

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6711





昭陽報

東京新聞社

東京市京橋區神田區正丁目三番地

昭陽報

本間孝民

東京市京橋區神田區正丁目三番地

昭陽報

市島龜吉

圖書刊行會升支店

東京市京橋區神田區正丁目十二番地

即帝三十九年正月二十五日發行

即帝三十九年正月二十日印刷

非賣品

明治三十九年五月二十日印刷

明治三十九年五月二十五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯者兼
發行者

市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者

本間季男

印刷所

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

東京活版株式會社

追加

六百四十三頁下段ノ闕文後黒川氏本ニヨリ其本文ヲ發見スト雖是ヲ補フ能ハズ因リテ茲ニ之ヲ掲グ

出雲國福田庄石見國久永庄三河國小野田庄播磨國網干庄美作國南庄一通依後覽注左御自筆草字也

出雲國福田庄石見國久永庄事任ニ申狀所令成ニ御氣色候也參川國小野田庄事先日相具神社仙口訴訟成敗内令成ニ下文候不能重沙汰候歟播磨國網干渡并美作國南庄境事非武士之所行候仍不能私之成敗候也就中至子網干渡者爲高雄領上人文覺令至沙汰候歟此事已社寺之訴之左右只任道理可有御成敗候也而若不宣下一候事など候者隨被仰下一候可加下知候也恐々謹言

文治二年

賴朝御判

十月一日

道ヲカ、ゲ出シ玉フモノナルベシ三社ノ神德陳ニ思

享保八年癸卯初冬上旬

新松守柱翁
源忠義識

フベカラズ又垂加翁ノ後翁ノ志ヲ續キ翁ノ神儒ノ道

ヲ普ク説廣メ玉フハ予ガ師跡部光海君ニテ候也神道

ハ正親町從一位公通公ヨリ奧祕マデ悉ク授カリ玉フ

サレバ光海君ノ門人多ガ中ニ常陸國鹿嶋大宮司中臣

連定則定則ノ先祖ヲ尋ヌルニ武靈繼命神護景雲元年六月廿一日

常陸國鹿嶋ヲ出玉ヒ住所ヲ求ムトテ伊賀國名張郡ニ至リ

二月七日ニ大和國安倍山ニ入リ二年正月九日ニ笠山ニ至リ玉リ其

時中臣連時風秀行ト云人武靈繼命ノ御供シテ時風ハ鹿嶋ニノリテ秀行

ハ嶋ニ乘リテ飛來リ時風ハ三笠山ニ止粟ヲ古ルサトヘ持カヘリテ植

ヘシ武靈繼命秀行ニ燒粟一ツ賜リテ此粟ヲ古ルサトヘ持カヘリテ植

マニ鹿嶋神宮近キアタリ夫ヨリ秀行チ燒粟ヲ連ト云ケルコト

ニ定則ハ其秀行ノ的孫也又大宮司代々ノ暮ノ紋ニ嶋ノ丸ヲ付ルコト

ハ先祖秀行嶋ニノリテ供奉シ奉リシヨリ起レリトゾ古ノコト

ハ先祖鹿嶋ニ詣テ侍シ時太宮司定則ノ物語リニテ聞侍ル

垂加翁ノ道徳ヲ尊ミ光海君ノ師恩ヲ報ヒンガ爲ニ宅

地ノ側ニ清淨之場ヲ撰ミ新ニ一社ヲ經營シテ去々年

辛五月垂加ノ靈社ト光海靈社ヲ勸請シテ相殿ニ鎮座

ナサシメ末代ニ至ルマデ月次ノ祭禮モ退轉ナキガ爲

社家二人小笛傳神ヲ定テ付置ヌ定則ノ誠有志又類ヒナキ

コトニコソ侍レ予モ今歲卯月ノ末兩靈社神拜ノ爲鹿

嶋ヘ詣テ侍リキ先ツ予ガ知ル處ノ古ヘヨリ神道段々

傳リ候大筋又今世ニ人モ知ル流義ノアラマシ右ノ通

リナリ

ナド云テ或ハ増補シ或ハ省畧シテ神代卷ヲ改正シテ神武卷トモニ三元卷ト號シテ板行セリ又宿禰流ト云神道アリ傳聞武内宿禰ハ景行天皇ヨリ仁德天皇マテ六代ノ帝ニ仕ヘテ政務ヲ掌リ忠義ヲ盡シ壽算三百六十歳ニテ薨玉フ此長壽ニ基イテ此流ヲ學ヘハ其身ハ勿論子孫ニ至マテ不老不死也ト教故ニ此流ヲ學人又多シ又垂加翁ノ門人鴨縣主梨木左京三位祐之モ翁沒シ玉ヒテ後心邪ニ成テ新ニ神道ヲ取立大ニ師傳ヲソムキ各別ニ神代卷ヲ講談シテ門人多クアリシ也第一國常立尊ヨリ人體ノ神トシテ説初タリ委クハアラハシ難シ右ノ外ニモ種々ノ流義ヲ拵ヘ世ヲ誑カスノ族多ト云ヘドモ算ル暇アラズ抑我が垂加翁ノ神道ト申スハ翁元大儒ヲ以テ世ニ名ヲ鳴リ朱文公以來ノ經學ノ道統ヲ和國ニ於テ續給フコト會津正之公賓師トシテ學ビ玉フ爰ニ於テ惟足翁ニ面會シテト部家ノ傳專ラ是ヲ授リ扱伊勢ニ於テ內宮ノ大宮司精長外宮ノ神主延佳ニ依テ伊勢神道ノ極秘ヲ傳ヘ夫ヨリ京都ニ於テ一條殿冬經公正親町殿實豐卿同公通卿土御門殿泰廣朝臣ヲ神道ノ門弟トシテ堂上方祕シ置給フ國記ヲ求メ又鴨縣主梨木三位祐之下御靈ノ神主出雲路民部

春原信直稻荷ノ神主太山兵衛等ヲモ門弟トシ其外洛中洛外ノ神職ニ便リテ一社々々ノ舊記ヲ搜シ就中舍人親王ノ御德ヲ慕ヒ藤森大明神ヲ尊崇シ玉ヒ神庫ニ傳ハル處ノ社記ヲ拜見アリテ弓兵政所記ヲ著述シ給ヒ伊勢ト部家ノ傳授ノ内附會龍説ノ疑キヲ除キ古傳ノ正シキ説ヲ撰ミ兩部習合ノ穢ヲ祓ヒ道ヲ神代ノ道ニ反シ今難ナキ天人唯一ノ神道ト改メ給ヒ舍人親王以來和國ノ教ノ道統ヲモ續キ玉ヒ則存生ニシテ自神靈ヲ勸請有テ下御靈ノ末社猿田彥大神ノ相殿垂加靈社ト申テ年々祭禮モ怠慢ナク候

山崎家譜曰父君曰先君性正直有武志自少持古筆三社託宣一幅深護之朝夕誦之將拜覽必盥漱着道服袴掛之吾等幼時觸之則叱之吾亦依先君命自幼誦之乃賜其古筆于嘉焉是ヲ以見レバ垂加翁祖君ヨリ代々三社ノ神ヲ深ク尊ミ玉フ也

同家譜曰嘉也元和四戊午冬十二月九日甲子亥時生小字長吉甫母君夢參比叡坂下兩社神一拜于鳥居前時老翁折梅花一枝與之母君戴之納于左袖而孕焉是ヲ以テ考合スレハ三社ノ神ノ感應ニシテ母君靈夢ノ告有テ翁ノ如キ神代生レ玉ヘリ天人唯一ノ神

天照太神ヨリ以來帝王御代々傳ハル處ノ神道ヲ皇子

難波ノ親王ニ傳サセ給ヒ此親王ヨリ五代ノ孫左大臣

橘諸兄公葛城王ト申ス橘ノ姓ヲ賜ハル聖武天皇ノ勝寶二年正月初テ

橘傳ハル諸兄公ヨリ二十九代ノ孫玉木兵庫正英丈人ニテ洛外ノ聖橘家神道ヲ相續セリ三喜流ハ三喜幼年ニ

護院村ニ住居シテ駿州淺間ノ神主惣社氏志貴秦賢ニ仕ヘテト部家

ノ行事ヲ學ビ道ノアラマシヲ惣社氏ヨリ傳ヘテ其後

江戸ニ來自ラ一流ノ神道ヲ拵ヘテ世ニ流布ニヨリ三

喜ヨリ前關東ニ神道ヲ說者ナケレバ神道ト云モノハ

眞言天台兩宗ノ僧山伏ノ知ル處ト人々思フ處ヘ三喜

吉田ヨリ唯一宗源ノ大導師ト名付テ教テ曰神佛一致

ニシテ隔ナシ佛法ニテ極樂ト云ハ神道ニテ高天ガ原

佛法ニテ地獄ト云ハ神道ニテ根國也人死スレバ神ニ

ナルユヘニ神事ニ死穢ヲ忌ス只明テモ暮テモ阿麻豆

羅須巢賣於保牟賀彌ト此教私ニノベ不レ侍ルヨシ自

筆ニ誓文ヲ書テ板行シ門人其外世ノ人ニ配リ與フ又

思辨集ト云テ三喜ガ方ニテ祕スル書アリ委クハ彼書

ヲ見テ教方ヲ知ルベシ三喜身マカリ後眞弟ニテ殘レ

ル者ハ武州太宮籙川太明神ノ神主武笠丹波職ヲ子ニ

譲リ常ニ江戸ニ出テ門人ヲ進ム其外三喜門弟ヨリ傳

ベキ者ドモ一人一人ノ工夫次第ザマノ事ヲ拵ヘ

或ハ弓矢神道中臣祓ノ燒錄ノ語ニ本ト號ス鎌ヲ以テ神體

トシテ行事ヲ勤ムルモアリ又白川殿流神道アリ是ハ

神田圖書ト云者本所ニ住テ專ラ祈禱ヲ勤テ世ニ徘徊

ス神代卷中臣祓ヲ說ト云ヘドモ此傳ヲ聞タル人ノ話

シヲ聞ニ心得ガタキコト多シ又山城國紀伊郡稻荷大

明神ノ祝羽倉齋宮ト云者是モ職ヲ弟ニ譲リ在江戸ト

シテ稻荷傳社ノ神道ト云テ是ヲ傳フ傳授ノ次第ハ稻

荷三社ノ傳ヲ初トシテ五社ノ傳ヲ中トシテ七社ノ傳

ヲ極メトスルコトゾ又神代ノ卷ヲ講ズルヲ本段ノ顯

ノ傳ト云本段計リヲヨム一書ヲ隱幽ノ傳ト云テ講セ

ズ深志ノ門弟ニハ一書ヲモ講シテ聞スルトゾ又中臣

祓ノ講釋ハスルト云ヘドモ神ヲ祭ルトキニ中臣祓ヲ

唱ヘズナゼトイヘバ此祓ハ中臣氏ノ祝詞ニシテ他姓

ノ人ノ讀ベキ様ナシ惣シテ神ヲ祭リ候ニハ其神ノ本

緣神德ヲアゲテ祝詞ヲツクリテ讀答ナリ何ゾ他人ノ

祝詞ヲ我モノニシテ讀タリトテ神ノ納受アラシヤト

云ヘルトゾ羽倉氏ノ傳授ノ次第神田ノ社家浦鬼主殿ノ咄シナリ又横山當榮ト云者ア

リ神代ノ卷ノ古天地——生ニ其中ニ焉ト云マデノ六十

五字ヲ衍文ナリト云テ省レ之其外ニモ衍文闕文錯簡

部次第ニ衰ヘテ今ハ姓氏モ斷絶シ漸ヤク齋部廣成ノ編メル古語拾遺齋部正道ノ著セル神代口訣其外梓ニ鑄タル遺書少々傳レル計リ也又天村雲命ノ苗裔ハ今ノ外宮ノ祠官度遇氏ノ族也内宮ノ祠官荒木田氏ノ族ハ天兒屋根命廿一世ノ孫天見通命ノ苗裔ナリ兩宮ノ祭主藤浪殿ハ大中臣ニテ清麿公神護景雲二年大ノ字ヲ賜リテ大中臣ト云トナリノ苗裔也神職ノ面々家系正シテ神道正統伊勢ニ過ベカラズト云ヘドモ元弘建武ヨリ事起リ文祿年中ニ至ルマデ東西南北ノ國々皆戰國ノ衢ト成テ神領寺領ニ軍役ヲカケ其催促ニ應ゼザレバ領地ヲ沒收シ宮社寺塔ヲ燒亡シ神職僧徒ヲ殺伐セリ此時ニ至テ伊勢祠官ノ面々モ神宮捨テ山林浦嶋ニ身ヲヒツメ妻子ノ命ヲ續計也マシテ神學ノ沙汰ニ及バザリシニ元和ノ初ニ成リ天下一同ニ大平ノ御代ト治リ兩宮ノ神領モ御寄附アリ神宮廿年ニ一度宛ノ御經營モ昔ノ如ク立歸リ年中ノ祭禮モ夫々執行レ祠官モ古郷ヘ立歸リ安堵ノ思イヲナスト云ヘドモ家々ニ傳ハル處ノ神籍モ戰國ノ時ニ亡失シ神學ニモ多年怠リヌレバ神宮ノ道退轉シケル處ニ人王百十二代後西院ノ御宇ニ度遇神主從五位下出口信濃守延佳元延長ト號スト云ヘドモ時ノ帝ノ御名ヲ長仁ト申奉レバ眞ナ仕

ニ改ト云人有延佳年來儒道ヲ好ミテ學ト云ヘドモ神宮ノ道ノ絶ナンコトヲ歎テ古ヨリ神庫ニ傳ハル處ノ祕書ヲ搜シ自學不斷ノ儒力ヲ合テ一篇ノ書ヲ著ス陽復記ト號ス此書辱モ天皇ノ歡覽ニ備ハリ御稱美不レ斜シテ延佳ヲ從五位上後年有テ叙ニ從四位下ニ叙シ玉フ時ニ延佳拜辭シテ曰我家代々五位ノ下ニシテ從五位ノ上ヲ經ズ先祖ノ位階ヲ超ナンコト恐アレバ勅免ヲ蒙リタキ由ヲ申シ上ル又勅詔アリテ延佳ガ申シ上ル處餘義ナク思召サル、間延佳亡父伊ニモ從五位ノ上ヲ贈ラセ玉フサレバ延佳神忠ノ誠神明ニ感ジ又先祖位階卑フシテ我位階先祖ヨリ高ク昇ランコトヲ恐レテ辭スルハ至孝也故ニ如レ此難レ有詔命ヲ蒙リ我身ノミカハ亡父マデ家ニ例ナキ位階ニ昇ルコト皆神明ノ御加護也夫ヨリ延佳瑞穗抄神宮祕傳問答神道或問ヲ始メ數卷ノ神書ヲ著シ伊勢一國ニ限ラズ諸國ニ門人多ク出來テ今世ニ伊勢流ノ神道ト云ハ延佳ニ出タリ延佳ノ次男權太夫延經父ノ志ヲ繼テ神儒ノ學力ヲ盡シト云ヘドモ不幸短命ニシテ身マカリヌ又橘家ノ神道アリ是ハ人王三十一代敏達天皇ノ御宇ニ異端ノ說日々ニ成ニ起レリ帝神道ノ眞傳ヲ失ンコトヲ恐レ玉ヒテ

神道辨草

今年長月半月アカキ夜アル朋友ノ許ニ招レテ中臣祓ヲ講ジ侍ケルニ講釋畢テ後亭ノ曰是ヨリ先吉田家ノ神道者ノ此祓ヲ講釋スルヲ聞キ侍シニ今イマシノ讀給フコト、引合思フニ本文ノ唱ヘ段割ノ數講ジ玉フマデ異ナルコト多クシテ同事少シ

元神道ハ 天照太神春日大明神ノ御教ト承リ候ヘバ道ハ只一筋ニシテアルベキ事ニテ候イカナレバ異ナルコト多候ヤ其分ケ承リ度候予答曰仰ノ如ク神道ニ二教ノ筋ハナク候中臣祓モ我垂加翁ノ傳詳也重テ委ク說聞セ申ベク候明白ニハ難シ申候中臣祓ニ不レ限統テ神道ノ教古キ家々ノ傳ヲバ取失ヒ新ニ色々ノ流義ヲ立テ己ガ考工夫ヲナシ僞顯之品新說多候ヘバ不審ト思玉フモ斷リ也幸夜長キ折リナレバ古ヘヨリ神道段段傳リ候大筋又今世ニ人モ知リ候流義ノアラマシ語聞セ可シ申候

夫我神道者往昔 天照太神天兒屋根命天太玉命天村

雲命ヘ御直授アリ兒屋根命ノ苗裔ハ大織冠鎌足公ヘ傳ハル鎌足公故アリテ御子不比等公ハハ唯一宗源神道ノ御傳ヘナク從父兄弟ノ意美麿ヲ婿トシテ神道ノ御傳授アリ其時大織冠意美麿ニ御附屬ノ御書曰

太祖尊神者掌ニ其解除之太諱辭ニ而宜レ俾テ以ニ太占之卜事ニ而奉レ仕主ニ神道之宗源ニ也神籙璽者又名天津磐境我國之神寶也祖神之神體也以ニ傳神錄ニ附ニ屬祭官意美麿ニ者慎而莫レ怠矣

大化六年六月一日

中臣朝臣鎌子

意美麿ヨリ今ノ吉田マデ道統セリ又左兵衛佐卜部兼治ノ次男兼從豐國大明神ノ神主ト成テ萩原ニ改ム道ニ器量アリテ卜部家道統ノ奧祕ヲ思惟シ玉フコト爰ニ吉川惟足翁兼從卿ノ門人ト成テ道ニ執心深ク尤學ブコト委ケレバ兼從卿其志ヲ感ジテ卜部家ノ秘傳皆惟足翁ヘ免シ授玉フト卜部正道ノ神道關東ヘ傳ハルコト惟足翁ヨリ起レリ會津中將正之公神道ヲ尊信シ惟足翁ヨリ此傳ヲ殘ラズ授リ玉イ其後惟足翁ノコト上聞ニ達シ召出サレ食祿地家ヲ賜ヒシ也又太玉神ノ苗裔ハ齋部家ニテ昔ハ朝家ノ輔佐トシテ卜部齋部ト左右ニ別レ政道ヲ執行ヒ祭祀勤メシムイカナル事ニヤ齋

窶_レ憐_レ慙_レ無告_二簡而有_レ禮儉而無_レ吝勞而不_レ伐不_レ知
而無_レ悶焉游_二其門_一者自_二諸侯大夫_一以至_二士商家_一懷
_レ德倚_レ風莫_レ不_レ被_レ澤因_二其教化_一雖_レ未_レ能_二面命_一者_上
寄_レ書仰_レ誨可_レ謂近者說遠者來而元文五庚申自_レ春罹
_レ病諸生操_レ藥以_二鍼艾_一寢蘇生家族門人并躍歡喜焉而
有_二一女_一配_二佐佐木氏_一自_レ夏臥_レ病先_二於沒日_一四旬餘
壯年而終焉安崇悼_レ之歎_レ之然天命所_レ賦而殀壽不_レ貳
也不_レ日集_二諸生_一講習誘_レ之焉然老朽衰體氣屈復初秋
上旬病革冒_レ身同十四日沒嗟呼可_レ惜焉生_二寬文七丁
未年冬十二月朔_一享年七十有四歲同十六日葬_二武府北
駒籠鄉吉祥禪寺境中宗寶珠林_一立_レ碑焉末弟平姓太田
忠經源姓五十嵐正辰與_レ予議欲_二作_レ銘彫_二碑陰_一予同_二
其志_一而不_レ願_二先進_一不敢辭_二而書_レ之夫惟師恩莫_レ大
_レ焉禮曰心喪三年可_レ思不_レ可_レ忘可_レ哀不_レ可_レ已也

平姓秋野信妙謹撰

乃末社止祝鎮奉止宮地於此地仁撰定本田氏安司之豆根岸氏貞共爾大己貴神少彥名神農御社仁准倍御神等能天之御醫日之御醫止造利奉禮留石瑞御殿造立奉終

氏本社乃神司栗原氏正精天津奇護言乎以言壽鎮白止今年癸亥夏今月今日今時良辰奈禮波久保彥八郎助等恭

御供仁從比奉事豆御神等於新殿惠振奉利市平鎮利定利給倍止申須事濃由乎平久安介聞食止申須

天壤無窮四海泰平仁志豆

天皇朝廷實位仁御座志

征夷大將軍武連長久彌高仁彌廣仁榮坐志常磐堅磐爾

奉仕百官天下乃萬民立榮氏此道於仰此流遠沒諸姓人

五十鈴川乃流止其仁末遠久三笠山農陰止其仁繁久昌倍

且崇障無久附祭留神能子孫八十屬幾從倍類僕此道乃

教乎受留人能領知乃民仁至留迄手長久足長久榮倍風雨

隨時五穀成就志女諸乃災無久萬千種乃長秋止茂御代

仁夜守日護止守幸給惠止天津奇護言乎神賀仁賀豆言

壽鎮白須事濃由乎

天神地神別豆波本社乃靈神末社神等諸其仁佐男鹿耳

振立聞食世止申須

辭別豆申佐久今供奉仁從比事倍申諸人參集留輩乃中爾

穢氣不淨不信懈怠乃過在止天津祝詞乃太祝詞於以天祓清女奉禮波咎毛無久崇毛無久神直日大直日神止見直

開直志給比天守護幸倍賜倍止恐美恐美申須

寬保三年癸亥四月十六日藤原基生員郡謹代撰

于時明和八年辛卯十二月二十五日

宮內守中親宴謹書寫

先師碑銘

源姓伴部氏安崇靈號曰八重垣靈社其先出自清和

末裔而常陽曰八田知家爲常弼小田城主也是小

田源氏之祖也知家五代孫曰山尾家時爲常弼多珂

郡伴部城主因稱伴部其後家族式微而家時六代孫

曰伴部三省仕豫弼今張侍從源定房而辭宜焉生

安崇於武彘品川鄉焉自祖至安崇其系詳矣其爲

人豪傑而好和漢學布德焉施仁焉性不覓仕宦

獨善其身寓居城西四谷之鄉而設學校從旦

至夕解經說傳五十有餘年其於神史也參考歷代

古訓廢墜開示深旨其於漢策也發揮洪範九疇

微解周易精蘊其於軍旅也極八陣之法然則鏤

梓編帙顯然明矣其齊家也有關雎麟趾之意其待

門弟溫潤而厲間雖遇變革不疾言遽色賑濟貧

八重垣大明神由祝詞

謹美々々惶美惶美申須八重垣濃靈輿波其先常陸國乃產也

水尾天皇乃裔小田乃城主之後姓波源伴部氏安崇先生之靈也瑞玉靈社波仕豫州今治城主源定房君有以豆辭官平以寛文七年丁未十二月辛未朔生先生於江城之南品川郷須爲兒好正直美嬉戲爾示設禮容給布然後專潛心於朱子傳慕垂加靈社之風比給布故禮友矢野佐藤兩丈年越不惑豆後謁見跡部光海翁講三綱領給布光海君歎賞甚志於是初豆師吾翁志學給利吾翁毛亦從光海君受垂加靈社之神傳尊信篤行毛不庸至與義莫不盡窮志垂加靈社能門人爾不學神道者波知有僻見豆數論辨佐藤氏爾其要於告給布故仁直方悔往事文書乎送豆歎乎呈其書今猶存利正親町從一位白玉翁江府爾來利御座須時光海君請豆拜謁給布先生毛從比往豆與仁聞神道深祕於是吾國西土乃道益相發明仁志承垂加靈社之正統豆天津兒屋根命五十八代乃

傳倍止故天津神籬仁心於起志立天波兩部習合乃誤於除歲天津磐境仁胸落着賜波天邇五十鈴之淵源利賀茂下上乃河流乎尋豆身乃垢乎清女藤森乃神祕乎極女八十萬乃粹乎搜利求女中臣三種能風水仁眼能霞乎拂賜天常倍仁守

八幡大神乃遺教豆羽翼留仁以儒道志土金龍雷以貫言行幾恭敬豆安羅仁和布志不流威豆不猛教人豆不倦學豆不厭德比如玉如鏡尊神敬祖廢佛關異劍如斷物爲學者所著述書數千百卷其名號不暇記中爾毛八陣蘊義止御統止波前賢毛所未發乃大祕也故禮八陣書乎獻

尊公在台命天深祕豆不博傳僅爾授三三子給布且垂加靈社濃遺志乎繼豆正日本書紀訓點改魯魚據釋紀豆附帝王之系豆復藤森舊傳賜比亦考書於編豆題天號日本書紀卷返微先生此書能歸正古止難久無考書波何爾因豆學者讀古安乎可得哉如是大奈留功業坐天類希爾故仁傳受人親族朋友相共爾蒙恩賴是以信仰之日少宮乃祕訣乎以豆一而守渾沌之始手自奉封利給布靈輿乎以豆寬保二年壬戌秋七月中元武藏國入間郡山口郷北野邑物部天神坂東天滿宮

ふこと返す／＼心を付て尊ぶべきこと也異邦は皆知力を以て取立たる國也此國は神力を以て成就する國也それゆへ力づくにていへば廣大なる國もあるれど中々此國に敵することあたはず古來よりのゑるし歴然たり國如此なるゆへ人も神人も書も神典也道も神道也萬國の此國に及ばぬこと能く眼を付べし

一祓祝詞の數もおびたゝゑふあれ其此内に中臣の祓か第一也いかなとなれば高天原に神とゝまりましますを以て祓することゆへ根本盛大にゑて外の祓の及ばぬ所也その高天原の^にとゝまりまします御神の勅定を以て萬民治亂ともに祓をなすゆへ安泰無事にして國家繁昌也八百萬の神々も皆此神の命令に従ひ給ふ自ら祓することをゑらぬ者へは上より國所へ教へて拂はしめ給ふ孝德天皇の卷にあらまし見へ侍る其爲に大中臣の人祓をつかさどり給ふ天津罪國津罪皆かくのごとし中にも教をしりみづから身の上家の内まで祓することを知る人は實に神國の神人に侍る諸惡をいまだ生ぜざるにはらひのけ萬福を來しまねくこと皆祓の威德にて此國の道と

も教へ共申事也尤國家にても小家にても非常の變有時は猶更改て祓を修行すべし

一名題を神道者といへば何もかも皆一つ事に覺ゆること大なる世上のあやまり也陰陽師も神道といひたて世をまどはし民をゑひ修驗道も神道といひたて山伏も其内にあり邪術の者も神道といひたて又は日蓮宗も神道といひたて是非混雜して正しからね共神道といはれて皆伊勢兩宮吉田白川其外名高き大社の傳もひとつことに心得合點ゆかぬは神道といふものは^御などゝ心得るは是非もなき誤りに侍る又神道の行事計を事とする人は神の道にはくらしすべての道に正邪はあれども就中神道は天照太神の御教なればよく／＼正道邪道僞作雜亂を正してひとつ事と思ふべからず仍て伊勢五部の書中にも巫覡の類を近くるなどありて禁戒し給ふ是第一の心得に侍る恐れみ恐れみも申す

元文三年戊午七月三日

八重垣翁識之

本紀を漢字讀によめば皆神代よりの傳授の意にそむくゆへ和訓を主として讀めとの御事也。扱漢字の文は側に付置給ふと云漢字で和訓を埋め假名のかはりとし給へば漢文を用給ふにも少も御心なきにはあらず所々其意有こと也。それを出雲國の正神主などは佐田の社とやらんに在けるといひしが白井氏が説を信じて後字よみに神代卷を取あつかふと云はわけもなき事也。世以漢字を尊ぶ世上ゆへに舍人親王漢字とても和訓の外はなしといふことを知らせん爲にあのごとくゑるし置給ふ根本の大事は和訓に有漢字にかゝはるまじき爲におのころ嶋を磯取廬嶋と書せ給ひたるるひ有講習の力を用べき事に侍る

一日本紀の内にて神代卷とて一二の卷を別に名付引分くるは後世の事なるべしと先輩の達人皆吟味ありたる事なり。神代は七代ありてその七代は今日とてもかわることなし

一日本の道はもと書物を以て傳へ來るにてはなし。器を以て傳來らせ給ふ三種神器の御相傳を初め十種の寶などいふも皆器也。その意ゆへに素盞鳴尊文字

を出雲國素鷦の河原にて作り初給ふも象形文字に作らせ給ふ忌部正通の神代口訣に申さるゝ神代の文字は象形也とは此事に侍る唯今神家によりて異國の靈符などを神代文字とて秘して書用るは皆誤也。萬物の理は色形に備るものなれば文字詞も象形にてすむ筈のことに侍る象形につゞきては會意の文字出來る筈也。神代十二支の文字は滿川家會意の文字と覺侍る片假名は吉備公和字も吉備公の祕傳いろはは空海法師高野にて大工の望によりて無筆の大工も相紋に書よき字を製作してあたへ又武具の文字は近代楠正成朝臣作り初らるゝといふいづれも漢字の旁を象れりといへ共神代文字の風に似せて作られたりと云それゆへ靈符に似たるかたち一つもなし

一人の頭頂の上は諸神衆會の所とて極めて尊き所に侍る正直の頭に神やどるといひ軍中にても胃の八幡座は軍神のやどらせ給ふ所に侍るもと頭のまかなるも大空の形に侍る常に頭の容を直くして神のやどらせ給ふをわするべからず

一やつがれ野中の清水にいふごとく此國を神國とい

一神國の軍傳と云は其流儀さま／＼有といへ共本皆神軍より出たり漢軍より傳りたるにてはなし 仲哀天皇の時陳輪といふ者異國より來りて帝へ陳法八陣を傳へたりと小幡流にて云は誠に無稽の妄説に侍る仲哀帝には陳法の御傳なし神功皇后軍傳を得給ふ則神武帝よりの神軍なりその傳へを聖德太子得させ給ふ今太子流と云軍書に其説多く見え侍る其傳へ源家の歴々へ傳はり皆神軍の流れなり漢軍の説は大江の匡房朝臣博學にして殊に一たび橘家に養れ神軍の傳知り又江家へ立歸り漢軍の傳へをましへて源義家朝臣へ傳へられしより漢軍交り來る事なり然れば源家江家の軍法ともに皆もとは神軍にて漢軍にあらぬこと明白なり橘家の事はもとより申に不_レ及楠正成朝臣なども橘氏にてもと橘家神軍の家にてその上英才ゆへ奇功をなし給ふ

一神の事をさへ取あつかひ常々それを事とすれば別に神社參詣拜參にも不_レ及冥加を蒙ると覺へたがへたるは源尊氏などさやうに心得られ常に神書を寫し歌を讀が則冥加に叶道といへり是には心得の

有べき事に侍るいか程神書に目をさらし明暮歌道をすきたりとも祓を修行し正直を守らぬ人は神慮に叶ふまじ冥加正直の心よりする事は凡夫とても神慮に叶ひ侍る筈の事とこそ覺へ侍る神書博識にても祝詞祓の讀やう數々覺へたり共其分にて神慮にかなふべきとは覺へ侍らず尊氏の見も佛見にひとしく念佛修行も同じ筋ときこへ侍る

一諺に近づく神に罰あたると云は尤なる事なり近づくとはあしき祭りやうの事にて俗語にいふ神せゝりといふものなり我身一分の爲に神の道もゑらず祭りやうも尋ねず此神を祭りて利益なきとてやめてあの神を祭りそれも思ふやうになきとて又心をかへあらぬ神を信じ正邪の分ちもしらで神事とて取あつかふものは神せゝりといふものにて必神罰あらですまぬもの也とにかくに正道を知る者正者にきゝて純一の誠心から祭祀をもなすがよし神せゝりの人はすきと純一の誠なき人也

一舍人親王の假名日本紀と申書ありとはいへ共聞及たる計にて見侍らすてうど萬葉集のごとく漢字の音を借りてかなとして書給もの也と云此御心は日

給ふにてはなし此事に深々の祕有ことなり日月とて則君臣の御位に侍る

一國家天下の守りと云は武の道にあり日本の國の軍傳の初り日神天位を守り給ふ所に有軍令軍法の御傳へは神武天皇の御卷に見え侍るごとく此帝よりを初とす大星の祕傳といふも此卷に見へ侍る式の軍防令は漢軍と見合せて立給ふ神軍と漢軍とはその根本にかはり有漢軍は黃帝より初る黃帝の本文ありやなしや定かならずといへども風後の握機八陣は黃帝の勅を以て撰ばれ侍ると云なり此時は握機陣と申す誠に神聖の御力ならでは此陣法初てかやうに立難かるべし然れ共神軍大星と符合するの説は見え侍らず神軍の陣法は九重の城八咫の城四民の本陣悉く橘諸兄公傳へ置給ふもと孝德天皇傳へ來らせ給ふと云聖德太子古傳を繼給へり西土八陣の説兵鏡武備志等の書を初として本意をさとりて記したる書なし七書の太宗向對は唐の李靖と云臣下太宗との兵論なりといへ其實は宋の阮逸が偽書に侍る神軍の九重八咫四民と漢軍の握機八陣とは合符節たるが如しされ共渾軍より是をすまさは

んとしてはずまず神軍より悟れば漢の握機八陣も其機の妙曉ること有べし權謀術數は異端なり握機八陣は國家天下を守るの要樞に侍る神國を尊び神國を守護するの志あらば此陣法詳に講せずば有べからず

一西土にては唐の代に三十三家の兵家流有けれ共宋の代に吟味有て七書につめ侍る此七書をさへ熟講したる人希なり林道春翁の抄有といへ共精微は説置れず其後諸抄見へ侍れ共太宗向對の八陣詭説なることを知人なし江嶋爲信は與州今治城の臣なるが七書に委しく七書非法と云ことを曉りて其門人に傳へ近耳抄と云抄を書いて領主へ是を上るやつがれいまだ弱冠に及ぬ時此人の免許を蒙るといへ共老年考索すれば太宗向對の誤はえらで過ぬることいちぢるし心法と云も三略を尊び侍れば皆人力詐僞の俗心にて天地神明の正道にあらず龍尚舎が神武紀の抄の内に 神武天皇は軍配天道を守り給ふと云は獨歩の見識に覺へ侍る近年山鹿氏の八陣長沼氏の八陣佐久間氏の八陣皆見及たれ共爰に及ぶはなしと覺ゆ

かくに其身にはらへをせずして祈るは誠の祈にあらずと心得べしと云かあれば一日片時も祈念と云事なくては神慮にそむく事に成はつる事に侍る

一神道にての修行と云は祓の事なり工夫と云も祓の事なり我心の及だけ祓を修行すれば心を天地に齊し想を風雲に乗と云神語のことく一念の和なく衣を千仞の岡にふるひ萬里の流にあらひ清流に口すすひで好茶の胸中をきよふするがごとし異國人の詩にも梧桐の月は懷中に向て照し楊柳の風は面上を拂て吹と作れるもその胸中ゆかしく覺え侍る

一神道にて知慧を披くの修行と云は菊理姫の修行と申侍り亦是泉津平坂の工夫と申侍る平坂より菊理姫は一段上の事に侍る至善なり菊理姫とは神靈の御名にて加賀國白山神社に鎮座まします菊理姫とはきくりと申事に侍る凡見る事聞事に付て心底に落付のでき決定するやうに物を見きく事なり平坂と云は半開半閉の間にてどちであらんと心の落付ぬ所に極嶮の場合一足の所にて巖谷へ落す平坂へ至り心の開く事なり披くれば心平に成ゆへ平かな

るの理りも有此平坂へは祓をなしつめて至る事なりそれはもろこしの文をよまんにもとより此國の文をよまんにも日用事に接り又は古今の物語人の評判をきかんにも皆此心得にて見きく事を申侍る菊理姫も平坂も共に伊弉諾尊の教へさせ給ふ事に侍る是も又祓也心のひらくるは大船のとも繩とさはなちへつなときはなちて大うみの原におしはなつことのごとくのはらへに侍る

一神道の大義の守りといふは君臣の道に在るなり天をいたゞきふむ萬代不易の道此國の萬國にすぐれたる天の神のうみのまゝにて君臣に少も變化なきが日本の日の本たる所に侍る父子から君臣の道といふ事はなし君臣から父子も立ことなり此事はやつがれ先年和漢問答に記し又は谷重遠土州臣の人にあたふるの一文に具なり垂加文集の附録にのせ置侍るよつて多毫に不_レ及

一神道の道と云は日月を申奉る西土の道と云は大極を申奉る大極はもとより至極なれ共老佛にもまぎれもの有國土も日月のあらはれ給はんとて國土となり清濁分れ侍る事なり大極の爲に日月あらはれ

共に見よく心よく成侍る正直の人に有

窮は困窮なり
通は立身なり

神慮に叶はねば窮通共に醜恥がはしく終には公の
罪人共なり天つ罪國つ罪をまぬがれたし其憂へ
なきは正直の人に有異國にて過は易辭と云がこと
しいひわけのふ
く濟事なり士農工商の四民ともに貴人の心にも
かわることなく上を犯し下を犯し咎と云咎罪と云
罪なし人々神の一字をわすれねば吉凶禍福廣外ニ
置など云やう成一己のみにといまる事なし儒道
の教は一分を主とし佛見はわが正直をのけて人を
助けんとす皆大道と申がたし能々神道の廣大成事
仰ぎ尊ぶべし

一神の一字をわすれずと云に付ては祈り祈禱が重し
祈といふに段々子細の有べき事也祓をして祈るを
よしとす祓とは其身の罪咎を知りて改め清めさて
其上を神力神助をいのり奉るを本とす中臣の祓の
旨その通りなり天つ罪とは露ほども君とおやかた
とおろそかに思ふ心の出るは君とおや方とに敵
對したるも同じ事にて天つ罪也國つ罪とは人をあ
しくゑなし人のためあしきを知つゝ爲にあしき事
をなし萬事妨をするは人を切ころしうちたおし人

の病をでかするとひとつ事にて皆國つ罪なりま
づかやうの心あらば祓すて、神を祈るべし又思は
ず放心の上にてあしかるわざをなしたるも天つ罪
國つ罪なり何れも朝の霧夕の霧をあしたの風ゆふ
べの風の吹はらふ事のごとく祓ひすつべしかやう
の放心もなきやうにと彌々神力を祈るべし世の人
はらへと云事はせずしてたゝ手前の仕合よき事を
祈るは祈りすなはち欲心なりいかで神感あらんや
神力と云ものは至てつよきものにまします數萬人
の力にてもうごかぬ事をうごかせ給ふは神力な
り神助と云事も慥にこれあり思ひがけもなく神の
みちびき給ひてよろしく引合給ふことなり
遠近のたつきもゑらぬ山中に

おほつがなくも呼子鳥哉

といふは人はなれたる山中にて何方へたよらん方
もなく心まどふ所におや鳥の子の音をよぶごとく
われをこちへこよと呼みちびかせ給ふ事有易のふ
みに鳴ける鶴在陰と云も此筋也神感と云ことも
有_三神徳と云事も有神の垂と云事も有神罰と云事
ももとよりあり神罰を恐れ奉るべき事に侍るとに

一 外の事におゐては儒書神書歌書等軍書まで昇平百年萬廢共起るの御代なれば興^レ廢繼^レ絶貴賤各其人有て反古の事多し然るに勅撰の初といひ日本書紀にまさる物はあらなくに慶長年中味岡三白板行せしめたるまゝにて百年を起て其まゝにて脱文錯簡誤字無訓の類あげてかぞへられぬものを沙汰する人のなきはいといふかしく覺へ侍る伊勢吉田白川藤波等の神家又は歌道儒道の人にも其人ありやなきやと今さらのやうにおどろき思ふ事なり

一 古へ禁中にて日本紀の講を興行ありし事は諸記に見へ侍る所は宜陽殿などにて竟宴の禮までありしとかや愛成朝臣などは其講に預りし人也古へより今迄地下にて日本紀の講と云ふ事は不^ニ聞及^一日本紀の内一二の卷をば神代卷と名付て吉田の家にて萩原大納言殿吉川惟足翁へ望によりて講じ給ふと云それも吉田の家に數十年絶ぬるを萩原大納言殿起し給ふと云林道春翁も神代を講せられたりといへども傳なくして儒學の力にて推て一二の卷を講せられけると其講本にて見へ侍る道春翁の講とて書本にて有慥に地下にては一二の卷の講は吉川

惟足翁いざなひ被^レ申會津左中將正之公の御望にて講じ申され其講本は惟足抄寫し本有伊勢にては出口信濃守延佳講じ初められ其講を山本廣足と云門人錄して板に出し侍る垂加靈社は神武記迄を毎門人へ講じ給ふいと尊く覺へ侍る中臣の祓は世に講せし人は古へより多し是は六月晦日と十二月晦日との大祓なり中臣祓は元來朝廷講習の書にはあらず伊勢五部の書は出口延佳講じ初めらるゝと見へ侍る垂加靈社は伊勢大宮司精長より中臣祓の傳を受出口延佳と伊勢の書を吟味し給へり

一 神道は修^レ己治^レ人の大道に侍る異國の聖人も人而無^レ信不^レ知^ニ其可^一と有又民無^レ信不^レ足^立共見へ侍る然れ共萬物の靈たる人なれば知力巧詐る知慧過て上古淳朴の風なければ上中下を欺き上をはかり中をはかり下をはかり邪知人欲やむ時なしそれゆへ忠も孝も仁も義も取うしなふは神の一字を目當とせぬ學問ゆへの事にて學ぶほど邪知の長ずる者多し神道は貴賤上下共にたゞ神慮に叶へと教へその神慮にかなふ人々の正直に有正直は信なり位に貴賤あり養に大小高下有といへ共其分に應じて窮通

一日本紀の板本世に一板のみ有其跋を見れば兩本有に似たり清原國賢朝臣の跋は勅を受けて印行の樣に見へ侍る又小字の跋を見れば洛三白跋と有て共に慶長の年號にて其間十四五年の違と覺ゆ三白は味岡三白とて名有醫のかき侍る小字に跋せらるゝ事扱々感じ入侍る此書六史の冠頭なれば天皇將軍家の御勢ならで地下の凡夫おし出して跋などすべき書にあらず此兩本有筈にて唯今三白跋の本のみにてあまつさへ脱文錯簡一枚として改正なくて讀つゝ侍らんやうなし此事數年京都江戸の物知りと云人に尋ね侍れどかつて知人なきこそいふかしけれ

一神道に面授口訣と云こと有 天照太神の御時より始り侍る高皇產靈尊より天兒屋根命太玉命へ神籬の道を面授口訣し給ふ是を後世にては傳と云其外傳と云こと皆面授口訣の事也西土の書にも書は不盡言言不盡意と云事有對君一夜話勝讀二十年書と云事も有たとへ心を盡す程に書たるとてもそれを讀たる計にては道を覺悟することはあたはず此事西土にては無之事にて面授口訣を得ざ

る人は言語聲氣の間にて道を覺悟すること也それ共に下地に骨折積累の人ならでは面授口訣にてもならぬ事に侍る曾子一貫の唯よほど近きこと也正親町一位白玉翁の御家に神道系圖の祕書有て卜部吉田ばかり相承口訣有のみにあらず 天皇攝關伊勢の祭主までこの口訣有事也といへども大職冠鎌足公より卜部へゆづり給る今は吉田一家の傳のやうになり侍る

一道の根本は伊勢の十二部の書の中にも五部の書に盡し侍る神代卷とても伊勢の書よりは後の事に侍る

一或曰神籬などは極祕と云侍とは申さずと左も有べし極重の事なれば詞遣もかわるべし扱神籬極祕とても伊勢兩宮の御鏡傳濟たる後にてなければ不通のこと也惣じて剪紙傳とて數返有て講談數遍濟たる人々は其卷々の次第に依て授る事なれども剪紙授りたるとて根から濟ものはなしたとへ切紙を受ずともとくと得心すれば獨濟事のみ多し風水草の内に其人に面授すれば心得るのみと有事深き旨と覺へ侍る

病後手習

やつがれ享保初年よりは江城の西郭外四谷の里に年
久しく住なれ侍る御覽箇町御先
手組崎氏ノ屋敷ことし元文三年同郭

内二番町の南麴町近き所佐々木氏の屋敷へ居を移し
侍る今年七十二歳なれば老年の養の爲娘并孫なりけ

る人の屋敷なればかくはかりて五月九日庚申の日に
五月雨の晴間なれば移り住ゐし侍る思はずも同き十

三日甲子の朝より便血の大病にて諸醫を招き危急の
病次第に快し高橋定安 尾州君ノ御匙
敷原通玄老 官醫御側土岐仙庵 四谷町醫

いづれも重き病として藥服用せしに後は仙庵の藥にて
快成ける五十日を歷て全快すつら／＼次第を考るに

まづ九日に家移りして後大病急に出しゆへ娘の屋敷
といひ萬端養の手づかひよく病中も人參大補の内に

仙庵醫案にて十日計りすぎと人參をやめて服藥せし
めらるればそろ／＼と快氣に趣けるも家どうじ水を

あみ神拜し神慮を窺ければ兩度迄仙庵宜しからんと
占方に示させ給ふ不思議の事に侍る其外思はずも諸

大夫士友の御惠にて手にも及ばぬ類達とやらんの人
參を惠賜り肥前州松平忠根君勝田氏孫
原光寛君勝田野下州元博君服藥し始終補養も

此人參にて快然をえ侍ること逐一人力のなす所にあ
らず一柳直畏君
戸田氏賢君よりも人參の賜に預り皆神明の御蔭仰

ても餘有こと也依而日頃諸門人へ示すごとく萬事人
力のなす事にてはなし神力のみを仰くべきよし物語

りし侍る此老生いきたりとて世の爲人の爲ともなら
ねども年頃の大願にて日本紀の古板誤多ければ此書

は我等ごとき凡下手を添べき書ならねば公の御力を
添させ賜り改板して後世へ残したき望のみに侍る病

危き時辭世とて讀侍る歌に
天にのほりかへりことせぬ身にも猶

と詠り侍る去年の冬神道度會の橋となんいふかな書
一卷あらはし官醫大八木氏の望梓行せしめられその

うへ 將軍家御昵近の衆へ便りて 臺覽に入給りか
つは御賞美の所も有けるとなんかやうの事にて冥加

に叶ひ此上日本紀の願成就せよかしと病後一入に思
るにより三十日の餘り筆をとらねば手習となん心得

かく記し侍る

シ垂加翁贈ニ檜崎正員ニ序曰生也自ニ天地ニ來死也魂遊ニ于天ニ魄降ニ于地ニ與ニ天地ニ化而更無ニ來處ニ更無ニ去處ニ此人物之始終造化之道也斯理也聖人於レ易備言レ之告ニ子路ニ之深語ニ宰我ニ之詳中庸發明之至矣盡矣復奚疑哉但輪廻之說行焉不ニ惟無學者被ニ誣惑ニ而讀レ書者亦不レ能ニ明辨レ之可ニ慨嘆ニ耳コノ語言約ニシテ其理明白ナリ神儒合一ノ道理ニシテ佛ノ惑ヲ排ク格言ナリ

又問幽厲來テ常ニ佛法ヲ疎ニシ後生ヲ願ハザルニヨリテ死シテ極樂ヘ生レズ迷ヒテ如レ此經念佛シテ跡ヲ弔ヒ罪ヲ滅シ玉ハレト云願ノ如ク弔ヘバ則不レ來古ヨリ多キコトナリ然レバ佛法ノ道理ナキニ非ズ如何 答曰死セル者又形ヲ顯ハシ來ルヲ幽厲ト云是ハ死セル時一念ノ氣凝テ散ゼズシテ來ル者ナリ是ニヨリテ久クハナシ其凝タル氣其事ニ依テ散ズレバ來ラズ是ハ其人死ニ及ブ時我ハ常々佛法ヲ疎カニシ經念佛ヲ唱ヘザレバ死シテ地獄ニ陷ンヤ又狐狸トモ生レ替ンヤ悲キコトナリト思ヒノテ死スル故ニ其一念ノ氣直ニ凝テ散ゼズ幽厲ト成ラ云コトナリ是ニ依テ經念佛シテ弔ヘバ凝タル氣散ズルハヅナリ日本ニテ

モ佛法渡ラヌ前ノ幽厲ハ如レ此ノコトナシ西土ニテモ後漢ノ明帝ヨリ前ニハ此事ナシ左傳ニアル申生太子ノ幽厲モ地獄極樂ノコトハ云ハズ是ヲ以テ知ベシ夢ニモ地獄極樂ノコトヲ見ル者アリ佛法ヲ聞テ常ニ惑フ故ナリ是同ジ佛法渡ラヌ前ノ夢ニハ和漢トモニ見ル者ナシ幽厲ヲ以テモ佛者ハ再生輪廻ヲ云愚ナルコトナリ禮記月令ニアル雀大水ニ入テ蜃トナル田鼠鶉トナルト云コトアリ又山ノイモノ饅ニナルト云コトアリ水銀ヲ燒ケバ朱ニナル朱ヲ燒ケバ白粉トナル蜂ガ虫ヲトラエテ似我ノトイヘバ蜂ニナルト云此類多シ是皆氣ノ變ナリ是ヲ釋迦ヤ達摩ガ見テ心ノ明ナラザルユエ理ヲ不レ知再生アリト見テ說タル者也懷胎ノ女猪ヤ猿ニ感ジテ生レシ子總身ニ右ノ毛生テ出タルコトアリ皆氣ノ變氣ノ感ナリ蒙求ニアル羊祜識環鮑靚記井ノコトモ氣ノヒバキ合タルコトナリ此類多シ推テ知ルベシ氣ニハ變アリ理ハ變ゼズ再生ト云コトハ決シテナキコト、知ルベキ者ナリ

寶永辛卯三月日

光海翁識

コトナシ馬ガ死シテ牛ヤ人ニ生レ出ル道理ハナキコ
トナリ此處古ヨリ和漢ニ達シタル博識ノ人惑ヘルハ
悲キコトナリ源親房卿神皇正統記ニ代降レルトテ自
ライヤシムベカラズ天地ノ始ハ今日ヲ始トスル理ア
リシカノミナラズ君モ臣モ神ヲサルコト遠カラズ常
ニ冥知見ヲカヘリミ神ノ本誓ヲ悟リテ正ニ居センコ
トヲ心ザシ邪無ンコトヲ思ヒ玉フベシトハ云ハレケ
レドモ本源ノ道理ニ暗クシテ神佛習合セラレケルハ
イト殘多キコトナリ倭姬世記曰天皇即位廿三年己未
二月倭姬命召_ニ集於宮人及物部八十氏等_ニ宣久神主部
物忌等諸聞玉_ニ吾久代_ニ太神_ニ託宣_志志_支心神則天地之
本基身體則五行之化生_志利肆元_ニ元入_ニ初元_ニ本_ニ本任_ニ
本心_ニ與神垂以_ニ祈禱_ニ爲_ニ先冥加以_ニ正直_ニ爲_ニ本利夫尊
天事_ニ地崇_ニ神敬_ニ祖則不_レ絶_ニ宗廟_ニ經_ニ綸天業_ニ又屏_ニ
佛法息_ニ奉_ニ再_ニ拜神祇_ニ禮日月廻_ニ四洲_ニ雖_ニ照_ニ六合_ニ須
照_ニ正直頂_ニ止詔命明矣_志矣_志已_志專_志如在禮_ニ奉_ニ祈_ニ朝廷_ニ波_波
天下泰平_志天_志四民安然_志奈_志布告託自退_ニ尾上山峰_ニ石隱
坐_ニ倭姬命身マカリ玉フ時_ニ至_ニテ神道ノ根元大意
ヲ述ベ玉ヒ死生ノ道理マデヲ示シ玉ヒ後世佛法ニ惑
ヒテ神道ヲ取失ヒ我國ノ人ヲ殘ハンコトヲ悲ミ太神

ノ託宣ヲ告知ラセ玉フナリ誠ニ尊ベク仰テモ猶餘ア
リ日神此命ノ恩德一時モ不_レ可_レ忘_ニ忘_ニモノナリ此神託ハ
垂加翁モ別シテ尊信シ玉ヒシナリ佛法ノ息ヲ屏ルト
云フコト古今人ノ疑アルコトナリ予ツハシミ草トイ
ヘル書ヲ著シテ疑ナキコトヲ分明ニ記シタレバ今コ
コニ不_レ述_ニ述_ニ或人問神道ニ渾沌ハ誠ナリト云ヒ儒道
ニモ誠ハ圓成底ノ物ト云大極圖○是ナリ然レバ佛法
ニ云輪廻ハ車ノ輪ノ如シト云ルト同ジコトナリクル
クルト廻ルハ出テハ歸リ歸リテハ又出ルナリ東ヨリ
出ル日西ニ入テ明朝又東ヘ出ルハ再生輪廻ニ非ス
ヤ答曰ソレハ大ニ理ノ取ソコナヒナリ此間即再生
輪廻ノナキ所ナリ日東ニ出テ西ヘ入テ又東ヘ出ルハ
先ヘ_ニト廻ルナリコレ生々間斷ナキノ理ナリ歸ル
ト云ハ東ヨリ西ヘ廻リテ又本ノ日道ヲ取テ返シ東ヘ
行クガ歸ルト云フナリ丸キ物ハヒタト先ヘ_ニト運
轉スルナリ天ノ形丸キ故ニ日東ヨリ先ヘ_ニト廻ル
故ニ又東ヘ廻リ出ルナリ再生輪廻ハ先ヘ_ニト生々
セズ西ヨリ東ヘ出ルヲ再生ト云フハ理ノナキコトナ
リ此處ヨク_ニ得_ニ心アルベシ再生輪廻ノ處大切ノ惑
コレサヘハキト決スレバ神道ノ本源ヲ得習合ノ惑ナ

年ノ先萬里ノ遠トイヘドモ感通セズト云フコトナシ
 古歌

ハルカナルモロコシマテモユクモノハ

秋ノチサメノ心ナリケリ

トヨメルヨク心ノ感通スル處ニ叶ヘリ同姓ハ其氣感
 ズ他姓ハ其氣異ナレバ感ゼズ祭テモ享ザルナリ然ド
 モ夫婦ハ交情ノ親キニ依テ其氣同姓ニ同ジクシテ感
 格スルナリ他人トイヘドモ常ニ交リノ親ミアリテ互
 ニ心ヲ同スルモノハ祭テモ感格スルナリ是ニ依テ天
 神地祇氏神ナドヲ祭ルモ神道ヲ尊信シテ齋戒シ誠ヲ
 以テ祭レバ其神靈感應シ玉ハズト云コトナシ身體亡
 ブトイヘドモ其神靈亡ビザルナリ空津彦ノ傳疑ベキ
 コトニ非ズ唯其筋々有テ感格スル也筋カハレバ感格
 ナシ萬物モ其筋々アリ開闢ノ始ヨリ生々シテヤマズ
 一モ筋ノカハルコトハナシ譬ヘバ松ノ木櫻花モ同ジ
 コトナリ松ノ木ニ櫻ノ花ハ不_レ咲櫻ノ木ニ松ノ綠ハ
 生ゼズ萬代筋ハカハラヌナリ松木ニモ女松男松赤松
 アリ櫻ニモ一重八重紅白品々アリ是同姓他姓ト同ジ
 コトナリ是ヲ以テ禽獸魚蟲マデ推テ知ベシ古今ノ人
 幾億萬人死シ去テハ跡ヨリ生レ出テ今ニ絶ズ幾億萬

人アリテモ先祖ヨリ數千年ノ後今日マデ其子孫一氣
 ノ神靈ニシテ他ノ人トハ別ナリ譬ヘバ玉川ノ源ハ一
 ツニシテ其流レハ江戸中方々ヘ流レ出ルガ如シサ
 レドモ他ノ川水トハチガヒ玉川ト云流水ハ一氣ニシ
 テ神靈モ備テ萬代カハラヌナリ毎日ノ生々シテ流
 レ出レドモ水上ノ一水ガ根トナリテ居レバ神靈ハイ
 ツマデモ封シテ玉川ナリ此流レ四谷ヘナガレ赤坂ノ
 芝ノト云處ヘ出ル其四谷ノ水道赤坂ノ水道芝ノ水道
 ト云フガ子孫ノ名ノカハル如シ顔貌カダチハ替リテ
 モ一氣ノ神靈ハ貫テ居ルコトナリ天地開闢ノ始氣化
 ニテ一度生テ出タル元祖ハハヤ別ニ一氣ノ神靈ト成
 テ他ニ交ラズ相續來ル也サテ廣ク云ヘバ天地ノ神理
 晝夜死生一ニシテ川流ノ如ク生々化々シテ息コトナ
 シ前ノ天地ノ終リハ今ノ天地ノ始ナリ昨日ノ終リハ
 今朝ノ始トナル天氣日月ノ運行風ノ吹マデ昨日ニカ
 ハルコト無レドモ今日ハ新ニ生ジテ昨日ニハ非ズ先
 ヘ流ル、水ハ盡キテ跡ヨリ新ニ流ル、ナリ佛法ニ再
 生輪廻ヲ第一ノ根本トスレバ天地理氣ノ道理ヲ不_レ
 知シテ造化ヲ離テ佛性トス此處神道儒道ト大ニ異
 ナル處ナリ筋々カハラネバ松木ガ朽テ櫻木ニ生ズル

神道生死之說

夫我國水土清明ニシテ正直ノ神道開闢ノ始ヨリ傳ヘ來リ天人唯一ト云異邦ニ勝レタルコトナリ然ルニ佛法渡テヨリ後習合シテ此道明ニ知者稀ナルハ此道ノ本源ヲ窮メズ日少宮ノ祕傳ヲ受ズシテ悟知ラザル故ナリ垂加翁ノ伊勢儀式帳序曰原夫神之爲神初不有_レ此名此字也其惟妙不測者爲陰陽五行之主而萬物萬化莫不由_レ此出焉是故自然發_ニ於人聲_一然後有_ニ此名此字_一也又會津神社志序曰我倭封_ニ天地之神_一號_ニ天御中主尊_一舉_レ天以包_レ地御尊辭中即天地之中主即主宰之謂尊至貴之稱又曰天地之間唯理與_レ氣而神也者理之乘_レ氣而出入者ト此ヲ以テ考ヘ知ルベシ神ト云ハ理ノイキテアルヲ云乘_レ氣出入スルハ動靜ニシテイキテ働ク處ノ妙用ナリ理ハ氣ヲ離レズ又雜ラズシテ流行シ妙合シテ萬物ヲ化生ス神代卷ニ清陽者薄靡而爲_レ天重濁者淹滯而爲_レ地トアルモ上テ天トナルハ動ナリ下テ地トナルハ靜ナリ動ノ中ニ靜アリ靜

ノ中ニ動アリ互ニ其根トナル一氣分テ二トナル二分シテ一ナリ是一ニシテ二ニシテ一ナリ垂加翁曰神道儒道共ニ一ニシテ二而一ト云フコトヲ萬事萬物ヘ推シテ考レハ可_レ疑コトナシ異端ハ是ヲ知ザルナリト常ニ教ヘ玉フト也垂加社語曰陽神上主_ニ天陰神_一下鎮_レ地伊弉諾尊神功已了還_ニ於天_一伊弉冊尊生_ニ火神_一歸_ニ于地_一其義炳焉親房東家祕傳發_レ之コレ陽神陰神已上ノ崩御未生一理ヲ云ニ天人唯一生死ノ道ヲ說キ再生輪廻ノ理ナキコトヲ明ニシ玉フ人陰陽五行ノ氣妙合シテ形ヲナシ天御中主尊心ノ主トナリ玉ヒテ明ニ天御量言ヲ以テ萬事ニ應ジ玉フ死スル時ハ其散ル氣モ神靈モ天地ニ歸テ化シテ一ニナリ去ル處モナ_ニ來ル處モナシ_一日少宮ニ留ルノミサレドモ先祖ノ氣子孫ニ受繼血脉呼吸傳テ不_レ絶子孫齋戒シ誠ヲ以テ祭レハ神靈コ、ニ感格ス其神靈目ニモ見ヘズ手ニモトラレズ無聲無臭ナリトイヘ_ニ天祭ル處_一誠ニ依テ感格シテ享ルナリ譬ヘバ水晶ノ玉ヲ以テ日光ニ向ヒ下艾ヲ以受レバ忽移來テ艾燃ユ月光ニ向ヘバ水滴ルガ如シ誠ハ清明ナリ誠ナラザレバ清明ナラズ氣ノヒキテ感ズル處心ノ清明ニシテ通ズル處高天ノ上數千

會津神社之訓詞

豐芦原の中國天地と共にひらけ 國常立尊の七代の
後伊弉諾尊伊弉冊尊あれませる時偶生神俱生神くに
ぐに所々に跡たれますゆへに神國といへりしかは
あれど吳竹のよゝを隔つれば埋木のそれとなく先祖
をだにしらす舊社は田にすかれ神木は薪にくだかれ
まれゝゝ殘る社は浮屠にうばゝれあらゝぎの傍にけ
がされ有がごとく無がごとしかゝれば神明岩戸を戸
ざし神徳日々にかくれて邪道年々におこる掛まくも
賢き 延喜の御代に六十餘國に詔して絶たるを繼邪
正を正し都て三千百三十二座神名帳にゑるし置くゝ
といへどもそも又時をうかゝひ虛に乗て神國の道に
跨て兩部習合とかまへ親王攝家高名の其子うまごを
その門弟となし別當と稱し大社をむさぼり歷代の祠
官を僕のごとく權威を以て取ひしぎ官祿共にうばゝ
れぬれば吾道おのづからおとろふ吾國に生し人たれ
か是を歎かざらんや又にくまざらんや粵に陸奥會津

前太守源正之公神道を學給へること年ありまのあた
りに吾國の道絶ぬる事を悲しみ我領内の神社をだに
再興せんことを思ひ臣等友松氏興に命じて郡吏木村
忠右衛門忠成子門弟服部安休をしてひたをから國ま
ざとをり深山がくれの谷のくまゝ馬蹄も及ばぬ遠
近のたづきなき嶺の社まで霞をわけ雲に伏霧にまど
ひ雪にうづもれて式内式外の神社淫祠妖怪のたぐひ
迄委正してよしなき邪神を除てその地を其所々の社
領によせて永く大破を補なふ尤自國よりして天下に
及び再び本つ洲に歸らんこと其功立處にみつべし

寛文十一年辛亥

天兒屋根命五十四代嫡傳

相山隱士吉川惟足謹書

瓊德合_レ看仁意明

窓前不_レ拂草生々

衣膚濕徹玉山雨

唯在_二天人_一箇誠_一

正德壬辰仲秋月

源良顯敬述之

土津靈神正學記

會津源正之公信_二神儒之道_一殊仰_二我_一國之神聖_一重_二忠孝之大義_一屏_二異端_一改_二兩部習合之說_一焉異邦之儒道則所_二妙契_一詳_二其說_一焉信_二垂加先生_一而爲_二賓師_一與共商量勤學有年矣自編_二集三子傳心二程治教玉山講義附三錄_一梓_二行于世_一以導_二衆人_一著_二會津風土記神社志_一皆令_二先生_一作_中序跋焉弄_二會津八景_一令_二先生_一賦_上詩風雅之情可_二以見_一也行_二社會法_一以惠_二民武備之用_一無_レ闕矣關_二江城之政_一秀_レ身以爲_二太平之治_一其志嗚呼深哉矣先生曰於_二神道_一則舍人親王以來之一人於_二儒道_一則蔡季通以來之一人也此言豈諛以賞_レ之乎阿以欺_レ人乎熟考神道則對_二舍人親王_一言之親王則中興之聖德也儒道則不_レ對_二朱子_一而對_二蔡季通_一言_レ之故神道之學勝_二儒學_一可_二以知_一也蓋才德亞_二先生_一者唯此源公而已矣號_二土津靈社_一沒後祭_二會津采地_一至_レ今其神光歷々焉先生書_二土津靈神碑銘_一以其言行詳著_レ之故自_レ古於_二武門_一雖_二學_一文者多_二未_レ聞_下如_二源公_一人也夫

源孝道之詩載_二于本朝麗藻源賴義之文載_二于續文粹_一源高德之詩文載_二于太平記吉野拾遺源義輝義昭賴之晴信藤孝豐臣勝俊藤原政宗源義直之詩本朝一人一首載_レ之然所_二學記誦詞章惑_二異端_一或主_二權謀_一或博雜更無_レ有_レ志_二於道學_一之人_上矣如_二橘正成_一有_二學才_一而忠義拔_二衆人_一故_二後村上天皇賞_レ之祭以號_二南木明神_一宜哉然未_レ見_二其詩文_一不_レ考_二著作之全書_一則不_レ知_二其學意_一於_レ號_二多門兵衛_一則不_レ免_二異端之惑_一垂水廣信尊_二朱子之書_一著_二嘉文亂記_一此說載_二于長濟草_一然不_レ見_二其書_一則不_レ知_二其學志_一也近來土佐家士小倉政義雖_レ尊_二朱書_一有_二其志_一未_レ全備前源光政信_二熊澤氏之王學_一水戶源光國雖_レ信_二神儒_一博識英才而其著述世人知_レ之未_レ免_二博雜_一南部行信信_二山氏之疎學_一焉皆是雖_レ有_二志不_レ學_一神儒一致之正道_一嗚呼惜哉其他文學之武人不_レ遑_二枚舉_一而未_レ聞_二神儒一致之實學者_一也以_レ之見_レ之源公則可_レ謂_二於_二武門貴家_一古今獨步也嗚呼稱_二土津靈社_一亦宜哉矣感發之餘賦_二詩以仰_レ之

學得源公儒與神

武門才德出_二群倫_一

靈光永守土津社

功遺五書千歲真

雨中對_二窓前草_一誦_二玉山講義附錄_一憶_二仁意_一

やみ諫にしたがひ侍らんとて卽道を從長へ附屬ありて汝時を待て吉田家へ返し傳へ死後にいたりても師命をはたしぬべし嗚呼我師命を遂さる事念なきわざなりととしてしきりに涙落しつ視吾堂かろふじて病おこたり例の相山の舊隱にまかりて休らひ侍るよのかなき事を思ひつゝ侍りて

消あへぬ小笹の雪の玉ならて

はかなくたのむ世のならひかな

其年も暮春の比本所の野亭に籠りて花を詠侍りて

春にたにとふ人もなく埋れて

住もかひ有花のしら雪

道の時いたらざる事を歎き侍りて

神代よりふみ傳へても濱千鳥

甲斐もなきさにひとりなく也

元祿七年戊十一月十六日視吾堂春秋七十九歳にして神さり侍るいさゝめも病腦なく顔色常のごとし門人啼いさち悲しみ闇夜に燭をうしなふにことならずさてしもあらねば遺體を道義沼屋敷に葬め侍る則視吾堂靈社と名づけ侍る嗚呼靈社吾道の絶なんとする時に出て神海靈社に此をうけ繼て埋もれし道をひらき

て人に此をほどこして世のまよひをさとしぬ大なるかな理のさかんなる事神代にも耻べからずひかりを後世に照し神忠を萬世に建悲哉不祥の時に逢て卷て道をふとろにす愚かなりといへども時を得ものは名を世に施す賢なりといへども時を失ふ人は名を世に埋むされば古より君子も其世には埋もれて後の世に顯ることかやそも一郡一庄をしるよしせる人は徳不徳作法に顯れて世にいやちこなるべし埋もれましくして一郡一庄の祿にもあづからざる身は其徳かくれて顯はれざれば人又これを知るによしなし徳達の人は一國をうれば一庄こぞりて徳に服ふ一國をうれば一國こぞりて徳に服ふいでや誠の大にして又其微に及ぶ事幽谷の樵夫ももれずとかやされば天照太神とは號け奉る事太陽の光りにたとへて號けたてまつるものならし

るを禁裏炎上其外障と侍りて相傳残りぬるなん師命をはたさるることいかばかり念なく常々歎き侍れど心にまかせぬ世の中いかむ共すべからずよりて道に

志厚き人々諫けらく師翁吉田へ道の相傳をとげ給はんと年來思ひこめられ侍れど時いたらず齡はやいやましに高く重ねおはしぬもしやはからざること出来侍らば道はたえ侍るべし誠に歎きわざなり幸に從長道に秀て師翁も常に賞感おはしぬ今師翁に替りて門人に教示をなし侍る唯道を從長へ傳へ道の絶て門人の心をもやすんじ給へとなん視吾堂答て曰親切なる諫にこそ侍れ神海靈社末期枕元にして申おかれ侍れば朝夕此事をのみ心に忘るゝ隙なくおもひわたり侍れどあやにくの世中心にまかせ侍らずかく星霜を経侍る師命をはたさず外へ道をのこすこと本意に叶はずまして從長たとへ秀たりとて吾子に侍る父子の親愛によりて傳へ侍るなどゝ世の有さまを知らぬ人の思はんこと座をすへぬる心ちこそ兼て思はれ侍る先達からじといひてうけあはずなりぬ各折にふれ事にしたがひしばゝ諫め侍れどうけいれす其中に堀田五郎左衛門河内守一輝はわかゝりしより道に志ふか

く眞實に侍る人なり一日とふらひ終日物語せし序に諫られしに折も有べしとうけあひなかりければ歸りてかくなん

天かゝみ空にかゝりて明らけき

きみか心は人もしるるらむ

親切なる志にこそと感じぬれどゆるし侍らず其後元祿三年五月視吾堂重き病にかゝりぬ道に志ある人々は驚きいふかりきこえ醫師などの事何くれせちに心づかひ有けり又は日來の諫の事をいづれもつどひ相議り侍りて諫て曰兼てより道の事從長へ附屬あれかしと何れも此事を願まうし侍れどうけ給はず今病に臥おはせばもしや病おこたり給はずば吾國の大道此時に絶ぬべし神海靈社の遺言を常にせちに心につけてたまふ誠は靈社照し給ふべし從長へ道を傳へ置給はば此後吉田家に志ある人出来侍らば返傳授願はるべししかあれば死後にも遺言とけ給ふべし將道に心ざす門人の志もくしけ侍らずとあながちに誠をせめ詞を盡して諫侍れば視吾堂答らく老かゝめる身にも侍事ありて今までは人々の諫にももどき侍りき今年は起居もくるしく心もおとろへぬれば世間今はと思ひ

侍る吾國は忠を五倫の第一とし侍れば君道を人道の最上と教へ給ふがゆへに忠義を以て五倫の本とし侍る君の爲に親を捨るの道はあれども親の爲に君を捨るの道なし如斯く忠義を重する時は君臣の道正しくして臣として君をしのぎ犯さず君臣の道正しき時は人道をのづから序ありて乱れず今澆季にくだれる時

えあけられしに視吾堂を營中へめされ土屋古但馬守上意の旨を命ありて御服并に御傳馬等を賜るよりて寛文十二年春正月下旬江府を出て都へのぼりぬ吉田へいたり神海靈社へまうでゝ讀て奉る
祈るなり吉田の山のさか木葉の

といへども我國君臣の禮正しきは伊弉諾尊天照太神の御教戒の異國にすぐれたる所以なり又日用本として脩る所は敬の一字なり尤敬は儒にも整齊嚴肅なども相見え侍れ共所作にかゝりて吾道のごとく其理幽遠深厚にたらず一生の學は此敬の一字に極り淺深の次第重々これ有て奥旨侍る一往は放散の氣をしづめゝて丹田に納むるをつゝしみると云日用心氣をしづめゝて行ひ物に應ずる時は事々物々の筋々明らかにして節にあたる猶重々口訣侍りて一往には述盡しがたしとなん正之卿甚おどろき信仰淺からず侍りき問答事多ければ皆事そぎ侍る夫より國郡の正道に志す人多く出來侍れば居住を江府に移して教をたれけり吉田家神海靈社の遺言のまにゝ返傳授の事を禁裏へ願上勅許有て所司代牧野佐渡守より關東へ聞

さかく影をとときはかきはに

講談の前に拾遺に兼敬神代卷講習なさしめ其後講談を始め隔日に讀侍る拾遺は講談の問日ごとにとぶらひ相傳の事うけられ侍る一日視吾堂むかし吉田へかよひしことを思ひ出て讀て拾遺へかくなんむかしへやおとろか本をふみ分て

講談の前に拾遺に兼敬神代卷講習なさしめ其後講談を始め隔日に讀侍る拾遺は講談の問日ごとにとぶらひ相傳の事うけられ侍る一日視吾堂むかし吉田へかよひしことを思ひ出て讀て拾遺へかくなんむかしへやおとろか本をふみ分て

めゝて丹田に納むるをつゝしみると云日用心氣をしづめゝて行ひ物に應ずる時は事々物々の筋々明らかにして節にあたる猶重々口訣侍りて一往には述盡しがたしとなん正之卿甚おどろき信仰淺からず侍りき問答事多ければ皆事そぎ侍る夫より國郡の正道に志す人多く出來侍れば居住を江府に移して教をたれけり吉田家神海靈社の遺言のまにゝ返傳授の事を禁裏へ願上勅許有て所司代牧野佐渡守より關東へ聞

問こし道を又とはれぬる

拾遺さもこそと感賞ありぬ講談も竟宴にいたりぬれば寄國祝といふ題なり各和歌あり

拾遺さもこそと感賞ありぬ講談も竟宴にいたりぬれば寄國祝といふ題なり各和歌あり

視吾堂

視吾堂

神風になひかさらめや押なへて

神風になひかさらめや押なへて

吾すめみまの國津民くさ

吾すめみまの國津民くさ

事畢侍ればかたみに名殘おしみて又近き年比にまうのぼりて殘なく傳へ侍らんとて別れ侍りぬ視吾堂年

事畢侍ればかたみに名殘おしみて又近き年比にまうのぼりて殘なく傳へ侍らんとて別れ侍りぬ視吾堂年

なみ高くなり行につけて返傳授再會にて悉く相濟侍

なみ高くなり行につけて返傳授再會にて悉く相濟侍

此し推古天皇以後異國の教盛に行はれ吾道おとろふ
るにしたがひ異域文國の風儀朝廷に移され武日にす
たれ文目に盛にして詩歌管絃のあそびに勇義とろけ
志やはらかになり行侍る將軍家の政武國の矩にかな
ひ天照太神の御掟に中り侍る天下將軍家の掌握に落
る事自然のことほりに侍るとなん頼宣卿甚感賞あり
てこよなふ崇敬おはしぬ一日頼宣卿かたらく東照宮
仰けらく吾國は吾國の道を以て治まる教の有べかめ
り聞ならく本朝の道は吉田家へ傳へ來るといへり道
を心得たる者を呼くだすべしとの仰ごとによりて神
龍院とかやいひし人駿河へ下りしに開卷の時東照宮
の書は無點なりしゆへ讀をとほせ給ふにさやかなら
ず外の事へ轉じ一つ二つとはせ給ふ事侍りしに是も
滯りてほどけずさるから重てきかせ侍らむとて講談
におよばざりし汝に代侍らば道はひらけ侍るべし念
なきわさに侍などなん頼宣卿量廣く英才秀達にして
世に智能の名ある徒をば祿を厚ふして招きおはしぬ
寔に良將に侍る折々まかりて講談し侍るに甚にたう
とみ道にすゝみおはしぬものする事畢て山家へ歸り
ぬ萬治三年秋七月秋のあはれも常よりも心にふかく

夕風身にしみ胸うちさはぎ侍れば都のかたしきりに
いぶかしくとみに旅行に赴きつとめて京につきぬ即
吉田へいたり萩原先生の館へとぶらふ先生重き病に
かゝり給ひぬよりて病の床を伺ふに先生曰我天年畢
なんとすさるから明朝は使を山家へまだし此を告ま
く難掌等にのべきらえぬはからざるに上京あなる鳴
呼浮橋なる哉とうめき給ひぬよりて末期の證明并吉
田家頼置るゝ遺狀わたし給ひぬ此時滿九二兼歌八歳左
衛門佐三從員十六歳御枕本に侍りて遺言承りき晝夜ま
とひかしづき侍りしに八月十三日神さりおはしぬ吉
田山に葬め社をいとなみ神海靈社となづけ侍る視吾
堂涙にかきくれ侍りてかくなん

いとせめて今は神代のかたみ共

なからん君のかけをだにみん

何くれ事畢りて東へ下り侍りぬ其後會津左中將正之
卿まみへられ侍る世に大儒英才の名あまねかりし間
て曰神學は五倫を本とする所は儒も同じかるべし今
日本として守る所は何れの理ぞや視吾堂答て曰五倫
は人道の當然に侍れば五倫の名目は儒も同ふして其
内前後に用ゐる替り侍る儒は孝を以て五倫の第一とし

得て天命なりと心の悦いふばかりなしいなむべからず視吾堂曰いみじき仰ごと心肝に銘じ泪押へがたふ侍るかくいやりち仰ごとをうけ奉らざること寔にかしこみ奉る相山に隠れ居る身におほけなき吾國の道を任じ侍りて何によりて道の興るよすが侍らん道は鎌倉山に埋れ絶むこそ神明の罪うるわざに侍る此仰ごととは幾度も辭びたてまつるべし先生いかりおもほてりして曰かくことはりを盡し侍るをさまで隠士はことはりのほどげざることこそ又汝まかりて申べし今汝に道を傳へぬるとて山を出て世にかゝづらひ道を起されよとはあらず有ふるまゝに相山にかくれおはせよ天命あらば大人招かるべしさもなくばほろぼすべし是亡ふべき時なめりいなむべからずとなん要説此上はうけまつりたまへとしきりにいさめ聞ゆ視吾堂いなむに所なく隨ひまつりて道を附屬し侍る先生いみじう悦おはしぬ視吾堂まかりし時道は汝にて興りぬべし吾はやみぬとのたまひき歸さもよふす比富小路三位賴直卿馬のはなむけにかくなんしたひ行ふるさとしやあかす共

なれし都の友はわするな

返し
忘れぬ都をさへに言の葉や

いとゝしのふの種をううらん

年を越て相山へ歸りけらし其後紀伊亞相賴宣卿道を傳へて相山に隠れ住ぬることをきゝてまみえまよくおぼす視吾堂にしたしき者侍るを相山へまだしてまねかる三度に及びて江府に出てまみへ侍る禮を厚くしてまみえおはしぬ信仰淺からず賴宣卿問て曰神道は本朝の道にして上代は此道を以て世を治められ侍るにや視吾堂答て曰しかり問て曰社人神を祭り所作を行ふを神道といへりしかあれば神學は所作を本とするにや答て曰神を祭り所作を行ふをば社人の神道と申侍る是を行法の神道共申侍る天下を治るをば理學の神道と申侍る更に行法を用ること侍らず理學の所作は武藝に侍る問て曰上代神學を以て世を治められし要目は何れの理ぞや答て曰武義を本として仁惠をほどこす是則天瓊矛の徳なり瓊矛を以て道の體とし世を治るの本とし侍る是を以て治る時は武備上に盛にして仁惠民にしき平けく安けく四海靜謐に治まる神代伊弉諾天照太神より人代に至まで上代の政法如

翌の日吉田へまかりて萩原先生へまみへ侍りて例のこと物まなびにかよひぬ先生曰この度は旅店を吉田に移してのどかにおはせよとのたまひて吉田村のかたへなる松樂庵といへる庵室にやどりて日ごとにとふらひ侍る年くれ春立かへり野邊の若草もへ出いつしか花もさかりになる比正親町亞相實豐卿しばの戸をたゝひてしめやかにかたらひしに庭前のはなさかりなりければ亞相曰かゝるさかりなる花をみて一首は有べかめり花のおもはんこともむげにこそとぞゝのかしすゝめられければかくなむ

しはの戸に花しさかすは白雲の

かゝる山邊に君を見ましや

亞相いとうめでゝ返しははしたなく侍らむとて

心ある花のあるしを花ゆへに

問てうれしきしはのかりいは

先生曰汝近きほどに講習有べしとなむいまだ讀ほどの力侍らず憚入侍れども仰ごとに隨ひ讀侍らむとてやがて開卷をとけり姉小路富小路風早大外記此人々は先生へしたしく侍れば講席へ出られ侍る講ごとに甚だ感賞おはしぬ一日視吾堂和歌をつらねて賢覽に

備ふ

置まよふ霜の下草ふみわけて

道あるかたに行かへるかな

滿座感吟やます其時先生外記兼種にかへりごとすべき

よし仰ごとありよりて返しにかくなむ

今よりやかよふ心の色とみむ

庭のあさちにをける初しも

日數へて講習も竟りぬ先生多賀要説をまたしてきこえ給ふ汝に道を附屬すべし七十年來汝をまち侍るいなむべからず視吾堂驚きいなみて曰冥加の至り身にあまり有がたく侍るしかあれどかろき隱士の身におほけなき道になひ奉らんこと恐れ入侍る且は冥加に盡侍るべしといなみてうけず又重ていはくことはりむべなり我多年の間其人をもとむるに公武地下に道を任する人を得ず其器にあらざる人に道を残さむはかへりて道を穢し殘る甲斐なきわざなめり賢王賢將の代多かめるにかく本國の道として埋り果ぬるもかつは道の量なきにこそ吾は其人あらずばたゝまくなん思ひとりて年月をすぐるほどに老の浪高く重なるまゝに此一つ心にかゝりてすぐしぬ今思はず汝を

人あまたつとひて何くれ物語せし序に人の云けらく吉田の萩原こそ日本の道を代に傳へおはしけりとかや年たかくおはしぬ此人身まかりなばやまとの道は絶べしと聞ぬおしきことにやといへり視吾堂年來此事を心にかけてぬるにいみじう聞出し侍るとうれしさととしへなく相山へ歸りてやがて旅のよそほひを調へ京へのぼりけらし紫野大徳寺にしるべ有て旅店に定め兼從先生へまみへまく其系にしを尋ね侍れど先生やゝ年たけ多病にして人にまみへ給はずと人のいふになむせんすべなし一日吉田の社へまうで心の願を祈り奉りてかくなん

神のみちしるへはかりにくれ羽鳥

あやしと人のなと思ふらむ

社人に近づき願くは序を以て兼從主へさゝげたまはれかし近き程に又まうでき侍らんとてかへりき四五日ばかり經て吉田へまかりて萩原先生の館へとぶらひしに童子に扶られてまみへたまふうるはしき仰ごとにより神代卷の日來ほどげざる事どもを粗尋侍るにはいゝえみ給ひてほどき教へたまふ昔より多くの人にはまみへぬるに汝ほど神書にくわしくわたりし人は

あらじと感聞したまふ吾年老多病にして人にまみへざれとも在京の間折々來ませよとねもごろにのたまふしばし侍りてしぞきぬ其後柴の扉の折々とぶらひしに吉田に四十年來講談絶ぬ今度汝の爲に神代之卷を讀べしとなん有難き御惠身にあまり侍るといふ近きほどに神代の開卷おはしぬ幽妙の意味をさとし一座の講ことに胸霧はれて日にすゝみぬ紫野へ歸りてひたぶるに心を書にひそめおもひをこらして夜もすがら机にむかひぬ年くれ春にもなればうらゝかに都おぼしてゑんにのどけしや花の比道にて雨に逢て

春雨はふらはふらなむぬるゝとも

よしや吉田の花の下かけ

日數重りて神代卷竟宴にいたりことぶきむべしし儀式行はれ侍るおぼろげならぬ御惠海よりもふかし事竟て東へ歸らむとする比我稀なる年におよび身又多病なれば再會期がたし隠士の無力なる身に重て上京の事大儀に侍れと思ふ子細もあれば何とぞ近年のほどに上京あれかしとそゝろに泪もよほされけりかしこみうけたまはりてしぞきけらし翌年の秋七月にいたり又都へたび立日かすふるほどに京に至りぬ

神學承傳記

夫吾國は天地ひらけし始萬州に先だちてあらはれ世界に秀で勝れたる國なり此大八洲國開けぬる時伊弉諾伊弉冊尊氣化まし／＼俱生神耦生神多氣化まし／＼しに此神大德の神明に坐ますゆへ國々こぞりて君とし崇め貴み命令をうけ給りぬ天命をうかいひ五倫の道を建給ひて萬民を教導給ふに君臣の道を以て五倫の本とたて給ひき又萬民の勇義を好む自然の風俗を觀たまひ勇義を以て政道の本とし仁惠を施して四海を治め給ふ是を天瓊矛の德と云瓊矛は武器なり瓊は玉の名玉といふ謂也勇義ありて惠みを施す體は威ありて懷きしたがふて四海安靜に治る此理を御子天照太神に傳へ給ひて天下を治め給ひ天照太神に至りて瓊矛の德を三種に述て三種の神器を傳へ給ひて事理を以て御孫瓊々杵尊へ傳へ給ひぬ是を以て代つたへて帝業の重器とあがめたまへり太神瓊々杵尊を日向國高千穗峯へ天降し百王萬代の帝祖と定め給

ふ時天兒屋命天太玉命を輔佐の神としたまひ八百萬神達供奉し給ひぬ天兒屋命有德にましますゆへ政をゆだね且神學の道統を附屬まし／＼しにより兒屋命の子孫八十連續是を傳へて大織冠鎌足迄道の事理附屬有けり所謂事とは太占の大業神事をいふ理とは治世の君道政を云大織冠までは代々政事にあづかりて神事の職をかねてつかへ奉りおはしぬ神事は幽冥の神慮へ近づき奉りて神事へ通するゆへに尋常の人とり脩がたし大織冠入鹿大臣を誅伐の志を興したまふにより若本意をうけざらましかば我子孫根をたゝれんことを願みしかあれば道の道統共にほろびんことをいたみて同姓の内其器を撰み中納言伊美麿吉田家元祖を養子として道の事理的々相承ありて吉田兼從先生迄天兒屋命より五十三代の道統におはし侍る視吾堂性閑雅にしてはやうより相州鎌倉山にのがれて相山の月に心をすまし四時の美景を樂み折にふれては和歌をつらねて思ひをのべり素より大和唐の文をよみてみぬよの人をともし侍るさるは我國の道に志ふかく侍りて年來心にかけぬれど此をしる人なかりしにとみのことありて江府へ立出侍る比或人の館にて

ノ氣カラ地ノ質ヲ生ズルハ相生也地ノ質ヲ天ノ氣
カラヤブルハ相尅ナリ相尅ノ初リハ天ノ氣ノ木カ
ラ火ヲ生テジ質ノ土ヲヤフルガ初也火生レ土トウ
ラハラニナルハ尅也根本尊キハ末レ生ノ土也土金
ヲ以神道全體ヲ貫クコト感心アルベシ中五ノ數五
十鈴ニシテ日神ノ尊バセ玉フモコ、ノ意也惟足翁
ノ傳神道ノ大祕也

右惟足翁土德一篇人雖レ得ニ其傳ニ漢文難レ解故今和
解以具傳授者也

享保廿年乙卯九月

八重垣翁識

ナレドモ天ハ氣ユヘ早ク成就ス丁度泥水ヲ日向ニ
ヲキテ見ルガ如シ泥水デサヘ半日モ一日モカ、ラ
ネバカハキ切り堅マラズ地土ノ成就ニモ幾萬年ヲ
ヘル筈也天ノ火氣十分ノ時地土モ成就スルコト也
土地成就スルトソノ中ノ金カラ又水ヲ生ズ此水ハ
開闢ノ時ノ滄海ノ水トカハルコトナシソレヨリ木
火金水循環シテ生々ヤマズサレドモ是ハ質アル五
行ユヘ限リアリテツキ亡ルコトアリ丁度人ノ形體
老衰シ草木枯落スルモ同ジ火氣強ケレバ地土ヒロ
ガリ地土ヒロガレバ海水カハキ海水カハケバ火ノ
氣モ亦キエテヨリ所ナシ是ハ皆形ニツクモノハ皆
如此コ、デ天ノ火ノ氣亡ルト見ヘタレドモ亡ルハ
皆相剋也親ヲ尅セラレテモ子ガヒカヘテアルユヘ
剋シ盡スコトナラズシテ又相生ズ總シテ形アルモ
ノヲ剋シタホスハ形ナキ氣ザシノスルコト也人ノ
丈夫ナル形モ風ヲヒキ熱ヲ生ジヤミタアル、ハ氣
ガ來テ剋スル也相生ハアマツコトハリニテ理ノ字
ヲ埋字ニ用フ相剋ハクニツコトハリニテ義ノ字ヲ
埋字ニ用フ形ニ五行具レドモ形ト云ヘバ全體ガ土
ナリ氣ニモ五行具レドモ全體ガ火也土ホド堅キモ

ノヲモ火デ亡スコト也生ズル時ハ木生レ火火生レ土
トクレドモ剋スル時ハ木尅レ土土尅レ火トクルコト
也是ガ相生相剋ノヤマヌワケニテ親ト子ノワケ也
木ノ孫ハ土也火ハ木ノ子也木カラ土ヲ剋スレドモ
土ノ子ノ金ガヒカヘテアルユヘ剋シ盡サズ助ルモ
ノアルハ相生也外モ皆其ワケニテ夏ノ末カラ火剋
レ金ト秋ノ金ヲ剋スレドモ火ノ子ノ土ヲ中ヘウチ
コミテ六月祓ヲスレバ禍ナシ四季トモニ土用アル
ユヘ土德ノ本ナルコト知ベシ火レ剋金モ金ヲトロ
カスホドノ火ニテモ水ハ金ノ子ユヘ火ニ燒盡サセ
ズ水剋レ火モ火ニ水ガカハカサレカハキ切ルカト
思ヘバ滄海ノ水カラ又水氣メグリカヘル
サテ天火ガ水氣ニ亡サレントシテモ天火ハ君也臣
下ニ地土アリテ土剋レ水ノ功ヲナスユヘツキセズ
臣下ガ君ノアタヲフセグナリ土サ全ケレバ金ハ中
ニアリ此金ハ天ヘノボルイキサシノ金也地ノ中ニ
アル質ノ金ニテハナシ初ハ天ノ五行カラ天先成モ
土ヨリ相生ジ其土ニハ金一體トナリテアリ後ニ地
ノ五行ノ出來ルハ天ノ五行ノ火生レ土ニシテ又土
ガ初リナリサテ天ノ氣地ノ質ト立タル上ニテハ天

未生土之傳

惟 足 翁

天地未_レ割陰陽不_レ分渾沌溟滓含_レ牙其清陽者起升靡降而爲_レ天重濁者淹滯而爲_レ地於是天地開闢焉

コ、ニ土アリコレヲ未生ノ土ト云コ、ノ場ニ何トテハヤ土ガアルゾト云ヘバ總シテ物ノ出來ントシテハ聚リ靜マラザレバ出來ズ何ガコレホドノ天地ノ出來ルコトユヘ此渾沌含_レ牙ノ内ニデツトアツマルモノアリソコガ土也アツマリタルモノアルユヘソレガ起升リソレガ淹滯テ天地ト開ケタル也人ノ日用デ云ヘバ何事ニヨラズ前ニシヅマリアツマル氣ガ無_レバ善キコトノ出ヌモ此分ケ也開ケテヨクナルモノハ開ケヌ前ニアツマル土德ガ無_レバナラヌモノ也ソフシマルトハヤ堅固丈夫ナル氣ノ出テタルハ金也此金モ未生ノ金ニテツヨキ氣ヲ云是未生ノ土生_レ金也其ツヨキ氣ヨリ水氣ノ潤出ル其潤ヒヨリハヤ浮ミ出ハエ出ルイキアルヲ未生ノ金生_レ水水生_レ木ト云サテ此上デ已生ノ木ノ氣トナル

コ、ガ已生ノ水生_レ木ニテ其已生ノ氣ノアタ、カナルヲ木ノ氣ノ春ト云ソノ春ノ氣カラシテアツキ火ノ氣ノ夏ヲ生ズサテアツク炎上ルモノハ上ル内ニ又土ノ氣ヲ生テ半上レバ半沉ムモノアリ火ヲタクニテモ知ルベシタクウチカラ灰トナリ土ノ體アリ是已生ノ火生_レ土也此土ノ氣ヲ土旺ノ土ト云テ土ノ中ニ光アリテ金ヲ生ズル土也コ、ハ秋ノ氣也土ヨリ光リヲウケテクルモノハ金也其金ノ氣ヨリ冬氣ヒヤ、カナル水ヲ生ズソノヒヤ、カニ潤フ内カラ又春ノ氣ヲ吹キ出シ已生ノ金生_レ水水生_レ木トナリ形ハ出來ネドモイキノ循環ヤマズ幾萬年モ氣ハカリテメクル内カラ已生ノ土地ガ出來テクル事也天先成トモアルハ此事也ソノ天ノ氣ノツヨク循環スル勢カラ土ガ土地トカタマリテ此土地ガ金ヲ生ミ金ガ水ヲ生ミ水ガ木ヲ生ミ木ガ火ヲ生ミテ形チアル土金水木火トナリテコレヲ形ノ五行トモ地ノ五行トモ云此土地モ萬年ヲ經テカタマルコト也サテ形チシタル五行ノ内デモ天ニ專ラ屬スルモアリ地ニ專ラ屬スルモアリ木ト火ハ天ニ屬シ金ト水ハ地ニ屬ス天ハ氣也地ハ質也天地一時ニ開クル様

爲_二親讐_一是於守_二金克_レ木之義_一不_レ負獨立然火木子故
 金有_二親讐之義_一是以火克_レ金相克而地金蕩溶而爲_二火
 氣_一耳然水金子故火爲_二親讐_一是以水克_レ火相克而火氣
 消盡而爲_二水氣_一耳其克_レ火之水氣也者本開闢滄海水
 而所_レ樹_二燥於天之火氣_一雖_レ不_レ知_二其所_一在也然水氣
 回固有_レ時而如_レ有_二定數_一焉故於_二報_レ讐之時_一水氣乃
 回來以消_二盡火氣_一而爲_二水氣_一耳蓋已生未_レ生一故天
 火爲_レ君地土爲_レ臣矣有_二君讐臣報_レ讐之義_一是以土克_レ
 水相克而爲_二土氣_一而已其克_レ水之土氣也者已生地土
 爲_二一氣_一所_レ克潰然喪_レ形以雖_レ不_レ知_二其所_一在也然土
 氣復固有_レ時而如_レ有_二定數_一焉故於_二報_レ讐之時_一土氣乃
 復來寶報_レ讐而惟爲_二土氣_一而已此土氣之裏復自生_二
 君金_一矣此君金固君土包具者於是時_二五行相生復所_一
 以始當_二行之理真具_一于其中_二處所謂天地未_レ剖陰陽
 不_レ分渾沌溟滓而含_レ牙未_レ生之君土復處矣其唯一君
 土生_二具君金_一也者卽是未_レ生土也於戲未_レ生土也者其
 至矣

中嶋延守吾道を學事十とせ餘り螢雪の窓光空しから
 ず或時は雲霧をしのぎ西に東に行かふにも影のごと
 くにしたがひ寸陰を惜むつゝに精功のいさをしを積
 て其幽遠を探る抑相生幾度めぐり相尅各一度轉じて
 唯一の土にもとづく工夫且又理義をそなへ其意味誠
 に至れりむべ吾道のしるしとするにたらんかよりて
 いさゝか情をのぶる事しかり

延寶七年七月吉曜

天兒屋根命五十四代嫡傳

相山隱士惟足謹書

土德篇

天地未剖陰陽不分渾沌溟滓而含牙其清陽者起升
 靡降而爲天重濁者淹滯而爲地於是天地開闢焉蓋
 以五行相生之序言之則天地未剖陰陽不分渾沌溟
 滓而含牙者未生土也其未生土土生金相生而爲
 金氣其金氣金生水相生而爲水氣其水氣水生木
 相生而木氣發生焉春木故於春木氣始發生其所發
 生之木氣木生火相生而火氣成焉夏火故於夏火氣
 炎上其所炎上之火氣不升不降所備其位於中處
 固中央之氣而遷夏火于秋金間火生土之時而
 五行相生之旺氣土也其五行相生之旺氣土土生金相
 生而金氣成焉秋金故於秋金氣始收斂其所收斂之
 金氣金生水相生而水氣成焉冬水故於冬水氣潤下其
 所潤下之水氣裏復具可發生之理於春木氣乃
 發生而天之五行相生循環歷幾日幾年之後自重濁者
 淹滯而爲地焉土生金故地土生金金生水故金生
 水水生木故自水木氣發生之迹木乃生木生火故木

中生火之理備焉於是地之五行生成又分天地以言
 之則天具木火地具金水故天之火氣有餘之跡地
 土自生焉歷幾日幾年之後地土成就焉地土既成就乃
 土中生金故水自生此水與開闢滄海水一天地雖異
 位水一而不貳也其天地所同之水水生木木氣發生
 木生火火生土土生金金生水相生而水復木氣發生
 而生生如無窮然有始則莫不有終也有質則莫
 不滅也是氣有限也是故天之火氣有餘之跡地土廣
 處地土廣處則海水隨乾及其極則海水竭海水竭則
 火氣無所託而自消盡徒爲陸而已譬如這燈火氣有
 餘而皿中素地多皿中素地多則膏油隨燥及其極則
 膏油竭膏油竭則火氣無所託而消盡矣其土窮水火竭
 一時而非有漸以也蓋水木火竭也乃天之所沒滅
 也然於地土金未喪也雖土金未喪也水木火既竭則
 五行相生之氣窮五行相生之氣既窮則所以五行相生
 之理亦自理矣於是五行相克始當行時而相克所以方
 行義既已至焉相克所以行之義與相生所以行之
 理二而一而二者故隨其義所無形體之一氣
 以下所有形體之土上木克土相克而地土潰然喪形
 矣其一氣雖克土未能溶土中金且金土子故木

き。日本の家廟のいにしへのごとくもあらざるは。祠官ならずとも。心あらん人のなげくべき事ならんか。問曰倭姫命は何れの皇女にてましますぞや

答曰倭姫世記に。倭姫皇女は。垂仁天皇第二女也。生而貌容甚麗。幼而聰明叡智。意貞潔通神明^{利倍}。故皇御孫尊乃爲御杖代^{豆奉}頂^三太神^二從^三美和之御諸宮^一發給天願給國求奉^支と侍り。其後五十鈴川上に。内宮をしづめ奉り御在任百卅餘年まし^くき。事長ければ畧し侍る。又同記に。大足彥忍代別天皇廿年庚寅歲。倭姫命年既老耆不能^レ仕。吾足^止奴宣。齋内親王仁仕奉物部八十氏人々定給^天十二司寮官等^{波奉}移^三五百野皇女久須姫命^二即春二月辛巳朔甲申。遣^三五百野皇女於^一皇太神乃御杖代^{止志}多氣宮造奉天齋慎美令^レ侍給^支伊勢齋宮群行始是也。爰倭姫命。宇治機殿乃磯宮坐給^{利倍}奉^二日神祀^止無^レ倦焉^一といへり。其記には。多氣宮は。天長二年に始といへど。倭姫世記の説はかくのごとし。其後はるかに御壽命を保たまひ。雄略天皇廿二年に。外宮を又御鎮坐したまひき。同世記に。至大泊瀬稚武天皇御宇。自退薨云或記に雄略天皇即位廿三年己未歲。春二月倭姫命自退^三尾上山峯^二石隱坐^一といへり。

凡御壽命五百歲あまり歟。倭姫命の御事を。今の世人あまねくしり侍らぬも神道あきらかならぬゆへにや。二宮の神祕は大方此聖女より傳へたと見えたり。おろそかにやはおもふべき。神道山のふかき理ありとは。御裳濯川の流の絶せぬ御代にてもしるべきことならん

々そのかみの。十が一にも及がたし。三百年來は。宮中にて。神事行ふ殿舎。又重々の御垣等も。いつとなくたえて。名のみなるもあり。又豊鋤入姫命より。七十五代相續きし齋王も。彥子内親王より御任しもなし。しかれば齋宮の跡は。少き森の内に黒木の鳥居立たれど。あたりは民の栖となりて。彼黍離々たるありさまむなしく竹の都の名のみといまりてむかしをし。たふあはれを催し。又離宮院。神服機殿。麻績機殿なども取立人なければ。其しるしばかりなり。又末社の遙拜所は寛永年中に。御再興あれど。其社の在所は。地領となりしより誰改むる事もなく。畑にすかれしやらん。野となりしやらん。慥に知人もまれなる多し。ことさら尊ぶべき。倭姫命の石隠れし給所の今神領の内なるさへ知人もすくなし。又二月九日祈年の御祭の奉幣使も参向なければ。兩宮ともに御祭もたえてなく。春秋の祈年穀の奉幣使もたえ。六月の御祭。十二月の御祭の奉幣もたえて。今は御祭を禰宜等つとむるまでなり。是皆かならずなくてかなはぬ事なれど中絶しぬ。又大奉幣。臨時の奉幣と云事ありて年中には幾度も。王氏中臣。齋部。卜部の四姓の官人参向

せしに。近頃再興の。九月の御祭の例幣のみなり。又神官も名ばかりは殘。任する我人なきもあまたにて。大司。權大司。少司として三員ありし。宮司も。近代は大司一員なり。司中。兄部。檢非違使。又神宮にも。官符權禰宜のたぐひ又郡司。神三郡惣追捕使。諸郷刀禰其外も品々ある事なれど。其役なければ。今はなし。たい祭主。大司正禰宜。權禰宜。物忌。玉串。大小内人のたぐひまでなり。又正權禰宜の位階は。天子御即位の賞に必一級を賜り。御祈の賞など打續の時は。一年二度も。位進みもて行故に。一禰宜は三位にのぼり。正權禰宜は四位まですゝみしかども。天正十五年に後陽成院の御代始の賞おこなひ給ひしより。惣位階賜る事も中絶せしかば。この頃は正權禰宜ともに。五位よりのぼる事もなし。又許多の神領なくなりしより。便なければ年中の神事の内にも。形ばかり取おこなふもあり。名のみなるもあり。我祠官なれば。神宮の古記反古など見る度に。宗廟のおとろへをなげく事。骨髓に入侍るしらすは中く。うかるまじ。何時か兩太神宮も。いにしへのさかへとなるべきぞや。さかへまじき所々は日に添て繁昌し。天下と共にさかゆべ

に依て。禰宜三人上洛し式日延引の事を。御とがめありける其後又式にたがひ康永二年十二月廿八日内宮正遷宮より。廿一年を式年のごとく用成ぬ。しかれども廿一年にさへたがふ事も。亦度々にて寛正三年十二月廿七日内宮正遷宮ありしより。天正十三年十月十三日正遷宮まで百廿四年延引す。非例の甚事也。又外宮は永享六年式月式日正遷宮より永祿六年式月廿三日正遷宮まで。百三十年非常の延引也其後天正十三年十月十五日正遷宮ありしより。兩宮同年とはなれり。又假殿遷宮は。往古より式を用ずといへども。

兩宮同日の事はなければ遷御の先後を。あらそう事もなかりしに。永正十八年よりぞ。あらそひははじまりける。但兩宮遷御之先後は。叡慮にあるべき事なれば下として祠官の。とかく云べき事にてはなし。予も亦祠官なれど。權任の身ななれば。又兩宮の正員の上をも。是非すべき事ならねど。二宮の御爲に。人のそしりをかへり見ず。言に出し侍。凡むかしより。たがひにかたんとする心にて。何事につけてもあらそふは。黒心の至極なり。よく元本をかんがへなば。外宮の祠官は先祖の二宮を兼行ひし。そのかみの心を察

し。内宮を仰ぎ尊み。二宮一光の理を知て。偏執すべからず。又内宮の祠官も。外宮は天照太神の由て出たまふ尊神にて。殊に皇孫尊さへ。相殿にましませば。兩宮一致の思ひをなし。外宮をあふぎ尊ひ。兩宮の祠官は。水魚のおもひをなすべき事ならんに。尊神の威をあらそふ故。廣く世の人のまどひとなる事は。かの佛氏の宗々の互にあらそひをしるありさまに。あやかりけるかと。いとあさまし。

問曰。兩宮の榮も。いにしへより今は遙にまさりたりと云人あり。しかるをいにしへをしたふ事略其故を聞ん。

答曰。人ごとにかく云事なれど。今を知て。いにしへをしらぬは。夏の虫の水を疑に似たり。それ兩太神宮も。尊氏の御時より。秀吉の御時まで。年月に添て衰微せしを。今の御時に。二見郷と前山をかへし賜り。又未社の遙拜所御再興あり。ことに聖武天皇の御宇より始めて。嘉暦年中迄百十余度ありし。公卿勅使の中絶せしをも。御興し有。其後は絶す九月の御祭の例幣あり。又近代は廿一年毎に造替御遷宮もあれば。尤兩太神宮のいにしへに立歸給ふべき端なれど。中

坐の時も。天村雲命の末孫。大佐々命。二所太神宮の大神主となり。それより猶代々二宮の神事を兼行しに。天武天皇即位元年に。太神主職を停て。兩宮に一入づ。禰宜を置給ひぬ。されども大佐々命の末孫。志巳夫は内宮の禰宜。兄虫は外宮の禰宜とし。伯父と姪と。二宮の神事を職りき。まかれど志巳夫に子なき故持統天皇の御宇に天見通命の十八世の孫。荒木田の野守を。禰宜に補し給ふより。内宮は荒木田の神主。外宮は度會の神主と別れ互に神徳の勝劣をあらそふ端出來りしに貞觀七年に。内宮の禰宜繼長。寶龜格文を考て。外宮の禰宜眞水にもまらせずぬき出て。上奏せしかば。内宮は内階に叙し。外宮は同時に上奏せざる故に。まばらく外階に叙しぬ。其後は便を求て尊神の高卑を密奏せしにや。尊神には高下をつけ給ふ。御代もありしと見えたり。さればかくのごとく折にふれ。あらそふ事ありしに。永仁四年より。外宮の禰宜の解狀に。皇字を載べからず。載べきとの甚しきあらそひ出來てたがひに奏聞を経き。又元弘年中には。詔刀師職をあらそひ内宮より京へ申せしを。外宮より返答せし事もあり。其後又文明より延徳年中

迄。兩宮の神官合戰に及。中々あさましき事もありき。又永正十八年六月十三日。兩宮同日同夜の假殿御遷宮より。遷御の先後をあらそふ事出來りぬ。又天正十三年より造替御遷宮も。兩宮同年にあたれば。御遷宮の毎度前後のあらそひやむ事なし。それ正遷宮は天武天皇即位十四年九月十日勅定にて二十年を式年と定。九月を式月とし。十五日は外宮。十六日は内宮の式日に定り。持統天皇四年に。内宮正遷宮あり。同六年に。外宮正遷宮ありしより。兩宮たがひに式を守て違例もなし。爰に天平元年内宮正遷宮あり。和銅二年より廿一年なり。又天平四年外宮正遷宮あり。和同四年より廿二年にあたれり。非常の故ある時は。式にたがふ事ありといへども。兩宮ともに式年にたがふは。是始なり。又延暦四年式月十八日に内宮正遷宮あり。風雨の故なれども。式日たがひしは。是始なり。其後承元三年八月廿日に内宮正遷宮あり。式月たがひし事は是始となり。如此非常の故ある時は式を用ぬ事もありといへど。猶代々式を守りしに。又建長元年外宮正遷宮未作に依て。式日延引して。式月廿六日に遷御ありしに。叙慮おだやかならずして。兩年まで召

より。後に御鎮坐なり。對する時は内宮を日神と號し。外宮を月神と號す。月神と申奉るとて。月讀尊の御事にてはなし。國常立尊は一水の徳の神にてまします故に。内宮火徳の日神に對して。外宮水徳の月神と習事なり。月讀尊は。内宮にも外宮にも。別宮にましますば。惑べき事ならず猶ふかき習あり。或皇孫尊相殿にまします事をゑらで。外宮は皇孫尊にてましますと云人あり。或は丹州奈具社の神を御饌都神といへば。外宮御氣津神の尊號と相通る故に。水は御氣津の略語なる事をわきまへずして。外宮は奈具の社の天女と。同體の神にてましますなどいふやからもあり。奈具社の天女は外宮の酒殿の神にてまします。件の子細は。其祠官ならずして。あまねく人の。ゑるべき事ならねど。世人二宮を。偏頗しておもふ方もあれば。口外に出すものなり。天照者二宮之通稱。太神者大廟之本號とも。古記に傳れば。いよく偏頗すべからざる事歟。祠官さへも。其故わきまへず。往々に其神の高卑をあらそふは二所尊神の御心に。かなひがたき事ならん。陰陽晝夜。兩眼兩手。何れを廢して可ならんや二宮一光の理。よく

わきまふべし。かたそぎの千木は内外にかはれども。ちかひは同じ伊勢の神垣と。禰宜從三位朝棟のよめるにても。ゑるべき理なり。何れに付てもあらそひの起は。末にての事なれば。深く元本を探るべし。吾祭奉^レ仕之時先可^レ奉^レ祭止由氣太神との。内宮の御神託により。外宮の諸神事。參詣の次第などの先なるを見ては。外宮は國常立尊にて諸神の元なれば。内宮より過て尊き神にてましますと。おもふやからもあり。是甚僻事なり。諸神事參詣之前後にて。尊神の高卑は定めがたし。又内宮は天照太神にて。國土のあるじの始の尊神其上内宮の御神託により。外宮も御鎮坐なれば。内宮の神の尊きに。外宮の神の及べき事ならずと云やからもあり。愚なる丁管なり。末代の凡夫の習といひながら。尊神に高卑を付て。これを上とし。かれを下とする事。言語道斷なり。抑二宮の祠官。二所太神宮の高下をあらそふ其由來をたづぬるに。垂仁天皇の御宇に。度會神主の祖。天村雲命の孫。大若子命を大神主に補し給ひ荒木田神主の祖。天見通命の孫。伊呂比命の兒。宇太太采禰奈を。大物忌に定め給より。代々其職をつかさどりぬ其後外宮御鎮

答曰往古より異國の曆を用て臣たる國の。かの國法に_二玄たがはぬは。君を無するなれば。我執にして天の道にそむくものなり。我國は上代より。今の代に至るまで。異國の年號を載たる曆を。用たる例一度もなし。そのうへ神明の御託宣に。從人。本_三天地_二續_レ命。祀_三皇祖_二標_レ德。深_三其源根_二恭_レ宗廟神。令_下朝_三四方之國_二觀_中天位之貴_上弘_三大業_二明_三天下_一よと侍をや。深味ふべし。我國法を本として。かの國の法にも考て斟酌し。時に隨て用ひば可ならんか。理は異國の理。我國の理とて。二つなけれども。法は形にあらはれたるものなれば。差別あり。是我執に似たれども。公道なり。たとへば我親をたつとぶは。私に似たれども。人々たつとぶ道なれば。是私に似たる。公道ぞかし。此理は儒書にも見えたり。ことに神道のたつとぶところなり。

問曰和國の法も。古書なければ知がたし。都鄙共に神書古書祕する子細は。如何。答曰大方私意より起たる事ならん。但祕する事も。なくてはかなはぬ故あり。たとへば南太神宮にては。御神體奉仕記。心御柱記などの類他家に傳て其益なく。殉に一大事の故あれ

ば。其職ならぬ人に。深祕するは尤理なり。又中古より出たる書は。兩部習合の神書おほく。殊更無眼の者の所作の。却而世をまどはす書なれば。祕するも理なり。かの天下にあまねくすべき神書。殊に律令。格式。國史の類まで祕するは。甚邪なる事ならん。佛教は其書かくす事なく。あまねくする故に。天下に流布し。神國は佛國。國人は佛奴と變じぬ。是は和國の神書古書邪祕して。人しらぬ故ならずや。倭姫の屏_二佛法息_一との御誠も。今は用ぬ世となりぬ。それ我國の神道も。天竺までこそ流布せずとも。神國を變じて。佛國となすまでは。あまりなる事ならずや心あらん人はおもふべき事なり。

問曰。内宮は。日神。外宮は。月神にてましますと云。玄からは外宮は。月讀尊にてましますならんに。それを國常立尊と云いぶかしいかん。

答曰。此事深祕の其一なれども。祠官たがひに其神の德をあらそひ。世人も亦惑事なれば。略其子細を云べし。尊神御出生の次第をいへば。外宮は先にして國常立尊。内宮は後にして天照太神なり。又御鎮坐をいへば。内宮は先にして。外宮は内宮の御告に

ますといふは。いつはりなるか。答曰我國に佛法わたらぬ以前に。兩大神宮に御鎮坐なれば。御鎮坐のはじめは。本地佛と云沙汰もなし。兩部習合より。佛とは申出し附會したるものなり。むかし聖武天皇。東大寺の大佛御建立の時。行基を勅使にて。伊勢太神宮にいのりたまひしに神殿の御戸開て。太神神勅ありしなど。歸京して奏聞せられしを。聖武いかゞおぼしけん。天平十四年十一月三日に。橘諸兄公を勅使として。重て太神宮へつかはされしには何の神勅もなかりしに。同十一日の夜。天皇の御夢に。太神宮は。本地大日と。御覽ありしよりぞ。兩部習合は。はじまりける。聖武天皇の御夢と。行基の聞れし神勅とのみにて。諸兄公には。何の神勅も夢もなし。いとあやし。思慮すべき事なり。聖武は佛法歸依の天皇にてましませばおもひねの御夢はあるべし。行基の聞れし神勅はいぶかし。か様の事の。世に用ひらるゝにて。是非となり。非は是となり。神道もおとろふる事なり。まどはさるゝ事なかれ。

問曰。佛法の流の幣も名利より出しと覺侍る。佛は名利をいとひ捨給ふに。流をくむものゝ名利に溺て。兩

部習合など云事を。作出せると見えたり。名利は神道にも。いとひ捨べき事歟。

答曰神道には。名利を捨す。名利を求めず。をのづからなる名利は。何ぞいとひすてん。但求るは。をのづからにてなければ。神道にそむくものなり。名利の欲は捨て。名利は捨べき物にあらず。名は實の實なれば。實と相應の名は神道にいとひ捨る事にてはなし。但實もなくて虚名を好み求るは。甚しく神道にそむくものなり。神道は正直を本とす。實の名なりとも。求るは名に心あればをのづからの名にあらず。まして虚名を求るは。黒心なり。則證據あり鏡を見て知べし利も亦求べき事にあらず求れば却て害あり。又いとひ捨べきものならず。いとひ捨ては。人の生命たちちがたし。但凡夫は。心引方に落入ものなれば。名利はいとひ捨る程に工夫せずば必ず名利にまよひて。根國に没落すべし。名を好心にかへて。義を好み。利を好む心にかへて。仁に好みなば。神道ならんかし。問曰。名利を不_レ捨不_レ求ることはきはき。但我執は神道の取所にあらざらん。吾國法を尊て。異國の法にえたがはじとは。是又我執ならんか。

み心得て。本心をわすれたる人は。余所の實を羨尊ぶに同じ。何の益なき事なり。其上神明の教にも。そむくものなり。よく工夫すべし。

問曰雄略帝の御宇に。倭姫命の屏佛法息と禁じ給にまかせて。今に兩太神宮に僧尼をいむとなれど。欽明帝の御宇に渡し佛法を。數十年以前に。いめよとの禁令信じかたき事なり。後人の筆跡なるべし。

答曰。日本紀には。神功皇后。應神天皇の御宇に。三韓と始て通じたと見へことさら神宮の古記には開化天皇の御宇に。異國と通じたと見えれば。漢土へ佛法の渡らぬ以前に。日本と漢と通ぜし事あきらかなり。其後後漢明帝の時。漢土に佛法渡れば。日本へ佛法こそわたらねども。其名きこえたるならん。

問曰佛法をいむ子細如何。

答曰説々あまたあれど何を證據としがたし。只倭姫命。の禁誠にまかせていむ事なり。若むかしより。此禁誠に不用して僧尼をゆるしなば宗廟の古法は。かたばかりも。今にのこるまじ諸國の神社を見てしるべし。祠官は社僧の奴のごとなりて。神殿は變じて。佛殿となりぬ。二宮などにては言をさへ替て。あ

らゝぎと云て。いむ塔なるを諸社には立置て。神のいさきとも見えす。是我國の古法ならんや。未來をかいみ給ひ。屏佛法息よとの禁令。ありがたき事なり。なを末代も。彌此禁誠に。まもるべき事歟

問曰佛法をいみ給ふは。あしき法なるか。

答曰。釋迦は天竺の聖人にてましますと聞ば。尊き法なるべし。但倭姫は。其法の源をいみたまふやらん。其法の流をいみたまふやらん。知がたし。中世より神道の名をかりて。兩部習合などゝし。神明をかすめて。我佛とする事は。佛法の流の幣なれば。それを未然にかんがみたまふ事もあるべし上代に生たりとも。其子細倭姫命に。問奉らずばしりがたし。まして今より知べきや。かやうの事は。人のあやしみそしらん事なれど此禁誠にかくし。僧尼に力をあはせん事は。冥の照監も。をそれあるものなれば。言に出し侍る。僧尼は佛の道をを行じて有てよかし。神社にさへ入交て社僧などになれど。佛教にも侍るにや。いとあやし左物を右にうつすとはかやうの事なり深おもふべし。

問曰。しからは兩宮の御本地は。兩部の大日にてまし

じて。其理をさとりべし。問所のごとく。狐狸のしわざ。又人の偽もあまたある事なり。まようべからず。問曰。まことに其理をしらば。神變奇特にもまよふべからず。しかれど其理をしる道は如何。

答曰。千早振神代には。人のこゝろもすなほなれば。觀天文。察地理。してさとりしぞかし。世くだりて人正直ならざるにより。教といふ事出來しなり。しかれども我國の上代より。つたへし記録などは。蘇我の蝦夷が難にやけて亡ぬ。其以前應神。仁徳の御代にさへ。此國の教も末になりたるにや。百濟より王仁と云賢人わたりて教へ。又繼體帝の御宇には。五經に博士をひて。渡し事もあり況其教し書も國記も亡ぬれば。闇夜の如くなる世となりしかど又其かたはし聞つたへし事などしるしといめて。今にのこせり。しかれどもむかしに立歸代ともならぬにて蝦夷が回祿以前の教には以の外おとりぬる事もしられぬ。其後我國の所々にありし學校もおとろへし折を得て。兩部習合の神道おこり。いよく其本を失て。神書は變じて。佛書となりしかば。神道も衰微して若存若亡。しかれども蝦夷が火をも經ずして上代よりの神

記。二所太神宮に残れり。されども是も亦。代々の禰宜神主。兩部習合にまどひて。かの言を取て。加筆の事のみ。半に過ぬれば信じがたき事有。但上代より傳たる事と佛語を用たる所とは。黑白別たる事なれば。其に付て熟讀し。工夫を用ひ。正直の教。任本心よとの教舉。一心之定準よとの教を。むねとして。聖經賢傳をも見て工夫し任本心。正直ならんには其理あきらかならんか。

問曰。心は神明の舍なれば一心の外に神はなしといへば。祭などと云事も。無用の事。迷の者のする事也と云人あり。いかに。

答曰。一心の外に神なしとは。一心の理の外に異なる神はなしとの事なり。灯をさして。此火の外に火はなしと云たるに同じ。さりとていづかたにも。火なき事あらんや。此火にちがひ。又異なる火と云物はなきとなり。あしく心得て。宗廟社稷の神はなきものなり。祭禮もいたづら事なりなどいふやからは。一心の量をせばく見て。一向偏見のものなり。灯を見て。火と云ものは。是ばかりにて國土に火ともしたる所はあらじとおもふにひとし。又外に神ありとの

時。御神體。猛火の中より飛出給て。或は御前松樹の枝にかゝりまし。或は御前の黒山の頂にましましき。内宮は火徳の神にてましますといふ習ある事なるに。其ゑるし少もたがはず。又靈龜三年八月十六日洪水の時と。貞觀十五年八月十三日。洪水の時と。外宮の正殿のあたりを。水一丈さけて。井のごとくがちしかば御垣諸の殿舎は。顛倒せしかども。正殿は水さけし故に少も損せず。誠に外宮は水徳の神にてましますと習有。そのゑるし少もたがはず。又天仁二年には。外宮内宮共に。心御柱朽損じ顛倒し給ふに依て。明る天永元年に二所太神宮ともに。假殿御遷宮あり。大治元年には。内宮心御柱を覆ひ奉る御櫛を。鹿來て喰損じ。保延五年十月廿九日には。内宮古殿の心御柱朽損じて顛倒ましましき。是皆鳥羽崇徳の御心。神慮にたがひたまふ故にや。久安五年には。内宮心御柱を卷奉る布破損しぬ依て同六年に。あらためて。山口祭勤行して。心御柱を採替奉れり。されどやがて保元の乱出來ぬ。安元三年には外宮の心御柱を卷奉る布を鳥來てけがし奉りぬ。頗て壽永の大乱あり。文治六年四月十一日の未刻に。内宮

の心御柱朽損し。顛倒まし。けるを見付て。奏聞せしかば。同廿日に御卜あり。當年九月十六日に一度の式年式日なれば造替遷宮あるべけれども。すてをきがたき大事なる故に。先八月廿五日に假殿遷宮ありて。心御柱を立替奉りき。是も後鳥羽の御心。神慮にたがひたまふ故にや。其後承久の大乱ありき。元亨元年には。内宮心御柱を纏奉る布を。鼠喰損せし故假殿遷宮ありまかれども程なく元弘。建武の大乱ありき。應仁年中には内宮心御柱ましまさざるの間禰宜等連署解狀を以て。二十餘度迄註進せしむといへども御驚もなかりしに。天下の大乱出來ぬ。其後も如此の奇瑞いくらともなくあり。抑心御柱と申奉るは。皇帝之命國家之固。神明之徳也といへり。中極の表。至て深祕の事なれば其子細。口外すべき事ならず人主の御心たがふ時は。大乱出來る物なるをかねて御つゝしみのため。心御柱の御示現ありがたく侍ぞや今とても奇特神變有。予が身に及でも見聞事もありしぞかし。但其神變奇特をのみ尊ぶは。神道のとる所にあらず。よく神道だに明にさとりたらんには。加様の事も。其理あきらかならんか。神を尊び。神道を身に行

神の後裔。又は祠官の祭は。凡人とは隔別なり。爰には神明の飛たまふ。かしこには。何の太明神の飛給しなど。云巫覡の妄言を信じ。國々所々に其神にあらざるを祭は非禮也。祈とは。或は主君父母の病腦などを。臣下忠誠の情を以いのり。又は孝子迫切の心を以祈ば。などか其誠を神も請たまはざらんや。或は天下國家。又身の上の災害を。いまだきざゝざるさきに神に詣て祈り又坐ながらも祈るは。なくてかなはぬ道理なり。我國のみにもあらずもろこしにも。天子ならでは。天をば祭給はざれども庶人も天に祈にて。其理知べし

問曰祭と祈との分ある事は聞ぬ但祈て其えるしあるもあり。又何のえるしなきもあるはいかに

答曰神の祈をうけたまふと。請たまはざるは其人の誠と不誠とにある事なり。誠に神に祈に。其えるしなきとおもふとも身にかへりて自の誠いまだいたらざるとおもふべしゆめく神を怨むる事なかれ。是神道也武王は聖人にてましませども。御病腦の時に。周公祈給ふぞかし末代の凡夫のをかせる過もなきものがほにて。神にいのる事もなく。心だに誠の道にか

なひなばいのらずとても。神やまもらんと云歌を。あしく心得て口にしき。誠の道にかなひたるかはなるは。甚僻事なり。誠の道にかなひたる人は。聖人なりかるくしくおもふべからず。其上いのらずとても神やまもらん。ましていのらば。猶まもらんと云心詞の外にあるをや。

問曰。今の世に誠の道にかなひたる人はなからん。凡黒心の人のみなれば其祈は神もうけ給はじ。玄かれど愚人の祈にも。まれくそのえるしのあるはいかに。答曰聖人の祈は。金中の金のごとし。愚人の祈も。玄ばらく誠なるは。砂中の金なれば。砂こそとらざらめ金はとらざらんや。愚者の誠ならざる祈は。砂中の砂のごどくなれば。いかでか神のうけ給ん。

問曰。神に祈る道は聞ぬ。日本國の神社に不思議奇特のあるは。神のなし給ふ事か。又狐狸などのえわざかはかりがたし。

答曰往古より。二宮のうちにても奇恠ありし事は。舊記のえるす所其數あげて云がたし其中にも。殊にありがたく侍るは。寶龜十年八月五日の夜。丑刻。内宮回祿の時と。又延暦十年八月五日夜子刻内宮炎上の

の義をつとむるは。則神道なり。しかりとて民の義をつとむる計にて。神を疎にせよともあらず。宗廟社稷神は天下國家の尊ばでかなはざるところなり。よくわきまふべし

問曰。世間に何事とはしらねども。神道とてたうとく。おもふは。神祇の祭禮にたづさはる人の束帶し或は衣冠し手に笏をとり。玉串持などして。口には神語などとなふるをこそ。神道とおもふに。其外民の義をつとむるも。神道といふべきや。

答曰。玉串を持。神語唱る事等は。祭庭などの儀式。是も亦神道の一事にして。尤重しとする所なり。されど此事計を。神道と思ふは。天を管の穴より覗きたるに等し。管の穴より見たるも。天にてなきにはあらねど。そのみは餘りにせばき事也。それ神道と云は。人々日用の間にありて。一事として。神道あらずと云事なし。君神道を以。下にのぞみたまふ時は。仁君なり。臣神道を以。君につかへ奉るときは。忠臣也。父神道を以。子をやしなふ時は。慈父なり。子神道を以。父母につかふるときは。孝子也。夫婦。兄弟。朋友の間も。神道を以まじはる事ぞかし。其外飲食するにも。神道

あり。手を舉るにも。足を舉るにも。神道あらずと云事なし。神書を讀て神名など覚え。拍_レ手祝詞などよむ計神道ならば。農圃醫卜の術よりは。猶せばき道なるべしかたじけなくも。天御中主尊。天照太神の。天の御量柱を。中國に立給てよりこのかた。時代により。用捨こそあらめ。于_レ今絶せぬ神道なれば。天地と無窮なるべきものなり。されば神の御誓にも。寶祚のつたはらん事。天壤と無_レ窮けんとの御言たがはずして。今上皇帝まで傳はりたまふ事。異國にも曾てそのためしなし。ありがたき事にあらずや。これにて神道の最上の道なる事はしるべし。

問曰。神道の廣大にして。最上の道なる事は聞ぬ。非_ニ其鬼_一而祭は謫なりと。孔子ものたまへり。しからば其神にあらずば。祭いの事も。あるまじき理にてあるべきか。

答曰。孔子のたまふごとく。其祭べき所の神ならずしてまつるは。へつらひなり。しかれど祭と祈と分別ある事ぞかし。伊勢兩太神宮にも。三姓の氏人として大中臣は祭主と。宮司に任じ。荒木田と度會は禰宜に補し。勅命によりてまつる。全く自分の祭にはあらず其

陽復記下

或問曰。子が云所の神道は。儒道の見解にしてかくいふや。儒の見解ならば用がたし。

答曰。しからず我祠官なれば。神道に志ある事年久。しかれども傳るに其人なく。見に其書まれ也。近比故家に求。他邦に尋て。神書數卷を得て。是をうかいひ見て。はい其理を得たる事かくのごとし其間に儒書のことを以。とほる事は彌神道をあかさなため又腐儒の僻見を破らんがためなり。我儒書のかたはしかいひたる。とて何の儒の見と云事あらんや。暗にかなふ所あらば。眞儒のとるべき事ならん。たとひ儒道の見解なりとも。神道にそむかずは何ぞいまんや。倭姫の禁令にも。屏_ニ佛法息_一とは侍れども。儒をさけよとの事はなし。其上今世神語は人の耳に遠く。又神書にとほしければ。事たらぬ事のみ多し其闕を補むには。佛語は禁令なれば用がたし。儒書の詞ならずして。何を用んや。殊更往古より。儒典をかりて神道をあかせし例あまたあるをや。たとへば。我國にも。異

國にも樂種はあれど。若我國の樂種すくなき時に。異國の樂種なりとて。用ぬは我執なり。我國の樂種すくなき時はかの國の樂種を用て。病をいやしてよ。但孔子の道の。神道にひとしからぬ所を。用よとはあらず。その人の心得によるべき事なり。制度文爲のちがひをさして。孔子の道と神道と。ちがひめありといはい。かはりあるべし制度文爲は異國にても。時代によりかはる事也まして其法を。我國に用るにをいてをや。異國には宗廟を祭に。牛羊のたぐひを專用ゆ。我國の宗廟には。牛。馬。猪。鹿。犬。豕。熊。猿。羚羊の類を。曾て不用してしかも甚いむ。かやうの法は。何ぞ我國法にしたがはざらんや。此等にて。萬制度にはかはりある事。可_ニ心得_一也

問曰。論語に。務_ニ民之義。敬_ニ鬼神_一而遠_レ之よと侍れば。我國の神道にも近づくは孔子の道にあらじ。孔子の道と神道とは。以の外ちがひありと覺侍る

答曰。敬_ニ鬼神_一而遠_レ之とは。鬼神になれちかづかすして尊敬せよと也朝暮神事にまじはり。神に仕奉る祠官さへ。なれ不_レ近して。甚敬するぞかし。まして其職にあらざる人をや。但神道をさけよとはあらず民

てゆくも何ゆへぞや。神道と云名をだに知人もまれになり。書は故家にかたばかり残れど。我家のかざりと云ふらん自も見ず。まして他にも見せず。虫や鼠の巢となりて朽る。かゝれば三百年來次第々に神地も變じ。伊勢の國司と仰ぐ。北畠殿さへ。神領を押領せられしかば。爰もかしこも他より押領しき。それに又豊臣秀吉公の。神徳も重じ給はず。神郡をも檢地し給しかば。度會郡さへ半は他領となりぬ。二所太神宮領もそのかみは。度會。多氣。飯野ぞ。神三郡とて神地なりしを。代々の聖主御寄附ゆへ。員辨。三重。安濃。朝明。飯高の五郡も附しかば。神八郡と云。其外諸國にも。神戸。封戸。御厨。御園などありしに。今は度會一郡さへ。宮川をかざりて他領なり。是にて神威のおとろへもしられぬ。ざれど世中もしづまりければ。神の風も亦ますにや。久しく他の押領となりし二見の郷をも。寛永の比かへし給り。又正保四年には嘉暦年中より。斷絶せし。公卿勅使をも立給ひぬ。かく天下の御うやまひもまさば。日にそひなどか神道もおこらざらんや。神道さかんならんには。日本の榮も天壤と窮あるまじきなり。神道をうやまひて國

さかへ神道ををろそかにして。國をとろへたる事は。日本の舊記にしろす所つまびらかなれば。今更あらはすにおよばす。我祠官なれば。かく神道をたうとくごとくしく云と。おもへるかたもこそあらめど。つくぐと思慮すべし我國の宗廟。社稷の神を捨て。何の神を尊ばんや。異國の神をたうとみ。異國に力を合て。我國のかたぶかん事をねがうは夷狄の法きりしたんのたぐひならん。眞儒のとる所にあらじ。神道あきらかに。行れば。上一人より下萬民まで樂み。天地位し。萬物育せん。若此書を傍人見ば笑草の種ならんか。但世間の毀譽は。善惡にあらずと古人もいへば。よきとさへもそしらん。ましておろかなる筆の跡をや。偶此記をしるす。事。慶安庚寅の冬。一陽復りし月なれば。陽復記と名付ぬ猶餘意あれどもらし侍る一二の同志のものを學ぶ心得にもなれよかしと。おもふ心にひかれてなん

此書同志に與ふる所に。この頃初學者の儒書を見てあやまる所。又は儒を嫌ふ人の儒道は神道にそむくと云事。其外世の人の疑ふ事。かうくあるなどいへば重て問答を設て。左に附しぬ。

給ふはよく／＼心行べき事なり。いかにとなれば元本は左右前後の違もなく。をのづからなるものを末にて違事は出来るなり。儒も根本に歸れと教たり。玄かりとて萬事を捨て。根本にかへれとはあらず。萬事の上に根本あり。心をつけて見るべし。學問とて。末にかゝりたるは迷ひなり。それをわきまへず。博學なりと心得たる學者もあり。博學は。聖人の教なれば。たうとき事なれど意得有事ぞかし赤子はその心誠一なる故に。無知の聖人なり。聖人はその心誠一なる故に。有知の赤子と也彼赤子の誠一の心をしうなはずして。聖經。賢傳を博學し。赤子の心のまゝにて。世を濟ぞ有知の赤子なるべきに。只博學とのみ心得。雜書までも。博く學びて人にはこるは。雜學にて博學には非ずまがひやすき事也。數萬卷の聖經。賢傳を學ぶとも一に眼をつけよ。一を忘れて書物のみに心を入るは。古人の云。書籍の間に有。蠹魚なるべし。但一とても形あるものに非ず。よく味ふべし。まことの博學は。百千萬と別て殊なるものを博くまなんで。彼は一心の理と一致なる事を。心に味へ。行にあらはして。終には數へり。一になるを云也。一は百千

萬の體。百千萬は一の用なるに。又博學を嫌ひて。只一とのみ心得たる人もあり。是は百千萬は一の用なる事をあらで萬事に違ものなり。ひろく學で一に歸する。是ぞ元元本本の心なるべき。かく云を若佛氏などもれ聞ば。兩部習合の神道は。神宮にはむかしより甚嫌ふ事なるに。是は又儒と習合なると。そしらん。それはさもあれ。儒と習合の神道にはあらずをのづからかなひたる所は捨がたし。たとへば異國の金も我國の金も同じけれど異國のまんちうを金といはば同からず。似たる事はにたれどもちがひめ有べし心を虚にして味へて見よかし。兩部習合は強て合たる物なり。それを世の人さとりぬ故に。日本國の神社は次第々々佛氏のはからひとなれり。我二所太神宮計ぞ。倭姫命の。屏佛法息。再拜神祇せよと。のたまふ遺命にまかせ今に外院へならでは。僧尼の參詣をゆるさず。されど末代の事なれば。遺命にたかふ事のみ出来る。あまりいま／＼しき事なればしるさず。我神宮領も世々を経て。佛寺のみ盛になり。末社などは名のみ残て畑となり田にすかれけるにや。あとかたもなく。其所慥にしれる人なきも多し。かく成も

致齋して祭にあづかり。殊には六色の禁忌を守れとか。今とても神に仕る人の。心得る事なれば。委は記におよばず。但慎の一字こそ眼なれ。神に仕には。慎にかぎる事也。日本武尊の。東夷征伐の時。よぎり道して伊勢太神宮に参り給ふに。倭姫命の天叢雲の劔をさづけ給ふ時の御言にも。慎て勿怠なにごたとあり。神道に殊に。心得べき所なり。左物を不レ移レ右右物不レ移レ左。左レ左右レ右。左返右廻事も萬事違事なくしてとは。左は陽。右は陰。左返右廻事も萬事陰陽の理に違事なくして。太神に奉レ仕とか。但左物右物といへるは。物のうへにていひ。左返右廻事とは身の上にての事にや。深き心もあるべし。今の時にも祭の庭にて玉串を取には。渡すものゝ左右の手を打ちがへ。左の手の玉串をば取人の左の手に渡し。右の手の玉ぐしをば取人の右の手に渡す。これは倭姫命の遺命を。今の世まで守なりと云。さもあるべし。されど此事とのみ心得るは餘にせばき見なり倭姫の教は萬事違事なくしてと侍る。まからば玉ぐしのみにもかぎらず。推してひろくいはい。君は君の道を行ひて。人を憐み。臣は臣の道を行ひて。忠をつくして身を惜ず。父は父の道

をおこなひて。子をいつくしみ。子は子の道を行て。孝をつくし。夫は夫の道を行て婦に情あり。婦は婦の道を行て。夫に順ひて他に心もなく。兄は弟をあはれみ。弟は兄をうやまひ。朋友はまことを以て親み。其外行住坐臥のふるまひまで。あるべき事をするこそ。左の物を右にうつさず右の物を左にうつさぬと云べきに。君は萬民をあはれまらずして百姓をくるしめ。臣は不忠にして。君をかたぶけんとするは。是ぞ左の物を右に移し。右の物を左に移すならん。父子。夫婦。兄弟。朋友もまか也。是は宇太采禰奈が。身の上の御教なれども。聖女の御言なれば萬事に通ず。此理をさとて。身にをこなはば。儒道とても。外に有べからず。聖人の教も。左物を左にし。右物を右にせよとの教なれば。更に別法なけんかく勤るを君子賢人と云つとめも化してをのづから。左の物を左にし。右の物を右にし萬事違事なきを聖人と云。かやうに深き御言を一事とのみ心得る。末代の人の心あさまし。かくつとむるは。太神に奉レ仕もの也。つとめも化してをのづからに成たらば。太神と一致の地位なるべきか。有がたき事にあらずや。元レ元本レ本故なりとの

ふて。終身悟る期もなし。かやうのものゝ人の師となりて教るを後の學者又わきまへずして。學問とは。かやうの事にてこそあらめと信する。是ぞ一盲引衆盲ならん。一心の定準とは。是心得がたき事也心は虚にして。何もなき物と計難し心得て。定準といふ事を人しりがたし。又あしく心得て。定準とは形ある物ぞと思ふは。愚なる人の心得なり。定準といふ。味はなめてしるべし。かやうの事を多くいはし是も萬言難説とやらん。其味は語り盡し難此一心之定準を。よく。舉たらましかば。其しるしは配天命して、神氣をなめんとなり。即の字は。そのしるしの速なる事をのたまへり。配天命して。神氣をなむるは。神聖の地位なるべし。我德配天命して。至大至剛の神氣は。我固有の氣なる事を。嘗味て眞知なる時は。天人一致の。地位ならんか。但一心の定準と云事を。しるばかりにて。舉すばいかでか如し此の地位にいたらん。舉の字に知行を兼たり。意味すべき事なり。かやうの神語。神宮の舊記に残るは。いともありがたき事ぞかし。此神語の中一字として儒の旨に。かなはずと云事なし。しかりとて儒書を以。神語と名付。偽て書

たるにてはなし。漢字をかりて。和國の神慮を。のべたるもの也。又倭姫世記と云書に。崇神天皇の。六十年に。大和國宇多秋志野宮に。天照太神を奉齋。四年ましゝき。そのときに。倭姫命太神の御杖代としてましけるが。宇太太采禰奈と云人に。をしへ給御言に云。無黒心。以丹心。清潔齋慎左物不移。右物不移。左左右右。左返右廻事。萬事違事奈久志豆太神奉仕。元元本本故也とあり。是又有がたき御言也。きたなき心と云を黒心と書たるは。黒は水色。陰にして闇昧也。心は火にして。陽明なるに。却而陰闇にするは。黒心也。故にきたなき心と云。和語を。漢字をかりて。黒心と書たる也。きよき心といへる和語を。丹心と書たるは。心は火なれば色は赤し。赤は丹也。心の色をそのまゝに。一點のおほはれもなきは。きよき心なり。黒心は不正直也。火の色の赤きを反せる。水の色の。黒となすは不正直也。如此きたなき心にて。神明には仕へ難し。玉清ければ日光やどる。日光やどるのみならず。日の本體の火を出す。神は正直の頂にやどるといへる言。則眼前に證據あり黒心の人は神に祈とも通じがたき理なり。齋慎とは。散齋

るべし。近く身にとりてはいはい。心まよひて外に走。本居を離て。陰惡の域に落入。是ぞ根國に沒落するならし。故に神記にも。任其本心。皆令得_レ大道と云り。本心のまゝなるは聖人なり。孟子の求放心との教も。本心に任せよとぞ大賢の教。神記に。替所なく侍る。故齊情天地。乘_二想風雲_一爲_二從_レ道之本_一。爲_二三守神之要_一とは。情は性の發にして喜。怒。哀。樂なり。情。天地に齊きは。發して節にあたる和なり。想は意の屬なり。意は心の發にして。しかも善惡にうつる物なれば。此想著する時は。心僻て闇迷ふ故に。物に執滯する事なくして。風雲に乗ることく意をもてとにや。昔唐に古き塚有しを。波斯國と云夷の國の人來て。かの塚を堀けるに。塚の中より。丸き玉のやうなる物。取出しぬ。その丸き物を剖て見ければ中に山水ありて。青碧をかけるごとし。傍にちいさき女の靚粧して。屋のらんかに寄かり。山水をながめてぞ有ける。不思議と云も餘なり。是はむかし山水を翫びて。執着したる婦人の心。凝たるとなり。あまり物に着する時は如此なる事ありとぞ。尤つゝしむべき事也。人は天の正氣を得て生ずる故に。終れば天上に歸

り。天御中至尊。天照太神の左右にあるは。よき人の事也。惡人は。心を天のまゝにせず。物に着する故に。彼婦人のごときの事もあるべし。さりとて佛氏の云やうに。人々あるべき事とも覺えず。但心滯るは。たとへば活ものを繩を持てつなぎたるが如し。心體人欲の繩につながれて。働がたき時は。物に應せず。應せぬは本心の用に非ず。心を死せたるならん。心死らば。身は人形のもの云ごとくなれば。故に想を乘_二風雲_一て。心を活せよとぞ。活する時は。行住座立も。道して。神明は我。われは神明全くへだても。なからんか。これを爲_二從_レ道之本_一。爲_二三守神之要_一と云り。ありがたき神語なり。將除_二萬言之雜說_一而舉_二一心之定準_一とは。雜説は駁雜之説なり。一言二言の雜説にさへ。惑やすき事なるを。まして萬言之雜説の是を非とし。非を是とせば。いかでか心まよはざらんや萬言の雜説は。耳に聞とも。心に聽ずして除去。一心之定準を舉よとぞ。殊に學者の。博學と云名をのみしりて。雜學なる事をわきまへず。諸子百家の雜説までも廣くまなぶひろくまなび。深く學へば。心いよまよ

さび塵を去べし。古はしらす近比の佛氏の中に。鏡にうつる影もまよひぞ。影もさるべしと。教る方も。有となん。僻事とぞ覺へ侍る。その故は。鏡のさびを去ては。萬像の影。をのづからうつる。いよく磨ば。いよくすなほに。影うつる物なり。さびをさるこそ修行ならめ。影をさらんとおもふは。是ぞまよひなるべき。さびを去は。大學の誠意の工夫。しかれども。鏡の本體平ならざればうつるかげゆがむもの也。其平ならざるを平にすれば。むかふ姿をそのまゝにうつす。此にて正心の工夫をすべし。正直といふも此事也。直計にて正なるはまれなり。但正ならざる直は。父の羊を攘るを。子のあらはしたるに同じからん。又倭姫皇女。神明の御託宣とて告給ふ御ことばにも。夫逆天則無道。逆地則無德而外。走本居。沒落根國。故齊情天地。乘想風雲。爲從道之本。爲守神之要。將除萬言之雜說。而舉一心之定準。卽配天命而背神氣。と侍り。此神託こそありがたく。とふとく侍れ。そらおそろしき事ながら。凡慮を以て窺ひ申侍るに。逆天則無道とは。中庸にいへることく。天の命せし是を性といひ性にしたがふ是を道といひ道に修む

る是を教と云なれば。性も道も教も天より出たるものなり。教にさかへば則道にさかふ。道にさかへば則性にさかふ。性にさかへば。天に逆なり。天にさかはじとの修行は。教をつゝし。道を行じて。性のまゝにすべし。天にありては。元。亨。利。貞。人に在ては。仁。義。禮。智。かはる所もなし。信ありて。仁。義。禮。智を行ふ時は。天に不逆して。有道の人とにや。逆天則無德とは。德は天より心に得たる理なり。是を明德といふ。載て捨る事なく。萬物を生長して成就するは。地の德なれば是を法則として。萬民生長すべき。仁德を行すべし。地の德にさかひて含弘の量もなく。心せはくしくて物を絶ち捨。愛憐なきは。地にそむひて無德なり。仁は愛の理。心の德にして。義。禮。智も。仁にすぶれば。仁心なきこと逆天地なれ。かくのごときの人を。有德の人といはんや。外走本居。沒落根國とは。本居は。人々固有の本心也。逆天逆地の人迷ふが故に。心外に走て。沒落根國と也。根國とは。黃泉を指といふ。しかとば地下をさすにや。或云。根と。子と和訓通す子は。北方陰闇の方なれば。北方をさすと。しかれば。兩説共に陰闇を指て云。猶深意あ

座以後。故ありて。外宮へうつし奉り。天手力雄命と萬幡豐秋津姬命を。左右の相殿とあがめ申皇太神宮と名付奉る今の内宮是なり。靈劔とは。天叢雲の劔の事也後に日本武尊の東夷征伐の時。子細有て。草薙の劔と名をあらため給ふ劔也。今は熱田太明神の御神體と。あかめ奉る。此三種の神寶は。智仁勇の三徳を表したると。ふるき傳あるにぞ。孔子の道は。我國の神道に。ひとしき道とおもはるゝ。或は玉は柔にとり劔は剛にとり。鏡は正直にとりて。柔剛正直の教に同じと。親房卿の作の東家祕傳といふ物などにはかかれたり。是もむかしより傳る所のあればなるべし。まかればかの洪範も。我神道にひとしき歟。此玉の柔なるごとく溫潤の仁徳を以て。天下の御政をきこしめせとぞ。曲妙といへるは。曲は不直なるを云直なる物は。つよくものにあたる故に曲とは云。しかれども邪曲ならざれば。妙とはいへるにや。又此鏡のごとく。分明なる正直の智を以て。山川海濱までも。看行し給はゝ。下に遺賢もなく萬民其所を得べきとか。劔は又勇にとりて。剛なれば剛にして無慾に。とゝこはる所もなく。まかもをのづから威ありて。天下を平

げ。萬民を利益し給へとぞ。此三の物。一もかけては。天下治がたし。智仁勇の三徳の事は。中庸の書に侍れば。今更くだゝしき言をもてしるさず。道しる人に傳授すべき事なり。但智仁勇の三徳に表し。或は柔。剛。正直に取との。ふるき傳ある故に。しばらく。解する事。かくのごとし。たいそのまゝも。やすらかならん。此神勅こそ。有がたく侍れ。殊に天下の御あるじの御心に味給ふべき御事にや。又欽明帝の御宇に。二所太神宮の大神主飛鳥といひし人の。筆作の記に。天御中主尊と申奉るは。虚而有靈。一面無形と書るぞ有がたく覺侍る。朱子の明徳を註せるにも。虚靈不昧而具衆理。應萬事と侍れば。神記のむねにひとしきにや。一面無形は。何れの物にか。應せざらん。神とは。鏡といふ和訓を。一字略せしなれば。かの明徳を鏡にたとへ侍るに。替所もなし。誰も。心をかゝみのごとくせば。吾心則天御中主尊。天照太神に同からんか。其上心は神明の舍といへば。もとより人の心中に。神はやどり。ましませどもくらましたる心は。舍の戸を閉たるがごとく。又鏡にさびうき。塵積りたるに同じ。急ぎ神明の舍の戸をひらき。鏡の

も云がたし。同姓をめとらぬ事などは。我國の古法には見あたり侍らねど。唐よりは。日本國は。同姓をめとらぬ國とあるしける。いかゞ聞傳るぞや。無實なる説なれども。いにしへは左様の人の。我國にも多かりけるにや。此事ふかき子細あるべし。我國にも昔より。藤氏ぞ天子の御外戚に定り給ふなれば。いにしへはさも有けるにや。仁德天皇の御妹を。后にそなへ給ふといふは。御妹を尊み皇后の尊號を授たまふまでなるを。記すものゝ。あしく心得て。夫婦となり給ふやうに書たるは。あやまりなり。御子なきにてあるべし。此誤を傳給ひ。敏達天皇も。御妹を皇后にそなへ給て。御子も産給ふと。或人のかたりし。さもあるべき事とぞ覺侍る。かやうの事は。いくらともなくあるべけれど。人のきかんもはかりあれば。もらし侍る。抑堯舜の道の我國の神道に同き子細あり。日本の宗廟伊勢太神宮に傳る古書の中。天口事書云。皇天盟宣久天皇如三八坂瓊之勾久爾久以二曲妙天治御字乃政免且如眞經津鏡久爾久以三分明看行山川海原支即提是靈劍豆平天下天利萬民度言壽布とあり。是は皇孫尊。此土へ天下りたまはんとせし時。皇天の三種の

神寶を。授たまひしに添られし御言なり。深き故もあるらめど。聞傳へし計は。八坂瓊とは。八坂瓊の五百箇御統とて太神の御くしに。かけられし玉と云。八坂は玉の出し所の名。五百箇御統は。數の玉をつらぬきたるものとなり。其外も説々あまたあれど。一説はかくのごとし。但勾といへば其形まがれるにや。又玉のかたちの柔なるをいへるにや。只玉の事と心得てよ。眞經津鏡は。八咫の鏡の御事なり。此寶鏡を見まさん事。吾をみるがごとくすべしとの。神勅にまかせ。天照太神の御神體とあがめ奉り代々天皇と。御同殿にましゝけるに人皇十代崇神天皇の御宇に其神威を畏れ給ひて。豐鋤入姫命を附奉て。大和國磯城に。神籬を立て。しばらく齋奉り給ひぬ。又内裏には。神鏡神劍の御影をうつして。とゞめ給ふ。内侍所寶劍と申奉るは是也。其後豐鋤入姫命。太神を戴奉り。所々を経給ひしかども。御年老たまふの故に。美和の御諸宮より。倭姫命を太神に附奉り給ひき。しかるに人皇十代。垂仁天皇の御宇に。猶國々所々を経て。伊勢國。度會郡。五十鈴川上にしづめ奉りぬ。始は天兒屋根命。太玉命を。左右の相殿の神と申奉りしを外宮御鎮

じを生んとて。天照太神を生給ふ。天照太神御子の吾勝尊を。此國にくだしたまはんとおぼしけれど。又其御子皇孫瓊々杵尊生れ給ふにより瓊々杵尊を下し給ひ。それより三代鸕鷀草葺不合尊に至り給ひぬ。此三神は。易にをいては。内卦の三畫。伊弉諾より吾勝尊まで三代は。外卦の三畫を表せるならむ。外卦は上内卦は下なれば。乾の九四の或は躍て淵にありといふごとく。吾勝尊の此土にくだらんとして。くだり給はぬこそ。易道に少もちがふ處なけれど云人あり。誠にちがひはあるまじき事なれど。我國の神道に易道は同じと見るこそ。忠厚の道ならめ。易道に神道は同じきといふは。いかゞと思ひ侍る。かく神道儒道其旨一なれば。其道によりて脩する教の。かはる所はあるまじけれども異國と我國と。制度文爲はちがひめ有。それをわきまへず。古より我國になき。深衣をきる儒者など。近比はありとなん。此事大なる非義なり。異國にも夷狄の服をきるは。重きいましめぞかし。我國は皇孫尊。日向國に天下り給ひ。神武天皇大和國橿原に。都を立給ふより。百十一代の今に至り給まで。天照太神の御神孫。天子の御位にましませば。御制度を

おもんじ。吾國の律令格式等を本として。行ふべきとの心はなくして。異國の深衣を着るは。さもあるまじき事也。異國に生れたる邵康節の。今人不敢服古衣とて深衣を着られざるを。儒にあしくいふは。さもあるべし。それは異國にて異國のむかしをしたふを。きらふ。さもあるまじき事也。神國に生れたる人は。神代のむかしを思ひ。國法の古をしたふこそ儒道にも本意ならめ。近代儒を學ぶ人のかしらおろすは。佛氏を人の崇敬すれば。かの崇敬を羨たるに似たり。又深衣を着は。國俗にかはり。異服をきて。人のめを驚し。崇敬せられんとにや。心に深衣をきて。外はさらでも。あれよかし。但時代により。國法のゆるす事あらば。さもあるべし思ひやるに。かしらおろして深衣きたる姿。佛氏のいふ蝙蝠僧とやらんには。猶おとるべきかとあさまし。冠。昏。喪。祭の禮も。我國にまたがひてよ。但末代にて。律。令。格。式等の書も。家々に邪祕し。他見をもゆるさぬ事なれば。まらぬ故ともいはんか。されど格式等も。異國の法を考て。此國の古法に合て。定たると見えたれば。吾國の古法のみにあらず。今とても異國の禮を用るを。ひたすらあしきと

陽復記上

神風伊勢の國。百船度會の郡は。内外の神のしづまり給ふ地にして。四時の祭禮をこたらず。垂仁雄略のいにしへより。今の世にいたるまで。上一人下萬民神威をたふとばすと云事なし。さればにや自然に地とみ。民ゆだかにして。上代の流風餘韻たえず。予も祠官にむまれをなせば。かたじけなくも。神につかふるのひま。神宮の舊記を披見し。儒典のかたはしをうかがひて。一二の同志と。かたりなぐさみ。あかしくらせば。三十とせにもあまりぬ。弱冠より以前の事は忘れき。近比見し事。古老のかたりし事。又は祕記の中にも。心にむかふ事をかたばかり書とて。漢語をかたりてことほり。朋友のものまなぶたすけとす。抑我國のおこりを尋るに。太虛の中に。一つのものあり。形ち葦芽の萌出たるごとし。則化して神となる。國常立尊と申奉る。又は天御中主尊とも名付奉る。この神を人皇二十二代。雄略天皇の御宇に。天照太神の御告に

よりて丹州眞井原より。勢州山田原にむかへしづめ奉り瓊々杵尊を東の相殿とし。天兒屋根命。太玉命も瓊々杵尊に添て西の相殿として。御同殿にましまし。豐受皇太神宮と名付奉る。今の外宮是也。此國常立尊より三代は一神つゝ化生し給のよし。日本紀に見え侍り。しかるを此三神は。易乾卦の奇爻を表して。かくしるすならんと云人あれど。さにはあらず。我國のむかしより語り傳たる事の。をのづから易にかなふ故に。神書を撰べる人の。易と附會したることばかり。日本の神聖の跡。唐の聖人の書に。符を合せたる事は。いかゞと思ふべけれど。天地自然の道の。かの國この國ちがひなき。是ぞ神道なるべき。其後又三代は。二神づゝ化生し給ふとなり。是を坤卦の耦爻の三書に表するならんと云此理は上にするしぬ。國常立尊より第七代めにあたりて。伊弉諾尊。伊弉冊尊。二神出生し給是を伊弉諾は乾卦三書成就。伊弉冊は坤卦三書成就にて。男女の體も定りぬるならんと云。をのづからかなふところ。深意あるものなり。此伊弉諾尊。伊弉冊尊夫婦となりて。此國をうみ。草木迄もうみ給と云。子細ありあらはしがたし。其後此國のある

之謂_レ知_レ之以_二大倭假名_一權_二託宣之言_一謾書、

慶安庚寅正月日

ルヲ愚ナル人見テ牛ノマネヲシテ草ヲクラフ傍ノ人
問テ曰ク何ガ故シカスルヤト答テ曰ク草ヲハミシ牛
既ニ天上ス我是ヲウラヤムト傍人笑テ曰ク是邪見ノ
人ナリ野牛ノ天上ハ智人ノステシ衣アリシガ風ニ吹
レテ牛ノ足ニカ、リシ縁ナリ彼人縁ナクシテ然ラン
ヤカクノ如ク人皆コレ邪見ナリ思ヘ邪ナカラントイ
ヘルハ孔夫子ノ要言ナリ

雖レ爲ニ重服深厚トハ重服トハ父母ノ喪衣ナリ衣ヲ
重テキル故ニ重服ト云也又ハ藤衣トモ云緇衣トモ云
唐土ニハ唐ノ太宗皇帝ヨリ始ルナリ惣ジテ神ハ行觸
來觸トテ少シキ身ノケガレヲモ嫌玉フトイヘドモ慈
悲フカキ人ノ家ヘハ重服ノ折カラナリトモ影向アル
ベキトナリ慈ト者イツクシムトモメグムトモ讀ナリ
一切ノ人ヲ吾赤子ヲイツクシム如クニスルヲ云也悲
ト者カナシムト讀一切ノ人ノ上ニ悲シム事アレバヘ
ダテナク是ヲ悲ミテ我力ニテ悲ヲ止ル事アレバ夜ヲ
日ニツイデモ是ヲヤメント思フ心ヲ慈悲ト云ナリカ
クノ如クノ人ノ室ノ中ヘハ八百萬ノ神往ブレ來ブレ
ハサテヲキ重服ノ處ヘモ來リ玉ヒ影ノ形ニ隨フ如ク

ニ守リ玉ハントノ御託宣ナリ誠ニ仰テモ餘リアルハ
三社ノ御誓ヒナリ

本邦之基根ニ於自然也、物之自然也天下僉貴之、物
之造化也世未レ重之矣、夫吾國寶祖神靈三器皆出ニ於
天成也昌也、皇裔數世其統御之靈也、與天壤之開
關同、非是國運出ニ自然者也、或有下戎夷之觀鼎
遠廢、關於西邦一匹近帝畿也、天竺有遺耆城之纂
亂、夏周在獫狁獯粥之厄、爲國鑿九鼎亦是爲人工
也、我國一種系連綿邈無窮者、天造自然之器出レ所
致也、神有國以降不蒙戎菴之攘奪者未レ有如下如
吾國ニ於純全也、開基之神傳器之靈然支不レ可同日
而語一矣、今見世人多携震旦風俗之文且蔑神代
遺風之書、和風爲之陵夷神慮爲之損レ明職之此由
矣、粵松本氏語予曰、悲哉稟生於神國懸望於異
邦、儻遇予師欲問神慮、僉曰神書披閱族蒙冥慮之
怒成衰貧之身一矣、愚昧暗然之謂乎、將爲神慮逆憤
謂乎、不然旨以三之一示之矣、予曰噫哉子之間
乎、神書出レ言豈祕哉、惟和國緇素合心馳者、時索
神書使二人寫之讀之者、和光彌高神威彌堅乎、爲

猶モ東國ノ神荒ク猛クシテ治マリガタシ爰ヲ以テ天
 兒屋根命健甕土命經津主命三神トモニ東國靜謐ノ爲
 ニ下向シ玉ヒケリ經津主命ハ下總國香取郡ニ至リ國
 神ヲ靜メ玉フ今香取明神ト云亦齋主命トモ云也天兒屋根命健甕土命ノ
 二神ハ常陸國鹿嶋郡ニ下リ荒振神タチヲ靜メ一統シ
 玉ヒテ猶天下安全ノ爲ニ三神ナガラ東國ニ住玉ヘリ
 其後三笠山勸請ハ人王四十八代稱德天王ノ御宇神護
 景雲二年ニ鹿嶋ヨリ鹿ニ乘櫛ノ枝ヲ鞭トシ今ノ春日
 山ニ飛入玉ヒ帝都ヲ守護シ玉フモノナリ春日御詠哥
 曰ク鹿嶋ヨリカセキニ乗テ春日ナル三笠ノ山ニ浮雲
 ノ宮ト詠シ玉ヘリコレニヨツテ鹿ヲ以テ使者トスル
 ナリ一ノ宮ハ鹿嶋大明神二ノ宮ハ香取大明神三ノ宮
 ハ春日大明神四ノ宮ハ姫神天照太神其後人王五十代桓武
 天王ノ時都ヲ山州平安城ヘ遷シ給時大原ヘ春日ヲ勸
 請又大原ヨリ吉田ヘモ勸請スルナリ

十六 春日御託言

雖曳三千日注連トハ此神託ノ意人々神ニ祈誓ヲカケ
 テ宮ヲ造リ石ヲ疊ミ御注連ヲ引歩ヲ運ブ事千日萬日
 ニ及トイフトモ邪ノ願ヒヲ以テ祈ラバ其人ノ家ニハ
 到リ玉ハジナリ注連トハシメナハノ事ナリ凡ソ注連

繩ノ起リハ天照太神天ノ磐門ニ閉籠リ玉フ時思兼神
 ノ策ニテ太神岩戸ヲ少シ開キ出玉時手力雄命イダキ
 奉リテ戸ヲ閉テ繩ヲ引張テ是ヨリ岩戸ヘ歸入玉ヒソ
 トナリ此繩ヲ神書ニハ端出之繩ト申コレ則チシメナ
 ハノ事ナリ神ヲ引ト、メテ願ヒヲ滿給ヘト申事ノ繩
 ナリカクノ如ク千日萬日ノ間御注連ヲ引テ祈ルトモ
 邪見ノ人ノ家ニハ到ルマジキトナリ邪見ト者ヨコシ
 マニミルト讀ナリ正直ノ人々神ニ祈誓ヲスルニワヅ
 カニ一日ノ注連ヲ奉テ願ヲ滿ルヲ不正直ノ人見テ邪
 ナル心ヲ以神ニ願ヲ懸ルニ百日ニモ滿ゼズ千日ニモ
 叶ハヌ事皆是我心ヨリナスワザナリ然ルヲバ却テ神
 ヲウラミナイガシロニ思ヒ人ニモ語ルモノ也昔愚姥
 アリ常ニ枇杷ヲカニスケリサネ大ニシテ食スル處スクナ
 キトテ悉クミバカリニ成ヤウニトテ神ニ祈ル事百日
 ニモ滿ゼズ千日ニモ叶ハズ還テ彼靈神ヲ嘲リ笑事ア
 リ是則チ不正直ノ祈リヲ枇杷ノ實ノ願ト云ナリ直ナ
 ル心ヲ以テ祈ラバ何ゾ石ヲ變ジテ金トナサヤランヤ
 世ノ人或ハ貪欲ノ爲或ハ墮患ヲ以テ祈ル前ニハ何ン
 ノ叶事カアランヤ佛家ニイハユル邪見トハ喩ベハ野
 中ニ牛アリ草ヲ食ヒシガ速カニ光リヲ放ツテ天ニ上

人ヨリ食物ヲ乞テ食スルニ武士ノ武威モ忠心モナクシテ心ヲ曲テ君ヲヘツラヒテ知行俸祿ヲ受人ノ物ヲ

ル人ノ心ケガレ濁リタル處ニ交ル事慎テモ慎シムベキモノナリ

十四 春日大明神之事

春日大明神ハ天兒屋根命大中臣氏ノ祖神ナリ皇孫尊日向國高千穗ノ峰ニ天クダリ玉フ時天ノ神ヨリ皇孫ニ三神ヲ副玉ヒテ天津日嗣國津日嗣ヲ守ラシメ給ヘリ其時春日ハ扶翼ノ臣ノ中ニモ大政官ニ當レリ地神ノ初ヨリ此國治リ兼タル處ヲ三神ヨリ平ゲ玉フ中ニ殊ニ天兒屋根命ハ皇孫ノ政ヲアヅカリ萬民ヲ安クシ玉フ事餘神ニ勝レリ是ニヨツテ春日大明神ト名クルモノナリ日天ハ四時ニワタツテ物ヲ照ス中ニ秋ノ日ハ陰分ニマケテ日アタ、カナラズ萬物初テカレシボム冬ノ日ハ猶陰分ノ極マル時ニシテ萬物生ジガタシ夏日ハ陽分ナリトイヘドモ又陽ノ極マル時ナレバ萬物又育スル事ナキ也コ、ニ春ノ日ハ寒ニアラズ熱ニアラズ此スナハチ中分ノ時節ナレバ萬物コトノク生ジテ國家萬黎トモニ安穩ノ時ナリ爰ヲ以テ春日ト號スルモノナリ明神ノ事ハ以前ニ念比ニ聞ヘタリ

十五 大和國三笠山勸請之事

皇孫尊天降給ヒテ日本恙ナク治マリタリトイヘドモ

タル方へ投レバ船ノメグリ干瀉ト成テ船ウヅク事ナケレバ自在ナラズ又味方ノ方ニハ海ヲ陸ニナシ陸ヲ海トナシ時ノ宜ニ隨テ自由自在ナラシメテ戰ヒ玉フ也此時神功皇后ハ王子御懷妊ナリ皇后一卷ノ軍書ヲ持玉ヘリ今ノ世ノ黃石公ガ三略ト云コレナリ軍ハゲシキ時皇后コノ書ヲ燒テ灰ニシ吞玉ヒテ唱ヘテノ玉ハク王子胎内ニアリテ此書ヲシロシメセ我ハ空シクナルトモ王子ハ恙ナカルベシトナリ右此軍モ三箇年ノ間ナリ漸々軍モ勝チニ成テ皇后ハ筑前ニ歸リ玉フ時三笠ノ郡宇佐ノ里ニテ王子御誕生アリ其處ニ宮ヲ立ツル今ノ宇瀨ノ宮是ナリ始胎内ニテ軍書ノ灰ヲ吞玉フ故ニ御誕生ノ時一卷ノ書ヲ暗ニ書玉フト云々又御誕生ノ時八ノ幡產屋ノ上ニ掩フ故ニ八幡ト名ケ奉ル也然シヨリ以來猶以テ日本安全ニ治リテ高麗ヨリ毎年ニ日本へ御調物ヲ奉ル事八十艘ニ定マリタリ人王六十代ノ帝醍醐天皇ノ比マデ少々御調物奉ル也

十二

山城國鳩峯男山勸請之事

人王五十六代清和天王ノ御宇大安寺ノ行教和尚貞觀元年ノ夏九旬ノ間宇佐ノ宮ニ參籠アリテ晝ハ大乘經ヲ讀誦シ夜ハ祕密神咒ヲ誦テ法施ヲコタラズ九旬已

ニ滿ヌル時靈夢ノ告新ナリ八幡現ジテ告テ曰ク久ク法味ヲ受テ師ヲハナレザル事影ノ形ニ隨フガ如クナリ今師王城ニカヘリナバ我モ又隨テ行キ王城ノ側ラニ居ラント也行教都ニ歸リテ山崎ニツク東南ノ方男山鳩峯ノ上ヲ見ルニ大光明アリ此事ヲ以清和帝へ奏聞アル則チ橘朝臣ノ工部ニ勅シテ宇佐ノ神社ノ如クニ新殿ヲ造テ遷シ奉ラルト云々又弘法大師モ參籠アリテ靈驗ヲ蒙リ入唐求法ノ大願成就シ玉ヘリ惣ジテ八幡ハ中比マデ祈願ノ返答ヲ社ノ内ヨリアリ然レバ度々天子ヨリ勅ヲ下シ玉ヒテ少シノ事ニモ宇佐ノ宮ニ問玉フニヨリテ其後ハ返答トバマリタル也

菩薩ト者梵語ノ略ナリ具ニハ菩提薩埵ト云ナリ此方ニハ覺トモ智トモ云ナリ又薩埵ニ四ノ薩埵アリ一ニハ愚童薩埵是ハ三界ノ凡夫ヲ云ナリ意ハ一切ノ人ハ智恵ヲ備ヘザルハナケレドモ顯レザルハ愚ナル童ベノ火ヲ知ズシテ入ガ如シニハ識薩埵コレハ二乘ヲ云三ニハ金薩埵コレハ菩薩ヲ云四ニハ智薩埵コレハ佛ヲ云ナリ委シキ意ハ明師ニ尋テ知ン者ナリ

十三

八幡御託言

雖レ食ニ鐵丸トハ食物ニ正食ト邪食トノ二アリ他

十一 八幡大菩薩之事

ハ日月ノ明ヲ神ノ頭ラニ戴クガ故ナリ天下ノ君臣モ亦カクノ如シ君王ヨリ潔キ政ヲ下シ玉フヲ臣下是ヲ戴キウケテ天下ノ人民ニ賦リアタフル者ナリ正直ト者タバシクスグト讀ナリ末代ニハ人ノ心モ正シク直ナル人ヲバ妬ミ惡ムハ是スナハチ不正直ノ人ノ心ヨリ出ルナリ西施ガ貌ヨカラズンバ東施何ゾ惡ンヤ然アレバトテ心ヲ曲テ邪ニイタサンヤ善人惡人ニ交ル時當座ハ石ニ米ノマジリ油ノ水ニ入タル如クナレドモ陰德アレバ必ズ陽報アルモノナレバ惡人モ正神アラハル、時ハ善人ナリト知テ親ミ近クモノナリ是ヲ終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ムルトハ云ナリ一旦トハ二字ナガラシバラクト讀ナリ依怙ト者ヨリヨルト讀ナリ毛詩ニ恃父怙母ト云語アリ今ノ世ノ正直ナル人ハ人ニウトミ遠ザケラレテ便リカラヲ失フ事喻ヘバ父母ヲ失フ孤子ノ東西ニ吟テ力ヲ得ズ闇中ニ火ヲ失フガ如クナレトモ終ニ父母ニ巡リ合テタチマチニ日月ノ光リヲ見ルガ如ク今ノ正直者モ人ニウトミ去ラレテ一旦夜陰ニ入トイヘドモ日月明ヤスクシテ終ニ善人ト知ル、モノナリ皆コレ日月神明ノ德ヲ蒙ル也

八幡ハ八皇十三代仲哀天皇ノ皇子九州筑前國三笠ノ郡宇佐ノ里ニテ御誕生アリ母ハ人王十四代神功皇后ナリ仲哀ノ御宇ニ薩摩國天子ニ隨ハズ天皇コレヲ隨ヘントシ玉フ時天照太神春日大明神御託宣シテノ曰ク吾國ハ神國ナレバタトヒ責ズトモ終ニハ隨フベシ先是ヨリ西ニ寶ヲノ國トテアリ此則新羅百濟高麗三韓也是ヲ對治アルベシト云々時ニ天皇ソノ國何クトモ知玉ハズ海上ニ兵船ヲタバヨハシ終ニ長門國豐浦ニテ八月十五日ニ崩御シ玉フト也或說ニ神託ヲ用ヒ玉ハ伊弉諾伊弉册所生ノ國ヲ伐玉ヲ神將ニ當テ獻御ナルト云說ナ其時仲哀ノ后神功皇后ハ龍馬ニノリテ虚空ヲ飛シテ豐前國池田ノ杉山ト云處ニ至リ玉ヒテ天ニ仰ギ祈リ給フ時四天王ハ八ノ白幡ヲ捧ゲテ天降リ玉フ今杉山ニ四天王ノ峯ト云ハ是ナリ此八ノ幡ノ上ニ小戸ノ瀬ヨリアラハレ玉フ三神現ジ給ヒテ三神ト者表筒男命新羅百濟高麗ノ三韓ニ向テ神軍シ玉フ事誠ニタメシスクナキ事ナリ猶三韓力ツヨキ時龍宮界ヨリ干珠滿珠ト云二ツノ玉ヲ捧ゲ奉ル滿珠ト云玉ハ敵方鹽ノ干瀉ニ有處ヘ投レバ皆悉ク鹽滿テ水ニヲボレテ自由ニハタラク事ナシ干珠ト云玉ハ滿タル鹽ニ船ヲ浮ベ

ク陰陽不測コレヲ神ト曰トナリ寶前次第作法記ニ曰ク陰陽ハ動靜ノ消息ナリトイヘリ動ハ進ニテ陽ナリ萬物ハ陽ニ向テ動キ進ムデ生長スル也陰ハ靜ニテ退ナリ萬物陰ニ至テ靜マリ退イテ朽凋ムナリ孟子ニイヘラク聖モ知ベカラズコレヲ神ト曰ト也安キ意ヲ以テ神ノ字ヲ知バ神ノ字ハ示篇ニ申ト書ナリ人々正直路ヲ以テ神ニ祈ルトキハ申ノ字ナリ暗ニ利生ヲアタヘ玉ヘルハ示ノ字ナリ

十 天照太神御託言

謀計ト者ハカリゴトカゾフルト讀ハカリゴト、ハ下地ノ我意ニハ僞テ上面ニハ眞ノ有サマヲナシテ人ヲ誑カス事ナリ世ノ中ニ倭人ナド、イフ是ナリカゾフルトハ喩ヘバ十アル物ヲ七ツ八ツニカゾヘ又二十三ナドニ計ル事ナリカクノ如クシテ人ノ目ヲヌキテ僞リ計ヘテ商内ナドスル時ハ眼前ニ利ヲ得テ家モ富榮ヘ身モ煖カニナルハ眼ノ前ノ利潤然レドモヌカレシ人當座ハ知ネドモ本心ノ時ハ知ルモノ也其時前ノ人ヲ恨ミ悲ム此コ、ロ彼ヌキシ人ノ方ヘ至リテ罰ヲアツルナリ世ノ中ノ人ノ心モ通力ヲソナヘテ有モノナリ運心神通ト云事アリ人モ夢中ニ千里ノ外ニ

行テ親シキ友ニモ逢テ過コシ今ノ事マデモ語リナグサミテ暫時ニ千里ノ程ヲカヘリ來ル事はミナ人ノ上ニソナヘタル運心神通ナリ亦世ノ人ノ中ニ奇特ナドヲアラハスハ明神ノ神通ナリ世ノ中ノ人ノ目ニモ見ヘズ奇瑞ナドノ有ハ神明ノ神通ナリカクノ如ク人々ニ通力神通アレバトテ商内ヲスルニ利倍ヲトルベカラズトニハアラズ喩ヘバ十錢ニ買シ物ヲバ十一錢十二錢ニ善ホドニ賣レバ人ヲ僞リ誑カスニモ非ズ人モ其分ハ許ス也十錢ノ物ヲ二十錢ニスレバイツハラルル人後ニ是ヲ知テ大ニ怒リ悲ム心神カノ人ニ酬テ必罰アタルナリ罰ニ神罰冥罰人罰アリ神罰ハホノカニ顯レテ當リ冥罰ハ知ズシテ當リ人罰ハ明カニ當ル五刑ナド是也愼テモ愼ムベキ者ナリ神明ト者惣ジテハ天地ノ神ヲサスナリ別シテハ人ニソナヘタル處ノ正直路ノ神ヲ神明トモ云ベシ又神明ト云明神ト云ニ少シキ異アリ明神ト者元神光リヲ和ゲ座ニ同リテカリニ人ノ形チニ現レ萬民ヲダスケ給ヲ明神ト云ナリ明ハ日月ナリ日月ノ明ガ神ノ上ニアラハレ出ルヲ明神ト云ナリ日月ノ明ガ神ノ中ニ有テ形チニ顯ハレザルハ神明ナリ神明ハ君ニシテ日月ノ明ヲ下ニシ明神

タリ春日ハ亦社稷ノ神ニシテ皇孫ノ臣下ノ神ナリ又
八幡ハ天神地神ニテモ非ズ人王ニ下リテ第十五世ノ
神ナリ旁以不審ナキニ非ズ是ヲ答テ云シモ神慮測難
シシカイヘドモ愚意推テ云ハ天照太神ハ地神ノ初メ
尤モ由緒アリ春日ハ社稷ノ神タリトイヘドモ皇孫
佐ノ神ニテ天下ヲ靜謐シ萬民ヲ安寧ナラシムル神ナ
レバ其由緒ナキニモ非ズ又八幡ハ誠ニ人皇ニ下リ十
五代ノ應神天皇ナリ剩ヘ皇太神宮ノ左リニ託宣ヲ安
ス^{左ヲ上トシ右ヲ下トスル事常ノ振舞ナリ}是亦由緒ナキニアラズ八幡ハ天照
太神ノ分身タル瀬織津姫ノ再誕ナリコ、ニ人皇ノ世
統ニ至異國ヨリ日本ヲ攻ムルニ隨テ人皇十二三世ノ
比ハ日本既ニ異國ノ手ニ入ントス爰ヲ以テ瀬織津姫
カリニ現レテ神功皇后ノ腹ニ宿リ應神天皇ト生レ給
テ日本一統シ玉フ王ナレバ日神春日ノ託宣ニ並ベ奉
シ事何ノ子細アラン哉委シキ旨ハ八幡託宣ノ下ニテ
聞ユベシ

九 天照皇太神宮

天照ト者日神ニテ天下ヲ照シ玉フ事平等也汚穢不淨
ノ處ヲモ照シ殘シ玉フ處ナシ尤モ和光同塵ノ意也白
虎通曰ク天ト者身ナリ天ノ言タル事ハ鎮ナリトアリ

然ラバ天ハ萬物ノ惣身ニシテ萬物ハ天ノ支節ナリ廣
雅ニ曰ク天ノ地ヲ去事二億一萬六千七百八十一里ナ
リ天ノ厚サ地ノ厚サト同ジ天ハ南北相サルト一億
三萬三千五十七里二十五步ナリ東西ハ四十步短キナ
リトアリ「照ト者明也ト字訓アリ日神天ニカバヤキ
テ萬像アキラカナリ又和訓ニハテラスト讀ナリ天萬
物ヲテラシテ萬物生成ス萬物ハ天ヲ父トシ地ヲ母ト
ス又照ハホムルニ名付ル事アリ孔子ノ昭ルナド云ナ
ルベシ」皇ト者スベラギトヨム^{スベラギ}皇ト者天子ノ名ナリ
又皇ハ大ナリトモ君ナリトモ匡ナリトモ字訓アリ前
漢ニ曰ク皇ハ君ナリ極テ尊ノ稱ナリ天子ノ父ナルガ
故ニ名ケテ皇トイフ預ジメ天下ヲ治メザルガ故ニ帝
トイハズトアリ又皇ノ字ハ白王ト書タリ白ハ明ナリ
トテ明王ト云意ミヘタリ上代ハ君モ君タル故天皇ト
書末代ノ今ハ天王ト書トイヘリ例セバミコト、云フ
ニ王臣ノ神ニ付テ尊命ノ字替ルガ如シ「太ト者ヲ、
シト讀ユヘニキワモナク限リモナキ意ナリ日神ノ國
土ヲ照シ玉フ事何レノ地ヲ限リ何クノ國ヲ限リトモ
ナク照シ給フ意也」神ト者カミトモタマシヒトモ讀
ナリ陽氣ノ精ヲ神ト云陰氣ノ精ヲ靈ト云ナリ易ニ曰

知明メテ天下ヲ治メ玉フ。故ニ王ヲ貫三ト云貫三トハ三ヲ貫クト讀堅ノ點ハツラヌク意ナリ萬物ヲシリ明ラムル義ナリ道一ヲ生ジ一ニヲ生ジ二ニヲ生ジ三萬物ヲ生ズルナレバ伊弉諾伊弉冊ノ二神國土ノ三ヲ生給ヒテヨリ以來萬物ノ中ニ生ズルモノナリ

社ト者ヤシロト讀社ハ土地ノツカサナリ萬物ハ土地ノ上ニ生ジテ人ヲ養育ス其恩ツクシガタシ爰ヲ以テ天下ノ政ニモ土地ヲ祭ントテ五方ノ土ヲ取テ崇メ奉ラル中方ノ土ヲバ黃ナル紙ニツ、ミ東方ノ土ヲバ青キ紙ニツ、ミ南方ノ土ヲバ赤キ紙西ノ土ハ白キ紙北ハ黒キ紙ニ包ミテ一處ニ壇ヲ築テ上天子ヨリ下萬民ニ至ルマデ是ヲ崇メ奉ル一方ヨリ土一寸ヲ取四方ミナカクノ如ク取テ社壇封ズルナリ封ノ字ノ意篇ニ土ヲ重ネテ作リニ寸ノ字ヲ書尤知ヤスキ事ナリ其外大唐ノ法ニモ一國一縣ノ司官ヲ下サル、ニハ王城ノ四方ノ土ト禁中ノ土トヲ其方ノ色ノ紙ニ襲ミテ下サル國司知行ノ地ニ至リテ社ヲ建テ此土ヲ封ジテ祭禮ヲコタル事ナシ皆此謂ナリ又社ヲ立ルニ王侯ヨリ下ツ方皆法アリ王群姓ノ爲ニ社ヲ立ルヲ大社ト云大社ハ四至九町也王自ノ爲ニ社ヲ立ルヲ王社トイフ云諸侯百

姓ノタメニ社ヲ立ルヲ國社トイフ諸侯自ノ爲ニ社ヲ立ルヲ侯社トイフ大夫以下群ヲナシテ社ヲ立ルヲ置社ト云ナリ社ニ上中下アリ上社ハ九町四方ナリ中社ハ八町四方下社ハ四町四方ナリ託ト者ツクトモヨルトモ讀ナリ形チヲ顯サズシテ神ヲ人ニ寄物ニ附テ言葉ヲ寄ルヲ云ナリ意ロ尤トモ知ヤスキ也宣ト者ノブルト讀ナリ神聖物ニヨリテ言葉ヲ宣玉フナリ宣旨宣命宣下ハミナ大臣ヨリ下ル言葉ナリ今天照皇太神ノ託言ヲ宣ト云ン事一端不審ナレドモ古語ニモ天子ノ宣室トアレバクルシカルマジキ歟又愚案日本ノ御主ノ始メハ天照太神タリトイヘドモ惡神ノサハリニヨツテ終ニ天降り御座サズ皇孫尊ニ至テ始メテ國土ヲ知食セバ高皇產靈ヲ始メ奉リ天照太神モロ共ニ天ノ御蔭日ノ御蔭トカクレ御座テ皇孫ノ朝廷ヲタスケ給ヘバ宣旨宣命ト取テモ苫布カルマジキ歟

八 諸神中ニ三神託宣之事

今此託宣諸神ノ中ニ天照太神八幡大菩薩春日大明神ノ三神取分テ子細アル哉否若子細ナクンバ如何但取分テ託宣アラバ天照太神高皇產靈尊皇孫ナド、コンアルベシ其上天照太神ハ地神第一ノ尊ニテ宗廟ノ神

ノシルシ處アルベシ急ギ尋テ遷シ奉レト則大和姫
三種ノ神器ヲ戴キ三種ノ神器ト者神璽
寶劍內侍所コレナリ國々ヲ尋ネ行キ給
フニ伊勢國渡會郡沼木郷山田ガ原ニテ老翁ニ行合玉
ヒテ尋給フ老翁ハ猿田彥命神
宮ニテハ與玉ノ社翁答テ曰ク我ハ是神代ヨ
リ天照太神ノ勅ヲ請テ御鎮座ヲ守ル事二百八萬歳ノ
間ナリ是ヨリ與五十鈴河上ニ有トテ道引ユク是今ノ
内宮ナリ此翁ノ鼻勝レテ長事五尺六寸有ト也今此國
ノ神事祭禮ノ時王ノ鼻トテ先前ニ鼻ノ長キ面ヲ着テ
通ル事ハ是神代ノ遺風ナリサテ皇女宇治ノ郷ニ至リ
見玉フニ天ノ逆鋒ニ五十ノ鈴チカ力懸テ立テ有シナリ
則此河ヲ五十鈴河ト云ナリ其ヨリハ皇女ハ立還リテ
同ク勢州鈴鹿ノ坂ニ宮ヲ造リテ朝夕ノ御供ヲ内宮ヘ
備ヘ給フニ往還ノ路ホド遠シトテ野ノ宮ヘ遷リ玉フ
今齋宮ト云是ナリ齋宮ハ四町四
方ノ宮ナリ皇女ノ後モ代々天子ノ
姫宮一人野宮ニ遷リ太神宮ノ御仕ヘ有シナリ

六 外宮御鎮座由來之事

豐受皇太神宮ノ御鎮座ハ人王二十二代雄略天皇二十
一年冬十月一日ニ天照太神日本姫ニ夢中ニ告玉ハク
天上ニテノ如クニ天ガ下ニテモ皇孫ト一處ニテ御供
ヲ受タキト也皇女則雄略天皇ニ奏聞アル其夜天皇ノ

御夢モ同キ事也ヨツテ其年外宮御造宮アリテ明年丹
波ノ與佐ノ宮ヲ出シ奉リテ大和國宇多ニ一宿アリ其
ヨリ伊賀國ニ二宿アリ伊勢ノ神戶ニ一宿同ク山邊ニ
一宿山邊トハ今ノ次ニ度會ノ平尾ニ三月ノ間御座ス
平尾ノ宮アト今ノ次ニ度會ノ平尾ニ三月ノ間御座ス
ノ離宮是ナリ同九月十六日ニ山田原ノ新殿ニ遷シ奉
ル也外宮ノ本宮ハ天御中主尊國常立尊ト同体異名也
天神七代ノ祖神ナリ治世ノ御神ハ皇孫瓊々杵尊ナリトイヘドモ相殿ニ御
座テ祖神ヲ崇奉リ給フ也サテ天兒屋根命天太玉命同
ク相殿ニ坐シテ皇孫ヲ輔佐シ玉フ也人王十一代垂仁
天皇內宮御鎮座ヨリ二十二代雄略天皇外宮御鎮座マ
デハ其年數四百十八年ナリ日本姫皇女其間存生ニ
シテ鈴鹿ノ宮ニ座セシナリ日本姫ノ壽命ハ七百歳
也云々

七 三社託宣題號之事

三ト者天地人ノ三才ナリ諸神ノ數多シトイヘドモ天
神地神人神ノ三才ノ神ノ外ニハアルベカラズ然ラバ
此御託宣ハアラユル神等ノ託宣トモ心得ベシ惣ジテ
三ノ字ハ神道ニ用ユル文字ナリ王ノ字ノ意ニテモ知
ヤスキモノナリ王ノ字ハ三ノ字ニ中ニ豎テ點ヲ打意
ハ天下ノ王タル君ハ天地人ノ三才ヲ胸ノ方寸ノ中ニ

ニハ天下ヲ讓リ玉フ月讀尊ニハ天ヲ讓リ玉フ素盞鳴尊ニハ根ノ國ヲ讓リ玉フ蛭子ニハ海ヲ讓リ玉フ此蛭子ハ生レ玉ヒテ三年ノ間足タチ給ハザレバ虛船ニ造籠テ海ノ事ヲシラスベシトテ流シ玉ヘバ攝津國ニ留リ玉フ今ノ西宮是ナリ亦素盞鳴尊ハ生ナガラニシテ荒ク猛キ神ニテ國ヲ行キ給ヘバ國ノ人煩ヒ死シ山ヲ行キ給ヘバ木ヲ朽シ海ヲ通り玉ヘバ波風ヲ動シカクノ如クニシテハ國土ヲ知スベキ神ニ非ズトテ根ノ國底ノ國ヘ拂ヒ給ヘドモ猶父母ノ神ノヲシヘニモ隨ヒ給ハズ動スレバ日神ノ住給フ宮ノ中ヘ入惡キ事ヲ而已ナシ玉フ惡事ノ色々神代卷ニ見タリ是ニ依テ日神ハ天ノ磐門ニ閉籠リ玉ヘバ國土ハ夜晝ノ別チモナク暗闇トゾ成ケル爰ニ八百萬ノ神ノ謀ニテ岩戸ノ前ニテ神樂ヲ拍子給フ舞姫ハ天ノ鈿女命祝言ハ春日大明神ナリ白幣青幣ハ天ノ太玉命持玉テ庭火ヲ燒謠ヒ舞給ヘバ天照太神ハ岩戸ヲ少シ開キテ見玉フ處ヲ信濃國ノ戸隱ノ明神ハ力ツヨキ神ニテ日神ヲイダキ出シ玉ヘリ其ヨリ素盞鳥命ヲバ髮ヲヌスキ足手ノ爪ヲ切テ日神ヘ御佗言ヲ申シテ素盞鳴ヲバ追失ヒ給ケレドモ猶天下ヲ天照太神ヘ渡シ奉ラズ地神第二代ハ日神ノ御子正哉

吾勝々速日天穗耳尊ノ時モ素盞鳥ノ御子大己貴尊ナヲ天下ヲ渡シ給ハズ其御子事代主命ニ至ルマデ素盞鳴ノ子孫代々國土ノ主タリ然間天ノ神高皇產靈尊經津主命下總香取明神健甕土命常州鹿島大明神也詔シテ曰ク汝二神天クダリテ天ガ下ヲ靜メヨトナリ時ニ二神天降り大己貴命ニ向ヒ給フ時劍ヲ逆サマニ立テ其キツサキニ腰ヲカケ猛キ姿ヲ顯シテ曰ク吾二神ハ天ノ神ノ使ナリ國土ノ御主ハ天照太神ノ子孫也急ギ渡シ奉ランヤト大己貴命答テ曰ク我スデニ子孫アツテ國土ヲ讓ル上ハ彼子孫事代主五十猛二人ノマヽナリトノ玉フ其時二神又始ノ如クイカメシキ形ニテ事代主命ニクハシク問玉ヘバ國土ヲ渡シ奉リ玉フ其時ニハヤ正哉吾勝尊ハ年行給テ其御子地神第三ノ尊天津彥々火瓊々杵尊ニ至テ天下始テ渡リ玉フ是今ノ伊勢國外宮相殿ノ神ナリ

五 內宮御鎮座由來之事

伊勢內宮ハ天照太神ナリ仁王十一代垂仁天皇御宇冬十月甲子ノ日ニ丹波國與佐ノ宮ヨリ伊勢國渡會郡宇治郷五十鈴河ノ宮ニウツシ奉ル其由來ヲ尋ルニ垂仁天皇御姬宮大和姬ニ詔リシテ天ガ下ニ神明ノ御鎮座

也亦垂仁二十六年冬十一月新嘗會ノ夜新嘗會トハ十一月ノ中ノ朔日於禁中一始テ太神宮ヘ當座ノ米ヲ御供ニソナヘ玉ノ祭リナリ其ヨリ天子ヘモ新米ヲ備フ此祭ヲ又ハニヒナヘノ祭トモ云垂仁帝

神主物忌等八十氏ニ詔ノリシテ曰玉ハク吾ニ今夜太神宮託宣シ玉フ也神主物忌等明カニ聞ベシ神代ノ人ノ心ロハ正シクシテ直ナシ人皇ノ末ノ代ノ人ハ其心黒烏シテ其心安キ時ナシ然レバ則チ惡鬼邪神モ便力ヲ得テ人ニ託シテ誑言ヲナサン然ラバ今ヨリ後永ク善神ノ託ヲ止メン若時ニヨリテ人ニ告ルニハ形チナクシテ聲ヲアラハシ尤驗言バヲアラハサント也此事實基本紀ニ具サニ見タリ然ラバ前ノ兩說ノ中ニハ池水ニウカブ文字ノ說尤シカルベシ

二 上代御託宣神變之事

人皇十三代仲哀天皇御宇天照太神春日大明神虛空ニ聲ヲアゲテ御神託アリ天皇是ヲ仰信シ玉ハザル過ニヨツテ崩御アリシト也又聖武天皇伽藍建立ノ叡願御坐トイヘドモ神國ノ遺風ナヲ恐レアリトテ行基菩薩ニ勅シテソノ効驗ヲ伺ヒ玉フ爰ニ行基太神宮ニ參籠アル七日ノ夜虛空ニ聲アツテ曰ク實相眞如ノ日輪ハ照ニ生死長夜之闇一本有常住ノ月輪ハ拂ニ無明煩惱之雲ト此御託宣ノ旨基公叡聞シ奉ル詔シテ曰ク句中

ノ意誠トニ神代ノ昔シ天照太神ハ素盞烏尊ノ惡逆ニ依テ六合常闇ニナルトイヘドモ終天ノ岩戸ヲ開テ長夜ノ闇ヲ照シ天孫ハ八重ノ雲ヲ別テ天降リ玉フ時雲霧アツクシテ重リシトキ祓ヲナシ玉ヘバ雲霧タチマチニ晴タリ是無明ノ雲ヲ拂ニ非ヤ然トイヘトモ勅使梵僧ニシテ句面佛法ニ似タリ是非ニ其告詳ナラズトテ天平十四年十一月ニ重テ右大臣橘朝臣諸兄ニ仰セテ諸兄ハ山城國井出ノ寺ヲ造リテ山吹ヲ植シテ人ナリ後ニ流サレテ死シケリトナリ伊勢太神宮ノ勅使タリ天平十四年十一月十五日ノ夜內宮三ノ鳥居ノ前ニシテ御託宣サキノ如シ同キ夜天子ノ御前ニ天女現ジ玉ヒテ光ヲ放テ宣ク此國ハ神國ナリ尤モ神ヲ敬ベシ然ドモ日輪ハ大日ナリ信仰スベキト也其後始メテ御願寺ヲ立玉フ今ノ東大寺是ナリ

四 天照太神國土請來之事

天照太神ハ地神五代ノ中ニ第一ノ神ナリ父母ハ天神七代ノ終リ伊弉諾伊弉冊ノ尊ナリ然ニ二神天ノ逆鋒ヲ以テ天ノ下ニ國アラムヤトテ探リ玉フニ銚ノ滴リカタマリテ嶋トナル今ノ阿波路是ナリ二神此嶋ニ下リテ先日本大八嶋ノ國ヲ生玉フ亦一女三男ヲ生玉フ天照太神日月讀尊月神素盞鳴尊蛭子尊是ナリ天照太神

三社託宣略抄

一 託宣起之事

今此三社ノ託宣ノ起リハ正應年中大和國奈良ノ京東大寺ノ東南院聖珍親王ノ御時庭前ノ池水ニ天照太神八幡大菩薩春日大明神三社ノ託宣ノ文字アキラカニ顯レタリト也此東南院池ノ事往昔ヨリ大蛇スミケリトテ住居ノ人年ヲコヘズ是ニ醍醐寺ノ聖寶尊師好ミテ此處ニ至リ住ス則チ鬼魅來テ聖寶ヲ爭ヒ拒事タビタビナリトイヘドモ聖寶ヲソレズシテ住ス或時聖寶茶ヲノミナガラ睡ル時大蛇梁木ニ登リテ寶ガ隙ヲ窺ヒ見ル寶眠リ覺テ茶椀ニ蛇ノ形チウツルヲ見テ仰テ是ヲ咒スタチマチニ大蛇シリゾヒテ二度來ル事ナシ其ヨリ聖寶ハ元興寺ノ願曉法師ニ隨テ三論宗ヲ習ヒ講ゼシ寺也然シヨリ以來惡鬼毒蛇此池ニ住事ナシ又此庭上池ノ傍ラニ大磐石アリ是ハコレ聖寶大峯ヨリ背ニ肩來テ今ニアリ人力ヲ以テ動スコトカタシ誠ニサマザマ子細アル池ナリ聖珍親王ハ尊圓ノ御舍弟也

人王九十一代伏見院ノ御宇ニ當ルナリ正應年中御託宣ノ比ヨリ今慶安年中マデハ其間三百五十余年バカリ也不思議ナル御託宣ナルガ故ニ天下悉ク此文字ヲ寫シ用ル者ナリ 一說ニハ日本ハ神國ニシテ唐土天竺ニモ勝レテ神變不思議ノ國ナリ上代ハ上下トモニ人モ正直正路ヲ面トシテ少シモユガミタル事ナシ然レドモ末ノ世ニクダリテ人ノ心モヨコシマニ曲ミ行ニヨツテ神慮ノ御惠モウスクナレル者ナリ是ニヨツテ三社ノ神ハ末ノ世ノ人ノ心ヲ正シク直クセン爲ニ吉田ノ神主ニノリウツリ給ヒテ心ヲ知ヤスク言葉ヲヤハラゲテ三社ノ神各ノ託宣シ玉フト也今都ノ吉田ノ森ノ峯ニ託宣ノ宮トテ有リトナリ右兩說ノ中ニ始ノ說ヲ以テヨシトスベキカ其子細ツギニ明カナリ

二 末世ノ御託宣人ニ不託事

人ニ乘ウツリ玉フ御託宣留マル事ハ人王十一代垂仁天皇ノ御息女大和姫ノ皇女御託宣ヨリ以來永ク止マリタリ天照皇太神大和姫ニ託シテ曰ク今ヨリ後ハ神託ヲ止ムト有シ時大中臣ノ祭主問テ曰ク若神託トバマリナバ末世ニハ神ノ御シルシハ有マジキカト其時答テノ玉ク末世ノ神ノ告ニハ夢ヲ以テ知シメント

三社託宣抄

天照皇太神宮

謀計雖_レ爲_二眼前利潤_一必當_二神明罰_一
正直雖_レ非_二一旦依怙終蒙_二日月憐_一

八幡大菩薩

雖_レ食_二鐵丸_一不_レ受_二心穢人物_一
雖_レ座_二銅燭_一不_レ到_二心濁人處_一

春日大明神

雖_レ曳_二千日注連_一不_レ到_二邪見家_一
雖_レ爲_二重服深厚_一可_レ赴_二慈悲室_一

一 御託宣起之事

二 末世御託宣人不託事

三 上代御託宣神變事

四 天照太神國土請來事

五 內宮御鎮座之事

六 外宮御鎮座之事

七 三社託宣題號事

八 諸神中三神託宣事

九 天照皇太神宮之事

十 天照太神御託宣事

十一 八幡大菩薩事

十二 山城國鳩峯勸請事

十三 八幡御託宣事

十四 春日大明神事

十五 大和國三笠山勸請事

十六 春日御託宣事

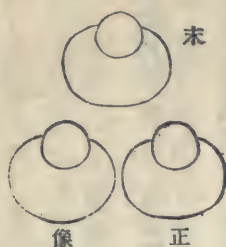
現是也觀音現身說法之山也此尊者應神天皇二十一代大祖也爲奉助大神之化尊早被示天童之妙體和之本山之光俱當山之月昔現于本山之時天童今現于當山之時天童明王之化延喜之年有行秀聖人云者行業年積効驗嚴重以神力之令然依神慮再拜見昔之天童顯現今日山靈體是也

當山三鉢靈水事

天平三年神託

鎮護國家正像末乃靈水奈利石乎爲體須水乎爲意須者

大寒不凍大旱不減勅使每參宮酌持之奉獻皇后寶祚延長之良藥敬神之人參詣之輩雖給一滴終潤二世也



巡拜記云
弘六寸許餘
深四寸許餘

大菩薩令浮御影於此水之坐主水御奇之間下部

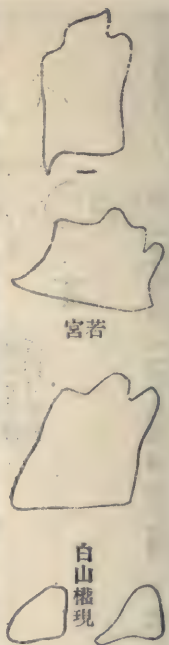
申云靈神之御影云々朝廷守護之瑞相也大同四年神託

此峰住三世利益諸衆生現世成悉地後生成菩提

宇佐八幡宮緣起下

本云建武二年乙亥十一月三日書畢右筆

宇佐重榮



靈石之上擬奉造覆御殿之時天平二年庚午神託云

吾體石體土顯流々已至未來惡世天久加其奈爲利此風爾當利此流平吞麻牟者可滅罪障奈利勿造覆一禮者

武內靈神事

懷中曆云景行天皇五十二年辛酉八月以紀武內宿禰始爲棟梁臣云々奉仕六代之帝謂景行天皇成務天皇仲哀天帝神功皇后應神天皇仁德天皇也

應神天皇御宇亦關白爲天下執柄歟壽三百八十餘歲後正衣冠壯束帶入美濃國云因幡山中不破山不知令死所之間人尋行見之竹葉懸札其銘云

法藏比丘豈異人乎彌陀如來卽我身是已上本地法身或示王臣之位或現主伴之神一體分身之利生權現同時之垂迹如大神應作大神比義朝臣也御在所十町許下參詣登山之路有王子大岩腹有口奥有水號硯

石也

武內宿禰之昔爲執柄之臣註天下之政應神天皇之御靈顯大神之坐爲神眷之位註當山參詣之人數其硯石硯水也王子者武內變身歟

石清水社記云武內者大菩薩寶前通夜人數交名每夜註之坐云々

白山權現事

八幡大菩薩之大祖權現也

第四十二代文武天皇大寶元年辛丑秦澄和上又云古志小大德神融生人間飛空中

第四十四代元正天皇養老年中越前國與加賀國之境有高岩一名白山有寶池湛綠水不常處已奇異也大師於此池澄心水誦念經咒奉備法味祈言定有佛神之居歟見色身之仰爰自洪波之心現大蛇之身大師言此是垂迹歟仰願可現本地其時阿彌陀如來色相耀波上次十一面觀世音菩薩光明徹水底然而言

我昔爲利日本國現天神第七代伊弉諾伊弉冊尊今住此峯欲利一切衆生云々

彌陀者陽神主本地也觀世音者陰神之本地也今白山權

汝下化衆生之矣累世契約不改當宮之守護殊新矣

右善神王事

高良玉垂大菩薩也

大帶姫靈行之昔異國降伏之刻地神第五代主鶴萱不葺
合尊現言我即明星天子之垂跡也有第三公子一月天子
之應也奉授付之爲大將軍可被遂敵州降伏之
本意也云々仍令賞此公子被授大臣官號藤大
臣連保大帶姫自龍宮城令得乾滿兩珠於新羅
之海擬令合戰之時爲此大臣之役被上下兩願令
降伏異國畢歸朝之後垂跡於神道顯名於後代
昔者征伐輔佐今者垂迹之助化也

八子神事

三十三箇之石爲御體和光同塵之驗爲堅固如位
田寺大菩薩神託者母堂之君產八王子之給故云八
幡^二八幡一義也兩所善神王菩薩八子神示現年紀抄
者無所見耳

御許山石體權現事

應神天皇御靈行之昔處々御修行之所也昔^{欽明天皇御宇云々}馬城
峰朝々令放光明之間長門國之守遙見之奏聞之
處即爲勅使重々尋來之時令住當山之麓大神朝

臣波知^{大神比}其壽八百歲申子細之間攀登見之處
如^{義分}翁申金色鷹於三柱靈石之上令飛渡之光明也
當山之下名曰足村者此光明如日足依照此村
也歸參令奏聞之有叡威而問群臣而言此神山如
何可名乎諸卿申云可爲御計云々帝取此語可
號御許山云々

又大菩薩爲人皇之時乘龍馬飛翔當山此馬之跡
多入石面二寸許見在矣今謂之龍蹄岩又大菩薩令
現足斑馬等之坐古今瑞馬棲之故名馬城峯耳



武内



北辰



三



二
巡拜記云
第一丈五
尺廣一丈
五尺許



右
善神王



左
善神王

殿畢

若宮 若姬 宇禮 久禮

四所權現御體者大神朝臣蘊磨同助雄奉造立之又御母龍神意猛之故預器械之坐也方有神敵朝敵之時大菩薩仰此神隨輕重令放八目流鏑而已古老傳云禮殿之北昔有戶自然不淨之輩上下向之時忽有罰之故止此戶今在南方

西脇殿事

天兒屋根尊春日大明神御在所也

天照太神之昔依素盞烏尊之惡事被閉籠天磐戶之間天下常闇人間失度之時天兒屋根尊心賢計妙取天香山五百箇真榊上枝著八坂瓊中枝著八咫鏡下枝著青和幣而祈申奏御神樂依人杖舞爰日神思食依何事吟遊哉少關磐戶令見出刻日光照耀人皆面白今人有感之時云面白者是也多力雄尊執御手奉引降中臣神忌部神引注連繩而申自今以後莫歸入矣日神相契天兒尾根尊而言於我子孫者必可爲中國主於卿子孫者可輔佐國家已上御神樂此時被始也人王代々之時其氏爲攝政神道明々之今者其靈令相副之坐神護之年示現于三笠山景雲年以後

造殿歟當山群鹿者此神之侍者也當社眷屬也

東脇殿之事

地神第五代鸕鷀尊不葺合尊住吉大明神之御在所也大帶姬靈行之昔異國降伏御祈之時天降之坐依此神之戮力討彼國之凶賊不忘昔契約令副合之應迹之坐弘仁年中以後造殿歟

北辰殿事

當山先住之神本地無双之誓也大菩薩御修行之時可令在所而奉守吾君之由令相語之間被領掌畢北斗七星之變作南州常住之刹生衆生之性者七星之種也機緣已厚于此界行度不移諸他方來於天宮已爲地主天降時代事非神者難知造舍事大菩薩御移當峯者神龜二年也其歲造舍歟

左善神王事

阿蘇大明神也

靈體三人爲兄弟令遊化十方自震旦歸日本之昔大兄留豐後國高知尾々々々明神是也次兄留肥後國阿蘇嶽々々々明神是也此明神告家弟八幡而言汝早到花都利成十善帝王之子可遂百王守護之誓我留當峯奉見繼高知尾大明神利可助

杵御禮盤上御座具其上草座每夜丑時奉_レ舉_二御格子_一年分僧奉_レ備_二香華等四方_一大菩薩令_レ向_二西之坐_一搆也

私云御本尊如何御修法如何

天平十三年公家被_レ奉_二納金字法華經_一寂勝王經金造塔等_二御本尊者釋迦多寶歟_一御修法者法華法歟

同三年天祿壬申神託

我加影波真言加持乃闕伽水仁可_レ寫志御振鈴之音承保之比御前檢校神日奉_レ聞_二之其後敬神人々間々奉_レ聞之云_二時代云_二人名不分明_一耳

若宮四所權現事

御靈行之時大帶姬遣_二方士於_一

志賀大明神

龍宮城而言汝之

所_レ妊者女子也我之所_レ妊者男子也可_レ成_二夫婦_一被_レ渡_二乾珠滿珠_一者可_レ令_レ降_二伏異國_一云々早得_二兩顆_一被_レ誅_二三韓_一畢大帶姬契約已間八幡御生成長之時成_二

夫婦_一生_二四子_一之坐_二謂若宮若姬宇禮久禮也_一此時自_二龍宮城_一被_レ獻_二黑色龍馬二疋_一今神馬毛是

第五十三代淳和天皇天長元年甲辰大神朝臣蘊麻呂母

酒井勝竹主女就_レ神而經_二七箇年_一又從八位下大神朝

臣真守家有門主女託_レ之而宣

吾波菱形宮西方荒垣之外隱居神會若不_二顯申_一波汝家爾

入_二神氣_一物會其時吾喻爲土波可_レ告者

思忘經_二年不_レ顯而後神氣入_二真守之家_一陰陽師川邊勝眞苗錄申云託宣之神向_二幸陽陰師_一言

吾禮其命乎取利死_二幸物會者_一

未_レ經_二幾年_一陰陽師頓死然後門主依_二託宣_一告_二蘊麻助雄等_一云

陰陽師不_レ用_二神之託宣_一而忽頓死汝不_レ見哉可_二早奉_一

_レ治_二彼神_一云

蘊麻申云取_二人之命_一之給何大神宮之邊可_二顯申_一即

神託

汝之所_レ申頗有_二道但大菩薩之大祭之後午月丑時吾靈

氣乎奉_二天勿_一令_レ告_二他人_一之年內爾靈氣顯不_レ狀可_レ見志者又申須以_二何因緣乎_一他處多之中仁顯_二大菩薩宮邊

爾_一之給哉即神託

大菩薩爲_二討_二隼人_一有_二行幸_一之時吾御伴爲_二將軍而

奉_レ仕幾彼隼人等乎打還利坐之時彼將軍器械皆授_二吾

氣給畢奴因_レ玆爲_二戰彼_一爾_二吾身老勞侍_一於門外_一爲_二立_一

第五十五代文德天皇仁壽二年壬申十二月造宮使正六位上藤原朝臣藤主典正六位上香山宿禰永貞奉_二造_一齋

宮領_レ又本公田之外治田悉爲_二不輸租田_一偏一爲_二神領國郡勿_レ附_レ諍

應_レ令_レ入_二封於豐前豐後日向國封_一返抄事

右三所大菩薩御封千四百卅餘戶也而依_二天平勝寶七歲二月十五日託宣_一以_二八百餘戶_一奉_レ返公家即充_二造宮造寺料_一所_レ遺封六百餘戶也追年三ヶ國司入封請_二宮返抄_一勘_二會公文_一其來已久若不_レ請_二返抄_一國司者捍_二公文_一有_レ限神事永勿_二牢籠_一

應_レ檢_二諸封鄉作田_一事

右封內之作田須國使不_レ可_二入勘_一然而追年國宰精宮返抄勘_二備公事者檢_一知封田作否並損否田若有_二否之者_一任_二先例_一令_二國宰_一殞_レ之令_レ請_二宮返抄_一若用_二冥酒鳥_一之人不可用是以清淨廉直之人宮使相共令_レ行_レ之已上三ヶ條在_二寬平四十九ヶ條官符文_一

被_レ加_二年分僧二人_一事

第六十一代朱雀天皇御宇平將門承平之年率_二十六萬人惡黨押_レ領東國_一令_二伺_一北闕_二藤井澄友天慶之曆以_二萬千人_一乘_二七百餘艘_一充_二滿西海道_一打_レ留上洛之船_二依_レ之公家以_二三歸五戒之力_一令_レ滅_二亡邪神_一可_レ奉_レ守_二帝皇_一之由仰_二天平神託_一奉_二爲第二殿比咩大

神第三殿大帶姬御戒師_一被_レ加_二一八年分僧_一官符文大政官符

應_レ加_二度豐前國八幡宮年分者二人_一事

右從三位守大納言兼右近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣實賴宣奉_レ勅件年分者宜_二加度_一者府宜承知於_二豐前國彌勒寺_一每年試度荷_レ奉行

右少辨正五位下兼內藏頭源朝臣右大史正六位上大達宿禰

天慶三年八月廿七日

私云依_二大菩薩御得戒之力_一滅_二亡像末邪神_一奉_レ延_二天帝御命_一者可_レ依_二氏人等讀經持戒_一之由神託分明也若不_レ讀經_二不_レ持戒_一者尊神得戒不定也若然者不_レ奉_レ延_二天帝御命_一之由大罪如何況神道已御持戒也凡夫盡_レ仰_二神託_一受戒_上哉

八幡大菩薩御行法事

第六十四代圓融院天祿元年庚午神託以_二眞言_一天淨_二道場_一愛以爲_二和光之栖_一率者大同二年御受法之後帝王一十四代年序百六十餘年但施_二自性壇之益_一未_レ顯_二大悲壇之行_一依_二此神託_一早令_二奏聞_一一夏九旬之間第一齋殿外殿西間莊方壇四方關伽香爐四角寶瓶立御鈴

傳教大師參宮講經時以神衣被進事

桓武天皇延曆廿三年大師承_二綸言_一入_レ唐參_二當宮_一令_二祈申_一渡_レ海在_レ唐求法如_レ願同廿四年婦朝之處雖有_二洋中之風波_一神力之故更無_二海上之煩事_一安穩着岸之後弘仁五年爲_レ遂_二渡海之願_一下_二向西國之時奉_二爲八幡大神於_二神宮寺_一自講_二八軸法華_一乃開講竟且神託

我禮不_レ聞_二法音_一志天久曆_二歲月_一平多幸值_二遇和尙_一天仰

聞_二聖教_一多兼又爲_レ我仁修_二種々功德_一須致_二誠隨喜_一須

何足_レ謝_二德_一良矣苟有_二我所_一授法衣_一利者即託宜主自

開_二齋殿_一手捧_二紫衣_一御袈裟七條一帖奉_二上和尙_一大悲

力故垂_二納受_一是時宮司并禰宜祝等各嘆云元來不_レ見

不_レ聞如_レ是奇事_二大神所_一施法衣今在_二比叡山_一前唐院云々

第三御殿之事

大帶姬_{人皇十五代神功皇后御靈}

第五十二代嵯峨天皇弘仁十一年神託

吾波神功皇后大帶姬_{奈利奉_二副_一天如_二昔今_一毛同心可_レ利_二益衆生_一志者}

同十四年官荷云

大宰府弘仁十四年癸卯四月十四日荷

傳可_レ新_二造八幡大菩薩宮大帶姬細殿式_一字_二已上_一

第十七代仁德天皇御靈事

平安城之邊平野社之神也所_レ々記仁德天皇御靈者宇佐宮南樓上_二云々_一

私云如_二當時_一者無_二壯嚴_一無_二御體_一亦無_二祭禮_一是則

大道天然之剎生歟自性法身之理宮歟所以帝位之昔

憐_二民之故於_二三年之間_一止_二萬民之役_一在_二高臺_一詠_二村里_一言_二高屋_一爾登_二天見禮波烟_一立津民農竈門波仁義波

飛爾氣利

於_二當宮_一者居_二高樓_一而顯_二覺月之昇_一上界之雲_二耀_一民

烟_上於_二彼社_一者在_二平地_一而表_二和光之同_一下界之塵_二照_一中

民烟_上也凡厥王者之政靈神之道重_二々生_一濟度方便_一也

高樓神居事依_二神託_一歟未_レ檢也

本云建武二年_{乙亥}十一月三日書畢右_筆宇佐重榮

神領可_レ全事

第五十九代宇多天皇寬平元年庚戌

神託後百三十五年

官荷

應_レ先_二大菩薩御領治田並桑蘭等_一事

右檢_二御託宣文_一傳_二天_一勝寶七_二諸國有_二二種田_一租田地子

田皆有_二其員_一私略者託宣之旨就_レ中自_レ今以後爲_レ先_二

如_レ前

宇佐八幡宮緣起下卷

小倉山歸坐事

光仁天皇寶龜十年己未神託

我禮前^幾坐須留此菱形宮^{仁志}波神乃名始天顯禮位報博^高奈^利是以願住^世此舊宮^我看^身身冑^鎧奉^守護朝廷及國家^哀幸者

右大臣宣用^神社祝^仰府令^{作者}云々府依^荷旨^自寶龜十一年庚申^到天應元年辛酉^{兩年之中}菱形宮被^造之第五十代桓武天皇延曆元年壬戌^自大尾社^如本奉^歸移^矣

御修正事

桓武天皇延曆六年丁卯神託

槌^鐘天諸僧入堂之時波堂乃後門^爾跪^{天地}爾候志入堂乃後波佛前乃露地^爾敷^坐具^天三ヶ夜乃間波奉^祈護天帝乎^幸者^矣

彌勒寺御入堂事

同天皇同十二年癸酉神託

神我禮^{九旬}每日^{一夏}彌勒寺^爾入堂須有^御尻懸石^利勿^人登^禮者

件石御堂正面之間^{三丈}去古者傳云入^地底^{七尺}自^地涌出石云々

驚^此乃度靈告^依天平神託^{一夏}九旬每夜丑時奉^上御格子^又開^{西中門}是則大菩薩御參堂之儀式也此間御寺長講僧一人參宮奉^迎於神^之儀式也又三人官僧於^申^中之^誤殿^讀法華懺法^唱大自在菩薩之寶號^矣年分僧於^豆齋^奉供^香花^又申時爲^申還御^同三僧等參^御寺^行例時歸^社壇^讀懺法^{之後}奉^下御格子^入御之儀式也

弘法大師參宮法樂時御受法事

桓武天皇延曆廿三年^{甲申}大師承^綸言^被入唐^望乘船之期^於高雄寺^爲仰^玄應^被致^丹祈^大菩薩納^受心中^示現其前御居長三尺三寸許僧形也着^香染御衣^以爾時奇異^爲末代効驗^互延^利生御手^被寫^護國御形^忝哉神筆之功已以勝^生身妙體^奇哉能書之德永奉^留入空御影^遂使在^唐施^威求^法如^願大同二年丁亥歸朝爲^報賽^參宮專以^所學法義^奉備^尊神^法樂令^感密法有^御受法^矣

宇佐八幡宮緣起下卷

目錄

- | | |
|--------------|------------------------------------|
| 一 小倉山歸坐事 | 一 御修正事 |
| 一 彌勒寺御入堂事 | 一 弘法大師參宮事 <small>御受
法事</small> |
| 一 傳教大師參宮御神衣事 | |
| 一 第三御殿事 | 一 仁德天皇御靈事 |
| 一 神領可全事 | 一 被加年分僧二人事 |
| 一 大菩薩御行法事 | 一 若宮四所事 |
| 一 西脇殿事 | 一 東脇殿事 |
| 一 北辰殿 | 一 左善神王事 |
| 一 右善神王事 | 一 八子神事 |
| 一 石體權現事 | 一 武內神事 |
| 一 白山權現事 | 一 三鉢靈水事 |

神道之驗起於天皇叡慮起於法王信心而已

東大寺鎮守八幡宮者是時神宮也

御神領事

聖武太上天皇天平勝寶二年庚寅二月廿九日御奉寄帳如御筆狀者

捧上件物爲有勤行神事等遠限日月窮未來際敬納彼社爲神稅令法久住拔濟衆生天下太平人民快樂法界有情共成佛道渡誓其後代有無道之主邪賊之臣若犯用破障不令勤行佛神事者是人必得破辱十方三世諸佛菩薩等之罪當落大地獄永無出期若不犯觸致勤行者世々紹隆子孫共出塵域早登覺岸取大底細々御誓狀具御本歟類聚國史第五云二年天平勝寶二月戊子奉充一品八幡大神封八百戶前四百廿戶今加三百八十戶位田八十町已上此神願井進宮民三百十三人散在三國豐前豐後日向七郡內又女稱宜大神朝臣杜賣食封四十戶位田一百廿町主神田磨給外從五位下仍以祝神主可爲大宮司之由被勅定畢

今度御奉寄被治定三國七郡之條往古子細及于天聽歟神道令然歟大菩薩御靈行之昔五人同行相共爲

利益衆生佛法修行豐前國馬城峯之連峯豐後國六鄉山之連山靈瑞留所々依今而見古効驗已重々依古而見今奇特亦多々就中豐葦原之中底豐前國之本宮者天地相之山神王道交之宮也又人王第一神武天皇生年十四歲昇帝釋宮受執印鑑還來日向蘇於峯十五歲立皇太子冬十月率諸皇子自日向國住宇佐郡之時宇佐津彥宇佐津媛二人於宇佐河上造一柱騰宮依獻大饗恭賜珍寶天王自斯所趣諸國降伏荒振神達被鎮一天四海生年五十二歲御即位治天下春秋七十六年拔除賊徒一千一百二十頭目當郡令進發之坐也又日向之國者日本之表也地神第一第二兩代主猶還于天不降住地第三第四五三代一百七十九萬二千四百七十六年之主山陵在日向國又若宮四所權現於斯國而所生撰定三國奉獻七郡立方以深以誤而已

有勅使登壇受戒

私云忝哉年分僧爲御戒師又給神字爲其名而已

彌勒寺領事 正文可_レ在寺務之許

聖武太上天皇天平感寶元年己丑六月廿三日御奉寄帳

如御筆狀者

捧上件物一切大小乘經律論等必爲轉讀講說遠限

日月窮未來際敬納彼寺永爲學分令法久住拔

濟群類天下太平兆民快樂法界有情共成佛道

復誓其後代不道之主邪賤之臣若犯用破障不令勤

行佛神事者是人必得十方三世諸佛菩薩等之罪當

落大地獄永元出期若不犯觸敬致勤行者世々

累福紹隆子孫共出塵域早登覺岸取大底細々御

誓狀具御本歟

東大寺供養時大菩薩御上洛事

孝謙天皇天平勝寶元年己丑十一月十九日己丑於內裏一七

歲童子神託

神吾禮向京波牟者

太上天皇同廿四日甲寅遣參議從四位上石川朝臣年

足十一月十九日○按十一月以下六字衍歟侍從々五位下藤原朝臣魚

名等以爲迎神使路次諸國差發兵士一百人以上

前後駢除又所歷之國禁斷殺生其從人供給不_レ用

酒食道路清拂不_レ令汗穢矣神與禰宜大神朝臣杜

女同乘神與田麿乘神驛十二月又遣六衛舍人各

廿人奉迎八幡大神於平群郡是日入京即於宮南梨

原宮造新殿以爲神宮請僧四十口悔過七日丁亥

大神禰宜尼大神朝臣杜女其與紫色拜東大寺天皇太上天

皇皇太后同亦行幸是日百官及諸氏人等咸會於寺

會僧五千禮佛讀經作大唐渤海吳樂五節舞久米舞

因奉大神一品比咩二品左大臣橘宿禰諸兄奉詔白

神曰

天皇我御命爾坐申賜土申久去辰年河內國大縣郡乃知識

寺爾坐盧舍那佛違禮奉久則朕毛欲奉造思_止得不爲之

間爾豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閑勅久神

我天神地祇乎率伊左奈比天必成奉天事立_レ有銅湯

乎水土成我身遠草木土爾交豆障事無久奈佐牟土勅賜奈我

成奴禮歡美貴美念食須然猶止事不_レ得爲天恐家禮御冠

獻事乎恐美恐毛申賜久土申

尼社女授從四位下主神大神朝臣田麿從五位下已上

奉爲大菩薩法樂被_レ行萬僧會之時天下太平之

文字現于鳳闕海內保全之瑞相見于佛庭佛法之効

聖武天皇彌有御感悅又爲買同佛料之黃金故遣使於大唐之間亦進朝使於當宮被祈申往還平安之由時神託

所求乃黃金波將仁出自此土陪志使乎勿遣大唐禮者

同廿一年天平丑黃金出部內小田郡正月陸奥守百濟敬福即進九百兩賞敬福授從三位皇帝感神驗其上分三百二十兩被奉神宮一件勅使四月六日參宮奉進黃金時大菩薩手自請取之被納香爐宮也又無水金佛像莊嚴難治之間被祈申之處自近江國比叡山之側水金自然流出也其上分又三升寺記云被獻同彌勒寺奉納寶藏而已

大菩薩御受戒師度者事

聖武天皇同廿年天平戊子九月一日神託大神吾禮波普波第十六代乃帝王今波百王守護乃誓神先仁波獨率數萬之軍兵志口氏隼人乎殺害氏大隅薩摩乎計後仁波此等乃生類乎爲救爾三歸五戒授牟思布仍每年仁一人度者乎儲豆號二年分且吾加神乃名乎授計令祇候社氏氏人等仁法華最勝乎習志三歸五戒乎持世氏每月六齋日辰時仁三歸五戒乎傳受牟歸依三寶持戒乃力爾依氏後像

末乃邪神乎滅亡志天皇乃御命乎守護奉其牟毛者

依此神託被下官府云

太政官符豐前國八幡神々戶人出家事右奉今月廿三日勅一件神戶人每年一人宜令得度入彼國彌勒寺上

天平感寶元年六月廿三日

第四十六代孝謙天皇元年依神託被進度者官符云

太政官符太宰府

應令豐前國八幡戶人每年一人度者宜得度入彼國彌勒寺者

右彼太宰府去天平勝寶元年七月六日符僞被太政官去六月二十三日符僞今月二十三日奉勅豐前國八幡戶人每年一人度者宜令得度入彼國彌勒寺符宜承知准勅施行者符到奉行

參議從三位左大辨勘解由長官

藤原朝臣正五位下左大史周防權守惟宗朝臣

天平勝寶元年七月廿三日

日本國中勅定受戒者當宮爲根本其後唐土楊州龍興寺鑒眞和尚來朝天平勝寶六年東大寺被立戒壇同七年十月太宰府觀世音寺被立戒壇宇佐宮年分僧

聖武天皇同九年天平_丑四月七日神託

我禮當_レ來_レ導師彌勒慈尊乎_一欲_レ崇布遷_二立伽藍_一奉_二安

慈尊_一利一夏九旬乃間每月奉_レ拜_二慈尊_一幸者依_二此神

託_一奏_二太政官_一同十年五月十五日從_二日足南元江_一

十三移來建_二立之_一今彌勒寺金堂等是也

聖武天皇十三年天平依_二大軍事_一馳遣_二勅使_一奉_レ進_二御

封廿戶御神寶及造寺度僧等_一矣

同十六年天平八月十四日爾爲_レ行_二放生會_一合出_二和間

濱_一之坐御行路次御寺後門順道也而虛空有_レ聲言

我加道場之邊口加可_レ通_二神輿_一幾御堂乃影_{阿耶}者御聲

自_二青天_一而降神語變而紫雲落爲_レ貽_二瑞相_一之不變_二成

石不_レ朽依顯_二神威_一之常住_一在_レ今知_レ古矣御影石者

是也御寺之東北之角柱去_二五丈三尺_一有_レ之此石長三

尺三寸廣一尺二寸入_レ底不_レ知_レ之每年七月十五日有

祭矣

同十八年天平御祈禱有_レ驗奉_レ進_二御位三位御封四百

戶水田五十町度僧五十口_一矣

東大寺成就菩薩神力事

聖武天皇廣利_二三界_一之生爲_レ興_二八宗_一之教欲_レ造_二大

伽藍并本尊_一行基菩薩爲_二勅使_一捧_二佛舍利一粒_一遣_二伊

勢太神宮_一而申志賜久若夫相_二叶神慮_一者必示_二其瑞奉

知_レ垂迹之本地_一將_二崇_一伽藍之本佛_一爰奉_レ勅於_二皇大

神宮之南門大杉本_一七日七夜祈念之處開_二神殿_一告曰

實相眞如之日輪破_二生死長夜之暗_一本有常住之月輪

拂_二無明煩惱之雲_一吾逢_二難_一遇之大願_一如_二暗夜得_一燈

冥_二難_一受之寶珠若_二渡海得_一船依_二其名福_一將_レ理_二飯高

郡_一云々行基菩薩拭_二感淚_一奉_二納佛舍利_一則奏_二神宣_一之

趣_二天皇大以_一歡悅雖_レ被_二思食立_一御願_二猶_一地未_二分

明_一已而

同天平十四年_壬十一月三日左大臣正三位橘宿禰諸兄

爲_二勅使_一重被_二祈申_一之處勅使歸參之夜天皇御靈夢

云

日輪大日如來本地盧舍那佛也衆生悟_二此理_一將_レ歸_二佛

法_一云々卽現_二御體_一放_二光明_一矣

然間於_二御本尊_一者被_二治定_一畢於_二御願成就_一者以可

奉_レ憑_二宇佐_一之由天平十九年_丁遣_二勅使於_一當宮_一可

成_二就此願_一旨於_二大菩薩御前_一捧_二宣命_一令_二祈申_一之

時神勅

吾禮護_二國家_一_{留古}是禮猶志楯鋒_{乃古}唱_二奉神祇_一且共爾

爲_二知識_一且必奉_レ成_二皇帝之願養_一者

同五年^{癸酉}遷宮之時被_レ造_二宮

同十三年^{辛巳}宮府云大菩薩并比咩大御神裝束奉_レ改_二換之_一已上

長御驗御枕事

聖武天皇同五年^{天平癸酉}大神朝臣田麻呂思惟大御神有_二暫時化現之御體_一無_二未來尊崇之色_一余之父諸男朝臣先年於_二野仲大貞池_一奉行顯_二御枕_一爲_二神與之御驗_一今我祈_二申長御驗_一欲_レ爲_二來際尊崇_一故致_レ信於_二本宮_一運_二步於_二彼池_一難行苦行精進潔齋摧_二一心_一經_二百日_一之處大虛有_レ聲而宣

我昔此薦乎爲_二御枕_一且發_二百王守護之誓願_一^{志垂}跡於神道流_レ以此薦備_二吾社之驗_一天致_二尊崇_一者可_レ施_二神德_一^{利者}

此是前之神勅之趣也忝哉非_二當爲_二百王守護之御誓_一兼又爲_二一天擁護之御驗_一守_二先例_一造_二新舍_一名_二之鵜羽屋田麿_一七箇日精進不_レ交_二人倫_一三々日用意令_レ奉_レ裏_二莊御長徑_一任_二舊記_一而已

本迹御體如在事

宇佐八幡大神者往古如來法身薩埵也如_二諸社例_一不可_二定_一也以_二本迹御體之幽_一爲_二宗廟莊嚴之死_一者

精神不可_レ得_レ見但以_二生時之居_一立_二宮家象貌_一之耳_巳孝經云宗者尊也廟者貌也父母既歿宅非_二其靈_一於_レ之祭祀謂_二之尊貌_一_巳故百王以_二當宮_一爲_二宗廟_一八幡以_二當社_一爲_二御體_一也

桓武天皇延曆二年神託云

我波以_二慈悲_一^{天爲}體須寺務社務乃司有_二非法_一^{平時者}可_レ歸_二寂光土_一^{志我體者有毛也}空毛以_二正道_一^{天爲}體已上

有者垂迹示現令_レ奉_二拜之廟社也空本地幽玄不_レ奉_一見之報體也又有者衆生利益之應體十界暫時之形聲也又空者真空冥寂之靈神虛空同體之妙身皆正道也然以奉_レ顯_二御枕_一之屋號_二鵜羽屋_一之御枕者御體之料不_レ可_二徒設_一也准望_レ之而申_二御體_一歟御體之幽而奉_二敬信_一之故被_レ致_二如在之祭_一僉蒙_二如意之益_一神服者奉_レ慕_二昔帝位之調進_一也御枕者奉_レ仰令_二靈託_一之御驗也依_レ之以_二微密_一爲_二御體_一或以_二宗廟_一爲_二御貌_一歟如_二春秋之說_一者大廟室懷心更作云々昔依_二破壞_一而臨時修理可_レ依_二神託_一而年限造營是乃百王孝道之所_レ顯八幡尊貌之可_レ全之故也寂光土者衆生之心底究竟之佛土也

同寺移來建立事

公家祈請於宇佐宮其禰宜辛島勝波豆米相奉神軍一行征彼國討平其敵大御神託宜曰

合戰之間多致殺生宜修放生會者諸國放生會始自此時矣

政事要略第廿三日 舊記云

養老四年豐前守宇努首男人將軍_{土志}大御神於奉請天

大隅日向兩國向拒隼人乎伐殺幾大神託宜

吾此隼人多殺津留報仁每年爾放生會奉仕_{留陪}依宇佐

宮託宣始流度諸國放生會事云々

小倉山宮事

第一御殿

八幡大菩薩聖武天皇神龜元年_{甲子}立勅使被祈申云齋殿如何可奉造哉爾時神託我禮以大慈悲天爲寶以柔_レ和忍辱天爲衣以諸法空天爲座須者

此神託者誦法華文之坐也

勅使歸參奏申此事豐前守男人椽從六位下藤井連毛人等奉勅小倉山奉造大神宮祝大神朝臣諸男同二年神龜_{乙丑}正月廿七日自小山田社奉移神道令致祭祀豐前守進御戶代田貳町七反

造彌勒寺事

尊神小倉山御移之日何事歟之由奉仰之處神託

神吾禮爲導未來惡世衆生爾以藥師彌勒二佛天爲我本尊須理趣分金剛般若光明真言陀羅尼所念呂奈利者

神託之趣奏聞之處令達上聞勅使下向菱形宮之東方日足林之西被造御寺奉安佛像號彌勒禪院

初之別當法蓮和尚云々昔於彥山般若岩屋被行如意珠之時_{大長大寶年歟}仙翁來給而言被行出之者可給我

云々已被行出畢重々問答之後仙翁言我是八幡也垂迹時宇佐郡可建彌勒寺可爲此寺別當之由依

御約束也同宮辰巳之方南元江林被造御堂奉安本尊號藥師勝恩寺大神朝臣比義之建立云々

勅使參宮始事

聖武天皇天平二年大神朝臣田麻呂奉申顯神德同三年正月廿七日捧神服以下神寶參宮自爾以來三年一度有限矣

第二御殿事

比咩大神_{人皇第一神武天皇御母玉依姬之御息也}聖武天皇同三年天平神託

我波比咩大神奈利大菩薩奉奉副天奉助化道平者

小山田社部

十々年續第二
養老七神龜元二

元正天皇靈龜二年

辰大

神朝臣諸男辛島勝波豆米等小

倉山之坤小山田之林奉

造神殿令致祭祀

元正天皇養老三年

未癸

大隅日向兩國隼人等襲來擬打

傾日本國之間同四年

甲申

公家被祈申當宮之時神託

我禮行而可降伏志者

豐前守正六位上宇努首男人奉宮府令造進神與

之時白馬自然飛來令相副神與于今有神馬之是

也諸男朝臣彌信仰倩以何物爲御驗可奉乘神

與哉豐前國下毛郡野仲之勝境林間之寶池者大御神

修行之昔令涌出之水也參行彼所祈申此事之時

七月之天初午之日雲波滿池寄渚心中致誠之時雲

外有聲而宜

我禮昔此薦爲枕發百王守護之誓幾百王守護者可

降伏凶賊也者

依之奉薦此薦令造別屋

號御產屋

七日參籠或二七

心收口奉異御枕御長一尺許御徑三寸人爭相計神

令然也

私云彼職并御寸法有大神正氏于今不絕云々

御驗事重々有深心歎可尋之哉

豐前守將軍奉請大御神福宜辛島勝波豆米爲大御

神之御杖立御前行幸彼兩國三ヶ年之間七ヶ所之

城

奴久良爲原神野牛屎志
曾利乃石城加牟比賣城

同七年於彼國神託

我今坐須留小山田社波其地狹隘志我禮移菱形山

願給布者

大御神從彼兩國歸坐本社小山田林畢將軍男人椽

從六位下藤井連毛人依此異貴威力奉進之五煙神

戶又進御戶代田一町徑者等神力効驗之由奏聞公

家聖感無極禰宜給勳十等

放生會事

第四十五代聖武天皇神龜元年甲子神託我禮此隼人等多

久殺却須流報仁波年別爾二度放生會於奉仕此年者

又云

一萬度放生乃事畢眷屬引率志天淨利爾送其年者大菩

薩宜此事行此會之坐四人同行法蓮華嚴體能廿五菩薩

等觀音勢至面々各々相互舞樂贖懸魚於網罟之中

救窮獸於弓矢之下此奇瑞及天聽天平勝實二年庚

寅被獻左右舞樂畢每佛神事于今被行是也扶桑略

記第二云養老四年九月有征夷事大隅日向兩國亂逆

郡本宮宇佐郡之三宇天地人三義也玉篇云宇于甫切室也四方上下也

司馬季云宇者天能覆萬物名之爲宇云宇即天也垂

象而明也佐子賀反亦輔佐之義佐即人也有貞臣之忠

矣郡求溫反君之邑也郡字國也郡即地也宇佐宮之後者宮即

地也一人叙慮通而成王字也道德經云昔之得一者

昔往也一元天得一以清言天得一故能地得一以寧言地得一故

能安靜不動靜也神得一以靈言神得一故能一即元氣者元謂天

地之始也氣謂萬物之命也皆受氣於天各得反生也

經文云一生二一陰一陽也二生三陰陽生和清濁之氣分爲天地人也三生萬

物天地人共生萬物也宇佐郡三字各生萬物孔子云一

貫二云々王仲舒云三書而通其中謂之王云々橫三

點者天地人豎一點者神德之通橫豎通而王也或稱通

三之君或稱得一之神依得一之神有通三之君

能通者神也所通者君也是王奉敬神々奉字王之竺

別宮之地離宮神設雖有八幡之號不可有通三

之義也法依地而弘夫誠乎此言耳神誓地而住尤泰

乎當宮焉哉

日本書紀云

欽明天皇三十二年辛卯八幡大明神顯於筑紫矣義同

前云々

御社初事

應居瀨社五箇年和銅五六七年靈龜元二年

八幡大菩薩

第四十三代元明天皇和銅元年戊申豐前國宇佐郡內大河

流今號三字西岸有勝地東岸有松木變形瑞多化鷹

顯瑞渡瀨而遊此地飛空而居彼松是大御神之

御心荒畏坐也往還之養遠近之輩五人行即三人殺十人

行即五人殺于時大神比義又來與辛島勝乙目兩人

絕殺三ヶ年精進一千日至誠祈申和銅三年不顯其

體只以靈音夜來而言

我禮成靈神旦以後飛翔虛空流無栖息志其心荒此

是奉前顯大御神也自和銅三年庚戌迄同五年壬

子依神託以勅定令造神殿勤仕神事應居瀨

社也辛嶋勝乙目爲祝職同勝意布賣爲是稱宜乙目

之妹黑比賣采女并御戶代田貳反進之次辛島勝波豆

米爲禰宜矣

一云於夜來之告者對大神春麻呂之聽此者比義朝臣之子也云々

第四十四代元正天皇靈龜二年丙辰詔宣此所波路頭爾志

往還人乃無禮利尤此等無禮波甚慙志小山田乃林爾移住

度世平願給布者

崩御事

治天_(下ノ字)四十年庚午二月十五日春秋百十一歲
(落歟)
御入滅葬_(河內國志紀郡惠我藻伏陵)
元年庚寅相_(當晉主武帝泰始五年)同元年如來滅後一千二百一十九年帝身爲_レ凡爲_レ聖御靈爲_レ雲爲_レ雨矣_レ今願_レ古崩御之後爲_レ靈行_レ現_レ神道_レ帝王一十三代夏曆三百廿二年之間本地法身和光同塵十界形聲十方示現爲_レ不可思議_レ者也

初顯神道坐事

第三十代欽明天皇御宇廿九年戊子筑紫豐前國宇佐郡菱形池之畔小倉山之邊有_二鍛冶之翁_一帶_二奇異之瑞_一爲_二一身_一現_二八頭_一人聞_レ之爲_二實見_一五行則三人死十人行則五人死_{他人不死於人}失_レ心而死_レ故成_二恐怖_一無_二行人_一於是有_二大神比義者_一行而見_レ之更無_レ人但金色之鷹在_二林上_一致_二丹祈之誠_一問_二根本_一云誰之成_レ變乎君之所爲歟忽化_二金色之鳩_一飛來居_二袂上_一爰知神變可_レ利_二人中_一然問此義斷_二五穀_一經_二三年_一之後同天皇三十二年辛卯二月十日癸卯捧_レ幣傾_レ首申若於_レ爲_レ神者可_レ顯_二我前_一此語未_レ說現_二三歲少兒於竹葉上_一而宣辛國乃城爾始天天_二降八流之幡_一吾者日本神土成_レ禮_二一切衆生_一左毛右毛任_レ心_多釋迦菩薩之化身一切衆生濟度_セ牟土

念天神道土現留也我者是禮日本八皇第十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也我名於波曰_二護國靈驗威力神通大自在王菩薩_一布國々所々仁垂_レ迹_二於神道_一留者斯後者大御神與比義常_二物語_一シ玉_二非_一余人之所_レ聞即令_二奏聞_一畢雖_二有_一尊崇_二未_一被_二造社_一以_二比義_一任_二祝職_一公家有_二御願_一之時教_二比義_一爲_二神舁_一比義向_二神山_一捧_二幣帛_一奉_二神語_一申_二勅答_一夫比義者不_レ知_二何國之人_一不_レ辨_二誰家之子_一來_二于自然長生之道_一衡天山高出_二于靈威神妙之底_一氣宇淵深其形似_二仙翁_一其首戴_二靈帽_一莫_二人以測_一之世以名_二之大含_一玄冥之神_二只比_一凡靈之義_{或作_二岐字_一}借_二聲_一不_レ可_二直_一喚_二之故也_一故以_二大神_一可_レ爲_レ姓以_二比義_一可_レ爲_レ名之由有_二群議_一被_二勅定_一畢

大神之昔_二三國_一
天竺震旦本朝
靈行之間常隨_二給仕_一或表_二五百余歲之齒_一或爲_二八百餘歲之身_一今不_レ詳_二出歿前後_一不_レ辨_二冥助去來_一何測_二壽命長短_一爭知_二凡聖同異_一只以_二方便之義_一暫表_二各別色_一國々靈行處々靈瑞或依_二神託之文_一或依_二比義之語_一知_二往々之跡造_一所々之社而已

豐前國宇佐郡本宮事

八幡大菩薩御撰定難_レ測者哉
私云大菩薩始者日向辛國城天降今者豐前國宇佐

宇佐八幡宮緣起上卷

帝位御事

八幡大菩薩者人王第十六代應神天皇御靈也御父第十四代仲哀天皇御母第十五代神功皇后也皇子在胎之昔仲哀天皇之時有熊襲之者云々不奉隨王命之間集群臣擬令討之處神託皇后而言勿憶熊襲之不隨有財寶國謂之新羅崇祭我之者不塗血於刀自降飯云云天皇登高岡上遙見浪路有雲更无國天皇言何神欺朕耶神亦言

不信吾語者不可得之也但皇后所妊之皇子必可得其財國也云々國王不隨神教九年庚辰二月五日丁未甚痛於櫓日宮崩御天下歎也辛巳十月二日卅二歲御即位女帝之始也遣吉備臣祖鴨別被討熊襲國之間即奉隨希力矢命畢小山田邑造齋殿請曰所崇之神何神乎口聞其名及七日七夜答託伊勢國鈴幸宮也云々如法令祭奉隨神教爲得財國年爲女人之身令成男形着甲冑帶武具引具

軍兵則渡異國當產刀之期取二之石挾御腰祈言事竟歸之日於茲土可產云々其石于今在筑前國怡土郡路邊謂之鎮懷石矣往還之人下馬拜過天皇兼被尋御產所同國那珂郡有里名蚊田村有樹云槐木武內大臣申於樹名有子細彼樹神亦鬼神也賢人之精靈謂之鬼聖人之精靈謂之神然則賢王聖人御誕生之地彼定置畢又王子在胎內之時天神地祇奉授三韓之條誠神也妙也天皇打取三韓令歸吾國冬十二月被定置之御產所被造內裏同十四日辛卯被懸御手於彼槐枝之時王子御誕生此時自龍宮城獻御初衣其長八尺等是白幡御襖八枚武內懷奉拜觀御安生御襖腕其形如輶是者天皇赴異國之時令假雄裝之刻依著於輶令宵此云而在胎內御腕上者也上古輶謂之褒武多故應神天皇亦申譽田天皇者是也生年四歲之時東宮七十一歲之時正月一日丁亥御即位御宇四十一年天下之政賞罰之道不思議爲事而已

釋迦如來之昔御誕生之時御母摩耶夫人四月八日入伽比羅城於藍毘尼國舉右御手口牽口無憂樹枝之時悉達太子御誕生矣彼不思議也此不思議也

宇佐八幡宮緣起上卷

目錄

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------|
| 一 帝位御事 | 一 崩御事 |
| 一 初顯 ^三 神道 ^一 坐事 | 一 豐前國 ^{宇佐郡} 本宮事 |
| 一 御社初事 ^{瀬社事} | 一 小山田社部 |
| 一 放生會事 | 一 小倉山宮事 |
| 一 造彌勒寺事 | 一 勅使參宮始事 |
| 一 第二御殿事 | 一 長御驗御枕事 |
| 一 本跡御體如在事 | 一 同寺移來造立事 |
| 一 東大寺成就大菩薩神力事 | |
| 一 大菩薩御受戒師度者事 | |
| 一 彌勒寺領事 | |
| 一 東大寺供養時大菩薩御上洛事 | |
| 一 御神領事 | |

君はいつもの浦めしの世や

此歌承久の後鳥羽院へ奉りける

いかにしてをはすて山の月よりも

読人不知

出雲の浦に照まさるらん

杵築に詣ける比素鷲の宮にて

此神のはしめてよめる言の葉を

細川玄旨

かそふる歌や手向成らん

發句

卯の花や神の井垣のいふかつら

玄旨

國造より所望にて

ほとゝきす聲の行方や浦の波

玄旨

寛永の比六月廿一日隱岐院の陵へ勅使として水

無瀬氏成卿渡り給ひける時大社に詣給ひて

殊さらに此宮居をや仰かまし

今はあつまに神無月哉

そのかみや雲もけしきの空に見て

數さためけんやまことこの葉

寛永の比ある人八雲立の神詠三十一文字を句の

かしらに置人々に歌よませ大社に奉納し侍りけ

る一卷のうち

早春霞

巻頭

やはらくる霞のみをも紅の

東山長嘯

簸の川上に今や立らし

寄神祇祝

巻軸

おしなへて仰く心を敷嶋の

藤原爲景

道にへたてぬいつも八重垣

正徳壬辰三月大社上官千家正延來予之家請

神道之教依深志傳授之故問大社事跡出

一冊以述其意喜而寫之者也

四月日

光海翁

いのちかあやな戀つゝあらむ

出雲國名所歌合

いつも山今宵の月のさやけきは

源兼經

雪のあしたの心地こそすれ

不老山

年経ても老せぬ山の松の風

作者不詳

幾萬代の數に吹らん

題不老山

鴈もまで同じ常世の春の月

宗養

素鷺川

万葉

眞菅よきそかの河原に鳴千鳥

まなし我せこわかこふらくは

夫木

萬代といはふ御祓は眞菅よき

後徳大寺

そかの河原の夕くれの空

新葉

眞菅よきそかの河風ふけぬとや

冷泉入道

ゑは鳴千鳥聲そさひしき

ぬれつゝやそかの河原の五月雨に 三條院讀岐

水のみかさの眞菅かるらむ

千鳥鳴そかの河風身に入て

頼阿

眞菅かた敷明す夜半哉

降そむるそかの河原の五月雨に

藤原隆祐

また水浅し眞菅からなん

今宵誰眞菅片敷あかすらん

後京極

そかの河原に千鳥鳴なり

出雲森

ちはやふるいつもの森に神酒居て

仲實

ねきそかけつるもみち散すな

出雲川

出雲の杵築の宮に詣て出雲川の邊にて讀る

いつも川ふるき湊を尋れは

寂然

はるかに傳ふ和歌の浦なみ

出雲川そこのみくつの數さへも

中務

見えこそわたれ夜半の月かけ

出雲浦

神のます出雲のうらにやく鹽の

後九條

煙ややかて八雲なるらん

川上の出雲の浦のいつもく

赤人

きませ我せこ絶すまつはた

たのみこし八雲の道も絶はてぬ

家隆

西百步水折而南百步間有_二菰蒲_一覆_レ焉有_二鳧鷖_一棲_レ焉其西幅員至_二數十百間_一閑曠遶_レ宜_二中秋觀月_一所謂湊川在_二乙見川之南_一形勢似_二乙見_一廣袤過_レ之其所謂鷺浦在_二社之北一里_一山勢四圍如_二環而北缺_一十一_一海潮自_二缺口_一入匯_二環中_一激澗可_レ愛缺口有_二島適禦_一狂濤衝突_一環堵百餘釣漁採蘇若_二與_一世相忘_一所謂出雲浦在_二鶴山之西南_一西之岨巖錯出南之白砂浩渺而波恬焉則羅紋繡縠濤驚_レ焉則鳴雷噴_レ雪瞬息異_レ態不可_レ得而定_一者所_レ同也其所_レ謂鹽搔島島嶼最東者而周圍皆石嵌空硯礪對者虎鬬聳者鳥喙伏者龍蟠不可_レ驟攀_一上有_二松四五株_一盤覆如_レ蓋其次所謂門石島也突兀如_二覆釜_一次所謂佐々古島也列峙者十餘圭首荀苗藕折決連爭爲_二奇狀_一而蒹藻膠_レ藕其間金光碧彩隨波見露次所謂枕島也島上有_二一大石_一口鼻隱然如_二龍首_一正南向側有_二洞_一曰_二鰐淵洞_一窟深不可_レ測次所謂屏風島也如_二張_一屏風前有_二一石_一曰_二枕石_一狀如_二散枕_一次所謂鬘島也方頂四直上黃下正黑有_二奇趣_一次所謂盾島也勢如_二盾_一上有_二五葉松_一露_レ根欹側如_二磬懸_一次所謂幕島也不_レ假_二彫刻_一而畫有_二龜甲紋_一末_下嘗爲_二波濤_一所_中刊滅_上其所_レ謂稻佐在_二鹽搔島之北_一卽大己貴命以_二廣

矛_一授_二與_一天皇之使_一之處地皆磧礫圓熟如_二彈子_一所謂雲見二俣在_二枕島屏風島之間_一所謂這田在_二盾島之西_一皆幽邃之地其所_レ謂赤人塚在_二乙見川之北_一其西有_二村_一因_レ塚得名曰_二赤塚村_一嗚呼杵築固已以_二大社_一馳_二勝境之名_一而又山水景物之富如_レ是則何必傷_二海涯窮鄉_一哉

素鷺宮

はるかなり幾世か雲に馴ぬらん

慈鎮

いつもの宮の千木の片そき

やはらくる光や雲に満ぬらん

寂然

雲に分入千木の片そき

此歌は大社に詣て見侍ければ雨雲たなびく山の中にて片そきのみえけるなんこのよの事と覺へざりけるによめると云々

八重垣の出雲の宮も神風に

したひ行てや千々のゑら雲

そさのをの君か御門のためとてや 土御門内大臣

八雲のゑるし思ひ立けん

出雲山

ゑらま弓出雲の山の常盤なる

家持

在下大社與蛇山之間延喜式風土記所謂出雲社者是而合祭素盞鳴尊稻田姬大己貴命三神

按新古今集序所稱素鷲里者卽此地而日隅宮經營之後冒杵築鄉名然亦未嘗移動素鷲社位所又按大原郡海潮鄉有須我社然延喜式不錄則不下是素盞尊詠八雲歌之地而非宮社可知矣

杵築景境志

西至幕島北至鷺浦東至關屋南至湊川方二里大社巍然中居焉大社之外音山可觀者四曰御崎山俗所謂龜山一名不老山一名八雲山曰鶴山遺跡可觀者一曰出雲森井泉可觀者二曰眞名井饌井清川可觀者四曰野能川曰素鷲川曰乙見川曰湊川閑浦可觀二曰鷺浦曰出雲浦列島可觀者八曰鹽搔島曰門石島曰佐々古島曰枕島曰屏風島曰褰島曰盾島曰幕島幽汀可觀者四曰稻佐曰雲見曰二俣曰這田古塚可見者一曰赤人塚其所謂御崎山在關屋之北出雲中最高峻者而望之若未開芙蓉盤道踐如利刃者數十回而上絕頂地平者方五六丈至此俯臨則隱伯備藝石諸山點綴寸碧出沒隱顯于野雲海氣之中幾一州偉觀所謂龜山在

社之東嶺勢穹隆而楷西出一小嶺如龜之昂首欲行而窺也所謂蛇山在社之北尾北首南互聯半里蜿蜒成蛇行勢上有池冬夏水不乾涸雲氣鬱勃常起其中觀者毛悚所謂鶴山在社之西一峯中聳夾以二嶺宛然若鶴而妙更在乎大雪變態之間其西嶠峯嶂聯綿復疊者不可具舉其所謂素鷲里事實詳于前其所謂出雲森在社之東百步岑澗可避雨其所謂眞名井在出雲森之東百步清澈音麗若瑠璃盤味極甘滑其所謂饌井在社之前側有二石如鷄卵其所謂能野川在龜山之西麓橋其上二橋之間兩涯多櫻桃橋北五十步有黃石水布其上璀璨如綺其北水伏榛莽六七百步有小潭寒冽如水潭北二百步巨石對立高丈餘水懸注其中殷々成甕中聲其所謂素鷲川在鶴山之東麓橋其上三橋之間小石平布水鏘然如鳴玉其下產菅其北水屈曲者四五百步其北爲飛瀑者三處皆高二四丈激波散沫閃々奪人目光天然驟雨過其上亂雲擁其下則飛瀑若掛在空中尤奇異側有大石如屋牀可容數人所謂乙見川在社之南六百餘步橋其上三最在東者曰乙見橋以橋側在乙見社得是名川亦冒其號橋

廿七日 御饌井神事國造 同日歲末神樂

晦日 大祓

○營造事實

齊明天皇五年秋七月庚寅命出雲國造修嚴之神宮

齊明天皇以前從天神之制法齊明天皇之時世々畧之定正殿式後世以不法其制謂假殿

寬文七年丁未三月晦日遷宮將軍源家綱公賜鈞旨營造制依正殿式

建久元年官家下令督莊園課役營大社嘉祿三年

復督課役營大社後柱爲蠹所蝕從迹讀之得

十六字國司右衛門尉昌綱守護佐々木信濃前司泰清

造之官家官人驚異爲發金穀新大社除莊園課役

後人稱其文爲蠹符云

蠹符

居大煩物朕非素意若人歸德栖高木足

國造祕記曰神火者天地人三火之祭也所謂天火之祭

者乃以三陽交泰之天火正月朔旦齋天神新嘗矣所

謂地火祭者乃以陽來復之地火

十一月中卯日於神魂社去杵築一里齋天神新嘗矣

神魂社與出雲熊野大神御同體也令義解所謂出雲國造齋神是也延喜式風土記等所載雲州之大社者杵築熊野二社也未行新嘗祭之前國造不食新穀矣

所謂人火祭者父國造身退之時不經一晝夜其子速詣神魂社受嗣神火神嘗矣

神火者天德日命相傳之靈物以此火有神嘗而後國造一生忌他火也

風土記曰出雲郡杵築鄉郡家西北二十八里六十步八東

水臣津野命之國引給之後所造天下大神之宮將奉

與諸皇神等參集宮所杵築故云寸付神龜三年改寸付爲杵築

神書抄曰八十限天日隅宮者共謂出雲國杵築宮即大

社也又曰出雲在乾方日之取入也夏至之日出於

寅入於戌故以杵築爲日隅宮或書曰杵築大社

者神社營作之始也凡無久於此社

大社說

謹按延喜式神名帳出雲郡及風土記歷舉社號冠以

大字者杵築熊野兩社而已是可見上古所尊所

重之實而六十餘州無遠近無上下至巷談童謠

不指地而專稱大社則杵築一社而已矣蓋大己貴大

神德如玉威如八千戈以贊成天地之化爾來千秋

而萬歲王公武將莫不尊崇敬畏則其德固可稱以

大字而營造殿閣構成門廊亦務盡宏麗傑偉雄大

高峻之觀則專稱大社豈不宣哉

素鷲社事實

十五日 田樂今廢

五月

朔日 神樂

五日 御頭祭禮天正以後廢

同日 御飯供

六月

朔日 涼殿神事國造步行 奉其祭 十五日 神樂

廿八日 涼殿神事國造步行 奉其役 晦日 輪越神事

七月

朔日 御供

二日 舞樂元祿年時大守綱近卿寄附祿地於是設此日及八月五日舞樂

四日 身逃兩國造舍子外所謂身逃神事者此夜忌火職上官修深祕神事

五日 瓜剝御供是日國造捧今年稻穗瓜茄子等七種供大社

六日 相撲於大鳥居外

七日 祭禮此日曝寶器設音樂 晦日 相撲

八月

朔日 祭禮有千度詣曝寶器設音樂 三日 神樂

五日 舞樂 十日御供 十五日 神樂

秋分 阿式社神樂 秋分 御歲社神樂

九月

朔日 神樂 三日 湊社神樂

九日 御頭祭禮有舞天正以後廢

廿九日 湊社祭禮職之上官往掌其事獻御供及禮酒設神樂

十月

朔日 神樂 同日 祭杵那都岐

十一日 封地御供 十四日 出雲井社 神事

十五日 大御供祭諸神

十七日 御供 同日夜 神等去出神事

自二十一日至二十七日為神在齋齋宿廳屋例歌

舞不張樂器宮庭不掃第宅不營不春相不

卷歌務事 靜密日之間錦紋小蛇出杵築海汀

號之龍蛇長尺余具十社之紋龜甲

廿六日 夜神等去出神事

十一月

朔日 阿式社祭禮慶長以後廢

十七日 御饌井神事國造自祭

廿二日 神事神人等會集拜殿設魚脰宴醴酒

廿七日 神事同規式

十二月

朔日 神樂自十三日夜至二十九日夜國造及上官齋宿廳舍

鍬二口 杵二箇 琴一張 箠一箇

御弓二張 矛八振 瑪瑙笛 本朝鮮舊物而
白木 吉川廣家納

金雉銀雉 雌雄 硯 紫石
酒井忠直納

○祭禮年中行事

正月

元日大御供引進神馬

同日 命主社祭禮 是日國造及職方
上官詣命主社

同日 鷲神社 御供

二日 飛馬神社 自晦夜至此夜國
造及上官齋宿廳舍

同日 年始神事

三日 飛馬神事 同日離宮神事 國造及上
官參詣

同日 雜宮神事

同日 御頭祭禮 天正以後廢

同日 阿式社祭禮 慶長以後廢

十一日 飛馬神事 同日吉書神事

同日 斬始神事 宮匠
爲之 同日夜大神樂

同日 祭湊社

十二日 飛馬神事 自子日夜至此夜國
造及上官齋宿廳舍

十三日 宮廻神事 同日奉幣神事 設舞
樂

同日 宮廻神事 中古以來廢
同日祭稻佐社

二月

朔日 千度詣 十五日 神樂

春分 阿式社神樂 春分 御歲社神樂

廿八日 神樂 自廿七日至晦
三月會試樂

三月

朔日 祭禮 御頭入神馬 大御供音樂舞流鏑馬
此外規式二日三日同今朝步射神事也

二日 祭禮 三日 祭禮 今朝千
度詣

右三日之祭禮有舞樂及結番相撲競馬花女文

明以後廢謹考神祇令一曰一月齋爲大祀二曰

齋爲中祀一日齋爲小祀

三日 齋爲中祀一日齋爲小祀

同日 阿式社祭禮慶長以後廢

十五日 神樂

四月

朔日 神樂

三日 祭杵那都岐

八日 神事 神人等會集拜殿
設魚膾宴醴酒

出雲大社記

本社即日隅宮是也祭大己貴神天井畫八色雲

客坐五神味鉦高彦根下照姬命建御名方命 事代主命

御向社美穗津姬

筑紫社田心姬 溫津姬

天前社脚摩乳

門神社二字東備磐間門命西豐磐間門命

素鷲宮即出雲社

氏社二字意字足奴命二神國造先祖天穗日命國造屋敷祭之

三十八社

釜社稻倉魂神 杵那都岐有壇無社諸神築 祓社

涼殿有壇無社所載名所集 出雲井社 乙見社

御歲社 大歲社 離宮 拜殿 門神 稻佐社 湊

社 鷲社抱齋守護神イナセハキノヨシ 拜殿 御供所 鳥居

阿式社祭味鉦高彦根命 拜殿

井厨屋宇事實

御手洗井六月朔日同廿八日有祭

御饌井用調御供 眞名井爲國造飲食常用之水

供祭所在本社左右 玉垣 樓門

觀祭樓 瑞籬 廻廊 八足門

水屋 拜殿門有神樂所北左右有神拜所 火燒屋

廳舍 會所每月於此所連歌修行 寶庫 書庫

神廐 荒垣

鳥居其中二基制以青銅其一基天正年大江輝元卿納其一基寛文造營時大江綱廣卿逐例納

番所 雜庫

寶器品目

神劍一柄古二柄獻二一柄納於後醍醐天皇宸筆

後醍醐天皇綸旨

爲被用寶劍代舊神寶內有御劍者可奉渡

者綸旨如此悉々

三月十七日

杵築神主館

神鏡一面 御冠御裝束 盛以唐櫃

御具足一領緋絨有三引兩之紋一東山義政公納

御具足一領緋絨有三引兩之紋一東山義政公納

金幣八振 劍三柄他猶有寶 楯二枚

御具足一領緋絨有三引兩之紋一東山義政公納

勝地に於て堂社佛閣御建立勅會嚴重につとめ給へり
于時寛永十三年廿一年にあたりて家光公法令にまか
せ新に御宮并堂社佛閣金銀をちりばめ佛像經卷七寶
壯嚴の儀則人皆花藏世界日東に現するかと疑ふ然則
一心清淨の誠をぬきんで遷宮の化儀を催し給ふ其勅
會を拜し奉るに大臣攝家結跏趺座し百官宰相圍遶供
養す門跡院家退座一面題名僧衆隨力演說誠に是靈山
一會儼然未散此時なるをや香花灯燭茶菓珍膳蘋蘩溫
藻百味の清膳佛像經卷祭奠の微誠勝計べからず齊々
たる禪徒はともに經題をあげ陶々たる郷士互に行香
をたすく道儀藹然として絳已に鄭重也時成哉新樹陰
をならべ靈山の會場に廻す事を表す餘花追薰瑞花の
法界に飜る事を見る勅願の悉地景色賀之たまふもの
なり家光公仰云吾濁世の時に當て將軍の家に生れ公
武憤關に携り廣く諸典をきかず要を取てこれを案す
るに孝行に淺深あり果報に不同あり大舜象耕の孝感
花報をすぎず丁蘭刻木も本地の果報を得ず餘これに
准ず或傳云法令を以て祭祠の眞孝とすといへり若爾
今年諸法實相といへども中につき甚深の法を修すべ
しと云々各承て云堅義者は佛法の紹隆神明の法樂闡

浮第一の淨業也近年番ひ論義中絶す幸なるかな南都
北嶺の探題會合せり因茲俗諦常住を業として五問十
題に至まで家々の堅義法味細也山門探題大僧正天海
南都探題僧正空慶定て神明納受諸佛歡善したまはん
一人恭敬したまへば四衆歸伏す貴哉和光の利物現前
不現前の結縁の縑素十方界に遍滿して稱美讚歎して
いはく宿習なるかな我等受かたき人身を受あひかた
き佛法にあふ豈現世安穩後生善處の利益にあづから
ざらんや因茲家光公哀憐を垂てのたまはく神は敬に
よつて威をまし人は信を以て得益す故に東照大權現
因位の徳を緣起に圖し末代に傳へ道俗是を聞して尊
重の思ひを發せば靈驗倍掲焉ならしめむ肆に忝も狩
野守信御下知を蒙り信敬の丹精朝暮數年無二怠慢一全
書功故に法眼繪所を下さるゝこれ以て御神徳也

には三千三觀の窓に向ひ夕には山王の神道を觀す我願既滿し衆望またたりぬ 後陽成院の宸筆にも新田大相國家康公者好勇恢武天下之名士也加之研精於文學發志於經論而極諸宗奧祕拔而以定惟一之則胸勵戒定惠之三業止觀圓頓漸之一念難行苦行累月累年云々僉曰若種姓高貴の家に生れては自在の威勢に誇て則恣に罪業を造り若貧窮下賤の身を受けては官位福祿を求て鎮に惡念をおこすといへり貴も賤も諸善を知るといへとも行ひがだきは道なり奇なるかな妙なるかな源君忝も前代末聞の觀を擬し還歸本理の成道を唱へ東照大權現とあらはれて廣く衆生を度し別しては家門繁昌にして氏族永くさかえむ守護神と成たまふ萬歲々々萬々歲ならくのみ委は眞名緣起の如し權現因位の御時常にのたまはく虎斑は見易く人斑は見がたし然といへども予知見する所あり嫡孫に至て家風彌吹興さむとのたまへり誠なるかな賢聖のみこととり三代征夷大將軍左大臣雖任相○暫息鶴退家光公幼しては眞敏を懷き長となつては神情にかなひ給ふ松風水月その情花に比するにたらず仙露明珠なむぞ能其朗潤にたくらべむ所以に大なる德行あり萬物資て行に

ならずといふ事なし今知源君の言語あたかも符契のごとし世尊眞因の鑒機に似たり巍々たるかな當寰天下をたもち給ふ事戰を以て戰を止るは戰といへも可なりいかにいはんや無爲にして各親其親各子其子君臣樽節海晏河清乎而今當君を仰見るに人におゐては親睦の情をなし給へども獅子嘯呻の勢を現するが如く貴賤頭を低る物におゐては柔和の語ありといへども象王爪牙の全を藏に似たり緇素掌をあはず僉いふ賢君その國に王たりし時は百姓四面鐵壁の室に居るが如く也しかのみならず最初好世依正の人主は動せずものいはす無爲にしてみづから化し自ら信し自なる當寰濁世の國民は善を勸め惡を懲ともよこしまなからん事を思はず賢君忝も賞を以てすれども欲に欲をかさぬ足ぬといふ事をしらす干戈止ことなしたとへば荷葉の雨をうけて鮮なり雨あるときは池水に加するが如し且は奢侈又は濁世の所以なり而に家光公御在位年尙し慈惠のいたり息熈の及ところ異國猶睦しむ況親戚に至るをや國の煙塵を鎮め人の泰平をいたす一天曇なし豈宿植德本の聖君にあらずや前大相國勅號 台德院殿源君御遺言にまかせ日光山の

色は仙女千尺の絹をかくるかと思ふ是三無差別にして眼前の景趣言語の盡す處にあらず或時は大日所變の不動尊まのあたり水上に化現し給ふ是を瞻是を仰く輩は利益巨多にして現當二世の安樂を得といへりまたこの御代は岩根の松の常石堅石の蔭ゆたかにて二あれの風のさわりも名残なく民の艸葉は心のまゝにさかゆく時の御めぐみにははるけき他の國までもなびきたがひ奉りけるなるべし

此間
有繪

源君の仰に云く當家は 神武天皇より五十六代清和天皇第六の王子貞純親王の六孫王經基始て源の姓を賜り多田滿仲賴信賴義八幡太郎義家義國の嫡子義重新田の祖也次男義康足利是也惣じて源平兩家は寶車の雨輪の如く天下を輔佐し違道を退治す其職にあたり保元平治の亂の時平家世を取て廿餘年壽永元曆のころ平家を追討し源氏日本惣追捕使征夷大將軍に任せらる其後同姓なりといへども新田足利確執す武勇に勝劣なしといへども聖運によつて足利世をとる中間に千變萬化すといへども時のよろしきに隨ふ所なり敢て其職にあらず我今將軍となり氏の長者となる且は先祖の素懷をとげ且は累代弓箭の耻を雪む宿

因の催す所天道のあたふる所なり情清和天皇の御即位を案するに惠亮なづきを碎しかば二帝位につく併法力也義貞山王權現に鬼切をさへげて子孫の征夷將軍を祈る神慮感應有て予其職に昇る是神德也現在の願望すでに滿す豈後世をしらざらんや然ば則八萬の聖教に通達すといへども後世をしらざるは愚者也一文句章に不及といふとも後世を識知するは智者也肆に諸宗の知識をめすに雲の如くあつまり星の如く列なる源君内には諸宗の奥義をつたへ外には朝暮に論議決擇せしむ諸佛の化導を觀するに但本在因地未離我執時各別發願各修淨土各化衆生如是等業差別不同矣佛すでに因位の我執をはなれす我亦各執本習而入圓衆なれば太子は厭離穢土求淨土欣の思ひに乘して子孫をつがす我は現世安穩後生善處の文に依て家門を繁昌せむ造次にも思惟し顛沛にも觀察す有時我常在此娑婆世界說法教化の文に當て忽然として大悟し累劫の妄情已にはれたり重て思惟すらく若迷於根源則増上濫乎眞證若香流失緒則邪說混於大乘只恨らくは師傳なき事を故に諸宗にあふて是を尋ぬ時に山門碩學の中に相承あり山王神道是也と云々爰を以て朝

處に移したてまつりて後多寶塔婆一基を造立し塔中に釋迦多寶二佛並座して境智冥合の深義を顯し文殊普賢等の尊像を安置せらる邊壁には人天大會來集の説相を書くも全く卽事而眞のことわりを示者乎于レ時大僧正天海戒灌を神靈に授まゐらせ供養を無疆にまふけ香花を不退に期し神威を飾り佛庭をひらき奉る緇素往詣の嶮路は名別義圓の教位を表して四十二重につみ又名義俱圓の觀位に約して三十六段にたゝめり無量の功德不可稱計一たびも歩を輩運ぶは解脫の風扇て無明の雲をはらふ神德顯現して武運長久ならむこと豈疑をのこさむや

竊に日光山の舊記を考るに神護景雲元年夏四月勝道上人跋涉を企といへども山頂雪深く路さがしく雲霧雷鳴して登る事あたはず三七日を経て歸り給ふ天應元年に又先思を興し給ひしかどもいたることかなはざりしにより同二年佛像經卷を圖寫して天神地祇に祈り此度不_レ到ば亦菩提にいたらじとちかひて深雪を踏分岩根を傳へからふじて到り着ぬ四壁を見るに山の狀或は龍の臥るが如く或は虎の踞るが如くにて棲息與あり加之平湖洋々として雲水蒼々たり蓋是靈

仙神龍の卜居なるべしと思ひて西南の隅に謁菴を結びて禮懺を修ること三七日畢て終に宿望を達し故居に歸りぬ誠に勘功不_レ淺者乎延暦三年かさねて高峯に昇り南湖のはとりにして一の小船を作りえて清波に棹さし頭をめぐらせば遠近の木だち一かたならぬ眺望也暮れば南岸に小船をよせて宿し明れば湖曲を漕行て遊覽しけるに或時は白蛇海上にうかび出又千手觀音形を現じ給ふさまの靈驗ありがたかりしことゝも也依之此勝地に伽藍をたて中禪寺と號し千手千眼丈六の尊容を安置し妙經一千部大般若經等を奉納せしめ靈窟を點じて一字の社壇をかまへ日光權現を祝ひ奉る又此鬼門に坑穴あり羅刹窟と名づくかの窟より大風起り國家を損すること年に兩度なり爰をもて二荒の字を改て日光と號せしより風穩にして緇素安泰なりといへり

此間有繪

此山中に華嚴の瀧とて靈地あり青巒たかく聳え紅日はやく照すによりてかくいひけるにやありけん思惟おぼつかなし侍かの飛泉を見るに剛風頻にひゞき出れば霏々たる素雪半空よりこぼすがごとし碎ちる波の光は天龍萬顆の明珠捨るかとおやしみ落くる水の

典のつとめ退失有べからずとぞ定給ひける此間有繪

同十八日には拜殿に於て御經供養あり御導師大僧正
天海本山顯密の碩才末派諸寺の學者も悉く召具して
是を行はる素より佛經の讚嘆いと尊く聞えしけふは
台嶺の門跡残りなく梵場に列座し證明し給ふ翌日は
御本地藥師堂の供養として法華曼荼羅供養を修せら
る御導師咒願證誠の出仕以下大むね昨日にかはらず
しかあれば兩日ともに大樹家光公御着座あり其行粧
美々しく見ゆ大臣公卿もあまた着座なりそのほか殿
上人花莚の役など勤られけり法會の儀式目驚くばか
りにてとりくにはへある御ことども也かゝる至孝此間有繪
の御めぐみをばたれかは天が下にしらざるべき
近曾朝鮮の正使副使武州にきたりて大樹を拜し奉り
やがて日光山に詣し社壇ををがみ蘭若をうやまふ信
仰の色外にあらはれし剩境地の美景を賞して遊事し
ばくせりかしこに到ては奇峯の色に目を驚かしこ
こに憩ては飛泉の聲に耳を洗ふかれらが志のゆく處
をのべむとにや數多の詩文を作りて大僧正の床下に
投すその國風を見るもさすがにあはれなればかつが
つこれをとゝむる物也

正使 白 麓

東武諸山望裡遙、日光周通獨峯曉、天開眞境挑
金殿、洞劈仙源駕玉橋、鈴響却隨旗脚動、篆烟新
惹雪花飄、地因人勝今方驗、功烈千秋未寂寥、

副使 東 溟

中天寺刹壓嶙峋、東照長留法像眞、白馬尙懸金
鎖甲、紅雲全露玉宮神、千岑力鎖山河定、百戰
功垂宇宙新、權現極知同一揆、宏圖寧復讓前人、

從事 青 丘

風 靈鯨障海淵、踞蹠仙鳳立雲間、上頭杉檜
傳千古、半腹雲烟隔九寰、對起士峯雄北固、
抱回江戶鎮東關、却忘萬里歸途遠、又借肩
輿訪此山、

かゝる時の仁德に懷ては諸蕃譯をかさねて來り今又
營造し給ふ神祠佛閣もかぎりなくめでまどふまして
此國にはかくただしき御政を今の世も末の世も大空
の月の光とあふぎたてまつらむかし此間有繪
情當社與院の地勢を望めば林樹蔭おほひ松杉風清し
て萬岳衆峯凡境を絶せりされば久能寺より尊體を此

也三藏せんかたなくやすらひ給ふ折しも深沙王梧桐樹を斬て橋となし草を集て沙にしき駒を進めて打渡すその喜びは甚し猶沙漠を行過れば軍衆百隊沙磧の間にみち旌旗衆旄のかたをなし又諸の惡鬼奇狀の物前に向ひ後にめぐりて人を却すされば一心に觀音を念じ專此經を誦するに従ひて妖恠おのづから消殞し急難すみやかに除滅してつひに渡天の素願をとげ八宏に歷遊し玄理を究竟して多くの經論を將來し給ふ事ひとへに群生を利せぬめむの爲なるべし此間有繪寛永丁丑夏のはじめ征夷大將軍家光公東照大権現の靈威をあがめられ城郭の内にもとよりありし神殿を猶孝敬の深きあまりに瑞籬の内外いま一しほの壯嚴をそへ造替あるべきにて其所を定給ふをりしもまな鶴二つがひ來りまばらくありて東の方にさるかくあやしく妙なる事を思ひて世に鳴騷人墨客おのゝ心心にやまともろこしのめでたきためしを考へてはめ奉る中にも大僧正天海の祭文の詞には神の御社を都巒の内院と號し佛の御寺を金剛淨刹と名づけ敬神を以て國の榮とし祭祀を以て國の法とすとかけり又宣帝世宗廟をまつれる日白鶴きたりて後庭に集りし瑞

を引て祝せしをばやがて内陣にぞ納置給ひけるされば靈神此鳥に駕し來て萬代不易の所をぬめし大樹のことぶきは千年の後までもたもち給はんことを告給ふかと世こぞりてゑみさかえけると也此間有繪宗廟をまつる事はもろこしにもこれを專とせり殊更本朝は天照太神の御末にて皇孫降臨し給ひしよりこのかた八百萬の神だち國家をまづめまもり給ふ就中廿二所の神祠はおはやけの恭敬他にことなるにより大社にあがめおはします今此東照三所大権現も是にひとしくなぞらへ當社開基より廿一年にして寛永十三丙子造替の時至りて征夷大將軍家光公ひだのたくみに課て不日に成功をとぐ社壇の嚴飾は反宇金銀を鏤め柱扉丹青を盡して玉垣の外までも玲瓏くばかり也これによりて四月十日新造の御社に神體を遷御なし奉り掛まくもかしこき勅使をたてられて宣命をよみ官幣をさゝぐ散齋致齋の行儀も嚴重にして十七日神輿臨幸の期には社司以下の供奉人まで美つくし善つくせりさて家光公御社參有て神拜の御作法甚以神妙也人みづから安にあらず神の助によりてやすきわざなれば末代に及ても豊年凶年のけじめなく禮

おろちをはなちたまへば進り横りて長橋となれりかのをしへにゑたがひ此橋にすゝみて速に向の岸に至れば大王も龍橋も共にかくれて見えずさてこの蛇背に山菅をまきたるより名づくるともいひ又は山菅生するによりてともいへり抑橋の功德を尋るに江河は旅の尤愁とする處也霜雪の寒きあしたには人馬ことさらになづみ風雨のはげしき夕には洪水ますゝみなざる是をわたす善根誠に莫大也その外佛忉利天安居の後金銀水精の橋を渡し又かの天台山の石梁をはじめわか朝には道昭法師の宇治橋行基菩薩の難波の橋何れも是衆生の利濟也殊に法橋といへるは生死の海をわたり涅槃の岸にいたらゑめむ事を本懐とすれば深沙大王の此處に化現し給ふ事ありがたき方便也今に至て社壇を橋のかたはらにかまへ佛法の守護神に崇め奉るもの也此間有繪

當山の開基勝道上人は下毛野國芳賀郡の人垂仁天皇の苗裔也于レ時天平寶字年中に藥師寺にして唐人鑑眞和尚弟子如意僧都惠雲律師に律部を習學せり戒珠潔く惠海波深してひとへに群迷を利益せんことを思ふ爰に稱徳天皇の御宇天平神護二年やよひのころ上

人大鈿の峯のいたゞきにのぼりて四方を望視に此山にあたりて五色の雲常に立おほへりかならず靈地ならんことをゑりはるかにたづね行て山趾に至ぬれば一の大河あり岸頭石を曇り溪流漲落てわたらんことかたく進退歩を失ひ三寶を念じ祕呪をとなへつゝ祈精ふた心なかりしかば深沙大王出現して慰誘し給ふにより輒く龍橋を渡り嶮難を経歴して伽藍をたて佛像を安置し所願を遂給へり忝も桓武帝是を聞しめて叡感斜ならざるあまりに勅して上野講師に補任し給ふ苦修練行をかさね弘仁八年三月一日八十三歳にして禪定に入が如く入滅し畢此間有繪

玄奘三藏西域におもむき流沙にいたり給へば深沙大王瘦老の赤馬に乗來て云前途險惡に沙河阻遠なり鬼魅熱毒の風あらくして單獨の身いかで輒く行べきといさむれども三藏法師我ゑばらく大乘求法の本意ありたとひ中途にして止めとも悔るに足ざるよし報ひしむ大王又云師必ゆかむとならば我馬に乗べし是既に十五度に及びて伊吾に往來すよく道える馬也とて三藏にあたへけりさてゆくゝ夜ふけ河のほとりに來りて見ればながれ緇にして兩岸の濶さ一丈あまり

を津の國阿威より談山に定慧和尚のわたし申されけるためしとかや神體を金輿に奉り大僧正天海みちびき給ひ北嶺高才の僧侶東關碩學の衆徒あひしたがひ武家の近習むねとのさぶらひ數輩警固し奉りて端麗しきよそほひ也こなたかなたの御旅所は新しく經營して夜々の御とまりには大僧正觀念を凝し給へば衆僧の勤行も嚴重なり殊に仙波大堂には日をかさねてとどまらせ給ひて一生入妙覺といふ論題を出し問答往復金玉をみがく大僧正もとより辨舌懸河をながして即故初後不二と證判せられたれば限なき御功德と來集のともがら感涙を催しきかくて卯月四日には日光山坐禪院につかせ給ふ此程大僧正扈從の人々にそれ神は混沌のはじめをまもるがゆゑに生死の二の相をとり給はす六塵の境にまじはるはしばらく和光の御結縁也今かしこきおほやけの詔をくだし神號を東照大權現と授けまゝらせられおほきひとつの位を贈らせたまひぬ御門よりはじめて御家運は久堅の天ながくあらかねの地ひさしくして擁護いままんこと疑なしとしめされけり佛誕生の日は御廟塔に御定座あり十六日にぞ新造の御社には遷御なし奉りけ

此問
有給

前大將軍大相國秀忠公もはら心ざしを抽て三業相應の白善を修し宿因内に薰じて無双の靈地を得知識外にたすけて清淨の堂社をたて東照大權現を祝ひ奉り年々の御忌辰には大相國秀忠公御社參ありて孝心をつくし給ふ威儀ことさらに儼然たりしかれば則堅固寂靜の梵閣は三世諸佛の依正眞際常恒の靈廟は十方如來の所栖也和光の惠日いよゝゝ祠上にかゝりき本地の秋月はるかに此閣をてらさむ起立の功德は子々孫々の德風ひさしく意樹にあふぎ禮敬の得益は家々遠々の惠露あまねく心地をうるほす還歸本理の東照大權現は法性凝寂にして懇誠を感じてつひにあらはるゝのみ

此問
有給

此橋を山菅といひ傳へたることはむかし勝道上人といへる沙門此河のほとりに來り渡るべきことたやすからずして蜘蛛慄慄す時に北岸より化人忽然として現來す其長丈餘かたち夜叉の如くにして左手を腰に安じ右手に青赤の二蛇を握り厲聲を出し告ていはく我は是深沙大王なりむかし玄奘三藏渡天の時も流沙の難を救ひき今又此河を渡しまゐらせむとて手裏の

は元よりも火宅の中ときくからに我此土安穩の妙文
いまはたありかたきこと也此後はいよ／＼四海八紘
一向に源君の御掌のうちにしそ風雨も時をたがへぬ
御代なりけり 此間
有繪

元和第二の暦む月の十日あまり源君御不例の色あり
これによりて諸社の奉幣諸醫さま／＼救療し奉ると
いへども平安に就たまふべき御けしきもあらざりけ
れば行衛たのもしげなくぞ見えたまひける 主上か
くと聞食て驚なげかせたまひ御修法行せられ御祈の
卷數などまゐらせらる元よりの御心ざしなれば今度
家康を太政大臣に任せらるゝよし 勅使をたてられ
宣旨を下さるゝも猶あかす思食ながく一人に師範と
して四海に儀形たるつかさにしあれば後代の龜鏡に
もとやおぼしよりけむ勸慮のほどありがたき御事也
此間
有繪

源君の御違例日を経てよはらせおはしませば自今以
後いよ／＼君を守護し國を治たまはむ事のみ大將軍
秀忠公にいとこまやかに御遺言ありければ秀忠公か
なしびに堪給はず哽咽し給ひけるとぞさて天海をめ
して法華止觀の深義山王神道の玄奥をつたへ現世安

穩後生善處の御本意を遂たまふぞありがたくおぼえ
侍るかくて御はふりのことは先當國久野寺にをさめ
一回の光景を送り時に神號の事奏聞を経て授賜るべ
きに於ては大織冠のためしをあふぎて日光山へ移す
べししからば神を當嶺に降して永く國家を擁護し子
孫を視そなはさん事たがふまじきよし御誓約有て元
和二年四月十七日七十五歳にて安然として薨御した
まひぬおほよそ髪をいたゞき齒を含たぐひ敢て悲歎
せざるはなし 此間
有繪

久能寺は是行基菩薩の草創なりといへども四明天台
の末寺補陀洛山の聖容化緣年ふりたり梵音の潮すさ
まじくして出現の月あきらか也御遺言に任ておの
／＼供奉の行粧を刷ふ石窟に尊體ををさめたてまつ
れば大僧正天海その作法をつとめしめ有縁を此山に
導き卽身を法界にひらく觀念を修す心印誦に推はか
られていとたふとし爰に當寺の鎮守を尋れば摩多羅
神也日光の奥院亦同名同神なりかれをもてこれを思
ふに重ねて此地より日光へ移しまゐらすべき御兼言
も神慮不思議にぞ覺えし 此間
有繪

抑元和三のとし尊體を日光山へ移し奉ること大織冠

叫で攻ければ士卒勦弩要害の處を守るといへども終に屈伏し内縁により頻に和順の義を乞れしかば堀築地を破却して無事に屬せしに當春又兵亂を起し京都を焼拂べき風聞有て洛中の上下蟻の如くに固り蠅の如くに散々依_レ之源君御憤ふかくして四月四日駿府を御立あり同十八日二條の御所に着せ給ふ將軍家は、大御所の命により江戸を出させ給ひて同廿一日伏見の城に入給ふつら_〱秀頼の不義を思ふに先年石田が謀叛のをりとひ去冬の暴逆といひ其罪輕からざるに今又斯るくわだてなれば再犯不_レ容して大樹は五月三日に伏見をた_〱しめ給ひ諸勢を六段に備らる其外小姓の精卒彼是都合廿萬騎にて其夜は角南にましましけり端午には大御所二條の城より近習の御勢一萬五千騎計にて出させ給ふ其外尾張宰相中將義直遠江宰相中將頼宣供奉せられて星田まで押出し給ふ大和口よりは、大和伊勢陸奥越後の軍兵推入ける尼ヶ崎西宮には播磨備前備中丹波丹後の人數隙なく陣をはる和泉紀伊國の勢は岸和田にゆらへて合戦の相圖をまつ大坂の軍勢は十五六萬騎とぞきこえし其中にも今度は十死一生に想定たる兵共命を輕じ義を重じ

て六日の早夙に道明寺若江矢尾口こなたかなたに打出箭鏃を飛し劔戟をまじへ面もふらず相戦ふはじめは勝利をえていさみしかども英雄の猛將先鋒として武藝を盡し攻ければ名をえたる勇士あまた討れて敵は機を失ふ終日數度の戦ひなれば死骸野徑にみち塞る敵方多く討れ暮に及て引退く翌朝七日には兩御所の仰により味方の御勢稻麻竹葎の如く旗の手を靡かし青屋口鷲嶋の方天王寺口へおしか_〱り茶臼山にそなへたる敵陣を攻詰隨一の大將も匹夫の如くにおり立て父子兄弟にも先を爭ひつゝ義士あまた討死して終に敵をば追入けり此外方々に控へたる良將我おとらじと進ければみな城中へ攻入ける則城内に火懸りぬれば秀頼御母堂と諸共に山里にしてあくる八日に自殺せらる親暱の男女あまた家後の御供してみな灰燼となりぬか_〱るをりの勳功は一々姓名を_〰顯し世の譽をも顯すべきをみじかき筆には及がたくや見ぬ周武漢高の忠臣も先哲史文にのせて末代にもつたへければ當時の才人も又しかるべし太閤萬國の人力を勞せしめ多年經營したまへる城郭金殿玉樓こと_〰く慶長廿年五月七日一片の煙とたちのぼりける三界

りといへどもおごることなく仁義を守り文道にも達し給へれば十目の視るところ十手の指ところにてかかるつかさ位にも昇り給ふなるべし同年三月廿五日御参内ありし時更に牛車の宣旨を蒙り給ふ此をりの行粧前驅扈從隨身雜色までも思ひの美麗をつくしければ洛中の男女衢にみちて手を額にあてゝぞ見たてまつりける殿上に昇給には月卿雲客昵近の外もなべての公達もいつき随ひ奉らるかしこき綸言を下し給ひいまはた君臣合體の御政道なれば萬國風靜にて八嶋の波治り樵歌牧笛の聲もやすくたのしめりとぞきこえし此間
有繪

駿城の西南に一の勝地あり志豆機山と名づく猗々たる緑竹枝をまじへ鬱々たる紅花色をそへてはたばりひろき錦を織出かとうたがふ誠に名におふ絶境也されば鶯花むなしく過しがたきをりふしなれば狂風いまだ起らざるに先だちて源君忽に高駕を廻らし給へば奉仕のともがら綾羅艷色袖をつらねて競きたる有様珍しき壯觀なり加之風雅の好士儒業の博達扈從してあひがたき聖君にあひえがたき花の時をえたることをよろこびて一吟一詠思ひの心ざしをのべ高

宴遊興を盡せりしかあれば遅々たる春の日もや暮わたり殷々たる鐘の音もかすみてほのかなるをりしも傍なる庵室に誦經の聲するをいかなる文にやと尋おはしませば黄昏の偈に侍るとて此日已過命則衰減如少水魚斯有何樂」といとたふとく訓釋しけるをつらくきこしめしげにさにこそとふかく心肝に銘じてはじめて無上正眞の道心を發得してやがて還御おはしける翌日に至りて花下の御遊希代の勝事なりしことなど各申けるに源君のたまひしは大かた世の中に吟翫する花の色香は皆是輪回の業因にして出離の要路にあらずたゞ美花を見ても本尊を念じ冷風を聞ても無常を觀すべし爰をもて南樓の秋の月を望ても眞如の本宮に至ぬべく金谷の春の花を翫びてもまさに寂光の理土に還なむとすといへりとぞ此間
有繪濃州關が原の合戦に討勝たまひし時秀頼も生害に及べかりしを其まゝもとの名城にたすけおき給ひて若干の國郡を費し博愛を垂給ふしかるをいつしか源君の御厚恩を忘れ去年秋のころ諸牢人を大坂に抱置て逆謀を企らる此事都鄙に隠なければ駿府武州の兩御所進發有て五十萬騎の大勢にて城外の四面打圍み喚

天正十二年小牧に於て大利をえ翌年秀吉と源君和睦有て數年を経秀吉薨去の後程なく奥州會津の逆徒蜂起により源君かれを征伐の爲に慶長五年七月二日江戸の城に還座し給ふ然る處に石田の何某といへる佞臣有て幼少の秀頼を恣にはからひ天下をくつがへしはたしてはおのれ獨歩の思をなさんと國々の勇士をあひかたらひ源君に對し奉り奸謀を企てけり此事關東へきこえければ各僉議有て中納言秀忠卿は上野信濃の勢を引卒し東山道をのぼり給ふ東海道よりは今度下國せる諸大名に譜代の武將を相添て八月朔日數萬騎の軍兵をさしのぼせらる猛勢尾州に着して廿二日には大河をこえ新賀野の軍に討勝翌日岐阜を攻落し城主を取籠にしてこのよし注進申ければ源君聞し召て東國の惣大將として結城少將秀康を残しおき九月朔日進發し給ひ漸く美濃の國につかせ給ひて關ヶ原のうへ岡山に御陣所を定らる此威氣におそれて大垣に楯籠たる敵軍江左の佐和山をさし夜深く城中を出て同十五日に大勢關ヶ原に至り伊吹山をうしろにあてゝ陣を取先陣より此よし申上ければ近習外様の軍士を出して相戦しめ給ふ敵もおのゝ名をえたる

ものゝふなりといへども天性此君の武畧異國本朝にもすぐれ給へば強將の下に弱兵なくして四方八面に敵を追ちらし就中御息下野守忠吉は眞前に進み出返し合たる究竟の敵を斬すてあたりをはらひたる御振舞なり此外敵味方の名譽不可勝計そのかたはしをしるしといめんも中々なればもらしつ石田は今度の不義不忠により天罰を蒙りつひにかひなく生捕られ首を獄門にかけらる彼謀叛の與類或は降参し或は滅亡して六十餘州一時に治りぬ秀頼は少年なりといへどもかゝる兵亂の本基たる上は石田と共に討はたさるべきことなりとみな人いひしかども源君は舊好をおぼしめしてたすけ置給ひしこと誠ふかき御めぐみの至り也さて此度忠功の人々には郡國を宛行ひ差降し俸祿にあづかり時を踰ざる御はからひ誠に賞罰嚴重の事ども也此間有繪

慶長八年二月十二日源家康公征夷大將軍の重任に補せられ右大臣に轉じ給ふ氏の長者として非學淳和兩院の別當を兼給ふこれたゞ一旦の歎慮にてはあるべからず元より累祖武將の御身なれば東夷西戎の亂逆をしづめ蒼生を利せしめられし勳功すでおほいな

ば伍々の行列を備る士卒もなく只各心の欲する所に
ゑたがひてあるは東西につどひあるは南北に集りて
挑み戦ふことひねもすにやます爰に源君十歳の御時
見物の爲に出たまひて供奉のともがらにのたまひけ
るは多勢の所にてはいなみじ小勢の方にあるべしと
仰ありはたして大敵敗北しておはしますかた勝にな
れりされば此君は生知なりと皆人感嘆し希有の思を
なせり此間有繪に

秀吉公天下を并呑の心ざし有て天正甲申の春尾州に
發向のよしきこえければ信雄一期の浮沉こゝに極り
源君の御扶助をたのみ給ひしかば故信長公のよしみ
を思しめし戦場の勝負を論せずやがて應諾有て三月
上旬八千餘騎を卒して濱松を御立あり清洲の城に入
たまひ國中を見めぐりて急ぎ勇兵をつかはし羽黒に
陣取たる敵軍を追拂ひ小牧山に御動座あり秀吉は四
月八日羽翼の武士共三萬餘騎小幡岩崎へ推廻し岡崎
を心ざし馳向のよし聞し召て小牧にも究竟の軍兵共
を残し置前後六千餘騎にて打出させ給同翌日長久手
に於て合戦あり源君に隨ひ奉る強兵一騎當千の勵し
て敵の猛將あまた討取勝鬨をあげて即時に小幡へ入

給ふ是猶小城なればとて其夜小牧山へ移らせ給ふ秀
吉は樂田に歸り小松寺に本陣をはり用心きびしくゑ
て小牧山の近邊二重堀小口樂田に其勢八萬ばかり手
分をしつゝ合戦の用意あり數日を経て源君信雄を誘
引し軍勢一萬八千を十六手にわかち小牧山より打出
二重堀の東の野へ押出し備を立給へば二重堀の者共
はあはて色めきて小松寺へ加勢をこひけれども秀吉
宣ひけるは敵馬をいればまづまりてあくまで敵の胴
勢かゝらば此方より詰べしとぞありしこれは二重堀
のものどもを餌兵になし兩將胸勢をみだしせめかゝ
らば大軍にて取籠討取べきとの計略なり源君ははや
く此事をまろしめし小牧山へ引とらる秀吉手を失ひ
て犬山の西南奈良高田村に士卒を残しおき五月朔日
七萬五千餘騎にて終に美濃へ退き給ふ源君は此たび
にかぎらず若年の御時より武勇世にすぐれたまひ江
州姉川に至りては朝倉が大軍を破り長篠に於て武田
にあたる時は甲軍忽に辟易す或時は隣國の名將とた
たかひ又は邊鄙の凶徒をまづめ數十ヶ度の合戦皆以
勝利を得給ふこと御智謀のいたす處也上古にも末代
にも有がたきためしなりと人みなほめ奉りけり

東照宮大權現緣起

傳聞いにしへ溟濤の蒼海に三輪の金光有て浮浪す天地ひらけ陰陽わかるゝに至て三輪の金光同く三光の神聖と成て其中に化生す此故に神國たり神世萬々人皇千々にいたり一刹利種系聯禪讓していまだかつて移革せず相胤も亦玄かなり閻浮界の裡豈かくの如く至治の域あらむやされば日域を根本として印度支那を枝葉とせる事良有^レ以哉 抑本朝帝皇の苗裔姓氏あまたにわかれし中にも第五十六代 水尾帝の御末の源氏はたけいききはひありて君を守り國を治るこゝと世に超過せりことさらに當家の祖神に祝ひたふとび給ふ東照大權現の名高き世のはまれは言説にも述がたく筆端にもつくしがたし今この本縁を顯すも巨海の一滴九牛が一毛のみならしそのかみ彼慈父贈大納言廣忠卿若君のなきことを歎き北の方もろともに參州煙巖山鳳來寺の醫王善逝に參詣ありて丹誠を凝し諸有願求悉令滿足の誓約を深くたのみ給ひ

き此間に
有繪

ある夜北のかたあらたなる靈夢を蒙りたまふ夫夢は六の玄な四のわかちありといへども瑞夢揭焉^{イヂルメク}して御身も唯ならずおはしませばまさしき卜筮の者にとはせ給へば孕にいまするは宿植德本の男子十有二月にて平安に誕生あるべし是十二神將擁護の故なりと考へけり

此間に
有繪

誠に占かた掌をさすが如く十二月月にあたり天文十一年壬寅十二月廿六日易産の紐をとき給ふ御骨法非常して乳母湯母備侍り養し奉り墓目の儀式碁手のかけ物など調へつとめて三日五日の夜の祝ごとども本所はさらにもいはすこなたかなたの御養産不可^ニ勝計^一此君襁褓のうちより風姿岐嶷に幼して雄略義氣いましければ御家族の繁榮行末たのみ有て國人皆天壤ときはまりなからんことをねがひよろこびあへり

此間に
有繪

或時邑里のわか人ども弓箭を携へ瓦礫を飛して因地といふわざをえけり此事何の年月にはじまり何の故事におこるといふ説をきかず元來の怨讐ならねば暫時の計策にまかす分々に下知を加ふる良將あらざれ

大僧都法印大和尚位覺深識之

右月能桂一卷（山王祭禮記一卷）延曆寺之藏本也依師命加書寫一校畢原本字形走草且依爲反古之裏間有難讀解者大概依本而闕任思得附朱字焉所謂山家要略記五卷山家要記淺略目錄二卷併此二卷都九卷全備日吉神社之由來者也

文政七年甲申秋九月十一日

氣吹廼屋垣内末松重恭花押

月能桂一卷平田家藏本を以て謄寫せしめ本集に收む

明治卅八年十二月

佐伯有義

らば是を書記して後の代にも傳へよかしと勧めたまふしかれどももとより愚の筆のあと殊に神わざの深きよしもわきまへ侍らねばいかでかこれを記し侍りなむといなめど強ていさめ給ふ事度かさなり侍ればいな船のいなとも辭しがたく且おふけなき神恩を謝し奉る一端ともなりねかしと思ひかへし侍りていささか目にさへぎり耳にふれ侍るわざどもをそこはかとなく書集めて彼僧都の几下に捧るもの也これ唯一時の責をふさぎ侍るのみなり敢て後の日に残し置侍るべき物にはあらず一度貴覽を経ばはやくかいやり拾たまへと云事まかり

于時貞享の五とせ龍集戊辰五月の下の七日に聖眞子の宮奉仕綠樹軒松順伊勢園の草廬にして是を記し畢

凡日吉山王權現初夏中祭禮者曩時 天智聖代大宮權現鎮座于波止土濃之靈地至子今一千餘回連綿不絕矣然從白鳳年中一至延暦九年唯以柳奉祭之同十年辛未桓武天皇令勅造神與二基謂大宮二宮二社耳渡御唐崎奉祭之五十六代清和天皇貞觀七年卯月七日令勅造聖眞子八王子客人此三神與七十四代

鳥羽院御宇天仁二年四月廿二日令勅造十禪師神與同帝永久三年卯月廿一日重令造三宮神與焉自爾已來代々聖主降詔造替神與故七社靈耀赫々矣且六十四代 圓融院御宇天元二年乙卯初夏自富津濱至于辛崎浦泛龍頭鷄首船伶人廿餘輩舞樂七十一代 後三條院延久四年四月廿三日祭禮被立官幣使八十四代 順德院御宇建暦三年十一月十八日祭禮之日此時有故祭禮延引也被發遣勅使左近衛中將藤原資平朝臣爾來勅使無敢斷絕焉凡我山王祭禮之巍々堂々大都如斯呼與廢有時行藏任運故元龜兵火一發已來寶殿神與成灰燼然天正聖朝神殿祭禮粗再興之余記此始末及當時祭時現行之次第以欲備廢忘未果焉一日綠樹軒松順來于山房問我安茶話之次談及此事故宣余微志以勸記此事固辭之不取止焉故令錄此一卷以贈之余閱之則宛如見掌菓矣於于茲宿望一時遂畢蓋是非遂我宿望抑亦可爲後代之龜鏡乎故一唱三嘆之餘叨加一語以贈彼孫謀云爾

貞享五年著雍執徐癸亥念八日

台嶺蘇陀峯雞足院住

着岸奉^レ上^ニ神輿^一三宮之船後殿一艘着岸上^レ之也凡
還御入^レ夜之故高挑灯^二張宛各神輿之先持^レ之八條横
大路町筋家々燒^ニ庭燎^一也駕輿丁比叡辻村役送^レ之如
此二艘宛奉^レ上^ニ神輿^一來依^ニ爲比叡辻村駕輿丁人數
少分^一也毎度以^ニ同人數^一八條之下迦羅陀山地藏堂迄
奉^レ昇^レ之從^レ此山谷ノ公人請^ニ取之^一三院其各其社仗
者院々奴僕昇^レ之各本社之假屋奉^レ入^レ之

一翌日已刻社家爲^レ賽於^ニ社々前^一笏拍子神歌坐^ニ大宮
拜殿賽次神莊嚴之具以下撤^レ之也

一賽之事廿ヶ年餘以前廊神子參^ニ大宮^一有^ニ歌物^一

郭公深キ谷ヨリ出ニケリ外山ノスソニ聲ソ落クル

三 反

近年廊神子不參無^ニ其沙汰^一也

夫日吉山王權現卯月申の日の祭禮は往昔天智天皇の
御宇白鳳元年に我御神大津の八柳のかげより此山末
に迄づまりましますべきゆへ彼^〇所^〇之^〇誤^〇を相たまふ
とて田中の恒世の船に棹さしてさゝなみや志賀の唐
崎に御幸なりし時恒世船中にて粟の供御を奉りしよ
り毎歳此浦に神幸あるべしとの神勅より事はじまり

て一千餘年の今に至るまであめが下の大祀となり代
代の聖主いとも畏き詔を降し給ひて執行はせ給ふ世
にかくれなき神わざになむ侍るされば法印延全の
神代よりかはらぬ松もとしふりて御幸久しき志賀
のから崎と詠じたまひしは新拾遺集にえらばれ尊圓
親王の

久かたの天津日よしの神まつり月の桂もひかりそ
へけりとつらねたまひしは風雅集になむ入侍る玄か
れば代々の帝叡慮をかたぶけましゝていときら
きらしく執おこなはれし祭禮にて侍りしを去る元龜
のみだれに絶はて侍りぬる事いと口惜きわざなり玄
かはあれどいつしか和光のかげの照そひてふたゝび
神幸のあとたえせぬわざとなり侍る事誠に七のやし
ろの御恵に四の海も靜なる故なるべしかくてやつが
れかく神職の身と生れ朝な夕なにあがめつかふまつ
る事年久しくなりになれど限なき神恩を報じ奉るべ
きよしもなし爰に覺深大僧都閑話の折から祭禮の神
わざをわさるし付たる物やあると尋ね問たまふに其わざ
記したる記見及侍らず但往日の事は辨へ侍らねど當
時の現行はおよそ見および聞傳へ侍りぬといへばさ

次宮仕一人令持幣於白丁二人下馬場七本柳乘役船至唐崎也是則爲神馬還御祝言也七社宮仕三艘各番勤之都合小船八艘神馬之役船也往昔洪水之時神馬乘之例歟各立七社神號札一艘下八王子船由但早尾歟大宮役船社家乘之二宮役船宮仕乘之也

一神輿渡御已前桂枝一把三院其各其社宮仕其院々ノ棧敷持參之

次七社宮仕持神劔下馬場歟手鉾持白丁各乘神輿船也

次持七社枕木追々下馬場皆載移神輿船

一神幸事惣合鳥居基并大橋東兩所振指麾時此指麾下自七社各公一人附之是則神輿神幸爲遲速

也大宮神輿昇出下指麾許次振指麾時昇出二宮已下次第如此也

一社廿人宛爲前驅仗者先行次各々神輿神幸其道筋出惣合鳥居經馬場一鳥居大鳥居一行石占井在舊井方上明良自作道下神輿道兩社辻到七本柳奉乘船供奉警固之若徒同乘船從七本柳御船神幸先進次第唐崎之四五町許南留御船中央大宮左二

宮右聖眞子二宮北八王子聖眞子南客人八王子北三宮客人南十禪師但北十禪師南可爲三宮誤歟

神輿船各東向也七社神輿各供神酒奉幣祝言與粟津神供同時也各宮仕勤之

次粟津御供船湖上相對大宮船隔東方半町許指留次自粟津之幣帛載移小船持參大宮之船々人着素襖袴掛赤色襷船漕樣故實有之由粟津村代代年

寄役也大宮木守請取幣渡客人社宮仕々々取之渡社家々々取之則奉幣祝言次御供船着素絹五

條僧向御船備御膳次第海落七五三四十九膳御菓子神酒等也此間於御供之船中奏音樂名樂今日樂

人御供許ヨリ招請之令奏樂ナリ又御供船屋形之上着猿面猿形者出三人爲猿遊戲此時宮仕小船

上唐崎南濱向神馬還御移祝言奉幣神馬別當持參御幣七本七社次第渡之則神馬相副持參本社七社各

寶前牽神馬舍人二人令持轡以此幣社家賽也神供々訖御供船莊之幣皆投入湖中打鐘口唱念佛

也其時神輿船擊太鼓則還御先進次第奉着比叡辻村若宮之汀御船遲速有之時指留五社之船汀半町

許東也然後大宮船二宮之船先着岸二艘宛如次第

未尅宮仕三人柳宮參迎此內客人社宮仕一人奉幣祝言是每年同役也餘二人七社宮仕各番勤仕之渡御柳大宮令供奉也

未下尅警固公人并下坂本比叡辻仗者皆着鎧集來中鳥居基撞生源寺鐘二度同午神事作法警固中以三小坂中役者柳宮遣七度半使是則大柳渡御之儀可

被相催之由也依之柳渡御供奉次第先御幣一人次宮仕三人着襖衣帶太刀召具自次素襖五人行次四宮神人木村左近着袴肩衣爲路次行列警衛也

次幸鉾持之次大柳人夫等捧持之次衣冠神人一人乘馬指掛衣蓋也是膳所五所明神內各番出仕次總角兒童一人着赤色裝束乘馬是出松本之內次着布衣神人二人各乘馬一人人大津町人者松本平野馬場町ヨリ次着布衣神人一人

明神人ナリ然柳自作道入二華表上馬場經早尾社前渡御至大宮社以柳社東方遷置也次於三院棧敷前有獅子田樂之役人與卯神事同人也獅子舞田樂終先指麾次公人三院別當次六別當次十六谷公

人次三院本谷公人先年有出入故近年如此次五年寄次法師次上坂本仗者次濱分仗者渡也著衣公人三十餘著鎧公人百十餘上坂本仗者八十餘濱分

仗者六十餘都合三百人計也次七社駕輿丁七百人加

增共千人可有之歟警固後續上先大宮神與次第春日岡後昇出搦副轅此時比叡辻仗者列立大橋西拔刀劔警衛之敢不令人通路也然此間社家自大床下春日岡邊以笏拍子奏神歌是號春日祭上古伶人奏鳥向樂云々

一七社駕輿丁之事

大宮山中村二宮八瀬里聖眞子千野雄琴八王子修學寺村客人高島允太十禪師上坂本志賀三宮下坂本一申之尅神幸唐崎供奉之次第

先神馬七疋各舍人二人自惣合鳥居經二鳥居至子唐崎之五町許南濱有神號札板七本立所牽此所則神馬之別當飼馬也今日神馬事下坂本町々爲役調出

次七社御鉾七基持一本各自惣合鳥居渡大鳥居傍此所立御鉾但大宮御鉾下掛猿田彦面也神與渡御畢上八條町歸入各七社是依爲還御之道筋歟

次持七社之太鼓下馬場皆載移神與船次七社之神子中之鳥居邊迄供奉

次社家二人供奉各衣冠騎馬召具笠持白下馬場一人者留大鳥居邊一人者七本柳乘役船至唐崎乘移大宮神與船是則爲神供祝言也

期谷々公人參集故賜酒者公人着鎧持太刀一列立
庭上飲之三獻冷酒廻一反次引着煮染小串也次酒二
反順行然後公人前駟衆徒自馬場出仕各々入棧敷
其門公人立一列棧敷前警固之衆徒入棧敷畢公人退
下三院棧敷皆垂簾各々有饗應行器赤飯酒肴等從
谷谷一年行事及當番役者役之凡三院兒棧敷入有之
則公人前駟次小童子一人次兒作眉着長絹袴持一袖
扇一乘法師肩法師白布一端掛肩其上乘兒法師者公人未衆過
者云法師也次若大衆着白素絹次老僧徒行然兒從棧敷
正面入之令坐上坐三院互樽核等祝儀有之其日
棧敷饗應自兒許設之未剋自粟津御供船山門執
行代江一通持參棧敷

御供船於唐崎令着岸候早々御神幸所仰候以
上

四月十八日

粟津 御供本

執行代

同剋從座主宮幣使大宮參着々鈍色袍裳五條袈
裟御幣七本持參禰宜兼出仕相待

同尅社家二人衣冠樹下生源寺 自分之宅乘馬通政所之前
出馬場參候大宮其儀於樓門內西方下馬中古春

日岡邊下馬之由也五色之幣七本先持之是官幣之由
備寶前也次社家皆政所之前通馬場出仕先排大
宮寶前着坐微音祓讀之歟次社家取座主宮御幣七
社神與移祝言畢皆昇坐大床次座主宮幣使大宮階三
段昇時宮仕桂枝一把渡之則請取之退出今日上京
之由

私云幣使持參事是可爲官幣使代歟爾者五色幣
可備寶前筈也雖然用常幣也是誤歟右之幣共
皆社家調進之由重可尋之也

次大宮御寶前牽神馬一疋祝言有之
次神輿各莊桂枝宮仕調之

大櫛今日午尅許大津四宮松本平野明神粟津五所社神
人等供奉渡御神宮在作大津町奉行所同心二人曳
鐵棒先行同奉行所之家老二并手代侍以下二十人

許控後一對之長道具令持之從四宮大津町間供
奉到觀音寺町暫奉留櫛於此所此間同町鍛冶着
袴肩衣直幸鉾打撻治之爲舊例每年如此也治之
訖則奉行所之侍飯去町代三人供奉櫛到坂本蓋是不
可令路次之間人夫等作爲放埒之事爲警誠也

神供棚之莊同政所御膳

洗米 載四方三膳 四方三膳

土器尺和布柿

御菓子

入緑高内
饅頭花煎餅

酒入錫盃御幣十本

但五本宛
取分之

八階神子双方一人宛次下左右八乙女二人宛并居祇園宮仕御膳度々唱奉渡木守然乙女次第取次之供内陣

次禰宜一老下階二度奉幣祝言退出訖次亥上尅警固之公人皆着鎧持松明群參中華表下立列二行凡生源寺撞鐘二度并上町八條町庄町一度集三方也小坂中役者回左右揃定十六谷公人然先立獅子役人獅子所從馬場間吹笛擊太鼓次田樂法師次警固公人皆捧持太刀舉聲參時集政所公人乍着鎧一社一人宛持神輿先輦是云駕輿丁表張

次大政所於神輿御寶前獅子舞次田樂四社前次第然二宮之前而以舞納相圖公人呼勝滿々々四社駕輿丁揃歎一時勝滿答應其時自神輿於拜殿下急昇出鼠祠前迄神幸遲速先進次第也從鼠禿倉前如式法定次第渡二宮橋上夜宮道經總社之前惣合鳥居入御大宮拜殿然七社神輿列立于一所所謂大宮中央二宮東聖眞子西八王子良角客人乾角十禪師

巽角三宮坤角也公人皆持松明警固前後政所四節後殿供奉然於惣合鳥居基挑灯高指上時大宮方四節一度上之是謂今夜祭禮無異相濟之標示歎今夜駕輿之事四社谷々駈人爲役相催也云例參有作法事依之餘谷々公人加勢之由也

次祭禮神供排四社寶殿各供内陣八王子三宮大宮内陣一所供之客人社下殿供之惣御供所調進之是則年中八箇之内其一也社家三老迄各奉幣祝言二申日已尅於坂本町々濱擲七社神輿方船所謂寄合船貳艘打渡船梁其上敷板々上四方精進竹四本曳注連高札各書神號立之七社同之然七本柳濱寄置御船也擲御船下坂本町々之役也

大宮酒井町二宮四屋町聖眞子石川町八王子柳町客人大道町十禪師比叡社三宮大間町傳聞康保安和之頃龍頭鷄首之船泛湖水有神幸云々々衰廢可歎嗟之耳神馬船八艘同着此所是亦浦々之公役也

同申日當日大宮權現祭禮也早朝供七社御寶前神供并神寶等追々三院衆徒參詣拜賀法施神樂等也宮仕參候大床并七社神輿前

今日午剋計山門衆徒集三塔各々集來所及棧敷入之

挑灯侍以下同大宮方也今夜祭禮相濟歸下四節今無

其人其故護正院者矢嶋道節預勤之相生坊者北谷教

王坊預勤之此二人大宮方各番也金輪院者上坂本年

寄中預勤之南岸院宮下宗伯預勤之此二人二宮方各

番也同尅警固渡訖次社家參候王子宮之傍四社之宮

仕候神與前次社家以下部云役人都同次二宮方宮

仕起座役人參二音呼之則參拜殿次奠茶所謂召大

宮木守本社御茶二音呼之則持參宮仕各取之奉供

四社神與戴小四方土器也次社家四人一度以笏祝言畢退出

召役人參二音即小比叡禰宜亦參候於二宮前祝言

訖退出然後禰宜一人衣冠着座王子宮外陣凡奠茶調

之事二宮十禪師之內宮仕三薦所役也御茶園所在井神町字云茶木

未御供早朝參座主宮申御加持之事即貫主宮垂

翠簾加持之其間件御供棚昇之回庭上三遍然即

持參左麓

一酉剋祇園社宮仕幸圓持參未御供於大政所之重之

棚莊神曳注連御膳皆載之其儀

二宮 洗米載四方

薄濃 鏡一面 疊紙 紅筆一双 造雛一對

鳥形造物一 造花

右之分皆入緣高

御札 御幣 卯杖長一間餘

八王子 洗米載四方

十禪師 同斷

三宮 同斷 神酒入錫壹

右之神供祇園社宮仕於拜殿前渡當社宮仕々々取

之各奉供神與次召役人參二音禰宜則昇拜殿

取笏笏四人一度祝言退下次召役人參二音則小比叡禰

宜參拜殿於二宮神與前奉幣退出則是持參祇園

幣也三尺許之札板入錦袋幣持副也但札板祇園持

歸也

札板之銘

日吉社

未日右方神人

貞享五年

泉和元年四月日

卯月十七日

未神供調進之所烏丸通五條坊門上町云山王町

二十ヶ年許以前迄從此所調進之今祇園幸圓領

也

一同剋燒政所篝火四社木守役也

同剋排大宮之寶殿社家宮仕參候次持參祇園調進

神事也。先奉_レ向_二八王子三宮神與於寶前_一。移祝言有_レ之。次昇_レ出神與兩宮。先八王子次三宮也。然下_二八王子坂_一。神幸渡_二御二宮拜殿_一。坂道依_レ爲_二難所_一。神與後更_二舒鈴繩二筋_一。後扣_レ之。警固公人二宮方迄着_レ。鎧渡於_二于此_一。脱_二具足_一。登_二八王子_一。駕與丁勤_レ之人數同。二月神與上時_二社家宮仕神人等供奉并兩宮木守燒_一。篝火_二先持_一之。於_二二宮拜殿_一。供_二洗米於神與_一。土器七膳。是二宮々仕爲_二恒例役儀_一。調_二進之_一。木守神子宮仕次第取次奉_二供之_一。此間社家並居二宮鐘打次社家一老行_二拜殿_一。向_二南奉幣訖皆退出_一。

一今日自_二七社寶殿_一。取_二出神寶並神與御裝束莊嚴具等_一。然五社各神與奉_二假御裝束_一。是則依_レ爲_二今日午神事_一也。亦今日撤_二大政所御銚_一。鳥居代立_二精進竹二本_一。立所七所也。所謂唐崎鳥居跡二本下坂本兩社辻同。比叡辻若宮前同。大鳥居跡同。政所同。馬場收納所辻同。二宮橋北同。今日各立_レ之也。凡七所何上古鳥居跡也比叡辻同。村之年寄役兩社之神人中座土佐所役也。

一同日唐崎社之一町許西南鳥居跡精進竹貳本立_レ之。曳_二注連_一。但鳥居四十箇年許以前迄有_レ之。云々同所北精進竹七本宛南北七通合四十九本立_レ之。曳_二注連_一也。古

老所_レ傳是上古宿院之跡也。此所奉_二移_一神與_二之由_一云々。或小五月會時棧敷跡也。云々不_レ知_二二說何是_一。耳立_二此竹_一之事等。下坂本大門町大工町中嶋治郎左衛門大津神出町大工源左衛門各番相_二勤之_一。着_二素襖_一。所_レ建_二之也_一。

一未日五社神與奉_二御裝束_一。大宮聖眞子客人神與直奉_二移_一。大宮拜殿二宮方_二十禪師自_一假屋_二出_一之各奉_レ向_二神與寶前_一。掛_二轆八階_一也。然而小比叡禰宜參候移祝言。小比叡禰宜者。禰宜內四老也。

今日未刻二宮方ヨリ遷_二幸政所之拜殿_一。加_二八王子三宮四社神與_一也。駕與丁之事相催四節之警固也太鼓持枕木同_レ之。此但金輪院南岸院。此二人各番ナリ。今日卯神事是二宮祭禮也。上古卯時行_レ之故號_二卯神事_一。連々成_レ宵由申傳也。今亥刻許行_レ之。今日申刻四節警固大宮方并政所方各三十人許皆帶_二甲冑_一而渡_二兩所神與前_一。則退下其次第先立着_二素絹_一。被_二五條袈裟_一。帶_二太刀_一。是則山徒之護正院相生坊金輪院南岸院四節之內二人宛各番每年勤_レ之。然一人宛留_二兩所神與前_一。警固下部二人帶_二兵具_一。相從也大宮方樓門外上長道具_二二筋并高挑灯二張立_一之。侍以下十餘人并居_二此所_一也。二宮方並_二居政所拜殿傍道_一。具_二

例御供船嚴重着岸並諸役人參勤可爲御神忠候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

粟津御供本

一右之通客人社宮仕爲役儀到兩所祝儀饗應有之自今日粟津定神供調進之當屋村之役人等相集調之然取往還賣人之分一之由

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例前日未之御供嚴重令調進可有參勤候仍而折紙如件

四月十一日

執行代判

主御供本

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例神輿御坐船嚴重令參勤候樣被相催者可爲御神忠候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

辻江五左衛門殿

日吉祭禮來十八日以式日令執行候任恒例各嚴重參勤可爲御神忠之旨可被相催候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

日吉社司中

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候如恒例精進竹調進可爲御神忠候仍而折紙如件

四月十一日

執行代判

大藪奉行中

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候任恒例駕輿丁嚴重參勤候樣念入可相催候仍而折紙如件

四月十一日

執行代

公人下輪中

日吉御祭禮來十八日以式日令執行候任例駕輿丁嚴重令參勤候樣念入可相催候仍折紙如件

四月十一日

執行代判

下坂本年寄中

一今日丑日取替大政所之神繩同所立御鉾然亦曳注連於王子宮并拜殿是二宮十禪師之內宮仕三薦所役也
一四月當日祭禮以前午日申尅八王子祭禮也是云午

西方入ニ社正面日隱内ニ幸銚同入レ之也次社家下レ階於ニ鐘打之下ニ訖ニ祝言ニ畢退出然而先幸銚一基奉レ掛ニ早尾大行事畫像ニ則是先立持レ之次大松明櫛前後持レ之大櫛自ニ樓門ニ奉レ出次四宮并松本明神神人等乘馬供奉從ニ馬場ニ經ニ作道下神輿道自ニ下坂本ニ渡ニ御大津四宮ニ若濱邊洪水之時者四ッ屋ニ奉ニ乗船供御也坂本大津道筋家々燒ニ庭燎ニ也今夜宮集會大官御供所頂ニ戴神酒ニ祝儀有レ之

四月祭禮以前丑日從ニ山門ニ獻上 座主宮之一通

日吉祭禮來十八日以ニ式日ニ令ニ執行ニ候前日未御供并奉幣役者嚴重有ニ參勤ニ之樣被ニ仰付ニ者可レ爲ニ御神忠ニ之旨依ニ衆議ニ令レ申之由 座主宮御前御披露所レ仰候恐々謹言

貞享五年四月十一日

執行代判

菅谷大輔法印

座主宮 奏聞之一通

來十八日例のごとく日よしさいいとりおこなひまいらせ候この御心え候て日ろうまいらせ候めでたくかしく

勾當内侍とのへ

御 諱

女房奉書

文のやう日ろう申入まいらせ候來十八日日よしのさい禮取おこなはれ候よし御心えあらせられ候此よし心えられ候てぎすの宮さま御下向に付それ故しんもんさまより仰入られ候との御事御もつとも思召候このよし心え候て御申入まいらせ候かし

御ちこの中

御日ろう

一丑日翌日從ニ座主宮ニ執行代御使者到來其口上菅谷大輔申云昨日書狀之趣日吉祭禮以ニ式日ニ被ニ執行ニ之旨 座主宮御前遂ニ披露ニ候之處有ニ御許容ニ即日被レ經ニ奏聞ニ之間 勅許相濟候此旨可レ被ニ相心得ニ候依レ之被ニ遣ニ使者ニ由也

日吉御祭禮來十八日以ニ式日ニ令ニ執行ニ候如ニ恒例ニ大櫛被レ令ニ調進ニ嚴重參勤可ニ相催ニ者可レ爲ニ御神忠ニ候仍折紙如レ件

四月十一日

執行代判

大櫛本

日吉御祭禮來十八日以ニ式日ニ令ニ執行ニ候如ニ恒

日吉祭禮記

大政所華表之跡曳神繩事

正月十八日七社牛王二通并櫛十二枝掛之是二宮十禪師兩社宮仕之内三薦各番調進之惣而祭禮之儀式三薦勤仕之

年之祭禮始之事

二月二申日辰尅八王子三宮兩社神與各自假屋本社拜殿江奉移置之八王子駕輿丁者西谷無動寺飯室谷公人三宮駕輿丁者北谷東谷西塔北尾橫河谷内公人等舊例而勤之兩宮々仕相從參著本社是年之祭禮始ト云ナリ

直櫛事

三月廿八日頃山門山内何處大櫛立木有所直木伐櫛飯室道廣芝松迄出置也同月晦日早旦於廣芝備神酒於櫛然櫛調進當番宮仕祝言余持七社宮仕此所出御迎也人夫十人計捧持櫛宮仕神子各供奉奉移大宮社東方大宮木守路次内橫大路迄擊太鼓也櫛調進

之事五社之宮仕内三薦各番相勤之今日此所持參之幣四手神酒以下調進之同人役也二宮十禪師兩宮除之蓋午神事卯神事役儀有之故歟今日七社之御寶前各櫛二枝立之小社各同之也

祭禮事始

四月一日七社宮仕集會御供所有三神事役儀等差定之祝儀但七社御供所各番也其宮三薦勤之

供備神供事

四月三日酉尅於大宮下殿供神酒於廿一社然櫛調進之宮仕祝言大宮寶前同備之也七社宮仕皆參候大宮下殿今日神酒一樽足打二膳土器廿一大豆壹升和布十把自執行代櫛調進宮仕江被下之是則今夜神供用也

大櫛爲御迎參着之事

同尅自天津四宮爲大櫛御迎參着四宮生得神人一人松本平野大明神之神人一人各着布衣路次之間騎馬樓門之外下馬然着坐大宮拜殿正面次社家一老一人七社宮仕各着坐大床次客人社宮仕下大宮階坐拜殿與御迎之神人勸杯三度訖亦昇大床復坐次人夫等立松明捧持櫛回大宮社之後從

月能桂

原本目錄無之今私加之

大政所華表之跡曳神繩事

年之祭禮始之事

直神事

祭禮事始 供備神供事 大櫛爲御迎參着之事

四月祭禮以前丑日從山門獻上 座主宮之一通附

座主宮 奏聞之一通并女房奉書事

執行代下行書大櫛本 御供船 未之御供 神輿御座 船 社司參勤 精進竹 駕輿丁二通 取替

大政所之神繩事

午日八王子祭禮之事 午日七社寶殿取出神寶事

午日鳥居跡立精進竹之事

未日五社神輿奉御裝束事 未日二宮祭禮之事

未御供之事 一未日未刻燒政所篝火事

同剋莊大宮神供事 二申日搦七社神輿船事

同日大宮祭禮之事 同日午剋山門衆徒集三塔事

未刻自粟津御供船差出一通

一未刻座主宮幣使參着事

大櫛渡櫛宮事

未下刻大櫛渡御之事 七社駕輿丁之事

申刻神幸唐崎供奉之次第 粟津御供船之事

翌日巳刻撤神莊嚴之具已下事

神宮御事抄所謂神宮御抄是也未詳作者頃閱ト
部氏藏本ニ先代舊事本紀卷第三奧書曰文永七年六
月十一日雨中天照太神御事抄出畢石上神御事抄畢
兼文云々依之考彼石上神宮御事抄者文永七年ト部
兼文述作歟斯益本文曰兼文案之爲據又曰件文案
之當件文作兼文舊本有膽寫之脫誤檢ニ本書
而以ニ朱筆訂正之云于時實永元年歲次甲申孟
夏初七書之又乙酉初春下六再校之

三枝益人今出川

一 友花押

安也人陽氣曰魂々運也言招ニ離遊之運魂ニ鎮ニ身體之中府之故曰ニ鎮魂ニ在ニ女曰ノ巫

神祇令曰中冬中寅日鎮魂祭集解云上卯之次寅也

仲冬十一月

貞觀儀式云鎮魂祭儀以ニ安藝木綿^{十カ}二枚ニ實ニ於宮中ニ進置ニ神祇伯前ニ御巫覆ニ字氣槽ニ立ニ其上ニ以ノ杵撞

槽每一度畢伯結ニ木綿ニ說御巫舞訖次諸御巫猿女舞

江次第卷十三鎮魂祭次第曰十一月鎮魂祭^{中寅有ニ寅行}

之宮內省東第一間立ニ櫓棚ニ置ニ祭物ニ又倚付ニ鈴賢

木ニ其西安木槽^置御巫衝ニ字氣^{衝ニ字氣神遊儀也神代上}

槽上ニ神祇伯一人進結ニ糸於葛宮^{卷覆槽置義以ニ賢木ニ衝也}

死之緣也用系自^{結糸自ニ至ニ十字麻志}延喜式具見タリ

延喜式曰備前國赤坂郡石上布都之魂神社

新撰姓氏錄曰大鷦鷯諡仁德天皇御世達ニ倭賀布都斯

神社於石上御布瑠高庭之地

神代卷曰素盞烏尊拔^ニ所帶十握劍^斬蛇云々一書曰其

斷^ニ蛇劍號曰^ニ蛇之龜正^{此今在ニ石上ニ也}一書曰素盞

烏尊斷^ニ蛇之劍今在ニ吉備神部許^也古備者今備前

古語拾遺云素盞烏神自^{天而降到ニ於}出雲國簸之川

上^{以ニ}天十握劍^斬八岐大蛇天十握劍其名天羽羽斬今在ニ石上神宮

兼文案^之蛇之龜正是素盞烏尊所^持十握劍也一名天

羽羽斬爲^ニ神體^{以ニ}仁德天皇御世^{大和國石上布瑠村}

鎮座所謂石上神宮是也初在ニ吉備神部許^哉所謂備

前國布都之魂神社是也

日本書紀^{第六}曰垂仁天皇三十九年十月五十瓊敷命居

於茅渟^{河內國}荒砥川上宮^{作ニ}劍一千口^{因名ニ}其劍^{謂ニ}川上

部^{亦名曰ニ}裸伴^{藏ニ}于石上神宮^{也是後命ニ}五十瓊敷

命^{倅ニ}主^{石上神宮之神寶ニ}八十七年二月丁亥朔辛卯

五十瓊敷命謂^ニ妹大中姬^{曰我老也不^能掌^ニ神寶^自}

今以後必妹主焉大中姬命辭曰我手弱女人也何能登

天神庫^{五十瓊敷命曰}神庫雖^{高我能爲^ニ神庫^造梯}

豈煩^{登^ニ庫}乎故諺曰神之神庫隨^{樹梯}之此其緣也然

遂大中姬命授^ニ物部十千根大連^{而令^治故物部連等}

至^ニ今^{治^ニ石上神寶^{是其緣也}}

石上神宮御事抄者神宮齋主首物部連光由相傳之

本也諸神記上^{卜部兼}敦作^載神言^{宮之誤}御抄曰石上社素盞

鳥所^持十握劍也一名天羽切爲^ニ神體^{云々}古語拾遺

素盞烏天十握劍^{其名天羽斬}今在ニ石上^{觀^ニ此案^之石上}

石上神宮御事抄略曰石上神宮御抄

貞觀九年格曰得神祇官解一併坐大和國山邊郡正一位勳六等石上神社一座

延喜神祇官式曰大和國山邊郡石上坐布留御魂神社一座

名神大月次相管新嘗

舊事本紀曰建甕槌男神亦曰建布都神今坐常陸國鹿嶋

大神亦石上布都大神是也

崇神天孫本紀

又曰磯城瑞籬宮御宇天皇御世遷建布都大神社於大

倭國山邊郡石上邑則天祖授饒速日尊自天受來之

天璽瑞寶同共藏齋號曰石上大神

又曰天璽瑞寶所謂贏都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉

一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比

禮一是也天神御祖敎詔曰若有痛處者令茲十種謂

一二三四五六七八九十而布瑠部由良由良止布瑠部

如此爲之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣

又曰神武天皇元年辛酉十一月丙子朔庚寅宇麻志麻治

命奉齋殿內於天璽瑞寶奉爲帝后崇鎮御魂祈

禱壽祚所謂御鎮魂祭自此而始矣其鎮魂祭日者猿女君等牽百歌女舉其布瑠之言本而神樂歌儼尤是其緣者也

古事記卷中曰天照太神高木命二柱之命以召建御雷神

而詔葦原中國者伊多玖佐夜藝帝阿理祁理云々汝建御

雷神可降爾答曰僕雖不降專有下平其國之橫刀上

可降是刀一名云佐士布都神亦名云建布都神亦

名云布都御魂此刀者坐石上神宮也云今按本書名以下割注也

日本書紀卷三曰武甕雷神平國之劍號曰誦靈

件文案之武甕雷神平國之橫刀訓號曰誦靈此云布

是即建布都大神之神體也以崇神天皇御世大倭國

後改山邊郡石上邑鎮座所謂石上神宮是也亦曰石上

振神宮

先師之說布都御魂者神代三劍其一也天羽羽斬亦然

又櫛玉饒速日尊自天受來之天璽瑞寶是即布留御魂

神之神體乎鎮魂祭之日神祇中臣持著鈴賢木及切木綿呼曰十種神名振之結木綿故各云布留御魂神歟

本書紀履中天皇紀曰倭石上振神宮又顯宗天皇紀曰石

上振之神相所謂石上振神之謂此以崇神天皇御世鎮

座

養老職員令曰神祇官伯一人掌鎮魂祭御巫事謂鎮

義解

之才今度進退不_レ出_二臆見_一又所_レ記偏閣下御說耳仍
應_二賢意_一不_レ能_二固辭_一謾呈_二筆紙_一獻之恐懼不_レ少者也
左近權中將藤原定基判

自舞殿東邊着隨一便宜一四方者爲一舞人參進之路一問有煩故也又得一賢慮一丁

次陪從羅列于中門前庭一西面發一歌笛聲一次舞人進北

駿河舞東上

次求子西上相對之舞圖歌了定基以下退出

次定基以下入御前儀一仍略之歌了定基以下退出

之儀云々此間時刻推移赤鳥停午又懸行列參上御社

其道東行頗向一丑寅三四町更赴西又向北到流木社邊猶

北行到上御社於一鳥居下興入休所二鳥居之內一以樂屋爲一

其所垂次社司供一神膳一聞一供畢之由一定基着輕幄一解

除其儀先洗手又無役人仍令隨身役之凡贖物以下如下社一但此社以氏人爲一陰陽代一先例此社用一安家陰陽師一定事也云々

次參進橋殿座昇降起戶一〇戶字一各有一揖一恐誤一

此殿或號舞殿其座向廊門斜敷之舊例對三片岡

山設之今度定基依有存旨改之得此事實內々然神

主職久稱先例一不承引一定基間云背一本宮一對三片

岡山其故如何其答唯存先例一耳別無一子細一云々仍

定基略述三所存一即承伏了遂向一廊門一敷之其座斜也

間也敷之

次讀宣命其儀如一讀畢後氣一色于神主職久一

神主參進定基授宣命一置笏以一右

此間內藏助捧幣幣案於橋殿前庭一入一廊門一授一神主

件宣命副幣物納神殿

小時神主歸出於三片岡社前石上申返祝詞拍手定基

應之次神主取葵持來插白木杖一兼社司置幣案上後日氏人

雖之其故者件葵佳所懸於神殿御帳也納幣物而後即取一葵持

謂失禮歟然無一桂定基間云桂如何神主答一失念之

由命早速可持來之由神主歸參社頭更取之持

參了定基插冠始所插之起座停立土屋邊次引回神

馬三回畢定基令立胡床於土屋西軒下着之

次東遊二曲如三下社歌舞事了歸洛舞人參一〇陰恐誤一從屋從

檢非違使左馬寮使

凡祭日有出立儀而有神館儀及還立事件疊祿

依無用脚一切不能設之加之每事略儀甚如

無威儀唯時勢令然歟更無餘儀暫開其端而

後世耳

夫溫故而知新者古今達道也此祭儀所載諸記延喜以

來既三變歟應仁大亂之後中絕二百餘歲方今與廢繼

絕彼延喜天曆盛時應永長祿衰代惣不合今日之儀

況無可見舊記之巨細到此時節之儀則實在閣下

御扶持一定基拱手而勤之不然者何堪一此大事一哉然

當日之儀可令注進之由蒙嚴命雖非不顧鳥焉

る心也未_レ得心_一雖_レ然不_レ及_二再往問答_一

抑朝野群載此 宣命作_二可有二字_一是又難_レ解尤

不審事也

讀了押_二合之_一小時祈念 宣命趣是嚴訓也更卷_レ之

過半卷_レ之後打_二懸左手_一卷了又取_二副笏_一二拜頗願

氣_二色于內藏助_一此間立南階下更返_二授_一宣命_一畢

次內藏助由久取_レ幣前寄懸之授_二禰宜久祐縣主及祝代

河合社祝秀久縣主_一祝惟真自去比小時禰宜歸出傳_二

神宣_一其儀有揖

次祝代復座申_二返祝詞_一不_二拍手_一如何失念歟仍定基又不_二拍

手_一

愚昧記云仁安二年十月十五日今日於_二院被_一立_二十

二社奉幣使_一今朝越後前司賴季過_二門前_一示云爲_二賀

茂幣使_一參仕而告文給_二一通_一如何答云一通所_レ給也

先參_二下社_一讀_二宣命_一了社司取_レ之書寫返_二授之_一次

參_二上社_一也

是賜_二宣命一通_一例據_二此說_一則近衛使於_二何處_一可

_レ受候哉雖_レ勘_レ之先例未_二分明_一依_レ之密々於_二閑處_一

可_レ受之由得_二嚴命_一而仰_二內藏寮使_一畢然今度作進

次第准_二嘉保二年行幸儀_一內藏寮使持_二參於舞殿使

次將又直返_二與內藏助_一畢

中右記嘉保二年四月十五日今日賀茂行幸也上卿着

座內記奉_二宣命_一取_レ苜歸兩段再拜讀_二宣命_一又兩段

再拜_二宣命返_一給內記參上御社

按此儀甚不_レ穩彼嘉保之儀者上卿對_二內記_一也此

祭者以_二近衛中少將_一對_二內藏頭助_一其品大不_レ異

況舊例內藏頭參仕之時位次或在_二使次將之上_一件

時甚有_二煩歟今日_一以_二殿上次將_一對_二地下諸大夫_一

猶用_二此儀_一雖_レ似_レ無_レ煩內藏寮使何用_二上卿對_一

內記_二之禮_一乎殊不_二相似_一歟雖_レ然作進次第如_二此

儀_一難_レ改_レ之仍暫從_二此儀_一耳是趣又得_二賢慮_一畢

次祝代秀久縣主進_二葵桂_一持白木杖持參舞殿定基插_レ頭_二之其插

記_レ左

久壽二年四月廿日台記賀茂論祝持_二插_一葵桂_二之杖_一白木

進出跪_二橋北頭_一申_二還祝_一畢昇_二自_一東西北第一間_一

獻_レ之餘取_二葵桂_一先以_レ葵入_二巾子_一次以_レ桂插_二冠後

如_二物忌_一像雖放件所指煩僅插之暫祝退歸

即起座降_二南階_一停_二立橋殿邊_一是非舊例隨使候此所

次馬寮使引_二回神馬_一三回

定基令_二手振立_一胡床於舞殿北階東掖_二件胡床懸_一約皮_二着_一之

踏_二其

凡此祭儀往古向_二內藏寮_一脩之儀或云內侍已下與_二使等_一向_二內藏寮_一解除又天元五年小右記云申時許有_二禊事_一禊畢向_二一條大路_一云々不_レ注_二其所_一然件記趣如_レ不_レ向_二內藏寮_一差_二府生_一遺_二內藏寮_一受_二葵桂_一之文有_二之仍知_一不_レ向得_二賢慮_一之處准_二關白賀茂詣及春日祭_一於_二社頭_一而可_レ循之由嚴命也即命_二其旨於兩社司_一畢次入_二廊門_一

欲_レ昇_二舞殿_一時須_レ撤_レ劔而讀_二宣命_一是依陰神也今日忘却不_レ撤_レ之後日嚴命云不_レ撤_レ之又_一說也

昇_二舞殿南階_一昇階之進_二有足禮記曲禮云上_二東階_一則先_二右足_一左右足_二是又所謂拾級衆足之意也着座揖

凡羽林例不_レ揖之由見_二薩戒記_一是禁中儀歟又一說非_二儀式官_一者不_レ揖云々但讀_二宣命_一之時尤可_レ刷_二威儀_一歟揖者有無之事尋_二申閣下_一仰_二可_レ引_二勘_一之由乃於_二賢前_一引_二勘_一諸記之處如_レ此少事具不_レ記之且參議要抄以下諸記有_レ揖所々多略而不_レ注_二其由_一也嚴訓云尋常奉幣之儀不_レ因_二儀式官_一惣有_レ揖況讀_二宣命_一之時無_レ揖之狀如何所詮可_レ無_二巨難_一也仍起居昇降皆揖_レ之

于_レ時內藏寮使助由久持_二參宣命_一此事先例不_二分明密々也然又關白_一引_二中右記_一仰_二定基取_一宣命_一取_二副笏_一二拜此儀其無_レ便歟巨細注_二左畢_一

次置_二笏右_一

次披_二宣命_一頗向_二右方_一披_レ之押合前爾モチメクラ不_レ發_二音抑_一此事近來東照宮奉幣使極高聲讀_レ之甚不_レ可_レ然引勘之處諸記注_二數音之由_一但其聲甲乙之程極不_レ注_レ之也然間觀音寺大相國紀注云永享八所年穀奉幣八幡使也被_レ凡神社宣命讀_レ之注_二不_レ出_一聲之由_二因_一之不_レ發_二音_一也云

間不_レ掩_二面少押下而讀_一之異_二於尋常儀_一是故實由稱_二前大納言實教卿說_一權大納言資熙卿談_二之乃尋_一申閣下_二之間舊記分明所見有_レ之哉旨被_レ尋_二仰權大納言_一畢答_二申分明之由_一仍可_レ用_二此儀_一之旨有_レ仰也頗敬屈讀_レ之

宣命詞云用_二紅梅紙_一是賀茂社例也天皇我御命爾坐掛畏岐加茂乃皇太神乃廟前爾恐美恐美申給_二者久_一申久太神乃助給爾護給爾依氏天皇朝廷者平久大坐氏食國乃天下無事久可有_二志爲_一氏奈常進_二無宇都乃大幣_一乎從五位下行內藏助藤原朝臣由久爾令捧持天走馬進_二免難_一恐美恐美申給_二者久_一申

元祿七年四月十八日

右訓點尋_二問大內記長量朝臣_一處如_レ此定基問云可_レ有_二二字如何桂下答云天下事なくあれといへ

已上御前儀勘合右兩記、加取捨而可用之由嚴訓也

抑舞後可被覽馬歟今日不騎馬仍無此儀又無無人陪從已下被祿之事

云入三閑所一挿頭葵柱其挿頭見社頭儀抑上古向內藏寮更云差三府生公助道內藏寮令受葵柱之或差三府生受之歟天元五年小右記等當世無被寮仍自家密々用意

此間檢非違使及馬寮內藏等使整列渡馳道先看督長八人二行各具次檢非違使四位二人右衛門尉貞弘宿禰左衛門尉

二人白丁一人次御幣下御社料內藏寮史生捧之衛士次御幣上卿社料六人白丁二人前行次馬寮使左馬允源友清六位也

次神馬二人着素襖次馬寮使左馬允源友清六位也次近衛舞人先行從者如先次前驅二行次定基次隨身

使二行次手振二行次有次雜色二行次陪從從者如先次內藏寮使白丁二人具之

西宮記云近衛使參射場就內侍所受祿近代天皇御三南殿御座在兩庇中間立馬形御屏風二帖廣延御出

置御內侍出上卿昇着座西上北面出廉昇異他男女使馬手振次第渡主人不渡入自日內藏近衛衛府有馬寮宮之

男使命婦宮之使圍司等馬從渡延喜天曆不歸渡內侍取御劍天皇入御

使使居長橋歌人立東殿御下給御衣舞人給第布以三此說見之者就內侍所受祿之日不召御前旨分明也然況西宮有主人不渡之文但此度因關白基命渡馳道了

各經三南殿前出東門去御所三十步而定基乘駕馬又因關白命不乘之凡路道次第如渡三南庭注云舞人已下道間騎馬東行到東河塘以西更北行出今出川東頭渡鴨川預設橋參下御社到鳥居邊下與即入鳥居洗手

兼而社司設之輕輦南也臨期無役之人仍俄令隨身役之畢

着輕輦輦體無異設假屋三面垂幕東一方囊之其座東面敷二帖一枕座前有轍是陰陽代座也不着座之間不揖依假座也

次脩禊其儀陰陽代凡社例用賀家陰陽師云々今度自社家相語行此儀進進贖物圖之略之陰陽代取大麻副祇付木申故也

祇中臣定基先取解繩解之其儀作持笏以左手取解之二度解之也高天原讀上之時解之故實也云々

次取人形撫之次散々米祇畢後陰陽代進大

麻或取手歟今度不取之作令息之一定基懸笏持陰陽代懸笏是一撫也陰陽代取大麻退去更撤贖物畢已上悉嚴訓也

其儀俊清取_レ盃土器進居_二座下方_一取_レ瓶_子相從_二先受

酒飲_レ之更又受_レ酒授_レ之_之置_レ筯取_レ盃也_{定基此間頗居向定基取_レ盞飲}

之置_二座右_一_{此間後清退入}

次頭左中辨尹隆朝臣取_二勅祿_一紅打御被_レ之_{其儀頭取_二祿}
方待_レ之到_レ使前取_レ直_二之_一以_レ襟向_二定基取_レ祿懸_二左肩_一執_レ筯

起_レ座

其儀少居直_{頗向_二西方_一是座}故也先置_レ筯左手ヲアヲノケザ

マニアコメノエリノシタノ方ニサシ入テソレヲウ

クルガゴトクシテ右手ヲウツムケザマニスリテ取

テスグニ肩ニウケカケテ左手ニテスソノ方ヲオサ

ヘテ右手ニ取_レ筯起_レ座也

降_二段階_一跣出_二砌外_一四五尺許向_二御所方_一乾拜舞其

儀如_レ例

次退_二出於長橋外_一著_レ沓氣_二色子隨身_一第一者以_レ祿授

之乃令_レ懸_レ肩畢

仁平元年十二月十一日_{使_二左少參_一內侍所_二申_一罷由_二}

次進_二弓塲_一_{西庭發_二歌笛歌_一此間藏人垂_二庇御簾_一主}

上出_二御晝御座_一頭朝隆朝臣奉_レ仰召_レ使々々進候_二

長橋代_{釣殿馬道北板上也}豫敷_二管圍座東西_一舞人陪從經_二馬道_一立_二釣殿_一

於_二東砌邊_一陪從發_二歌笛聲_一舞人於_二庭中_一舞_二求子_一

主殿官人曳_二此間賜_二肴物_一_{細折櫃衝重_二合殿上人五位二人}

次朝隆朝臣勸_二盃_一_{藏人右衛門佐忠親_二依_二管圍_一真_二舞人陪}

從退出之儀_二飭馬引馬_一_{各_二自_二馬道_一引入_二廻庭中_一}

之後自_二本路_一引出之間朝隆朝臣取_二御柏_一_{振_二振_一着}

使々取_レ之掛_二左肩_一進_二出砌外_一拜舞_二不_レ着_一退出賜

沓賜_二御柏於隨身_一_{先_二是出納給_一舞人陪從一員官人}

治承二年十月卅日_{使_二右中將_一良通_二使參入舞人在_一使前_二陪從}

謂_二右左_一隨身雜色小舍人童飭馬引馬々副手振等相從

參入使進_二立弓塲代_一_{西中門_二外北殿_一陪從發_二歌笛音_一藏人頭}

左近中將定能朝臣奏_二事由_一即告_二召_一之由使垂_レ裾入

自_二中門北小戸_一候_二中門廊緣南妻_一_{懸_二長橋_一豫敷_二圓座}

賜_二肴物於使_一_{殿上五位二人役_二次舞人入_一自_二中門_一進_二前庭_一舞_二求子_一此間}

五位藏人基親取_二瓶子_一使飲畢置_二盃於前_一次頭中

將取_二勅祿_一_{紅打柏_二領後開_一重御單被_レ出_レ之_{出_二自_二殿上之}}

戸懸_二使肩_一使左手取_二御衣_一右手持_二筯下_一自_二緣南

妻_二不_レ着_一進_二出砌_一_{四五尺許向_二御前方_一北拜舞如_二恒就_一右}

廻出_二自_二初小戸_一着_レ沓_二令_レ着_一也_{經家朝臣賜_二祿於隨身_一上薦_二武}

子宗雅傳_{取給_レ之}

元祿七年加茂祭記

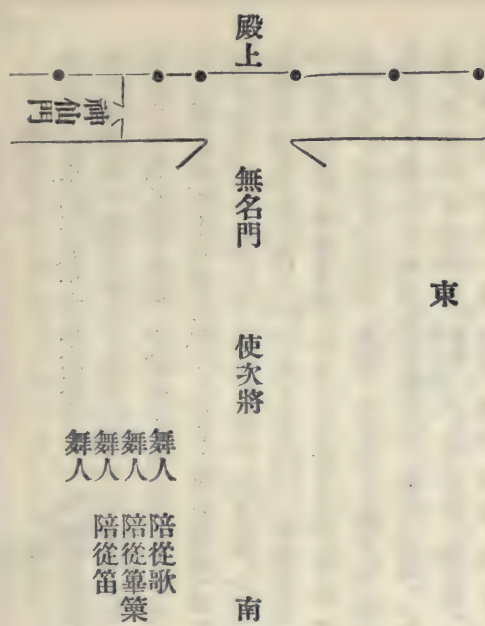
六百六十七

代舞人陪從以下悉屬從

治承二年玉葉云自三條坊門西行到西洞院院口一
即下馬布衣共人留此所云々如此記者布衣輩不
可入陣內事勿論也但今度依渡南庭悉召具
之了

弓場代列立儀圖之

使次將立無名門前一許丈舞人陪從各羅列使次將計陣座
壁第二柱之程立舞人者當宣仁門陪從立舞人之
後也凡舞人以下列差退于西南令立之是殿訓也



次陪從發歌笛一曲畢藏人右中辨俊清出逢定基
奏參社之由其儀一揖俊清歸參御所此間垂中殿御簾
以三大床子圓座敷之云々
天皇御簾中俊清歸出告召之由一定基答揖而參進直
昇長橋假階不揖

文永十年四月十五日吉續記云使左少將隆久參弓
場經賴出逢次歸出仰聞食之由次昇長橋

着圓座

其儀頗向乾着之向御所方也是今案也且得賢
慮畢又繆裾不揖是爲羽林例之由見薩戒記矣
先是隨身取沓退入了

次陪從發歌笛立長橋內北面西上

次舞人進庭中舞求子祖楊掃笏

次此間賜着物衝重二合六位藏人二人役之

件着物不立箸此事立哉否舊記不注之而江家次

第出立儀一二獻之間無下箸之文到居粉熟下

箸之由注之又六條右大臣顯房公說云着者以手取

之不用箸之由見世俗立要集已上御厨手所預以

此旨得賢慮而用此儀畢

次藏人辨俊清勸盃

胡床乍開之捧之

抑手振裝束仁平元年台記云紫褐衣

以三村濃
糸爲括

朽葉末濃

袴青半臂同下襲濃蘇芳打衣青單白下袴冠細纒老懸

葉脛巾布帶凡稱紫褐者濃蘇芳也治承二年十月卅

日玉葉云紫褐其色蘇芳也云々仍以蘇芳極濃染之

偏如紫也又不指括之事見同記仍不指之袴者

舊例末濃也仁平隆長見治安元泰通見吉治承顯家見山

槐等手振用朽葉末濃治承二良通玉葉用青末濃

仍可見用朽葉之由有嚴命而尋求之處其難得剩

偶雖求出之古物殊見苦然間用蘇芳末濃之由

見治承四年山槐記使少將
基家用之更得賢慮而

用蘇芳袴畢如下襲惣難調出仍准隨身只用

單許又可見着藥袋歟然其體不分明且爲唐

鞍之具由見治承玉葉不乘馬者無益歟之由存

之略之藁脛巾布帶等依不詳同省之畢凡今度

儀同用脚微々每事不具無力事也冠又挿葵桂畢

小舍人童一人

先例六人也又省略玉葉云薄物萌木狩襖袴結紅葉付

之歟冬打薄歟冬柏黃單毛沓今度用薄物狩衣萌木

略柏只用單許毛沓其體不祥略之抑結紅葉事

先蹤不分明凡稱結花者當世如杉目扇以絲造

花形付之准此儀以赤絲作楓葉付之以紅

紙結髮根以同紙書物忌二字結副之持杉目

扇皆據
玉葉

雜色八人

玉葉之裝束半蘇芳狩衣無裏袴濃打出柏黃柏青單衣

造菊白付之今度柏單等略之

此外走童十二人執物舍人四人具之然延應二年

制符走童一切可停止之由載之見平又執物者

皆馬具也悉不具之或人難云每事省略之間童雜

色等風流不相應歟定基答云全不可然往古諒

間年必止之治承五年吉記云依諒間無風流

云々仍殊令付花等丁

次舞人陪從起座舞人直出門外陪從
列庭中四面南上

次定基起座隨身乘駕陪從殿中之間
取香

先例參內之時用車今度用轅

轆轤參內舞人先行召具素襖二人陪從
白丁二人

到本院御所

前下與下三公門
之意也過門之後更駕之赴闕至正親町

邊下與近來無立石
計其程步行入左衛門陣進立弓場

款冬衣青單蒲萄染奴袴藤原業清家勾當範綱蘇芳布

狩紫奴袴萌木衣紅單建久十年二月廿二日明月記

云於藤杜騎馬行列先幣和琴次前駢二人源長邦

八條院藤光資布衣半靴例鞍平鞞左中辨馬長邦

乘光資乘白馬

次隨身四人

凡中將具四人一是定員也其裝束者細纓冠插葵桂蠻繪

褐押獅子丸左獅子右熊是又宜例也但件紋當世付

種々花又用金薄尋之處二條御幸之刻寬永所用

之遺風遂以爲俗習然未知其據也又法隆寺舞

樂裝束之中有二件物皆採色也雖古物猶不足

爲規模仍得賢慮之處可引勘之由有仰而

賜舊記二卷御視行幸服筋記乃考之以銀薄押獅子丸

舌口之中付朱砂之由見壽永元年信範卿記仍

用此儀了著蘇芳袴舊例多蘇芳末濃歟安元二年

左中將泰通朝臣見古記治承四年左少將基不見山所

相具隨身皆用末濃然件物俄難得之嚴訓云蘇

芳袴雖非末濃可無巨難也仍用之帶劍無尻

難得之壺胡鐐指白羽矢舊例左用驚羽是自閣下

拜借之又用紅單而不著下襲此事見仁平台

記一件記云取要

仁平元年十一月十五日春日祭使左少將隆長賴長公男隨身裝束獅

子蠻繪布袍二藍末濃狩袴濃打白衣下袴懸緒無布紋

帶冠老懸泉脛中淺沓野劍指尻鞘其樺卷鞭插腰

右記不著下襲之由也仍略之又插鞭事依

不勝馬無其儀矣又用絲鞋

手振二人

江家次第云手振十二人下臈四人持物鞭宮笏宮胡床

豹皮毯代外年々日記注十二人之由今度每事依

不具僅具二人是爲取物也其所持物所謂如鞭宮笏

宮爲乘馬也仍不令執之又毯代者其調法未

詳依嚴命略之胡床者常所用節會也以白

木造之上引革緒即位之時黑漆也打金銅金物見指

圖豹皮者即位所用虎代也染帛畫豹毛同見指圖

豹皮持有兩說一歟

一說仁治三年十月廿一日御視行幸陽龍記云執物持樣事

豹懸左肩以尾方爲後一說寬元四年十月廿四日御視行幸同記云懸豹皮於扇

右按兩說手振所持之扇其體未詳仍以仁治

儀用之

用淺沓之儀甚不可然也此陪從裝束蠻繪袍關腋也其色繪得關白寶察而下知之陪從裝束蠻繪袍關腋也其色繪九舊記注蠻繪之袍由不載其色青朽葉下襲紫未濃袴以所用舞樂之蠻繪袍被准之云々已下舞人以下裝束爲武家沙汰關白其說也凡禮袴者使次將與之今度依無出之不及其儀也著淺沓一舞人陪從共取笏此事臨時祭記求子之指細拔笏之丈有之仍命也地下輩猶准之歟定基答云誠以件儀難准之但出立間大將着座賜孟於舞人之時任一府生一舞人取笏拜之說見江家次第雖歟之由命之

次授三葵桂一各插頭之

江家次第云往年參內之後到內藏寮者座懸葵見山立儀然往古件寮在近衛世俗稱出水南堀川西今尋其所市鄭比軒更無寸地又無可准之處仍得賢慮而密々授之其插樣專如插頭花以葵懸巾子以桂あげをの根をはなちて指之以桂末向左插之江家次第抄云今案巾子之前あげをのちがひたる所に指之すきなければたぬしにさづくてづからさす上緒のさきにさすはひがこと也近代益々あげをのねをはなつなり

次定基出簾中外舞人陪從動座

按四等官各有其禮如太政官以大臣爲長官納言參議者次官辨少納言者判官外記史者主典也長官之後參之時次官以下動座次官後參之時判官以下

動座判官後參之時主典動座以之准之如近衛府以二大將爲長官中小將爲次官然者將監以下可有禮節也仍得賢慮之處尤可有其禮之由有仰也

小時前驅隨身等列立干前庭

前驅四人以布衣侍爲代各著狩衣指貫

凡祭使者必可乘馬也延喜近衛式云凡諸祭供走馬者賀茂祭少將已上一人近衛十二人云々

如式文者爲走馬使騎馬勿論事也此外勘諸家記乘車而參向社頭之例未見及之參內之時並整日向神館也用車嚴訓又如此然關白基可爲轅之由再三有命仍又得賢慮而從彼命爲之行粧既欲失祭體其故者罐馬副殊爲風流又手振舍等所持之物多以馬具也乘車日一物更無所用一僅隨身雜色之外似無具之人甚冷然之嚴訓云無一人之前行之狀不便也春日祭使有具前驅例且治承二年春日祭使眞通被具共諸大夫十七人其輩著狩襖狩衣等准之可具布衣四人云々仍召具之

治承二年十月卅日玉葉云不能詳記只取其要共諸大夫十

七人四位一人五位十人六位四人源國輔家勾當行賴子朽葉布狩衣濃打衣

爲中宮權亮勤仕賀茂祭其時着花橘下襲又云
四五月晴時著用之就此儀令申閣下之處仰下
可著用之由件色表青朽葉裏青見胡曹抄紅單如
例

抑半臂可着然而近來嘗無着用之人且又時日甚

迫織縫難合期仍無力略之畢平絹袴裏紅打

胡書抄云非參議已下常所着也

巡方馬腦帶付魚袋

傍劍

次將裝束抄傍劍代云々件物不分明歟後成恩寺殿

下御說云傍劍代といふ劍あり名のみきゝて今にみ

ず云々且嚴訓云近衛使限此祭帶傍劍之由也仍

拜借之件御劍眞楯卿劍之寫也用紫綵平緒見次

將裝束抄

及天明舞人陪從來集舞人四人左近將監近茂同近詮同近家

方同狹近各着座舞人西面南上

舊例舞人十二名陪從中將時八人少將時六人以之

爲定員見江家勘舊儀凡物節者限府生番長近

衛歟案北山抄云定物節者中少將相共於陣

座一定補先成符奏付殿上少將次中將執筆定書

番長以下給將曹依召立稱唯進立再拜然而今

度令將監將曹勤之殆失先規但東遊事當世府生

以下之輩無知之人唯伶人狛多兩氏稱家傳彼

輩或任諸國受領或任四府尉志皆以五位也

仍被補物節之儀一切不沙汰僅存近衛之

名分而被任將監將曹歟員數殊被減之舞人四

人陪從三人耳三人者所謂歌笛及箏篳也

凡件器者參向之間令捧之進列前然而東遊久

不發聲適舞樂之剋雖奏之也和琴嘗不彈之今

度左近將監久富出件譜而宰相中將公詔卿被試

之處甚依不分明遂以被略了但存古體雖可

携之不彈之者無詮仍令申閣下文畧之抑

舞人裝束事治承三年山槐記注退紅狩衣之由然者

布袍也如將監專不相應仍被用紅紗袍岡腋

下裏者二藍平絹紅單青摺袴白平絹以山藍摺

帶傍劍殊以不可然歟但今度時日甚迫不及新

調所用于舞樂秦王散手之劍借用之仍無尻

鞘尤明年可有新調云々已上裝束武著絲鞋從

將監近家申陪從着淺香舞人用絲鞋之事如何殊乘馬之時有

頃云々定基者云臨時祭舞人必股上人也然猶用絲鞋之由見西

宮記況地下舞人何不著之乎乘馬有袴者用武藏鎧之故也如

唐鞍鞍被全雖不見其物如圖書證之其異措絲鞋

元祿七年加茂祭祀

元祿七年四月十五日壬午天晴早旦沐浴潔齋立札於門

凡潔齋事家々說不同或入月而齋或奉仰之日卽齋也桃華閣下嚴訓云入月始齋者同於大祀加茂祭者中祀也尤三日之齋可然但自月始不可交僧尼之類矣花山院相國說云或自一日潔齋不獻灌佛布施是全不可然之由故宇治左府被命或自如下如前驅一定潔齋或自御禊日齋我付宇治左府命自御禊日齋之仁安二年見山槐記令申此趣之處依家說自午日可潔齋之由有仰仍自此日始齋但自月始僧尼不淨之輩避之加茂祭神事也僧尼并重輕服者不淨輩不可入來

右見應永卅二年薩戒記也

十七日甲申天晴今日掃亭北西懸翠簾飭葵桂飭葵事先規其樣不分別但必可飭之歟此日不飭之者重輕服之家也仍所々懸之

觀應三年四月十八日園太曆云加茂社司獻葵如例家中可飭之由仰了女房重服實夏方輕服不飭也

今日下上兩社幣物料送社司許明日未明命可令奉幣之由是祈祭使之儀平安之由也

此事小野右大臣度々勤仕之時如此件儀雖爲上卿之儀敬神之故徑彼跡者也

十八日乙酉天晴今日有賀茂祭再興事定基爲近衛使參向之仍曉天沐浴帶束帶

冠垂纓關白基命云賀茂祭必有警固須卷纓帶弓箭也嚴訓云件事雖兩說如次將裝束抄京極中納言定家卿作以垂纓爲正說以帶弓箭爲或說且今年

無警固警固事依國祭行之況上古警固中猶垂纓持笏平關腋袍

次將裝束抄雖無所見春日祭使及臨時祭使等着之仍准之

盧橘下襲

次將裝束抄云多以着皆練重又着例二藍然年年記多以注用一藍之由既欲染之處今年彼花不求得之仍引勘諸記之處飭抄云宰相中將通忠

右一冊者今度隨_二江戸寺社御奉行_{松本山城守殿御所}
望_二度々及_二吟味_一殊に神主保可權禰宜維久季通并
月奉行六役等連日參_二會于評議所_一所_二撰聚_一之予幸
爲_二執筆之役_一相_二加于座右_一之序申_二請社中之草案_一
令_二書寫_一之別而令_二秘藏_一者也至_二神領之卷_一者猶
爲_二後覽_一下知之狀制札之案等少々令_レ書_レ之尤至_二
後年_一可_レ爲_二禁河_一云々

延寶九_{辛酉}年八月吉辰

當社山林竹木并柴猥伐採事

右堅被_レ停止_二訖若於_レ有_二違背之輩_一者速可_レ被_レ處_二嚴科_一之旨被_二仰下_一者也仍下知如_レ件

明曆二年三月日

佐渡守源判

天正十七年秀吉公御代御檢地以來當社御神領山林境內竹木諸役免除之御朱印被_二成下_一惣高貳千五百七拾貳石餘此內千六百四石五斗餘本郷有_レ之五百六拾一石四斗余小山郷在_レ之三百七十一石四斗中村郷在_レ之三十四石六斗西賀茂河上郷在_レ之都合貳千五百七十七貳石也天正御檢地之時境內六郷過半減省訖雖_レ然御神事祭禮御修理等如_二古代_一於_レ今勤行之御代々御朱印頂載仕來候

當御代御朱印

當社領山城國愛宕郡西賀茂內參拾四石六斗上賀茂之內貳千五百三十七石四斗合貳千五百七拾貳石事并境內竹木諸役等免除但元和元年七月廿七日同三年七月廿一日兩先判旨進止永不_レ可_二相違_一者也仍如_レ件

寛文五年七月十一日

御朱印

上賀茂社家中

別御朱印頂戴仕輩

一高百拾壹石八斗餘上賀茂之內西賀茂之內在_レ之

御代々御朱印拜領

岡本宮内少輔

一高四拾壹石內拾六石西賀茂在_レ之廿五石丹州船井

郡觀音村在_レ之

御代々御朱印拜領

松下民部大輔

一高廿石丹州青戸村同土埴村在_レ之

御代々御朱印拜領

林主馬首

一高廿五石丹州土埴村在_レ之

御代々御朱印拜領

森左京權大夫

一高卅石播州室津在_レ之

大猷院樣御朱印頂戴

鳥居大路大膳大夫

一高卅八石西賀茂河上郷在_レ之

御代々御朱印拜領

岡本下野中
大路甚助

右別御朱印拜領分

合貳百六拾五石八斗領

都合貳千八百參拾七石八斗餘

右諸國御神領之舊記公武御代々御教書御下文等數百

通于_レ今雖_レ爲_二傳來_一其內少々記_レ之而一々不_レ能_二注進_一者也

延寶八年三月廿二日

賀茂社家中上

右堅令停止畢若於違犯之輩者速可處嚴科者也仍下知如件

御朱印

慶長五年九月十六日

是者東照權現様御朱印也云々

禁制

賀茂

一當軍勢濫妨狼藉事

一田畠立毛刈取事

一對百姓等不分申懸事

右條々堅令停止畢若違背族於在之者速可被處嚴科者也仍執達如件

慶長十九年十月日

板倉伊賀守 黒印

制札

上賀茂境内

當社山林竹木猥採事堅被停止訖若違輩於有之者速可被處嚴科之旨被仰下者也仍下知如件

慶長二十年六月日

伊賀守 黒印

制札

貴布禰境内

當社山林竹木并柴猥伐取事堅被停止候若於違背之輩者速可被處嚴科之旨被仰下者也仍下知如件

慶長二十年六月日

伊賀守 黒印

急度申遣候今度就洪水當社競馬之馬場崩候之處其所々石從三方猥取散候由沙汰之限候堅申付可被相留候猶使者申含候恐々謹言

九月朔日

板倉伊賀守 勝重判

上賀茂惣中

定

上賀茂

一在々所々百姓訴訟事有之者親子兄弟庄屋年寄之外奉行所へ不可來對地頭代官書起請文催多勢訴訟來事一切令停止也若背此旨輩有之者當人之儀者不及申一同之百姓悉可處罪科堅可存其趣事

一山城國中山林^{竹カ}安木之根^{樹カ}を採取事任先規例彌令停止了此上於堀取者見相搦捕奉行所へ可申來若於見隱者其在々庄屋屋肝煎可曲事一鄉村水論之事以先規例兼日相定及田地湯水不可申來但新儀用水之處有之者不單相論奉行所へ可申來遣檢使隨其趣可有裁許事

右所定置聊不可有相違者也

元和八年八月廿日

周防守判

禁制

上賀茂境内

當社惣御中

賀茂社領境內六郷并所々散在等事從_二先規_一三社領之內爲_二守護使不入_一度々任_二御下知御朱印旨_一山林竹木人足非分課役以下如_二先々_一彌令_二停止_一者也仍如_レ件

天正十一年十一月廿二日

羽柴筑前守

秀

吉

賀茂社惣中

國々當社領事年來任_二當知行旨_一彌不_レ可有_二相違_一之狀如_レ件

天正十一

十一月廿二日

秀 吉御判

賀茂社惣中

賀茂社領境內六郷并所々散々等事從_二先規_一三社領之內爲_二守護使不入_一度々御下知被_レ帶_二御朱印_一殊秀吉御折紙被_二遣上_一者山林竹木人足非分之課役以下如_二先々_一令_二停止_一之狀如_レ件

天正十一

十二月廿三日

玄 以判

賀茂惣中

賀茂社領南小野郷一乘寺四_レ村之内在_レ之六拾七石九斗六升之事被_レ任_二先規之旨_一社納不_レ可有_二相違_一之狀如_レ件

天正十二

十二月六日

玄 以判

當社惣中

當社境內竹木事一切不_レ可_二剪採_一若於_二違犯輩_一者速可_レ處_二嚴科_一者也仍如_レ件

天正十二

三月十日

秀吉公 御 判

賀茂社人中

當所之儀依_レ爲_二社家_一從_二先々_一寄宿御免除之上者今度河並御普請衆不_レ可有_二寄宿_一候押而何日と申候事候者急度可_レ承候也

閏正月十一日

民部卿御印

玄 以判

賀茂惣中

山城國西賀茂之内參拾四石六斗土居内減分田畠替上賀茂内貳千五百三拾七石四斗本知殘分合貳千五百七拾二石事遣候訖可_二全社納_一候也

天正十九

九月十三日

秀吉公 御朱印

上賀茂社家中

禁制

一軍勢甲乙人等濫妨狼藉事
一放火事
一田畠作毛刈取事付竹木剪取事

賀茂難掌御中

賀茂社領境內六郷井所々散在事任ニ知行之旨ニ彌全領知不_レ可_二相違_二之狀如_レ件

天正元

十二月 日

信 長御朱印

當所惣中

貴布禰山之儀先年從ニ市原野ニ雖ニ申懸被_レ遂ニ糺明ニ理連無_レ紛之上者此方へ誰々申來候共不_レ可_二能_二承引_一候如_二有來_二可_レ被_二仰付_二一段肝要候恐々謹言

天正九

十一月十七日

羽柴筑前守

秀 吉御判

賀茂社中

賀茂社領能州昨郡內五ヶ村在之分井賀州金津庄拾ヶ村事如_二先々_二可_レ被_二相渡_二候分國中何も無_二相違_二申付之條如_レ此候恐々謹言

同元

十一月廿二日

羽筑 秀 吉

前田又左衛門殿 御宿所

賀茂社領境內六郷井所々散在等之事任ニ御朱印之旨ニ彌全御領知不_レ可_二有_二相違_二之狀如_レ件

天正二

十二月廿一日

明智 光 秀判
村井 貞 勝判

當所惣御中

今度有來水之儀申付候處別而入精之事神妙候然者夏三月之間者可_二用捨_二候條無_二油斷_二彌其機遣肝要候從ニ波々伯部清六_二可_レ申候恐々謹言

十月四日

信 良判

賀茂社氏人衆中

禁制山城國上賀茂同貴布禰

一軍勢甲乙人乱妨狼籍事

一陣取放火事

一相ニ懸矢錢兵糧米一事

右條々堅令ニ停止ニ訖若有ニ違犯之輩ニ者速可_レ處ニ嚴科ニ者也仍下知如_レ件

天正十年六月七日

日向 守判

制札

天正十年十月日

三七郎判

奥古書內ニ此ク條當年軍勢之中行ニ付非分課役事忽可_レ處ニ嚴科ニ云々此異字有_レ之也

賀茂社領境內六郷井所々散在等事從ニ先々ニ三社領之內爲ニ守護使不入ニ度々御下知殊被_レ帶ニ御朱印ニ上者山林竹木井人足非分之課役等如_二先々_二不_レ可_二有_二相違_二之狀如_レ件

天正十二年

三月廿七日

杉原七郎左衛門尉 家 次判

同
永祿四年七月廿八日

此文内竹木ノ下に刈田等矢錢
下に一切非分課役と有レ之也

右近大夫判
右兵衛尉判

義昭公御代
同十一年九月日

此文中ケ條に陣取放火付非分
課役事云々奥に仍執達如レ件

彈正忠朱印

同年同月日右馬助三善判

此制札竹木の下に寄宿事終ケ
條に非分課役付刈取作毛事

前信濃守神宿禰判

當社領加賀國金澤庄事當知行之處國錯亂以來無沙汰
云々太以不レ可然所詮靜謐之上者爲ニ直務一令ニ領知一
可レ被レ抽ニ御祈禱丹誠一之由所レ被ニ仰下ニ也仍執達如
レ件

永祿十二年七月三日

右馬助判

前信濃守判

賀茂社雜掌

禁制賀茂社領城州所々井境內

一當手軍勢甲乙人等狼籍事

一三社領內守護使之事

一山林竹木伐採付寄宿非分課役事

以上

右條々堅令ニ停止ニ訖若於ニ違犯之族ニ者速可レ處ニ嚴

科ニ者也仍如レ件

元龜元年九月日

左衛門督日下部朝臣判

元龜元年十月日

淺井備前守長政判

此文段奥一ケ條陣取放火寄宿非分課
役事云々右書之奥仍執達如レ件云々

貴布禰谷山隈ニ南堀取明神ニ事去永祿六年以來市原野百
姓構ニ新儀一令ニ掠領ニ之旨就ニ訴申ニ百姓支中間雖レ及ニ
三問答ニ猶爲ニ御ニ糾一明淵底ニ被レ相ニ尋隣鄉ニ被レ訪ニ右
筆方異見ニ訖然近郷所ニ進之紙面披見之處賀茂社領分
明之上者不レ寄ニ本役未進有無ニ本所進止候哉所詮任ニ
領主意ニ改易之段古今通法趣各致ニ評判ニ言上之條早
退ニ彼郷競望ニ彌可レ被ニ全領知ニ之由所レ被ニ仰下ニ也仍
執達如レ件

元龜二年七月廿六日

右馬助判

前加賀守判

當社雜掌

表包ニ
賀茂社雜掌

前加賀守

貴布禰谷山之事市原野百姓等構ニ新儀ニ雖レ及レ申事
被レ經ニ上裁ニ任ニ社家理運ニ之旨被レ成ニ御下知ニ之上者
彌可レ有ニ領知ニ之事簡要候恐々謹言

八月廿三日

丹波五郎左衛門長

秀判

享祿二年十月廿一日

堯 運判
長 俊判

當所名主沙汰人中

山城國賀茂社領境內所々散在地等々任代々下知之

旨彌領掌不可有相違狀如件

萬松院殿御下知

享祿四年十月廿日

判

當社氏人中

禁制

一當手軍勢甲乙人濫妨狼籍事

一剪採竹木事

一相懸矢錢兵糧米事

右條々堅令停止訖若於違犯族者可處嚴科者

也仍如件

義晴公御時

天文十年十一月日

左京亮判

禁制賀茂社領所々井境內文言同前

天文十五年九月十四日 藥師寺與一元房判

禁制城州賀茂社領

井所々散在

一當手軍勢甲乙人等亂妨狼籍事

一爲先規任代々下知之旨守護使不入之處相懸

矢錢兵糧事

一伐採山林竹木事

右條々堅令停止訖若於違犯輩者速可處嚴

科者也仍下知如件

天文十五年九月日

河內守判

禁制城州賀茂社領并所々散在

文段同前

天文同年同月日

源 判

禁制賀茂社領所々境內

文段同前但中行々寄宿事三字替計也

同年同月日

玄蕃頭源判

當社領城州奈嶋鄉事往古以來爲競馬料無相違

之處非分之族競望々々以外次第也早退其妨彌全

社納可被抽御祈禱丹誠之由所被仰下候也仍

執達如件

天文十六年二月十七日

左衛門尉判

對島守判

賀茂社祝殿

禁制賀茂社領境內

文段三ヶ條甲乙人狼籍竹木矢錢同前

同十六年六月廿五日

豐前守判

義輝公御時

天文十八年六月日

禁制札文段同前

河內守藤原朝臣判

同年同月日

文同前

筑前守判

作公文新三郎無謂押妨之條可止競望旨被成奉書訖如先々早可被全社納之由也仍執達如件

大永六年四月五日

元 兼判

當社正祝殿

禁制山城州賀茂社領境內所々散在事

一甲乙人等亂入狼藉之事

一先規不入守護使之事

一伐採山林竹木之事

右條々堅令停止訖萬一及違犯輩在之者可被

處嚴科者也

義晴公御代

大永七年二月 日

柳本 賢 治判

波多野 孫四郎判

貴布禰谷山限南梶取明神事去永祿六年以來市原野百姓構新儀令掠領之旨就訴申百姓支申間雖及三問答猶爲御糾明淵底被相尋隣鄉被訪訪右筆方異見訖然近鄉所進之紙面披見之處賀茂社領分明之上者不寄本役未進有無一本所進止者哉所詮任領主意改易之段古今通法趣各致評判言上候條早退彼鄉競望彌可被全領知之由所被仰下候也

仍執達如件

元龜二年七月廿六日

右馬 助判

當社雜掌

前加賀守判

表包 賀茂社雜掌

前加賀守盛就

禁制賀茂境內并所々散在

(此全文次再出蓋衍)

一神田同往來年貢諸本役無沙汰事

一從先規爲高除諸役免除之處相掛半濟事

一伐採山林竹木之事

右條々堅令停止之訖若有違犯之輩者可處嚴

科者也仍下知如件

大永七年三月十七日

沙 彌判

同八年五月十九日筑前守源判制札文言如大永七年

二月也仍略之

賀茂社境內六鄉河上鄉大宮鄉小山鄉中村鄉岡本鄉散在襟原二瀬庄幡枝庄在之小野鄉南北散在等事自往古社家當知行之處今度小山鄉有違亂之族云々以外次第也所詮此所々競望輩有之者速退其妨年貢諸公事物以下如先々嚴密可沙汰渡社家雜掌由所被仰出之狀如件

賀茂氏人中

就倭文庄御公用之儀、重而山本殿御下候涯分申付京着五拾五貫文上申候仍御補任下給候誠以畏入候然者此内五百疋者御補任爲御禮、運上申候相殘御公用可致奔走候間山本殿御立歸可有御申候尙委者被官中與三左衛門方より可申候恐々謹言

永正十年十月廿八日

眞久判

就御公用之儀、預御札候委細令拜見候涯分奔走仕候而五千疋分運上申候此内三千疋者割符にて渡申候貳千疋者御上使山本殿と可申合、由代官に申付候猶委細山本殿可有御申候條令省畧候恐々謹言

十二月廿六日

眞久判

畏言上候仍御上使山本與五郎殿并御書謹拜見仕候了就御公用之儀、蒙仰候則三千疋運上申候委曲之段猶以從代官可有御申候此等之趣有御意得御披露肝要候恐惶謹言

九月十三日

會津庄 御百姓中判

就賀茂御社領讃岐國萬濃池之内競望申被成下御補任候畏存候然者御公用之事者毎年四月中旬六貫

九百文將又十一月中仁五貫八百文分京着定社納可申候萬一無沙汰申候者彼代官職之儀可有御改替候其時一言之子細不可申候仍爲後日請文之狀如件

永正十七年四月十六日 栗野孫三郎景昌判

禁制賀茂社領境内六郷并所々散在

一當手甲乙人等亂妨狼籍事

一代採山林竹木事

一先規爲守護使不入之知處相懸半濟事

右條々堅令停止訖若違犯輩有之者可處嚴科者也仍下知如件

永正十七年四月廿三日 右京太夫源朝臣判

城州賀茂社領境内所々散在事從往古軍勢甲乙人等亂入狼藉守護使不入相懸半濟之事任大心院殿御成敗之旨堅令停止者也有萬一違犯輩者可被處嚴科者也然者彌御祈禱精誠可爲肝要候

永正十七年四月廿六日 三好筑前守之長判

賀茂惣中

賀茂社領泉州深日箱作庄事從往古爲諸役免除之地無相違社家知行之地深日公文鳥取彈正忠箱

右六郷同斷

河上大宮小山中村岡本小野等郷

名主沙汰人中

禁制城州賀茂領散在之事任ニ大心院殿御制札之旨ニ不
可^レ有^ニ相違^ニ之狀如^レ件

義澄公御時

永正四年八月 日

元 治判

夢想

告

つの國米谷庄はもんとく天皇御むさうのつげより御
寄進
さしんの地として代々のみかどりんしをなし下され
右大將よりどもの御代下知せさせ給ひしより以來ず
いぶんの御神りやう也然に御くようぶさたのみざり

不沙汰

後うだの院當社御さんろうの夜御夢になげき申させ

給へばすなはち勅使をたてられて庄内をたづねさぐ

りかたく仰つけられしより勅使庄とは申也こゝにき

向押領

んねん一かうにわうりやうごんごだうだんのしだい

也所詮御屋形様へ子細を申あびちぎやうをまたくし

精誠

て御いのりのせいゝをいよゝいたさんがための

ごん上如^レ件

永正四年十一月 日

禁制城州賀茂社領境内所々

一軍勢甲乙人等亂妨狼藉之事

一伐^{懸カ}取竹木之事

一縣ニ課役之事

右條々於ニ違犯之輩ニ者可^レ處ニ罪科ニ者也仍下知如^レ件

同御時

永正五年四月三日

民部少輔判

神領能州賀茂庄之事國錯亂砌迄無^ニ懈怠^ニ社納申候不
相^ニ替先々^ニ可^レ致^ニ取沙汰^ニ候可^レ被^レ成^ニ其心得^ニ候恐
々謹言

同七年三月十四日

義 元判

賀茂社中

態以ニ折番ニ申候仍而賀茂領本役事如ニ先々ニ急度納所
肝要候神田之事者不^レ混ニ自餘ニ先年も長慶以ニ折紙
被ニ仰付ニ候き今以前前之儀候堅社納專一候不^レ可^レ有
油斷ニ候於ニ難澁ニ者可^レ差ニ上催促ニ候恐々謹言

永正七年十月五日

三好日向守長逸判

大宮郷 小山郷 中村郷 南北小野郷

名主沙汰人中

法住院殿義澄御下知
城州賀茂社領境内所々散在等之事任ニ政元下知之旨
全可^レ有^ニ領知^ニ者也恐々謹言

永正八年七月十九日

澄 元判

御祈禱_ニ之由被_ニ仰出_一候云々

同九年六月廿八日丹波國由良庄事爲_ニ前納_一令_ニ知行_一可_レ致_ニ御祈禱_一之由可_レ被_ニ下_一知彌久縣主_ニ之由被_ニ仰出_一候也云々此內於_ニ貳千疋之土貢_一者可_レ被_ニ付_一貴布禰兩官_ニ無_ニ懈怠_一可_レ致_ニ其沙汰_一若有_ニ不法之事_一者可_レ被_ニ召放_一之由云々

同十二月七日賀茂正祝領之事名主計允申處有_レ理仍致_ニ其沙汰_一臨時課役可_レ被_ニ止_一催促_ニ之由武家御下知之上者其趣可_レ被_ニ存知_一候由可_レ申旨候恐惶謹言

十二月七日

賀茂祝殿

賀茂貞久申奈良社領賀茂田散在事度々被_レ成_ニ奉書_一之處茨木孫次郎押妨未休云々太以無_レ謂所詮就_ニ當社造營_一御下知之上者不日退_ニ彼妨_一可_レ被_ニ全_一貞久所務_ニ若猶令_ニ難澁_一者一段可_レ有_ニ御成敗_一由所_レ被_ニ仰下_一候也仍執達如_レ件

文明十年四月二日

大和前司判

同十五年九月十八日山國庄枝庄小鹽黒田郷民等就_ニ緩怠之儀_一可_レ止_ニ貴布禰之通路_一之由去月廿八日被_ニ仰出_一畢今以令_ニ通路_一者依_レ不_レ塞_ニ其路_一歟堅可_レ被

加_ニ下知_一之由被_ニ仰出_一候由可_レ申付_ニ候也恐惶謹言

九月十八日

親繼

賀茂神主殿

賀茂社領江州蒲生郡船木庄領家職_{號賀茂庄事}

任_ニ當知行_一被_レ成_ニ奉書_一畢

早止_ニ押妨之族_一可_レ被_ニ全_一所務之由被_ニ仰出_一候也仍執達如_レ件

延德三年十一月廿二日

宗勝判

禁制

右當所山伐事堅可_レ停止_ニ若有_ニ違犯輩_一者可_レ處_ニ罪

科_ニ之狀如_レ件

善教公之御時

永享二年十二月七日

沙彌判

賀茂社領境內六郷并諸神田以下所々散在之事

爲_ニ三社領守護不入_一之處號_ニ半濟_一香西又六致_ニ無理之競望_一云々言語道斷之次第也不日退_ニ彼妨_一年貢諸公

容カ

事物等如_ニ先々_一可_レ全社納_ニ若有_ニ押妨人_一許客之輩者可_レ被_ニ加_一誅罰_ニ之由所_レ被_ニ仰出_一候也

永正二年四月廿九日

元行判
長秀判

右宣旨可令_レ知給_二之狀如_レ件

弘安十年四月九日 左京大夫信輔奉

謹上 土御門中納言殿

賀茂社領播磨國室御厨下司并公文職事室四郎朝兼致_二濫妨狼籍_一云々早停止彼違亂可_レ全_二社家之所務_一若有_二子細_一者可_レ注進申_二之狀依_レ仰執達如_レ件

建武三年十一月十八日 武藏守判

赤松入道殿

禁制

賀茂社領播磨國鹽屋庄

右於_二當所_一軍勢甲乙人等不可_レ致_二濫妨狼籍_一若令_二違犯_一者可_レ處_二罪科_一之狀依_レ仰下知如_レ件

觀應元年十二月 日 武藏守

鹿苑院殿御判

播磨國室鹽屋丹波國由良庄本家職事知行不可_レ有_二相違_一之狀如_レ件

應永元年十一月廿四日

禁制

右當所山伐事堅可_二停止_一若有_二違犯輩_一者可_レ處_二罪科_一之狀如_レ件

永享二年十二月七日 沙彌判

賀茂社領雜掌申備前國尾張保事被_二官人押領_一云々太不可_レ然早止_二其妨_一沙汰付_二雜掌_一可_レ被_レ申_二左右_一之由所_レ被_レ仰下_一候也仍執達如_レ件

嘉吉元年十二月三日 右京大夫判

賀茂社領若狹國宮川庄本家職事早任_二當知行_一之旨權禰宜益久致_二直務_一可_レ領知_二之狀如_レ件

長祿二年五月十九日

右近衛大將源朝臣御判

此時者後光嚴院御宇也征夷大將軍義政公號爲照院殿之代也

賀茂社領和泉國稻作庄與_二淡輪庄_一堺山林浦等事爲_二社領_一數年當知行之處淡輪次郎左衛門尉違亂云々早去應永七年十一月十四日守護下知狀分明之上者全_二所務_一可_レ被_レ遂_二神事無爲節_一之由所_レ被_レ仰下_一也仍執達如_レ件

寬正五年十二月廿六日 大和守判

左衛門尉判

當社祝殿

文明八年十二月五日以_二由良庄公用之內_一每年千足被_レ付_二貴布禰之禰宜祝兩官_一之由被_レ定訖專神事可_レ致_二

被_レ下_二關東御教書_一之間任_レ狀兩度令_二張行_一畢所詮
如_二關東御教書并六波羅度々下知_一者可_レ尋_二決兩方子
細_一之由也而參差于_レ今不_二事行_一之處今備_二次第證文_一
雖_レ進_二社解_一不_レ遂_二一決_一者輒難_二下知_一歟然者早今月
中兩方企_二參洛_一可_レ遂_二其節_一也其間相互止_二新儀之濫
妨_一可_レ令_レ相_二待間注左右_一之狀如_レ件

嘉禎三年九月十五日

越後守判

駿河守判

宮河保地頭代

賀茂別雷社領石見國久永庄守護所_レ使_二入部_一并高野
山流人雜事間事社解_{副具}如_レ此子細見_レ狀所詮如_二承元
二年十月十五日關東御下知狀案_一者故右大將殿御時
御寄進之後一向社家進止之地也停_二止守護所之沙汰_一
於_二大番役_一者隨_二先例之勤_一可_レ有_二左右_一至_二于其外課
役者可_レ令_二免除_一云々承元二年被_レ下_二御下知_一之後無_二
毀破之狀_一歟任_二彼狀之趣_一且停_二止使者入部_一且可_レ
免_二除流人雜事_一之狀如_レ件

寬元二年六月三日

相模守判

守護代

賀茂社雜掌申若狹國多烏浦漁獵事

院宣_{副具書}

遣之子細見_レ狀事實者其不_二穩便_一早停_二止

其妨_二任_一先例可_レ致_二沙汰_一之由可_レ令_二下知_一也若又
有_二殊由緒_一者可_レ令_二注申_一之狀依_レ仰執達如_レ件

建長四年十月廿八日

相模守判

陸奥守判

陸奥左近大夫將監殿

賀茂新宮社領遠江國濱松庄內岡部鄉雜掌忠茂申云當
鄉地頭職事保歲依_レ致_二押領_一先度被_二仰下_一候處使節
于_レ今難濫云々甚無_レ謂不日與山六郎相共遂_二入部_一沙
汰_二居社司基久代_一於庄家可_レ致_レ執_二進請取狀_一使節尙
以有_二緩怠_一者可_レ處_二罪科_一者也依_レ仰執達如_レ件

嘉曆元年十二月廿四日

沙彌判

高時入道宗鑑

獻上

田中三郎入道殿

宣旨

賀茂別雷社神主正四位下賀茂縣主久世申請以_二
寬治勅免神領等_一向後永停_二別相傳并別納儀_一可_レ
令_二神供備_一事

仰依_レ請_二

自二年來至今年四月供祭人等引網致漁之窟中也而自去五月三日始爲吉直魚獵押領彼河尻之間於其外河上之漁者雖數萬町更所無用也又雖有何處之未流往古供祭人等尋魚入之便水所致漁藥也而日吉禰宜大藏權少輔成茂宿禰等奏狀備件河建保之比流比叡庄之條僅十餘年也然則其條縱雖爲建保之比已十餘年之間供祭人等無異議於比叡庄中致漁畢迄昨今始彼濫妨出來之條其理可然哉新儀無道可備賢察也吉直違背代々宣旨打畱當社供祭之條違勅之科尤以不輕之上當時綸言頻下和尚御坊又任道理不可有供祭妨由御請文及度々畢雖然吉直更不叙用彌乘勝企惡行供祭人等於來臨比叡庄中河邊者忽及喧嘩御厨辭事由可致訴訟之旨結構云々未會有之所行不可說之猛惡也仍不被召禁吉直者狼籍更不可斷歟夫公家忝以當社祭祀專爲日本第一之神事日供卽爲寬治勅願豈非朝廷無双之禮奠哉今忽依吉直新儀之濫妨既擬廢一百餘歲之供膳雷匪社家之愁歎爭無朝廷之僉議哉彼比叡庄濫妨者指無一紙勅言只今年五月三日始所巧出之猛惡也御厨漁

築者荷帶代々宣旨年來於比叡庄中漁進供祭之條顯然也是非之至尤在明察裁報之處偏仰憲政凡當御厨在無只期今度之裁報者也式數有限之御贊忽闕御厨之課役者社家廻何祕計可致無足辨備哉不被止吉直之濫妨者永可闕有例之神菜也尤依勅裁左右宜存日供之勤否也望請天裁早且任嘉應元曆宣旨狀且依近行友次之例被召禁吉直之身者永斷當時向後之窄籠奉祈萬歲千秋之御願者權中納言藤原朝臣家光宣奉勅依請者國宜承知依宣行之

貞永元年六月卅日

大史小槻宿禰判

少辨藤原朝臣判

賀茂別雷社領出雲國福田庄地頭職事右任今年八月十九日關東御下知狀可停止伊北又太郎時胤地頭職之狀如件

貞永元年十月廿七日

掃部助平判

駿河守平判

賀茂別雷社領若狹國宮河庄雜掌與卽國宮川保地頭相論大谷畠并矢代浦事就社家之訴訟天福以後度々加下知之處去年七月二十八日依保地頭之訴

庄者縱雖非大西庄司之跡依爲神主能久之領入沒收注文之條炳焉也然則停止社司濫訴可令時胤爲福田庄地頭職云々已上略之如狀者時胤追亡父之跡已蒙載許之間所申聊雖有其謂如御家人連署狀者爲大西庄司跡之由不申之只依神主能久之科被沒收之旨載之當庄非指能久之私領爲代々神領之間付社務令知行之許也何依能久之罪科無左右可被沒收社領哉者早任右大將家御下文并先下知狀可令停止彼地頭職之狀依鎌倉殿仰下知如件

貞永元年八月十九日

武藏守平朝臣

相模守平朝臣

(異本)武藏守判

相模守判

左辨官下

應任嘉應元曆 宣旨停止比叡庄民當時向後濫妨就賀茂社領當國安曇河御厨漁進全日別供菜料間事

右得彼社司等今月廿六日解狀稱重檢案內一件安曇河御厨者令下漁河海之魚鱗備進朝夕之御贄所

無退轉也寬治聖代被下官符以降神人五十二人別引募國領公田三町以官物辨濟撰以難事所漁進每日二度之御贄繼踵無絕如申忠宗朝臣者依減寄人并神用等之員數日供忽闕乏社家經奏聞之處宣下延引之間國司俄卒去畢仍任天永々久兩度免狀等寄人五十二人神田百五拾六町無相違可勤仕役之由忝被宣下畢大治元年宣旨是也其後如嘉應宣旨者依被尋下神事違例注申子細之刻安曇河流上者限滴水下者迄于河尻不可有他人希望之由嚴制重以如此宜從停止云云如元曆宣旨狀者件安曇河御厨漁河流冬所釣海浦也停止河上并善積庄及國中權門勢家庄園坊可漁進賀茂日別供祭云々前格嚴制其文明然之間彼河新古餘流南北遠近之江海一向停止甲乙濫妨皆悉被止他人希望畢仍船木北濱供菜人等可全漁進是則只以河內被定置供菜料之故其河縱雖流入何庄々任宣旨狀可不漁進日供御贄哉依之或雖有權門勢家之御領或雖多山門日吉之庄園於河漁者更非其所之成敗只付流水併爲御厨之成敗者也但漁築者專以河尻爲本之間比叡庄中

相模守列

可_レ令_下早任_二右大將家御下文并先下知_一停止伊北
又太郎時胤知行賀茂別雷社領出雲國福田庄地頭
職上之事

文言依_二後資法印江月本_一不_レ載_一之

右如_二社解_一者右大將家御時於_二當社_一領者被_レ奉_免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

免

可令早停止旁武士狼籍任先例勤仕神役事
右件所々者賀茂別雷社領也而近日面々武士寄事於
左右任自由企濫妨之間恒例臨時所役及闕如
云々早停止旁狼籍可令勤仕本役之狀如件以下

文治二年九月五日同上

右六鄉之内賀茂社司申富野鄉居住當社神人訴申地頭職事嘉禎四年十
一(越後守相摸守)下知狀有之也又奈島鄉賀茂祠官等申當社領山城
國奈島鄉事任文治御下文可爲社家進止之狀如件延慶二年七月
十三日前越前守云々此奈島鄉下知狀正和三九廿一武藏守文保元七十
八陸奥守同二年十一月卅日平行長賀茂社雜掌宗親申狀之事又元曆二
年二月十四日倫爲基篤執達之狀雜掌申押領當鄉申事書狀如此早
令出對可被請取本解狀由候云々

私云此細字之分江戶公儀上分不載也

下播磨國安志庄林田庄

可令早停止旁武士狼籍勤仕神役事

右件庄々御厨者賀茂別雷社領也而近日依面々有
限之神役及闕怠之旨以社家之申狀自院所被
仰下也於自今以後者早停止彼等之妨可令勤
仕神役若又有武士之押領外之狼籍直可令經奏
聞之狀如件以下

文治二年九月五日賴朝御判

下周防國伊保庄竈戶關矢嶋柱嶋等住人

可早停止土肥實平妨并土人大野七郎遠正不當
從領家進止事

右件庄々者賀茂別雷社御領云々而土肥實平近日致
押領之上土人大野七郎遠正令滅亡庄内之由依
社司訴自院所被仰下也仍召問實平之處於
兵糧米者免除了況無押領之由所申也何物之謀計
乎兼又遠正令滅亡庄内之條甚以不屈也自今以後
停止彼等之濫行可從社家進止之狀如件以下

文治二年九月五日

下出雲國福田庄

○關文庄石見國久永庄三河國小
野田庄播磨國網子庄美作國南庄
文治二年十月朔日

丹波國私市庄務事

右如社解者公文胤行如地頭令張行之間社家
訴申子細之日追本公文跡可致沙汰之由嘉
祿三年十月廿五日成給下知狀畢而去年胤行任新
補之傍例可致分沙汰之由申給御教書重文
致非法云々者事實者甚不隱便早守嘉祿之成敗
本公文跡之外可停止新議之狀鎌倉殿仰下知如
件

寬喜四年四月十七日

武藏守判

若狹國 宮川庄 矢代浦

加賀國 金津庄

越中國 新保御厨

右肆拾貳箇所神領任_二院應御下文_一停_二止方々狼籍武士等濫吹_一如_レ元可_レ備_二進神事用途_一若不_レ恐_二神感_一不_レ用_二院宣_一慥可_レ處_二重科_一之狀如_レ件以下

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

庶苑院殿之御時右之趣不_レ可_レ有_二相違_一之旨御下知被_二仰出_一御判被_レ下畢

應永五年二月 日

奉行飯尾加賀入道

管領神主豐久

左辨官下_二近江國_一

應_レ停_二止河上_一并善積庄及國中權門勢家庄園妨_レ令

漁_レ進賀茂別雷社領安曇河御厨日別供祭物_二事

右得_二彼社去月日解狀_一係當社御厨等或爲_二平家_一被_二

燒拂_一或爲_二源家_一被_二押領_一皆悉不_レ叶_二社役_一之間供菜

不_レ令_レ通日別供菜併所_レ及_二斷絕_一也今僅所_レ憑近江安

曇河御厨計也而件御厨夏漁_二河流_一冬所_レ釣_二海浦_一也

近來爲_二權門庄園等_一依_レ致_二制止_一輒不_レ能_二漁捕_一日別

課役更以難_二合期_一凡者當社供菜狩捕之地者不_レ顧_二國

中權門勢家庄々_一可_レ釣漁_二之由被_レ下_一宣旨以來皆

所_二漁來_一也然者絕無_二前法_一近年供菜御厨滅亡間隨_二

社家申狀_一尤可_レ蒙_二勅許_一何況於_二前格嚴制_一哉早被_二

下_二宣旨社_一被_レ停_二止彼庄々妨_一無_レ煩令_レ引_二網欲

令_レ奉_レ備_二日別供祭_一者權大納言藤原朝臣忠親宣奉

勅者國宜_二承知依_レ宣行_一之

元暦元年十二月廿九日

小槻宿禰判

少辨平朝臣判

下_二近江國安曇河御厨_一

可_レ令_レ早停_二止定綱知行_一任_二先例_一勤_二仕神役_一事

右件御厨者賀茂別雷社領也而近日依_二彼定綱無道_一知

行有_レ限神役及_二闕怠_一之旨以_二社家之申狀_一自_レ院

所_二被_レ仰下_一也於_二自今後_一者早可_レ停_二止定綱知行武

士之妨_一之外者直經_二奏聞_一可_レ令_レ蒙_二御裁定狀_一如

件以下

文治二年九月五日賴朝御判

同日

下_二山城國_一

森本郷

永主郷

富野郷

奈木郷

壽永二年十月十日

前右兵衛佐源朝臣判

院廳下_ニ備前國在廳官人等_一

可_レ早無_ニ事煩_一令_内運_乙上賀茂別雷社領

山田竹原等年貢米_甲事

右彼庄々御米者嚴重用途也云_ニ點定之船_ニ云_ニ水手之
催_ニ不_レ准_ニ他所_一早停_ニ件等_一之課役_一止_ニ路次之狼籍_一合
期可_レ令_ニ運上_一之狀仰如_レ件在廳官人庄官等宜_ニ承知_一
不_レ可_ニ違失_一故下

壽永二年十一月四日

主典代織部正兼皇后宮大屬大江朝臣判

判官代右衛門權佐藤原朝臣判

別當中納言兼民部卿藤原朝臣判

大藏卿高階朝臣判

參議右大辨平朝臣判

同三年四月廿四日壬辰賀茂社領四十一ヶ所任_ニ院廳

御下文_ニ可_レ止_ニ武家狼籍_一之由有_ニ其沙汰_一云々

下_ニ諸國_一

可_下早任_ニ院廳御下文_一停_コ止方々狼籍_ニ備_制進神事

用途_上賀茂別雷社御領庄園事

賀茂注進雜記

近江國 舟木庄 安曇河御厨

美濃國 脛長庄

尾張國 高島庄 玉井庄

參河國 小野田庄

遠江國 比木庄 笠名郷 落居濱

丹波國 由良庄 私市庄

攝津國 米谷庄 貞觀ノ勅ニ津國河部郡山本郷嚴野トアリ

播磨國 安志庄 林田庄 室鹽屋御厨

美作國 倭文庄 河内庄 便補保

備前國 山田庄 竹原庄

備後國 有福庄

伯耆國 星河庄 稻積庄

出雲國 福田庄

伊豫國 菊萬庄 佐方保

周防國 伊保庄 矢嶋 杜嶋 竈戸關

和泉國 深日 宮作庄 淡輪 寛正ノ訴狀

淡路國 佐野庄 生穗庄

紀伊國 紀伊濱御厨

阿波國 福田庄

能登國 土田庄 桃浦 賀茂庄 羽咋

是百王之通規會非一時之自由仍任舊跡不敢改易
 加以延曆寺領八瀬橫尾西村田島等代々國宰以租
 稅宛禪院之燈分令住人勤彼寺之役者久作佛
 地何爲神戶哉但除社素所知之神山採葵山之外
 諸山者或是社領末之處或又公私相傳之地自歷年
 紀難輒停止且置于戶田限田造島等者社司領主
 共檢公驗租分令納於社地子可免本主此外田
 地官物官舍等類自今以後悉爲神領卽以其應輸物
 永充恒例祭禮神殿難舍料上下枝屬神社神館神宮寺
 等修造及臨時巨細之料矣正二位行右近衛大將藤原
 朝臣宣奉勅依件分宛者宜承知依宣行之符到奉行
 右少辨正五位下兼行近江守源朝臣
 正五位下行左大史兼播磨權介但波朝臣

寬仁二年十一月廿五日

此時禰宜茂忠祝茂延云々

社記云寬治三年十二月廿四日相定御神膳事申上之
 同太田大明神之御膳事申之云々
 同四年正月廿二日被下宣旨上下社長日御膳料被
 奉寄庄々等左少辨藤原爲房左大史祐俊參向上下社
 奉行之各社司等之膳羞之大外記清原定俊有託宣之

事云々

或記云同四年三月廿六日以參議保實卿爲賀茂社
 奉幣使始自今日調進神膳被令獻於大神之
 寶前社司等有託宣之由依申之也云々

同年七月十三日賀茂御祖別雷二社被奉不輸田六百
 餘町爲御供田近日依有夢想被供御膳也且
 是神稅不足故又分置御厨於諸國云々

同七年五月八日賀茂託宣御馬飼事等諸卿定申江記云
 神託事先例或用之賀茂御供是也或不用之者伊勢
 友平被止神鏡事也云々

下賀茂神主重保所

可令下早且任院宣狀且依先例無相違致中其
 沙汰當社御領等事

右一天之下誰人不奉仰神明之驗德四海之中何所
 可相背

皇化之教旨因茲往昔放免之地其數繁多而平家誇
 自權蔑如皇憲之間忽以滅亡其間近日於當御神
 領者任先例可令致其沙汰之由雖被下院
 宣不令承引之條甚以不當也於今者早且任院宣
 狀且依先例可致其沙汰之狀如件故下

門諸卿列立左右大將進立_{左大將}先_{渡階前}是左次將率御

與長等渡階前大將立定畢寄御與_{渡階前}母后同輿出

從西門經大宮一條大路并出雲道等午刻着給下

御社神祇官奉御麻有御祓事上下兩社御奉幣神

寶神馬舞樂以下如例仍畧之宣命

天皇我詔旨止掛畏岐賀茂皇太神乃廣前爾恐見_美申賜

倍申久年來乃間令祈願給倍留事在利然毛驗久冥助相

通天其驗照然利恐由乎報賽_{世志}給_者所念行奈幸故是以

吉日良辰遠撰定天金銀乃御幣仁錦蓋飭劍平劍唐組之平

緒御弓御矢御梓御鏡并種々神寶音樂走馬東遊等遠相

並天唱進_利行幸給布又前年爾愛宕郡一郡奈_加可奉

寄之由遠令祈申給倍利而件郡內爾所在呂或帝王城

都或明神領地是萬代相傳之處奈利會非一人自由之

地爾仍南者皇城乃北乃大路乃同末遠限天東波郡界爾至

末天西波大宮乃東大路乃同末平限天北波郡界仁至末天奉

寄給但此內爾有凌室藏氷之邑利是又百王之職事_奈

婆難致一時改易之縱在神郡內止毛可除此一

邑之抑上下乃御社仁件郡乎平均仁奉分給倍之然而毛

田圃鄉邑乃數須忽以難決之追以後日天各可奉界

之皇太神此狀遠平久安久聞食天彌垂感應禮天天皇朝

廷乎寶位無動久堅磐常磐仁夜守日守仁護幸倍奉給比

四海清平仁萬民安樂_仁之水旱飢疫乃難遠未兆仁拂退介

農圃蠶養之業遠每年爾豐仁登_良唐堯仁同德之漢文仁

比名天叙慮乃尅念爾無違久必然爾謹惠奉給倍止恐見

恐_美申賜_波久申

辭別天申賜_波久申皇太后毛同久共仁參給倍利冥助不空

須感應暗至天后闈之月長明爾母儀之風彌芳_天萬歲千秋

末天夜守日守爾護幸倍奉給倍止恐見_毛申賜_波久申

仁寬仁元年十一月

太政官符民部省

應_ト以山城國愛宕郡捌箇鄉奉寄賀茂大神宮事

四至_{東限延曆寺四至南限皇城北大路同末西限大宮東大路同末北限郡界}

御祖社肆箇鄉

蓼倉鄉栗野鄉上栗野鄉出雲鄉

別雷社肆箇鄉

賀茂鄉小野鄉錦部鄉大野鄉

右亥年十一月廿五日行幸彼社以件八鄉被奉寄

畢今商量便宜平均田圃所定如件_{ミツロイ}

抑諸鄉所在神寺所領及齋王月料勅旨混沌埴川氷室篠

丁陵戸等田并左近衛府馬場修理職瓦屋其守丁使人皆

神領官符并代々手次證文等

聖武天皇天平二年十二月十四日奉_レ宛_二御戶代田壹町_一御戶代會神事始_二於此時_一云々次年中神事用途乏少之由依_二申請_一加_二增一町云々

嵯峨天皇承和十一年十一月壬子鴨上下太神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等依_二申請_一被_レ下_二官符_一其符云

太政官

應_レ禁_二制汚穢鴨上下太神宮邊河上事_一

右得_二彼神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等解_一僞鴨川之流經_二二神宮_一但欲_二清潔_一之豈敢汚穢而遊獵之徒就_二屠割事_一濫穢_二上流_一經_二融神社_一因_レ茲汚穢之祟屢出_二御下_一雖_レ加_二禁制_一曾不_二忌避_一仍申送者大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣奉勅神明攸_レ崇不_レ可_レ不_レ慎宜_二仰_一當國_二俾_上禁_二斷之_一若違_二制犯者禁_一其身_二申上容隱不_レ申國郡司并禰宜祝等必處_二重科_一不_二曾寬宥_一

承和十一年十一月四日

此官符被_レ下之以後社家并當國郡司等當_二川上北山村々里々令_一觸穢_二澗水流出之所々加_一禁止之下知_二故

北芹生峠其邊靜原小野鄉等取_二弃牛馬猪鹿之死骨_一堅無_二葬_一埋人死骸_二之舊式_一不_二違犯_一而持_二越山頂水流之外地_一至_二今相守者_一也

三代格
太政官

應_レ令_二神戶百姓護_一鴨上下大神宮邊川原並野上事

四至

御祖社

東限_二寺田_一南限_二故參議左近衛大將大中臣朝臣諸魚宅地路末_一西限_二百姓宅并公田_一北限_二槐村下里南畔寺田_一東限_二路并百姓宅地_一南限_二道并百姓宅地_一公田_二西限_一鴨川_二北限_一梅原山_一

別雷社

右得_二山城國解_一僞依_二太政官去十一月四日符_一仰_二愛宕郡司_一令_二禁_一護件社邊河_二而郡司解僞郡中僞丁數少

無_レ人_二差充_一望請_二以下_一在此郡_二神戶百姓_一分番令_二禁守_一若致_二汚穢_一永出_二神戶_一以_二公戶民_一相替補入者國加_二覆審_一取_レ陳有_レ實謹請_二官裁_一者左大臣宣依_二請

承和十一年十二月廿日

清和天皇貞觀六年三月十四日以_二太皇太后宮職勅旨_一田攝津國河邊郡山本鄉巖野肆拾五町九段七十步被_二寄_一進于賀茂社_二米谷庄是也又_一勅使庄共云

後一條院御宇被_レ寄_二山城國愛宕郡於賀茂上下神領_一事或記云寬仁元年十一月廿五日己未今日幸_二賀茂_一時

刻_二已_一出_二御南殿_一吉平朝臣奉_二反問_一御輿持_二立西中

本社 拾五石

神主

同 拾三石

正禰宜

同 拾三石

正祝

同 拾貳石

權禰宜

同 拾貳石

權祝

片岡社 拾貳石

禰宜

同 拾貳石

祝

貴布禰社 拾貳石

禰宜

同 拾貳石

祝

新宮社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

太田社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

若宮社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

奈良社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

澤田社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

氏神社 拾石

禰宜

同 拾石

祝

右合貳百參拾三石

高八石七斗三升貳合餘

梅辻備後

高八石七斗三升貳合餘

富野宮内

合拾七石四斗六升五合餘

都合貳百五十石四斗六升五合餘

以上

一社職料社家中以ニ相談ニ定免相年々等分可ニ收納ニ事

一社職料賣買之儀者不_レ及_レ言不_レ可_レ入_ニ質券_ニ事

一雖_レ爲_ニ親子兄弟_ニ向後以_ニ家領_ニ而別家江不_レ可_ニ分

散ニ事

右之旨今度相定訖堅相_ニ守此旨_ニ不_レ可_ニ違背_ニ者也

寛文四_{甲辰}年六月廿一日

甲斐御印

河内同

大和同

美濃同

豐後同

城州賀茂

社家中

家中相談之上以_二相應之人_一如_二先規_一傳奏江致言上_二可_レ任_レ之事

一神前勤番之札如_二先例證文_一社司之子共最初可_二書裁_一之事

一年中神事可_レ爲_レ如_二有來_一但斷絶之祭禮唯今爲_二自分與行_一於_レ可_二相叶_一者社家中以_二相談_一可_二取立_一之事

一貴布禰田之儀氏人押領之由社司雖_レ申_レ之氏人配分之證文有_レ之上者可_レ爲_レ如_二有來_一但斷絶之祭禮唯今與行於_レ可_二相叶_一者社家中以_二相談_一可_二取立_一之事
一神山有_レ之木於_レ爲_二神用_一者社家中以_二相談_一可_レ伐_レ之爲_レ私一切不可_二伐取_一之但下刈者社司氏人共可_レ刈之事

一每年葵進上之節向後者社司氏人自_二双方_一一人宛可_レ致_二參上_一事

一賀茂中之儀向後者社司氏人從_二双方_一相定月行事萬事沙汰可_レ仕事

一社家中專_二神道_一不_レ存_二邪曲_一萬事守_二先例_一不_レ可_二企_一新儀_一事

右條々今度依_二社司氏人相論_一裁許了堅相_二守此旨_一

永不_レ可_二違犯_一者也

寬文四_{甲辰}六月廿二日

甲斐御印

河內同

大和同

美濃同

豐後同

城州賀茂

社家中

覺

一氏人中惣納五十八石四斗八合六勺

是者累年氏人雖_二支配_一之往來田貴布禰田家領等有_レ之候間今度取除候事

一社僧中惣納九十五石壹斗壹升七合

是者累年社僧雖_二支配_一之供田寺領等有_レ之候條今度取除之候事
一柳芳軒海藏院竹林庵祖芳院四々寺領合九十六石九斗四升壹勺

是者社僧職無_レ之而社領之内取來候間今度取放候事

右三々合貳百五拾石四斗六升五合七勺

今度社職料新附之并社司之内家領無_レ之兩方江配_二附之_一畢可_レ存_二其旨_一委細目錄如_レ左

社職料之覺

美濃同

豐後同

賀茂社家中

賀茂御裁許狀之寫

覺

御造營訴訟之儀社司江無相談氏人罷出候儀不届候向後社司氏人以相談一同可申上候事

一神事祭禮修理等入用之儀社司中古來雖不勤之向後者一同役儀可勤仕事

一恒例御祈禱之儀可爲如來但於森所正五月御祈禱之節者自分可相勤候事

一社一同臨時御祈禱之節卷數御被一社一同調之神主持參可指上之事

一御朱印被成下候宛所社家中と有之儀總而神社奉仕之輩上下共可爲社家之條御朱印之儀社司氏人致相封御藏可納置候事

一本神社主正禰宜祝權禰宜權祝并片岡貴布禰兩社之禰宜祝者相傳之社司松下森鳥居大路林梅辻富野并今度岡本宮内相加之以七家可勤之新宮太田若宮奈良澤田氏神六社之禰宜祝者氏人十六流之内社

後山如先々自賀茂支配可仕但貴布禰之神社於有所用者社家中以相談可伐之爲私用一切不可伐之山之物成於有之者右之社神用可仕事

一從奧社之後山至芹生峠如有來賀茂江役米役錢を出し貴布禰之者支配可仕但屋作用木等伐候時者賀茂江相斷可受差圖事

一貴布禰之者共近年從吉田補任狀取之烏帽子狩衣著之儀不届候自今以後停止之事

付貴布禰之者十人向後立烏帽子布之黃衣免許之但以賀茂小司相達神主出許狀之後可著之事

一貴布禰之者共相背先例依不隨賀茂先年賀茂社家中より板倉周防守江訴之處貴布禰之者共不届令落着急及籠舍候畢然處近年違背先裁許之條其科不輕候間亦令籠舍候事

右條々今度依賀茂貴布禰相訴糺明之上令裁許畢永可守此旨若於違犯者可爲曲事者也

寛文四年六月四日

甲斐御在判

河内同

大和同

矢刀禰一人黃衣

供御所一人

小目代一人黃衣

小預一人

松行事二人

土器師深草石見五郎
機器以上八人

神夫一人

大炊一人

山代一人

出納三人

五郷圖師五人

六郷小使六人

御馬先生一人

湯屋翁十二人

鍛冶二人

番匠四人長五人

槍物師一人

木守二人

觸使二人

神前所々下番四人

賀茂聖神寺看坊一人

貴布禰社每日參詣一人賀茂
社家也

貴布禰端社神子一人自賀茂
置之

同不動堂看坊一人

同奧社護摩堂看坊一人

同奧端下番二谷之者
共勤之

賀茂供僧廿一人

此外非衆但供入之時以神主補
任令初入之社例也

同中方三綱三人

承仕三人

專當四人

右貴布禰谷之在家人者六十餘人中自賀茂一奉

獻之神供辛櫃昇運之常々神庭掃除下番并小破之

御修理自賀茂一勤之時夫役等勤之外於神役者從

告勤之事無御座候然近年驕輩斷而不隨賀茂

下知故寛文四年忝被遂御裁斷双方以同御文
言御裁許狀被成下末社之舊法相立賀茂社家中
難有忝奉存御事御座候
其御裁許狀之御文言

覺

一貴布禰者從往古爲賀茂之攝社之由舊記相見
其上賀茂之社人致所持候證文歷然候上者彌如
先規可受賀茂之支配事

一貴布禰年中神事祭禮神供修理等從賀茂勤來之由
無紛候條彌可爲其通事

一從賀茂相勤神事祭禮之外貴布禰之者爲私不可
備神供事

一貴布禰社散錢幣物等從賀茂支配可仕事

一札牛王從賀茂沙汰之外貴布禰之者爲私不可
調出事

一從賀茂參向神事執行之時貴布禰之者共如先規
役儀等可勤之事

一貴布禰之神殿拜殿並從賀茂之番所江谷之者無
免許而不可濫昇事

一貴布禰谷山之儀南者限梶取明神北者限奧御前

右廿一宮之社司皆以勅宣を蒙り昔より次第轉任の社法にて最末氏神の社職には氏人より新輔せられ候將又社職領の田地も其社職に付て其職になり候へば其人所務いたし神役勤例候大方他國にて寄せられたる神領は社司の預り所納仕たると社記にみえて候然に諸國の社領落行候より社職をかけて神役勤儀難堪候へば年久しく末社の社司は闕職に成行候故代官と號して年ごとに五人づゝ氏人替り神前の役儀勤來りて候然に御當代寛文四年に社司氏人申分和睦仰付させられ忝も金八百五十兩拜領仕り社領の中に買得田有之候を買もどし社職料に被_レ付下_一并社中の諸職社司氏人評議をいたし双方立會月奉行を相定て平均に可_レ相守之旨御裁許狀をなし被_レ下一社一同ありがたき御再興と忝奉_レ悅萬歳を唱申御事候

氏人百四十人

社職に未_レ用候賀茂氏社司の
以下皆氏人と稱し候也

右百四十人之氏人者年齢次第往來田を帶し神事祭禮の神役等社司に相次て勤來り神前の結番晝夜怠懈なく勤申候此外幼年の社司の子以下無足の氏人數番御座候此氏人いづれも位階五位より四品になし被_レ下候當社祠官も氏人も或は京官八省の内或は受領等を

兼官拜任し來例口宣等社記に分明に御座候或御記に賀茂日吉の社家は諸大夫の一例とみえて候

諸役人

代官五人

忌子氏女一人

御服女郎同五人

贊殿別當一人

雅樂役一人

大宮郷司一人

中村郷司一人

田所奉行五人

目代一人

御服所一人

落田奉行一人

山奉行一人

山守五人

陰陽寮一人

以上社役今氏人中兼役也

伶人樂頭二人外七人

刀禰四十二人白衣

精進頭五人

神子同八人

御祿女郎同一人

御前頭一人

河上郷司一人

小山郷司一人

岡本郷司一人

侍所々司一人

棚所一人

御馬別當一人

作所奉行一人

河奉行一人

收納奉行二人

河口繪師一人

田口膳部一人青侍

下役人ナリ以下同
神人四十二人黄衣

平可_レ任_二民部大輔_一可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

五月三日

藏人左少辨殿

從五位下賀茂重秋宜_レ爲_二賀茂別雷社權祝_一從五位下賀茂重益宜_レ爲_二澤田社祝_一以上可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

六月二日

藏人左少辨殿

從五位上賀茂社權祝宜_レ轉_レ祝從五位下賀茂重賢宜_レ爲_二澤田社祝_一已上可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

六月十二日

藏人左少辨殿

此時節已後本社五官之内大概無_二闕事_一云々末社之禰宜者隨_レ時片岡貴布禰兩社一職宛有無之事不定也但位階事者社司氏人申來候神主職者三位如_二先例_一也逐一不能_二注進_一候

當時社司二十一人

本社 神主從四位下岡本宮内少輔保可

禰宜從五位下松下民部大輔順久
祝 從四位下林 主馬首 重豐

權禰宜從四位上森右京權大夫維久

權祝從四位下大池大藏少輔重榮

片岡社 禰宜從五位下鳥居大路大膳大夫順平

祝 從四位下梅辻 主計 職久

貴布禰社禰宜從四位下富野左京大夫就久

祝 從五位下岡本新吉保喬

新宮社 禰宜從五位上藤木但馬守宣直

祝 正五位下藤木兵部少輔和久

太田社 禰宜從四位下西池備中守季周

祝 從四位下芝式部少輔清雄

若宮社 禰宜從四位下西池左兵衛尉氏德

祝 正五位下山本左京亮季村

奈良社 禰宜從四位下南大路大膳亮英顯

祝 從四位下梅陰大炊頭氏持

澤田社 禰宜正五位下山本三河守兼益

祝 正五位下岡本民部權大夫保家

氏神社 禰宜從五位上藤木主計允朝顯

祝 正五位下藤木刑部大輔佐直

貴布禰競馬會神事依ニ無足ニ辭ニ申當職ニ事已無餘日ニ
事候間可レ爲ニ如何様ニ候哉爲ニ一社ニ可レ被レ致ニ無爲之
沙汰ニ之由可レ申旨候恐々謹言

五月十三日

親繼

賀茂神主殿

氏人中同可レ被ニ仰遣ニ候由也

正四位上賀茂貞久縣主宜レ任ニ左京大夫ニ可レ令ニ宣下ニ
給ニ之由被ニ仰下ニ候也謹言

五月廿三日

藏人辨殿

正四位下賀茂繼平宜レ叙ニ正四位上ニ可レ令ニ宣下ニ給
之由被ニ仰下ニ候也謹言

十二月廿五日

親繼

藏人左少辨殿

氏人

鴨長久三河守

同長興美作守

賀茂成顯豐後守

可レ被レ遊レ遣ニ口宣案ニ候也

從五位下賀茂諸久可レ爲ニ新宮禰宜ニ可レ令ニ宣下ニ給

之由被ニ仰下ニ候也

長享二年六月廿一日

藏人左少辨殿

正四位上賀茂貞久縣主宜レ叙ニ從三位ニ可レ令ニ宣下ニ
給ニ之由被ニ仰下ニ候也謹言

十二月十九日

藏人左少辨殿

正四位下賀茂棟久縣主宜レ叙ニ從三位ニ可レ令ニ宣下ニ
給ニ之由被ニ仰下ニ候也謹言

十二月十九日

藏人左少辨殿

此棟久は三位氏久神主の後胤にて後鳥羽法皇の尊影御宸筆など相傳
へけるを讓狀に永代つたへよと書て奥に一首よみおける歌
かくてよも絶はてしと頼む哉

君かゆかりの宿のしるしに

正四位上賀茂繼平縣主宜レ叙ニ從三位ニ可レ令ニ宣下ニ
給ニ之由被ニ宣下ニ候也謹言

同三年三月朔日

藏人左少辨殿

從五位下賀茂保平宜レ叙ニ從五位上ニ從五位上賀茂保

文明十二年賀茂權祝重則縣主可_レ被_レ止官職候可_レ令_二下知_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

九月十七日

親長

藏人辨殿

同十三年二月廿五日從四位下諸平縣主可_レ爲賀茂神主之宣下也此諸平者明應之歌合之時被_レ入人數了

賀茂社務職事及闕如者可_レ存知候由可_レ被_レ仰付繼平縣主之由被_二仰下_一候也謹言

十月廿四日

藏人辨殿

當社々務職事就_二辭退之儀_一被_レ仰正禰宜處是又堅辭申候猶重被_二仰出_一者可_レ辭官職當イ之由申候間繼平禰宜可_レ還補之由被_二仰出_一候處是又猶雖申_二故障之趣_一堅被_二仰下_一候就其神事已無餘日之上者可_レ被_レ致無爲之沙汰之由被_二仰出_一候旨也恐々謹言

十月廿七日

親繼判

賀茂一社御中

從四位上賀茂繼平縣主如_レ舊宜爲賀茂別雷社神主旨可_レ令_二宣下_一給_上之由被_二仰下_一候也謹言

十月廿七日

藏人辨殿

治部少輔重秋權祝事可_レ存知之由被_二仰出_一候處堅故障申候間就其先爲其代年始以下神事不闕怠之樣可_レ存知之由被_二仰付_一了其旨可_レ令_二存知_一給_上之由可_レ申旨候恐々謹言

十二月廿五日

親長

賀茂神主殿

就_二權祝職闕_一可_レ拜重秋之由雖被_二仰付_一難澁之由堅歎申候間被_二指置_一候處往來田下地可_レ勘落云々何樣之子細候哉以外之次第候不可_レ致疎骨之沙汰之樣堅被_二仰出_一候旨可_レ申旨候恐々謹言

二月四日

親繼判

賀茂神主殿

貴布禰兩官申就_二計會_一辭退當職云々神事已遲々之處可_レ闕御祈禱之條右以不可_レ然就中_二被_レ宛_一由良庄公用之處代官難澁云々年貢令無沙汰者彌久縣主以他足可_レ致其沙汰歟一社一同加談合云々神事云御祈禱不御事闕樣可_レ被_レ致其沙汰之由可_レ申旨候恐々謹言

三月廿七日

親繼

らる此神主歌人也集に入事おほし新後撰集に述懐の心を

神山にその名をかけよ二葉草

三のくらゐのあとをたつねて

とよめるを入られける

或記云文明八年十二月廿四日正四位下賀茂繼平縣主宣爲賀茂別雷社權禰宜正五位下賀茂重則如元宜爲同社權祝從四位上賀茂棟久縣主宣爲片岡社禰宜從五位下賀茂諸平宣爲同社祝從五位下賀茂諸久宣爲貴布禰々宣以上可下令宣下給之由仰所候也謹言

十二月廿四日

藏人辨殿

文明十年四月四日賀茂社務職事貞久縣主可存知候由難及再往之御問答諸神事領等就違亂堅歎申間未定候然者今日氏神祭神事先爲一社加談合社司氏人等可致無爲沙汰之由可被下知之由被仰下候也謹言

四月四日

親長

藏人辨殿

賀茂別雷社權禰宜賀茂繼平縣主宣轉任禰宜祠官等次第轉任事任例可存知候由可下令下知候由被仰下候也謹言

四月七日

藏人辨殿

當社々官次第轉任事任例可被存知之由可申候恐々謹言

四月十三日

親繼判

賀茂神主殿

文明十二年二月廿九日記云

當社々務職事辭退候間被仰正禰宜諸平縣主之處是又俄事難叶之由堅歎申候此上一社一同加評議可致無爲之沙汰候歟不然者被略神事歟各可被存知候由被仰出候旨可申分候也恐々謹言

二月廿九日

親繼判

賀茂一社御中

正四位下賀茂夏久縣主如舊宜爲賀茂別雷社神主可下令宣下給之由被仰下候也謹言

八月廿四日

親長判

藏人辨殿

正五位下賀茂縣主遠久

可_レ爲_ニ貴布禰々宜_一

從五位上賀茂縣主景久

可_レ爲_ニ同祝_一

從五位上賀茂縣主能秀

可_レ爲_ニ太田禰宜_一

從五位下賀茂縣主久忠

可_レ爲_ニ同祝_一

從五位下賀茂縣主久道

可_レ爲_ニ若宮禰宜_一

從五位下賀茂縣主久宗

可_レ爲_ニ同祝_一

從五位下賀茂縣主康基

可_レ爲_ニ奈良禰宜_一

從六位上賀茂縣主忠久

可_レ爲_ニ同祝_一

藏人頭左京大夫平信輔奉

獻上

宣旨

賀茂社司轉任事

右宣旨獻上如_レ件

十二月二十一日

左京大夫信輔奉

久世神主者氏久之男也歌人多被_レ入_ニ勅撰之集_一和歌之中詠_ニ社頭花_一歌

神垣に咲そふ花をみてもまつ

風をさまれと世を祈るかな

同年十二月廿四日

宣旨

從五位下賀茂保光

宜_レ爲_ニ澤田禰宜_一

職事同前奉

獻上

宣旨

從五位下賀茂保光可_レ爲_ニ澤田禰宜_一事

右宣旨可_レ下知_ニ給_上之狀如_レ件

十二月廿四日

職事同前奉

謹上 土御門中納言殿

同年十月十一日神主氏久從三位に叙せらる

是諸社の祠官上階のはじめ也云々此氏久歌人也集

に入たる歌多し

伏見院御宇正應六年二月廿二日井關經久神主に補せ

可_レ轉_二貴布禰々宣_一

從五位上賀茂縣主能季

可_レ轉_二貴布禰祝_一

從五位上賀茂縣主延平

可_レ轉_二太田禰宣_一

從五位上賀茂縣主遠久

可_レ轉_二太田祝_一

從五位下賀茂縣主主平

可_レ轉_二若宮禰宣_一

從五位下賀茂縣主景久

可_レ轉_二若宮祝_一

從五位下賀茂縣主久幸

可_レ轉_二奈良禰宣_一

從五位下賀茂縣主能兼

可_レ轉_二奈良祝_一

從五位下賀茂縣主久忠

可_レ任_二澤田禰宣_一
爲字常事歟
任字不可然

後宇多院御宇弘安九年三月前神主氏久神主再任其宣

旨云

或記云

弘安九年三月十六日

宣旨

正四位上賀茂縣主氏久

如_レ舊宣_レ爲_二賀茂別雷社神主_一

藏人頭治部卿平信輔奉

弘安九年六月十五日

宣旨

賀茂澤田社祝從五位下賀茂縣主重夏

可_レ轉_二別雷社權祝_一

從五位下賀茂縣主種久

可_レ爲_二澤田社祝_一

藏人頭右同人奉

弘安九年十二月廿一日

宣旨

正四位下賀茂縣主久世

可_レ爲_二賀茂別雷社神主_一

從四位上賀茂縣主久政

可_レ爲_二同禰宣_一

從五位上賀茂縣主經久

可_レ爲_二同權禰宣_一

正五位下賀茂縣主能季

可_レ爲_二片岡禰宣_一

正五位下賀茂縣主延平

可_レ爲_二同祝_一

興ある事ども有けり宮の女房内の女房いひかはしつゝ
ゝやさしき事どもおほく侍けり後朝に大納言宮の御
方の按察殿のもとへ

この春はけにふることを思出る

かはらぬ宿の雪をなかつて

昔みし庭の雪とは思はねと

たかためならぬ宿を戀しき

白雪のふれはかひある世なれとも

昔よいかに忘れわひぬる

堀河殿いそのかみふりにし事を返事に

萬代も雪つもるへき雲の上に

たゝ思やれ秋の宮人

紅のうすやうにかきておなじ色のうすやうにてたて
ぶみして所の衆をつかひにて中宮の按察殿の局にさ
しおかせけるとぞ

後堀河院の御時嘉祿元年八月十九日に季保若宮禰宜
になさる後に片岡禰宜になり歌人にて御歌合にも秀
歌奉し故に禰宜になし給りぬといへり後土御門内大
臣のいまだ中納言なりし時賀茂社に參詣ありけるつ
いでに榊枝を折て歌講せられける後程へて賀茂季保

がもとによみておくり給し

ちはやふる神にたのみをかけ置し

榊の枝の折ぞわすれぬ

返し

賀茂季保

神垣にいのり置てし榊葉の

ときはかきはゝかけなひくまで

と續拾遺集に入られける此外神主禰宜貴布禰片岡
以下の社職の人々あまたもらしつ

龜山院御宇文永九年十月一日或記云賀茂社司事有

其沙汰頭中將奉行也即於陣宣下藤中納言着仗座

予同可存知之由職事相觸之間候床子頭中將出

陣宣下中略正五位下賀茂縣主某可爲其社禰宜仰

之後被下折紙書宿紙社司次第轉任也
口宣紙ノ機注左聊披見之微唯

懷中退又於床子召六位史盛廣先仰第一之轉任之

仁如上卿
仰詞之後下折紙上卿起座

正五位下賀茂縣主久世

可轉三片岡禰宜

正五位下賀茂縣主久政

可轉三片岡祝

正五位下賀茂縣主能重

時は御代々參候いたしあげ鞠露はらひをば先賀茂人
うけ給る事也依レ之御鞠會に飛鳥井難波御子左賀茂
人と舊記どもに有と云々

二條院御宇應保二年閏二月廿一日に政平太田社禰宜
より片岡祝になりて年ふるまゝによりける歌千載集
の神祇部に入られる

さりとともたのみそかくるゆふたすき

わかた岡の神とおもへは

とよめりければ神の感じおぼしけるにや其後程なく
禰宜になりけるとなん此事千載集の詞書にみえた
りこの人も代々の集に入れる也

高倉院御宇治承元年九月廿八日藤木禰宜重保權禰宜
より神主に補らる歌人にて代々の勅撰に入たる也賀
茂社歌合とて人々すゝめて左右の歌人數多よめる其
内に源三位賴政平忠度など神前に參向あり俊成卿判
者にて勝負をわかち給へるに重保神主がうたに

すへらきの願を空にみて給へ

わけいかつちの神ならば神

とよめりしが勝に定まる後に千載集にぞ入られる
又元暦の比後番の歌合人々にすゝめし時 定家卿

忍へとやしらの昔の秋をへて

おなじかたみにのこる月影

とよみ給へるは秀歌にて人の口にある詠なり云々又
月詣集と名づけて十二月に部をわかちて集をえらび
ける人也

順徳院御宇或記云承元五年閏正月二日のあした目も
おどろくばかり雪ふりつもりけるに九條大納言參内
せられて此雪は御覽すやとて人々いざなひて車よせ
に車さしよせて別當の三位かうのすけ以下内侍だち
引ぐしてやり出されけり中宮は后町よりいまだいら
せおはしまさねば中御門殿へやりよせて宮の女房一
車やりつゝけて大内右近馬場賀茂のかたざまへあく
がれゆかれけり大納言直衣にて騎馬せられたりけり
さらぬ人々も或は直衣或は束帶にて六位までもな
ひたりけり賀茂神主幸平狩装束して車のともにまい
れりむかしはかゝる雪には馬に鞍置まうけてこそ侍
しに今はかやうの事たえて侍つるにめづらしくやさ
しく候ものかなとてわかき氏人どもおなじく狩装束
して各鷹手にすゑてかんだちめのかたへ御供つかう
まつりて雪の中の鷹狩して御覽せさす道すがらいと

と號すと云々其後萬壽四年に安賴長曆元年に親經後冷泉院御宇永承二年五月十三日賀茂成眞を賀茂神主になさる是神主と號する初例なり云々

同御宇永承六年十二月十九日に成助權禰宜より神主に補す大池神主と號せり歌人にて代々の撰集に入られし歌多し其中に金葉集に入れる詞書に

賀茂成助に初てあひて物申けるついでにかは

らけとりてよめる

津守國基

きゝわたるみたらし川の水清み

底の心を今そみるへき

返し

住吉のまつかひありてけふよりは

成助

なにはのこともしらすはかりそ

とあり此事社記にいへるは住吉神主國基日比より神道の事歌道など望しにかつゝ傳はれる比かくよみておこせたりと云々此次の神主山本神主成經永保二年に補任す堀河院御宇寛治五年に安成正禰宜に補任せらる同寛治五年に重助禰宜になさる同年六月廿二日に成禰神主此時同七年に當社にて競馬はじまれり天仁二年十一月十九日に重助神主たり同時に從四位

下に拜叙しけり是則四品の初例たるべし次に成家權禰宜より保安二年三月三日補任せらる崇徳院御宇天承二年四月三日山本神主成平補任せられぬ鞠足無双なりし人也此次に成重保延二年四月十三日に貴布禰禰宜より神主に成重繼片岡禰宜より久安元年に神主になさる仁平二年十二月廿九日に貴布禰禰宜より保久神主に補任せらる同二年に重忠舍兄三人を超て神主になさる次に高倉院御宇に山本禰宜家平神主に勅許なりぬ此家平が館へ後白河院保元四年四月に賀茂社御幸なりし時人々鞠このみあひて雲わけみんとて度々行むかひいみじき由を申あはれければ聞しめしわたりて御覽あるに御供には按察使資賢大納言兼雅公卿殿上人あまた參り候じて御覽ありけり雲分といふは昔の名也山本神主成平がもとにありけりと云々又安元御賀の時三位頼輔賀茂神主家平が家に行向て御賀の上鞠仕べき由勅定あり其間の子細訓説をかうぶるべしと云れければ家平云鞠は仕候へども御賀の鞠つかうまつる事に候はねば故實申がたく候但常の老老の人のあげまりの體にこそ候はめと申けり如此賀茂人蹴鞠堪能の輩おほくてうへの御まりある

社家 官位 諸司

舊事紀云神皇產靈尊兒天乃神玉命葛野鴨縣主等祖也云々本朝月令云賀茂建角身命丹波神伊可古夜日賣を娶りて玉依日賣玉依日子をうめり此玉依日子の神賀茂縣主等が遠祖也云々

又新撰姓氏錄には賀茂縣主は神魂命孫建角身命孫也と云々或書云神龜年中迦毛之字作賀茂也云々光仁天皇の御宇寶龜十一年四月に山城國愛宕郡の人正六位上鴨禰宜眞髮部津守十一人に賀茂縣主の姓を給ふとみえたり

桓武天皇の天應元年四月戊申の日賀茂神二社の禰宜祝等始めて笏を把事を免せらるゝ由見えたり平城天皇の御宇大同四年十一月戊戌の日外從五位下賀茂縣主眞襲に從五位上を授らると云々古書には賀茂字と鴨字を上下の社に通じて出せり舊カ後世上下社各別に書來れり嵯峨天皇弘仁二年賀茂男床賀茂大神宮禰宜たり此男床よりこなた社家の系譜歴名など明かに今に傳り來れり悉是をあらはす能はずあらまし勅宣有し社記の趣どもをかつく注進つかうまつり候
淳和天皇御宇天長元年四月甲午日祝部枚麻呂枚を以て正一位勳一等鴨別雷大神の祝に補せらると云々又承

和仁壽貞觀にいたりて賀茂大神の禰宜賀茂縣主廣友益雄門麿等外從五位下に叙らる

光孝天皇仁和二年賀茂縣主貞基をして別雷大神の禰宜に補らる醍醐天皇御宇延喜十一年に忠實朱雀院御宇天慶五年に在樹同六年六月廿六日に忠主權祝たるを正禰宜に轉任せらる此後村上天皇天曆九年に在實此在實禰宜の時社頭鳥居のほとりにて往古の錢七百八十二文掘出し公家に奉る其錢の文和銅開珍萬年通寶神開寶と三の文あり神祇陰陽寮をして是をうらはしめらる通用すべきやいなやの事又諸道の博士に仰て勘へしめらると云々

同天皇天德二年六月五日に忠成禰宜に補らる圓融院御宇天延二年に貴布禰々宜より忠賴當御神の禰宜に轉補せらる歌人にて金葉集に入たり其詞書に和泉式部が賀茂へまいりたりけるをみて賀茂忠賴れて紙をまきたりけるをみて賀茂忠賴ちはやふるかみをはあしにまくものかと申かけけるに和泉式部かくぞつゞけゝるこれをそしものやしろとはいふ

一條院御宇寛弘七年に茂忠を禰宜になさる岡本禰宜

私市社 斷絶

日吉社 三尺 高欄
二尺七寸

舍屋方

祝詞屋 長五間 幅一間

同渡殿 四間半

同渡殿 六間半

御籍屋 八間半

忌子屋 四間

高倉 六間

直會所 五間

樓門 三間半

中門 一丈 二間

日門 八尺八寸 二間

西門 八尺八寸 二間

細殿 五間 高欄

土屋 五間

御所屋 五間

同庫 三間

酒殿 七間

神馬屋 四間

林田社 二尺三寸五分 二尺一寸

鈴一社 三尺六寸 高欄

禰宜方御供所 五間

祝方御供所 五間

透廊 七間

幣殿 四間 (高欄) 4

神寶庫 三間

樂屋 四間

預部屋 三間 (但縁高欄) 4

廻廊 十八間

平重門 七尺

唐門 一丈五尺 (一本作一丈五寸)

裏門 八尺

橋殿 六間 (舞殿也) 4

樂所 三間

廳屋 十三間

寶殿 五間

廊下 八間

湯屋 五間

御物井 二間

參籠屋 四間

一鳥居 一丈七尺付 井垣五十六本

奈良鳥居 一丈三尺

同下番所 二間半

同下番所 二間半

板壁 二ヶ所

同食堂 七間半

聖神寺 四間 (縁高欄) 4

同門 八尺五寸

同看坊屋 五間

貴布禰舍屋

巫女屋 三間半

同看坊屋 三間

同地藏堂 三間 (高欄) 4

同一鳥居 一丈五尺

奧鳥居 一丈五尺

橋 二ヶ所

下番所 一間 一端半

畔倉 三間

下番所 二間

二鳥居 一丈七尺付 井垣五十七本

太田鳥居 一丈三尺付 井垣十八本 (一本二十一)

氏神鳥居 一丈五尺付 井垣十八本

橋十一ヶ所 内石橋三

御讀經所 五間 (縁高欄) 4

小經所 四間 (高欄) 4

同看坊屋 三間

神宮寺 五間 (高欄) 4

鐘樓 一間半

同不動堂 三間 四方高欄

同奧參籠屋 六間半

同門 三ヶ所

二鳥居 一丈六尺

結神鳥居 九尺

板壁

凡當社御造營者每度木造始立柱上棟遷宮等事依_二古來之例_一有_二日時定之陣儀_一宣旨使遷宮當日者公卿諸司參向并有_二宣命奉幣等_一也

別雷皇太神宮

神殿八社末社次第

本宮表一丈九尺五寸
脇一丈三寸

權殿同上

正一位

片岡大明神表九尺四寸五分
脇七尺五寸

同拜殿一間半

正一位勳一等

貴布禰大明神一丈一尺七寸五分
九尺七寸

同拜殿三間

同權殿六尺二寸五分
四尺八寸

同拜殿一間半

同奧社七尺五寸
六尺

同拜殿一間半

新宮大明神九尺四寸
七尺五寸

同拜殿一間半

太田大明神八尺六寸五分
七尺

同拜殿一間半

若宮大明神九尺三寸五分
七尺六寸

同拜殿三間

奈良大明神七尺三寸
五尺六寸

同拜殿一間

澤田大明神七尺三寸五分
五尺七寸

同拜殿一間半

氏神大明神六尺五寸
五尺一寸

同拜殿一間半

末社

棚尾社表二尺
脇一尺八寸 高欄

土師尾社二尺一寸五分
一尺

梶尾社二尺一寸五分
二尺 高欄

山尾社同上

藤尾社同上

川尾社同上

諏訪社同上

橋本社二尺八寸高欄

岩本社二尺八寸高欄

梶田社同上(高欄)

山森社三尺三寸三社相殿

小森社斷絕今神東仁在○疑有誤字歟

半木社三尺三寸五分

同拜殿一間半

聖神寺

神宮寺

鎮守二尺七寸

鎮守二尺二寸五分

別宮社此社者鳥羽院御誕生之御所被_二造立_一云々近代斷絕

太田社末社

白鬚社表二尺一寸五分
脇二尺

百大夫社二尺八寸
二尺五寸

福德社二尺五寸高欄

鎮守社二尺八寸五分

印殿神主當職之間
奉_二安置里亭_一

貴布禰社末社

梶取社表二尺七寸五分高欄
脇二尺五寸

梅宮社二尺六寸五分

白石社二尺六寸

白鬚社斷絕

牛一社二尺八寸(高欄)

鈴鹿社二尺八寸

山尾社斷絕

惣社斷絕

任部社同上

黑尾社斷絕

吸葛社二尺五寸
二尺三寸五分

結神社二尺一寸

三月十三日可_レ奉_レ造之由奏聞則六月朔日本作始七月
三日上棟八月十三日遷宮神主者成助也

堀河院康和五年三月十八日奏聞了七ヶ月之内奉造了

同年九月四日遷宮神主成繼_{云々}

同御宇康和五年之後嘉承元年四月十二日燒亡同年七

月二日上棟同廿六日遷宮_{云々}

鳥羽院天永二年造營_三

崇德院御宇保延六年二月朔日本作始八月四日遷宮也

此時成重神主之中也

近衛院康治二年三月廿三日上棟同年八月四日遷宮去

保延之造營依_レ爲_二堀河材木_一被_二改造_一之_{云々}

高倉院承安二年三月五日木造始六月十七日上棟八月

十六日御遷宮是重忠神主之時也_{云々}

同御宇治承三年三月廿日若宮四月七日太田造營

土御門院正治元年十二月廿五日遷宮資保神主

順德院御宇建保五年八月七日木造始十月二十九日上

棟十二月十七日遷宮

龜山院弘長二年造營事起文永元年遷宮_{云々}

後宇多院御宇弘安五年造營

後二條院嘉元三年八月七日遷宮神主經久

花園院應長元年正和元年舍屋修造_{云々}

光明院貞和二年造營_{云々}

崇光院應安三年後圓融院永和二年打覆

後小松院至德元年造營明德元年打覆

稱光院御宇應永三十二年造營正長二年造畢_{云々}

後花園院永享七年末社造營

後土御門院文明年中燒亡之後造營

後奈良院弘治二年丙辰五月廿七日遷宮

造營記云天正十九年七月二日亥刻遷宮_{秀吉公依_二神主}

尊久奉_レ遷_二神體_一之時庭燎神前燈等消鎮御內陣欲_レ參

之時自_二南方_一大光物飛來入_二于神殿_一_{云々}于_レ時勅使中

山亞相舞殿着座御驚懼之處社司申云嘉元之時光映_二

于神前幕_一之由所見之由申之有_二御感心_一急可_レ有_二奏

聞_一候旨被_レ仰_{云々}

寬永五年十二月廿四日亥刻本社遷宮

台德院大相國之御代本社并八社小社舍屋等皆造營

被_二仰付_一神寶神器社家諸司之裝束迄新調被_二仰付_一

了

延寶七年九月十六日戌刻遷宮_{神主保可}本殿新造末社舍屋

等修造被_レ爲_二仰付_一之

神事有^三猿樂^一 矢田觀世立合也云々 也云々社司氏人を菅貫の輪に入奈良河邊にして麻人形など流しやる此日權大外記
康富貴布禰に參りてかの河邊にてよめる

御被するきふねの川の瀬をはやみ

なかるゝ年そなかは過ぬる

寶徳元年八月廿三日祈年穀の奉幣中絶して侍りける
を武家執奏せられて興行あり賀茂奉幣使權中納言藤
原明豐刑部少輔大江朝臣俊宣をへ使也と云々同二年
五月九日祈雨奉幣を貴布禰社に奉らる宣命神馬など
例のごとし

後土御門院御宇文明八年十一月廿四日此比京城火災
の事あるによりて賀茂一社一同として懇祈をいたし
天下泰平國家安全の精誠を抽べきよし仰くだされて
社司氏人神前に參りて祈り奉る

文明十五年五月四日當年御重厄の御祈の事一社一同
丹祈をいたすべき由仰下さるゝ也

長享三年正月廿一日二星合公武御祈の事七ケ日一社
一同として殊に精誠を抽奉るべきよし仰出さる室町
殿御教書おなじく到來云々

就^二出馬^一祈禱之卷數并菓子一合房鞆二懸到來悅入候

尙惟任五郎左衛門可^レ申候也

三月廿五日

賀茂社中

信長
御朱印

此表就^二出馬^一祈禱之卷數并鞆二具

到來祝着候猶委細細井新介可^レ申候也

三月廿九日

賀茂惣中

秀吉御朱印

右行幸御幸御祈の事官幣使并公家たゞ人まで當御
神を敬神ふかくてまさしく神の靈應おはせし事ど
ももらしがたくて所々に書つらねければくど
しく候もの歟

造營

右官史記曰天武天皇六年二月丙子令^下山脊國營賀茂
神宮云々

或記曰賀茂造營粗勘例

冷泉院御宇安和元年賀茂社造營

一條院御宇正暦五年造營

後朱雀院御宇長暦元年造營

御冷泉院御宇康平三庚子年造營四月八日本作始六月

廿日上棟八月廿九日還宮也其後白河院御宇永保元年

になりてこれをすてば人いよ／＼^彌ぎぼうをさきとし
 て國たちまちにほろびうせんしかあらば正直の神何^然
 をもちてかそのめいをつぎ其かたちをのこさんやわ^以
 くはうのちかひおそろくはむなしきにあるべし神も^光
 し邪ねいをうけすば我ねいしんをもたず我ねしいん^誓
 をもたずば神また捨^{又イ}給はんやいのる所わたくしなく^{ナシイ}
 ば神かん座をたゝずしてそのしるしを見せ給へいの^後
 る所もしわたくしまじはらば我とがをかうむらん事^蒙
 いさゝかもいたむ所にあらずたゞ神に身をまかせま^鑑
 つりてさらに身をわたくしにせず此心をあきらけく^鑑
 かゝみたまひてあやまる所なくばじやねいを萬里に^正
 しりぞけてせいちよくのみちをすゝめ治天のうむた^直
 ちまちにひらけん大明神このじやうをたひらくや^狀
 すらくきこしめして夜のまもり日のまもりにもも^平
 りさいはいたまへとかしこみ／＼も申たまはくと申^安
 此御祈願のおもむき神慮感應まし／＼てければ二た
 ひ皇統をうけさせ給ひて帝運ながく萬歳をつがせ給
 ふとなり

稱光院御宇應永八年五月五日に北山殿賀茂御參詣競馬御見物あり

同九年十月廿三日賀茂社へ奉幣使勅使參議藤原隆信
 副使左近衛將監藤原友清を立らると云々 同廿五年十
 月七日今日七社奉幣を發遣せらるゝによりて賀茂へ
 中御門宰相定輔卿參向ありて幣を奉られ宣命を神前
 にして讀あげらるゝと云々

後花園院御宇嘉吉二年十月十九日賀茂奉幣使を立ら
 る權中納言正三位藤原兼郷副使越前守大江朝臣俊宣
 云々

同三年五月九日貴布禰社祈雨の奉幣を奉らる從五位
 上神祇權大副大中臣房宣を使として黒毛の御馬を引
 そへ宣命よみたてまつらせらると云々

祈雨幣物事

五色絹一疋 生絹一疋 絲二絢

綿二屯 木綿二斤 麻二斤

初二支 黒毛馬一疋 衛士二人

文安元年七月廿六日祈年穀奉幣なり賀茂社へ權中納
 言源朝臣有定前越前守高階朝臣重頼を立らる

文安四年六月卅日今日賀茂御手代會神事也例年神前

花園院御宇正和四年五月廿一日貴布禰社奉幣使を立
らる止雨の御祈なりと云々此間禁裏仙洞産の穢混合
の事ありて七ヶ日の後なり貴布禰は賀茂の末社たる
の間三十ヶ日たるべき由これを申といへども公家の
法にまかせられ幣使を立られたるの趣或記にみえた
り此時仰られしは社家は社法を守へし公家は七ヶ日通路無憚法に任さると云々

後醍醐院御宇元亨四年四月十七日壬申行幸御代始な
るべし或記云後伏見院御位をすべらせ給ひて太上天
皇と申奉れる比皇子は東宮に立せ給ひしかども御即
位の事御沙汰あやふく思食ければ皇統正流の御紹運
をば昔より賀茂の御神擁護ましゝて神威あらたに
帝位につかせ給ふ先蹤を頼思召し御祈願ふかく歎慮
の誠を盡し申させ給ふ御告文を御手づから親ら宸筆
にあそばして當御神へこめまいらせられける其御告
文云

此間異本賀茂ノコトアリ

これ嘉暦三年としのついでつちのえたつ九月四日み
づのとのゐよき日のよき時太上天皇胤仁かけまくも
かしこき賀茂大明神のひろまへにかしこみくも申
たまはくそれおろかなるせい性かへりみるといへども
天日嗣をうけて皇とうの正流にあたり東宮の立坊

のうむにいたるまですでに神の御めぐみにあづかる
としす年既成でにせい人のよはひにおよぶせんその運天
のさづくる所その期いたれりしかあるを一はうみち
なきひけい秘計日を途をいて色をそふむしんのかまへ神か
んさだめて照したまはんかこれしかしながら身のた
めしにして世をかたぶくるにあらすや天のしたは一
人のあめのしたにあらすあめのしたのあめのした也
ほしきまゝにじやねい耶倭をもちて正ろをふさがんこと
神としてあにうけ給はんやそもく大明神の御めぐ
みを我身にたれ給ふ事この時にあたりてすいさう一
にあらす是をたのみあふぎたてまつるにさらにうむ
のおそれなしもとよりのこと自然はりしせんのみちにゆ
づりて運を天にまかするゆるにかならずこれを火きう
にいのらす此こゝろおのづからくはんたいに似たり
といへどもひだうよこしまのねんりきたとひつ非道よく
とも神道いかでか邪をうけ正を捨んもしひだうの念
力つよきによりて正道をたのむ心くわんたいの急とが

去年閏五月御産の御祈によりて院の御隨身等宿願を果し奉らんとて殊に賀茂上下の社には競馬五番あり幣帛以下奉らるゝと云々

同御宇康元々々年五月十四日又御幸ありて七日の御参籠あるべしと云々

同御宇正元元年四月廿七日二十二社に臨時の幣使立ちたる是天下の飢饉疫癘の御祈也云々

龜山院御宇弘長二年四月廿日行幸例のごとく御代始也同御宇文永三年四月十二日上皇御幸ありて上下の

社にして御神樂あり拍子は前源中納言笛は花山院中納言筆箒は實成朝臣和琴は親忠朝臣也下の社にては

三ヶ夜のよし社記にみえたり同四年四月一日兩院御幸ありて七ヶ日の御参籠のよしみえたり同五年正月

五日兩院御幸なされたるよし社記に見えたりその御比はひ神館の雪のあしたしのびて御幸ありける後に

よみ侍りける賀茂氏久

神山の松も友とそおもふらん

ふらすはけふのみゆきみましや

とよみ侍りけるを後に續拾遺集の冬の歌に入られけると也

皇承永元四年四月十九日當社行幸御代始例後宇多院御宇弘安元年四月十九日當社行幸御代始例

のごとし同九年二月廿五日賀茂別雷神社の神殿ひらかしめ給はざる事又同年中樹の顛倒の事につき宣旨ありて御卜の事行はれ御祈ありと云々

伏見院正應三年十二月八日賀茂行幸御代始例のごとし後伏見院の御宇正安四年六月後宇多院賀茂の御幸

なりける時供奉にさふらはれける人々題をさぐりて歌つかうまつられけるに社頭天と云事を

新千載神祇
天降る別雷の神代より
隆長

とよめるとなん又寄國祝と云事を
續千載神祇
かたふかぬ速日の嶺に天くたり

と詠じたまひけるとなむあまたもらしつ
あめのみまこの國を我くに

後二條院御宇乾元二年七月廿九日法皇河上御幸上卿防城中納言也但此たびは社の常の神馬を引せらるゝ

のよしみえたり同御宇嘉元々々年十一月廿六日御幸あり御参籠ありて曉がた御かちにて御宮めぐりありし

と云々同二年正月廿日又御幸御宮めぐりの次第奈良さはだ片岡新宮より御前にまいらせ給ふ

せ給ひて公卿は鳥居の内南上西面に侍臣は鳥居の外
北上東面に列居し御隨身御前につらなり屈居して御
車の轡を鳥居の内に入て下御也侍臣前行公卿御扈從
につらなるさて内の鳥居を入せ給ひて細殿の御座に
着御南面にまします細殿の東階より舞殿の西南へ打
橋をかけて舞殿の北第二間に御拜の座をして同殿の
小庭に案をたて、金銀の御幣白妙の御幣を倚立る也
さて御拜の座にうつりおはします時是より先御手水の事あり頭中
將御笏を獻す次院司の衆顯定卿金銀の御幣を取院司
の四位行家朝臣白妙の御幣をとる時に兩段御拜まし
ます院司金銀御幣をとり退下りて久繼神主をめす神
主西北の庭に參りこれを給はり神前にまいり御戸に
よせ奉る次に白妙の御幣は若宮貴布禰片岡太田各一
捧社司給はりて社頭に奉る神主まかり出てかへり祝
詞を申片岡の前よりすゝみて榊をたてまつる杖にさ
しはさむ公卿是をとりて獻せらる此後細殿に入御な
りぬ毎度かへり祝詞のゝち入御あり若是よりさきに
入御なりぬれば細殿にまいりて榊を獻す此間神主以
下祿を賜はる各大樹一領云々次神馬を引橋殿をめぐ
らす事三匝御隨身これを引社家請取て神前に引むけ

てしりぞく此間公卿東屋の座に着て舞樂あり頭中將
御所に參りて勸賞の事をうけ給り神主以下禰宜祝氏
人等一階を給ふ事をはりて還幸なりぬ同四年四月廿
九日上皇御幸内大臣以下供奉ありと云々同六月廿六
日祈雨の御幣を奉らる御使權大納言通忠卿まいり給
ふ但丹生貴布禰には殿上人を用らるゝのよしみえた
り

後深草院御宇建長二年三月十三日己卯軒廊の御卜あ
り賀茂別雷社御鎮ひらかせ給はざるによりて也姉小
路中納言顯朝卿以下御參有と云々

同三年四月十日御幸當社七ヶ日御參籠云々同年五月
五日幣使を立らる貴布禰殿上人使如^レ初但霖雨の御
祈云々同年六月五日賀茂社勅使をたてらる勅使參議
藤原朝臣公泰散位源朝臣仲氏散勅使也云々

同五年二月三日辛亥賀茂行幸供奉の人々大略八幡宮
のごとしと云々

同年八月廿一日丁卯賀茂一社奉幣の事ありと云々同
六年八月十九日上皇御幸あり同十月九日軒廊の御う
らあり賀茂の恠異によりて也云々同月廿八日又御幸
此儀又八幡のごとしと云々同七年二月廿一日大宮院

儒官をへざりければ直に拜任いかいと沙汰ありけり
重代稽古のものなりけれども引たつる人もなかりけ
るに忝も神恩をかうぶりて先途をとげてけるめでた
き程の者なりけりと云々

同四年四月七日又御幸同八月八日には奉幣使を立ら
る同十月五日當宮には神馬を相添て獻せらるゝと云
々但天變の御祈也と云々

順德院御宇建曆元年四月七日太上皇御幸三日の間御
參籠ありて御幣六本神主幸平に給ふのよしみえたり
同十二月四日又幣使を立らるゝ大嘗會延引の事によ
りて也同二年九月廿八日奉幣あり齋院まかでさせ給
ふのよしを告申さるゝなり同年十一月一日大嘗會を
あらため行はるゝよしの日時定の幣使なりと云々

同御宇建保元年三月十日行幸上卿公房正禰宣重政が
許へ花折てまいらすべき由仰ありければ賀茂重政

さくらはなけふのみゆきに咲そめて

やはよろつ代の春はかきらし

とよみて奉りければ

年をへてみゆきにかさせ春の花

たえぬ色かは神そしるらん

と御返しありける同年三月卅日又御幸ありて七日御
參籠云々

同三年六月十五日雨の御祈として幣使を立らる同八
月十六日上皇御幸ありなりける

同六年二月廿七日當社幣使を立らる同十二月廿日上
皇又御幸なりぬ

同御宇承久元年六月七日庚午幣使を立らる天下疫疾
の御祈謝なりと云々

同三年三月廿日行幸此御代二ヶ度行幸也同四月二日
丙辰幣使を立らる宣命等ありと云々

後堀河院御宇嘉祿元年十二月八日御代始行幸有四條
院御宇嘉禎三年十一月十一日戊午行幸御代始の例の
ごとし

後嵯峨院御宇寛元元年十二月五日御代始行幸有

同三年四月九日幣使を立らる但三合併天變の御祈の
ため也と云々

社記云寛元四年四月廿九日賀茂下上に御幸あり今日
未明に出御ありて秉燭の後還御なりぬ其次第先下社
にまいらせられ社頭の儀御拜例のごとしさて上の社
にむかはせらる路次の儀行幸のごとし外の鳥居に着

年の御幸は儀式にて神寶種々舞樂競馬御鞠歌合などの事有しを今度建久には略儀の御幸也と云々

此御門の比にやあらんある記云二條宰相雅經卿は賀茂大明神の利生によりて次第に昇進ありし人なりけり其初世間あさしくたえくにしてはかくしき家などもおはせざりければ花山院の釣殿に宿してそれより歩行にてふるにも照にもたゞ賀茂へまいるをもてつとめとしてけり其比よまれたりける歌に

世の中に數ならぬ身の友千鳥

なきこそわたれかもの河原に

と此歌心の中ばかりに思ひつらねて世にちらしたる事もなかりけるに社司其名を忘ると云が夢に大明神われはなきこそわたれ數ならぬ身とよみたるものゝいとほしき也尋よとしめし給ひけりそれよりあまねく尋ければ此雅經のよみたる成けり此示現きゝていかばかり彌信仰の心もふかゝりけん扱次第に成あがりて二位宰相迄のぼられ侍り是併大明神の利生也云々

土御門院元久元年十一月十三日辛未行幸御代始也同御宇元久二年三月十二日太上皇御幸同年六月五日河上行幸此時御馬十三疋社司に下さると云々又建久元

年三月十九日上皇御幸同年五月四日廿二社に奉幣使をたてらる但庖瘡の御祈によつて也同年六月廿二日軒廊の御卜ありて賀茂社奉幣使をたてらる齋院禮子の御不豫の事によりて也又承元元年三月七日上皇御幸橋殿をしつらひ御所として和歌の御會あり御題

海邊歸鴈 春雨 社頭 夜風也と云々

同年八月十三日又御幸同年九月七日幣使を立らるこれ又庖瘡の御祈とみえたり同年十二月十九日又御幸有て雜々の御遊覽有時に神主幸平上鞠に候す此時の管絃に上皇御琵琶を遊ばさるゝの由社記にみえたり同二年三月廿五日幣使を立らる三合の御愼によて也日月星の合天也同年十一月十五日御幸同三年六月十日又御幸ありて御神樂ありとみえたり或記云承元四年正月十六日大外記良業死たりけるに十六日の曉河内守繁雅が夢に賀茂の御前にて除目おこなはるゝけしきなりけるに小折紙に大外記中原師方とかきたりとみて夢さめにけりいそぎ此よしを師方に告たりければ多年つかうまつりたるしるしと覺えて忝も頼母敷もおぼへけるにやがてその夜大外記に成にけりさきに助教仲隆師高師季など競望しけるうへ師方は大監物にていまだ

上あり此間攝政職事をめして社司の賞の事を仰らる
次御筭を撤せられ又神寶を撤するのゝち攝政休幕に
まかで給ふ北の鳥居の外東のわき也此間御神樂韓神
など例のごとし次上卿社頭より歸參て暢の西を経て
南の暢門の方に出きて職事をして御願平安遂ましま

すよしを申す聞食のよし仰らるゝ事例也次御前の西
良坤の暢を撤して公卿の座をしき東西の西の頭中將を

わきなり

して公卿をめす上卿以下座に着次御馬を南より上て

北に馳ける社の方へ走する也次公卿座をたち給へば
座を撤す次上卿奉行をして見參を奏せしむ御所の西
の椽椽カをへて持まいりて奏す杖にさせり攝政北の第一
間の簾中にして覽し給ひて返し給はる奉行職事これ
を取てしぞき下れば公卿の祿をたまはりて事をはり
ぬとて還幸を催さる公卿御所の南の腋につらなり給
へば上卿は北に立給ふ例也云々次御輿を寄奉り攝政
簾中に候し給ふ二位中將御璽をとりて鳳輦の中に安
じ給へば主上乘御なりぬ攝政たすけ乗せまいらせら
れ西の暢門より出御ましゝて鳥居の外より攝政車
に乗せ給ひて御後陣よりまいらせ給ふ御輿深更に及
て還入せ給ふ御輿をよせ内侍參向ありて中將殿御璽

をとり渡し給ひ主上下御ましゝ御帳の前にたゝせ
給ふ時次將御輿を退れば鈴奏次名だいめんの事あり
て御本殿に入御まします也次奉行職事をして行幸の
行事の賞を仰らる

社司の賞 神主重保追可申請由也

自餘上下社司は社家の注進ある交名皆一階を給也
と云々

社記云建久九年二月廿六日賀茂行幸あり奉行兼權左
少辨長房朝臣也後白河院の例を以て諸事沙汰し調べ
きよし仰せらると云々先下社へ行幸なりて神前の儀
をはりて上社へ向はせ給ふ例の如く南の鳥居より下
御なりて細殿の御所に入せ給ひ舞殿に御拜の座をか
まへてこゝに移り着せ給て上卿幣を奉られ兩段再拜
おはしませば上卿たまはり傳へて社司に給はれば社
司神前にたてまつり返り祝詞申畢れば細殿に入御神
馬等を引めぐらす供御の御事は御破子云々御讀經所
の屏の内に進物所を儲たり兼又殿の御所の東頭に
かりやをかまへて上卿の座とせり此間に頭中將伊輔
朝臣賞の事を承り仰らる神主資保正四位下に叙せら
る又禰宜祝氏人等各一階を給へりと云々但去文治元

東西の幙門より入せられ下御なりて

○一本此間
有文敷行簾中平

敷のおましに着せましますこゝに腋御膳御くだ物な
どを供し奉り公卿饗の座に着給ふ此間御神寶御幣等
を御所の東庭の案上に置ければ○此間以下一本
之文大異而詳上卿頭
中將をして宣命の清書を奏せらるれば攝政殿中に入
御覽をはりて返し給ふ次御手水の事ありて御拜の座
にうつり着せましますば御贖物二膳を供に宮主御麻
もて参り頭中將とり供じ奉りて先御祓の事あり上卿
南の幙門より入前庭を経て着座し給へば御馬一正將
監これを引次走馬三疋舞人は是を引御祓をはりぬれば
上卿御幣二捧を取て長に向ひ御拜兩段再拜おはしま
せば上卿幣を置いて復座あり此間權中納言挿頭の花を
取り参り進みて御冠にさし奉らる次上卿社頭に参向
有てかへり参り御願平安遂まします由奏し給へば聞
食の由を仰せらる此後神寶等を撤し公卿馬場の座に
着舞人御馬を南より北に馳て事畢れば内侍かり幘の
左右に候じ主上其中央に立せまします御輿を寄奉り
て上御社に向はせ給ふ其儀攝政参上ありて御簾を卷
て其北の簀子に候じ給ふ近衛中將まいりて御壺を御
輿に入安せらるれば乗おはします攝政西鳥居の外に

して車に乗後陣に参り給ふ南鳥居の外にして各下馬
あり御輿御所の西の幙門より入おはしまして北第三
間の御こしよせに昇居時に攝政殿西の簀子の邊より
参上あり中將御輿寄の簾をかゝり御璽の宮を取て内
侍に授てしぞきて北方に候せらる次に主上下御あり
て假幄の前に立給ふ中將葦戸を閉てしぞき下らるれ
ば次將御輿を退さりぬ攝政御簾中に参候あり次公卿
西の幙外を経て公卿の座につく主上御平敷の座に着
せ給ふ件御座ばかり幄の前にあり此御所のかまへ北
面なり第三間にかり幄をかまへ第二間に平敷を敷て
御座とす第一間に御拜の座を五重に装なり次攝政殿
奉行の職事をめして神寶等を昇置さしめ給ふ東西行
にして南北あひならべり次に案を立て幣を倚たて神
寶を取置なり下社は河合社をくはへて二社に奉らる
當社は一社なり次主上御手水女房これを奉る事初
のごとし事畢て御拜の座に着おはしますば御笏を獻じ
御あが物を供す次に御麻を奉る次に宮主御麻を取て
着座す上卿西の庭を経て着座次に神馬一疋走馬三疋
引たつる次に上卿御幣を取て立次に兩段再拜下社の
事畢て上卿御幣を置いて本座にかへらず直に社頭に参

の身となし給へと無二の信心を發し度々籠り念せられけるに或夜の夢に賀茂の御神より給ふと覺えて檜榔毛の車の來りて胎内にやどるとみえしがやがて懷妊ありて生給ひける邦綱卿にておはしければ福報人に超て繁榮なりしと云々

又云叡嶽の學徒幼年より智慮かしこく心ざし勇猛にして止觀の窓の雪に眼をさらし三諦の床の月に心あきらかなりといへども富報すくなくて濟度の道乏しかりければいでや毘沙門天に祈むとて鞍馬寺に參籠し又清水の觀世音に通夜して普門融通の福力を與へ給へと祈念ありしに觀音も多門天も福報を授なんことは賀茂大明神の御はからひなれば我らがまゝならずたゝ賀茂へまいり申べしと兩寺の本尊の告させ給ふにまかせ賀茂御社に參り七夜通夜して祈歎きければ七日滿じける曉宿屋に下向し暫まどろみける夢の中に汝もとより福報なき身なれどもあまりに祈歎き申も不便なれば大明神より給はるなりとて裝束したる神人長櫃二合舁持きたりてあなかしこ此長櫃底まで取拂事なかれさもし侍らずば一期が内盡る事あらじと告げてさりぬ夢さめてみるに枕にありけり一櫃

にはしらげのよね入たり又一櫃には絹綿の類入みてたり難有拜しいたいきて是を自他の施用などに取つかふに盡ざりけりと云々

後鳥羽院文治二年十一月十四日賀茂行幸あり其儀あらゝ記之先上卿參内ありて奉行職事をして諸司以下催し仰せらる又舞人の行事をして舞人等を催さる主上御湯殿の事あり次上卿弓場殿にすゝみて宣命を奏せらる是よりさき宣命の草を攝政殿内覽の事例のごとし主上御總角御裝束などあそばし晝御座に着せ給ひ神寶を御覽せらる鏡筥金銀の御幣等なり次南殿に出御あり攝政御裾に候し給ひ内侍前後に候す頭中將右中將内侍に付て扶持せらる奉行的職事攝政の裾をとりて相從へり御帳の西の間にして御反問ありて御張の前に立せおはしませば次將わたり公卿つらなり立次に圍司の奏鈴の奏ありて御輿を寄奉る近衛中將御璽を取て御輿の中に納らるれば主上乘おはします路次の行列公卿殿上人舞人神寶神馬相つらなれる次第は略して記さずかくて西洞院より二條大宮土御門又西洞院一條出雲路河原を経て下の御社に着おはします堤の外にして上下各下馬あり御輿は御在所の

皇大神の靈驗あらなる事ども書たる記云皇太后宮大夫俊成卿若かりしより賀茂御神にふかく祈申されしは我和歌の道にかなひ子孫までに此道をつたへ世にほまれある助を垂加させ給へと祈り奉る志他事なしと年比參詣意なかりしが殊に千日のあゆみをはこびて念じ申されければ願のごとく其名雲井に高くして嫡男定家卿は父に超て中納言に昇り孫爲家卿は大納言まで昇進ありしは歌道名譽ゆゑにして偏に當御神の感應なりとぞ申傳へし

又伊勢大輔といへる官女は一生の内に秀歌よませてたべと賀茂へ祈をかけ橋本社のもとにながるゝ水を硯水にして千首をよみて奉りければ千首大輔と呼れ世の人の口にある秀歌よみけると也

又云平清盛公いまだ淺官なりし時夢の告に賀茂御神より寶の山を賜ふとて金の寶山門に入がたき大きなる其上に藤花さきかゝりたり装束したる神官二人出來りこれは賀茂大明神より下さるゝなりといへるに今一人の云是は春日大明神の使にてしばらく清盛にあづけらるるとありて夢はさめけり驚つゝしみていかなる冥助をかうつゝに得せしめ給ふべきとた

のもしく彌信仰あさからざりしに後に白河の准后と聞えしは清盛の妹女にて其比の殿下の北方に物せられしが其御領悉かの後室一期知行せらるべきよし仰られけるに過分の事なり辭退申べきにこそと思はれけれどもかの夢の御告に任て御請申され年久しく主のはからひなりしよりいつしか身の威勢龍に雲のしたがつごとく天の下のはからひをも心にまかされける事偏に神恩なりしと云々

又治承四年六月九日に京を攝津國福原へうつされて新都の事始ありしに卿相雲客衆議の上此所を定けるには一條より五條までありて五條以下は不足にて事行ざりければたゞもとの京へ移かへらるべしとて賀茂社へ其由の奉幣を立られ舊都にことごとくかへられけるに先里内裏を造進せらるべきよし衆議有て五條大納言邦綱卿に周防國を給はりて六月廿三日に事始して八月十日に上棟と定めらる彼大納言は大幅長者におはしければ造立する事左右に及ばずといひあへるにやがて其事遂なりぬとなり此邦綱卿の富榮果報ゆゝしかりし事はそのかみ此卿の母あまり家貧しきを歎て賀茂の御社へまいり詣であはれ願くは福力

保安年中に左衛門大夫源康季年來賀茂御神を信じ頼奉りけるに或夜御戸開にまいりつるかひなく賀茂川の水おびたしく出て渡がたければ岸上に思ひやり奉りて居たりしが社司ども例のごとく御戸ひらき奉らんとするにさらに開かれさせ給はざりければ祠官いかにもせんすべなくて時うつり觀念し心をしづめ居たりける程に眠頻に催されて或社司の夢に康季が參くるをまたせ給ひてひらかぬよしを告給ひける驚覺て氏人をさしつかはし迎にければ康季岸の上に居けるをいざとてゐてまいりけるに其まゝ御戸ひらかれ給ひにけり康季かく神慮に叶ひける故にやさしもありがたき大夫尉に近康康綱以下四代までうちつゝきてなりなき此外季範季頼季實季國等六代までも此康季が子孫にて皆此昇進を遂たりけるは他家にありがたき事也

崇徳院天治二年十月廿七日御代始行幸あり同院御宇天承の比太上皇賀茂社御幸なりて御鞠ありしに賀茂成平縣主うけたまはりあげ鞠つかうまつりし時かくよめる

しめのうちのみゆきに袖をかさしつゝ、

名をあげまりをけふしつるかな

保延五年五月一日祈雨の幣を貴布禰に奉らる其宣命は大内記儒門の博士など皆故障ありて作ることあたはざれば其時の上卿少内記相永永が作代にして事行ひけるが必神感あるべきよし自讀し給ひけるにはたして三日雨おびたしく降たりけるとなん宣命はこと長ければもらしつ同年十月二日己酉行幸あり此御代すべて五度の行幸也

近衛院久安元年十二月四日甲辰御代始の行幸也此御代三々度行幸なりける同御代に左少將藤原實重と云ける人年來賀茂社に詣てゝ藏人にならぬ事をなげき侍りけるを二千三百度にもあまりけるとき貴布禰にまうでゝはしらに書付ける

千載集
今までになとしつむらんきふね川

かはかりはやき神をたのむに

かくて後なんほどなく藏人になり侍りけると云々

後白河院保元々々年四月廿五日丙申賀茂社行幸あり二條院永暦元年正月廿七日壬申御代始賀茂行幸ありて此御代に五々度行幸有ける

高倉院嘉應元年八月廿九日行幸此御代五々度也賀茂

當神領寄進まし／＼ける比社家の申文を惟家辨に付て奏聞申事ありけるに詰り笑はれて他の辨につげられける間三ヶ月にあたりて惟家辨血を吐て卒去せり是は棚尾社の御前にけだかき人參らせ給ひて惟家辨勘當仕候はんと申御返事は何とも聞へす承り候番のものにまいれと召されければ褐衣冠にいちひたゝれたる人平胡籙負たりける參られたり惟家辨勘當仕れと仰あれば南に向て矢をはなたせ給ひけるが惟家辨の胸にあたり苦痛の聲聞ゆ勘當仕さぶらふと申て出させ給ひ誰の參らせ給ひたるぞと尋ければ日吉のまいらせ給ひたるとありて後に夢は覺にけり是ぞ惟家辨の姑なにかしの局通夜せられける曉の夢なりけりかの局驚給ひ彌おそれ祈りをかけて願など立れけれども其日卒去せられけるとぞ

嘉承二年五月一日根合の事兼て催されて今日左右殿上人河原に向ひ祓して七社に幣を奉るとて幣使を差遣す賀茂一社に於ては金銀の御幣競馬十番奉ると云云今日左方仰によりて北の中門を渡り上皇御覽ありしは方々の面目也同月五日新院女房の根合也未刻東泉殿に參集せり左右勝負をあらそひけるに左方の勝

侍る慶申立願果し奉るとて同月九日に競馬を相具して賀茂に參詣あり女房の駕車三輛乗尻等相つらなりける出立の儀上皇御覽あり其行列先金銀の御幣次乗尻十人舍人居飼等女房の車本院の侍等布衣を着し騎馬にて相具す二位宰相中將殿直衣をめさる殿上人兩貫首など皆束帶にてつらなれり所の衆瀧口等貫首の扈從として候せり其路洞院の大路より三條京極大炊御門朱雀を経て法成寺の東大路より先下の社に參る奉幣社司につれてまいらせ事畢て上御社に參詣ありて幣帛おなじく社司につけて奉り競馬などありて夜に入下向ありと云々其時女房のもとより殿上人の中に送る歌

たちならふ人やあらましちはやふる

我かたをかの神なかりせば

返し

みかりしていのりしことのかひあれば

我かた岡の神ぞうれしき

鳥羽院天仁二年八月十六日戊子賀茂行幸御代始也此御宇にすべて六々度行幸ありけり年月しるすに及ばずもらしつ

參詣し給ふ供奉四位四十人五位三十人六位三十人前をかと云々同年十月十一日に官幣を石清水賀茂へ奉らる同年十一月八日には石清水に行幸なりて同十二月十五日に賀茂行幸あり是より御代々の帝の恒例として御即位ありてはかならず兩社行幸とて石清水賀茂へまいらせ給ひ御幣寶物品々奉られ舞人走馬などの事ありける同二年四月廿二日戊申の日攝政の御參詣あり是則天下の庶務を攝給ふゆゑに御祈のため也云々永祿元年二月廿八日また攝政二條の第より當社に詣給ふ内大臣以下參向あり殿上人を舞人として舞樂を奏し給ひ神だからしくあぐるに及ばず四位二人五位八人供奉に具せられける正暦二年六月廿四日日をへて雨ふらざれば御祈の御てぐら奉らるゝ時黒雲山岳にくだりて雨ふりぬと云々同五年二月十七日祈年穀の幣使を奉らる又長保四年三月廿六日に當帝御祈願の事ありて行幸おはしましぬ

三條院長和二年兩社行幸あり

後一條院寛仁元年十一月廿五日御願によりて當社行幸あり同御代長元二年十二月三十日にも御願によりて當社行幸あり當帝の御母后は上東門院と申し奉る

此時御同車にて參らせ給ひ幣帛などを奉らせ給ふその時の齋院は選子内親王と申せしが齋の神館に立寄らせ給ふかと待せ給ひけるに紫野より還幸なりしあくるあしたに内親王よりよみてつかはされし御歌

みゆきせしかもの河波かへるさに

たちやよるとて待あかしつる

萬壽三年八月廿八日賀茂社より言上あり神殿の前大なる檜樹一時に枯て一葉の青事なしと云々これによりて御卜の事ありて御幣使など奉らると云々

後朱雀院長暦元年八月十一日御代始の行幸あり又同三年八月十八日二十二社に官幣をめてらるゝとて當社并貴布禰へ勅幣まいらせらる後冷泉院永承二年四月廿三日御代始の行幸也又同御宇天喜四年十二月九日行幸同康平五年七月十三日御祈之行幸也

後三條院延久元年八月九日御代始行幸也

白河院承保二年四月廿三日御代始行幸あり

御叡願によりて今年以後毎年行幸なるべきよし宣命に申奉り給ふ是によりて當御代之行幸九ヶ度なりし堀河院寛治二年四月廿八日御代始行幸也同嘉保二年四月十五日行幸又長治元年二月廿七日行幸同四年に

甘雨を祈りこひ走馬を奉らる朱雀院天慶五年四月廿九日に當社へ行幸あり是則神社行幸のはじめなり云云此帝は延喜帝の皇子にて承平の帝と申也然に此神前へ行幸なりける御願は平將門謀逆を企我身平親王と名乗親類眷屬を公卿殿上人となし下總國に都をかまへて官物を押領し西國には藤原純友朝敵となりて天下のさわぎなりし故に天皇御みづから叡慮の誠を盡し祈り給ひしに靈驗あらたに御夢の告ありしかば將門はたちまちに矢にあたりて誅伏せられ純友は生捕にせられ獄中に死して四海靜謐に萬民安堵のよろこびをなしければ此御祈願のいちじるき神恩を謝し給ふとて行幸なりさまざまの神寶みてぐら物など奉られて社の禰宜祝にも位階をなし給ひける

天德元年三月四日官幣を奉らる天變恠異によりての御祈り也同三年四月十七日には新錢を伊勢賀茂へ神祇官を使として奉らる兩社以下十一社に奉られけると云々村上天皇康保三年四月十三日賀茂社鳴動の事社家は奏す同時に内裏の宜陽殿鳴ければ公卿僉議ありて御慎重かるべしとて上七社に幣帛使を立らる當社の使は左大辨橘好古也神馬等を引立て神前にし

て宣命よみけるに老軀に託宣の事ありてますゝ使諸司恐れみ崇め奉りぬと云々同年八月廿一日九天雲おほひ霖雨月をわたりて晴る事なかりしかば諸社に使を立らるゝに賀茂貴布禰兩社に奉られける此時十六社の御祈といふ事始る貴布禰は當社の攝社たりといへども水徳の御神なれば雨の御祈は必ず官幣使を奉らる弘仁九年五日に貴布禰も大社の宣に預り給ふ圓融院天祿二年九月廿六日攝政右大臣賀茂御神に詣給ひて宿夜こもりましゝて御祈りあり天延三年四月十四日丙辰内裏微穢ありて七月二日大祓行はれて賀茂御社へ幣帛を奉らる貞元元年四月廿五日辛酉賀茂祭に齋院いまだ社頭の本院に入せ給はざれば御供奉の事なし仍今日太政大臣堀河の第より賀茂參詣あり辨少納言供奉の事ありと云々

天元三年十月十日天下のますゝ泰平にして五穀豐年に萬民安く平けく守給へと御代の御祈として行幸なりおはしまし御みづから御幣奉らせ給ひ神馬寶物等例のごとしと云々

一條院永延元年五月廿一日雨の御祈に勅幣を貴布禰丹生に立らる使藏人なり今日右大臣爲光公賀茂社に

姫宮齋院に立たせ給ひしを選子内親王と申ける齋王にはいづれ、いまだ嫁し給はぬをそなへ給ふ事なり又さはる御事あればまかでさせ給ふを此齋院は神慮に感應おはしけるにや五十四年までいつきにておはしけるが世中の常ならずはかなき事をおぼしめして菩提心を發し給へども佛を神事にはばかり給ふ心を

おもへともいむとていはぬことなれば

そなたにむきて音をのみそなく

とよませ給へりけるとなん

行幸官幣御幸付祈願靈驗等

聖武皇帝神龜三年七月乙未使を遣し幣を賀茂神に奉らしむ云々桓武天皇延暦三年六月壬子參議近衛中將正四位上紀朝臣船守を遣して賀茂大神に幣を奉り遷都の由を告らるかくて此京繁昌し廿餘年をへて後同天皇延暦二十五年三月辛巳に崩御なりて同乙未の日山城國葛城郡宇多野を爲山陵其地西北兩山有火おのづから焚て日の光なし大井比叡小栗栖野等の山共燒烟灰四方に滿て京中晝昏し今上おほすらく山陵に定る地賀茂御神に近し疑らくは是御神の災火を致し

給ふらんか即詔して卜筮に決せしむ果して有神祟云々帝曰初山陵の地をうらなはしめし時筮は從ふといへども龜卜は從はざる也仍今災異頻に來れり不慎はあるべからずとて即御みづから賀茂神に禱祈し給ふ事嚴重なりしかば災火忽に消滅しぬと云々平城天皇御宇大同二年五月三日庚寅賀茂御祖神別雷神并正一位を授奉らる嵯峨天皇弘仁六年八月三日伊勢賀茂兩御神へ霖雨晴ざる御祈として幣使を奉らる同九年十月己未山城國貴布禰神祈雨の靈驗あらたなるによりて賽の神寶御幣使を奉られる同十年五月甲午幣を奉られて貴布禰社へ雨を祈り給ふ同御宇承和十年十一月丙申日參議左大辨從四位上躬王を差遣し幣帛を賀茂神に奉られて國家の昌泰を祈り給ふ又御代々御即位あらんとては勅使を立られ官幣を奉られて此神國の天日嗣をうけつがせ給ふよしの宣命を告奉られける是を由の奉幣とぞ申める醍醐天皇延喜十六年六月十二日乙未石清水宮賀茂上下社に臨時の幣帛使を立られ左右馬寮十つらの御馬各五疋左右近衛各十人を奉られける延長二年五月七日乙卯丹生貴布禰幣使を定められ同八日に殿上人を丹生貴布禰に遣され

相つらなり次に膳部六人舍人二人荷領十人次に藏人所の陪從六人院女別當など御車のあとに並び従ふ次に公卿勅使一人齋院別當一人五位四人六位四人并御前をかる左右の近衛各二人左右の衛門各二人左右の火長各十人供奉し左右京の官人兵士を引率してむかへ奉る山城國司郡司どもを引て京極の大路に祇候しまいる辨一人太政官史生二人官掌一人供奉の諸司を引ゐて御祓の所に參り其事をおこのふ齋院御幕の内に入せ給ひ河水に臨てはらへし給ふ神祇官中臣御麻を奉り宮主祓祝詞をよむ事畢ぬれば勅使以下に饗膳

祿などたびさて御車をめぐらし初齋院に歸り入せ給ひければ御膳を供し御櫛をたつ此初齋院にして三年の御禊齋ましゝて其年の四月に始て賀茂紫野の野宮にうつり入せ給ふ也其儀先吉日をえらび又河原の御禊あり初齋の御禊の時のごとし但此度は御輿にめさる御輿のをさ十人輿丁四十人駕女十六人は是は御めのと二人女藏人六人女孺四人小女四人のる也女別當以下車にのる勅使大納言一人中納言一人參議二人四位五位四人内侍一人并外記史太政官の史生辨官の史生官掌其外神祇内藏縫殿陰陽大藏宮内大膳木工大炊

主殿掃部造酒主水左右の馬寮等の官省寮のつかさ共供奉しつらなり御祓ありて後饗膳などたび事畢ぬれば御輿をめぐらして紫野に入らせ給ふ宮にとまりて更に祿をたびけるさて毎年四月中酉日に賀茂兩社の祭に參らせ給ふと云々齋院につきたる官を長官次官判官とて此院に事をうけ給りつかふるにさし定置る、也齋院の御代々歌よみ給はぬはなしとぞ但有智子内親王は御ざえすぐれ給ひて大和もろこしの文の道にも通じ給へりしかば嵯峨天皇賀茂齋院に行幸なりし時齋院のつくり給ふ其詩云

寂々幽莊迷水樹、仙輿一降一池塘、棲林孤鳥識

春澤、隱澗寒花見日光、泉聲近報初雷響、山色高

晴暮雨行、從此更知恩顧渥、生涯何以答穹蒼、

この詩天皇歎美おはしまし世をへて人は是を吟賞し奉れり神齋を重じ給ふゆえに定例として御禁忌の事ども或文にも出せりもとより此國は神國なれば佛法僧の名をだに忌給ふことにして佛をばながごといひ經を染紙塔をあらゝぎ僧を髪長尼をば女かみながといひ佛法には日に一度食するをときといひふれたるをかたそなへといひかへて詞をさへ憚給ふ村上天皇の

佳子内親王三品 後三條院第六皇女延久元年卜定母
贈皇太后茂子能信卿女實公成卿女

篤子内親王准三宮 同第七皇女同五年
卜定母同上

齊子内親王 三條院御孫承保元年卜定母
下野守政隆女春日齋院卜申

令子内親王 准三宮 白河院第八皇女寬治三年卜定母中
皇后 宮賢子後鳥羽院母代號三條大宮

禎子内親王 准三宮號三子 同第九皇女康和
御門齋院 元年卜定母同上

宮子内親王 鳥羽院(榮花系圖六白河院
トアリ)皇女天仁元年卜定

惇子内親王 號大宮 堀河院第三皇女保安
齋院 四年卜定母康實王女

恂子内親王 鳥羽院皇女大治三(二一)
年卜定上西門院卜申

禕子内親王 堀河院第四皇女長承
元年卜定一品宮卜申

怡子内親王 號北 輔仁親王第三女長承二年卜定母大藏卿行
小路 宗女後三條院孫四代ノ帝ニアヒテ廿七年

式子内親王 准三宮 後白河院第十一皇女平治元年
高倉宮 卜定母從三位成子季成卿女

僖子内親王 二條院第二皇女嘉應元
年卜定母師元朝臣女

頌子内親王 鳥羽院皇女承安元
年六月廿八日卜定

範子内親王 號三六 高倉院第五皇女治承二年
角宮 卜定坊門院母成範卿女

禮子内親王 後鳥羽院第十一皇女元久
元年卜定母内大臣信清女

齋王卜定事

或記云延長九年十二月廿五日九殿下着陣諸卿同着召
神祇官令卜定齋宮齋院先召外記一召紙視書

内親王名令外記密封一召神祇大副奥生朝臣賜之
令卜先令卜伊勢齋王二度合也殿下令持外記 參上令
令卜賀茂齋王一度合也殿下令持外記 參上令
奏了召奥生朝臣被仰以惟子内親王定伊勢齋
王以婉子内親王定賀茂齋王之由卜定作法詳見
于家諸記仍略之又社家之假字記に云賀茂の齋院は
天子御位につき給ふ後必先女親王をうらなひ定て勅
使をして女親王の御方へ告らるさて勅使卜部を具し
て御祓の具櫛に木綿付たるを彼女親王家の四面と御
門などに立させらる其祓の事に相從中臣忌部等に祿
物など下さる扱賀茂御神へ公卿勅使を立られ齋院定
り給ひて當大神宮にいつきつかへ奉らしめらるゝ由
を告給ふ齋院の御禊といへるは賀茂川に行啓なりて
御祓ある事也其儀式は先二日以前に齋院別當陰陽寮
其外供奉の諸司を相具して河原にいたり其所を點し
定て奏聞す齋院御神事の御所を宮城の中便所に定め
られて是を初齋院といふ此院にいらせ給ふとて賀茂
河原へ御車にめしておもむかせ給ふ其行列走女十人
御車ぞひ十四人手振十人御よそほひ物の唐櫃御手水
の具入たる唐櫃各一合供膳雜器衣服祿物などの唐櫃

乎止賣內親王齡母老身乃安美毛有爾依豆令退出留代爾已上廿字補時子女王平卜食定豆進狀平參議左大辨正四位下藤原朝臣愛發乎差使豆申給止申并奉幣云々

文德天皇嘉祥四年四月辛酉遣止使者向賀茂神社奉

祭但齋內親王未盈齋限故不得行祭云々

文德天皇仁壽二年四月乙卯賀茂齋惠子內親王禊於河濱是日始入紫野齋院云々

光孝天皇元慶八年四月九日己亥以皇女伊勢齋繁子

賀茂齋穆子并爲內親王同十一日辛丑遣參議刑部

卿正四位下兼行近江守忠貞王向賀茂神社告以下

改齋王并爲內親王之狀上廿一日辛亥繁子穆子兩

內親王各賜絹五十疋木綿五十疋綿二百屯細布二十

端商布三百段貞觀錢二十貫韓櫃二十合云々此後御

代々齋王省畧之土御門帝御宇禮子內親王後鳥羽元

久元年爲齋院一至於此禮子內親王以上三十五代自

是以後斷絕畢御敬神之道衰故也可歎々々

齋院次第

有智子內親王嵯峨天皇第八皇女弘仁元年卜定母后交野女王

時子內親王仁明天皇第九皇女天長八年卜定母貞主女

亮子內親王仁明天皇第十二皇女天長十年卜定母百濟氏

惠子內親王文德天皇第八皇女嘉祥三年卜定母藤原列子但被廢也其事說世莫知之

述子內親王文德天皇第五皇女天安元年卜定母同惟喬親王

儀子內親王文德天皇第三皇女貞觀元年卜定母同清和天皇

敦子內親王清和天皇第十皇女元慶元年二月十七日卜定

穆子內親王光孝天皇第七皇女同六年卜定母參議正如王女醍醐妃有明母

直子內親王惟彥親王女文德孫仁和五年卜定

君子內親王宇多天皇第十皇女寬平五年卜定母女御橘義子

恭子內親王醍醐天皇第十九皇女延喜三年卜定母更衣鮮子

宣子內親王同第十八皇女延喜十五年卜定母藤原女

韶子內親王同第十九皇女同廿一年二月十五日卜定母女御利子

婉子內親王三品朱雀院第二十三皇女承平二年卜定母同恭子內親王

尊子內親王二品冷泉院第六皇女康保五年卜定母贈皇太后懷子伊尹公女冷泉院女御

選子內親王號大齋院村上天皇第五皇女天延三二

擊子內親王皇后後一條院第二皇女長元四年卜定母中宮威子道長公女後三條院后

娟子內親王號佳任齋院後朱雀院第三皇女長元九年卜定母陽明門院三條院皇女後堀河左大臣俊房公北方

模子內親王號三六條齋院同院第五皇女寬德三

正子內親王同第六皇女天喜六年卜定母女御進子賴宗公女

外陣具等

一 狛犬左右金銀

一 影狛 左右代々名譽之畫工被_レ令_レ書之例也

一 御臺盤左右數絹

一 御八足左右

一 御高杯左右

一 高燈臺左右

一 銚子提福宜方祝方

一 九盤同

已上權殿分同前

高倉等之祭具以下

一 大瓶十二口

一 御鉾八基

一 樂器 但裝束舞面等近代斷絶

一 唐櫃 二合赤漆白綾覆二ヶ神供昇料也

一 貴布禰祭供料辛櫃

赤塗八合末社神祭供同用之金物覆白綾

一 同社日供運櫃二合

赤塗覆白綾紋紫

一 大幡 五色平絹 十張

一 斑幡 五色絹或布 十張

一 白幕布三十張

一 筋幕布十張

一 御簾小二百五十三間

一 疊 寬永五年に 五百九十一帖半

一 長床四十八枚

一 傾宮料御簾錦緣

一 競馬裝束 冠太刀兩袖兩襦(唐織)褲尾(錦袴(唐織))下帷子指貫以上二十人前外裝束三人前

神道行事諸具

一 大壇赤塗 四面

一 高軾座 四座

一 脇机 八脚

一 高机 二脚

一 高燈臺 八本

一 太麻臺 二基

一 金高杯三十六

一 雲盤玉盤

一 打鳴

二口

一 太元八宮岐神

一 御鈴

四振

一 水器

二口

一 洗米器 二口

一 瓶子

二口

一 御田樂々器

木綿襷九人前笛手拍子鬚編木二ヶ鞆大鞆二ヶ

一 貴布禰芝田樂々器

班笠 御鈴 明衣 チハヤ 已上十人前

一 太田社每月神樂々器

大鞆 手拍子 鞆 御鈴 明衣

右所_二注記_一之外片岡貴布禰_二端_一兩社新宮太田若宮奈良

澤田氏神八社之内陣神寶神服外陣神器以下悉不_レ能

レ記_レ之但神宮寺經所等之佛壇行法之佛具迄寬永之御

造營時悉新調被_レ爲_二仰付_一子_レ今無_二朽損_一辱用_二來之_一

候仍今度朽損或紛失之分新造修補等被_二仰付_一難_レ有

奉_レ存御事御座候

齋院

嵯峨天皇御代天皇皇女有智子內親王弘仁元年卜定

淳和天皇天長八年十二月壬申替_二賀茂齋內親王_一其辭

曰天皇我御命爾坐掛畏皇大神爾申給波久皇大神乃阿禮

米納法也
社司衣冠

御燈

晦日本社權祝末社各祝淨衣參勤但丹波
國由其庄爲沙汰勤之云々近代斷絶

太田社御神樂

每月十日夜陰太田社
之神子參向執行之

節分追儺祭

每年於御影像谷有二
其儀近代斷絶了

右每御神事社司廿一人諸役氏人忌子參向并陰陽

祓奏樂等之儀有之又刀禰神人下人役同參勤了但此

年中神事之内宴儀等少々斷絶其外二季御神樂并勅

使參向之奉幣等百七十年餘斷絶了雖然爲社家一

同之沙汰祭禮神供甚簡略而勤行之次第粗注進之

神寶神服祭器等

一內陣之御靈寶

上古傳來不易之靈寶深祕之分等者不記之此外御

造營之度々被新調奉納之分如左

一御傍劔唐組平緒

一御平劔錦袋

一御弓錦袋

一御矢鎗矢一雙錦袋
雁俣

一御鉾二本

神服等辛櫃二合左右各蓋錦

一御冠纓

一御帶琢玉也(イ馬腦)
紋

一御笏

一御扇檜扇

一御袍夏冬

一御直衣夏冬

一御表袴

一御下襲夏冬

一御指貫

一御大口

一御大袖夏冬

一御單衣

一御小袖夏冬

一御轆子

一御沓御草鞋

一御打羽

神器等辛櫃二合左右各蓋錦

一御飯窪器

一金銀御箸同臺

一御銚子金銀二枚

一提子金銀二口

一御盃金銀同臺

一御椀金輪角盥

一御泔器金銀臺

一御櫛笥蒔繪

一內陣飭具等

一御立障子四季繪

一四季御屏風代々名譽之
書之

一小八足螺鈿

一御机二脚

一大八脚御臺盤一脚

一大瓶二口

一大幣二捧

一小麻

一御茵白錦中紋三巴

一龍鬚御平敷龍之繡綿
緣裏緋

一八重疊錦緣

一御厚疊經綢緣

一御几帳赤浮線綾(三分一
白色)紋桐篠蝶鳥

一御壁代白綾紋葵

一御幌綾緣紋
帽額

一御簾錦緣金龜甲

一御帽額

四日 御菖蒲並御物事社司布衣但神主可有出仕

五日 已刻御戸開神供自左右調進之社司束帶其後於貴布福兩官館饗膳以下經營之又十番之競馬勝負舞等有之但於馬場邊構領宮屋奉勸請神主著座束帶奏樂

六日 昨日競馬之乘尻廿人參詣于貴布福御物事有之

六月御戸代會 日不定但中古以來六月晦日福宜方御戸代會勤之

同月廿九日 小月者廿八日於二鳥居前夜陰有猿樂晦朔兩日於社家亭有饗膳歌舞之祝儀

晦日 入夜御戸代會神事御戸開神供自祝方獻魚鳥其外境內之河魚等社司衣冠有越祓之事

祝方御戸代會 七月朔日正祝沙汰也

翌日 晝遊勸盃等如之福宜方之儀

七月七日 五節供已刻御戸開內陣外陣御神供并河魚樂懸等自左右獻進之樂人奏樂

八朔 獻八朔之御神供

二日 後宴御納禮社司布衣

同日 鞍馬僧侶於貴布福社前有施主經之事

九月八日 夜陰社司布衣著土屋於橋殿南庭有十番相撲內取但貴布福兩官沙汰之儀大宮小山兩鄉者右方小野岡本兩鄉者左方各饗膳

九日 五節供已刻御戸開內陣外陣御神供自左右獻進之神前之儀事於細殿南庭十番之相撲并勝負之舞等有之舞近代斷絕了奏樂如三日

十日 饗膳之儀有之但左方者中村鄉右方者河上鄉沙汰之

亥猪 十月亥日御神供獻進當番社司衣冠參勤之

十月晦日 於貴布福兩官亭神供經營之儀露掃并預事等如四月之儀

同日 御田刈之神事權祝忌子社務代參向于御封田令神夫刈之

同日 十一月爲臨時祭神齋令陰陽大夫以忌竹立於社司之家々々如三月晦日之儀

十一月朔日 貴布福臨時御神祭也神供以下如二月朔日之儀

二日 於貴布福兩官館內昨食如四月

氏神祭 初申日儀式如四月之儀

御禊 初寅日戌刻御戸開奉祓清於內陣外陣但十一月朔日相當於卯日時者十月晦日有此儀

同日 於饗屋社司氏人饗膳有之

相嘗會 初卯日也已刻御戸開內陣外陣御神供自左右獻進但今日始當年新穀生茄子等供之自是神主忌子食新穀例也又祠官束帶自今日着冬裝束

翌日 後宴御納禮食薦座有之

御神樂 日不定如四月之儀近年斷絕了

臨時芝田樂 如卯月之儀

臨時祭 中西日已刻御戸開內陣外陣御神供自左右調進之四月祭禮并臨時祭祝前記之了奏樂如例

倚羅滅鬼 十二月日不定饗膳御服所之沙汰也

小祭 十二月廿八日大月者廿九日夜陰御戸開御神服并御神供御封米調進之御小庭與中門前於兩所令神人算計御封

十五日 雞鳴刻御戸開神供自一方調進之
社司衣冠樂人奏物音如三元日

同日 夜陰於印鑑前
爆竹之儀有之

十六日 步射神事社司束帶廿一宮之禰宜祝前後立分
四十二射立儀式有之勤孟祿物沙汰之

十七日 神主參詣于貴布禰
社有步射之儀

燃燈祭 正月下子日本社權祝井各祝方
布衣參向獻小松燃燈草等

節祭 二月日不定神戶
之一老沙汰之

土解祭 二月日不定御戸開神供自一方調進之社司衣冠今日
社務代權忌子參向于御戸代田而下定苗代令時種
子(朱書近
代晦日也)

九日 貴布禰祝詞師精進頭等
參向于彼社獻神供

三月二日 御物(御膳也)
事社司布衣

三日 五節供已刻御戸開神供桃花辛夷等自
左右調進之社司束帶樂人奏樂

四日 後宴直會食薦
座社司布衣

十日 徘徊花祭也但河上鄉岡本
郷中村郷之土民每年勤之

晦日 貴布禰社神供經營
於兩官亭勤之

同日 露掃並預事二少
度饗膳行之

同日 來月爲御祭神齋今日令陰陽大夫於禰
官家々門々立忌竹禁僧尼重輕服穢人

四月朔日 貴布禰御神祭御戸開爲兩官御沙汰御辛櫃海藻魚鳥
種菓種菜四十合調進之當時七合也簡略也神主奉幣

衣冠兩官白
今日夏束帶

二日 號膳食貴布禰一方直會井
饗膳獻酒於廳屋行之
於貴布禰兩官亭號
內昨食勤益有之

同日 氏神社御祭 初申日也社司出仕五官衣冠以下之社司淨衣也舞人
十人騎馬參向于氏神社奉幣下向于小森社有
之儀

中巳日 定齋院恒下事井奉園
御生所之儀有之

御禊 中平日戌刻御戸開內陣外陣御掃除御臺盤御八足等令
被清之今日獻夏神服奉替冬神服社司衣冠
御戸開獻葵柱並神
幸有御生所之儀

同日 國祭也又執柄殿下賀茂詣其次
第見于格式(自古斷絕)

中申日 御祭也已刻御戸開神供自左右獻之詞官束帶但自今
日著夏服或御禱以後更衣云々奏樂如例乘馬五疋

中西日 後宴御納禮食
薦座有之

次日 日不定御戸開神供以下一向祝沙汰之社司衣冠五官各
於澤田社前奉幣權祝社務代忌子等參御封田而令爲
植

植御祭 苗植早
日不定社司布衣但仁堀庄
領主必有出仕近年斷絕

御神樂 日不定貴布禰兩官代官井八乙女
等參勤于貴布禰社執行之

芝田樂 御馬番立廿疋足
汰馬速速內覽

五月朔日 競馬乘尻散供祓有之令陰陽
大夫立忌竹禁僧尼穢人

三日 競馬乘尻散供祓有之令陰陽
大夫立忌竹禁僧尼穢人

えて候自餘の神事は貴布禰の兩度の祭に四月朔日神
 供の御から櫃七合に魚鳥神膳の御そなへ窪手一本葉。
 梶作るひら手に賀茂の供御所にて盛とゝのへ賀茂より
 昇運び毎年の祭今に絶る事なし此神事には賀茂より
 社司氏人ことくまいりかつらかけ渡し歸路に市
 原野にて駒乗かへし祕歌を唱ふる社例あればかの所
 をかれの馬場と唱ふ歌連と書り此翌日には還立とて
 賀茂廳屋にてひもろぎとて社司氏人直會の事あり其
 外貴布禰の芝田樂と申事今に勤來りて候もことふり
 て八處女八人まいりまだら蓋を着しちはやの袖を翻
 し神歌を唱へてめでたき作法に勤來れり又止雨祈雨
 の事は昔より勅使を立られて祈雨には黒毛の神馬止
 雨の御祈には赤毛の駒を引立られて宣命を讀みてぐ
 らをさへ給ふ賀茂氏の貴布禰の社職かけたる祠官
 其外神主以下彼社に參りむかひて祈り奉る事なりか
 の雨乞によみける賀茂幸平が歌新古今集に入たり其
 詞書に社司ども貴布禰に參りて雨乞しけるついでに
 よめる

大御田のうるほふはかりせきかけて

井せきにおとせ川上の神

かやうの神事ども年中七十餘度今にその神前の式法
 絶事なしといへども神供など甚簡略ながら少分の社
 領ゆへとゝのへわづらふ御事はかりに候然ども當皇
 太神宮第一の葵祭に勅使官幣の立申さゝる事のみ社
 家中年比の歎にて候へば天下の五穀成就の御祈は國
 家泰平の根本たる御祭の御再興に過べからず候と葵
 草の二葉にかけて年ごとに神にいのり君に願ひ奉る
 ばかりに候いづれの御方ざまにも此神國の古風をあ
 ふぎ興させ給はゝなどか御武運長久御子孫繁榮國家
 太平の神鑑を照し給はざらむや

年中御神事次第

正月朔日

五箇供始已刻御戸開神供自左右調進社司束帶
 獻御齒固井壽香酒等樂人奏樂也四方拜有之

二日

禰宜方節養饗膳酒肴引物神主沙
 汰於三社一行之朱書今絶

三日

祝方節養正祝沙汰饗膳
 以下同前朱書絶

四日

鉦始之儀有之朝御料與夕御料之間也井神主參詣
 于御祖社之事又於三社務館有吉書初詣初等之儀

卯杖

初卯日卯杖御戸開
 獻卯杖社司衣冠

七日

雞鳴刻御戸開若菜獻供自一方調進之井白
 馬奏覽之儀有之社司衣冠樂人奏樂如元日

八日

田所始之儀有之五郷之田所各淨衣於三社家御物事有之
 但十一日正大工機持來申云千町萬町の機來渡云々

十四日

御棚會戌刻也兼日以三郷御鏡鎮錢沙汰之至今日同
 御棚六脚魚鳥種菓種菜等調進之社司布衣於神庭奉幣

ても足そろへに出足遅ければ社法にまかせて如_レ此なり御馬奉行立腹無_ニ是非_ニ云々又天正二年競馬には信長公御祈願として廿疋の御馬を出し立らる此時御召用の鞍皆具の飭あたらしく仰付られたるを賀茂社人に乗初させよと太田又助と申せしを御奉行にて仰くだされしを其御奉行社家にて語り給ひしは此御鑑は攝州一谷を義經の落し給ける時の鑑なり又御鞍は頼朝の御鞍なりしを相傳て越前の畠田_{○田一本山に作る殿より}取置しを修飾など仰付られしを今日乗初に且は御祈念と思召していまだ出来せしより召事なくて御馬に具して引立らるゝと云々希代の名物とて社家中拜見したる由社記にみえたり此等の例によりて秀吉太閤の御時にも御馬出し立らる其外武家の御衆へ仰せられて廿疋ながら各おとらぬ逸物のはや馬ども出し立らるされど馬の番立をば古をあらためずかの昔の庄々の名どもを乗尻の廻文にも書きたりて今に此神事のみ武家の御とりもちゆゑに御馬出候へば外の入用は少分の社家僅づゝ分納る給田役田の領米に石打米かけて都合二百三十石計競馬足汰兩口の雜用を例年怠事なく勤來候葵祭臨時祭も神前の作法どもは神

供以下甚簡略ながら勤來申候又正月十四日御棚會と申御神事は右に申如く後一條院の御代愛宕郡を賀茂御神事領に御寄附せられしより今に河上郷_{賀茂郷}大宮郷小山郷岡本郷_{錦部郷}中村郷小野郷等の御棚を白木を以て新造いたし安曇河の大鯉大鰯と號して小鯉小鰯をそなへ海魚も小魚干魚等を代とし雉の付鳥などかの棚六脚に盛かざり毎年そなへ六捧の幣を奉り候此曉の御戸開古より今に刻限を不_レ違つとめ來候此御戸開の事を五條三位俊成卿の歌に

十日あまり四つといふ夜の御戸ひらき

ひらくる御代はかくそたのしき

此歌はかの卿通夜し給ひしに告給ふともいへり又家隆卿も

神山の正月のなかは月さえて

鳥の初音に御戸ひらく也

此御神事の儀式のみ大を小にもちゐかへ候ても神供以下かはる事なく勤來候はかの六郷の領知とも御檢地より零落にて大野郷などは大かた大徳寺領になり小山小野郷も他領になり行候へどもかつゝ今に社納あるゆゑに其領に石打米をうちかけて絶ざるとみ

尉能行定平基政光頼頼業等大路を渡る御棧敷の前にしてはことに心づかひし侍ると云々

五月五日競馬は堀河院の御叡願にて五穀成就天下安全の御祝禱として寛治七年より始らる十番廿疋の馬料を寄られ例年に執行せしめらるかの武徳殿にてありし面影をうつされ勝負の樂を奏し神寶なども以前に渡る也乗尻は近衛司の左右にあらずふ事身をすてて勝負をきそひいどみしとぞみえしくらべ馬の歌にとねり子かちかふる馬のあしうらに

心くらへのみえもする哉

又競馬右方のかちたるには狛の亂聲を奏するといへりかやうの式は競馬記にくはしければしるすにあたはざる儀也定家卿近衛の將たりし時乗給ふとて社に定家鞭とて今に傳へたり彼卿の歌に

埒のうちにくらぶる駒のかちまけは

のれるをのこの鞭のうらから

と讀給へるはしらすこと時にてや侍る此競馬料も壽永元暦の比社納なくなりて候つるを鎌倉右幕下の御くだし文東鑑に記されたるごとく神領五十餘ヶ所よせられし内に十番の馬所載て候一番は美作國倭文庄

の御馬二番は加賀國金津庄の御馬三番は播磨國安志庄四番は能登國土田庄の御馬五番は美濃國脛長庄是等の庄々此外何も廿疋の馬を其庄々よりぞ出したてける元亨の比競馬料運送なかりしを尊氏將軍の御時の下文にて他國の神領少々かへしよせられて諸神事簡略ながら社家の沙汰として無_二退轉_一勤來候武家の御所より御祈のため名馬など引たてられて度々御覽じありける事あり近代には天文廿一年五月五日義輝公渡御なされて御見物ありける其時さらに三番臨時の競馬あり乗尻も御馬も相應してすぐれたるを神事はてゝ走乗るよしみえたり其後信長公も御見物あり又後陽成院御即位あるべきみぎりいまだ親王御所と申奉りし御時御敬神のため競馬の日行啓ありて御覽の事あり永祿七年には公方の御願として廿疋の御馬引たて奉らる鞍皆具までいときら／＼しく目出たかりし見物也とぞ社記に見え候永祿十二年公方義昭公渡御御馬廿疋引立らる元龜元年の記云武家御所の御馬二十疋の内に荒馬三疋あり一番の左は倭文料馬社例の如く二番金津庄の料馬は八番へさがり一疋は九番へさがり一疋は十番に下る公方御寮の御馬と

位をすべらしめ給ひて次の帝にいづれかと議問給ひて帝徳にもかなひ給ふ聞えあればとて小松の帝いまだ式部卿親王と申てかすかなる體にておはせしを御位に迎つけ給へりしが三年ばかり御位にて其御子の末に王侍従と申に御讓位ありて宇多天皇と申是也神約のいちじるきを覺し出て臨時祭を奉られ御敬神の官幣年ごとに奉り給ふ事嚴重に詔を下し仰せられけるとぞかの霧立しことを

さりこめてかもの河原にまよひしや

けふの祭のはしめなるらん

と續古今集に關白左大臣良實公の詠にて侍りし此祭の發遣の高莊なる事葵祭に大概おなじ挿頭の花などぞ異なる兼日に試樂とて舞御覽などあり還立の禁中の式しるすもさらなり此祭の使にたちてのあしたにかざしの花にさして左大臣の北の方のもとにいひつかはしけるとて參議兼茂のむすめ兵衛といへる女官の歌に

ちはやふるかもの河邊の藤浪は

かけて忘るゝ時のなきかな

承久三年十一月廿四日臨時祭つかひに二度立て侍従

の宰相定家卿神主重保がもとへ送られし立かへり二たひかさす藤浪を

みたらし川に神やうけゝん

返し

神かきにふたゝひかさすふちのはな

雲のうへにそかけなひくらん

此祭に琴など數つらなりしをそのことなくなりぬとなげきて三位氏久の神主のよめる歌則新千載集に入られける其詞書に

當社の臨時祭に山城國のみこともちなどもなくて社の和琴をかり渡され侍ければみし世にもあらずたれ行さまを思ひつけてよみ侍ける引かへてなり行世こそ悲しけれ

昔のことのしらへならねは

卯月の葵祭も壽永のさはぎより此比はひ世の亂にて神事料も落行つれば祭も絶々なりしを鎌倉の大樹の御時公家に仰合せられて神領などもかへし寄られ神事も再興ありしとなん或記に云嘉禎四年四月十六日辛酉賀茂祭を將軍家御見物有けり勅使の出立出車騎馬のかざりまで例年に越て花美なり大樹の御家人延

の御神にまいらせ給ふ先幄の内に入せ給ひ暫ありて社前の右なる殿に入おはしまし座し給ひて御拜祭儀祝詞の事をはればまかでさせ給ふ山城介東宮の御使中宮使馬寮の吏近衛使内藏吏各例のまゝに御幣物など捧たてまつらしめ毎度大かたは及夜のよし社記分明也御車にも葵をかけつらね使の雲客社司までも然也云々凡此葵の内侍を出し立給ふは中納言の息女を立しめらるゝ例にて此賞に依て除目などにも年給を恒例にまし給ふ事也云云此葵の出立前日朝廷にして天子出御なりて使などめして饗膳献酒の儀式ありて舞人舞樂を奏し奉る御試の舞樂なりとぞ申侍る還立とて祭使御所にかへり参りても音楽など儀式見物なりければ永久四年四月廿三日の還立の儀式御見物とて太上皇右大臣以下めしぐせられて内へ御幸なりけり連年の事也云々抑又當社臨時祭と申は人皇五十代宇多天皇寛平元年十一月下酉日始めてまつり奉らる關白昭宣公の嫡男本院のおとゝ時平其時は近衛中將なりしを勅使に差參せられ此時藤原敏行朝臣に仰られて和歌を奉らしめらる

古今集卷軸

ちはやふるかもの社の姫小松

よろつよふとも宮はかわらし

と詠じて奉れり此祭の儀式官幣神寶神馬舞人以下四月の祭のごとくにて御代々恒ねとして奉らせ給ひける其次第等諸家の舊記歴然なればくはしく注進にあたはず但寛平の帝の始奉られし御事は此天皇いまだたゞ人にて王侍従と申せし冬の比賀茂河原に狩し行ひける時俄に天霧立滿て四方暗くなりて御神現形ましゝ告宣て我は是賀茂の神也當社に冬の祭なくて物うく覺るに臨時の祭を給はるべし此契約を申さんために現形し侍りぬと仰られければ答てのたまはく我に宣告給ひてもすべなき身に候へば帝へ申させ給へとありしかば思ふやうありて申也たがへ給ふましとて御形見へすあがらせ給ひしかば忽霧晴れわたれりけるに侍従の大君かたじけなく恐み給ひ奇靈の思ひをなしおはせしに其時の帝は清和第一の親王にて陽成院と申せし御代也九歳にして御即位なり御母後の御はらからにて昭宣公攝政し行ふ然に此帝此帝歡心御物くるほしくて帝道にかなはせ給はぬ御事をのみ好せ給ひければ攝政誠を盡し諫させ給へども改隨給はざればたすけ侘せたまひて公卿衆議に及ぼし既に御

云也未の日或は申日諸衛府に警固の儀を仰られて陣を固て必ず警固の事ありたとひ依^レ有^ニ觸穢^一祭は停止ありとても猶警固有これは國祭あるの故也云々國祭は申申日也此日關白賀茂詣事あり幣帛神寶のからびつ雲客前驅につらなり卿相扈從あり其外舞人陪從官人おほく供奉しつらなりて參らせ給ふもとより當祭には葵桂を冠にかけ給ふ往昔神託の靈現なる御告ありしゆえ也云云殿下もこれをかざし給ひて乗車にて御參詣なり御琴持菅笠深沓をめしぐせらるゝ例なり社頭にて御奉幣あり葵桂を禰宜持參りて捧れば拜しかざし給ふ東遊求子するが舞など舞人奏して社づかさ神酒をまいらす三獻の御かはらけめぐる天祿年中謙徳公參らせ給ふこれや始なるかく執柄の詣給ふは國の萬機を執つかさどらせ給ふ故に殊に當御神をあがめ奉り毎年詣給ふとぞこれ等のこと他社にことなる社例天下の御崇敬年中行事にも分明に候へば不^レ及^ニ筆候中西日は祭の當日とて齋院まいらせ給ふ勅使院宮のみてぐら個參り給ふ其路の程の行列れるあらましの次第は先歩兵左右に各四十人騎兵左右に各六十人郡の司八人健兒各十人檢非違使十人史生さく

はん掾各一人山城守一人或介次内藏寮の官幣次に中宮の御幣東宮の御幣次に宮主東宮の走馬中宮のはしり馬各二疋馬寮の走馬左右各六疋引つたる次に東宮の御使中宮の使馬寮の吏近衛使内藏寮吏次に圍司中宮の女藏人内藏人中宮の命婦あひつらなる次に左右の衛門兵衛近衛各二人次に齋長官御輿駕輿丁前後二十人御輿のをさ左右各五人女孺各十人^{はしりわら}執物十人次に腰輿供膳のからひつ三荷雜器の物二荷膳部六人次に陰陽寮漏刻次に騎女十二人童女四人院司二人唐櫃十荷^{神寶}藏人所の陪從六人次御車内侍車相つゝ^{近代後にあ}女別當車宣旨車女房の車^{童女是}にあり馬寮の車に留りましゝて御衣裳を清き服に差しあらためられて後腰輿にめして御社に入おはしますこれより與長御こしを昇奉る凡賀茂兩社の式に神の御告ありしより社に詣る事も奉る幣物なども下社を先にせらるる例也伊勢の外宮より先にせらるゝがごとしと云々扱社より十許丈こなたにて下輿ましゝ步行あり此道の程兩面をしく社の前左の殿に座し給ふ其作法はもらしつ事了て社外に出まして牛車に駕し給ひ上

神代のうらや今のみあれ野

是まで風雅集に入らる

祭禮

欽明帝

志貴嶋宮の御宇天皇の御世天下國舉て風吹雨零その時卜部伊吉若日子に勅してうらなはしめ給ふにすなはち卜して奏す賀茂の御神の崇なりと云々仍四月吉日を撰て馬に鈴をかけ人猪頭を蒙りて驅馳して以て祭祀をなしてよく禱祈せしめ給ふこれによりて五穀成就し天下豊年也乗馬こゝにはじまれりと云々又月令云祭日楓山の葵を挿頭す當日早朝に松尾社司等をして挿頭の料にたてまつらしむ内藏寮に參候す祭使すでに來楓葵を庭中に置詔戸申祭使等各かざして出たつ禰宜祝等祿物を賜ふ又馬を走す近衛一人と云々文武天皇二年三月辛巳山城國賀茂祭日會衆騎射を禁ず大寶二年四月庚子祭日徒衆會集執仗騎射する事を禁ず唯當國人不_レ在_二禁限_一云云元明天皇和銅四年四月乙未詔して祭日自今以後國司毎年親臨檢察焉云々山城の國司必出立事はより始て後年絶事なし嵯峨天皇弘仁十年三月甲午勅して山城國愛宕郡賀茂御祖并別雷二神の祭よろしく中祀に准すべしと云々

凡祭祠に大祀中祀小祀の三のわから有_二大祀は神齋一月天子御代始に一度の大嘗會是也中祀は三日賀茂祭の御神齋是也餘社の祭は悉小祀なれば一日の御齋也承和三年四月乙酉紫宸殿に出御ありて賀茂祭使等の鞍馬のかざり從者の容儀を閱覽まし_二て使等に賜_レ祿播磨守從四位下橘朝臣永名をかりに内藏頭として祭使に供せしむ云々當社の御祭は御代々の聖主殊に嚴重の御崇敬にて禁闕觸穢の年ならでは止事なく_二て勅使官幣御發遣の儀式天下の壯觀不_レ足_二勝言_一也其故いかにとなれば天八重雲分て天降給ひし天皇の御祖神なれば朝廷の御守りふかく鎮護國家の神德揭焉に御めぐみの告なりし御ゆえなりと云々此神國の祭と稱するは賀茂葵祭の儀也諸社の祭といふには官人使として發遣あるも奉行職事上卿の仰をうけて檢校して行事なるを當祭の儀は天子出御ありて禁中へ祭使諸司内侍以下女官衛府の容儀神寶列立の次第にいたるまで必_二觀覽ありて參向あるおもき儀申もさらなる御事も祭日は卯月中酉也然に和銅の帝の詔ありしより山城國司よろづ祭具不_レ足_二哉を檢校してかり_二にも輕忘_レある事なし祭以前僧尼重輕服人不可_二參内_一

る人は賀茂大神宮の御氏子也せめては年に一度參詣を
もいたし日に一たび北に向ひて祈念遙拜をもいた
すべき事也云々又天子御拜の事を公家の御記に賀茂
上下皆堂上にして御拜あり枕上の事鳥羽白河兩法皇
ことに北枕におはしますと云々賀茂と伊勢御神此神
國にして靈驗あらたなる大社におはします事はもろ
こしにも傳うけ給りて皇朝類苑と云書に書載せしは
日本は神國にて專神道を崇て祠廟多し伊州に太神あ
り山州に賀茂神まします三五歳の童子に託して祠廟
の事を降言すと云へり當御神の託宣おはしまし或は
夢に告させ給ふ事どもあげてかそへがたし神詠ども
の勅撰集に入たりけるは

神たのむ人いたつらになしはては

又雲分てのほるはかりそ

慈悲のめにくしと思ふ事そなき

とかあるものは猶あはれにて

鏡にも影みたらしの水の面に

うつるはかりの心とをしれ

これ又賀茂に詣ける人の夢にみえける

左兵衛督高遠といふ人賀茂に七日詣けるはての夢に

御社よりとてちはやきたる女の文を持てまへにきた
りけるをあけて見侍りければかく書て侍り
ゆふだすきかゝる袂はわすらはし

ゆたけにとけてあらんとをしれ

この後やがて大貳に成て侍りけるとなむ
頼もしなちかひたかへてもろ入の

待ためしにはなれをひかせん

此歌はある人賀茂大明神より歌を給けると夢
に見ておどろきてみれば白きうすやうにかゝ
せ給ひておかれたる御歌と申傳ける

又神縁に思ひよせたる詠歌ども多し

續拾遺

ちはやふる別雷の神しあれば

後京極攝政

をさまりにける天のした哉

神山の高根にかゝる白雲や

參議雅經

分し名殘の雲のかよひち

天岩船を思よせし歌

神山に天の岩船こきよせて

三位賀茂氏久

つなきとめしも我君のため

御生所の舟つきといふを神主遠久がよめる

久方の天の岩船こきよせし

の主也口決云社は居也土者吐也土の生ずる所は口中物を吐がごとし稷は五穀の長たり土地より生ずる五穀を乳味として群生を養育せる仁慈敦厚の靈德廣大なるを社稷の神と申也云々 取要 又云社といふ字は示土とかけり土地より萬物を生ずる體無量にして名づけかたし就中五穀の諸靈をとり稷字萬理を攝して國土の主たる靈神なれば宗廟と云になすらへ對して社稷の神と申也云々

私記云國王中土に位し坐て黄色の御衣を着し給ふと也有二口傳云々

大江匡房卿記云賀茂神者日本國地主の神たりと云々畧之又或記云神山かも山同訓にして口傳あり往昔此御神降臨まします所岩根あり是を降臨石といふ其神山御生所云々又云加毛の神日向の襲の峯に天降ましまし漸山背の岡田に遷り給ひ石川の狹見の小川を見巡し其清流をめでまして御手を洗はせ給ふ故に御手洗川と號すといへり又天岩船を漕よせ神の現形ましましける其所を御生所といふ其御生所のわたりをみあれのとも神代の浦ともいひ船差の入江ともいへりやまとかも海にあらしの西吹は

いつれの浦に御舟つなかも
といへる歌は賀茂祭の午の日詠じとなへ侍るふる歌也云々

當皇大神宮の御事は書々説々おほしといへども昔よりつかうまつる氏の宮人だに心府に秘し來るなれば外より本地とて決しあらはせる社記もなきにこそとみえて候歟吉田の某諸社の神縁を注記せし中にも當宮の御事は不詳と載たり神祇の長官といふ吉田の社家すら本縁の正儀は書々にまどひて候やらん然どもト部兼邦百首和歌を詠じて神道の事を注せしには國中に生るゝ人は賀茂の御神を氏神とこそいふべけれ然に其社の宮人をはじめ此境より上下は祇園の氏子といひ或は稻荷の氏子今宮御靈の氏子など云事更に本據なき事也それはうぶすなの神とこそ云つべけれ山城國の總社は賀茂大明神殊に帝都の鎮守也祇園は清和の御宇八幡も同じ貞觀年中稻荷は元明和銅に始れり賀茂の御事は上古よりの御事也世俗盲昧にしてかゝる事を申あへり淺ましき事也あを女房などの申あへるを上ざまの人も聞しめしてそれを本説に思召事歎しき事になんもとより山城國殊に愛宕郡に生る

山城國風土記云可茂を賀茂と稱するは日向國曾の峯に天降まします神賀茂建角身命是也神倭磐余彦の御前に立おはしまして大倭かづらき山の峯にやどりまし／＼かしこより漸うつり山城國岡田の賀茂にいたり給ひ山代河にしたがひて下りまし／＼葛野河とあふ所にいたりまし／＼て賀茂川を見巡してのたまはく狭小なれども然も石川清水ありとのたまひて名づけて石川瀬見小川といふ彼河上より上りまし／＼て久我の國の北山の基に定り坐すその時より賀茂と名づくといへり賀茂建角身命丹波國神野の神伊可古夜日女を娶りて子を生ます玉依日子次に玉依姫と名づく玉依姫石川瀬見小川にして川遊せし時に丹塗の矢河上より流くだる則とりて床の邊にさし置つひに孕て男子を生りひと成時外祖父建角身命八尋の屋を造り八戸扉をたて八腹の酒を醸して神集につとへて七日七夜樂遊して子に語りていはく汝か父と思はん人に此酒を飲ましめよ則盃を舉て天に向て祭をなし屋の蔓を分穿て天に昇るいまし祖父の名によりて御名を可茂別雷尊と申すいはゆる丹ぬりの矢は乙訓郡の社に坐す火雷命也建角身命と丹波神伊可古夜日子

と玉依日賣三柱の御神は蓼倉里三井社に坐す三身之神坐故に三身社といひしを今漸に三井と云と云々此三井社は中賀茂の社にまします上件の説秦氏本系帳には秦氏女丹塗矢を感じて產生すといへり少異同儀たれば畧之

無題記云取要夫天照太神地神五代の住所は陰陽次第麗氣記云日本國人壽四萬歳の時淡路の三上嶽にあまくたり給ひ三十二大眷屬を引率して庚申の年より春秋を送り給ふ事五十五萬五千五百五十年の次に布倉宮にうつり給ひ丙申年より年月を送り五十六萬六千六百六十六年文八輪嶋に遷り戊申年より年月を送り五萬七千七百七十七年文八國嶽にうつり庚申年より年月を送り五十八萬八千八百八十八年文丹波國與謝郡にうつり給ひ年月を送り給ふ事六十一萬千百年文已上外宮御神事也云々賀茂に約すれば上賀茂の御事也又云爲大明神三所たりといへども實は是伊勢南宮是也有二口傳云々日本紀神代祕決云地神五代は五形の神なり五形を以て地の宗廟とし天照太神を地神と申也云々賀茂は天の神にして社稷第一の神と申也口傳深祕なる故不書之社稷と云は是五穀の長精地神

賀茂注進雜記

當宮本縁 諸書之說

賀茂皇大神宮の本縁は昔より一社の深祕にて社家の中にも信機にあらざれば淺略の儀を傳へて相承の奥儀をゆるし傳る事なし況や他授に及び外に傳る事あらず候へば今以あらはに筆舌に難述候しかはあれど社家の文書所見の趣あらまし要を摘て注進つかうまつり候此等の事は世間流布の書籍にも歴覽あるべく候歟或神書に云天地未分まろかれたる中に大もとの御神まします清るは天となり濁れるはくだりて地と成しより陰陽の兩神わかれましゝて陽徳の御神は天の事をつかさどり陰徳の御神は國土をしろしめすといへり又云當社の託し給へる神詠に

ちはやぶるわけつち山に宮居して

天くたること神代よりさき

と託し給つると一本無託以下六字みえたり同私記に賀茂御神は陰徳にて男神伊勢は陽徳にてしかも女神に坐す天地陰陽兩神相對の御神徳靈驗いちじるくおはしまし

伊勢に内外賀茂に上下の兩社たゝせ給ふ深祕不可説の口決ども難筆相承の傳を受べしと云々

豐葦原ト定記云古に八十萬の神達を天高市に集給ひ神議に議り給ひて可遣神を神尋に尋出し奉り武雷の神と齋主の神とを降し給ひ千早振惡神を悉皆伏せまつろへて遂に報申す此後建角身命國々を見巡しおはしますにこゝに天鈿女命磐樟船を漕奉り尊を神代浦の浪靜なる磯まで送おはします仍天神より賜ひし三の神寶を以て此國の固とならせたまはんとて北山の麓に應化し百王を守り給ふ經津主武雷神も同此所に垂跡し給へりと云々

上宮太子記云平京深山なるを御覽じて宣はく國中の秀たる國日本の中心天下無双の勝地なり四神相應せり南は晴北は塞り佛閣皇居建立するに尤相應する也東に流水ありて福壽長遠のいはれをあらはす東西に長山遙に連れり諸方に靈神先立て此地を守護し給ふ我滅後百七十餘年ありて此所都なるへししかも北山の麓に月神の應化して百王を守り給へる靈神坐す即賀茂大明神の御事なり云々又同北山の高嶽に龍神常に止住し給ひ京城を守護す貴布禰大明神是也云々

賀茂注進雜記

目錄

- 第一 本綠 諸書說
- 第二 祭禮
- 第三 神寶祭器等
- 第四 齋院
- 第五 行幸官幣御幸 附祈願靈驗等
- 第六 造營
- 第七 社家 官位諸司
- 第八 神領

籍爲一家之書。或曰：深祕。或曰：家傳。甚以邪祕之。於是神國之教化陵夷。人非其人。異教之風義隆盛。道非其道。雖宗廟不尊。崇之雖社稷。以蔑如之。剩內宮祠官等時々及相論。文明延德之竺火神書悉焦土矣。痛哉偶煨燼之餘。及管見之中。拾其祕傳。以設問答。筆之於書。以欲傳無窮矣。若夫舊事紀古事記日本紀等。則未聞其書義。何知其淵奧。唯以神宮相傳。故名神宮祕傳。問答以授三三子。必莫及廣覽云爾。

萬治三年三月二十三日

天牟羅雲命四十四世孫權禰宜從五位上度會神主延良

如キ文人ナク記シ留メヌ故也異朝本朝ノ文字ノ上ヲ不レ論神聖ノ上ヲ論セバ吾國ノ始ヨリ今ノ代マデモ天照太神ノ御苗裔天位ヲ嗣セ給フハ神聖ノ德異國ヨリ遙ニ勝レ給ル驗ナラン歟如レ此有ガタキ神國ナレバ龜ト八卦ノ數ナトモ異朝而已ナラズ本朝ニモ神代ヨリ有テ用キ來ルト可ニ心得ニ龜ト八卦ナド云漢字ハ異國ノ書來朝シテ以後ノ事ナリ神道モ易道モ自然ニ從フ故ニ道理相叶事有リ殊ニ日本紀神代卷ナドニモ備レ易漢字ニ顯シタル所アリ然リトテ易ヨリ出タル神道ニハアラズ異朝ノ書ニ執シテ見ル故ニ周易ヲ以テ日本ノ神道ヲ作り出シタル歟ナド、疑フ人有レド本朝ニ生タル人ノ意ナリ此ノ心ヨリ叛逆モ起也深可レ戒神道ハ日本ノ道也儒道ハ震且ノ道也佛道ハ天竺ノ道也吾カ身ハ異國ノ人カ本朝ノ人カ身ヲ省ヨ如レ此了簡ノ上ニテ本朝ヲ主トシテ異國ノ聖賢ノ書ヲ學ハ吾神道ノヨキ羽翼ナルベシ 問曰神道ニ二見ヲ嫌フト云テ萬事ニ初一念ヲ用ル人アリ初一念ハ難念ナク殊勝ノ心ナレド時ニヨリ楚忽ノ事モ可有歟 答曰神道ニ二見ヲ嫌ハ楚忽ノ初一念ヲ用ヨトノ事ニハアラズ神道ニハ無ニ一見ニ至誠ヲ尊也二見トハ難

念ノ事アシク心得タル人ハ二見ヲ嫌フトテ楚忽ノ初一念ヲ尊フ也無二見至誠ハ神道ノ極意ナリ二見ヲ嫌フト云テ輕シク不レ可ニ意得ニ能可ニ工夫ニ二見ヲ不淨トスル故ニ伊勢ニテ不淨ヲ祓除スル浦ヲ二見カ浦ト云也同シ所ニ清渚ト云所有ルハ祓除シテ清淨ノ上ニテノ名ナルベシ二見浦ノ名義許多有レド疑シケレバ云ニ不レ足也 問曰天地ノ始ハ異國トテモ同ク然ラシ何ゾ國常立尊ヲ日本國ノミノ始祖トスルヤ小見ト云ベキカ 答曰天地ノ始ハ異國本朝トテモ相違不レ可有然レドモ吾國ノ神道ハ日本國ヲ主トスル故ニ神書ノ說日本ニ限リタル如ク書タル也吾ガ國ノ元祖國常立尊ヲ元氣化生ノ靈ニ配スル事ナレバ異國ト元祖同ジ事ニハアラズ日本紀私記ニ日本ノ日月ト異國ノ日月ト各別ノ由記シタルハ愚ナル様ナレドモ日月ハ異國ト相違ナキトテモ配スル神ニ相違有ル故ナルベシ不然則私記ノ說ハ以ノ外ノ避見也日月ノ同キ事ヲノミ知テ配スル神ハ各別ナル事ヲ不レ知故ニ兩部習合ハ起リタル也深ク思フベシ 本朝神聖之道被レ混ニ異教ニ之後人不レ知レ爲ニ天下國家之道ニ誤以爲神祇宮人之法仍祠官職掌人等亦以ニ神

太神御怒ヲ含テ天下ノ政ヲ開食スヲ比喻シテ云タルカ此ノ事ハ口傳有ベシ能ク工夫ノ上ニテ道知ル人ニ問ベシ 問曰磐戸ノ前ニ懸シハ八咫鏡也咫ノ字ハ八寸ヲ云八寸ヅ、八ハ六尺四寸ナリ六尺四寸ナラバ延喜太神宮式ニ載ル御槌代ノ寸尺相違歟如何 答曰神鏡ノ御事ハ最極ノ祕事也但シ八咫鏡ト申奉ルトテ六尺四寸ト見ルハ誤也八者八花形ノ御鏡也咫ハ八寸ナレバ八花形ニシテ徑八寸ノ御鏡トナリ神鏡之御事ハ深々祕密口傳アリ殊更内宮外宮ノ御形ノ相違ハ憚多キ故ニ難言也 問曰神鏡ノ御事聞モ粟粒膚ニ生ズ明鏡ヲ御神體ニ用ヒ奉ルハ神ノ御心ヲ表シタリトモ云神トハ鏡ノ和訓ヲ中略シタリト也此ノ事如何 答曰明鏡ハ萬物ヲ照シテ一物ヲ不レ畜殊ニ正直ノ德ヲ備ヘタリ神ノ御心ト同キ故ニ神勅ニモ視ニ此寶鏡ニ當レ猶視レ吾ト宣ヘリ但シ他ニ不レ可レ求明鏡ノ上ニテ吾カ本心ヲ工夫シテ神ノ御心ト吾ガ心ト一致ニナルハ是神道ノ極意也 問曰神書ノ中ニ何ゾ八ノ數ヲ用ルヤ 答曰八ハ神道ノ愛スル數也其由ハ口傳有事ナルベシ但シ神代ヨリ太占ヲ以テ占合ト日本紀ニモ有リ龜ノ占モ有リ又鹿骨ヲ拔テト合シ事モ古事記

等ニ出タリ龜兆傳ト云神書ニモアリテ易道ト符合シ易ノ八卦ヲ以テ推シテ見レバ能合所モアリ其上神書ヲ漢字ト成ス故ニ日本紀ナドニハ周易ヲ合セテ云タル文書モ有リ心ヲ付テ可レ見所ニヨリ相違アレドモ大方ハ八卦ノ數歟 問曰異國ノ易道ヲ摸シタラバ神道ハ易道ヨリ出タタルカ答曰異國ノ易道モ人爲ニ出タル物ニ非ズ天文ヲ觀ジ地理ヲ察シテ始シ物ナリ本朝ノ神聖モ天地ノ理ヲ觀察シテ自然ノ理ニ從テ神道ヲモ教ヘ給フ也今トテモト合ハ自然ニ從フ也天文地理異國而已ニ有テ日本ニ有間敷哉喻ヘバ天地開闢ヨリ一度通路ナキ南蠻國ニモ衣食ヲ知リ殊ニ種々ノ器物ヲ持テ來朝ス此ノ衣食器物ヲ唐ヨリ南蠻ヘ教ヘタルニモ非ズ日本國ヨリ教ヘタルニモアラズマシテ南蠻ヨリ唐ヘモ日本國ヘモ不レ教其國々ニモ通明ノ人有テ自然ノ理ニ從事何ノ國モ不レ違コレノミナラズ禽獸マデモ異國本朝相違アリ或ハ木ニ巢ヲ懸或ハ穴ニ居テ其可レ食物ヲ食フ況ヤ日本ノ神聖異國ノ聖人ニ劣リ給フベキヤ但シ漢字ニ顯シタル書ノ上ニテ見レバ異朝ヨリ日本ハオトリタル様ナレドモ其レハ漢字ノ書ヲ日本ニテ學ビテモ吾國ノ書ナラネバ異國ノ

說ナレドモ今外宮ノ坤方ノ藤岡山麓ニアリ此ノ水ヲ天孫瓊々杵尊御降臨ノ時持テ下リ給ベキヲ遺置給フ故ニ度會氏ノ先祖天牟羅雲命又天上ニ登テ持下リ日向國高千穗宮藤岡山ト云所ニ安置シケルヨリ此ノ界ノ水モ清タルト也今モ此ノ水ニテ毎日朝夕ノ大御饌ヲ炊備ヘ奉ル天上ヘ二度登リシ故ニ天牟羅雲命ヲ天ニ上命ト名ヲ賜シ也丹州眞井原ヘ移シタレドモ雄略天皇御宇ニ丹州ヨリ外宮ヘ御遷坐ノ時又伊勢ヘ移シ給フ日向ニテ眞名井有シ所ヲ藤岡山ト云故ニ丹州ニテモ其所ヲ藤岡山ト名付今又伊勢ニテモ其在所ヲ藤岡山ト云也此ノ眞名井ヲ忍鹽井トモ云忍穗耳尊ト云御名モ忍鹽井ニ濯シ瓊ヨリ化生シ給フ故ナルベシ忘井ト云所伊勢ニ有ト云傳テ其在所知ル人ナシ疑ラクハ天上ニ忘レ置給フ水ナレバ此ノ井ヲ云歟今ノ代ニ兒ノ水ニムセタル時オシマツト唱テ咒フハ此ノ水ノ事也天上ニテ神勅ニ忍水ト云テ咒ヘト有シ事御鎮座本紀並ニ傳記等ニ有リマトミト五音通スル故ニ忍水ヲオシマツト也此ノ水ニテ次タル御供ヲ頂戴スル輩ハ必ズ壽ヲ保ト神書ノ説也 問曰瓊々杵尊ノ木德タル證ハ如何 答曰忍穗耳尊ハ水德ナレハ水生木ト木

德ノ瓊々杵尊ヲ生ジ瓊瓊杵尊ハ水生火ト火德ノ火火出見尊ヲ生ズ火々出見ハ火生土ト土德ノ彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊ヲ生ジ給也忍穗耳尊ヨリ葺不合尊マデ水木火土ト相生事ハ世ニ流布ノ東家祕傳ナドニモ有リ 問曰火々出見尊ノ海神ノ宮ニ至リ給トノ事其故有リヤ 答曰異國ノ書ニモ孫思邈水府ニ行テ千金方ヲ傳シ事有リ本朝ニテモ浦島子常世郷ニ行ヌ此ノ類ナルベシ但シ其指所モ有ル歟神代ニハ神變有シ事ナレバ左モアルベシ神書ノ如ク見テ可ナラン歟龍宮ハ琉球ト音近シ琉球國ヲ云トノ説有レドモ古書ニ所見ナシ 問曰素盞鳴尊ノ惡逆ノ故ニ天照太神天磐戸ヲ閉給ヘバ國土常闇ト成シトハ指所有リヤ 答曰逆臣ノ爲ニ犯サレ人君天下ノ御政ヲ聞食事無ハ天下常闇ナルベシ又心上ニ取テ云ヘバ惡念起テ本心闇ハ日神天磐戸ヲ閉給テ國土常闇ト成リシ也又日蝕ヲ云トノ説アリ左モ有ベシ但シ神代ノ事跡比喩多ケレバ能察スベシ磐戸ヲ閉給フハ人體ノ日神也世界常闇トナリシハ天ニ御坐ス日神磐戸ノ前ニ懸シ御鏡ハ地ニ御坐ス日神也是等又天地人ヲ配合シテ云ヘリ神代ノ事跡此等ヲ以テ類推スベシハ素盞鳴尊惡逆ノ故ニ天照

卦ノ三畫ノ奇爻ニ比シタリ陰爻陽爻互ニ交テ三畫ノ後ニコソ三體ノ純男ハ有ベケレ三神ヲ其儘三畫ノ奇爻ニ比シテ純男トノ事其心如何 答曰此ノ說予モ不審ナリ知者ニ可レ問或曰日本紀ノ乾道獨化所以成ニ此純男ト云十字ハ後人ノ加筆ナラント予謂此三神ハ上中下ノ三氣ヲ云歟一氣生スレバ則上中下ノ氣アリ一物トシテ三無レ不レ備一息ニモ呼ト吸ト中トノ三アリ萬事萬物モ類推スベシ又渥土煮尊沙土煮尊大戸道尊大苦邊尊面足尊惶根尊此ノ六神二神ツ、耦シテ坤ノ三畫耦爻ニ比シタルト見ヘタレトモ予謂渥土煮尊大戸道尊面足尊ヲ乾ノ三畫ニ比シ沙土煮尊大苦邊尊惶根尊ヲ坤ノ三畫ニ比セバ其理可レ通歟其故ハ渥土煮尊大戸道尊面足尊ハ陽神也沙土煮尊大苦邊尊惶根尊ハ陰神也此六神ヅ、對シテ生ジ三陽三陰成就ノ上ニテコソ正陽德正陰德ノ伊弉諾伊弉冊尊モ現ジ給フナレ日本紀ニ上ノ三神ヲ乾ノ卦ニ比シ下ノ六神ヲ坤ノ卦ニ比シタルハ如何ト覺侍ル但シ出生ノ次第ナク上三神一度ニ出生シ下六神一度ニ出生ナラバ左モ可レ有歟有道ノ人ニ可レ正 問曰國常立尊ヨリ惶根尊マデ九神ヲ九ヶ月懷胎ニ取り十ヶ月ニハ男歟女歟

其體顯ル、ヲ男ナレバ伊弉諾尊女ナレバ伊弉冊尊ト云ナラン歟其故ハ國常立尊ヨリ惶根尊マデハ形ヲ末レ現神ナリ此九神ハ懷胎ニシテ伊弉諾伊弉冊尊ハ男女ノ體ノ現レタル出胎ナルベキ歟如何 答曰此說理有リ天地人ノ始ル其形ハ遠フトモ其理ハ不レ可レ違左モ可レ有 問曰天神七代地神五代トハ何タル故ゾヤ 答曰天照太神ヨリ天下ノ君ハ始リ給フナレバ其以前國常立尊ヨリ伊弉諾伊弉冊尊マデノ七代ヲ天神七代ト云天照太神ハ天下ノ君ノ始トシテ出見ナレバ其ヨリ以後五代ヲ地神五代ト云也 問曰天照太神ト素盞鳴尊ノ誓約ノ間ニ忍穗耳尊化生シ給フトハ天照太神ト素盞鳴尊ト夫婦ト成給フ歟 答曰天照太神ハ火德ノ神忍穗耳尊ハ水德ノ神也火ト水ハ尅ス素盞鳴尊ハ金德神ナレバ金生水ト水德ノ忍穗耳尊ヲ生給也人ノ世ニモ養子ヲスルニハ同性ノ中ニ子ノ列ヲ取ナレバ素盞鳴尊ノ御子ヲ養テ天照太神ノ御子トシ給ト神書ノ說萬代マデノ養子ノ法ナルベシ天照太神ノ御甥ヲ養子トシ君位ヲ傳ヘ給也 同曰忍穗耳尊ノ水德ノ證如何 答曰天真井ニ濯給フ瓊ヨリ生ジ給フ由日本紀ニ詳也其眞名井ハ丹州眞名井原ニ有リト齋部氏ノ

旺スル日五十四日ニシテ十八日不足也故ニ三歳マデ脚不_レ立ト云也 問曰蛭兒土德ノ神ナル時ハ木火金水德ノ神ハ何レゾ 答曰稚日女尊ハ水德也大日女尊ハ火德也素盞鳥尊ハ金德也月夜見尊ハ水德也 問曰木火金水德ノ其證如何 答曰稚日女尊木德ノ證ハ金德ノ素盞鳴尊ノタメニ害セラレ給フ金尅木ノ故也木陽ハ稚ケレバ稚日女尊ト申也今按ニ紀伊國日前宮是ナラン歟古ヘハ木ノ國ト書ク弱浦アルモ稚日女木德ノ故ノ名ナルベシ玉津嶋明神ハ日前神也ト云祕說アリ然レドモ二所ニ御鎮坐不審也伊勢太神ノ荒魂ノ例ニテ見レバ玉津嶋明神ハ稚日女尊ノ荒魂歟猶可_レ考_レ之衣通姫ハ和歌ノ神ニシテ弱ノ字ノ和訓和歌ナレバ因テ後代ニ從祀スト云傳アリ但シ清輔カ囊草紙ニハ衣通姫ノ此所ヲ面白カリ給テ神ト現ジテ垂_レ跡ト書タリ天磐戸ノ前ニシテ初度ニ鑄給フ御鏡ハ小キ故ニ又鑄給フ御鏡伊勢太神ニシテ初度ノ御鏡ハ日前宮ノ由神書說詳也日神ヨリ前ノ御鏡ナレバ日前宮ト云也日ハ火也五行相生ノ時ハ火ノ前ハ木也木陽ハ稚ナル故ニ初稚ノ御鏡ヲ小シトハ云也出生ハ前ナレドモ稚キ故ニ稚日女尊ハ天照太神ノ妹トモ云也又大日

女尊火德ノ證ハ日神ト奉_レ申日ハ火ニシテ南方ノ君位ヲ主トリ御坐ス故ニ天下ノ君ノ始ト成給フ其上金德ノ素盞鳴尊ト御中惡キモ火尅金ノ故也又素盞鳴尊ニシ山海ヲ鳴動シサナガラ秋ノ様ヲ神書ニモ記セリ西方申酉ノ方ヲ主リ給フ救ニ今ノ世ニ必ズ秋ニハ申酉ノ日大風吹テ素盞鳴尊ノ様有リ又月讀尊水德ノ證ハ月ハ水也大日女尊火德ナル時ハ月讀尊水德ナル事不_レ言可_レ知也 問曰右ノ五神五行ノ神ナラバ木神句_{ノチ}句_{ノチ}迺馳火神軻遇突智土神埴山姫金神金山彦水神罔象女ハ右ノ五神ノ別名歟 答曰稚日女大日靈尊等ノ五神ハ人體ノ神ノ德ヲ五行ニ配シテ云フ句々迺馳等ノヲ加ヘバ二女三男ト云ベシ一女三男ト云事ハ何タル說ゾヤ 答曰一女三男ト云事舊事紀古事記日本紀ニモ不_レ見マシテ神宮ノ古記ニモ無_レ之疑ラクハ俗諺ナラン歟其上蛭兒ハ男體トモ女體トモ難_レ言是モ夷三郎ト云俗語有レバ男ト云ナルベシ但シ上古ノ證文有ル歟博覽ノ人ニ可問 問曰國常立尊國狹槌尊豐斟淳尊ノ三神ヲ日本紀ニハ純男ト記セリ純男ト云時ハ乾

テ今不^レ有^レ無味^レ意默シテ可^レ知 問曰舊事紀日本紀
ニ天照太神月讀尊素盞鳴尊生給事三所アリ異說カ但
シ故有歟 答曰日本紀ニテハ異說ニ似タレドモ舊事
紀ヲ見ベシ三處ノ出生故アリ伊弉諾尊御眼ヲ洗テ化
生ノ日神月神ハ天上ニ御坐ス日神月神也伊弉諾尊ハ
陽神ナレバ天ニ像リ日月ハ天ノ兩眼ナレバ御眼ヨリ
化生ト云白銅鏡ヲ左右^ニ御手ニ取テ化生ノ日神月神
ハ地ニ御坐ス日神月神也白銅ハ地ヨリ生スレバ也是
故ニ御靈形ニ鏡ヲ奉^レ崇歟伊弉諾伊弉冊尊夫婦トシ
テ胎生シ給フ天照太神月讀尊ハ人體ノ日神月神也天
地人ノ日神月神其德一ナル故ニ配合シテ祭ル也 問
曰然ラバ素盞素鳥尊モ御鼻ヲ洗テ化生ハ天ノ素盞鳴
尊又顧^{イル}眄^カ之間ニ化生ハ地ノ素盞鳴尊又伊弉諾伊弉冊
尊ノ 答夫婦トシテ胎生シ給フハ人體ノ素盞鳴尊歟
曰然リ 問曰御鼻ヲ洗テ化生ヲ天ノ素盞鳴尊トシ顧
眄之間ニ化生ヲ地ノ素盞鳴尊トハ其儀如何 答曰殺
伐ノ金氣ノミナラズ物ヲ損スル不正ノ氣ハ天ノ素盞
鳴尊也鼻ハ兩眼ノ間ナレバ御鼻ヲ洗フト云鼻ハ主
ノ肺肺ハ金也素盞鳴尊ハ金德ノ故ニ御鼻ヲ洗テ化生
ト云御鼻ヲ洗テ化生ノ御名ヲ速佐須良姬ト申テ素盞

鳴尊ノ靈魂也又左右ノ御手ノ白銅鏡ヲ顧盼之間ニ化
生ヲ地ノ素盞鳥尊トハ白銅ハ地ニトリ顧盼之間ハ正
見ニシテ正見ニ非ズ故ニ地ノ素盞鳴尊ト申奉ル但シ
素盞鳴尊ノ和魂ノ表ハ劔ナルベシ子細アリ熱田宮ヲ
素盞鳴尊ト日本武尊ノ二神ニテ御坐トノ祕說モ其理
アル事カ 問曰人體ノ月讀尊ヲバ除テ天ト地ト月神
ヲ以テ豐受大神ニ配スル其義如何 答曰舊事紀日本
紀等ニハ人體ノ月讀尊ヲ主トシテ云フ故ニ月輪ヲモ
御鏡ヨリ化生ヲモ月讀尊ト云ヘドモ神宮ニテハ月讀
尊モ豐受大神ノ德ニヲサレ給フ故ニ水德ノ豐受大神
ヲ火德ノ天照太神ニ對シテ兩大神ヲ日神月神ト申セ
バ荒魂ヲモ和魂ヲモ日神月神ト申也必シモ不^レ可^レ執
^レ隨時義ヲ取ルベシ 問曰蛭兒三歲マデ脚不^レ立ト
ハ其故アリヤ 答曰蛭兒ハ土德ノ神ナリ土ハ專主ノ
方也四季ニモ寄旺シ三季ノ時ハ脚不^レ立四季ニシテ
脚立也木ハ春旺シ春九十日ノ内ヲ十八日土旺ス火ハ
夏旺シ夏九十日ノ内ヲ十八日土旺ス金ハ秋旺シ秋九
十日ノ内ヲ十八日土旺ス水ハ冬旺シ冬九十日ノ内ヲ
十八日土旺ス四季ニ十八日ツ、土寄旺スレハ木火土
金水トモニ七十二日ヅ、旺スル也三季ニシテハ土ノ

吹戸主ノ神トモ申ス海水ノ氣ハ月ニ從フ故ニ中臣祓祝詞ニモ氣吹戸仁坐氣吹戸主ト云ヘリ 問曰荒魂トハ何ゾヤ 答曰荒魂ハ陽ニトリ和魂ハ陰ニトル天ニ御坐ス日月ハ天照太神ト豐受太神ノ荒魂ノ表也御神體ノ御鏡ハ和魂ノ表也荒ハ動也和ハ靜也荒魂トハ魂ヲ云ヒ和魂トハ魄ヲ云ナルベシ神功皇后紀ニモ和魂服ニ王身而守ニ壽命荒魂爲ニ先鋒而導ニ師船トアルハ魄ハ止テ玉體ヲ守リ魂ハ先行テ師船ヲ導クトナルベシ 問曰荒魂ハ魂ニシテ陽ナラバ月神ハ陰ナルニ豐受太神ノ荒魂トハ如何 答曰月神ヲ日神ニ對スル時ハ月ハ陰ナレドモ地ニ御座ス水德ノ神ノ和魂ニ對スル時ハ天ニ御坐ス月神ハ陽ナル故ニ豐受太神ノ荒魂ト申也 問曰上古ニ多賀宮ノ内宮ニ御坐ノ時ハ和魂宮ト奉レ申タルト也然ラバ豐受太神荒魂ト云ハ相違ナリ如何 答曰多賀宮ハ豐受太神ノ荒魂ナレドモ陰德ノ月神ナル故ニ陽德ノ日神荒魂ノ宮ニ對シテ和魂ノ宮ト申シ内宮ノ五十鈴川上ニ荒魂宮ノ荒祭ト並テ御鎮座有シヲ神ノ誨ニ從テ外宮ヘ奉レ移テハ御號ヲ改メテ多賀宮ト奉レ申也 問曰荒祭ノ宮ハ日ノ神ニシテ又瀬織津姬トモ奉レ號伊弉諾尊ノ憶原ニテ

祓除ノ時左ノ御眼ヨリ化生シ給フ天照太神ノ荒魂ト也多賀宮ノ例ニテ見レバ荒祭宮ハ天ニ御坐ス日神也然ラバ内宮ノ本宮ハ天ニ御坐ス日神ニテ、ナシヤ 答曰本宮ハ日城ノ天子ノ始伊弉諾伊弉冊ノ御子人體ヲ受給天照皇太神ニテ御坐ス其德日輪ト齊キ故ニ大日靈尊ト奉レ申日ニ配シテ祭ル也又瀬織津姬ノ御名ハ祓除ノ時御眼ヲ水ニ洗テ化生ノ故ニ奉レ申ナルベシ神功皇后紀ニ曰神風伊勢國百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴御魂天疎向津媛命トハ荒祭ノ宮ナルベシ同紀天照太神誨レ之曰我之荒魂不可近ニ皇居ニ當レ居ニ御心廣田國トアリ此二段ヲ引合セ見レバ廣田大明神モ荒祭宮ト同體ノ神ナルベシ 問曰然ラバ豐受太神モ天照太神ノ自テ出給フ神ナレバ人體ナルベシ人體ノ神ニシテ元氣ノ靈ニ配シテ祭ル歟 答曰然リ 問曰豐受太神モ人體トノ證文有リヤ 答曰日本紀一書曰便化ニ爲人一號ニ國常立尊ニ又御鎮座本紀云神人化生名號ニ天御中主神ニ是等證文也 問曰天地ノ始元氣化生ノ神人ニテ御坐セバ元氣ノ靈ニ配スル迄ニ不及事カ何ゾ配ニ元氣祭乎 答曰元氣ヨリ天地人始ル今日トテモ人生スルハ以ニ元氣ニ生ズ昔シ有

ハ御正體ニテ瓊々杵尊ハ高貴神ノ勅ニ依テ東相殿ニテ御坐也瓊々杵尊ニ添奉テ天兒屋根命天太玉命モ西相殿トシテ御同殿ニ御坐ス瓊々杵尊ノ荒魂ヲ天上^{アマノホリ}玉杵尊ト申テ瓊々杵尊ト同ジ御船代ニ一座ニシテ御神體ノ御形ハ二體御坐ス此ヲ五神四坐ノ祕事ト云此ノ義ハ口外スルモソラ恐シケレド古記紛失故ニ祕傳ヲモ絶ベキ事淺間敷今サラ言ニ顯シ侍ル豐受太神トハ國常立尊一神ヲ申奉ル宮ノ字ヲ付テハ五神ヲ總テ外宮トモ豐受太神宮トモ度會宮トモ申奉也延喜式ニモ度會宮座豐受太神一座相殿神三座ト云ヘルハ是也問曰五神四座ノ御事大方ノ神書ニハ不見難有說也東寶殿西寶殿コソ世ノ人モ東西ノ相殿ト思ニ御同殿ニ御坐ハ東西ノ寶殿ハ相殿ニテハナシヤ答曰昔丹州ニテハ前社トモ申タルト本記ニアレバ世人ノ思フモ理ナレド相殿トハ御同殿ニ御坐ス故ニ奉レ申東西ノ寶殿ハ寶藏也延喜式ニハ財殿ト書寶基本記ニハ寶藏ト書テ勅幣ヲ被レ奉ノ時ハ錦綾等ハ東寶殿ニ奉納シ御馬鞍等ハ西寶殿ニ奉納ス其上御體在宮ヘ本宮ノ御正體ヲ假殿遷宮ノ事ハナシ東寶殿忌屋御氣殿等ヘハ假殿遷宮アリタルニテモ寶藏ナル事了簡スベ

シ問曰外宮ヲ水德ノ神トハ何ノ故ゾヤ五行未生以前ノ國常立ヲ水德トハ不審也其上外宮ノ別宮多賀宮ヲ豐受太神ノ荒魂トハ是又何ノ故ゾヤ多賀宮ハ伊弉諾ノ櫛原ニシテ祓除ノ時右ノ御眼ヨリ化生シ給フ神ト云ヘリ然ラバ月讀尊也月讀尊ヲ豐受太神荒魂トハ水德ノ故ニ云ヤ殊ニ外宮ノ別宮ニモ月讀宮有リ多賀宮月讀尊ナラバ又別宮ニ月讀宮不レ可有如何答曰是又深祕ニテ雖レ難レ顯諸人ノ惑ト成ル事ナレバ粗其由ヲ可レ申國常立尊ハ元氣化生ノ神ナレバ五行ヲ含タル御神ナレドモ五行ニハ水ヲ始トスル故ニ水德ノ神ト申也亦月ノ神ハ形ニ見レタル水德國常立尊ハ無形ニシテ含ミタル水德ノ神ニテ御坐スナリ伊弉諾尊ノ櫛原ニシテ祓除ノ時右ノ御眼ヨリ化生ノ神ヲ日本紀舊事紀等ニハ月讀尊ト記シタルト神宮相傳ノ古記ニハ此時化生ノ神ヲ月神トモ云ヒ豐受太神荒魂トモ云テ月讀尊トハ不レ記月讀ノ宮ニ奉レ崇ハ伊弉諾伊弉冊ノ夫婦トシテ生ジ給フ人體ノ月讀尊ノ御事也月神ト申ハ天ニ御座テハ豐受太神ノ荒魂ノ表也多賀宮ヘ參ル坂ヲ登ルニハ登天ノ心ヲ持ベシト古來相傳也荒祭宮ノ坂ヲ登ルニモ此心ヲ持ベキ事歟此ノ月神ハ氣

遷都ト見レバ神書ノ旨ニ叶ヒテ具ニ可レ無レ難此事ハ
深々口傳可レ有古記文ノ如ク可レ見古記ニモ無キ事跡
ヲ求テモ其詮無義也 問曰瓊々杵尊天上ヨリ降臨有
タルトノ神書ノ說ナレド天上ノ事跡半ニ過テ人間ノ
如シ是ノミナラズ伊弉諾伊弉冊尊ヨリ天照太神忍穗
耳尊迄モ其事跡人間ノ如キ事ノ有ルハ如何 答曰是
亦容易難レ顯事也然レドモ其ノ不審不晴時ハ神道ノ
障ナレバ一二ヲ可レ謂人體ヲ受給天照太神ノ盛德光輝
廣大ニシテ至ラヌ曲無レバ日々ニ拜シ奉ル故ニ於ニ
神書ニ日輪ノ德ト天照太神ノ德ヲ配分シテ云ヘバ人
間ノ事ノ如キ言モ有リ伊弉諾伊弉冊モ其德ヲ陰陽ニ
配分シ月讀尊モ其德ヲ月輪ニ配合スル故ニ人間ノ事
跡ノ如キ文言アリ天神七代地神五代ノ諸神ノ御名ヲ
今世迄傳タルダニ餘リニ年代久シケレバ疑ハシキ事
ゾカシ況ヤ其事跡悉ク有タル事ト云ンモ知者ノ取マ
ジキ事也又無レ事ト云バ不審可レ起凡神書ハ神名ノ上
ニテ能取レ義悟入有事トナリサノミ事跡ニ執スベカ
ラズ又一向ニ廢スベカラズ 問曰日月ニ配ストノ事
其證如何 答曰古記ニモ伊勢兩宮ヲ云テ配日月ト有
リ又倭姬ノ世記ニ天照太神波日月止合レ明天宇內常照

臨給利豐受太神波天地止齊レ德天國家乎守幸給利ト云
ヘリ 問曰日月ニ配ストノ其說左モ有ベシ又伊弉諾
伊弉冊モ陰陽ニ配セバ人體也人體ニシテ何ゾ山川草
木マデモ生ズルヤ 答曰陰陽ニ配スル故ニ人體ノ伊
弉諾伊弉冊ノ上ニテ陰陽造化ノ跡ヲ言タル也人體ノ
伊弉諾伊弉冊ノ山川草木マデモ産給フトノ事ニハ非
ズ是ニテ日月ニ配シタル事モ推レ類可レ知 問曰然ラ
バ神書ノ說悉ク僞ナルカ 答曰易ノ乾ノ卦ヲ天トシ
テ又父ニ比シ坤ノ卦ヲ地トシテ又母ニ喻タルガ如シ
其德ヲ比喩シテ而モ我が國ノ事物ノ權輿ヲ言テ殊ニ
勸善懲惡ノ言モ有リ深ク悟入スルトキハ凡夫トテモ
神人ト可レ成奧義有リ仰テ尊ベシ但シ用ル所ノ神書
ト其人ノ見解トニ可レ依事 問曰外宮ヲ宗廟社稷ノ
神ト云ハ國常立尊瓊々杵尊ヲ宗廟ト云ヒ天兒屋根命
相殿ニ御座ス故ニ社稷ト云ヒ合セテ宗廟社稷神ト申
奉ルトナリ如何 答曰神宮ニ相傳ノ大概ノ說如レ此
然モ此土地ハ元氣化生ノ國常立尊ヨリ始タレハ社ノ
神也又豐受太神トモ御氣津神トモ申セバ稷ノ神也増
テ國常立尊瓊々杵尊ハ宗廟ノ神ナル事無レ疑也 問
曰瓊々杵尊ノ外宮ニ御坐其說如何 答曰國常立尊

明理本源ノ神ニテ元氣ノ中ニ御座スト云事也日本紀云天地之中生ニ一物ニ狀如シ葦牙ニ便化ニ爲神號ニ國常立尊ト云ヘリ國常立ハ元氣化生ノ神ナレバ化爲神ト云氣ヲ離レテ理無ケレバ天御中主神ト國常立尊ハ同體異名ニテ御座ストヘ云ヘリ其後國土成就シテ豐葦原中國トモ又豐葦原瑞穗國トモ豐葦原千五百秋瑞穗國トモ云ヘリ五穀出生シテ瑞穗國ト成タル元氣化生ノ神ニテ御座ス故ニ國常立尊ヲ豐受皇太神ト申奉リ御氣津神ト奉_レ崇也若シ豐葦原中國ト云ヲ葦多キ國ト心得タル時ハ因以曰ニ豐受皇太神トノ名義難_レ解事也又內宮ヲ太伯ノ御廟トノ事本朝ノ神書ニ無_レ之増テ異國ノ書ニモ無_レ之三讓ト云額內宮ニ有タリト云說アレド今世モ能書ハ額ヲ書神前ヘ奉納ス此ノ三讓ノ額何タル人ノ所爲ヲ不_レ知此額御鎮座ノ始ヨリ有テ禰宜神主今ニ相傳ストモ此三讓ノ二字ニテ推テ太伯ノ御廟ト云ンモ相違之事也況ンヤ後人ノ所爲ヲヤ又日本ヲ異國ヨリ姬氏國ノ稱スルモ日本ハ周太伯ノ御末姬姓ナレバ云トノ說有レド異國ヨリハ兔モ謂ヘ角モ云ヘ本朝ニテハ昔モ太伯ノ御末トノ說ヲ禁制ト承ル如_レ此ノ說盛ニ行レバ日本モ異朝ニ可_レ傾故

ナルベシ殊更附會ノ兩部習合ヲバ嫌ナガラ似合タル說有トテ太伯ノ御廟トノ事モ習合ノ說ニ似タルベシ問曰太神宮ハ太伯ノ御廟ニテ無トノ事其ノ理有ト云ヘドモ瓊々杵尊ノ降臨モ日向ノ國ナリ處コソ多キニ今モ異國ノ船ノ著岸スル筑紫ヘ降臨ハ疑シク侍ル其上舊事紀ニ記ス供奉ノ諸神ニ船長梶取有モ海路ノ爲ナルベシ雲路ヲ降臨ニ何ノ儀アルベキ疑クハ海路ヲ歷テ異國ヨリ來臨カト覺ヘ侍ル 答曰瓊々杵尊筑紫日向ヘ降臨ハ猿田彥ノ教ニ依テ也人代ニモ都ヲ建ルニハ地ヲ相スル事有リ況ヤ猿田彥ノ訓ナレバ日向國ヨリ始リテ我國萬々歳マデ王家相續スベキ地ニテコソ有ツラメ又船長梶取有リトテ異國ヨリ來臨トモ難_レ申事也饒速日尊モ天ノ磐船ニ乗テ河内ノ國ニ天降給フ事有リ此等必シモ今世ノ海上ノ船トモ見エズ此船長梶取ハ下界ニテ海上ヲ渡リ給ハハ其時ノ備ノ爲トテ供奉セシ事モ有ベシ神代ノ事ナレバ古記文ノ儘ニ天上ヨリ降臨ト見テ可也若シ天上ニ比シテ別ニ指ス國有ラバ國常立尊ノ化生ノ國ナレバ豐葦原中國ノ内ヨリ其所可_レ有異國トハ見ベカラズ豐葦原中國ノ内ヨリ日向ノ國ヘ移リ給ヒテ神武天皇ニ至テ又大倭國ヘ

神宮祕傳問答

或問曰日本無雙ノ宗廟ノ御事ヲ卒爾ノ申事恐多ケレドモ外宮ハ后稷ノ御廟ナラン歟其故ハ内宮ハ大伯ノ御廟ト云傳有レバ大伯ノ自テ出給フ所ノ神ハ后稷也又外宮ヲ豐受太神宮ト申奉ルモ后稷ハ五穀ノ神ノ故ナルベシ舊事紀古事記日本紀其外ノ神書ニモ豐ハ豐饒ノ義字氣ト云ハ五穀ノ稱也其上御氣ト云モ食ノ事ト也然ルニ御氣津神ト申シ奉ルモ外宮ノ御事ニテ内宮ノ御氣モ外宮ニテ調備シテ毎日兩度外宮ノ御氣殿ニテ兩太神宮ヘ供進ス是等悉ク五穀ノ神ノ明徴也外宮ハ水德ノ神ナル故ニ御氣津神ト云水ハ御氣津ノ略語トノ神書ノ説モ疑ハシ又外宮ヲ宗廟社稷神ト申奉レバ彌后稷ノ御廟ナルベシ如何 答曰此ノ事ハ最極ノ神祕ニシテ書ニ顯ハシ難キ故代々ノ禰宜神主モ世間流布スベキ記ニハ豐受太神ハ水德ノ神也水ハ御氣津ノ略語ト記シタレド是ハ外宮ヲ保食神ニテ御座ト云輩有リ又丹州奈具社神豐字賀能賣命ヲ豐受太

神ニテ御座ト云人有レバ其難ヲ遁レン爲マデニ言テ最極ノ神祕ハ書ニ筆セヌ也去ドモ后稷ノ御廟トノ事猶以テ遁レ難キノ間其由ヲ云ベシ不信ノ輩ニハ必ズ口外スベカラズ豐受ト云ハ五穀豐饒ノ義勿論也御氣津ト云モ食ノ神ノ事也此ノ義ハ舊事紀古事記日本紀等ニ詳ナレバ水ハ御氣津ノ略語トハ本紀ノ説ナレドモ御氣津ノ御號ノ外ニ豐受ノ御名モ有リ又今ニ御氣殿ニテ毎日御氣供進スレバ水ハ御氣津ノ略語トモ難申是ハ神祕ヲ口外シ難キ故ノ異説ナルベシ抑モ外宮ハ天御中主神ニテ豐受太神ト申シ奉ル故ハ本紀ニ曰天地初發之時大海之中有ニ一物ニ浮形如ニ葦牙ニ其中神人化生名號ニ天御中主神故號ニ豐葦原中國又因以曰ニ豐受皇太神也云々大海之中ニ有ニ一物トハ水ヨリ始ル事ヲ云大虛之中ト云ガ如シ如ニ葦牙ト云ヘバトテ葦牙ニハ非ズ如ノ字ヲ能ク味テ喻ナル事ヲ知ルベシ如ニ葦牙トハ此ノ國ツヒニ瑞穗國ト成タル一氣ヲ後代ヨリ推源云タル也葦ハ水草ニテ繁榮スル物ナレバ行末五穀出生シテ瑞穗國ト成ベキ一氣ノ始ヲ喻テ云ヘリ豐葦原瑞穗國ト云トテ蘆花ノ事ニハ非ズ五穀ノ瑞穗也其中ニ神人化生名號ニ天御中主神トハ天ノ

神宮祕傳問答序

古人曰苟非其人、道不虛行、焉神道亦然不識得神道、而豈其行神道乎、夫仰觀之俯察之、自及清陽、薄靡重濁、淹滯已來、雷一發而蟄蟲振霜一降而天地肅八區四隅無不與神之動靜氣之運用、實其玄微道體不次妙機、誰其識得之乎、一日醫生片岡氏某參余明窓、懷神書兩局來欲鏤于梓、以閤淨几、余忽爾豐漱而後攤讀之、則神宮祕傳問答同續祕傳問答之書也、可謂夜光明月之珠也、爲此書也、剗子纔而如泉之一滴、如雲之膚寸、雨于天下、洽於六合、何其不可乎、有高明之人出於此世、則得之心而行之身、然則夫神道赫微而無涯際、必矣、雖漢倭懸隔冠帶異風、神道兼儒風、何其差別之乎、余雖爲攝津之老儒、遐傳授伊勢之神風、故爲之序、茲嘉獎附夫醫生之手云爾

元祿十一年戊寅夏五月梅雨降日

北水浪士惟中

同日如_二告知_一者今日可_レ爲_二祭禮_一之處官幣使無_二下

着_一
十一日 晴交替予番文二三予六八九

廿一日 晴交替予番文二三_{○以下}
_{缺文}

寛文八_{戊申}年十二月十五日書寫校合畢

廿六日 晴潤月番帳權任加奉彼廻文云

享徳元年

此間原本凡九行缺文

潤八月

一日 晴交替予左右板彌傾下^{○此間}予七御内ニ參拜

見ス覆板自^レ棟^ニ尺計サガル番文三予六七八九十加

判上番權任以下裁^ニ番文^ニ

十一日 晴交替予番文一三予六八九十加判予之許

自^ニ昨日^ニ犬穢予ハ折節他所^ニ居仍カ、ラス番文ニ中

番衆載^レ之

十七日 晴大橋朽損之間僧賢正并最祥法師等十方ヲ

令^ニ勸進^ニ可^ニ再興^ニ之山中仍被^レ成^ニ廳宣^ニ加判十人

廿一日 晴予之宿所自^ニ昨日^ニ犬產穢仍不參

九月

一日 晴交替予番文三予六八九十加判二神違例仍不

參

二日 雨造替遷宮遲引事注進解狀ヘ加署十人田宮寺

定使武泉代官方ヨリ殺害事ニ國方ヘ被^レ成^ニ解狀^ニ加

署十人

九日 晴菊花御饌ニ三予六八九十參如^レ常□□雨

予夕參例幣可^レ爲^ニ式日^ニ之由三日祭主下知今日

此間原本凡十一行缺文

十八日 晴宮比矢乃籌神事其後荒祭々禮二三予六八

十九日 晴瀧祭神事三予六八九十參月讀宮神事九參

自^ニ長官^ニ

廿日 夕雨小朝熊宮祭禮予ハ父遠閑日仍自^ニ昨日^ニ退

出雖^レ然饗膳送預^ニ役所別儀芳志^ニ歟無^ニ三膳饗^ニ

廿一日 晴潔齋不參祈訴請文加署

廿二日 晴瀧原并宮祭禮予參六神主去年於^ニ五座瀧

原ニ參彼任本衆巡番七ケ御園自^ニ國方^ニ依^ニ違亂^ニ野原

ヨリ幣使米不^レ進如^レ此時ハ自^ニ長官^ニ雖^レ有^ニ三下行^ニ無^ニ

其儀^ニ仍以^ニ私力^ニ參勤人夫白野副參替夫同^{ヨリ}參神

事如^レ常下向楠マテハ昨日人夫自^ニ是打見郷人夫參進

參□マテ追付參晝飯落着等下行餉河原饗□

廿四日 晴例幣可^レ爲^ニ廿六日^ニ之由下知等廻覽

廿五日 晴伊雜宮祭禮六參

同日風日祈宮祭禮二予八九十有^レ饗三神主分送^ニ進

里^ニ別儀歟

十月

一日 晴交替予番文三予六九十加判御綿預

此間原本凡八行缺文

神宮二子六八九十東寶殿傾危間□□□□□□マテニ
テ荷前御調ヲ外幣殿ニ納勸盃御遊八十參神事如レ常
幣馬六拜

十八日 晴宮比矢乃籌神事次荒祭宮神事二子六七八
九十從

十九日 晴瀧祭神事予六八九十參

同日雨月讀伊佐奈岐宮神事予一人參自長官自道大
雨神事如レ常彼宮新拜所饗今日始而沙汰サイ八種汁
酒三獻任心ケツコウス

廿日 小朝熊宮神事二三子六八九十從祝權長等不參

此間原本一行缺文

間彼役ヲ出納二人勤之酒肴無沙汰

廿一日 晴交替予番文二三子六七八九十加判

廿二日 雨瀧原祭禮十參十八新衆九ハ去々年於二十
座伊雜ニ參去年六月ハ爲七座九十禰宜依ニ未補

自長官代官ヲ被進九神主去々年伊雜宮被參任ニ彼
本衆巡番可參伊雜ニ之間新衆十神主瀧原ヘ參迎人
夫田口ヨリ來替夫不來之間質ヲ取之處當時七ヶ御
蘭自國方ニ進退武家ノ掟ヲハ不被□□不レ可レ用ト

テ追カケ取返之

廿五日 晴伊雜宮祭禮

此間原本凡八行缺文

十一日 晴交替予番文

廿一日 雨交替予番文二三子六八加判

八月

一日 雨風政所師昌子之館ニ來雨風烈無廳舍可
有_レ神事如何哉之由伺先年雨時於_ニ殿_一被_レ行_レ之
於_ニ子今_一ハ一殿_モナシ但長官ノ御館有_ニ維南_一時者御
神事於_ニ御館_一被_レ行先例也可_レ爲_ニ其分_一由返答之處雨
風止畢仍於_ニ廳舍_一被_レ行交替物忌計參二子六加判時
分七參七八九十加判時分三神主參被_ニ加判_一御鹽湯神
事ハ鹽湯ニ不_レ合者不_レ從如_レ此祝事遲參ハ斟酌之法
也依_ニ本衆之請_一別無_ニ酒肴_一

三日 晴予申南職田事解狀之加署十人

氏榮申霜野御厨事同前

予申深田御蘭事牛庭御厨事 廳宣

兩通九人被_ニ加判_一十神主ハ他行

十一日 晴交替六番文二三子六八九加判

廿一日 晴上ル雨交替予番文一二子六九十加判

八日 雨祈年祭可延引之由三日祭主下知今日
以下
缺文

十一日 雨交替予番文予六九加判

此間原本凡十一行缺文

物忌方之自役所可有之事歟

十一日 晴交替予番文二三予六

廿一日 晴交替予番文予六八九十

廿八日 山宮神事六經與參予御初進之

四月

一日 晴交替予番文三予六八九十加判

九日 晴氏神祭禮六參予之御初進之

十一日 雨交替予番文二予六八九十加判

十四日 御笠神事二予六八九十從

廿一日 交替予番文二三予六八九十加判

五月

一日 晴交替予番文予六八九十加判

五日 晴菖蒲御饌二予六七八九十參
三神主
遠隔日酒肴送之館

無隔子
机故也

十一日 雨交替予參如常番文二三六八九十加判予

之館ニ番文持參令ニ遅々一間番出納二臈號ニ文字屋相

尋之處令失念行政印一訖之由申仍不加判一出納ヲ
令ニ折檻其後出納予之許ニ來令ニ退望

此間原本凡十一行缺文

阿婆羅氣ヤ島ハ七島ト申セドモ毛無カラニハ八島ナ

リエイヤノ中刀禰ノ頭役

我君ノ御濱出ノ御座舟ノセ千代ト云鳥ノ舞アソブエ

イヤノ

我君ノ命ヲコハバサレ石ノ巖ト成テ苦ノ生マデエ

イヤノ

我君ノ御倉ノ山ニ鹽ノ満如富コソ入マセエイヤノ

各三度宛歌之當年無此儀

夕興玉神業二予六七八九十從御神拜申六月御祭今月

十五日ノ今ノ時ヲ以興玉ノ廣前ニ奉大宮御贊并地祭

ノ物忌ノ奉御神酒御贊ヲ奉狀ヲ平ク安ク知食テ禰宜

神主内外物忌色々ノ式衆供奉ノ人々神事供奉ヲ調仕

シメ給エト畏ミ申如レ此御巫申于レ時一同ニ兩端

次第如レ常御占神事同衆丙合次御巫權任ト申于レ時

召立行高次禰宜神主内外物忌色々ノ式衆并國々ヨリ

マイル郡口神戸御蘭御厨ノ御シンニウ御贊ノ不淨口

口口御占ニテ

饗膳送進所從分三膳送無^{不足}謂家子侍中間人數ヲ伺調遣例也田邊氏神社參着之處祝不參饗料持參之百姓ニ祭禮可^レ爲^ニ今日^一之由言付之旨雖預所申不^レ來之間預所從^ニ山神^ニ遣處祝不^ニ存知^一之間他行畢仍以^ニ便宜職掌^一行^ニ神事^一時分祝之自^ニ留守代官^一進雖^レ然早行畢傍官御初等祝取^ニ不^レ參之間無^ニ存知^一予之御初計持參以^レ之行物忌尙重弘家參尙重衣冠一薦之代ス走懸進氏神領百姓原平

此間原本凡十二行缺文

小朝熊宮神事三予六十從酒肴送^レ館服氣衆

十九日 晴瀧祭神事予六十參月讀伊佐奈岐宮神事六

參

廿一日 晴交替予番文一二三予六十加判

廿二日 晴瀧原祭禮巡番服氣仍自^ニ長官^一氏綱參

廿五日 晴風日祈宮祭禮二予六十參政所師昌詔刀兼

日^ニ用意氏仲神主^ニ預置之處置^ニ忘政所之許^一人遣者可^レ及^ニ深更^一便宜之公文^ヲ雖^ニ相尋^一無^ニ器用仁^一間

予於^ニ廳舍^一書^レ之行^ニ神事^一

同日伊雜宮祭禮巡番服氣間自^ニ長官^一氏綱^ヲ被^レ進是又詔刀同前氏綱俄奉書之行^ニ神事^一

廿六日 晴六經興外宮拜賀息男經房神主共奉同日御所樣御法樂御會百首自^ニ長官^一承予奉幣

此間原本凡十五行欠文

加判之後皆加判退出時分長官

六日 晴公方御祈事十二月十九日御教書同廿三日祭主下知卅日宮司告狀等廻覽則請文ニ加署

七日 晴新榮御膳二三予六八九十從

十一日 晴交替六番文三予六八九十加判

十五日 晴御竈木奉納神事二三予六八九十參無^ニ酒肴^一七神主服氣間木^ヲ不^レ削不^レ合奉納由貴殿ノ軒^ニ立置氏親神主犬穢之所^ニ居仍穢限以後奉納差出略之

水量三尺八寸予之許犬穢予他所^ニ居時分也仍^{以下}恐缺文

十八日 晴田宮寺行頭役一二三

廿一日 小雨交替予番文予六八九十加判

二月

一日 晴交替六番文二三四予六九十加判嶽山神事宮司神宮二三予六八九十從一薦不參仍神宮勸盃二薦參

宮司三薦參神事如^ニ例年^一

五日 晴祈年祭可^レ爲^ニ式日^一之由正月廿四日御教書

廿五日祭主狀□□

十一日 晴交替予番文予八加判神主ハ被ニ加灸

廿一日 晴交替予番文予八加判

廿八日 晴經興轉任守房替五月十日口宣同日官施行

六月十一日 祭主施行八月廿七日司奉行今日宮奉行加

判新禰宜經興五座加判則當宮拜賀氏久六ニ下守喜秀

守朝

九月

一日 交替予祈神主供奉番文予五六七八九加判

此間原本凡八行缺文

十六日

○此所缺文

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮神事無ニ酒肴ニ予

○此所缺文

十七日 晴神嘗祭例幣使有忠御共_{内氏綱}四姓宮司神

宮二子五九二神主手扶五參御衣櫃達之東寶殿依傾危

之間錦綾_モ奉_レ納_ニ西寶殿_ニ予參又先度

錦

綾自_ニ外幣殿_ニ奉_レ渡五反在三端令_ニ紛失_ニ歟不審勸盃

予五九御遊同前

十八日 荒祭宮神事宮比矢乃籌神事二子五九參

十九日 晴瀧祭神事二子五九參月讀伊佐奈岐宮神事

五參今一人末座可_レ被_レ參事也五ハ自_ニ長官_ニ參予ハ明

日父之遠忌日仍退出

廿日 晴小朝熊宮神事饗予料送預_ニ別段芳志_ニ也

廿一日 晴不參沐浴遲々

廿五日 伊雜宮祭禮六巡番服氣之間自_ニ長官_ニ仲氏

被_レ進

同日風日祈宮祭禮予五九從酒肴延引

十月

一日 晴交替二番文二子五八九加判御綿奉納五參予

分預

二日 雨氏興替滿元九月五日宣旨同日官狀八日祭主

施行今月一日宮司

加判件事既被_ニ宣下_ニ

此間凡十一行缺文

十一日 晴夕雨交替六番文二三子六十加判神業神事

六

十二日 晴神業六參

十八日 晴田宮寺行無_ニ二月行_ニ之間今度二四子六七

勤頭

十九日 晴光用廳宣加判兩門氏寺領事野篠郷給主五

ヶ所方へ被_レ成_ニ廳宣_ニ加判

廿一日 交替六番文二子六九加判

廿五日 晴氏神々業予參預所三艸尙重共ス乘馬上下

例一身田ヲ被ニ施行ニ云々

廿一日 晴交替三番文二子予六加判

卅日 晴一氏興逝去經見執印 予五故障

此間原本十五行缺文

禰宜ト計書未補ハ禰宜ト計可レ書忌時神主字計可レ略之歟不審

十五日 賀海神事二神主永昌經俊正秀守成永家氏倍

經房三代泰春泰俊忌服未補等代八人自ニ長官一同夕興

玉神事御占神事二參

十六日 晴御巫竈祓一二勤レ之河原祓二御稻檢知二

同神拜

十七日 五位貞重文安六年七月廿五日口宣同九月三

日祭主施行寶德二年二月廿四日司奉行今日宮奉行加

判

○此間缺文歟

十六日 夜御饌神事等二參

十七日 月次祭幣使有忠御共

內奏言外山崎宮

司氏長神宮二

東寶殿傾危之間無ニ參昇ニ送文計讀進於ニ荷前御調者

外幣殿ニ被レ納勸益幣使宮司兩所二神主一人勤レ之御

遊同前幣馬二預自ニ幣使一人當祭被レ從ニ諸神事之

條神宮由二神主許ニ在ニ御使二神主於ニ大庭ニ御禮被

申レ之

十八日 晴宮比矢乃籌神事荒祭神事等二被レ參

十九日 晴瀧祭宮神事月讀宮伊佐奈岐宮神事二神主

參勤

廿日 晴小朝熊宮神事二參在ニ酒予不レ預今朝館ニ不

レ參故歟

廿一日 交替一番文一二子加判

廿二日 晴瀧原

此間原本十二行缺文

一日 交替二番文二

四日 晴柏流神事二參予館雖ニ不參ニ苾饗送里難掌家

司弘家別儀芳志哉但自余皆如レ此也

十一日 晴交替二子不參

十六日晴 守朝轉任事五月□□□□□□□□同廿七日

官狀六月廿九日祭主施行今月十四日宮司施

今日宮奉行守朝八座加

判

廿一日 雨予頭風氣仍不參

八月

一日 晴番文廳舍之儀如ニ例年一二子ハ於ニ館加判二

八廳舍六七神主ハ番文以後ハ被レ參レ館

三日 晴三子六參在酒肴^{大泉}石橋酒肴雖令□□□

□□無例之由返答玉串內物忘方在酒肴^{一役}別役□□

五日 晴祈年祭幣使正四位下秀忠御手水役守成御共
內宮定久 宮司氏長神宮三子六幣馬七神主巡番遲々一時

余相待神事如恒但一殿儀式略之舊冬月次祭^テ被

行同衆也一殿酒肴勸盃幣使予宮司六神事如恒幣馬

八神主給件神事任一次第一先可被行月次^一歟之由

於外宮被相尋之處月次被付行之間先爲祈年

祭之由間先祈年次月次仍當宮^モ如此

十一日 晴交替予番文一三子六加判舊冬月次祭御饌

マテハ被行畢相殘神事等今日被行三子參六□□

□月讀伊佐奈岐宮參先宮比矢乃籌神事次荒□□宮神

事次瀧祭神事次月讀神事次小朝熊宮神事催促權長彼

宮祝兼日雖被相觸不參仍木綿麻等役出納勤之勸

盃出納之一薦酌由貴殿出納二薦依爲當番月讀宮

參月讀宮祭禮ニハ每度由貴殿出納御鎧^ヲ持參先例

也雖^レ然當祭平奉納御鎧不^レ入之間略仍就便宜當番

二薦參次風日祈宮祭禮在御火祇承放家當祭役黑崎

□□□□可有催促之由也

十四日 晴五位行峯寶德二年十一月廿六日口宣同三

年二月廿一日祭主施行今月九日司奉行^{以下}

廿一日 晴交替予番文子六加判

廿七日 晴五位守時寶德二年^{此間}祭主施行三月廿

一〇以下
缺文

廿八日 晴五位泰延寶德二年^{此間}施行同三年^{以下}

廿九日 晴山宮木^{此間原本}在^{四行缺文}饗予之御初兼日祝

□□

四月

三日 晴氏神饗心見官首長官進飯一鉢鯛一懸二

瓶雖未進任料御饗可沙汰之由被仰出仍沙

汰之然者可爲預所職者也

四日 晴氏神祭禮^初中三神主被參三雖被去年參巡

番子并六神主犬穢依之也

十一日 晴交替予番文二子六加判御祓水保神主享

十四日 晴御笠神事予一人參

十九日 晴八王子黃葉遊子參衣冠不食魚鳥出納

三人荷用八人皆參馬自長官用意世木通自北宮御

前在下馬百文下行御初也自長官在饗清進菜八

種汁一清酒三獻出納荷用等皆預饗白酒巫舞三番檢

知下向件祭二月八月也鄉料所依役人之訴訟延引任

廿一日 雨交替十番文子十加判

廿三日 晴一守房逝去永清執印依ニ究老ニ四神主正陳ヲ給宮中ニ被レ遂

廿四日 晴一永清逝去氏與執印則被レ參ニ宮中ニ子之館ニ被ニ祇候ニ前宮家司弘成御竈持參渡申之當家司兼親請ニ取之ニ奉ニ安置ニ

廿九日 晴先内々神拜長官子六衣冠家子氏綱布衣公文所行高布衣其外皆下姿南御門ヨリ參_{内々間無ニ}自_{御湯}西退出遙拜等如レ恒歸立在ニ一獻ニ

寶德三年_{辛未}正月番文番兼親長官先於レ館被ニ加

判ニ

一日 小雨三子六參宮司者依ニ禁忌ニ不參神事如レ恒在_レ饗料所未_ニ所納ニ其近代雖_レ爲_ニ酒肴_ニ再興之館祝長官衣冠子良館代_ニ子良等參_ニ御館_ニ無_ニ外宮參_ニ里宿ニ被_レ出吉書等如_レ恒政所師昌

三日 卯杖神事物忌等參

七日 晴新菜御饌神事三子六參服新菜無_ニ通路間不_レ進

十一日 晴夕雨交替三番文一三子六加判宮司參六對面

十三日 大雨雪由貴殿出納水量木_{ハイ}今日奉_ニ探爲_ニ定例_ニ之處深雪間不_レ叶之由申之如何様_ニ廻_ニ思慮_ニ可_レ奉_レ探由下知食百口

十五日 晴御竈木奉納神事三子六參在_ニ酒肴再興_ニ無_レ粥失念口水量四尺九寸五分未補七八忌御竈木不_レ獻_レ之

廿一日 晴交替三番文一三子六加判

二月

一日 晴交替三番文一二三子六加判司對面六番禰宜流究老也鍛山神事宮司三子六在_ニ酒肴_ニ神事如_レ恒

九日 雨祈年祭延引事五日祭主狀今日宮司狀廻覽去年口口祭祈年ニ可_レ被_ニ付行_ニ之由在同_レ之

十一日 晴交替三番文三子六正殿葺萱頽落則_{○以下}同日神業神事六參_{缺文}

十二日 同神事六參

廿一日 晴交替予東寶殿傾寶以外也口口口口口口口口間可_ニ顛倒_ニ之條決定之由大物忌申問此旨口口口口口方_ニ被_レ觸扶木ヲ以可_ニ修理_ニ之由返事口

三月

一日 晴交替三番文一三子六七八加判祈年

役前
田殿
一日 晴交替予番文五予九十加判酒肴近年無沙汰津雲

十一日 晴予之許依_レ爲_二御祓之會所_一不參

十四日 晴新糴米二斗五升沙汰當百姓病死仍減云々

五位八人分沙汰自余_ハ不_レ進云々小河方_{ヨリ}相傳六斗分四斗沙汰

十一日 晴交替予番文五予十加判

廿四日 盜人六郎之沒收地彌六郎買得事廳宣加判廿一日日付也

十一月

一日 晴 交替五番文予十五神主_ハ交替依_二遲々_一退出

十一日 晴交替予番文予_ハ神拜計出畢

廿一日 晴交替五番文五予十

十二月

一日 晴交替五番文五予九十加判

十一日 晴交替三番文五予十加判

十五日 晴興玉神事予八九十從御占神事前召立行

高

十六日 晴御巫竈祓次河原御祓五予八九十御稻奉下

神拜同衆

同夜御饌予_ハ頭風氣仍不參十一人參歟

十七日 晴官幣使下着昨日者北畠殿御陣依_レ不_レ被_レ通由色々有_二御問答_一今日御通抑今度御陣者依_レ致_二緩怠_一去月廿九日原小神野篠荊田邊被_レ燒今月三日上

洛中例懸橋邊_ヲ被_二燒拂_一七日小俣_ヲ被_二燒拂_一而山田

合力間山田_ヲ可_レ有_二沙汰_一殘三千鄉濱邊爲_レ可_レ有_二沙汰_一御在陣仍如_レ件

然禰宜等通_二陣中_一依_レ爲_二觸穢_一不_レ可_レ有_二祭禮_一之由

自_二神宮_一被_レ申_レ之難人參宮中番禰宜祇御饌朝夕供進

之上者何限_二祭禮_一而可_レ被_二押止_一之由雖_レ被_レ仰猶不

可_レ叶_レ之由被_レ申然者可_レ爲_二七日穢_一歟有_二逗留_一而

可_レ被_レ遂_二行神事_一之由被_レ仰其_モ不_レ可_レ叶_レ之由無_レ謂

被_レ申之仍當宮_ニ御使_ヲ被_レ立永英外宮者如_レ此當宮祭

禮可_レ爲_二如何樣_一哉由被_レ尋雖_レ有_二觸穢之疑_一外宮朝

夕御饌被_二備進_一之由承之間次第神事_ヲ遂行去夜由貴

御饌_{マテ}供進畢外宮不同之沙汰不_レ得_二其意_一雖_レ然外

宮_ニ先立事無_レ例之間可_レ延引_レ之由被_レ申仍官幣_ヲ外

宮_ハ被_レ預上洛仍當宮_モ退出了

十八日 晴私御膳惣祭禮_ニ不_レ可_レ准所謂爲_二私御饌_一

之間供_二進之_一十參

論座確執猥雜希代新儀猥藉也仍弘盛予之許禮來依弘憲出手非弘盛之緩怠之由申之番文予十加判

同夕一殿顛倒柱四本椽壁板等大略難入盜取之間相殘柱以下長官運送

九日 自巳尅雨菊花御饌五予九十參

十一日 晴予夕參

十四日 拔穗神事十參

十五日 晴興玉神事予依咳病不參雖然奉獻之

御占神事等如常八神主昨日外祖母逝去仍御贊

以下被納長官

十六日 晴御巫祓如例河原御祓予不參獻奉物御

稻奉下同前御贊七百御機食三百送子良館

例幣延引由十日御教書次第施行又十四日可被發

遣之由十二日御教書以下廻覽予之點稻進道全檢撲

同夜御饌予不參預直會

十七日 晴神宮神事如常一五予九十昇殿東寶殿予

參荷前御調糸奉納七八日之大風傾危以外也輕命

參者也九神主參錦綾之櫃表葺相殘方奉昇寄勸

盃御遊十參

十八日 晴荒祭宮祭禮宮比矢乃等神事等如常予九十參

同夜例幣五予九十從東寶殿予參西寶殿九參勸盃予

九十參神事如常幣馬預一件神事前々日數雖相

違十七日令下着可行一夜然者本宮神事可爲式

日之由就被仰下昨日御下着神宮此旨被相

觸之處遠所之予人等俄難參之由被申外宮神事無

之仍今夜被行之

十九日 晴瀧祭祭禮予九十參月讀伊佐奈岐宮祭禮十

參

廿日 晴小朝熊祭禮予今日父遠關日仍退出牛喰饗

予之分送館役所別儀歟每年如此

廿一日 晴予依潔齋沐浴遲々不參昨日饗膳召寄

祝之

廿二日 晴瀧原祭禮六代經元參

廿五日 晴伊雜宮祭禮五代正秀參

同日 風日祈宮祭禮九十參祝承弘安酒肴送館

廿八日 晴東寶殿忌火屋殿一殿伊雜宮等事注進解狀

如署

十月

四日歸着

廿五日 晴伊雜宮祭禮十代泰春參

同日風日祈宮祭禮五子九十從饗送進館服氣方不進不審

晦日 晴輪越神事時分大雨指笠五子九十八神主服於子之館被越權永保神主待清晨等同越皆出納一薦勤之

七月

一日 晴交替予番文五子九十加判

十一日 晴交替五番文五子九十加判

廿一日 雨子依難熱不參

廿八日 晴大物忌父尙重任宮奉行加判

八月

一日 晴五子九十於廳舍加判如常無酒看

三日 伊雜宮顛倒云々

八日 正殿盜人參歟之由職掌人等注進仍十神主物忌

等參拜見之處瑞籬板ヲ押破大床御金物等悉放取仍

糺明之處扇屋右衛門尉之子六郎男菖蒲男兄弟兩人逐

電畢件金賣手等捕之處六郎之妻女賣之由答彼女

召捕渡了六郎之家屋敷沒收檢斷今度彼跡得分在地三

分一刀禰三分一給之新儀也在地者假屋刀禰者在藁

屋時給之先例也或中門或妻戶在家者祭主殿之進退

道後方ヨリ計之下地者彼跡一段仁及者祭主殿進退不

足一段者神宮之計也是近代之儀也往古者雖不

足一段祭主進退外宮者當時毛如昔扇屋右衛門尉

者自兼六郎菖蒲等令勘當之間無相違歟

十一日 晴交替九番文子九十加判

廿一日 晴交替予番文子十加判盜人事注進解狀加署

廿三日 晴盜人六郎男於山田召捕之於宇治岡

邊誅頭如此者於神宮誅事新儀也自神宮渡道

後自道後渡守護誅之先例也但氏茂一禰宣代

盜人小法於神宮被誅畢神慮難測之由也

廿七日 雨夜大風自亥剋至卯剋東寶殿千木經木

覆左右板葺萱等吹落東方千木二枝殘瑞籬荒垣等悉顛

倒荒祭宮御垣同前宮中生木彼是百本計顛倒前九禰宜

館軒打破岩崎館打破九丈殿打破荒祭宮忌火屋敷打破

惣而禰宜權任職掌人等宿館悉吹破諸鄉迄隣國同前

人牛馬若干死云々

九月

一日 雨交替予於三廳舍前一宮守物忌父弘憲同弘盛

無實子令養子改姓讓遺跡仍被補考先例氏
助以經兼之孫民祖考申之間去嘉吉三年二月四日被
補之處非經兼之子異姓孫爲土民之由自神宮
被申祭主清忠卿之間依無其子細存知被申補
畢尤不可然可被略之由被仰下之間不被引
付之而去應永年中祭主通直卿兼春被申補畢件
兼春雖爲異姓者依爲兼時之養子甥也繼荒木
田姓叙爵畢經兼依無實子養氏助令繼遺跡
上者云理運云先例何不被免之由就懇訴被
免文安二年九月日被引付之畢於末代此可有
准據歟縱雖號養子或有實子之者自幼少之時
被養不繼家者不可被用此儀之由被定置者
也 有榮叙爵事以兼春氏助等之例祭主宗直卿被
申補有與依無實子有榮之自產屋之內養令
繼遺跡孫也此等以度々例尙重補任

十五日 晴贊海神事予清泰五代季滿一代正秀二代守博
三代不被參詣 守成六代忌自 泰秀十代泰俊四代守雄八代服間白長官
氏卿九代鹿海海士鹽鯛六代小濱海士大鯛四艘安波
羅氣役人不參自余神歌神事等如三例年
同夕與玉宮神事予十參看二種清宮計進之無謂看三

種清宮後清酒一獻兩盃也精好之處役所未馴由申次
御占神事同衆參召立行高

十六日 晴月次祭使事五月廿六日御教書今月九日祭
主下知十四日宮司狀今日廻覽

御巫祓後河原御祓予九十御稻奉下予參次神拜等予
九十 御贊獻之半損分

同夜御饌告來之間參候處夜明了宵曉櫻宮瀧祭宮神
事等如例

十七日 晴尙重尙常替大物忌職望申解狀加判同夜月
次祭幣使昌忠御共外宮口久宮司神宮予九十參寶殿子
參勸益御遊九十參神事如常幣馬八預

同夜西寶殿千木鏗木覆左右板天氣長閑落地上瑞
籬板數一枚打破畢神事退出畢時分也

十八日 晴荒祭宮祭禮宮比矢乃籌神事予九十參

十九日 瀧祭宮祭禮五子九十參
月讀伊佐祭岐宮祭禮十參小朝熊宮祭禮五子九十參

無酒看如何

十一日 晴交替予番文五子十加判四神主番文雖相
待出納不持參無謂西寶殿事注進加署公武兩通

廿二日 雨瀧原並宮祭禮九神主代仲氏參下向大水廿

之由返答常秀一禰宣代ニ一度實久代ニ一度神宮ニ被
渡其例ヲ引被レ申其例以ニ別儀ニ被レ遣之由返答既前
祭主宗直卿代文安五年六月廿三日同六年五月三日一
社奉幣終無ニ其沙汰ニ由雖レ被レ仰是非ニ不レ給者神事
可レ略之由被レ申之然者內宮計可レ被レ行之由被レ仰雖
然天下御祈禱處依ニ神宮新儀申一其儀不可レ然之間
被レ遣馬又御劍ヲ可レ給之由被レ申此等段自ニ京都ニ可
被レ仰之由被レ仰如此問答等依ニ繁多ニ神事遲々內宮
者此儀雖レ不レ被レ申被レ遣馬畢

四月

一日 晴交替五番文四五予九十加判
二日 雨當宮工等召符去月廿八日奉書頭人開闔廿九
日祭主下知
十日 雨氏神事神事五神被レ參新預所尙重御食備進
十一日 晴予之許御祓會所仍夕神拜
十六日 晴三月廿七日祈謝宣旨今月七日祭主下知十
五日宮司狀廻覽則請文ニ加判
廿一日 雨交替予番文五予十加判

五月

一日晴 交替五番文五予九十加判

當年諸國口病倍增於ニ當所ニ者未雖ニ無ニ其儀ニ且爲ニ天
下祈ニ且爲ニ所於ニ一殿ニ一萬度御祓勤仕予之此行五予
九十權任俊尙直垂季滿同永保布衣公文所物忌不レ勤之
予之以ニ所從ニ自ニ近所館ニ疊ヲ借令ニ敷之權任少々先
予之館ニ來臨仍館守進レ酒被爲羽館齋進酒一殿爾ニ
同前

三日 晴當宮參籠順者於ニ山田ニ相留事公方ニ可レ被
申之由館守等雖ニ度々申ニ不レ被レ成仍上ニ目安之間
被レ成ニ解狀ニ畢加署

同日 天下病事祈事去月廿六日御教書廿七日祭主狀
今日宮司狀廻覽則請文加署

五日 大雨菖蒲御饌予九十參在ニ酒肴ニ
十一日 晴交替五番文五予九十加判
廿一日 晴交替十番文五予十加判

六月

一日 晴交替予番文四五予九十加判
十一日 晴交替十番文予八十加判
十四日 晴尙重之五位寶德二年四月六日 宣旨五月
三日祭主施行六月十二日宮司施行十三日宮奉行今日
加判件尙重叙爵事雖レ爲ニ異姓者ニ前大物忌父尙常依

宮司告狀廻覽 件祭主職事爲公武御沙汰宣下以前

四日參神祇官神事五日給官符

宣旨幣使秀忠朝臣下向之處祭主出於安濃津被施

行之云々

九日 祈年祭幣使從四位上秀忠御共內宮恒元外宮雅主御手水

役守博泰後御鹽湯役人膝衝可給之由申惣官直御下

向御拜賀之時可有下行之由被仰仍參布一端敷役

人一貫可給由申無謂宮司氏長神宮子九參神事

如例幣馬預予十神主加灸

十一日 晴交替五番文五子九加判地下靜謐爲祈禱

今日於一殿一万度御祓勤仕之五子九衣冠權任季

滿神主直垂物忌皆布衣皆疊敷

同日神業神事九參予饗初十

十二日 同神事九從

十六日 晴握御馬公家江可有注進之由以頭人一

被仰下旨十三日祭主下知之間宮司狀等廻覽則注進

之解狀加署

十七日 晴田宮寺明日行物取役人來頭文加判予小頭

廿文權任十文宛遣之正月同前

廿一日 晴交替五番文五子加判

三月

一日 自日中雨降交替予北御門御鑲未被拵之

興里申之於二鳥居九神主行合此旨申弘家神主

申付處于今無沙汰無謂重堅可申付以他御鑲可

奉差堅之由九神主返答番文五子九加判

三日 晴桃花御饌予九參在酒肴一物忌方同前

十一日 雨子遲參番久政印以後仍不判

廿一日 晴交替五番文五子十加判

同日 伊勢一社奉幣來廿三日可被發遣由今月十

日御教書十四日祭主下知廿日宮司狀

廿六日 晴山宮木目神事子參物忌宮守忠利冠祭祭鎮時

忠直垂六八神主依服氣御初不被進二三四五子御初

獻之神事如例祭中谷子歸參田宮寺參外宮神拜

廿七日 晴正信五位文安六年七月廿五日宣旨同九月

三日祭主施行寶德二年二月二日司奉行同廿一日宮

奉行加判

廿八日 雨一社奉幣使昌忠御共內泰後外口久御手水配膳祝

承史姓泰神宮子十從甚雨之間錦綾被預子良館神

事畢時分夜明了於外宮當祭幣馬御劔神宮不被

渡者神事不可行被申舊例引祭主爲得分

摘進_二處無_三其儀_二物忌無沙汰不信之儀也

十一日 晴自_二日中_一番交替五番文四五子九十加判

十五日 晴御竈薪奉納神事告_三三度_二來之間予九十參

於_三應舍_二數剋雖_一相待_二自參不_一被_レ參之間余入_二石壺_一

_二着座後五神主被_レ參告_三兩度之不_二來仍遲參云々不_一

_レ合_二御鹽湯_一而被_二從事_一新儀也殊更祝詞讀進之八神

主服氣御薪由貴殿軒_二立_一置之_二不_一削水量五尺

廿一日 晴交替五番文五子十加判

廿六日 晴荒祭宮御筥料所部田御厨事當十禰宜難掌

就_三久次之申狀_二被_レ成_一應宣_二加判

廿七日 晴宇治山田確執事開_二通路_一可_二和睦_一之由上

使前祭主清忠卿當祭主依_二違例_一代舍弟房直朝臣今日

山田下着廿八日兩殿以_二使者_一使節奉行有_二下着_一可

_レ令_二和睦_一其間可_レ止_二弓箭_一之由可_レ被_二下知_一之間相_二

副奉書_二被_レ觸_一送長官_二仍被_二下知_一之廿九日兩殿御參

宮前惣官衣冠予之許_二奉_一入_二三四六十神主祠官數輩

皆捶持參_二新殿_一直垂西米野亭奉_レ入_二八九神主祠官數

輩被_レ參云々九神主_二瓶持參云々

祈年祭可_レ爲_二式日_一由去月廿一日御教書廿五日祭主

下知今日宮司狀廻覽

二月

一日 晴交替五番文一五子八九十加判鍬山神事宮司

參_二神宮_一一五子九十參在_二酒肴_一次第如_二例同上使奉

行兩人山田下着飯尾備中守殿布施民部丞殿

五日 晴奉行兩人前惣官新殿御故障_{日他界}目代鉢

秋神主長官館_二來臨和睦事被_レ仰_一一神主老體仍九神

主對面則地下_二被_レ相觸_一之處可_レ隨_二仰之由捧_一請文_二

上使或廿七日或一日雖_二有_一下着_二山田輩依_一兔角申_二

令_二遲々_一雖_二然開_一通路_二可_レ令_二和睦_一之由御成敗之間

申事不_レ被_レ用仍

七日 晴於_二外宮_一一鳥居_二和睦前惣官衣冠兩奉行上下內

九神主衣冠外八十神主衣冠當所長三人_{日他界}屬屋衛門尉藤兵皆

白帳_二着山田長三人皆上下着自_一當所_二兩奉行_一五百

疋宛折紙進_二之祭主蒙_一御禮_二追而可_一申由也五日於_二

長官館_二上使_一被_レ獻_二一獻_一太刀一宛被_レ進_二之三方七

日和睦以後則上使四方同時上洛畢

同日北御門御鑲放執仍先古鑲_二被_レ納置_一者也

八日 晴祭主職清忠卿補任五日宣下七日祭主施行廻

覽則請文_二加署

九日 晴祭主職事并祈年祭可_レ爲_二式日_一之由事相副

之告知乎

十八日 晴栗野但馬經考神主檜垣大藏丞眞神主長官

被參自管領様御神馬御太刀去月被進之處號

無通路山田留置之間罷下開通路御馬内宮

可引進之由祭主方被仰出權少輔殿御下向後使

之由申被渡御馬御太刀管領様御書云

件御馬御太刀依地下憤歎小岐洲方留置某久爲御

祈禱師依何事有御改替蘭田方可被仰付之

由愁申處更非改替之儀内宮御師職事始而被憑仰

付旨被仰云當長官子息守喜守秀神主兩人當管領

島出處以前御當職之時彼以御執奏令轉任一仍朝夕

致御祈禱之由被聞食如此被仰付了

同日官幣者未被進之由也仍今日神宮神事行之束

帶清衣木綿等如常取榊山向御鹽湯等參宮司不參間

彼榊玉串進之予九十五串代物忌弘家勤之物忌等參朝廷奉

祈荒祭遙拜等如常次宮比矢乃等神事其後荒祭宮祭

禮等如常衣冠予九十參

同夜私御饌十參預直會一件御饌米下部不參間自長

官取替沙汰開通路者定可進歟

十九日 晴瀧祭宮祭禮五予十參

同日月讀伊佐奈岐宮祭禮十參

廿日 少雨小朝熊宮祭禮予十參酒肴送館

廿一日 晴交替五番文四五予十加判

廿二日 晴瀧原井宮祭禮雖爲巡番八服氣之間自

長官代官可被進之處依無通路略之幣使米

長官得分

廿五日 晴伊雜宮祭禮予代氏綱參如例

同日風祈宮祭禮五予九十從

卅日 雨月次祭可爲來廿六日之山廿二日御教書

廿五日祭主下知廿九日宮司告狀等今日廻覽

寶德二年庚午正月

一日 天晴五予九十參宮司不參御饌遙拜等如常番

文一神主於彼館加判次於廳舍各加判次於一

殿白散無酒看大井田數年退轉此間八辨之云々次神拜次館祝長官

無對面八神主服氣於館雖被相待番文不被送

之間退出依無通路外宮參無之二日内宮參同前

同夜月次祭依月水婦兩人出一予不參五十參幣馬六

預

七日 晴若菜御饌五予九十參依通路事若菜不進

若菜御饌進又自佐八風自脇進之牧毛進歟役所不參者於當所清淨菜可

廿六日 變異御祈請文加署

十一月

一日 晴交替五番文五予九加判

十一日 晴予神拜計退出番文ニ不_レ合神態神事十參

十二日 晴神態神事十參

十五日 晴兩宮間塞ニ通路ニ不_レ可_レ然早々可_レ開之由

依ニ公方御成敗ニ十日祭主殿下知十四日宮司告狀廻覽
則地下ニ被ニ相觸ニ仍捧ニ地下請文ニ長官請文ニ相副宮
司ニ被_レ遣之

廿一日 晴交替十番文予十加判

十二月

一日 晴交替予番文五予九十加判

十一日 晴交替予番文五予九十加判

十三日 晴月次祭可_レ爲ニ式日ニ之由事今月二日御教

書五日祭主殿下知十一日宮司狀廻覽

同日宇治山田確執令_ニ和睦_ニ可_レ開ニ通路ニ之由被ニ仰
出ニ之旨去月廿九日祭主殿下知廻覽

十五日 晴興玉神態次御占神事召立行高予十參

十六日 晴御巫參竈祓勤仕之次河原御祓予九十參御
稻奉下予參次神拜等同衆共奉於ニ祓所邊ニ地下之年寄

等參爲ニ世上忍劇ニ御祈禱任ニ先規ニ於ニ河原ニ歟一殿

歟一同御祓御勤仕可_レ然歟之由申之此儀尤可_レ然當

祭禮中可_レ有ニ勤行ニ之旨内ニ被ニ定之處如_レ此勸申言

上神妙之由返答一二三_{老體}至極六_{中風}館仁毛_{不_レ被_レ參八服}

氣四五神主御館ニ以ニ出納ニ此由觸申四神主ハ老體

八十八歲參候難_レ叶之間於_レ館可_レ勤仕ニ之由返答仍五

予九十玉串物忌等參_ニ河原_ニ風烈之間於_ニ一殿_{鋪_レ疊勤}

仕之一萬度四神主六百度勤仕之由被_レ送_ニ一座_{揮_レ其}

外内人等少々勤仕在_レ之件御祓御祈禱長存號_ニ御禮_ニ

自_ニ地下_ニ百疋長官_ニ持參爲_ニ郷内惣別祈禱_ニ上者煩

依_レ不_レ可_レ然被_レ返_レ之

同夕御贊献之半損分

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮神事等如_レ例子九十從

十七日 晴昨日御祓禮分依_レ被_レ返令_レ用意酒肴ニ長

官御館ニ進仍五予八九十玉串參會地下年寄等榮進之

以_ニ此次_ニ宇治山田確執通路事解狀并地下請文等之文
章被_レ疑_ニ禪定整之加署_ニ

同夜月次祭可_レ爲ニ式日_ニ由先日有_ニ告知_ニ其上有直朝

臣今日山田御下着之由有_ニ其沙汰_ニ然者兩宮神事可_レ
爲_ニ同夜_ニ之間終夜雖_レ奉_レ待無_ニ參勤_ニ然者何無_ニ延引_ニ

里二居

廿日 雨小朝熊宮神事饗牛喰促予雖爲憚同役所以別儀予之館送之

廿一日 雨潔齋等依遲々不參昨日饗今日行之

廿二日 雨瀧原祭禮參勤五神主巡番件幣使米野原卿役雖被相待不進之間俄用意難叶不被參此旨長官不被申之條無沙汰儀也幣使米人夫等不參候時

者自長官被沙汰之巡番也禰宜令參勤於後日幣使米者一倍人夫者一人分二百宛定使令催促進

長官先例也件米廿四日持參五神主許納而間後日可被參歟之處人夫式日參候其上諸役人定式日神

事執行歟之間不可參之由也役人等事者自長官被下知者重可參勤人夫自長官雖可有沙汰

歟上不可被參之上者不能是非仍彼米三斗進長官件郷予爲鎮家之間定使申付取進之件米五神主

五升二合件幣使米遲參事可有紀明沙汰之件米五神主家用也二斗

廿五日 晴伊雜宮祭禮六代經貞參如例

同日風日祈宮祭禮四予九十參酒肴以下如例

十月

一日 晴交替五番文五予九十 御綿預

十一日 小雨交替九予之許爲御祓之會所仍未明令神拜退出

廿一日 晴月水婦出之間不參

廿七日 閏月番帳廻文上番自滿元迄全尙中番

自三行是迄全長下番自秦言迄經康末座略不審

閏十月

一日 雨交替五番文五予九十加判

十一日 晴交替五番文迄晝程雖相待番公文所不

參之由出納申之間退出其後尙常參云々宮司數剋相待

云々

廿一日 晴交替五番文予十加判閏月番廻文仁波下番

自參宮載之今日番仁波自定久注之

廿二日 晴變異御祈今月十四日御教書十五日祭主下

知廿日宮司狀今日廻覽

廿五日 晴武田殿參宮外宮ヨリ指南於一鳥居相

留當宮指南參事大法也而外宮ヨリ指南當人一人號

髓柄荷用破法可參云々當宮籠等留之仍令騷動之間

間自子良館宮守物忌父弘憲走出靜之處件弘憲麻績

ナ及傷ス仍乍兩人殺害畢依之山田ヨリ止通路

反弓矢

神宮予九十參^〇在寶德^{七月廿八日年}神事如^〇例但於^{錦綾者甚雨之間期}神嘗祭次^{子良館}被^{置勸盃皆}參

九月

一日 雨交替予番文予九十加判
荒祭宮巽方千木折御

九日 菊花御饌予八九十從詔刀予讀進一方御饌供進
之土敷迄小濕損之間拜見之處御板敷漏畢御座危不
少

十日 小雨就^〇外宮正殿動搖并同西寶殿千木折御事
祈謝御祈事去月廿八日宣旨今月三日祭主告知十日宮
司告狀等今日廻覽

十一日 雨交替予番文四予加判

同日伊雜神戶正領御贊當年不熟爲^〇申^〇損之百姓等數
輩烈參在^〇狀彼狀備

同日一四予八九十自^〇今日^〇參籠

十四日 雨拔穗神事十參

十五日 雨與玉神事時分天晴之間神事例所^〇二六館^〇
雖^〇不參^〇奉物^〇獻三神主守公儀不參之間不^〇獻四予

八九十參勤御占神事同前召立弘安

同日祈謝御祈請文^〇加署

十六日 雨御巫祓次河原御祓一予八九十從一殿於^〇
酒肴以後^〇手水者可^〇爲^〇家司役^〇之由初納申之於^〇紙
家司^〇進手水於^〇河用^〇之雨儀者爲^〇臨時^〇之間番出納
役之由下知仍出納勤^〇之惣而或者役人不^〇集或臨時皆
出納勤^〇之諸神事同前御稻奉下予參八九十從神拜同
前

御贊百姓等一同^〇參三分一外不^〇可^〇進不^〇然者檢見^〇
可^〇被^〇下之由申御贊損已無^〇謂之間不^〇可^〇有^〇其儀^〇
之由色々問答畢^〇由^〇損沙汰仍御饌三百五十宛獻^〇
之予同次^〇御機食三百御母良方^〇遣三神主^〇如^〇此
諸沙汰略^〇之御贊以下^〇長官^〇被^〇納了

同夜雨御饌宵曉^〇瀧祭櫻宮神事無^〇酒肴^〇予八九十從

十七日 例幣使清直御共^〇內宮定泰^〇外宮常^〇四姓宮司一予八九

十東寶殿予參祈年穀錦綾同奉納之送文行定讀進西寶

殿八參御鞍奉納勸盃御遊予九十參八神主老母依^〇達

例^〇退出

十八日 雨今日神事等予不參三神主內方違例依^〇火
急^〇退出同夜三神主妻女他界仍三八故障

十九日 雨神事等不參明日カク父遠隔日仍昨日ノマ、

十八日 晴月次祭幣使清直御共同前手水祀承弘憲參神宮予八九十參御火祀承同前玉串內人役同前東寶殿予參錦綾荷前御調等奉納送文行定讀進對面予八九十勸盃幣使予宮司八同衆御遊參四所役人昨日參之處延引之間令_レ逗留_レ勤_レ之但琴姓不參幣馬五神主預_レ之神事如_レ常

十九日 晴宮比矢乃帚神態次荒祭宮神事予八九十參廿日 小雨瀧祭神事予八九十參同日月讀伊佐岐伊佐美宮神事十參

小朝熊神事予九十參說權長等不參之間出納等件役_ヲ勤_口神司殿顛制之間於_二一殿_一行_レ之交替予番文四五予八九十_口等延引無_二余日時_一者同日阿摩多神事行_レ之時剋雖_レ令_二相違_一可_レ任_レ例同次第又御膳延引之時供進以後可_レ有同夜祭禮_モ右先例

廿二日 雨瀧原并宮祭禮十代泰春參勤大水_{口口口} 雨風日祈宮祭禮八九參於_二一殿_一行_レ之洪水之間役人等迄_二河端_一參饗膳等送_レ館進予_ハ依_二雜費_一雖_二不參_一迄_レ館參之間進之四五同館被_レ參之間進之同日伊雜宮祭禮九代仲氏參洪水之間朝熊越_二參仍亥上剋計_一着役人等御膳供進時分云々神事如_レ例但一瀨

被無_レ之歟

廿九日 雨輪越神事無_レ橋之間任_レ例於_二一鳥居前_一可_レ被_レ越之處俄祓所邊懸_レ橋於_二例所_一越_レ之五予八九十

七月

一日 晴交替五番文一五予九十加判四日 晴柏流神事予八九十詔刀予讀進在_二荒饗_一迄_レ館不_レ被_レ參衆_{マテ}皆被_レ送云々

十一日 晴交替五番文一五予九十加判廿一日 晴交替五番文五予九十加判

八月

一日 晴一神主於_レ館被_二加判_一五予八九十於_二應_一加判政所行定公文所番行高無_二酒肴_一十一日 晴予之宿四季祓可_レ爲_二會所_一之間自_レ宵參神拜計番文同前退出了

十九日 祈年穀奉幣之間可_レ被_二發遣_一之由去月廿八日御教書今月十一日祭主狀十七日宮司狀今日廻覽廿一日 大雨交替十番文予十加判

_{口口口} 晴祈年穀神事用道之處延引可_レ爲_二廿三日_一之由今月十七日御教書十九日祭主狀今日宮司狀一同下剋廻覽祈年穀祭幣使清直共_{内守奉}外_{口口}四姓宮司

守成三代自長官經貞四代氏卿九代

同夕興玉神事五予八九十次御占神事同前召立行高讀進

十六日 大雨洪水館土依水入御巫竈祓酉上剋次河原御祓於一殿行之次神拜予八九十忌火屋殿令破壊水入御竈崩之間御饌調備不叶仍今日無御稻奉下風日祈宮橋落畢

十七日 晴依昨日洪水御贊等不進之并御器長不參其上忌火屋殿令破壊雨水入御竈崩畢於御贊御器等者自長官雖可有取替沙汰依調備不叶今夜御饌無供進仍今日祭禮可延引之由以神宮奉行之折紙觸送司中返事如此

折紙の趣委細披露申候の處則御幣使へ其分御申候處御返事には月次祭就大水明夜まで延引不可然候間御談合候て今夜被執行候は目出度候御せんなどまいり候はでも御祭御入候例なく候哉無爲候今夜御事成候はい可然之由幣使より申され候又八社奉幣事者いかやうにも候へ今夜にて候は御心得あるべく尙々月次祭をも今夜被執行候は目出度候恐々謹言

六月十七日

內宮奉行御中御返報

司中奉行 文持判

同日御稻奉下九十參

夜八社奉幣依昨日一昨日大水官幣不奉越宮河一仍外宮神事等今夜被行之子剋計參向當宮於二鳥居任先例先可行月次之由衛士申之昨日御贊御器等不進其上忌火屋殿水入御竈崩之間今夜御膳調備何御饌以前可被行祭禮之由返答然者被急御膳可爲供進以後之由重申之依御膳延引祭禮延引常例也被行同夜事無例之由被返答猶色々邪申事雖幣也不被用者也仍八社奉幣計被行之史姓參幣使清直御共内定幸外□□手水爲祀承役之處山向勤之神宮予八九十御火予之館來祇承弘家自廳舍邊參玉串內人服氣也件役等弘家勤之依於錦綾者明日被期月次祭次子良館被預置者也自余神事如常對面勸盃八九十同御饌予者宿館歸着衣冠參八九十者衣冠之裝束ヲ召寄於櫻宮邊着之參瀧祭神事畢櫻宮神態之時分五神主被參自之亂從

自幣使色々依被仰八日被遂神事內宮同前諸役
入等或五里三里外居住或依不令清進合期於不
參者相語便宜之職掌被行之畢幣代新儀也幣使清直
宮司氏長神宮五子八參幣使勸孟子宮司八幣馬四預
十日 雨氏神祭禮八參予御初付進

十一日 晴予之宿所御祓會所被借仍不參

十二日 晴五位武元武次武正去月二日口宣四日祭主
施行十六日宮司施行今月二日宮奉行今日加判祭主施
行宮司施行三人一通也仍神宮同前

十七日 晴自二十四日可致地震御祈之由事十二
日御教書同日祭主下知十五日宮司狀今日廻覽則請文
加判

廿一日 雨交替番文迄晝程雖相待番奉行不參間
退出

廿六日 晴來廿七日可被發遣伊勢一社奉幣事十
九日御教書廿二日祭主狀廿四日宮司今日廻覽

五月

一日 晴交替番文一四五子八九十加判

三日 雨一社奉幣九參幣使清直云々予自家中依二月
水婦出不參

五日 晴高蒲御饌神事予八九十參予詔刀讀進

十一日 晴交替番文五子九十加判

廿一日 晴交替十番文五子十加判

六月

一日 天晴交替九番文一五子九十加判

十一日 晴交替九番文四五子九十加判

十三日 晴月次祭可爲式日之由五月廿日御教書

廿五日祭主下知今月八日宮司告狀等今日廻覽之

同日八社奉幣可被付行月次之由五月廿八日御教

書今月一日祭主下知同八日宮司告狀等同廻覽之

十五日 雨贊海神態依大水宇治岡仁輪松尾ヨリ黑

瀬中濱仁出鹽合橋南解繩神事於行乘舟解繩役所舟漕等可
自長官被參送仍參之神崎神事旁立等例所有祓島之屋形一獻

而搔鹽取御饌之贊雖鹽引依水深海松尋取之

甚雨之間於饗於松下社拜殿調備之仍彼迄拜殿

步行鹿海之海士進鹽鯛小濱海士進饗廿獻件魚依

海荒二昨日之魚進之間令損不被用者也歸參舟

中阿婆羅氣役人不參自余神歌如例自鹽合南乘馬

先立御饌自鹿海細越松尾通於宇治岡戊剋計

歸參參衆予八十權任永保二代正秀五代經元六代守博一代

十二日 晴神態神事十從

廿一日 晴交替予番文五予八十加判

三月

一日 晴交替五番文一五予九十加判

三日 晴桃花御饌予八十參予詔刀讀進在酒肴物忌

方同時

十一日 晴交替五番文四五予八九十加判

同日五位經康當年二月十三日口宣同廿一日祭主施行

今月二日宮司施行五月宮奉行加判件經康神宮引付

自宮司方以折紙長官申之間調次第被送之處

曾不申之由返答則應宣返答然間件折紙謀書也可

有糺明之由也

十四日 祈年穀奉幣來十四日可被發遣之由去月

廿七日御教書今月一日祭主狀十一日宮司狀今日廻覽

十五日 大雨風北御門御戶顛倒之由當番宮守物忌父

弘憲予之館注進予依當番則令注進長官畢其後同物

忌父弘憲來依然風御鑲打立吹拔顛倒之間拵直奉

御戶納之由申之神妙之由返答其後被相觸司中

以鑄鍛冶奉直云々

廿一日 晴交替十番文予八十加判

廿二日 晴祈年祭可爲廿二日之由今月十五日御

教書十七日祭主狀廿一日宮司狀今日廻覽

祭主狀追而書先度告知祈年穀事延引重而被成御

教書者可告知之由在之

廿七日 晴山宮神事五被參

同祈年祭如告知者雖可有今日無幣使下向雖

然此儀無告知不審々々

四月

一日 予者依無所從不參 五位經雄去月二日口

宣四日祭主施行十六日宮司施行廿九日宮奉行加今

日判

七日 晴祈年祭官幣使夜前下着神事可爲今日之

由及深更自司中觸送由自長官被觸之予者早

朝令經并參佛前又自家中二月水婦出畢條々於今

日者參勤不可叶之旨申之諸役人等被相觸之處

官幣日取延引之時者自京都被仰下此間就次第

下知存知其旨又有定日時者其段被不知知

用意事每度例也仍不遂潔齋而可參乎神事者可

爲三二ケ日以後由一同申之則此旨自長官宮司方

被觸送仍宮司幣使令申云々外宮又同前雖然

膳祇承於外宮者御手水役配膳重代俄之間於當宮者返其不及沙汰手水配膳等祇承之五位勤之畢大麻御鹽湯役人布一反下行之今日拜賀山口祭以前之間可爲未明之由有沙汰之間曉着裝束之處夜明後被參外宮御膳以御歟條々事多之間略之

文安六年巳正月

玉串以下皆參

一日 晴宮司神宮一五子八九十朝拜以後一神主退出於館被加判其後五子八九十於廳舍加判自余迄館不被參之間無判形次一殿勸盃五次第神事如例次神拜次館役如常但一神主着直垂對面是始歟次外宮參一子八九十權任正秀前道後政所永保神主代也經元守博守成守春氏綱氏卿公文所侍兼親行定行高貞兼尙常弘案等供奉歸立之饗長官者高坏傍官者公卿臺權任者半臺也當年傍官半臺是始也自余神事等如例

三日 月次祭廿九日可爲進發卅日之由去月廿八日祭主狀昨日二日宮司告狀今日廻覽

四日 晴去月月次祭延引今日被行之件神事昨日三日被告知之條事聊爾之間予者不參八十從幣馬預三神主

同日御所樣并大方殿依御重厄當年中可致御祈

禮旨去年十二月廿五日御教書同廿九日祭主下知今日宮司告狀等廻覽祭主宮司狀年中每月可進御祇之由在之此段雖無御教書每月可被進之由也則請文加署五日付

七日 晴新菜御饌四子八九十參

十一日 雨交替予番文四子九十加判

十五日 晴粥御膳物忌等進之御竈木奉納五子八九十參五神主者遲參石壺着座之時分被參然之間雖不被合御鹽湯詔刀被讀進之條新儀也水量三尺九寸餘

廿一日 晴交替予番文子八十加判

二月

一日 晴交替十番文一五子八十加判二神主老毫間當時依不被參番司對面無之

鐵山神事宮司神宮一五子八九十玉串物忌內御巫山向權長刀禰祝諸役人等悉參山向二薦忌服之間自長官語沙汰自余神事如例在酒肴不足簀盆二羹一菓子計也

九日 雨祈年祭延引此分雖無告知官幣無下向

十一日 交替十番文子十加判神態神事十參

十一日 晴予依_レ無_二所從_一不參神熊神事十參

十二日 晴神熊神事十參召符請文加署

廿一日 晴交替五番文五予加判

十二月

一日 晴交替九番文四五予九十加判

同日窪田上聖事解狀_二加署_一

十一日 晴交替九番文四五予九十加判

十四日 晴自_二十二日_一一七ヶ日可_レ始_二行地震御祈_一

之旨今月九日御教書十日祭主下知昨日十三日宮司告

狀等廻覽則請文之解狀_二加署日付十五日_一

十五日 雨興玉神態一殿予九十參次御占神事例所召

立行高讀進

十六日 晴御巫內人館竈祓後河原祓予八九十御稻率

_レ下神拜等同前

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮神事等如_レ例櫻酒肴九月

延引今夜勤_レ之予八九十從

十七日 晴月次祭宮司神宮予八九十參如_レ常一殿八

十着勸盃八御遊八十雖_レ無_二延引之告知_一官幣無_二下

向_一

十八日 晴宮比矢乃波々岐神事荒祭神事等予八九十

參同夜私御膳九參

十九日 晴瀧祭神事予八十參月讀伊佐奈岐宮神事九

參

廿日 晴夕雨小朝熊宮神事予八九十參酒肴送_レ館依_二

損亡來六日不可_レ有_二酒肴_一云云

廿一日 晴交替五番文四五予八十加判

廿二日 雨瀧原并宮祭禮予參見瀨川步渡七ヶ通下向

之處神原替夫不_レ立仍相_二催政所沙汰人等_一巡番夫之

許_二責入所從等令_一質納_二之間參畢渡野原瀨出橡原野

下向

廿五日 外宮造宮使明日廿六日外宮山口祭以前可_レ被_二

拜賀參宮_一之由告狀今夜到來仍早旦一廻覽山口祭可

_レ爲_二廿六日_一之由廿二日被定之夜_二入而御教書到來

之間如_レ此云云

同日伊雜宮祭禮八參

同日風日祈宮祭禮予六參外宮造宮使也御館參

廿六日 晴外宮造宮使清國拜賀參宮束帶神宮予十參

束帶皆疊御記奉行照文渡_二官府宣旨政所行定_一冠衣請_二取

之次第如_二內宮造宮使拜賀也時但今度者不_二讀進_一渡

_レ予予披_二見之_一十同前如_二元返畢酒肴勸盃在_一疊予參配

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮等如_レ常但櫻酒肴無沙汰
予八九十從

十七日 晴神嘗祭幣使有直御共_{内定奏}手水役_{守成}四姓_{仲氏}

參宮司氏長神宮一四五予八九十一神主之手扶_{九守}東寶殿予參西寶殿八參送文行定讀進勸盃御遊予八九

十從神事次第如_レ例御階兼同被_二相觸_一宮司方御鯉木
以下大物等_ヲ取退御階_ヲ直畢雖_レ然御階無_二昇殿_一之間
物忌不參開_二北御門計_一也

十八日 晴宮比矢乃帚并荒祭宮祭禮予八九十參

十九日 小雨瀧祭宮神事五予八九十月讀伊佐奈岐宮

神事十參

廿日 晴予父遠閑日也仍自_レ宵退出

廿一日 晴予今日潔齋遲之間不參又昨日牛喰饗予分
雖_レ爲_二指合日_一自_二役所_一以_二別儀_一送_レ館之間今日行之

畢

同日先日禰宜召符之請文之解狀ニ加署公武兩通也

廿二日 晴瀧原祭禮六巡番代經元神主參勤

廿五日 晴伊雜宮祭禮五巡番代正秀神主參勤同日風

日祈宮祭禮予八九十從在今在_二家酒肴_一

十月

一日 晴交替九番文予九十加判御綿預

七日 晴朝明郡十_ク所就_二守護新儀_一一段錢課役事被_レ成_二廳宣_一加判

十一日 晴交替四番文一四五予八九十加判

廿一日 晴交替予番文四予十加判

廿二日 晴美濃國東池田御厨河籠米廳宣加判_{今日付也}

廿四日 晴禰宜重召符九月卅日御奉書同日御教書今

月二日官狀同廿日祭主狀今日宮司狀等廻覽

廿七日 晴召符請文加署

十一月

一日 晴交替五番文一四五予九十加判

同日氏神祭禮予參代官事既被_レ始上者可_レ爲_二其分_一歟

可有_二評定_一之由雖_レ被_レ定去四月不_レ及_二其儀_一神事如

常大物忌父與_{里衣}尙常_上宮守物忌弘盛忠利地祭物

忌弘家弘次時忠等皆上下前々_ハ布衣近年如_レ此歟無

謂乘馬稻半束飼飯小付酒三献茶役人用意於_レ饗者

送_二所從_一分五膳

五日 晴窪田上聖事廳宣加判

九日 晴重禰宜召符今月四日傳奏奉書同日職事御教

書同日官狀同六日祭主狀今日宮司狀則廻覽

同請文加署

八月

一日 晴於廳舍二行三番文吉書等一先一神主於館加判其後廳舍四五予八九十加判

同日正見叙爵文安四年九月十一日口宣十二月十七日祭主施行當年七月五日司奉行廿六日宮奉行自余昨日被加判予者依爲昨日母遠閑日今日於廳舍加判二日 小雨重貞叙爵文安三年七月廿六日口宣七月廿七日祭主施行八月三日司奉行忠香當年七月卅日宮奉行加判

六日 晴變異御祈自來五日一七ケ日可始行變異御祈之由一日御教書二日祭主狀五日宮司狀六日請文加署

十日 晴成本叙爵文安三年十月十三日口宣同日祭主施行同十七日宮司施行文安五年七月廿六日宮奉行加判

十一日 晴交替九番文予九十加判

廿一日 晴交替五番文四五予八加判

廿三日 晴就當宮假殿正遷宮等事可被尋子細在之宿老禰宜兩三人可有參洛之由事十三日傳奉

書奏狀同日職事御殿書十四日官狀十五日祭主狀廿二日宮司狀今日廻覽禰宜上口不可然之條々仍歲久無廻儀之由請文加署

九月

一日 晴交替九番文予九十加判

三日 晴美濃國開發御厨內宮役夫工米催促停止廳宣加判

九日 大雨水菊花御饌予八十參子於瑞籬御門軒下詔刀讀進如常東寶殿下水流間令蹲踞預直會長官自昨日一

十一日 晴交替予番文四子加判一同參籠二二六不參犬產穢也

十四日 晴拔穗神事十參例幣可爲式日一由三日御教書六日祭主狀十二日宮司狀廻覽

十五日 雨興玉神態予九十於殿行之御占神事例所召立行定讀進

十六日 晴禰宜可參洛之由事重被仰今月五日官狀十一日祭主下知今日宮司告狀等廻覽

同日御巫館竈祓次河原祓一四五予八九十參一四自二鳥居退出自余神拜御稻奉下五參予八九十皆從

同日月讀伊佐奈岐宮神事雨儀殊更洪水間於二殿被
行_レ之十參

廿日 雨小朝熊宮神事予九十從予詔刀讀進一殿無
酒肴一

同日月次祭并一社奉幣十八日可_レ被_レ發之由御教書等
廻覽

廿一日 雨交替九番文一四予八九十加判

廿二日 小雨瀧原并宮神事九巡番代仲氏參

廿三日 晴月次祭幣使有直御手水役 御共_{外宮住實口口}宮

司氏長神宮四予八九十如_レ常荒祭遙拜_{マテ}一殿儀一社

奉幣_{マテ}期_{二神主}幣馬預

同一社奉幣幣使宮司同前四姓參神宮予八九十從四神

主退出東寶殿御鑑雖_レ可_二予給_一八神主與奪仍八參勸

盃八九十參當祭幣馬每度祭主_ニ被_レ預之仍彼方者告申

之處今日被_レ渡_ニ御馬飼_ニ雖_レ然又祭主方者請取不_レ被

渡_ニ神宮_ニ銀釵神宮之御渡事度々也先規不同今度無_ニ

其儀_ニ自余神事如_レ常

廿五日 晴伊雜宮祭禮十番代仲氏參酒直悉令_ニ沙汰_一

云云

同日風日祈宮神事四五予八九十今日饗事_{高侯役}去年

不熟之間可_レ調進酒肴_一之由兼日_ニ侘申去年下地無_ニ

相遣_ニ其上先年不熟之時半饗_ニ侘申自_レ夫每年半饗_ニ

沙汰無_レ謂之處近年猶々減之間條々堅可_レ有_ニ成敗_一之

由傍官中及_ニ御沙汰_一之處結句如_レ此申條太無_レ謂爲_ニ

酒肴_一者一圓可_レ畧被_レ仰何如_ニ此間_ニ沙汰之送_ニ進館_一

廿八日 晴俊春叙爵文安五四月八日口宣五月廿七日

祭主施行六月十六日司奉行廿五日宮奉行加判

廿九日 晴假殿遷宮事注進解狀_ニ加署

卅日 晴輪越神事一五予八九十

七月

一日 晴交替一番文一五予九十加判

四日 晴柏流神事予八九十無_ニ酒肴_一武饗杉山去年無

足云云

九日 晴春規叙爵文安五四月九日口宣五月七日祭主

施行七月四日司奉行七月七日宮奉行加判

十一日 雨交替九番文四五九十加判出納不_レ來_ニ予之

館_ニ仍無_ニ予判_一

廿一日 晴交替十番文五予十加判

廿四日 晴變異御祈事自_ニ來十日_一可_レ始行_一之由七日

御教書八日祭主狀廿三日宮司狀_ニ只今到着之間廻覽

十日 雨正殿千木北方二支落畢南方_レ折不_レ落

十一日 雨交替九番文予九十加判

同日守勝叙爵四月七日宣旨五月廿七日祭主施行今日

司奉行則宮奉行加判

十二日 雨氏規叙爵四月七日宣旨五月廿七日祭主施

行六月十一日司奉行今日宮奉行加判同氏規權禰宜

在_二加判_一

同日仲氏叙爵四月九日宣旨五月廿七日祭主施行今日

司奉行則宮奉行加判仲氏規仲氏規_ハ予之子也仲氏

權任子也宣下次第施行爲_二同時_一_ハ禰宜子爲_二座上_一

先例也殊更仲氏_ハ宣下後日之處上_二被_二引付_一候條且

無_二故實_一且偏頗之儀也雖_下此段可_二支申_一歟_上氏規_ハ當

年僅二歲也仲氏既五十歲_二及間_一以_二憐愍之儀_一署_レ之

同日月次祭可_レ爲_二式日_一之由去月廿六日御教書同廿

八日祭主下知案今月十一日宮司告狀等廻覽同日神三

郡內可_レ被_レ止武家締之由解狀加署祭主殿依_二御所

望_二被_レ成_一之外宮同前

十五日 晴贊海神事予八十二代永昌六代經元一代守博

三代守成_{館ニ不參之}四代經貞五代氏卿_{三神主}九代仲氏_{件仲氏}

進也如_{此仁體神事ニ參}御膳裴_ハ湯涌祝舟_{ヨリ}持之

鹿海之海士鹽鯛六鰾進小濱海士鯛六鰾進御膳海松宮

無間色々相尋取之阿婆羅氣役人不參自余神事如_例

去月廿八日井毎日霖雨今日殊更天氣以外也定而可

爲_二大風洪水_一者可_レ爲_二神事如何_一哉危不_レ少之處天

俄晴畢令_二神慮然_一也舟中百歌_{興力}無行依_レ闢發句十神主

同夕與玉神事御占神事四予八九十從召立弘安讀進氏

規始而合丙

十六日 雨御巫館竈祓次河原御祓一予九十次神拜次

御稻奉_下一神主_自御稻_{退出}自余次神拜

同夜雨御膳宵次瀧祭神事次櫻宮神事雨儀一殿次曉御

膳予八九十夜明了

十七日 大雨月次祭幣使雖_無延引告知無_二下向_一宮

司參神宮予九十大物忌父與里不參二薦弘富_ヲ召宮守

物忌一薦服氣二薦弘盛_ヲ召地祭物忌一薦弘家_ヲ召東

寶殿_ニ予參送文行定讀進勸益予十神事如_レ常

同日就_二御經木事_一祈謝宣旨廻覽則捧_二請文_一

十八日 雨宮比矢乃箒神事於_二第四御門下_一行_レ之次

荒祭宮神事予九十

同日主神司殿顛倒難人少々取散相殘分長官被_レ取

十九日 雨瀧祭宮神事八九十參

變之儀可_レ爲_二如何樣_一哉此分可_レ申之由被_二誘引_一仍
二神主許參被_二申通_一由之處先度儀雖_レ爲_二勿論_一無_二家
子禰宜_一間難儀之由返答就者以_二權神主_一可_レ被_二勤仕_一
瀧原并宮伊雜宮神事等以_二權任_一被_レ行之恐此御神其
儀何可_レ有_二子細_一哉之由被_レ申之雖_レ然於_二今度_一者無_二
余日_一皆々凝_二談合_一自_二來祭_一可_レ被_レ定事之由也
仍先五神主被_レ參畢予御初廿文

十一日 交替九番文一五予八九十加判

十四日 晴御笠神事予九十參詔刀等予讀進

十九日 晴變異御祈事御教書以下廻覽予今日加灸同
請文_二不_二加署_一

廿一日 晴依_二灸穢_一不_二參_一

五月

一日 雨依_レ灸不_二參_一

八日 雨宮司氏長補任四月九日宣旨同十七日官狀同
廿七日祭主施行今日宮司告狀等廻覽

同日變異御祈結願之事御教書以下廻覽請文加署

十一日 晴不_二參_一

十三日 晴自_二今日_一當番當時番代_二不_レ被_レ差雖_レ不_二

口迄_レ館參

十七日 晴夜亥尅計_二正殿覆板_一鏝木悉落御階高欄等

被_二打摧_一畢千木者乍_レ折不_レ落難人亂入御金物等放取
候間所_レ殘鏝木金物以上六長官_二被_レ取了_一件金物材木
等事古殿祭主得分也然者此等可_レ爲_二其分_一歟之由道
後政所方_二ヨリ_一長官_二被_レ申神宮_一取之先規也先應永兩
度假殿之時鏝木金物等經博一禰宜被_レ取之畢之由返
答應永度經博被_レ取之事者若爲_二祭主通直代官_一被_レ取
歟每神爲_二御代官_一被_レ計申間不審之由重而被_レ申之其
儀爲_レ致_二支證分明_一者不_レ可_レ自專_二無_二其儀_一上者只神
宮計勿論之由返答又荒垣內顛倒木如此物等宮司得
分之由宮司方_二雖_レ有_二沙汰_一不_レ及_二迄_一催促_二儀顛倒
木得分之事勿論也如此金物材木等無_二其沙汰_一歟只
神宮計也

十八日 晴件鏝木等事急被_レ成_二假殿遷御_一可_レ被_レ奉_二

修理_一之由注進公武兩通宮司雜掌_二上_一

廿日 晴予之灸今月_二愈候間_一參拜

廿一日 晴正殿ノ棟_二ニ_レ筈_二ヲ_レ奉_レ覆宮司氏長沙_二汰_一之

六月

一日 晴交替九番文一五予九十加判宮司氏長拜賀十

神主對面

故實_二故不及_レ開_二記錄_一西寶殿予參開_二閉御戶_一以前

御遷宮之後西寶殿造_二進之_一仍本樣古物等此間外幣殿

奉_二納置_一之間自_二彼殿_一奉出本樣儀式以後西寶殿_レ奉

_レ納件神事次第注_二別記_一申畢退出之時宮司供給雜事

無沙汰之間本樣使宮司乘馬_ヲ質_二取仍不_レ可_レ有_二無沙

汰_一之由退望然者拾貫文可_レ有_二沙汰_一之由申之馬_ヲ

返候

十五日 晴御竈木奉納神事四予八九十從水量三尺五

寸餘

廿一日 晴交替予番文予八十加判

二月日

一日 雨交替五番文一五予八九十加判鐵山神事一五

予八九十從在_二酒肴_一神事時分雨晴宮司忠春去月廿八

日逝去

八日 晴祈年祭可_レ爲_二式日_一由告知廻覽

九日 晴祈年祭予九十參幣使清直無_二宮司_一之間彼櫛

玉串於_二石壺_一進_レ之予取_レ之大物忌_ヲ召渡自餘同神事

如_レ常幣馬十預_レ之

十一日 晴交替九番文五予九加判

廿一日 雨交替十番文四予十加判

三月

一日 雨交替予番文四五予九十加判

瀧祭副物忌荒木田弘行補任廳宣加判去二月廿六日之

日付也皆判

三日 晴桃花御饌予八九十從詔刀文予讀進在_二梅津

役酒肴_二石橋分無沙汰仍憤_レ之玉串物忌方別役取勤

_レ之

十一日 雨不參依造_二作子細_一

十七日 晴外宮造宮使職補任去月廿九日口宣并次第

施行造宮使告狀等廻覽請文一神主狀也

廿一日 晴不參國方與_二長野方_一合戰頭等實見_二相交

輩同宿之間自_二十七日_一迄_二廿三日_一七日間斟酌同日山

宮神態神事八順番俄違例仍物忌并彼宮役人等計參

遂_二行神事_一畢予之御初廿文進之

四月

一日 晴交替九番文一四五予九十加判

五日 晴氏神祭禮五神主可_レ被_レ參之由自_二官首_一二神

主被_レ命仍三日五神主予之許_二來臨此事既去去年二神

主始而被_二定置_一事氏神山宮神事老體者以_二代官_一被_二

勤仕_一畢然者二神主可_レ爲_二順番_一之處今又如此腰之

內宮氏經日次記二

文安五年戊辰正月

一日 晴 一四五予八九十參一四朝拜ヨリ退出先一
神主於レ館番文吉書等加判次於レ廳舍一五予八九十加
判次送二四加判次一殿司對勸盃五番文番貞兼次白
散次酒肴次神拜次館祝吉書一衣冠五予八九十次外宮
參同衆家子權任經元寄守博綴守成守春氏綱定久道後政所
永保代氏卿公文所兼親行定政所也行高貞兼弘安尙常等參
神事如レ例年一

四日 晴 去十二月次祭延引今日被行之幣使高司權
少補清直御共內宮定幸高司殿親父基親參勤之時者兩宮
重代權任不レ共仍異姓人勤是者故通直卿爲養子分一
歟仍無二相違二手水祀承役宮司忠春神宮予八九參勤八
九參今日神事無レ觸雖レ然自二道後政所方一一日內々此
由可レ被二心得二被申之仍參此事宮司告狀二日到來則
番出納被レ遣云云然出納緩怠無レ謂廿七日自二公方二被二
仰出二云幣馬九預

七日 晴夕雨新菜御饌四五予八九十參

十一日 晴交替予參番文一五予八九十加判

十三日 番參本樣使夜前下着彼下向事二日御教書七

日宣旨同日祭主狀十二日宮司告狀夜半計到來仍今朝

廻覽雖レ可レ爲二神事一今日之由申下兼日無レ觸之間不

レ可レ叶由レ返答日時可レ爲二今日一之由被レ仰下之處兼

不レ被レ告知一之條祭主無沙汰歟今日無二神事一者令二上

洛一此分可二注進一之由宮司方へ堅申之間司中ヨリ日內

四ヶ度雖レ觸送二神宮無二兼觸一上者曾無二承引一雖レ然

諸役人等可二參勤一歟之由重而被二相觸一處來十五日例

式爲二神事一之間清進可二合期一於二其以前一者難レ參之

由申間此旨宮司方ニ被レ觸送一仍本樣使等官長參一結

進歟奉行師昌ニ五口志云云再三懇許之間然者少之役

人者以レ代明日可二遂行一旨返答

十四日 晴予九十束帶宮司忠春束帶公文所師昌行定

弘安衣冠自餘布衣於二一殿一任例可レ讀二進宣旨一由催

促之處宣旨宮司方へ渡リ之由申宣旨神宮ニ到來然者

可二返渡一而有二其例一之由問答之處可二讀進無二仁體一

今度此儀ヲ可二以失一由官使越前守氏里懇訴之間無二

讀進次第參入神事如レ例今度儀式計也本樣使等無二

廿二日 晴瀧原祭禮七巡番代經貞參

廿五日 晴風日祈宮祭禮予九十參祀承弘憲

同日晴伊雜宮祭禮予巡番代氏綱參神事如_レ常

里直會宵二盃朝三盃進之云酒直并儲之饗等宵朝如

_レ前

寛文八_申年十二月十五日書寫校合畢

氏經日次記一卷以荒木田久老藏本令騰寫雖多魯魚豕
亥之誤以無類本不能校訂矣

明治丙午二月

佐伯有義

門ヲ開着座如ニ本殿之時ニ于レ時ニ神主詔刀讀進今度者脱レ沓先例也于レ時一同兩端次下向件假殿者宮司以ニ私力ニ致ニ沙汰ニ重任御免之事申時此假殿可レ致ニ沙汰ニ之由申定畢仍神宮ヲ奉レ覽如此沙汰每事聊尔也御裝束者絹生御櫛代覆ハ布御殿者無ニ御鑲ニ久留々計也御門ハ懸金計御垣ハ柴也如此每事雖レ爲ニ聊尔ニ既數年御顛倒之間且又此段依ニ神慮歟被レ遂ニ行之仍不レ及ニ召立ニ勤行之狀注進別紙在ニ引付ニ古殿ニ神主預レ之六日 晴世上靜謐并神璽出現御祈事一日御教書三日祭主告狀今日宮司狀廻覽請文加署七日付又儼御馬奇特事依レ有ニ公方御沙汰ニ自ニ祭主殿ニ被レ尋仍注進十一日 晴交替一番文一二三予九十加判廿一日 晴交替予番文五予九十加判

十一月

一日 晴交替五番文三五予九十加判五日 晴氏神祭六參四巡番勸樂五辭退仍六參十一日 雨晴二日神態神事十參十三日 晴一社奉幣事廻覽十八日 一社奉幣使秀忠御共_{外雅}御手水役永尙五予九十從東寶殿ニ子參勸盃予九十馬二足銀釧二祭主

ニ被レ留

廿一日 雨交替予東寶殿御戸本差相造歟但御鑲御封無ニ相違ニ之由物忌申之狀此旨長官ニ申送了番文予九十

十二月

一日 晴交替六番文六予九十加判十一日 交替予番文五予九十加判十五日 晴興玉神事宮予九十次御占召立行高十六日 晴御巫祓尺魚失念無ニ用意ニ代五文沙汰河原御被ニ五六予九十從次神拜二神主自ニ御前ニ御稻奉_{下參}十神主供奉自余神拜同夜御膳宵曉瀧祭神事櫻宮神事在ニ酒肴ニ九月延引分神事等次第如_レ常予九十從十七日 晴月次祭幣使秀忠御共_{外雅}御手水役人_{永尙}宮司氏長神宮二三予九十勸盃御遊九十神事如_レ常十八日 晴宮比矢乃籌神事次荒祭神事二五予九十從同私御饌十參同曉瀧祭禮予九十十九日 晴伊佐奈岐伊佐奈美神事十一人參廿日 小朝熊宮神事五予九十從酒肴送_レ館廿一日 晴交替二番文二三五六予九十加判

臨時者當祭神事可爲以後之由被仰仍次第如例
三神主依老耄西寶殿御鑑予被渡但先送文計讀
進期臨時之幣物不開御戶退出仍予於例所御鑑

廿五日 雨風日祈宮祭禮雨儀於一殿行之一三子
九十從在酒肴三神主酒肴自館被請之由役所申之
仍三退出

次自一鳥居一社奉幣參予九十南御門邊ニテ清
衣着予於例所西寶殿御鑑給參入二神主東寶
殿御鑑以前祭禮ヨリ所持予被與奪仍予西寶殿

同日伊雜宮祭禮五巡番代經貞參

御鑑九神主ニ渡東寶殿參今夜兩祭之錦綾并先度
子良館ニ被預置錦綾被納之了九神主西寶殿參
御鞍ヲ納了勸盃予九十參

同日月讀宮假殿遷宮可遂行之由雖宮司申依儀
式聊爾被延九日十日奉行廿日宮
奉行口宣以下不訓

十八日 晴宮比矢乃需神事其後荒祭宮祭禮彼宮物忌
二薦不參仍出納彼役勤就間木綿麻不請俄奔之一
二五九予九十

十月 晴交替一番文一二三五六予九十加判重賴叙爵
宮奉行加判

十九日 晴瀧祭神事予九從十神主酒肴時分參預酒
肴新儀也

同夜月讀宮假殿遷宮二五予九十宮司氏長皆束帶於
例所先手水彼宮使人勤之宮司南神宮北南上東面次
大麻次御鹽湯同役先御神寶御樋代御裝束等也居次
宮司神宮司鬘木綿同取櫛歸本坐次神宮同前御前
ニ參先神宮次宮司着座宮司參神宮西東上于時二神
主詔刀讀進先例不脫沓今度被脫之不審顛倒之御
殿之軒兼切開自其役人參昇在秉燭雖無召立權
任數輩參冠衣悉奉渡御神寶給之所余便宜之職掌給
之所御體奉出神宮左宮司右蹲踞行御神宮前陣
宮司後陣在道敷假殿秉燭兼テアリ神宮左宮司右蹲
踞奉鎮御體於假殿御神寶等奉取納御戶堅御

廿一日 不參

十一日 晴祭主職清忠還補事廿日口宣廿一日祭主狀
廻覽則請文加署

廿二日 瀧原祭禮六巡番雖然灸治

宮司後陣在道敷假殿秉燭兼テアリ神宮左宮司右蹲
踞奉鎮御體於假殿御神寶等奉取納御戶堅御

廿三日 晴祭主職清忠還補事廿日口宣廿一日祭主狀
廻覽則請文加署

宮司後陣在道敷假殿秉燭兼テアリ神宮左宮司右蹲
踞奉鎮御體於假殿御神寶等奉取納御戶堅御

一日 晴於_二廳舍_一一二三五六予九加判如_レ例酒肴無_二沙汰_一

四日 晴新禰宜十神主七月七日口宣_{上彌萬里小路大納言}十八日

官施行同日祭主施行今月一日官奉行今日加判新十守喜加_レ之

十日 晴石清水八幡宮惟異御祈事四日傳奏狀七日祭

主下知今日宮司狀廻覽則請文之解狀_二加署_一

十一日 晴交替一番文一二三五六予九加判

廿一日 雨交替一番文一二予九十加判

廿五日 新十神主守喜外宮拜賀家子守秀守春公文所

尙常供奉

九月

一日 三神主許犬產穢也彼從女令_二失念_一予之許入來間不參

七日 宗直祭主職補任事三日宣旨五日彼狀今日宮司

狀廻覽八日請文加署

九日 菊花神事五予九十參無_二酒肴_一

十一日 晴交替二番文二五予九十加判自_二今日_一一同

參籠

十三日 晴武秀武行五位六月十一日口宣八月三日祭

主施行十三日宮司施行今月十二日宮奉行加判

十二日 晴又多氣郡前野御饌米催促廳宜如_レ例

十四日 拔穗神事假殿事注進_二加署_一

十五日 晴興玉神事二三五予九十次御占神事召立行定

十六日 晴館祓次河原御祓一二五予九十參五神主_ハ

二鳥居ヨリ退出自余神拜并御稻檢知等_二參但_一神主

依_二老毫_一御稻ヨリ退出仍皆令_二遙拜_一下向此儀始歟

四神主少依_二歡樂_一雖_二不參_一御贊ヲ納奉之御巫竈祓勤

之於_二御參代食等_一者不_レ被_レ獻_レ之

同日一社奉幣明日神事以後可_レ被_レ行之由自_二幣使_一

以_二經考神主_一被_レ告_二知神宮_一俄被_二仰出_一之間無_二御教

書_一之由也仍告狀_{モナシ}號爲_二詔刀幣使_一位階名乘被_二

注送_二神嘗_一一社_モ無_二詔刀宣命_一也然之處此儀不審

同夜御饌宵曉瀧祭神事櫻宮_{酒肴}神拜等如_レ常予九十從

十七日 晴神嘗祭四姓參幣使秀直御共_{御宮永保外貞茂}神宮一

二三五予九十參幣使御手水役可_レ爲_二重代_一之山雖_レ被

觸御家嫡計也仍祗承可_レ勤之處山向勤了然間自_二神

宮_一幣使_二御禮_一被_レ申被_レ折_二檻祗承_一又當祭一社兩祭

之送文錦綾等一度_二渡之間自_一幣使_二衛士_一被_二折檻_一

申間^{ホンカ}六被^レ出^レ之以^レ是進了^レ如^レ此事令^レ遲之鷄鳴
及^ニ一度^ニ而告來五子參南鳥居邊參候時分六被^レ參依
御鹽湯^ニ不^レ相之間退出瀧祭神事^{ヨリ}五^モ被^レ從次第如^レ
例

十七日 晴月次祭官幣延引宮司神宮予如^ニ常自^ニ神事
時分^ニ雨東實殿予參勸盃御返予下^ニ御門下一

十八日 晴宮比矢乃帚神事荒祭宮神事一五予十參彼
宮物忌新輔弘長二里合八幡宮恠異御祈事御教書次第
施行等廻覽同請文加署

十九日 晴瀧祭神事六予十月讀神事十馬所從自長

廿日 晴小朝熊宮神事一五六予十酒肴送^レ館四神主

雖^レ出^レ里送

廿一日 小雨交替一番文一二三五六予九十加判

廿二日 晴瀧原祭禮雖^レ爲^ニ十巡番^ニ去去年六神主參

勤時三瀧依^ニ留申^ニ其後三瀧度^ハ雖^レ令退望無^ニ參勤^ニ

依^ニ神過難^ニ測自^ニ長官^ニ守博神主被^レ參

廿五日 伊雜宮祭禮依^ニ大水^ニ延引風日祈宮神事大水

無^レ橋間於^ニ一殿^ニ行^レ之予酒肴送^レ館

廿七日 伊雜宮九代俊尙參諸役人等式日迄夜半過待

申處無^ニ御參^ニ間奉^レ備^ニ御膳^ニ神事^ヲ遂行之由申不參

間神拜計也宵直會等催促之處其時令^ニ用意^ニ畢之由申
之不^レ進件饗^ハ參着以後米以下當方^ニ請取役人^ニ令^ニ
下行^ニ備進之處如^レ此申之條無^レ謂幣使依^レ不^レ知^ニ案
內^ニ不^レ被^レ究^ニ問答^ニ歟朝饗里直會酒直等如^レ前之云云
件神事雖^レ爲^ニ九神主巡番^ニ云^ニ急病^ニ云^ニ灸穢^ニ旁以自^ニ
長官^ニ可^レ被^レ進^ニ代官^ニ之處自專之條新儀也而同夜九
經朝死去畢

廿九日 晴輪越神事一二三五予九氏久

七月

一日 晴交替一番文一二五六予九加判

四日 晴柏流神事一二三六予九參酒肴送^レ館

十一日 晴交替一番文一二五六予加判

十六日 晴宮司氏長重任事七月七日宣旨同日口宣八

日官狀十日祭主施行十三日宮司狀等今日廻覽

廿一日 晴交替一番文一二三予九加判宮司不參依

未^ニ拜賀^ニ歟武家御壽福增長御祈事祭主狀宮司狀廻

覽請文加署

廿二日 晴播磨國國分寺廳宣能登櫛比同櫛比二郷上

分廳宣以上三通加判

八月

廿七日 晴一神主三位外宮拜賀裝束少々如元膝突アリ日笠^{以青絹被張之}立輿如木二本雜色四本其外白張數輩笠持以下在之二神主白張數輩直垂着中間二人^{是舍人}一人笠持以下六神主雜色一本白張數輩笠持等予雜色二本舍人一人笠持等十神主雜色一人白張二人權任清泰正秀經元守博守喜守秀守春永尙氏經氏高皆布衣直垂着中間二人宛公文行定行高弘正弘盛尙常等也先當宮神拜自南御門參西出遙拜如常自大庭乘馬橋上打渡出外宮手水神拜以下如元日一沓役清泰裾經元北宮參歸立以下如元日三獻畢時分白拍子等持參酒既雖令着座爲神事之間立座仍彼之宿三貫被遣荊田大夫自道御共仕於中屋邊被下酒

五月

一日 晴交替一番文一二三六予九十加判
五日 晴菖蒲神事一二三予十參如例在酒肴一
八日 晴自酉下刻及子尅而館炎上大庭並木杉北端通之世古限北方館卅余宇悉燒失了此内一神主館在之自余無相違當時參籠人群集之間汚穢不淨相交歟其上下人等館住宮中之法犯間如此事

出來宮中殿含有類火之危處俄風南ヨリ吹テ火止了
火本有爾館預祓所籠號孫六則令逐電畢
十一日 晴交替二番文二六予加判
廿一日 雨交替予番文一人加判今日番過退出

六月

一日 晴依頭風不參
八日 荒祭宮物忌弘長補任宮奉行加判
十一日 交替二番文宮六予十加判
十四日 晴同館參
十五日 晴贊海神事予十俊尙九代經俊七代正秀六代守博一代經貞五代守春二代永尙三代氏綱四代參小濱海士大鯛四獻進鹽鯛四獻進神事如例
興玉御占神事三五六予十參召立行高
十六日 晴館祓次河原御祓一五予十參五二鳥居ヨリ下向自余神拜御稻奉下等參
同夜内外物忌等予之館來今夜御膳ハケヲ雖被詔詔不出來之間以代物可被下行可奉成御事之由自長官承之自余物ナキ時御事奉成事度々ノ例也ハケノナキ事無例可奉進御膳歟之申間二三神主館參此由可被申旨予意見仍二神主館參此由

膳ニ 菜不_レ入自余如_レ例

十一日 晴交替一番文一二三四五六予九十加判司對面六御被起座

十五日 晴御竈木奉納神事一二三五六予九十參水量三尺九寸

廿一日 晴交替一番文一二三予九加判

廿八日 晴當貞盛貞叙爵嘉吉二年十二月廿一日宣旨十二月六日祭主施行同三年正月十五日宮奉行之間加判

二月

一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判鍬山神事同衆參如_レ常

九日 晴祈年祭一三予九十勸盃九十

十一日 晴三條殿御參宮仍予不參

廿一日 交替一番文一二三予九加判

廿七日 晴祈年穀奉幣二五予九十參錦綾東寶殿ニ不_レ被_レ納子良館被_レ預置ニ神主意見仍御門不_レ開_信使宣命宮司無_ニ詔刀_一勸盃予王使九幣使十宮司

三月

一日 晴交替一番文一二予九加判
三日 晴桃花神事一二三五六予九十在_ニ酒肴_一物忘方

酒肴別役也今日無_ニ沙汰_一仍不_ニ着殿_一依無_ニ勸盃役_一當方酒肴一前被_レ下二膳參一膳今日不參

十一日 雨依_ニ頭風氣_一不參

十二日 成行叙爵永享三年正七日宣旨同二月廿五日祭主施行嘉吉三年二月十日司奉行十一日宮奉行加判

十七日晴番參櫪御馬事依_ニ度々注進_一今月五日被_ニ牽進_一荷用上分藤浪方預置奉_レ下今日御厩ニ奉_レ入件神馬事十五日荷用京着又其間之飼料文引下日ヤウ等之

賃荷用沙汰雖_レ爲_ニ先例_一不_ニ漚之間自_ニ長官_一下行

廿一日 晴交替一番文一二予九加判
山宮神事闕如

四月

一日 交替一番文一二三予九十加判

十一日 晴交替一番文一二五六予九十加判氏神祭三參彼宮祝死去仍御初取ニ不參之間予御初三神主所從

付進自余御初二薦取替沙汰云云依_ニ一薦指合_一二薦役等勤_レ之件神事役田等去年亂ニ無足仍去年十一月祭_モナシ今度預取以_ニ私力_一小付酒肴沙汰之無_ニ心見_一今日

祈謝宣旨廻覽

廿一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判

神_ニ之由被_レ申_于時司中侍申云依_ニ御遲參_一余及_ニ深更_一之間長官_ニ尋申候處神宮子被_レ參之由返答仍神事_ヲ被_レ行由間在_ニ拍手_一而退出對面_于十參宮司幣使_ノ座_ニ着_ニ三勸盃御遊同前_一

十八日 晴宮比矢乃等神事其後荒祭宮神事五_于十參同夜私御饌_于參_ニ政所_一代行定御火以下館_ニ來次第如_レ例

十九日 晴瀧祭神事_于九十參月讀伊佐奈岐神事_于十參長以下自_口

廿日 小朝熊神事一五_于九十參酒肴送_レ館

廿一日 大雪腰立_于踏_ニ分_一之_ニ雖_レ參樣々大宮計神拜別宮參不_レ叶而下向諸人參事不_レ叶番文一二三五六_于九十加判

廿二日 瀧原神事雖_レ爲_ニ予巡番_一去年九月六神主被_レ參時_ニ瀧方相留後退轉幣使不_レ進_レ之人夫不_レ來

廿五日 雨伊雜宮祭禮七代經貞參風日祈祭禮_于九十參祀承弘富廳舍_ニ參御火同前雨儀於_ニ一殿_一行_レ之浪出御火祀承_于之迄_レ館來件神事雨儀時者末座禰宜人役人等彼宮_ニ參詔刀讀進也近代無_ニ其儀_一

嘉吉三年癸亥正月

一日 晴一二三五六_于九十玉串參_ニ政所_一代_ニ行定_一番文番貞兼一神主自_ニ廳舍_一退出仍宮司勸盃_ニ神拜館祝_キ如_レ例一神主依_レ求_ニ上階_一拜賀外宮參延引_于十山神北宮八王子以下令_レ參直_ニ里_一出

七日 新菜御膳一二五_于九十玉串權從_ニ御鹽役所_一不_レ參仍前々之殘自_ニ酒殿奉_一出用之杓今日_ト十五日_トハ_レ內三方_ハ二柄宛也今日一柄宛被_ニ下_レ行_一惣而御膳供用被_レ減下_レ行之間不足每度御膳如_レ此久由_ニ內外物忌_一一同申_レ之又箕役所五進_レ之二_ハ長御得分三_ハ每年御下行仍於_ニ古箕_一者外物忌方下_レ行之先規也於_レ役所者雖_レ無退轉_ニ近年不_ニ下_レ行_一之間子良館上館等之古箕借用古以_ニ人物_一御饌調進雖_レ有_ニ其恐就_一闕如_レ奉_レ成御事由申_レ之間於_レ杓者止而可_レ有_ニ沙汰_一之由下_レ知之間參_レ了仍北御門被_レ參候處不開_ニ御門_一何樣候之由被_レ仰之處一薦與里申云每度二薦役也前一薦尙延此由_ヲ申每度與里參_リト申二薦更無_ニ其儀_一弘富數年雖_レ爲_ニ一薦_一未_レ參必一薦役之由申_レ之一薦役之間番之物忌_ヲ相語令_レ開_レ之今日無_ニ其禮_一云云一薦不_レ爲_ニ自役_一之間不_レ及_ニ禮_一ト申問答不_レ休時移之間宮守物忌父弘憲臨時_ニ勤_一之_レ了今日新菜役所若菜御蘭國方神郡依_ニ知行不_レ參_一仍今日御

宣同廿三日祭主施行九月十五日宮奉行今日加判

五日 月次祭六月延引分雖無兼日告知神嘗祭綾依不出來延引先六月分廿九日被成御教書卅日被發遣今日此趣自幣使以使者禰宜中被仰仍二二五五十從予灸治相殘

十一日 晴交替一番文一二三予九十加判何幣可爲來十六日旨內々被仰出之由七日祭主狀今日宮司狀

廿一日 雨交替一番文一二三予九十加判同夜例幣使從四位上秀忠四姓參予九十從予名召始也予東寶殿參九神主參時依暗顛倒自予血本ノ間西寶殿十參神事時分雨降不引裾西寶殿參昇時者引之勸盃皆參無御遊式日畢

十一月

一日 交替一番文一二三五六予九十加判外宮盜人參昇

十一日 交替一番文一二五六予九十加判神態六參

十二日 同予饗

廿一日 交替一番文一二五予九十加判今月氏神祭禮初十文料所亂ニ退

轉仍
無祭

十二月

一日 晴交替一番文一二五六予九十加判

假殿遷宮可爲近日之由有沙汰之間錦綾有濕損否事今日東寶殿在昇殿爲令實檢巨細可有注進之間自宵可被參之由傍官中被觸同宮司方被觸仍參北御門開二五六予十參二六今朝參之間昇殿斟酌云々然五神主可被開御戶處無故實之由被申仍予勤之于時五十被參拜見之處無濕損少々紛失歟有不足八段惣數百九十五端在之東西寶殿瑞籬御門表葺朽損居玉一果朽損

十一日 交替一番文一二五六予九十加判

十五日 晴館參御贊等納國崎長役御贊廳長五十自余各廿御鳥玉貫十連政所取之興玉神事一二五予九十從次御占神事同前召立行高讀進

十六日 晴河原御被一五六予九十御巫二薦服氣仍一薦兩役勤五九二鳥居ヨリ退出自余神拜御稻檢等參

同夜御饗宵曉瀧祭神事櫻宮神事在酒肴九日延引分予九十從

十七日 晴官幣延引宮司氏長神宮五予九十參次第如常三方櫛畢時分二神主雖不合御鹽湯版位不着不相待長方被行神事之條何樣哉之由可取直

廿日 酒肴予_モ預

廿二日 瀧原祭禮九神主巡番雖_ニ去年三瀬方煩落居_一

不參不審

廿五日 伊雜宮神事十巡番依_ニ指令_一自_ニ長官_一代官_ニ

被_レ進風日祈宮神事饗_ニ三神主雖_レ爲_ニ服氣_一送足先例也

先年三子十服氣時雖_ニ參館_一件饗不送之間先例雖_レ致_ニ

問答_ニ不沙汰仍今度予十不參

廿九日 輪越神事三子十致_ニ送館_一出納_ニ薦越_レ之家

子_ニテ

七月

一日 交替一番文一二三五六予九十加判氏保叙爵宮

奉行加判

四日 柏流神事服氣間不參三神主爲_ニ服氣_一參館之間

祇饗催促之處無沙汰不審

十一日 晴去八日山田亂_ニ燒死者裁輩依_レ可_レ爲_レ穢

歟號_ニ交替一番文先一予加判自余如何

廿一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判

八月

一日 神事如_レ例酒肴御沙汰番文吉書等致_ニ送館_一加

判一二三五六予九在判

十一日 番文一二三五六予九加判

九月

十一日 番文一二五予加判

十五日 予早旦館參納御贊不_レ獻

懸稻役田大畧在_ニ蒔田邊_一當年國司依_ニ神郡發向無_レ之

仍面々以奔走被_レ懸_ニ之子分有_ニ一見_一雖_レ無_ニ相違_一服

氣之間得分田邊御田當祭一石九斗三合入由也是又同

前下部サへ不參之間自_ニ長官_一一石五斗下行御器不

致_ニ沙汰_一之間同以代下行

十七日 神嘗祭官幣雖_レ令_ニ延引_一昇殿以下神宮儀如

例

廿日 小朝熊神事饗延引

廿二日 瀧原神事依_ニ武家神郡發向_一不參

廿五日 伊雜宮神事六代正秀參同日風日祈宮神事酒

肴延引亂中間役所今在家之地子等不_レ致_ニ沙汰_一之由

兼日_ニ雜掌所_一佗申_一

十月

一日 交替一番文一二五予十加判予服氣過明等去月

廿日饗今日沙汰式日子雖_レ爲_ニ大裁闕日_一今沙汰之間

預_レ之廻饗氏榮分預今日御綿預氏卿叙爵六月六日口

十六日 田宮寺行物大頭百文沙汰

廿日 守雄叙爵宮奉行加判去十一月口宣同十日祭主

施行正月廿日宮司施行正月五日宮奉行不審

廿一日 晴交替一番文一二五予十加判

廿九日 變異御祈御教書次第施行廻覽

三月

一日 雨交替二番文一二予十加判

三日 晴桃花神事右酒肴物忌方別役二百文副物忌傳之云々自中尾方仁取納無沙汰無謂雖一薦勸盃

ニ余神妙間當方也

十一日 予一昨日九日加灸仍不參□□酒肴ヲ下給

十六日 變異御祈事御教書廻覽同請文今日加署

廿二日 變異御祈可給願事今月十五日祭主狀同廿

一日宮司狀今日廻覽祈年奉幣可爲來廿四日之申十一

日御教書十四日祭主狀廿一日宮司狀同前

廿九日祈年穀奉幣

四月一日不參

十一日 交替一番文一三五六予九十加判司對面六御

祓口起

十四日 御笠不參

廿一日 依無所從不參

五月

一日 晴交替一番文一二三五六予九十加判

五日 晴一二三五參

十一日 晴不參

廿一日 晴交替二番文一二五六予九十加判今日御神

田子雖出仕服氣之間七折目時者別座敷候

六月

一日 晴交替一番文一二五六予九十加判

十一日

十五日 館ニ參御贊海神事六九一代清泰二代守春三

四予十服氣之間自長官守博守成泰成泰俊被進五

代經俊七代經元七神主當病仍館ニ不參然間御贊以

下長官被納別宮以下代官自長官被進先規

ナリ然神慮有恐間被申請長官每事如平生時御

占興玉神事一二五六九被參

十六日

十七日 官幣延引神宮如常

十九日 月讀伊佐奈岐宮神事自長官六末座九參十

神主去二日舍弟他界仍四十服

一日 晴一二三五六九十從予ハ服氣一神主不着廳舍退出仍番文於館被加判其後連判次以奉行弘安出納等被送予之館又以下色々物加判宮司勸盃事六神主可被參之由兼長官被仰又只今雖二神主被仰每度爲一座御役不可然之由六返答仍二神主勸盃三神主酒肴以後退出自余例式神拜次長官祝二六十參三五九不參一神主着衣冠對面新儀又館吉書酒肴除火物被送服氣禰宜之館先規也今日無其儀自余神事如例外宮參延引上階拜賀未被參予分自散三十神下人請取傳之

予依服氣雖不參承及事等爲後注之

七日 晴新菜神事

九日 荒木田感忠同盛重叙爵去十二月三日司中狀今月五日宮奉行口宣案祭主雖不具數輩之上首皆被加判上ハ加判了同氏武行吉三月廿七日宮司狀今月四日宮奉行同前

十一日 晴交替一番文一二五六予十加加判

十三日 晴經繁叙爵永享十三年正月七日口宣二月廿五日祭主狀三月二日宮司狀嘉吉元年四月廿七日宮奉行加判定德口宣同前二月廿五日祭主狀三月九日宮司

狀嘉吉二年正月四日宮奉行加判

經定 嘉吉元年三月四日口宣同九日祭主狀同十六日宮司狀嘉吉二年正月四日宮奉行加判定盛了嘉吉元年十月六日口宣十六日祭主狀十一月十六日宮司狀十二月十一日宮奉行加判十七日加判之

十五日 晴御竈木予之分服氣間不合奉納不削由貴殿脇立置也同服氣權任木不削無指出

廿一日 交替二番文一二三六予九十加判一神主被參館無沙汰非里故加判歟不審司對面九神主起御祓座

二月

一日 大雨大水交替二番文一二五六予十加判嶽山神事同衆徒雨儀間物忌等酒肴於殿內御種等調進役人等於九丈殿勤之爲先例之處物忌可爲例所之由二神主成敗不審但神事時分晴之間例所云々予神事時分雖出里酒肴送里大夫營之彼芳志也

九日 祈年祭二十從五主神明日父遠閑日也仍不參九神主余茅住家今日他界仍不參自余如何幣馬四神主預

十一日 交替一番文一六予十神態神事十參
十二日 同前

十一日 晴一昨日九日山田神人與神役人確執死人

百余人其內數輩燒死畢可爲村穢歟否未承定其上忌人諸人相交間先今日斟酌此問七字闕自如何

十三日 晴今日予雖被差七番代山田事爲眼前觸穢之間神拜斟酌三四七予十此儀同心

廿一日 晴交替一番文一二六予九加判

九月

一日晴 予妻女他界同廿日父他界仍神事參勤次第

不存知當祭御贄依爲忌被納長官但以別儀拜領奉物等不獻官幣延引神宮如常

閏九月不參

十月

廿一日晴 交替一番文一五予加判予外院神拜布衣

十一月

一日晴 交替一番文一二三六予九加判假殿以下注進

加判

九日 雨氏神事九參予依服氣御初不獻

十一日 晴三日神態神六參予饗御初依服氣不獻

十八日 田宮寺行物小頭廿文沙汰同權任分沙汰

十九日 晴長官上階六日御教書同祭主狀廻覽

廿一日 長宮當宮拜賀束帶

十二月

一日 晴交替一番文一二三五六予十加判

十一日 晴交替一番文一二三五六予九加判

十五日 晴參館初御贄不獻之御贄塵直會竈等公文

所取

十七日 晴官幣延引神宮如常

廿一日 晴番文一二三五六予加判

廿三日 晴長官上階宮奉行加判三位宮奉行無先規

不審

廿二日 晴瀧原祭禮七神主雖爲巡番違例館不

參間自長官可被進代官爲先例之處無其沙

汰但去九月六神主被參之時三瀬方松倉藤兵衛有

意根儀間彼者可奉取替之由申太神主押畱然之

間五々方令籌策無相違下向之事未落居歟云

彼云是無參勤

廿五日 晴伊雜宮祭禮予雖爲巡番服氣間長官

守成神主被遣

廿九日 晴經泰五位宮奉行去三月三日付今日加判

嘉吉二年戊正月

兩人參今日十神主不參間自長官予被語一人馬

所從等自長官給之在酒肴神事如例

廿日 雨小熊宮神事予九十參如例酒肴送館

廿一日 交替一番文一二三四五六予九十七神主依

達例不參廿二社奉幣廿日可被發遣之由御教書次第施行等廻覽

廿二日 晴瀧原祭禮十參當祭幣使三十田口鄉役近年

以代三百文送之處今日六ッ到來彼鄉定使號木下虛

妄歟同鄉人夫二人進候處今度一人參件夫落着

定使役朝自幣使被下歸參人夫打見二人又野

原一人道替

廿五日 晴伊雜宮祭禮九參 同日風日祈宮祭禮一二

五予從直會於祭庭行之十神主館參仍送饗

同夜廿二社奉幣使清國朝臣雖爲惣領非祭主恩

秀忠朝臣依爲當祭主恩爲家督每度手水役參了

仍無今夜自餘如例二五予參東寶殿予參勸盃王

使五幣使官司予立渡兩役勤之二神退出常祭每事如

祈年穀

廿九日 晴輪越神事一三予九如例五神主遲參仍以

出納被送彼館被越

七月

一日 晴交替一番文一三五六予九加判二神主勸樂仍

番代五禮候

四日 晴柏流神事一二三五六予從件神事役人日祈

依服氣不參然間權可參候處遲參仍御鹽湯役人幸

爲衣冠向爲長裁相語彼件役勤次第畢於一殿茨饗

行之六神主退出仍茨饗送館

十一日 雨交替一番文一二予十加判

十七日 晴予番參候處正殿乾方瑞離三十余枚顛倒

此由長官申畢官司修理間自長官被置宿直

了

廿一日 小雨交替一番文一二三五七予九十加判司對

面當番九神主御祓起座

廿九日 赤松調伏事御教書廻覽

八月

一日 晴一三五六予十參交替番文如元同十神主加

判時分九神主參仍先九神主加判其後十相殘處加判自

余館被送時分二神主參着仍加判四七館不參仍無

判酒肴無沙汰赤松調伏加署請文又外宮御池端犬

喰來人頭仍七日爲穢

居退出與玉拜次荒祭拜開手兩端次櫻宮前ノ置石ニ着座東上北面無ニ鋪設ニ自ニ置石ニ北在ニ鋪設ニ一神主詔刀讀進諸神ニ御笠ヲ獻狀也歸着之時一同ニ兩端次酒殿拜同諸別宮拜次下向丁今日御笠ノ菅自ニ內瀬兼日ニ進之處無沙汰之間自ニ長官在ニ奔走テ役人ニ下行然十五日內瀬ヨリ持參間折檻之處此御菅雨一滴ニモ不レ宛爲ニ先規ニ之處依ニ此間之霖雨ニ不レ得ニ參之由申事闕上例判無ニ下行ニ或十五文或十文

十七日 雨予番ニ參

廿一日 雨交替一番文一三四加判五六七予九十雖ニ皆參ニ出納不レ取レ判之條無沙汰也

五月

一日 晴交替一番文一二三四五予九十加判

五日 晴菖蒲御膳自ニ宵館ニ參卯尅束帶如ニ元日一殿ノ背爲ニ列立ニ之處今日殿內ニ座列新儀也御膳次第如ニ元日一但第四御門無ニ御鹽湯今日ハ茅卷菖蒲蒜山芋名吉干魚以テ獻歟與玉拜荒祭拜兩端櫻宮拜由貴殿酒殿同諸別宮拜次一殿酒肴長役勸盃陪膳如レ例一二三七予十玉串内外物忌等着座三獻一同神拜

十一日 晴交替一予十依ニ參合ニ從ニ番文一五六予九

十加判

十七日 晴予番ニ參

廿一日 大雨大水交替 番文一予九加判

六月

一日 晴交替二番文二三四五六予九十加判

十一日 雨交替一六予從ニ番文一五六予加判

十五日 雨贊海神事予十清泰六代定泰九代守成二代守秀一代經貞五代永時三代經隆七代氏生四代等次第如レ例

同夕雨與玉神事一五予九十次御占神事召立弘安

十六日 雨御巫館祓申次河原祓一二予九十雨儀之間

於ニ一殿ニ行レ之在ニ鋪設ニ次第如ニ河原ニ手水番出納進

レ之次神拜自ニ御前ニ御稻檢知九神主次神拜自余御稻

之後神拜

同夜雨御膳宵曉瀧祭神事櫻宮神事予九十參

十七日 雨月次祭幣使秀忠正秀神事如レ例

予參二五予九十從ニ勸盃ニ御遊九十參予ハ假殿注進事

依レ爲ニ急事ニ退出幣馬三神主預

十八日 雨宮比矢乃帚神事荒祭神事予九十從

十九日 雨瀧祭神事予九十同日月讀伊佐奈岐伊佐奈

美宮神事往古ハ一同ニ參近長官ノ家子一人末座一人

石橋不_ニ着座_一皆請歎此役所無沙汰ノ時ハ物忌不_ニ着座_一仍一薦勸盃不_ニ參之自_ニ役所_一一薦_ヲ語進先規也近無沙汰之時當方ノ酒肴_ヲ一前一薦被_レ下勸盃_ニ參畢非_ニ本儀_一又今日陪膳ハ自_ニ役所_一勤之爲_ニ例之處可_レ爲_ニ物忌_一之由依_ニ二神主ノ成敗_一自_ニ役所_一副ノ物忌_ヲ語進

十日 晴度異祈請文ニ加署

十一日 晴交替一番文一二五六七予九十加判

十七日 晴予自_ニ今日_一當番祀候

廿一日 晴交替一番文一二三五予十加判

廿二日 晴上薦御局御參籠御神拜ニ北御門_ヲ被_レ開

自_ニ十六日_一御參籠於_ニ落合_一御行水一千度一七日_ニ被_レ滿今日御退出

廿六日 雨公方御參宮瑞離御門_ヲ被_レ開二五六七予十衣冠自_ニ北御門_一參一神主家ニ傳御祈禱料所在_レ之然之間於_ニ御與宿_一之際御祓被_レ進仍束帶直自_ニ南御門_一被_レ參御殿ノ西南上東面踞_ニ三神主同祈禱料所在_レ之於_ニ二鳥居_一御祓_ヲ被_レ進束帶依_レ爲_ニ老體_一內院_ニ不_レ參退出公方樣自_ニ南鳥居_一御參前陣宮司束帶共侍一人南東ノ方踞次御師束帶共布衣西方_ニ踞公方奉物ノ

金太刀_ヲ所持次公方樣裾_ヲ引_テ御拜八度歎公卿殿上人大明近以下ハ皆御門ノ外祀候 同日今出川殿御參宮北ノ御門_ヲ被_レ開

廿七日 晴山宮神事九神主參巡番廿三日祝參神事可_レ爲_ニ廿六日_一之由雖_レ申之公方御參宮之由九神主被_レ申今日行_レ之予之初廿文遣_ニ祝巨細追而可_レ注

四月

一日 晴交替一番文一二三五七予加判

六日 雨初申氏神事六參予之初廿文彼宮祝四來請取了

十一日 晴交替二番文二六予九加判一神館ニ乍_ニ祀候_一不_ニ加判_一不審也

十四日 小雨御笠神事一七九參衣冠予自_レ宵雖_ニ參館依_ニ違亂_一不_ニ參_一殿ニ參列役人等參櫻ノ宮ノ北_ニ御櫛_ヲ立并御笠_ヲ付于_レ時彼宮前置石列立東上西面在_ニ御鹽湯_一先御笠次當方于_レ時日祈御櫛三本奉持先陣次笠縫御笠_ヲ櫛ニ付奉持次禰宜自_ニ南御門_一參_テ石壺_ニ着座役人八重疊ノ東_ニ踞一神主於_ニ前石壺_一詔刀讀進于_レ時役人御櫛御笠_ヲ御門下_ニ奉納一方_ニ一本一方_ニ二本宛歎一神主本座_ニ歸着_一時一同_ニ手口自_ニ西鳥

一同ニ着座幣使四姓東西上神宮西東上一薦玉串役勤仕之上者石壺ニ可ニ着座一由雖申之不_レ被_レ免于_レ時院部前ノ石壺ニ平伏于_レ時幣使後ノ石壺宣命讀進歸着之時二座ニ下王使一座ニ進于_レ時院部本座ニ歸着次神ヲ取事如_レ例□□次宮司神宮座立八重疊西_テ經_テ御内ニ參鑓取八重疊ノ於_ニ西際一東寶殿ノ御鑓ヲ進二神主取_レ之持參御階ノ前ニ一同蹲踞東上次宮司瑞離御門ノ東ノ下參于_レ時神宮御前ヲ拜於_ニ宮司前_一有_ニ一拜宛一御殿ノ東着座北上西面于_レ時宮司神宮ノ前ヲ通北方ニ着座于_レ時二神主依_ニ窮嘯一歎御鑓ヲ五神主ニ與奪五不_レ知_ニ案内_一之由被_レ申仍七神主御鑓ヲ取沓ヲ穿_テ前_テ通東寶殿ノ御階ノ下ニ南向ニ立于_レ時鑓取御力キヲ給宮司ニ封ヲ取_ス其間七蹲踞封ヲ取_テ七進七力キヲ取据引_テ大床ニ昇ソト拜_ス于_レ時力キ取忌刀ヲ進取之御鏢ノ封ヲ切鑓取_ニ渡_ニ給之_一宮司ニ令_レ見東寶殿ノ御鏢ノ御封開ト申于_レ時御戸ヲ開御力キヲ力キ取_ニ渡次錦綾取_テ御内ニ納御戸ヲ閉于_レ時力キ取御封忌刀ヲ進取之_テ御鑓ニ付紙ノ餘ヲ切_テ返退下シ_テ御階下ニ立于_レ時御力キ封ヲ付_テ進七神主取_レ之本座ニ歸着于_レ時一同ニ立座正殿ノ御階ノ前ニ蹲踞東上于_レ時宮司御門ノ下ニ

參于_レ時奉拜テ退出シ八重疊西ニ列立南上東面宮司於_ニ彼前_一在_ニ一拜_一テ通共ノ侍以下八重疊ノ東ヲ通于_レ時七御鑓ヲ力キ取_ニ渡一同ニ石壺ニ歸着于_レ時力キ取東寶殿ノ御鏢ノ御封納ト申于_レ時一同ニ在_ニ兩端_一テ退出荒祭遙拜等加_レ例次王使幣使宮司一殿ニ着于_レ九十如_レ例淨衣木綿襦袢ヲ脱爲_ニ勸盃_一參之處如_ニ例幣時一机二前用意之南北ニ居_レ之北方先王使令_ニ着座_一宮司南ニ着座幣使ノ御前無_レ之然間彼前一神主ノ館ニ爲_ニ催役一人長走其間予等殿ノ東相待之處及_ニ遲々_一之間幣使退出仍皆退出畢此役者一神主令_ニ下行一人長調_ニ備之_一此事無沙汰何事哉之由自_ニ幣使_一以_ニ正秀神主_一一神主方_ニ被_レ仰之處如_レ例役人ニ申付候之處無沙汰之條恐入候於_ニ向後_一者堅可_ニ申付_一之由返答_ス了三日 晴桃花御膳二三五七予十從自_ニ北御門_一參次第如_レ例預_ニ直會_一ノ時桃花一葉宛進之時取_レ之笏ノ上ニ置少酒入_テ吞又二獻之時兩度少宛入_レ之_テ吞相殘花ヲ令_ニ懷中_一於_ニ家中_一祝_レ之下向次第如_レ例一殿酒看如_レ例大泉役初獻寒酒桃ヲ入後二獻ハ暖_レ之本儀者初獻_テ暖後寒酒歟自_ニ今日_一寒酒儀也又今日之酒看玉串物忌以下酒看別役所也當時副物忌沙汰之_大夫二今日_耶ト號

馬上モ步行モ口ヲ打昨日ノ道遣所御社マテ如レ此昨日ノ在所ニ如ニ昨日一着座在ニ酒肴一長官ノ沙汰也今日ハ權長百文給調進之由申之勸盃配膳次第如ニ今朝三獻也刀禰祝并荷用出納政所之所從以下之饗昨日延引今日沙汰之酒八升云箇云々由伊若榮神事ト號也刀禰祝末西上所從以下西亂座次田態先祝大豆次種テ蒔次權長田歌祝二人植役一人參間權長之所從一人勤レ之今日ノ藁等權長之沙汰也諸役人於ニ不參之饗以下一者權長預レ之於ニ無沙汰事一者權長勤レ之當神事每事權長觸催也此神事饗酒肴以下往古ハ繁多歟下向予前陣月讀宮在ニ下馬一神事無爲之由長官ニ申退出了

十六日 晴田宮寺十八日行物當月頭役六七予百宛沙汰之

十七日 晴予番ニ參又十九日秀賴榮爵神宮施ニ判テ加

廿一日 雨番文一五予九加判交替事雖レ被レ觸五神主不レ知ニ案内一之由被レ申之間被レ觸予今宵處在ニ急用一出里了仍九參勤

二月

一日 晴交替一番文一二五予九十加判

同日祈年穀奉幣四姓參無ニ幣馬ニ二鳥居北東上ニ立神事次第如レ例於ニ其外一者注レ之先陣王使次幣使秀忠次院部次占部次宮司四姓ハ無ニ祀承一神宮二五予九十從依レ爲ニ畫神事一雖レ無ニ御火一余暗之間幣使參向神宮御火ヲ二鳥居被レ進次玉串行事所四姓東上手水先王使次幣使役人俊尙神主次院部次占部次宮司次鬘木綿先幣使彼役人玉串不參然之間任ニ近例一薦可ニ參勤一之由ニ神主被レ申于時一薦興里爭可レ勤ニ玉串役一其上自役繁多之由申ニ神主玉串不參之時前一薦尙延每度參畢異儀何事哉之由被レ申其ハ不參之時每度可レ憑之由依ニ前玉串之語一參畢當玉串不參之時依レ語常祭物忌父時氏度々參勤之由一薦彼役上役也一薦參事爲ニ規模一者哉時氏不可レ參只一薦可レ參之由ニ神主成敗一膳ハ不レ爲レ役之間不可レ參之由申然者可レ被レ止ニ神事一之由ニ神主被レ申依レ之神事停滯可レ及ニ雞鳴一歟之間於ニ先規一者追而可レ有ニ落居一先以ニ別儀一薦可レ成ニ御事一之由依ニ予之意見一今夜玉串役悉一薦勤レ之幣使有ニ鬘木綿一而綿着之時一座ニ進仍王使二座ニ下次院部鬘木綿次送文ヲ進綾八端渡由ヲ申次宮司神宮禰ヲ取テ御前ニ參事如レ例幣使四姓ヲ相待

被_レ退畢於_二津長手水役人祝紙權長于_一時予取_二笏政所
 令用意津長皇神詔刀_ヲ取讀進西向_{在鋪設_ハ幣_ニ次北_ニ向楊}
 田神社拜八度開手兩端次又西_ニ向津長神社拜八度開
 手兩端次同方拜四度開手在_レ之次又楊田神社拜四度
 在開手_一皆同座次着座南面延帳_ノ搆座政所西東面權
 長南北面各在_二鋪設刀禰祝東西上南面薦_ヲ敷予大饗_ハ
 居_ニ机菜八種_{四ハ簀}計一勸盃權長配膳祝次政所次權長
 皆配膳祝次權長御箸_ヲ申于_レ時一同喰_レ之次入一獻同
 前次權長准_ヲ申于_レ時一端末座_{ヨリ}机_ヲ上_ニ予之前權長
 祝兩人_{シテ}上_ニ之出納荷用請_レ取_ニ預_ニ此饗_ニ田一段尼田
 坊_ニ知行彼代官右衛門太郎調_コ進之_ニ次酒肴海老差三
 菓等在_レ之勸盃配膳同前今度_ハ三獻也同火切_ヲ進_七權
 二柳_ニ結_ニ火切_ハ出納_ニ令_レ持_下向火切酒肴刀禰祝等皆預
 合_之
 之酒田一段也岩井庸四郎沙_ニ汰_ニ之下向次津長前_ノ出_ニ
 河端_ニ在_ニ手水_ノ以前役人于_レ時取_二笏政所用意_ノ八所_ノ詔
 刀_ヲ讀進東向同拜八度開手兩端次西_ニ向拜四度開手
 一端次又東_ニ向拜四度開手一端在_ニ鋪設_ハ前幣_ヲ立
 皆同座也次櫛爪_ニ着座筵帳_ノ搆座南面政所西東面權
 長南北面各在_ニ鋪設_ニ予大饗_ハ居_ニ汁一菜八種內簀_{モリ}四
 此饗所點手子良館送在_ニ復飯饗_ニ菜汁計同前同机_ニ居

喰之勸盃配膳御箸准以下如_レ前是_ハ三獻也此役所瀧
 祭七郎物忌瓦崎_ノ鞠屋兩人一年宛打替_ノ勤仕當物忌
 巡番也次又乘馬町下辨才天_ノ世古_ニ馬_ノ鼻_ヲ向_テ立于
 時權長唯々ト申自_レ是刀禰祝等盜人神_ニ參饗_ヲ祭予神
 事_ハ河原_ニ參當所之酒肴役田在_ニ朝熊_ニ彼役人以_レ代今
 朝二百文權長許_ニ送_レ之間無_ニ酒肴_ニ仍手水鋪設_{モナシ}
 予北南面政所西東面權長東西面彼酒肴五代予之分五
 十文出納荷用_ニ下_レ之政所廿四文權長廿四文取_レ之相
 殘百文刀禰祝以下_ニ配分_ト云々御鉞_ノ役遲參_ノ間權長
 催促則持參以笠_ノ葛在之役人號_ニ小濱六郎_ニ此役人數
 多也當時六郎一人沙_ニ汰_ニ之又鉞山_ノ小_キ御年木_ヲ此
 所_ニ持參役人不_レ知權禰_ヲ立魚_ヲ獻散具_ヲ解御祓_ヲ申
 南向刀禰祝饗_{ヨリ}參東座西上南面裏_ヲ作權長鉞_ヲ二進
 次巽_ヲ二進次巽_ヲ進次御種_ヲ進如_レ狀山時左右_ニ九取
 一_ノ巽_ニ入_レ以_レ藁結_レ之次權長禰_ヲ進如_レ例在_ニ一端取
 之_ニ于_レ時山向給_レ之本宮_ニ參例所_ニ奉納次又權長禰_ヲ
 進取_レ之_ニ于_レ時楊田社_ノ祝給_レ之彼社_ニ奉納之處彼祝今
 日不_レ參_ノ間雖_ニ權長持參_ニ是又道_々在役之間權長給_レ之
 河端邊_ニ奉納_ニ次巽_ニ二鉞_一結合荷用_ニ令_レ持_一ノ鉞_ヲ
 予所持件葛_ヲ冠_ニ點乘馬自_ニ河原_ニ權長祝歌在_レ之隨彼

一同ニ一拜在ニ鋪設ニ予引レ裾ヲ幣使前ニ着座テ一拜
在鋪設予宮司前同前于レ時御手水役人參後陪膳予盃ヲ
取以レ扇ヲ扇キ酒ヲ受テ進在ニ一端ヲ請取之聞食宮司
如此三獻同祀後二獻ハ無手本儀後二獻ハ非ニ勸盃ニ獻
先宮司ノ前ヲ上陪膳彼祀承也幣使陪膳ハ御手水二人
也仍御前兩人雖レ昇レ之今日無ニ其儀ニ予在ニ一拜テ引
レ裾本座ニ着九四前于レ時一同ニ一拜于レ時一同ニ起座
沓ニテ一拜退出祀承等迄二鳥居參神宮ハ以前退出御
火祀承迄館參了

十日 晴饗祝參饗御初ヲ催促米一舛紙一帖ノ由申歟
近六文三文思々也結句一向無沙汰在レ之予轉任ノ初ヨ
リ每度十文宛沙汰今日又如レ此

十一日 晴交替一如例番文一二六予加判

講座神事依ニ長官之語ニ予參馬出納荷ヲ被レ送衣冠笏ヲ
紙ニ爰出納ニ令レ持政所前陣辻ノ世古ヨリ河原ニ出岩
井田神事河原ヲ通西迎院ノ前溝ニ出弘正寺之前ノ自ニ
世古ニ堀町河出テ所ノ御社ニ參自レ馬下于レ時御手水彼
役人祝不參之間今日ノ役所進レ之號ニ森右權長紙ヲ進于
レ時予笏ヲ取御前ニ參政所用意詔刀ヲ取履ヲ脱於ニ鋪
設ニ立テ拜居テ拜シ詔刀ヲ讀進北讀畢居テ拜立テ拜次

御子社ノ拜八度北次大社ノ拜八度北開手兩端次西ニ
向拜四度次東ニ向拜四度皆同度也次着座南面座政所
西東面在鋪設權長南北面在鋪設並會□テ酒肴調進勸盃權
長陪膳祝依ニ祝不參役所森右衛門配膳次政所次權長
次御箸ヲ申于レ時手ヲ點次又二獻同前三獻畢テ自ニ末
座ニ机ヲ上予前權長ト兩人シテ上之預ニ荷用出納ノ今
日之役田有ニ御神田之上先年經博卿代井溝所損之
由依ニ訴訟饗テ五年被レ免酒肴沙汰之修理百人之人
足也其後去永享九年ニ所損訴訟之時被レ免ニ三年一酒
肴ニ沙汰又去年所損修理間自ニ當年ニ三ヶ年可レ爲ニ酒
肴一之由役所申之予之乘馬之其草稻之分稻束代十六
文荷用催促之處爲ニ酒肴一之時者不沙汰之由返答軒法
之儀也政所乘馬分三把之代十文同前又祝雖レ爲ニ廿四
人今日一人モ不參此內十人計當長官ニ有歟先高依ニ
六反一六人在レ之是等皆百姓等緩怠之由役人等申之
又今日十三人之刀禰廿四人之祝并予政所之所從以下
饗延引役所當長官知行號ニ由伊若菜ニ歟下向予前陣月
讀宮下馬アリ船橋之辻神事モ爲由長官ニ申畢
十二日 晴神態神事如昨日先饗土ノ二本櫻ノ本ノ通
津長參彼道雖レ爲ニ神事道郷人依レ任雅意成昌仍彼垣

ヨリ一讀宛雖被進之今夜無此儀一次宮司長氏祀承弘
富神宮御火祀承一神主之館參之處不參仍二神主ノ
館參二七予九束帶着清衣木綿襦襦ラス彼麻自長
官請之經中道玉串行事所皆參寄西ノ石壺ノ東
幣使西ノ宮司東ノ石壺神宮西上皆南面于時一拜官幣
束方東居案道ヨリ南山向御手水用意于時幣使引
ノ裾手水彼役人泰俊冠衣此役人自長官以廻文重代
神主被差廻一番二人宛參勤懈怠之時自長官以
家子神主被勤之然今夜一人無沙汰也但祭主家督
外ハ無此儀一次宮司手水役人山向次幣使鬘木綿在
鋪設玉串機在進之在一端次大物忌父興里冠衣送文
ヲ一座進草履二神主取之披見在御其間一薦下立
東待披見後給之別宮官幣任付札各役人等渡
祿褻等也于時衛士幣馬ヲ御馬飼請取八重疊東列立次宮
司執在鋪神山向追玉串執之進各一端自是直
ニ南鳥居ノ前屏垣ノ際ニ參神宮ヲ相待北面立子時二
神主六神主在一拜引裾鋪設先左ヲ跪次右ヲ跪玉
串ニ一拜シ旁腰ヲ指在一端左ノ神ヲ左取次右ヲ右
ニ取又在ニ一拜而右足ヨリ立テ直南鳥居ニ參東上南面
次々毎度如レ此石壺ヲ毎度在ニ一拜宛尙進皆參畢

在ニ一拜宛而御前參引裾於宮司前一拜宛在之
第四御門下御鹽湯在之次宮司次幣使皆參寄一同石壺
ニ着座東上于時大物忌詔刀ヲ使進使取之起座引
ノ裾ヲ不穿御前於石壺讀進在御歸着時玉串
宮司ノ神ヲ取一座進二神主手神石壺置彼神ヲ取
一端玉串歸着時大物忌興里ヲ召興里ヲ申テ參于
時件神被渡給之奉納二神主以石壺置神取ヲ興
里歸着之時宮守物忌父荒木田弘憲ヲ召弘憲ヲ申テ
參于時自一座ヨリ末座マテ給奉納歸着時又玉串一座
神進歸着時常祭物忌父荒木田時氏ヲ召時氏ヲ申テ
申參彼神給奉納歸着之時玉串所殘之神奉納此役
皆草履不脫玉串歸着時一同蹲踞有手兩端奉拜
起座幣使次宮司南ノ御門ヨリ退出神宮ハ物忌等之前
在ニ一拜宛而西御門ヨリ退出荒祭宮遙拜所前北上西
面立幣使彼前通時一同一拜宮司同前次彼遙拜所ノ
石壺ニ脫レ沓中石壺ニ蹲踞東上北面在兩端而拜下向
幣使宮司背ヲ通神宮ハ此ノ石壺ヲ經テ物忌等之蹲踞ニ
一拜幣使一殿ニ北ヨリ入テ東二間着座北方南面在鋪機
兼居置在宮司南ヨリ入同間南北面同前予九於櫻宮
前木綿ヲ取請衣ヲ脫テ東ノ間ヨリ入北上西面ニ着座テ

一日 小雨神事時分晴交替一番文一二五六七予九十
皆朝飯以後參加判事神拜司對面二鍬山神事役人等山
入之時分參衣冠經ニ中通一殿北ヨリ入テ着座東上一
二五六七予九十玉串正宮司衣冠東西面物忌西北上東
面一神主依レ爲ニ老體一鋪設下ニ疊テ敷仍司中神宮皆敷
之玉串物忌等鋪設計也酒肴祝部役實盛二器盛二暖
物一菓子一膳副ノ物忌勸盃神宮一膳司中二薦寒酒先
宮司次神宮次々之勸盃玉串マテ皆一端宛次物忌陪膳
人長次石橋東上北面薦テ敷此等荒祭瀧祭風日祈宮内
人物忌等也次御箸申受二獻今度ハ非ニ勸盃一玉串ヨ
リ酌替三獻畢テ末座ヨリ机ヲ出ス西方ヨリ各所從レ請預
之ニ一座前東二間ヨリ出ス陪膳二人宮司前東二間ヨリ
出ス陪膳一人手レ時石橋起座東方ニ薦テ敷着座北上西
面手レ時内物忌置石ニ着座東上西面在鋪設石橋座跡其東ニ御
巫等着刀禰宜祝植長以下ノ役人等外物忌ノ背ニ着座
政所公文所一殿ノ末ノ壁ノ柱ノ本ヨリ東ヘ鋪設テ敷着
座西上南面其前ニ子良母良着座在鋪設次御鍬褰テ物忌
役人調レ之先御鍬二宛宮司ヨリ玉串マテ進レ之居折敷陪膳
山向二人次手鍬一宛木線葛ヲ相副進レ之次褰一宛進
之次又褰一宛進之次結藁進之次御種九宛石進之

時山向祝言ノ和歌ヲ申于レ時口ニ五石四取レ之一ノ褰ニ入テ以レ藁
結レ之又御種ヲ一度取入テ進如ニ以前取レ之又一ノ褰
入テ結于レ時御巫唯々ト申于レ時手鍬ノ葛ヲ取テ冠ニ點
御巫ノ申事ニ隨以ニ手鍬一打レ地次御巫御祓ヲ申一同ニ
手兩端次山向打レ田次大豆次蒔レ種次山向西方ニ東向
ニ鍬ヲ槌テ乍レ立御苗今日六十四日例年ニ勝太逞出來
座此由以ニ宮政所ニ時ノ長官ヘ可ニ申上ニ之由申政所之
前ニ蹲踞此由申政所長官ノ前ニ畏テ此由申テ時長官
宇治卿大小刀禰維東維西之祝士浪人浮人等ニ仰御曰
蕃植令ニ合期下被レ仰政所承本座ニ歸中刀禰ノ一薦ヲ
召此由申刀禰此由觸于レ時植長歌ヲ歌イ植畢以前ノ鍬
褰等皆結合一ハ無實持レ之座ヲ立一拜次褰ヲ取東ノ間ヨリ南
ニ出先宮司次神宮於ニ軒下ニ褰各所從ニ渡櫻宮前ヲ經
置石ヲ通テ中道ヨリ下向畢
此神事雨儀之時ハ役人等九丈殿田熊一殿ノ内歟
九日 晴祈年祭幣馬二神主預ニ巡番ニ本儀現馬也然近
年五百文宛衛士沙汰仍巡番之禰宜馬ヲ用意於ニ一鳥
居ニ渡レ之衛士等幣馬ヲ引官幣ヲ奉持二鳥居參幣使二
鳥居南宮司北于レ時御鹽湯太麻在テ先官幣次幣使岡秀
祀承弘今日依レ爲ニ晝神事無ニ御火一近代以ニ別儀一長官

備之間依^レ之與次又御殿ノ際ニ新造ノ館在^レ之云ニ在所云土民ノ旁以不^レ可然被^ニ免許^一大不^ニ伺申^一歟雖不審之由被^レ申敢無^ニ返答^一三神主依違例不^レ被^レ參自餘皆參大般若經事扇屋ノ館ニ安置之由風聞ノ間被^レ立^ニ使之處廳里ニ出之由申之旨後日ニ長官ヨリ被^レ觸送^ニ此事何禰宜帳行ノ不^レ然者法手舍ノ住呂ノ訴詔大何樣可^レ散^ニ鬱憤^一之由於^ニ內々^一吐^ニ廣言^一之由風聞ノ時分彼扇屋之三男俄傳^ニ重病^一惱亂之間閉口畢又此病者云一日歲取ノ夜子良館ノ前僧拜ノ大楠洞ニ火燒之處洞ニ炎付不^レ得^ニ消彼木元日ノ已尅計燒倒畢參宮貴賤式消肝式□□此等之有^レ咎歟旁以不思儀也

或力 或力

十五日 晴粥御膳物忌等參獻^レ之予朝飯以後館ニ參先松ノ神拜衣冠所從等ニ御竈木ヲ削荷ス長官木七十五本於^ニ由貴殿之前^一出納等調^レ之從八人荷^レ之自余五十五本宛各於^レ館調^レ之三人荷^レ之權任四十五本宛忌火屋殿ニ奉納指出ヲ送^ニ權福宜荒木田神主名乘荒祭宮遙拜所前ニ奉行着座彼指出等ニ合點御竈木奉納之神事可^レ奉^ニ調^一御木^ニ之由在^レ告人^長次裴束之告參于^レ時束帶次可^レ參之由告來于^レ時經^ニ中道^一廳舍ニ參集南間東上南面立^ニ御木十荷^一通畢次第^ニ東

ノ間ヨリ出テ參御木等南之鳥居之脇ニ相待自^レ其禰宜前陣裾ヲ引於^ニ第四御門之下^一在^ニ御鹽湯^一石壺ニ着座于^レ時八重疊ノ東ヨリ南エ次第^ニ二十人ノ御木奉^レ置于^レ時人長次第^ニ悉數ヲ計八重疊ノ西ニ蹲踞テ三千五百荷渡候ト申于^レ時一座執^ニ詔刀^一起座引^ニ裾前々於^ニ石壺^一祝詞ヲ讀進本座ニ歸着之時一同ニ兩端于^レ時御木等ヲ忌火屋殿持參彼殿ノ壁ニ荷ヲ解キ寄懸置次第不同次西御門ヨリ退出在^ニ與玉拜^一在^ニ荒祭拜^一兩端^ニ在^ニ櫻宮拜^一在^ニ酒殿拜^一同諸別宮末社拜自^レ是下向水量三尺八寸

十六日 晴十八日氏寺之行^ニ祈禱^一之物頭役三四五百宛沙^ニ汰之^一番衆六七予九十廿文宛沙^ニ汰之^一權任十文宛沙^ニ汰之^一正月二日十一日年中三ク度行^ニ二門禰宜^一三三分テ年ニ一度頭役沙汰之^ニ二門ノ官首ヨリ^一每度頭文ヲ書彼等ノ以^ニ役人^一被^レ廻^レ之各名乘ニ加^ニ奉料足^一沙汰供僧愈行當月ハ送^ニ牛王^一十七日 自^ニ今日^一予番ニ參廿一日 交替一番文一二五予十加判^{予十七日ヨ}今日退出番^{祇候}

二月

五日 晴卯杖神事物忌等參彼杖送_レ館_三但今日ニ不_レ限每年初卯日

七日 晴卯尅新菜 御饌御內神事自_レ宵館ニ參一二五六七予九衣冠一殿參集東上南面調_ニ御膳_一案内チ申于_レ時櫻宮ノ南チ退_テ忌火屋殿ノ前ニ參東上北面ニ立于_レ時御鹽湯先御膳次禰宜次北御內ヨリ御前ニ參禰宜前陣御階ノ前ニ着座東上於_ニ御殿下_一三方御膳チ獻于_レ時一神主詔刀チ讀進シ着座之時一同ニ一端三獻畢立_レ座本殿ノ東ノ方ニ着座北上西面預ニ直會一勸盃一膳陪膳別等二獻畢_テ御箸チ申于_レ時彼飯チ汁ニ入喰_レ之次御前ノ上雨儀之時ハ御前ノ儀御門ノ下預ニ直會一事東寶ノ下南間東上南面_{如_レ此}退出荒祭遙拜東上_{在_ニ兩_一}與玉拜彼御前忌火屋殿ノ後_テ進_ニ櫻宮_一拜シ一殿ノ經ニ後酒殿由貴殿ニ拜於_ニ此所_一思々ニ諸未社チ拜下向_了

十一日 晴交替一神主_{冠衣}先神拜豐受口ニ參時南ノ鳥居ノ西方ニ物忌等_{布衣}御鑑チ持_テ祇候仍一拜又下向ノ時同前自ニ與玉ニ北御門ノ前ニ參屏垣ノ際蹲踞于_レ時三方物忌等玉垣ノ東チ經_テ參皆蹲踞于_レ時番ノ物忌北御內チ開參于_レ時一膳先御內チ拜次一神主チ一拜シテ御內ニ參次第也如此參內院チ懇ニ拜見シ一同ニ退出一膳一

神主向異ナル事モ渡候又等申_{在_ニ相違_ニ時}御門チ閉テ時一拜次荒祭以下神拜一殿ニ三方物忌着座仍三間チ一拜宛シテ通供奉ノ禰宜同之次酒殿拜次廳舍東間ヨリ入_テ鋪設ニ跪龜居南面于_レ時物忌等彼殿ノ前置石ノ際チ一同蹲踞于_レ時一膳番打渡侍ト申在_ニ一拜_一立座西間ヨリ出此間供奉ノ禰宜廳舍外猶待御鑑チハ子良奉_レ入殘物忌等置石ノ南ニ蹲踞於_ニ彼前_一一拜風宮以下遂ニ神拜一下向_レ此神事雖_ニ予不_ニ供奉_一爲_レ後記注之番文一二四五六七予九十加判司對面六當番ノ禰宜也宮司ハ兼_テ着座_{在_ニ鋪_一}六着座一拜_{在_ニ鋪_一}司北六南于_レ時番公文所番文讀進西方_{在_ニ鋪_一}染筆宮司ニ渡司執_レ之加判于_レ時執_レ之司中ノ奉行ニ渡于_レ時在_ニ一拜_一立座沓チ着_テ一拜司北ヨリ退出近日宮中館々ニ參籠ノ僧以下讀經ノ在_ニ沙汰_一剩大般若安置之館在_レ之歟之由及_ニ沙汰_一之間今日以_ニ御祓會合之次一同_一長官ノ館ニ參此由被_レ申一神主曾無_ニ存知_一恐可_レ求_レ觸之由返答次又荒祭宮忌火屋殿在所チ替結句石居角柱ニ新造之條以外事也宮司如此致_ニ沙汰_一有_ニ急可_レ被_レ仰之由_一被_レ申處宮司方ヨリ條理科ニ三百疋彼宮ノ物忌并瀧祭物忌等請取之如此沙汰之由一神主返答瀧祭物忌等_モ於_ニ此在所_一御膳調

執_レ之加判行高執_レ之司中之奉行ニ渡次酒肴一神主不
 參之間ニ神主勸盃裾_ヲ引_テ彼前ノ鋪設ニ着座シ_テ一
 拜配膳人長ニ獻畢_テ又ニ拜裾_ヲ引_テ本座ニ歸着子_レ時
 一同ニ一拜一同ニ座_ヲ立沓_ヲ穿_テ一拜宮司北ヨリ退出
 子_レ時北方ニ鋪設_ヲ調東上着座物忌西北上東面_ニ設_ニ鋪石
 橋東上北面席_ヲ敷荒祭御祭風日祈内人物忌等也子_レ時
 物忌等人長_ヲ召白散ノ串紙_ヲ乞_ニ調之紙長俊串ハ由
 貴殿ノ出納沙_ニ汰之政所公文等名_ヲ書政所之座西之
 二間之柱之本在ニ鋪設_ニ次酒肴寒酒勸盃一薦配膳副ノ
 物忌等也爲_ニ殿内之間玉串_ニ勸盃_ス次政所次物忌
 次石橋次一薦御箸_ヲ申又暖_ニ獻同前但今度ハ一薦盃
_ヲ執_テ進然間玉串_ニ無_ニ勸盃_ニ仍人長執_ニ銚子_ニ三獻畢
_テ自_ニ末座机_ヲ上各ノ所從_ニ渡_{西ヘ}於_ニ一座前_ニ者兩人
 昇之東ニ出_ス今日ノ饗長役也一禰宜顯興行雖然無_ニ
 料所者末代ニハ定可_ニ退傳條不_レ可_レ然被_レ存大井田上
 分_ヲ所_ニ被_ニ定置_一也然猶近代酒肴之時在_レ之但上分不
 法之時歟當代每年酒肴也不_レ可_レ然次白散_ヲ進先二宛
 次一宛次神拜手水依無_ニ役所自_ニ長官用意無紙次長
 官ノ館ノ祝二五六七十參乃神主ハ依_ニ腹中違亂_一自_ニ
 大庭枝_ニ歸然間祝_ヲ彼館_ニ可_レ被_レ送之處里_ニ被_レ出畢

服氣之時者除_ニ火物_一被_レ送法也御菓公卿也種々以_ニ珍
 物三獻配膳ハ公文所皆布衣次吉書政所進之冠_衣其後退
 出次外宮參一二六七七十束帶家子權任經元守博守喜
 守秀守春永尙_布公文所兼親行定行高弘安_布家子前陣
 公文所後陣中強一神主與自余ハ皆乘馬外宮於_ニ玉串
 行事所_ニ手水引_レ裾役人彼宮物忌二人參_衣時分_ニ子良
 館_ニ告知延引之時ハ日時兼日_ニ被_ニ觸_一又ハ於_ニ御
 池_一用_レ之家子以下ハ皆每度於_ニ御池_一用_レ之次御前_ニ參
 於_ニ石壺_一神拜_手在_ニ次高宮并諸別宮遙拜在手政所之指
 南_ニ隨次月讀伊佐奈岐宮_ニ參上岡ノ道本宮一鳥居ノ是
 於_ニ在所_一昏下馬於_ニ月讀宮前溝_一先々ハ在_ニ手水_一當代
 無_ニ此儀_一先月讀宮拜_裾引_ニ次伊佐奈岐宮拜_裾引_ニ次一元社_ヲ
 拜次所御社拜_向東次楊田社拜宮下向長官於_ニ里歸立_一在
_レ饗禰宜ハ公卿長官高坏家子ハ半公卿陪膳公文卿等也
 次吉書政所進_レ之前々ハ長官計被_ニ加判_一今日一同ニ加
_レ之不審也政所經美依_ニ違例_一今日代兼親參_{舍弟}
 之事中古ハ一同ニ參宇治岡邊_{ヨリ}家々ニ歸一門二門不
 知ノ時分ヨリ或家子禰宜或近付ノ禰宜計參然_テ經博卿
 歸立_ニ饗_ヲ用意彼代長官陪膳政所自余公文也當代無_ニ
 此儀_一

內宮氏經日次記一

永享十三年辛酉正月

一日 天晴卯尅束帶經ニ中道ニ殿乃北參集東上北面
一二五六七子九十玉串殿內宮司氏長半夜越年也忌
火殿乃前乃置石乃際仁三方御膳櫃昇居東上于時
參一拜宛置石上ニ東上北面御膳ニ向于時白散分配
一神主之次役人御鹽湯獻先御膳次別宮御膳次禰宜子
持參也時一同ニ裾ヲ引テ前陣一拜宛次御饌於ニ第四御內
在ニ御鹽湯ニ八重疊ノ東ヲ經テ瑞離ノ御內ノ下ニ參上首
半分ハ東ニ蹲踞沓脱北上西面下座半分ハ西北上東面
御饌ヲ案ニ居于時彼御門ノ軒ノ南着座東上御前ニ向
于時三方神酒ヲ獻白散ノ于時一神主詔刀ヲ讀本座ニ
歸テ一同ニ蹲踞シキ在ニ一端拜如此三獻畢テ退出於ニ
刀者一於ニ玉串御門下ニ預ニ直會ニ東上北面勸盃一薦諸
神事一薦指合時ハ二薦參也配膳副物忌等也初獻ハ番
次第勸盃皆在手無ニ玉串一勸盃二獻畢一薦御箸ハ不申ト
申于時一同懸手次末座ヨリ撤之玉串物忌勸盃ナシ

彼配膳駟使也次西御門ヨリ退出荒祭宮遙拜所之前ニ
在ニ鋪設ニ北上西面ニ蹲踞于時隨政所之指南ニ其方
方ヲ拜各開手一端宛次退出宮司一殿軒半ニ疊ヲ敷着座
若彼座奧ニ入者憤之當年如法彼於前裾ヲ引出酒殿
前政所廳舍着一神主依ニ老體ニ退出彼殿打板腰壁破損
之間自ニ長官ニ屏風疊ヲ用意其上ニ鋪設ヲ敷北間東上
南面玉串鋪設計西東面政所鋪設南之二間北何番文吉
書先長官ニ進次政所出納等ヲ召加御政印御倉ニ參御
政印ノ箱ヲ奉出廳舍ニ持參于時公文所行高布衣番文
吉書ヲ進先行高一拜次次ハ一拜シテ先番文ニ加判次吉
書ニ加前々ハ吉二通ニ加判二通ハ神主計加判之處當年
二神主午ニ四通ニ加判之間自余モ皆加之物忌等交替ニ
參地祭南御門ヲ開一同內院拜見御門ヲ開テ御鎗ヲ廳
舍前ノ置石ノ際ニ一同蹲踞北向一薦番打渡侍ト申テ退
出宮司氏長束帶神拜祓承公文所行迹布衣番文吉書判畢以ニ出
納ニ三四神主之館雖被送迄館モ不被參之間無
判於ニ廳舍ニ政所奉ニ捺印彼箱ヲ出納等ニ令持御倉
ニ奉納歸着之時一同ニ立座一殿ニ參司對面在ニ鋪設
宮司北南面戸ノ東ノ脇神宮南東上北面着座シテ一拜次
公文行高在鋪設西東向番文ヲ讀進次筆ヲ染持參之于時宮司

相可井內神田一町三斗代

朝明郡佐々良井神田二町上分二斗

一志神戶渡神田一町二段在蘇原御厨內但八段神田內三重郡少々在之

志摩國賀茂庄內字懸力神田一町二段稻四十餘束云々

箕曲郷勾庄料田九段之中大覺寺庄三段蓬臺寺庄六段

一諸島々

東船越御厨

大津國崎神戶4

槌柄神戶

伊志賀御厨

大濱御厨

木本御厨

比志賀御厨

菅島御厨

錦御厨

土具御厨政所

坂手御厨

大吹御厨

大久田御厨

右注進如件

迫御厨

二見御厨

(片方御厨)

(伊介浮島御厨)

羽畔蛸御厨

濱賀利御厨

笛御厨

丹島御厨

泊浦御厨

和濱御厨

竈子御厨

南船越御厨

飯高郡大苗代御厨小松原

宇田御園瓜分二町餘也

兩三所一志太郎大夫文清口入

○此處
圖文

外宮神領目錄式冊以權禰宜延經神主之本書

寫出訖

寶永元年甲申四月廿四日

權禰宜從四位上荒木田神主武因

攝津國

中村御厨上分米三石

能登國

能登島御厨廿五石

備前國

長沼御厨上分米

一諸郷祭料

四石繼橋郷近年有名無實此
外上分米三石

一石伊蘇郷

二石田邊郷

六斗沼木郷

二石有爾郷

三石麻績郷

一石三宅郷

二石竹郷

一石四斗長田郷

一石兄國郷

一石神戸里

一諸郷祭料

廿八石飯高郷

十四石安東郷

十四石安西郡政所

廿四石朝明郡政所

一諸神戸祭料

六石飯高神戸政所

四石安濃神戸政所

四石河曲神戸

六石伊賀神戸

二石同新神戸

三石同新神戸

四石同新神戸

一渡神田等

安濃西郡字内田一町五斗代定五石

安東郡片田神田一町四斗代(定米四石)

楠神田一町五斗代定(米五石)

山室松山御厨神田一町三斗代定三石

莫太御厨内神田一町四斗代定四石

立野名寮神田一町所當三石六斗但閏
月之年者加進之

丹河御厨内神田一町二斗代定二斗

三重郡豐岡御厨神田一町五斗代定四石五斗

同郡柴田神田少々

廿四石三重郡

廿八石員辨郡

六石一志神戸

二石鈴鹿神戸

二石幸名神戸

二石尾張本神戸

四石三河本神戸

四石遠江本神戸

濱名神戸祭料八石政所

佐久目御園 勤同前

池田御厨三石

小板御厨三石

山口御厨六石

駿河國

大津御厨白布三十端 雜紙三百卅帖

大沼鮎澤御厨布六端

小楊津御厨三石 雜用米十七石云々

伊豆國

蒲屋御厨銀五十勾

武藏國

七板御厨布二十五端

大河土御厨國絹卅疋 御幣紙四百六十八帖

上野國

園田御厨布卅端

高山御厨布十端

下野國

築田御厨絹廿疋布十端

寒河御厨長日御幣紙三百六十帖 雜紙但近年
絹進之

安房國

東條御厨布五端 長日御幣紙三百六十帖 口入所
行長云々

下總國 相馬御厨布五十端

甲斐國

石禾御厨長日御幣紙(三百六十帖)

信濃國

長田御厨布三百端 神馬一疋

藤長御厨布五十端 長日御幣紙代布日別二丈矢原

御厨

但馬國

太多御厨絹三十疋 上品紙十二帖

田口御厨上品紙五十帖

加賀國

富永御厨米十石名吉五十侯 領家二條東洞
院角懸所

越前國

山本御厨絹六疋

泉北御厨米卅石 長日御幣紙

越中國

弘田御厨米十五石絹十五疋布十五端 □□□□□

綿百五十兩鮭十五侯長日御幣紙

本神戶神酒副布三端各三丈

○此處
關文

新神戶絹一疋內染端等同一

○此處
關文

瀨邊御厨

治開田絹十疋別領上分米
十石宮斗定糸三十兩

酒見御厨

千九垣內御園漆一箇

新溝御厨

御母板倉御厨上分御糶五石料田二丁口入料二石

新溝神領

立石御厨糸十兩

宅美御園

生部御園大豆少々五六斗餘

生栗御園大豆一石

伊福部御厨

草部御園大豆少々

野田御厨

秋吉御園油一升

笑生御厨

下生栗御園大豆一石

柿御園

海東新上分二貫文

高屋御厨 桑代糸廿勾

○此處
關文

瀨邊御厨 桑代糸廿勾

赤曳糸御油等

酒見御厨 桑代糸十勾

三河國

饗庭御厨九石

加後進祈禱
一石五斗
內於上分一石五斗者

六月二石五斗九月二石十二月二石

蓋御園六石六斗

料田六十六丁段別一升
充但同本斗定大器也

吉田御園三石

菓子栗六籠

神谷御厨十石

菓子

蘇美御厨六石

生栗御園油一斗栗二石

伊良胡御厨三石干鯛三十候

野依御厨三石

保袖濱田兩御園一石五斗

又同濱田御園勤月次御幣紙十二帖

遠江國

刑部御厨三石

祝田御厨

小高御厨六石

美園御厨廿石

大墓御園八丈絹二疋 雜紙十帖 葛布一端

豐永御厨三石

大崎御園 雜紙九十帖

大谷御厨一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

岡本御園三斗内 ^九六月三斗九月三斗十二月三斗

多度御園一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

縣御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

倉垣御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

麻生田御厨大豆五斗 ○此處 闕文

阿下喜御厨十石 ○此處 闕文

茂永御厨五斗

富津御厨六石 此外副米一石在之

宇賀御厨三石

大戸御園六斗

石河御厨六斗

御油御園上分米八斗 料田四町段別二升歟
口入人維行神主

桑名郡

富津御厨六石 此外副米一石

桑名郡多度御厨一石五斗

伊賀國

阿保神田三石 口入料一石近代
以上紙十帖進之 内六月一石 九月一石
十二月一石

穴太御園

六月芋 九月栗 十二月菓子

但此加進上分米一石近年進之

神戸神田上分白布十二段二丈并祭料造酒米代白

布九段

若林御園上分米三石菓子

比志岐御園白布六端六月芋 芋歟 (六束九月栗串柿)

六箇山内 上河 比奈知 瀧原

大和國

宇陀神戸白布十八端内六月六端九月六端十二月六

端

此外先分三端 新上分五石云々

近江國

岸下御厨三石 在御上分小鮎鯿六桶
此外口入料鯿六桶

福永御厨三石 但神馬二疋代米二石
又雜用米二石在之

佐々木御厨六石

柏木御厨三石 又新御厨一石

黑丸御厨段別上分 山室新御厨三石云々

美濃國

中河御厨二十五石 長絹十疋

小泉御厨 長絹二十疋

郡戸御厨御年貢

尾張國

田口御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

坂合部御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

金綱御園三石三斗内 六月^{一石}九月^{一石}十二月^{一石}

山田御厨一石

富田納所一石

月讀神田三斗

末永御厨二石

桑名神戶祭料二石

野田御厨上分一石六斗 但田十八町所歟

小泉御厨上分五斗 元三石上分備進濟所也而口口茂福小泉御厨建長二年口口廿二日以前一禰宜行能定口入人件上分三石内以五斗者定上分以三石五斗者可爲二口入料云々

小向御厨一石内 牢籠半分同前

員辨郡

高島御園三石内 六月一石(九十二月一石宛)

松尾御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

萩原御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

治田御厨三石内 但十石割米一石 六月一石九月一石十二月一石

大藁御園一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

留番御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

和泉御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

河島御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

穴太御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

星河御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

梅戸御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

深瀬御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

大泉御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

中河御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

高柳御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

笠田御厨三石内 六月(一石九月一石十二月一石)

長深御厨三石内 六月一石 ○此處 闕文

饗庭御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小中上御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

斗

田中御園五斗内 六月一斗九月二斗十二月二斗

平田御園三斗内 六月一斗九月一斗十二月一斗

藁御園三斗内 六月一斗九月二斗

島田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小田中御園三斗内 六月一斗九月一斗十二月一斗

曾原御厨三石 此外新加 上分三斗 六月一石九月一石十二月一石

島富御厨一石五斗内 六月五斗九月五斗十二月五斗

豐岡御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

庭田御厨四石加進分一石加之定 六月二石九月二石十二月二石

櫻御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

延貞神田五斗十二月進

稻田御厨三石内 六(九十二同二石宛)

永松神田三斗 六(十二月進)

治田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

多米御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

又多米新御厨六斗 六月二石九月二石十二月二石

衣比原御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

垂水御園七斗内 六月一斗九月三斗十二月三斗

長澤御厨一石八斗内 六月六斗九月六斗十二月六斗

吉澤御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

曾井御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

大強原御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

縣御園三石

飯倉御園二石内 九月一石十二月一石

高柳御園一石内 六月五斗九月五斗

小山田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

長尾御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

平田御厨一斗此處闕文

佐山御園三石此處闕文

高岡御園九斗内 六月三斗九月三斗十二月三斗

深溝御厨一石十二月勤之在御油

寬御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小泉御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

又小泉御厨一石五斗御神酒外副米三升 內六月五斗九月五斗十二月五斗

小松御園

鹽濱御園藍五斗

泉野御園三石

河田納所二斗

朝明郡

長松御厨五石但近年四石濟之 內六月一石九月二石十二月二石

南富田御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

北富田御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

岩田御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

保々御園三石内 六(九十二一石宛)

長井御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

小嶋御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

此處闕文

廣瀬御園油三升菓子

莫太御園上分一石五斗米一石麥五斗此外口入料同一石五斗被口入人行宜神主云々

濱田御園鹽二斗

又新濱田御園上分米一斗御費飛魚五連
禰宜維行口入所

鈴鹿郡

原御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

庄野御厨六斗段別
三升 六月三斗九月二斗十二月二斗

那越御園段別三升上分今爲高垣神田備進上分五斗

久賀御園五斗

和田御厨三石

葉若御厨壹町 長日御幣紙濟所四ヶ所神領内

河曲郡

河曲神田三石 近年號三柳新御厨
關文 菓子

山邊御厨一石三斗内 六月白米
三斗九月五斗十二月五斗

成高御厨六石

永藤御厨二石

須可崎御厨六石内 六月二石九月二石十二月二石

若松御厨五石内 六月二石九月一石
五斗十二月一石
五斗

土師御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

箕田永富御厨二石

井戸神田五斗

吉藤光富神田七段上分二石一斗

高垣神田五斗

高富御厨六石口入料六石

林崎御厨六石

三重郡

河嶋御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

高角御厨(一石五斗六九十二御祭五斗宛)

飽良河御厨三石内 六月一石(九十二同)

松本御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

日長御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

日長新御厨三石 六月一石九月一石十二月一石

遠保御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

栗原御厨三石 六月一石九月一石十二月一石

潤田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

池底御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

采女御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

山田御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

野田御園三斗

六月飛魚三百六十候九月

御祭

長屋御園一斗五升

十二月進之

岩田御厨三石內

六月一石九月一石十二月一石

岩坪御厨九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

建部御厨石五十(一石五斗但號栗原六九十二五斗宛)

下内田御厨(一石五斗內六九十二五斗宛)

宿祭部御厨三石

下見御園三斗

泉上御園三斗

小野林御園九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

飯原御園三石內

六月一石九月一石十二月一石

荒倉御園三石內

六月一石九月一石十二月一石

松崎御園九斗五升

垂水御厨鹽九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

燒出御厨鹽九斗內

六月三斗九月三斗十二月三斗

藤方御厨鹽六荷內

六月二荷九月二荷十二月二

豐野御園二斗此外粗二斗

高志御園一斗九月

大繩御園三斗

長岡御厨二斗 三度御祭勤之

小松御園(一石九月五斗)

久松御園(一石九斗內六月五斗九月十二同前)

久松神田三町五段上分三石五斗段別二斗充勤之

但次久松御園田號久松神田歟之ハ有甚沙
汝爲無俊康友神主令知行々々可尋紀也

極樂寺御園六斗

新永松御厨上分二斗 禰宜維行口入所

平田御園上分米六斗 口入人同禰宜維行

縣御園

奄藝郡

大古曾御厨三石內 六月一石九月一石十二月一石

朝明郡南富田營被付之
得田御厨五石

爲元御厨卅石

晝生御厨五石

小林御園粗一石

南黒田御厨三石 六月一石九月一石十二月一石

北黒田御厨粗一石(菓子)

若栗御園粗一石

成富御園三斗十二月

豐國野御園三斗

越智御厨二石五斗

一志郡

年魚御鯨六十六斤六兩祭料米ノ一十五石三斗八合升方

糧料七石在饗料八石分別三斗八升

嶋拔御厨鹽五石內六月三石九月一石十二月一石

八太御厨上分田五町所當二十五石此外雜掌二石五斗取之

小社御厨鹽三石內六月一石九月一石十二月一石

蘇原御厨米三石內六月米一石九月米一石十二月米一石

大阿射賀御厨十三石凡絹十疋於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

小阿射賀御厨十三石凡絹十疋內於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

北黑野御厨十三石內於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

南黑野御厨(十三石內上分三石六九十二一石宛)

木平御園一石

○此處
闕文

稻木御園 荷前神田五斗

箱木御園鹽三石內六月一石九月一石十二月一石

都御園

六月麥一石 九月米一斗

又都御園

六月麥三斗 九月米一斗

北高橋御園

六月麥一石 九月米一斗

八太御園四斗

見長御園三斗

本見長御園 三度御祭菓子勤

一松御厨鹽九斗六月三斗九月三斗十二月三斗

大原御園 六月紙十二帖桶二柄三度御祭勤有

野田御園三石此外三坪一町料上分米一石在之

拜野御園米一石麥五斗

黑田御園米二斗

下牧御園(六月菓子九月米一斗十二月菓子)

西濱御園鹽二(駄二石歟)

利松名上分二石

西園御厨 四个所神領內 長日御幣紙濟所

常富御園

安濃郡

五百野御厨七石五斗內於上分三石者

六月一石 九月一石 十二月一石

小稻羽御厨九斗內

六月三斗 九月三斗 十二月三斗

辰口御厨三石內

六月一石 九月一石 十二月一石

切田御厨三石內

六月一石 九月一石 十二月一石

堺御園三石內

六月一石 九月一石 十二月一石

池上御園一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

深田御園(五斗)

片岡御園米一斗十二月御祭之時備進之

石取御園一貫文新加上分同

熊倉御園(上分米三斗光香口入也)

泉御園

○此處
闕文

飯野郡

伊勢庭御園三斗

黒部御厨三石内六月一石九月一石十二

若菜御厨三石内六月一石九月一石十二月一石

櫛田河原御厨九斗内六月三斗九月三斗十二月三斗

飯野岡御園六月菓子九月^{米二斗}菓子等十二月菓子

治田御園九斗内六月^{菓子三斗}菓子九月^{米三斗}菓子十二月菓子

萩尾御園九斗内六月^{菓子三斗}菓子九月^{菓子三斗}菓子十二月菓子

鞭書御園三斗六月一斗九月一斗^{剛米一斗}菓子十二月一斗

佐福御園九斗内六月三斗九月三斗十二月三斗

二升御園一斗十二月進之

神山御園新開上分九斗七斗光香申之

堺御園神稅麥三斗^{此外口入料麥三斗在之歟}

^{口入人前一禰宜行能云々}

飯高郡

光用御厨(三石 六月一石 後同斷)

勾御厨 (六月 二石 九十二同)

莫太御厨三石内 六月一石九月一石十二月一石

梅田御厨一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

臼井御厨一石五斗内六月五斗九月五斗十二月五斗

忠近御園三石内 六月一石九月一石十二月一石

粥見御園綿二十兩

松山御厨六石^{此外新上分三石}

五箇山御園綿十兩絹四丈布等

手丸御園五斗

立野名御園新上分五斗口入所光香

境御園九斗

松尾御園五斗

深田御園三斗

平生御厨一石

福末神田^同上分三石^{但高宮饗料米十二月十七日勤仕之田數四町三段云々口入人常躬}

位田御園(薙七枚比外先分斬一枚)

丹生山内上河原(御園上分水銀五十兩)

岸江御厨内高宮新神田一町六段^{但段別一升充}上分一斗六升

永用神田一町二段

外宮神領目錄

注進

宮廳御所知諸神領目錄

合

伊勢國

度會郡

高羽江御厨三石内六月一石九月一十二月一石

牛庭御厨三石内六月一石九月一十二月一石

丹可御厨(四石内同前)

有瀧御厨(五斗)六月九月十一月

若田井邊御厨五斗六月九月十二月

無漏御厨二石一斗内六月七斗九月七斗十二月七斗

大橋御園六斗六月菓子九月三斗十二月二斗

宮子御園 汁嶋御厨

小栗生御園一斗六月菓子九月

玉丸御園五斗六月菓子九月五斗十二月菓子

中屋御園三斗 九月三斗

笠服御園一斗

飯倉御園

十二月一斗五升

長屋御園内小林村田島段別五斗

村松御厨上分田廿七町段別七升上分十八石九斗

通諸國

此外參雜克等在之

土保利御園鹽二斗

新開御園鹽九斗

矢田檜皮尾御園一石五斗口入人前一福宜行能敷云々

小俣御園

八斗

沼木郷

上山幡收納使

下山幡收納使口入人行能云々

小中須收納使

積良收納使

宮河々守

濱簀使

岩坂御園上分油三升此外口入料一斗二升在之

葛原御園麥十八斗口入人前一福宜行能小口入賴氏神主

佐田御園二斗菓子三籠此外口入料三斗在之歟口入人雅繼神主云々

多氣郡

四蘭生御園六斗六月菓子九月三斗十二月三斗

齋宮柑子御園六斗内六月二斗九月二斗十二月二斗

濱田御園六月鹽二斗菓子九月鹽二斗十二月米一斗

有三何事一矣僉議雖謂二高宮中門一無下一言及中此
鳥居上世記傍書說不_レ足_レ徵焉

總宮廻大垣一重_{今亡}

儀式帳云總宮廻防往籬貳佰漆拾餘丈福宜內人等戶人夫搨造七十餘丈

氣郡并神戶人夫搨造七十餘丈

神宮雜例集云延長四年四月十一日神祇官符近四至

去三神宮大垣外一四方各肆拾丈寬平五年十一月廿七

日司符備有_二火失事_一殆及_二宮內_一自今以後自_レ宮四

方各四十丈之內居住人宅一切制斷

外御廐一字_{今亡}

儀式帳云馬集廐貳間長各四丈廣各二丈幣帛御馬隱

廐壹間長二丈廣一丈二尺

古老口實傳云外御馬屋邊中堀同云中堀外竝樹

按新任辨官抄云外院此外有_レ隍太神宮年中行事

六月廿三日瀧原竝宮御祭

云々相傳北御門橋外西北五許丈古中堀外御廐舊

蹟也今爲_二堀溝_一其北在家稱_二竝木_一

頭工日記云應永九年二月一頭工國貞等注文六十貫

文外御廐

其南地而改名

大同本記云止由居乃神平度會乃山田原爾令鎮理定理坐其宮之內良角御饌殿乎造立云々其御饌殿乎今號伊屋殿

按伊屋殿者忌火屋殿也古記多作忌屋殿

新任辨官抄云忌屋殿在廳東調備御膳所也

中右記云元永二年五月九日軒廊御卜祭主卿申豐受宮御春殿忌屋殿去四月一日不知名虫多出來恠異

類聚大補任云建久三年豐受宮御春殿供用犯用之

造外宮葺葺員數記云忌屋殿御葺葺分五百圍

忌火屋殿鳥居一基今亡

元亨高宮假殿記云禰宜著忌屋殿南例所鳥居西

腋西上南向

正中御飭記云別宮金物御裝束等次第土宮禰宜參例

所本宮忌屋殿鳥居西腋

物忌子等宿館

儀式帳云物忌五人宿館屋伍間長各二丈廣各一丈二

尺齋火炊屋伍間長各一丈六尺廣各一丈物忌父小內

人等宿館屋伍間長各二丈廣各一丈

今子良館長四丈六尺八寸桁行七間各六尺六寸八分

丈二寸樂行六間各六尺七寸西北各有庇按帳所載之宿館十

五間然今作二字不知何時如斯

新任辨官抄云子娘館在忌屋殿北

物忌齋館院倉一字亡今

儀式帳云倉壹字長一丈六尺廣一丈四尺納木器

物忌齋館院門一間亡今

物忌齋館院垣一重亡今

儀式帳廻防往離長十五丈

按長下十上當有脫字

遷宮要須云內召立事終之後被參玉串所之時於

忌火屋殿前木柴垣之南鼻太麻御鹽湯有之

按木柴垣今猶在忌火屋殿東南蓋古齋館院大垣

之遺乎

北御門鳥居一基在子等館前

今鳥居廣一丈五尺

倭姬命世記傍書云多賀宮鳥居立北門也

按長秋記云長承三年六月廿四日參仗議土宮鳥

居可先是大治三年改社爲宮在否事皇太后宮權大夫時云於高宮荒

祭者各立中門云々令准中門被立鳥居

亦稱鹽御倉

台記云久安三年七月二日先日範家下_二太神宮解狀_一

豐受太神宮御器御倉鑰折損下_レ辨昨日付_二範家_一奏

_レ之八日外記持_二來太神宮倉鑰折勘文_一_二解_三本_一

安東郡專當記云宮中奉納之時供用御料等廿四俵御

器御倉五斗粃量_レ之號_二祓粃_一

盛殿一字_亡今

儀式帳云盛殿長三丈廣一丈六尺

祭大炊屋一字_亡今

儀式帳云祭大炊屋長三丈五尺廣一丈六尺

按右二字竝未_レ考_二舊蹟_一

禰宜齋殿

儀式帳云禰宜齋殿壹間長三丈廣一丈六尺齋火炊屋

壹間長一丈六尺廣一丈二尺厨屋壹間長三丈廣一丈

六尺

按番文云大宮院長上兼酒殿院神宮雜事記云禰宜

職是連日長番古禰宜一員長番_二於當院_一禰宜員歷

_レ代加任齋館地隨_レ時遷轉今禰宜齋館在_二一鳥居

西_二寬文三年所_一建也

嘉祿山口祭記云遣宮使殿_二經_一一殿乾_二廻_一良御_二著

宿館_二畢_一禰宜光高神主宿館也

古老口實傳云宿館事上代萱葺中古萱葺板屋相交云

云近代一向板屋也存_二車寄_一可_二造構_一也齋宮御參宮

之時三所女房在_レ寄_二宿事_一_二事當_一上代神主等乘_レ車

參入之間齋宮御參宮古記云齋宮女房車破損之時

用_二神主車_一云々古人云上代宿館鳥居內大庭也中古

者外御馬屋邊中堀內也近古者中堀外竝樹邊也

御酒殿院御門一間_亡今

御酒殿院御垣一重_亡今

儀式帳云防往籬壹重廻長卅五丈

○物忌齋館院

忌火屋殿一字_亡今

儀式帳云御饌炊殿長二丈二尺廣一丈二尺

今忌火屋殿長三丈_二桁行四間各_一廣一丈二尺_二梁行二間中_一

隔東號_二春殿_一西號_二炊殿_一

同云御井與_二御炊殿_一往還間道百廿丈橋十五丈神宮

雜事記云雄略天皇廿二年依_二勅託宣_一豐受神宮之良

角造_二立御饌殿_一每日朝夕御饌物調備令_二捧齋_一令

_レ參_二向太神宮_一

按忌火屋殿本名御饌殿神龜六年更立_二御饌殿於

貫文與_二葺板文_一矛盾內宮廳舍葺_レ萱見_二兵範記_一遷宮要須云案橋以下之物廳舍東庇之程仁自_レ南始_二氏北方江次第七分_一置之

按今廳舍東面東庇謂_二廳前_一也

調御倉一字_{今云御政印御倉}

儀式帳云倉長一丈六尺廣一丈四尺納_二神酒并御贊等類_一

今御政印御倉長二丈_{桁行三間各六尺六寸六分}廣一丈三尺_{梁行二間各六尺五寸}按元納_二封戶調庸之雜物等類_一於_レ今納_二御贊

年魚等_一

新任辨官抄云御倉三字在_二廳後_一

按三字當_レ作_二二字_一或云酒殿與_二御政印御倉_一之交乾隔有_レ傳稱_二御倉蹟_一之地_上辨官抄御倉三字

在_二廳後_一者其一此歟此說恐非矣帳此院倉二字御倉院倉三字都五字也應永送官符云御倉伍字

古老口實傳云一_二禰宜者雖_レ爲_二假染_一酒殿與_二調御倉_一以北大楠方江不_レ入者也是一_二禰宜退出禁忌方也

按調御倉者御政印御倉也今酒殿坤廳舍後二字御倉南北相竝東面也其在_二北近_一酒殿者御政印御倉也

鎮座傳記奧書云文治元年神祇本記上下代代本系等有_二子細_一而奉_レ藏_二調御倉神體假櫃_一也光晴神主奉行也又御正印銘銅尺一隻別櫃納_レ之也代代儀式本系等同正印櫃內仁加納也

按內宮調御倉仁平以來納_二政印_一古記分明也年中行事寬正遷宮記竝稱_二御政印御倉_一又神宮雜例集云太神宮司印奉_二納於離宮廳調御庫_一當宮亦調御倉納_二政印_一與_二彼宮及離宮院_一同例

皇字沙汰文云十二月晦夜燈油供奉御倉神祝言云豐受皇太神乃酒殿調御倉御竈屋坐留_二字賀御魂神等乃廣前爾恐美恐美申

按承前之例燈油神事一_二禰宜入_一御政印御倉中_一讀_二此祝文_一次到_二酒殿前_一復讀_二同文_一次參_二御炊殿御白殿_一是亦御政印御倉爲_二調御倉_一之證也

造外宮葺萱員數記云調御倉御葺萱分四百五十圍

御器御倉一字

儀式帳云倉長一丈六尺廣一丈四尺納_二雜器并米鹽等類_一

今御器御倉長一丈五尺_{桁行三間各五尺}廣一丈二尺_{梁行二間各六尺}按帳納_二雜器米鹽_一者御器御倉也內宮御器御倉

饗_レ故內人憚_レ之不能_下自_二御膳殿_一直向_中御杵_上枉_レ道偷經_二九丈殿東_一偷字可_レ付_レ意後世齋王不_レ座御膳殿蹟絕山口祭祀神事亡只有_下賜_二大饗之禮_上同日於_二高宮山麓_一所_レ祭者入_二御杵_一操_二心柱_一木本祭之遺法而已據_レ此則御膳殿當_レ在_二直會院北_一今十二月晦燈油神事供_二一燈_一於御廐南官道東傍_二此地當_二直會院北_一疑齋王御膳殿之舊蹟乎

造外宮葺萱員數記云廳舍御廐御饗殿

按本宮御饗殿此記別作_二御氣殿_一知_二御饗殿齋王御膳殿_一也御廐次注_レ之在_二其近_一可_二以見_一又此記之所_レ載皆萱葺也符_二合內宮制兵範記文永記_一

頭工日記云應永十二年造外宮諸殿舍注文廳舍齋王御膳屋子良館

齋王御膳院御門一間_{亡今}
齋王御膳院御垣一重_{亡今}

儀式帳云板垣一重長八丈

按長下八上恐脫_二十字_一

○御酒殿院

御酒殿一字

儀式帳云御酒殿壹間長二丈五尺廣一丈六尺
今酒殿長一丈八尺_{桁行三間}廣一丈二尺_{梁行二間}在_二廳舍北_一向_レ南

同云正月朔日禰宜內人物忌等御酒殿拜奉然即白散御酒供奉

神名祕書裏書云以_二石神_一爲_二正體_一也仍酒殿造替并修補之時奉_レ遷_二調御倉_一也

古老口實傳云酒殿者神居殿也故預出納外雜人輒無_二出入_一者也又人用雜物等不_レ納_二置之_一祭器置方角在_レ之

貞和御飭記云居_二天平賀_一酒殿五口

廳舍一字

儀式帳云務所廳壹間長三丈五尺廣一丈六尺

今廳舍長四丈_{桁行五間}廣一丈六尺_{梁行二間}在_二酒殿前_一向_レ東

新任辨官抄云廳一字在_レ北

按在_レ北者謂_レ在_二正殿北_一

神宮雜例集云保安四年八月廿二日洪水八間廳舍一字件含葺板三分之一破損敷板長押下桁等流損也

按司家記云寬正二年造外宮葺萱要脚注文廳舍廿

直會院御門一間^{亡今}

儀式帳云直會御門長一丈二尺廣一丈

直會院御垣一重^{亡今}

按既有門則有垣可推知^不以垣者缺文也

內宮直會院防往繼廻六十丈

二鳥居一基

今二鳥居廣一丈二尺六寸

車宿殿一字^{亡今神事供奉記云外宮河原殿}

類聚大補任云建曆元年豐受太神宮遷宮今度造^二加

車宿舍壹字^{五間壹而檜皮葺}嘉應以後新立元四間也今度加^二

一間增^二高任^二例募^二別功^二造^二進^二之^一

按車宿未^レ知^二遺蹟^二十二月燈油神事二鳥居外官

道南傍相社乾供^二一燈^二據^下內宮車宿在^中二鳥居

外見^レ之則車宿之趾歟

神事供奉記云寬元四年四月御衣神事大司盛房今日

自^レ京下著只今追可^二供奉^二之由觸送之間於^二外宮河

原殿數尅相待酉下尅參會即參入祇承二人^{一人五位一人物忌}

勤^レ之大麻御鹽湯在^レ之

按外宮河原殿無^レ所^レ載^二諸記^二疑車宿之別稱以下

內宮河原殿院中有^中車宿^上稱^レ之乎恒例於^二一鳥

居祇承參候捧^二太麻^二灑^二鹽湯^二詳^二此文^二則此殿

在^二二鳥居外^二明矣謂供^二燈油^二之地當^レ爲^二此蹟^二

頭工日記云應永十二年二月十二日造外宮殿合注文

百三拾貫文車宿

一鳥居一基

今一鳥居廣一丈九尺

齋王御膳院

齋王御膳殿一字^{亡今}

儀式帳云齋內親王御膳殿壹間長二丈廣一丈二尺御

炊殿壹間長一丈八尺廣一丈二尺

嘉祿山口祭祀云三年十月十五日官下祭物并友光

忌^二奉^二作祭物色節內人等進^二向廳館^二請預持^二參齋

王御膳殿調^二備祭物供物^二申時造宮使隆通朝臣參^二

著一殿云々於^下奉^レ取^二心御柱^二工國澤地祭友貞等^上

者早速成^レ事以^二戊尅許^二自^二齋王御膳殿^二出立偷經^二

九丈殿東入^二御杣^二畢工饗米訖不^レ退出^二之以前自^二

御杣退出

按御杣者高宮山歟雜例集云天永元年工入^二御杣^二

出^二心柱高宮山口^二抑色節內人以^二忌物等^二祀^二山

口神於齋王御膳殿此際造宮使就^二直會院^二賜^二大

外自北戶一參入

按主神司殿南戶者此殿北面有_二南戶_一一殿南面有_二北戶_一二殿南北相向帳以_二二殿_一爲_二一耦_一共稱_二五丈殿_一

同云三頭座者主神司殿前仁向_レ南著座之例也向背_二一殿_一之間今度三頭座許主神司殿良方一丈餘許東乃北反引出天立_レ机向_レ西座一頭方小工者主神司殿乃乾角於御輿宿乃良角指天著流二頭方小工者主神司殿乃良角於九丈殿坤角指天著流三頭方小工者九丈殿中間指天著流鍛冶座元者九丈殿西也今度者御輿宿北仁座以_レ南爲_レ上相作其後座也

按主神司殿前向_レ南著座向背_二一殿_一者一殿在_レ北而南面主神司殿在_レ南而北面故南_二面于中庭_一則一殿在_二其後_一也又主神司殿良角於九丈殿坤角指天著流者可_レ見_下主神司殿之良近_中九丈殿之坤_上然則主神司殿者在_二九丈殿之坤_一復可_レ見焉又主神司殿乾角於御輿宿良角指天著流者御輿宿在_二主神司殿西_一其相去不_レ遠者也凡一殿者南面主神司殿者北面九丈殿者西面御輿宿者東面也

九丈殿一字

儀式帳云九丈殿壹間廣二丈

今九丈殿長四丈三尺

桁行五間各八尺六寸

廣一丈八尺

梁行三間各六尺

按帳長若干丈字缺不_レ明元長九丈故號_二九丈殿_一頭工日記云應永九年二月廿一日頭工國貞等注文貳百三十拾貫文之一殿百六拾貫文主神司殿貳百五十貫文九丈殿帳一殿九丈殿共廣二丈一殿長六丈以其料二百二十貫文一分爲_レ六則一丈料三十八貫三百三十三文計_二九丈殿料_一二百五十貫文則應永時漸衰微殿長六丈五尺餘歟

新任辨官抄云九丈殿神部以下著也檜皮葺

按內宮例寮神祇神部著_二主神司殿_一祭使宮司之從者著_二九丈殿_一年中行事文與_二此稍異_一

嘉祿山口祭祀云安貞二年七月廿二日造宮使殿_隆拜

賀參宮祇承宮掌參向經_二九丈殿內_一向_二鳥居_一任_例

獻_二大麻御鹽湯_一

按九丈殿與_二二鳥居_一相近如此今殿東去_二二鳥

居_一數十餘步也古九丈殿趾可_レ在_二今殿東_一乎

同_事始云一殿外巽方九丈殿內指天大宮三所別宮內人廿餘人著座

按此文九丈殿在_二一殿巽隅_一明矣

今一殿元祿四年再興之殿長六丈桁行七間各八尺五寸廣二丈梁行三間各六尺七寸按直會一殿中絕故一殿之行事假於三

九丈殿一行之俗誤以三九丈殿爲一殿然而月次祭饗應三句司對面等猶依承前著一殿之舊趾

元祿年偶繼絕禮章稍復舊式

新任辨官抄云一殿一字五箇間四度幣并公卿使中臣以上居之有酒肴楹皮葺

按兵範記內宮伍間壹面楹皮葺壹殿此記爲五箇間楹皮葺二宮例昭合又葺葺員數記無載當院

諸殿御輿宿是皆葺楹皮之故也

太神宮式月次云使及宮司以下向多賀宮齊王再拜兩段拍短手兩段退就解齋殿給酒食

按祭使寮官就一殿宮司主神司就主神司殿祭使宮司從者候九丈殿給饗解齋殿者總稱此三

殿也祭禮訖脫木綿鬘漸解謝齋戒之謂乎

江家次第公卿勅使云著直會院入自北戶著西膝座南面兼居使以下酒肴結黑木爲機以繪木葉付機等脚編集敷面作小宮盛

菓子肴物東腋設王以下座更南折設宮司座西南砌下設禰宜座西上北面經賴記不居饗脫白袍著

按使座禰宜座俱西上以近御所爲上也

嘉祿山口祭祀云造宮使神祇權大副隆通朝臣東經帶一殿東外自北戶參入造宮使殿座以西壁中柱

當中心禰宜北座御使座前北座自西第三柱當中心禰宜漸

漸加補殿內座狹之間訪內宮之例依要須申請之處可爲本宮計之由依總官并造宮使殿仰如此改座

按使座元南面此時改東面謂西壁中柱當中心則東西梁行各二間也明矣

司家記云一殿司對面事宮司北座西上南向參退北戶也禰宜南座西上北向自第二柱之本於爲上

廻當殿南廂之南令著也

主神司殿一字亡今

儀式帳云五丈殿長四丈廣一丈六尺

新任辨官抄云神祇官殿忌部卜部著之楹皮葺按倭名鈔云神祇官加美豆主神司以豆岐乃美以訓同

主神司殿作神祇官殿忌部卜部上可有宮司中臣四字神事供奉記云宮司主神司中臣以下著主

神司殿簾中抄云齋宮主神司中臣忌部宮主

嘉祿山口祭祀云三年十月十五日禰宜東引率權任神拜通主神司殿南戶見知工機經一殿東

宿也

同云長承二年五月廿一日內宮禰宜申請御與宿屋可
被_レ加_二今一間_一事元三間也外宮四間也

愚昧記云治承元年九月十五日公卿勅使參宮至_二御
與宿西砌_一列立_北上西面_北至_北先_二是禰宜等列_二同舍
西庭_一舊記北上也如何南上東面
第一彥章與_レ予相對也

按治承元年當_下御_二坐西宮地_一之時_上故列_二御與宿

西_一與_二嘉承記_一合

康曆遷宮記云應安六年御事始祭主忠直朝臣於_二例
所_一有_二手水_一祭主者御與宿殿自_レ北第二間_レ被_レ立
但北一間顛倒之
間見第一間也

按江家次第御與宿前北上東面愚昧記西砌北上西
面此記自_レ北第二間立見_二御與宿東西桁行南北梁
行_一也內宮御與宿南北桁行東西梁行_二宮制互_二縱
橫_一

內御廐一宇

儀式帳云御廐壹間長三丈五尺廣一丈六尺

今御廐長一丈六尺廣二丈四寸按今御廐者內御廐
也三代實錄云貞觀六年勅加_二置豐受太神宮御馬
飼內人一人_一以_二元御馬二疋_一充_二飼內人一人_一也

中右記云長承四年二月十五日軒廊御卜外宮樞御
馬斃事愚昧記云嘉應元年十二月月次祭左少辨爲
親云外宮御馬斃之由進_二宮司解狀_一撰_二日次_一追可
被_レ引獻_一古老口實傳云御馬芻諸鄉符大豆禰宜
巡役口實傳嘉元一禰宜行忠之所_レ記也此時秣_二樞
馬_一如_レ此近世雖_レ有_レ廐無_二養飼_一居_二木馬形_一徒
存_二其名_一耳

遷宮要須云總官御參籠時經營作法本宮御神拜其間
禰宜兼天集_二會于內御馬屋以西槻木之本_一總官神拜
之後被_レ著_二于一殿樞之內_一

古老口實傳云朝夕御饌供進最中不_二神拜_一也供進之
時參會人禰宜子良退出之程者內御馬屋邊候也

按以下御饌殿在_二其西_一殿在_二其南_一見_レ之則今御
廐者內御廐也

造外宮葺萱員數記云廳舍御廐御饌殿

按所_レ載_二此記_一者皆葺_レ萱也內宮之例兵範記云肆
間萱葺御廐

直會院

一殿一字頭工目配作三一之
殿帳云五丈殿
儀式帳云五丈殿長六丈廣二丈

御倉

造外宮葺萱員數記云御稻御倉御葺萱分四百五十圍鋪設御倉御葺萱分同前懸稅御倉御葺萱分同前

按三字御倉徒觀迹於舊墟無知其制然古葺

萱如_レ此今內宮御稻御倉獨存有葺萱上_二千木_一

經木上

應永送官符云鑰伍枚_{御倉}

按此院倉三字合酒殿院倉二字都五字

御倉院御門一間_{今亡}

御倉院玉垣一重_{今亡}

儀式帳云玉垣一重廻長卅丈

御輿宿殿一字_{今亡帳云御輿停殿元亨記云玉串殿}

儀式帳云御輿停殿壹間長三丈五尺廣一丈六尺

按太神宮式云齋內親王至板垣門東頭下與據

此則古御輿宿在荒垣東傍分明下與者下葺

輿御腰輿也

新任辨官抄云御輿宿齋王御輿容也檜皮葺

按儀式帳云齋內親王致板垣御門氏御輿留氏手

輿爾移坐氏參入

江家次第_{公卿}勅使云禰宜等五人束帶_{袍上著白生絹腋關著木綿臺}列立

於御輿宿前_{北面上}使使相向列立砌下_{西面內人昇高北上}

机二脚立_{前忌部置御幣等於机上}

按禰宜列立御輿宿前御輿宿東面在玉串所西

是則御座東宮地之例也

勅使部類云承保元年七月三日公卿勅使參宮至御

輿宿前神主五人_{件神主等著木綿臺袍上著白絹腋關}列立_{北上次僕官經}

信進_二手水_一

按承保元年當御座東宮地之時上

同云嘉承二年二月十六日公卿勅使參宮使等立御

輿宿西砌下_{北面上}禰宜六人向立_{南上}先是昇立神寶

引立御馬

按上二條列立於御輿宿東此列立於御輿宿西

參差如_レ此嘉承二年當御座西宮地之時上故玉

串所在御輿宿西南上當爲北_上

中右記云永久二年二月三日_{雨降}公卿勅使參宮入御

輿宿屋中立先正員禰宜六人束帶列立此屋中太

神宮司并使使皆列立_{雖可列庭前依雨列屋中也}

按司家記云雨儀時玉串供奉御輿宿內也元亨高宮

假殿記云於玉串殿前禰宜與宮司對拜頭工日記云應永九年注文百五拾貫文玉串所皆謂御輿

御稻御倉一字_{亡今}

儀式帳云倉參宇長各一丈六尺廣各一丈四尺一字

納正殿寶殿御鑰

按古納御鑰蓋御稻御倉歟內宮制以御稻御倉爲首調御倉次之竝立於同地當宮調御倉立酒殿院中與此御倉異地

新任辨官抄云御稻御倉一字在廳異角

按今十月初午神事御稻奉下請印訖於東宮地北御門外北道路大物忌父向北修祓此地當廳舍巽隅疑御倉院之趾也神宮雜例集云十月底午外宮神態古老口實傳云十月宮崎御常供田御稻奉納神宮雜事記云長曆四年七月廿六日豐受太神宮正殿寶殿等顛倒仍御氣殿平洗淨天御體平奉遷鎮同廿八日御稻御倉平洗淨奉遷神寶物利鋪設御倉平洗淨天御絲絹等平奉納了外幣殿平洗淨天御膳平奉備按御稻御倉鋪設御倉共與西宮御饌殿相近如此長曆四年者當御座西宮地之時謂初午修祓之地在東宮地北與西宮御饌殿近

神宮雜例集云保安四年八月御稻御倉板敷之上水二寸許滿登御糲少々所濕損也景道季連等沙汰安西

郡御神田去年所當御糲不供進之上今又有此事仍御料殆可及闕怠

康曆遷宮記云永和三年四月奉入御稻御倉壁

懸稅御倉一字_{亡今}

儀式帳云倉一字納懸稅并御田荊稻

遷宮要須云御裝束等以宮中下部奉納于調御倉云々內物忌等以仕丁等令汲水洗假殿之後申事由於長官并禰宜于時著衣冠各列參于廳舍檐物忌案於廳舍南檐妻東西止二脚昇立之奉取出御裝束案之上仁置之禰宜西上蹲踞爰大物忌父致解除其後案於內物忌并副物忌等昇氏懸稅御倉與鋪設御倉之中間於通天北鳥居於入

按神宮雜事記之文見御稻御倉鋪設御倉其近於御饌殿今謂通懸稅御倉與鋪設御倉中間因知三字御倉相竝在於廳舍與荒垣北鳥居之際符合帳謂倉參宇之文嚮謂初午修祓之地爲古御倉院趾明矣

鋪設御倉一字_{亡今}

儀式帳云倉一字納鋪設

嘉祿山口祭記云山口木本兩祭宮下祭物安置鋪設

荒垣東鳥居一基_{亡今}

荒垣西鳥居一基_{亡今}

康曆遷宮記云永和三年六月一日荒垣西者自正殿

通以南奉立之但東以下鳥居際一間者不奉立

之未立三方鳥居之故也十三日同東鳥居立之

頭工日記荒垣鳥居內間乃廣一丈二尺東西同又云六

十貫文荒垣東鳥居

按內宮今唯西鳥居一基存之當宮曾有西鳥居一

可_レ知

荒垣北鳥居一基_{亡今}

康曆遷宮記云永和三年六月一日北鳥居之以東荒垣

奉立之

頭工日記云北鳥居內間乃廣一丈二寸又云六十貫文

荒垣北鳥居

荒垣一重_{今亡亦云板垣}

儀式帳云板垣廻長百十六丈

神宮雜事記云治曆四年二月荒垣外御氣殿良方當天

牛產

神宮雜例集云保安四年八月廿二日大風洪水外宮荒

垣廿三間柱八本流失伴御垣東面八間未申角十三間

西面一間北面一間流損也者神主注文云彼荒垣本自傾倚破損之上依大風洪水彌以損失也番直宿衛之間非無事恐早可被修造

勅使部類云長治二年八月十九日公卿勅使參宮從

御殿東荒垣外鹿走出南入高宮山

康曆遷宮記云永和三年二月廿九日南鳥居西方荒垣

奉立之六月一日新宮南東荒垣大畧奉立之抑新

宮東方荒垣者東宮乃西乃荒垣_{與外仁奉立今御座}

爲先例之處東宮乃荒垣乃本在所_{爾奉立}之條違

失也十月廿七日東方荒垣三尺許寄東立改之以

前東宮荒垣乃在所仁立之間改之也先度之儀希代之

失錯哉

按此時建新宮於西宮地將有遷幸謂今御座

方者東宮地也詳此文則知西宮東荒垣入於

東宮西荒垣裏其交三許尺_上

頭工日記云荒垣柱長九尺口太九寸五分覆廣一尺五

分緣厚二寸〇四寸

按右文四寸上可有中字內宮荒垣有覆出文

永記請屋日記_{文見下內宮下}可并考

○御倉院

造之由依仰募別功造進之一

按此云萱葺辨官抄云荒垣中殿皆萱葺疑宿直舍在荒垣中乎今下部等番直屋在玉串門邊

第四御門一間外玉垣南門也承保記云第一門

今第四御門長二丈五尺三寸桁行三間中間一丈二尺三寸左右間各六尺五寸廣一丈三尺梁行二間各六尺五寸自第三鳥居至此三丈七尺

五寸

太神宮式云朝使進入外玉垣門當內玉垣門竝皆跪

勅使部類云承保元年七月三日公卿勅使參宮入第三鳥居

次入第一門各居石壺座

按此第三鳥居者荒垣鳥居也始自一鳥居數之與儀式帳江次第謂第二鳥居異也第一門者第四御門也除鳥居自外初數之則此御門當第三

一

新任辨官抄云外玉垣御門號四御門也

康曆遷宮記云永和三年正月十三日奉懸第四御門

千木

頭工日記云第四御門千木長二丈六尺七寸六八廣六寸七分厚四寸組目上一丈二尺五寸御戶廣三尺一寸

九分二枚合定厚二寸

應永送官符云四御門鏤釘覆金伍枚

外玉垣東御門一間

按承前之例三節祭御遊事訖禰宜自中重直退出

東不經第四御門據此推之古外玉垣有東

門直出荒垣東鳥居無疑也

外玉垣西御門一間

儀式帳云內人物忌等波西玉垣御門內方列東方

向跪侍

按今時物忌父等列禰宜石壺西東面詳此文則

外玉垣有西門炳焉

外玉垣北御門一間

外玉垣一重

儀式帳云廻長九十六丈

荒垣南鳥居一基亦云板垣門承保記云第三鳥居頭工日記云冠木鳥居

今鳥居廣二丈自第四御門至此四丈四尺

康曆遷宮記云永和三年十一月十二日荒垣大鳥居立

之

應永送官符云荒垣鳥居壹基鋪拾捌隻

頭工日記云冠木鳥居柱長地上二丈九寸五分

在此鳥居西腋一是自瑞垣門初數之爲第三蕃垣門不充其數

康曆遷宮記云應安六年十一月十二日新造宮使祭主忠直朝臣神拜御火二續神拜之時如例御火者自三鳥居之左右差上之

按揭松明於三鳥居者以下使石壺在此鳥居東傍上也

御饌殿一字

儀式帳云御饌殿長一丈廣一丈

今御饌殿南北二面各有扉長一丈九尺五寸桁行三間中間五尺八寸左右間各六尺八寸分廣一丈三尺梁行二間各六尺五寸按帳長廣丈同當有闕文誤字

新任辨官抄云荒垣之內御食殿如寶殿有千木堅魚木每日二度御膳供之屋也朝未明夕秉燭程供之內宮御膳同供于外宮此殿也

應永送官符云御氣殿南北御戶鏤釘覆金捌枚徑貳寸花形

御饌殿御門一間在北面

今門長八尺八寸

御饌殿瑞垣一重

神宮雜事記云神龜六年宮司千上蒙宣旨豐受宮外

院建立御饌殿一字瑞垣一重

今御饌殿瑞垣東西徑三丈九尺南北徑三丈四尺廻長十四丈六尺除門八尺八寸殘十三丈七尺二寸

御饌殿北鳥居一基

今御饌殿鳥居廣九尺自御門至此二丈三尺三寸

外幣殿一字或云幣帛殿

儀式帳云幣帛殿長一丈廣一丈二尺

今外幣殿長一丈七尺四寸桁行三間各五尺八寸廣一丈梁行二間各五尺

按揭帳長廣丈尺倒錯當有闕誤此殿南去內玉垣北一丈一尺三寸

新任辨官抄云外幣殿在正殿後瑞離玉垣等外也舊損神寶幣帛納此殿作樣如東西寶殿

按玉垣謂內玉垣也外幣殿在正殿後乾隅

宿直屋三間今亡

儀式帳云宿直屋三間長各一丈四尺廣各八尺

按宿直屋不知舊趾祠官番直廢三句交替以歷名附神宮司無其實

類聚大補任云建曆元年豐受太神宮遷宮今度造加宿直舍壹宇四間萱葺嘉應始造立建久不造之今度可

在三鳥居內_二異_三於內宮之制_一且於_三兩殿中間_一奏_レ舞見_二年中行事_一詳見_二手_一今內宮齋王候殿在_二鳥居_一外_二依_三承前_一奏_二舞於鳥居外_一當宮例奏_二舞於鳥居_一內_二凡內宮齋王候殿北面與_一古記_一合當宮齋王候殿南面見_二新任辨官抄_一二所太神宮之造制向背進退互_レ例如_レ合_二符節_一

太神宮式云齋內親王參_二入度會宮_一入_二外玉垣門_一就_二座於東殿_一門內東西各有_二一殿_一東殿設_二齋內親王座_一西殿設_二女孀等坐_一

按門內東西殿者東齋王候殿西舞姬候殿也

中右記云永久二年二月三日公卿勅使參宮使々參進

著_二御子宿屋_一

數_二半帖_一爲_二子座_一是依_二雨儀_一也

晴時著_二前庭石壺_一

新任辨官抄云外玉垣內御子殿二字

南面在_二東西_一六月九月十二月御祭齋

王參_二候_一此東殿

按御子殿二字其一齋王候殿其一舞姬候殿也兩殿以_レ爲_二東西一雙_一此書同稱_二御子殿_一

同云荒垣有_二鳥居_一此中號_二內院_一殿皆萱葺千木堅魚木有_レ之門又同

按齋王候殿舞姬候殿內院之殿也古有_二千木堅魚木_一可_レ推知_二諸書稱_二內外院_一有_二不同_一大概瑞垣

中稱_二內院_一

司家記云兩儀時齋王候殿自_二第三間內敷_一宣命之半帖_二也_一

按太神宮年中行事云自_二西第二間前方半疊敷也_一殿四間自_二西第二間者自_一東第三間也右文自下第上可_レ有_二東字_一

康曆遷宮記云永和二年十月廿一日於_二舞姬候殿_一工等奉_レ作_二御船代_一

造外宮萱葺員數記云齋王候殿御萱葺七百圍已上貳拾貳百舞姬候殿御萱葺分同前已上貳拾貳百文

按古齋王候殿舞姬候_二殿落_一萱葺如_レ此

垣三鳥居一基

俗云小鳥居又云四鳥居

今鳥居廣一丈六尺四寸自_二玉串御門_一至_レ此六丈

二尺五寸

江家次第公卿勅使云入_二於第三鳥居_一立_二幣案於第二御

門外_一齋部屈_二身跪_一地又云禰宜等候_二第三御門內西

腋庭中石壺座_一

按此玉串御門爲_二第二御門_一儀式帳中右記勅使部類亦同且外玉垣門號_二第四御門_一此鳥居在_二其中間_一則爲_二第三御門之名義分明也到_レ今禰宜石壺

申乎受取第二御門奉_{先太神宮司東}置_{方次禰宜西方}

勅使部類云承保元年七月三日公卿勅使參宮把禰宜等玉串置第三門腋次神人進出申開御鑰封之

_{御鑰鑰居案上}
_{立第二門外}

按玉串置門腋御鑰居門外皆謂玉串御門也

第三當作第二同書下三作二

同云嘉承二年二月十六日公卿勅使參宮御殿前中門

外昇立神寶引立御馬云々取宮司禰宜等玉串

立中門東腋

中右記云永久二年二月三日公卿勅使參宮取玉串

置二門腋

頭工日記云御門鑲廣四寸厚二寸三分

按此文載瑞垣門下第四門上疑御門上脫玉

串二字_{歟倭名鈔云戶少漢語抄云戶乃帖木按蓋兩扉所合之木也}

內玉垣北御門一間

神宮雜例集云外宮伊向神事一禰宜申詔刀從北

御門內玉垣外參入

今門長一丈一尺寬文九年玉垣再興竝建之

內玉垣一重

儀式帳云廻長六十二丈

今玉垣東西徑十四丈九尺南北徑十七丈五尺都廻

長六十四丈八尺_{除南門三丈一尺北門一丈一尺殘六十丈六尺}依寬文七年

十月廿日大司精長朝臣申請同九年再興之

新任辨官抄云內玉垣之中無屋又東西北三方者相

去六許尺

按今玉垣去瑞垣東西各六尺四寸五分去北九

尺八寸

頭工日記云永享六年八月一頭工近弘註文百四十五

貫文玉垣二重

齋王候殿一字_{帳云齋內親王殿中右記云御子宿屋今亡帳云}

舞姬候殿一字_{女孺侍殿}

儀式帳云齋內親王殿長四丈廣二丈女孺侍殿長四丈

廣二丈

今齋王候殿元祿五年再興之二殿長四丈_{桁行五間各八尺}

廣二丈_{梁行三間各六尺六寸六分}

同云齋內親王致中重殿就御座即太神宮司御鬘

木綿并太玉串_乎捧持氏第三御門內爾候即命孺罷出氏

其御鬘木綿并太玉串乎受取

按內宮之例帳雖有_下司捧鬘木綿等而無_下捧於

第三門內之文_上因知當宮齋王候殿舞姬候殿者

東西寶殿一奉_ニ納御調御鞍_一

瑞垣南御門一間

儀式帳云御門肆間長各二丈廣各一丈五尺

今瑞垣御門長二丈二尺_{桁行三間中間一丈一尺左右間各五尺五寸}廣一丈

一尺_{梁行二間各五尺五寸}按肆間當_レ作_ニ參間_一瑞垣御門玉串

御門第四御門也今三門長短廣狹稍有_ニ不同_一太神

宮式云度會宮裝束三門幌三條

新任辨官抄云瑞籬玉垣等有_ニ御門_一瑞籬御門第六

門也

按始_レ自_ニ荒垣鳥居_一數_レ之則瑞籬御門當_ニ第六_一

瑞垣北御門一間

今門長一丈一尺

瑞垣一重

儀式帳云廻長五十丈

今瑞垣東西徑十三丈七尺九寸南北徑十三丈四尺

二寸都廻長五十四丈四尺二寸_{除南門二丈二尺北門一丈一尺殘五十一丈一尺}

二

康曆遷宮記云應安八年七月十二日二頭代有繼來云

新宮瑞垣御門柱根自_ニ本宮_一者三尺寄給之間寶殿止

相近同北御門毛二尺寄_レ北事同前也可_レ爲_ニ何樣_一哉

作所毛_レ被_ニ存知_一工毛不_ニ存知_一任_ニ東宮之寸法_一

自_ニ古穴_一三尺寄_レ南自_ニ昨日_一堀_レ之言語道斷仁地堅

候也止申_レ之予_{編宜}元尙引_ニ見記錄_一之處西宮瑞垣御門并

同北御門三尺寄_レ北事祖父長官嘉元記分明之間令_ニ指南_一

指南_二

蕃垣御門一間

儀式帳云蕃垣參重長各二丈

今蕃垣御門長一丈一尺參重當_レ作_ニ壹重_一各字衍

文自_ニ瑞垣門_一至_レ此一丈六尺七寸今見存之外不

聞_下別有_中遺蹟_上內宮之例亦蕃垣一重也

中右記云天永二年四月九日伊勢豐受宮蕃垣御門依

風顛倒

玉串御門一間_{內玉垣南門也帳云第二御門嘉承記云中門}

今玉串御門長二丈一尺_{桁行三間中間一丈三左右間各九尺}廣一丈四

尺_{梁行二間南間七尺五寸北間六尺五寸}自_ニ瑞垣門_一至_レ此三丈一尺此門

及第四門近世無_ニ千木鏗木_一亦無_ニ門扉_一寬文造宮

再_ニ興千木鏗木_一九年八月廿一日廳宣云繼_ニ三百

秋來之絕_ニ二門千木崇起興_一二百餘年之廢_ニ玉垣

一重長廻

儀式帳云大物忌父發太神宮司禰宜乃捧持氏留太玉

豐受皇太神宮殿舍考證

豐受皇太神宮權禰宜從四位上度會神主延經撰

大宮院

正殿一區

儀式帳云長三丈廣一丈六尺

今正殿長三丈三尺六寸桁行三間各一丈一尺二寸 廣一丈九尺行梁

二間各九尺五寸

東寶殿一字

西寶殿一字

儀式帳云寶殿貳字長各一丈六尺廣各一丈二尺

今寶殿長一丈九尺五寸桁行三間各六尺五寸 廣一丈二尺梁行二間各六尺

各六尺

新任辨官抄云舊神寶取_二納西寶殿_一幣絹絲納_二東寶殿_一

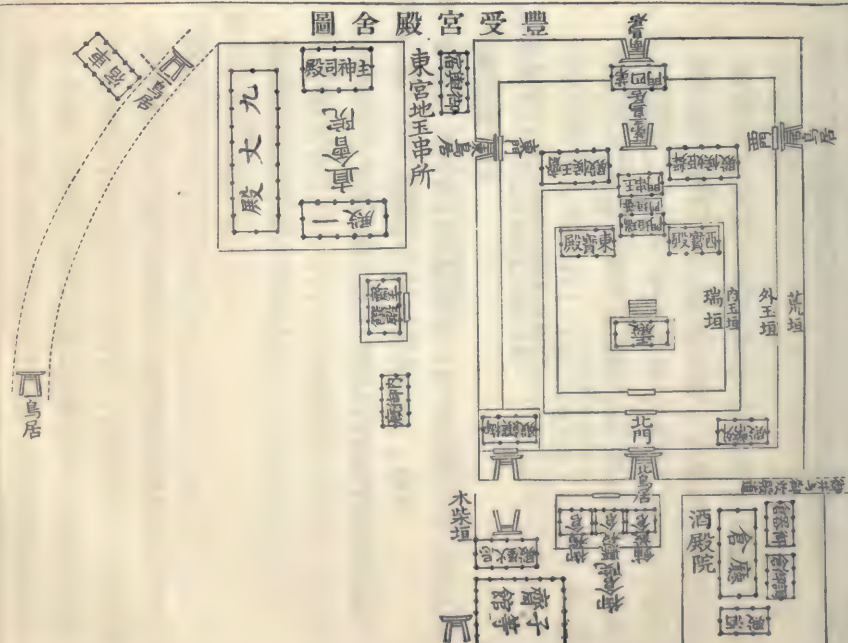
殿一

勅使部類云天德四年九月神嘗祭豐受宮御鞍西寶殿

不被_レ開仍奉_二納外幣殿_一

神事供奉記云延應二年九月外宮御祭二五禰宜參_二

豐受宮殿舍圖



請屋日記云應永十五年一頭工兼安等注文外御廐八十貫文

禰宜齋館院門一間

禰宜齋館院垣一重

儀式帳云防往籬一重長廻五十丈

禰宜齋殿

儀式帳云齋殿壹間長二丈弘一丈炊屋貳間齋火炊屋一間大炊屋一間竝長一丈五尺弘一丈厨一間長二丈弘一丈

按延曆時禰宜齋館當_レ在_二今御厩邊_一自_二御厩前_一出_二一鳥居內_一之路號_二之中道_一於_レ今隨_二神事之日_一禰宜於_二此道東傍_一齊_レ列進退常經_二中道_一憶是雖_下歷年久而有_中齋館地遷轉_上猶此一_レ事守_二舊例_一無_二敢變_一焉兵範記云仁安二年燒_二失禰宜內人等宿館伍拾捌字_一萬治元年聯_二建正員禰宜齋館_一一鳥居西同三年有_二洪水_一漂沒寬文元年移_二一鳥居東_一是今齋館也

年中行事云交替事維北宿館祇候長官時廳舍參申例也又云從_二一鳥居前所_一東荒祭御前西山河行道以南以北堺也自_二件道_一南外院內也自_二道北以北_一也以_レ是各別_二四至堺_一也以南宿館祇候長官時旬日番交替於_二私宿館_一申行例也其次第_上廉_上一禰宜着_二衣冠_一以_二笏_一向_レ南候三色物忌父等前庭以_レ東爲_レ上各北向蹲踞

高倉殿一字亡

儀式帳云禰宜齋館院倉一字長一丈八尺弘一丈五尺

按帳齋館院中載_二倉一字_一厩一間如_レ今御厩北有_下稱_二高倉殿_一之石壇蓋以_レ有_下神祇官號_二高倉_一見_レ之則所謂倉當_レ爲_二高倉殿_一

寬正遷宮記云御樋代御船代并_レ令_二朽損_一御裝束御神寶等之落散塵芥悉高倉殿奉_レ納高倉殿寶殿令_二退轉_一顯露之間以_二兩所相殿御座板_一覆藏

按高倉殿古以_レ在_二齋館院內_一而垣牆周備收_二神寶_一

永正記云古物御樋代御船代等莫_レ及_二顯露_一高倉殿奉_レ納_レ之外宮者藏宿館中所_レ令_二秘藏_一也

按古物御樋代等外宮者藏_二宿館中_一因知納_二古物高倉殿_一者禰宜齋館院倉也

外御厩一字

儀式帳云禰宜齋館院厩一間長二丈弘一丈五尺

今御厩長二丈四尺廣一丈五尺

兵範記云外院肆間板葺櫪御馬勞飼館壹宇

按今御厩在_二外院_一卽外御厩也古以_二內御厩近_一宮垣別置_二此厩_一時勞_二休櫪馬_一中右記長承二年請_下以_二內厩_一移_中禰宜館邊_上者舊依_下此厩在_中館中_上也

御裝束宿殿一字亡今

儀式帳云御裝束宿殿長二丈廣一丈

車宿殿一字亡今亡帳云御與宿殿

儀式帳云御與宿殿長二丈廣一丈

按此院御與宿納齋王齋與及女官副車帳云齋內

親王暫侍坐於外川原殿院即召手與參入年中

行事云三所曹司乘車迄河原殿也儀式帳雜事

記竝爲御與宿而與上載御與宿異也大補任文

永記請屋日記文安記竝爲車宿見其同在河原

殿院中蓋一字二名歟

神宮雜事記云承平四年六月十七日齋內親王雅子內親王

依例太神宮仁入御依御與宿院內有穢御與違九丈

殿西砌仁宿置

按御與宿謂之院者以在川原殿院中也齋王

避川原殿穢御直會院雜事記寬平四年康平五

年共有此例寬平條云一殿乃西砌仁御與寄天於

九丈殿西砌御祓文見康平條云一殿西砌御祓其

祓子西砌者因祓所在川原殿西也以一殿南

面九丈殿東面見之則蓋川原殿在祓所東一向

南御與宿在其坤一向東歟

類聚大補任云承元三年遷宮今度造加五間一面檜皮
葺車宿舍

按造加言增間數也豐受宮車宿亦建曆造加

文永遷宮記云車宿兩方長押同板敷乾角西北半壁作

レ之

按謂西北壁似車宿東面也

同云河原殿車宿又云殿舍分配河原殿十車宿二十

鳥居宮掌上萬一二兩
人任先例賜之

按車宿上載河原殿下載一鳥居據次第推

之則知其屬河原殿院在一鳥居之內請屋日

記

文安假殿記竝云車宿河原殿

御厠殿一字亡今

儀式帳云御厠殿長一丈廣八尺

川原殿院御門一間亡今

川原殿院御垣一重亡今

儀式帳云防往籬一重長廻四十丈

一鳥居一基

今一鳥居廣一丈八尺四寸

○禰宜齋館院

二、鳥居一基

今二鳥居廣一丈七尺

○齋內親王川原殿院

川原殿正殿一字_{亡今}

日本紀_{仁垂}云倭姬命隨_仁太神教_仁其祠立_仁於伊勢國_仁因

興_仁齋宮于五十鈴川上是謂_仁磯宮_仁同齊_仁云川上此云

箇播羅

倭姬命世記云倭姬命宇治磯殿乃磯宮坐給_{利倍}奉_{利倍}日神

祀_止無_止倦焉同云奉_止遷_止於五十鈴川上_止之後和妙

之磯殿乎同興_乎于五十鈴川上側_乎令_乎倭姬命居_乎焉于

時天棚磯姬神令_乎織_乎太神和妙御衣_乎給_{利倍}是名號_{利倍}磯

宮矣

按磯宮靈蹟經_二千載_一無_二人知_一也或謂_二之神宮之

別名_一甚非矣川原殿三祭齋王所_二着御_一之別館而

在_二五十鈴川上_一神衣祭有_下於_二此殿西_一修_中禊祓_上

似_下機殿所_二因興_一之地_上疑古磯宮者川原殿也乎

儀式帳云齋內親王川原殿一院正殿一區長四丈廣一

丈七尺葺_二檜皮_一

按稱_二正殿_一似_レ爲_二南面_一寬平四年齋王避_二此院

穢_二御_一直會一殿_{詳見}于_上假御_二南面殿_一元以_二此殿向

南之故乎

兵範記云肆間檜皮葺河原殿壹宇

年中行事云齋內親王御參宮次第先御祓件御祓所

自_二御裳須會河渡瀬_一上自_二瀧祭御前_一北中間自_レ河

東也御祓畢之後令_二參御_一之間始_レ從_二寮頭_一次第寮

官等皆御共步行也於_二三所曹司_一者乘_レ車迄_二河原

殿_一也其後者同步行於_二寮御火_一者於_二一鳥居_一止畢

齋內親王河原殿與_二二鳥居_一中間腰與移御齋王候殿

御著

按齋宮式云參_二太神宮_一禊_二御裳洗河_一今祓所在_二

一鳥居南路傍_一當_二瀧祭北_一下文謂河原殿西祓所

此也祓所東至_二二鳥居邊_一此院之舊趾也可_二以見_一

同_{神衣}祭_二云神服神麻績兩織殿神部織子人面等於_二河原

殿之西祓所_一祓勤仕

同云小朝熊神事往古例所河原殿木陰曳_二坊領_一勤

之

文永遷宮記云河原殿板敷西北兩面并北土間長押打

之畢

寬正遷宮記云御裝束御神寶等御著先例河原殿奉

入去永享度_{按永享三年遷宮}件殿不被_二造進_一仍一殿奉_レ入

同云從湯貴御倉下充奉大御饌朝夕大御饌二時之料

兵範記云由貴御饌調備御倉一字

長曆送宮符云中鑲拾具別宮料八具由貴殿酒殿二具

按由貴殿在酒殿東依近御所以東爲先乎

年中行事海贊云於御贊者祝等奉持由貴殿巽方耳迄十六日夜奉懸例也仍造替御遷宮之時件御倉

耳中彼方一枚切殘也

按御贊者荒蠅御贊由貴御饌所供之也

盛殿一字亡今

儀式帳云盛殿長五丈廣一丈七尺說文云盛黍稷在器中

大炊屋一字亡今

儀式帳云大炊屋長二丈廣一丈

按右二字未考舊蹟蓋酒殿院直會院接隣古三

節祭給坏飯群官不可無此二殿

新任辨官抄云內宮蚊屋殿始御與宿在外院

按蚊當作炊御與宿在外院者謂御與宿之中

河原殿院中歟此書參議俊憲卿作載保元二年

事登時有此殿存乎

御酒殿院御門一間亡今

御酒殿院御垣一重亡今

儀式帳云防往籬一重長四十四丈

○物忌齋館院

物忌子等宿館

儀式帳云物忌并小內人宿館五院大物忌齋館一間齋

火炊屋一間厨屋一間宮守物忌齋館屋一間齋火炊屋

一間地祭物忌齋館屋一間齋火炊屋一間荒祭物忌齋

館屋一間齋火炊屋一間已上屋九間各長二丈弘九尺

今子良館長三丈二尺五寸桁行五間各六尺五寸廣同長桁行同

按帳所載之宿館九間然今作一間不知何時

如斯

中右記云永久二年公卿勅使一禰宜忠元申子等宿屋

板葺也早可被葺檜皮

兵範記云伍間貳面板葺物忌子等宿館壹宇

文永遷宮記云子良宿館東西搏風張之

物忌齋館院門一間亡今

物忌齋館院垣一重亡今

儀式帳云防往籬一重長廻七十五丈

年中行事云遠江神戶所進種蓋用殘子良宿館南垣內所奉殖也

都記云承曆四年五月八日庚午被_レ行_二軒廊御卜_一伊勢太神宮燒亡之次納_二酒殿御鞍鐙燒失是不_レ知_二何用_二可_レ被_二新造_一歟否由被_レト也神祇官卜申可_レ被_二新造_一

年中行事云正月十四日夜水量立事占木_ヲ酒殿前置石北端立月影九丈殿西軒酒殿西軒同通指時_{是夜半也}占木影指所_{博士木ヲ}立也_{測月影占年豐凶名水量}

按此文見_二酒殿在_二九丈殿北_一廳舍在_二一殿坤_一而爲_二酒殿在_二九丈殿北_一則同院殿舍異_レ方廳舍在_二西酒殿在_二北畫_レ之爲_二一院_一其形中折_二宮諸院未_二曾見_二如_レ此者_一憶是非_二年中行事之本文_一當爲_二寬正氏經之所_レ加儀式帳云九丈殿長十丈當時九丈殿失_二尺度_一長太不_レ可_二必如_二載帳_一因_二地空間多_一自有_レ倚_二酒殿於其北_一乎以_二水量柱_一爲_二上古事_一欲_レ以_二年中行事_一合_二儀式帳_一齟齬如此神宮雜例集載_二建久元年事_一悉錄_二年中諸祭_一而無_レ立_二水量柱_一也年中行事者建久三年大內人忠仲所_レ記也由_レ此見_レ之水量柱者建久後寬正前其事始起乎不_レ可_レ不_レ察焉

文永遷宮記云酒殿土居奉_レ組_二始_一之又云酒殿四面

板組_二滿_一之又云酒殿立_二宇立_一懸_二三角木_一廳舍一字

儀式帳云務所廳一間長三丈廣一丈七尺

今廳舍長三丈八尺_{桁行五間各七尺六寸}廣一丈八尺_{梁行三間各六尺}

兵範記云伍間壹面堂葺廳舍壹宇

年中行事云正月元日正權神主并玉串大內人廳舍着座自_二東間_一入打板上有_二鋪設_一禰宜北東上南面玉串

西東面政所南北面

同云印鑰請取次第自_二鳥居_一參_二廳舍_一自_二西間_一入_二北方打板上自_一東第二間_一著座政所南方打板上長官

向祇候

由貴殿一字_{帳云湯貴御倉兵範記云由貴御饌調備御倉}

儀式帳云酒殿院倉二字長各一丈八尺廣一丈五尺

今由貴殿長六尺_{桁行三間各二尺}廣四尺一寸_{梁行二間各二尺五分}小門

一間廻垣一重在_二一殿北_一按今由貴殿之制甚微且

別有_二門垣_一不適_二古凡直會院在_レ東酒殿院在_レ西

由貴殿是酒殿院之倉也何在_二直會一殿北_一外宮酒

殿院倉在_二廳舍後_一由_レ此見_レ之由貴殿當_レ在_二廳舍

長隅_一而九丈殿之北立_二酒殿_一一殿之北立_二由貴

殿_一蓋荒廢年久二院垣亡其限不_レ明故乎

按上載直會殿座位皆以_レ西爲_レ下九丈殿爲_二從坊_一則在_レ西可_レ知

文安假殿記云一殿九丈殿主神司殿

按一殿與_二主神司殿_一各橫對_三向南北_二九丈殿傍

_レ西向_レ東縱在_二殿之中間_一此文始_レ北中_レ西終

_レ南

直會院御門一間_今亡

儀式帳云門長一丈三尺

直會院御垣一重_今亡

儀式帳云防往籬一重長廻六十丈_{釋名云籬以柴作之}

按防往籬柴籬也大嘗宮將_レ柴爲_レ垣見_レ式源氏物

語齋王野宮木柴爲_二大垣_一

○齋王御膳院

齋王御膳殿一字_今亡

儀式帳云齋內親王御膳屋肆間長各二丈廣一丈

兵範記云肆間萱葺齋王御饌殿壹宇_{有四面玉垣一重}

年中行事_{月次}云齋內親王貢御者請_三預料米_二祝部并

山守相共於_三齋王御膳殿_一所_レ奉_三調備_一也

文永遷宮記云齋王御膳殿土壁敷居入_レ之又勤行文

云齋王御饌殿葺萱遲到之間所_レ不_レ葺也

嘉曆公卿勅使記云荒祭宮神拜所拜如_レ常次禰宜於_二齋王御饌殿後_一被_レ脫_二明衣_一勅使自_二後戶_一被_レ著_二一

殿

按年中行事_{新年祭}云於_二櫻宮北_一脫_二明衣_一同_{月次}云

於_二酒殿後_一脫_二明衣_一未_レ知_二御饌殿後者爲_何地上

舊趾湮滅無_レ所_レ據帳直會院下酒殿院上載_二齋內

親王御膳院_一文永記云一殿齋王御膳殿主神司殿

文安記云忌火屋殿齋王御饌殿荒祭忌火屋殿

齋王御膳院御門一間_今亡

齋王御膳院玉垣一重_今亡

儀式帳云防往籬一重長廻廿四丈

文永遷宮記云齋王御饌殿四面玉垣奉_レ立_レ之

○御酒殿院

御酒殿一字

儀式帳云酒殿一間長四丈廣一丈七尺底一面

今酒殿長二丈四尺_{桁行三間各八尺}廣一丈二尺_{梁行二間各六尺}按

古酒殿由貴殿當_二在_三廳舍北_一外宮酒殿亦在_二廳

北_一以_二廻垣亡_一酒殿由貴殿倚_レ東遂與_二廳舍_一相離

似_二非同院_一

兵範記云參間檜皮葺酒殿壹宇

按殿名四丈以_二其長四丈也即主神司殿也兵範記爲_二肆間_一在_二一殿南_一三節祭饗主神司於此殿是故稱主神司殿

兵範記云肆間檜皮葺主神司殿壹宇

神宮雜事記云大同二年九月荒祭宮牛斃十八日御祭於_二太神宮神司殿_一奉仕

年中行事_{祭月次}云祭使著_二一殿從_二後戶_一東也向_二南在_二

件殿前立_二明火_一宮司主神司殿中間以_二東爲_二上著

子_二時寮官等參_二彼殿_一史生等六人燭_二火寮頭_一一殿南

座向_二祭使_一著_東方次助次允等參著又坤方砌史生等向

北祇候寮中臣主神司殿宮司座西方座闕置着次同

忌部次宮主次占部次宮主代著也_{皆東}其次北副向

南寮神祇神部等參著_衣中臣後向_{北祇}承檢非違使

二人著次司中下部等著_衣同向_{北參}著也在_二件殿北

方_二宮司前立_二明火_一

按主神司殿座二列皆東上北面神部北副向_二南與_二

一殿坤史生_一向_二北相互也南殿對_二向南北_一可_二證

一殿前立_二炬火_一此殿北亦立_二炬火_一

嘉曆公卿勅使記云家子一人其座主神司殿乃北間東

北引_二坊領_一小文高麗端疊二帖諸大夫十三人其座同

殿西間南東上北面紫端但西間江居廻東面

按諸大夫十三人座東上北面主神司殿南北桁行東

西梁行對_二向_一殿_二可_二以見_一

氏經日次記云文安六年六月十八日主神司殿顛倒

九丈殿一字亡_今

儀式帳云九丈殿一間長十丈廣二丈葺_二檜皮_一

兵範記云玖間檜皮葺九丈殿壹宇

神宮雜事記云寬平四年六月十一日太神宮坤方淵仁

男子一人溺死忽石田山之西腰新道作_二天齋_一內親王

當_作齋王并祭使宮司等參宮但齋宮波_一殿乃西砌仁

按元子女王御與寄_天九丈殿西砌_{仁志}寮司共御祓祭使又同前也

按一殿西寄_二王與_一見_二九丈殿在_二一殿西_一年中行

事載_二九丈殿在_二酒殿南_一詳見_二于_一以_二一殿西酒殿

南_一見_二之則古九丈殿在_二一殿坤_一明矣凡_二二所太神

宮互_二制_一今外宮九丈殿西面在_二一殿巽_一當宮九丈

殿東面在_二一殿坤_一實符合焉

年中行事云鍛山伊賀利神事雨儀時役人等九丈殿候

田態_一一殿內也_{按伊功也賀利茹也農功所}

同祭_{月次}云祭使并宮司等之從坊九丈殿也_{坊神官雜例集}

號_{忌殿}雜事記云_{中臣定實離宮宿坊}

殿荒垣坤角彼神祭祀スル所石疊ニ持參

按石疊忌火屋殿坤櫻宮石壇是也

文永遷宮記云忌火殿者御饌調備之間屏垣四面內所
奉安置御竈木也而西面四間北面參間不造進

○直會院

一殿一字横云五丈殿
式云第一殿

儀式帳云五丈殿一間長五丈四尺廣二丈葺檜皮

今一殿長二丈四尺桁行三間
各八尺廣一丈九尺梁行二間各
九尺五寸按

殿名三五丈以其長五丈也卽一殿也兵範記爲

伍間考古南橫有主神司殿坤縱有九丈殿今

一殿南至官道砌纔三丈七尺五寸何其建二殿

於此狹隘之地然則非古跡可以見焉古一殿

當在下今一殿北去官道砌十許丈上

太神宮式云禰宜內人神郡祝等恩詔位記付四度使

下之使率神祇史一人就直會院第一殿南面坐

以二位記置案上一史喚名給殿前東向被喚名禰
宜內人北上東面重行訖則

奉拜太神拍手
兩段次北向朝拜

按勅使就此殿正位南面三殿中爲首稱第二

殿今畧第三字云一殿

兵範記云伍間壹面檜皮葺壹殿壹宇

按今一殿猥小纔三間帳名五丈殿此記爲伍間
外宮一殿五間見新任辨官抄

正應公卿勅使記云勅使被立座之後櫻宮御前未
天被
參祇承宮掌依申子細任先例一殿後與
利所被
退出也

按古人守舊式如此今一殿以無後戶不能
率由於古禮

嘉曆公卿勅使記云勅使御座一殿東間自第二柱西

敷之四姓副使座後戶西間東上南面宮司座西壁副

南上當作北上年中行
事云以北爲上東面禰宜座自東第二柱本敷

之東上北面

按東間者自後戶東也第二柱者始自良柱數

之當第二也第二柱之西卽後戶東間也後戶一間

東西各二間都五間也使座禰宜座俱東上皆以近

御所爲上

文永遷宮記云一殿壁板皆以入之又云一殿檜皮東

北方同未葺滿又云一殿未葺棟不立後戶不葺

妻庇又云一殿東庇奉葺之棟裏也後戶者未立

主神司殿一字今亡帳云
四丈殿

儀式帳云四丈殿一間長四丈廣一丈六尺葺檜皮

請屋日記云應永十五年十一月十六日一頭工兼安等
注文內御廨八十貫文

古記云文明二年二月神主注進今月廿七日櫛御馬飼
丁等不_レ相隨_二不_レ開_二御廨戶_一出馳_二廻宮中內外院
寺_一之前大庭邊一番直禰宜祠官諸役人等驚騷拜見之
處其粧不_レ尋常_一急戰如_レ控_レ銜有_レ暫而於_二與玉御
前_一自_レ頸流_レ汗如_レ懸_二水其後奉_レ入_二御廨_一畢

按與玉荒垣外乾隅也謂_二自_二與玉前_一入_二御廨_上則

此御廨當_レ在_二與玉之前路西傍_一即御稻御倉後荒
垣外也今外宮內御廨在_二東宮地長荒垣之外路東_一

可_二併按_一焉

○御膳宿院

忌火屋殿一字誤云御膳宿大同
本紀云御饌殿

儀式帳云御膳宿殿二間長各二丈廣一丈

今忌火屋殿長二丈五尺六寸桁行四間各
六尺四寸廣一丈五尺

梁行二間各
七尺五寸按忌火屋殿帳當宮爲_二御膳宿殿_一外宮

爲_二御饌炊殿_一古於_二彼宮_一炊_レ食齋參此宮處此

殿朝夕隨時供_レ焉故彼爲_二炊殿_一此爲_二宿殿_一歟

年中行事祕抄云每_レ至_二神態_一鑽_二火炊爨謂_二之忌

火_一玉葉云神宮之習不_レ用_二火打_一用_二火切_一

大同本紀云皇太神宮倭姬命戴奉天度會宇治乃五十
鈴宮爾令_二入坐_一鎮理給時爾兄比女乎物忌定給天宮內
爾御饌殿乎造立天其殿爾爲_二天拔穗田稻乎令_二拔穗祓_一天
大物忌大字禰奈止共爲_レ令_二春炊_一供奉始支

按大同本紀云止由氣宮御饌殿號_二伊屋殿_一詳見_二手
外宮下_一

神宮雜事記亦外宮忌火屋殿爲_二御饌殿_一帳載_二御
膳宿_一不_レ別載_二忌火屋殿_一名異實同也

兵範記云肆間檜皮葺忌屋殿壹宇

年中行事云六月十六日方々御稻等之中一御方者

於_二忌屋殿_一奉_レ春大物忌子良荒本因
氏女先奉仕至_二于二

三荒祭御方_一者主神司殿奉_レ春然後各於_二忌火屋殿_一

奉_レ炊クヤシト

按物忌子春_二炊料米於此殿_一權_二與于大字禰奈兄

比女_一帳爲_二御膳宿殿二間_一其一春殿歟外宮忌火

屋殿亦中隔東號_二春殿_一

忌火屋殿鳥居一基今亡

文永遷宮記云忌火屋殿鳥居立_レ之

忌火屋殿荒垣一重今亡
儀式帳云防往籬一重長廻十五丈
年中行事小朝熊
御神態云彼社祝告_二自_二由貴殿_一請預忌火屋

予^{大綱音}以下列立^{西面南上}先^{有石室}是禰宜等列立其南^{相去四五尺許}予向禰宜揖禰宜答揖

按御坐東宮地則玉串行事使禰宜南面御坐西宮地則西面年中行事西御坐時者使神主西向也治承元年者當御坐西宮地之時上

年中行事^{祈年祭}云御鹽湯所石壺列立幣使西其西^{○按本文無其}

四二宮司神主東西上各南向于時答拜同時雨儀御與宿內也官幣禰宜東方砌奉居案御馬其際牽立玉串

大內人并大物忌父兄部官幣南方列立以北爲上但西御坐時者西方北上列立使神主西向也^{○今按本文省假字且所々多}

略字

按今時玉串行事用南向儀也無知因宮地

令玉串所更^西南面西面^甲

嘉曆公卿勅使記云勅使四姓副使宮司者自南御門退出禰宜自西御門退出御與宿北答拜如例

按古御與宿在西鳥居南傍是故使司出南門廻南路北行禰宜出自西門相逢道岐對拜

內御廄一字^今

儀式帳云御廄一間長四丈廣二丈船一隻長三丈廣三

尺^{按船係名鈔云槽和名與舟同馬槽也馬寮式云槽長一丈六尺以二艘充二匹櫃字當作槽}

太神宮式云二所太神宮擬飼御馬各二疋簡幣馬內恒令養飼

中右記云長承二年五月廿一日內宮禰宜等申請御廄屋在內院仍有火事恐外院禰宜館邊可被立

也仍本御廄可壞寄者祭主申云尤可然只隨禰宜申可作也者予申云隨祭主申可被行行之

按雖有禰宜請朝議仍舊不被改移歟長承以後之諸記以御與宿內御廄爲中院

兵範記云中院肆間萱茸御廄壹宇

建久假殿記云九年七月六日立假殿柱上棟大司康定朝臣參宮於內御廄前^{天被拜見之一}

按此時營假殿於西宮地謂於內御廄前見其立柱上棟則知御廄在西宮近邊

年中行事^{儀御}云九月十一日自朝迄二十七日夕於

御稻御倉母良并織女所奉織也當番飼丁每朝水平汲機殿仁進

按謂機殿即御稻御倉也使飼丁汲水運御稻御倉者御廄與此御倉不遠可以證焉

文永遷宮記云內御廄雖搔^{ユツリ}棧依^{ユツリ}萱之未到不葺之又云內御廄四面土壁雖搆^{ユツリ}下地未塗之

三鳥居不知爲荒垣鳥居

同云荒垣西鳥居八十貫文

荒垣北鳥居一基今亡

兵範記云荒垣北鳥居一基

年中行事句神拜云興玉宮拜北上躋踞次一座北鳥居前

坪垣砌躋踞

按興玉壇古在荒垣乾隅依寛正三年ヒロクルニ辟中御垣上

今在玉垣隅

文永遷宮記云荒垣北鳥居東柱立替之

請屋日記云荒垣北鳥居弘一丈一尺

荒垣一重今亡帳云板垣

儀式帳云板垣廻長一百三十八丈六尺

文永遷宮記云造宮所沙汰荒垣御門西脇カハ同北三十二

間立柱上下樋盤同覆構二付之

請屋日記云荒垣一重百七十七間又云荒神覆廣一尺

一寸五分緣厚三寸中棟厚五寸

年中行事云宮比神御在所興玉後御所乾荒垣角也矢

乃波々木神御在所御所巽方荒垣角也按宮比庭津日神

共大年神子也神名帳云和泉國大鳥美波比神社國帳作大鳥爾波比社美與爾波首通神祇官座摩羅祭五神中有波比祇神舊事紀云座摩是大宮地之靈波々木神爲大宮地神因祀於此乎

御輿宿殿一字

儀式帳云御輿宿殿一間長三丈廣一丈四尺

今御輿宿長二丈四尺桁行三間各八尺廣一丈二尺梁行二間各六尺

按齋王於河原殿停輦輿御腰輿此殿納腰

輿乎

中右記云長承二年五月廿一日內宮禰宜等申請御輿

宿屋可被加レ今一間事元三間也就中外宮四間

也祭主申云尤可被作加也

按同記永久二年公卿勅使參宮一禰宜忠元云御輿

脫宿屋一間可被作加儀式帳長三丈兵範記爲

肆間則知長承裁下依請諸殿例大抵以一丈

爲一間

兵範記云中院肆間檜皮葺御輿宿殿壹宇

江家次第公卿勅使云禰宜等列立御輿宿南方南面相去四五尺使

使列立其西

按古御輿宿在官道東御坐西宮地則玉串所

在御輿宿之北御坐東宮地則玉串所在御輿

宿之南今御輿宿在官道西玉串所遙相隔在其

東南是故與古記文齟齬

愚昧記公卿勅使云治承元年九月十五日至御輿宿北方

二丈許內方進向東跪列

按古三玉垣有西門如_レ此今三色物忌父等候八

重櫛西_二北上東面

年中行事_{月次}云一禰宜自玉串御門西脇西御門退出

出

按二玉垣屬玉串御門謂西御門者三玉垣西門

也

三ノ玉垣北御門一間_{今亡}

三ノ玉垣一重_{今亡}

儀式帳云廻長百二丈

神宮雜事記云長元四年六月御祭齋王_{博子著}齋王

殿_{俄放}音御託宣_略之十八日四御門東妻乃玉垣二間

遠破開天御與遠寄天內親王遠奉_令退出_{已了}當_{內親王}作_王

抑御前仁御與者有_{制法}天腰與遠用之例也自昔

依_有禁制御門_{與利}不_{寄也}

按四御門東玉垣者三玉垣屬四御門齋王候殿傍

玉垣在_二門內東_一

文永遷宮記云玉串竝四御門西腋玉垣立_レ之

荒垣南鳥居一基_{今亡}帳云板垣御門請_{屋日記云冠木鳥居}

儀式帳云第五重御門參入進第四重倭儻仕奉

按第五重門者荒垣南鳥居也在第四御門外

兵範記云荒垣南鳥居一基

按外宮南鳥居今猶存足以徵焉

年中行事云卯杖二筋南荒垣御門外方左右立同_{祈年}

云一座跪玉串四枝奉_レ之進參南鳥居西柱下南向

立二神主以下同前各宮司立向對拜於四御門在_二御鹽湯_一

按今於四御門下宮司東西面禰宜西北上東面相

秩對拜以此鳥居亡假於此門對立如_レ此

文永遷宮記云南荒垣鳥居東御柱立替之又云南荒

垣鳥居置_二嶋木一打_一冠木

請屋日記云冠木鳥居弘一丈五尺五寸應永十五年一

頭工兼安等注文冠木鳥居百廿貫文

寬正遷宮記云永享三年遷宮南鳥居不被造進

荒垣東鳥居一基_{今亡}

文永遷宮記云四面荒垣鳥居

請屋日記云荒垣東鳥居八十貫文

荒垣西鳥居一基_{俗云三鳥居}

請屋日記云荒垣西鳥居弘一丈四尺

今鳥居廣一丈七尺祠官常出入自_二此鳥居_一俗云

今御器御倉乎當宮鹽御倉亦稱御器御倉二宮同例

鋪設御倉一字_{亡今}

神宮雜事記云永承六年九月十七日御饌供進禰宜等

退出之間見古宮鋪設御倉之跡東方馬落胎

兵範記云鋪設御倉所奉納宮中鋪設裝束料筵疊坊

傾簾等

年中行事_參云一殿鋪設自鋪設御倉出納之手請取

勤仕宮司退出之後出納返上之一

按列御倉四字名兵範記文永記符合御稻御倉

近外幣殿則此列始北終南也兵範記云內院御

稻御倉調御倉鹽御倉鋪設御倉所載文永遷宮

記之分配一禰宜御稻御倉二禰宜調御倉三禰宜

鹽御倉五禰宜鋪設御倉

御倉院御門一間_{亡今}

御倉院玉垣一重_{亡今}

儀式帳云玉垣廻長廿八丈

宿衛屋四間_{亡今}

儀式帳云宿衛屋四間長各二丈

按太神宮式云禰宜_長大內人每旬率物忌父并小

內人戶人等二番宿直又云考文者宮司勘造九月廿五日以前進神祇官宿衛屋廢無遺趾者考績法壤以下祠官失其所職也如今下部番直屋在串門邊而已

第四御門一間_{三玉垣南門也}

今第四御門長二丈五尺_{桁行三間中間一丈二尺左右間各六尺五寸}廣一丈三

尺_{梁行二間各六尺五寸}自第三鳥居至此三丈五尺按文安

假殿記云永享十一年七月神主注進荒垣內未作所

所依關木未作猪鹿牛馬亂入如今三玉垣廢此御

門無扉考古記有御戶如_{此年中行事}祭_{月次}云

御遊祭使四御門下御戶東腋宮司西腋請屋日記云

第四御門御戶弘三尺一寸九分厚二寸長八尺三寸

神宮雜事記云雨氣之時於齋王殿奉仕宣命詔刀

御玉串至子御遊者四御門_{亡今}奉仕之例也

年中行事云祝部等御衣祭以前參本宮從四御門

之玉垣外南荒垣內掃除也

按四御門之玉垣者謂三玉垣也

三玉垣東御門一間_{亡今}

三玉垣西御門一間_{亡今}

儀式帳云內物忌父四人諸內人物忌父等以西玉垣門

鑰封太神宮司御厨置之

按古納御鑰者疑御稻御倉

長曆送官符云大鑰肆具納御稻等倉四字料

按歲時祭典無一不本於年穀四字御倉以御稻爲首者明以食爲重之意乎

兵範記云御稻御倉所奉納每年二度御祭由貴御饌料御稻

年中行事冬季神應云御常供由當年作稻於廳舍懸之後

御稻御倉奉納例也而近代外幣殿與御稻御倉中間懸來也

文永遷宮記云內院御倉四字內於御稻御倉調御倉鋪設御倉三字者葢遲到之間未葢終

按四字御倉並葢宣如此今御稻御倉獨存猶有

不失茅茨之制

調御倉一字今亡文永記云庸御倉嘉元記云調庸御倉寬正記云御政印御倉

兵範記云調御倉所奉安置神宮政印也而炎上出

來之間於件御印者僅所出奉也抑件御印元雖

奉安置酒殿去承曆三年外院燒亡之時於彼殿

依燒損被改鑄下之後所奉安置代々執行禰

宜宿館也而猶依有其恐去仁平年中任其時祭

主下知奉安置彼御倉

按調御倉元納神封調庸之雜物等類仁平以後

合納政印

文永遷宮記云調御倉荒祭宮御倉上棟庸御倉張垂木搏風又云河原祓御神寶自外幣殿庸御倉請預之云々今夕可用先陣之神財返納外幣殿調御倉

按庸御倉者即調御倉也請屋日記御倉名調庸字前後互用古記云嘉元三年正月廿一日伊雜宮御遷宮

官下御裝束自本宮調庸御倉奉出之設分調庸爲二則御倉五字也儀式帳云御倉四字長曆官

符云納御稻等倉四字文永遷宮記云內院御倉四字

寬正遷宮記云文安二年十一月廿八日山口祭奉採

心御柱安置御政印御倉

按外宮調御倉亦納政印稱御政印御倉

鹽御倉一字今亡或云御器御倉

兵範記云內院鹽御倉

請屋日記云調御倉御稻御倉御器御倉鋪設御倉

按豐受宮儀式帳云倉一字納雜器并米鹽等類是

是

是

外幣殿一字帳云外幣殿

儀式帳云幣殿一字長一丈五尺弘一丈二尺

今外幣殿長一丈八尺桁行三間各六尺廣一丈二尺梁行二間各六尺

按外幣殿在正殿乾三玉垣內古記分明近世變

亂古法移於正殿坤西鳥居外

同云春宮坊并皇后宮幣帛并東海道驛使之幣帛及國

國處處之調荷前雜物等納外幣帛殿踰年卽禰宜

給之

太神宮式云廿年一度造替正殿寶殿及外幣殿皆

操新材構造自外諸院新舊通用

兵範記云內院參間萱葺外幣殿壹宇件殿所奉納往

古御神寶等

長秋記云天永四年八月六日大臣仰頭辨問伯卿

云准下豐受宮御他殿之例上有可奉度便殿之

否親定卿申云准御他殿可遷御候者外幣殿屋

有其便

按謂豐受宮御便殿者長曆四年幸御饌殿之例

也凡神座頃刻必正位南面也當宮東寶殿忌火屋

殿竝向南是故有遷御體之例今有祭主卿

議及此則外幣殿爲南面炳焉

年中行事云十月一日司中政所兄部相具荷前御綿外幣殿奉納也

文永遷宮記云河原祓參集新宮御稻御倉西玉垣之

前其座敷長筵北上東面也于時召立役人氏繼神

主立外幣殿巽角召立之神寶取物權任自外幣

殿庸御倉請預之

按御稻御倉西玉垣者謂三玉垣廻御倉之後也

召立役人立殿巽知外幣殿在御稻御倉北而

南面上也

幣殿院御門一間亡今

幣殿院玉垣一重亡今

儀式帳云玉垣一重廻長十六丈二尺

按外幣殿帳爲幣殿院考他書在三玉垣之間未見別有廻垣無所考御倉院垣効之

御倉院在太宮院中

御稻御倉一字九月於此御倉機御衣俗云御機殿

儀式帳云御倉四字長各一丈八尺弘各一丈五尺

今御稻御倉長一丈八尺桁行二間各六尺廣一丈二尺梁行二間各六尺

稱機殿見年中行事文出寺內御藏下

同云正殿寶殿荒祭宮鑰奉置西四御倉卽其御倉

右傍據帳則爲第三重御門也明矣三玉垣門

號第四御門此鳥居在其內

齋王候殿一字帳云齋內親王侍殿中右記云御子宿屋年中行事云御子殿

舞姬候殿一字今亡帳云女端侍殿

儀式帳云齋內親王侍殿長四丈弘一丈六尺女端侍殿

長四丈弘一丈七尺

今齋王候殿長三丈桁行五間各六尺廣一丈二尺梁行三間各四尺

同云齋內親王到第三重東殿就御座即西殿波女

孀等侍

兵範記云肆間萱葺齋內親王候殿壹宇在二肆間萱葺間屏

舞姬候殿壹宇

按新任辨官抄云荒垣中殿門皆有千木堅魚木

詳見下外宮下二殿有千木堅魚木可推知焉凡造太神

宮寬正以降中絕百餘年舞姬候殿廢而不造所片

存齋王候殿亦不葺萱無有千木堅魚木內院

殿舍且多所廢闕況於外院乎

中右記公卿勅使云永久二年二月三日雨降於御子宿屋取

玉串次第事畢後予右大臣宗忠公目一禰宜忠元進來座

前給宸筆宣命仰云可燒忠元逆取宣命以面

取成裏縵寄奧方給內人於座前燒

按帳齋內親王侍殿親王二字訓御子依訓稱御

子殿亦稱御子宿屋

年中行事云風雨難之時於御子殿齋王候殿也被申詔

刀之例也自西第二間前方半疊敷也

同月次祭云半疊一枚齋王候殿與舞姬候殿中間北方

仁副敷也跪二件半疊有大和舞又云鳥名子所下部

等相具鳥名子等於下齋王候殿與舞姬候殿中間

謳歌吹笛

同云六月十八日參著齋王候殿正禰宜南座西上權

任神主并玉串大內人東座南上物忌父等西座南上件

殿前平柱左右赤良曳荷前御調糸結付也

按今齋王候殿北面合右文檢外宮例新任辨官

抄云御子殿南面蓋二宮之制向背表裏相互如此

建久假殿記云舞姬候殿土壁一間修造其外葺萱未勤

嘉曆公卿勅使記云齋王候殿舞姬候殿葺萱破壞

寬正遷宮記云齋王候殿未作之間爲讀合木屋一

字以黑木打之去永享三年御遷宮者造宮使宗直

頭人攝津掃部頭常承中原滿賴法名依自專重重玉垣南鳥

居齋王候殿舞姬候殿要須之諸殿舍不被造進

○幣殿院在大宮院中

當宮正殿長太而瑞垣還狹於外宮者蓋以下外宮有內外玉垣當宮有二三玉垣也重垣奇耦之數職有由無稽叨變古制其弊終至不能知門垣之舊趾可勝歎哉

藩垣御門一間式云藩御門

儀式帳云藩垣一重長三丈同云藩垣御門藩玉簫藩屏也廣韻籬也

今藩垣御門長一丈一尺三寸帳爲長二丈一未詳

自瑞垣御門至此二丈一尺五寸

年中行事神衣祭云內院南面藩垣并玉串及四御門合三

重玉垣御櫛奉差

按一玉垣屬藩垣御門二玉垣屬玉串御門三玉

垣屬第四御門

一玉垣北御門一門亡今

一玉垣一重亡今

儀式帳云玉垣三重一玉垣長十四丈

按十上當有玉垣一玉垣不五十四丈則不能

廻レ瑞垣外兵範記云仁安三年炎上注文玉垣參

重西北二方少少燒損一玉垣廻瑞垣四面帳脫

五字也明矣不然則何以有三方燒損

玉串御門一間二玉垣南門也帳云內玉垣御門

今玉串御門長三丈一尺桁行三間中間一丈三尺左右間各九尺廣一丈四尺

梁行二間南間七尺五寸北間六尺五寸自藩垣御門至此一丈

年中行事占云下部等者玉串御門西方玉垣南集會

同云九月十七日懸力稻事玉串御門左右玉垣懸也

同神嘗云爲申行寮御玉串一禰宜參入料造替御遷

宮之時玉串御門西腋御垣自東第一間母木中一枝

一間貫木渡也

二玉垣北御門一間

今門長一丈四尺寬文九年玉垣再興竝建之

二玉垣一重

儀式帳云廻長六十丈

今玉垣東西徑十六丈六尺南北徑十八丈三尺五寸

都廻長六十九丈九尺除南門三丈一尺北門一丈四尺殘六十五丈四尺依寬文

七年十月廿日大司精長朝臣申請同九年再興之

第三鳥居一基帳云第三重御門俗云四鳥居

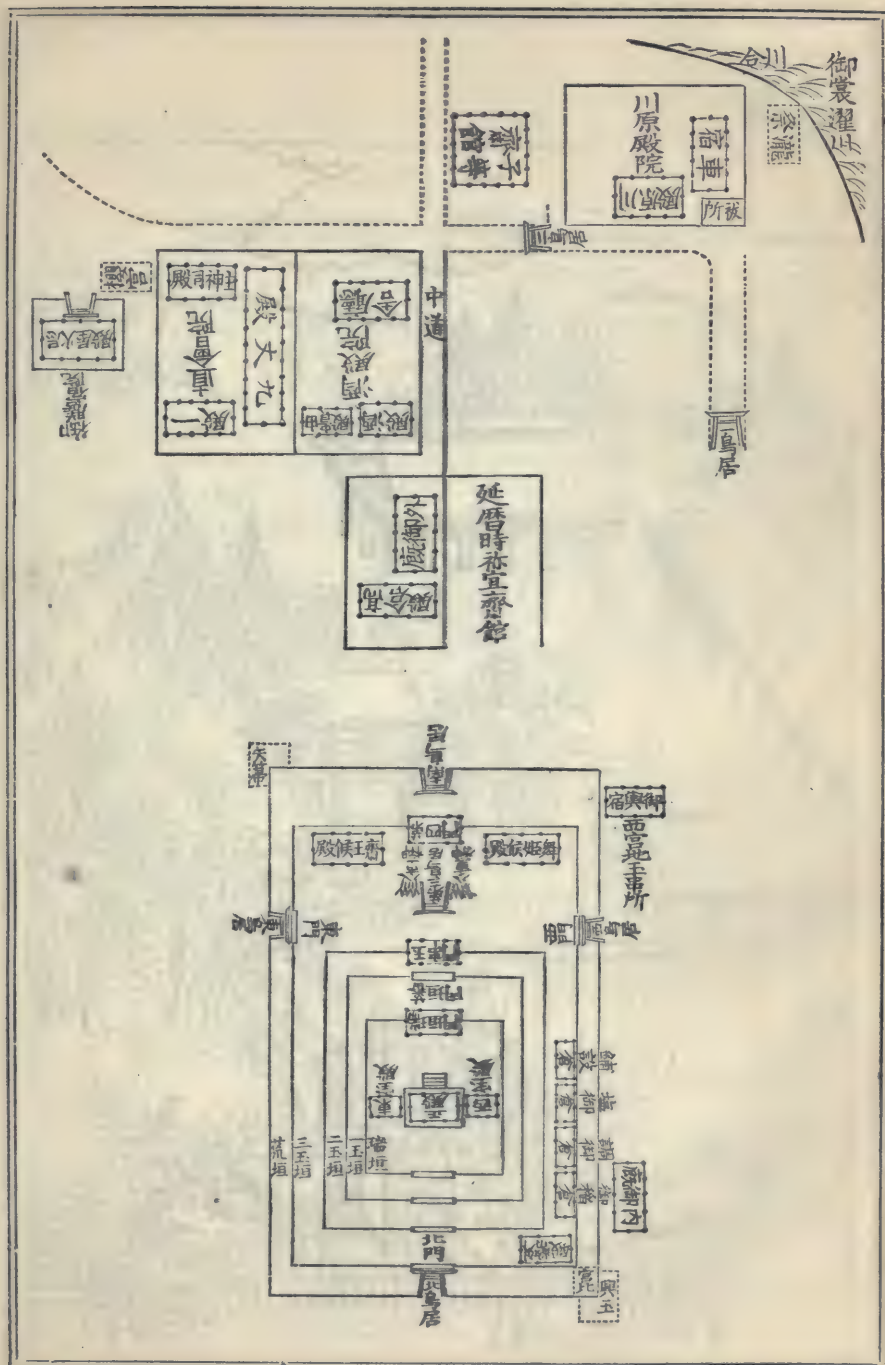
今鳥居廣一丈五尺八寸自玉串御門至此四丈

四尺

儀式帳云天八重櫛取備供奉第三重御門東方一列八

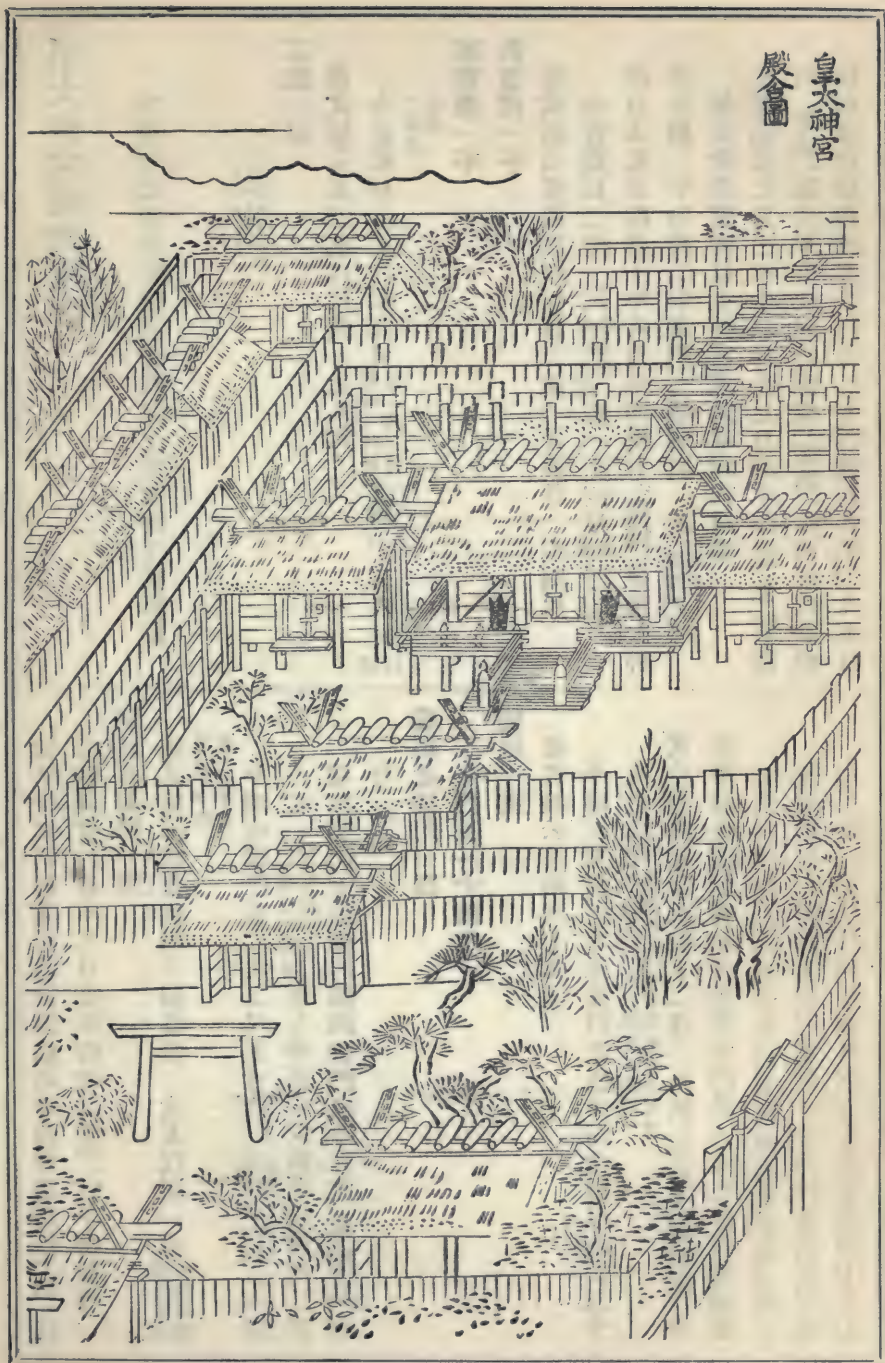
枝八重數六十四本右方亦如左員

接近世失此鳥居之名至今天八重櫛在鳥居左





皇太神宮
殿舍圖



皇太神宮殿舍考證

豐受皇太神宮權欄宜從四位上度會神主延經撰

○太宮院

正殿一區

儀式帳云長三丈六尺廣一丈八尺

今正殿長三丈六尺九寸桁行三間各一丈二尺三寸廣一丈八尺梁行二間各九尺

東寶殿一字

西寶殿一字

儀式帳云寶殿二字長各二丈一尺廣各一丈四尺

今寶殿長二丈一尺桁行三間各七尺廣一丈四尺梁行二間各七尺

續日本紀云延曆十年八月辛卯夜有盜燒伊勢太神

宮正殿一字財殿二字御門三間瑞垣一重類聚國史一重作三重

按財殿者寶殿也太神宮式云瑞垣內財殿

兵範記云仁安三年十二月廿七日神主注進東寶殿

所奉納臨時奉幣使參宮時被進納綾兩面經綢神

服麻續兩機殿神部等勸進二季神御衣每年六九兩月

御祭時宮司勸進荷前御調絹糸等西寶殿所奉納往古御神寶并每年九月御祭時被進納官下御鞍等

瑞垣南御門一間

儀式帳云於葺御門三間各長一丈五尺廣一丈按於字神名帳萬葉集訓二字倍爲上字意

今瑞垣御門長二丈二尺五寸桁行三間中一間一丈一尺五寸左右間各五尺五寸

一丈一尺梁行二間各五尺五寸按太神宮式云南草葺御門三間

瑞垣御門玉串御門第四御門也今三門長短廣狹

有三不同

瑞垣北御門一間

今門長一丈四尺

瑞垣一重

儀式帳云長廻四十九丈

今瑞垣東西徑十五丈南北徑十四丈四尺廻長五十

八丈八尺除南門二丈二尺五寸北門一丈四尺殘五十五丈一尺五寸

寬正遷宮記云三年十二月一日依正殿之御前狹今

度申沙汰瑞垣蕃垣玉串等御門各一丈充南寄御垣各

一丈廣久因玆坤角地形窪間五尺餘石倉疊地乎築上

按儀式帳正殿外宮長三丈廣一丈六尺當宮長三丈

六尺廣一丈八尺瑞垣廻外宮五十丈當宮四十九丈

有_二歌會_一矣

雍州府志曰新住吉社在_二油小路五條北_一傳言藤俊
成卿之所_二勸請_一也凡本朝以_二玉津島明神住吉明
神梯本人丸_一爲_二和歌道守護之三神_一住吉新玉津
島兩社今現在_二洛中_一人丸社亦須_レ有_レ之今不_レ知
_レ爲_二何處_一街衢處々小社之中思須_レ有_二人丸社_一惜
哉一說人丸社始在_二本國寺地_一移_二斯寺_一時移_二八
坂鄉_一今人丸塚是也

和歌兩神記畢

神一是允恭天皇之后衣通姬而稚淳毛二岐皇子第二之女也詠我背子之可來宵也之歌自是爲倭歌之神一配住吉明神并柿本人丸而稱和歌之三神爾後等持院尊氏卿依有靈夢之告而再興之則以經賢法師爲別當職每年十一月十三日祭祀于今不絕又曰倭成社在新玉津島東人家後園一案自新玉津島至此處悉藤俊成卿之宅地乎又定家社在小倉山常寂光寺之中相傳古藤原定家卿時雨亭在斯處爾後建社而祭之

人麿

人麿社者在播磨國明石郡大倉谷所祭之神一座也諸社一覽曰人丸社祭神柿本人麿拾芥抄曰柿本人丸者官位不見天智御時人也萬多親王姓氏錄曰柿本人者天足彥押人命之後也○林羅山先生神社考曰柿本人麿者石見國人也或曰未詳其何許人也善詠和歌多載萬葉集焉紀貫之曰先師柿本太夫者高振神妙之思獨步古今之間有山邊赤人者並和歌之仙也藤原敦光作柿下朝臣人麻呂畫像贊曰大夫姓柿下名人麻呂蓋上世之歌人也仕持統文武之聖朝遇新田高市之王子吉野山之春風從仙駕而獻壽明石浦之秋

霧思一扁舟而綴詞誠是六義之秀逸萬代之美談者歟方今依重幽玄之古篇聊傳後素之新樣因有所感乃作讚其辭曰倭歌之仙受性于天其才卓爾厥鋒森然三十一字詞華露鮮四百餘歲來葉風傳斯道宗匠我朝前賢涅而不緇鑽之彌堅鳳毛少彙鱗角猶專既謂獨步誰敢比肩見續本朝文粹或曰鴨長明云人丸墓在大和國泊瀨傍長明嘗往泊瀨問人丸墓在何所乎無知之者土俗呼其地爲歌墳故也或曰未詳其所終也和歌三神傳曰謂倭歌三神則住吉明神玉津島明神柿本人麿也亦謂和歌三聖乃柿本人麿山邊赤人衣通郎姬也

清輔囊雙紙曰萬葉集第二卷曰柿本朝臣在石見國臨死時自傷作歌一首鴨山濃岩根志麻計留我於加毛不知登伊茂加俟津都在牟泓昌案自傷歌所載乎拾遺集一少異拾遺集妹山乃岩根爾於計留我於加毛知受豆伊茂加俟津都在牟又善齋脰餘雜錄曰柿本人麻呂生卒未記其詳愚按人麻呂石見國人也天平元年至其將死發和歌曰石見乃耶高角山乃古乃麻與利宇岐與乃月於美波兵都流加奈○徹書記物語曰三月十八日即人麿之忌日而昔者和歌所每月十八日

和歌兩神記

玉津嶋

玉津島神社者在_二紀伊國弱浦_一或作_二和歌浦_一後改_二明光浦_一所_二祭之神二座也諸社一覽曰玉津嶋社衣通姬靈也人皇廿代允恭天皇后也神社啓蒙曰玉津嶋所_二祭之神二座歟續日本紀云神龜元年十月幸_二紀伊國_一詔曰登_レ山望_レ海此間最好不_レ勞_二遠行_一足以遊覽_二故改_二弱濱_一名曰_二明光浦_一宜置_二戶守_一勿_レ令_二荒穢_一春秋二時遣_二官人_一奠_二祭玉津島之神明光浦之靈_一度遇延佳神主神宮祕傳問答曰玉津嶋明神者日前神也云有_二祕說_一矣然二所御鎮坐不審也以_二伊勢太神荒魂之例_一觀_レ之則玉津嶋明神乃稚日女尊之荒魂也歟猶可_レ考焉衣通姬者和歌之神而弱字之和訓和歌也者因後代從祀有_レ傳矣續古今集藤原隆信卿歌兼互與利和歌乃浦地仁跡垂互君於耶俟志玉津嶋姬○林羅山神社考曰玉津島神者衣通姬也案日本紀允恭天皇之后忍坂大中姬之妹容姿絕妙無_レ比其艷色徹_レ衣而晃之是以時人號曰_二衣通郎姬_一

天皇喚_二郎姬_一郎姬畏_二皇后_一而不_レ參天皇強而七喚以來之因_二皇后之嫉_一別構_二殿屋於藤原_一而居八年春二月幸_二于藤原_一密察_二衣通姬之消息_一是夕衣通郎姬戀_二天皇_一而獨居其不_レ知_二天皇之臨_一而歌曰和餓勢故餓句倍枳豫臂奈利佐瑳餓泥能區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛天皇聆_二是歌_一則有_二感情_一郎姬奏言妾常近_二王宮_一而晝夜相續欲_レ視_二陛下之威儀_一然皇后則妾之姊也恒恨_二陛下_一亦爲_二妾苦_一是以冀離_二王宮_一而欲_二遠居_一天皇更興_二造宮室於河內茅渟_一而令_レ居諸神記曰和歌三神者住吉玉津島人麿

泓昌案鎮坐之年紀不_二分明_一矣所_レ傳衣通姬詠曰立歸復此邦爾跡垂牟昔戀幾和歌乃浦波○神社啓蒙曰或問衣通姬善歌之人而爲_二和歌神_一乎抑以_二其在_一和歌浦_一爲_二和歌神_一乎曰此爲_二一種之祕決_一也世人指_二和歌浦_一專爲_二衣通姬_一而然稱_二其神_一爲_二玉津_一名_二其地_一曰_二稚者蓋有_一深意_二存焉且續日本紀謂_二玉津島之神明光浦之靈_一則以_二衣通姬_一合_二祭玉津神_一也歟黑川氏雍州府志曰新玉津島在_二五條松原通室町東_一此邊古爲_二藤俊成卿之宅地_一因稱_二五條三位_一家內勸_二請紀州和歌浦玉津島明神_一而號_二新玉津島_一

蓋日域地主明神也雍州府志曰一說本社國常立尊也又言所祭眞一元水之靈而號豐氣太神也畢竟豐受神號而其餘悉攝社也

泓昌案鎮坐之年紀不分明矣○白井自省軒便覽曰抑貴布禰社者累代爲賀茂末社也何者儀同三司十二社次第云貴布禰者賀茂之攝社也蓋攝者兼也宜哉此末社也又至今賀茂有禰宜等職也於賀茂可尋焉

二十二社略記畢

子也中間菅丞相道真公而西間吉祥女則菅丞相之室也未詳爲何家女子一說西園寺家之女也住平安城西南吉祥院里故爲號神社考曰北野天神者右大臣菅原朝臣之靈也○和爾雅曰北野所祭之神三座今在記云東坊城和長卿云東源英明中間菅丞相西在良朝臣也

二十二社註式曰村上天皇天曆元年六月九日遷坐北野同天皇治十三年天德三年九條右丞相造増屋舍奉付寶物○明薩天錫夢觀集曰題天滿宮詩無常說法現神通千里飛梅一夜松萬事夢醒雲吐月觀音寺裡一聲鐘又明洪序贊天神曰日本嘗聞北野君愛梅瀟洒又能文謫居西府三千里一夜飛香度海雲

頭註云神社啓蒙卷三曰間用廿五日者何世也曰人皇七十四代鳥羽院天仁二年二月廿五日始行北野御忌日之後永爲流例

丹生

丹生神社者在^二大和國吉野郡下市側山中^一所祭之神一座也延喜式神名帳上曰丹生川上神社神社便覽曰罔象女神一座○廿二社註式曰當社爲大和之別社事見延喜格不聞人聲之深山立我宮柱以敬禮者爲天下降甘雨止霖雨者

廿二社註式曰人皇四十代天武帝白鳳四年乙亥御垂跡廿二社註疏曰神武天皇以天神教造嚴饗陟于丹生川上用祭天神地祇

貴布禰

貴布禰神社者在山城國愛宕郡所祭之神二座也神社便覽曰初作木船也後依瑞驗改貴布禰延喜式神名帳曰貴布禰神社神社便覽曰閭禰神和爾雅曰貴布禰所祭之神一座祈雨止雨之神今在記云閭罔象女也神社啓蒙曰所祭之神二座高禰神與御前廿二社註疏曰城州貴船社船玉命與高禰也諸社一覽曰按船玉命猿田彥神也雍州府志卷二曰貴布禰社所祭之神二座第一高禰神第二別雷神也神代卷曰伊弉諾尊斬軻遇突智爲三段其一段爲高禰水德神也第二別雷神第三奧御前也是爲守護安穩所祭而地主神也然奧御前社并船守社等社家祕而不言之又曰素戔嗚尊是天忍穗耳尊之皇親而瓊瓊杵尊之祖神也故尊其所出奉勸請之今貴布禰社是也依之下上賀茂并貴布禰三所相比並○羅山先生神社考曰神書鈔云高禰與閭禰同龍神類也貴布禰明神亦是也今祈雨止雨多祭此神氏成私記曰奧御前爲平安城守護所祭之

不_レ分明也蓋一箇口傳故耳尙待博達之師可責焉○白井氏神社啓蒙曰今世間刻_レ雕負_レ袋之形而配_レ蛭子_二字_一大黑也知大黑與_二大國_一音相同蓋大國者大己貴命之異稱又云予視_二世所_一崇像_一決靡_二他方者_一首所_レ服體所_レ被皆吾國之俗也蓋大國主神而託_二之大黑_一耶黑川氏雍州府志曰案大黑天者軍神也出_二佛祖通載卷二十二卷_一台家說曰傳教大師逢_二大黑天於東坂本_一短身黑面手持_二木槌_一足蹈_二米囊_一專掌_二壽福_一一々有_二問答_一自_レ爾世人祭_レ之案本邦所謂大黑者葛刺天而蓋別神也貝原氏和爾雅曰大黑神南海寄歸傳第一卷載_レ之最詳號曰_二莫訶歌羅_一求者稱_レ情義楚六帖曰大黑神梵天眷屬在_二食厨_一合須_二塑盡供養_一西域諸寺僧食厨無_レ不_レ有也大有_二靈異_一今案大黑神者天竺寺僧食厨所_レ祭之神也或以爲_二倭神_一者無稽之言也

祇園

祇園神社者在_二山城國愛宕郡八坂鄉_一所_レ祭之神三座也神社便覽曰祇園式外祇園天王三座西稻田姬號_二少將井中素盞烏號_一大政所東龍王女號_二今御前_一和爾

雅曰祇園所_レ祭之神三座素盞烏尊八王子稻田姬諸社一覽曰八王子三女五男也泓昌案三女五男者是天照太神與_二素盞烏_一誓約之時所_レ生神謂田心姬湍津姬市杵島姬天忍穗耳尊天穗日命天津彥根命活津彥根命熊野櫛樟日命也詳_二于日本書紀_一矣○神社考詳節曰一曰牛頭天王二曰婆利女是稻田姬也或云婆竭羅龍王女也三曰蛇毒氣神是八岐蛇所_レ化乎武塔神者素盞烏之別號也祇園一名_二感神院_一

神社便覽曰人皇五十六代清和帝貞觀十八年移_二八坂鄉_一雍州府志卷二曰二十二社註式云牛頭天王始垂_二跡於播磨國明石浦_一而移_二廣峯_一其後移_二東山瓜生山_一北白川東光寺其跡也清和天皇貞觀十一年移_二感神院_一昭宣公藤基經公尊_二崇斯社_一新造_二營之_一其形模表_二紫宸殿_一故後世雖_二改造_一依_二其樣_一今考_レ之宮殿雖_レ有_二大小之異_一柱數寸尺粗與_二紫宸殿_一相同世以_二昭宣公之殿_一爲_二此神社_一者誤也

北野

北野神社者在_二山城國葛野郡_一所_レ祭之神三座也神社便覽曰北野式外天滿自在天神三座東中將殿中管丞相西吉祥女雍州府志曰三座內東間中將殿而是管神之嫡

九四世曰平九又改姓卜部依之吉田家爲神道長

廣田

廣田神社者在攝津國武庫郡西宮鄉廣田邑所祭之神一座也延喜式神名帳曰廣田神社廿二社註式曰廣田者天照太神之荒魂也可謂神宮御同體如式文者一座也現在五社神社便覽曰五座說一殿住吉大明神二殿廣田大明神三殿八幡大神宮四殿南宮五殿八祖神貝原氏和爾雅卷二曰廣田所祭之神一座乃天照太神荒魂也見于日本紀如今爲五座一殿住吉二殿廣田三殿八幡四殿南宮大山五殿八祖神高皇產靈尊以上爲五社

○神社啓蒙曰註進記云人皇百一代後小松院治廿三年應永十三年四月四日甲子伯三位資忠王依招而日本紀第九讀合廣田社事條々有不審雖爲社祕委細演說云々如社官申詞者奉書廣田社者神功皇后也自餘神社意得之勸請歟案以廣田爲皇后難心得歟不合日本書紀等旨

二十二社註式曰垂跡時代無正記日本書紀曰神功皇后征新羅之明年忍熊王起兵屯於住吉皇后聞之還務古水門而卜之於是天照太神誨之云

我之荒魂不可近皇后當居御心廣田國即以山背根子之女葉山媛令祭之

神社考詳節曰蛭兒天照太神弟事八十神貴兄在西宮五社之內俗呼蛭兒爲夷三郎神社啓蒙曰西宮者蛭子神也俗號夷三郎非也蛭子天照太神弟也卜部兼熙二十二社註疏曰相殿神二座事八十神大己貴命雍州府志曰凡稱惠美須者是蛭兒命也命住西宮海邊故以釣魚爲樂故斯社多在濱漁人專崇之漁人數日舉網不得魚則必祈斯神若得魚之願成則裁縫衣服使着惠美須像又謂惠美須者福神也凡農工商共祭之商賈特崇之和爾雅卷二曰攝津國武庫郡西宮蛭兒及少童神爲夷社乃廣田之末社也一說俗所謂夷殿者事代主命而大己貴命之子也設其垂釣之像者依日本紀所記事代主命遊行在於出雲國三穗之碕以釣魚爲樂之說也蓋此御神者日本最初之地主神也故歲首揭而祭之白井氏神社便覽曰蛭兒夷殿世流布以爲混同也蛭兒者天照太神兄弟載方冊而分明也夷殿說拾遺云口授之一條也又案今人家以大黑而配當于此神之義今古

代幽契一祈一酒解二座神一矣一且應一感有二三妊孕一遂以三當宮清砂一敷一御座下一居一其上三生一兒所謂仁明天皇是也天皇追三神慮一嘉祥年中以三外祖父清友一并三酒解社一以三檀林一并三酒解子神社一又以三瓊々杵火火出見命一配三若子二社一以爲三橘氏祖廟一也至一今尊崇異一他夏冬祭祀無一怠耳

吉田

吉田神社者在三山城國愛宕郡神樂岡一所祭之神四座也神社便覽曰吉田式外和爾雅曰吉田所祭之神與三春日大原野一同○神社啓蒙曰御堂關白御書云奈良京時春日社長岡京時大原野平安城今吉田社占三帝都之咫尺一有神祠之鎮護一

卜部兼右二十二社註曰清和帝貞觀年中鎮坐中納言山蔭卿始奉一渡一之神社考曰御堂關白道長公造一法成寺一崇一吉田社一以擬一興福寺春日社一云卜部兼俱日本紀抄曰當社藤氏崇敬依一異一他曩祖兼延勸請神系圖傳曰卜部家說云神樂岡明神者雷神也號三裂雷神是吉田之地主也至一一條院御宇一卜部兼延掌一社務職一時以三藤氏之崇敬一故勸一請春日神一

諸社一覽曰大元殿謂三齋場所一是卜部家神道勸請

所伊勢内外宮始八百萬神勸請維州府志卷二曰齋場所所在吉田山一始在三神祇官一樓門額有日本最上日高日宮之字一嵯峨天皇之宸翰也鎮魂八神殿亦在三神祇官一神祇官者古在三平安城宮内省一則今二條所司廳之西也自一茲移一東山如意嶽一後土御門院文明十六年移吉田神樂岡一八神所謂高皇產靈尊神皇產靈尊魂留產靈尊生產靈尊足產靈尊大宮姬御膳津神事代主是也此八柱則八州守護驗神八齋靈命八心府神故以爲三皇帝鎮魂之神一吉田卜部家主一裁萬事一凡二十二社之外所一在日本國一之大社小社神職皆自一此家一下一令并官位等執一奏之一中臣卜部同氏而天兒屋根命苗裔也天兒屋根命奉三天照太神勅一輔一佐皇孫一治一豐葦原於一是以三三種靈寶一傳一皇孫一是爲三王道之元一又以三神籙正印一傳一三兒屋根命一故是爲三神道之祖一三兒屋根命十二世孫大雷臣命仲哀天皇時賜一卜部姓一十八世孫常磐大連改一卜部姓一爲三中臣姓一至三二十一世大織冠一改一三中臣一爲三藤原氏一三大織冠一爲三朝家一將一誅一入鹿一時思一事有難一以三神道一傳一其從弟右大臣清丸一清丸意美九子是爲三大中臣一清

神三女或云惶根尊已上數說見三耀天記等又社家註進曰二十一社之說上七社大宮二宮聖眞子八王子客人十禪師三宮中七社大行事早尾下八王子王子宮聖女氣比小禪師下七社惡王子新行事石瀧劔宮牛御子若宮護因頭註云神社啓蒙卷三曰日吉所屬十四座加上七座稱三十一社下八王子宮中主尊上子宮建御名方命早尾素戔嗚尊一說云猿田彥命大行事高皇產靈尊聖女下照姬新行生瀧津姬牛尊領來記云此殿底有靈石尤曰停小禪師彥火火出見尊惡王子深祕岩瀧蹈輪姬命劔宮素戔嗚尊神氣比仲哀大皇大電漢津彥命靈殿漢津姬

神社使覽曰當社鎮坐年記不分明兮或云人皇卅九代天智帝御宇鎮坐神社考詳節曰此社者松尾之同體也或說云山王權現者磯城島金刺宮欽明即位元年自天降于大和國磯城上郡現大三輪神大津宮天主智即位元年現老翁形曰我是大比叡大明神也又傳教大師以天竺金毘羅神一名摩多羅神爲素戔嗚尊號曰山王以爲日吉神體日吉鎮座記曰人皇卅九代天智帝御宇白鳳二年三月三日琴御館奉祭山麓其後御館乞奉拜尊神御形于時夜忽光曜如日其中有大字更無異物依之奉稱大宮也○又鎮座記曰十者天七地三之數禪讓也師國也言十善天子護國之義雍州府志卷二曰凡自天神七代傳地神五代天忍穗耳尊正受天照皇太神之御禪實爲第

二位然凶惡神素戔嗚尊之御子也故天忍穗耳尊之御子瓊杵尊爲皇太神之正統天子稱十禪帝亦因受第十位瓊瓊杵尊之御禪也釋氏稱十善者牽強附會之說而非可取者乎

梅宮

梅宮神社者在山城國葛野郡梅津里所祭之神四座也延喜式神名帳上曰梅宮坐神四座神社使覽曰酒解神大若子神小若子神酒解子神神社啓蒙曰舊傳云所謂酒解社大山祇大若子社伊勢度遇神主遠祖加夫良居命也小若子社同大若子弟也酒解子神木花開耶姬也和爾雅曰梅宮所祭之神四座酒解神者大山祇大若子神者瓊瓊杵尊小若子神者彥火々出見尊酒解子神者木花開耶姬

二十二社註式曰鎮坐不分明矣神社啓蒙曰社記并舊傳云伴四社以孝謙帝天平寶字年中祭此地爲帝基守護鎮守其後人皇五十二代嵯峨天皇后姓橘氏諱嘉智子父清友少而沉原涉獵書記眉目如畫爲人寬和風容絕異嵯峨天皇初爲親王納宮寵遇日隆天皇登祚弘仁之始拜爲夫人後立爲皇后然常以無太子而淒淒不樂因茲皇后憑神

龍田

龍田神社者在_二大和國平群郡立野_一所祭之神二座也延喜式神名帳曰龍田坐天御柱國御柱神社二座和爾雅曰龍田所祭之神二座天御柱國御柱神是則風神級長津彥命級長戶邊命也○家行神主類聚神祇本源曰瀧祭神與_二廣瀨龍田神_一同體異名水氣神也故廣瀨龍田神名號_二天御柱國御柱_一是天逆戈守護緣也舊記曰廣瀨龍田風水陰陽二神也故名_二天國御柱_一也

日本書紀曰天武天皇治四年夏四月遣_二小紫美濃王小錦下佐伯連廣足_一祠_二風神于龍田立野_一

住吉

住吉堺社者在_二攝津國住吉郡堺邑_一所祭之神四座也延喜式神名帳曰住吉坐神社四座神社便覽曰底筒男中筒男表筒男神功皇后○神社考曰社家者說云住吉神社四座第一天照太神第二字佐明神第三底筒表筒中筒爲_二一座_一第四神功皇后神祇拾遺曰住吉玉津嶋和歌之兩神也和爾雅曰住吉所祭之神四座凡住吉郡諸社事詳見_二新撰神代記_一

二十二社記曰神功皇后征_二韓_一之時顯_二坐攝州_一神社啓蒙曰住吉舊記云其荒魂在_二筑紫之小戶_一和魂者

神功皇后征_二韓_一時顯_二坐攝州_一託_二皇后體_一而循_二行四方_一遂到_二攝州之地_一宣言云真住吉真住吉之國也因鎮_二坐其地_一名云_二住吉_一○卜部兼方釋日本紀卷第六曰攝津國風土記云所以稱_二住吉_一者昔息長足比賣天皇世住吉大神現出而巡_二行天下_一覓_二可_一住國一時到_二於沼名棕之長岡之前_一前者今神宮南邊是其地乃謂斯實可_二住之國_一遂讚_二稱之_一云_二真住吉國_一乃是定_二神社_一今俗畧_二之直稱_一須美乃叡_二貝原恥軒_一八幡本紀曰住江卽住吉也吉江相通故云_二住江_一

日吉

日吉神社者在_二近江國滋賀郡坂本村_一所祭之神七座也延喜式卷第十神名帳下曰日吉神社廿二社註曰大宮大物主神二宮國常立聖眞子八幡八王子國狹槌客人菊理姬十禪師宇賀姬三宮豐斟神社啓蒙曰日吉所祭之神七座大宮大己貴二宮國常立尊神皇魂尊聖眞子正哉吾勝尊八王子國狹立尊客人伊弉冊尊十禪師瓊々杵尊三宮惶根尊一說天照太神三女○和爾雅曰日吉式內一座二宮者大山咋神也式外六座大宮者大己貴命聖眞子者應神天皇八王子者國狹槌尊客人社者伊弉冊尊十禪師者天兒屋禰命三宮者天照太

顯國玉神一神社考詳節曰日本紀大己貴神之幸魂奇魂

此大三輪之神也○又詳節曰二十二社之中大和大神石

上日吉下鴨松尾此六社者皆大己貴神也

神社便覽曰兼敦云案神代鎮坐勿論也清輔與儀鈔曰

崇神天皇七年倭迹迹日百襲姬命之夢中大物主神告

曰我是大物主神也我兒令大田田根子一祭於我上焉

然後○然後二字恐衍歟大田田根子命者神主君等之遠祖也

石上

石上神社者在_二大和國山邊郡布留鄉_一所祭之神一座

也延喜式神名帳曰石上坐布留御魂神社和爾雅曰石上

所祭之神一座石上布都御魂神神宮御鈔曰石上社者

素戔嗚尊所持之十握劍也以_二人皇十代崇神天皇御

宇_一鎮座也○雍州府志卷二曰近世誤_二石上_一爲_二岩神

又云一說石上明神者豐石厠奇石憲命也然則太玉命之

子也

神社便覽曰第十一代垂仁帝四十九年十月作_二劍一

千口_一藏_二石上神宮_一以_二斷蛇劍_一爲_二神體_一今所_レ作

劍奉_レ副也神社啓蒙曰舊記云磯城瑞籬御宇遷_二建布

都大神社於大和國山邊郡石上邑_一則天祖授_二饒速日

尊_一自_レ天受來天璽瑞玉同共藏齋號云_二石上大神_一建

膽心命祭_レ之

大和

大和神社者在_二大和國山邊郡大和里_一所祭之神一座

也延喜式神名帳曰大和坐大國魂神社三座神社便覽曰

大己貴神御年神大國魂神和爾雅曰大和所_レ祭之神一

座大國魂神○神社考詳節曰此亦與_二三輪_一爲_二同神_一今

案延喜式大和國城上郡大神大物主神社者謂_二三輪_一也

同國山邊郡大和大國魂神社者謂_二大和_一也

神社便覽曰人皇十代崇神帝六年鎮坐日本書紀卷第

五曰崇神天皇六年以_二日本大國魂神_一託_二淳名城入

姬命_一祭然淳名城入姬髮落體瘦而_レ不能_レ祭

廣瀨

廣瀨神社者在_二大和國廣瀨郡廣瀨里_一所祭之神一座

也延喜式神名帳曰廣瀨坐和加宇加賣命神社和爾雅曰

廣瀨所_レ祭之神一座倉稻魂命號_二和加宇加賣神社_一亦

號_二大忌神_一神名祕書曰伴神伊弉諾伊弉並尊子豐宇賀

乃賣神神祇官坐御食神是也○頭註云神社啓蒙曰和賀字加乃賣神與_二勢州外宮神_一同水德神也

○松下氏公事根源集釋曰廣瀨社今河合明神是也

日本書紀曰天武天皇四年夏四月遣_二小錦中間人連

蓋大山中曾禰連韓犬_一祭_二大忌神於廣瀨河曲_一

三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡寸雍州府志曰昔日當社出現和銅四年二月九日也從斯說以長曆推之則其日偶當初午日然今不用九日而於初午日諸人參詣俗謂初午參又稱三福參神祇拾遺曰元正帝御宇當社影向之日偶二月初午日也故至今用此日慈鎮拾玉集歌稻荷山其二月乃初午爾乘豆耶神波人於導久

春日

春日神社者在_二大和國添上郡春日鄉_一所祭之神四座也延喜式神名帳曰春日祭神四座神社使覽曰一殿武雷神二殿齋主神三殿天兒屋命四比咩大神神名祕書曰天照太神相殿之姬神栲幡千姬命於春日者第四神殿坐也泓昌按舊說春日第四殿姬神爲天照太神而祕書曰栲幡千姬命未_レ知孰是也

頭註云日社皆蒙曰武彥命鹿島神也齋主命香取神也已上二神天孫降臨日有大功仍帝都必祭之天兒屋命春日神是

春日註式曰第四十八代稱德天皇神護景雲二年正月九日大和國添上郡三笠山垂跡同年十月九日寅日寅時太敷立宮柱春日祕記曰神護景雲二年十一月

九日戊申三笠山頂宮柱立三所御座四年正月十二日戊寅三笠山下津磐根南向宮柱立御遷宮在_レ之其時第四御殿奉祝副也長者左大臣正一位藤原朝臣永平御時也

大原野

大原野神社者在_二山城國乙訓郡西岡_一所祭之神四座也神社使覽曰大原野式外和爾雅曰大原野所祭之神與春日社同

神祇正宗曰人皇五十四代仁明帝御宇嘉祥二年爲_二王城守護_一閑院左府冬嗣申沙汰勸請之神社考詳節曰文德天皇仁壽元年二月初自春日本社勸請此所蓋后妃行啓以春日社路遠故也雅州府志卷三曰桓武天皇始先遷都於長岡鄉于時遷春日社四座神於斯處

大神

大神神社者在_二大和國城上郡三輪鄉_一所祭之神一座也延喜式神名帳曰大神大物主神社具原損軒和爾雅曰大神又云三輪社所祭之神一座大己貴命日本書紀一書曰大國主神亦名大物主神亦號國作大己貴命亦曰葦原醜男亦曰八千戈神亦曰大國玉神亦曰

像衣手一號二七所之本社一也頭註曰神社啓蒙曰松尾一座大山昨神南殿氏成私記曰別雷苗裔也神

雍州府志曰人皇四十二代文武大寶元年秦都理承勅始自三分土山大杉谷一移神殿于今地一祭之分土山即今松尾山也又奉伊勢宣命紙用縹紙松尾賀茂社用紅梅紙餘社皆用黃色紙伊勢石清水遣中納言爲奉幣使松尾賀茂兩社遣參議餘社皆遣四位五位殿上人是最依朝家御尊崇者也

平野

平野神社者在山城國葛野郡所祭之神四座也延喜式神名帳曰平野祭神四社神社便覽曰今木神源氏神久度社平氏神古開社高階氏神比咩神大江氏神縣社菅氏神廿二社次第曰平野第一今木神日本武尊源家氏神第二久度神仲哀天皇平家氏神第三古開神仁德天皇高階氏神第四比賣神天照太神大江氏神第五縣神天穗日命四姓氏神中原氏清原氏菅原氏秋篠氏○和爾雅曰平野所祭之神四座第一今木社源氏神日本武尊第二久度社平氏神仲哀天皇第三古開社高階氏神仁德天皇第四比咩神大江氏神木花開耶姬林氏神社考曰平野社者仁德帝之廟也藤原家隆歌曰難波津仁冬籠世之花奈禮也

平野乃松仁降留白雪

延喜格曰桓武天皇延曆年中立二件社一

稻荷

稻荷神社者在山城國紀伊郡所祭之神三座也延喜式神名帳曰稻荷神社三座神社便覽曰下社大宮姬中社倉稻魂上社太田命神社啓蒙曰上社土祖神中社倉稻魂下社大山祇女○神祇拾遺曰弘長六年比爲五座神社便覽曰今所傳稱五座田中社大己貴分四大神神功皇后和爾雅曰稻荷所祭之五座諸神記云秦氏之祖神也或云中社保食神田中社稚産靈下社大己貴命上社三神幸魂四大神以上四神爲一社一號四大神也雍州府志卷三曰稻荷社是稱上下者非神世之崇卑就社之所而有稱上下者也今所傳謂五座而中社爲三座所謂伊弉諾尊瓊杵尊倉稻魂也三座之中有瓊瓊杵尊在一故此社稱十禪師宮或號客人宮又田中社猿田彥而掌導諸神一者也四大神住吉四所明神也地主神則荷田明神也其地置倉稻魂故號稻荷云頭註云神社啓蒙曰倉稻魂同名異神有三神而前識各異也勿混滋昌按土祖神乃太田命之異名也

神社考曰此神社建立權輿未詳社家者流說和銅年中此神始現于伊奈利山豐葦原卜定記曰人皇四十

己貴神也又一說鷗羽葺不合尊叔母玉依姬爲后而產神武帝是爲人王之始下賀茂社稱御祖神奉勸請玉依姬者也神社啓蒙曰玉依姬非高皇魂并海童女別在一神○具原氏和爾雅神祇門曰緣起云下社御祖二座健津之身命丹波伊香古耶姬也西峰先生說云玉依姬河合社也河合訓加和比又讀多太須鳥居西向立糺森卽此社森也御祖者在河合之奧大社也此下賀茂也今俗云是糺訛也又神社啓蒙卷二曰河合社式稱小社宅神是也上賀茂社官參宮之日先詣此社而後拜御祖蓋有社例傳習也

神社考詳節曰欽明天皇時初祭此上下神雍州府志卷二曰白鳳年中大己貴命來現下賀茂其後四月酉日瓊瓊杵尊自大和國賀茂社來現上賀茂別雷山麓御生所地號別雷神稱大賀茂故兩社世稱上下賀茂然則平安城遷都以前之神社也

齋院

齋院者雍州府志卷二曰齋院古在大宮杜西南云或言在雲林院村又云常盤古御所地齋院之舊址也未知孰是又卷三曰齋院宮在太秦東南此處古賀茂齋院而所勸請上賀茂神也有御手洗河是修

祓處也延喜式卷第六齋院司式曰凡天皇卽位者定賀茂大神宮齋王簡內親王未嫁者卜定若無內親王者依世次簡諸王女卜定神社考曰平城嵯峨帝爭帝位時嵯峨帝爲祈願以皇女有智子內親王始立齋院後代々皇女立之至土御門院元久元年三十四代齋院斷絕矣

松尾

松尾神社者在山城國葛野郡所祭之神二座也延喜式神名帳曰松尾神社二座神社便覽曰大山咋神一座胸形中津大神一座舊事本紀曰大己貴神弟大年神之子大山咋神此神者坐近淡海國比叡山亦坐葛野郡松尾鳴鏑神也和爾雅曰松尾所祭之神二座大山咋神市杵嶋姬命○神社考詳節曰賀茂玉依姬所取之丹塗矢化爲神松尾大明神是也號曰大山咋神是比叡山日吉之同體也又神書鈔曰丹塗矢者大己貴之所化也神社啓蒙曰今所傳七座名松尾社月讀社櫟谷社三宮宗像社衣手社四大神雍州府志卷三曰松尾神社在洛西所祭神二座大山咋命瀛津島姬命以此二神爲相殿稱中本社高皇產靈尊月讀尊二座稱南本社田心姬命湍津姬命櫟谷神三座爲北本社又加三宮四大神宗

大和乃國葛木仁宿寸彼與利漸山背國岡太乃賀茂仁遷幸山代川仁下坐天葛川止賀茂川止合處仁立坐給比賀茂川乎見巡之天宜久狹久少也止云止毛石川乃清流也止天石川瀨見小川止號久川上仁宮所於定給天北山乃麓仁住給利其時此處乎賀茂止云也白井氏神社啓蒙卷二曰案健角身者隱語也詳賀茂氏成私記一雍州府志曰一說瓊瓊杵尊爲天孫而始降臨斯國故是爲地神之始奉勸請上賀茂是爲山城國一宮風雅集神祇部賀茂遠久歌、久堅乃天濃磐船漕寄志神代乃浦耶今乃御形野又鴨祐光歌、君加爲三國移豆清幾河乃流仁住留賀茂乃瑞籬卜部兼右神祇正宗曰社家深祕無申旨故難露顯○山城風土記曰賀茂健角身命之女玉依姬神道遙于石川瀨見小河邊于時丹塗矢自河上流下玉依姬採其矢夾屋上頃之有身遂生賀茂上社別雷神其丹塗矢今在松尾神社神社考詳節曰玉依姬之子爲雷神號別雷命故號下賀茂爲御祖號別雷爲上賀茂金葉集神祇部賀茂重保歌、君於祈留願於空仁滿給惠別雷乃神奈良波神

神社使覽曰鎮坐年紀更難明也○類聚國史曰八百萬神其餘不量雖無何勝劣已別雷皇大明神爲

帝都鎮守神社啓蒙卷二曰或問賀茂爲別雷神所謂八色雷公是也且舊書所載鳴箭爲雷之說其言揭焉何爲不記焉答曰以賀茂爲雷公神非吾所聞後世好事者爲此也所傳賀茂神詠曰千早振別雷山仁住居之氏天降事神代與利先別雷者賀茂山名也是以爲別雷神耶爲之別雷山神可也爲之雷公神否也今松尾有稱別土者不知何故也又曰然則賀茂社爲宗廟耶爲社稷耶謂祕之不言則近誣矣曰此難言也又曰賀茂者大社也其不載神紀何也曰予聞諸神代兩卷者所以審諦乎伊勢與賀茂之由也不可以輕語焉○皇朝類苑曰日本國專奉神道山城州有賀茂明神託三五歲童子降言禍福事

下賀茂者所祭之神二座也雍州府志下賀茂曰糺宮或作只洲高野川與賀茂川於此社南合流故或稱河合神又稱御祖延喜式神名帳曰賀茂御祖神社二座諸社一覽曰所祭之神二座玉依姬大己貴命清原宣賢神代鈔曰大己貴者下賀茂號御祖神社考曰下賀茂御祖神者號玉依姬賀茂健角身命之女也雍州府志卷二曰下賀茂社或謂所祭丹塗矢然實所祭大

焉卽建_三八尋機殿_一其後景行帝御宇廿年春宇治之齋宮移_二于同國多氣郡_一但先_三是立_二齋宮_一皇女之初則第十代崇神帝之皇女豐鍬入姬命也初以_三此皇女_一爲_二御杖_一貢_二奉於天照太神_一然後離_二天照太神於豐相入姬命_一託_二于倭姬命_一而後隨_二神誨_一遷_二奉于伊勢國渡邊宮_一因興_二齋宮于五十鈴河上_一矣延喜式卷第五齋宮寮式曰凡天皇卽_二位者定_二伊勢太神宮齋王_一簡_二內親王未_一嫁者_二卜定若無_一內親王_二者依_二世次_一簡_二諸王女_一卜定林羅山神社考曰垂仁帝廿六年以_二第二皇女倭姬命_一初立_二齋宮_一後代々皇女立_二之土御門院承元二年至_二四十一代齋宮後鳥羽院皇女肅子

內親王_一斷絕矣

頭註云具原損軒續倭漢名數曰垂仁天皇二十六年以_二第二皇女倭姬命_一初立_二齋宮_一其後帝王每_二卽_二位世世以皇女_一立_二之至_二土御門院承元二年四十_一代齋宮後鳥羽院皇女肅子內親王_二而絕矣_一垂仁帝二十六年至_二承元二年凡千二百二年_一說肇_二于崇神天皇御女豐鍬入姬_一至_二於後宇多院皇女嬪子內親王_一而後絕矣凡七十五代○御領座本紀曰倭姬皇女隨_二老翁之告事_一而大喜遂祭_二天照太神_一以立_二宮所于伊勢國宇治川上_一因興_二齋宮于五十鈴川上_一而居焉謂_二之磯宮_一爾後世簡_二內親王未_一嫁者_二卜定_二伊勢太神宮之齋宮_一五百野皇女酒入內親王恬子內親王等是也天皇若無_二內親王_一則依_二世次_一簡_二諸王女_一卜定_二之延喜以後齋宮既絕近世以_二天鈿女命之苗裔_一狹良子_二代之_一

石清水

石清水者在_二山城國久世郡科手鄉鳩峯_一今雍州府志

以_三石清水_一屬_二綴喜郡_一是稱_二雄德山_一或作_二男山_一其山之半腹有_二清泉_一號_二之石清水_一故稱_二之石清水宮_一所祭之神三座也神社便覽曰石清水式外八幡大神宮三座中八幡宮東玉依姬西神功皇后黑川氏雍州府志卷三曰正殿三座中八幡宮則應神天皇也東氣長足姬尊則神功皇后也西比咩大神則玉依姬也

神社考詳節曰人皇第五十六代清和帝貞觀元年八月廿三日武內宿禰之苗裔南都大安寺沙門行教憑_二八幡大神教_一奏聞之從_二豐前國宇佐_一遷_二之於山城國男山鴿峰_一所謂八幡卽應神天皇是也○神社便覽曰案以_二此神宮_一爲_二天下第二宗廟_一今玉依姬置_二東殿_一等蓋有_二深旨_一哉宋史卷四百九十一日本傳曰應神天皇

甲辰歲始於_二百濟_一得_二中國文字_一今號_二八蕃菩薩_一

頭註曰神社啓蒙曰按玉依姬海神女豐玉姬之妹神武天皇之母神也貝原好古八幡本紀卷四曰八幡宮國々奉_二勸請_一則皆從_二宇佐之例_一田心姬命湍津姬命市杵島姬命以此三女神_二祭_二于相殿_一然雜書說比咩神稱_二玉依姬_一是無稽之妄說也不_二可_一以證_二焉_一

賀茂

上賀茂者在_二山城國愛宕郡_一所祭之神一座也延喜式卷第九神名帳上曰賀茂別雷神神社亦_二神社便覽曰賀茂別雷神大神宮一座廿二社註式曰日向國仁天降坐須神於賀茂建角身命止申須神倭磐吾彥天皇乃御前仁立坐天

奉御饌津神止由居太神乎我坐國欲止誨覺給支云々明
 年戊午秋七月七日以_二大佐佐命_一天從_二丹波國余佐
 郡真井原_一志天奉迎_二止由氣太神度遇山田原_一茨多
 親王神皇正統錄曰垂仁帝御宇皇太神移_二五十鈴宮_一
 而至_二此年_一既四百八十四年自_二神武帝_一殆千餘年矣
 大倭姬命猶在焉內外宮規准_二日少宮模_一以造_二之白
 井氏神社便覽曰內宮鎮坐之後四百八十年餘_一御鎮
 座本緣曰天地未_レ發陰陽未_レ分五德未_レ行四時未_レ轉
 之前渾沌如_二鳥卵_一溟滓而含_二牙之神白_一天常立尊_一
 其已發之初大海之中有_二一物_一浮形如_二葦牙_一其中神
 人化生名號_二天御中主尊_一其物便化_二爲國常立尊_一也
 此三名是一神而天地人之三才又備焉神社考詳節曰
 一說云外宮者天祖天御中主神也天孫瓊々杵尊在_二
 此宮相殿_一故天兒屋根命天太玉命亦附_二天孫_一而在_二
 相殿_一謂_二之_一二所太神宮_一天御中主者國常立異名也
 泓呂按舊記合_二兩宮_一稱_二二所太神宮_一特謂_二外宮_一
 號_二一所太神宮_一無_二所見_一也此事具辨_二于延佳續祕
 傳問答_一矣然林羅山者國朝宏博之先生也是只別有_二
 祕錄_一識焉歟是當_二尋_一博覽之士矣

神名祕書曰天照太神與_二豐受太神_一則爲_二無上之

宗靈_一而尊無_二二故異_一於天下諸社是則天地精明
 之本流也無相無位大祖也故不_レ起_二佛見法見_一以_二
 無相鏡_一假表_二妙體_一也神宮祕記曰凡伊勢二所皇
 太神宮則伊弉諾伊弉冊尊崇子宗廟社稷神惟群神
 宗惟百王祖也尊無_二與_一二自餘諸神者乃子乃臣孰
 能敢抗_二衣止詔玉布太田命傳記曰兩宮者天神地祇
 大宗君臣上下元祖也惟天下大廟也國家社稷也故
 尊_二祖敬_一宗禮教爲_二先故天子親耕以供_二神明_一王
 后親蠶以供_二祭服_一長寬勘文曰伊勢兩宮更抗_二禮
 天無_二一日_一地無_二一王_一之義也倭姬命世紀曰天地
 開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中主尊與_二
 大日靈貴_一豫結_二幽契_一永治_二天下_一言壽宣故或爲
 日爲_二月永懸而不_レ落或爲_二神爲_一皇常以無_二窮御
 鎮座本紀曰吾祭奉_二仕之時須_一祭_二止由氣皇太神_一
 也然後我宮祭事可_二勤仕_一

願註云葛城寶山記曰天御中主尊無_二祖無_一
 宗而獨能化故曰_二天帝神_一又號_二天宗廟_一

齋宮

齋宮者初在_二伊勢國飯野郡流田鄉_一于_二今宮跡存倭
 姬命始居_一焉是齋宮之始也神宮舊記曰垂仁帝廿六
 年興_二齋宮于宇治五十鈴川上_一以降令_二倭姬命_一居_二

哉倭姬命對曰理實灼然惟久代天祖誓願給天豐葦原
瑞穗國之內仁伊勢加佐波夜之國波有美宮處_ニ利止見
定給天自_レ天志天投降降居天之逆太刀逆鉾銅鈴等是也
止天倭姬命天平手於拍天甚喜於懷玉比於此處大_ニ宮_一
柱太_ニ敷_一立於下津岩根_ニ岐_ニ崎_ニ搏_ニ風_ニ於高天原_ニ而廿
六年丁巳冬十月甲子奉_レ遷_ニ于天照太神於渡邇宇治
五十鈴河上_ニ鎮坐也○楊文公談苑曰景德三年日本
僧入貢遂召問_レ之僧不_レ通_ニ華言_一善_ニ筆札_一命以_レ牘
對曰天台山延曆寺寺僧三千人身名寂照號_ニ圓通大
師_一國王年二十五大臣十六七人群寮百許人每歲春
秋二時集_ニ貢才_一所_レ試或賦或詩凡及第者常三四十
人國中專奉_ニ神道_一多_ニ祠廟_一伊州有_ニ太神_一或託_ニ三
五歲童子_一降_ニ言禍福之事_一山州有_ニ賀茂明神_一亦
然

外宮者在_ニ同國度會郡沼木鄉山田原_一是號_ニ度會宮_一
又謂_ニ豐受宮_一古者宇治內宮曰_ニ度會宮_一所_レ奉_ニ崇
祭_一之神四座也延喜太神宮式曰度會宮四座豐受太神
一座相殿神三座神社便覽曰左瓊々杵尊右兒屋命太
王命神代口訣曰於_ニ山田之神宮_一豐受太神相殿瓊々
杵尊天兒屋命太王命也○延佳神宮祕傳問答曰國常

立尊御正體瓊々杵尊依_ニ高貴神_一之勅東相殿御坐也奉
添_ニ瓊々杵尊_一天兒屋根命太王命西相殿而御同殿
御坐瓊々杵尊之荒魂號_ニ天上玉杵尊_一而與_ニ瓊々杵尊_一
同御船代一座而御神體之御形二體御坐是謂_ニ五神四
坐之祕事_一也釋空海天地麗氣記卷第四曰相殿座神左
皇孫尊天上玉杵命二柱一座右天兒屋命_前太王命_後又
云太王命亦名_ニ大日女荒神_一亦名_ニ月紇神_一亦名_ニ月讀
命_一又云今兩宮則兩部大日色心和合成_ニ一體_一則豐受
皇太神宮內一所並座也此事勿_レ令_ニ發言_一可_ニ兩宮崇
坐_一故

御鎮座傳記曰御間城入彥五十瓊殖天皇_{崇神天皇也}三十
九歲壬戌止由氣之皇神_{豐受太神也}天_ニ降_ニ于丹波國余佐郡
真井原_一泊瀬朝倉宮御宇天皇_{雄略天皇也}廿一年丁巳冬十
月一日倭姬命夢天照太神誨覺迎_ニ止由氣太神_一立_ニ
祠於伊勢國度遇之山田原_一爾來豐受太神與_ニ天照太
神_一合_ニ明齊_一德自_ニ垂仁天皇二十五年_一至_ニ雄略天皇
二十一年_一該四百八十二年倭姬命世紀曰泊瀬朝倉
宮大泊瀬稚武天皇即位廿一年丁巳冬十月倭姬命夢
教覺給久皇太神吾一所不_レ坐波御饌毛安不_レ聞食_ニ丹
波與佐之小見比沼之魚井原坐道主子八乎止女乃齋

左天兒屋命右太玉命舊記曰依天照太神御託宣太神第一攝神高宮奉傍止由氣宮也亦天照太神相殿坐神三座奉傍止由氣宮止由氣相殿神皇孫命仁奉陪從故號止由氣宮相殿自爾已降以天手力雄萬幡姬爲天照太神相殿度遇延佳神主中臣禊瑞穗鈔曰天照太神所鎮座之相殿神即天兒屋命天太玉命也然雄畧天皇御宇外宮御鎮座之時皇孫瓊杵尊爲外宮之東相殿故隨二神亦同侍殿內善爲防護之神勅而相傍皇孫尊天兒屋命天太玉命爲外宮之西相殿也因是御戶開神天手力男神萬幡豐秋津姬命以此二神奉爲內宮左右之相殿也

神宮本緣曰自神武天皇迄開化天皇九帝歷年六百卅餘歲天皇與同殿坐也此時帝與神其際未遠同殿共床以此爲常故神物官物亦未分明矣第十代御間城入彥五十瓊殖天皇崇神漸畏神威同殿不安改更令齋部氏率石凝姥神之裔天目一之裔二氏取天香山白銅黑金更鑄造於鏡劔同六年己丑天皇畏神靈共住不安故秋九月就於倭笠縫邑殊造立於磯城神籬奉遷於天照太神及天彥雲劔舍人親王日本書紀卷第五崇神紀曰六年百姓

流離或有背叛其勢難以德治之是以晨與久惕請罪神祇先是天照太神和大國魂二神並祭於天皇大殿之內然畏其神勢共住不安故以天照太神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬神籬此云比葬呂岐亦以日本大國魂神託淳名城入姬命祭同卷第六垂仁紀曰二十五年三月丁亥朔丙申離天照太神於豐稻姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎮坐太神之處而詣菟田彼幡彼此云佐佐更還之入近江國東廻美濃到伊勢國時天照太神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可憐國也欲居是國故隨太神教其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照太神始自天降之處也一云天皇以倭姬命爲御杖貢奉於天照太神是以倭姬命以天照太神鎮坐於磯城嚴櫃之本而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷于伊勢國度遇宮神宮舊記曰今歲猿田彥神裔宇治土公祖太田命參相乃曰南大峯有美宮處佐古久代宇治之五十鈴河上是日本國中仁殊仁勝靈地也其裏翁八萬歲之間仁未現知有靈物照耀如日輪惟小緣之物仁不在定主出現御坐

二十二社畧記

東武 長 島 泓 昌 編 纂

延喜式卷第九神名帳上曰天神地祇總三千一百三十二

座大四百九十二座小二千六百四十座

社二千八百六十一處

卜部兼右廿二社註式曰人皇六十二代村上天皇治十九

年康保二乙丑年霖雨經月九天覆雲依之閏八月廿

一日奉幣於十六社止雨伊勢石清水賀茂上松尾平

野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀨龍田住吉丹生木

船○案江次第云正曆已前十七社

註式曰第六十六代一條院正曆二年辛卯炎天送日萬

物變色依之六月廿四日祈雨奉幣時加吉田廣田北

野三社被奉官幣爲二十九社○儀同三司廿二社次

第曰吉田廣田北野次第事可爲住吉之次丹生之上

由宣下

註式曰同五年二月十七日祈年穀時加于梅宮被奉

幣爲廿社○次第曰梅宮事可爲住吉之次吉田之

上由宣下

註式曰第六十六代一條院長德二年乙未二月廿五日被

奉臨時官幣之日加祇園爲廿一社

又曰第六十九代後朱雀院長曆三年己卯八月十六日被

奉官幣之日加日吉爲廿二社○次第曰日吉事

可爲住吉之次梅宮之上由宣下林羅山神社考詳節

曰伊勢石清水稱宗廟皇帝祖神故也賀茂松尾平野春日吉田

等稱社稷又凡勅願尊崇之神社總名社稷又爲其人

之苗裔者爲祖神又曰石清水吉田祇園北野不入

延喜式神名帳號之式外神○白井自省軒神社啓蒙

卷二曰賀茂社爲宗廟耶爲社稷耶謂祕之不言

則近誣矣曰此難言也又神社便覽今宮下曰傳聞神位

各有高下也皇太神宮爲上大神宮次之大明神又次

之明神又其次也

伊勢

內宮者在伊勢國度會郡宇治鄉五十鈴河上所奉崇

祭之神三座也神名祕書曰村上天皇御宇祭主公節之

時皇太神者與座故號內宮一度相宮者外坐故曰外宮

始自此此時也延喜式卷第四太神宮式曰太神宮三座

天照太神一座相殿神二座神社便覽曰左手力雄神右萬

幡姬命○齋部正通神代口訣曰於渡會之神宮中御鏡

二十二社畧記引據書目

日本書紀	舊事本紀
釋日本紀	倭姬命世紀
鎮座本紀	鎮座傳記
神宮本緣	神祇本源
太田命傳記	神宮御鈔
神名祕書	神祇拾遺
神皇正統錄	新撰姓氏錄
神系圖傳	神祇正宗
延喜式	延喜格
江次第	類聚國史
葦原卜定記	日吉鎮座記
春日祕記	氏成私記
天地麗氣記	和歌三神傳
社家註進	長寬勘文
諸神記	山城風土記
神代口訣	同宣賢鈔

引據書目畢

兼俱日本紀抄	八幡本紀
廿二社註式	同註疏
同次第	同記
神社考	同詳節
神社便覽	神社啓蒙
諸社一覽	和爾雅
中臣瑞穗鈔	公事根源集釋
祕傳問答	續祕傳問答
雍州府志	正徹物語
清輔與儀抄	同囊雙紙
拾芥抄	拾遺集
金葉集	續古今集
風雅集	拾玉集
宋史	談苑
皇朝類苑	夢觀集
贈餘難錄	葛城寶山記
續倭漢名數	
通計六十五部	

二十二社畧記題辭

夫本朝者神國也。是故邦國郡縣莫不有鎮座之神焉。延喜式所載神名帳之神社凡三千一百三十二座。其外石清水吉田祇園北野號之式外神矣。蓋伊勢石清水者本朝二所之宗廟也。賀茂松尾平野春日等謂之社稷。後朱雀帝長曆三年秋八月定二十二社之數。且每歲勅神祇官以被奉幣帛。然後天下之衆人崇敬之。最越于自餘之神社矣。是以自古爲之記者不爲不多也。然其鎮座之神名諸傳不同。且爲其說或簡約而不詳。或廣博而不節。故蒙昧之徒病焉。因斯余雖不敏。敢會衆說而廣異聞。題曰二十二社畧記焉。亦和歌者我國之舊風。而其源起于神代。故上智下愚相與無不依焉。無不慕焉。仍今以和歌之兩神并附其後。與衆共之云。

嘗元祿十二己卯之祀孟春。幾望東武。逸民長臨。泓昌謹誌。

人亡羊留遺心何月仁賀改哉夫禮石於彫流龜猶海原於思
布何況神明乃種乎植人其本烏忘傳不_レ想者石仁母不_レ似
止自乃意於以豆自能心仁警昨假令小木耻乎願連波大那留功
志於立爾不_レ暇止云留言烏賴豆予賀短具拙氣志於以天幼稚
童蒙乃爲女覽流仁便阿留小幾記乎綴物南利不足所乎波後
乃世吾情仁齊木人相續與然者所願仁至留奈良志

于時寬文乃四咩俱理年能序甲辰霜月上茲日

白井自省軒宗因敬書

勅使_二以爲_レ祭也世人稱曰_二御蔭祭_一故社名_二御蔭社_一耳祝部社務等乘_二羽車_一神官悉應_二其位_一而或騎馬或扈從奉_レ爲_二供奉_一也誠非_二輕易之神事_一故今及_二怠倦_一者乎尙舊記存_二下鴨_一之間於_二此所_一可_レ尋焉

小野御靈 山城國葛野郡小野庄東河內村

人皇十五代文德天皇第一子惟喬親王之靈社也天安年中鎮坐今爲_二北小野氏神_一也

案世流布云某何社氏子也殊不_レ知_二本據_一之故耳何者兼名說云假令從_二此境_一祇園氏子或御靈氏子或稻荷氏子或今宮氏子更無_二本據_一也祇園社清和帝御宇貞觀年中之勸請也御靈社朱雀院御宇天慶二年勸請稻荷社元明天皇御宇和銅年中始顯今宮者一條院御宇長保二年始祭也云々於_二其內_一生者爲_二產神_一也氏神氏子之義古來無_二其沙汰_一也文盲青女之申事上樣仁聞食_二天爲_一本說一口惜次第也殊更山城國愛宕郡生者賀茂大明神御氏子勿論也賀茂大明神者山城國惣社也攻年中一度可_レ致_二社參_一也每日一度向_二北方_一可_レ致_二祈念_一也但是山城國之事也於_二餘國_一則其國惣社可_レ崇敬也又四姓

氏神者日本武源氏神也仲哀天皇平氏神也天兒八福命藤原氏神也仁明帝橘氏神也云々然則此神北小野產神也非_二氏神_一耳
落葉社 同下小野鎮坐
落葉大明神

傳言嵯峨天皇之皇后靈社也

由木社 城北鞍馬山鎮坐

正一位由木大明神

諸人之司_レ罪神也今不_レ載_二本緣_一者有_二深旨_一者乎平向_二神祇博達之士_一可_レ尋也

城南神 山城國烏羽鎮坐

烏羽天皇之靈社也當_二帝都南方_一之故世人號_二城南神_一也

南神_一也

也豆加連竊_ニ以者當昔天瓊矛乃_一一滴_ニ世利_一大八洲能國止

成里八十萬濃神廻御量事乎以豆安國登定理奉伎故仁蒼生

頓之深久恩賴烏蒙利飛鳥昆虫乃族未傳其功更不_レ預和無之

然似吾國能元乎忘_二天他乃國濃初於探_一天不_レ知_レ歸須根國底

國仁吟豆和尙吾性乃安木所止思天不_レ遷怪幾物乃形乎貴美

神脉相傳乃神祇乎不_レ恐寸邇_ニ近_一爾吾邦乃道乎勤禮波眼於

側指乎舉天笑布悲哉天神禁戒乃罪何能歲烏以天贖比諸

稻荷攝社也御神事之砌出_レ炬而奉_レ迎也故名云々

一社祕也故省畧焉

官者殿 京極四條鎮坐

舉_レ世所謂此神誓文起請赦免社也云々依_レ此考則唯一所_レ傳起請返神乎起請返者起請文上書_二靈印_一以奉_二神供_一一七日祭_レ之誠唯受_二一流大事非_二其家_一則不_レ傳也故今本緣不_レ載_レ之耳今世所謂武將之靈者蓋花言哉乎祇園末社有_二此神_一又宜也

鼠禿倉 日枝山鎮坐

案日吉神道密記末社註解下云蓋此神十二支中以_レ子爲_二使者_一故號_二鼠宮_一也主_レ福神也云々雖_レ有_二本緣_一今不_レ載焉行_レ世甲子祭者崇_二此神_一也以_二此社_一而記_二此書_一者羅先醒神社考之說天地雲泥也予又不_レ知_二是非_一故記以具_二後覽_一矣

田中社 山城國宇治郡石田鎮坐

天照皇太神 日吉山王

當社鎮坐年紀不_二分明_一也傳云當昔天武御宇之比此里忽然而一夜之間積_レ苗數尺其上有_二白羽矢_一也老翁來現云此地宜_レ鎮_二坐于天照太神日吉兩社_一也然則永爲_二帝都南方守護之神明_一耳依_レ此鎮

坐云々其積_レ苗之地于_レ今存也里民號_二苗塚_一也

荒神 大和國笠山鎮坐

興津彥 興津姬 中御神 日決之由

案荒神鎮坐雖_レ多和州笠荒神者諸人深崇_レ之故其名鳴_二畿內_一也仍記焉人家竈神亦此也蓋祭法別有_二式文_一耳

高野 山城國愛宕郡鎮坐

高野明神一坐

尋_二夫高野神社_一兩說也一云天照太神一云早良親王云々早良之事後乎天照太神之義尤附合也今明不_レ載焉故何者當社事於_レ他不_二分明_一也誠卜部家從_二天兒八禰命_一以降傳_二三種神物_一而神祇長職之家也依_レ此神社舊文太多耳今此天神於_二神代_一鎮坐之事非_二此家_一者雖_レ知又恐可_レ不_レ盡_レ美哉

石座 同岩藏鄉鎮坐

石座大明神

舊記云天神所_レ籠之窟戶也云々尙如_二上記_一於_二神樂岡_一可_レ尋_レ之

御蔭社 山城國高野鎮坐

當社下鴨影向之宮也昔天子每年四月午日被_レ立_二

古老云此神日吉櫛殿也故稱大賢木本四宮大明神也四座神鎮坐依斯號四宮也四座者

大比叡 大己貴 小比叡國常立

氣比 仲哀 小禪師火々出見

健部 延喜式神名帳云近江國栗太郡

健部神社 勢田也近江一國惣社也

一宮記云大己貴命也

櫻谷 神名帳云近江國栗太郡

佐久良谷神社 瀬織津姫

案以中臣祓熟語乎

唐崎 近江國坂本鎮坐

唐崎大明神

案拾遺爲祓說也故不載之今以六月晦日

爲參社又有與旨哉

苗鹿 神名帳云近江國滋賀郡云々

番神記云倉稻魂也

江文 城北大原鎮坐

江文大明神

案神祇拾遺云國狹槌也

大原 丹波國桑田郡鎮坐

大原大明神

伊弉冊尊

流諺云大原者天照太神之御母也然則伊弉冊義分

明也額云天一位大原大神宮云々

淡路多賀 延喜式神名帳云淡路國津名郡

伊佐奈伎神社

栗嶋 紀伊國鎮坐

栗嶋神社 少彦名

溫泉宮 延喜式神名帳云攝津國有馬郡云々

案少彦名傳云或出溫泉爲人治病云々然則此

非分明乎

船玉 延喜式神名帳云攝津國住吉郡

船玉神社 猿田彦

水垂 山城國淀鎮坐

水垂大明神 八幡叔母

向日 案延喜式神名帳云山城國乙訓郡 山崎

向神社 拾遺云素盞烏孫

當社累年有其名不正其本也羅山等又不

載神社考故今記以示童蒙耳

炬火殿 洛内七條鎮坐

正一位彥根大明神 天照太神子

案山門神系註云天照與素盞所誓活津彥根命也

鞭崎八幡 近江國栗太郡矢橋鎮坐

鞭崎八幡宮

案舊記云人皇四十代天武御宇白鳳四年二月十一日依勅願詔大中臣清丸鎮坐云々稱鞭崎者源賴朝上洛時此浦有神社召浦人馬上以鞭指之問此社也浦人云是八幡也賴朝有下馬而拜之依此號鞭崎云々雖有多說摘其要記焉

正八幡 同山田鄉鎮坐

勸請同日也稱鞭崎者矢橋八幡御事也

法華峯八幡 近江國蒲生郡鎮坐

今村號八幡

八幡宮

案社記云人皇六十六代一條帝御宇影向法華峯

云々

篠村八幡 丹波國鎮坐

八幡宮一座

案二十二社註式云人皇七十一代後三條院延久三

年依勅奉勸請兼延奉三行之

鶴岡八幡 伊豆相模鎮坐

案延久年中源義家勸請云々

朝倉八幡 周防鎮坐

案二十二社註式云人皇五十六代清和帝貞觀元年

立行宮勸請之

正八幡宮 大隅國桑原郡鎮坐

案家記云欽明帝五年顯坐云々

又案舊史五所別宮之一也

奈良八幡 大和國平群郡鎮坐

案舊史云孝謙御宇天平勝寶元年依八幡神託造

宮云々東大寺八幡也

佐女牛八幡 洛內六條鎮坐

今五條橋東號若宮者是也

案人皇七十一代後冷泉院治八年天喜元年依勅願

勸請曩祖兼親奉三行之

高倉八幡 洛內御池鎮坐

案康永年中等持院勸請兼豐奉三行之云々尙詳三

十二社註式等矣

四宮 近江國大津鎮坐

四宮大明神

神田 武藏鎮坐

神田靈社

羅山云平將門靈也

三保 延喜式神名帳云駿河國盧原郡

御穗神社

案神名帳首書云三穗津姬乎案國谷置瀨織津姬類乎依名置神之義往々有之

神祇官八神

神產靈 高皇產靈 玉留產靈 生產靈 足產靈

大宮女 御食津神 事代主

惣社 播劔姫路鎮座 大己貴

軍八頭正一位伊和大明神

案穴栗郡影向乎一宮穴栗郡勿論

高鴨 延喜式神名帳云大和國葛城上郡

八重事代主神社 大己貴子

平岡 延喜式神名帳云河內國河內郡

枚岡神社

一宮記云天兒根命也

兵主 延喜式神名帳云近江國野洲郡

兵主大神宮 口傳

案神祇正宗云大國玉命也云々此外有二祕說一今今

省畧焉

小津 延喜式神名帳云近江國野洲郡

小津神社 今世流布書物有二ハナヒ山者其中四月下稱菅祭此也

社家者說云稻荷同體也

額曰玉津正一位小津大明神云々蓋玉津者宇賀之

謂乎

大寶 近江國總郡鎮坐

大寶天王 疫神也

社家說云大寶年中從天上降臨神也其鎮坐老杉

今尙存也

牛頭 近江國栗太郡下笠村鎮坐

正一位牛頭大明神三座

同祇園也

當社雖不載式文今記之一日赴此地之節

奉拜神殿者法式嚴然更非田舍之法也利生

於今又盛也神祇職正春之鎮神靈印並年中神供

調進日記神事出仕瑞驗等記錄于社中存焉

佐々木 延喜式神名帳云近江國蒲生郡

沙々貴神社 少彥名命

彥根 近江蒲生郡鎮坐

案神名帳頭書曰人皇十五代神功皇后御宇武內宿禰勸請之一

長田 延喜式神名帳云攝津國八部郡

長田神社

案神名帳首書云事代主命也神功皇后祭之

生玉 攝津國大坂鎮座

生玉神社一座

社家者流云當社明神者當昔天孫降臨之時三十二

座神被供奉一也彼中天生玉神此也云々

大荒 播州鎮坐

大荒靈社

案風姿花傳抄云秦川勝靈社也本朝人代申樂祖神

也又製三十六番面而爲舞戲等此神始也云々

文段審彼書也撮其要領以書之其餘於花

傳可求焉

鹽竈

鹽竈明神

或曰猿田彦化神歟

出雲路道祖神 山城鎮坐

傳聞道祖神者幸神也古老語予曰今京極西一條

上有幸神町也此出雲路道祖神鎮坐地也今指上御靈末社之義難心得云々蓋道祖幸神皆猿

田彦神也

關明神 近江相坂鎮坐

關大明神

蟬丸靈社也

諸羽 城東山階鎮坐

諸羽大明神

案此神不分明也流諺蟬丸之姉靈社也云々又號

四宮者山階十八鄉內有二三宮而當社第四

故號四宮也又案古諸羽字作兩羽然則是兒屋

禰太玉命乎蓋爲左右扶翼神之故也又案對州上

縣郡有諸羽姬神也恐當社此神乎不知博雅君

子改之爲示幼童舉數說耳

竹生嶋 案延喜式神名帳近江國淺井郡

都久夫須麻神社

豐葦原本紀云市杵島姬或說云大字賀姬

河上 延喜式神名帳云肥前國佐嘉郡

與止日女神社

淀姬者八幡叔母也

上者_ニ矣競馬神事累代賀茂務_レ之尙見_ニ舊記_一也
亡智所_レ言敢非_レ可_レ執哉

藤杜 山城國鎮坐

藤杜神社

崇道盡敬天皇之廟也

御香宮 山城國鎮坐

御香宮

神功皇后廟也

志賀 延喜式神名帳云筑前國糟屋郡

志賀海神社三座

底津少童命 中津少童命 表津少童命

御靈 山城國鎮坐

御靈八所

吉備靈 崇道天皇 伊豫親王

藤原大夫人 橘逸勢 文屋宮田丸 藤原廣嗣

火雷天神

案神祇正宗云朱雀院御宇天慶二年勸請

清瀧 山城國醍醐鎮坐

清瀧權現

案神系圖註素盞雄

布刈 長門國赤目關鎮坐

布刈太明神

彥火火出見命也 神社考

戶隱 信濃國鎮坐

戶隱神社

手力雄命也

清水地主

大己貴命也 素盞烏子

右羅氏之說也

岩本

橋本

山城國賀茂鎮坐

案古來流傳云業平實方之靈社也云々誠此兩社賀茂社官祕不_レ明宜哉一條口決也傳聞業平實方_ニ士信_ニ此社_一而常奉_レ祈_ニ歌業_一也故爲_ニ業平實方_一也吁此神社非_ニ傳授_一則更可_レ難也

籠守 大和國吉野鎮坐

籠守大明神

案一宮記云住吉一體也

高御魂 延喜式神名帳云大和國添上郡

宇奈太理坐高御魂神社

神祇正宗云猿田彥也

三上 延喜式神名帳云近江國野洲郡

三上神社 口傳

正宗云伊弉諾云々

案兼右云尚有口決也故以祕說不載焉

富士 延喜式神名帳云駿河國富士郡

淺間神社

舊記云木花開耶姬山祇女

赤山 近江西坂本鎮坐

赤山神社

正宗三十番神註云素盞烏尊爲求法慈覺建之

云々

新羅 近江鎮坐

新羅神社

五十猛命也素盞子或素盞烏

遠布 延喜式神名帳云若狹國遠敷郡

若狹比古神社二座

一宮記云上社彥火火出見命下社豐玉姬

國玉 延喜式神名帳云尾張國中嶋郡

大國玉神社

一宮記云大己貴命也

足輕 相模鎮坐

足輕靈社

大和本紀云昔狩人也離寵妻有悲傷遂死爲

神云々又夫以妻鏡尙爲憂捨足輕山也以其

鏡爲足輕神云々

今宮 山城國鎮坐

今宮靈社

一條院御宇立神社于時藤原長能詠和歌曰

白妙能豐御幣乎取持豆伊波比曾曾武留牟羅佐幾乃

野仁

案頃今宮神輿前仁以錦而包數尺札書其上曰

紫野今宮大神宮云々傳聞神位各有高下也皇太

神宮爲上大神宮次之大明神又次之明神又其

次也然則非正統又難號哉乎何世何歲有勅

許而賜宮號耶更難心得耳或又語不肯云五

月五日競馬今宮神事也別雷社當社之末社也依今

送賀茂蓋有此旨乎否不肯應曰夫別雷社國史

等所載尤重普天社三千餘座中伊州太神山州賀

茂南社誠難下手之靈宮也恐於吾國無於此

伏消除_{一也云々}

松浦 肥前鎮坐

神功皇后 神社考

高良 延喜式神名帳云筑後國三井郡

高良玉垂命神社

案舊記云高良大神者武內宿禰也云々此說非也尙

可考_二古史_一也不曾非_二過論_一耳

玉津島 紀伊國鎮坐

玉津島社

衣通姬也 允恭帝后

蟻通

蟻通社

羅山云昔未詳何時世也唐將擊我國試贈七
曲玉環上下內通且告以繩貫此玉衆人不知所
爲于時有中將某取蟻繫細糸其腰以密
塗環口而入蟻蟻聞蜜香遂得通入而出於
是以其系所貫玉環還于唐唐人驚曰日本國
人其賢哉遂不肯攻哉_{誤字}其中將進至大臣
位死而爲神云々

橋姬

宇治橋姬社

姬太神居宇治橋下故號橋姬云々

足羽 延喜式神名帳云越前國足羽郡

足羽神社

繼體天皇靈社也

葛城 大和國鎮坐

一言主神社

手力雄命也

金峰 延喜式神名帳云大和國吉野郡

金峯神社 今號藏主權現

安閑天皇靈社也

愛宕 山城鎮坐

愛宕神社

或說云伊弉冊尊也拾遺軼遇突智下云疑愛宕神乎
案爲主火神勿論也軼遇突智神之義符合乎又
稱伊弉冊有故哉情案愛宕神爲地藏以禁魚
味並忌葷菜更難心得也近來佛法流中華
之後以地藏爲愛宕也吁全志人又以正焉

白鬚 近江鎮坐

白鬚神社

吉備武彥命也 孝靈帝三世

阿蘇 延喜式神名帳云肥後國阿蘇郡

健磐龍神社

此神古來有口傳之旨或人語不肖也決有與旨哉

熱田 延喜式神名帳云尾張國愛智郡

熱田神社

和國軍記云日本武尊所佩草薙劍是今在尾張年

魚市郡熱田社

白鳥 勢州鎮座

白鳥神社

日本武尊也

案軍記日本武傳云

尊逮于能褒野而痛甚則以所俘蝦夷等獻於神宮因遣吉備武彥奏於天皇曰臣受命天朝遠征東夷被神恩賴皇威而叛者伏罪荒神自調是以卷甲戢矛凱旋還冀曷日曷時復命天朝然天命忽至隙駟難停是以獨臥曠野無誰語豈惜身亡唯愁不面既而崩于能褒野云々于時日本武尊化白鳥從陵出指倭國飛

云々

膽吹 延喜式神名帳云近江國栗太郡

伊布貴神社

八岐蛇所變也 又別有口傳

案軍記作五十葺也

氣比 延喜式神名帳云越前國角鹿郡

氣比神社

一宮記云人皇十四代仲哀帝也云々

香椎 筑前鎮坐

借飯神社

舊記云香椎宮者神功皇后宿禰大臣在此宮謀

伐新羅云々雖有數說又本據未慥也故略焉

宇瀨 筑前鎮坐

宇美神社

譽田天皇產處也 神社考

宮崎 延喜式神名帳云筑前國那珂郡

八幡大菩薩宮崎宮一座

應神天皇也

案二十二社註式云書于新羅國降伏之由而置吾座下石柱乎立天宮殿向新羅造自然可降

案神祇正宗云此神爲三社稷神而爲三宗廟之後見一以守護朝家也云々又以石作柱者石腐乃際

尙神明在也止神誓見正宗也

香取 延喜式神名帳云下總國香取郡

香取神宮

一宮記云齋主命也齋主者經津主別稱也

三島 延喜式神名帳云伊豆國賀茂郡

伊豆三島神社

大山祇神也

生田 延喜式神名帳云攝津國八部郡

生田神社

稚産靈命也 天照太神妹

諏訪 延喜式神名帳云信濃國諏訪郡

南方刀美神社

健御名方神也 大己貴子

五條天神 西洞院五條松原

少彥名神社 高皇產靈子

社司家有少彥名記錄而詳也於此所可尋焉

案少彥名命者天下經營神宮本朝醫家祖也吾國

業醫術者不可不敬也今來古往醫士崇敬藥

師者何也吾國冠醫者無先於少彥名耳

南宮 延喜式神名帳云美濃國不破郡

仲山金山彥神 伊弉册子

宗像 延喜式神名帳云筑前國宗像郡

宗像神社

田心姬神 天照太神與素戔所誓子也

宇佐 豐前國宇佐郡

宇佐神社

湍津姬也

二十二社註式云人皇四十五代聖武帝神龜四年庚

申就此山造神宮因名曰廣幡八幡大神宮云々

云々

嚴島 延喜式神名帳云安藝國佐伯郡

伊都伎島神社

市杵島姬也

比賣語曾 延喜式神名帳云攝津國東生郡

比賣許曾神社

下照姬也

吉備 延喜式神名帳云備中國賀夜郡

吉備津彥神社

和多都美神社

對馬上縣郡

右以「一宮記」而書之雖有「異說」又不「雜焉」

雜社

熊野 延喜式神名帳云紀伊國牟婁郡

熊野速玉神社

速玉男 事解男 伊弉冊

多賀 延喜式神名帳云江州犬上郡

多何神社

伊弉諾尊

白山 延喜式神名帳云加賀國石川郡

白山比咩神社

伊弉冊尊 菊理姬

大社 延喜式神名帳云出雲國出雲郡

杵築大社

大己貴命 素盞烏

案舉「世皆云素盞烏就「根國」之故此國無「垂跡」也殊不「知素盞烏神者萬民可「崇敬」第一神也無「此神」則誰敢爲「安堵」之思乎以下就「根國」之句上而又勿「泥焉」

日前 延喜式神名帳云紀伊國名草郡

日前神社

寶基本紀云石凝姥神鑄鏡也初度所「鑄不」合「神」之意「也紀伊國日前之神是也云々葦原本紀等說如「此」今此外雖有「本緣」口決之條不「註焉」

太玉 延喜式神名帳云大和國高市郡

太玉神社

齋部祖神也又天孫降臨時三十二神爲「從神」也太玉神其一也

高市 延喜式神名帳云大和國高市郡

鴨事代主神社

事代主神者素盞烏之孫也

靜社 延喜式神名帳云常陸國久慈郡

靜神社

手力雄神也

思兼神子也天神忠功神尙分「明神書中」也

木幡 延喜式神名帳云山城國宇治郡

許波多神社

天照太神子吾勝尊之降跡也

鹿島 延喜式神名帳云常陸國鹿島郡

鹿島神宮

二荒山神社

都都古和氣神社

大物忌神社

遠敷大明神

氣比大明神

白山比咩神

氣多大明神

氣多大明神

伊夜日子神社

渡津神社

出雲神社

籠守神社

出石神社

宇倍神社

倭文神社

杵築神社

物部神社

由良姬神社

伊和大明神

中山神社

下野河内郡

陸奥白河郡

出羽飽海郡

若狹遠敷郡

越前敦賀郡

加賀石川郡

能登羽咋郡

越中礪波郡

越後蒲原郡

佐度羽茂郡

丹波桑田郡

丹後與謝郡

但馬朝來郡

因幡法美郡

伯耆川村郡

出雲出雲郡

石見安濃郡

隱伎智夫郡

播磨宍粟郡

美作苦田郡

吉備津明神

伊都伎島神社

玉祖神社

住吉神社

日前神社

伊弉諾神社

大麻彥神社

田村社

大山祇神社

都佐神社

宮崎神社

高良玉垂神社

宇佐宮

西塞多神社

淀比咩神社

阿蘇神社

都農神社

鹿兒島神社

和多都美神社

天手長男神社

備中賀夜郡

安藝佐伯郡

周防佐波郡

長門豐浦郡

紀伊名艸郡

淡路津名郡

阿波板野郡

讃岐香川郡

伊與越智郡

土佐土佐郡

筑前那珂郡

筑後三井郡

豐前宇佐郡

豐後大分郡

肥前佐嘉郡

肥後阿蘇郡

日向兒湯郡

大隅桑原郡

薩摩穎娃郡

壹伎石田郡

野本地堂_二也何社官等不_レ正_レ之耶於_レ不_レ正則潤_二色吾國之耻_一者也

丹生 延喜式神名帳云大和國吉野郡

丹生川上神社

岡象女神一座 伊弉諾子

人皇四十代天武帝白鳳四年遷座云々

貴布禰 延喜式神名帳云山城國愛宕郡

貴布禰神社 初作_二木船_一也後依_二瑞驗_一而改_二貴布稱_一

閼麗神 伊弉諾子

案 奧御前 船宮等 口傳

抑貴布禰社者累代爲_二賀茂末社_一也何者儀同三司

二十二社次第云貴布禰者賀茂之攝社也蓋攝者兼

也宜哉此末社也又至_レ今賀茂有_二禰宜等職_一也於_二

賀茂_二可_レ尋焉

豐葦原一宮御事

賀茂下上大明神 山城愛宕郡

三輪大明神 大和城上郡

平岡大明神 河内河内郡

大鳥大明神 和泉大鳥郡

住吉大明神 攝州住吉郡

敢國大明神

都波岐大明神

伊射波大明神

大神社

砥鹿大明神

己等乃麻知神社

淺間大明神

三島大明神

淺間大明神

寒川神社

氷川神社

洲崎大明神

玉前神社

香取神社

鹿島神社

建部神社

南宮神社

水無神社

南方刀美神社

拔鋒大明神

伊賀阿拜郡

伊勢河曲郡

志摩答志郡

尾張中島郡

參河寶飯郡

遠江佐野郡

駿河富士郡

伊豆賀茂郡

甲斐八代郡

相模高座郡

武藏足立郡

安房安房郡

上總埴生郡

下總香取郡

常陸鹿島郡

近江栗太郡

美濃不破郡

飛驒大野郡

信濃諏訪郡

上野甘樂郡

公^{人皇十四}元正帝養老元年入唐而其後^{人皇十五}聖武御

宇天平五年癸酉飯朝之日留^{此所也}于^時山中

有^{白和幣}而時々放^{光也}吉備怪以登^{山道遙}

一樹下^{者老翁現而語}吉備^{云吾是素盞烏命也}

爲^{諸人守護五穀能成}從^{出雲}來^{往此峰}數年

汝告^{帝以可立}祠而崇敬^也吉備驚以下^{山發}

船赴^{京師}速攀^{玉階}拜^{龍顏}而後告^{此旨}

今帝遂以^{綸旨}下^{吉備}云々其翌年甲戌再建^神

殿^{自奉崇敬}以來諸人爲^{群每傾頭悉蒙恩}

賴^也其白和幣立處號^{白幣峯}而建^{吉備靈社}

于^{今存也}又御本殿後有^{九穴}而一穴經八寸許

傳云九部神各鎮坐^{云々}九部者一社祕說也故令^省

略^{焉誠傳}隨^{一神法}而遂不^陷月氏教法^者

此吾國神忠不^過之者乎有^思正統^者誰可^{不仰哉}

又天王^{人皇卅七}大化元年逢^{法道}之事今不^{載也}

見^{三元亨釋書第十六}矣

又牛頭號並冠者殿九部神於^{其家}而可^{尋焉}

北野^{式外}山城國葛野郡西京

天滿自在天神三座

東 中將殿

中 菅丞相

西 吉祥女

人皇六十二代村上帝天曆元年六月九日遷坐^{云々}

接天滿自在天神者天穗日命後裔而本朝文道之大

祖也至^{今蒼生誇詩賦}兮^{和歌}之輩無^不

仰^{也靈驗赫赫照}正直之頭^{兮惜哉}宦者忘^其

本^{以務其末了}之故餘光徒埋而遂不^{見誠慨痛}

之甚哉

宮寺說

今寶札上令^{蒙宮寺二字}以爲^{面目}也恐近來

作意乎獨非^{北野耳}詰^{此意}則皆云借^{某寺地}

也可^{歎可}悲哉夫我國從^{常立御中主}已來神系

正統之神國也然佛何豈先^{國常立}而主^{此國}乎

是却云^{侵神國}則佳也何有^{于借佛地}之理^上

耶 又嘗神學^{佛法}者此爲^試自他廣窄優劣

也嘗非^{貴佛意}也何者於^{筑紫宮}以^{正一位}自

在號^{爲足也}若貴^{佛則何望}大菩薩寺號^{耶蓋}

今以^{學佛法}而爲^{據或爲普賢}或爲^{觀音}也

依^{斯南門外東向觀音堂爲}與院^{並守符上書}北

神樂岡神社

當社地主也於此所八色雷神勸請之由古來卜部
家流傳也此外瀧澤日降坂如意山等之數條今省略
焉蓋於某家以可傳授也不肯非所能及也
廣田 延喜式神名帳云攝津國武庫郡

廣田神社

天照太神荒魂云々

又五座說

一殿 住吉大明神

二殿 廣田大明神

三殿 八幡大神宮

四殿 南宮

五殿 八祖神

右說中不顯本緣者蓋似未盡美者乎雖然
百一代後小松御宇伯三位資忠公深歎本緣之正
說而朝求夕尋以雖窮髓腦兮尙不出臆中
故今亦不明註記也

蛭兒夷殿

世流布以爲混同也蛭兒者天照太神兄弟載方
冊而分明也夷殿說拾遺云口授之一條也云々又案

今人家以大黑而配當于此神之義今古不分明也蓋一箇口傳故耳尙待博達之師可責焉

二十二社註式云垂跡時代無正記云々又三十番神

註云人皇十五代神功皇后二年壬午歲以山背根子
之女葉山姬祭之云云

今存兩說也覽者可研窮矣

祇園 式外山城國愛宕郡八坂鄉

祇園天王 三座

西稻田姬 號少將井註見子神祇正宗

中素盞烏 號大政所

東龍王女 號今御前

人皇五十六代清和帝貞觀十八年移八坂鄉云々

今案此神社中美御前惣光社等古來面授云々並感

神院號之事一社之深祕也止愚昧不及之甚也

廣峯天王 播州節東鎮座

三社 本社之外也然爲祇園
本社之間入此所也

二十二社註式云牛頭初垂跡播州廣峯陽成院御

宇移北白河東光寺傍貞觀年中移八坂鄉云々山

門慈惠大師大延二年記云蓋素盞烏尊在播州號

廣峰當陽成御宇來京師云々社家者流云吉備

二十二社記云神功皇后征三韓之時顯坐攝州云々

日吉 延喜式神名帳云近江國滋賀郡

日吉神社

大宮

大物主神

二宮

國常立

聖眞子

八幡

八王子

國狹槌

客人

菊理姬

十禪師

宇賀姬

三宮

豐樹瀧

右註解二十二社註出焉此外以天神七代而分

配之說雖行世今不肖貧之家無博識涉獵之

備也今以遮眼之書而記之撰其是者可

隨矣

二十一社之說

大行事

早尾

下八王子

王子宮

聖女

氣比

小禪師

中七社

惡王子

新行事

石瀧

劔宮

牛御子

若宮

護因

下七社

右社家之註進如此今不記本緣者蓋重神社之故也

當社鎮坐年記不分明兮或云人皇卅九代天智帝御

宇鎮坐

梅宮 延喜式神名帳云山城國葛野郡

梅宮坐神四座 口傳

酒解神

大若子神

小若子神

酒解子神

二十二社註式云鎮坐不分明矣

案此神本緣或爲諸兄靈或爲檀林又傍爲

釋氏也未知是非也尙恐非傳授則誰敢知

之哉

吉田

式外 山城國愛宕郡

四座 同春日

御堂關白御書曰奈良京時春日社長岡京之時大原

野平安城今吉田占帝都之咫尺有神祠之鎮護

云々

當社鎮坐不分明

或云人皇五十六代清和帝貞觀年中鎮坐中納言山陰

卿始勸請云々

此說爲虛誣一則於某社可尋焉獨悲道廢而非舉惡矣

春日 延喜式神名帳云大和國添上郡

春日祭神四座

一殿

武雷神

二殿

齋主神

三殿

天兒屋命

四殿

比咩大神

人皇四十八代稱德帝神護景雲二年正月九日大和國

添上郡三笠山垂跡

大原野

式外

山城國乙訓郡

四座同右

舊記云仁壽元年二月二日依太皇太后御祈山城國

葛野郡大原野仁宮柱廣知立春冬乃御祭如賜

大神 延喜式神名帳云大和國城上郡

大神大物主神社

素盞子

兼敦云案神代鎮坐勿論也

石上 延喜式神名帳云大和國山邊郡

石上坐布留御魂神社

口傳

第十一代垂仁帝四十九年十月作劔一千口藏

石上神宮以斷蛇劔爲神體今所作劔奉副也

大和 延喜式神名帳云大和國山邊郡

大和坐大國魂神社三座

大己貴神

御年神

大國魂神

人皇十代崇神帝六年鎮坐

廣瀨 延喜式神名帳云大和國廣瀨郡

和加宇賀乃賣命神社

龍田 延喜式神名帳云大和國平群郡

龍田坐天御柱國御柱神二座

口傳或云級長戸邊命

住吉 延喜式神名帳云攝津國住吉郡

住吉神社四座

底筒男

中筒男

表筒男

神功皇后

又社家說云

天照太神

宇佐姬

底筒男中筒男表筒男

神功皇后

傳授並客人地主等令省略也

名稻荷之說

案一書曰弘法東寺門前逢荷稻老翁大師以爲東寺鎮守以其荷稻故名稻荷云々蓋非此意也此地主荷田大明神之地置倉稻魂也依斯稻荷二字爲神號也夫此神者本朝衣食祖神蒼生安逸之靈社也何人不敬之乎何者人我堪寒凍之苦飢餓之患永退者皆此神恩也常雖天子諸侯又以不下筋之前祭字賀姬也古今通例矣嗚呼種神明之餘光却沉夷狄之教法而摘初食號生飯而餉佛祖也此何惑耶夫爲人子厚孝於己父母爲人臣則盡力於吾君則人倫之達道也棄己母而孝他母兮罔己君以忠他君者爲忠孝乎此天下大賊也今世人何異之棄吾國神法以從于夷狄之法也

真如堂稻荷說

洛北今出川邊有寺而號真如堂也此寺庭有一字中安置辨才天跨白狐之像而名稻荷以每歲二月初午日男女尊卑爲群也寺僧皆云紀伊郡稻荷神體數十年已往爲質物送此寺兮故

今此寺守札印尊形又紀伊郡稻荷不印尊形也此豈非分明乎自街檀那之深信而以賣不實者也殊不知夫神者不測之靈號也仰之彌高欲尋之則玄妙幽遠而難到其境也何以現其形耶以有示無示有兮依斯萬願千誓一而不虛也喻一輪月雖洪海雖微露亦應大小無不宿也神誓又如此兮嗚神道微而學者稀也以此謾者爲貴耳其本亂而未治者何有之乎情案真如堂稻荷來意則往歲此寺住僧深信稻荷也越於餘社而從壯至者每日無怠倦爲社參耳依此彼僧與稻荷上人名增圓者爲飲酒之友也一日語上人云多年詣此所不止今歲漸桑榆景迫難成步行兮願汝與吒祇尼天像乎上人不及固辭以附與之僧大喜還寺名宇賀神而且夕奉神供供酒食爲禮法也依此奴隸密語人云我主來往稻荷神社也數年宇賀感僧志而被授尊形也今有此寺晝夜爲勤耳吁昧者不知神理之故且尊形而雖語人又以親炙愚夫愚婦之耳遂充不實於天下者乎一人傳虛則天下悉傳虛者蓋此謂哉若以

社領一四時一日無怠令引網奉備一日別供祭也此論旨有近江如レ此之崇敬人不レ知之偏爲ニ盲者守神一堪ニ大息ニ哉

○類聚國史云八百萬神其餘不レ量雖レ無何勝劣已別雷皇太明神爲ニ帝都鎮守ニ云々

○上宮太子馬腦記云凡帝都守護神明何雖レ不レ疎而賀茂明神之守護深重也全文略之

御祖大神宮

山州一宮勿論也天子崇敬尙不レ異上社也尙三家社小鳥比良木二言三言社等別而口決之由社家者流言也竊案古昔天子御崇敬越ニ於餘社也依レ斯諸人又常敬レ之惜哉中神道徵學者稀也邂逅有ニ學者則舉レ手搖レ頭而嘲レ之嗚呼古人云入ニ鮑魚肆一而久忘ニ其臭一之徒乎何疎ニ吾國道ニ而馴ニ人國法ニ耶一日居ニ吾國一則可レ隨ニ其道一也若居ニ吾國一而却貴ニ月氏教法一則是罔レ君罔レ父之徒哉

松尾 延喜式神名帳云山城國葛野郡

松尾神社二座松尾二字有二一社神祕之由

大山咋神一座口傳有之

智形中津大神一座

人皇四十二代文武帝大寶元年秦都理始建ニ神殿一云々

平野 延喜式神名帳云山城國葛野郡

平野神四座

今木神 源氏神

久度社 平氏神

古開社 高階氏神

比咩神 大江氏神

縣社 菅氏神

延喜格云桓武帝延曆年中造レ社

稻荷 延喜式神名帳云山城國紀伊郡

稻荷神社三座山成風土記三座說又別也

下社 大宮姬

中社三座 倉稻魂

上社 大田命

人皇四十三年元明天皇和銅四年鎮座

今所レ傳稱ニ五座一

田中社但忌烏理今有 大己貴命

四大神 神功皇后

神祇拾遺云弘長六年比爲ニ五座一云々此外中社三座

○第六十九代後朱雀院長曆三年_{己卯}八月十六日被_レ奉_二官幣_一之加_二日吉_一爲_二二十二社_一日吉社可_レ爲_二住吉_一之次梅宮上_二之由宣下

伊勢 延喜式神名帳云伊勢國度遇郡

太神宮三座

天照太神一座

相殿神二座<sub>左神力雄
右萬幡姬</sub>

第十一代垂仁帝御宇二十六年_{丁巳}十月遷_二度遇宮_一豐

受太神宮一座

御食津神

相殿三座<sub>左瓊瓊杵尊
右兒屋命 太玉命</sub>

第二十二代雄略帝二十二年_{戊午}七月從_二與佐郡魚井

原_一遷_二伊勢國度會郡山田原_一_{云々}內宮鎮坐之後四百

八十年餘_{云々}

竊案_二鎮座本紀並神祇百家之書_一誠伊勢兩太神事

源遠末潜而更一朝一夕難_レ盡也內外二宮之內或

御倉或御舟或多賀宮阿古根等傳授雖_レ有_レ之更

難_二註記_一也尙於_二某所_一可_レ求焉

石清水_{式外}山城國久世郡

八幡大神宮三座

東 玉依姬

中 八幡宮

西 神功皇后

第五十六代清和帝貞觀元年八月二十三日遷_二雄德

山_{云々}

案以_二此神宮_一爲_二天下第二宗廟_一今玉依姬置_二東

殿_一等蓋有_二深旨_一哉雖_レ然非_二不肖所_一及也故今省

略焉

賀茂 延喜式神名帳曰山城國愛宕郡

賀茂別雷皇太神宮一座

鎮座年紀更難_レ明也

案本緣難_レ註也自_レ昔終不_レ下手今何者神祇正宗

云社家深祕無_二申旨_一故難_二露顯_一_{云々}寔到_レ今輕易

不_二許宥_一也只雖_二知者之姪孫_一又非_二器則撰_一他人

俊秀_一而附與焉悉非_レ知_レ之_{云々}就_二中八社攝殿並

末社等_一_{云々}就_二中八社攝殿並末社等_一之義同事也

尋_二夫賀茂別雷皇太神宮_一者山州之一宮也加之天

下安泰神社蒼生荷恩之靈宮也上自_二天子大樹_一下

至_二陋巷匹夫_一何不_レ敬_レ之乎昔者天子每度奉_二幣

並以_二皇女_一而被_レ置_二齋院_一又江州安曇河爲_二別雷

神社便覽序

夫國神國也道神道也敎神敎也故稟_ニ生於吾邦_一者無_レ不_レ依焉無_レ不_レ仰焉因_レ斯嘗羅山子博索旁搜而爲_ニ書三卷_一名_ニ神社考_一予偶閱_レ之涉_ニ獵諸氏百家之書_一而無_ニ不_レ到者_一惜哉徒煩_ニ其多_一不_レ窮_ニ其本源_一乎吾友有_ニ白井氏_一家世業_ニ醫而爲_ニ曲直瀨氏之餘流_一也家業之暇汲_ニ汲於此道_一焉故馳_ニ足於大小神社_一就_ニ其所_一聞_ニ某說_一也遂輯_ニ錄之_一傍附_ニ私見_一號曰_ニ神社便覽_一蓋欲_ニ嘉_ニ惠後學_一便_ニ覽_ニ乎急務_一也縮_ニ冊爲_ニ小者則欲_ニ下至_ニ凡民之徒_一各令_ニ蒙_ニ其澤_一者乎予於是感_ニ于觥_一排浮屠_ニ登_ニ崇神社_一之志_ニ而忘_ニ固陋_一爲_ニ之序_一

時
寬文四年歲在甲辰

稻荷上社祝秦公建

神社便覽

二十二社

人皇六十二代村上天皇治十九年康保二_乙年霖雨經_ニ月九天覆_ニ雲依_ニ之_一閏八月二十一日奉_ニ幣於十六社_一止_ニ雨_一

伊勢 石清水 賀茂_上松尾 平野 稻荷 春日
大原野 大神 石上 大和 廣瀨 龍田 住吉
丹生 木船

○第六十六代一條院正曆二年_{辛卯}炎天送_ニ日萬物變_ニ色依_ニ之_一六月二十四日祈雨奉幣時加_ニ吉田廣田北野三社_一被_ニ奉_ニ官幣_一爲_ニ十九社_一吉田廣田北野次第可_ニ爲_ニ住吉次丹生之上_一宣_ニ下_一

○同五年二月十七日祈年穀時加_ニ于梅宮_一被_ニ奉幣_一爲_ニ二十社_一梅宮事可_ニ爲_ニ吉田之上住吉之次_一由宣_ニ下_一

○第六十六代一條院長德二年_{乙未}二月二十五日被_ニ奉_一臨時官幣之日加_ニ祇園_一爲_ニ二十一社_一

振古神社之傳記行于世者多偏集大成
而以號本朝諸社一覽惟欲便童蒙庶幾
崇吾日東之神祇且辨吾桑域之國風也
因跋於卷尾云

貞享乙丑初秋

坂内氏直賴謹撰

ラマレテハ見參ニモ參ラヌゾトイフニサキ、サル
 コトナシトテキタリケレバ國司ムヅガリテ國司モコ
 クシニコソヨレ我ニアヒテカウハイフゾトイヤミ
 思ヒテ知ラン所ドモ點ゼヨナドイフ時ニ人アリテ大
 宮司ニイフ誠ニモ國司ト申スニカ、ル人オハス見參
 ニマイラセ玉ヘトイヒケレバサラバト云テ衣冠ニ絹
 イダシテ供ノ者三十人計グシテ國司ノガリムカヒヌ
 國司出アヒ人ドモヲヨビテキヤツタシカニメシコメ
 テ勘當セヨ神官トイハンカラニ國中ニハラマレテ如
 何ニ奇恠ヲバイタストテメシタテ、ユフ程ニコメテ
 カンダウス其時大宮司心ウキコトニ候御神ハオハシ
 マサヌカ下薦ノ無禮ヲイタスダニ立所ニ罰セサセオ
 ハシマスニ大宮司ヲカクセサセテ御覽ズルハトナ
 ク、クドキテマドロミタル夢ニ熱田ノ仰ラル、ヤ
 ウ此コトニヲキテハ吾チカラ及バヌ也其故ハ僧アリ
 法花經ヲ千部ヨミテ吾ニ法樂セントセシニ百餘部ハ
 ヨミ奉リタリキ國ノ者ドモタウトガリテ此僧ニ歸依
 シアヒタリシヲ汝ムヅカシガリテ其僧ヲオヒハラヒ
 テキノレニ此僧惡心ヲオコシテ我此國ノ守ニ成テ此
 コタヘヲセントテ生レ來テ今國司ニ成テデレバカラ

ヨバズ其先生ノ僧ヲ俊綱トイヒシニ此國司モ俊綱ト

イフ也ト夢ニ仰アリケリ 宇治拾遺

島明神

基隆朝臣周防國ヲ知ケル比保安三年十月ニ語ケルハ
 彼國ニ島明神トテオハシマス神主ドモアラソヒノ事
 有テ論ジケル者有トテ神田ヲ薊トラントシケレバ寶
 前ヨリ蛇三百バカリ出タリ其中ニツノアル二ツアリ
 ケリシバシアリテ入ヌ其後猶薊ントシケレバ鳥數萬
 飛來テ神田ノイネノ穗ヲクヒヌキテ皆神殿ノ上ニフ
 キケリ不思議ノコトナリ 古今著聞集(ノ心)

諸社一覽第八大尾

ナラバ誰カ尊神ヲ仰ギ和光ノチカヒヲタノマンヤト
深クウタガヒテ此事ヲ申止ント思レケル夢ニ大明神
示現シテノ玉ハク方便ノ殺生ハ并ノ六度ニコエ愛見
ノ大悲ハ達多ガ五逆ニモスギタリ汝イマダ神慮ノ源
底ヲ知ズ涅槃經ヲ見ザルユヘニ此見オコル也トテ經
ヲ取出テミセ玉ヲ其文ニ我未來魚鳥等禽獸成飢衆生
被レ食以ニ其緣令得脫アル趣也意ヲトル夢サメテ
感涙ヲサユガタク即チヘン經ヲ披見スルニ文分明也

三國傳記
吉野

三輪上人トテ貴人有リ或時吉野勝手明神エ百日參詣
アルニ百日ニミツル日吉野川ノハタニ死人ノアリケ
レバ穢ヲハヤカリテ參詣ノ諸人トヲキ道ヲメグリテ
參レリ上人此ヲ見テ彼死ガイヲトリカクシ參詣者ノ
煩ナキヤウニナセリ上人ハ彼ケガレニ依テ參詣ニア
タハズ明神ノ御方ヲ伏拜シテソレヨリ下向アリケレ
バ足ナヘテ行歩叶ハズサラバ明神ノ方エ參テミント
歩ミ玉ヘバヤスク歩マレケリ又下向シ玉ヘバ足ナヘ
ケリサレバ上エ參ラント思ヒ山マデ參玉ケルニ相違
ナシサレドモ恐憚テ瑞籬ノ外ニ畏キ玉ヒケルニ明神
童子ニ託宣アリテ上人ヲ見テアレニ侍ル法師近ク參

レト仰ラレテ此後今一度見參ニ入テヨロコビ申サン
トテ神アガリ玉ヘリ 同上

三島

伊豆三島ノ社ニ鷄多ク有ケル中ニ目ノツブレタル有
イツモ暗ケレバトキナラズ時ヲ作り朝夕ヲモ辨ヘズ
風霜ニ苦シミ食ニトボシ、或修行者此ヲ見テヤセヲ
トロヘ飢渴スルヲアハレミ短冊ヲ書テ鳥ノ頸ニ付ケ
レバ鳥ノ眼忽ニアキケリ皆人アヤシミテコレヲ見レ
バ一首ノ歌ニテゾ有ケル

鷄ノ鳴音ヲ神ノ聞ナカラ心ツヨクモ日ヲ見セヌ哉

僅ニ三十一字ヲモテ神慮ニ達スルコト新ナリ 同上

熱田

今ハ昔伏見修理大夫ハ宇治殿ノ御子ニテオハスアマ
リ公達多クオハシケレバヤウヲカエテ橘俊遠ト云人
ノ子ニナシ申シテ藏人ニナシテ十五ニテ尾張守ニナ
シ玉ヒケリソレニ尾張ニ下テ國オコナヒケルニ其頃
熱田神イチハヤクオハシマシテ自ラ笠ヲモヌガズ馬
ノハナヲムケ不禮ヲイタス者ヲバヤガテタチドコロ
ニ罰セサセオハシマシケレバ大宮司ノ威勢國司ニモ
マサリテ國ノ者ドモオチ恐タリケリソレニ此國司下
テ國ノサタドモアルニ大宮司ワレハトオモヒテキタ
ルヲ國司トガメテ如何ニ大宮司ナランカラニ國ニハ

船ヲエテ上總ノ地エ渡リ女ノ方ニ尋行ヌレバ主出テ如何シテ下リ玉ヒケルト云フ鎌倉ノ方ユカシク修行ニ出テ侍ツルガ近キ程ト承テ參テ侍トイヘバサマザ

テ七日コモリテ此度タスカリガタクバ速ニ吾命ニメシカヘ玉ヘト祈リテ七日ニ滿ケル日御幣ノシデニ書ケル

マニモテナシケリ田舎ノヤウヲモ見玉ヘト留ケルマ、本ヨリ望處ニテトバマリケリトカクウカバヒテ忍々女ノ方ニ通ヒケリサル程ニ男子一人イデキヌ女ノ親是ヲ聞テイカリケレバユカリ有方ニカクレキテ年月ヲ送ル程ニ唯一人ノ女ナレバツキニ親ユルシツ此僧モ形清ラニヤサシキ者ナレバ今ハ子ニゾナサメトテ許シケリカクテ此二人ノ中ニ子三人イデキヌ此子十三ノ時元服ノ爲鎌倉エ行トテサマノ具ドモ用意シテ船ニ乗テ海ヲワタルニ風ハゲシク波高キニ此子フナバタニ望ケルガアヤマチテ海エヲチケリアレノトイヘドモシヅミテ見エズ胸ヒシゲアハテサハグト思テ夢サメヌ十三年ノ間ノ事ヲツクノト思ヘバ只片時ノユメ也タトヒ本意トゲタリトモ片時ノ夢ナリヨシナシト思テヤガテ歸テ行ヒケリ和光ノ御方便成ベシ 沙石集

カハラント祈ル命ハラシカラテサテモワカレンコトソ悲キカクヨンデ奉ケルニ神感有ケン舉周ガ病ヨクナリヌ母下向シテ悦ナガラ此ヤウヲカタルニ舉周イミジクナゲキテ我生タリトモ母ヲウシナヒテハ何ノイサミカアランカツハ不孝ノ身ナリト思テ住吉ニ詣テ母我ニカハリテ命ヲハリ侍テバ速ニ吾命ヲメシテ母ヲタスケ玉ヘト泣々祈申ケレバ神アハレミ玉ヒケン母子トモニコトユヘナク侍リケリ 同

延久二年八月三日上總國一宮ノ御託宣ニ懷妊ノ後スデニ三年ニ及ブ今明王ノ國ヲオサムル時ニノゾミテ若宮ヲタンジャウスト仰ラレケリ是ニ依テ海濱ヲ見ケレバ明珠一顆有ケリ彼御正體ニタガフ事ナシ不思議ノ事ナリ 同

諏訪
信濃國諏訪明神ノ祭禮ニ多クノ鹿ヲ供御ニ備奉ル也隆辨僧正コレヲ見テ神明和光ノ善巧ハ物ヲ利スルヲ以テ元トシ衆生濟度ノ方便ハ慈悲ヲ以テ始トス何ノ有生カ命ヲ惜マザラン且ハ無理ノ禮貪ヲ神納受アル

住吉
昔式部大輔大江匡衡朝臣ノ息式部權大輔舉周重病ヲ受テタノミスクナク見エケレバ母赤染衛門住吉ニ詣

人モナキ寺ニ成ケリ僧ノ中三人新羅明神ニ參テコモ
リタルユメニ明神御戸ヲ挑ゲ玉テヨニ御心ヨゲニ見
エサセ玉ヒケレバ我寺ノ佛法マボラント御誓アルニ
イカ計御ナゲキ深カラント思フニ其御氣色ナキコト
イカニト申ケレバ誠ニイカデ歎キ思ハザランサレド
モ此コトニヨリテ眞實ノ菩提心ヲ發セル僧一人アル
コトノ悅シキ也堂塔佛經ハ財寶アラバ造ヌベシ菩提
心ヲ發ス人ハ千萬人ノ中ニモ有ガタクコソト仰ラレ
ケル 沙石集

隆覺法印保延五年ニ興福寺別當ニ成タリケルヲ衆徒
用キザリケレバ隆覺怒ヲナシテ數百騎ノ軍兵ヲ發シ
テ十一月九日ニ三方ヨリ興福寺ヲウチカコミテケリ
隆覺ガ方ノ兵寺中ニ亂入ントスル間合戰ニ及テ隆覺
ガ方ノ軍兵多ク命ヲ失ヒケリ隆覺衆徒ノ首ヲ切テ御
寺ヤキウシナフベキ由下知シタリケレバニヤ隆覺ガ
兵ノ中ニ放火ノ具ヲ持タル者有リ寺ノ外ノ小家一二
字ヤケタリケレドモ雨フリテ消シケリ合戰ノ間ニ不
思議共多カリケリ春日山ニ神光有ケルガ合戰ハテ、
見エズ或人ノ夢ニモ御寺ノ方ノ兵鹿ノ形ナリケリト
見ケリ又神主時盛ガ夢ニハ弓袋シタル兵數百人アリ

時盛問ケレバ春日大明神ノ御合戰御訪ニ藤入道ノ參
セ玉フ兵ナリト云ケル時盛驚ク程ニ隆覺ガ兵入ニケ
リ大明神ノ御ハカラヒニテ衆徒合戰理ニシケル嚴重
也ケル事也古今著聞集(ノ心)

熊野ニ盲者ノ齋燈ヲタキテ眼ノアキラカナラン事ヲ
祈ル有リケリ此ツトメ三年ニ成ケレドモシルシナカ
リケレバ權現ヲ恨マイラセテ打臥タル夢ニ汝ガ恨ル
所ソノイハレナキニアラネドモ前世ノ報ヲシルベシ
汝ハ日高川ノ魚ニテ有シナリ彼川ノ橋ヲ道者ノワタ
ルトテ南無大悲三所權現ト上下諸人トナヘケル聲ヲ
聞テ其エンニヨリテ魚鱗ノ身ヲ改テ受ガタキ人身ヲ
エタリ此齋燈ノ光ニアタル緣ヲ以テ來世ニ明眼ヲエ
テ次第ニ昇進スベキ也ト仰ケリ後懺悔シテ一期ヲ限
テ此役ヲツトメケルニ眼開ケルナリ 同(ノ心)

熊野
上總高瀧トイフ所ノ地頭熊野元年詣シケリ娘ヲイツ
キカシヅキテカツハ彼ガ爲トモ思テ具シテ詣ヌミメ
形ヨカリシヲ熊野ノ師ノ房ニ若僧アリ此女ヲ見テ心
ニカケ忍ガタクナリテアクガレ跡ヲシタヒテ上總エ
下ケル鎌倉スギテムツラト云フ所ニテ便船ヲ待居テ
濱ニウチ臥テヤスミケルニ打マドロミタルニ夢ニ便

幡ニ詣テ七日コモリテ祈念シケルニ或夜ニユ、シゲナル客人ノ參玉ヘリケルニ大井御對面アルヨシナリ客人某ト申僧ヤコモリテ候ト申玉ヒケレバサル事候ト答申サセ玉ヒケリ又客人ノ玉ハク件僧年來吾ヲ賴テ朝夕セメ候ツレドモ今度必出離スベキ者也若タノシミニホコリナバ如何ト思候エバヒカエ侍ル御許アルマジト申玉ヒケリ僧是ヲ聞テ客人ハタレニテ渡セ玉フト人ニ尋ケレバ春日大明神ノ御渡也ト答ケリユメ覺ケレバ今生ノ結縁モウレシク來世ノ得脫モタノモシク本寺ニ歸テ後生ノツトメヲハゲミテツキニ往生ヲ遂ヌ是事山ノ桓舜ガ稻荷ノ利生ヲカウブリシヲ日吉ノサマダゲ玉ケル様ニタガハズ 同

吉田

仁安三年四月廿一日吉田祭ニテ侍ケルニ伊與守信隆

朝臣氏人ナガラ神事モセデ仁王講ヲ行ケルニ御明ノ火障子ニモエツキテ其家ヤケニケリ大炊御門室町ナリ其隣ハ民部卿光忠卿ノ家ナリケリ神事ニテ侍ケレバ火ウツラズ恐ルベキ事也 同

山王

叡山東塔南谷ニ勝陽房眞源法橋ト云人アリ或時夢ニアラズ現ニアラズシテ山王權現ノ社ニ參ル大宮ノ樓門ノ前ニテ眞源ガ師範ナリシ嚴筭阿闍梨ニアヘリ公

ハ失セ玉ヒシ人也イヅクニ御座ゾト申ケレバ嚴筭答云吾存生ノ時佛法ノ志深ク多ノ聖教ヲ學シカドモ出離生死ノ志ナク常ニ名聞利養ノ思ニテ五道輪廻業ツキズ忽惡道ニ入タルニ權現和光ノチカヒニテ當社邊ニヲカレテ御扶持アル也一度モ歩ヲ運トモガラハ貴賤ヲ論ゼズ禽獸ニイタルマデ余ノ惡道ニ入ルヲナク此奥ノ山ハ王子谷ノ邊ニ召ヲカレテ晝夜ニ加護シ玉ヒテ利生ヲ施シ佛果菩提ニ至ルマデ見ツナハシ玉フ也不審ニ思ハバ此ヲ見セントテ奥ノ山ノウシロエ伴ヒテ登レリ見レバ昔山上ニテ見馴シ人坂本ニ住セシ人幾トモナク見エタリ修因善惡ニ隨テ居所ノ尊卑アリトミエタリ誠ニ權現ノ慈悲言語道斷ノ方便也 傳記

新羅

三井寺ノ鎮守新羅明神ハ婆竭羅龍王ノ子ナリ智證大師渡唐ノ時大師ノ佛法ヲマモラントチカヒ玉ヒテ形ヲアラハシ彼寺ニアトヲタレ玉ヘル也圓滿院僧正明尊始メテ祭禮ヲ行ハレケル明神ヨロコバセ玉ヒテ託宣ノ和哥

唐舟ニ法守ニトコシカヒハ有ケルモノヲコ、ノ泊ニ古今著聞集

昔三井寺山門ノタメニ焼レケレバ寺僧モ山野ニ交リ

シテ還御アリケリ本ノ通成中將ノ亭エハ入セ玉ハデ御祖母承明門院ノ土御門ノ御所エ入セ玉ヒテ其年モクレ同三年正月九日四條天皇十二歳禁中ニシテ崩御アリ後堀川院ノ御方ニハ御位ニツカセ玉フベキ宮モオハシマサズ定テ佐渡院ノ宮タチゾ踐祚アラシラントテキ、ワキタルコトノナケレドモ卿相雲客四辻修明門院エ參ツドイケレ共天照太神ノ御ハカライニヤ侍ケン同十九日ニ關東ヨリ城ノ介義景早打ニ上リテヒソカニ承明門院エマイリテ御位ハ阿波院ノ宮ト定メ申侍ル也公家ニハイカバ御ハカライ侍ント申テヤガテ法性寺大相國エモ申入テ下リヌ京中ノ上下アハテサハギ今更ニ土御門女院エ我モノト參ツドフ三月十八日御年廿三ニテ御即位アリ 同

^{北野}昔中納言道俊卿ノ子ニ世尊寺阿闍梨仁俊トテ顯密智行ノタツトキ人オハシケル鳥羽院ニサブラヒケル女房仁俊ハ女心アル者ノソラ聖タツルナド申ケルヲアザリ聞テ口惜ク思テ北野ニ參籠シテ此ハデス、ガセ玉ヘトテ

アハレトモ神カミナラハ思ヒシレ人コソ人ノ道ヲタツトモトヨミタリケレバ彼女房赤キ袴バカリヲ着テ

手ニ錫杖ヲ持テ仁俊ニソラゴトイヒツケタル報イヨトテ院ノ御前ニ參テ舞クルヒケレバ淺猿トオボシメシテ北野ヨリ仁俊ヲ召出テ見セラレケレバ神慮ノアラタナル事ニ泪ヲナガシテ一度慈救咒ヲ讀テケレバ女房モトノ心地ニナリニケリ院イミジク思召シテ薄墨ト云フ御馬ヲタビテケリ 同

^{嵯峨}

延長八年六月廿九日ノ夜貞崇法師勅ヲウケタマハリテ清涼殿ニ候シテ念佛シ侍ケルニ夜ヤウノフケテ東ノ庇ニ大ナル人ノアユム音聞エタリ貞崇籬ヲカキアゲテミレバ歩ミ歸ル音シテ見エズ其後又小人ノ歩ミクル音スヤウノ近ク成テ女ノ聲ニテ何ニヨリテ候ゾト問ケレバ勅ヲ承テ候由ヲ答フ小人ノ云ヒケルハ先度汝大般若ノ御讀經ツカウマツリシニシルシ有リキ初歩ミ來ツルモノハ邪氣也彼御經ニヨリテ足燒損ジヌ後ノ度ノ金剛般若ノ御時ハシルシナカリキ此由ヲ奏聞シテ大般若ノ御讀經ヲツトメヨ吾ハ是稻荷神ナリトテ失セ玉ヒヌ 同

^{春日}興福寺ノ僧ノイマダ僧綱ナドニハ上ラザリケルガ學生ニテハ侍レドモ最マヅシカリケレバ春日社ニ參テ申ケレドモシルシナカリケレバ寺ノ交モ思タエテ八

降テ諸木ノ枝タハムホドナリ未申ノ方ヨリ大ナル電
光シケリ何事ニカアラント思フニ迅雷西南ヨリ東北
ヲサシテ鳴行燈モキエ屏風障子モ顛倒スルバカリ也
前代未聞ノ雷ニテ其後ハ少モナラズ然ルニ翌日ヨリ
七日ノ觸穢也其故ハ山田上久保トイフ所ニ住人アリ
テ九日ノ晩人ヲ殺ケルヲ穿鑿スルトトカクシツ、
思ハズモ一日一夜死人ヲ家ニトバメタルニ依テノ穢
也折節雷一ツ鳴ヌルモ不思議ナリ神領ニテハ一日一
夜死人ヲ宿ニトバムルトキハ觸穢七日シテ兩太神宮
ノ朝夕ノ御饌ヲ打トメ奉テ諸國參詣人モ宮中マデハ
參ラズサテ彼死人センサクニ行タル人ハ正シク其家
エ雷オチタリト覺タリトイヘド落タル跡モナシ 同上
或人物語セシハ伊勢國ノ武家ノ下人太神宮ヲ信ジテ
主人ニイトマヲモ不レ請シテ參宮シケル間主人大ニ
イカリテ歸ルヲ待テ殺シケリ其尸ヲバ埋ケルニ其後
彼殺サレタル人立歸テ居ルヲ見テ幽靈カトオドロキ
ケレトモサニハアラズ只今太神宮ヨリ下向シタルト
イヘバアマリノ不思議サニカノ尸ヲホリ起シテ見レ
バ祓ノ大麻ニ刀疵ツキテ有ケルトナン 同上
二條宰相雅經卿ハ賀茂大明神ノ利生ニテ成アガリタ

ル人也往昔世間アサマシクタエトシクテハカト
シキ家ナドモ持ザリケレバ花山院釣殿ニ宿シテソレ
ヨリ歩ニテフルニモテルニモ唯賀茂エ參ルヲモテツ
トメトシテケリ其比ヨミ侍ケル

世中ニ數ナラヌ身ノ友千鳥鳴コソワタレ鴨ノ川原
ニ此歌ヲ心ノ中計ニ思ツラテ世ニ散シタル事モナ
カリケルニ社司某ガ夢ニ大明神ノワレハ鳴コソワタ
レカモノ川原ニトヨミタル者ノイトヲシキ也尋ヨト
示玉ヒケリソレヨリ普ク尋ケレバ此雅經ノヨミタル
也ケリ此示現ヲキ、テイカバカリ信仰ノ心モ深カリ
ケン次第二成上リテ二位宰相マデ登リテ侍リ是併大
明神ノ利生也 古今著聞集

八十七代後嵯峨天皇ト申ハ土御門院第三ノ皇子ナリ
父ノ帝寬喜三年ニ遠所ニテ崩御有シ後ハ御メノト大
納言通方卿ノモトニカスカナル御住居ニテワタラセ
玉ヘバ御位ノ事オボシメシモヨラズ大納言サヘ身マ
カリニケレバ仁治二年ノ冬ノ比八幡エ參ラセ玉ヒテ
御出家ノ御イトマ申サセ玉ヒケルニ曉御寶殿ノ内ニ
德是北辰椿葉影再改ト鈴ノ聲ノヤウニテマサシク聞
エサセ玉ヒケレバ是コソハ示現ナラメト嬉シク思召

張參河遠江等封戸各拾烟ヲモ御寄附有リ禰宜モ一階ヲ玉ヒキ此等ノ記文分明也神明御尊崇ノ代ニハ國敵ノ冥罰ヲカウブル事疑ナキ也太神宮神異記

後花園天皇ノ御宇嘉吉三年九月廿三日ノ夜凶賊禁裏ニ亂入シテ天子ヲ犯シ奉ラントセシニ其賊足シドロニ成テ顛倒セシカバ逃ノビ玉ヒテ玉體ハ恙ナカリケリ其夜太神宮櫪飼ノ御馬厩ヲヤブリ出テカケマハリケルガ鞍ヲケルアト有テ汗カキツ、元ノ御厩ニ歸リ入ケリ此事イソギ奏聞セシニ其夜京ニハ亂有テ太神宮ノ神異ト符ヲ合セタルガ如ク也此事ハ續神皇正統記ニモ記シタリ偏ニ太神ノ御守アラタナル由也同上
壽永二年癸卯五月ノ比外宮一禰宜度會彥章神主鯉魚ノ鱠ヲ食ヌルガ傍人ニ戲云ケルハ禰宜タレドモ鹿ヲ食ナリト其夜夢中ニ神告玉ヒケルハ一禰宜トシテ禁忌ノ詞ヲワキマヘザル事甚以道ニツムク命ヲトルベシトノ玉フト見テサメテ後人ニ語テ其マ、五月廿四日四十六歳ニシテ死セリ同上
天正十年壬午御造替遷宮ノ御用木ノタメ太神宮ノ大小工等信濃木曾山エ入ケルニ六月二日ニ河ヲヘダテテ高聲ニ云ケルハ京本能寺ニテ信長公御生害ナリ急

ギ皆々歸國仕レト大小工等ヲドロキテ速ニ歸國シケリ本能寺ニテ薨去ノ日ト木曾山ニテ河越ニ告タルト同日也太神ノ御告ナルベシ同上

豐臣太閤ノ御時朝鮮人來朝セシニ食用ノタメトテ太神宮ニイクラモアル雞ヲ取寄玉フ事アリテ伊勢ヨリ籠ニ入テアマタ上セケルニ程ナク皆カヘシタマヒケル是ハ朝鮮人ノ食物ニ毛ヲムシリタル鳥狙ノ上ニテ生テ起アガリ晨ヲツクリケルニヨリ此神異ニヲドロキ玉ヒテ殘ル鳥皆返シ玉フトゾ同上
同御時ニ太神宮領ヲ悉クオトシ玉ヒテ宮川ヨリ内ヲモ撿地シ玉フベキトテスデニ御使伊勢ノ國マデ來シニ其沙汰モナク宮川ヨリ内ハイロヒナク成ヌル事ハ高藏主トイフ比丘尼ノ膝ヲ枕トシテ大閤ウタ、チシ玉ヒケル夢中ニ烏帽子ニ白キ裝束着タル人來テ云吾ハ伊勢太神ノ御使也神地ヲ撿地スベキトノ事神ヲモオソレザル所爲也撿地スベクバ命ヲ取ベキトテ劔ヲ持テムチヲサ、ントスト見タリトテ大ギニヲドロキ汗水ニ成玉ヒイソギ使ヲモ呼返玉ヒテ撿地ノ沙汰モヤミニケリトゾ同上
寛永十九年壬午二月十日ノ夜イマダ半ナラザル比雪

汚穢神社ニ仍成ニ此祟ニ 勅奉ニ封二千戸ニ 三代

實錄

壹岐

陸奥。出羽。佐渡。隱岐。對馬以上四國二島

爲ニ邊要ニ 延喜式

○天手長男社 石田郡ニ在リ 祭神

天思兼神一男也 一宮記

對馬

○和多都美社 上縣郡ニ在リ 祭神

八幡宮也 一宮記

御位 貞觀十二年三月五日丁巳正五位下 國史

○御託宣 益人が直き心にあらんときはおろかな
る事なくかしこき事なくかなしみなく恨なくて春
の日ののどけきにひのひらくるがごとくあらんお
ろかといひかしこきといふはいまだ吾心にこのま
す 同上

已上諸社畢

靈驗

太神宮相馬ノ將門ハ天慶三年庚子二月十四日下總國
ニテ平貞盛ガ箭ニ中テ馬ヨリ落タリシヲ藤原秀郷其
首ヲ取ケリ去ナガラ是ハ偏ニ伊勢太神宮ノ幽ニ誅伐
シ玉フモノ也其故ハ平將門謀叛ノ御祈ノタメ天慶三
年二月九日二所太神宮ニ種々ノ神寶物等ヲ進セラレ
公卿勅使ニハ參議從三位大伴宿禰保平祭主賴基也ケ
ルニ同月十三日ノ夜太神宮ノ正殿ノ内ニ人ノ名字ヲ
召立ラレ弓箭甲冑等ヲ被下聲シケルヲ宿直ノ番ノ
内人物忌等現ニ聞テ恐レ畏ル處ニ又二見ノ浦人男女
數十人幻ニ見ケルハ甲冑ヲ著タル人アマ太白馬ニ乗
テ海上ヨリ東ヲ指テ行ノ間浦人等云是ハ何ナル人ナ
レバ陸地ノ如ニ海上ヲ馬ニテハ行玉フゾトイヘバ太
神宮ヨリ平將門誅センタメニツカハサル、勢也トイ
フテ其マ、皆消テ見エズ浦人ヲドロキアヤシミカ、
ル奇異アリタルト申ト前夜名字ヲ召立ラレシ神異ト
符合セシカバ必定將門退治アルベシト思フニ後日ニ
キケバ二月十四日將門誅セラレシト也此事ニ依テ同
八月廿七日ニ伊勢國員辨郡ヲ太神宮ニ御寄附アリ尾

向ト云也

○都農社 兒湯郡ニ在リ 祭神 大己貴命 一

宮記

大隅

和銅元年ニ日向國ノ内四郡ヲ分テ是ヲ置ケ

リ本郡ノ名也云々

○鹿兒嶋社 桑原郡ニ在リ 正八幡ト號ス

祭神ニ説 彦火々出見尊一説

○大隅國正八幡火々出見尊也與ニ宇佐八幡ニ不同

神書抄

大隅宮神功皇后乎大御前豐玉姬南面應神帝若宮仁

德帝西向武内臣也 兼右説

欽明天皇五年甲子顯座 社記

○神託 益人が心に誠あれば萬物皆したがふ益人が心に誠なきときは萬物ひとつとして隨ふ事なし

誠といふは天也地也神明なるがゆへ也 倭論語

○高千穂社 垂跡神並鎮座記未レ考

昔豐後國或片山里ニ女有或人ノ獨女也男何方共ナク夜々通フ程ニ年月モ經ケレバ直ナラズ成リヌ母恠テ通フ者ハ何者ゾト問ケレバ來ルヲバミレ共歸

ヲバ不レ知ト云フサヲバ歸ン時効ヲ付テ見ヨト云ケレバ朝歸リスル時男ノ狩衣ノ頸髮ニ針ヲサシ賤ノ緒環ト云物ヲ付テ角ト親ニ告タレバ人四五十具シテ糸ノ注ヲ尋行ニ豐後日向ノ境優婆塞ノ下大ナル岩屋ノ内エ入タリ女岩屋ノ口ニイテ聞ケバ大ナル聲シテ喚ケル女云ケルハ御姿ヲ見進セン爲ワラハ是マデ參テ侍トイヘバ内ヨリ云ク我ハ人ノ姿ニ非ズ汝我姿ヲ見バ肝魂モ身ニ添マジキゾ胎メル子ハ男子ナルベシ弓矢打物取テハ九州二島ニ肩ヲ雙ル者有マジキゾト云フ女重テ縱如何ナル姿ニテモオハセヨ日比ノ好ミニ互ノ姿ヲ今一度見モシ見エラレント云ケレバサヲバトテ臥長五六尺跡枕エハ十四五丈計ナル大蛇ニテ這出ケル彼針ハ大蛇ノ腦咽ニ立タリ是即日向高知尾明神也 平家物語盛衰記

薩摩

○杓聞社 綿積トモ 額娃郡ニ有リ 祭神

猿田彦命 一宮記

貞觀十六年七月二日太宰府言薩摩國從四位上開聞神山頂有火自燒烟薰滿天灰沙如雨震動之聲聞ニ百餘里一近社百姓震恐失レ精求ニ之著龜神一封戸及

新古今集
西の海たつしら波の上にして

何すくすらんかりの此世に

○神託 衆生の心不善なるとき神明を祈りもとむといへども其心にやどる事なしなをき心にして正しき時はいのらざれども我常に其いたゝきにうつりて守らん衆生の心は神の舍成が故に其みあらかあしければすむ事なし 倭論語

○宇佐宮 宇佐郡ニ在リ 祭神一座 湍津姫命

素戔嗚命子

傳系上ニ見 社記未考

○賀春社 香春郷ニ在リ 祭神一座 辛國息長大

姫 是神日本之神胤ニ非ズ

○豊前風土記云田川郡鹿春郷昔新羅神自度到來住此川原即名云鹿春神也案之豊州比咩語曾社

不見ニ神名帳并風土記也而任那新羅國種也辛國

比咩語曾神之垂跡也 神名帳註

○釋最澄傳 弘仁五年春於賀春神宮寺講妙經

是時豊前田河郡吏等錄瑞雲狀寄之澄固封告義

真云非吾滅後不得開緘寂後門弟子等披閱

其文云今月十八日未時紫雲光耀起賀春嶺覆法

筵之庭村民悉見敬異又是澄泛海時宿田河郡賀春山下夢梵僧來前袒衣露身左肩似人右肩如石言之云我是賀春明神也和尙慈悲救吾業道之身我當加助求法晝夜守護欲知我實海中急難現光爲驗澄明日际山右邊崩巖草木不生宛如夢中半身心異焉又海中風浪果有光曜是以思神之不浪也而建法華院自創講席乃神宮院也開講之後其右巖之地漸生艸木年々慈茂郷邑嘆異 釋書一

豊後

○西塞多社 大分郡ニ在リ 祭神三座 神功皇后

應神天皇 武内大臣

○一名杵原大明神垂跡同宮碕 神名帳註

○貞觀十一年三月廿二日無位西塞多神從五位下

國史

○神託 其心のあしかるものゝ吾前に來る時は炎の中に座して其烟をのむがごとし心の直き者の吾前に來るときは天月にむかふがごとし 倭論語

日向

是國東ニ望テ直ニ日ノ出ル方ニ向フ故ニ日

五十三凡在位十六年也其後白壁王太子ニ立玉ヘリ
卽光仁天皇是也天智天皇ノ孫施基皇子ノ子也藤原
永手吉備大臣太子ト相談シテ道鏡ヲ下野國藥師寺
ノ別當ニナシテ彼國エ流ス世ヲ篡ントセル惡人ナ
レドモ先帝御恩深キニ依テ死罪ヲ免ストナン年ヲ
ヘテ道鏡病死ス清麻呂ヲ都エ飯ス

王代一覽

○盛衰記主上女院ヲ始メ進セテ内府以下ノ人々豐
前國宇佐ノ宮エ參詣アリ社頭ハ皇居トナリ廊ハ月
卿雲客ノ居所トナル御祈誓ノ趣ハ主上舊都ノ還幸
也都ハスデニ山河遙ニ隔テ雲ノ餘所ニ成ヌ何ゴト
ニ付テモ心ヅクシノ旅ノ空身ヲウキ船ノ住居シテ
コガレテ物ヲゾ覺シケル七箇日ノ御參トテ大臣殿
財施法施ヲ手向奉リ神寶神馬カクテ七箇日ヲ送り
玉ヘドモ是非ノ夢想ナンドモナカリケレバ第七日
ノ夜半計ニ思ヒツマケ玉ヒケリ

思ヒカネ心ヅクシニ祈レドモウサニハ物モイハ
レザリケリ神殿大ニ鳴動シテ良久クシテユ、シキ
御聲ニテ

世ノ中ノウサニハ神モナキ物ヲ心ヅクシニ何イ
ノルラン

○むかし三井寺の禪徒にて慶祚大阿闍梨といふ人
いまそかりけるが智行ともにそなはりて月輪觀を
こらし給ひけるに彼庵の松の木の上に明淨なる月
のあらはれ出給ひてまのあたりおがまれ給へりけ
るとかやこのあざり道心深くてむかし釋尊の御法
とかせ給へりける鷺の御山祇園精舍なんどゆかし
くおもひ給ひければ日數をへてわたらんするいと
なみのみ侍りける我もともなひ奉らんといふ人五
十人におよべりけるがはりまの國明石のうらにて
は二十餘人に落なり給へり筑紫にては皆落行て只
あざりと心寂と計二人になり給へり宇佐の宮に詣
て船路のほどの哀を照させ給へと祈念し給ひける
に明神の御託宣に中天笠の佛法今は跡もなし祇園
精舍は虎狼のふしどゝなり白鷺池はくさのみしげ
り流沙もはげしく葱嶺もむかしに似ず佛法すべて
形なしたと思ひとまれと御託宣侍ければ佛法のお
とろへにける事をかなしみてそれより歸り給ひけ
り

撰集抄

源順天皇朝

稱徳天皇の御とき和氣清丸を宇佐宮に奉り給
へりける時たくせんし給ひける御歌

坐於豐前國宇佐宮神社考

○傳教大師弘仁五年春詣宇佐八幡神宮講妙法華講竟神託云不_レ受_二法味久歷歲華今聽微言_一何以報德我有_二法衣願表_二嚮達_一乃啓齋殿推出紫衣二領_一神宮巫祝各相謂云我等未_レ嘗見_二如斯靈感_一也釋書

○四十八代孝謙天皇神護景雲元年九月太宰府ノ阿曾麻呂ト云者道鏡ガ威ヲ見テコビヘツラヒテ宇佐八幡ノ託宣ト稱シテ道鏡ヲ帝位ニ卽シメバ天下泰平ナラント云道鏡悅デ天皇ニ申ス天皇道鏡ヲ愛スル事甚シトイヘドモ帝位ノ事ハ私ナラヌ事ナレバ宇佐エ勅使ヲ遣シ神託ニ任セテ決セント宣フ道鏡然ルベシト申ス天皇和氣清麻呂ヲ召テ云ク八幡大神夢ノ告有リ汝ヲ勅使トシテ宇佐ニ遣スベシ能敬テ神託ヲ聞テ飯レト也清麻呂御前ヲ退ク時道鏡人ヲ退ケテサ、ヤキケルハ此度ノ勅使ハ我ニ帝位ヲ讓ラルベキヤ否ト八幡大神ニ問ル、處ナリ其心得ヲ以テ神託ヲ言上スベシ汝ガ返事ニ依テ我卽位セバ汝ヲ大臣トナシテ國ノ政ヲ任スベシ若返事惡クハ重キ罪ニ行フベシト眼ヲイカラカシテ威ス清麻

呂宇佐エ參詣シ是ハ國家ノ大事ナリ縱ヒ託宣アリトモ卒爾ニハ信ジ難シ願クハ一ツノ不思議ヲ示シ玉ヘト祈念シケレバ大神忽チ長三丈バカリノ形ヲ現シテ影向アリ其光滿月ノ如シ清麻呂伏拜シテ仰ギミル事アタハズ神託ニ云吾國ノ天日嗣ハ神代ヨリ代々皇胤ノ外臣トシテ伺フベキニアラズ況ヤ無道ノ者ヲヤ汝飯テ有ノマ、ニ申ベシ道鏡ヲオソルル事ナカレト清麻呂神託肝ニメイジテ都ニ飯リ參内ス道鏡御前ニ侍テ椅子ニヨリカ、リ清麻呂ヲ呼デ神託イカニト問フ清麻呂少モ諂ラハズシテアリノ儘ニ奏聞ス天皇モイト與ナク思ヒ玉ヘリ道鏡大ニ怒テ清麻呂己ガ心ヲ以テ神託ヲ詐テ申ナルベシ曲事也死罪ニ處スベシトイフ天皇死罪マデハ如何ニト宥玉ヘバ道鏡怒テ足ノ筋ヲタチテ大隅國エ流ス道ニテ殺スベシト道鏡謀リケレドモ折衝雷雨甚シクテタメラウウチニ勅使來テ死罪スル事ナシ清麻呂行步叶ハザリシガ宇佐八幡エ參詣シケレバ足ノ筋忽チナヲリテ行步本ノ如ク也藤原百川ト云フ者清丸ガ忠節ヲ感ジテ備後國ニ領地アリケルヲ分テ清丸ガ配所エヲクル同四年八月天皇崩御アリ歲

リニケレバサゾヨトアザ笑テ打トヲリケル其後社壇ヲミケレバ二丈計ナル大蛇矢ニ當テ死ニタリケルコソ不思儀ナレ太平記

○板櫃社 松浦郡ニ在リ 祭神一座

藤廣繼之靈也傳上ニ見リ ○廣嗣到三板櫃河ニ與ニ

官軍ニ戰死其靈板櫃明神是 啓蒙

肥後

○阿蘇社 阿蘇郡ニ在リ 祭神三座

武磐龍命本宮 阿蘇姫二殿 國造速甕玉命三殿 已上

社記

右本傳口決相承也

○景行天皇御宇十八年六月十六日到阿蘇國ニ也其國郊原曠遠不見人居一天皇云是國有レ人乎時有二神云阿蘇都彥阿蘇都媛忽化レ人以遊詣之云吾二人在何無レ人耶故號ニ其國云阿蘇一日本紀

御位 仁壽元年冬十月丙午建岩龍命加階從三位

文德實錄

貞觀十七年十二月從二位 國史

仁壽二年二月戊寅阿蘇姫神加ニ從四位下 實錄

○神託 益人が天地の事をもつておこなへば其身

則天地也その心即神明也臥て思ひいねてなせば思ふ事なすにとをからずおろかに思ひ愚になして至がたきはこのさかひ也 倭論語

和歌

大貳成章肥後守にて侍ける時阿蘇社に御裝束してたてまつりけるに彼國の女の讀侍ける

讀人不知

後拾遺 天下はくゝむ神のみそなれば

ゆたけにそ立みつのひろまへ

豐前

○宇佐宮 宇佐郡ニ在リ 祭神八幡三所

○三所者八幡比咩神大帶姫也豐前國宇佐郡菱形山廣幡八幡大神坐ニ郡家東馬城峯頂ニ後人皇四十代聖武御宇神龜四年就此山ニ奉レ造ニ神宮ニ二十二社註式古老云傳云應神帝玉依姫神功皇后稱ニ之三所ニ如ニ延喜式一則中男神應神天皇是也女神ニ體神功皇后

并姫神是也已上平野神主兼前註進ニ之 啓蒙

○欽明天皇三十一年冬肥後國菱形池邊民家兒甫三歲神託云我是人皇第十六代譽田八幡麻呂也諸州垂ニ跡于神明ニ今又顯ニ于此ニ其後差ニ勅使ニ移而鎮ニ

モトハ火前ト書タリ其故ハ景行帝ノ十八年五月ニ葦北ヨリ火國ニ到ル日没シテ夜クラカリシカバ船ヲツケナン岸ヲ知ラズ其時遙ニ火ノ光見エケレバ此ニヲイテ着岸ヲ得タリ是人間ノ火ニハアラジト量テ其國ヲ火前トイフ也云々

○淀姫社 佐嘉郡ニ有リ 川上大明神ト號ス○肥前風土記云人皇三十代欽明天皇廿五年甲申冬十一月朔日甲子肥前國佐嘉郡與止姫神有鎮座一名豐姫乾元二年紀云淀姫太明神者八幡宗廟之叔母神功皇后之妹也三韓征伐之昔者得干滿兩顆而沒異賊之凶徒於海底文永弘安之今者施風雨之神變而摧幾多之賊敵於波濤神名帳註 ○御位 貞觀十五年九月十六日正五位下 國史

○松浦社 松浦郡ニ在リ 祭神三座 上松浦下松浦トモニ同ジ鏡宮ト稱ス 祭ル所

○田島神一座 ○仲哀天皇弟稚武王也號上松浦明神神名帳註

○志々伎神一座 ○稚武王弟十城別王也號下松浦明神 同上

○鏡宮 一座 ○昔氣長足姫尊在松浦山遙覽國形而勅祈云天神地祇爲我助福乃用御鏡安置此所其鏡化爲石而在山故名云鏡宮肥前風土記 和歌

新千集載
あひみんと思ふ心は松浦なる

紫式部

鏡の神や空に知るらん

○櫛田社 神碕郡ニ在リ 祭神一座

大若子命 天御中主尊十九世孫上ニ見

○垂仁天皇御宇有北狄退治之功賜大幡主命蒙啓

元弘三年三月十三日卯ノ刻ニ肥後國住人菊地入道

寂阿僅ニ百五十騎ニテ筑紫ノ探題北條英時ノ館エ

ヅ押寄ケル菊地入道櫛田ノ宮ノ前ヲ打スギケル時

軍ノ凶ヲ示サレケン又乗打ニシタリケルヲトガ

メ有ケン菊地ガ乗タル馬俄ニスクミテ一足モ前エ

進ミエズ入道大ニ腹ヲタテ、如何ナル神ニテモ坐

セヨ寂阿ガ戰場エ向ハンズル道ニテ乗打ヲ尤メ玉

フベキヤウヤ有ル其義ナラバ矢一ツマイラセン受

テ御覽ゼヨトテ上差ノ鏑ヲ拔出シ神殿ノ扉ヲ二矢

マデゾ射タリケル矢ヲ放ツト均シク馬ノスクミ直

○宰府社 太宰府ニ有リ 祭神

菅家 山城北野天神宮ノ本宮也

傳記云醍醐天皇延喜元年依ニ左僕射時平之讒ニ遷ニ大宰權帥ニ間ニ一歲ニ薨ニ于宰府ニ春秋五十七遂建ニ一字ニ號ニ天滿宮ニ

●太宰府 當國ハ日本西ノ末ニシテ異國ニ近シ若異國ノ夷軍來ン時ハ其ヲフセガン爲人勢ヲ此所ニヲケリ府ハ其居ル所也東國陸奥ニ鎮守府アルガ如シ猶有職袖中鈔ニ書シ畢

○網場天神 博多ニアリ 祭神 同上

昔菅相公左遷ニオモムキ玉フ時此所ニ憩ヒ玉ヒシニ居奉ラン御座ノナキマ、ニ船ノ綱ヲワノゴトクナシソレヲ敷テ其上ニ居奉リシ也此時一夜ノ中ニ白髮ト成ラセ玉フ也

○壹伎社 那珂郡壹伎ニ在リ 祭處 壹伎直眞子

應神天皇臣下也

應神天皇ノ御宇武内大臣勅使トシテ筑紫ニ赴キケル間ニ大臣ノ弟甘美内宿禰譏言シケルハ武内筑紫ニテ三韓ヲカタラヒ謀叛セントスト奏ス天皇怒玉ヒテ使者ヲ以テ武内ヲ殺サシメントシ玉フ壹伎直

眞根子ト云モノ聞テ武内ニ此由ヲ告ワレ御身ノ形ニ似タリト世上ニ云處ナレバ吾命ニカハラシテラバ討手ノ勅使シリゾギナン其時ハ御身ヒソカニ上洛シテ罪無キ旨ヲ申ヒラカレヨ其後ハ死ストモ愚ナラジト云ステ、自害ス使者武内ガ首ナリト見テヤガテ退ケリ武内ハ竊ニ上洛シテ科ナキ由ヲ申ス天皇聞玉テ甘美内ト武内ト神前ニテ熱湯ヲ探ラシメテ其實否ヲ決ス武内ハ更ニ恙ナカリケレバ官職トモニ元ノ如クナサシメ玉ヘリ湯起請ノ起是也扱甘美内ヲバ武内自ラ害殺セントシケルヲ天皇勅シテ釋サシメタマヒテ其一門ノ者ニ下サレケル也日本紀ノ心

筑後

○高良社 三井郡ニ在リ 祭神 武内宿禰

○人皇四十代天武帝白鳳二年二月八日高良神託云譽田天皇御宇爲ニ晨昏武畧之健將ニ末世時古敵新羅禍害發哉乎宮碕松原建ニ新宮書ニ新羅降伏之字置ニ吾座下ニ則自然降伏云々件新宮以ニ延長元年ニ遷御畢神名帳註○御位 貞觀十一年三月廿二日正二位國史

肥前

矣 日本紀

○志加清ンデ讀ム也濁テヨムハ近江ノ名所也

前大納言經輔

後拾遺

戀しさも忘れやはする中々に

心さわかす志賀のうら波

家隆

新古今

しかの浦や遠さかり行波まより

氷て出る有明の月

右は近江の志賀のうら也

讀人不知

新勅撰

しかの蜚のめかり汐やさいとまなみ

くしけのをくし取もみなくに

同

同

しかの海士のけふりやきたてやく沙の

からき戀をも我はする哉

金葉

つれなくたてゐるしかの嶋哉

爲助

弓張の月のいるにも驚かて

右は筑前なり

○大己貴社 夜須郡ニ在リ 祭神一座

大己貴命 傳系上ニ有リ

氣長足姬命欲レ伐ニ新羅ニ整ニ理軍士ニ發行之間道中

逃亡占ニ求其由ニ即有ニ崇神ニ名云ニ大三輪神ニ所以

樹ニ此神社ニ遂平ニ新羅ニ神名帳註

○宇瀨社 宇瀨ニ有リ 祭神一座

譽田天皇 是即八幡大神也此所生レ玉フ所也

皇后從ニ新羅ニ還之十二月戊戌朔辛亥生ニ譽田天皇

於筑紫ニ故時人號ニ其產處ニ云ニ宇瀨也 日本紀

○香椎社 糟屋郡ニ有リ 祭神二座

神功皇后東 武内宿禰西

袈裟宮昔者仲哀天皇之后息長足姬神功及大臣武内

宿禰命今在此行宮ニ謀レ伐ニ新羅ニ從ニ爾已來便爲ニ

庶室ニ后宮在ニ東臣在ニ西社註

當社ヲヨメル和歌

神主膳武忠

金葉 ちはや振香椎の宮の杉のはを

二度かさす我君そ君

讀人不知

新古今 千早振かしの宮のあや杉は

神の御祓にたてゐるなりけり

船ノ著所ヲ筑紫ト云フ也筑ハ著之義也云々
風土記ノ心

筑前

○宮崎社 那珂郡ニ在リ 祭神三座 神功皇后

應神天皇 武内臣

人皇六十代醍醐天皇延喜廿一年六年廿一日依託
宣建宮柱於宮崎松原書新羅降伏之旨而置御
座下立石柱祈神誓不朽 二十二社註式

此社者譽田帝之祠也地近博多

古老云昔此松原理戒定惠三字之箱故號云箱崎

栽松于其處爲標至今猶在焉

緣起云昔白幡四流赤幡四流降下於其處栽松爲

表故有八幡之號已上神社考

續古今

ちはやふる神代に植ゑし箱崎の

松は久しきしるしなりけり

法印行清

新拾遺

跡たれて幾代へぬらん箱崎の

しるしの松も神さひにけり

顯朝

○宗像社 宗像郡ニ有リ 祭神一座

田心姫命 素戔嗚子 傳系上ニ有リ

宗像 一作肩肩又作肩形

○天照太神與素戔嗚誓乃取其十握劍所生神號
云田心姫次湍津姫次市杵嶋姫凡三女矣大神勅云
十握劍者素戔嗚尊物也此三女神悉是爾兒便授之
素戔嗚此筑紫胸肩君等所祭神是也 日本紀

○神書疏云神名帳筑前國宗像郡宗像神社三座是也
田心姫胸肩明神湍津姫字佐明神市杵嶋姫嚴島明神已上神社考

○昔貞信公小一條ニ居住アリケリ此所ハ筑前國宗
像ノ明神筑紫ヨリウツリ坐所ナレバ貞信公尊敬シ

テ洞院ノ後路ヨリゾ必車ヨリオリテ出入アリケリ

或時此神形ヲ現シ玉ヒテ貞信公ト物語アリケルニ

神ノ御位貞信公ヨリ卑キヨシヲノタマヘバ公此由

ヲ奏問アリケレバヤガテ神ノ位階ヲ進メ玉ヒケリ

○志賀社 糟屋郡ニ有リ 祭神三座

底津少童命 中津少童命 表津少童命

○伊弉諾尊至筑紫日向小戸橋之檣原而被除焉
沈瀝於海底因以生神號云底津少童命又潛瀝
於潮中因以生神號云中津少童命又浮瀝於潮
上因以生神號云表津少童命是阿曇連等所祭神

ルアハレ弓矢ノ面目哉ト羨ム人モ有リ又爪彈ヲスル人モ有竹澤ヲバ猶モ謀反與力ノ者共ヲ尋ベシトテ御陣ニ留ヲカル江戸ニハ暇玉テ恩賞ノ地エ下サル江戸遠江守則拜領ノ地エ下向シケル十月廿三日ノ暮程ニ矢口ノ渡ニ下居テ渡ノ舟ヲ待居タルニ兵衛佐殿ヲ渡シ奉シ時江戸ガ語ヒヲ得テノミヲ拔テ舟沈タリシ渡守共江戸ガ恩賞玉テ下ルト聞テ種々ノ酒肴ヲ用意シテ迎舟ヲ漕出ケルニ此舟已ニ河中ヲ過ケル時俄ニ天曇雷鳴水漲テ逆卷浪舟ヲ返ケレバ水手一人モ不_レ殘皆水底ニ沈ケル天ノ忿直事ニ非ズ是ハ義興ノ怨靈也ト遠江守恐テ河端ヨリ引返余所ヲ渡メトテ廿餘丁アル上ノ瀬エ馬ヲ早メテ打ケルニ電行前ニ閃テ只今雷神ニ蹴殺サレヌト思ケレバ御助候ヘ兵衛佐ト手ヲ合セ虚空ヲ拜シテ逃ケル山ノ麓ナル辻堂ヲ目ニカケアレマデト馬ヲ早メケルニ黒雲一村江戸ガ頭ノ上ニ落サガリ雷電鳴閃ケル後ヲ顧タレバ義興火威ノ鎧ニ龍頭ノ五枚甲ヲ着白栗毛ノ馬ノ角生タルニ乗テ江戸ヲ弓手ノ物ニナシワタリ七寸計ナル雁俣ヲ以テカヒカネヨリ乳ノ下エ射通サルト思テ江戸馬ヨリ倒ニ落血ヲ吐ケ

ルヲ與ニ乗テ江戸ガ門エ昇着タルニ七日ガ間ニ足手ヲアガキ水ニ溺タル真似ヲシテ死ケリ又雷火落テ入間河ノ在家三百餘堂舍佛閣數十ヶ所ヤケ、リ又矢口ノ渡ニハ夜々光物出テ往來ノ人ヲ惱ケレバ近隣ヨリ集テ義興ノ亡靈ヲ一社ノ神ニ祠テ新田大明神ト號シ常磐堅磐ノ祭禮今ニ不_レ絶 太平記猶委シ

土佐

○都佐社 土佐郡ニ在リ 祭神高鴨大明神

○高賀茂大明神味耜託彥根命也 一宮記

○土佐風土記云土佐郡郡家西去ニ四里ニ有ニ土佐高賀茂社ニ其神名爲ニ一言主尊神名帳註

御位 貞觀元年正月廿三日從五位上 神階記

○託宣 諸人のいとけなき時より老の暮に至るまで一善をもなさざるを大惡人とはいふ也神明も生るをぬすむ人としてふかくこれをにくめる也人は人の道正しくて直き心なきをば人とはいはず天のなす處にそむけば必らずわざはひ多かるべし 倭談語

西海道

總云ニ之筑紫也二嶋壹岐對馬也 筑紫ト云事ハ允恭天皇ノ時異國ヨリ紫草ヲ獻ジケル其ニ

德壽丸ト號ス其母賤ニ因テ義貞之ヲ愛セズ嫡子義顯越前ノ金崎ニテ討レシ後義興ノ弟義宗ヲ家督トス延元々年八月奥州ノ國司顯家鎌倉ヲ攻ル時德壽丸上野ヨリ起リ二萬騎ヲ卒シテ顯家ニ與力シテ鎌倉ヲ攻破ル其後吉野エ參ル後醍醐天皇ノ御前ニテ勅命ヲエテ元服シテ左兵衛佐義興ト號ス其後觀應二年ノ春尊氏鎌倉ニ在リシ時義宗義興并ニ脇屋義治上野國ニテ義兵ヲ起シケレバ東國ノ兵附從フ者數萬也武藏野エ出張シテ尊氏ト合戰ス尊氏打負テ已ニ危カリシガ幸ニ免レタリ爰ニ尊氏ノ一族仁木賴章同義長遊軍ニテ戰ノ勝負ヲ窺ヒケルガ義興義治ガ戰疲レテ居ル所エ夜討シケレバ義興義治自ラ戰ヒ拒武勇ヲ勵ストイヘ力盡テ退ク義宗ハ義興義治ヲ尋カネテ上野エ赴ク其比鎌倉ノ留守ニ尊氏ノ次男基氏在リケレバ義興義治鎌倉エ攻入ル基氏ノ守南遠江守拒ギ戰トイヘドモ義興義治武勇ヲ勵シ攻ケレバ遠江守打負テ基氏諸共ニ落行ケレバ義興義治鎌倉エ入テ暫東八箇國ノ大將ト稱ス其後尊氏鎌倉エ向レケレバ義治義興退テ相模ノ河村ノ城ニ籠リテ尊氏ト合戰日久シ翌年ノ春河村ノ城ヲ退

テ越後エ赴尊氏逝去ノ後義興武藏エ赴キ兵ヲ起サントス義貞ノ舊好アル者附從者多シ此時鎌倉ノ管領基氏ノ執事畠山道誓是ヲ聞テ義興ガ在所ヲ尋聞テ屢討手ヲ遣ス義興大勢ナレバ討レズ道誓如何スベキト晝夜案ジ居タリケルガ或夜潛ニ竹澤右京亮ヲ近付テ御邊ハ先年武藏野ノ合戰ノ時彼義興ノ手ニ屬シテ忠有シカバ定テ其好ミハ忘ジトゾ思ハラン此人ヲ僞討シ事ハ御邊ニ過ジ謀ヲ運シテ討テ左馬殿ノ見參ニ入玉ヘ恩賞ハ請ニ依ベシト語ル竹澤元來欲心深者ニテ曾テ一義ヲモ申サズサ候ハバ某御制法ヲ背テ御勘氣ヲ蒙リ御内ヲ罷出タル體ニテ本國エ下テ後此人ニ取寄候ベシト謀テサマノノ事ヲナシテ態追出サレ己ガ所領エ飯テ後潛ニ通ジテサマノ謀ケレバ義興果シテ竹澤ニ欺レテ武藏ヨリ忍テ鎌倉エ赴トテ竹澤ト江戶遠江守ト謀テ矢口渡ノ船ノ底ヲ二所エリ拔ノミヲ差シ水主二人沖ニ出テノミヲ拔ケレバ水船中ニ湧入ヌ竹澤等同意ノ者共河岸ヨリ矢ヲ放ケレバ義興自害シテ失ヌ郎從十三人モ共ニ腹ヲ切テ沒セリ斯アレバ竹澤江戶ガ忠功拔群也トテ則數箇所ノ恩賞ヲゾ被レ行ケ

ニテ崩ズ歲四十六白峰ニ葬ル 王代一覽

○白鳥社 讚州ニ有 祭神一座 日本武尊

日本武尊移ニ伊勢ニ而崩ニ于能褒野ニ時年三十仍葬ニ於能褒野陵ニ時日本武尊化ニ白鳥ニ從ニ陵出之指ニ倭國ニ而飛之群臣等因以開ニ其棺襪ニ而視ニ之明衣空留

而屍骨無ニ之於是遣ニ使者ニ追ニ尋白鳥ニ則停ニ於倭琴彈原ニ仍於ニ其處ニ作ニ陵焉白鳥更飛至ニ河内ニ留ニ

舊市邑ニ亦其處造ニ陵故時人號ニ是三陵ニ云ニ白鳥陵ニ然遂高翔上ニ天徒葬ニ衣冠ニ日本紀

一說云讚岐國有ニ白鳥明神ニ是倭武尊也自ニ伊勢國ニ差ニ西飛去止ニ于此國ニ云 又云日本武尊之靈化為ニ

白鶴ニ西飛止ニ讚州ニ 神社考

伊豫

○大山祇社 越智郡ニ有リ 祭神一座

大山祇神 傳系上ニ有リ

俗稱ニ三島大明神ニ伊與風土記云宇治郡御座神御名大山積神一名和多志大神也此神者難波高津宮御宇

渡座云々 神名帳註

○御位 貞觀十七年三月廿九日正二位國史

○神託 吾神明は法の中には日天子又は大日遍昭

也垂跡を滄海の龍神にあらはれまして三界の衆生のねがひをかなへます法の人もおろかに思ひ奉るべからず天地萬物みな吾神明成事を知るべし 倭論語

○湯宮 温泉郡道後ニ有リ 祭神二座

大己貴命 少彥名命 傳系上ニ見

○伊與風土記云湯郡大穴持命見ニ悔耻ニ宿奈比古那命欲ニ活而大分速見湯自ニ下樋ニ持度來以ニ宿奈比古

奈命ニ令ニ浴漬ニ者甕間有ニ活起居ニ然詠云眞甕寢哉踐健跡處今在ニ湯中石上ニ也凡湯之貴奇不ニ神世時

耳ニ於ニ今世ニ染ニ疹痼ニ萬生爲ニ除病存身要藥ニ也 釋日本紀

○新田社 同國在所未ニ考 新田義宗義治之靈也 新

田明神ト申ハ去ル應永年中新田武藏少將義宗脇屋右衛門佐義治出羽國ヨリ密ニ當國ニ拔落シ御坐シ

ヌ河野一族土居得能ヲ頼玉テ深隱坐シケルガ時至ラズシテ素懷ニモ達シ玉ハズ彼國ニテ空ク成玉ヒ

シヲ神ニ祭テ新田明神ト號奉ル也 後太平記○因ニ云武藏國矢口渡ニモ新田明神ト號シテ社有リ此所

ハ新田義興ノ靈ヲ祠也義興ハ義貞ノ次男也小名ヲ

惡ニ飼部等跡之氣ニ故自レ是後頓絶以不レ跡ニ飼部ニ而止レ之 日本紀

伊弉諾尊神功既畢靈運當レ遷是以構ニ幽宮於淡路洲ニ寂然長隱者矣 日本紀

○御位 貞觀元年正月廿七日一品神階記

阿波

○大麻彦社 板野郡ニ有リ 祭神 猿田彦命 一宮記

○御位 貞觀九年四月廿三日正五位上 國史

讃岐

○田村社 香川郡ニ有リ 祭神

猿田彦命 一宮記 ○御位 貞觀九年十月五日

從四位下 國史

○崇德社 松山ニ有リ 祭處 崇德院御靈

人皇七十五代ノ天子ナリ 鳥羽院第一ノ御子也

諱ハ顯仁母ハ中宮藤原璋子待賢門院ト號ス大納

言公實ノ娘元永二年五月天皇誕生保安四年正月

讓ヲ受ケ二月卽位時ニ五歲治世十八年永治元年

三月上皇鳥羽殿ニテ落飾鳥羽法皇ト號ス歲卅九

十二月法皇ノハカライニテ崇德帝何ノ故モ無ク

位ヲ御弟ノ體仁ニ讓ル後十六年有テ後白川院保元々々年七月二日鳥羽院崩ズ歲五十四天皇卽位ノ

初ヨリ忠通ハ替ラズ關白タリ賴長ハ氏長者元ノ

如シトイヘドモ内覽ヲヤメラル是ニヨリテ當今

ニ恨有ケルニヤヨリノ崇德新院ヲ勸メ申サル、

コト有リ新院元ヨリ世ヲ取返サント志アリケレ

バ悅玉ヒテ賴長ト密謀アリ法皇ノ崩御ニ折ラエテ

近國ノ兵ヲ呼アツム故ニ崩御一七日モ過ザルニ京

洛外騷動ス新院ハ鳥羽ヨリ白川ノ御所ニ御幸也賴

長モ同ク參向內裏エハ關白忠通以下參向ス武士ニ

ハ下野守源義朝安藝守平清盛等內裏ヲ守護ス義朝

ガ父爲義ト清盛ガ叔父平右馬助忠正等ハ新院ノ召

ニヨリテ白川殿ニ參ル爲義ガ子共義朝ガ外ハ皆新

院ノ御方ニアリ同キ十一日ノ夜少納言入道信西勅

ヲ奉テ義朝清盛等ヲシテ新院ノ御所ヲ攻シム爲朝

防ギ戰フニ依テ官軍多ク討ル義朝火ヲ放テ白川殿

ヲ燒ハラフ新院ノ軍敗レテ散ズ賴長ハ流矢ニアタ

リテ死ス歲三十六新院ハ出家シ玉ヒシヲ讃岐國エ

流シ奉ル時歲三十八此合戰君臣上下共ニ親類骨肉

ノ爭前代未聞也新院ハ二條院ノ長寛二年八月讃州

○伊曾太祁社 名艸郡ニ有リ 祭神三座

五十猛命 大屋津姬命 抓津姬命

傳上ニ見 ○大寶二年二月己未分ニ遷伊曾太祁大

屋都姬都麻都比賣三神社

續日本紀

御位 貞觀元年正月廿七日伊曾太祁大屋都姬神抓

津姬神並從四位下

神階記

○玉津島社 弱浦ニ有リ 祭神

衣通姬靈也 人皇二十代允恭天皇后也

○玉津嶋神者衣通姬也案日本紀允恭天皇之后忍坂

大中姬之妹容姿絕妙無_レ比其艷色微_レ衣而晃之是以

時人號云_ニ衣通郎姬_一天皇喚_ニ郎姬_一郎姬畏_ニ皇后_一而

不_レ參天皇強而七喚以來之因_ニ皇后之嫉_一別構_ニ殿屋

於藤原_ニ而居八年春二月幸_ニ于藤原_一密察_ニ衣通姬之

消息_ニ是夕衣通郎姬戀_ニ天皇_一而獨居其不_レ知_ニ天皇

之臨_ニ而歌云和餓勢故餓旬倍枳豫臂奈利佐瑤 餓泥

能區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛天皇聆_ニ是歌_一則

有_ニ感情_一郎姬奏言妾常近_ニ王宮_一而晝夜相續欲_レ視_ニ

陛下之威儀_一然皇后則妾之姉也恒恨_ニ陛下_一亦爲_ニ妾

苦_一是以冀離_ニ王居_一而欲_ニ遠居_一天皇更興_ニ造宮室於

河内茅渚_ニ而令_レ居_一已下略 神社考

聖武帝也

○天璽國押開豐櫻彥天皇神龜元年十月幸_ニ紀伊國_一

詔云登_レ山望_レ海此間最好不_レ勞_ニ遠行_一足_ニ以遊覽_一

故改_ニ羽濱名_一爲_ニ明光浦_一宜置_ニ戶守_一勿_レ令_ニ荒穢_一

春秋二時差_ニ遣官人_一奠_ニ祭玉津島之神明光浦之靈_一

續日本紀

和歌 浦 海士 田鶴神 玉津島

古今 若のうらに汐みちくれはかたをなみ

赤人

蘆へをさして田鶴鳴渡る

後京極

續古今 いか計若の浦風にしみて

宮はじめけん玉津島ひめ

同 兼てより和歌のうら地に跡たれて

藤原隆信

君をや待し玉津島姫

古今 和田の原寄せくる波のしはくも

讀人不知

みまくのほしき玉津島かも

淡路

伊弉諾伊弉並二神產玉ヲ洲也日本紀ニ見リ

○伊弉諾社 津名郡ニ有リ

履中帝五年秋九月十八日天皇狩_ニ于淡路島_一是日河

内飼部等從_レ駕執_レ轡先_ニ是飼部之跡皆未_レ差時居

河島伊弉諾神託_レ祝云不_レ堪_ニ血臭_一矣因以卜_ニ之兆云

天丹生神 ○先師説云高野山天野大明神者丹生都神也天照太神之妹稚日女神也一説云丹生都姫天照太神也坐三和州丹生川之裔故名三丹生都姫也後又顯三伊勢國神名帳註

○丹生高野の二神は即母子にておはしますと申傳へり或は夫婦とも高野の大明神は大神宮の御弟なり又玉津島の衣通姫を思ひ人にて御馬にて忍びて通ひ給ひけるを丹生明神やすからぬ事に思召けり彼玉津島へ神馬を奉られし時は明神の御前にてくつばみの音をならさぬ事にて侍となん今此所を尋るに牛窟とて玉津島山の江のほとりに有昔は高野明神の神與此窟へ渡御の事毎年有しかども今絶たり窟の内に小社有委は公任卿家集にみえたりあま人の乗渡しけんしるしにや

公任

岩屋に跡をとめ置けん

兩大明神 北は丹生神殿女體南は高野神殿俗體是を山王院と云也是當山鎮守也弘仁十年五月三日大師勸請也啓白の文あり

○四所明神 御寶殿戌亥の方に向ふ南の方第一は一宮丹生明神次は二宮高野明神三宮氣比明神四宮丹

生明神の子なり高野明神は天照太神の孫王也丹生權現第一の子也氣比は丹生權現の御女也四宮は丹生の子也往古は兩大明神のみ有しを中古行勝上人瑞夢をかんじ勸請せられしよりかくの如し此格子の内十二王子の宮有 八王子 土公神 大將軍 皮張明神 皮付明神 八幡 熊野 金峯 白山 住吉 信田 西宮 同百二十伴の宮右十二王子百二十伴勸請諸神は大師御時よりの事とみえたり舊記にみえたり

○七社明神 四社明神と三社の神となり四社の神は前のごとし三社は 天照太神 八幡 春日明神也鳥居の額云正一位勳八等丹生七社大明神廿餘村の守護神とす

嵯峨帝弘法大師に密灌を受給ひしとき此近邊の村を御寄附有しなり其後他の領となりぬ毎年九月晦日神事あり高野の衆徒法事をつとむ寺號は神通寺と申傳へり

○栗島明神 觀音堂の左にあり勸請たれと云事さだかならず

已上高野ニ有リ 假名書之分

高野名所記

底搜看潮人出_レ波奏云貝猶在徑三尺許自_三帝修_ニ練

此地_ニ苦行者六十人至_レ今不_レ絶釋書十七

仲算大德熊野へ參給ひけるに那智のたきにて心經

をたうとく讀給ひければたきさかさまにながれて

瀧のうへに正眞の千手觀音のあらはれいまそかり

しをまのあたりおがみ給ひけるとなん撰集抄

○神託 吾國はしたがへる人日の蝕なる時は心を

つゝしみ身をしづめて蝕にあたるべからず大蝕は

大災也小蝕は小災也和論語

○御行 御幸始

平城帝 花山院 白河院三山五度

堀河院三山一度 鳥羽院三山八度

後白河院三十三度

○當社和歌ニ詠ズ

熊野にまうで侍ける時發心門の王子にて

千載集

嬉しくも神のちかひをしるへにて 權中納言經房

心をおこすかとに入ぬる

鹽屋の王子の御前にて 後三條内大臣

同 思ふ事くみてかなふる神なれば

鹽やに跡をたるゝ也けり

熊野新宮にて讀侍ける 中原師光朝臣

玉葉集 天さかる神や願をみつ汐の

湊に近きちきのかたそき

同 待わひぬいつかは爰にきの國や

むろの郡は遙なれとも

右熊野の權現の御歌

續千載 うろよりもむろに入ぬる道なれば

是そ佛のみもと成へき

此歌は後白河院熊野の御幸三十三度になりける

ときみもとゝいふ所にて告させ給ひけるとなん

風雅集

もとよりもちりにまじはる神なれば

月の障も何かくるしき

是は熊野の權現和泉式部にしめさせ給ふとなん

○粟島社 名草郡蚊田地ニ有リ 祭神一座

少彦名命 高皇產靈尊子也

傳系上ニ見 當社鎮座年紀未_レ考

此神者本朝神仙醫藥之祖神也

○丹生社 伊都郡高野山上有リ 祭神一座

津姬命凡三神亦能分_二布木種_一即奉_レ渡_二於紀伊國_一也 同上

系圖上_二見

○熊野社 牟婁郡_二有_レ 祭神三座

伊弉尊

伊弉冊生_二火神_一時被_レ灼而神退矣故葬_二於紀伊國熊野之有馬村_一焉土俗祭_二此神之魂_一者花時亦以_レ花祭又用_二鼓吹幡旗_一歌舞而祭焉 日本紀

事解男神 速玉男神

伊弉諸尊追至_二伊弉冊尊所在處_一便語之云悲_レ汝故來答云族也勿_レ看吾_一矣伊弉諸尊不_レ從猶看_レ之故伊弉冊尊耻恨之云汝已見_二吾情_一我復見_二汝情_一時伊弉諸尊亦慙焉因將_二出返_一于_二時不_レ直默_一飯而盟之云族離又云不_レ負_二於族_一乃所_レ唾之神號曰_二速玉之男_一次掃之神號_二泉津事解之男_一凡_二二神矣_一 同上

崇神天皇十六年始建_二熊野本宮_一 景行天皇五十八年建_二同新宮_一 神名帳註

○御位 延喜七年十月二日丙午熊野坐神正二位

天慶三年二月一日丁酉速玉神正二位 國史

○古事記舊事紀等謂伊弉冊尊神去葬_二出雲國與_二伯

耆國_一之界比婆山上_二不_レ與_二此書_一同_二社家者說熊野權現者自_二天然_一飛來之神也今見_二此神書_一爲_二伊弉尊_一者決矣故諸道博士勘文多引_二此書_一爲_レ据

神代纂疏

按神代舊事紀等一說以下葬_二於紀伊國熊野_一之記文爲_二伊弉尊_一也若據_二長寬勘文_一則爲_二熊野樟日命_一之明矣蓋伊弉尊葬_二于出雲國比婆山_一之故也又今紀伊國熊野鄉有馬村無_レ神則彼神紀之一說非_レ無疑乎 啓蒙

○熊野權現證誠殿本地阿彌陀 本宮

兩所權現者樂師觀音 新宮

○若一王子施無畏大士 號云_二日本第一大靈驗_一三處權現

○飛瀧權現 千手觀音 已上習合ノ說

花山法皇入_二那智山_一不_レ出_二三年其精修勵苦行_一之者皆取_レ法一日神龍降獻_二如意珠一顆水精念珠一串海貝一枚_一帝置_二寶珠於富屋念珠於千手院_一以爲_二地鎮_一苦行上首傳持祕授至_二如今_一其海貝九穴沉_二瀧下_一俗云食_二九穴貝_一者長年不_レ老蓋帝令_二飲_二瀧水_一者得_二延齡_一也承保帝聞_二貝事_一召_二弄潮者_一入_二瀧

白河院

○神託 吾國の人は吾神の子也親の教をうしなひてあらぬ方のをしへにしたがふは吾子にあらねば守るによしなし是天照尊のをしへ也吾思ふ益人よ持たもて和論語

○和布茹社 下關赤目ニ有リ 當社ヲ和布茹社ト云事ハ毎年ノ除夜夜半ニハ必此海ノ汐ヒル也神人炬火ヲ燈シテ海底ニ至ヌレバ和布生出テ有リ是ヲ茹トリテ歸ル也誠不思議神變也明且元朝ニ神前ニ備ユル也是ヲ和布茹神事ト云也

祭神 彦火々出見尊 神社考

傳系上ニ見當社鎮座記未レ考

○龜山社 龜山ニ有リ 祭神 八幡三座 應神帝中殿 神功皇后左 仲哀帝右

○人皇五十六代清和天皇貞觀元年奉レ遷ニ男山ニ時行教和尚造ニ行宮ニ勸ニ請之ニ二十二社註式

南海道

紀伊

紀ト讀也故實也 或云昔秦ノ除福ト云フ者不死ノ藥ヲモトメニ出テ此國ニ來里人奇異

也哉トイヒシヨリ紀異國ト云フ云々

○日前社 國懸宮トモ名草宮トモイフナリ 名草郡ニ有

祭神 石凝姥神 天兒屋根命孫一宮記

○太神入ニ天石窟ニ而閉ニ磐戸ニ天下恒闇時思兼神思而白云宜圖ニ造彼神象ニ而奉ニ招禱ニ即以ニ石凝姥ニ爲ニ治工ニ探ニ天香山之金ニ以作ニ日矛ニ又全ニ剝眞名鹿之皮ニ以作ニ天羽轡ニ用レ此奉ニ造之神是即紀伊國所レ坐日前神也 日本紀

○託神 益人が心太虛のごとくその身大地のごとく其口風のごとく其思ひ天地にひとしくすれば神明其身を社とし日月光を友とす愚につとめいたるべかずとぞ思ふ和論語

末社

五十猛神社 ○素戔嗚尊帥ニ其子五十猛神ニ降ニ到於新羅國ニ初五十猛神天降之時多將ニ樹種ニ而下然不殖ニ韓地ニ盡ニ以持歸遂始自ニ筑紫ニ凡大八洲國之內莫レ不ニ播殖而成ニ青山ニ焉所以稱ニ五十猛命ニ爲ニ有功之神ニ即紀伊國所坐太神是也 日本紀

○大屋津姬社 ○抓津姬社

○素戔嗚尊之子號云ニ五十猛命ニ妹大屋津姬命次狐

たらゐと云御社三所におはします又すこし前の方
にひきのきて南北え三十三間東西え二十五間の廻
廊侍しはのみつる時は廻廊の板敷のしたまで海に
ゐる汐のひくときは白砂五十町計也然あれば汐の
さしたる時まいれば船にて廻廊まで参る也けたか
くいみじき事たとへもなく侍る但いか成御事やら
ん御簾の上には御正體のかいみをかけまいらせで
御簾より下にかけて参らする也彼御神は女體神にて
おはしますなればかくはならはせるやらん大かた
は御社は山上にあがり廻廊は平地にあり東西南の
三方はれわたりてことに心もすみ侍所に鹿を狩ざ
れば御山には男鹿なき草より露おち野路東なれば
むしのこえさかりに侍何心なき人も此御社にては
心のすむなるとぞ申傳て侍る撰集抄

周防

○玉祖社 佐波郡ニ有リ 祭神 玉屋命

伊弉諾尊男 一宮記

○高峯宮 吉敷郡山口ニ有リ 祭神 伊勢兩宮ニ同

シ ○社家註進云當所内外二宮永正十七年十一月
上旬大内多々良朝臣從三位左京大夫義興依ニ夢覺ニ

而從ニ伊勢國度遇郡奉遷ニ當國高峯ニ也祭祀末社
等准ニ南太神宮ニ啓蒙

○山口社 同郡ニアリ祭神 山州祇園ニ同シ 山口
祇園ト號ス ○社家註進云永正中疫疾盛行國民

斃死者甚多矣仍大内義興祠之遷宮ト部兼右被勤
焉

○朝倉宮 朝倉ニ有リ 祭神 八幡宇佐ニ同

人皇五十六代清和天皇貞觀元年立ニ行宮勸ニ請之ニ
二十二社註式

長門

元ノ名穴門ト云フ日本紀ニ見ユ仲哀天皇都

シ玉ヘリ穴門豐浦宮トハ是也猶日本紀委シ

○住吉社 豐浦郡ニ有リ 祭神 底筒男 中筒男

表筒男 一宮記

神功皇后十一年垂ニ跡于長門國豐浦ニ云々

又云住吉大神其荒魂在ニ筑紫之小戸ニ和魂神功皇后

征ニ三韓ニ時顯ニ座攝州ニ而託云眞住吉々々之國也

因鎮座地名云ニ住吉ニ豐浦那珂之住吉由ニ攝効地名ニ

而通ニ稱之一神名帳註

○御位 貞觀十七年十二月五日從四位上 國史

網釣恩賀ノ爲島ノ邊ニ經回シケルニ西方ヨリ紅ノ帆アゲタル船見エ來ル船中ニ瓶アリ瓶ノ内ニ鋒ヲ立テ赤幣ヲ付タリ瓶ノ内ニ三人ノ貴女アリ其形端嚴ニシテ人類ニ同ジカラズ託宣シテ云吾百王守護ノ爲ニ本所ヲハナレテ王城ニ近ツク寶殿并廻廊百八十間造立シテ吾ヲ嚴島大明神ト崇ベシトノ玉ヘバ鞍職云何ナルシルシ有リテカ官奏ヲ經ベキト申ス明神云ク王城ノ艮ノ天ニ客星異光有リテ出現セシ公家殊ニオドロヒテ怪ヲ成ヘシ時ニ鳥島多ク集テ共ニ神ノ枝ヲ食^{クハ}エント宣ヒケリ卽津國難波ノ王城ニ俄ニ千鳥神ノ枝ヲ食エテ禁裏ニ鳴集ル鞍職奏シテ申是ハ大明神ノ現瑞也ト天皇叡信アリテ御倅田町御修理杣山八千町御寄進ノ宣旨ヲ下サルノ上同年十二月廿八日重テ宣下セラレテ云自今以後拜ニ任當國ノ之吏毎任可レ捧ニ上分田不^レ可^レ輕ニ神威ニ及ニ末代ニ社頭破壞顛倒之時ハ當任ノ國司經ニ官奏ニ國中ノ杣ヲ點シテ修理スベシ其間材木檜皮等不^レ可^レ運ニ上京都ニ云々 盛衰記

○弘法大師詣ニ嚴嶋ニ供ニ法味ニ神現云所レ祈何事答云末世祈ニ菩提ニ者願神賜ニ道心ニ餘何望哉神諾而隱或

時一僧來詣見ニ其祭供ニ海中群鱗不^レ知ニ其數ニ心謂和光本地佛并也專ニ慈悲ニ戒ニ殺生ニ而今此供物亦可以疑ニ因心祈^レ之神託云世之不^レ知ニ因果ニ怒ニ殺屠ニ而有罪者欲^レ供ニ於我ニ故讓ニ罪于我ニ其罪惟輕其生類報命盡而爲ニ祭供ニ以ニ此因緣ニ爲ニ佛道方便ニ是以令^レ取^ニ其報命已盡之鱗類ニ以祭^ニ我矣於^レ是僧解^ニ其疑^ニ 神社考 沙石集

○神託 吾國の人吾名をむかししらざりし故に今の世に生れて賤きにくるしめり吾天上にしては日の神也中央にはこゑをあらはし大地の内にかくれては萬物を生じ海の中には八大龍王となり四海に其とくをほどこしたとへば貧乏の衆生一度參詣して我に其姿をみせ思ひをのべていはんものをば其人により一七日二七日三七日或は三年七年のうちに願の輕重にしたがひ必心のごとくならしめんされ共直からぬ者のたのめるぞくるしき大悲のちかひすてざればかれも又すつる事なし 倭論語

御位 貞觀九年十月十三日從四位上 國史

○安藝嚴島の社は後は山深くしげり前は海左は野右は松原也東の野の方に清水よく流たりこれを御

聲吉凶也仍誓_レ神士女輻輳如_レ市

○仁壽二年二月備中國吉備津命神列_二官社_一同年七月奉_レ充_二封廿戸_一文德實錄

御位・貞觀元年正月廿七日二品神階記

○神託 天照神のをしへの祓ひとたびはらへば百日のさいなんをのがれ百度の祭文は千日の咎をすつる千世萬歳をへても天神のめぐみはつきじと生世々にたつときは天地のおん仰ぎても猶あまり有は神德にこゆる事なし 倭物語

●眞金吹と讀し吉備中山并細谷川等此わたりに近

き名所なり
古今大歌所御歌
まかねふくきひの中山帯にせる

細谷川の音のさやけさ

後拾遺

誰か又年へぬる身をふり捨て

清原元輔

吉備の中山こえんとすらん

金葉

鶯の鳴につけてやまかねふく

顯李

吉備の中山春を知らん

新古今

ときはなる吉備の中山をしなへて

讀人不知

千年を松の深き色哉

新千載

思ひ立吉備中山遠くとも

三善資連

細谷川の音つれはせよ

○渡社 沼隅郡鞆ニ有リ 祭神 船玉命

猿田彦神也卜部兼邦說

傳テ云神功皇后三韓御退治發向ノ時此浦ニテ船

楫ヲソロエ玉ヒ兵食ヲツミソナエ玉フ渡ノ地ニ

シテ船ノ鞆ヲ以テ神臺トシ玉ヒ舟玉神ヲ祠玉ヘ

リ是故此ヲ鞆ト云フ ○鞆浦歌ニヨメリ

新勅撰
鞆の浦の磯のむろの木みる毎に 大納言旅人

逢みし妹は忘られんやは

○疫隅社 所同上 號ニ鞆祇園

祭神 三座 山城祇園ニ同シ 祭六月十四日是社

傳備後風土記見ユ今彼國ニ有リ疫隅社ト云フ云

々風土記上ニ見エタリ

安藝

○嚴島社 佐伯郡ニ有リ 祭神 市杵島姬

○天照太神與_二素戔嗚_一鳥_二誓生_一三女_二内市杵島姬也

一宮記 系圖傳上ニ見

天照太神以_二素戔嗚_一尊八坂瓊之曲玉_一化生神號_二市

杵島姬命_一是居_二子遠瀛_一者也 日本紀 傳系上ニ見

推古天皇五年十一月十二日内舍人佐伯鞍職ト云者

諸社一覽第八

備前

○石上社 赤坂郡岡山傍三里許ニ有リ 祭神 布都御魂當宮素戔嗚尊斬蛇之劍號韓鋤也祭以爲神靈神紀所謂其素戔嗚尊斷蛇之劍今在吉備神部許又云其斷蛇劍號云蛇之龜正此在石上者是也因功則名龜正據形則號韓鋤所謂異名同物崇神天皇御宇奉遷大和國山邊郡啓蒙

○酒折社 岡山石關ニ有リ 祭神一座

日本紀日本武尊自日高見國還之西南歷常陸至甲斐國居于酒折宮時舉燭而進食是夜以歌之問侍者云珥比磨利菟玖波塢須擬氏異玖用加禰菟流諸侍者不能答言時有秉燭者續皇子歌之末而歌云伽餓奈陪氏用珥波虛々能用比珥波苦塢伽塢卽美秉燭人之聰而敦賞

案酒折神者秉燭之人也惜乎史失其姓名也是歌世所謂連歌之始也 啓蒙

備中

孝靈天皇第三子雅武彥命以功封于備之中州其後胤吉備大臣也

○吉備津 賀屋郡ニ有リ 祭神 吉備武彥命 備前備中備後三國一宮也 一宮記

○神名註人皇第七孝靈天皇御子彥五十芹命亦名吉備津彥命是說非也孝靈三世皇子吉備津命也日本紀與風土記符合 景行天皇御宇彼御子吉備武彥命罷吉備國如備中風土記者賀夜郡伊勢御社東有河名宮瀨川河西者吉備建日子命之宮造此三世王故之名宮瀨勸請年紀未分明

按神祇正宗云人皇卅四代推古帝御宇元年現座

社家說云

本宮 孝靈帝 去本殿南一町

本殿 吉備武彥

岩山 地主神 去本殿巽七町餘

內宮 孝靈帝后 同

新宮 吉備津彥 去本殿南一町許

釜殿 去本殿西一町許

傳聞若人有祈願則來于當宮就神官卜鳴

諸社一覽第八目錄

備前 石上 酒折

備中 吉備

備後 渡 疫隅

安藝 巖島

周防 玉祖 高峯 山口 朝倉

長門 住吉 和布 龜山

紀伊 日前 熊野 粟嶋 丹生 四所

七社 五十 玉津

淡路 伊弉

阿波 大麻

讃岐 田村 崇德 白鳥

伊豫 大山 湯宮 新田

土佐 都佐

筑前 箱崎 宗像 志賀 大己 宇瀬 香椎 宰

府 網場 壹伎

筑後 高良

肥前 淀姫 松浦 鏡宮 櫛田 板櫃

肥後 阿蘇

豐前 宇佐八幡 同 賀春 西塞

日向 都農

大隅 鹿兒 高千

薩摩 枚聞

壹岐 手長

對馬 和多

已上諸國畢

諸神靈驗

良山アリ又二三町ノ東ニ眞鳥スムト詠ゼシ宇那手森アリ

○勅使宮 津山府中ニ有リ 祭神大日靈貴

鳥居額二品道晃親王筆也

御位正一位當宮天文年中火災宣命燒亡故問ヨ尋吉田兼連寛文三年八月又改レ之

戸川戸字或作告又作富皆訓止在二三瀬之名上瀬曰早瀬下瀬曰弱水中瀬曰廣瀬宮ノ南ニ流ル

○大隅宮 津山城下五町東ニ有リ 祭神大己貴命

相殿神號ニ少宮少彥名命 此神古ヘハ別宮ニテ今

ニ少宮谷ト云所アリ

鎮座年記未レ考

白神宮 田中郷津山ニ有リ

祭神 月讀尊 又有五座之說未レ考レ之

傳聞當社大明神者天神之皇子月讀尊之垂跡也美作

國七郡内西北條郡田中郷清淨之靈地而有古蹟

云三月和田有清水其邊堆舊墳號曰潮神厥后遷壇正開三月殿奉仰白神其由來尙矣

日本書紀天文曰伊弉諾尊勅任三子曰天照太神者

可以治高天原也月讀尊者可以治滄海原潮之

八百重也素戔鳴尊者可以治天下也因茲觀レ之

會合月盈獻潮之滿干然則月和田原之潮神者治滄海原之潮神一體分身無雲月之白神之謂也神物實形之月影勿開蓋勿視焉

諸社一覽第七終

浦_ニ移_ニ廣峰_一者蓋此地也 啓蒙

○人丸社 明石郡明石大倉谷ニ有リ 祭神柿本人丸

○柿本人麻呂者石見國人也或云未詳其何許人也善詠和歌多載萬葉集焉紀貫之云先師柿本大

夫者高振神妙之思獨步古今之間有山邊赤人

者並和歌之仙也藤原敦光作柿下朝臣人麻呂畫像

讚云大夫姓柿下名人麻呂蓋上世之歌人也仕持統

文武之聖朝遇新田高市之王子吉野山之春風從

仙駕而獻壽明石浦之秋霧思扁舟而綴詞誠是

六義之秀逸萬代之美談者歟方今依重幽玄之古

篇聊傳後素之新樣因有所感乃作讚焉其辭

云倭歌之仙受性于天其才卓爾厥鋒森然三十一字

詞花露鮮四百餘載來葉風傳斯道宗匠我朝前賢涅而

不緇鑽之彌堅鳳毛少彙麟角猶專既謂獨步誰

敢比肩 續本朝文粹

○人丸者官位不見天智御時人也 拾芥抄

○柿本姓天足彥押人命之後也 姓氏錄

○大學頭敦光人丸讚云大夫姓柿本名人丸蓋上世之

歌人也仕持統文武之聖朝遇新田高市之皇子古

今著聞集同云元永六年六月十六日修理大夫顯季朝

臣六條洞院の亭にて柿本の人丸の供を行ひけり件
の人丸の影あたらしく圖繪するところ也左の手に
紙をとり右の手に筆を握て六句ばかりの人也其上
に讚を書く

○如萬葉集人丸始自天武至文武袋草子萬葉
第二卷云柿本朝臣在石見國臨死時自傷作歌一
首 鴨山ノ岩根シマケルワレヲカモシラズト妹ガ
マチツ、アラン同上

此歌拾遺集ニ入レリ少キ違アルカ
いも山の岩ねにをける我をかも

しらすて妹か待つゝあらん

○三月十八日は人丸の忌日にてむかしは和歌所に
て毎月十八日に歌の會ありし 徹書記物語

美作

和銅六年四月割備前國六郡始置之云々

○中山社 苦東郡國府津山北一里ニ有リ

祭神 大己貴命 一宮記

貞觀十七年四月五日正三位 國史

○二宮 津山西半里餘ニ有リ 祭神傳記未考

此所風景無類 前ニ川アリ名負久米川 久米佐

有^レ綠生^ニ於日域^ニ請爲^レ臣矣時大和州有^ニ洪水之變^ニ初瀬川大漲有^ニ大甕^ニ流來止^ニ于三輪明神廟前^ニ土人開^レ之視則有^ニ一男子^ニ身體如^レ玉土人奏^レ之天皇云所^ニ夢見^ニ者此人也舉養^レ之賜^レ姓云秦氏^ニ其才智與^レ年相長至^ニ十五歲^ニ授^ニ大臣位^ニ而奉^ニ五朝^ニ以至^ニ推古女主之時^ニ豐聰太子監國祭^ニ祀天地神祇^ニ以布^ニ安國利民之政^ニ因作^ニ六十六番之面^ニ命^ニ河勝^ニ弄^レ假貌^ニ真遂於^ニ橘內裏紫宸殿前^ニ令^レ作^ニ此伎^ニ由^レ是四海波穩萬民康樂也太子以^ニ其神樂^ニ折^ニ神字^ニ名^レ之云^ニ申樂^ニ河勝遂入^ニ攝津州難波浦^ニ遊乘^ニ一小舟^ニ任^ニ風之所^ニ行而舟浮^ニ西海^ニ著^ニ播磨岸^ニ土人聚視^ニ其形^ニ非^ニ常之人^ニ靈威可^レ畏矣共謀立^ニ神祠^ニ祭^レ之云^ニ大荒明神^ニ神社考

○大酒社 赤穂郡坂越浦ニ有^リ祭ル處 弓削守屋大連

○物部尾與ガ子也三十一代敏達天皇ノ御宇百濟并新羅國ヨリ佛像經論ヲ奉ル天皇ハ文ヲ好テ佛法ヲ信セズ天皇ノ御甥厩戸皇子并馬子大臣甚好テ崇敬ス此時疫病ハヤリケレバ守屋奏聞シケルハ是馬子ガ佛法ヲ信ズルタ、リナリ宜佛法ヲ斷絶スベシト

申ス天皇然ルベシトノ玉ヲ守屋即ミヅカラ寺エ赴キ堂塔ヲ打ヤブリ佛像ヲ燒ステ僧尼ノ衣ヲハギテ追放ツ馬子大臣ハ泪ヲ流シテ悲ム其後馬子病ニオカサレケレバ奏聞シテ己ガ病佛力ニアラズバ愈ガタシト申ス天皇汝獨佛法ヲ行ヘトユルシ玉ヲ馬子此ニヲキテ又佛法ヲ再興ス 天皇崩ジ玉ヲ欽明天皇ノ第四子卽位シ玉ヲ是用明天皇ト號ス卽位ワヅカニ二年ニシテ病ニカ、リ玉ヲ佛ニ祈ト議ス守屋并ニ中臣勝海コレ無益ノ事也ト諫ム馬子タレカ勅定ニ從ハザラントテ豐國法師ト云フ者ヲ内裏エ呼ヨセケレバ守屋睨怒天皇ノ御子厩戸皇子ト馬子ト甚睦シスデニシテ天皇崩ズ守屋ヒソカニ天皇ノ弟穴穗部皇子ヲ立ントス馬子從ズ穴穗部ヲ殺ス遂ニ厩戸并諸皇子ヲカタラヒ軍ヲ起シテ守屋ヲ攻ム守屋タ、カヒテ三度カツ其後跡見赤檮ト云フ者ノ矢ニアタツテ守屋死ス一族ミナ亡ブ厩戸皇子ハ聖德太子ノ事也 已上王代一覽ノ

○岩屋社 赤石郡中庄ニアリ 祭神三座 疫神里謠云守疫神也

案廿二社註式所^レ謂牛頭天王初垂^ニ跡於播磨明石



池ノ中ニ
宝殿在リ

按陰陽二神如_ニ夫婦_一者謂_ニ大己貴命少彥名_一歟夫
古來相傳有_ニ此義_一即生石村主之哥云大汝少彥名
乃將座志都乃石室者幾代將經 啓蒙

○曾禰社 曾禰村海濱松原中_ニ有_リ石寶殿ヨリ半里
許坤ニアタレリ 祭神 菅家

里謠云菅家左遷之日於_ニ此地_一折_ニ松枝_一而埋_ニ土中_一
矢云若帝悟_ニ讒臣之僞_一予有_ニ飯洛_一者敢勿_レ枯矣遂
生長而枝葉生也仍作_ニ神籬_一云_ニ天神_一 啓蒙

○佐用社 佐用郡_ニ有_リ 祭神 佐與姫

肥前國松浦郡有_レ女名_ニ松浦佐與媛_一大伴辰彥女大
伴佐提彥妻也彼彥爲_レ渡_レ唐出_ニ松浦川湊_一于_レ時佐
與媛登_ニ松浦山正巔_一遙望_ニ佐提彥船_一々漸去行不
レ_レ堪_ニ別思_一拔_ニ出領巾_一而振_レ之仍此山號_ニ領巾磨山_一
或云佐提彥遂不_レ歸而死_ニ于唐_一佐與媛聞_ニ以悲歎泣
血之餘來而死_ニ此地_一云故祭以爲_レ神 峯相記

嘉祥二年十一月播磨國佐用郡佐用津姬神預_ニ官社_一
續日本後記

○大荒社 所未_レ考 祭神一座 秦川勝之靈

秦河勝者化_ニ生乎人王三十代欽明天皇之御宇_一者也
天皇一夕夢有_ニ神童_一言云我是秦始皇之後身也以_レ

天平六年甲戌賽經營之宿禰全文略之

改曆雜事記云聖武天皇天平五年三月十八日吉備歸朝於播州逢天王圓融院御宇天祿三年壬午天王從西峯遷廣峯已上啓蒙

攝社 井別宮

白幣社 當宮始影向之地也今爲吉備靈社

軍殿 大己貴命即祇園後見殿本社也

地養社 蘇民 護王所 祇園卷池本社

冠者殿 天祖父社

九部神穴

○惣社 同郡姫路侍町ニ有リ 祭神大己貴命

額云軍八頭正一位惣社伊和大明神

按ニ鳥居刻彫傳聞當社者以大名持命奉崇云々

里謠云七月既望兵士會集爲軍旅之威儀云古老

相傳云欽明帝御宇師安元年六月十一日當社影向

也稱一國守護者天平寶字年中也又按峯相記

云天平寶字八年異賊襲來即遣藤原貞國追討

云々恐者當社貞國凱旋之日祀焉 已上啓蒙

○荒田社 多珂郡ニ有リ 當國二宮也

祭神 少彥名命

二宮荒田大明神者天平勝寶元年己丑五月七日女體赤裝而來臨即少彥名命也延曆年中將軍田村麻呂尊崇此神而定神田又以勅使奉授正一位峯相記

○靜窟 姫路鹿兒間山中ニ有リ 稱生石子大明神

祭神二座 大己貴命 少彥名命也 神殿石也故ニ

號石寶殿是天女ノ造處也御戸ノ口ハ地ニ成口ノ

開ベキ所棟有リ實ニ神變ニアラズシテ如何成ン哉

縱數萬人トイフトモ動シ難キ者也神作ノ時斫碎ト

テ傍ノ山ニ碎石充滿セリ予播州名所歷覽ノ時拜見

ス其後不思議ニシテ當社緣起ノ寫ヲ得タリ今此ニ

ハ略ス圖左ニ○峯相記 生石子高御倉者陰陽二神如

夫婦而顯坐時天女降擬造社既及黎明也不暇

起立遂上夫去耳即今石寶殿是也生石真人歌所謂

志都石室者蓋謂此也

カリ實朝ノ縁者タルニヨリテ赦サル泰時々房六波羅ノ館ニ居テ賞罰ヲ沙汰ス是兩六波羅ノ初ナリ七月新帝懷成位ヲスベリテ九條院エシリヅカル同月泰時ガ嫡子時氏奉行ニテ後鳥羽院ハ隱岐國エ遷サレ玉フ順德院ヲバ佐渡國エ遷シ奉ル後鳥羽ノ御子雅成親王ハ但馬ノ國エ賴仁親王ハ備前ノ國エ流サル土御門院ハ今度ノ事ヲイサメラレシカバ其マ、ニ都ニヲキ申ベキト沙汰有リシカドモ是モ土佐國エ遷シ奉ル年經テ阿波エ遷幸後鳥羽院遷嶋ノ間廿一年四條院延應元年二月廿二日彼嶋ニテ崩ズ 王代一覽

山陽道

就ニ山南ニ而行西故云ニ山陽ニ成務天皇始分ニ國縣ニ時山陽云ニ影面ニ也山陽之名始出ニ于此ニ云々

播磨

舊事紀云ニ針間ニ昔景行天皇二年立ニ播磨稻日太郎姬ニ爲ニ皇后ニ生ニ日本武尊ニ播磨名始出ニ于此ニ云々

○伊和社 完栗郡ニ有リ 祭神

大己貴命御魂 一宮記

欽明帝師安元年甲申二月十一日始現座 當社説 ○一宮伊和太明神者坐ニ完栗郡伊和郷ニ即素戔嗚尊第一皇子大己貴命是也昔神功皇后三韓進發之日於ニ當社ニ有ニ敵軍伏誅之約ニ而凱旋遂賽禱其後欽明帝治廿五年託ニ伊和恒郷ニ云可ニ祭ニ朕於此地ニ蓋有ニ上代之幽契ニ哉翌日忽平森中双鶴刷ニ羽佇立于ニ時恒郷奏ニ 上帝ニ營ニ寶基ニ被ニ寄ニ神戶ニ併定ニ當國一宮ニ而被ニ授ニ正一位ニ 畢相記

○廣峯社 飾磨郡廣峯山ニ有リ 祭神 三座

素戔嗚尊 稻田姬 八王子 山城國祇園本社也 三座傳系上ニ見エタリ

社記云人皇四十四代元正帝養老元年吉備眞備人入唐其後四十五代豐櫻彥天皇天平五年癸酉歸朝之日止ニ此地ニ偶佇ニ立船舳望ニ乾維者山後有ニ山峻高支天深谷遠腰穿崖岸之形 今白幣 是也云々公所ニ誘ニ感情ニ而凝ニ眸則有ニ白幣ニ時々放ニ光公怪以徐々登臨也老翁現出云吾是素戔嗚命也爲ニ守ニ諸民ニ保ニ百王ニ來ニ臨此峯ニ尙矣雖ニ然與ニ時變衰知者幾少也汝是傑俊人速飯奏ニ帝公驚下ニ山發ニ船赴ニ華京ニ攀ニ玉階ニ拜ニ龍顏ニ後奏ニ此旨ニ帝忝被ニ下ニ倫命於吉備ニ而同御宇

高倉院第四ノ子諱ハ尊成母ハ藤原殖子七條修理大夫信隆ガ娘也在位十五年順德院ニ位ヲユヅリ玉フ承久三年四月ニ鎌倉ヲ滅サント思召立事アリ在位ノ時ヨリ常ニ武家權ヲ執テ王威ノ衰ルヲ憤リ位ヲ讓テ後倭歌管絃ノ暇ニハ武藝ヲ專ニナラハセ院中ニ北面ノ外ニ侍ヲ置テ西面ト號シ實朝薨ジテ後義時其家臣トシテ天下ヲホシヒマヽニスルヲ怒リ玉フ處ニ信濃國ノ士仁科盛遠トイフモノ西面ニ召レケレバ義時其領地ヲ沒收ス上皇攝州倉橋庄ヲ白拍子龜菊ニ賜フ其地頭龜菊ヲアナドル義時ニ仰セテ其地頭ヲ改易セシム義時シタガヒ奉ラズ上皇彌逆鱗アリテ此比在京シケル武士三浦胤義ガモトエ北面秀康ヲツカハシ義時追討ノ事ヲ議セラル胤義同心ス是ニヨリテ密ニ軍兵ヲ召アツメラル土御門院ハ此事無用ノ由イサメラル主上ハ同心シ玉フ同月主上位ヲ御子懷成ニ讓ル此時後鳥羽院ヲ一院トモ本院トモ申シ土御門院ヲ中院ト申シ順德院ヲ新院ト申ス本院新院心ヲ一ツニシ玉テ義時追討ノ事ヲ議セラル五月本院高陽院ニ渡御アリテ西園寺右大將公經其子中納言實氏ヲ召テ弓場殿ニオシコ

メラル此父子義時ト親シキニヨリテナリ伊賀判官光季ヲ召ケレトモ參ラズ胤義秀康佐々木廣綱大江親廣等在京ノ武士ヲ遣シ攻ラレケレバ光季防ギ戰ヒテ自害ス此ニ於テ中納言光親ウケ玉ハリテ院宣ヲ書テ五畿七道ニ義時ウツベキ旨ヲフレツカハサル關東ニハ押松ト云フ者御使ナリ胤義私ニ使者ヲ以テ其兄三浦介義村ガ許ニ義時討ベキ由ヲ申ツカハス義村同心セズ胤義ガ狀ヲ義時ニ示ス押松モ尋出サレテ捕ラル即チ二位禪尼ノ前ニテ義時并ニ廣元善信評議シ京都ニ軍兵ヲ指遣ス武藏守泰時相模守時房并ニ足利義氏三浦義村等十萬騎東海道ヨリ上ル武田小笠原小山結城五萬騎ニテ東山道ヨリ上ル義時ガ次男朝時等四萬騎ニテ北陸道ヨリ上ル六月泰時時房路次ノ官軍ヲ破リ美濃尾張ニ到ル官軍ヲ分テ宇治勢多所々ニ遣シ防ガル、トイヘドモ東兵強クシテ泰時ハ宇治ヨリ入洛シ時房ハ勢多ヨリ攻入ケレバ胤義并ニ官軍ニシタガヘル武士佐々木廣綱以下或ハ討レ或ハ自害或ハ生捕レテ殺サル光親并ニ大納言忠信中納言有雅藤原宗行以下近習ノ廷臣トラハレテ關東エ下向路次ニテ殺サル忠信バ

○時長髓彦乃遣_二行人_一言_二於天皇_一云嘗有_二天神之子_一乘_二天磐船_一自_レ天降止號云_二櫛饒速日命_一是娶_二吾妹三炊屋媛_一遂有_二兒息_一名云_二可美真手命_一 日本紀

○御位 貞觀十七年十月己未正五位上 國史

○神託

倭論語

諸人の心清くは我も又

かけをうつしてつねにかたらん

隱岐

和名也或云伯耆出雲石見等之沖國也故云_二

沖國_一云々

○由良姬社 智夫郡ニ有リ 祭神須勢利姬神 大己

貴命嫡后 一宮記

素戔嗚子大己貴命也 系圖左ノ如シ

大己貴命

此ヨリ前ノ系圖上ニ見ユ

五十猛神

大屋津姬神

抓津姬神

須勢利姬神

大歲神

稻倉魂神

事八十神與_二大己貴神_一兄弟各有_二欲_レ婚_二稻羽八上姬之心_一八上姬不_レ聞_二事八十神言_一而將_レ嫁_二於大己貴神_一因_レ斯事八十神急欲_レ殺_二大己貴神_一大己貴神

到_二素戔嗚尊所坐之根國_一而又以_二素戔嗚之女須勢利姬命_一爲_レ妻其八上姬所_レ生之子者名_二木俣神_一又名_二御井神_一 舊事紀(ノ心)

○神託 諸人よ二六時中一息の間も神明の心ならぬはなしかくれたる事の外にもるゝは世界みな天照ところのひとつ成ゆへなりつたなくて益人が自他のおもひより萬のくるしみは有にこそ 倭論語

○離火社 海部郡島前ニ有リ 祭神一座

大日靈貴 天照皇太神也

按内侍所三十神第一也仍内侍所三十神儀式載_レ焉然延喜帝已來制斷之書也故不_レ舉_二記文_一也予惟離火神或爲_二大日靈貴_一又號_二午比留尊_一者於_二周易_一離爲_二中女_一而陰中之陽也大日靈貴陰神而有_二顯露之政_一故呼爲_二離火神_一歟啓蒙

○此社ヲ離火ト稱シ奉ル事往還ノ船闇夜ノ比惡風ニアヒ或ハ汐ニ蕩フニ船人身ヲ清メテ此神社ノ方ニ向ヒテ離火ヲ祈念スレバ忽然ト火起テ大ナル炬火ノ如ク也其時東西ヲワキマヘ船ヲ直シテ岸ニ着ク事ヲ得ル也誠ニ奇異ノ神功也

○後鳥羽社 島前ニ有リ 祭神 後鳥羽院

崎者出雲國造神而大己貴命之父也杵築者天下經營神本朝醫家大祖也其神功之大者悉載神紀也佐田者吾國開闢祖而素戔嗚命之母也蓋稱大者讚其德也間杵築者大己貴社也故號大者非也此外有大庭八重垣等神社皆屬杵築也今又畧之 已上啓蒙

○神託 益人等吾神國のおきてを守らで外にころをうつしなば神明のあたなればわがけんぞくの神をつかはし其玉の緒をうばいとらん諸の神をまつらんに吾をさきにせぬ衆生のねがひはよもとげじとぞ思ふ 倭論語

攝社

氏神社 神殿傍ニ有リ神主ノ祖神也

田中 神殿ヲ去テ二町許深祕ノ社也

幸神 已上三社北殿攝神

惠曇社 五十田狹社 已上二社南殿攝神

神菟社 屬正殿

○手間社 意宇郡筑野村間瀉海中ニ有リ

祭神一座 少彥名命 所ノ俗天神ト濁呼デ菅原天神ニ混ズルハ非也天真ト清デ讀ムベシ

○神代卷云大己貴命行到出雲國五十狹々之小汀而且飲食是時海上忽有二人聲驚而求都無所見頃時有二箇小男以白斂皮爲舟以鰭鷯羽爲衣隨潮水以浮到大己貴神即取置掌中而翫之則跳嚙其頰乃怪其物色遣使白於天神于時高皇產靈尊聞之云吾所產兒凡有一千五百座其中一兒最惡不順教養自指間漏墮者必彼矣宜愛而養之此即少彥名命是也 啓蒙

○土師社 出雲郡土師村ニ有リ 祭神 菅家

舊史所載說天穗日命十有四世孫云野見宿禰居出雲國垂仁御宇與當麻蹶速角力而贏當是時一人死者多殉帝甚哀之野見宿禰採埴造像以代殉帝大喜之賜土師姓云蓋菅神者土師之裔也故此邑祀此神歟 啓蒙

石見

此國有三角山有岩崎山有岩奈仁山皆嶮石之國也故號石見國云々

○物部社 安濃郡ニ有リ 祭神一座

宇摩志間知命 饒速日命子 一宮記

系圖上ニ見ユ

此所謂伊弉諾伊弉冊也 神皇實錄

南殿素戔嗚尊 神紀所謂伊弉諾尊伊弉並尊生素戔

島傳系上見

北天津彥火瓊杵尊 社記傳系上見

或問佐太本宮往々爲伊弉諾何子之言相反耶云
名神記當國之撰書而其語不誣且當宮至今有
神在之祭祀則縱雖不抱記文爲伊弉並尊
明矣

○云神在祭者奈何云社說云伊弉冊尊功既成後
以十月神避矣御子素戔嗚命幼而悲其喪妣遂
來于此地也於是簾川上聞有害人蛇徒
行制之其言載以明白也是以雖星霜久風曆數
更每歲十月當宮與御崎錦紋小蛇浮海上來
而未失其信也且伊弉並尊依爲群神之尊妣
當月一切神祇會集有神在之名

○問世傳十月稱神無月云諸神會集于出雲大
社而不在于舊地之故也或又云此蓋非正說
也是月出雲無異祭則諸神會集之說不可信云
奈何云夫天下稱神無之月出雲特稱神在之月
蓋稱陽月之類也十月陰極之時而雲州又極陰之

地也所謂諸神會集者蓋陽伏之義耶世俗於十一月
燒薪木於宮社而稱火燒是知迎陽之義
也然則會集于雲州者陽伏之謂也況又雲州有
箇々祭事也

○問每歲四月秋鹿嶋根兩郡輻輳成市神官奠桑
供禮而稱神之遺風也是何據乎云社家者說
云表天孫降臨之威儀云初降日向之千穗遂
慕大祖廣而來臨于此所也故至今權神主大
來目命神胤而世以來目爲氏蓋來目部遠祖大
來目命爲神孫之從者今祭祀日有舞名猿田
彥也此皆降臨之遺習

○問雲州諸社造木偶人稱隼人國家將有凶
災則或落廡下或云去他方此何遺風云神紀
云火酢芹命苗裔諸隼人等至今不離天皇宮牆
之傍代吠狗而奉事者也劔佐田社北殿瓊杵
尊也則以隼人爲護衛之義有所據耶其去
宮牆轉落廡下者謂監衛之無賴之兆也本朝
神代之遺俗流風存者出雲伊勢也志神道者不
可忽焉

○案名神記以已上三宮稱大社誠有故哉御

具一夫須^レ噉八十木種皆能播生^{○今按}
居^ニ熊成峯^ニ而遂入^ニ根國^ニ者矣^{中略歟}然後素戔嗚尊

社^下大日靈貴^{天照大神}當國大日靈貴產生之地而今又有^二日神

垂跡^一也故名^二日御崎^一^{名神記}

相殿五座 正哉吾勝尊 天穗日命 天津彥根命

活津彥根命 熊野樟日命

已上神傳系上^ニ見エタリ

○問上社配^二二女^一下社合^二五男^一是何據乎云神紀

所謂天照太神勅云原^ニ其物根則八坂瓊之五百箇

御統者是吾物也故彼五男神悉吾兒乃取子養焉又

勅曰其十握劍者是素戔嗚尊物也故此三女神悉爾

兒便授^ニ之素戔嗚尊云是上下三五合祭之緣^{啓蒙}

○問當宮有^二紋石者^一石面有^二栢葉^一如^二良工雕刻^一

而雖^レ爲^二數片^一其紋猶存也相傳稱^二神紋^一是也否

云按^二名神記^一出雲國日崎山有^二栢葉紋形石^一神代

昔平^レ國而後登^二熊成峯^一爲^二栢占^一云吾欲^レ住^ニ於栢

葉之所^レ止也遂隨^レ風止^ニ於此地故至^レ今示^二其幽

契^{略之}全^{全文}之問宮祭宦每歲十二月除夜半雖^二甚雨大雪^一

揭^レ裳帶^レ劍入^ニ山中^一捧^レ所^レ帶之劍於天神^一也及^二

黎明^一下^ニ於山^一嘗雨雪不^レ霑^二一點^一也是何遺風

耶云傳聞昔八束水命斬^二八岐蛇^一及^レ尾而及缺卽

臂而視^レ之有^二一神劍^一此不^レ可^二以私用^一也乃遣^二

五世孫天葦根命奉^ニ於天^一蓋當宮祭宦葦根命之神

脈也仍于^レ今有^二天神奉劍之遺習^一乎此外十月神

無月祭祀并除夕禮奠等姑舍^レ之^{已上啓蒙}

○攝社 天葦根神社 號^二波屋鷄明神^一神主祖神也

在^ニ出雲鄉宇料^一

大歲社 同鄉ニアリ 蛭兒社 在^ニ當所^一

日臺社 此所隱丘神祕也 大土社 栗津鄉ニ有リ

荒魂社 蛇山ニ有リ 宇賀社 園村ニ有リ

○佐陀社 秋鹿郡ニ有リ 祭神四座 正殿二座南北

二殿各一座ナリ

正殿伊弉冊尊 社記 ○杵築大社母神也神代伊弉諾伊

並尊持^二天瓊矛^一御^二大八嶋^一而有^二夫婦之道^一而神功

終之日伊弉諾尊隱^ニ於淡海國日少宮^一伊弉並尊崩^ニ

當國^一遂葬^ニ足日山麓^一也神紀所謂比婆山者蓋此地

哉矣然後垂仁天皇五十四年乙酉四月始合^二祭伊弉

諾尊^一爲^二二座^一全^{全文略之}名神記

從^二國常立尊^一至^二惶根尊^一天神六代之間則有^二名字^一

未^レ現^二尊形^一五位神坐其後合^二陰陽^一有^二男女形^一云々

小汀一問大己貴云皇孫君臨此地汝當須避大己貴對云我子事代主神在於三穗之碕以釣弋爲樂以熊野諸手船載使者稻背脛遣之問之事代主云今天神有此勅問我父當奉避吾亦不可違因於海中造八重蒼紫籬蹈船柁而避大己貴云我子既避吾亦當去如吾禦之國內諸神必當同禦今我奉避誰敢不須授所杖廣予於二神云吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者必當平安遂隱百不足之八十隈啓蒙

神書抄云八十隅天日隅宮者共謂出雲國杵築宮即是大社也又云出雲在乾方日之所入也夏至之日出於寅入於戌故以杵築爲日隅宮一說此宮在天上故云天日隅宮○神祇令註出雲大社者素戔嗚尊也故朝廷及社家此社祭素戔嗚尊矣而日本紀見之大社者天神爲大己貴所造供也素戔嗚尊行於根國故於中國無降迹後世祭大己貴故合祭素戔嗚尊者也○余案素戔嗚尊建出雲清地宮娶稻田姬生大己貴以手摩乳脚摩乳爲其宮首一則大社爲素戔嗚尊亦有所据歟以清地宮爲杵築宮亦復爲是已上神社考

○神傳系上ニ委シ

○攝社 熊野神宮 在意宇郡 仁壽元年九月乙酉加從三位實錄

天穗日神社 在能義郡

三穗社 在島根郡

○日御崎 同郡大社之西北二里許ニ在リ

祭神二座 上社 下社有リ

社上八束水神 八握髮尊者素戔嗚尊別稱也蓋八握髯生之緣矣名神記

○相殿神三座 田心姬 湍津姬 嚴島姬

是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上○今按中略歟

娶稻田姬遂到出雲之清地焉於此建宮乃相與

適合而生兒大己貴神因勅之云吾兒宮首者即脚摩

乳手摩乳也故賜號於二神云稻田宮主神已而素

戔嗚尊遂就於根國矣又云素戔嗚尊云韓鄉之島是

有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是

佳也乃拔鬚髯散之即成杉又拔散胸毛是成

檜尻毛成被眉毛是成櫛樟已而定其當用乃稱

之曰杉及櫛樟此兩樹者可爲浮寶檜可爲

瑞宮之材甲板可爲顯見蒼生與津葉戶將臥之

○神託 諸人の世の人のたすけとならん事をつねにねがひもしまなびもしあらん者をばわれつねに神力をはげまして日本のかんだからとせんと徒に世の人の國の産をついやさんをば必我かれをしてそむけてうしなはん 倭論語

○大山社 伯耆國大山大智明神者稱德天皇時有神託 因勅建社山下之砂夕昇山朝下山其前岡有

松枝必指神前云 神社考

○伯耆國に大山といふ所に大智の明神と申神おはします利益のあらたなる事にあしたの日の山のはしに出るがごとくに侍り御本地は地藏并にておはしますとぞむかし俊方といひける弓取野に出て鹿を獵けるほどに例よりも鹿おほくて皆おもひの外にゐとゝめにけり扱此しかどもをとらんとすれば吾持佛堂に千體の地藏をすへ奉りつる五寸の尊像に矢をゐ立て鹿とみつるは地藏にぞおはしける其時俊方あさましく悲しくおぼえて地藏にとりつき奉りてなきおめきけれどもさらに甲斐なしやがて手づからもとより切て我家を堂につくりてながく殺生をとどまり侍りにき去程に稱德天皇の御時社に

いはひ奉れといふ託宣侍りてやがて堂を社になして大智明神とぞ申侍る利益あらたなれば彼所の砂たにもゆふべにはさかのぼりてあしたにくだりて參下向の相をしめす彼岡の松は明神の御方にむかひてみななびきける歸依のすがたをあらはし侍るとかや心なき草木砂までも歸依し奉るわざげにありがたくぞ侍る此地藏并の御事は昔廣目女と申侍りし時母戸羅善現のために堅固の大願をおこしおゝくの宿願を立て修しあがりましゝて今等覺無垢の菩薩とは成給へり 下略 撰集抄

出雲

所_三以名_二出雲_一者八東水臣津野命詔_三八雲立出雲_一之故云_二出雲_一風土記 私八東水津野命ハ素戔嗚尊別名也

○大社 又杵筑_三出雲郡_二有リ

出雲國大社素戔嗚尊也 神祇令註

社家亦隨焉雖_レ然以_二根本_一推之則天祖親以_二日隅

宮_一所_レ附_二與于大己貴命_一者也 當代社家尤以_二大己貴命_一座_二爲_二垂跡_一而無_二素戔嗚

之_一按神紀所_レ載云天津彦々火瓊々杵尊爲_二葦原中

國之主也經津主神武甕槌神到_二出雲國五十田狹之

ヌレバ島子ガ形タチマチ若カリシ粧ヲ引更白髪ノ
翁トナリケリツキニ其所ニテミマカリヌ時ハ天長
二年ノ事ナリトナン 丹後風土記ノ心是同シ

但馬

○粟鹿社 朝來郡ニ有リ 祭神 上中下三社

上社火々出見尊 中社籠神 下社豐玉姬神 一宮記

伊弉諾伊弉冊相生之兒大日靈貴月讀素戔嗚合三神
也和銅元年戊申八月十三日筆取神部八島勘註言
上 神名帳註

又說云以ニ出石ニ爲ニ一宮云々

御位 貞觀十六年三月十四日正五位上 國史

神詠 倭論語

雲はれて嵐に松のひひきこそ

顯れ出し神の心よ

○出石社 同國府出石ニ有リ 祭神 古事記ニミエダリ

○應神天皇 御宇多遲摩比多訶婆ニ其姪由良度美ニ

生ニ子葛城高額姫命ニ故其天日矛持來物者玉津寶而
珠二顆又振浪比禮切浪比禮振風比禮切風比禮又奧

津鏡邊津鏡并八種也 此者伊豆志古事記
八前大神也

祭禮 九月九日

但馬國伊津師宮と云社にてなのりそといふくさ
を
新給遺物名部
千早振出石の宮の神の駒
人なのりそやたゝりもそする 重之

因幡

○宇陪社 法美郡ニ有リ祭神 武内宿禰也 一宮記

神名帳註云風土記云仁德帝治五十五年春三月御歲
三百六十餘歲當國御下向於龜金ニ双履殘御隱所不
レ知云々然則以ニ上件年月日時ニ爲ニ垂跡之始ニ乎 神名
帳註

○神託 もろ人の心は神のみあらかなれば直きと
きは神なり慈悲の心ふかければ即佛也神佛一如の
身を思ふべし 倭論語

伯耆

手摩乳足摩乳娘稻田姫八頭之蛇欲レ吞之故
遁ニ入山中ニ于レ時母遲來姫云母來云々故號ニ

母來國ニ後故爲ニ伯耆ニ

○倭文社 川村郡ニ有リ 祭神一座

下照姫神 大己貴命女 一宮記

傳系上ニ見ユ 鎮座年記未レ考

サシヌ女ノ云君シバラク目ヲフサギ玉ヘトイヒケレバ教ノ如ク目ヲフサギシバラクシテ開ケヨトイフ開テ見レバ在_レ見エザリシ島ニツキタリヤガテ船サシヨセ二人手ヲ取リテアガリヌレバ云フバカリナキ宮殿アリ玉ヲカザリ金ヲチリバメ本草鳥獸ニ至ルマデヨノツネメナレヌ風情更ニ心コトバノ及_レズ處ニアラズ内ヨリアマタ出テ龜姫歸リ玉ヘリトテ迎ヘケリナヲ内ニイリヌレバ女ノ父母姉妹イデムカヘリ左右ニ侍ル女モ花ヲアザムク姿イヅレ劣リハナシ父母ノカシヅキ限ナク人間ト仙堺ノ物語ツキヤラズ百味ノ珍物ヲソナエ玉盃左右ニメグレリ仙女カハル_レ出テ思ヒ_レノ歌舞ヲナス其曲感情ニシテ思ヒヲ忘ル、計也カクテ夜ニイリテ夜モイタク更ヌレバ玉床ニ珊瑚ノ枕ヲナラベ海老ノチギリ淺カラズ是ヨリ嶋子蓬萊ニトバマル事スデニ三年ニナレリ故郷ノ遠クヘタバルコトヲナツカシク思ヒ父母ヲ思フ心切也此由女ニ語ケレバ女モコトハリニ至極シケリサレ_レ年月ノムツビヤラシカタナク別_レ事ノ悲シサニ許モヤラズ亦トバメシ事モ叶ヒガタクアリシ契リハ夢現トモ分兼タバ

泪ニシヅム計ナリカクテ有ルベキヤウナクテ別モ今ニナリヌル比女一ツノ箱ヲ島子ニアタヘイカナル事アリトモ此蓋ヲアケ玉ヲ事ナカレサル故ノサフラウヅトテアタヘヌイザ、ラバトテモトノ船ニ乗セテモトノ海ニ出ヌ女此度モ又シバラク目ヲフサギ玉ヘト云フ程ニフサギツ、暫シテヒラキ見レバ古郷水江ノ浦ニツキ彼女ハ_レシソレヨリタトル_カ住_カコシ家路ニ歸ケレバ更ニ三年ノ昔ニモ似ズ萬更ハテ見シ人獨モナシ如何ナル事ト思ヒ人ニ問ケルハ此ハ水江浦ソ_レンジヤウ其_レニハ侍ラズヤ里人如何ニモサ云フ所也トサ侍ラバ水江浦島ガ家ハイヅクニ侍ルゾヤトイヘバ里人聞テソコハイカナル人ゾヤ遙昔ノ事ヲ問玉フゾヤ其浦島ガ子トヤランハ沖ニ出テ釣スルトテツキニ海ヨリ歸ラズト云傳ヘ侍ル今スデニ三百歳ノ昔トコソ聞ツレサル人ノユカリト聞ハ七世孫ニコソアメレトイヒケレバ島子オドロキ悲シム事限ナシ二度蓬萊ニカヘラマホシク思ヘドモ更ニ不叶心ヲサメン方ナシ彼別レシ時姫ノアタエタリシ箱ヲ今ハ形見ト詠ル計也此蓋アクル事ナカレト云シ詞ヲワスレテ蓋ヲアケ

國欲止誨覺給支

據ニ此書ニ則雄畧已前以ニ與佐宮ニ爲ニ本宮ニ今以ニ

山田原可レ爲ニ神在之神地ニ矣 啓蒙

千載旅 ○與謝 海 浦 湊 蟹等歌によめり

思ふことなくてや見ましよさの海の 赤染衛門

新勅撰戀 天の橋立都なりせは

うかりけるよさの浦波かけてのみ 殷富門院大夫

新後拾 思ふにぬるゝ袖をみせはや

松たててるよさの湊の夕涼み

後京極

今もふかなん沖つゑほ風

○網野社 竹野郡阿佐茂川東網野村ニ有リ

祭ル處 水江浦嶋子也

雄畧二十二年秋七月丹波國餘謝郡管川人水江浦嶋

子乗レ舟而釣遂得ニ大龜ニ便化ニ爲女ニ於是浦嶋子感

以爲レ婦相遂到ニ蓬萊山ニ歷ニ觀仙衆ニ 日本紀

●丹後國與謝郡日量里筒川村トイフ所ニ筒川嶋子

トイフ者アリ常ニ釣ヲナンシケリ其人妻タヲヤカ

ニシテ誠ニ止事ナキ美男ナリ或時釣センタメニ獨

小船ニ棹サシテ沖ニ出ケリ釣シアリケルマヽ三

日三夜沖ニタゞヨヒケレトモ魚ノ一ツヲモ得ズ本

意ナキワザニ思フ處ニ五色ノ龜ヲ釣エヌ嶋子不思

儀ヲナシテ船ニイレヲキケリ其夜モ歸ラデ船ニ寐

ニケリ夜半バカリナルニサモアテヤカナル女一人

イヅクヨリ來ルトモ知ズ船ニ乗テアリ嶋子目サメ

テオドロキ女ニ問ケルハカク人家ハルカナル海面

ニ何トシテカハ來玉フゾ如何ナル人ヅヤト云ヒケ

レバ女面ハユキ物カラ打エミテイヒケルハ御身獨

此海上ニマシマセバ餘所ニ見ルニ忍ビエズ風雲ニ

乗ジテ來リサブラウトイヘリ嶋子又問フ風雲ニ乘

ジテハ何處ヨリ來リ玉フゾヤ女云我ハ天上仙家ノ

者ナリ君ウタガヒノ心ヲナシ玉ハズ打トケテカタ

ラヒ玉ヘトイヘリ嶋子思フヤウサテハ神女ナリト

コハンモ如何ナル事ゾトオソロシサカギリナシ女

ノ云我心更ニアサハカナル思ニアラズタトヘバ天

地ニ比シ日月ハキハマルモ更ル心ニ侍ラズ何ナレ

バ君ハ我ニ心ヲヘダテ玉フゾヤ嶋子云フベキコト

ノ葉ナクテ其儀ニテ侍ラバイカデソムキ侍ラント

イヘリ女イトヨウ懸想ジテ其御心ニテマシマサバ

イザヤワガスム蓬萊山ニ至リ侍ラン船ヲメグラシ

玉ヘトテ沖ノ方ヲ教ケレバ嶋子女ノ教ヘノ儘ニ棹

祭伊勢之末社者號酒殿神以能釀酒之故也移祭大膳職者號御食津神以能植稻之故也共豐宇氣姬神也延喜式

○與謝郡比治山頂有井其名云眞井今既成沼昔天女八人降來此井而浴此里有老夫婦其名云和奈佐老夫和奈佐老婦竊至井畔窺見之而取藏一羽衣天女等見老夫而驚愧著衣皆飛登一女無衣而不能飛行即隱身井水於是老夫謂天女云吾夫婦無兒請天女爲吾娘天女對云妾獨無衣留人間何敢不從老夫之心乎請還許妾衣老夫云天女奚存欺心哉天女云天道無僞以信爲本何多疑心而不許老夫耻云多疑少信率土之常也是以不肯許而已天女之言誠然遂許與其衣而相携歸家共栖十餘年天女能釀酒一飲除百病酒價滿庾又能植五穀土形肥稻穗美仍名此處云土形里今云比治老夫家倍潤富而後俄娼疾天女老夫謂天女云汝本天上之產非率土之種暫借住吾家而已宜早去天女仰慟哭俯哀吟謂老夫云妾初非求爲老夫娘唯任老夫之所願妾心無異老夫奚發厭惡之心哉老夫增瞋不聽天女流涕出

門謂里人云妾久淪落人間而今不得升天上率土無親故不知所由妾其爲如奈哉拭淚嗟歎歌云阿麻能波良布理佐兼美禮婆加須美多智伊幣治麻土比天山久幣志良受母遂去而至一村乃謂村人云吾心如荒鹽仍云荒鹽村又至一村據槻木下而哭故云哭木村後到竹野郡船木里謂里人云吾心奈具志久古語事平善者云奈具志竟留居此處因建社祭之所謂竹野郡奈具社坐豐宇氣姬神也丹後風土記

● 埴山姬神 稚産靈神

豐宇氣比女神

○伊弉冊尊爲軻遇突智所焦而終矣其終之間臥生土神埴山姬及水神罔象女神

○與謝社 與佐郡川森有リ 祭神一座

豐受太神 今內宮ヲ祠ハ近代之俗也

○世記云泊瀨朝倉宮大泊瀨稚武天皇卽位廿一年丁巳冬十月倭姬命夢覺給久皇太神吾二所耳不坐波御饌毛安不聞食丹波國與謝之小見比沼之魚井原坐道主子八乎止女乃齋奉御饌都神止由氣太神乎我坐

○輕野社 同郡宮傍村ニ有リ 祭神三座

里諺云輕野三座者菅原天神之御子也祠以爲神云或云輕野大臣也予未レ知ニ可否ニ所謂輕大臣者舊傳昔日輕大臣爲遣唐使時支那人飲ニ之不言藥身作ニ彩畫頭戴ニ燈臺而燃火即名レ之爲ニ燈臺鬼一其子參議春衡又爲ニ唐使ニ于レ時齊明天皇二年丙辰歲也追入ニ于支那帝殊貴重焉及ニ于夜一秉燭出ニ鬼燈一鬼灯遙見ニ春衡而知ニ我子一涕涕鳴咽噬指頭一血書云我元日本華京客汝是一家同姓人爲ニ子爲ニ爺前世契隔ニ山隔ニ海戀情辛經ニ年流ニ涕蓬蒿宿遂ニ日馳ニ思蘭菊親形破ニ他郷一作ニ灯鬼一爭歸ニ舊里一寄ニ斯身一又歌曰灯乃影耻敷身奈禮鈍子於思闇乃悲鴈鳧春衡見レ之以爲ニ我父一也遂求ニ灯鬼一歸ニ日本一之日沒ニ瓊州硫黃邊一各ニ其所ニ葬之地ニ云ニ鬼界一 啓蒙

丹後

和銅六年四月ニ丹波國ノ内五郡ヲ分チテ始

テ置レ之丹波ノ北ニ當レリ後ハ北ノ意也云々

○籠神社 與謝郡ニ有リ一名籠守 祭神 住吉同體也一

宮記

貞觀十三年六月八日從四位下 國史

○神託 益人の身を思へるがごとく神明をうやまひすべらみことをあがめ長を長として天の神のをしへをまもりおらば一身をはづかしむる事なかるべし 儀論語

○竹野社 竹野郡竹野村ニ有リ 祭神二座

垂跡同ニ于伊勢兩宮一 里民所謂齋宮是也盖有ニ齋官女子ニ之故也

○里諺所謂若天下凶徒欲ニ蜂起一則神殿鳴動而宮中神箭悉飛去入レ海或超ニ他邦一也於レ是當國刺史捧ニ兵器一遣ニ軍卒一晝夜警蹕不レ怠也或五日或三日之後以ニ神殿靜一爲ニ期集ニ飛箭一納ニ宮中ニ云故里人稱ニ天下治平神一又號ニ齋官者熊野郡市場村有ニ齋官之人一女生ニ女子一則飛箭必立ニ于屋上ニ也其子四五歳之時奉ニ當ニ宮呼爲ニ齋女一也于ニ山中深林之中一獨與ニ禽獸一同居敢無ニ畏怖一若及ニ長天癸至或交接之情生則大蛇出現虺々瞋レ眼及ニ是時一致ニ官還ニ郷里一已上啓蒙

○奈具社 今稱ニ天避社一 同郡丹波郷ニ有リ

祭神一座 宇賀乃咩命 伊勢酒殿同體 豐宇氣比女

神共同神別名也

丹後國竹野郡奈具神社者豐宇氣比女神也此神移

三穗津姬 高皇產靈尊子 栲幡千千姬命妹 大己貴命之妻 系圖上ニ見エヌ

○高皇產靈尊勅ニ大物主神ニ汝若以ニ國神ニ爲妻吾猶謂ニ汝有ニ疏心ニ故今以ニ吾女ニ穗津姬配ニ汝爲妻宜_下領ニ八十萬神ニ永爲ニ皇孫ニ奉_上護乃使ニ還降_一 日本紀

天津彥根命

正哉吾勝々速日天忍穗見尊

天照太神

天穗日命

天津彥根命

含ニ嬰_レ頭之瓊ニ著ニ於左臂中ニ化ニ生天津彥根命ニ 日本紀

倭論語
神託 和歌

いむといふけかれを云へる日本の

神の教を知る人そ神

○神野社 同郡ニ有リ 祭神一座 伊賀古夜姬命

鴨御祖神母

賀茂健角命婦伊賀古彌日賣命也玉依彥玉依姬母也玉依姬鴨御祖神也玉依彥可茂縣主等遠祖也神名 帳註

○大原社 同郡ニ有リ 祭神一座 今爲ニ三座ニ 伊弉

並尊 一座

社家説云當宮者伊勢太神宮母神伊弉冊尊之鎮座也今以ニ伊弉諾天照太神ニ爲ニ三座ニ春秋兩度祭奠者遠近國郡爲_レ群也其祭儀不_レ事ニ饗醴_一以ニ桑梓ニ爲_レ禮而示_ニ謙道於天下ニ章乎 啓蒙

○篠村社 同郡篠村ニ有リ 祭神 八幡 垂跡同ニ

石清水

人皇七十一代後三條院延久三辛亥年依ニ勅定ニ奉ニ勸請ニ曩祖兼延奉ニ行之_一 二十二社註式

○水雄社 同郡愛宕山ノ傍ニ有リ 祭神 清和天皇

文德天皇ノ太子御諱ハ惟仁母ハ染殿后藤原明子太政大臣良房ノ女也 生レテ九月ニシテ太子ニ立ツ

天安二年八月文德崩ズ十一月太子九歲ニテ即位シ玉フ幼少ニシテ帝位ニ即事是天皇ヲ始トス貞觀六

年正月元日天皇元服シ玉フ御歲十五同十八年十一月天皇位ヲ第一ノ皇子貞明親王ニ讓ル十二月清和

ニ太上天皇ノ尊號ヲ奉ル後ニ水尾山ニ入玉フニ依

テ水尾帝トモ申ス御子陽成院ノ元慶四年三月天皇山城大和攝津ノ名山佛閣ヲ見巡テ丹波水尾寺エ入

玉フ意ヲ佛法ニカタブケテ頭陀ノ行ヲシ玉フ同十

二月崩ズ歲三十一 王代一覽

御位 貞觀元年正月廿七日從一位 神階記

越中

○氣多社 或高瀬 礪浪郡ニ有リ 祭神 同上

大己貴命也 一宮記 天活玉命也神名帳註 延喜八年

八月十六日乙卯以ニ越中國氣多大神一預ニ官幣按

據ニ此說一則能州氣多神爲ニ天活玉命一必也 啓蒙

御位 延曆三年三月三日丁亥氣多神正三位 國史

越後

○伊夜彥社 蒲原郡ニ有リ 祭神 天香山命也

饒速日命子 一宮記

承和十年六月○按可作天長十年七月 越後國蒲原郡伊夜彥神預ニ

之名神一以下彼郡每有旱疫致雨救病也續日本後記

佐渡

○渡津社 羽茂郡ニ有リ 祭神 五十猛神 大己貴命

兄 一宮記

欽明帝五年十二月越國言於ニ左度島北御名部之碕

岸有ニ肅慎人ニ乘ニ一船舶ニ而淹留春夏捕魚充食彼

嶋人言非レ人也亦謂ニ鬼魅ニ不ニ敢近ニ之嶋東禹武邑

人拾ニ椎子ニ爲ニ欲ニ熟喫ニ著ニ灰上ニ炮ニ其皮甲ニ化成ニ

二人ニ飛ニ騰火上ニ一尺餘許經レ時相鬪邑人深以爲レ

異取置ニ於庭ニ亦如レ前相鬪不レ已有レ人占云是邑人必爲ニ魅鬼所ニ迷惑不レ久如レ言被ニ抄掠於レ是肅慎人移ニ就瀬河浦ニ々神嚴忌人不ニ敢近ニ渴飲ニ其水ニ死者且半紀日本素戔嗚尊帥ニ其子五十猛神降ニ到於新羅國ニ初五十猛神天降之時多將ニ樹種ニ而下然不殖ニ韓地ニ盡ニ以持歸遂始自ニ筑紫ニ凡大八洲國之内莫不播殖而成ニ青山ニ焉所以稱ニ五十猛命ニ爲ニ有功之神一 同上

系圖上ニ見エタリ

山陰道

陰ハ北也北山ニツイテ西北ニ行國也故ニ山陰

ト云フ也成務天皇ノ御宇始テ國縣ヲ分チ邑里

ヲ定メ玉フ時山陰ヲ背面ト云ヘリ山陰ノ名此

ニ始ル云々

丹波

○出雲社 桑田郡ニ有リ 祭神 兩記 三穗津姬

一宮記 天津彥根命也 坐ニ丹波ニ出毛神天津彥根

命也日吉樹下神系圖

元明帝和銅四年辛亥始出現 改曆雜事

御位 貞觀十四年十一月廿九日從四位上 國史

十九萬一千四百七十六歲上ハ上皇ヲ守下ハ下民ヲ撫吾本地ノ眞身ハ在山頂往テ可レ禮ト云テ化女卽隱玉ヒヌ和尚靈感ヲ仰デ白山ノ絶頂ニ攀登池ノ邊ニ居テ三密印觀ヲ凝シ五相身心ヲ調テ祈念加持シ玉ヒケレバ池中ヨリ九頭龍ノ身ヲ現ズ和尚責テ云此ハ是方便示現ノ形全ク本地ノ眞身ニ非ジトテ咒遍功ヲ増ケレバ十一面觀音自在尊慈悲ノ玉體ヲ顯シ玉ヘリ妙相遮眼光明身ヲカバヤカセリ和尚悲喜胸ニ滿テ感涙面ヲ洗フ歸命頂禮シ奉テ願ハ大聖本地垂跡哀ヲ垂テ像末ノ衆生ヲ利益シ玉ヘト被レ申ケレバ爾時ニ觀世音金冠ヲ動シ慈眼ヲ瞬シ玉テ妙體速ニ隱レ玉フ又和尚左ノ峯ニ登玉ヘバ一宰官人ニ逢リ手ニ金ノ箭ヲ把リ肩ニ錄ノ弓ヲ懸タリ咲テ合テ語テ云我ハ是妙理大芥ノ神務輔佐ノ眞首名ハ小白山別山大行事ト云當レ知聖觀世音ノ化身也ト云テ隱レヌ又和尚右ノ峯ニ登玉ヘバ一ノ老翁アリ語テ云我ハ是妙理大芥ノ神務ノ輔弼也名ハ大己貴ト云フ蓋又西利ノ教主阿彌陀也ト云テカクレ玉ヒヌ是ヲ白山三所權現ト申ナリ峻嶺高々トシテ切利ノ雲モ手ニトルベシ幽谷深々トシテ風際ノ底モ足ニ

蹈ツベシ効驗一天ニキコエ利益四海ニ普シ 盛衰記
○神託 益人よたしかにたもて天地の間に偽まがれるものゝ入べき所なし天より地をやしなひ地よりは心なくてうくるぞなす事あればなす事おこる也それ吾國は三界の中にすぐれたる所也かるがゆへに諸の神明もろゝの清き人等の魂をさる事なしあしかる事をしてねの國におち入事なかれ
倭論語

白山和歌に讀り

後撰冬 白山に雪降ぬれば跡絶て

讀人不知

新千載神祇

今は越路へ人も通はず

新千載神祇

わきて猶たのむ心も深き哉

前大僧正道玄

新拾遺同

跡垂初し雪のしら山

千早振雪の白山わきて猶

讀人不知

ふかき頼は神を知るらん

能登

能等養老二年割ニ越前國四郡ニ置レ之能等郡

名也舊事紀

○氣多社

羽咋郡ニ有リ

祭神

兩説

大己貴命也

一宮記

天活玉命也

下部兼
熊記

ト云フ其子ヲ彥主人王ト云フ是繼體ノ父也ト云々
 年久ク越前ニ住玉フ武烈崩ジテ仁德ノ王孫タエケ
 レバ大伴金村大連物部麿鹿火大連巨勢男人大臣等
 繼體ヲ迎エ奉ル繼體五度マデ辭シ玉ヘ凡金村シキ
 リニス、メ申ニヨリテ即位シ玉フ時ニ歲五十八都
 ラ山城筒城ニ遷シ後又同乙訓ニ遷ス後又大和磐余
 玉穗宮ニ遷シ玉フ在位二十五年ニシテ崩ズ歲八十
 二或ハ在位二十八年トモイヘリ 王代一覽
 ○天皇壯大愛レ士禮賢意豁如小泊瀨天皇崩而無ニ
 繼嗣ニ元年正月辛酉朔甲子大伴金村大連更議云男
 大迹王性慈仁孝順可承天緒 日本紀
 ○二十五年二月崩冬葬ニ藍野陵越前國足羽明神是
 也 曆年史

加賀

嵯峨天皇弘仁十年三月日割ニ越前國三郡ニ
 爲ニ加賀國ニ加賀郡名也云々

○白山社 石川郡ニ有リ 祭神

伊奘並尊 上社ハ菊理姫 一宮記 此姫ハ伊奘諾

伊奘冊ノ子也 日本紀ニ有リ畧ス

○靈龜二年丙辰顯レ形云我當山地主伊奘冊垂跡也

又左峯老翁現云吾白山輔佐也稱ニ小白山又右峯老
 翁現云吾白山獨也即大己貴垂跡也 改曆記

余案神書鈔以ニ菊理媛一爲ニ加賀白山權現ニ雖然

其顯ニ子神融ニ時自名ニ伊奘諾ニ則世人遂從ニ其義ニ

今見ニ延喜式神名帳載ニ加賀國石川郡白山比咩神

社則又爲ニ菊理媛歟並書以傳レ疑云 神社考

御位 貞觀元年正月廿七日正三位 神階

○傳記云白山妙理權現者觀音菩薩之垂迹自在吉祥

之化現也小白山大行事者妙理菩薩之輔而觀音之化

也大己貴者妙理菩薩之弼而西刹教主阿彌陀也號ニ

之白山三所權現 佐羅早松大明神本地不動明王也

白山七社之中中宮權現者國常立尊也 金劔明神者本地俱

梨伽羅不動也此妙理權現第一王子也弘仁十四年

立ニ此宮 神社考

○抑白山妙理權現ト申ハ昔越前國麻生津ニ三神ノ

安角ガ二男越大德神融禪師ト云人マシノキ久修

練行年ツモリ難行精進日ニ新也キ元正天皇ノ御宇

養老元年ニ和尚當國大野郡伊野原ニ遊止シ玉ヒケ

ルニ一人ノ貴女化現シテ云日本秋津島ハ本是神國

也我天神最初ノ國常立尊ヨリ跡ヲ降シテ以來百七

諸社一覽第七

北陸道

北方ノ陸ニ就テ行國ナル故北陸道ト云フ也景行天皇二十五年七月ニ武内宿禰ヲツカハシテ北陸及東方ノ諸國ノ地形ヲ見セシメ玉フ云々

若狹

昔此國有ニ夫婦ニ共長生人不レ知其年數容貌若而如ニ少年ニ後爲レ神今一宮神是也因レ茲有ニ若狹之名風土記抄

○遠敷社 遠敷郡ニ有リ 祭神 彥火々出見尊 上社

豐玉社下社 一宮記

○社記云人皇四十五代元正天皇御宇靈龜元年乙卯九月十日當國遠敷郡西鄉內靈河之源白石上始垂跡神名帳註

按豐玉姬ハ海神ノ女火々出見尊妻也日本紀ニ見エタリ

○彥火々出見尊因レ娶ニ海神女豐玉姬ニ仍畱ニ住海宮ニ已經ニ三年ニ彼處雖ニ復安樂ニ猶有ニ憶レ郷之情ニ

已下略之 日本紀

○神詠

皆人の直きこゝろぞ其まゝに神の神にて神の神なり 此神詠は宇多帝の御子敦實親王に夢中の御つげなり 若狹彥大明神 倭論語

越前

越國ハ越前、加賀、能登、越中、越後也和歌ニ越路トヨメリ

○氣比社

或筭飯

敦賀郡ニ有リ

祭神 仲哀天皇也

一宮記 ○氣比神宮者宇佐同體也、八幡者應神天皇之垂跡氣比明神仲哀天皇之鎮座也 風土記

○御位 貞觀元年正月廿七日從一位

神階記 啓蒙

○神託 益人よ一念のおこらぬかたにあゆみをはこび常にたのしめばはるかに遠しといひし天の心

によく叶ひ吾神明はつねに友とせる也思ふ事なかれ 倭論語

○足羽社 足羽郡ニ有リ 祭神一座

繼體天皇也 應神天皇五世ノ孫ナリ應神ノ御子ヲ

二派皇子ト云フ其子ヲ太郎子ト云其子ヲ彥主人王トイフ是繼體ノ父也或說ニハ應神ノ御子ヲ私斐王

諸社一覽第七目錄

出雲	伯耆	因播	但馬	丹後	丹波	佐渡	越後	越中	能登	加賀	越前	若狹
土師	大社	倭文	粟鹿	籠	水尾	渡津	伊夜	氣多	氣多	白山	氣比	遠敷
	日崎	大山	出石	竹野	輕野	神野					足羽	
	佐陀			奈具		大原						
	手間			與謝		篠村						

石見	隱岐	播磨	美作
物部	山良	伊和	中山
	離火	廣峯	二宮
	後鳥羽	惣社	勅使宮
		荒田	大隅宮
		岩屋	白神宮
		靜窟	
		曾禰	

命也 一宮記 傳系上ニミエタリ 鎮座年記未考

此外當國 伊達明神 鹽釜明神

笠嶋道祖神等社有リ追而可考

出羽

和銅五年始割ニ陸奥二郡ニ置之上古此地貢ニ

鷲鷹羽ニ故云ニ出羽云々

○大物忌社 飽海郡ニ有リ 祭神倉稻魂神也 一宮記

傳上ニ有リ

續日本後紀云出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下餘如故兼充ニ神封二戸一詔云天皇我詔旨爾坐大物忌大神爾申賜波久須皇朝爾緣有ニ物怪一夭ト詢爾大神爲ニ崇賜倍利加之遣唐使第二船人等廻來申久去年八月爾南賊境爾漂落氏相戰時彼衆我寡氏力甚不敵奈利儻而克敵留波依有ニ神助一止申今依ニ此事一氏臆量爾去年出羽國言上太留大神乃於ニ雲裏一氏十日聞作ニ戰聲一後爾兵石零利止申世利之月日與ニ彼南海戰日一正是符契世利大神乃威稜令ニ遠被一太留事乎且奉ニ驚異一且奉ニ歡喜一故以ニ從四位爵一奉授兩戸之封奉充其久止申云々

○御位 貞觀十五年四月五日從三位勳五等大物忌

神正三位 國史 已上啓蒙

○神託 世の人のたつときとなくいやしきとなく思ひをつくすは有物のたから也天の神のたからをねがひて直きにまさるたからは三界のうちにはなき事をするべしもとむるにもあらずねがへるにもあらずして其心に有ぬる事を思ひしるべし 倭論語

已上東山道畢

諸社一覽第六終

當國一良材多出也駄負_レ木行_二大津_一如_レ飛也
號_二飛駄_一 風土記

○水無社 大野郡ニ有リ 祭神大己貴命兒御歲神也

一宮記 ○大己貴命女高照光姬命母高降姬大和國
葛上郡御歲之神社同_レ之 神名帳註

○御位 貞觀十五年四月五日從四位上 國史

信濃

○諏訪社 諏訪郡ニ有リ南方刀美社トモ 祭神 健

南方命 大己貴命一男也又健御名刀神トモ傳系前
ニ見ユ

○天孫降臨時健御名方命逆_レ命不_レ順於_レ是經津主
神使_下岐神逐_上之健御名方命逃至_二信濃諏訪郡_一請
降云乞以_二諏訪郡_一爲_二大己貴之讓_一以爲_二我有_一然
則不_レ逆_二天孫之命_一經津主神告_二天孫_一而許與焉是
今諏訪大明神也 舊事紀

○戸隱社 同國ニ有リ 祭神 手力雄神

○日神入_二天石窟_一時手力雄神立_二磐戶之側_一日神
以_二御手_一細_二開磐戶_一窺之時手力雄神則奉_二承御手_一
引而奉出 日本紀 ○神書抄云伊勢內宮相殿左脇祭_二
此神_一々々者思兼神之子也戸隱明神是也○或說云

多力雄命取_二岩戶_一抛_レ空落在_二信州戸隱_一故云_レ爾
已上神社考同之

上野

上毛野下毛野者兩國中間有_二二野_一云_二佐野
笠懸野_一其野中有_二一河_一號_二渡瀨_一又有_レ川
云_二佐野中川_一以_二渡瀨_一爲_二兩國境_一川西云_二
上毛野_一東云_二下毛野_一 風土記抄

○拔鉞社 甘樂郡ニ有リ祭神經津主命也 一宮記傳系
上ニ有リ 鎮坐年記未_レ考

下野

○二荒山社 河内郡ニ有リ 祭神 事代主神 一宮記
傳系上ニ有リ 鎮坐年記未_レ考

御位 貞觀十一年二月廿八日丙辰從二位勳四等二
荒山神加_二正二位_一 國史

○神託 我人の吾をたのまんにその事のしるしな
しとてうらむるわざなかるべし一稱一禮むなしか
らずみさはをくだ_レしくなす事なかるべし時成
べし_レ 倭論語

陸奥

○都々古和介社 白河郡ニ有リ 祭神 味耜託彥根

王法亦衰語已形隱珍歸叡山至山王院時山王明神現形云傳來經書宜藏此所新羅明神又出云此地來世必有喧爭不可置也南行數里是爲勝處珍乃與新羅山王二神及二比丘到滋賀郡園城寺寺僧教待說寺事既而山王廻叡阜新羅明神語珍云我ト居寺之北野時百千眷屬倏來圍繞唯珍獨見已下略之元亨釋書文

案卜部兼邦說新羅明神ハ素戔嗚ノ化現也ト説

左ニ記ス

ことのはもいかにと通ふそしもりにやとりをか
りし程の衰さいふ心は此神地獄えおひやられて其
御玉新羅國に至りてそしもりといふ者に宿をかり
給ふ其時の出立みのかさをきて雨風にあひて淺ま
しき御姿成し事也此神の御魂うかれさせ給ひ智證
大師入唐の次新羅國に至給ふ時翁のすがたにてあ
らはれ給ひ大師にむかひて我佛法應護の神也汝が
佛法行せん所え至りて守らんとて同御船にめして
御かへりあり兼邦和歌自注

○神託 すべての人こゝろ直く正しき其身には鬼神もこれをかたおけず水火もおかしえす金石もこ

れがためにしたがりときやいばもきるゝ事なしおもふべし諸人よなをきこゝろのみさをかたぶくる事なかれ 倭論語

已上近江終

美濃

三野或云此國有大野三故云三野後改美濃 舊事紀

○南宮 不破郡ニ有リ 祭神 金山彦命 一宮記

○社家註記云南宮者金山彦命而火神非金神司離火南方故名南宮抑南宮者陽神而居南方文武兼備故國家崇貴敍正一位勳一等就中天武朱雀朝施功於我邦云々按一社相承如此乎然奉備天覽國史皆爲金山彦一且風土記金山彦神云々蒙啓

○神託 世の人よ心に知る事なふしてあやまてる事あらんには神明にむかひ身をなきがごとくにして我なき所にいたらん時其あやまち霜のてる日にあへるがごとく成べし 倭論語

飛驒

○攝社 十禪師社 南大神 高山社 隼人社 飛驒本美濃國內也然建近江大津宮時自

古今

君か代にあふ坂山の石清水

忠岑

こかくれたりと思ひける哉

詞花

引駒にかけをならへてあふ坂の

朝隆

關路よりこそ月は出けれ

逢坂の關明神と申はむかしの蟬丸の彼わらやの跡
うしなはずしてそこに神と成て住給ふ成べし今も
打過る便にみれば昔深草のみかどの御使にて和琴
ならひに良峯の宗貞とてかよひけんほどの事迄俣
にうかびていみじくこそ侍れ 無明抄

蟬丸は敦實親王の雜色也盲目にて琵琶をひきたる
が逢坂のほとりに庵を結びてゐたり博雅三位これ
に流泉啄木の曲を傳たり敦實のみこ管絃の道に達
し給へり蟬丸が琵琶は是を聞とりて彈じける也そ
れよりして盲目のびはひく事ははじめれり東齋隨筆
蟬丸を世人盲目といふはあやまれり後撰の詞書に
相坂の關にてゆきゝの人をみてと云々 盲目ならば
みる事不可有 愚案抄

延喜の皇子といふ事甚不可然古今に此人の歌い
れり延喜の帝は十三歳にて即位有延喜五年のころ
は廿二歳にておはしますこれにて知へし 玄旨抄

○赤山 ○赤山者支那山名山有^レ神世稱^ニ太山府君
神也 神社考

社西坂本ニ有リ

慈覺大師在^レ唐習^ニ清涼山引聲念佛一時神現^レ形與
覺約來^ニ于日本覺歸朝海波惡將^レ漂^ニ羅刹國赤山
明神着^ニ蓑笠持^ニ弓矢而護^レ覺或現^ニ不動形或爲^ニ
毘舍門姿故其舟無難相傳云此本地々藏井也釋書文
○神託 世々のためのし吳竹も手にしえらねば妙
なるこそもなし神明もきよく清かるこゝろをして
日に月をまし時をうつして身にし口にしねらざれ
ばあらはれたるしるしなしなをざりならず思ひお
もひていのらばなどかするしのなかるべけんや
倭論語

新羅社 園城寺北院ニ有リ

新羅明神者天安二年圓珍師泛^レ舶自^レ唐歸洋中忽
有^ニ老翁現^ニ船舷云我是新羅國之神也誓護^ニ持師
教法至^ニ慈氏下生託已不^レ見珍入^レ京將^ニ傳來教
籍藏^ニ尚書省時海上翁來云此所不^レ堪置^ニ經書
是日域中有^ニ一勝地我已先相^レ攸師聞^ニ官建^ニ院宇
度^ニ此典籍我鎮加護又佛法是王法之治具也佛法若

○田村麻呂者從三位左京大夫兼右衛士督苅田麻呂子正四位上犬養之孫身長五尺八寸胸厚一尺二寸目如蒼鷹鬚編金絲有レ事而重身則三百一斤欲輕則六十四斤隨心所欲怒目轉視則禽獸懼伏平居談笑則老少馴親 日本後紀 ○嵯峨天皇弘仁二年五月逝去五十七天皇甚ヲシミ玉ヘリ宇治郡栗栖村ニ葬ル勅ニ依テ甲冑劔鉾弓矢ヲ棺ノ内エ入テ王城ノ方エ東向ニ立テ土葬ス 王代一覽ノ心

○黑主社 志賀郡辛崎ノ邊ニアリ祭神 一座
大伴黑主之靈也

○志賀黑主者與多孫也與多者大友皇子之子而創造園城寺曾賜大友姓其都堵矣麻呂而後大友字改作大伴也黑主之在園城寺亦自與多而連綿至此 本朝通史

○秀郷社 栗太郡勢多郷大橋傍ニ有リ 祭神倭藤太秀郷ガ靈也相並一座 水府神云々 諺傳秀郷爲龍宮射三上之巨蛇殺云仍祠其靈于勢多歟 啓蒙 倭藤太秀郷者出自房前公々々子魚名々々子藤成々々子豐澤々々子村雄々々子乃秀郷也仕至武藏守平將門誅伐之日詔秀郷爲鎮守將軍賜采地

于東州 神社考

○關明神 志賀郡會坂ニアリ 祭神一座

蟬丸之靈也 ○相坂關明神者蟬丸也有草屋之跡深草天皇時良岑宗貞爲勅使來習和琴○遯史曰式部卿敦實親王之雜色也善彈琵琶結草庵于相坂隱栖焉二位源博雅往訪之遂得流泉啄木之調按世俗以蟬丸爲醍醐帝皇子其說云帝貶菅右丞相於宰府其冤枉之憤令帝子喪明卽蟬丸也帝棄置之于王坂蟬丸善彈琵琶云々蟬丸之爲皇子未考或云彈琵琶之人非蟬丸云予謂當時有德之士屏迹於逢坂寓懷於和歌自晦其光者也彼信皇子之說者以四宮川原也帝王第四之宮所流離之地也仍以逢坂爲王坂與蟬丸相附說不可信之甚也 已上 啓蒙

逢坂 關 山 清水 駒迎等歌により

古今 音羽山をとに聞つゝあふ坂の 元方

關のこなたに年をふる哉

金葉

わきも子にあふ坂山の時鳥

明れば歸る空に鳴也

源定信

以ニト部兼藤一奉ノ再ニ興社壇ニ同四年八月十五日有ニ遷宮一 二十二社註式

○兵主社 野洲郡ニ有リ祭神一座 今所ノ傳七座也所ノ謂表ニ當宮七名ニ歟

大國玉命 大己貴命別名也傳系上ニ見エタリ

○大國玉命也人皇三十代欽明帝御宇鎮坐祕說曰天照太神也 神祇正宗

○貞觀十六年八月從三位 國史

按當社者大己貴命之鎮坐勿論歟祭祀之日以ニ干戈弓箭一乘ニ于七社神輿ニ而從者又表ニ軍旅之威儀ニ也 啓蒙

○小津社 同郡ニ有リ祭神三座 大宮二宮三宮是也玉津正一位小津社

神名帳註 宇賀魂也按社家註進大宮本緣同上二宮素戔烏 三宮大市姬也

按祭尊必用ニ午日一又稱ニ稻荷同體神ニ則玉津之二字蓋有レ據乎 啓蒙

○大寶社 栗太郡緒村ニ有リ 祭神一座

素戔烏尊 ○疫神也大寶年中降見之神故稱ニ大寶天王一其影向之老杉于ノ今存社家註進狀 啓蒙

○牛頭社 同郡下笠村ニ有リ 祭神三座 牛頭天王

素戔烏 后ノ宮稻田姬 八王子 五男三女 已上同ニ祇園一 中左 右

正一位牛頭天王ト號ス

○社記云當所栗太郡下笠村明神者真宗豐祖父帝御宇慶雲元年三月四日影向同四月現ニ平森大杉本ニ而宣爲ニ一郡東西守護神ニ矣百六代後奈良院御宇神志奮發萬民流浪也仍享祿三年庚子五月十七日再造ニ修神殿ニ而奉レ慰ニ神慮ニ同御宇天文九年御怒不レ靜而鄉民同日著レ席也里人喚ニ神樂岡神主正春者乞ニ鎮神ニ也正春齋戒入ニ神殿ニ令ニ神靈正座ニ密仰ニ帝意ニ奉レ授ニ正一位ニ也爾來號ニ正一位牛頭大明神ニ致ニ如在之禮奠ニ 全文略今摘要 啓蒙

○水尾社 高島郡水尾村ニ有リ 祭神二座

猿田彥命 天鈿女命也 水尾大明神ト號ス神傳上ニアリ

○彼郡內有大河一件河南水尾猿田彥命名ニ河內社ニ河北天鈿女命也兩社分ニ水尾川一勸請也 神名帳註 啓蒙

○田村社 甲賀郡土山驛之邊ニ有リ 祭神正一位田村大明神 田村丸ノ靈神也東夷征伐之功アルニ依テ此地ニ祀歟鎮座之年紀未ノ考 啓蒙同

鎮坐年紀未考

釋法勢叡山義眞之徒也承和八年過近州比良山下和邇村宿民家々々婦俄病狂言云師讀觀音普門品我欲聽之勢素持普門品然思狂病之言不足聞便云我無經本故不能也婦人云師臂囊見經在焉勢不得已出經讀之婦人合掌云我比良明神也勢云我聞神者皆有通又長壽昔釋迦文出世西天未審見知不婦人云我不住西印度然千數百年前諸天多西飛去豈迦文出世時乎元亨釋書

○立木社 草津驛札辻有リ 祭神 與春日社一同正一位立木神

社家者流曰當社垂跡與春日一同體神也于今以藤蔓爲神愛草

鎮坐年紀未分明 已上啓蒙

○筑摩社 坂田郡筑摩ニ有リ 祭神御食津神 傳註

上ニミエタリ

仁壽二年三月甲戌近江國筑摩神授從五位下 文德

實錄

按筑摩大膳職御厨之地也運送色目載在延喜式等故以當職所祭之神祠此地歟蓋此神依

掌稻食而里女爲婚則祭祀必戴金鍋奉神矣不幸於少壯之間爲婦則改嫁焉再嫁者二枚三嫁者用三枚 啓蒙

拾遺 筑摩江神沼野和歌に讀り

いつしかもつくまの祭はやせなん 讀人不知

難面人のなへの數みん

○法華峯社 蒲生郡八幡村ニアリ 祭神 八幡

同石清水

社記云人皇六十六代一條院御宇影向法花峯同御宇長德三年行放生會 啓蒙

○矢橋八幡 附山田八幡 栗太郡矢橋浦町末之東一町許ニ有リ 祭神三座 中ハ神功皇后左ハ住吉右

ハ高良鞭崎八幡ト號ス

○人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥二月十一日

依勅願詔大中臣清麻呂於近江國栗太郡矢橋

浦奉勸請聖母太神住吉高良三所正八幡宮一座

在山田鄉同日鎮座第八十二代後鳥羽院建久元年

十月二日源朝臣賴朝上洛之時於矢橋浦有神社

召浦人在馬上以鞭指之間浦人答云八幡宮也

賴朝下馬拜之依此有鞭崎之名同三年賴朝

竹生嶋にまうで侍れるときもみぢのかげの水
にうつりて侍ければ

拾遺集

大海に秋の山へをうつしては

法橋觀教

はたはり廣き錦とそみる

○むかし宇多御門の御比都良香といふいみじき博士侍りけり卯月の頃江州竹生嶋へ人々友なひつれて參けるはるかに山のいたいきに上りて御社へ至りぬ四方みえわたりて實面白き所也されば都良香三千世界眼前盡と作て詠せりけるに神殿おびたしくゆるぎて殊に大にけ高き御聲にて十二因縁心裏空といふ御句の人の耳にあざやかに聞え侍りける忝も侍る實高き御山のはれたる所なれば三千界は眼前につきぬといふもことはりに侍るそれに十二因縁は心のうちにむなく侍らんかへすいみじく侍る實も神ならずは誰かかゝる句をばつけ給はんとぞおぼえ侍るに小野篁は人皇の御意をよろこばしめて相公にいたり都良香は明神の感歎にあづかる能藝は實かたじけなくぞ侍る扱も都良香は十二因縁は心のうちにむなしといふ御詩を日に三度となへて後世のつとめにむかひけるにはた

して此心をさとりておほりをとりにけるもありが
たくたつとくぞ侍る 撰集抄

都良香雖_レ仕官_ニ心慕_ニ神仙_ニ一旦棄_ニ簪纓_ニ入_レ山修
鍊不_レ知_レ所_レ終後百餘歲或人見_ニ良香大峯山窟中_ニ
其顔色不_レ衰矣 神社考

平經正此嶋ニワタリ神明法樂ノ御タメニ一曲ヲ彈
ゼン仙童ノ琵琶トリ出シナンヤトノ玉ヘバ安キ御
事也トテ僧琵琶ヲイダキ經正ノ前ニ閣ク經正カキ
ヨセ玉ヒテ樂二ツ三ツ彈ジテ後ニ上玄石上ト云フ
祕曲ヲ彈ジ玉フ諸僧耳ヲ欽テ感涙袖ヲシボリケリ
天女納受ジ玉ヒテ社壇ノ上ヨリ白キ狐イデ來庭上
ニアソビテ經正ノ方ヲ守リケルコソ不思議ナレ經
正ハビハヲ閣テ神明ノ化現ト忝ク思ヒ玉ヒケレバ
所願成就疑ナシ和光利物ノ夏衣思ヒ立ケルウレシ
サヨ

千早振神ニ祈ノ叶ヘハヤ白クモ色ノアラハレニ
ケリトゾ詠ジ玉ヘリ 下畧 源平盛衰記

○白鬚社 比良明神同シ志賀郡境打下ニ在リ祭神一
座猿田彦神 傳上ニ見エタリ

○打嵐白鬚大明神者猿田彦命也 神祇正宗

匂ひをよするしかのうら風

○二宮

日吉の社に奉りける中に二宮を

慈圓

^{新古今}やはらくる影をふもとに曇なき

本の光は峯にすめとも

○聖眞子宮

聖眞子宮に讀て奉りける

權少僧都良仙

^{續古今}やはらくる光はへたてあらしかし

西の雲ゐの秋の夜の月

○客人宮

客人宮に奉りける

後京極

^同爰に又光をわけてやとす哉

こしの白根や雪のふる里

○十禪師社

^{續後拾}木の本に浮世をてらす光こそ

くらき道にも有明の月

同

○伊吹社 栗太郎伊吹里ニアリ 膽吹 五十葺 伊

^{新古今}服岐 いぶき 山峯等歌に讀り

今日も又かくやいふきのさしもくさ 和泉式部

さらは我のみもえや渡らん

祭神一座 八岐蛇所變日本武尊還_レ自_二東征_一到_二

於尾張_一聞_二近江膽吹山有_二荒神_一即徒行之山神化_二

大蛇_一當_レ道尊不_レ知_二主神化_一蛇之謂是必荒神之使

也既得_レ殺_二主神_一其使者豈足_レ求乎因跨_レ蛇猶行時

山道雲霧大起尊迷而失_レ路途痛_レ身如_レ醉偶得_レ泉而

醒因號_二其處_一云_二醒井_一^{日本紀}○神社考云素盞烏尊

在_二出雲國_一斬_二八岐蛇_一尾中有_二神劍_一所謂天村雲劍

也尊獻_二之于天照太神_一々々云是入_二天岩戸_一時隕_二於

近江國伊布貴山_一予惟日本武尊所_レ佩之劍乃素盞烏

尊所_レ獲_二于蛇尾_一者也故八岐蛇靈爲_レ求_二其舊物_一而

當_二于尊之行道_一也是以言_二膽吹神八岐所變_一也^{啓蒙}

貞觀元年正月廿七日從五位上^{神階記}

○竹生嶋社 淺井郡ニ有リ 祭神一座

宇賀御魂命 素盞烏子也 上ニ見ユ

改曆雜事云景行天皇治十五年淡海國湖中竹生島出

聖武帝天平三辛未末竹生島神顯形^{啓蒙}

竹生嶋者在_二江州湖中_一其巖石多_二水精寶珠_一本朝五

奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江州地折湖水始湛

駿州富士山忽出焉

景行天皇十年湖中竹生嶋初涌出云^{神社考}

ント思フ程ニ相知人稻荷ニコモリケレバソレト友
ナヒ七日詣ツ、又事ヲ二心ナク祈申スカクテ七日
ニ満ズル夜ノ夢ニ御戸ヲ押開テ簾裝束シ玉ヘル女
房氣高クメデタキ様ニテ出玉テ法師ノ胸ヲ引開二
寸バカリナル紙ノ切ヲ押付テ歸玉ヘリコレヲ見レ
バ千石ト云フ文字有リイミジキ神徳ヲ蒙リヌト思
ヒ居ル程ニ鳥居ノ方ヨリ目出度ゲナル人ノ多ク仕
人ニ圍繞セラレテ入玉フアヤシク誰カハカバカリ
ノ粧ナラント見ル程ニ宮殿ヨリ有ツル女房イソギ
出玉ヒテ何事ニワタラセ玉ヘルニカ最思ヒカゲズ
ト申玉フ客人ノ玉フヤウ若桓舜ト申法師望申ス事
ヤ侍ルト問玉ヘリ爾事ニ侍ル七日ノ間法施ヲナシ
念比ニ祈申ツレバ只今望申ツル事ハ叶侍ストノ玉
フ客人ノ玉フハ努々有ザル事也我ニモ年來ナゲキ
申侍リキ其ツトメ淺カラズ侍レバ玉ハラセンニハ
何事ヲモ與フベケレドモワザト聞入侍ラズ既ニ玉
ハラバ速ニ召返サセ玉ヘトアリ女房驚キ玉テ故侍
ケルヲモ知ラズ誤仕ヌ但其僧ハイマダ此ニ侍ル召
返ナントテ立ヨリノ玉テ胸ノ紙切ヲトリテ歸玉ヒ
ヌ僧思フヤウ此客人ハ疑ナク山王ニコソオハシマ

スメレ年來功ヲ入レ奉レリ我モトメタビ玉ハン事
コン難カラメ適外徳ヲカウブルヲサヘ妨玉フ事ッ
ラメシクテ泪ヲオサヘ居ケル程ニ女房サテモ如何
ナル故ニテワザトワタリ玉ヒテカク妨玉フゾト問
玉ヘリ客人ノ玉フヤウ此僧ハ順次ニ生死ヲイトフ
ベキ者ニテ侍ルヲ若豐ニシテ世ニ侍ラバ必餘執フ
カク成穢土ニ留ルベキ也コレニ依テミヅカラヨキ
様ナル事ヲバトカクシテ違エ往生ヲトゲサセント
構侍ル也トノ玉フト覺テ夢サメケリアハレニ忝覺
テ山ニ歸リヌ其後此望ヲタヤシテ偏ニ後世ヲツト
メツキニ往生セリ月藏房僧都トハ是也下略百因緣集

日吉の社和歌に讀り

我頼む日吉のかけはおく山の
法印慈圓

柴の戸迄もさゝさらめや

日吉の社に御幸の時讀せ給ひける

續拾遺

道あれと我世を神に契るとて
後嵯峨院

けふふみ初るしかの山越

○大宮

日吉の社に讀て奉りける歌の中に大宮を

續後撰
いにしへの鶴の林にちる花の
後京極

八王子 千手觀音 客人宮 十一面觀音

十禪師 地藏 三宮 普賢

中七社牛御子 大威徳 大行事 毘沙門

早尾 不動 氣比 聖觀音

下八王子 虚空藏 王子宮 文珠

聖女 如意輪 下七社小禪師 彌勒龍樹

惡王子 愛染明王 新行事 吉祥天女

岩瀧 辨才天 山末 摩利支天

劔宮 不動 大宮竈殿 大日

聖眞子竈殿 金剛界大日 二宮竈殿 日光月光

已上習合神
道之説

○日吉社與ニ松尾神ニ爲ニ同體ニ也後朱雀院長久四年
六月八日初備ニ二十二社之數ニ後三條院延久四年四
月二十三日初祭レ之後白河院永暦元年十月十六日
移ニ日吉神體於東山今熊野新宮一號云ニ新日吉ニ應保
二年四月三十日初祭レ之 公事根源

○昔一條院の御時上總守時重といふもの有千部の
法花經讀誦の願心中にふかゝりけれども身まづし
くして僧一人かたらふべきはからいなし思ひかね
て日吉の社にまうでて二心なく祈申たるに神感あ

りてはからざるに上總守になりけり任國の最前
の得分をもて千部の經をはじめてけり其夜の夢に
貴僧枕にきたりてのたまはく善哉く汝一乗の讀
誦をくはたつる事とてかんないをながしておはし
けり時重かく仰らるゝはたれ人にてわたらせ給ふ
と申しければ吾は一乗守護の十禪師なりとのたま
ひて歌をなん詠じ給ひけり

一乗のみのりをたもつ人のみそみ世の佛の師と
は成ぬる時重たつとく覺えて生死をばいかではな
れ候べきと申ければ

極樂の道のしるへはみをさらぬ心ひとつのなを
き也けりさてかへらせ給ひけるが立かへり給ひ
て

朝ゆふの人のうへをもみ聞らんむなしき空のけ
ふりとそなる無常を悟べきよしを示て去給ひけり

古今著
聞集

○中比ノ事ナルニ貧ナル山法師有り世路ノ不レ叶
事ヲ憂テ年來山王ニ詣ツ、泣々祈申ケレドモ更ニ
其驗ナシイト口惜覺テ宿業限アラバ不レ叶トモ示
玉ヘカシ不通ニ聞入玉ハズト怨メシク成テ如何セ

者琴御館以_二大賢木_一奏_二神幸之祝詞_一於_二唐崎_一如_二先盟_一恒世奇奉_二粟御料_一也出_二神輿_一而祭者桓武帝延曆十年又御舟祭始延文中洪水已後例也

○七十一代後三條院延久四年四月廿三日記云今日

比叡祭也自_二今年_一初被_レ立_二官幣_一二十二社註式○或云

六十四代圓融院貞元二年四月廿六日始被_レ遣_二上卿

辨外記史諸司等_一

○臨時祭 圓融院治十三年天元五年七月五日依_二

叡願_一被_レ遂行_一之 使侍從藤原朝臣栗田 ○第六

十六代一條院長德元年八月廿一日被_レ行之 使左

少將源朝臣_{理方}

○或說八十二代後鳥羽院建久三年二月十三日丙辰

後白川法皇依_二御不豫_一急御願被_レ行之 使正三位

行左近衛權中將藤原朝臣忠經 此已後絕

○行幸始 七十一代後三條院延久三年十月廿九日

始已上數說啓蒙

○日吉神社一座注云比叡神同 延喜式ノ心

○傳記云山王權現者磯城島金刺宮欽明即位元年自

天降_二子大和國磯城上郡_一而現_二大三輪神_一其後大

津宮天智即位元年現_二老翁形_一告云我是大比叡大明

神也地主權現者天照太神開_二天岩戶_一以_レ錄搜_二海中_一時有神當_二其鋒_一是開闢之初國常立尊降而爲_レ神以主_二豐葦原_一者也此時滋賀浦三津川見_二五色波_一所謂大比叡小比叡大宮二宮是也神社考

○釋行圓姓源氏通議大夫國舉之子也初圓已冠爲_二

進士_一名_二國輔_一隨_二父赴_一州有_二嬖妾_一留在_二都下_一國輔

繫戀央々一日潛歸問_レ女或云近聞其人病無_二看養_一

不_レ知已終不國輔尋求往_レ野其屍脹爛不_レ可_レ見也國

輔不_レ還家即入_二園城寺_一剃落遊_二智靜心譽之_一門_一

以_レ故精_二修學_一修_二如意輪觀自在供_一大悲尊現_レ身放

光常與_二山王明神_一清談明神云我名_二山王_一公委_レ之

乎表_二三諦即一_一也山字豎三畫者空假中也橫一畫是

即一也王字橫三畫者三諦也豎一畫又一也二字三畫

而有_二一貫之象_一故我立爲_レ號也一心三觀一念三千

亦復如_レ是是以我護_二持台教_一鎮_二覆國家_一我身外無

名名外無_レ身身而名即_レ名而身名外無_レ法法外

無_レ名名即_レ名而法即_レ法而名身與_二名法_一無_二二無_一三

是名_二一乘_一我名義也 元亨釋書

山王 本地藥師 大宮權現 釋迦

聖真子 阿彌陀 二宮 藥師

○早尾 素戔嗚尊 又說猿田彥命傳上ニ ○馬場頂上

鎮坐也諸人加護深重神之故坂口祭レ之鎮坐紀

○大行事 高皇產靈尊也 傳上ニミエヌ

昔日神入ニ磐戶ニ閑居之時以ニ此神之謀ニ而集ニ八百

萬神ニ奏ニ神樂ニ日神再御怒解同上

○聖女 下照姬也 傳如上

延喜年中祭レ之 同上

○新行事 瀛津姬也 ○天照太神與ニ素戔嗚尊ニ盟而所

生三女神之一也 同上

○牛尊 ○八王子右祭レ之此殿底有ニ靈石ニ尤口傳同上

○小禪師 彥火々出見尊 傳上ニミエタリ 地神第

四尊也同上

○惡王子 深祕 ○童子形ニテ出現同上

○岩瀧 蹈鞰姬命 淺井郡竹生嶋神同體也神武帝后

也同上 ○蹈鞰姬命事代主命子也大己貴之孫ナリ

●事代主神 天日方奇日方命

蹈鞰五十鈴姬命

五十鈴依姬命

○劔宮 素戔嗚尊變神也

童形出現也容嶺凶事退散神也 同上

○氣比 仲哀天皇也 ○從ニ越前國角鹿郡ニ影向也桓

武帝御宇勸ニ請之同上

○大竈 澳津彥命也 ○此即大歲神子也大歲者杵築

大神御孫也諸家竈神是也 同上神傳系上ニミエタリ

○竈殿 澳津姬神也 ○註同上 鎮坐紀

○所攝社

○若宮殿 在ニ和田町比睿辻ニ

國常立尊也 同上

○護因 在ニ王子宮邊ニ

二條院勅附也 同上

○女別當社 在ニ唐崎ニ唐崎社是也

大宮初顯之地口傳社也 同上

今按此外神社靈社所レ載之數七十座然摘ニ其要ニ

而記レ焉

○位記

●大宮 五十七代陽成院元慶四年正一位

●二宮 八十一代安德帝壽永二年正一位

●聖眞子 ●八王子 ●客人 ●十禪師 ●三宮已上五社

八十八代後深草院建長二年正一位

○祭 四月中申日 日吉鎮座諸祭儀式云卯月祭禮

宮 已上七社

大宮 大己貴命 傳上ニミエタリ

○人皇卅九代天智帝御宇白鳳二年三月三日琴御館奉_レ祭ニ山麓_レ其後御館乞_レ奉_レ拜_レ尊神御形_ニ于_レ時夜忽光耀如_レ日其中有_ニ大字_一更無_ニ異物_一依_レ之奉_レ稱_ニ大宮_一也 日吉鎮坐記

○二宮 國常立尊 神皇魂尊 傳上ニミエタリ

○此卽天地二義主神天地始其中出現之故名_ニ二宮_一二字此天字畧也天地陰陽兩義加護神者是也垂跡始自_ニ神代_一己來波母山降現也 日吉鎮坐記

天地初判始有_ニ俱生之神_一號_ニ國常立尊_一次國狹立尊又云高天原所生神名云_ニ天御中主尊_一次高皇產靈尊次神皇產靈尊 日本紀

○聖眞子 正哉吾勝尊 傳系上ニ見ユ聖者神也言於_ニ兩神眞心中_一出生故名_レ焉 鎮坐紀

○八王子 國狹立尊 ○天地之中生_ニ一物_一狀如_ニ葦牙_一便化爲_レ神號_ニ國常立尊_一次國狹槌尊 日本紀 ○八十萬神大祖元氣神也尤有_ニ口傳_一 鎮坐紀

○客人 伊弉冊尊 ○次有_レ神伊弉諾尊伊弉冊尊 日本紀

○十禪師 瓊々杵尊 ○天照太神之子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶_ニ高皇產靈尊_一之女栲幡千千姬_一生_ニ天津彥火瓊々杵尊_一 日本紀 ○十者天七地三之數禪讓也師國也言_ニ十善天子讓_レ國之義 鎮坐紀

○三宮 惶根尊 一說 天照太神三女 ○三女影向故名_ニ三宮_一 鎮坐紀 ○天神第六惶根尊是也 日大記

○所屬十四座 加_ニ上七坐_一稱_ニ二十一社_一

○下八王子宮 天御中主尊

祭禮七社外當社有_ニ神馬_一也東有_レ石名_ニ石船_一明神初降之地 鎮坐紀

天地初發之時大海中有_ニ一物_一浮形如_ニ葦牙_一其中神人化生名云_ニ天御中主神_一故號_ニ豐葦原中國_一又因以云_ニ豐受皇太神_一 鎮坐本紀 ○天地初發之時於_ニ高天原_一成神名_ニ天之御中主神_一 古事記

以_ニ國常立尊_一爲_ニ元始_一蓋同體異名也 日本紀

○王子宮 建御名方命 又御名刀命共 大己貴命子也 白_ニ信州諏訪郡_一鎮坐 鎮坐紀

大物主神娶_ニ高志河沼姬_一生_ニ一男_一建御名刀神 舊事紀 ○信濃諏訪神是也

類聚國史云貞觀十七年三月廿九日三上神從三位

或問當宮齋官食_ニ于陶器_ニ炊_ニ于瓦釜_ニ又忌_ニ革服

火奴之類_ニ稱_ニ天下第二之忌火_ニ也奈何云皆疾_ニ機

巧之智欲_ニ早計_ニ之故也蓋神貴_ニ乎淳朴_ニ賤_ニ機巧_ニ

且古人祭服多以_レ革造_ニ之本朝疾_ニ皮革之屬_ニ竊惟

古人用_レ之不_レ忘_ニ其本_ニ也朝人疾_ニ之避_ニ其流_ニ已

上啓蒙

○神託 常に天下の諸人に正しく直き心をしらし

めんと思ふものは神これをよろこびて其名を天下

にあらはしますさいはいは子孫にあまるたとへば

まがれるものゝ一旦人のよかる人有とも神明かれ

をうばひてつぎなかるべし 倭論語

○石部社 甲賀郡石部村ニ有リ 祭神二座

上社ハ吉姫大明神 町尻北二町許ニアリ

下社ハ正一位吉彦大明神 笥町頭折ノ南三町ニア

リ ●案倭姫世紀云而後倭姫命度坐時爾阿佐加瀉

爾多氣連等祖宇加乃彦之子吉志比女次吉彦二人參

相支云々爾吉姫地口御田并麻園進蓋此神歟古老諺

言上下二神有_ニ伊州兩宮緣_ニ 啓蒙

○苗鹿社 志賀郡坂本郷苗鹿村ニ有リ

祭神一座 苗鹿明神 式所謂那波加社は也○天太

玉命化_ニ老翁_ニ鹿負_レ稻導_レ之故名兼靈番神記 ○天智

帝七年營_レ社 神祇正宗 啓蒙

○櫻谷社 栗太郡去_ニ勢多之南_ニ二里許有

祭神一座 瀬織津姫命 式所謂佐久奈止社は也天

照太神荒魂也

○伊弉諾尊洗_ニ左眼_ニ因以生神云_ニ天照荒魂_ニ亦名_ニ

瀬織津比咩神_ニ阿波良波命傳

○仁壽元年六月丙子詔以_ニ近江國散久難度神_ニ列_ニ

明神_ニ文德實錄

鎮坐年紀不_ニ分明_ニ 已上啓蒙

○四宮 志賀郡大津之驛ニアリ 祭神四座

大日叡 小日叡 氣比 小禪師

○大日叡 大己貴命 日吉社記

○小日叡 國常立尊 同上

○氣比 仲哀天皇 同上

○小禪師 彦火々出見尊 同上

當社日吉禰殿也

○日吉 同郡坂本村ニ有リ 祭神七座

大宮 二宮 聖眞子 八王子 客人 十禪師 三

於日之少宮日本紀 ○神書抄曰日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也近江在良方一日之所初出也故曰日少宮

按神記云伊弉諾尊構幽宮于淡路之洲寂然長隱者矣故舊事紀亦載伊弉諾坐淡路之多賀神名帳亦云淡路津名郡伊弉諾神社蓋伊弉諾在於彼亦在於此也

或云以近江國爲良方自今山城王宮視之則然往日伊弉諾尊都於山城國乎不若未都于此則以近江國爲良方則似未可信云關國之初自有王畿之兆在山城洲其數遷都乎四方者時使然也 啓蒙

○別宮并攝社

山田社去本宮乾一里許

兒宮 去本宮坤半里土人稱與御前

荒神社 有本宮東掖

蛭子社 有本宮西掖

伊勢神宮 有本宮西

日向社 伊勢宮西 鑰取社二座也、有、町口南

已上其啓蒙

○神託 心あればつみあり心なければ罪なし有無の心は我このまずたいありのまゝなるもの人の心をもて玉の緒はゆたかにひろき心よりいつまでもつきし物をや倭論語

○彥根社 蒲生郡ニ有リ一云犬上郡共

祭神一座 活津彥根命

素戔嗚尊自右臂中化生活津彥根命日本紀

○樹下山門神系圖云天照太神與素戔嗚尊所誓生之活津彥根命者近江國彥根明神也 啓蒙

天照太神——正哉吾勝々速日天忍骨尊

天穗日命

天津彥根命

活津彥根命

○三上社 益須郡ニ有リ 祭神一座 天御影命

社記云伊弉諾之別稱也

○古事記云近淡海國之御上祝以伊都玖天之御影神云々兼右神祇正宗曰今多賀大明神本地伊弉諾尊也

人皇七代孝靈帝六年出現○社家相承所謂伊弉諾尊與天照太神之兩座也仍稱天御影日御影社

鼓うちて思惟佛道のするを猶きかばやと託宣侍て
さまぐの事なんと侍りしにこそ實に神もおはし
ましけるとは覺えし其中に我去ぬる神護慶雲に法
相をまもらんとて三笠山にうつりぬれど此所をも
すてす常々守るとぞ御託宣侍りし扱も汐のみつる
ときはおほくの鱗波にしたがひて御殿迄寄汐のひ
くときは遙に歸れば日に二度參下向に似たりされ
ば結縁むなしからで定て巨益にあづからんとあは
れに侍る又はるかに御社にむきのきて御社有率川
と申眷屬の御神におはします也天下をもらさずは
ごくまんとちかひ給へり鶴千里にとぶ猶地をはな
れず鷺雲へかけるいまだ天の外にあらざれば何の
鳥獸か利益にもるゝ事侍らん如此に覺えて我等を
すくはんかれをたすけんと思しける佛神多くまし
ませ共我等妄染の雲厚く心のはれぬ程に候神も利
益に所のましまさぬにて侍り 撰集抄

○洗磯前社 鹿島郡ニ有リ 神祭

少彥名命 文德實錄云齊衡三年十二月戊戌常陸國
上言鹿島郡大洗磯前有神新降初郡民有煮海爲
鹽者一夜半望海光耀屬天明日有兩怪石見在

水次ニ高各尺許體ニ於神造ニ非ニ人間石ニ鹽翁私怪レ之
去後日亦有ニ二十餘小石ニ在ニ向石左右ニ似レ若ニ侍
坐ニ彩色非ニ常或形ニ沙門ニ唯無ニ耳目ニ時神憑ニ人云
我是大奈母知少比古奈命也昔造ニ此國ニ訖去往ニ東
海ニ今爲ニ濟ニ民更亦來歸

○志津社 久慈郡ニ有リ 祭神一座

手力雄命 思兼命子也 傳系有レ上神紀所載太神
入窟之時有レ功信州戶隱神同垂跡也 啓蒙已上東
海道畢

東山道

就ニ東方山中ニ行道也

近江

昔云ニ淡海ニ後代改ニ近江ニ風土記

○建部社 栗太郡ニ有リ 祭神 大己貴命一宮記

○兼熙番神註云天明玉命也云々未レ知ニ是非ニ仍存
兩說ニ啓蒙 天武帝白鳳四年勸請神祇正宗

○貞觀九月七日十一日授ニ從四位下ニ國史

○多賀社 犬上郡ニ有リ 祭神一座

伊弉諾尊 額云多賀大社

伊弉諾尊功既至德亦大矣於レ是登レ天報命仍留ニ宅

日神煥速日神之子武甕槌神 同上 ○高皇產靈尊遣

經津主神於葦原中國一時此神進云豈唯經津主神獨

爲丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨故卽配經

津主神令平葦原中國 同上

○相傳曰神誓以石爲柱者石腐之際神明在也云々

啓蒙

○神託われつねに此葦原の中國の衆生をめぐみ天神のみのことをうけ異朝の凶徒をしりぞけ天魔地魔の鋒さをくだく此國の者一人も我神徳をかうぶらずといふ事なし神明につかへまつるもの國におゝき時は我力をえて魔軍日の下の雪の如くにさえ失ぬ國に神明につかゆるものすくなき時は我力おとろえて毎度に心を苦しむ魔力はやゝもすればつよく神力はやゝもすればよはし是只諸の人の心或時は月氏國の教にうつり或時は西天の教にはしりて神道を思ふ者なきゆへに我つねにくるしむ天國の教も我神道の潤色ならば用てもよし一向に本を捨てするに近づきもとの心をうしなふべきぞくるしき 倭論語

鹿嶋和歌によめり

拾遺
鹿島なる筑まの神のつく／＼と

讀人不知

我み一つに戀をつみつる

新機古今
なそもかく別初けんひたちなる

俊成

鹿島の帶のうらめしのよや

治承の比常陸國かしまの明神に參侍れば御社は南むかひに侍り前は海後は山にて社いらかをならべ廻廊軒をきしれり汐だにさせば御前の打板まで海になり汐だにもひけば眞砂にて二三里に及べり南は海にてきはもなく侍れば晝はみなれざはさす船をみ夜は波に宿る月をみき北は山にて侍れば杉村も落なく時鳥のはつねいちはやく聞え草むらに露をそゆるよるの鹿あかつきさけぶ猿のこゑ深山おろし松の風よに物あはれに心すぐく侍り東西のべなれば色々の花は錦をおほへるに似たり扱も何よりおもしろく侍りしは御殿の上の櫻の七日を限る別れを告て庭をさかりと移て侍りし折ふし汐みちて花のあそこひとむらこゝにひとむらなぎさ／＼入江／＼にゆられありき侍りし兼て廻廊のうちにて入於深山思惟佛道とたつとき聲にて讀侍りしがやがて讀さして末床しく思ひしにかんなぎの

○玉前社 埴生郡ニ有リ 祭神 高皇魂尊弟生產靈

一男前玉命也 一宮記

按ルニ系圖傳相違アル歟

高皇產靈尊

神皇產靈尊

津速魂命

武乳速命

振魂命 前玉命

貞觀九年七月廿七日從五位上勳五等玉崎神從四位下 國史

位下

○神託 もろ人よ理にさかふ事なかれ理にさかへば天神の心にたがふぞ理といふは天也地なり神也

思ふべし 倭論語

下總

○香取社 香取郡ニ有リ 祭神 齋主命也 一宮記

○天神遣ニ經津主神武甕槌神ニ使_レ平_ニ定_ニ葦原中國ニ是時齋主神號ニ齋之大人ニ此神今在ニ東國楫取之地ニ

也 日本紀

○神書抄曰齋主祭神之主也經津主神之別稱

已下畧之 神社考

○經津主神者天之鎮神也其先出_レ自_ニ諸尊_ニ初諸尊斬_ニ遇突_ニ血成_ニ赤霧_ニ天下陰闇直達_ニ天漢_ニ化爲_ニ三百六十五度七百八十三磐石_ニ是謂_ニ星度之精_ニ也氣

化爲_レ神號云_ニ磐裂_ニ是謂_ニ歲星之精_ニ磐裂生_ニ根裂_ニ是謂_ニ熒惑之精_ニ根裂生_ニ磐筒男_ニ是謂_ニ太白之精_ニ筒

男生_ニ磐筒女_ニ是謂_ニ辰星之精_ニ筒女生_ニ經津主_ニ是謂_ニ鎮星之精_ニ故云_ニ天安河磐石_ニ則經津主神之祖也

天書

○神託 それ神明のいむ事のけがれは衆生の穢惡の心をいましむ也直きものにはけがるといはずなべての人の心のたいしく直からんがため也

いさぎよき人の心の底すまば清き神明のかげをうつさん 倭論語

常陸

此國之邊常沙滿民家多有_レ煩故宣云此國千立成_レ陸則百姓安故云_ニ飛多智_ニ也 風土記

○鹿嶋社 鹿島郡ニ有リ 祭神 武甕槌神也 一宮記

○伊弉諾尊拔_ニ所帶十握劍_ニ斬_ニ軻遇突智_ニ其劍鐔垂血激越爲_レ神號云_ニ甕速日神_ニ次熯速日神其甕速日神是武甕槌神之祖也 日本紀

○甕速日神之子熯速

神是武甕槌神之祖也

常陸

此國之邊常沙滿民家多有_レ煩故宣云此國千立成_レ陸則百姓安故云_ニ飛多智_ニ也 風土記

○鹿嶋社 鹿島郡ニ有リ 祭神 武甕槌神也 一宮記

○伊弉諾尊拔_ニ所帶十握劍_ニ斬_ニ軻遇突智_ニ其劍鐔垂血激越爲_レ神號云_ニ甕速日神_ニ次熯速日神其甕速日神是武甕槌神之祖也 日本紀

○甕速日神之子熯速

神是武甕槌神之祖也

日本紀

本朝文粹一 神社考

桓武天皇 葛原親王 高見王 高望王

良將 將門 相馬小次郎 自號平親王

○湯島社 江府湯島ニ有リ 祭神 菅家 ○太田道

灌持資在江戶城時文明十年六月五日於城官之中一建菅丞相祠同年秋道灌宴坐一室夢中見

接菅丞相其翌朝或人卒然來獻菅丞相所親筆之畫像可謂靈夢也遂於城外之北畔建菅丞相祠堂寄數十頃之美田栽梅花數百株

○鷺宮 武藏大田庄ニ有リ 祭神未考

建久四年十一月武藏大田庄鷺宮寶前血流ト筮云兵

革之兆也因奉神馬鹿毛源賴朝使榛谷四郎重朝

莊嚴社壇上 神社考

安房

養老二年五月日割ニ上總國四郡一置之天平

十三年復田其後又置景行天皇五十三年冬

十月至ニ上總國一從ニ海路一渡ニ淡水門云々淡

水門今安房國也

○天比理乃咩社 同安房郡ニ有リ 一名洲崎社

祭神 太玉命 一宮記 仁壽二年七月丙辰加ニ從三位 文德實錄 ○神傳系上見

源賴朝石橋山ノ合戰ニウチマケタマヒテ後治承四年八月廿六日ノアケボノニ伊豆國眞鶴崎ヨリ船ニ

乘三浦ヲコ、ロザシテヲシイダス折節風ハゲシクテ水崎ニ船ヲヨセカネテ廿八日ノ夕暮ニ安房國洲

崎トイフ所ニ船ヲハセアゲテ其夜ハ即大明神ニ御通夜アリテ夜ト、モニ祈念ヲブ申サレケル夢ニ明

神ノシメシ玉フトオボシクテ御寶殿ノ御戸ヲイツクシキ御手ニテヲシヒラキ玉ヒテ一首ノ歌ヲゾア

ソバシケル

源ハ同シ流ヲ石清水只セキアゲヨ雲ノ上マテ賴朝ユメウチ覺テ明神ヲ三度拜シタテマツリ玉ヒテ

源ハ同シ流ヲ石清水セキアケテタヘ雲ノ上マデ

源平盛衰記

上總

上總下總々謂ニ木枝也昔此國生ニ大楠長及ニ數百丈ニ時帝恠之ト占之ニ大史奏云天

下大凶事也因茲斬捨彼木倒ニ南方也上

枝云ニ上總下枝云ニ下總也 風土記

○足輕社 同國足柄ニアリ 山 關 和歌あり
續古今

あしからの山路はみねと別れなは

躬恒

心のみこそ行て歸らめ

新勅撰
 足柄の關路こえ行くしのゝめに

後京極

一村霞む浮島か原

○大和本紀云足柄明神者昔狩獵人一日離寵妻而
 悲傷無止期也其及將死授一鏡云若有追慕
 之情則視此鏡焉仍如教者相其亡妻之模猶如
 生平也以其鏡祭爲神々所_レ在國名_三相模_一 啓蒙

武藏

秩父嵩者其勢如勇者怒立日本武美此山
 奉爲東征祈以兵具納埋岩藏故云武
 藏 風土記

○氷川社 足立郡ニ有リ 祭神 素戔嗚尊也 日本
 武尊東征之時勸請也兼俱神名帳註 ○貞觀十一年十一月十
 九日壬申正四位下 國史

○山王社 武藏江戸ニ有リ永田山ト號ス

祭神 江州日吉ニ同ジ神傳ハ日吉ノ下ニ有リ○長
 祿三年に太田道灌江府の城に住ける時文明年中に
 始て此御神を星野山の城内に勸請せり承應三年に

回祿の後今の溜池の築山にうつせり祭六月十五日
 隔年に有元始慈覺大師勸請也 江戸名所記

○神明 芝日比谷ニ有リ 祭神 天照太神 祭九月

十六日○一條院寛弘二年乙巳九月十六日に幣并大
 牙壹ツ此所に降りくだれり然所に童子壹人來て狂
 出て口ばしりけるは我は是伊勢の神明也此所に跡
 をといめんため二種のしるしをあらはすと云々さ
 あるに依て此所に勸請し奉る云々 名所記ノ心

○愛宕社 同江府ニアリ 勸請年記未_レ考 所_レ祭山
 城之愛宕ニ同ジ

○氷川社 江府四谷ニ有リ 額云氷川大明神 祭神
 未_レ考此所入間郡也足立郡氷川神ニ同キ歟後君子
 仰_レ考耳

仰_レ考耳

○神田社 江府神田ニ有リ 所祭 平將門ガ靈也○

神田明神者世傳平將門屍埋_三于此_一者也朱雀院御宇
 承平二年平將門在總州相馬郡招集東關士民等
 叛攻破伯父常陸大丞國香_一振威於東關_一于_レ時天
 慶三年正月國香子平貞盛倭藤太秀郷藤原忠文等蒙
 勅命爲征伐使而赴將門居城屢戰遂誅_二伐將
 門秀郷得_二其首_一傳言將門首飛留_三于此_一云々見_三于續

たらず職掌におはせて八月の放生會をおこなはる
崇神のいつくしみ本社にかはらずときこゆ 同上

東鑑文治五年九月頼朝於ニ奥州伊澤郡鎮守府ニ奉ニ

幣八幡宮瑞籬^{號ニ第ニ殿ニ}是田村九將軍征ニ東夷ニ時此處

奉ニ勸請^ニ之靈廟也彼卿所^ニ帶弓矢及鞭等納^ニ置之^ニ

于^ニ今在^ニ寶藏^ニ 神社考

○景政社 鎌倉極樂寺切通エカ、ル在所ノ北ノ山ノ

間ニアリ松楨三カイ程ナルガ兩ノ脇ニ有リ 名所記

○祭處 權五郎景政ガ靈也 ○景政嘗從ニ源義家ニ

赴ニ奥州之役ニ矢中ニ景政左眼ニ不^レ拔^レ矢七日遂射^ニ

殺其寇^ニ今世患^ニ目疾^ニ者祈^ニ此社^ニ有^レ效云 神社考

○號^{御靈}東鑑元曆二年八月廿七日御靈宮鳴動依て

兵衛佐殿御參詣有て御神樂神拜有又云御所の女房

の夢に景政と名乗り老翁夢に告て云崇徳院の御

たゝり世にみつ依て今鎌倉中人おほく死す我是を

ふせがんとす然其大きにかゝはりを得すといへり

鎌倉殿つたへきゝ給ひて諸寺諸社にて御祈をはじ

めらるゝ 名所記

○杜戸明神 同所鷺浦ヲ行海中エ五十間程サシ出タ
ル所也松樺ノ古木シゲリ浦ノ景江島金澤ニモヲト

リマサリハ分難シ 同上 祭神未考 ○明神の寶物
あこ小鞍どう駒の角 運慶作の獅子 綸子一通其

文はしれず年號は嘉元元年守殿明神刑部介物部恒

光とあり并二位尼御前の御教事あり年號は曆應二

年十二月十四日 同上

○下若宮八幡 東鑑一卷に本社は後冷泉院御宇伊豫

守源頼義勅定をうけ安部貞任を征伐せしむ其時丹

祈のむねありて康平六年秋八月にひそかに石清水

のみづるぎを當國由井郷に移し奉る今是を下若宮

と申

永保元年二月に陸奥守源義家しゆふくをくはゆ又

兵衛佐小林郷にうつさる 名所記

○荏柄天神 祭神菅家 頼朝やしきより東にあり東

鑑に御所より東をがらの前焼亡とあり 名所記 後

土御門院長享元年二月廿五日建立太田道灌本願也

○鎌足明神 祭處大織冠鎌足公ト云々大職冠鹿島に

まうで給ひ歸京の時由井郷に宿し給ふ其夜の夢の

御告により多年たしなみ給ふ所の鎌を大倉松岡に

うづめ給ふに依て鎌倉と號す 名所記
○瀬戸明神 傳無ニ所見ニ 己上鎌倉

○箱根 同國 社家者語、余云伊豆箱根者其本社彦

火々出見尊也又有駒形權現 白和龍王 右鵠王

左鵠王及客人宮神社考

千載
ともしゝて箱根の山に明にけり

俊綱

二より三より逢とせしまに

甲斐

○淺間社 八代郡ニ有リ 祭神

神體同「富士」一宮記

相模

足輕明神者狩人也或時離寵妻有悲傷故
常見亡妻之鏡思之相模如見亡妻相
見也模形也 風土記

○寒川社 高座郡ニ有リ神體同「八幡」一宮記 貞觀

十一年十一月十九日從四位上 國史

○鶴岡宮

鎌倉鶴岡ニ有リ 祭神 垂跡同「山州石清水」○

廿二社註式云本社者人皇七十代後冷泉院御宇伊與
守源朝臣賴義奉勅定征伐安倍貞任之時有丹祈
之旨「康平六年八月潛勸請石清水建瑞籙於當國
由比郷今號「下若宮」人皇七十二代白河院治八年永保元

年二月陸奥守源朝臣義家加修復今又奉遷小林
郷

後冷泉院天喜六癸卯年鎮座 改曆雜事記

已上同啓蒙

鶴岡和歌によめり

新拾遺
鶴岡木高き松を吹風の 左兵衛督基氏

雲のにひく萬代のころ

●東鏡大概右兵衛佐賴朝義兵をおこし給ひて漸威
東國におよぶのさざみ心願有により先鎌倉に入給
ひ小林郷の北山をてんじ宮廟をかまへ下若宮を此
ところに勸請し給ひ先假初の宮居也治承五年に武
藏國淺草より木道のたくみをめして七月八日事始
有之八月十五日に遷宮有奉行は梶原景時土肥眞平
大庭景義也建久二年若宮の上の地に別て正八幡宮
勸請し給ふ上の若宮是なり 鎌倉名所記
東鑑若宮のかたはらに熱田大明神を勸請し給ふと
有今左右に三輪熱田諏訪三島住吉の社有山の上八
幡の右の方に武内神社賴朝の靈社有 同上
○鴨長明道記鶴岡若宮は松柏みどりしげく藟纂の
そなへかくる事なし陪從を定て四季の御神樂おこ

○三穗社 有度郡三穗ニ有リ

昔神女飛來懸_ニ羽衣於松枝_ニ漁人取_レ之神女失_レ衣不_レ能_レ飛 屢求_レ之不_レ卑焉遂相約授_レ衣神女悅而飛去其後又來於_レ是土人立_レ祠奉_レ之

○神名帳註三穗津姬乎云々

按俗人家有_ニ東遊者_ニ相傳云安閑帝御宇於_ニ駿河國有度濱_ニ天女降現而爲_ニ歌舞_ニ道守氏翁者傳_ニ此曲_ニ矣予聞_ニ諸元留_ニ云三穗神社與_ニ羽衣社_ニ不_レ同今現二社在焉三穗社在_ニ平林中_ニ羽衣社去_ニ平林_ニ數十步在_ニ沙陵之下_ニ云下畧_レ之 啓蒙

○三保松原者在_ニ駿河國有度郡_ニ有度濱北有_ニ富士山_ニ南有_ニ大洋海_ニ久能山嶮於西清見關田子浦在_ニ其前_ニ松林蒼翠不_レ知_ニ其幾千萬株_ニ也殆非_ニ凡境_ニ誠天女海童之所_ニ遊息_ニ也案風土記古老傳言昔有_ニ神女_ニ自_ニ天降來曝_ニ羽衣於松枝_ニ漁人拾得而見_レ之其輕軟不可言也所謂六銖衣乎織女機中物乎神女乞_レ之漁人不_レ與神女欲_レ上_レ天而無_ニ羽衣_ニ於是遂與_ニ漁人_ニ爲_ニ夫婦_ニ蓋不_レ得_レ已也其後一旦女取_ニ羽衣_ニ乘_レ雲而去其漁人亦登仙云 神社考

伊豆

伊豆和名也東相模西駿河出_ニ其中間_ニ之國故伊豆則出_ニ之義也日本武東征時無_ニ伊豆名_ニ後代立_ニ當國_ニ乎

○三嶋社 賀茂郡ニ有リ 祭神一座

大山祇命 一宮記

○崇峻帝御宇庚戌年出現 改曆雜事記

○抄云伊豆國賀茂郡三嶋神社攝津國嶋下郡三嶋社

伊與州越智郡大山祇神社此三所共一神也 神社考

伊豆三島明神者移_ニ伊與三島_ニ以祭_レ之伊與守實綱患

旱祈_レ之令_ニ能因法師詠_ニ和歌俄大雨禾不_レ枯 同上

太宰大貳佐理任罷自_ニ鎮西_ニ還至_ニ伊與國_ニ泊風浪惡

而不_レ出_レ船其夜夢三嶋明神告云請書_ニ社額_ニ翌日佐

理書以懸_レ之風乃順而發_ニ船佐理本朝無双之能書也

其額云日本總鎮守三嶋大明神 同上

貞觀九年七月廿七日 從三位 國史

○神託 益人よ天にならひ地にうけし心をうしな
はで天照神の教を教として人の國に操をよせてわ
か人をして人の人たらんは我つねにこのます氣は
あしかるに移り安く能に移りにくき事を辨へをり
て其操をくだく敷する事なかれ 倭論語

此地一矣又每歲有御葦神事者ト國中疫疾變異等一啓蒙

三河

此國有三河一云男川二云豐川三云矢作川男川者河上有山神一白鬚明神也豐川者此河上有長者一民屋豐饒故云豐川一矢作川者日本武尊東征時於河邊多作矢故云矢作川一風土記抄

○砥鹿社 寶飫郡ニ有リ 祭神 大己貴命 一宮記

貞觀十二年八月廿八日正五位下砥鹿神正五位上同十八年六月八日從四位上 國史

遠江

近江始書淡海一有大江自帝都近故改近江一又遠江始書遠淡海一此國有大江自帝都遙遠故名遠江一風土記

○事任社 周智郡ニ有リ 祭神 大己貴命也 一宮記

社記云一名小國神社也遠州周智郡大己貴命者欽明天皇御宇十六年乙亥春二月十八日出現于這所一爾來奉崇小國一宮無不欽仰奉仕也若遠可社頭造修達一 天聽一則勅使奉行之畢厥功一

攝社

與石戸 王子宮 八幡 內宮 外宮 八王子

眞佐子社 飯王子 荒神

○文德實錄云嘉祥三年七月丙戌遠江國事任神授後五位下

○橫須賀社 同郡橫須加村ニ有リ 祭神三座

高松社一座 小笠社同 橫須賀社同

社家註進云人皇四十二代文武天皇大寶元年秋九月奉遷此所也高松社者大市姬命大山祇女也素戔素戔鳥尊也橫須賀社者即熊野樟日命也鳥子啓蒙

駿河

珠流河舊事記 舊事紀 ○昔書洲流河也

郡有駿河一因爲國名一風土記

○淺間社 不盡郡ニ有リ 號富士權現一是也大山祇

女木花開耶姬命也 一宮記

○貞觀元年正月廿七日從三位 神階記

○神託 我人よ心なかれ心なければ能神明の位にのぼる也わづかに念慮にわたれば人心をさる也人心もさればちくるいとなるぞ人をしてかくあらんぞ我たへがたくいたみ我つねになげくのみ 倭論語

日本武尊留^ニ其形影天村雲^ニ爲^ニ御神體^ニ可^レ謂^ニ日本武尊垂跡^ニ者 啓蒙

○景行天皇廿八年冬十月日本武尊征^ニ東夷^ニ發路之枉^レ道拜^ニ伊勢神宮^ニ仍辭^ニ于倭姬命^ニ云今被^ニ天皇之命^ニ而東征將^レ誅^ニ諸叛者^ニ故辭^ニ之於^ニ是倭姬命取^ニ草薙劍^ニ授^ニ日本武尊^ニ云慎之莫^レ怠也是歲日本武尊初至^ニ駿河^ニ其處賊陽從^レ之欺云是野也麋鹿甚多氣如^ニ朝霧^ニ足如^ニ茂林^ニ臨而應^レ狩日本武尊信^ニ其言^ニ入^ニ野中^ニ而竟^レ獸賊有^ニ殺^ニ皇子^ニ之情^ニ放^ニ火燒^ニ其野^ニ皇子知^レ被^レ欺則以^ニ所佩劍^ニ自抽薙攘皇子之傍草^ニ因^レ是得^レ免故號^ニ其劍^ニ曰^ニ草薙^ニ也 日本紀

景行天皇の御宇東夷を御退治のとき相模國にて高かやにひをつけ打手の大將日本武尊をやきころさんとす尊劍をぬき祈念して打はらひ給へば方壺里のくさこことくくなぎふせ給ひぬ尊も官軍もつゝがなしそれより此つるぎの名を改めてくさなぎの劍との給へり還御の時奇瑞あるによりて尾張國に大社をつくらしめ給ふ今の熱田明神是也八劍の宮是也其時太神宮え御いもうと大和姫の皇女奏問ありしに陳のはらひと此劍天のひわかしのひうち三種

を給ふ也其以後新羅國の僧日羅といふ者此劍をはしがり彼宮に參籠日久し可^レ然びんぎをもつて御殿をやぶらずでにぬすみ取にげ行と思へば宮中を一夜の程めくる計也夜の明たれば不^レ叶して劍を返しすてゝにげぬ是によりて同し寸尺に太刀を七振うたせて同殿にをき給ふ以上八振也又げん大夫どのといふ小社は有^ニ手摩乳也神宮にてはをき玉の神といふ是皆猿田彦の化現也 卜部兼邦記ノ心

○神託 天下の諸人よつねに神明の直きみことを身にうけて天を父とし地を母とし万物を兄弟として恨なくかなしみなき此神國の三界にまされるをたのしまん天照神の教にたがはですべらみことをうやまひませそむくかたあらば我神前に來て其名をあげよ必てきをくだきて心のまゝならん 倭論語 玉葉集神祇部 櫻花散なん

松にかゝれる藤をたのまん

是は熱田の大明神の御歌となん

○津嶋社 海部郡津嶋 祭神山州之祇園ニ同ジ

素戔烏尊中殿

稻田姫東 八王子西

社家註進狀云 人皇卅代欽明天皇元年己未來ニ臨于

諸社一覽第六

東海道

伊賀 就東方海邊行道也東海道名始于此景
行時分畿内七道者始于此文武時分諸國東
西南北者始于此成務時

伊賀

四郡内有伊賀郡以郡名爲國名

○敢國社 阿拜郡 祭神一座 金山彦神也 一宮記

當國之一宮也○伊弉冊尊且生火神軻遇突智之時悶熱懊惱因爲吐此化爲神一名云金山彦日本紀
貞觀九年十月五日從五位下敢國神 國史

志摩

志摩和名也爲伊勢嶋之意也放地出海
中之嶋也後成國名 風土記

○伊射波大明神 答志郡有伊雜宮是也 祭神
伊勢内宮之下ニミエタリ

尾張

日本武征東夷而還於尾張所帶之劍在
熱田熱田明神是也此劍本自大蛇之尾張
出劍也此劍留此國故曰尾張

○眞清田社 中嶋郡有 祭神 大己貴命也
一宮記 當國一宮也一宮記ニノスル所以下同事也

○熱田社 年魚市郡有 祭神一座今爲六座
天村雲劍也 傳祇園素戔嗚尊之下見エタリ

素戔嗚尊勅蛇云汝是可畏之神也敢不饗乎乃以八
甕酒每口沃入其蛇飲酒而睡素戔嗚尊拔劍斬
之至斬尾時劍乃少缺割而視之則劍在尾中是
號草薙劍此今在尾張國吾湯市村即熱田祝部所
掌之神是也日本紀

神名帳註云人皇十二代景行帝十四男小碓尊後名
日本武此神垂跡也大宮日本武素戔嗚尊南宮實姬
西伊弉並北倉稻魂中央天照太神也尾張風土記云熱
田社者昔日本武命巡歷東國還時娶尾張連等遠
祖宮實姬命宿於其家夜頃向廁以隨身劍掛
於桑木遺之入殿乃驚更往取之劍有光如神不
把得之即謂宮實姬云此劍神氣宜奉齋之爲
吾形影因立社熱田鄉爲名 先師說曰熱田社者

諸社一覽第六目錄

[illegible]

下總	香取	鹿嶋	洗礪	志津	三上
常陸		建部	多賀	彥根	
近江		石部	苗賀	櫻谷	四宮
		日吉	伊吹	竹生	白鬚
		立木	筑摩	八幡	矢橋
		兵主	小津	大寶	牛頭
		水尾	田村	黑主	秀郷
		明神	赤山	新羅	
美濃	南宮				
飛驒	水無				
信濃	諏訪	戸隠			
上野	拔鋒				
下野	二荒				
陸奥	都々古和介				
出羽	物忌				
已上					

媛ニ分ノ祭 啓蒙

○茨住吉 茨原郡ニ有リ長田生田ノ双ビ同海道ニア

リ 祭神三座

表筒男 中筒男 底筒男

○神功皇后伐ニ新羅ニ之明年二月表筒男中筒男底筒

男三神誨之云吾和魂宜レ居ニ大津渚中倉之長峽ニ便

因看ニ往來船ニ於レ是隨ニ神教ニ以鎮坐焉

○比咩語曾社 東生郡ニ有リ 祭神一座

下照姬命 大己貴命子也 此神與ニ出雲御碕神ニ和

歌祖神也 古今集註

○高皇產靈尊賜ニ天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢以遣

之此神亦不ニ忠誠ニ也來到即娶ニ顯國玉之女子下

照姬一又名高姬又名稚國玉

又曰天稚彥中レ矢立死天稚彥之妻下照姬哭泣悲哀

聲達ニ于天一 已上日本紀

田心姬命生ニ妹下照姬命一 舊事紀

攝州東生郡比賣許曾神社下照姬也今按比賣許曾

在ニ日本紀第六ニ與レ此不レ同

已上神代系圖傳

○大己貴命

都味齒八重事代主神

味鋹高彥根命

下照姬命

高照光姬命

○上宮天神 高槻ニ有リ 祭神一座

菅家 里諺曰村上天皇天曆年中奉ニ于北野ニ之日先

祀ニ于此地ニ也鳥居銘云攝津國上宮者菅神歸洛寓居

之名區也

諸社一覽第五終

四殿南宮 五殿八祖神 已上五社也

南宮ハ大山咋 八祖神ハ高皇產靈尊神名 案以ニ廣

田爲ニ皇后難ニ心得ニ歟不レ合ニ日本書紀等旨啓蒙

○御位 貞觀元年正月廿七日從三位勳八等廣田神

正三位 神階記

貞觀十二年十月六日從一位 神名帳註

新續古今 當社をよめる歌 六條入道前太政大臣

けふ迄はかくてくらしつ行末を

めくみひろ田の神にまかせん

○西宮 西宮町ノ西ニアリ 祭神一座 蛭子 世所

謂西宮夷是也

相殿神二座 事八十神 大己貴命

蛭兒尊 此神雖ニ已ニ三歳脚猶不レ立故載ニ之於天磐櫛

樟船ニ而順風放棄 日本紀

初伊弉諾尊伊弉冊尊巡レ柱之時陰神先發ニ嘉言一既

違ニ陰陽之理ニ所以今生ニ蛭兒同上

相殿神 事八十右 大己貴命兄也 大己貴命左

蛭兒 事八十傳系圖上ニ見エタリ

右相殿二座之説ト部兼熙廿二社註説也

攝社 名次社 鰺津社 岡田社

須川御前 興夷社 西宮辰巳田中ニ有リ

○生田社 八部郡生田ニ有リ 祭神一座

稚日女尊 稱ニ天照太神妹有レ習乎 啓蒙 是後稚日

女尊坐ニ于齋服殿而織ニ神之御衣也日本紀 神功

皇后紀云伐ニ新羅之明年二月稚日女尊誨之云吾欲

居ニ活田長峽國ニ因以ニ海上五十狹茅令祭

○御位 貞觀九年十二月十六日從三位國史生田歌

後撰戀 に讀リ

幾度か生田のうらに立かへる

讀人不知

波に我みを打ぬらすらん

同かへし 立歸りぬれてはひぬる沙なれば

同

生田のうらのさかところみれ

生田杜 川 池歌によめり

○長田 攝津郡ニ有リ生田ノ双也 額云長田大明神

祭神一座 事代主尊

大己貴命子傳系上ニ見エタリ

○皇后伐ニ新羅之明年二月皇后之船廻ニ於海中ニ以

不レ能レ進更還ニ務古水門ニ而トレ之於ニ是事代主尊

誨之云祠ニ吾子御心長田國ニ則以ニ葉山媛之弟長

也數日後起ニ寢床ニ遂奉遷ニ替神殿其後信長兵燹之日殿閣悉爲ニ灰燼ニ纔以ニ神璽ニ遷ニ別所ニ耳慶長年中秀吉築ニ城郭ニ之序遷ニ今神地ニ云々○御位 貞觀元年正月廿七日從五位下此後未レ考 已上啓蒙

○高津社 高津ニ有リ 祭神 仁德帝云々 いにしへは境内六町四方にて仁德帝の皇居の地也といへり名所記 此所西生郡也

金葉
いにしへの難波の事を思ひ出て

師頼

高津の宮に月のすむらん

新勅撰

春のよの月に昔や思ひ出る

覺延法師

高津の宮に匂ふ梅かえ

○逆櫓神 東成郡大坂ニ有リ 祭神

天照皇太神 號ニ朝日宮 舊記云後鳥羽院文治元年二月十八日義經與ニ梶原景時ニ爲ニ逆櫓之論此日爲ニ利運ニ義經於ニ此所ニ勸ニ請神明 啓蒙 ○松や町北裏町 名所記

○神明 大坂蠟燭町ニ有リ 所祭 天照太神 八幡太神

後陽成院御宇勸請云々

○曾根崎社 曾根崎ニアリ 祭神 菅家 傳未レ考

○北野天神 大融寺ノ邊ニ有リ 祭神同前 京師ノ北野ヲ摸スルト云々 京北野の宮より四十餘歳後の造營と也昔此所に一夜に七本の松生出たり希代の事なればとて大融寺の僧奏聞をとげ寛正四年の倫旨等有と也名所記

○天満宮 難波津天満ニ有リ祭神京師北野宮ニ同シ村上天皇御宇天曆年中ニ詔ニヨツテ勸請云々社記未レ考 祭 六月廿五日 九月廿五日

○廣田社 武庫郡西宮郷廣田村ニ有リ

祭神一座 廣田大神 又云五座說アリ

○神功皇后征ニ新羅ニ之明年忍熊王起兵屯ニ於住吉皇后聞レ之還ニ務古水門ニ而トレ之於レ是天照太神誨レ之云我之荒魂不可レ近ニ皇后ニ當レ居ニ御心廣田國ニ即以ニ山背根子之女葉山媛ニ令レ祭レ之 日本紀

廣田者天照太神之荒魂也可レ謂神宮御同體 註式

註進記云人皇百一代後小松院治廿三年應永十三年四月四日甲子伯三位資忠王依レ招也日本紀第九讀

合廣田社事條々有ニ不審ニ雖ニ爲ニ社祕ニ委細演說云々如ニ社官申詞ニ者奉レ書ニ廣田社ニ者神功皇后也自餘

神社意得レ之勸請歟一殿住吉 二殿廣田 三殿八幡

何モ住吉ノ名所和歌ニ詠ゼリ 和歌略之

○安倍社 安倍王子ト號ス 住吉邊安倍野ニ有リ祭神熊野山第二王子云々

社記未_レ考 新勅撰 新續古今ニヨメル 安倍島或人此所ト云々後ノ君子可_レ有_レ考

○今宮惠比須 安倍野ノ北ニアリ 祭神蛭子 天照

太神 素戔島 又北ノ社ハ廣田神ヲ勸請云々 傳未_レ考

正月十日此社に詣俗に十日ゑびすと云々九月十八日此社におゐて伶人の舞ありて神輿を天王寺の西門まで遷幸し奉る也 難波名所記

○安居天神社 天王寺ノ西ニアリ 祭神一座

菅家 社記不_レ得_レ考 祭 八月廿日

○新御靈 世權御靈ト稱ス

祭神未_レ考俗ニ鎌倉權五郎景正ガ靈也ト云フ事非也云々 祭 九月廿七日

○座摩社 當社昔ハ八軒屋ノ邊ニ有シガ中比淡路町

一丁目ニ移シ其後今ノ渡邊ニ勸請シケルト也名所記

祭神一座 神功皇后也 宮中所_レ祭之坐座神又別也

○神名帳註云神功皇后也凱旋之日於此所ニ飲食也

仍名 譽田天皇三年十一月百濟辰斯王叛遣ニ紀角

宿禰羽田矢代宿禰ニ令_レ伐_レ之即日於難波海中祀之仍爲住吉第一攝神啓蒙 神功皇后三韓御退治

ありて御歸帆の時始て御鎮座有石上に御休し給ふ今に八軒屋の上に舊石あり其後賤女來りて醬を奉

けるその式によりて今に六月廿二日御祭禮の神供に醬を奉りけるはかゝる故なりとぞ 名所記

○玉造稻荷 玉造ニアリ 祭神 稻荷明神ヲ勸請云々 傳未_レ考

住吉の名越の岡の玉造 數ならぬみは秋を悲しき 好忠

○森明神 祭神 用明天皇云々予未_レ考

○生玉社 東生郡天王寺邊ニアリ 祭神一座

天生玉神 天孫降臨時陪從神也

○活玉命新田部直遠祖也舊事紀 〇社家註進云天孫

瓊々杵尊降臨之時陪從三十二神之中天活玉命是也

神武天皇戊午年春二月到難波之倚日祠此神云

爰去明應年中本願寺僧來此所而創寺院以神地ニ接ニ境內ニ矣依斯神惡ニ不潔ニ罰ニ彼僧也于時

懷神殿造替之宿禰而令神主藤原吉勝告願辭上

口而入、蟻々聞、蜜香、遂得、通入而出、於是、是以、其系所、貫玉環、還、于唐、唐人驚云、日本國人其賢哉、遂不、肯攻、我其中將進至、大臣位、死而爲、神有、人詣、其社、夜告云、那々和多余麻我、戾留他麻乃於々奴幾、氏阿里通登波我波志良須哉

紀貫之集貫之歸、自、紀伊國、時馬病將、斃、路人僉云、此所、坐之神爲、崇貫之思、此所無、社又無、誌而欲、祈亦無、幣帛、因濯、手跪而問、名答云、蟻通明神乃詠、和歌云、加枳句毛利阿夜梅毛志羅奴於保曾羅爾、阿里登保志鳥波於毛布倍志耶波於、是馬遂能行古事談云、貫之還、自、和泉國、時也、已上神社考

攝津

攝字彙云、靜謐也、漢書攝然天下安、此國難波堀江天下著船之津、以、天下靜謐之義、名、攝津、云々

○住吉社

攝津國住吉郡ニ有リ 祭神四座

底筒男 中筒男 表筒男 神功皇后

○伊弉諾尊往至、筑紫日向小戸橋之檣原、而祓除焉、沉、濯於海底、因以生神號云、底筒男命、又潜、濯於潮中、因以生神號云、中筒男命、又浮、濯於潮上、因以

生神號云、表筒男命、是卽住吉之大神也、日本紀

●神功皇后 前ニ傳アリ

皇后伐、新羅、之明年二月、又表筒男中筒男底筒男三神誨、之云、吾和魂宜、居、大津渚中倉之長峽、便因

看、往來船、於、是隨、神教、以鎮座焉、日本紀

住吉舊記云、其荒魂在、筑紫之小戸、和魂者神功皇后

征、三韓、時顯、坐攝州、託、皇后體、而循、行四方、遂

到、攝州之地、宣言云、眞住吉眞住吉之國也、因鎮、坐

其地、名云、住吉、啓蒙

攝社

被戸社 儀御前 津守氏ノ祖也

○御位未ノ考

○住吉御祓 六月晦日 御田植トイフ事アリ五月

廿八日也 九月十三夜神前ニシテ市ヲナス寶市ト

云フトカヤ其外年中ノ神事等多シ

古今拾遺 住江の松を秋風吹からに

聲打そふる沖津白波

躬恒

和歌多し 岸 松 姫松 忘草などよめり

名所岸野 忘水 那古海 名越 粉濱 淺香浦

浦初嶋 長居浦 佐比江 津守 細江 淺澤小野

此近わたりに恩智左近將監正遠が城の跡并左近が塚あり名所記

○水分社 石川郡ニ有リ傳未^レ考 天水分神ト號スルハ速秋津彥神十柱子第五也若シ此神歟後君子ノ待^レ考耳

左は日神月神右は吳子孫子也鳥居額は楠正行が筆也此おくに南木神といふ社有なり是は楠正成をまつれる也名所記

○道明寺天神 志紀郡同寺ノ内ニ有リ

三町の森の一町左右に梅を植中に社あり此所は往昔菅相公の御伯母の御在所とかや御神體は鏡後宇多院勅符也

靈寶數多あり後宇多院震筆天神名號天神御筆松梅繪 同御所持之笏 石帶 御鏡 御硯 御櫛箱 櫛あり 濃紫本結二筋 香箱一合ニ今に香有云々已上名所記ノ心

○當宗社 同郡ニ有リ ○仁和五年四月初祭^レ之宇

多帝外祖父姓當宗氏神社考

○佐田天神 澁川郡佐田ニ有リ 傳未^レ考名寄 駒なへていさみにゆかん佐太川に

枝さしかはす大和なてしこ

俊成

○鏡社 若江郡 ○降幡社 石川郡

○岩船社 石川郡 右傳未^レ考

已上河内國畢

和泉

河内國靈龜元年割置ニ吉野監改爲國舊事紀

元正天皇靈龜二年四月割ニ河内國大鳥日根

和泉三郡始置ニ和泉監類聚國史

○大鳥社大鳥郡ニ有リ一宮記云日本武尊也卜部兼熙云昔有ニ白鳳飛來止ニ是處ニ天照太神所^レ化也故名ニ大鳥啓蒙

貞觀元年正月廿七日從四位下

神階記

○神託諸の人の心をはなれて外さらに神もなし又佛もなき事を知て神佛に偽なくまがらずしてつねに觀喜すべしとへば諸の人邪路に入て無量のくるしみ其身をせむるなるべし能まもるべし倭論語

○蟻通 和泉ニ有リ祭神一座

昔未^レ詳ニ何時世ニ也唐將^レ擊ニ我邦ニ試贈ニ七曲玉環上下内通ニ且告云以^レ繩貫ニ此玉ニ衆人不^レ知^レ所^レ爲子^レ時^レ有ニ中將某ニ取^レ蟻繫ニ細糸其腰ニ以^レ蜜塗ニ環孔

平ニ中洲伐ニ凶徒ニ天下一統矣然後開都於畝傍山東南樞原命ニ有司ニ經ニ始帝宅ニ庚申九月納ノ后辛酉正月即ニ帝位ニ也故歷代皇帝無レ不ニ尊崇ニ食ノ國武將無レ不ニ仰全文畧之啓蒙 ○神別記云高皇產靈四世孫許々止魂尊子河內國平岡社也 啓蒙

○攝社 青櫛社 岩本社 一言主社 大山彦社

戸隱社 右見ニ社記ニ啓蒙

○御位 仁明帝承和三年五月從三位勳三等天兒

屋命正三位 續日本紀

貞觀元年正月廿七日正一位 神階記

○祭 春二月冬十一月上申日 延喜式

○社記云正月十五日ト田祭 當日於ニ神供所ニ燒ニ

小豆粥ニ々上五寸掛ニ竹管ニ中納ニ百穀署ニ依ニ蒸

氣強弱ニ占ニ年穀之吉凶ニ也蓋當社第一神ニ事水速氏

神主之外無レ有ニ相承ニ

同十六日踏歌祭二月朔日平國祭及暮而入ノ山採ノ木

叩ニ拜殿樓閣ニ各趨歸也水速氏申レ祝詞拜而退有ニ社

流口決ニ啓

○神託 從へる人一神を禮拜するとも諸の神の心にかなはん也たとへば千々の鏡をかけて人あり是

にむかはんにいづれの鏡か其影をうつさずといふ事なしふたつ心のおこるよりくだノしき心にはくだりてまよひのうみにしづむなるべし倭論語

○譽田八幡 古市郡ニ有リ祭神 應神天皇緣起云應

神天皇葬ニ于河內國田市郡長野ニ欽明帝始改ニ造廟ニ

而有ニ行幸ニ 啓蒙

○譽田八幡宮は應神天皇の御廟也陵は長野山と號

す三十代欽明帝廿年に始て三所の社をたてらるゝ

中は八幡右神功皇后左仲哀天皇緣起は普光院義教

の筆繪有卯月八日若宮の神事車樂二乗渡る又能と

兒の舞と隔年にあり八月十五日御輿出御伶人の舞

有正月十四日曲物に水を入月影を浮め板に目をも

りて年穀の水はかり何合と知る事有又此所に矢坂

といふ有神功皇后矢を收給ふ所也名所記

○恩智社 高安郡恩智村ニ有リ祭神一座大御食津命

天兒屋命之來孫也

河內國恩智大明神中臣朝臣藤原朝臣之遠祖也

樹下神系圖

貞觀元年正月廿七日正三位勳六等恩智大御食津彦

神從二位 神階記

○武津身命爲三八咫鳥之神武帝軍先導正統記 ○慶雲二年祭三八咫鳥社大和國宇多郡一

○笹幡社 同郡山邊笹幡ニ有リ 祭神 天照太神

崇神天皇六十年御鎮坐云々此後勢州度會ニ移玉フト云々世記心同此所ノ傍ニ山邊赤人が石塔あり名所記

○丹生社 吉野郡下市傍山中ニ有リ 祭神一座

罔象女神 祈雨止雨神也

伊弉並尊爲ニ軻遇槌一所ノ焦而終矣其且ノ終之間臥

生ニ土神埴山姬及水神罔象女日本紀

○神武天皇以ニ天神教ニ造ニ嚴食ニ涉ニ于丹生川上用

祭ニ天神地祇二十二社註

○當社爲ニ大和之別社ニ事見ニ延喜格ニ不聞ニ人聲

之ニ深山立ニ我宮柱ニ以敬禮者爲天下ニ降ニ甘雨止ニ

霖雨一者 同註式

○又云人皇四十代天武帝白鳳四年乙亥御垂跡

○攝社 御食持社

○御位 貞觀元年正月廿七日從三位此後未考啓蒙

○祭 廿二社註式無ニ祭禮一

已上

大和國畢

河内

柏原朝御世以ニ彦己曾保理命ニ爲ニ凡河内國

造舊事紀

○平岡社 河内郡ニ有リ 祭神四座

第一殿天子屋命 二彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

三大國主命 四天照太神

葺不合尊 彦火々出見尊子母豐玉姬

天津彦々火瓊々杵尊

彦火々出見尊 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

外神傳系前ミエマ

●當社鎮座人皇第一神武天皇御宇戊午年春三月十

日入ニ當國草香村去平岡一里許四月九日皇師勒兵步

趣龍田社北十町許而其路狹險人不ノ得ニ並行ニ號ニ此所ニ云ニ行

難山社北十町許乃還欲東踰ニ伊駒山而入中洲上時長

足彦聞之云天神子等所以來者將奪我國則盡

起屬兵於孔舍衛坂會戰有流矢中五瀨命肱

皇師不ノ能進戰天皇憂之乃運神策於冲衿云我

是日神子孫而向日征虜此逆天道也不ノ若退還

示弱禮祭神祇者即當社也天神者所謂天照太神

也地祇者葺不合大國主天兒屋等是也遂因此神熊

○狹井社 城上郡ニ有リ 狹井神。大己貴之荒魂也 世所謂鎮花之神者是也

○疫神也神祇令云花散之時疫神分散爲病故有鎮花祭 舊記云鎮花祭祀大神狹井也宇多帝寬平九年

三月七日勅亭神名帳註

○鏡作社 城下郡ニ有リ 祭神二座

石凝姥命 天糠戶命

稚日女尊坐于齋服殿而織神之御衣也素戔嗚尊見之則逆剝斑駒投入於殿內稚日女尊乃驚而墮機以所持梭傷體而神退矣故天照太神謂素戔嗚尊云汝猶有黑心不欲與汝相見乃入于天石窟而閉著石戶焉於是天下恒闇無復晝夜之殊故會八十萬神於天高市而問之時有高皇產靈之息思兼神云者有思慮之智乃思而白云宜圖造彼神之象而奉招禱也故即以石凝姥爲治工採天香山之金以作日矛又云使鏡作部遠祖天糠戶者造鏡已上日本紀

按本朝鏡工大祖神也其神功併如上矣式中稱鏡作之神二座一云鏡作麻氣神社二云鏡作伊多神社也兼俱神名帳註記垂跡云麻氣神社天糠戶命。

伊多神社石凝姥命也共坐城下郡一啓蒙荒神社 笠山ニアリ郡未考 祭神三座

土祖神 澳津彥命 澳津姬神

大年神娶天和迦流美豆姬爲妻生兒澳津彥神澳

津姬命此二神者諸人拜三祠竈神者也 先代舊事本紀

○高市社 高市郡高市ニ有リ 祭神一座

事代主命 大己貴命子 系圖前ニミエタリ

○大己貴神娶子坐邊津宮高降姬神生一男都

味齒八重事代主神坐倭國高市郡高市社亦云甘

南備飛鳥社舊事本紀

○太玉社 同郡ニ有リ 祭神一座 太玉命 高皇產

靈尊子 齋部氏祖也 系圖傳有前

○八咫鳥社 宇多郡ニ有リ 祭神一座

賀茂武津身命 神武天皇々師欲趣中洲而山中

嶮絕無復可行之路乃棲遑不知其所跋涉時

夜夢天照太神訓于天皇云朕今遣八咫鳥宜以

爲鄉導者果有八頭八咫鳥自空翔降天皇云此鳥

之來自叶祥夢大哉赫矣我皇祖天照太神欲以助

成基業乎是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將

元戎蹈山啓行乃尋鳥所向仰視而追之 日本紀

ざりしと也 奥儀抄 清輔作

若宮 祭神 未_レ考

三輪山神岡山 神山何モ同ジ卷向山卷向川三輪川

三輪崎 佐野渡共ニ歌ニヨメリ

○御位 清和帝貞觀元年二月 正一位

○祭 四月十二月上卯 但有_二三則中_一也

○石上 山邊郡布留郷ニアリ 祭神一座

石上師御魂神 祭處十握劔云々古語拾遺ノ心○十握劔其名

不_レ一 天羽斬古語拾遺天尾羽張 又伊都之尾羽張

古事記 師靈劔 布都主神魂刀 佐士布都 建布都

豐布都 已上舊事紀龜正 韓鋤劔 甕布都神 釋日本紀

○石上社者素戔烏尊所_レ持之十握劔也以_二人皇十代

崇神天皇御宇_一鎮座也 神宮御鈔

○舊記云磯城瑞籬御宇遷_二建布都大神社於大和國

山邊郡石上邑_一則天祖授_二饒速日尊_一自_レ天受來天璽

瑞玉同共藏齋號云_二石上大神_一建膽心命祭_レ之啓蒙

○天足彦國押人命裔木事命市川朝臣大鰐鰒天皇御

世達_レ倭賀_二布都斯神社_一於_二石上御布留村高庭之地_一

以_二市川臣_一爲_二神主_一 新撰姓氏錄

○攝社 布留社 傳未_レ考

○御位 清和帝貞觀九年三月十日正一位

○祭 今世六月晦日也

○神庫に靈寶有當世わづかに造りて社殿にならび

て有此神庫の事日本紀に有畧也す方五尺の櫃有神

符なれば開く事なし名劔おさまれりとかや六月晦

日祭に神殿にこめたる布留の劔を袋に納ながら鳥

居の外迄出し奉る也又七月七日神前にして護摩を

修し寶藏におさまりし笈三つを僧のかたにかけて

おこなひあり是を笈わたしといふ也○此社歌に讀

り石上振の神杉等數多也

萬 石上ふるの神杉神と成

戀をも我はさらにするかも

堀川百首

石上ふるの社に春くれは

霞たなびく高圓の山

此ついに 石上池 石上溝 布留山 布留野

古柄小野 忘水 布留川 布留高橋あり いづれ

も名所和歌に讀り已上大和名所記

○高皇產靈社 添上郡ニ有リ 祭神一座

●宇奈太理坐高御魂尊 神名註曰人皇十五代神功
皇后御宇武内宿禰勸_二請之_一 啓蒙

○坐宗像興津嶋神田心姬命生一男一女兒味鋺高彦根神坐倭國葛上郡高鴨託云捨篠社先代舊事本紀
 ○穴師社 城上郡穴師ニアリ 鳥居 遙海道ニ有リ
 社ハ遙東ニアリ

天照太神天降玉フ時護齋鏡ハ三面子鈴一合ヲ御身ニソエサセ玉フ其一ツノ鏡ハ大神ノ御靈トシテ天懸神ト御名ヲアガメ又一ツノ鏡ハ同前御靈トシテ國懸神ト御名ヲ申奉ル今紀伊國名草宮ニ崇ウヤマヒ申大神也ヘツノ鏡并子鈴ハ天皇御食津神アシタエフベノ御食夜護日護ト奉レ齋卷向穴師社ニイマヌ大神也釋日本紀ノ心新勅撰
 まさもくのあなしのひ原春くれば 好忠

花か雪かとみゆるゆふして

此あたり十町計の程に 崇神天皇 景行天皇

舒明天皇ノ陵アリ

○三輪社 城上郡三輪ニ有リ 一鳥居二鳥居樓門拜殿寶藏ナンドハアレドモ神殿ハ無シ

祭神一座 大己貴神

于時神光照海忽然有浮來者云如吾不_レ在者汝何能平_ニ此國_ニ乎由_ニ吾在_ニ故汝得_レ建_ニ其大造之續_ニ一矣

是時大己貴神問云然則汝是誰耶對云吾是汝之幸魂奇魂也大己貴神云唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲何處住耶對云吾欲住於日本國之三諸山故即營宮彼處使就而居此大三輪之神也日本紀
 ○大己貴神駕天羽車大鷲飛於虛空徧覓妻妾時下_ニ行於茅渟縣_ニ潛通_ニ大陶祇之女活玉依姬_ニ其往來非_ニ人之所_ニ知其女初孕父母怪問云誰人來乎女答云有_ニ神人自_ニ屋上_ニ來共_ニ双_ニ枕_ニ於是欲_レ顯_ニ見_ニ之著_ニ針于_ニ苧卷_ニ懸_ニ于_ニ神人裳_ニ認_ニ其_ニ絲_ニ見_ニ之明旦從_ニ絲_ニ往尋覓出_ニ自_ニ鑰孔_ニ經_ニ茅渟山_ニ入_ニ吉野山_ニ留_ニ於_ニ三諸山_ニ其所_ニ縮_ニ之絲_ニ三九猶遺故號云_ニ三輪山_ニ舊事本紀ノ心
 ○崇神天皇七年倭迹々日百襲姬命に大物主神著給ひて告有御夢に我は是大物主神也我兒太田々根子をして我をまつらしめよとかく有しより太田々根子命は神主君等が遠祖也くはしくは日本紀に有さて祭の日は茅のはをみつくりて岩はのうへに置てそれをまつる也云々やしろのおはせぬあやしとて里人ども造りたりければ鳥百千きたりてつゝきやぶりふみこぼちてその木どもををのゝくはへて行さりにけり神のちかひとしりて其のちはつくら

幸時其大神滿山未於長谷山口送奉故是一言主之大神者彼時所顯也古事記

○役小角者賀茂役公氏今之高賀茂者也和州葛木上郡茆原村人少敏悟博學兼鄉佛乘一年三十二棄家入葛木山居巖窟者三十餘歲藤葛爲衣松果充食持孔雀明王咒駕五色雲優遊仙府驅逐鬼神以爲使令日域靈區修歷殆徧一日告山神云自葛木嶺蹊金峯山其間危險雖苦行者猶或艱汝等架石橋通行路衆神受命夜々運崑石督營構小角呵神云何不早成對云葛城峯一言主神其形甚醜難晝役待夜出以故遲耳小角促一言主一言主不肯小角怒咒縛繫之深谷下略之釋書因云此をよめる和歌

石橋のよるの契も絶ぬへし

藏人左近

明るわひしきかつらきの神

按諺云役小角集衆神於葛木金峯間架石橋其以不早成而小角怒咒一言主縛繫之深谷云予嘗疑小角者葛城里民而一言主者天神裔胤也神而所縛于人則何以爲神也傳謂小角能役使鬼神又云小角所屏于荒地云小角靈于

鬼愚于人固可恠之事吾神者習聞其說樂其誕而遂至不辨焉又可痛哉啓蒙之辨

○四十七代廢帝天皇天平寶字八年從五位上高賀茂朝臣等奏シテ葛城山ノ東下高宮岡上ニ迎ヘテ鎮奉ル續日本紀ノ心

○御位 貞觀元年正月廿七日葛城一言神ヲ從二位ニ叙セラル三代實錄ノ心

○葛城山金剛山同山異名也此山大和河内のさかひ也半腹のみねを高天山といへり新古

よそにのみてややみなんかつらきや 讀人不知

高天寺には彼初陽每朝來とさへつりし鶯の宿せし梅朽ながら有也かつらきの岑には岩はしの跡あり大和名所記

○神託 諸の人の心の鏡ちりつもれば神明すがたのかげをうつさず祈る心のつよからん程人の心のただしき道をみがゝばいのらすとても心のまゝならん倭論語

○高賀茂 同郡所祭一座 味耜託彥根命大己貴命子下照姬兄也

此所の寶藏に文治元年靜法樂のまひをまひし裝束義經のよろひあり

右にそばだちたるは御影山左は袖振山也

清御原天皇吉野の宮にましくて琴をしらべ給ひしに雲おこりて神女のあらはれ曲に應じて舞羽衣の袖を振けるより袖振山云々

○籠守社 同吉野山ニ有リ

大宮三座住吉同體也一宮記 神傳ハ住吉ノ下ニ見エ

タリ
草根集

吹はらへ山は吉野の秋霧に

こもり勝手もみえぬ神風

○金峯社 同吉野山ニ有リ

祭所 號三藏王權現一人皇廿八代安閑天皇也繼體天皇ノ長子也

○勾大兄廣國押武金日天皇男大迹天皇長子母云目子媛日本紀

治二年十二月崩葬河内舊市高屋丘陵金峯山權現是也 曆年史

昔役行者在吉野山時神現釋迦像行者云此形難度衆生一次彌勒形現行者尙云未也次藏王權現出

甚可怖貌也行者云此我邦之能化也 神社考

○金生明神 此社吉野山ニアリ 金峯之金ヲ護神ト云々 傳未考金峯山ト號スルハ彌勒佛出世ノ時地

ニ敷ベキ金此山ニ有故也云々

○與喜山天神 初瀬ニアリ三燈嵩ト云々傳未考

○葛城社 葛城上郡葛城山ニ有リ 祭神一座 一言主命 一云爲事代主神所變也 又云高彥根命分身也 系圖傳 素戔嗚子 啓蒙

○幼武天皇登幸葛城山之時百官人等悉給著紅紐之青摺衣服彼時有自其所向之山尾登山上二人既等天皇之鹵簿亦其裝束之狀及人衆相似不傾爾天皇望令問云於茲倭國除吾亦無王今誰人如此而行即答云之狀亦如天皇之命於是天皇大怒而矢刺百官人等悉矢刺爾其人等亦皆矢刺故天皇亦問云然告其名爾各告名而彈矢於是答云吾先見問故吾先爲名告吾者雖惡事而一言雖善言而一言々離之神葛城之一言主之大神者也天皇於是惶畏而白恐我大神有宇都志意美者不覺白而大御刀及弓矢始而脫百官人等所服之衣服以拜獻爾其一言主大神手打受其捧物故天皇之還

四日釋日本紀西宮鈔ニアリ日本紀ニハ四月朔日
○廣瀬川歌に詠す

大宮殿 小折社 火神社

廣瀬川によめり

續古今集戀部

ひろせ川袖つくはかり淺きせに

讀人不知

心ふかめて我はおもはん

○若宮 宇智郡御山村ニアリ吉野ヨリ半里許南也

此處井上内親王ノ子ノ靈社也

若宮は雷神なり是井上内親王の御子なり親王御著帶ながらながされおはしまして後に御産有おのこ御子なれば御名を雷神と名付奉りき此名故有べし御産所は大岡小山といふ所也それより爰を産屋峯といふ也雷神人となり給ひて御母の皇后兄の他戸親王ながされ給ひし由來をしろしめして御門をふかく恨給ひてつゐにみまかり給ひし其君の御門に御惱をかけ給ひ又は人民をなやまし給ふ故若宮の神號をなして神國祠給ふ也大和靈安寺縁起の心 井上皇后は聖武帝の姫宮也同郡に皇后の陵あり 實龜元年ニ光仁帝ノ后ニ立玉ヘリ此御腹ニテマシマス他戸親王ヲ皇太子ニスエ玉ヒシガ第一ノ皇子

山部親王ヲ太子トナサント參木百川ハカラヒケレ

バ井上皇后ト天皇ト申アシク成テ潜ニ天皇ヲノロ

ヒ他戸太子ヲ早ク即位セシメントハカル事アラハ

レケレバ皇后及ビ他戸太子ヲオヒヲロス年ヲヘテ

井上皇后モ他戸太子モ皆卒ス井上ノ怨靈龍ト成タ

リトイヒ傳タリ。已上王代一覽

○御靈社 同靈安寺ノ内ニ有リ 祭所

井上皇后東向 早良親王 北ノ脇南向

他戸親王北向 已上三座

延暦十九年井上内親王ニ皇后ノ位ヲ贈御墓ヲ陵ト

號スベキノ宣下有リテ勅使ハ從五位下葛井王ナリ

類聚國史ノ心

○勝手社 吉野郡吉野山 祭神一座 愛鬘命 傳未

レ考

○天孫臨降之時三十二神相添而奉ニ天降ニ也次爲ニ

護國後見ニ被レ下之三十二神云々愛鬘命勝手大明神

也六十四神式

吉野山和歌に詠す畧之

師兼千首

三芳野や勝手の宮の山鳥

神につかふるみもふりぬめり

連廣足^一祠ニ風神于龍田立野^一同上

○瀧祭神與ニ廣瀨龍田神ニ同體異名水氣神也故廣瀨

龍田神號ニ天御柱國御柱ニ是天逆戈守護縁神祇本源

○神託 ナベテノ貴賤天ヲ祈リ地ヲマツリテ諸神

ヲ祈ランヨリ汝ガ父母ニ能ツカエヨ則兩親ハ内外

ノ神明ナレバ内アキラカナラデ外ノミヲネガフベ

カラズ倭論語

攝社

三太神 若宮 瀧祭社

御位 清和天皇貞觀元年正月廿七日廣瀨龍田正一

位 二十二社註式

祭 天武天皇治五年夏四月朔日祭ニ龍田風神廣瀨

大忌神^一日本紀

日本紀 續日本紀 簾中鈔 年中行事等ニハ四月

七月四日トアリ今ハ九月十三日也立田和歌多シ龍

田ト號スル事^一むかし此所田にてありし時雷神お

ちてあがる事をえす童子と化したりそこをつくり

ける農夫やしなひて子とせり比しも夏なるに隣村

には雨ふらざりしに此農夫が田の上には夕立折々

そゝぎて秋の納思ふまゝにしてけり其後此童子い

とまこひて小龍と成て天にのぼるかれがつくる田

を龍田とぞいひけるやがて所の名とせり云々龍田

は正字立田は半假名也 詞林採葉

拾遺愚草

龍田山神のみけしにたむくとや

くれ行秋のにしきをるらん

堀川百首

立田川しからみかけて神なひの

みむろの山の紅葉をそみる

壬二集

行まゝに立のゝのへの霞哉

わくとやよその人のみるらん

此ついき 神南備森 神南備川あり

○廣瀨社 高瀨郡河合村ニアリ 祭神一座

和賀宇加乃賣神

伊勢外宮神ト同シ水德神也

廣瀨坐和加宇加賣命神社延喜式

又御名大忌神^一日本紀○又御膳持若宇加賣命令義解

天武天皇四年四月遣ニ小錦中間人連蓋大江山中曾

禰連韓犬ニ祭ニ大忌神於廣瀨河曲^一日本紀○伴神伊弉

諾伊弉並尊子豐宇賀乃賣神祇官坐御食神也^一神祇

御位 祭 同上 祭立田廣瀨トモニ四月四日七月

此歌は朱雀院の行幸のとき御供にての歌也

壬二集
手向山紅葉のにしきぬさはあれと

猶月かけのかゝるしらゆふ

此ついきに浮雲のといふあれども鎮座出所しれ
ず飛火野 野守池など名所有

○櫟本社 同和爾南ニ有リ 祭神一座

牛頭天王 山城祇園同神也兼俱遷宮記

此鳥居の内に柿本寺有其東に人丸の塚有或書云人丸の塚は大和國添上郡治道柿本寺にあり清輔集に大和のいそのかみ柿本寺といふ所の前に彼塚有と聞て卒都婆に柿本人丸墓としるし付てかたはらに歌をかき付たる

世をへてもあふへかりつる契りとして苦の下にも朽せさりけり清輔集にいそのかみと有はたがひたるやうなれとも和名類聚云添上郡に石上郷有此所は添上郡のはづれ石上の境也云々長明無名抄に人丸のつかははせへ參道也所の者は歌塚といへり云云されば清輔長明の兩説此所になふとみえたり已上名所記

○辰市社 同郡大安寺村南ニ有リ 祭神二座春日

明神鹿島ヨリ三笠山ニ移リ玉ヒシ時供奉セシ時風秀行が靈社也春日記俗に鴻宮といふ也辰市名所也
壬二集
名におひて風もけふより辰市や

たつ商人の袖を涼しき

此邊に和歌に讀る 賣間清水アリ同上

○新龍田 平群郡法隆寺六七町坤民屋間有此所ハ本龍田社ヲ聖德太子勸請シ玉フ也推古天皇十四年二月十五日ニ聖德太子法隆寺ヲ建立アラントテ其地景ヲ求ニ巡行マシケルニ立田明神老人ニ化シ玉ヒテ伽藍ノ地ヲシメシ玉ヒ吾又守護ノ神トナルベシト誓約アリシ也依テ立野本社ヲ此所ニ勸請シ玉フ也是法隆寺ノ鎮守也云々

○龍田社 同郡立野ニアリ法隆寺ヨリ一里餘アリ 祭神二座

天御柱國御柱神ト號ス則級長戸邊神 級長津彥神也 風神也

伊弉諾尊云我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化爲神號云ニ級長戸邊命亦云ニ級長彥命一是風神也日本紀

天武天皇治四年夏四月遣ニ小紫美濃王小錦下佐伯

後深草御願也

○若宮祭 保延二年丙辰九月十七日始

○行幸 六十六代一條院永祿元年三月廿三日始○

三笠山春日山に御笠山としてひきくだりてちいさき山に春日の社おはしますかすが山は惣名也三笠山は別名也顯注密勤

春日神託 諸人等神明ノタスケヲ受ント思バ常ニ慢心ヲシリゾケヨタトヘバ一毛ノ慢心ノ神明ヲヘタツル事大雲ノ如シ和論語

○水屋社 祭神三座 素戔烏尊 稻田姬

南海神女云々祭ハ四月五日ニテ能アリ 伏見院御宇

始云々 水屋川アリ

水屋川夫木すゑせきかけてかすかのゝ

爲家

野田のさなへはけふそ取る

○八幡宮 添上郡東大寺境内ニ在リ

祭神 宇佐ニ同シ○北畠准后説云孝謙天皇御宇天

平勝寶元年依ニ八幡神託ニ造レ宮

○改曆雜事記云孝謙帝天平勝寶二年宇佐八幡東大

寺入御啓蒙

中ハ八幡太神 右ハ姫太神玉依姫 左ハ神功皇后

宇佐緣起 ○天平勝寶元年十一月十九日内裏にして

年七つの童子に神うつらせ給ひて我都にうつりなましと也 宇佐緣起 同廿四日甲寅石川朝臣年足藤

原朝臣魚名等を宇佐八幡大神を向へ奉る勅使として道すがらのけがれを清めさせたり續日本紀ノ心神御乗物なきよし神勅ありしによりて御門の玉輿を

たてまつらせ給ふ訓林採葉禰宜左右朝臣社女神輿をたてまつらせ給ぬれば圓麻呂神驛にのりたり 宇佐緣起 十二月十九日五位六衛府舍人など神を平

群郡にむかへて此日戊寅都に入奉り宮南の梨原宮に新殿をつくり僧四十口にして七日行ひき同十二月丁亥日御門行幸なり給ひ左大臣橘宿禰諸兄公み

ことのりを申さるゝ也其宣命のことば續日本紀にみえたり梨原宮より大佛殿のほとりにうつし奉るなりそのゝち鎌倉西明寺の仰によりて三月堂の南

に移し奉る也寛永十九年十一月廿七日に炎焼して黒木の神殿に移し奉りて後造營なし

此上の山を手向山といふなり

此度はぬさも取あへす手向山

紅葉の錦神のまにまに

菅家

命御子乎將又別神而所_レ祕邪云是唯難_レ言是以不_レ言矣決非_三兒屋命子_一啓蒙

同攝社 ○兵主神社 懸稅神社稅一作橋 紀御社 種樹神也所_レ祭三座

一言主神社 同啓蒙

○若宮外院小社一童子社は三輪明神次南南宮社は金山彦神次の東兵主社は諏訪明神○同若宮付り内院小社若宮は神職一家の神祕にて他に知る事なしと春日記に書り内院に小社二座有南は太力雄神北は通合神此神は中臣祐房朝臣の靈社也祐房若宮を移し奉りて後仁平二年十二月廿四日に卒して廿七年をへて治承二年に神託ありて通合神とあかめ申春日記 又此社に春日曼陀羅有壽永年中普賢寺基通公御夢惣の圖なり

○若宮外院小社 廣瀨神社 俗鬼子母神といふ次の南懸橋神社は葛城神其南に卅八所明神社其南に佐良氣神社は蛭兒神しばらく南に紀伊御社四座日前五十猛 大屋姫 狐津姫 春日記

問社内六道者何云神祇拾遺云明神影向時以_レ櫛爲_レ鞭駕_レ鹿來_三臨三笠山下_一也其所_三經歷_一號謂_三鹿

道_二六與_一鹿音相似而今聚_レ石洒_レ水以呼_三亡魄_一又可_レ歎哉乎 啓蒙

○本宮位記 人皇五十四代仁明天皇治十七年喜祥三年九月正一位勅使參議藤原助向

祭 五十六代清和帝貞觀元年十一月九日始或五十五代文武帝仁壽三年始 同御宇天安二年十一月三日庚申停_三平野春日等祭_一啓蒙 ○春日祭といふは大宮の神事也二月十一日の申日一年に兩度あり勅使立也仁明天皇嘉祥三年九月に中臣秀基はしめて奏聞をへて後に清和天皇貞觀十一年十月九日庚申の夜はじめて祭有 已上舊記 此祭をよめる和歌拾遺愚草 けふ祭るしるしにとてやそのかみは

三笠と共に天くたりけん

霜月の祭は若宮の神事也此祭は保延二年九月十七日にはしまれり注進狀にみえたり其後寛正年中に十一月廿七日に日をかえられたり春日記 右假名がきの分大和名所記にみえたり

清和天皇貞觀十八年二月丙申春日祭如_レ常云々如_二此等文_一者天安已後被_レ始行之條顯然歟啓蒙

○臨時祭 九十一代伏見院正應三年二月九日始

○回廊に三つの門有北は内侍門中は僧正門南は慶賀門といへり内侍門を入て北部の社は伊弉諾尊其東椿本社は三見宿禰命其南の社は立田明神みづがきをこえて杉本社は大山咋神其東の社は田心姫つぎの栗辛社は火酢芹尊其南海本の社ハ大物主命其東西にむかふ社は八雷神也已上春日記

四所神三笠山に御垂跡の事春日社家傳には兒屋根尊ハ人王三十七代孝德天皇四年十一月戊申日御鎮座也三神にさき立給ふ事王代十一代年曆二百二十一年也人皇四十五代聖武天皇天平十二年大中臣清丸三笠山の春日の社より攝津國嶋下郡壽久山に移し奉りて本座の山の名にしたがひて三笠山と名付たり三神にさき立て春日山に御鎮座あきらかなるよしみえたり春日記

門院小社付中院小社○内院の小社二座西にむかふ南の一座は手力雄神北の一座は天御中主尊中殿の坤岩本社は住吉明神又東部に神護寺の社次の南の青櫛の社は青和幣次の南の辛櫛社は白和幣次の南穴栗社は穴次神次の南井栗社は高魂尊くはしくは春日社に有名所記の心○當社八講の始は人皇六十二

代村上天皇天曆元年より始て時の長者は貞信公別當は平源大僧正也又の説六十八代後一條院寛仁元年二月廿日にはじむとも其後七十代後冷泉院康平八年より四月九日九月四日に行るゝ也舊記それより中絶て年へたりけるを寛文十二年十二月五日より九日迄行れし也八講殿のつゝきに舞殿有貞觀元年の造立陪從の神樂は爰にして奏せされしと也此前に林檎木有春日祭奉幣の所也二つのはし有北を一位橋南を二位橋といへり同上

○啓蒙云所攝社任舊式ニ如レ此

祓戸神社 榎本神社 太力雄社 青櫛社 右本宮攝社也

○若官 本宮ヨリ一町許平森ノ中ニアリ 祭神三座内二座輔佐神也

○若宮垂跡四所相同乎否兼滿云四所共以二同日一影嚮也若宮遷座神代也廿二社註式

○若宮輔佐兩神說

舊記云文永七年七月十三日秀氏狀云太力雄太玉兩神也祕說 已上啓蒙

○問上所述中欠ニ若官本縁ニ若依ニ字儀ニ則天兒屋

に造立也此所は祭の日勅使役人等を著到して神殿にまうでらるゝ所也地嶽谷はむかし解脫上人の弟子璋圓僧都とてたつとき人有遷化の後いかなればにや或女人につきてさまゝ口走中に我大明神の御方便よりいみじきはなしかりにも値遇すべしとひ深重の惡人なり其他方の地ごくへはつかはすまじかすがのゝ下に地ごくをかまへそれにあつめ入酒水をそゝぎ經陀羅尼をかきしめたすけ給ひなんと也我も魔道にしづみつれども慈悲方便の洒水口に入て三ねつのくるしみをはなれ和光垂跡の說法を耳にふれて九泉のたのしみをきはめん事ありがたくはあらずやと錠ければ聞人みなかんたんせり沙石集東に榎本社有猿田彦神也春日記此社の前に青瀧といふ有青瀧の橋有是より若宮に行中間道とて細道有ちいさき橋有かたらいの橋といふ也前にいふ左道に祓戸社東に藤の鳥居有昔は藤有て立よりはつかさゝも心せよ 後醍醐天皇

藤の鳥居の花の下かけ

已上大和名所記ノ心 本殿祭神四座

武甕槌命 齋主命 天津兒屋命 姫太神

○伊弉諾尊拔_ニ所帶十握劍_ニ斬_ニ軻遇突智_ニ其劍鐔垂血激越爲_レ神號云_ニ甕速日神_ニ次熯速日神是武甕槌神之祖也日本紀○甕速日神之子熯速日神々々々子武甕槌神同上

●甕速日神——熯速日神——武甕槌神

齋主命 又經津主命_凡

伊弉諾尊斬_ニ軻遇突智_ニ其劍乃垂血是爲_ニ天安河邊所在五百箇盤石_ニ也卽此經津主神祖矣日本紀○高皇產靈尊更會_ニ諸神_ニ選_下當_ニ遣_ニ於葦原中國_ニ者_上僉云磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神同上

磐裂神

磐筒男神

經津主神

根裂神

磐筒女神

天津兒屋命 春日神是也 傳外宮下ニ見ユ

姫太神 傳內宮下ニ見ユ

春日註式云春日垂跡事第四十八代稱德天皇神護景雲元年十二月七日大和國城上郡安部山御坐 同二年正月九日大和國添上郡三笠山垂跡 同年十月九日寅日寅時太敷立宮柱同本宮廻廊始治承三年己二月廿六日也註進狀 啓蒙

諸社一覽第五

大和

以^ニ大和^一日本ノ總名トスルハ此國人皇帝都之始也故總名トスル也唐土ニモ周ヨリ起テ世ヲ周ト名ヅケ高祖漢ヨリ起テ世ヲ漢ト云フガ如シ

○春日社 添上郡春日郷ニ有リ

鳥居より本社の間はるかなり道すからに名所有鳥居に青櫛を壹本たてそえたり此内左は三笠山ふもとびやうくたる野也春日野是也和歌により拾遺愚草に

朝日さす春日のをのゝをつから

先あらはるゝ雪の下くさ

鳥居の纔東に有橋を馬出橋といふ春日のゝけしき二本の塔のありさま馬出橋を足もといろにふみけん若紫のゆかりあればすみれつむなるをざゝ原玉ざゝの上には玉あられつもりひろはん事も片岡の松のみどりは君がため千代の色をやふくむらん

撰集鈔此間に若宮の御旅所有霜月の祭禮に黒木の柱青松葉の軒かた計成御殿を立る也猶東え行南え分入る細道に雪消澤あり

堀川太郎百首

春日のゝ雪消の澤に袖ふれて

君か爲にそ小芹をそつむ

道の東に細きなかれ有率川是也

はねかつらいまする妹をうらわかみ

いさ率川の音のさやけさ

爰を鹿道といふ事は春日明神鹿にめしてうつり給

ふ道なれば也西行法師は六道とかけりこゝに板と

石との橋二つ有板橋をば古郷の橋といひ石橋を善

趣橋といふ六の道わかれたる六道のちまたに是を

擬せりまさしき道や是ならんと善趣橋を過ぬれば

御社もやうく近づきぬ撰集鈔それより東の橋を

五位橋といへり二の鳥居有其東の北づらに神垣森

の跡あり

風雅集

神垣の森のくさはゝ散しきて

尾花そ残る春日のゝはら

院兵衛督

森のはとりに左右の道有右の道を行に著到殿といふ所有其南に地嶽谷といふ谷有著到殿延喜十六年

諸社一覽第五目錄

大和

春日 水屋 八幡 樸本 辰市 新龍 龍田 廣
瀬 若宮 御靈 勝手 籠守 金峯 金生 葛城
高鴨 穴師 三輪 石上 高皇 狹井 鏡作
荒神 高市 太玉 八咫 笹幡 丹生 已上
河内

平岡 譽田 恩智 水分 道明寺 天神 當宗 佐田 鏡
社 降幡 岩船 已上
和泉

大鳥 蟻通 已上

攝津

住吉 安倍 今宮 御靈 座摩 稻荷 森社 生
玉 高津 逆櫓 神明 曾提 北野 天滿 廣田
西宮 生田 長田 茨住吉 比咩語曾 上宮
已上

玉吟集

石神の森の下水ゆふかけて

家隆

大宮人のすゝむ比哉

○俊成社 松原通島丸東人家裏ニ有リ

祭處 俊成卿 此地即彼卿家ノ跡也五條三位ト稱

スルハ此謂也云々祭年記未レ考

○新玉津島 松原通島丸西人家裏ニ有リ

祭神 紀州玉津島ニ同ジ 神傳玉津嶋ノ下ニ見エ

タリ此地勸請ノ年記未レ考和歌神タル故ニ俊成卿

ノ勸請也云々

新續古今集・應永四年新玉津嶋のやしろつくりか

えの比權大僧都堯孝讀せ侍りける百首の歌の中に

社頭祝言といふ事を

今こゝに移すも高き宮居哉

櫛中納言

雅緣

もとの渚の玉つ嶋姫

○天神社 眞トスンデ可レ讀

松原通西洞院川之邊ニ有リ 祭神一座

●少彦名命 ○神代卷大己貴命與ニ少彦名命一經ニ

營天下ニ復爲ニ蒼生及畜産ニ定ニ其療病之方一又爲

攘ニ鳥獸昆虫災異定ニ其禁厭之法ニ百姓咸蒙ニ恩賴ニ

案少彦名命者高皇產靈尊之子也即是五條天神也今

毎年節分人皆詣ニ此社取ニ餅及白米爲レ除ニ疾病ニ也

蓋神代之遺風耶 天子不豫或世間騷動時五條天神

宮被レ懸レ靱矣鞍馬山有ニ靱負明神ニ是亦被レ懸レ靱之

神也靱者看督長之所レ負者也神社考

○當社鎮坐之記未考

○六宮 八條西朱雀大通寺内ニ有リ

祭處 六孫王經基云々 記文未レ考

○炬火殿 七條東ニ有リ

稻荷攝社也御神事之時出レ炬而奉レ迎也故名云々一

社祕也故省畧焉便覽

○吉祥院社 東寺ヨリ未方吉祥院村平林中有リ

祭神 菅承公

此所菅家の離亭之跡也緣起略之

右之外洛内洛外二十一所神明宮稻荷山王ト稱スル

所計ルニ不レ違傳記不レ得レ考故略レ之後見君子考ア

ラハ幸甚耳

諸社一覽第四終

したゝめてよさりなど思ひて有程に夕つかたみる程に此ひつのふたはそめにあきたりけりいみじくおそろしくすぢなけれどしたしき人々近くてよくみんとてよりてみればひつきより出て又つまどぐちにふしたるいとあさましきわざかなとて又かきいれんとてさまゝにすれどゆるがすつちよりおいたる大木などをひきゆるがさんやうなればすべきかたなくてたゞ爰にあらんとおぼすかさらば爰にをき奉らんかくてはいとみぐるしかりなんとて妻戸口のいたじきをこぼちてそこにおろさんとしければいとかるらかにおろされたればすべなくて其つまどぐちひとまをいたじきなど取のけてそこにうづみて高くと塚にて有家の人々もさてあひ給ひてあらん物むつかしく覺てみなほかへわたりにけりさてとし月へにければしんでんも皆こばれうせにけりいか成事にか此つかのかたはら近くはげすなどもえいつかすむづかしき事ありといひつたへておほかた人もえいつかねばそこにはたゞつかひとつぞ有高辻よりは北室町よりは西高辻おもてに六七けんがほどは家もなくて其塚高々とし

て有けるいかにしたることにや塚のうへに社をいはひすえてあなる此ごろもいまに有となん宇治拾遺

祭 九月廿日

○新住吉 高辻通堀川東ニ有リ

祭神 攝州住吉ニ同ジ和歌神ナルニ依テ三位俊成卿ノ勸請云々年記未レ考

○菅大臣社 五條坊門西洞院ニ有リ

祭神 菅家 古老云昔菅家之館也一夜飛梅之天神者是子^コ今飛梅之跡存^ハ于此地^ニ啓蒙左遷時詠^メ梅歌云古知布加波^{フカハ}保比^{ホヒ}於古世與梅乃花阿留志那之登^{ノト}底波留那和須禮楚

○中山社 石神ト稱スル是也 三條猪隈邊ニ有リ

祭神 二座

豐石牖命 奇石窻命

○天照大神入^ニ天石窻^ニ時群神歌樂令^ニ天手力雄神引^ニ啓其扉^ニ遷^ニ座新殿^ニ令^ニ豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守^ニ衛殿門^ニ是並太玉命之子也古語拾遺

○後冷泉院永承五年六月十六日建^ニ神社^ニ同六年十一月授^ニ從三位^ニ天喜元年四月始奉^ニ官幣^ニ神社考祭ハ四月中申日

○蛭子社 建仁寺前ニ有リ鎮坐傳未_レ考

祭 九月廿日

○若宮八幡 五條橋東四町ニ有リ往昔ハ佐女牛ノ六

條ニ有リ

祭神 石清水ニ同シ 人皇七十代後冷泉院天喜元

年依ニ勅願ニ勸請兼親奉ニ行ニ伊豫守頼義御沙汰

也二十二社註式

○玉葉集ニ後深草院御灌頂長講堂にて侍けるに寅
時の水くませ給はんとて六條若宮の井に臨幸のと

き讀る

石清水なかれは深き契りとも

前大僧正公什

こよひや君かくみて知るらん

○五條八幡 五條橋西ノ傍ニ有リ傳未_レ考

○市姫社 五條寺町市屋道場金光寺内アリ

祭神傳云宇賀姫ト未_レ考 市姫とは市場にい
はひたる神の事也
漢鑑草

市姫の神のいかきのいかなれは

あきなひ物に千代をつむらん

○ハンジャウノ社 高辻通室町西ニ有リ

額云 繁昌社 祭神未_レ考有云此社ハ靈社傳宇治

拾遺ニ有リト依_レ之コレヲ記ス後人考アルベシ

今は昔長門前司といひける人のむすめ二人有ける
が姉は人の妻にて有ける妹はいと若くてみやづか
ひしける後には家にいたりけりわざと有つきたる
男となくて只時々かよふ人などぞ有ける高辻室町
わたりにぞ家は有ける父母もなくなりておくのか
たには姉ぞゐたりける南面の西のかた成妻戸口に
ぞつね々人にあひ物いふところ也廿七八なり
けるとしいみじく煩て失にけりおくは所せしとて
其つまど口にぞふしたりける扱有べきことならね
ば姉などしたでゝとも人のみいでいぬさてれいの
さほうにとかくせんとてくるまよりとりおろす櫃
かるくとしてふたいさゝかあきたり怪しくてあ
けてみるに露物なかりけり道などにて落などすべ
き事にもあらぬにいか成事にかと心えずあさまし
すべきかたもなくてさりとてあらんやはとて人々
はせかへりて道をみれども有べきならねば家にか
へりぬもしやとみれば此妻戸口にもとのやうにて
打ふしたりいとあさましくもおそろしくてしたし
き人々あつまりていかゞすべきとさわぐ程に夜も
いたくふけぬ夜あけて又ひつきに入て此度はよく

之西一條大路之北ニ祠也今幸神町ト號ス此出雲路
道祖神鎮坐地也朱雀院天慶二年奉遷ニ出雲路京
極啓蒙便覽ノ心

○神傳前ニ記ス

○晴明社 堀川西一條大路北ニアリ卽晴明町ト號ス

今人家ノ中ニ社アリ

祭神一座 安部晴明

安倍晴明者仲麻呂之後也就賀茂安憲學天文窮其蘊奧至於曆算推步之術無不兼習花山院寬和二年六月二十二日夜帝與式部丞藤原道兼沙門嚴久潛出宮路過晴明宅晴明適避暑于庭仰見驚云天象呈異天子避位何其怪哉帝聞而笑走入花山寺薙髮晴明急入宮奏事帝不在焉神社考術家白藤道長言其日家內有怪至期相國閉門謝客肺時有叩者問之對云和州之瓜使也開門納之于時大史安部晴明大醫重雅僧勸修在座相國顧安大史云家裡有齋戒不知此瓜可嘗不晴明云瓜中有毒不可輒啖也相國語修云許多瓜子何爲毒乎修誦咒加持忽一瓜宛轉騰躍一座驚怪重雅乃袖出一針針瓜其動便止割見中有毒蛇

針中其眼蓋術家之言是也都下嘆三子之精其術矣同上

●晴明役使十二神將妻畏職神形因咒以置十二神于一條橋下有時事喚而使之自是世人占吉凶于橋邊則神必託人以告云

三善清行死子淨藏祈之于一條橋而清行蘇生故世人號云反橋同上

○櫻葉宮 洛陽朱雀東近衛西ニ有リ今出水通千本東是也 祭神一座

天照太神 此神宮者上古在右近馬場五月荒手番之時太陽光花降下馬場之頭也故世人稱云日降神明啓蒙

○白山社 白山通二條下人家裏ニ有リ

祭神 賀州石川郡白山權現 遷座紀文未考 此宮有ル故ニ通ヲ白山ト號ス狹屋町是

○高倉八幡 三條坊門高倉万里小路間ニ有リ此宮有ル故ニ此坊門ヲ八幡町ト號ス

祭神 應神天皇 人皇九十七代光明院御宇康永三年等持院勸請也云々等持院尊氏之院號也又ハ等持寺八幡ト號ス

テ大野東人ヲ大將軍トシ紀飯麻呂ヲ副將軍トシ諸國ノ軍勢一万七千人ヲ添又佐伯常人阿倍虫麻呂ニ四千人ヲ添テ相共ニ廣嗣ヲウタシム伊勢太神宮ニ勅使ヲ立奉幣祈請セラル所々ノ關所エ兵ヲツカハシ守シム廣嗣ハ肥前ノ國遠珂ノ郡ニ城ヲカマエ板櫃ト云所ニ出張ス十月大將軍大野東人板櫃川ニテ廣嗣ガ万騎ノ兵ト合戦ス廣嗣ガ前手ノ兵木ヲアミテ船トシ河ヲワタラントス東人虫丸大弓ヲ放テ射ケレバ敵ス、ム事アタハズ東人等六千餘人ヲヒキヒテ進ミ廣嗣ニ言ヲカケテ呼ケレバ廣嗣馬ニ乗テ進出テ勅使ハ何人ゾト問フ東人某々ト答ケレバ廣嗣馬ヨリ下テ我本ヨリ朝廷ニ叛カズ只眞備ト玄昉トニ怨アリト云東人然ラバ何トテ大軍ヲ起シ官軍ニ向テ戰ヤト云フ廣嗣コタユル事アタハズシテ退ク廣嗣自五千人ヲ帥ヒ其弟綱手ニ五千人ヲ添又多胡古丸ニ兵ヲ添テ三手ニ分レテス、ム廣嗣ガ一手先進テ二手ハイマダ到ザル内ニ官軍急ニ攻ケレバ廣嗣戰マケテ船ニ乗テ異國エニゲントスル處ヲ肥前國松浦郡長野村ニテ官軍ノ内安倍黒丸ト云者廣嗣ヲ生捕テ是ヲ斬ル綱手モ同ク殺サル或說ニ廣嗣

馬ニ騎テ海エトビイリテ其靈タ、リヲナスニヨリテ松浦ニ社ヲ建テ神トアガムトイヘリ廣嗣ハ宇合子也同上

吉備 始ノ名ハ下道眞備ト號ス

元正帝靈龜二年多治比縣守ヲ遣唐使トス藤原宇合ヲ副使トス吉備大臣此時ハイマダ下道眞備ト云テ二十三歳也阿倍仲麻呂十六歳二人共ニ學問ノ爲ニ縣守ニ從テ入唐ス 聖武帝天平七年多治比廣成大唐ヨリ歸ル下道眞備モ皈朝ス在唐ノ間廿年 稱德帝天平神護二年十月吉備眞備ヲ右大臣トス此人再入唐シ博學ノホマレ有ニ依テ微賤ヨリ登庸シテ大臣ニ至ル世ニ所謂吉備大臣是也 光仁帝寶龜二年三月右大臣吉備致仕ス 同六年十月吉備薨ス歳八十二同上

吉備靈八所ニ祭ル傳記未レ考

火雷神 菅丞相御靈也 神社考同

祭 八月十八日

○京極八幡 上御靈西二町ニ有リ 不考

○出雲路幸神社 帝城左京京極之西ニ有リ

祭神一座 猿田彦神 道祖神也幸神ト號昔ハ京極

繼ヲ殺ント奏ス天皇從ハズ是ヨリ政ヲ太子ニ任セズ太子甚恨ム此時天皇ノ奈良エ行幸スルヲヨキ折節ト思ヒ大伴繼人大伴竹良ヲ日暮方ニ種繼ガ家エ遣シネラハシム此時都遷ノ砌ニテ家造モマバラニテ種繼燭ノ下ニ有ケルヲ窺テ矢ヲ放ツアヤマタズ射通シテ死ス天皇ヲドロキ玉テ奈良ヨリ長岡エカヘリテ繼人竹良ヲ捕テセンギアルニ太子ノ所爲紛ナカリケレバ太子ヲ淡路エ流ス太子斷食シテ路ニテ死ス淡路ニテ葬禮ヲ行フ繼人竹良ハ斬罪シ其外太子方ニ侍ル者流罪セラル種繼ニハ正一位左大臣ヲ贈ラル甚ヲシミ玉フ故也其後早良ノ靈タ、リヲナス由テ崇道天皇ト諡ス已上王代一覽

伊與親王 崇道天皇子也拾芥抄

伊與親王此年十月藤原宗成ガス、メニヨリ謀叛ノ志アリ右大臣内麻呂是ヲ知テ奏聞シ宗成ヲ捕エ白狀シケレバ左中辨安倍是雄左兵衛督巨勢野足ニ官兵ヲサシソエ親王及其母藤原夫人吉子ヲ捕エテ川原寺ニ押コメ飲食ヲトドメケレバ親王モ吉子モ藥ヲ吞テ死ス宗成流罪セラル大納言雄友ハ親王外舅ニ依テ伊與エ流サル其外解官者多シ同上

橘逸勢 左中辨從四位下入居之子三代實錄能書也嵯

峨帝弘仁九年四月内裏殿開門ノ額ヲ改ム北面ハ宸筆也東面ハ逸勢書之又入唐シテ平城帝大同元年八月歸朝ス承和七年七月嵯峨太上天皇崩ズ此折節春宮帶刀伴健岑但馬守橘逸勢等謀叛ノクハダテアリ太子恒貞ヲトリタテ申サントノ事也恒貞ハ淳和ノ子ニテ天皇ノイトコナルニヨリテ淳和崩シテ後互ニヘダツル心有ケルニヤ嵯峨崩御ノマギレニ健岑逸勢カクハカルナルベシ阿保親王ヒソカニ此ヲ知テ天皇ノ御母嵯峨ノ皇太后ニ申ス皇太后此ヲ藤原良房ニ告テ奏聞ス即官兵ヲツカハシ二人ノ家ヲ圍テ是ヲ捕エ糺明ス逸勢ハ伊豆エ流シ健岑ハ隱岐エ流ス太子ハ後ニ僧ト成テ恒寂ト號ス同上

文大夫 宮田丸ト號ス

右同承和十年十二月文屋宮田丸トイフ者謀叛ノ企アリ事アラハレテトラエテ伊豆エ流ス同上

廣嗣

聖武帝天平十二年八月大宰少貳藤原廣嗣上表シテ時ノ政ノ得失ヲ申シ下道眞備ト僧正玄昉世ヲ亂ル間此ヲ除ント言上シ九月筑紫ニテ謀叛ス是ニヨリ

○福大明神 洛陽堀川西猪隈東一條大路南ニ有リ
祭神 紀貫之也

神地本ニ高倉東勘解由小路寛永比筑ニ九條殿下
居ニ之時接ニ神地ニ也依レ是被レ遷ニ神殿於堀川西一下略
之啓蒙 或此神稻荷明神也云々

○水火天神 上京天神圖子ニ有リ

祭神 北野ニ同シ傳未考

○五所八幡 上京極北田中ニ有リ

祭神 五所 筑前國大分宮

肥前千栗宮 肥後藤崎宮

薩摩新田宮 大隅正八幡

已上是謂ニ五所別宮也

件五座在ニ外國ニ不レ便ニ參詣ニ也仍後栢原大永年中
奉レ移ニ山城國小山庄ニ神祇拾遺

○御靈社 上下 上ハ京極上ニ有リ下ハ同ク春日通

ト大炊御門ノ間ニアリ古ハ町尻一條ノ下ニ有慶長
年中ニ此所ニ移ス云々

●御靈八所 早良親王 伊與親王

藤原夫人 文大夫 橘逸勢

藤原廣嗣 吉備公 火雷神

●有云上御靈社ハ 早良親王 吉備公
下御靈社ハ 伊與親王 藤原夫人云々

○文大夫 綴喜御靈是也神祇拾遺

橘逸勢 下桂御靈是也同

火雷神 上桂御靈是也同

三代實錄云清和天皇貞觀五年五月廿日於ニ神泉苑ニ

修御靈會ニ云々所謂御靈者崇道天皇伊與親王藤原夫

人及觀察使橘逸勢文屋宮田丸等是也並坐レ事被レ誅

冤魂成レ厲近代以來疫病死亡甚衆天下以爲此灾御

靈之所レ生也今茲春初咳逆疫百姓多斃朝廷爲レ祈至

レ是修ニ此會ニ以賽ニ宿禰ニ啓蒙

朱雀院天慶二年勸請也神祇正宗

早良親王 光仁帝子 桓武天應元年御弟早良親王ヲ

太子トス四年八月天皇奈良エ行幸早良太子右大臣

是公中納言種繼長岡ノ留守タリ天皇常ニ遊獵ヲ好

テ政ヲ太子ニ任ゼラル種繼ハ天皇ノ近臣ニテ内外

ノコトヲ執行フ長岡エ都ウツシノコトモ種繼ガ進

メ申トコロ也或時太子奏シテ佐伯今毛人ヲ參議ト

ス種繼佐伯氏は參議ニ昇ル家ニアラズト申テコレ

ヲオサヘトドメントス太子憤リ怨テ事ニフレテ種

傳記未ニ分明 高野神社兩說也一云天照太神亦

早良親王云々 便覽ノ心

○御蔭社 同所

當社下鴨影向之宮也昔天子每年四月午日被_レ立_ニ勅使_一以爲_レ祭也世人稱云_ニ御蔭祭_一故名_レ社耳祝部社務等乘_ニ羽車_一神官悉應_レ位而騎馬扈從奉_ニ供奉_一也誠非_ニ輕易之神事_一故今及_ニ怠倦_一者乎 同上

○石藏社 愛宕石藏ニ有リ

和歌新勅撰

足引の石藏山のひかけくさ

賴資

かさすや神のみこと成らん

祭神 石座大明神 傳未_レ考

舊記云天神所_レ籠之窟也 便覽

○大宮 葛野郡紫野ノ北ニ有洛陽大宮通頭也平林ノ

内ニ有リ大宮ト號ス

神傳未_レ考

○大將軍社 紫野大德寺ノ門前町中ニアリ

祭神 大將軍也 此神女神。磐長姫

●日吉神道密記云大將軍神大山祇女木花開耶姫之姉也其代昔以_ニ其顔貌醜而遂不_レ幸焉云故此神守_ニ夫婦之配匹_一啓

軻遇突智

雷神

大山祇磐長神

○七社 同紫野大德寺ノ南ニ有リ

伊勢 春日 石清水 稻荷 賀茂 松尾 平野

此七所ヲ勸請ス故ニ七社ト號云々

亦ハ此邊ニ七野アリ其神ヲ勸請ストモ七野ハ内野

蓮臺野 紫野 舟岡野 柏野 北野 平野云々 社

記未_レ考

○惟喬社 雲林院ノ南道ノ傍ノ社は也云々紀文未_レ考

後ノ君子ノ考ヲ待ノミ

○惟仁社 同所ノ西藪ノ内小庵ノ中ノ小社は也云々

如_レ前

○大將軍社 洛陽一條之西紙屋川之東ニ有リ 祭神

一座 大將軍 記未_レ考

○文子天神 同大將軍ノ邊ニ有リ

祭神 菅相公

緣起云天曆元年欲_レ遷_ニ北野_一之前遷_ニ文子之傍_一云

是啓蒙

○鳴瀧社 鳴瀧川ノ東ニ有リ 神未_レ考

祭九月廿八日

有常皆詠レ歌既而惟喬彌厭ニ俗塵ニ隱ニ于小野ニ時人號ニ小野宮ニ云々貞觀十五年二月薨ニ二十六啓

○世ニ惟仁ノ兄惟喬トアラソヒ有リテ相撲ノ勝負ニヨリテ位ヲ定ラルト云ハ誤也其上惟喬ノ方ヨリ相撲ニ出タリト云ヘル紀名虎ハ四年以前仁明ノ承和十四年ニ病死セリ然レバ彌虛説也王代一覽

○むかしみなせに通ひ給ひしこれたかのみこれいのかりしにおはしますとも右馬頭なるおきなつかうまつれりひごろへて宮に歸給ふけりみをくりしてとくいなんと思ふにおほみき給ひろくたまはんとてつかはさざりけりこの右馬頭心もとながりて

枕とてくさひき結ふこともせし秋のよとたにたのまねなくにと讀けりときはやよひの晦日也けりみこおほとのごもらであかし給ふてけりかくしつゝまうでつかうまつりけるを思ひの外に御ぐしおろし給ふてけりむ月におがみ奉らんとてをのにまうでたるにひえの山のふもとなれば雪いと高ししゐてみむろにまうでておがみ奉るにつれゝといと物悲しくておはしましければやゝひさし

くさふらひていにしへの事などおもひいで聞なりけりさてもさふらひてしがなと思へどおほやけごとゝも有ければえさふらはで夕ぐれに歸るとて忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君をみるとはとてなんなくゝきにける伊勢物語

○小野 山里 篠原 山田 雪 炭竈 歌ニ詠ス
○落葉社 同下小野ニ有リ

傳言嵯峨天皇之皇后靈社也便覽

○江文社 愛宕郡大原ニ有リ 祭神一座

●倉稻魂命 伊弉諾子 傳前ニ見ユ

内裏三十番神篇云江文大明神倉稻魂命也神祇正宗

○大原 音無瀧 臈清水

此所之名所也歌畧之

○靱社 同郡鞍馬寺門内ニ有リ 祭神一座 大己貴

命 傳前ニ有リ

○此社天子不豫世上騷動之時懸ニ靱於此神前ニ故

號ニ由木ニ也 正一位由木大明神云々

祭九月九日

○高野社 同郡高野ニ有リ 祭神一座

神院新宮ト號ス

祭 九月十五日

○地主 同郡清水寺ノ内ニ有リ 號ニ地主權現ニ 祭

神一座 大己貴命 記文未考 祭四月九日

○新熊野 同郡大佛殿南二丁ニ有リ

祭神 紀州熊野同 額云新熊大權現 永曆年中後

白川院御勸請也 鳥居銘ノ心

神傳熊野之下ニ見エタリ

○若王子 同郡東山黒谷東有リ 勸請ノ神熊野那智

山若王子也

●後白川法皇勸ニ請熊野那智大權現於此地ニ號ニ若

王子ニ者也中世尊氏將軍崇ニ敬此社 鳥居銘○祭有脱文歟

○有云法皇熊野權現ヲ信仰マシマス故ニ御參詣ノ

便安カラシ爲ニ三所ノ宮ヲ三所ニ移玉フ今一所ハ

聖護院杜ノ社是也

○岡崎社 黒谷山南ニアリ 祭神一座 正一位天王

云々同ニ祇園ニ 祭九月

○小野篁社 葛野郡小野庄杉坂村ニ有リ

祭神 小野篁靈也

○篁 參議左大辨小野朝臣參木正四位下岑守長

子也身長六尺二寸云々續日本後記又文德實錄ニ見

●敏達 春日皇子 妹子 毛人 毛野

「永見 岑守」 葛絃 道風

篁 保守 好古

篁仁壽元年十月卒五十一歲

○瀧社 同杉坂村ニ有リ

祭神 小野道風靈也

○道風從四位上木工頭寛平五年生村上帝康保三年

十一月卒七十一歲

○小野御靈 同小野庄東河内村ニ有リ

祭神 惟喬親王靈也

○人皇五十五代文德天皇第一子也

●本朝遯史云惟高者文德天皇第一皇子也皇嗣固其

所也然而第四皇子惟仁以下 忠仁公爲其外祖 故立

爲皇太子 清和天皇是也於 是惟喬閑居子洛外山

崎水無瀬宮 吟詩詠歌以自遣每歲賞櫻花 一日

遊河州交野之奈疑佐院 以翫櫻花 在原業平從

行賦和歌 惟喬自交野 到天河 以設宴業平紀

同
山城のこはたの里に馬はあれと
なき名すゝかん瀧つせもなし

人丸

千首
春ははや木幡の關の朝ほらけ
かちよりそ行君を思へは

爲尹

夫木
木幡山花のにしきは折てけり
都のたつみやゝかすみぬる

堀川

月落
待わひぬ今宵も扱は山城の
柳櫻をたてぬきにして

後京極

こはたのみねの遠の白雲

祭神一座 正哉吾勝々速日天忍骨尊地神第二代神

也素戔烏尊子 天照太神取爲_レ子也啓傳前ニアリ

○蓋吾勝尊不_レ降_ニ下土_ニ故無_ニ山陵_ニ而祀_ニ其靈_ニ名_ニ

木幡神社_{神社考} ○祭九月廿四日

○清瀧社 同郡醍醐ニ有リ 祭神 清瀧權現云々

傳云空海法師入_レ唐到_ニ青龍寺_ニ詣_ニ神祠_ニ祈_ニ佛法東

漸_ニ而歸朝時勸請云々

祭九月九日

○小栗栖八幡 同郡小栗栖ニ有リ傳記未_レ考祭_{○有脱}

○四宮 宇治郡山階里ニ有リ 四宮ト號ハ山階十八

郷内有_ニ一二三宮_ニ而當社第四故號_ニ四宮_ニ也云々此

所和歌ニ詠ズ
古今

山科の音羽の山のをとにたに
讀人不知

後撰
はかなくて世にふるよりは山科の
三條右大臣

宮の草木とならまし物を

同返
山科の宮の草木と君ならは
兼輔

我は雲にぬる計なり

祭神二座 號_ニ諸羽明神_ニ

●天兒屋根命 天太玉命 傳上ニ有リ

按二神以_ニ高皇產靈尊詔_ニ而爲_ニ天孫左右羽翼之臣_ニ

也故名_ニ兩羽_ニ耳右者作_ニ兩羽_ニ今改爲_ニ諸字_ニ啓蒙

○祭ハ四月上巳日

○四宮川原此所ニ近シ長明道記ニ延喜第四宮此所

ニマシマス故ニ此關ノアタリヲ 四宮川原ト云フ云

云但此儀說多シ追可_レ書

夫木
明わたり 四宮川原霧はれて

順徳院

遠方人の數そみえ行

○栗田口神社 栗田口ニ有リ

祭神二座 祇園ニ同シ 素戔烏命 八王子也 感

ケレバ藤右丞相刑ノウタガハシキヲバ不_レ行賞ノ
ウタガハシキヲバ行ヘトコソ候エト申サレケレド
モ終ニ忠文ニハ其沙汰ナカリシカバ忠文本意ナキ
事ニ思ヒテ手ヲ握テ立タリケルガ十ノ指ノ爪手甲
マデ通リテ思ヒ死_{キマ}ニシケリ其マ、惡靈トナレリ其
故ニヤ清慎公子孫スエナク成テ小野宮モ他家エツ
タハリ又村上院第一廣平親王ハ忠文ガ女ノ腹也御
弟冷泉院ハ后ノ腹ナルニ依テ一御子ヲサシヲキテ
春宮ニ立チ玉フ忠文是ヲモ本意ナク思シガ死シテ
後冷泉院ノ御物狂ハシクナラセ玉テ御子花山院ハ
俄ニ御位ヲステ、御グシヲオロシ玉ヒ三條院ハ御
目ミエサセ玉ハズ又三條院ノ御子敦明親王ナド申
セシハ御位ノ望ナシトノ玉テ俄ニ院號カウブラセ
玉テ小一條院ト申キカヤウニ冷泉院ノ御末イヅレ
モスル_ノトワタラセ玉ハヌハ彼靈ノナスワザト
見エ侍シサテ三條院ハ御女禎子内親王其後々朱雀
院ノ御代ニ入内有テ後三條院ヲ產玉テ後ニ陽明門
院ト申キ其スエノミコソ今ノ世マデツタヘサセ玉
ヘ三條院ノ御末男方ハ絶サセ玉テ女方ヨリ御子孫
ヲ殘シ玉フ也云々○後冷泉院治曆三年十月七日正

三位ヲ授玉フ云々 祭ハ五月八日

○橋姬社 同宇治橋本ニ有リ

祭神 未_レ考 ○世傳昔有_ニ妬婦_一祈_ニ于貴布禰神_一

求_ニ生爲_レ鬼既而改_レ形頂被_ニ鐵輪_一口含_ニ炬火_一每_ニ深

更_ニ詣_ニ貴布禰社_一遂生爲_ニ厲鬼_一也此爲_ニ宇治橋姬_一

云又言羅生門鬼與_レ此同啓蒙

古今
さむしろに衣かたしきこよひもや 讀人不知

我を待らんうちのはし姫

新古今

さむしろや待夜の秋の風更て 定家

定家

○田中社 同宇治郡石田ニ有リ 祭神二座

●天照太神 日吉山王

當社鎮坐年紀不_ニ分明_一也傳云當昔天武御宇之比此

里忽然而一夜之間積_レ苗數尺其上有_ニ白羽矢_一也老

翁來現云此地宜_レ鎮_ニ坐于天照大神日吉南社_一也然

則永爲_ニ帝都南方守護之神明_一耳依_レ此鎮坐云々其積

苗之地于_レ今存號_ニ苗塚_一也便覽

○木幡社 宇治郡木幡ニ有リ此所 川里 關山

岑 歌ニ讀リ

拾遺
こはた川こは誰いひしことのはそ 讀人しらす

月詣集

民の戸も神の恵にうかふらし

後京極

都の南宮あせしより

續後撰

雪のとふ鴈のは風に月さえて

後鳥羽院

鳥羽田の里に衣うつ也

○岡田鴨神社

相樂郡木津川ノ渡一里許東ニ有リ

祭神

帝城北賀茂神ニ同ジ

大木集

山城の此都をは守けん

行家

岡田のかもに跡たれしより

○可茂社稱ニ可茂一者日向曾高千穗之峯天降坐神賀

茂建角身命也神倭磐余比古之御前立坐而宿坐倭葛

木山之峯自レ彼漸遷至ニ山代國岡田賀茂一隨ニ山代

河ニ下坐葛河與ニ賀茂河ニ所會立坐下略 風土記

○田原社

宇治郡田原村ニ有リ 祭神一座

田原皇子 天智帝第二皇子也施基皇子ト號光仁天

皇ノ御親也光仁帝寶龜元年十一月田原皇子ト諡ス

王代一覽

○宇治離宮

宇治郡宇治橋傍ニ有リ 祭神藤原忠文

靈也 忠文參議修理大夫右衛門督也 或書云人皇

六十一代朱雀院承平三年三月平將門征討ノ時秀郷

貞盛忠文等走向フ忠文ヲ征夷將軍トシ弟忠舒并源

經基等ヲ副將軍トス小野好古藤原慶幸大藏春實等

ヲ將軍トシテ兵船二百餘艘ヲ率テ伊豫國へ發向ス

又東海東山兩道ニハ官符ヲ賜リ軍功アラバ賞ヲ行

ルベキヨシ相觸ラル二月朔日下野押領藤原秀郷常

陸掾平貞盛陸奥下野ノ勢ヲ催シ一萬九千人ヲ率テ

下野ノ國ニオイテ將門ト合戰ス將門ガ兵數百人討

レテ引退ク貞盛秀郷ヲツカケテ十三日下總國ニ到

ル將門嶋廣山ニ籠ル貞盛火ヲ放テ將門并其從類ノ

家ヲヤク十四日將門自辛嶋ト云フ所ニ出テ戰フ貞

盛ガ放矢將門ニアタリテ馬ヨリオツ秀郷將門ガ頸

ヲ切ル將門兄弟并同類玄茂興世王等所々ニテ討ル

貞盛ハ國香ガ子也父ノ仇ナレバ殊ニ戰功ヲ勵ス秀

郷ハ始ハ將門ニ從ントテ彼館ニ赴ク將門悅テ出迎

フ秀郷其器量輕クシテ本意トダマジキ事ヲ見知テ

遂ニ貞盛ト力ヲ合セテ功ヲ立タリ坂東治リケレバ

三月九日秀郷ニ從四位下ヲ授ラル其後秀郷貞盛鎮

守府將軍タリ貞盛ヲバ從五位上ニ叙シ右馬助ニ任

ズ同二十五日將門ガ頸京都ニ到ル四月忠文等駿河

國清見關ヨリ歸京ス其後勅賞ノサダメ有ケルニ小

野宮左府清慎公ウタガハシキヲバ不レ行ト申サレ

觀元年己卯八月廿三日從_ニ宇佐_ニ移_ニ山崎_ニ改曆雜事記

○水垂大明神 山城郡淀_ニ有_リ 或書_ニ釋千觀肥前

國佐賀郡川上淀姫大明神勸請云々

○水垂大明神 八幡叔母 神社便覽

○此所大荒木杜也和歌多シ又浮田ト云フモ此所也

共_ニ讀_メリ

大あらきの杜の下くさ茂りあひて

忠岑

深くも夏の成にける哉

續古今

かくしつゝさてやゝみなんだあらきの

人丸

浮田の杜のしめならなくに

○伊勢向 同淀驛小橋東河中ニアリ

祭ル神一座 天逆向津姫命

天照太神也 寶基文圖

○石清水社家説云依_ニ八幡遷幸之縁_ニ號_ニ伊勢向_ニ而

祠_ニ于此_ニ云啓蒙

○神功元年三月壬申朔皇后選_ニ吉日_ニ入_ニ齋宮_ニ親

爲_ニ神主_ニ則命_ニ武内宿禰_ニ令_ニ撫_ニ琴喚_ニ中臣鳥賊津

使主_ニ爲_ニ審神_ニ者因以_ニ千縉高縉_ニ置_ニ琴頭尾_ニ而請

曰先日教_ニ天皇_ニ者誰神也願欲_ニ知_ニ其名_ニ逮_ニ于七日

七夜_ニ乃答曰神風伊勢之國百傳度遇之縣之折鈴五

十鈴宮所_レ居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉

日本紀

○御香宮 伏見京町東_ニ有_リ 祭神 一座 神功皇

后傳前_ニ有_リ

○鎮座年紀未_ニ分明_ニ從_ニ昔垂_ニ跡此地_ニ也秀吉築_ニ城

柵_ニ之日雖_ニ奉_ニ遷_ニ神籬於東岳_ニ今古御香

依_ニ是又奉_ニ還_ニ舊地_ニ云即今神地是啓蒙●祭九月九

日

○藤森杜 紀伊郡深草山南_ニ在_リ 祭神一座 舍人

親王 天武帝子廢帝父

○舍人 讀ヤウ一ナラズ。トネリシンワウ。イエビ

トシンワウ ヤドノシンワウハ伊勢神宮古來ノ讀

カタナリ ○元正天皇養老四年四月先_ニ是_ニ一品舍

人親王奉_ニ勅修_ニ日本紀_ニ至_ニ是功成奏上紀卅卷系圖

一卷 廢帝天平寶字三年六月追_ニ尊舍人親王_ニ稱_ニ

崇道盡敬皇帝_ニ續日本紀 祭五月五日

○城南神 乙訓郡鳥羽里_ニ有_リ 祭ル神

鳥羽天皇 諱宗仁堀河第一子母贈皇太后藤原次子

治世十六年保元々々年七月二日崩○祭禮 九月廿日

○和歌

氣布利奈利氣利。隔山見煙早知是火之意也惠尊告齊安國師以_二此和歌之事_一安聞而許可云東城染解之人誠婦人而大丈夫者也后容貌甚麗及_レ崩云不用_二葬儀_一以棄_二中野_一耽_二色欲_一者見_二我爛穢_一有_二少驚悟_一也遂從_二遺詔_一奉_レ捐_二其屍于西郊_一其後拾_二其拳_一以收埋因號_二其處_一云_二一拳_一又云_二拳宮_一神社考

○木嶋神社 葛野郡太秦東_二有_一 和歌

木嶋ノミヤシロ

新勅撰集物名部
あなしには

木の嶋のみや白妙の

俊頼

雪にまかへる波は立らん

祭神一座 天照坐御魂神

○遊仙窟文章生英房跋云嵯峨天皇書卷之中撰_二得遊仙窟_一召_二紀傳儒者_一欲_二傳授_一也諸家皆無_レ傳學士伊時深愁歎于_レ時木嶋社頭林木鬱々之所撓_レ木結_レ草有_二老翁_一閉_二兩眼_一常誦之間讀_二遊仙窟_一云也伊時聞及潔齋七日整理衣冠_レ慎引_二陪從_一參_二詣翁所_一誰來答曰唯々跪申爲_レ得_二遊仙窟_一所_レ參也翁云我幼少自客_レ授_二此書_一年闌倦_レ事僅所_二學誦_一而已重申願教_二此書_一僕苟候_二王家_一居_二學士之職_一少幼睹_レ文無_レ讀垂_二哀矜_一翁誦讀之伊時付_二假名_一讀_二一帙_一畢還

飯之後送_二種々珍寶_一菴跡異香郁々無_二其跡_一其後感書幾_二乎大明神爲_一化現_二耳文保三年四月十四日

○向日神社 乙訓郡西岡ニアリ 和歌ニ詠ズ拾遺愚草

夕つく日むかひの山のうす紅葉

またき淋しき秋の色哉

祭ル神一座 向日神素戔嗚尊孫

●額云正一位向日大明神 道風筆云々

○素盞烏孫大歲子也母須治比女神名帳註

○羽束師社 同郡久我繩手ニ有_一 和歌

續拾遺もらしても袖やしほれぬ數ならぬ

俊成

身をはつかしの森の雫は

祭ル神一座 高皇產靈尊傳有前

○羽束師坐高御產日神神名帳

○山崎神社 同郡山崎ニアリ 祭ル神一座

●大山祇神 傳前ニアリ ○山崎神者大山祇命也即

離宮左殿祠焉神祇拾遺

○離宮 山崎ニ有_一 八幡離宮也祭ル神石清水ニ同

行慶法師豐前之宇佐ヨリ下向ノ時此所ニテ八幡ノ

靈夢ヲカウブリ覺テ後瑞光ヲ拜見ス即此所山崎鳩

峯也云々其後今ノ男山ニ御影向云々○清和天皇貞

○戊亥仁當天。王都守護神明坐す即天神第七陰神也
火災於永久退平爲也止天若宮仁和火産靈於置玉索利偏
仁帝都靜謐乃基也應原卜定記

○當社久代平安城北鷹峯東隣也光仁天皇御宇天應
元年釋慶俊奉遷今之靈地矣仍神人等ト居於北
山麓神祇拾遺按當社者昔愛宕郡鎮坐之故有此名
今北山大門村蓋當官神門之舊跡也故今所祠之地
雖屬於丹州溫其故號愛宕歟延喜式又以當
宮接桑田郡無山州鎮坐之記文啓蒙

○慶俊法師當山ニ移テ將軍地藏ノ法ヲ行ヒ地藏
ヲ安置シテ神ノ本地トナシ朝日嶺白雲寺ト號シ
愛宕山權現ト號スル也

○神位 清和天皇貞觀十四年十一月廿九日從五位
下阿當護神從五位上國史

○神託 衆生常ニ世界ノ火ヲケガシ己一人ノ思ヒ
ヲ含ミ天ニサカヒ地ニソムカン者ハ吾常ニ火亂神
ヲツカハシテ其不淨ヲ燒亡サン上ハユタカニ下ク
ルシマン時ハ火ノ雨ヲ殿舎ニ降シ上ノ寶ヲチラシ
テ苦ミノ者ニアタエン倭論語

○野宮 葛野郡嵯峨ニアリ龜山ノ麓平林ノ中ニ有リ

黒木ノ鳥居名高シ伊勢ノ齋宮此所ニ籠玉フ由源氏
物語ノ抄物ニアリ畧之

野宮に齋宮の庚申し侍けるに松風入夜琴といふ題を讀ける

拾遺集
ことのねに岑の松風通ふらし

いつれのをよりしらへそめけん

○裏柳明神 嵯峨中院ニ有リ○長明神 同所二尊院
ノ門前ノ小宮也○日靈明神 同所小倉ノ麓ノ小宮
也○拳社 野宮ノ左龜山ノ麓ニ有リ

右何モ嵯峨帝后檀林皇后ヲ祭ル所也薨ジ玉フ時遺
命ニヨツテ葬ノ儀ヲ不レ用嵯峨ニステヲキケルヲ
野犬ノ食チラシ捨ヲキケル所々也云々名所記

○世云皇后問密法于空海海稱揚之又云唐有佛
心宗達磨之所傳來也海雖少聞未レ達窮之皇
后於是詔惠夢赴唐求其法夢到于杭州靈池
院謁鹽官齊安禪師通皇后之金幣安甚美之因
令其上首義空充其請空與夢來于本朝天皇賞
賜又厚皇后立檀林寺居空而時々問法故號檀
林皇后其寺迹今天龍寺是也一說皇后和歌云毛呂
古志乃耶麻乃阿奈多余多豆劬毛波許々余他劬比乃

●軻遇突智

雷神
大山祇
高麗

○神書鈔云高麗與_ニ闇麗_ニ同龍神類也今祈_レ雨止_レ雨多祭_ニ此神_ニ神社考

○弘仁九年五月爲_ニ大社_ニ日本後紀

與御前 ○爲_ニ平安城守護_ニ所祭之蓋日域地守神明也氏成私記

○城州貴舟社船玉命與_ニ高麗_ニ也二十二社

按船玉命ハ猿田彥神也

○人皇百六代後奈良院御宇小兒咳嗽逆疫而死亡甚衆仍令_ニ相者_ト焉卽貴船神之所_レ崇也於_レ是乃同御宇弘治二年重九日令_レ逐_レ疫_{事記}改曆雜今落中ノ童子九月九日貴船與_ト稱シテ小神與_ヲ振アリク事ハ此遺風也云々

○攝社

與深社 吸葛社 私部社

○御位 七十五代崇徳院保延六年七月十日正一位
○祭 未考 二十二社註式云無_ニ祭禮_ニ

男に忘られて侍ける比きふねに參てみたらし

川に螢のとび侍けるをみて
後拾遺神祇
物思へは澤の螢も我身より

あらはれ出る玉かとそみる

和泉式部

返し明神の御歌とらん

おく山にたきりて落る瀧つせの

玉散るはかり物な思ひそ

○今宮 葛野郡紫野ニ有 祭神 一座

是社疫癘神也一條院正暦五年長保二年世間不_レ靜立_ニ神社於船岡山北_ニ行_ニ御靈會_ニ號_ニ今宮_ニ被_レ奉_ニ神馬_ニ藤原長能詠_ニ和歌_ニ曰白妙乃豐幣於取持天祠會始留紫乃野爾神社考

○神今者比_ニ祇園_ニ爲_ニ三二社_ニ啓蒙 祭五月十五

○愛宕神社 帝城ヨリ二里餘西山ノ絶頂ニ有リ四月

中亥日嵯峨祭ト云フハ卽此神ノ祭也故ニ山城之

部ニ入畢此所實ハ丹波國桑田郡也

拾遺集
なき名のみ高雄の山といひ立る

八條王

君はあたこの峯にや有らん

祭ル神 二座 伊弉並尊 火產靈尊啓蒙 ○松尾神

書云軻遇突智者火神也故此神掌_ニ火災_ニ祭_ニ之平安

城乾隅愛宕山ニ而除_ニ火災_ニ者也系圖傳

○北野神託 諸人吾前ニ來テ願ヲトゲントナラバ其心僞ナク内外清クシテ鏡ニ向フ如クシテ祈ベシ我罪ナラヌツミヲウケン者吾ヲタノマンニ一七日ノ内ニ其願心ノ如クナラズハ吾神ト不_レ謂_レ 倭論

○北野參詣男女當社北門ヲ小石ヲ以敲又敷居ニ石ヲ積事アリ 改曆雜事記云人皇八十一代後深草院建長四年八月十八日北野社邊火起社家走而鎖_レ之飯宅時各向ニ北門_一以ニ小石_一一兩叩云火鎖收也從_レ是已降無_レ止期_一啓蒙

○服ニアタル者五十日オハリヌレバ南門ノ鳥居ノ外ニアル石塔婆ノ五輪ニ詣ル事アリ此事ハ昔ハ社司之輩除服ノ日ハ必神谷川ニ至リテ禊スル也其時忌中ニ用タリシ具ヲ此所ニ納シナリ今ハ此事ナシトイヘドモ其遺風ニテ世人除服ノ日詣ル也云々神社啓蒙ノ說同ジ愚按ニ此說アタラズ如何トナレバ必除服ノ用物ヲ石塔ニオサムルト云フ事如何又是ヲ納ントテ石塔ヲ可_レ立ヤウナシ夫石塔婆ハ佛說ヨリ出タル事也然ルヲ啓蒙ノ說唯一神道ニシテ佛說ヲ破スルニ何ゾ此說ヲ信用スルゾヤ其儀ナラバ今ニ至リテ當社司ノ除服ニ其儀アルベシ社家ニハ

其說ナキヲ俗家ニ其風ヲツタユル事如何 除服ニ參詣スル事別ニ子細有リト云々由緒シルシ難シ後人考可_レ有先年地震ノ時此塔クヅル、事有シニ臺ノ下ヨリ金佛ヲ、ク出ヌ宮司ノヌン_一思ヒ_一ニ彼佛ヲ取テ持佛堂ニオサメシ也其夜サマ_一不思議アリシカバ又モトノゴトク納ヲキシト也此事アル宮司ノ物語也現ニ誰モ知侍事也然バ此塔ニ一靈アレバコソ其不思議ハ有ルナレ猶以由縁考シルベキ事ニヤ

○貴布禰 愛宕郡鞍馬ノ傍ニ有リ
社司共木船に參て雨ごひしけるついでによめる
新古今
大御田のうるほふ計せきかけて 賀茂幸平

新後拾遺
さふね河末せき入るゝ苗代に 源義將朝臣
神のみしめをひきやそへまし

祭ル神二座
高麗神_{タカラカミノ} 水徳神也別雷神神宮第二攝社也

伊弉諾尊斬_ニ軻遇突智_一爲_ニ三段_一其一段爲_ニ高麗_一日本紀

菅家系圖

天穗日命 宇庭 古人 清公 是善 菅家

中將殿 傳未考

吉祥女 未考 何家女 云西園寺家也稱吉祥女 住都西南吉祥院里之故名焉今神官等稱吉祥天女者可笑之甚也啓蒙

○鎮坐之事 村上天皇天曆元年六月九日遷坐北

野二十二社註式 同天皇治十三年天德三年九條右丞

相造増屋舍奉付寶物

○本殿之傍有ル宮ヲ北野天神ト號ス

此所根源地主神也云々傳社記未考

○攝社

宰相殿 菅相公四世孫菅原輔正云々○正三位菅原輔

正壽永三年三月廿七日贈正二位二十二社註式

和泉殿 菅原定義也 ○從四位下菅原定義同時贈

正二位同

福部社 世人云奏者神是也

老松社 在本宮東可二町

右兩社菅三品眷屬神也 未考

白大夫 在本殿巽中門内 ○禰宜外從五位下神

主春彥在任十六年又云渡遇春彥天御中主卅六世孫也卽神主二門大内人高主六男也延喜十八年戊寅六月廿日任同廿年十二月廿五日叙外從五位下承平

三年十一月廿日辭職讓男晨晴天慶七年正月九日卒蓋菅三品在世之時有幽契睦故爲第一攝社

也然今畧不記焉社官謂於太宰饗酒醴之翁上者非也禰宜補任

一夜松 號船宮

經藏之前有傳祕也云々 已上啓蒙

○御位 ○六十二代醍醐天皇治廿八年延喜三年二

月廿五日從二位同三年四月贈正二位六十六代一條

院正曆四年五月廿日贈左大臣正一位 同年閏十月

廿日贈太政大臣二十二社註式

○祭 一條院永延元年八月五日始祭預官幣 ○七

十代後冷泉院永承元年八月四日被定五日依母后

國忌也

○臨時祭 一條院寬弘二年八月四日始奉神寶

○行幸始 一條院寬弘元年十月廿一日始 或云六

十八代後一條院萬壽元年十一月廿二日始 使菅家

五位一人 幣一前同

之仁和中任南海道讚岐守。寬平五年二月進爲參議。六年九月門徒於吉祥院。修五十賀。九年六月經中納言。升大納言。兼大將。昌泰二年二月累進至右大臣。右大將如故。是時與左大臣左大將藤原時平共受上皇勅。輔佐天子。攝行萬機。初帝年十四卽位。寬平九年至此聰明一日行。幸朱雀院。上皇謂帝云。右大臣年高才賢。舉國之所望也。專宜任用。乃召右大臣宣其旨。右大臣固辭而止。已而左大臣聞而大恨於。是左大臣與光卿朝臣菅根朝臣等相謀。遂譖之。帝疑之。左大臣妹爲皇后。帝及左大臣年相富而內外讒行。昌泰四年正月廿日左遷大宰權帥。延喜三年二月廿五日右大臣薨。子配所葬。安樂寺。年五十九。此年夏未雷落清涼殿延喜八年藤原朝臣菅根卒。九年時平薨。十四年京災。延長元年二月太子保明親王薨。人僉云菅靈爲災。京都大懼。因焚捨菅丞相左遷宣旨。復本官。贈正二位。又改年號。延長八年六月霽。靈于清涼殿。藤清貫平希世震死。天子不豫。承平五年延曆寺災。天慶三年七月菅靈託右京七條坊婢文子者。欲棲右近馬場。天曆元年移立祠于北野。九年三月託近江國比良社禰宜良種云。大内北野一

夜生松千本。其所建社以可崇。天滿天神於是朝日寺僧是珍與右京文子勸力爲造靈社。天德三年右大臣藤原師輔改造大厦。甚敬神威。四年九月二十三日庚申夜內裏回祿。及圓融院時。改營數度。工匠運斤新斲。一夜之間虫食天井裏板。爲文字云。都勾留登茂末多毛耶氣南武須鵜波羅耶牟禰能伊太摩乃阿波牟加幾里波依。茲畏神怒猶在。而營北野宮。其後神祟遂止。至于一條院。正曆四年五月遣勅使於宰府安樂寺。詔贈太政大臣正一位。時神託詩云。昔爲北闕被悲士。今作西都雪耻屍。生恨死歡其我奈從。今望足護皇基。神社考延長八年六月民部卿藤原清貫右中辨平希世二人於清涼殿逢雷震。死。皇帝惶怖玉體不豫。乃移常寧殿。召尊意宿禁中。持念初意在叡山。一日菅丞相化來語云。我已得梵釋許與。欲儻夙懟。願師道力勿拒。我也意云。然々率土者皆王民也。我若承皇詔。何辟乎。菅作色適薦柘榴。菅吐哺而起化作燭坊戶煙騰意結。瀉水印擬之。其火卽滅。燒痕尙在焉。已而雷雨洩旬。鴨河大漲。人馬不通。於是乎詔意赴宮。意車到河濱。激浪止。流水不濕輪。已下略之。

諸社一覽第四

山城

北野宮 王城之西ニ有北野ヲ讀ル和歌

北野の宮に讀て奉ける

續後撰集

曇るへき浮世の末を照してや

前大僧正慈圓

あら人神は天降にけん

同

千早振神の北野に跡たれて

後さへかゝる物や思はん

定家

祭レル神 三座

菅丞相中殿

中將殿

東間

菅三品嫡子

吉祥女西間

北御方

○北野天神者右大臣菅原朝臣之靈也其先出自天穗日命十四世孫云野見宿禰居出雲國經向珠城宮御宇宿禰奉詔到大和與當麻蹶速角力而贏當是之時死者多殉葬帝甚哀之宿禰率土師三百人採埴造像以代殉帝大喜之賜土師姓逮天宗高紹御宇天應元年宿禰之後遠江介土師宿禰古光仁天皇

人散位土師宿禰道長奏請依其所居地名改土師爲菅原姓詔許之桓武帝延暦元年少內記正八位上土師宿禰安人改土師賜秋篠姓四年冬十二月勅以菅原宿禰古人侍讀之勞賜古人男四人衣糧令勤學業九年冬十二月勅菅原眞仲土師菅磨改其姓爲大枝朝臣枝一作江是月詔菅原宿禰道長秋篠宿禰安人並賜姓朝臣又土師宿禰諸士賜大枝朝臣古人之子云清公博學多聞弘仁天長之際與丞相清原眞人及諸博士斟酌律令而作義解清公之子云是善能繼家業侍讀清和帝以講孝經論語經史及群書治要等帝甚善遇時與大枝氏齊名世稱云菅江先是大學寮每年春秋釋奠先聖先儒此寮有東西曹司菅氏江氏爲其曹主敎授諸生是善仕至參議正四位下勘解由長官兼式部大夫播磨權守是善之子者乃右大臣也名道眞字三幼而穎悟才過公祖及壯文采日進屬文章作詩賦初貞觀四年五月補文章生九年爲得業生十二年三月廿三日對策及第十八年進爲侍從元慶六年渤海國使者來諸儒往鴻臚館見之使者一日見右大臣所作詩藁稱云風情似白樂天大臣聞而悅

諸社一覽第四目錄

北野	貴船	今宮	愛宕	野宮	木嶋	向日
羽束師	山崎	離宮	水垂	伊勢向	御香	藤杜
城南	岡田鴨	田原	宇治	離宮	橋姬	田中
清瀧	小栗栖	四宮	栗田口	地主	新熊野	
若王子	岡倚	小野	瀧宮	野小	御靈	落葉
由木	高野	御蔭	石藏	大宮	大將軍	七社
惟喬	惟仁	大將軍	文子	天神	鳴瀧	貫之
水天神	五八幡	御靈	京極	八幡	幸神	晴明
櫻葉	白山	高八幡	蛭子	若八幡	五八幡	市姬
繁昌	新住吉	菅大臣	中山	俊成	新	玉津嶋
條天神	六宮	炬火殿	吉祥院宮			

地主大己貴神所化也

大宮賣 專女神 御膳津神豐受神

事代主 大己貴尊子 已上

右八柱則八洲守護神八齋靈命八心府神坐故式
爲_二皇帝之鎮魂神_一矣謂夫水氣清淨海水即大祖元神
性也陽氣者濁世生類不清實執也故清淨神氣祭則人
魂陰氣鎮也故有_二鎮魂氣_一也神皇系圖

諸社一覽第三終

福寺春日社云神社考

○當社藤氏崇敬依異他曩祖兼延勸請卜部兼俱說

○清和帝貞觀年中鎮坐中納言山蔭卿始奉渡之同

兼右二十二社註

○攝社 八十四代順德院建保三年四月十三日入夜自伯大納言殿被仰之吉田内小神員數御名等可註進者以折紙註申之二十二社註式

神樂岡社 當社地主雷火神

一言主社 今宮 率川社 水屋社

氷室社 榎本社 已上

○火雷神 火雷即丹塗矢之化神松尾明神是也延喜式

卜部家說云神樂岡明神者雷神也號裂雷神是吉田之地主也至一條院御宇卜部兼延掌社務職時以

藤氏之崇敬故勸請春日神上古日神居于天石窟

諸神奏神樂其處降爲一山雷神壁開爲二高野

山如意嶽是也其後事勝神鴨御祖神集會于此奏

神代之樂故云神樂岡此岡有八雷神之垂跡八方

堆土以祭之延喜式載霹靂神坐山城國愛宕郡神

樂岡西北者是也又此地有日降坂以日神降臨故

名之有池云龍澤造齋場所大元宮安神代之

靈寶修宗源之神道其東南有井其水自龍澤通

一旦沙落水涸兼俱自以鋤浚之白龍出現眞靈區也

云爾神系圖傳

○霹靂神祭三座坐山城國愛宕郡神樂岡西北四月

令卜部一人吉日祭之十一月亦同延喜式

○位記 九十九代後光嚴院延文五年六月卅日正

位 使藤氏五位一人幣四前

○祭 六十六代一條院永延元年十一月廿五日甲

申今年始祭禮依誓願爲公家沙汰已上廿二社註式

五月下子日十一月中申日吉田祭藤中抄

○大元殿 齋場所 是卜部家神道勸請所

額 日本最上日高日宮 伊勢内外宮ヲ始八百萬神

勸請云々

○鎮魂八神社 同所ニ有 往昔ハ帝都之宮内省ニ有

秀吉公之時吉田山奉遷云々

按宮内省ハ太政官東大炊寮西ニアリ云拾芥抄

八神

高皇產靈尊 天御中主尊子神皇產靈尊高皇產靈尊子魂留

產靈尊神皇實錄曰
元氣精靈

生產魂尊或云神皇產靈子足產靈尊道反魂神 ○神皇實錄云天

舊記云人皇五十五代文德帝仁壽元年二月二日乙卯依ニ太皇太后御祈ニ山城國葛野郡大原野仁宮柱廣知立春秋御祭如レ賜

卜部兼右神祇正宗云人皇五十四代仁明帝御宇嘉祥三年爲ニ王城守護ニ閑院左府冬嗣申ニ沙汰ニ勸請之

今存ニ兩說ニ宜レ隨ニ佳說ニ啓蒙

○春日社遠ニ於帝闕ニ故移ニ于大原野其山曰小鹽蓋后妃夫人有ニ參詣之便ニ故也 神社考

○攝社

海童神社 瀬和井水神

瀬和井 瀬加井同 歌ニ讀リ

夜を寒みせかゝるの水は氷るとも 夫木集

匡房

庭火は春の心地こそすれ

六帖 大原やせかゝるの水を手に汲みて

家持

鳥は鳴共あそひてゆかん

○御位 正一位 使藤原五位一人 幣四前 宣命

黃紙

○祭 二月上卯日

人皇五十五代文德天皇仁壽元年辛未二月二日乙卯別制ニ大原野祭儀ニ一准ニ梅宮祭ニ國史 ○近衛使同ニ

于春日祭ニ上卿辨内侍參向神社考

○行幸始 六十六代一條院正暦四年十一月二十七日

日

○后宮行啓之始

大原野行啓起ニ五條后順子ニ以ニ藤氏勸學院衆ニ爲ニ車副ニ二條后高子以ニ姪乗ニ車後ニ在五中將書ニ和歌ニ與ニ

二條后ニ大原也小鹽之山毛今日等己曾神代之事緒思出良目江次第

按ニ此歌伊勢物語ニハけふこそは神代のこととも思ひ出つらめト直シテ書リ

○吉田 愛宕郡 王城之東半里許ニ有拾遺

名にたてる吉田のさとの杖なれば

玉葉 つくともつきし君か萬代

兼盛

すへらきもたのむ宮ゐと成にけり 從三位爲實

た、山陰の名残はかりに

祭ル神 大原野ニ同 四座

○御堂關白御書云奈良京時春日社長岡京時大原野平安城之今吉田社占ニ帝都之咫尺ニ有神祠之鎮護ニ啓蒙

○御堂關白道長公造ニ法成寺ニ崇ニ吉田社ニ以擬ニ與

云汝是誰之子耶對云妾大山祇神之子名吾田鹿蘆津
姬亦名木花開耶姬下略之日本紀

瓊々杵尊 傳伊勢外宮ノ下ニ見リ

火々出見尊 瓊々杵尊子母大山祇神女吾田鹿蘆

津姬

○攝社

三石 能野三所影向所

市杵島社 幸神 護王社 愛宕社 天王社

○御位 仁明天皇承和三年十一月被授酒解神從

五位上大若子小若子神並從五位下續日本紀

清和天皇貞觀十七年五月十四日乙未梅宮正四位上

若子神小若子神酒解神酒解子神並從三位類聚國史

人皇八十代高倉院治十二年治承四年十二月正一位

使橘氏五位一人 幣四前

○祭 梅宮神四座夏冬祭料同平野祭人皇五十六

代清和帝貞觀元年十一月十日梅宮祭如恒二十二社註式

陽成院御宇元慶三年四月三日停梅宮祭三代實錄

橘氏頃年間停祭今勅始而祭

第五十八代光孝天皇仁和元年四月七日又始祭

第六十六代一條院永延以後祭不絕

同御宇治十九年寛弘二年十一月新依御願如舊
例令勤任祭自明年可用式日一條院以來
相續四月十一月上酉

○被定南方鎮守始 七十四代鳥羽院治十年永
久五年丁酉六月炎干御卜入云々

已上神社啓蒙

○神託 世人ノ無嗣シテ悲ミ又嗣生ントキ其母
心安カラント思ハバ常ニ我前ニシテ砂ヲ奉レ必其

心ノ如ク成ベシ是ヲガヨクスル處也倭論語

○大原野 乙訓郡 王城ヲ去テ三里計ニ有申西ノ方

按ニ當國ニ同字之名所有愛宕郡ニシテ王城北ニア

ルヲモ大原トイヘリ但多クハ大原ト唱ル也歌炭竈

雪ヲ詠ス

大原やをしほの山の小松原

貫之

はやく高かれ千代のかけみん

大原やをしほの櫻咲ぬらし 爲實

神代の松にかゝるしら雪

右之歌大原野 小鹽山此所ニアリ

祭ル神四座 奈良之春日社ニ同ジ

神春日之下ニ見エタリ

○臨時祭 六十五代花山院寛和元年四月十日始
以_三殿上五位_一爲_レ使以_三近衛府官人_一爲_三舞人陪從_一
有_三御拜尤大臣已下參仕座自_二今年始平野祭被_レ奉_一
遣_レ使臨時舞人走馬左衛門權佐藤原惟成爲_レ使有_三
宣命_一 啓蒙

○御幸始

六十四代圓融院天元四年十二月二十日同

○神託 諸人心清ク清カレバ神明其心ニ移リテ思
ヒトシテ心ノマ、ナラザルハ無シ縱バ水ノ清ニ
天ノ月ノ浮ブガ如シ 倭論語

○梅宮 葛野郡梅津里ニ有 王城二里許西也 里川

和歌ニ詠ズ

新後拾遺
更にいま花咲梅の宮柱 權少僧都慶有

拾遺
たてゝそ千代の盛をもみん

名のみしてなれるもみえず梅津河 讀人不知
井せきの水ももれはなりけり

祭ル神四座 相殿神四座

酒解神 大若子神 小若子神 酒解子神

社記並舊傳云件四社以_三孝謙帝天平寶字年中_一祭_ニ
此地爲_三帝基守護鎮守_一所謂酒解社大山祇大若子社

伊勢度遇神主遠祖加夫良居命也小若子社同大若子
弟也酒解子神木花開耶姬也其後人皇五十二代嵯峨
天皇后姬橘氏諱嘉智子父清友少而沉原涉_三獵書記_一
眉目如_レ畫爲_レ人寛和風容絶異嵯峨天皇初爲_三親王_一
納_レ后寵遇日隆天王登祚弘仁之始拜爲_三夫人_一後立
爲_三皇后_一然常以_レ無_三太子_一而淒淒不_レ樂因_レ玆皇后
憑_三神代幽契_一祈_三酒解二座神_一矣一旦應_レ感有_三妊
孕_一遂以_三當宮清砂_一敷_三御座_一下_二居_一其上_二生_一兒所謂
仁明天皇是也天皇追_三神惠_一嘉祥年中以_三外祖父清
友_一并_三酒解社_一以_三檀林_一并_三酒解子神社_一又以_三瓊々
杵火々出見命_一配_三若子二社_一以爲_三橘氏祖廟_一也至
今尊崇異_レ他夏冬祭祀無_レ怠耳世人望_三產月_一則必
取_三當社砂_一佩_三帶襟_一此遺風也啓蒙

○神系

大山祇 伊弉諾尊拔_レ劔斬_三軻遇突智_一爲_三三段_一

其一段是爲_三大山祇_一日本紀

大若子小若子 註_三二卷_一

木花開耶姬 皇孫遊_三幸海濱_一見_三美人_一皇孫間

拾遺

千早振平野の松の枝しけみ

能宣

千代も八千代も色はかはらし

同

おひしけれ平野の原のあや杉は

元輔

こき紫にたちかさぬへく

祭ル神四座

今木社 久度社 古開社 比咩社

第一御殿源氏第二平氏第三高階氏第四大江氏都八

姓祖神在焉 公事根源

今木社 日本武尊也

大足彦忍代別天皇立_三稻日大郎姫_一爲_三皇后_一生_三二

男_一第一曰_三大碓皇子_一第二曰_三小碓尊_一日同胞而双

生天皇異_レ之則語_三於碓_一故因號_三其二王_一曰_三大碓小

碓_一也是小碓尊亦名日本童男亦曰_三日本武尊_一(日本紀)

久度社 仲哀天皇也

日本武尊第二子也母皇后云_三兩道入姬命_一天皇容姿

端正身長十尺稚足彦天皇成務無_レ男故立爲_レ嗣 同上

古開社 仁德帝也 大鷦鷯天皇同

譽田天皇第四子也母曰_三仲姬命_一五百城入彦皇子之

孫也譽田天皇崩時太子菟道稚郎子讓_三位于大鷦鷯

尊_一未_レ卽_三帝位_一爰皇位空之經_三三載_一太子自死焉二

十四歲遂卽_レ位在位八十七年崩時年一百十同上

系圖

大足彦忍代別天皇

日本武尊

稚足彦天皇

足仲彦天皇——譽田天皇——大鷦鷯天皇

比咩神 天照太神也但依_レ所 傳註_上

縣社 天穗日命也 中原 清原 菅原 秋篠 四

姓神也

素盞烏尊嘴_三右瓊_一置_三之右掌_一而生_三兒天穗日命_一此

武藏國造土師連等遠祖也日本紀

○桓武天皇延曆年中立_三件社_一延喜式

○攝社

春日社 任部社 啓蒙

○御位 五十六代清和帝貞觀六年七月十日正一位

幣四前二十二社註式

○祭 四月十一月上申日

貞觀元年十一月九日始祭 或桓武帝延曆被_三始行_一

之又云嵯峨帝弘仁始_レ之又云文德帝仁壽元年十月

始_レ之

スルニヤ夫神者不測之靈號也仰之彌高欲尋之則玄妙幽遠也何以現其形耶以有示無號以無示有喻一輪月雖洪海雖微露亦應大小無不宿也神誓又如此號鳴神道微而學者稀也以此護者爲貴耳遂充不實於天下者乎一人傳虛則天下悉傳虛者蓋此謂哉神社便覽ノ心

○當社鍛冶ヲ始メ一切ノ金物師信仰シテ十一月八日輪囊祭トテ此神ヲ祭奉ル事ハ當山御垂跡ノ時天上ヨリ輪囊ト云フ物ヲ持下リ玉フ故也トイヘリ是俗説ノ誤也云々昔二條小鍛冶ト云フ者當山ノ埴土ヲ以テ乃ノ土ニ用ケレバ比類無キ劔ヲウチ出ケル故其後ハ偏ニ當社ヲ信敬シ奉テ猶土ヲ用ルトテ數當山ニ往來シケル也是理ヲ不知シテ金工ノ守護神ナル故小鍛冶ハ信仰シケルト流布シケルト也

○稻荷明神ノ託宣 諸人ヨ鬼神天魔ヲ嫌ヒニクム事ナカレ大悲ノ心ヲオコシテ經多羅尼ヲヨミサヅケヨ假初ニモ是ヲ降伏スル思ヒヲ成ベカラズ濁レル世ノ衆生ハ惡キトテ祈シリゾクル故ニ終ニ子ガヒヲミツル日ナシ 倭論語

稻荷明神御歌

續古今神祇部

我たのむ人のねかひを照すとて

憂き世に残るみつの灯

親の處分をゆゑなく人にをしとられけるを此事ことわり給へと稻荷に籠りて祈申ける法師の夢に社のうちよりいひ出し給ひたる歌

詞花集

なにかき世のくるしき事を思へかし

何なけくらんかりのやとりを

○高博ト云シ人ノ母重病ヲウケテ存命不定ナリシガ逝テ不還ハ盛年ワカレテ會ガタキハ悲ノ親也イカバセントテサマザマイタハリケレドモ終ニ療藥ノ効ナカリケレバ稻荷ノ社ニ七ケ日參籠シテ母ノ病ヲ祈申ケリ第七日ノ夜深更ニ及テ心ヲスマシテ琵琶ヲ抱テ上玄石象ノ曲ヲ彈ゼシニ折節御前ノ燈爐ノ火キエナントシケルヲ御寶殿ノウチヨリ玉簾ヲ卷上テ弗童一人出現シ灯ヲカ、ゲ、ル高博ヲガミ奉リテ神慮ノ御納受タノモシク覺テ下向シタリケルニ母ノ重病タチドロニ平愈シテ更ニ恙ナカリケル下略ス盛衰記十二

○平野 葛野郡 王城ヨリ一里計西也

四大神 四柱兒神也

已上之加三一座爲五座焉○弘長三年有告文永年中奉併也已上神祇拾遺啓蒙

○神殿 延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣時平修造件三箇社者也二社註式

○別宮并攝社

御倉上社 三座 本宮之後丘有

白狐社 同所左二有

明日荷田社 地主神上社傍二有

鴨社 本宮之乾二有

御田社 非太田 大鳥居之内南二有 已上啓蒙

○御位 人皇六十一代朱雀院天慶三年庚子八月廿

八日從一位 使四位一人幣三前 宣命黃紙 同上

○祭 四月初卯日 天曆勘文云禰宜祝供ニ仕春秋

祭云々 同上

○行幸 七十二代後三條院延久四年三月廿六日同

上

○二月初午日當宮ニ參事 元正帝御宇當社影向之

日偶二月初午日也故至今用此日 神祇拾遺

○號ヲ稻荷ト申事 空海師東寺ノ傍ニシテ稻ヲ荷

老人ニアヘリ是神ナル事ヲ悟テ即祭納テ東寺之鎮守トス此故ニ今祭ノ日御旅所ヨリ本宮ニ還リ玉フトキ神與ヲ東寺ニ成シ奉レバ東寺ノ境内ヨリ役當アリテ神供ヲソナヘ寺僧出テ眞言密乘ノ行ヲナシ事オハレバ神與本山ニ還玉フ也是東寺ノ鎮守ナルユヘ也老人ト化シ玉フ時稻ヲ荷ヘルニヨツテ此號有ト云々

又卜部兼邦說云稻荷之事一說弘法大師入唐之時御供被レ申共有和銅年中ニ稻荷山ニ勸請也云々右兩說ハ兩部習合歟唯一神道說云當山之地主神荷田明神ノ地ニ倉稻魂ヲ鎮坐シ奉ル故ニ倉稻ノ稻ノ字ト荷田ノ荷ノ字ヲ取テ號トス

夫此神者本朝衣食祖神倉生安逸靈社也何人不敬云云 ○京極ノ上極樂寺眞如堂ニ稻荷ノ神體ト稱シテ初午日開帳シケレバ男女群詣ス其像ハ辨財天ニシテ白狐ニ乘レリ傳云數十年前此神體當寺エ質物トシテ來玉フ也ト此日札守ヲ出ニモ其像ヲ印ス也予按ルニ兩部習合ハ神體ヲ立ツル故ニ辨財天ヲ號スル事サモアランカシ但質物トシテ當寺ニ來レル事ハ信用シ難シ別ニ子細アレドモ本縁ノ筆記紛失

御幣等使^ニ左少將藤原理兼左右御馬有^ニ五疋^一右近
官人供奉^ニ東遊歌略之^一此後中絶第七十五代崇徳院天
治以後毎年相續同上
已上啓蒙

○崇徳院天治元年六月始焉御禊儀式同^ニ平野^一勅使
殿上五位奉^ニ東遊^一有^ニ宣命^一今日又有^ニ走馬勅樂^一^{神社考}
○行幸始ハ七十一代後三條院延久四年三月二十六
日

祇園之神詠

玉葉集神祇部

我やとに千もとの櫻花さかは

植をく人のみもさかえなん

○稻荷

紀伊郡 帝城之東南二里バカリニ有

昔ハ今ノ宮地ヨリ十餘丁山中ニ有坂アリテ諸人參
詣ノ便アシケレバ今ノ地ニ引奉ルト也舊宮ノ跡今
猶アリ

いなり山越てやきつる時鳥

源賴實

ゆふかけてのみ聲の聞ゆる

風雅
やはらくる光をみつの玉垣に

前左大臣

外よりもすむ秋のよの月
舊宮ノ道スガラ坂有リ坂ヲ讀ル和歌
堀川百首
おそくとく宿を出つゝ稻荷坂

忠房

のほれはくたる都人哉

清少納言初午ニ詣シニ坂ヲ登シガクルシカリシ由

枕双紙ニ書リ 瀧有

拾遺
瀧の水かへりてすまはいなり山

讀人不知

七日のほりししるしと思はん

祭ル神三座

大山祇女 下社 非ニ木花開耶姬

倉稻魂 中社 同名異神有三神

土祖神 上社

豐葦原卜定記云辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂跡阿利夫
此神波百穀於播玉故仁名奉神代乃昔與利此峯仁向玉
母不知只三峯仁顯玉之波人皇十三代元明天皇和銅四
年辛亥二月十一日仁垂跡寸誠仁諸人哀憐乃御心深久
蒼生作牟物波草乃片葉未天百乃災於攘玉全文略之啓蒙今
傳五座說

田中社 今ハ本宮ニ奉移云々東福寺ト稻荷ノ間南側人
家ノ中ニ有其所ヲ田中町ト云也

彦根命次熊野櫟日命凡五男矣是時天照太神勅云
原其物根一則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼
五男神悉是吾兒乃取而子養焉已上日本紀

○牛頭天王初垂跡於播磨明石浦移廣峰其後

移北白河東光寺其後移感神院

社註式
二十二
改曆雜
事記

○貞觀十一年始天王從播州遷坐

社註式
改曆雜
事記

○播磨國峰相記云吉備公歸朝日於當山奉崇牛
頭天皇也歷年數後爲平安城東方守護奉勸請

祇園荒町啓蒙

○人皇五十六代清和帝貞觀十八年移八坊鄉云々

便覽

○第六十四代圓融院天祿三年以祇園爲日吉末

社慈惠大師記

○攝社

後見殿 本殿ノ丑寅ニ有神大己貴命

傳系
前在

蘇民將來社 南門ノ内左ノ社

今世傳簀篋内傳有蘇民惠素戔嗚之辨也不信

不可執之

與官受福社 拜殿ノ傍ニ有

美御前 本殿ノ東ニ有

社家流云素戔嗚尊所生之三女神也啓蒙

護王地社 在下川原

於當社尤有習王城守護神也啓蒙

官者殿四條京極祇園御旅所ノ傍ニ有

舉世所謂此神誓文起請赦免社也云々依此考則唯
一所傳起請返神乎起請反者起請文上書靈印以奉
神供一七日祭之誠唯受一流大事非其家則不傳
也祇園末社有此神又宜也 啓蒙○世ニ土佐正尊
ヲ祭ルト云フハ非也商人渡世ノ諺トシテ請文ヲ云
フ事限ナシ然共十月二十日此神ヲ祭バ神其答ヲユ
ルシ禍來ラズトイヘリ此故ニ其日群參スル事限リ
無シ神ハ正直ノカウベヲテラシ玉フト云事タレカ
辨ヘザラン僞言ヲモテ人ヲ誑セシヲ神何ゾ是ニク
ミシ玉ハン幣帛ヲエテ其答ヲ許玉ヘバ惡ヲス、ム
ル神也辨フベキ事也神ノ御事神祕ト云々其家ニ入
テ可尋事也

○祇園祭之事

圓融院天祿元年六月十四日始御靈會自今歲行之

二十二社註式

臨時祭 同三年六月十五日始被奉走馬勅樂東遊

吾耶對曰隨_レ勅奉矣故素羹烏尊立化_二奇稻田姬_一爲_二

湯津爪櫛_一而插_二於御髻_一乃使_二脚摩乳手摩乳_一釀_二八

醞酒_一并作_二假殿八間_一各置_二一口槽_一而盛_二酒以待之

也至_二期果有_一大蛇_一頭尾各有_二八岐_一眼如_二赤酸醬

松栢生_二於背上_一而蔓_二延於八丘八谷之間_一及_二至得

酒頭各_二一槽飲醉而睡時素羹烏尊乃拔_二所帶十握劍

寸_一斬其蛇_二至_一尾劍及少缺故割_二其尾視_一之中有_二

劍此所謂草薙劍也_一又曰本名天藜雲劍蓋大蛇所居

之上常有_二雲氣_一故以名歟至_二日本武尊_一改曰_二草薙

劍_一素羹烏尊曰是神劍也吾何敢以私安乎乃上獻於

天神_一也然後行_二覓_一將婚之處_一遂到_二出雲之清地_一焉

乃言曰吾心清清之於彼處建_レ宮時素羹烏尊歌之曰

夜句茂多菟伊都毛夜霸餓岐菟磨語味爾夜霸餓枳菟

俱廬贈迺夜霸餓岐迺相與遂合而生_二兒大己貴神_一

○昔北海武塔天神_{素羹烏尊}通_二南海龍女_{奇稻田姬}日暮借_二

宿路傍有_二二人_一兄曰_二蘇民將來_一弟曰_二巨旦將來_一兄

貧弟富天神借_二宿巨旦_一不_レ借又求_二蘇民_一許_二之以_一

粟柄_一爲_レ座以_二粟飯_一爲_レ饗後天神殺_二巨旦_一喪_二其

家_一以_二茅輪_一與_二蘇民_一曰吾是速進雄神也後世有_レ疫

則汝蘇民將來子孫以_二茅輪_一應_レ著_二之腰_一將_レ免備後

國風土記

一說云進雄借_二宿諸神_一皆不_レ許_二之時有_一蘇民巨旦

者_一兄弟也兄貧而仁弟富而吝進雄借_二宿巨旦_一固拒

之不_レ容蘇民出迎而勞_二之則餽以_一粟飯_一尊大喜欲

報_二之其夕命_一蘇民_一渾_レ家帶_二茅輪_一即有_二大疫_一除_二

蘇民家_一皆遭_二殃亡_一神亦教_二之云後世疫氣流_一行天

下_一一小簡書云吾是蘇民將來之子孫并爲_二茅輪_一此

二物係_二之衣袂_一則必免矣按備後風土記以_レ是爲_二北

海民塔神通_二南海神女_一時事_一武塔神乃進雄之別號

其祠見今在_二彼國_一云_一疫隅社_一今六月御靈會於_二四

條京極_一供_二粟飯_一蓋起_二于蘇民緣_一云

八王子_一三女五男也天照太神乃索_二取素羹烏尊十握劍_一

打折爲_二三段_一濯_二於天真名井_一齧然咀嚼而吹棄氣噴

之狹霧所生神號云_二田心姬_一次湍津島姬次市杵島姬

凡三女矣勅曰其十握劍者是素羹烏尊物也故此三女

神悉是爾兒便授_二之素羹烏尊_一此則筑紫胸肩君等所

祭神是也_{已上}素羹烏尊昇_二天之時乞_一取天照太神醫

鬘及脫所纏八坂瓊之五百箇御統濯_二於天真名井_一齧

然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號云_二正哉吾勝_一

速日天忍穗耳命_一次天穗日命次天津彥根命次活津

人_レ以_レ是爲_レ信言已不_レ見朗謂_レ徒曰_二鳥來馴子等莫_レ恠果如_三神言_一其石今尚在焉爾來_二鳥外餘羽不_レ入朗安元二年移_三松尾山南寂福寺_一元亨釋書

○祇園 感神院ト號ス愛宕郡八坂郷和歌ニ祇園トヨ
メリ

後三條院の御時祇園に行幸侍けるに東遊にうた

ふべき歌めしければ讀る
後拾遺神祇之部

藤原經衡

万代ふへきはしめ也けり

祭ル神三座 素戔嗚尊中 八王子東 稻田姬西

牛頭天王 感神天王トモ 素戔嗚尊也

此神有_二勇悍以安忍_一且常以_二哭泣爲_レ行故令_二國內人民多以夭折_一復使_二青山變枯_一故其父母_二神勅_二素戔嗚尊_一汝甚無道不_レ可_三以君_一臨宇宙固當_二遠適_一之於根國_一矣遂逐之日本紀又云於是素戔嗚尊請曰吾今奉_レ教將_レ就_二根國_一故欲_レ暫向_二高天原_一與_レ姉相見而後永退_上矣勅許之乃昇_二詣之於天_一也素戔嗚尊昇_レ天之時溟渤以之鼓盪山岳爲_レ之鳴响此則神性雄健使_二之然_一也天照太神素知_二其神暴惡_一至_レ聞_二來詣之狀_一乃勃然而驚曰吾弟來豈以_二善意_一乎謂當

有_二奪_レ國之志_一歟夫父母既任_二諸子_一各有_二其境_一如何棄_二置當_レ就之國_一而敢窺_二竅此處_一乎舊稜威之雄詰_二發_二稜威之噴議_一而徑詰問焉素戔嗚尊對曰吾元無_二黑心_一但父母已有_二嚴勅_一將_二永就_二乎根國_一如不_レ與_レ姉相見吾何能敢去是以跋_二涉雲霧_一遠自來參不_レ意阿姉翻起嚴顏于時天照太神復問曰若然者將何以明_二爾之赤心_一也對曰請與_レ姉共誓天誓約之中必當_二生_レ子

○系圖

伊弉諾尊
伊弉冊尊
大日靈貴
天照太神之系圖太神ヨリ前略
月夜見尊
蛭兒尊
素戔嗚尊

少將井 稻田姬也 ○素戔嗚尊自天而降_二到於出雲國籙之川上_一有_二一老公與_二老婆_一中間置_二一少女_一撫而哭之素戔嗚尊問曰汝等誰也何爲哭之如此耶對曰吾是國神號脚摩乳我妻號手摩乳此童女是吾兒也號奇稻田姬所以哭者往時吾兒有_二八箇少女_一每_レ年爲_二八岐大蛇_一所_レ吞今此小童且臨_二被_レ吞時_一無_レ由_二脫免_一故以哀傷素戔嗚尊勅曰若然者汝當_二以_レ女奉_レ

祭_レ之隨_二神誨_一遷_二宮于彼地_一以祭_レ之自_レ是以來天下每_レ有_二炮瘡之疫_一人無_二貴賤_一詣_二此社_一以祈_二神之佑_一
三代實錄ノ心
神社考

○今所傳七座名

松尾社 月讀社 櫟谷社 三宮 宗像社 衣手社

四大神 啓蒙

○祭ハ四月上申日十一月上酉日人皇五十四代仁明帝承和四年ニ始也 祭ノ日賀茂下上ノ宮ニ同ク内藏使山城使等當宮ニモ立ツ也賀茂ニ同ク帝城守護ノ神也 按ルニ山城使内藏使ノ事職原鈔ニ見ユ

四月八日松尾祭使に立て侍けるに内侍は誰をと上卿の尋侍ける折しも郭公の鳴ければ讀る

玉葉集
時鳥しめのあたりに鳴聲を 深草院少將内侍

聞我さへに名乗せよとや

○御位 三十六代清和帝貞觀八年十一月廿日正一位使同賀茂幣二前廿二社註式

○預大社事 始六十六代一條院寛弘元年甲辰十一月十四日

○初以秦氏爲神官事 松尾鎮座記云元明帝和

銅二年四月十一日秦良兼同正光荒子山松尾爲守護留 已上啓蒙

○松尾神託 諸人ノ一心ニ一禮ヲナスモ無量ノタスケアリマシテ一念正直ノ大道ニイランモノ也 倭論語

○釋空也在雲林院一日入帝城有老翁倚城垣其貌甚寒齒牙相戰也曰尊老凜寒何立此乎對曰我是松尾明神也頃受般若法味未上白牛挽艇之車以故貪癡之風逼我膚師善法花願有意乎也脫衣度與曰我着此衣讀法華者四十年其妙香薰皆染是衣今獻之可乎神悅受之便被身相溫如無復寒氣元亨釋書心 ○建久七年七月雷折松尾祠後大杉其木覆神殿欲斬之其材大難制恐壓神殿若不伐異時小風雨又自壓倒神官與僧延朗議朗曰莫慮早伐又杉中有奇事耳已而加斧其杉如相避仆殿側於是自杉中忽迸出一漆塔其內又有銅塔盛舍利神官見之益信朗言便於祠之南建三層塔安之池側有大石白髮老人常坐其上朗問何屢來此對曰松尾明神也擁護師法又聽師誦法華故數來耳又我奉師給使者二

續拾遺

行てみるとや夏祓する

御祓する麻のゆふして波かけて

入道内大臣

涼しく成ぬかもの川かせ

風雅集
世中に物思ふ人の有といふは

我をたのまぬ人にぞ有ける

是は賀茂の御祖神の御歌となん

○松尾 葛野郡 都ノ西南 二里餘ニ有

新古今
萬代を松の尾山のかけ茂み 康資王母

君をそ祈るときはかきには

一條院の御ときはじめて松尾行幸侍けるにこ

たふへき歌つかふまつりけるに 源兼澄

後拾遺
千早振松の尾山のかけみれば

けふそ千年の始也ける

祭る神二座

大山咋神 大己貴神弟大年神之子大山咋神此神者

坐三淡海之比叡山又坐三葛野郡松尾鳴鏑神也舊事紀

遠古世丹波國皆湖也其水赤故云三丹波三大山咋神

決三其湖三丹波水涸成土矣以三鋤爲三神體三此神者即

松尾大神也系圖傳

○大歲神

大國御魂神

韓神

御年神

曾富理神

奥津彦神

白日神

奥津姫神

聖神

大山咋神

夫香山戸神

已上

南殿 神垂跡神祕也云々

別雷苗裔神也氏成私記 ○市杵島姫也廿二註式

○大中臣定好松尾鎮座記云元明帝和銅二年四月十

一日山城國山田庄荒子山於三賀茂三初奉傳云々

○造神殿文武帝大寶元年始於秦都理一廿二社註式

已上啓蒙

月讀 松尾已前之鎮座歟顯宗三年依三神託三被奉三

歌荒巢田押見宿禰侍祠云日本紀 ○顯宗帝獻三山背

國葛野郡歌荒巢田十五町以爲三月讀神地三歌荒

巢田在三大堰河之西南一即今松尾之東南地是也 ○

文德帝仁壽三年春夏之間痘疹流行病之時神現形

曰我是大堰河濱所居神名爲三三月讀神三我居近河頗

有泛濫之患今欲三移居於松尾之南山若能敬三祭

我三者災害當三自消三矣帝得三神語三大悅乃會三廷臣

糸木 糺の杜を行歸鳴

河合や清き川原に麻のはの

ぬさ取りして、いさ御被せん

爲家

此河に御祖原と云名所有又糺別名也

山家集 月のすむみおやか原に霜沍て

西行

千鳥群立聲聞ゆなり

祭ル神二座 玉依姫 大己貴命

玉依姫 前ニ記ス則別雷神ノ尊母 御祖神ト申ス是

也 夫木集三條入道左大臣ノ歌

けふはみな折にあふひをかさす哉

頼む御祖の神のしるしに

大己貴命 素戔嗚尊子也系圖上ニ見

素戔嗚尊降ニ到於出雲國 娶ニ奇稻田姫ニ遂到ニ出雲

之清地ニ焉乃言曰吾心清清之於ニ彼處ニ建ニ宮相與違

合而生ニ兒大己貴神ニ

大己貴命與ニ少彥名神ニ戮ニ力ニ心經ニ營天下ニ復

爲ニ顯見蒼生及畜產 則定ニ其療病之方ニ又爲ニ攘ニ

鳥獸昆蟲災害ニ 則定ニ禁厭之法ニ是以百姓至ニ今咸

蒙ニ恩賴ニ 已上日本紀

○攝社

比良木社 當所地主神也

河合社 式稱ニ小社宅神ニ是也上賀茂社官參宮之日先

詣ニ此社ニ而後拜ニ御祖ニ蓋有ニ社例傳習ニ也已上啓蒙

小鳥社 河合之東ニアリ

三井社 或三身社トモ三座有

久我社 未刀社 共ニ本宮之北ニ有

靈璽社 本緣神祕也云々○下上トモニ行幸之始ハ六

十一代朱雀院天慶五年四月二十九日也同上祭之事

上賀茂ニ同ジ 六月洗手水會十八日ヨリ晦日ニ至

リテ諸人群參ス上賀茂ニハ廿九日晦日ニ神事能有

此事往昔ヨリ三伏ノ祓也是ヲ夏越祓ト云フ也昔ハ

神官悉川邊ニ集會シテ夏越ノ儀式アリ貴賤川頭ニ

ノゾミテ祓ヲシケリ今ハヲトロエテ其遺風バカリ

也云々○邪神ヲ祓ナゴムル故ニナゴシノ祓ト云フ

也ハ雲鈔ノ心夏祓夏越和雛トモ○天照太神皇孫命ヲ

葦原中國ノ王トセントス彼國ニハ螢火ノ神及蠅聲

邪神多シトイヘリ是ヲ祓和ルトテ六月祓ハスル也

團太曆

六月祓ヲヨメル和歌

後撰 かも川のみな底清く照る月を

讀人 不知

○賀茂祭四月中酉日也未日先上卿着陣召_二六府課_一警固_一朝廷被_レ獻_二走馬_一其日勅使近衛中少將勤_レ之昔有_二神夢_一人々懸_二葵蔓花鬘_一先一日賀茂松尾社司獻_二葵花鬘_一此祭始_二于欽明帝之時_一花鳥餘情河海等ノ心神社考又賀茂國祭者四月中申日也欽明帝撰_二吉日_一行_レ之和銅年中詔_二山城國司_一令_レ檢_二察_一之

○賀茂臨時祭者十一月下酉日也 寬平御記載字多帝潛龍時_{號_三王_一}放_レ鷹狩_二于賀茂邊_一俄天陰霧降東西迷_レ路帝臥_二藁中_一憂恐之甚有_二一翁_一來告曰吾此邊之老翁也春既有_レ祭冬未_レ有_レ祭願賜_二冬祭_一帝心爲_二賀茂明神_一也因答曰吾力非_レ所_レ及宜_レ被_レ奏_二請_一于內_レ翁曰吾知_二其力之所_一可_レ及願自重而勿_レ輕矣言已不_レ見帝大怪_レ之未_レ幾仁和三年八月二十六日立爲_二皇太子_一即日即_二天皇位_一於是信_二神言_一而寬平元年十一月二十一日始行_二賀茂臨時祭_一左近中將時平朝臣爲_二勅使_一藤原敏行詠_二東遊歌_一外記內記云東遊男從等皆著_二已上神社考_一青櫛_一二十人左右少將侍

臨時祭 五十九代宇多帝寬平三年十一月廿四日庚午日於賀茂明神_一有_二走馬事_一勅使右兵衛督藤原高經率_二男二十人_一參_二上下社歌舞云々_一○臨時祭ヲ讀ル歌

新勅撰

いかなれはかさしの花は春なから 法性寺入道

山あるもてすれる衣のあかひもの 貫之

長くそ我は神につかふる

○五月五日之走馬社家第一ノ神事ナリ

○式部大輔實重ハ賀茂ニ參事ナラビ無キ者也前生ノ運オロソカニシテ身ニスギタル利生ニアヅカラズ人ノ夢ニ大明神又實重來リイフヤウハトテナゲカセオハシマス由ミケリ實重御本地ヲ見奉ルベキ由祈申ニ或夜下ノ御社ニ通夜シタル夜上ニ參間流木ノ邊ニテ行幸ニアヒ奉ル百官供奉常ノ如シ實重片敷ノ中ニカクレテミケレバ鳳輦ノ中ニ金泥ノ經一卷オハシマシタリ其外題ニ一稱南無佛皆已成佛道トアリトオボエテ夢則サメヌトゾ宇治拾遺卷四○下賀茂 王城ヨリ五六町子丑ノ間也平林ノ中ニ宮アリ此所ヲ紉トモイヘリ又紉ハサシ入ニ有ル南向ノ宮ヲ云フ也河合トモ

新古

慈圓

君を祈る心の宮を人とは、

玉葉 川千鳥なれもや物はうれはしき

俊成

續古今

乙女子かゆふかみ山の玉かつら

家隆

けふは葵をかけやそふらん

又日陰葛トモイヘリ 蘿日本紀

續後撰

神山の日かけのかつらかさすてふ 正三位成次

豊の明そわきてくまなき

葵祭ノ前ノ日ヲミアレノ日ト云フ也 云々

玉依姫ノ別雷神ヲ産玉ヒシ所也御形トモ御生トモ

書祭ノ前ノ日ヲミアレノ日ト云フ也御生所ハ神館

ニアリ祭ノ時ノ御旅所也花鳥餘情見

思ふ事みあれのしめにひくすゝの

西行

かなはすはよもならしとぞ思ふ

御形野 御形山歌ニ詠ゼリ是ハ下鴨ト云フ説有後

人之考ヲ待者也又上鴨ノ乾高野ノ邊ニ御形山有云

云實説未レ考

久堅の天の磐船漕よせし

賀茂遠久

神代の浦や今のみあれ野

みあれ山幾世の雲は嶺こめて

賀茂季保

しらぬ昔のけふにあふらん

夫木 見あれ川かものみとしろ引うへて

好忠

今はた年の神をいのらん

○因云鴨川鴨羽川トモ瀬見小川トモ

玉葉

我たのむかもの川波立歸り

顯輔

嬉しきせゝにあふよしも哉

さかのほる鴨のは川のかみを 前太政大臣

思へは久し代々のみつかき

賀茂社歌合に月

石川やせみの小河の清ければ

月も流を尋てそとふ

判云此川さだかにしらすかゝる川や有とてま

けになりたるに又改て顯昭法師に判をさせ侍し

とき此歌を判じていはく石川せみの小川いとも

聞及侍らず但おかしくつゞけたりかゝる河など

侍にや所のものに尋て定むべしとてことをきら

ず後に顯昭にあひたりし時此事かたり出てこれ

はかも川の實名也當社の縁起に侍と申せしかば

おどろきて下略之無名抄

○御手洗川歌ニヨメリ略ス ○御手洗川神山ヨリ

流出テ賀茂ノ社貴舟片岡杜ノ中ヨリ折レル小川也

河海抄

賀茂齋院卜定アリテ後東川ニ望玉ヒテ御祓ノ事ア

リテ直ニ初齋院エ入玉フ初齋院トハ大内ノ中大膳

職或左近府ナンドヲ點ジテソレニテ三年潔齋ノ事

アリ其年ノ四月ニ御社エ參玉ハントテ祭ノ前ニ吉

日ヲエラミテ又御禊ノ事アリ則紫野ノ野宮ニ入玉

フ是ヲ二度ノハラヘト云フ扱中西日ニ賀茂社エ參

玉ヒテ祭ノ事ニ隨玉フ也已上花鳥餘情按ズルニ野宮ニ

所ニアルカ嵯峨之野宮ハ伊勢ノ齋宮ノコモリ玉フ

所也是ニモサマノ儀式アリ源氏物語ノ鈔物等

ニ記セリ又此所近ワタリニ川有有栖川ト云フ也是

モ同名二所ニ有○有栖川ハ齋院ノオハシマス本院

ノカタハラニ侍ル小川也袖中抄

千載
ちはや振いつきの宮の有栖河

松とゝもにやかけは澄へき

後京極

夫木
音に聞く齋の宮の有栖河

躬恒

たゝ舟岡のわたり也けり

右紫野の野の宮近き有栖川なり

一葉抄にさかの有栖川といへり○今出川のおほの

とのさがにおはしけるに有栖河のわたりに水の流

れたる所にて下略徒然草

右さがの有栖川也又有栖山ともよめり

夫木
夕されは空もをくらの時鳥

經信

有栖の山に聲なしのひそ

太神宮ノ齋宮ニ同ク忌ノ詞等有テ佛法ノ息ヲノゾ

カル、也詞花集ノ詞書ニ

賀茂のいつきと聞えける時西に向ひてよめる

思へ共いむとていはぬことなれば 選子内親王

そなたに向て音をのみそなく

○祭之事凡ッ祭トバカリ云フ時ハ當社葵祭ノ事也

トカヤ縦バ山ト計云フ時ハ比叡山ノ事寺ト計云フ

ハ三井寺ノ事成ガ如シ

四月中西日也人皇卅代欽明帝之御宇ニ始レリ葵ヲ

モチ神宮ニカケ用ル事神祕ノ子細有リトカヤ

堀川百首
めつらしく年に一度あふひをや 顯仲朝臣歌

神も嬉しくみそなはすらん

此日社家 天子將軍其外諸家エモ葵ヲ獻ズル也

天子ノ玉垂ニモ葵ヲカケラル、ト也

けふといへはすたれのみかは葵草

榮雄

古きふみにも巻添てけり

今日女ノ髪ニモカケ、ルト也

かしこまる四手に泪をかゝりける

西行

又いつかはと思ふみなれば

賀茂社中有三言主神 賀茂氏久歌曰
君を祈るたゝひとことの神の宮

二心なき程をしるらん

神社考

○賀茂皇太神御託宣

一度吾前ニ來リテ一禮ヲ成ス者ハ其思ヲシタガヒ
テ神力ヲ加テ思ヲトゲンマシテ日重テタノマン人
ニオヒテヲヤ倭論語

むかし横川に恵心僧都とてならびなき智者いまそ
かりけり行徳たけ薰修年積りて法のしるしどもを
ほどこし給へる人也或年の神無月の比かもの社に
まうでゝおはしける程にいかにも心すみて覺給へ
ければ御前につやし給ひけるに時雨にはかにさえ
とをり嵐はげしくて月の光も雲まなくしかあれど
も晴行空のするのさと人は月を猶待らん物とみえ
侍り枯のゝくさの露のやどりしげからんと覺えて
何となく哀なるにつけても世のさだめなき事の思
はれてかなしみ給ひけるに御戸の内より誠にけた
かき御聲にて

つねなき世にはこゝろとむなよ

と聞えければ僧都とりあへず

月花のなさけもはてはあらばこそ と付申され

ければ御聲おどろくしくうごきてあら面白との

御こゑをまのあたり内記入道は聞給へりと傳へ承

る忝侍り下略之 撰集鈔

片岡社

千載集
さりとともと頼みそかくるゆふ禪

賀茂政平

わかた岡の神と思へは

大田澤 社ノ前東ノ方ニアリ

神山や大田の澤の杜若

俊成

ふかきたのみは色にみゆらん

○齋院

凡天皇即位者定ニ賀茂大神宮齋王ニ簡ニ内親王未
嫁者ト定若無ニ内親王者依ニ世次ニ簡ニ諸王女ト

定神社延喜考式●私曰諸王ノ事職
原鈔ニ見エタリ

平城帝嵯峨帝位ヲアラソヒ玉フ時嵯峨帝御祈願ノ

事アリテ皇女有智内親王ヲ以テ始テ齋院ニタテ玉

ベリ其例相續テ立玉ヒシヲ土御門院元久元年三十

四代之齋院ニ至リテ斷絶シ玉フ也

諸書ニ記ス
神社考ノ心

是也其槻歳久偃仆世貴爲靈木不厄樵材故至
於今也子乞神官刻菩薩像圓喜而詣神主告
事神主不靳不日而成像長八尺營行願寺安之
釋書●私曰一條革堂是也三十三所願禮所也
ニ雷神ト詠ス
君を祈るねかひを空にみて給へ

別雷の神ならは神

○當社鎮座之年紀秘シテ不語況神之御事哉井八所
之攝社末社等モ同ジ云々○社家祕無申旨故難露
顯神祕○凡帝都守護神明何不疎別而賀茂明神之
守護深重也太子馬○公家悉以當社祭祀爲日本第一
神事一日供即爲寛治勅願豈非朝家無双之禮
奠哉貞永元年六月卅日之宣旨

○攝社

若宮本宮東傍

新宮若宮東

土師尾社御札屋前

藤尾社

新宮南

鎮守社本宮東片岡山麓

太田社自本宮五町東

白

鬚社ヒゲ太田社

福德社

鎮守社共太田社南神宮寺南石橋ノ南ニ有

川尾社

回廊丑寅玉
垣ノソト

片岡社

諏訪社共本宮樓門外川東南側ニ有但片岡ハ東スハ南橋殿ノツギ

澤田社諏訪社南

岩本社澤田南

奈良社澤田南 梶田社

奈良社南 流木社梶田社ニ

流木社梶田社ニ

奈良社鳥居右

梶田社

杉尾社本宮傍未申四足門内

棚尾社四足門段橋右方小社

橋本社樓門間廊西石橋北傍

山森三間社本宮西方

氏神社一鳥居外未申

岩本 橋本社

神祇拾遺云住吉和歌之兩神也業平

實方常拜二件二社一祈一和歌之秀矣遂家風成ノ譽溢

海内一之故世人稱爲二兩神化現云々徒然草ノ説ハ右ニ異ナリ

賀茂の岩本橋本は業平實方也人のつねにいひまがへ

侍れば一年參たりしに老たる宮司の過しをよびと

どめて尋侍しに實方はみたらしに影のうつりける

所と侍れば橋本や猶水の近ければと覺え侍る吉水

の和尙

月をめて花を詠し古へのやさしき人はこゝに在

原と讀給ひけるは岩本の社とこそ承をき侍れ以下文略之

棚尾社 撰集鈔そのかみつかうまつりなれけるなら

ひに世をのがれて後も賀茂の社に參けるを年たか

くなりて四國の方え修行しけるが又歸參らぬ事も

やとて仁安三年十月十日夜參て幣まいらすとてた

なをの社のもとにてしづかに法施奉けるほどこの

まの月ほのくにて常よりも神さびあはれにおも

はえ侍ければ

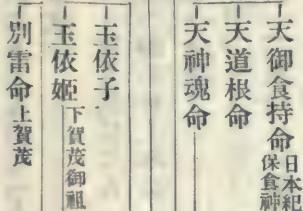
山城國風土記云賀茂建角身命娶丹波國神野伊可古夜姬生子名玉依子次曰玉依姬玉依姬遊於石川瀨見小川今賀茂川時丹塗矢自川上流下乃取來置之床邊忽成麗夫遂孕生子至成人祖父建角身命欲知其父造八尋屋堅八戸扉釀八醞酒而神集七日夜遊樂謂其子曰汝飲此酒將杯與汝父其子即舉杯置矢前向天穿屋薨而升於天乃因外祖父之名號賀茂別雷神神代系圖

○雷神 伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智爲二段其二段是爲雷神日本紀

神系圖

神皇產靈尊

「賀茂武津之身命」



正統記云武津之身命爲八咫鳥爲神武帝軍先導

已上系圖傳
元亨釋書行國傳此神之傳アリ少異大同也左記ス

釋行圓鎮西人寬弘二年遊帝城頭戴寶冠身被革服都下呼爲革上人圓持千手大悲陀羅尼又欲得好材刻其像一夕夢沙門來告曰明日送爾異材翌朝果一僧至語云賀茂神祠側有一槻木莓苔纏封不知幾千百歲其外似朽內甚堅實每至六齋日槻畔有誦千手神咒音近見無物遠聞有聲自古名爲異木是子之所求材也古老傳言昔城北出雲路有少女臨鴨河洗衣一箭沿流而來女取見之鴨羽加害女携還家插簷牙自此女娘已而生男兒父母問其夫女曰無父母以爲匿也兒三歲父母議曰世豈無父而有兒乎思此里人乎宜具酒膳大宴里夫令此兒持杯試告言以此杯置汝父所其得杯之人便兒之父議已多會鄉人數爵之後令兒送杯時兒取杯穿衆人出堂而置簷上鴨箭所父母及諸胥怪之相議曰是箭屬鴨羽宜姓此兒爲賀茂氏於是兒化成雷上天母又同時登天而去今之賀茂中祠昔爲田中時田主已播秧數畝其苗俄變成槻樹母氏降樹下一爲神今賀茂中宮是也兒又降爲神賀茂上宮

新拾遺同祭を

九重の櫻かさしてけふは又

後醍醐院

神につかふるくものうへ人

年中行事歌合

放生會年中行事歌合

世にかくてつなかるゝ身も救はなん

新中納言

生るを放つ神のめくみに

○賀茂 鴨之訓也 鴨トモ書リ

愛宕郡也王城之北半里バカリニ有リ 宮ハ鴨山ノ

下ニ有 山名 神山 二葉山 日蔭山 御影山ト

モ和歌ニヨメリ

かくてのみやむへきものか千早振 三條右大臣

鴨の社のよろつ代をみん

新勅撰

神山の榊も松も茂りつゝ 賀茂重政

ときはかさはの宮そひさしき

夫木

神垣にかくる葵の二は山 季經

幾とせ袖の露はらふらん

同

日かけ山けふのかさしの諸草は 師光

万代かけて我や頼まん

同

そのかみのみかけの山の諸はくさ 師光

長き代かけて我や頼まん

祭ル神 別雷皇太神

廿二社註式曰日向國仁天降坐須神於賀茂建角身命

止申須神倭磐吾彥天皇乃御前仁坐天大和乃國葛木仁

宿寸彼與利漸山背國岡本乃賀茂仁遷幸山代川仁下坐

天葛川止賀茂川止合處仁立坐給比賀茂川乎見巡之天

宣久狹久少也止云止毛石川乃清流也止天石川瀬見小

川止號久川上仁宮所於定給天北山乃麓仁住給利其時

此所乎賀茂止云也止 ○豐葦原卜定記云古仁八十萬

乃神達乎高天原仁集給比神議仁議給天可遺神於尋

出之奉利此國陪鹿島仁坐寸武雷神香取仁坐寸齋主神止

於下之千早振惡神於悉皆伏世順陪奉天遂報申寸此後

建角身命國々於見巡之御座寸於是天細女命磐樟船乎

漕奉利尊於神代乃浦乃浪靜奈留磯末天送利御座仍天天

神與利賜之神寶乎以天此國乃固止成世玉波率止天北山之

麓仁應化之百王於守利玉布經津主武雷神母同此所仁

垂跡之玉陪利

○別雷者賀茂山名也是以爲別雷神一耶爲之別雷

山神一可也爲之雷公神一否也以鴨箭爲賀茂氏一

之說賀茂固地名而人以爲仁民也爲取義於鴨箭一之

說吾未聞焉已上ノ說啓蒙ニ載マリ

忍信命^一是武内宿禰之祖父也景行天皇三年屋主忍
武雄心命詣^ニ紀伊國^一居^ニ阿備柏原^一娶^ニ紀直遠祖菟
道彥之女影媛^一生^ニ武内宿禰^一由^レ是見^レ之孝元子彥
太忍信其子武内也事^ニ六君^一景行 成務 仲哀 神功 應神 仁德 壽三
十餘歲^{日本紀ノ}心啓蒙○高良神記 吾是武略之健將也末世
大將タラン者常^ニ吾名ヲ唱言セバ必神力ヲ加テ天
下ノ武將爲^ン倭論^語

下高良 外院南^ニ有 師時記云江帥曰高良大明神者

武内大臣也非也高良者藤大臣連保也神號云^ニ高良
玉垂命^一以^ニ干滿兩顆^一令^ニ奉行^一之故奉^レ號^ニ玉垂^一
云々廿二社註式肩書云石清水別當清澄曰上高良武
内也下高良玉垂也已上啓蒙

狩尾 本殿西半里計山中^ニ有 舊記云件神石清水地

主社也即大國玉命啓蒙大國玉命傳前^ニ記ス

下院 役神社也 社記云貞觀二年六月十五日行教

造^ニ神殿^一云々○延喜式所謂山城國與^ニ攝津^一之堺所
祭之疫神者是也啓蒙厄年ノ者正月十八九日此社^ニ
群詣スル也

○八月十五日放生會之事 社記云扶桑記云養老四

年九月在^ニ征夷事^一大隅日向兩國亂逆公家祈^ニ請於
宇佐宮其禰宜辛島勝波豆米相^ニ率神軍征彼國^一討^ニ

其敵^ニ太神託曰合戰之間多致^ニ殺生^一宜^レ修^ニ放生會^一
者諸國放生會始^レ自此時矣啓蒙每年八月一日ヨリ
十五日^ニ至テ諸所ノ魚ヲカヒ集テ十五日山麓ノ小
川^ニ放也放生川是也早朝其供養ノ爲^ニ神輿山下^一
下玉フ也祠官祠僧衣服ヲヨソヒ伶人樂ヲ奏シテ供
奉^ニ神輿下玉ヒテ法會アリ法會オハリヌレバ神輿
山上^ニ歸玉フ也此度ハ祠官等初ノ禮服ヲヌギテ淨
衣ヲ著シ白杖ヲツキ草鞋ヲハク也是葬ノ儀ヲ形取
ルトカヤ是日勅使アリ上卿宰相辨衛府參向內藏寮
使受^ニ宣命^一自^ニ延久二年^一准^ニ行幸儀式^一六府已下供
奉セリ已上公事 根源ノ心第六十四代圓融院大延二年八月十五
日放生會仰^ニ雅樂^一准^ニ諸節會^一 第七十一代後三條
院延久二年八月十五日自^ニ今年^一上鄉以^ニ三府馬寮^一
准^ニ行幸^一扈從御輿○行幸始ハ簾中抄圓融院御宇
有^ニ八幡御幸^一啓蒙○三月中旬月有^ニ石清水臨時祭^一
天慶五年四月廿七日始焉神社考

朱雀院の御時石清水の臨時祭を初てお

こなはせ給ふとてめされけるときの歌

續古今神祇
松もおゐる又も苦むす石清水

紀貫之

行末遠くつかへまつらん

皇后從_ニ新羅_ニ還之生_ニ譽田天皇於筑紫_ニ立_ニ譽田別
皇子_ニ爲_ニ太子_ニ在位六十九年夏四月崩_ニ於若櫻宮_ニ
時年一百歲冬十月戊午朔壬申葬_ニ於狹城盾列陵_ニ

玉依姬 海神女豐玉姬之妹神武天皇之母神也 啓蒙 彦

波瀲武鸕鷀草葺不合尊_ニ以其姨玉依姬_ニ爲_レ妃生_ニ神
日本磐吾彥尊_ニ日本紀心磐吾彥尊神武天皇也

○八幡ト申事譽田八幡丸也トノ託宣ニヨツテ也 緣

起○八幡ト申奉ル事應神天皇ノ御廟河內國譽田ニ

テマシマスナリ宇佐ニ勸請アリテ和氣清丸ニ託シ

玉ヒテ我レハ譽田ノ八幡丸ト御名乘有シニ依テ也

兼邦ノ說筑前宮前有_ニ八幡宮_ニ昔白幡四赤幡四降_ニ于

此_ニ故名_ニ八幡_ニ植_レ松而爲_レ標至_レ今猶在_ニ宇佐緣
起_ノ心○八

幡以_ニ古者赤白之幡各四流天降_ニ爲_レ號予惟不_レ然

特地名也耳矣幡者非_ニ自_ニ天降之物_ニ非_ニ雨雹霜露之

類_ニ待_ニ人工_ニ而後成者也天何爲者哉降_ニ此異物_ニ也

決非_レ是矣一書ノ心啓蒙之辨也

當山御鎮座ノ事和州大安寺之沙門行教ニ御告アリ

シユヘ也云々豐前宇佐ヨリ此ニウツリ玉フ也○清

和帝御宇有_ニ行教者_ニ姓紀氏武內宿禰之後也昔武內

宿禰爲_ニ景行帝之臣_ニ成務帝時爲_ニ大臣_ニ而又爲_ニ仲

哀神功應神仁德之輔佐_ニ是故行教尤崇_ニ宇佐神_ニ神
憑_レ教欲_レ棲_ニ帝都邊_ニ遂移_ニ于山城男山_ニ神社考
○釋

行教武內大臣之裔也居_ニ大安寺_ニ貞觀元年詣_ニ豐之

宇佐八幡神祠_ニ夏九旬晝讀_ニ諸大乘經_ニ夜誦_ニ密咒_ニ

法歲已滿夢大神曰久受_ニ法施_ニ不_レ欲_ニ離_ニ師師廻_ニ王

城_ニ我又隨行居_ニ王城側_ニ當_レ護_ニ皇祚_ニ耳教漸著_ニ山

崎_ニ其夜又夢大神曰師見_ニ我所_ニ居俄覺便起見_ニ東

南_ニ男山鳩峯上現_ニ大光凌晨至_ニ光處實靈區也教便

錄_ニ一事_ニ表奏帝詔_ニ橘工部_ニ准_ニ宇佐祠規_ニ建_ニ新宮_ニ

世言教祈_レ見_ニ大神本身_ニ於_ニ是彌陀觀音勢至_ニ像

現_ニ袈裟上_ニ因_レ是殿內安_ニ三像_ニ釋書外殿ニ安置シ奉

ル木像ハ敦實親王ノ刻彫シ玉フトコロ也諸神記

○攝宮

若宮 本殿ノ良ニ有 舊記仁德帝也啓蒙

姬若宮 若宮ノ傍ニ有 二十二社註式云宇禮姬姉吳

姬妹 同

水若宮 姬若宮ノ傍ニ有 舊記宇治皇子也仁德帝之

御弟也 同上仁德并宇治皇子ノ事平野ノ下ニ見ユ

上高良 祭ル神武內臣也

按_ニ日本紀之說_ニ孝元天皇妃伊香我色謎命生_ニ彥太

諸社一覽第三

山城國 上山背 山代上古此字ニ作ル

天照太神天上ニシテ齋服殿ニ入セ玉ヒテ神衣ヲ織玉フ此服殿ノ下ニアタル國ヲ機内五ヶ國トイフ山背國トイフハ神衣ヲ織玉フ御背中ノトヲリ也中古ヨリ城ト書リト部兼舊事延曆桓原朝御世阿多根命爲ニ山代國造紀延曆十三年七月改ニ山背爲ニ山城云々拾芥抄見山城國久世郡一名男山雄德山石清水

○八幡トモ此水山ノ半ニ有リ八幡山跡たれ初ししめのうちに新續古今後鳥羽院

續千載 世のためもあふくとをしれ男山 後二條院

新拾遺 石清水流の末をうけつきて 伏見院

祭レル神三座 絶すそすまん万代迄に

譽田天皇中 玉依姬東 神功皇后西

譽田天皇 胎中天皇トモ應神天皇トモ申也人皇十六

代ノ帝也大和國輕島豐明宮ニ都シ玉ヘリ二十二年

三月幸ニ難波一居ニ大隅宮四十二年二月崩ニ子明宮

玉フ一云大隅宮ニ崩ジ玉フ神社考○日本紀第

○譽田天皇足仲彥天皇仲哀第四子也母目息長足姬

尊神功天皇以下皇后討ニ新羅之年歲次庚辰多十二

月生ニ於筑紫之蚊田一幼而聰達玄監深遠動容進止

聖表有異焉皇太后攝政之三年立爲皇太子時三

初天皇在孕而天神地祇授ニ三韓一既產之実生ニ腕

上其形如輶是肖皇太后爲雄裝之負輶故稱其

名謂譽田天皇四歲立爲太子七十一即位立

仲姬爲皇后一在位四十一年崩時年百十一歲日本

紀心

神系

○日本武尊 足仲彥天皇 譽田天皇

神功皇后 氣長足姬尊トモ○稚日本根子彥大日々天

皇開化天皇之曾孫氣長宿禰之女也母曰高領媛一足仲彥

天皇二年立爲皇后一幼而聰明睿智貌容壯麗傷天

皇不從神教一而早崩一征新羅々々王自服高麗百

濟知不可勝永稱西蕃一絶朝貢一所謂三韓也

諸社一覽第三目錄

山城 上

○八幡井攝社 若宮 姬若宮 水若宮 上高良

下高良 狩尾 役神

○賀茂同上 若宮 新宮 土師尾社 藤尾社 鎮守社

大田社 白鬚社 福德社 鎮守社 川尾社

片岡社 諏訪社 澤田社 岩本社 奈良社

梶田社 流木社 杉尾社 棚尾社 橋本社

山森三間社 氏神社

○下賀茂同上 比良木社 河合社 小鳥社 三井社

久我社 靈璽社 末刀社

○松尾 攝社不見

○祇園 後見殿 蘇民社 與官受福社 美御前

護王地社 末社官者社

○稻荷 御倉上社 白狐社 明日荷田社 鴨社

御田社 末社田中社

○平野 春日社 任部社

○梅宮 三石社 市杵島社 天王社 幸神護王社
愛宕社

○大原 海童神社 瀬和井社

○吉田 神樂岡社 一言主社 今宮 率川社

水屋社 氷室社 榎本社

○鎮魂八神

已上

リテ彼黍離々タル有様空ク竹都ノ名ノミトバマリテ
昔ヲシタフアハレヲ催シ又離宮院神服機殿麻績機殿
ナドモトク立ル人ナケレバ其印バカリ也又末社ノ遙
拜所ハ寛永年中ニ御再興アレド其社ノ在所ハ他領ト
成シヨリ改ル事モナク慥ニ知ル人モ稀也又二月九日
祈年ノ奉幣使モ參向ナケレバ兩宮トモニ御祭モタエ
テナク春秋ノ祈年穀ノ奉幣使モタエテ六月ノ御祭十
二月ノ御祭奉幣モタエテ今ハ御祭ヲ禰宜等ツトムル
マデ也是皆必ナクテ叶ヌ事ナレドモ中絶シヌ許多ノ
神領無ナリシヨリ便ナケレバ神事トテモ形計執行モ
侍リ已上陽復記ノ心

以上伊勢國畢

諸社一覽第二終

家集

こゝのはにつけても何か思ひ出る

長明

齋の宮のもりの下草

凡天皇即位者定ニ伊勢太神宮齋王ニ簡ニ内親王未レ嫁者ト定若無ニ内親王ニ者依ニ世次ニ簡ニ諸王女ト定延喜式

寶龜三年十一月以ニ酒人内親王ニ爲ニ伊勢齋王權居ニ

春日齋宮續日本紀

貞觀元年十二月廿五日丙午伊勢齋宮恬子内親王

於ニ鴨水邊六條坊門末ニ修レ禊賀茂齋儀子内親王於ニ

同水邊待賢門末ニ修レ禊並入ニ初齋院三代實錄

貞觀二年八月廿五日伊勢齋恬子内親王臨ニ鴨水ニ大

修ニ禊事即日入ニ野宮同上

垂仁天皇廿六年以ニ第二皇女倭姫命ニ初立ニ齋宮後

代々皇女立レ之土御門院承元二年至ニ四十一代齋

宮後鳥羽院皇女肅子内親王ニ斷絶矣已上神社考

椿社 河曲郡ニ有リ 當國一宮也 祭ル神 猿田

彦命也傳前ニ見ユ當社註記無ニ所見ニ啓蒙

太神宮祭禮

祈年 四十代天武御宇白鳳四年乙亥月始

月次 五十二代嵯峨帝弘仁年中始

神今食 四十四代元正帝靈龜二年六月始

新嘗 廿三代清寧二年辛酉十一月始

神衣 神代已來例也 四月九月十四日

例幣 四十代元正帝養老五年九月十一日始奉ニ官幣ニ

天曆勘文曰於ニ濫觴ニ垂仁御宇也云々

行幸者 四十四代聖武帝天平十二年十月始已上神社啓蒙

問云兩宮ノ榮モ昔ヨリ今ハ遙ニマサリタリトイフ人

有如何 答云人毎ニカク云フ事ナレド今ヲ知テ古ヲ

知ラスハ夏虫ノ氷ヲ疑フニ似タリ夫兩太神宮モ尊氏

ノ御時ヨリ秀吉ノ御時マデ年月ニソヒテ衰微セシヲ

今ノ御時ニ二見郷ト前山ヲ返シ玉ハリ又末社ノ遙拜

所御再興アリ殊ニ聖武天皇ノ御宇ヨリ始リテ嘉曆年

中マデ百十餘度有シ公卿勅使ノ中絶セシヲモ御興シ

有其後ハタエズ九月ノ御祭ノ例幣アリ又近代ハ廿一

年ニ造替御遷宮モアレバ尤兩太神宮ノ古ニ立カヘリ

玉フベキハシナレトモ中々往昔ノ十ガ一二モ及ビガ

タシ三百年來ハ宮中ニテ神事行フ殿舎又重々ノ御垣

等モイツトナク絶テ名ノミナルモアリ齋宮ノ跡ハ少

森ノ内ニ黒木ノ鳥井立タレドモアタリハ民ノ栖トナ

又云大物主神大國玉神亦曰顯國玉神其子凡有一百八十一神日本紀心素戔嗚尊子也系圖傳末卷ニ見

ユ佐々良姬命傳末ノ考

大間社 度會宮川邊町口ニ有 祭神二座 東大間社

西國生社 社記云所レ謂大若子乙若子命也補云大

若子命者天御中主尊十九世之孫也父彥久良伊命

垂仁天皇御宇北狄退治之賞賜大幡主命天照太神

御鎮座之時爲大神主令供奉給同上乙若子者大若

子命弟也景行成務仲哀三代仕奉補云宜轉補

小俣社 度會小俣村ニ有 祭ル神一座

宇賀神 社記云坐湯田郷小俣村宇賀神一名專大明

神啓蒙○宇賀神同名有二三神故當社之傳不考不

能レ記矣

櫛田社 多氣郡櫛田川邊有 祭ル神一座

大若子命 傳前ニ記ス

星川社 員辨郡額田村ノ川向ヒ也延喜式神名帳員辨

郡星川社云々○神未レ考

名寄 かきりあれは橋とそなしぬ鵲の

立るしるしの星川の水

長明

鈴鹿社 鈴鹿郡坂下ニアリ 祭ル神一座

大比古命 倭姬世記云川俣縣造祖大彥命參相支汝

國名何問賜白味酒鈴鹿國奈具波志忍山白支然神宮

造奉令ニ幸行又神田并神戶進支

新後撰

す、か川ふりさけみれば神路山

僧正行意

神は分て出る月かけ

新千載

す、か川今關越て思ふ事

藤原朝村

なりもならずも神に祈らん

新續古今

す、か川うつりしせゝを過しきて

從三位雅家

住世そ神のめくみ也ける

レ神一座

尾上社 度會郡 阿比乃山常明寺傍乎森中ニ有 祭

倭姬命 垂仁天皇第二女也

齋宮 多氣郡也森アリ

齋內親王住タマヒシ舊跡也此所宮川ヨリ一里計西

今齋宮村ト稱ス景行天皇廿年春宇治ノ齋宮ヲ多氣

郡ニ移シテ五百野皇女久須姬ヲ皇太神ノ御杖代ト

シ玉ヒ倭姬皇女ハ猶宇治ノ機殿ニ坐シケルト世記

ニ見エタリ名所

夫木集

なかき世のためしにひかんす、か川

家隆

外宮神主宮崎氏度會氏之祖神也^上 社記云天御中
主尊十世孫也飛鳥本紀云天村雲命天二登命後小橋
命止三名負給支^{已上} 啓蒙

神皇產靈尊

天御食持命
天道根命
天神魂命
多久豆玉命
生魂命
櫛真乳魂命

天曾多智命 天副杵命 天鈴杵命

天御雲命 天牟良雲命

國御神社 伊勢外宮之末社有國御神社天日別命子

彥國見賀岐建與見命倭姬世紀

天日別命

建日別命

○如系圖之者建日別命子
也世紀有相達者矣

玉柱屋姬命
彥國見加岐建與束命
姬前羽命
彥前羽命

高神客神社 山田土橋郷ニアリ 祭神二座

高神 客神 社記并神系圖等云神魂命之八世孫建日

別命也客神社者大己貴命子健御名方命也 建日別
命ノ傳前ニ見エタリ 健御方命 健御名方神トモ

○大物主神娶高志河沼姫一生一男健御名方神
舊事紀○大物主神子健御名方力美神者事代主之弟
也今諏訪明神是也^{神皇正統記}

大己貴命

都味齒八重事代主神
味鉏高彥根命
下照姫命
高照光姫命
御井神
建御名力神

大國玉姫社 右同所高神山ノ尾崎ニアリ

祭神二座 案世記云大己貴命一座佐々良姫命一座

又云于時大國玉神出使奉迎支日別命因令造其
橋不堪造畢于時到令以樽弓爲橋而渡焉

爰大國玉神資美豆佐々良姫命參來迎土橋郷岡
本村^{前後文啓蒙}略之 ○愚按大國玉ハ則大己貴命ノ別名也

○啓蒙

天兒屋命 父神興登魂命娶玉主命之女許登能床遲

媛命所生也○天御中主尊十世孫卜部中臣藤原諸

氏之祖也天孫降臨之時八百萬神之中棟梁五臣之第

一也奉天照太神勅輔佐天孫治豐葦原已上系圖

傳天照太神天石窟ニコモリ玉ヒシトキ御出アレト

祈禱サレシ神也太神磐戸ヲ出玉ヘバ太玉命ト端出

ノ繩ヲヒキワタシ二度イハ屋ニ太神ヲ入奉ザリシ

神也日本紀ニ見ユ

津速魂命 天御中主第七世卜部大中臣藤原

等之上祖

市千魂命 興登魂命

天兒屋根命

日本紀作興登產
靈命舊事紀曰中
村連等上祖也

太玉命 高皇產靈尊勅云汝太玉命宜持天津神籬

降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉日本紀高皇產靈尊

勅曰以吾高天原所御齋庭之穗稻種亦當御於吾

兒矣宜天太玉命率諸部神供奉其職一如天上

儀舊事紀

高皇產靈尊

天思兼命
天太玉命

四所別宮

多賀宮 神宮ヲ去テ六十丈ニアリ

件神伊弉諾尊洗右眼因以生神號云豐受荒魂亦

名伊吹戶主神是也神名
秘書

土宮 三座 大歲神 上ニ見エタリ 宇賀魂命素戔

鳥尊子也上ニ見エヌ但丹名異神三有

土御祖神 大年神之子也大年神者大己貴命之弟也

土御祖神母天知迦流美豆姬也已上神代
系圖傳 大治三年六

月官符改社號爲宮凡太神宮ノ祭禮祈年月次神嘗

等之祭此宮ニモ奉幣ノ事アル也宮川ノ堤ヲ守ル神

也

月讀宮 山田宮後ノ所ノ北ニ有リ 內宮月讀同神也

傳前ニ見エタリ

風宮 高宮ノ下左ノ方ニ立玉フ也名所記

社記云正應六年三月廿九日官符改社號奉授宮

號預官幣依異國降伏之御祈也啓蒙

以上四所畢餘宮左ニ見ユ

宮崎氏神社 度會郡宮崎ニアリ祭ル神一座但六座ト

習事アリ禰宜相傳ノ儀云々

天村雲命 一座 倭姬世紀 伊勢外宮之末社有宮崎氏

社一祭天牟良雲命此神者天御中主尊十二世孫也

ヲ國常立尊トイフ事如何答云此事深祕ノ其一ナ
 レドモ祠官互ニ其神ノ德ヲアラソヒ世人モ又マヨ
 フ事ナレバ子細ヲイフベシ尊神御出生ノ次第ヲイ
 ヘバ外宮ハ先ニシテ國常立尊内宮ハ後ニシテ天照
 太神ナリ又御鎮座ヲイヘバ内宮ハ先ニシテ外宮ハ
 内宮ノ御告ニヨリテ後ニ御鎮座ナリ對スル時ハ内
 宮ヲ日神ト號シ外宮ヲ月神トモ號ス月神ト申奉ル
 トテ月讀尊ノ御事ニテハナシ國常立尊ハ一水ノ德
 ノ神ニテマシマスユヘニ内宮火德ノ日神ニタイシ
 テ外宮水德ノ月神ト習フ事也月讀尊内外宮トモニ
 別宮ニマシマセバマドフベキ事ニアラズ然ニ内外
 二宮ヲ偏頗シテ思ヒ奉ル族モアリ天照者二宮之通
 稱太神者太廟之本號トモ侍レバ偏頗スベカラズ
 陽復記
 ノ心
 ○魚井之事與謝郡比治山頂有井其名曰ニ眞
 井今既成沼昔天女八人降ニ來此井ニ而浴下署ト丹後
風土記ニア
 系圖傳
 ○神託皇太神豐受太神託ニ倭姬命ニ宣言人者
 天下神物也勿レ破ニ心神神垂以ニ祈禱爲レ先冥加以ニ
 正直ニ爲レ本又日月雖ニ照ニ六合ニ而照ニ正直之頂ニ
 已上神
 社考
 相殿神 四座
 ○瓊々杵尊 二座 天兒屋命 太玉命已上

瓊々杵尊 天照太神之子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊
 娶ニ高皇產靈尊之女栲幡千千姬ニ生ニ天津彦々火瓊
 瓊杵尊ニ故皇祖高皇產靈尊特鍾ニ憐愛ニ以崇養焉遂
 欲下立ニ皇孫天津彦々火瓊々杵尊ニ以爲ニ葦原中國之
 王上○天照太神以ニ思兼神妹萬幡豐秋津媛命ニ配ニ正
 哉吾勝々速日天忍穗耳尊ニ爲レ妃降ニ之於葦原中國
 且將レ降間皇孫已生號曰ニ天津彦々火瓊々杵尊ニ時
 有レ奏曰欲下以此皇孫ニ代降上故天照太神乃賜ニ天津
 彦々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡艸薙劍三種寶
 物ニ又以ニ中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命猿女上
 祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五
 部神ニ配侍焉因勅ニ皇孫ニ曰葦原千五百秋之瑞穗國
 是吾子孫可レ王之也地也宜ニ爾皇孫就而治ニ焉行矣寶
 祚之隆當下與ニ天壤ニ無窮矣已上日本紀

系圖

天照國照彥火明櫛玉饒速日尊
 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天津彦々火瓊々杵尊

○饒速日尊亦名膳杵瓊丹杵尊尊舊事紀

名也。古事記○形質未顯棄元氣而爲神國常立尊是

也。元氣所化形質已具水德變而爲神天御中主神是

也。隱顯雖殊其實一也。元々集○國常立尊無名無狀之神

也在天則元氣之元神在地則一靈之元神在人則

性命之元神故號大元尊神。神皇寶錄又云一而無形虛而

有靈天地始而神常存形體消而神不毀性命既而神

不終一氣開闢以降今日亦在故號國常立尊○昔ハ

丹波國與佐郡魚井原ニシヅマリ玉フ也今此地ニ御

鎮座ハ人皇廿二代雄略帝廿二年也內宮御鎮座ノ後

ナル事四百八十四年也。啓蒙ノ心○昔豐鋤入姬命載天照

大神到丹波與佐宮時此神自天降同坐一所一

經四年天照太神獨還大和而此神留於丹波道

主命奉祭之古時調御膳于此宮每日送內宮

而神龜年中建御膳殿于外宮又同獻內宮是以

雖有曰御膳神之說而有御食御氣之二義食

與氣和訓相近陰陽元初之御氣而又有天狹霧國狹

霧之名則宜以前說爲正天孫尙在相殿何得

言御膳神哉神社考

泊瀬朝倉宮大泊瀬稚武天皇卽位廿一年丁巳冬十月

倭姬命夢教覺給久皇太神吾一所不坐波御饌毛安

不聞食丹波與佐之小見比沼之魚井原坐道主子八

乎止女乃齋奉御饌津神止由居太神乎我坐國欲止誨

覺給支爾時大若子命乎差使朝廷令參上天御夢

乃狀令申給支即天皇勅汝大若子使罷往天布理

奉宣支故率手置帆帆彥狹知二神裔以齋斧齋鉏

等始採山材構立寶殿而明年戊午秋七月七日

以大佐佐命天從丹波國余佐部眞井原志天奉

迎止由氣太神度遇山田原已上倭姫世記垂仁帝御宇皇

太神移五十鈴宮而至此年既四百八十四年自

神武帝殆千餘年矣倭姬命猶在焉內外宮規准

日少宮模以造之神皇正統錄

天御中主者國常立之弟也而有同體異名之義矣

舊事紀天照太神與豐受太神則爲無上之宗靈而尊

無二故異於天下諸社是則天地精明之本源也無

相無爲大祖也故不起佛見法見以無相鏡假表

妙體也。神名秘書○天照太神ノ御オシヘニ吾祭ニ仕ヘ

タテマツル時先止由氣皇太神ヲ祭リ奉ルベシ然シ

テ後ニ吾宮ノ祭ヲナスベシ御鎮座紀ノ心

問云一說ニ內宮ハ日神外宮ハ月神ニテマシマスト

イヘリ然ハ外宮ハ月讀尊ニテマシマスナランニ其

稻倉魂神 素戔鳴尊後娶三大山祇神女名神大市姫

生三二神一兒大年神次稻倉魂神舊事紀伊勢內宮之末社

有御倉神社二大田命傳云素戔鳴尊子宇賀之御魂神

神代系圖系圖大年神ノ下ニ見エタリ

○岩戸 諺天照太神入座天岩屋也是非也伊勢津彦住

窟也 岩屋本縁云高倉岩屋天日別命大己貴命也

啓蒙ノ心

外宮 度會郡沼木郷山田原ニ立玉ヘリ

山田原外宮御鎮座之所也名所記豐受宮トモ

新古今 すすか川ふるき木のはに日數ヘテ

山田の原の時雨をそ聞く

同 神風や山田の原の榊はに

心のしめをかけぬ日をなき

續千載

すへらきの大津みおやのみこととり

續後拾遺

つたへて祈るとよの宮人

かけまくもかしこき豐の宮柱

とよけの宮にて

何事のおはしますとはしらねども

かたしげなさに涙こほれて

五百枝杉 外宮ノ神木也二鳥居ノ外僧尼ノ拜所ノ

邊ニ有トイヘリ外宮ニシテハ山田原ノ杉ノ村立千

枝ノ杉五百枝杉アヤ杉ナンド皆讀ナラハス内宮ハ

百枝松ヲヨメリ

神祇百首

神風や五百枝の雪の春にきて

杉の印のはこしみえつゝ

太神宮に詣ける時千枝の杉を讀侍ける已上名所記

新續古今

世を守る神のしるしは今も猶 勝定院太政大臣

しける千えたの松の下陰

祭ル神 豐受皇太神 相殿神 三座 東天津彦々

火瓊々杵尊 四天兒屋根命 天太玉命 已上四神

マシマスヲ五座ト申説アリ神祕相傳ト云々

豐受皇太神

古天地未割陰陽不分渾沌如ニ鷄子ニ溟滓而含牙及ニ

其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合

搏易重濁之凝場難故天先成地後定然後神聖生ニ其

中ニ焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶ニ游魚之浮ニ水上ニ

也于時天地之中生ニ一物狀如ニ葦牙ニ便化ニ爲神號ニ

國常立尊日本紀○以ニ天御中主神ニ爲ニ元始ニ蓋一神ニ二

ノ始是也但齋宮ハ後ニ同國多氣郡ニ遷セリ事齋宮ノ下ニ見ユ内宮ノ際ニ倭姫命ノ居玉ヒシ齋宮ヲ磯トイフ又宇治ノ機殿ト申モ此宮ノ御事也名所宮垂仁帝廿六年興ニ齋宮于宇治五十鈴川上ニ以降令ニ倭姫命ノ居ヲ焉即建ニ八尋機殿ニ伊勢國飯野郡也啓蒙神風や五十鈴の川の磯の宮 皇后宮大夫師繼

常世の波の音を長閑けき

大歳神社 素戔鳴尊後娶ニ大山祇神女名神大市姫ニ

生ニ一神ニ兒大年神次稻倉魂神已上舊事紀伊勢内宮之

別宮有ニ大歳神社此神化ニ白鶴飛止ニ於志摩國答志

郡伊雜葦原ニ啄ニ稻穗ニ因立ニ社於此所ニ伊佐波登美

之神宮是也倭姫命移ニ之伊勢度會郡ニ號ニ大年神社ニ

事見倭姫命世紀此神天上ニアル天ノ狹田長田ハ天

照太神ノツクラセ玉フ御田ナリ其稻穗ヲクハエテ

下界エ下セ玉フ也南膳浮州ニアル米ノ種是也神宮

ノ社司鶴ヲ喰ザルハ此謂也已上兼邦記ノ心

瀛津島姫命

湍津島姫命

市杵島姫命

素戔鳴尊

事八十神

興玉社 祭神猿田彦大神也傳前ニ見エタリ○衢神猿

田彦大神又號ニ興玉命ニ猿田彦之苗裔大田命逢ニ大

倭姫ニ云吾八萬歲間守ニ此靈寶有ニ天逆矛五十鈴

天上圖像ニ倭姫大喜遂定ニ宮所于此ニ其猿田彦大神

今無ニ祠祭ニ大神宮之西北隅ニ倭姫世紀

伴神無ニ寶殿ニ以ニ賢木ニ爲ニ神殿ニ也五十鈴宮處之地

主神也石坐也神名秘書

猿田彦ノ事神宮ニテハ興玉神山王ニテハ早尾熱田

ニテハゲン太夫道祖神トモ幸神トモ舟ニテハ船魂

又サキ玉出雲ニテハ手ナヅチトモイヘリシヤウゲ

神トモウガ神トモナレリ善惡トモニ二六時中人

人ニオコル所ノ一念ヲ氣ニ乗テ形ヲ現ジシヤウゲ

ヲ成ス事アリ蹴鞠ノ坪ニオキテハ鞠ノ明神トモア

ヲハル已上下部兼邦ノ抄ノ心

大己貴命
五十猛神
大屋津姫神
抓津姫神
須勢利姫神
大歳神

系圖傳

名寄
此春は花をおしまてよそならん

西 行

心を風の宮に任せて

伊雜宮

志摩國答志郡伊雜村ニアリ

儀式

祭レル神倭

姬命世記云伊勢內宮之別宮有伊雜宮天牟羅雲命

裔天日別命子玉柱屋姬命是也上又伊佐波登美之神

トモ

天日別命

○天牟羅雲命—天波與命—

建日別命—玉柱屋姬命

以上七所別宮畢餘宮左ニ見ユ

鏡宮

朝熊宮トモ櫻宮トモイヘリ

名所記

俗ニ阿佐未

ト云フ是也長明伊勢記云朝熊川ヲヘダテ、晝河ノ

横根トイフ山アリ其山ノ西ノハナニ鏡宮ヲハシマ

ス云々 祭レル神

座六

櫛玉命

保於止志神

櫻大

刀神 苔虫神

大山祇

朝熊水神

已上名所記

案世紀云櫛玉命靈石坐

保於止志神石座櫻大刀神

花木坐苔虫神石坐大山祇神石座朝熊水神石座 實

鏡二面日月所化白銅鏡コレナリ儀式帳云又大山罪

命子朝熊水神形石坐倭姬內親王御世定祝

社記云朝熊水神倭姬命以三石凝姥神之裔一所鑄造

之寶鏡座已上啓蒙

神代より光をとめて朝熊の

前大僧正隆辨

鏡の宮に澄める月かけ

神さひてあはれ幾世に成ぬらん 嘉陽門院越前

浪になれたる朝熊の宮

右之内傳不_レ得_レ考神依_レ有_レ之餘神傳系共略_レ之

瀧宮 瀧祭宮トモ祭ル神一座御裳濯川ノ落合トイフ

所ノ岸ニ石クミノ宮ニテオハシマス澤女神トモ美

都波神トモ水神ニテマシマス此宮ハ殿モナクテ下

津底ニオハシマス常世ノ郷トモ仙宮トモ龍宮城ト

モ申ス天逆戈ヲ納玉ヒシ所也名所記

美都波女神 罔象女トモ書リ○伊弉冊尊爲ニ軻遇

突智一所焦而終矣其且終之間臥生ニ土神垣山姬及

水神罔象女日本紀

罔象女在ニ下津底ニ水神也一名澤女神亦名美都

波女元々集

浪とみる花のしつえの岩枕

西 行

瀧の宮にや音よとむらん

磯宮 由來前ニ見エタリ倭姬命此ニ居シ玉ヘリ齋宮

○伊弉諾尊ノ玉ハク月讀ノ尊ハ滄海ノシホノ八百重ヲ治スベシ同心

此神ハ男神也月弓尊三日ヨリ八日マデヲ月弓尊トイフ上絃ノ月是也廿三日ヨリ廿九日マデヲ下絃ノ月トイフ十五日圓滿ハ月ヲ月夜見尊ト云フ晦日ノ月ヲ月讀尊ト申ス晦日ニ滅シテ光ナシ然バ日數ヲヨミテ用ユレバ月讀尊ト申晦日ニ天地會シテ朔日ニ月ヲ生出ス也ト部兼邦ノ記

萬
月讀の光にきませ足引の

湯原王

山をへたてゝ遠からなくに

風雅

常闇をてらすみかけのかはらぬや

後宇多院

今もかしこき月讀の神

新古今

さやかなる鷺の高ねの雲むより

西園寺入道

影やはらくる月讀の杜

啓蒙

貞觀九年八月丁亥社號ヲ改テ稱レ宮舊記裏書

瀧原宮 太神宮ノ遙宮也伊勢ト志摩トノ兩國ノ堺山中ニアリ延喜式同祭レル神速秋津彥神 伊弉諾尊

伊弉冊尊生ニ水門神等ニ號ニ速秋津日命 日本紀

夫木

白いとの絶えず落くる瀧の原

荒木田延季

跡たれ初て幾代へぬらん

并宮 右同所 祭レル神

速秋津姫秋津彥神之妹也

○速秋津彥神妹速秋津姫神此二神因ニ河海ニ特別生神十柱舊事紀 十柱之神 沫那藝神 沫那美神 頗

那藝神 天之水分神 國之水分神 天之久比奢母道神 國之久比奢母道神 大山止津美神 鹿屋姫

神已上系圖傳

瀧同の原ならひの宮の神たから

爲家朝臣

猶すゑつゝ沖津白波

風宮 當宮ト月夜見宮ハ内外兩宮ニアリ内宮ハ子良館ノ前ヨリ橋ヲ渡テ行是ヲ風宮ノ橋トイフ也名所

記祭レル神一座志那加都彥神也神名○伊弉諾尊曰我所生之國唯有ニ朝霧ニ而薰滿之哉乃吹撥之氣化ニ

爲神號曰ニ級長戸邊命ニ亦曰ニ級長彥命是風神也日本紀

紀此宮ニテ柏流シノ神事ト云フコトアリ度會郡土貢島ヨリ大神宮エ柏ヲサ、グル由也是昔ノ儀ナリ

今ハ當宮ニテアル也内宮年中行事云柏流神事七月四日也神名祕書云山谷水變成ニ甘水ニ浸ニ潤苗稼ニ

得ニ其全稔故有ニ風神祭ニ名云ニ柏流ニ也豐年則浮流通凶年則沉覆損四月七月祭レ之云々風日折神事トイ

フ是也已上名所記

七所別宮 想宮ト稱スルハ尊崇ノ義也

荒祭宮 內宮七所別宮第一ノ御神也太神宮ヨリ北エ

二十四丈ニ立玉ヘリ伊勢名所記

此神ハ伊弉諾尊左ノ眼ヲ洗玉フテ生ル神ヲ天照荒魂トイフ亦荒祭宮ト名ク亦瀬織津姫神ト名ク是也
神名祕書

伊弉諾宮 祭ル神伊弉諾尊 伊弉冊尊二座也月讀宮

ノ西ニ立玉ヘリ宇治郷中村ノ里ノ北ニ森有是ヲ月讀森ト云フ其内ニ東ハ月讀西ハ伊弉諾伊弉冊ノ宮也太神宮ヲ去ルコト三里也各南向ニ座ス名所記

伴神ハ天神地祇ノ大祖國家萬物ノ性靈也光仁天皇ノ御宇寶龜三年八月官社ニ入玉フ清和天皇御宇貞觀九年八月丁亥朔伊勢國伊弉諾伊弉冊ノ神社、社ヲ改テ宮ト稱ス神名祕書此二神伊弉諾尊陽神伊弉冊尊陰神○陽神乾タリ陰神坤タリ萬物ニアツテ

ハ父母也人ニアツテハ男女ノ形ナリ一代二神二萬三千四十歳也コレヲ變化ノ神代ト云フ也神皇實錄ノ心○

天祖伊弉諾伊弉冊二ノ尊ニ詔シテ曰豐原千五百秋瑞穂之地アリ汝ユキテ備スベシトテ天瓊戈ヲ玉舊事本フ紀ノ心○伊弉諾尊伊弉冊尊天ノ浮橋ノ上ニ立テト

モニ計テ曰底下國ナケンヤトノ玉ヒテ天瓊矛ヲ以テサシ下テ探玉フニ是ニ滄溟ヲエ玉ヘリ其矛ノ先ヨリシタバル潮凝テ島トナル二神コ、ニアマクダリ玉ヒテ共ニ爲夫婦シテ洲國ヲウマント島ヲ以テ國ノ中ノ柱トシテ陽神左ヨリ旋リ陰神右ヨリ旋ル同ク一面ニ會ヒキ時ニ陰神先唱テ曰熹哉可美小男ニアヒヌ陽神ヨロコビズシテ曰ワレハ是男子ナリ先唱ベシ何ゾ婦人反テコトバ先ダツヤ事スデニ不祥改メグルベシト二神マタ相遇玉ヒヌ陽神唱テ曰熹哉可美少女ニアヒヌ陰神ニトヒテ曰汝ガ身ニ何ノ成レルトコロアルヤ對テ曰吾身ニ一ツノ雌ノハジメトイフ處アリ陽神ノ曰吾身ニモ雄ノ元トイフ處アリ吾身ノ元ノ處ヲモツテ汝ガ身ノ元ノ處ニ合セント思フコ、ニ陰陽始テミトノマダハヒシテ夫婦トナル産時ニ及テ先淡路洲ヲ以テ胞トス意ニ快バザル所也故ニ名テ淡路洲ト云フスナハチ大日本豐秋津洲ヲ生日本紀

月讀宮 祭ル神二座 左月讀命 右荒魂命 月讀。

月夜見。月弓トモ○此神光ウルハシキコト日ニツグリ以テ日ニ配テ治スベシ天ニ送りマツル日本紀ノ心

坐本紀開化天皇箱中化女ヲ倭姬命トイフ又按スルニ日本紀崇神天皇ノ姑倭迹々日百襲姬命聡明叡知ニシテヨク未然ヲシル又云倭迹々日百襲姬命ヲ大物主ノ神ノ妻トス云々倭迹々姫ハ崇神ノ姑。倭迹迹日百襲姫ハ亦崇神之從祖姑也而大物主神之妻則二人非ルニ似タリ有文ナラン又云天照太神ヲ倭姬命ニ託ルハ垂仁ノ女也開化箱ノ中ノ神女ト異説アルカ已上神社考ノ心

神託

天照太神宮寶勅ニ吾諸ノアラヒトグサ僞リハカリテタトヘバヨシト思フトモ必天ノ詔ヲウケテ根ノ國ニオモムカンタバシキ心ヲ持テハ將ニアシクトモ必天ノ神ノメグミアラン「モロ」ノ幾人等天ニ逆フ時ハ道ナク地ニサカヘハ其幸無ラン其元ニハナレ根國ニ入オチンゾ重テ心ヲ天地ニ等シテ思ヲ風雲ニノセテ道ニ隨ヲ元トシ神ヲ守ルノ要トセヨ万ノクダク敷コトヲ拂ステ、一心ノ定法ヲ尋テ天神ノミコトニ叶テ神ノ心ニカナヘ已上倭論語

○相殿神

天手力雄命 天照太神入三千天石窟閉磐戸而幽居焉故六合之内常闇而不_レ知晝夜之相代二千時八十

萬神計ニ其可_レ禱之方一以_ニ手力雄神_一立_ニ磐戸之側_一天照太神乃以_ニ御手_一細開_ニ磐戸_一窺之時手力雄神則奉_ニ承天照太神之手_一引而奉_レ出日本紀

月夜見尊——島根見尊
手力雄尊

神代系圖

八百萬神ノ中ヨリ撰出サレタル大力ナリ思兼尊ノ御子也兼邦神道和歌ノ抄

萬幡姬尊 栲幡千千姬命トモ

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶_ニ高皇產靈尊之女栲幡千千姬_一生_ニ天津彦々火瓊々杵尊_一日本紀

天思兼命

天太玉命

天忍日命

舊事紀ノ神狹日命同シ

高皇產靈尊

天穗津命

天神立命

山代久我直等祖也

少彥名命

栲幡千千姬命

始ハ天兒屋根命太玉命相殿ノ神ニテマシマスヲ外宮御鎮座以後ユヘアリテ外宮エウツシ奉ルナリ陽

復記

乙未淡海甲可日雲ノ宮ニウツリ玉ヒテ四年八年
巳亥同國坂田宮ニウツリ玉ヒテ二年十年辛丑美濃
國伊久良河ノ宮ニウツリ玉ヒテ四年次ニ尾張國中
島ノ宮ニウツリ玉フ十四年乙巳伊勢國桑名野代宮
ニウツリ玉ヒテ四年時ニ大若子命弟若子命仕へ奉
ル十八年己酉阿佐賀藤方片樋ノ宮ニウツリ玉ヒテ
四年廿二年癸巳飯野高宮ニウツリ玉ヒテ四年廿五
年丙辰三月伊蘇宮ニウツリ玉フ時ニ倭姫ノ玉ハク
南ノ山イマダ見玉ハズ吉宮處ヲモトメ幸玉フ此時
狭田社坂年社御船社御瀨社瀧原神久求社園相社水
饗社二見浦堅田社江社荒崎社稜神朝熊ノ社等國々
處々ニアガメ祭玉フ今歲猿田彥神ノ裔宇治土公祖
大田命參相ヒ乃曰南ノ大峰ニヨキ宮處アリ佐古久
代宇治之五十鈴川上ハコレ日本國中ニ殊ニスグレ
タルヨキトコロ也其裏翁八万歳ノ間ニモイマダミ
シラザル靈物アリ照カ、ヤクコト日ノ如シコレ小
縁ノ者ニアラジ定メテアルジ出現ヲハサンヤ倭姫
命對曰斷ハリ實灼然コレ久代天祖チカヒチガイ玉
ヒテ豐葦原瑞穗國ノウチニ伊勢加佐波夜之國ハヨ
キ宮處有ト見定メ玉ヒテ天ヨリシテ投ゲ降居天ノ

サカ太刀逆鉾銅鈴等コレ也トテ倭姫命天ノ平手ヲ
拍テヨロコビ玉ヘリ此處ニ於テ大宮柱ヲ下津岩根
ニ太シキ立テ高天原ニ峻ニ崎搏風テ廿六年丁巳冬
十月甲子ニ天照太神ヲ渡會ノ宇治ノ五十鈴川上ニ
鎮坐也已上神社啓蒙前ニ云フガゴトク神鏡ハ人皇十
代崇神天皇大和磯城ニ神籬ヲ立テ齊奉玉ヒヌレバ
内裏ニハ又神鏡神劍ノ御影ヲウツシテトメ玉フ
内侍所寶劍ト申奉是也陽復○倭姫命垂仁天皇ノ皇
女也太常國史云鎮坐本紀ニ載開化天皇ノ手箱ノ中
ニ物アリ小虫ノウゴメクガゴトシコレヲ見ルニ人
ノ貌也帝アヤシミ玉ヒテコレヲ養ハセシメ玉フニ
長ルニ及テ姜女也所謂倭姫命是也帝其來レル所ジ
問玉フニ答テ我將レ事神ヨツテ三種ノ神器ヲ祭ラ
シム帝神ノ威ニ恐玉ヒテ殿ヲ同シク玉ハズ宮處ヲ
求シム崇神天皇ノ時ニヲヨンデ倭姫皇女三神器ヲ
以テ内裏ヲ出玉フ時ニ劍鏡ヲ改テ内裏ニオサメラ
ル神璽ハ同ク留テ三種ノ器トス已上神社考ノ心
案ルニ倭姫同名異人多シ日本紀ヲミルニ倭迹々日
百襲姫命孝靈女倭迹々稚屋姫命同倭迹々姫命孝元女
千々衝倭姫命崇神女倭姫命垂仁女共ニ日本紀ニ載セリ鎮

問^ニ之天鈿女乃露^ニ其胸乳^ニ抑^ニ裳帶於臍下^一而笑噓
 向立是時衢神問曰天鈿女汝爲之何故耶對曰天照太
 神之子所幸道路有^ニ如此居^一之者誰也敢問之衢神
 對曰聞^ニ天照大神之子今當降行^一故奉^レ迎相待吾名
 是猿田彥大神時天鈿女復問云汝將^ニ先^一我行乎抑我
 先^レ汝行乎對曰吾先啓行天鈿女復問云汝何處到耶
 皇孫何處到耶對云天神之子則當^レ到^ニ筑紫日向高千
 穗穗觸之峯^ニ吾則應^レ到^ニ伊勢狹長田五十鈴川上^一因
 云發^ニ顯我^一者汝也故汝可^ニ以送我而致^レ之矣天鈿女
 還詣報^レ狀皇孫於是脫^ニ離天磐座^一排^ニ分天八重雲^一稜
 威道別々々而天降之也果如^ニ先期皇孫則到^ニ筑紫日
 向高千穗穗觸之峯^一其猿田彥神者則到^ニ伊勢之狹長
 田五十鈴川上^一即天鈿女命隨^ニ猿田彥神所乞^一遂以
 侍送焉○太神御正體御鏡ニテマシマスナリ天照太
 神寶鏡ヲ持玉ヒテ授テノ玉ハク吾兒此鏡ヲミマサ
 ンコト吾ヲミルガゴトクスベシトモニ床ヲ同クシ
 殿ヲヒトツニシ以テ齋ノ鏡トスベシ○又日ノ神天
 磐戸ヲイデマス此時鏡ヲモツテ其石窟イレシカバ
 戸ニ觸^レテ小瑕ツケリ此即伊勢ニ崇秘ノ太神也
 此鏡ハ鏡作部遠祖天糠戸之造^レリ已上神代
卷ノ心是鏡内

宮ノ御體也神書抄
神社考

右太神ノ勅ニヨツテ御正體八咫ノカガミヲ代々ノ
 天子大殿ノ内ニ床ヲ同ジク安置シ玉ヘリ然ルニ崇
 神天皇ノ御時太神トモニ住玉ハンコトラハバカリ
 玉ヒテ皇女豊鋤入姬命ヲソヘ草薙ノ御劍トトモニ
 大和國笠縫邑ニ祭玉ヘリ其後又太神ノヲシヘアル
 ニヨツテ國々處々ニ宮處ヲモトメ玉フナリ卅九年
 壬戌ニ丹波ノ吉佐宮ニウツリ玉ヒテ此所ニ四年齋
 奉^レリ又四十二年丙寅ニ大和國伊豆加志本ノ宮ニ
 ウツリ玉ヒテ八年又五十一年甲戌木國名草ノ宮ニ
 ウツリ玉ヒテ三年五十四年丁丑吉備國名方ノ濱宮
 ニウツリ玉ヒテ四年五十八年辛巳倭彌和三室峯ノ
 宮ニウツリ玉ヒテ二年倭姬世記曰是時豐鋤入姬命
 云吾日足ト白シキ從^レ此倭姬命戴^ニ天照太神^一而行幸
 六十年癸未倭國宇多秋志野宮ニウツリ玉ヒテ四年
 爾時天兒通命孫八佐支刀部一名伊己
呂比命宇多大采奈仕ヘ
 奉ル亦弟大荒命モ同ク仕ヘ奉ル六十四年丁亥伊賀
 國隱市守ノ宮ニウツリ玉ヒテ二年六十六年己丑同
 國穴穗ノ宮ニウツリ玉ヒテ四年垂仁天皇即位二年
 癸巳伊勢國敢都美惠ノ宮ニウツリ玉ヒテ二年四年

命大田命ニアヒ玉ヒテ是ヲ敎ヘ奉ルトモ已上太常國史ノ心
五十鈴川千五十鈴川同内宮大宮ト風宮トノアヒヨ
リ流レ出ル河也

○内宮ト申ス事村上天皇ノ御宇祭主公節ノ時ニ皇太
神者奥座ナルユヘニ内宮ト號シ度相ノ宮ハ外座ナ
ル故ニ外宮ト申此時ヨリ始ル也已上神名祕書ノ心又
内宮ヲ朝日宮アサヒノ申也

玉葉集伊勢遷宮のとしよみ侍りける歌 鎌倉右大臣
神風や朝日の宮の宮うつし

影長閑なる世にこそ有けれ

内宮ノ御山ヲ神路山トイヘリ

神道山

後九條内大臣

新後拾遺世の爲にたてし内外の宮柱

高き神路の山はうこかし

五十鈴川

匡房

新古今君か代は久しかるへし度會や

いすゝの川の流絶せて

みもすそ川

中院入道右大臣

同立歸り又もみまくのほしき哉

みもすそ川のせゝの白波

祭レル御三座 天照皇太神 相殿ノ神 左天手力
雄神 右萬幡姬神

天照皇太神 大日靈貴ニ申奉ル也

日本紀曰伊弉諾尊伊弉冊尊共生ニ日神ニ號ニ大日靈
貴ニ此子光華明彩照ニ徹於六合之内ニ故ニ神喜曰吾
息雖ニ多未レ有ニ若レ此靈異之兒ニ不レ宜ニ久留ニ此國ニ
自當ニ早送ニ于天ニ而授以天上之事上是時天地相去
未レ遠故以ニ天柱ニ舉ニ於天上ニ也○又云伊弉諾尊曰
吾欲ニ生ニ御レ宙之珍子ニ乃以ニ左手ニ持ニ白銅鏡ニ則
有ニ化出神ニ是謂ニ大日靈尊ニ○又云伊弉諾尊至ニ筑
紫日向小戸橋之櫛原ニ而祓除焉然後洗ニ左眼ニ因以
生神號曰天照太神ニ已而伊弉諾尊勅任曰天照太
神者可ニ以治ニ高天原ニ也

又云天照太神皇孫曰荒原千五百秋之瑞穗國是吾子
孫可レ王之地也宜ニ爾皇孫就而治ニ焉行矣寶祚之隆
當ニ與ニ天壤ニ無ニ窮者矣已而且降之間先驅者還白
有ニ一神ニ居ニ天八達之衢ニ其鼻長七咫背長七尺餘當
レ言ニ七尋ニ且口尻明耀眼如ニ八咫鏡ニ而赭然似ニ赤酸
醬ニ也即遣ニ從神ニ往問時有ニ八十萬神ニ皆不レ得ニ目
勝相問ニ故特勅ニ天鈿女ニ曰汝是日勝ニ於人ニ者宜ニ往

諸社一覽第二

○伊勢

昔伊勢津彦ノ神オハシテ此國ヲ領シ玉フ其名ニ
ヨリテ國ノ號トス伊勢名所記

天日別命天照太神ノ勅ヲ奉テ東ノ方ニ入ルコト
數百里其邑ニ神アリ名ニ伊勢津彦ト天日別命問
云汝ガ國ヲ天孫ニ獻ランヤ答云吾レ此國ヲモト
メテ居ル事日久シトイヒテ敢テ命ヲ聞ズ天日別
命兵ヲ發テ其神ヲ戮サントオボス其時ヲソレ伏
テモウシテ云吾國ヲ悉ニ天孫ニタマツリテ吾
敢テオラジト命云汝ガサラン時ハ何ヲ以カ驗ト
スルヤモウシテ云今夜八風ヲオコシテ海水ヲフ
カセテ浪ニ乗テ東ニサラントス此レ吾却ヨシ也
ト日別命兵ヲ止テコレヲウカバハスルニ中夜ニ
及ブ比風吹キ浪ヲコリテ光曜コト日ノ如シ陸モ
海モアキラカニミエヌ遂ニ波ニ乗シテ東ニサリ
ヌ此故ニ神風伊勢常世波寄國トイフハ蓋コレヲ

云フナラン已上風土記ノ心

内宮 伊勢度會郡宇治郷五十鈴川上^ニ有天照太神倭

姫命ニ誨テノ玉ハク是神風ノ伊勢ノ國ハ常世ノ浪

ノ重浪ヨスル國也傍國ノ可^レ怜國也是國ニオラント

オモフ故ニ太神ノヲシヘノ隨ニ其祠ヲ伊勢ノ國ニ

立ツ因テ齋宮ヲ千五十鈴川上^ニタツコレヲ磯宮ト

イフ則太神ノ天ヨリ降之處ナリ^{已上日本紀第六ノ心}倭姫命太

神ノ宮所ヲモトメ玉ハントテ諸國ヲメグリ玉ヘリ

垂仁天皇ノ御宇ニ伊勢ノ國ニテ一リノ老翁ニアヒ

玉ヘリ命クダンノ事ヲ語リ玉フ翁ノ云宇治ノ川上

ニ光アリ我二百八万歳コレヲ守リ居也又彼川上ニ

五十鈴天上圖像天逆戈アリ吾コ、ニ有ルコト八

萬歳マモリテコレヲ崇メ奉ル也ト皇女大ニ悦玉ヒ

テ彼翁ヲトモナヒ玉ヒテ行テ見玉フニ此實ハ昔天

照太神天ヨリ投クダシ玉ヒシ天逆矛五十鈴トイフ

モノ也トノ玉ヘリ此時皇女船ニノリテ此ニ至リ玉

ヘルニ御裳ノヨゴレタルヲ洗玉ヘリ此故ニ御裳濯

河ト名ヅケ又五十鈴ノアル所ヨリ流レ出ル河ナル

故ニ五十鈴河ト名ツク遂ニ其川上ニ宮ヲ建玉フ今

ノ内宮コレ也翁ハ猿田彥又ハ興玉命トモ一云倭姫

諸社一覽第二目錄

內宮 名所記并倭歌 神系圖 傳記

太神并相殿神 神託

七所別宮 荒祭宮 伊弉諾伊弉冊宮 月讀宮 瀧

原宮 風宮 伊雜宮 已上 鏡宮 瀧宮 磯宮

大歲宮 興玉 稻倉魂 已上別宮 岩戶

外宮 同上

太神 內外之御事問答 託宣

相殿神

四所別宮 多賀宮 土宮 月讀宮 風宮 已上 宮

崎氏神 國御神 高神客神 大國玉姬 大間 小

俣 櫛田 星川 鈴鹿 尾上 齋宮 椿杜

太神宮祭禮并問答

裔一已上神社考
三十四

一國一宮之御事

賀茂^{上下}大明神 山城

平岡大明神 河内

住吉大明神 攝津

都波岐大明神 伊勢

大神社 尾張

已等乃麻知神社 遠江

三島大明神 伊豆

寒川神社 相模

洲崎大明神 安房

香取神社 下總

建部神社 近江

水無神社 飛騨

拔鋒大明神 上野

都々古和氣神社 陸奥

遠敷大明神 若狹

白山比咩神 加賀

氣多大明神 越中

渡津神社 佐渡

三輪大明神 大和

大島大明神 和泉

敢國大明神 伊賀

伊射波大明神 志摩

砥鹿大明神 三河

淺間大明神 駿河

淺間大明神 甲斐

氷川神社 武藏

玉前神社 上總

鹿島神社 常陸

南宮神社 美濃

南方刀美神社 信濃

二荒山神社 下野

大物忌神社 出羽

氣比大明神 越前

氣多大明神 能登

伊夜日子神社 越後

出雲神社 丹波

籠守神社 丹後

宇倍神社 因幡

杵築神社 出雲

由良姫神社 隱岐

中山神社 美作

伊都具島神社 安藝

住吉神社 長門

伊弉諾神社 淡路

田村神社 讃岐

都佐神社 土佐

高良玉垂神社 筑後

西塞多神社 豐後

阿蘇神社 肥後

鹿兒島神社 大隅

天手長男神社 壺岐

以上

右以ニ一宮記一而書レ之但有ニ異說ニ焉猶末卷國々之下而可ニ見合ニ也

出石神社 但馬又說粟^{トハカ}所神社

倭文神社 伯耆

物部神社 石見

伊和神社 播磨

吉備津^{ヒビツ}明神 備中備前備後同

玉祖神社 周防

日前神社 紀伊

大麻彦神社 阿波

大山祇神社 伊興

宮崎神社 筑前

宇佐宮 豐前

淀姫神社 肥前

都農神社 日向

和多都美神社 薩摩

和多都美神社 對馬

三十一

問明神ト云フコト如何 答尊稱ノ詞ナリ明ノ字ハ日月也日月ヲイタバキ申サル、神トイフ心也兼邦ノ記

日ノ神月ノ神ニモ威光ノヲトリ玉ハヌトノ尊稱也

問和幣ハ如何 答是幣ノ事幣トモ幣ヲ竹ニハサム事

ハ上古イマダ是ヲノスベキ具ナキニヨツテ竹ニハサ

ミケル也今其風ヲアラタメズトカヤ又云幣何ニテモ

神ニ奉ル物ヲ幣トモイヘリ○手向ノ幣トハ海路ニモ

陸路ヲ行ニモ其國ニイリ其里ニ入ニ在所々々浦々ニ

イタルニハ其所ノ大小ノ神祇ニ幣袋ヨリ手向ノ小幣

ヲ取出シテ奉テトフル也ヌサ袋ハ錦ノ袋也白米ト白

紙ヲ細ニキル又榊櫛ノ葉是モ細ニ切カキマゼテ奉ル

也切ルヤウニ口傳アリ兼邦抄ノ心幣帛同

問神ニ榊ヲ奉ルハ如何 答日本紀ニ木ノ親句句通馳

ト有榊ノ事也此木ハ風フケドモ葉ヲヒルガヘサズ正

直ナルニヨツテ木ノ最上トスル也一説ニハ楸ヲイフ

トモアリ

然後生ニ木神句句通馳ニ日本紀

三十三 所定ニ二十二座ニ由

二十二社註式云人皇六十二代村上天皇治十九年康保

二乙丑年霖雨經月九天覆雲依之閏八月二十一日

奉幣於十六社止雨

案江次第云正曆已前十七社云々反此說

伊勢 石清水 賀茂下 松尾 平野 稻荷 春日

大原野 大神 石上 大和 廣瀨 龍田 住吉

丹生 木船

第六十六代一條院正曆二年辛卯炎天送日萬物變色

依之六月廿四日祈雨奉幣時加吉田廣田北野三社

被奉官幣爲二十九社同五年二月十七日祈年穀時

加于梅宮被奉幣爲二十社云々

第六十六代一條院長德二年乙未二月廿五日被奉臨

時官幣之日加祇園爲二十一社云々

第六十九代後朱雀院長曆三年已卯八月十六日被奉

官幣之日加日吉爲廿二社云々

延喜式所載神名帳日本國中大小神社三千一百三

十二座其外石清水吉田祇園北野號式外之神後朱雀

院長曆三年秋八月定二十二社之數每歲勅神祇官

以奉幣帛祈年穀除禍灾名之曰祭先是每歲

仲春四月遣幣使于群國至是其國司奉詔各祭其

國之神伊勢太神宮八幡宮謂之宗廟賀茂松尾平野

春日吉田大和龍田等謂之社稷又祖神之祠謂之苗

ヲ寶前ト云ヒケル等ノ事ハ遙後世ニ出來タルコト也
皆佛者ノ佛前ニシテ行道スル體ヲウツシタル誤也本
說ナシ云々

二十七

問氏神氏子ナンド云フハ俗說ニカハリナキヤ 答此

事本說ナキト云々二條ノ南側ヨリ五條ノ北ガハマデ

此ニ生ル、者ヲ祇園ノ氏子トイヒ二條ノ北ガハヨリ

大原口迄御靈ノ氏子トイヒ一條ノ堀川ヨリ西ノ方ヲ

今宮ノ氏子トイヒ五條ノ南ガハヨリ九條マデ此内ニ

生ル、者ヲ稻荷ノ氏子ト號スル事更ニ本說ナキ事也

所ノ神トコソ云フベケレ山城國ノ惣社賀茂大明神ノ

御拜領也八幡ノ神人源家ノ氏神イマシマスユヘニ山

城國ハ八幡大井ノ御ハカラヒナド申事アトカタモナ

キ事也只物ヲシラザルユヘ也殊更愛宕郡ニオキテハ

賀茂大明神ノ御拜領也祇園ハ清和天皇ノ御宇貞觀年

中八幡同ク貞觀年中御垂迹賀茂ノ御事ハ上古ヨリノ

事也只皆文盲ニシテカ、ルコトヲ申アヘリアサマシ

キ事也アリヤウ大内ノ四町ノ御所ノ内ニモ鎮主トテ

ヲハシマス也其内ニテ生レタラン人ハ此所ノ神トコ

ソ崇ムベキ事ナレワケモ知ラヌ生女ナンドノ申アヘ

ルヲ上マザノ人聞召テソレヲ本說ト思召事ハアサマ

シキコト也然ハ山城國コトサラ愛宕郡ニ生ル人ハ賀
茂大明神ノ御氏子也セメテハ年ニ一度參詣ヲモ申日
三度ハ北ニ向ヒツ、祈念ヲ致スベキ事ニヤ 已上卜部兼
和歌ノ註 邦ノ說神道

二十八

問湯立ハ如何 答云湯立庭火等ハ神ヲ祭ノ事也陽ニ

ハ陽ヲ以テス同氣相寄ルノ儀也ト思フニタガウ事ナ

シ太神岩戸ニカクレマシマシケレバ天下クラカリシ

時神ヲナグサメ出シ奉ントテ諸ノ神神樂ヲソウシ玉

フニ天鈿女ノ神篠ノ葉ヲカザシ踊ハテ舞玉ヒシ今

ノ世ニ巫子ノ湯タデナンド沙汰スル神樂ノオコリ也

兼邦百首鈔ノ心

二十九

問注連ハ如何 答神代ニ有シ事也一五三 七五三ト

云フ事アリ是ハワラノナヒサゲ様也清淨ハ一五三穢

レタルニハ七五三ナリ左繩ノ注連ヲシククベ繩トイ

フ也兼邦記心

天照太神聞之而曰吾比閉ニ居石窟ニ謂當ニ豐葦原中國

必爲ニ長夜云何天鈿女命噓ニ樂如此者乎乃以ニ御手

細開ニ磐戸ニ窺之時手力雄神則奉ニ承天照太神之手

引而奉ニ出於ニ是中臣神忌部神界以ニ端出之繩ニ乃請曰

勿ニ復還幸ニ日本紀

神ナルガ神ノ管領ノ所ヲメグルナリ我ハ前ヲハラ

フ神也若出ザルトキハサマノ過怠ヲカウブルト

イヘリ已下略已上元亨
釋書九ノ卷ノ心

問云コマイヌハ何ノ義ゾ 答高麗犬也然ルヲ獅子ノ

形ニツクルハ非也ト云々亦上可茂ノ社コマイヌノ後

ノ板ニ同犬ヲ繪書テアリ是余社マレナリ是ヲカケノ

犬ト云フ也子細神祕也ト一年白井氏宗因ガ談也

問牛王ハイカバ 答是ハヨク一切ノ不祥ヲ除ク表爾

ト也神德ニ比スル也云々猶可レ尋

問鳥居ハ如何 答説々アリ西ノ方ニ立ツルヲ鳥居ト

鳥酉同訓也寶基本紀ノ心云々神社啓蒙 又居ノ字井ニ

書ク天真井ヲ表シタルトモ同心在家ノ鴨井トイフモ

横ニワタシタル木也井モ鴨モ共ニ水ヲカタドル也火

災ヲ拂フノ表爾也鳥井又此義也或ハ天ノ字ヲカタド

ルナリ所詮上古ノ神門也 啓蒙同一説云凡鳥井ハ陰陽

ノ二ツヲアラハセリ上ノカサ木ハ遙ニ以後ニヲカレ

ケルニヤ岩戸ノ昔ニハ鳥ヲヤドサン爲ニヲカレケル

カト也唐土ニモ天地壇トテツカル、事有其前ニ華表

トテ立ラレタリソレモ柱二本バカリ立テ笠木ハナシ

是陰陽ノカタチ也已上吉田兼邦和歌註ノ心

問社頭ノ千木鏝木ハ如何 答千木棟風ト書リ千木ト

訓ズルハ違木トイフ義也カツホ木モ加棟木也上古ニ

ハ皆屋ヲ茅茨ニテ葺タルユヘニ棟ヲシムル具也 啓蒙

ノ心私ニ曰左右エヤリチガヘタルヲ千木横ニアルヲ

加棟木ト云フ也千木ノ先ヲソギタルニ陰神陽神ノカ

ハリ有トカヤ子細アダノシクハ云ヒ難キカソギタ

ルユヘニ片ソギノ千木ナンド歌ニヨメリ度會ノ神主

朝棟ガ歌ニ

風雅集
カタソギノ千木内外ニカハレトモ

チカヒハ同ジ伊勢ノ神垣

又恐ナガラ住吉ノ神詠ニモ

夜ヤ寒キ衣ヤウヌキカタソギノ

ユキアヒノ間ヨリ霜ヤヲクラン

問闌神ハ何ノ義ゾヤ 答門守也凡千木加棟木闌神等

ハ其神ニ應ジテ立ベキ事也中國ノ俗ノ是ヲ門客人ト

云ヘリ衣冠ノ體黒赤ノ色五位上ノ裝束ニシテ綏ヲシ

矢籠ヲ負弓矢ヲ持セタリ是誤也ト云々仇々シク難レ云

問參詣ノ者社ヲメグルハ如何 答曰一説ニ陰陽ノ二

神天浮橋ニシテ彼柱ヲメグリ玉ヲ遺風也トイヘドモ

此説アタラズ凡神社ニ鰐口ヲカケ宮廻リナドシ神前

人廣太之神德委見ニ攝儒釋二教一

桓武天皇ハ人皇五十代ノ天子四十九代光仁帝ノ第一ノ御子

高岳親王ハ平城天皇第四ノ皇子貞觀四年ニ入唐シ

玉ヘリ

舍人親王ハ四十代天武帝第四ノ皇子神道再興之大

祖日本紀之作者也號ニ崇道盡敬天皇已上倭論語

問根本神ノ御正體ハ何ヲスルゾヤ 答鏡也前ニイフ

ガ如ク神トハ鏡ノ畧言也明鏡ハ萬像ヲウツシテ一物

ヲタクハエズシカモ正直ノ徳ヲソナエ又清クイサギ

ヨキ事神ノ御心ニヒトシ故ニ爾イフナリ又上ト云フ

意也 タツトブノ儀也神代講卷述抄ノ心

問繪馬ハ如何 答馬ハ陽獸也此故ニ春ノハジメニ血

ヲトル也馬經大又陽性ニテマシマスユヘニ奉ルニ

由アル也神馬トテ社ニツナグモ此謂也然トモ馬ヲ献

ズルニ力タラザル者ハ繪ニ書テ奉ル也又歌仙ナンド

ヲ奉ハ和歌ハ是神國ノ風儀ナレバ道理有也然ルヲ當

世サマハ異様ナル繪ヲ書テ奉ルハ更ニ敬ノ儀ニア

ラズイカデ納受アラシヤ又佛前ニ繪馬ヲカタルハ是

ヲウラヤミタルモノ也因ニ云今繪馬等ノ書付ニ施主

某トスル事誤成ベシ施主ハ佛法施行ノ義也願主ト有

タキ事也又因ニ云フ昔天王寺ニ道公ト云フ僧アリ或
時熊野ノ社ニ一夏コモリケルガ夏ヲハリヌレバカヘ
ル折節暮ニ及テ或一村ヲ通リケルニ更ニ人家モナケ
レバ其所ノ杜ノ下ニテ夜ヲ明サント思ヒソコニ臥ケ
リ夜半ノ比騎馬ノ者三十人余來レリ杜ニ向ヒテ翁ア
リヤト云フ翁ノ聲ニテイカニモアリトイヘリ彼者何
トテ進ザルゾトイヘリ翁云馬ノ足損ジ候ユヘ乗侍事
不_レ叶我又年老候ヘバ歩ニテ行事叶ヒ難候トイヘリ
此ヲ聞テ皆々トヨリケリ夜明ケレバ道公不思議ニテ
杜ノ下ヲ見メクリケルニチイサキ社アリ其中ヲミレ
バフルキ像有所々クチソシタリ前ニチイサキ繪馬
アリケルガ前足ノ所板ワレテアリ道公不思議シテ糸
ヲ以テネンゴロニトデツナギテ懸ケリイカナル事ニ
ヤアルラン試ント思ヒ又其夜モ其ニヤドリケルニ又
夜半ノ比騎馬ノ者大勢來レリ又翁ヲ呼ビケレバ翁此
度ハ馬ニ乘リテ出人々ノ前ニス、ンデイヅクトモナ
ク行ケリ曉方ニ彼翁カヘレリ道公ニ向テ云フヤウ馬
ノ足ソシタリシヲ治シ玉ハルユヘニイトハヤク乗
出テ候トテサマハノ饗ヲナシケリ公問ケルハアノ
騎馬ノ大勢ハイカナル人ゾヤ翁ノ云フヤウアレハ疫

テ件ノ御願寺ヲ企テ玉フ也東大寺是也此後七十年ノ後眞言密教日本ニワタレリ去ル天平年中ノ御示現ニカナヘリ金胎兩部ノ大日盧舍那佛ハ一切諸佛并ノ惣體也舍那ノ生身ハ日月ノ兩神也尊形スデニ明鏡也故ニ顯密ノ二義ヲマフケ本跡ノ二門ヲタテ、宮社ノ縁ニシタガヒテ相應ノ諸尊ヲモツテ本地垂迹ノ差別ヲ稱スル也顯密ノ二義トハ一ツニハ顯露ノ顯佛ヲモツテ本地トシ佛ヲ以テ垂迹トス一ツニハ隱幽ノ密神ヲ以テ本地トシ佛ヲ以テ垂迹トス顯露ノ顯トハ淺畧ノ義也隱幽ノ密トハ深祕ノ義也今佛ヲ以テ本地トスルハコレ淺畧之一儀也

十四

問顯密ノ二義ハ敎家ノ名目ニヨルカ元來道ニ是アリヤ 答顯密ノ分別ハ敎家ノ心ニ同名目ノ言ハ神書ノ文ニヨレリ日本紀神代卷ノ下曰吾所治顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退治ニ幽事ニ即躬被ニ瑞之八坂瓊ニ而長隱矣

已上

是則大已貴尊ノ神語三輪ノ大明神是也顯露ノ事ハ密ヲ具シ隱幽ノ事モ亦顯ヲ具ス

十五

問密位ノ名目ハ幾クノ品有ヤ 答云相祕決義云眞言

ハ祕密也神道ハ隱密也祕密超過之重位アリ故ニ隱密

トイフ

已上所謂神道ハ四重四位ノ密意ヲ設ケ機ノ淺

深ヲマモリコ、ロザシノ同異ヲハカリ其人ヲ得テ此法ヲサヅク其器ニアラザル者ハ淺畧ノ分際タリトイヘドモタヤスク授與スベカラズ已下略已上神道妙法要集ノ心

十六

○桓武天皇勅ニ西天ノ法ヲ吾國ニヲキテ第一ノ臣下

トシ震旦ノ儒道ヲ吾國ニヲキテ第二ノ臣下トシテ神

明ノ左右ヲハカラセ神道ノ潤色トスルモノ也故ニ此

國ハ日輪ノ國ニシテ震旦ヲ月輪ノ國トシ天竺ヲ星ノ

國トス良由アル哉倭論語

十七

高岳親王曰異朝ノ法ヲ見テ吾神國ノ掟ヲヨクマモル

モノハ是吾國ノ寶也外國ノ法ヲ見テ吾神國ノ掟ヲオ

ロソカニミン者ハ國賊也同上

十八

舍人親王云今ノ世ノ貴トナク賤トナク吾神明ノ詔ヲ

ステ、外ノ敎ヲ專ニスス是親ヲステ、他人ノ親ヲアヒ

スルガゴトシ天ナンゾ是ヲヨシトセンヤ地何ゾ是ヲ

好マン親ヲ親トシテ後子ヲ思ヒ子ヲ思ヒテ後外ノ親

ヲ親トセンアハレナル哉ナレタルハナレデ捨テメヅ

ラシキニ隨フ事也ユヘニ世ノ人ノナキ事ヨ天ノミオ

ヤノ掟ヲ守ベシナベテノ人ノ思ヒト思ヒコ、ロヨカ

ラストイフ事有ベカラズ同上

右兼俱ハ吉田兼延十七世兼名男從三位神祇大副此

是ヲ前後ノ散齋トイフ則外清淨ノ行儀也致齋トハ神事正當ノ日格式ノゴトク六色ノ禁法ヲマモリ一心不亂ニシテ神事ニシタガフヲイフ也則内清淨ノ行儀是ナリ齋場齋庭トハ内清淨ノ道場齋庭ハ外清淨ノ道場也

十二

問神國ニオキテ佛法ヲアガムルハ何レノ時ゾヤ 答吾神國開闢以來萬々歳ノ後釋尊天竺ニイヅイハンヤ佛法日本ニキタルハ猶末代ノコト也人皇三十代欽明ノ御時佛法來レリ佛ノ滅後千五百歳也漢土ニツタヘテ後四百餘年ヲヘテ日本ニ來レリサレドモ信ズル者ナシ三十四代推古帝ノ御守聖德太子奏聞シ玉フヤウ吾日本ハ種子ヲ生ジ震旦ハ枝葉ヲ現ジ天竺ハ花實ヲヒラクカルガユヘニ佛教ハ萬法ノ花實タリ儒教ハ萬法ノ枝葉タリ神道ハ萬法ノ根本タリ彼二教ハミナコレ神道ノ分化也枝葉花實ヲモツテ其根元ヲアラハスハ花ヲチテ根ニカヘルガゴトシ故ニ今此佛法東漸ス吾國三國ノ根本タルコトヲアカサン爲ニ余シヨリ佛法コ、ニ流布セリ云々神武帝ヨリ此方千二百余歳ヲヘテ其中間ニ二法ナシ唯神國ノ根本ヲ守リ神明ノ本誓ヲアガム故ニ神事ノトキ佛經念誦等ヲ去ル此義

也

十三

問神明ノ本誓ヲモツハラニシ神事ケツサイニシテ佛經等ヲ忌トイハハ何ゾ諸神ニ佛并等ヲモツテ本地トスルヤ 答聖武天皇ノ御宇伽藍建立ノ御子ガヒ有リサレドモ神國ノ遺法ヲオツレ玉ヒテ行基并ニ仰セテ其効驗ヲウカバヒ玉ヘリ行基則太神宮ニ參籠申テコレヲ祈念セリ神告テノ玉ハク實相眞如ノ日輪ハ生死長夜ノヤミヲテラシ本有常住ノ月輪ハ無明ボンノフノ雲ヲハラフ文已上此文句面ノコトバ、佛法ニ似タリトイヘドモ句中ノ心ハ神代ノムカシ天ノ岩戸ヲ開テ長夜ノヤミヲテラシ玉ヒ月神八重ノ雲ヲワケテ此蘆原中國ニクダリ玉フコレ則無明煩惱ノ雲ヲハラフニアラズヤ然ルニ佛像伽藍建立ノゼヒ其御ツゲマダ分明ナラズ故ニ天平十四年十一月右大臣橘諸兄公ニオホセテ勅使トシテ御願寺建立ノ事祈請アル也諸兄公歸參ノ後同月十五日ノ夜御示現アリ天皇ノ御前ニ玉女アツテ光ヲハナシテノ玉フヤウ當朝神國尤神明ヲ仰奉玉フベシソレ日輪ハ大日如來也本地蘆舍那佛也衆生ハ此コトハリヲサトリテマサニ佛法ニ歸依スベシトノ玉ヘリ夢サメ玉ヒテ後彌堅ク道心シ玉ヒヌ依

繪ニ書テ參詣人ノ散錢ヲムサブルモミグルシ、是ハ
イカバ 答是ハ亂世ノ比世ヲワタルベキタヨリナキ

マ、ニ何ノ社カノ社ナド、云ヒテ不案内ノ參詣者ニ
イヒキカセタル不作法今モクセトナリテ泰平ノ御代
ニテイヨ／＼有也皆ナゲ、ドモ改ムベキ人ノトカク
沙汰セヌ上ハ傍人は非ナクテ年月ノビ行也サテ又末
社ヲ四十末社八十末社ナンドイフモ山伏ナドノ祭文
トヤランニアラヌ事ヲイフヨリ興タリ神書古記ヲ考
ルニ外宮ノ末社ハ内宮ヨリ員數モ多キ也已上神道
或問ノ心

九
間然レドモ今ノ宮ノメグリ外宮四十末社内宮八十末
社トタテタルハ何タル社ゾヤ 答是モ世間流布ノ説
ヲ御キ、及アリテ御再興有ベキトノ時御問ニソムキ
ガタキ故ニ深キカンガエモナクテ其比ノ者申上タル
事也諸末社ノ社地ヲアラタメテ御再興マデニ及バサ
ルモヲシキ事也外宮ニモ宮ノメグリノ神スベテ貳百
余前ト儀式帳ニモ侍リ但其神名ハ何トモナケレバ末
社ノ事ヤラン何レノ所ニ鎮坐ヤランハ知リ侍ラズ古
記神書等考ルニ八十末社四十末社ナド、ハ更ニ不勘
ノ義也其上末社ハ大方宮中ニハ社地ナクテ他領ニア
マタ有今ノ廻ノ社二百余前ノ神カ然レドモ末社ノ名

ヲ一々ニ付タレバ諸末社ノ遙拜所トイフベキカ但遙
拜所ニハ寶殿無事ト承及タリ同上

以上唯一神道ノ心

十
○ト部兼俱曰夫吾神明ハ上ハ非想非々想下界金輪ニ
至リテ御身ヲ分テモロ／＼ヲミチビキ玉フ天竺國ニ
シテハ獨尊ト化生シ三世ノ業ヲ說テ一切ノ衆生ニ因
果アル事ヲシラシメ慈悲ノ門ヲヒラケリ震旦ニシテ
ハ儒道ヲヒロメテ仁義ノ五ヲシラシメ四州ノ内イタ
リ玉ハザル所ナシ御鎮坐ハ此國也故ニ四方ノ國ニシ
テヒロメヲシエ玉ヘル其法皆々モトニカヘルノ理ニ
シテ今日本ニワタレリ神道佛道儒道是一神ノミノリ
也然ドモ御鎮坐ノ此國ニオキテハタマチニ實正ノ言
ヲタガヘヌレバ出家儒家ノモノ神前ニハバカルハ元
ハ元ノ心ナルユヘ也今世ノ神道ヲ學ブモノ此コトハ
リニウトクシテ一向ニ佛道ノ教ヲ嫌ヘリ是吾神明
廣大無邊ナル事ヲクハシク知ラザル所ヨリヲコレ

リ倭論語

十一
間内清淨外清淨ハイカナル事ゾヤ 答此義ニツイテ
二ツ有一ニハ散齋致齋二ツニハ齋場齋庭兩壇アリ散
齋トハ神事ノ當日ヲ定テ件ノ前後ノ間精進潔齋スル

ク日本ニ生ラウケタル事ヲワスレ儒書佛書ニシミ入タルモノ也心ヲ虛ニシテ明鏡止水ノゴトクニシテ讀書ハスベシ日本紀ナドニハ一言モ吾國ヲオトシメタル詞ナシ古ノ學者ハ唐土ヲ中花トモイハズ日本國ヲバ豐廬原中國トイフ也天照太神ハ日本ノ神聖ニテマシマセバ孔子ノ道トテモ釋迦ノ道トテモ聖人ノ道ナルヲイカデ嫌玉フベキナレトモ佛家ヨリハ兩部習合トテ伊勢兩宮ハ兩部ノ大日ニテマシマシ彌陀也釋迦也ナド、云フ神道ヲタツトプヤウニテ神道ヲ盜ム也儒者ハ太神宮ハ泰伯ニテ內宮ニ三讓ト云フ額アリタルナド、附會ノ說ヲイヒチラスハ淺マシキ事ナリ佛道ハ佛道儒道ハ儒道ニテ少モ吾國ノ神道ニ混雜セズ然モ日本ノ神道ヲ根本トシテ行フトキハ佛道モ儒道モ萬民ノ心ヲヤハラゲテ道理ヲ知リヨキ神道ノ羽翼也已上神道或問ノ心

問倭姫命ノ屏ニ佛法息ニヨトノ託宣ヲ知ナガラ佛經モ神書ノ羽翼トハイカバ答倭姫命ノ御託宣ハ佛法ヲ根本ト思テ神道ノ害ヲナシテ吾國風ヲ變ズルユヘナルベシ御託宣以後ニ按ノゴトク兩部習合ノ神道オコリテ太神宮ハ大日ニテマシマスナド、附會ノ說ヲ

申ヲ未然ニ御託宣有難コトナリ此御託宣無クハ兩太神宮ハ今佛家ノハカラヒナルベキコト必定也然ルトテ佛法ヲ邪法トハイヒガタシ神道ノ本意ヲ知リタル時ハ佛經ノミナラズ雜書迄モ神道ノ羽翼ト成事也故ニ僧尼ノ參詣モヒタスラニ禁ゼズシテ外院迄ハユルス也是ハ如法ノ比丘ノ事ニテ兩部習合ノ神道者ノ事ニハアラズ習合ハ混雜シテ神道ヲ盜ミタル說也此故ニ神道者ナガラ以ノ外吾國ノ神道ノ害トナレバ倭姫ノ遺命ニ任セテ重クキンゼイスベキ事ナリ同上

問外宮ニハ尤僧尼ハ外院ヨリ內エ入ザレトモ內宮ニテ御供ヲ上ル僧尼ハ却テ凡人ノ拜所ヨリ奥ノ瑞籬ノ御門ノ外玉串御門ノ內迄入ル、ハ何タル事ゾ内外宮ハ同事ナルベギニ外宮バカリニテ堅ク僧尼ヲイミ玉フモ如何答內宮ニモ僧尼ノ拜所ハ定リテ五十鈴川ノ外ニ有然ルヲ瑞籬ノ御門ノホトリマデ入ル、ハ無作法ノ義ナレドモ末代ニテ法式モヤブレタル也斷髮ノ人モ此御門ノホトリ迄入事モ近代ノ例也是神役人ノワタクシヨリナスコトナレドモ誰アラタムル事モナキユヘニ如此也同上

問云兩太神宮ノメグリニ辨才天大黑三寶荒神ナドヲ

タルトミエタレバ漢土ニ佛法ノワタラヌ前日本ト漢土ト通ゼシコト明也其後後漢明帝ノトキ漢土ニ佛法ヲタリタレバ日本エコソ渡ネ共其名キコエタル事モアラシ

已上陽
復記

問云佛法ヲイミ玉フハ惡キ法ナルカ 答釋迦ハ天竺ノ聖人ニテマシマスト聞ケバ尊キ法成ベシ但命ハ其法ノ源ヲ忌玉フヤラン其流ヲ忌玉フヤラン知ガタシ中世ヨリ神道ノ名ヲ借テ兩部習合ナド、シ神明ヲカスメテ吾佛トスル事ハ佛法ノ流ノツイヘナレバ其ヲ未然ニ考ミ玉フ事モ有ベシ僧尼ハ佛法ヲ行ジテ有テヨカシ神社エサヘ入交テ社僧ナドニナレヨト佛教ニモ侍ルニヤイトアヤシ同上

五
問今神社ノ祝等神道護摩神道加持ト云フ事ヲスル也カヤウノ事神道ニ有ル事ニヤ 答是ト部家ヨリ云ヒ出シタル事也先護摩ト云フハ梵語加持トイフモ佛言也亂世ノミギリヨリ神祇官モ有カ無カノヤウニナリ吉田ノ上ノ山エ八神殿ヲカマエケルヨリ中臣モ齋部モ神祇官ナガラ各別ノヤウニ成行マ、ト部氏一家ヲ立テ天台眞言ノ中ニテシタシキ出家ヲカタラヒ吾神道ヲ傳受スルナド、テ彼家ノ護摩加持ノ修シ様ヲ

カタハシ傳聞テト部家ニ一流ヲ立テ神道護摩神道加持ト云フ事アリトノ、シルマ、ニ諸國神社ノ祝等傳受シテ世ニ流布スカヤウノ僞ナラズトモ上一人ヨリ下萬民マデ行ヒ玉ヘトノ事ニテハナシ神ヲ祭ル法ナドハ禰宜神主ノスル事ニテ神道ト云フハ上一人ヨリ下萬民迄行フ旦暮ノ道也天神地祇ヨリ相傳ノ中極ノ道ヲ根トシテ行フトキハ日用ノ間神道ナラズト云フ事ナシサシテ是ハ神道也ト一々指南ニ及ベキ道ニハアラズ心ヲ虛ニシテ自得シ玉フベシ神道ハ吾國ノ道也シカルヲ釋迦ノ法ヲ聞タルハ天竺ヲ尊ビ孔子ノ道ヲマナブハ震旦ヲタツトビテ和國ヲ粟散國ゾ夷狄ゾトテイヤシム事今時ノ佛者儒者ノ心也佛者トテモ儒者トテモ日本ニ生ラウケタル輩ハ日本ノ道ヲ根本トシテ絶ハテタル神道ヲモ興シ天竺ヨリモ震旦ヨリモ吾國ノタツトキ事ヲ心根トシテ釋迦ノ教ニテモ孔子ノ教ニテモ學ブハ日本ノ益有事ナレド儒者ハ震旦ヲ中華トイフテ日本國ヲバ夷狄トテイヤシム中華ト云フ事ハ震旦ノ人ノ詞ニハ似合タリ和國ノ人ヨリハ云フマジキ詞也佛家ヨリハ日本ヲ粟散國也トイヒ天竺ヲ佛國ト尊フ也是等ハ神道ヲ知ズ忠厚ノ心ナ

ヲ伊弉諾尊伊弉冊尊ト申ス是ハマサシク陰陽ト二ツ
ニ分レテ造化ノ元ト成玉フト云々

國常立尊ハ明理本源ノ神也國ハ天地ノ儀常ハ不易ノ

理立ハ卓然タルノ儀也神代講又云人代末世マデモ此

尊ハヲハシマス也スベテ天地山海草木人物器財マデ

モ一物モ此尊ノ乗ウツリオハシマサズトイフ事ナシ

此理ヲモツテ常立尊ト申也トコシナヘニ立玉フ故ニ

末世人代迄モ日月モ地ニ落ス四時モ時ヲタガエズ人

物モ斷絶セヌハ此神德ニアラズヤトコシナヘニ立ト

云フ事はゾ神道ノ根本ナル直指抄又伊勢神宮本記ニ

ハ形如三葦牙一其中神人化生名號ニ天御中主神トイヘ

リ國常立同体異名ノ習ヒアリ中常ノ道ヲ神道ト云フ

也云々天御中主尊ト申奉ルハ虛而有靈一而無形

神主飛鳥記是神ノ理ヲ述ル言也一而無形ハ何レノモノニ

カ應ゼズト云フ事ノアランヤ一心虛ニシテ靈々タル

モノ其ナカニ照ストキハ心鏡ノゴトシ夫神ト云フハ

鏡トイフ畧言神明ノ理ヲ鏡ニタトヘタル也其ゴトク

明了ナル時ハ吾心則御中主尊天照太神ニ同カラン此

ヲ以テ心ハ神明ノ舍也トイヘリ心正直ナルトキハ神

我一體ニシテ心ニ神アリ邪曲ニシテ人欲ニオモムク

トキハ舍ニ神ナクシテ巳ト神トヘダ、ル事天地ト黒

白トニ等シ一致ナル時ハ諸願圓滿シヘダ、ルトキハ

禍災現ズル也サレバ此天御中主ノ中極ノ道ヲ神道ト

イヘハ中道ヲ修行シ正直ノ御教ヲ信シ任ニ本心ニ又從

レ正以爲清淨ニ隨レ惡以爲不淨トノ神託ヲ信ジテ起

居動靜ニ心ノチリヲサリ理ノ本元ニタガハズ行事也

是真ノ神道ナリ兩部習合トイフモノハシキテ佛法ト

合セタル者也日本ニ佛法渡ヌ前ニ兩太神宮ハ御鎮座

也是ヲ以テ知ベシ神ノ本地佛也トハ沙汰モナキ事也

末世ニ成テ所々ノ社ノ風皆習合トナレリ然レトモ伊

勢ニノミ元本ノ神道也是ニサヘ今ハ替リタル事アル

也倭姫命ノ屏ニ佛法息ニ再ニ拜神祇ニセヨトノ玉フ遺命

ヲ守テ二所太神宮ニハ今ニ佛語ヲ禁ジテ塔ヲモアラ

ハ、ギナンドイヒ僧尼ヲ外院ノ外エハ入ザル也已上神道或問

問云倭姫命ノ詔ニ任セテ佛法ノ息ヲイムト有是ハ雄

畧帝ノ御宇也欽明帝ノ御時ワタリシ佛法ヲ數十年前

ニイメヨトノ禁令信シガタシ答曰日本紀ニハ神功

皇后應神天皇ノ御宇ニ三韓ト始テ通ジタルトミユコ

トサラ神宮ノ古記ニハ開化天皇ノ御宇ニ異國ト通ジ

諸社一覽第一

神道大意問答

一問云神國ニ生レタル者神道ヲバ不レ知シテ叶ハズサレドモサマ^ムノ流儀アリテ一樣ナラズシモ如何バカリノ流儀有リヤ 答云サレバ此流儀トイフ事末世ノマヨヒ邪路ニ落入根元是也夫神道ハ二モ無ク三モナク唯一大虚ノ中ヨリ發起シタル道ナレバ何ヨリテ品分カルベキ子細ナキモノヲ皆是後世神道衰微ニ乗テコトヲタクムシワザ也先其分レタル品ヲイヘバ兩部習合ノ神道ナリ此中ニ凡四ツ有リ聖德太子ノ流吉田ト部ノ流弘法流三輪流是ハ鏡圓法師元祖也已上是也此等ノ神道トイフハ其理ヲノブルニ神ノ垂跡ハ神ナレトモ本地ハ佛ナリト立ル也縱ハ京祇園ノ本社ハ素盞島尊本地ハ藥師トイフガ如シ末世トシテ萬變モテユク中ニ第一ノスイビ悲ノ至リテ深キハ神道ノ兩部習合タル事也根元ノ神道ハ唯一ト號シテ獨立不合ノ神道也元初一理ノ神道ニ唯一トイフベキ名モ有ベキ事ナラ子トモ兩部習合出來テ世ニモテケウズルニ

對シテ暫ク立タル名也

二問唯一ニシテ神ノ本地ヲ立ザル神道ハ如何ニ 答フ是ヲコトハルニハ先吾靈葦原國ノオコリヲ云フベシ伏シテ尋ルニ大虚ノ中ニ一ツノモノ有化シテ神トナル國常立尊ト申奉ル也是神國神ノ始也神皇正統記云夫天地未レ分シトキ渾沌トシテ圓カレル事雞子ノ如シクバモリテ牙ヲ含リ是陰陽ノ元初未分ノ一氣也其氣初テ分レテ清クアキラカナルハタナビイテ天トナリ重ク濁レルハツバイテ地トナル其中ニ一物ナリ出タル形葦牙ノ如シ卽化シテ神トナリヌ國常立尊ト申ス又天御中主神トモ號シ奉ル此神ニ水火木金土ノ五行ノ德マシマス先水德ノ神ニアラハレ玉フヲ國狹槌尊ト云フ次ニ火德ノ神ヲ豐斟淳尊ト云フ天ノ道獨ナスユヘニ純男ニテマス次ニ木德ノ神ヲ湍土煮尊沙土煮尊ト云フ次ニ金德ノ神ヲ大戸之道尊大苦邊尊ト云フ次ニ土德ノ神ヲ面足尊惶根尊ト云フ天地ノ道相交リテ各陰陽ノ形アリ然トモ其フルマヒナシトイヘリ此諸神實ハ國常立ノ一神ニテマシマス成ヘシ五行ノ德アラハレ玉フ是ヲ六代トモカゾフル也二世三世ノ次第ヲ立ベキニハアラザルニヤ次ニ化生シ玉ヘル神

諸社一覽第一

神道大意問答

目錄

神道流儀

倭姫命詔

神道護摩並加持ハ根本神道ニ無事

神道ニテ佛道ヲ列事 伊勢兩宮ニ僧尼ヲ忌事

兩大神宮ノ廻ニ佛像ヲ置誤

同四十末社八十末社ノ事以上唯一神道

吉田兼俱神道之辨 内外清淨之事

日本ニ佛法ヲ崇始 諸神之本地佛用不審

神道顯密之事 同密位

桓武天皇勅定 高岳親王辨

舍人親王辨 根本神體ノ事

繪馬ヲ献ズル縁付リ天王寺道公ガ事

コマイヌノ事 牛王ノ事

鳥居ノ事 千木鯉木ノ事

關神之事 參詣者廻レ社事

氏神氏子

注連

和幣

二十二社式内式外之神

諸國一宮 神無月并十一月火燒ノ事出雲國佐臨ノ社ノシタニミエタリ

以上一之卷目錄終

凡例

○這書ノ述ル所以童蒙族ニ神道ノ大意ヲ知ラセ淺キヨリ深キニ入ン爲也

○凡神道ニ唯一神道ト兩部習合トイフ者ト大槩兩説アリ今此書ニモ始ニ唯一ノ説次ニ習合ノ説ヲ双記ス者也

湯立

明神

神

本朝諸社一覽叙

夫我秋津洲者神國也六十州裏無一州而不神之有而生其土者其諸社垂迹之事不可不知焉而雖有舊記其事之廣大豈容易得知焉於是乎近代便其事之書記播世者不少焉尤憾其書或太繁或太簡而無折衷也比屬坂內直賴氏考索舊記抄出衆書錄爲若干卷名曰本朝諸社一覽其意欲便幼學之輩授而鏤梓功成之後介于書肆某索序於余々々讀之則其繁簡最得宜匪是沈思研求之勤曷能至此余與直賴雖無半識之舊其功不可不以不嘉之率叙數言而不辭也唯懼余非其人貞享乙丑端正之夕若耶溪後學桑村孚休涉毫于洛陽客舍

本書脫漏之語考之附于後

○神祇本源曰天口事書曰二所大神宮左右東西寶殿前後不_レ同儀_一內宮者陰神外宮陽神坐也是春夏象陽長_二萬物於前_一秋冬陰藏_二萬物於後_一所謂天地之位聖人之法在_レ前在_レ後象_二四時_一治_二天下_一以_二事理_一此其儀式也

○千木片揆者陰陽之表也

○堅魚木者星象坐其數十九者大日靈尊照_二十方_一撰也九者五大成貞尊光濟_二八洲_一群生光明表也八者八心德明表也七者七星頂坐守護願也六者六根明也五者中也四者四德表三者天地人三才表也

○一說云十者十地之位表也九者極上之位表也天四德地五行爲_二九也九者五方羅_二九洲_一因_二九之故爲_二九々八十一_一數極也

○同九曰天口事書曰八坂瓊戈形天地開闢始同躰坐也以_二一基_一分_二天地_一而爲_二內外_一心御柱也故大人者與_二天地_一合_二其德_一而利_二萬物_一者也

○同八曰天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗乃成_レ之神近悟諸不_レ遠也天照珍圖者心神華臺之中天地尊圖鏡坐_二豐受珍圖_一者天地父母二儀之中五

大尊光照金鏡坐_二俗常_一以_二金鏡_一喻_二明道_一也

天神皇珍圖狀者天之位象_二四時之行_一治_二天下_一四時之行者寒有_レ星聖人之法故有_レ文有_レ武天地之位有_レ前有_レ後有_レ左有_レ右聖人之法以建_二經緯_一春主_二於左_一秋殺_二於右_一夏表_二於前_一冬藏_二於後_一生長之事文也收藏之事武也故文事在_レ左武事在_レ右_{元々集}

○元々集五曰天口事書曰皇天盟宣久天皇如_二□□□

利_二萬民_一_止言壽_比皇天之受命也不_レ可_二以_一智爭_二不_レ可_二以_一力競_二焉_一印度支那王種不_レ常至_二膺_二瓊籙_一者皆承_二於天_一況於_下繼_二日神之體_一居_中天皇之尊_上哉傳_二三種寶器_一守_二八洲_一之神靈此非_二少緣_一也

享保庚戌十有一月八日 備郡謹書寫之

寬保癸亥閏四月廿三日 伊橋藤七郎謹寫之

明和三丙戌夏卯月十有五日 宮內兵庫謹寫之

皇御宇之撰也以相殿

之畢

寶龜三年壬子四月七日

度會神主五月麻呂

承平二年壬辰八月五日書寫之畢

大神宮禰宜荒木田行真

文治四年戊申正月十七日書寫之

高倫判

弘安三年六月廿日書寫之

度會神主行忠判

石凝姥神所鑄造之御鏡也

活目入彥五十狹茅天皇御宇二十五年丙辰春三月丁亥

朔戊申爰倭姬命天皇第四皇女母皇后日葉酢媛命也丹波道主貴

小蘇蠶見之則人貌也天皇怪令養之己而美女也能知未然所謂倭

姬命也帝其所從問答曰我將事神令祭三種神器壽蓋五百歲餘倭

所請齋宮此其緣也求下鎮坐太神之處訪神風之地

尋三重浪之地一天隨大神之教天其祠立伊勢國度會

宇治五十鈴之河上始天降地以天逆矛爲宮處之

璽也

夫天御中主尊無宗無上而獨能化故曰天帝之神一亦

號天宗廟一到天下則以即一無相之寶鏡崇神

體是天鏡尊居二月殿所鑄造三面之內第一之御鏡

祭止由氣宮祭也大泊瀨稚武天皇御宇二十一年丁巳

多十月天照大神乃依御託宣以止由氣皇大神於從

丹波國比沼之眞名井原志天奉迎度會之山田原止

由氣宮是也

凡祭神之禮者散齋致齋內外清淨是也其致齋

前後兼爲散齋其心無汚念爲內清淨以二清淨或以二

禁法爲二外清淨亦其品非一以二正直爲二清淨或以二

一心定準爲二清淨或以二起生出死爲二清淨專

致其精明之德須不三分三法共食一水一軌匡其

心令至神國之道若亦神人心外好別諸而從不

淨實報則不得踐神地○按胡連集引用此文下有上字不許飲神

地水而五千大鬼常言大賊ナアラタ

夫大日本者大日本訓之曰於保都麻止是我明之總名也神日本伊

於帝宅故以爲日本爲畿內一國大八洲也神語磯取虛島自

之名後以爲大八洲之總名也古語波津國亦千五百秋瑞穗國

述國目以爲神名也食國食國猶言毛國五穀是國上之毛也故曰毛

已併是神語也亦食國國一矣言人能食其五穀而身命所保養之國

也俗曰葦原中國是皆自然之名也

凡伊勢兩宮則爲無上之宗靈而貴無二故其造宮

之制者則柱高太板則廣厚禮是皇天之昌運國家之洪啓

古止波當依三神器之大造奈利即移二日之少宮寶基

造伊勢兩宮焉

心御柱一名忌柱一名天御量柱是則伊弉諾伊弉冊尊御

量事化原陰陽變通本基諸神化生心臺也

棟梁形皇大神者日天圖形神代祕書十二卷之內最極祕

書也

廣糠天皇御宇四年壬辰三月十八日度會大神主調書寫之

此書一卷者相傳屋姬天皇御宇之撰也以相傳一見

天口事書

天地未開關陰陽未分五德未行四時未定之前混沌如鳥卵溟滓而含牙之神白天天常立尊其已發之始大海之中有一物一浮形如葦牙一其中神人化生此時未備故用神號天御中主神

神語曰天護日國護月皇神也高天人之二字也海原初出之故天御義理舉之八重雲

以天於其物便化為國常立尊是三名是一神而天地人坐神也

三才又備焉無名無狀天地開闢始含精氣而應化之元神故高天原爾居之天視天下式時候授諸天子

照臨天地之間而以一水之德利萬品之命故亦名曰御饌津神也神語曰御義理也古語曰天津御氣國津

御氣亦曰狹霧一是水德易形因以天氣下降地氣上騰天地和合草木萌動惟水德矣當神寶日出之時御饌津神

天御中主尊與天照大日靈貴皇親神漏岐天照大神天神漏美天御中主尊之長靈男命於以皇御孫之命乎天津高御座爾坐天天津璽乃劍鏡乎捧持賜天言壽宣古語曰天神

宇珍珍圖之御子皇御孫之尊若天津瓊玉戈久曲妙爾天

津日嗣乎萬千秋乃長秋神嘗其此緣也大八洲乃豐葦原瑞穗國古語曰瑞穗者安國止古語曰浦平久知食止言壽寄奉利賜岐亦皇

豐穗也天盟宣久天皇如八坂瓊之曲玉久以曲妙一天治御

宇之政一且如真經津鏡久仁以二分明天看行山川海

原一支即提此靈劍天平三天下天利二萬民止言壽比

於茲皇孫之命天磐座押放天之八重雲乎伊豆之知別爾

知別天築紫日向高千穗穗觸之峰爾天降坐支奴是猿田彥

神奉導奈利吾當到伊勢乃狹長田五十鈴之河上止

以三逆矛一豆天逆矛訓之云為宮處乃璽二天逆矛名二八

坂瓊乃戈或云皇親尊天降居之時平鬼神治天下靈異之物有

天衣白銅鏡之類也三百六十種之神寶所謂天之八坂瓊之曲玉玉裳比禮戈

瓊玉戈為最長而立國御量柱也

是天地開闢之始浮高

天海原之神寶也神語曰破者古語天逆矛天逆太刀俗

曰魔返鋒麻返鋒訓之云亦名三天乃登保古此名天御

璽又曰天御量柱者天瓊矛同體坐也天照大神天降坐

以前從上天志天投二降給比志天之逆太刀逆鋒金鈴等五

十鈴河上以來常建五色之雲有二金玉之聲一幾照輝

如日月仍大田命惟小緣之物爾波不坐止天崇祭之

天照大皇神是字者源起天孫流傳皇日本國大廟坐是皇

帝之宗祖萬姓之大元也以三天地八尊鏡一假模御靈是

有_二恩旨_一開_二文軌_一爲_二一慮_一跪_二二宮之砂廷_一答
祈_二百王之地_一久照_二本根之子葉_一扇_二孫枝之遺風_一
而已

一本

正平二十四年八月十三日內宮參籠之時書寫畢

元祿十二年己卯春以_二竹下松立青山翁之本_一書

寫之_二焉青山翁者出雲地信直丈之門人也青山翁

曰此書意甚好恨間有_二附會_一予熟讀加_二批點_一青山

翁觀以爲_レ是

光源翁源良顯

寶永己丑春

伴部重垣翁寫之

享保二十乙卯九月上旬謹書_二寫之_一

近藤員郡

鑑^ニ與^ニ天御量柱於金石^一以治國家焉天地神祇頓首再拜天下幸甚矣珍圖像者張經緯而理^レ代齋^ニ上下^一而濟^レ人故形五位爲^ニ大傳^一也五十鈴宮御靈形者天瓊杵象表也是天地發初萬像根本火珠所成靈坐白銅鏡形八面是大八洲神靈居坐部類三十二神社列也^レ山田原宮御靈形者五神位圓形坐也是卽五常圖滿智光表理也一輪之中含^ニ萬像^一五常百行悉皆一圓常住應元神坐也金鏡形十四面坐也部類神五十四坐列也謂伊勢兩宮恭現^ニ美麗之威儀^一顯^ニ御形之珍圖^一給是^レ大元靈明^{イヒカリ}是稟氣^{イキトシイケルモノ}之靈大智光明身神語百千尊號天津御量之功名也故聖神日内外不^レ二常一體天神地祇皆一露矣

履中天皇御宇神鏡日命六世孫大水神獻^ニ櫻樹於天照大神^一御形靈以來宮人等齋祭也從^レ此而若櫻姓始賜矣

件大水神朝熊小刀子姬神靈以^ニ大刀子二十枚小刀子十二枚^一櫻樹木祭藏焉^{今世稱^ニ櫻社^一也}

天皇御宇隨^ニ天神高皇產靈神之訓^一土師物忌取^ニ宇仁之波邇^一造^ニ天平瓮^一敬^ニ祭諸神^一是則天下泰平吉瑞諸天納受寶器

臣聞陰陽定位裁萬物以先^ニ人倫^一歡聖正^ニ名叩^ニ五音^一而甄^ニ姓氏^一是以因^レ生之本自^レ遠胙^レ土之基增崇治^ニ帝道^一而汗隆襲^ニ王風^一而興替者也伏惟國家降降^ニ天孫^一而創^ニ業橫^ニ地軸^一以開^レ邦一統架^ニ宗環^一八洲^ニ以御辨^一五連^ニ無^レ代^一跨^ニ億載^一而期^ニ圖高門接軫^一甲姓聯^ニ衡扶葉寔繁派流彌衆^一旣而德廣所^レ覃者雲靡輟^ニ情願^一編戶^ニ星口^一相尋或撰^ニ丘陵^一而挺^ニ峻或飛^ニ斬蓋^一以騰^ニ華^一又有^ニ僞^一會冒^ニ祖安認^一膏腴證^ニ神引^一皇虛訖^ニ黷冕^一先朝鑒^ニ其假濫^一留^ニ盧根源^一昧且臨^ニ軒仄景忘^一膳今臣等謹奉^ニ綸言^一追^ニ遂前旨^一云云開^ニ書府之秘藏^一尋^ニ諸氏之苑丘^一至明繼^ニ明至聖承^一聖集爲^ニ姓氏錄^一別卷是神光祕府也是萬姓至尸也令然示^ニ掌而已^一于^ニ時弘仁乙未^一右大臣從^ニ二位兼行皇太弟^一傳勳五等臣藤原朝臣園人^{コ、ニテ表ト序省略シテ入ル}別錄新撰姓氏錄目錄合三十一卷弘仁六年七月二十日萬多親王撰定奏聞已畢今此實錄并姓氏錄目臣等齊持而藏^ニ之祕府^一矣

弘仁十四年八月三日以^ニ宮內卿藤原諸嗣祕本^一祭主神祇大副淵魚書^ニ寫^一之^ニ長和六年四月廿日神祇大中臣朝臣輔親優^ニ祭官^一

件二神同殿坐陪從故稱「相殿神」也亦曰右相殿神

栲幡豐秋津姬命云云本說不合也

豐受宮二座在二度遇郡沼木鄉山田原一
大二座前一座稱「相殿」

天御中主皇神一座

高天原初出之故天御氣理舉之八重雲以天坐成神

天讓日國禪月乃皇神名亦曰「天御中主尊」故天地俱

生神坐也致「皇帝之大宗」也諸天子孫保「任此事」而

尊崇敦孝故崇「祭天孫」於「天照大神」天照大神則

尊「貴天御中主皇神」焉

御間城入彥五十瓊殖天皇三十九歲壬戌天照大神

遷于但波吉佐宮今歲止由氣皇大神結「幽契」天降

坐矣

泊瀨朝倉宮御宇天皇二十一年丁巳冬十月一日倭姬

命夢教覺給皇大神如「天之少宮坐」爾天下仁志所耳

不坐爪御饌毛安不聞食「爪丹波國與佐乃小見比沼

乃魚井乃原坐道主子八乎止女齋奉御饌都神止由氣

皇大神乎我坐國欲度誨覺給岐爾時大若子命差使皇

朝廷爾御夢之狀乎令言給岐即天皇勅汝大若子使

罷往「天布理奉宣岐」故率「手置帆肩彥狹知」二神之

裔以「齋斧齋鉏等」始採「山材」構立寶殿「皇明年戊

午秋七月七日以大佐々命率諸神等從「丹波國

余社郡真井原」奉迎止由氣大神「度遇山田原之下

都磐根大宮柱廣敷立皇高天原仁千木高知皇鎮理定理

坐稱辭竟奉仕天照大神託宣諸祭事以止由氣宮

爲先也

天津彥彥火瓊瓊杵尊一座爲「東相殿神」坐也

天照大神與「天御中主神」則是天孫尊之大祖也以

高皇產靈神爲「皇親神漏岐」也謂親者祖也故屬「二

祖尊號」名曰「皇孫尊」也故豐受者天御中主皇神皇孫

尊二柱之總名也豐者天御中主皇神本號
受者皇孫尊承得尊號因以名「大八洲」

而稱「豐葦原中國」其此緣也大日本大日靈尊所化坐

國本名也

天兒屋命 太玉命二座

詔「二神」同侍「殿內」善爲「防護」矣故名「皇孫尊之

前神」坐也名「西相殿」是也

右天照大神悉治「天原事」耀「天統」皇孫尊專就「豐

葦原中國」受「日嗣」是聖明所「覃莫」不底屬「宗廟

社稷之靈得「一無」之盟百王之鎮護孔照焉ハナタケナリ

倭姬皇女承「皇天嚴命」移「高天原之宮」而造「神風伊

勢內外兩宮社」顯「御形珍圖於棟梁」用作「王化之龜

主水司坐神是也
也水饗神子也

御門神玉女神變
化分產

櫛石窓神 豐石窓神

四面門各座十二月祭

造酒司坐神黑御酒白御酒饗
復作滿奉饗也

酒彌豆男神黑御酒彌豆女神白御酒
作ル神酒彌豆女神作ル神

件二神根倉神子也
大年神苗裔
大土祖孫也

大膳職神

御食津神 火雷神 高倍神御持
神化

件三柱神者素戔鳴尊苗裔稻倉魂名字賀能賣神亦

稱御食津神也亦大年神子奧津比賣命大戸比賣命

也是竈神坐也君子合諸天道春禘秋嘗凡祭有四

時春祭曰昶夏祭曰禘秋祭曰嘗冬祭曰烝昶禘

陽義也嘗烝陰義也夫祭天神於圓丘祭地神於方

澤乃后土也魂氣歸于夫形魄氣歸于地形故求

諸陰陽之義也

日本國大廟水火二靈坐也謂宗廟者先祖之尊貌也皇者大也顯明
也祖始也名先人以君明始者所以尊本之意也

伊勢太神宮日本國大廟坐此皇帝宗祖
萬世大元也尊崇異于諸祖

太神宮三座在度會郡宇治鄉五十鈴河上
也大一座前一座稱相殿神

天照大神一座亦曰大日靈尊
亦曰天照皇神

天照大神天地大冥之時現日月星辰像照虛空之
代神足履地而興于天瓊戈於豐葦原中國上去下
來而鑒六合治天原耀天統皇孫尊筑紫日向高
千穗穗觸之峰天降坐以降迄于彥波瀲武鸕鷀草葺
不合尊終年癸丑三主治百七十九萬二千四百七十
六歲

件葺不合尊第四子逮于神武天皇元年甲寅發向

日本國八年辛酉即建都橿原經營帝宅皇孫尊乃

美豆之御殿造奉仕天照大神與同殿御坐也崇神天

皇即位六年己丑漸畏神威同殿不安更就於笠

縫邑殊立磯城神籬奉遷天照大神以豐鋤入

姬命齋焉從神武天皇元年寅至崇神天皇即位

五年戊子帝十一代歷五百七十六歲神與帝同

牀坐纏向珠城宮天皇即位廿五年丙辰天照大神令

倭姬命奉載之伊勢國宇治五十鈴河降伊蘇宮

坐明年丁巳已冬十月甲子奉遷于天照大神於度遇五

十鈴河上也詔曰常世思金神手力雄命天石戶別神

此鏡者專為天照大神御魂如拜吾前奉齋矣

天手力雄神一座

栲幡千千姬妹思金神一座

耳命神淳名川耳尊^{フルコニカミヲシテウササキ}故古語稱之曰於^ニ畝傍之樞原^ニ也太^ニ敷立宮柱於底磐之根^ニ天御柱^ニ峙搏^ニ風於高天之原^ニ風雲緣^ニ也而始馭天下之天皇號曰^ニ神日本磐余彥火火出見天皇^ニ草創^ニ天基之日也凡德合^ニ天地智合^ニ神靈稱^ニ皇帝上則答^ニ乾靈授^ニ國之德下則弘^ニ皇孫養^ニ正之心也焉甲子四年春二月壬戌朔甲申詔曰我皇祖之靈自^ニ天降鑒光^ニ助朕躬^ニ今諸虜已平海內無事可^ニ以郊祭於天神用申^ニ大孝^ニ者也乃立^ニ靈時於鳥見山中^ニ其地號曰^ニ上小野榛原下小野榛原^ニ用祭^ニ皇祖天神^ニ焉任^ニ皇天乃嚴命^ニ齋^ニ八柱靈神^ニ而式爲^ニ鎮魂神^ニ爲^ニ天皇乃玉體^ニ春秋二季齋祭也惟魂元氣也清氣上升爲^ニ天濁氣沉下爲^ニ地清濁之氣通而爲^ニ陰陽五行^ニ陰陽共生^ニ於萬物之形^ニ是水精陽氣生因以名^ニ魂爲^ニ心故以^ニ安靜^ニ爲^ニ命是道大也神語大者人靈也^ニ名^ニ之號^ニ魂^ニ形也總以^ニ八洲八齋八心^ニ因以爲^ニ大象^ニ者也古語陽氣爲^ニ心爲^ニ神故名^ニ魂也陰氣爲^ニ意爲^ニ性故名^ニ精魄^ニ也因^ニ茲祭^ニ八齋神靈^ニ則^ニ此下有世苦樂之三字皆是自在天神之作用廣大慈悲之八心即續生之相真實而无^ニ畏鎮^ニ坐大元神地^ニ如^ニ湯津石村^ニ長生不死之神慮謹請再拜國家幸

甚々々

高皇產靈尊^{神武天皇以高皇產靈一朕親作}

神皇產靈尊^{八咫鳥靈坐亦伊勢朝臣上祖神日本磐余彥天皇欲^ニ向^ニ中州之時山中峻絕路迷失^ニ路於是神魂命囑武津命化^ニ如^ニ大鳥翔飛奉^ニ導遂達^ニ中州天皇喜^ニ其功特^ニ厚褒賞^ニ天八咫鳥之號從^ニ此始也故政道能靈坐}

魂留產靈尊^{元氣精靈坐}

生產靈尊^{精氣化現靈坐}

足產靈尊^{大地主大貴神}

大宮賣神^{天狐辰王亦名專女是從諸宮是太玉命空神如^ニ今世內侍^ニ}

御膳神^{粟國祖神大御食津姬神名世間保食神是也神語供^ニ神物^ニ名^ニ由賀神^ニ加^ニ其此緣也}

事代主神大已貴子

件八神則八洲守護驗神入齋靈命八心府神因以合^ニ大象^ニ是生化靈明也國家福田也故式爲^ニ皇帝^ニ鎮^ニ御魂^ニ崇祭矣依^ニ神祇官請奏^ニ諸司輸^ニ祭料^ニ宮主御巫供^ニ奉御食料^ニ稻二束其日御巫於^ニ神祇官齋院^ニ春^ニ稻籾炊以^ニ朝竈^ニ拏即盛^ニ蘭筍^ニ納積居^ニ案神部二人^ニ執^ニ向祭所^ニ供^ニ之于^ニ時加^ニ大直日神一座^ニ也天種子命招^ニ魂續^ニ魄^ニ除不祥^ニ也

御井神^{五星變易八龍神同居作井名也}

生井神^{福井神}

網長井神

水神

鳴香神

舉於天上矣

地神五代攝地五行傳神位坐道德極而生化德表也

天照大神奉舉天上之故曰大日靈尊也

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊素戔鳴神欲奉辭日神

昇天之時櫛明玉命奉迎獻以瑞八坂瓊之曲玉素

戔鳴神受之轉奉日神仍共約誓而感其玉生天祖

吾勝尊是以天照大神育吾勝尊特甚鐘愛常懷腋

下稱曰腋子今俗號稚子謂和

天津彦々火瓊々杵尊是八洲主尊也

天照大神之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶皇

天御中主尊長男高皇產靈尊之女栲幡豐秋津姬命

生天津彦々火瓊々杵尊故皇祖高皇產靈尊特鍾

憐愛以崇養焉因以受皇天尊號一稱皇御孫尊也

遂欲立皇孫尊以為大葦原中國之主矣高天原

神留坐天御中主神天照太神正哉吾勝尊高皇產靈尊津速產靈尊皇親天御中主神

漏岐高皇產靈神神漏美命栲幡豐秋津姬命以八百萬神等神集

集賜而神議議賜焉我天皇御孫尊豐葦原水穗之國

安國度平久所知食度事依奉岐如此依之奉之國中仁荒

振神等鹿島大明神香取大明神語問之盤根樹立草乃垣葉平語止而天

照大神手持寶鏡授天皇孫尊而祝之曰視此寶

鏡當猶視吾可與同牀共殿以為齋鏡寶

祚之隆當與天壤无窮矣則授八坂瓊曲玉八咫

鏡草薙劍三種寶物永為天璽矛玉自從矣惟皇天

御中主神與大日靈尊盟宣又天皇孫尊如八坂瓊

之勾以曲妙治天下且如白銅鏡以分明

看行山川海原乃提是靈劍平天下矣詔天兒

屋命天太玉命曰惟爾二神亦同侍殿內善為

防護焉亦詔天鈿賣命同使配侍焉皇孫尊天之盤

座押放天之八重雲伊豆千別而千別矣築紫日向之高

千穗穗觸之峰天降居奉尊後因吾將顯伊勢狹長田

五十鈴河上也以天逆戈為宮處顯伊勢狹長田宣旨

彦火火出見尊天津彦彦火瓊々杵尊第二子也

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊母木花開耶姬大山祇神女也

人皇首躡歷登皇乘圖稱帝於德義一者也

神日本磐余彥天皇彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊四子也

日本人人皇始天照大神五代孫庚午歲誕生年十五為

太子辛酉正月庚辰朔天皇即帝位於橿原宮是歲

為天皇元年五十尊正妃為皇后生皇子神八井

利^{カスノモノ}三萬品之命^ヲ故亦名曰^ニ御氣津神^一也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣亦曰天狹霧國狹霧是水氣易形因以天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動惟水道^{ノイホボシ}德^ヲ矣^ニ

天八下靈神^{府中五魂坐五靈五常名}五大神也作萬生實也

天三降靈神

天合靈神

天八百日靈神

天八十萬魂神

件五柱神則受天地之精氣而形質具而未相離名稱五大魂是中府藏坐神也故謂神者生之本形生之具也古語謂稱獨化神也

高皇產靈神^{皇祖神故亦名高貴神}天御中主神長男也

「栲幡豐秋津姬命^{皇孫尊母也}高貴女神

思兼神^{智性靈性相殿}天手力雄神^{石戸開神坐相殿神}

神皇產靈神^{八咫鳥垂伊勢朝臣祖神也}

津速產靈神^{中臣朝臣上祖}

件三柱靈神者天御中主神所化神名為子父子道今

時露現矣^{アラハル}

天鏡尊^{獨化神天津水鏡神三坐是神鏡始元三光面目明白此時也}

天萬尊^{獨化神天鏡次生也伊弉諾靈明坐}

沫蕩尊^{獨化神天萬次生也伊弉冊靈明坐}

件三柱神者天御中主神出現之時三魂荒魂^{ミクワニ}坐續命^ス

神坐云亦名稱三諦明神也

裸坐^{アラワル}天神一代^{天神第七代陰陽定位萬物形也}

伊弉諾尊^{天降陰神名}日^{子也}

妹伊弉冊尊^{天降陰神名}月^{子也}

從國常立尊至惶根尊天神六代之間則有名字^{ナノミ}未

現尊形五位神坐其後轉變而合陰陽有男女形

應化相坐而專心珠神以清淨為先神能與焉伊弉諾

伊弉冊二尊承天御中主神詔即以天瓊戈指立於

磯取慮島之上以為國中之天柱則化豎八尋殿共住

生大八洲次大小島合拾四箇島其後處々小島皆是水

沫潮凝而成者也伊弉諾伊弉冊二尊共議曰吾已生大

八洲及山川草木何不^ラ生天下之主者歟先生日神

號曰大日靈貴亦云天照大神亦云大日靈尊此

子光華明彩照徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未

有若此靈異之兒不宜久留此國自當早送子

天而授以天上之事是時天地相去未遠故以天柱

神皇實錄

姓氏錄別卷書記神皇實錄一卷
姓氏錄抄一卷

以代元氣イノチノカミ渾渾天地未割猶雞卵子溟滓含牙其後清氣漸登薄靡爲天渾濁重沓淹滯爲地所謂洲壤浮漂開關判剖是也譬猶遊魚之浮水上于時天先成而地後定然後於高天原一化生一神號曰天イハヒ讓日ニギハヤヒ神國ニギハヤヒ

神坐是諸天降靈之本致一切國王之大宗也イハヒ德被百王イハヒ惠濟四海歷代帝王崇尊祖萬方人夫敬神祇故世質時素無爲而治不肅而化云爾イハヒ爾ニギハヤヒ天御中主ニギハヤヒ以天瓊戈授伊弉諾尊伊弉冊尊故讓天イハヒ地於之尊故謂之稱天讓日國讓月皇神也

大元イハヒ謂無名之無狀之狀呈稱氣神萬物靈臺也日月一本日月之下有星氣是天之四宇是大地大人亦大故大衆人形坐也元者元至也國常立尊イハヒ著德立功名也所化神名曰天御中主神也

謂大易者虛無也因動爲有之初故曰大初有氣爲形之始故曰大始氣形相分生天地人也大方道德者虛無之神天地沒而道常在矣原性命受化於心

受之意意受之精精受之神形體消而神不毀性命既而神不終形體易而神不變性命化而神常然因以名國常立尊以初爲常義者也

天地耦生神イハヒ謂耦生天地對耦萬物生故八大五行佐天地生物五行自永始火次之金次之土爲從木生數三成數入俱育也配用有德故於明堂以祭吾神而已

國狹槌尊

水藏戶

豐斟淳尊

火藏戶

湍土煮尊

木藏戶

大戶之道尊

金藏戶

面足尊

土藏戶

沙土煮尊耦生荒魂
大苦邊之尊耦生荒魂
惶根尊對耦荒魂

件五代八柱天神光胤坐也雖有名稱未現形體五大府中坐故名天地耦生神也應化神名曰天御中主神未顯露一名國常立尊亦稱國底立尊天地之間稟氣之靈蒙一大五種之神力受天地父母之生氣以言語授世人依之得一切智心利萬物生化也

天神首イハヒ名稱天地俱生神一代謂天文地理日月星辰狀此時明現神聖出世天口成事

天御中主神

天地開闢之始含精氣而應化之元神視天下而式時候授諸天子照臨天地之間以一水之德

而爲_二帝宅_一詔給矣、神日本磐余彥天皇賴以_二皇天之威_一、甲子歲春二月甲申詔曰、我皇祖之靈也自_レ天降靈光_二助朕躬_一、令_二諸虜已平海內無事_一、可_下以郊祭_二祀天神_一、用申_レ大孝_上者也、乃立_二靈時於鳥見山中_一、用祭_二皇祖天神_一矣、亦天富命率_二諸忌部_一捧_二天璽鏡劔_一奉_二於正安殿_一、天種子命奏_二天神壽詞_一、此神世古事而已

天皇鎮魂八神

高皇產靈神此尊者極天之祖皇帝也

神皇產靈神八咫鳥

魂留產靈神玉作

生產靈神生魂

足產靈神生島足魂道反魂

大宮賣神傳女

御膳神保食神

事代主神素盞鳴尊子大己貴神長子也

右八柱神則八洲守護驗神、八齋靈命、八心府神坐、故式爲_二皇帝之鎮魂神_一矣、謂夫水氣者清淨、海水即本祖元神性也、湯氣者濁世生類不清實執也、故清淨神氣祭即人魂湯氣鎮也、故有_二鎮魂_一

也、湯者氣也、亦光明也、故名曰_レ魂也、凡一氣化現名號_二神靈_一是生化魂也、故湯氣散亡即爲_レ死即佛_ニ本居_一善哉善哉、皇天壽_ニ曰_一、而布瑠都由良都止布瑠都_ニ云々_一、惟是皇天无極大神咒也

神皇系圖一卷

豐御食炊屋姬天皇庚辰歲攝政上宮厩戸豐聰耳聖德太子尊奉_レ勅撰定而已

神皇系圖一卷以眞福寺本爲底本以一本校了

明治丙午三月

佐伯有義

右從三國常立尊迄至伊弉諾伊弉冉尊謂天神七代一矣、爰蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命、天以授天獨矛、而諸尊立於天浮橋之上、二神共計曰、底下豈无國歟、廼以天獨矛指下而探之、摧獲滄溟、其矛鋒滴瀝之潮凝成二島、名之磯取、廬島、二神於是降居彼島、與八尋殿、社記曰、大日本日高見國神祇因欲共爲夫婦產生州國及山川草木神等、後生一女日三男素戔鳴尊或爲日爲月、永懸而不落、或爲神爲皇、常存以无窮矣

蓋聞伊弉諾尊則東方善特藏愛護善通由賀神、梵所名之伊舍那天也、伊弉冊尊則南方妙法藏愛變行識神、亦名之伊舍那后也、凡從自性淨妙藏、乃至邪曲地爲下化衆生、隨順方便、故假所化義具生滅形、依无爲行滿、即得正果、是大慈悲神慮也

地神五代

大日靈貴天照皇神 神風伊勢國玉掇五十鈴川上座、諾尊持左手金鏡陰生、持右手銀鏡陽生、因以日神月神所化生也、謂火珠水珠二果曲玉變成、

三昧世界建立日月是座、凡上座時名之尸棄大梵光明大梵、下座時名之尸棄光天女天照太神遍照智光、法陰法陽兩部不二平等一心同殿同床、三神即一所座矣、尸棄大梵尸棄光天女、杵獨大王

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊天照大神太子正哉吾勝尊太子亦名皇孫杵獨王也

天津彦々火瓊々杵尊正哉吾勝尊太子亦名皇孫杵獨王也

彥火々出見尊天津彦々火瓊々杵尊第二子

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊彥火々出見尊太子

右天津尊率諸部神一降、到於筑紫日向櫓日高千穗之峯、治天下、以來迄至葺不合尊三主、治合一百七十九萬二千四百七十六歲也

人王

神日本磐余彥天皇葺不合尊第四御子

天照皇神誓曰、吾日太子如八尺瓊之句、以三曲妙一御宇、且如白銅鏡以二分明一看行

山川海原、乃提神劍平天下焉、肆以三名之三

種神靈也、汝敬承吾壽、手抱二流鈴以御

无窮、無念爾祖、吾在鏡中矣、式臨寶

位、以鎮元元、上則答乾靈授國之德、下則弘

皇孫養正之心、然後兼六合以開都掩八紘、

神皇系圖

天神七代

國常立尊

古天地未^レ剖、陰陽不^レ分、渾沌如^ニ鷄子[、]溟
滓而含^レ牙、及^ニ其清陽者[、]薄靡而爲^レ天、
重濁者淹滯而爲^レ地、精妙之合[、]搏易、
重濁之凝[、]竭難、故天先成而地後定、然
後神聖生^ニ其中[、]焉、號^ニ國常立尊^一矣、亦名
无上極尊、亦名曰^ニ常住毗尊[、]謂惟三世常
住妙心法界體相大智也、故天神地祇本妙
大千世界大導師是尊也、所^レ形名曰^ニ天御
中主神[、]亦戶棄大梵天王、故則爲^ニ大千世
界主^一矣

天御中主尊

神風伊勢百船度會山田原大神座、元氣所
化水德變成、爲^レ因爲^レ果而所^レ露名^ニ天御
水雲神[、]任^ニ水德[、]亦名御氣都神、是水珠所
成卽月珠是也、亦號^ニ大葦原中津國主豐

受皇神^一也、凡以^ニ一心二分^ニ大千[、]形^レ體顯
言爲^レ陰爲^レ陽矣、蓋從^ニ虛无^一到^ニ化變[、]天
月地水感應道交、故在^ニ名字相^一云々

天八下靈神

天三降靈神

天合靈神

天八百日靈神

天八十萬魂神

前五柱神者是生化五大尊座也

高皇產靈神皇祖神座

神皇產靈神大神主祖神也

津速產靈神天兒屋命祖神也

都八柱神者、天御中主神寶座之內獨化神也、明^ニ
百億須彌百億日月百億四天下、而爲^ニ天地人民化

生元祖^一者也云々

國狹槌尊

豐樹淳尊

泥土煮尊

沙土煮尊

大戸之道尊

大苦邊尊

面足尊

惶根尊

右八柱神者俱生之神、陰陽與耦生之神也、故乾坤
之道相參而化、所以成^ニ此男女形^一矣

伊弉諾尊

伊弉冊尊

來利香山社仁詣奉留仁何物乎捧奉爾也右手仁物乎捧豆
彼社仁參真世手後手乎開奈利四五日乃後伊勢太神仁飯
止加也何乎持止云事昔與利不識誠仁不思儀乃事也鏡
宮者伊勢仁御座岩乃上仁徑八寸計乃鏡仁天繞和缺豆今
母在止風社止天又有之天磐戶乃靈霧乎吹開之神奈利此
宮乃神官菊田乃無實乎得太利之時敵人申狀乎得豆訴陳
鳥書止天一首歌計乎書是

吹干止風乃宮爾也祈梟秋乃菊田乃露乃濕衣止計仁天沙
汰之梟仁其沙汰爾母勝豆誠貴鷹梟心鳥直仁之天賴事有
葉何其利生乃可無哉乎

正本云此書中過半以大江匡房康和年中記而爲
レ本並以ニ卜部好真註紀等秘說爲一書釋春山揖
天正拾七年卯月六日於和州書寫延春自省
記云全篇中往々以本地經文等附一段之中
親炙神佛略同之理也予見之誠陽明之行陸
用車馬諫言徹寸心矣依斯去外國邪道
而令飯元々微源之心者乎

○天之
誤歟 曆三年小野氏與志布留安樂寺仁詣天之爾御託

宣詩仁

家門一閉幾風煙

筆硯拋來五十年

我仰蒼天一懷古事

朝々暮々淚連々

止告玉陪利此由乎奏聞申鳧仁應同四年仁從一位左大

臣宣命於送奉留八月廿日再拜奉誦上留仁詩首

忽驚朝使排荆棘

官品高加拜感成

雖悅仁恩覃遠窟

但着存沒左遷名

神慮不穩止天同五年正一位太政大臣宣命乎奉留仁

虛空仁聲之天

昨爲北闕蒙悲士

今作西都雪耻尸

生恨死喜其我奈

今望足須護皇基

止響母不絕爾道風乃筆樣之天書太留於吹下之鳧內乃實

止之天內藏寮乃御藏仁納留凡此詩乎每日誦輩乎波守給

半止誓玉布正曆五年仁至末天九十六年仁天神止顯玉布

延喜三年與里今應安二年末天四百六十七年奈利

天磐戶事

天照太神天浮橋乃上與利葦原瑞穗乃秋津島山仁渡玉
時八入天津乙女子乎從比玉陪利其外四人婦人介侍
留八人乙女者一仁女豆羅乙女二仁奈加豆良姬三仁歌

姬四爾舞姬五仁加宇波志姬六仁花姬七仁明姬八仁兼

姬奈利四人者一仁未奈伎姬二仁結姬三仁豆良奴姬四

仁鈴姬是奈利八人八乙女止母又十二人乃幾稱止母云布

五人神樂男者五龍奈利昔素戔嗚命此中咩豆良乙女

乎引連天上陪登玉幾時仁天照神弟尊乃惡行乎有玉

仁尙不止波瑞穗乃里仁穩仁母無事乎恨仁思食天天磐

戶仁閉籠玉布八十萬神愁玉豆神樂乎奏之庭燎乎設介

神議仁議玉陪波磐戶乎少開玉天阿奈面白止宣時手力

雄神引出奉木其時御影乎遷申太利支和內侍所鏡奈利

其時持玉之和鏡明神是奈利第一鏡和不叶神慮止即

紀伊國仁崇奉留日前宮奈利第二和今內侍所也第三和

用意仁鑄玉奈利是和和大和國多布峯仁有止次天照太神

乃御冠和大和國西大寺仁朱乃唐櫃仁深久納天崇奉止

瓊鉾和大和國秋山社乃傍仁有留二本乃木仁打掛天置

利覆母無天阿良波仁有利二本木止和一和花杜一和賢

木奈利去葉何人母秋山乃香久詣止天仕也其時鉾乎母拜

止奈牟又神樂岡止天諸神等神樂奏世之岡有利其所仁

竹筒仁酒乎入豆藁仁天口乎指天岡乃上仁置介利誠仁昔與

利今乃代末天絕事無之其數乎不知下和皆朽天上仁和

頃乃新木筒有止奈牟又每年猿一足伊勢乃神與里香山仁

世玉奈利四七十禪師權現者桓武御宇延曆二年癸亥正月十六日仁降臨止五仁八王子權現者天神第二國狹立尊仁天人皇十代崇神天皇乃九年仁淡海國志賀郡比睿東乃大嵩仁天降玉布諏訪御射山乃明神是也六爾客人權現者桓武御宇延曆元年壬戌八王子山乃麓仁顯玉布延曆寺二十七代座主慶命大僧正時仁宮作有止是白山妙現權現仁天御座寸七爾三宮權現者桓武帝延曆六年丁亥貴女形仁天濃色乃衣裳之天顯玉陪利諏訪下御射山明神仁天候仁會次仁新日吉社者人皇七十八代二條帝永曆元年庚辰御建立奈利同御宇應保二年四月三十日始天當社乃祭奈止被_レ行天目出度御座寸奈利凡七社影向皆山王權現止申也竹_歟伊智古乃葉一本松八柳木于今有利止凡山門和昔青海原乃時探書錄乃滴成處止母申幾

山王御歌止天萬葉集爾

大伴乃美豆乃濱邊乎打去其辭寄來留浪乃行衛不識母

地主權現御歌止天

波母山也小比睿乃楳乃獨居和_{○風雅集作}嵐母寒之間人

母無之

聖真子御歌止天

何事實御座覽瑞垣乃久具成奴見奉真天
此三神誓約御歌止天_{○今按後撰集爲均子內親王之詠}
我母思人母忘奈阿里曾海乃浦吹風乃止時母奈之

北野天神緣起

太政威德天滿大自在天神者從三位參議刑部卿朝臣是善卿養子也叙正二位補右大臣兼右近衛大將內覽乃宣旨平蒙天宮中乃政平奉行玉陪利人皇六十代醍醐帝御宇昌泰四年辛酉正月廿五日太宰權帥仁天御歲五十八仁天左遷之延喜三年癸亥六十七仁天薨給陪利六十一代朱雀院御宇天曆五年壬寅七月十二日西七條大傳蜚賀娘文子仁託曰右近馬場仁向時曾愁暫忘留神社乎造見世與又延喜三年與利天慶五年仁至末天四十年乎經院利同九年丙午淡海國比良禰宜神良胤仁託曰比良峯仁太刀笏乃埋有是老松仁和笏福部仁和太刀乎授與可居所仁和松數千於生乎止奈理御詠止天二
離家三四月落淚百千行萬事皆如夢時々仰彼蒼一鴈足粘將疑繫帛鳥頭點着憶飯家止云詩共乎詠
世襲何爾與有乎止奈利天慶九年秋九月比一夜中仁數千乃松生多利人皇六十二代村上天皇天慶九年六月九日北野仁宮遷玉陪利良胤此所仁來天問波如託止延

天崩御同年同國秋篠山陵仁納奉留神龜元年甲子人皇四十五代帝聖武御宇仁筑前國若槻山乃香椎宮聖母大明神止顯玉布當昔神功應神御懷胎乃時御鑑乃不合之乎香良神御鑑乃草摺乎切豆御脇仁宛申是此後與利鑑乃脇立始叙止次仁昔家持卿越前國仁知留由之天下向世之爾氣比神仁詣天月夜爾聞波海中仁鐘乃聲聞覺不思議仁思天常宮仁祈申禮計連業夢乃中爾

浮止天魚乎角鹿乃入海仁鯨乃鐘乎浪瀾打覺

八幡大神宮緣起

仲哀帝九年十二月十四日應神天皇筑前國宇佐宮爾天誕生四歲爾之天春宮仁立七十一即位治天四拾年也此時文字始見繩爾替留百濟國與利世五經博士來利又絹綾錦等織物乃上手始天來利奴御齒百十一爾天二月十五日仁大和國高市郡輕島豐明乃宮仁天岩隱有利陵和河內國譽田陵也神成玉事和人皇卅代磯城島金刺宮欽明帝卅一年辛卯正月十一日豐前國長田池乃邊仁天三歲小兒乃形爾天竹葉上仁立玉天天吾是人皇十六代帝應神帝乃靈也我名和護國靈驗威力神通大自在王止云奈利宣之奈理人皇四十五聖武天皇御宇四年壬申東大寺仁影向孝謙帝御宇宮造寸止人皇五十代桓武

帝延曆廿三年甲申日枝山仁影向其後五十五代文德帝御宇齊衡二年乙亥大安寺仁遷玉布又五十六代水尾帝御宇貞觀元年己卯八月十五日男山石清水鴿峯仁遷座其時廣濱卿三男行教和尚貞觀樂主乃勅使止志天宮遷玉天今年應安元年末天五百十年男山利生是新奈利

山王權現緣起

山王大權現垂跡和是廿一座爾天御座寸先上七社者一爾大宮權現人皇卅代磯城嶋金刺宮欽明帝即位元年庚申大和國三輪大明神臨降之玉比其後卅九代天智即位元年壬申即大比睿大明神止顯玉布本社爾天和正一位大神大明神重一棟大物主止申天照太神乃甥乃神爾天座寸乎今和日吉大宮殿仁天崇奉後昔大津八柳邊仁顯出玉天神人天乃晴光田中恒世此二人仁勅曰餉乎與陪用止應天恒世黃楊中仁天粟飯乎炊之奉利伊智古乃葉仁入天奉留唐崎孤松仁召乃御舟乎引掛介紫玉利其時只人仁非寸神明止知奉天琴御館宇志丸仁詔之天御跡乎慕奉天大宮乃社壇乎始玉陪利二爾地主權現者天地開闢乃最初天神第一國常立尊也高嶺乃槻仁天降玉止三爾聖真子者輕嶋宮應神天皇人皇四十二代文武帝御宇九年近江國志賀郡仁顯玉布即八幡宮仁天渡

榎本神詠止天

補陀洛乃南能岸仁堂立豆今會榮幸北乃藤浪

賀茂大明神緣起

秦氏女子葛野河仁衣平濯仁水上與利鴨羽仁傳短留矢
一流來留取飯天戶上仁挾置太利梟其後懷妊志天男子
平生父母饗應之天賀茂里仁乎疑天此中仁汝父太留仁仁
社盃乎差勢奈登止云仁戶上乃矢仁指迎梟留仁曾日比乃
不審母晴太利上賀茂和別雷神止申奈利下鴨和母奈利中
鴨和御子奈利扱社賀茂氏秦氏乃婿仁成止又祭日和桂
并仁葵乎賀佐素父母芳契乃心也止凡賀茂御事打安留
樣奈利申母憚安利福葉

筥飯大明神緣起

人皇十四帝仲哀天皇御靈也本和武內大臣乃宮奈利之
塵輪襲來時安陪高九同分々九二人仁守門弓矢乎執留
二月六日仁崩御成玉陪利御劍和命乃角鹿宮浦仁寄利
本和筑紫乃香椎宮仁神止顯玉乎懸豆宮作乎崇奉留凡人
王第九開化帝四拾捌年仁異國與利廿萬三千人寄來留
仲哀帝御宇仁廿萬三千人神功皇后時三萬八千五百
人應神帝御宇仁廿萬人欽明帝時卅四萬餘人敏達帝
御宇播磨國明石浦末天三萬人天智帝時二萬三千人

桓武帝延曆六年仁四十萬人龜山院文永五年二月一
日寄來○取アルカ奈利後宇多天皇大覺寺殿御時弘安四年末天已
上十箇度日本乎攻然仁一度母我國不二打負一弘安四
年爾和蒙古舟八十萬七千八百艘高麗舟五百艘也云々

常宮權現緣起

人皇十五代神功皇后靈神仲哀天皇乃勅乎受介塵輪乎
討豆懸豆三韓乃堺仁向玉布人皇五代乃時化顯住吉
神止高良神止乎以天神功仁副奉豆云我年關陀利爲三守
護仁高良大神乎大將止之天異國乃三韓仁到玉陪又申
云龍宮仁目出度御坐寸干滿兩願乎敵仁施掛給和波止
申仁懸高良河上大明神安曇磯良乎賴奉豆神望乎達寸
彼磯良海底仁多年有梟仁也面仁石花奈止云物付天醜計
連葉絹乎御貌仁掛天神功乃御舟仁管絃之給時清曇止云
舞乎奏天出玉陪利伶人等于今傳天祕曲寸高良明神
二乃玉乎預給故仁高良玉垂命止申侍幾敵舟來葉干珠
乎投天陸止成之陸與利來波滿珠乎以天溺寸遂仁日本仁
降乎乞奉留故仁神功以三弓弭一天高麗王和日本大奈利
止書付給利今仁不失止奈率抑神功御父和息長足彥御
母和葛姬奈利開化五世孫卅二歲即位治天六十九年
御歲一百歲四月十七日大和國十市郡磐余稚櫻宮仁

土御門宰相歌止天

神路山百枝乃松母更爾又幾千代君爾契利太留覽

一條關白謙德公詠爾

鈴鹿山伊勢於乃蟹乃奴連來侶裳鹽垂多利止人夜見留覽

金葉集云

神無月鍾禮乃雨乃降儘仁色々仁成留鈴鹿山哉

內大臣歌止天

降儘仁路絕奴連葉鈴鹿山雪社關乃鎖成是

白山妙理權現緣起

但大鏡第二御堂三男權大納言能信撰

伊奘諾伊奘冊尊八百萬神等乎神議仁集天豐葦原水穗乃

國仁御社處乎高天原仁卜玉布人皇四十一代持統天皇

御宇大化三年乙未越智顯金洞頭仁顯玉比同四十三帝

元明天皇和銅元年爾白山乃嶺仁鎮坐云々於白山有

七名利一爾蓬萊仙二爾高天原三爾未牟漏四爾白山

五爾千本嶺六仁千倉嶺七置倉嶺其神乎甘呂伎甘呂

美命止或伊奘諾伊奘冊止申奈利最此神仁飯天擁護乎

憑陪之凡吉野藏王權現止白山妙理權現止深久諸人乎

憐玉利然波白山仁藥草生比廿七所仙窟乃名有利一仁

長生神洞二爾不老仙宮三爾不老神仙洞四仁光明神

仙洞五仁紫微宮六爾三光神仙七爾神驗仙洞八爾賢聖

神洞九爾龍神仙洞十仁並光神仙洞十一仁護法洞十

二仁天女神洞十三仁異香仙窟十四爾輪堂神仙洞十

五爾月神窟十六爾水精洞十七爾蓬萊宮十八仁禪證洞

十九仁音樂仙洞二十仁最勝仙洞廿一仁明墨仙洞廿

二爾垂神仙洞廿三爾天人洞廿四仁司命洞廿五仁天

神洞廿六仁常住神仙洞廿七仁棲神仙洞止乎時神護

景雲年中也

春日大明神緣起

春日里三笠山麓仁宮居玉布春日四所止和第一鹿島第

二概取第三平岡第四姬神奈利人皇四拾二代文武天

皇慶雲四年甲辰常陸國興利移玉陪利第三平岡明神

和正久天子八禰命止申傳春日神也昔天上仁天高木尊

神議乃日天照太神御孫乎葦原國陪降之給時仁三乃神

寶乎被授奈利一爾葉八咫鏡二爾和八坂瓊曲玉也印籍三

爾和寶劍也天津兒屋禰命乎副奉旦日向國高千穗峯仁

天降玉之時諸神達譽云其形和日乃如久其心和如海之

其惠和如天之其德和地乃如久此故仁天照堅久誓申佐

久我子孫和此國乃可爲主之汝乃子孫和代之仁柄乎

取天奉扶禮止神約有利君乎輔佐之申事是興利始利支

曩祖紀伊國先生椎葉仁粟乃餉乎盛奉且其後椎木仁二面鏡止成化天顯玉布止云々傳教弘法智證慈惠等詣介留仁一度母正木御顯形和無之止那智飛瀧權現母當社別神也神感威光乃事不_レ遑_二羅繼_一奈利

住吉大明神緣起

人皇第五帝孝昭天皇仁靈現乃神也御座垂迹松木七本檜木七本共仁天降止住吉森和何母靈木仁人間乃種仁非寸住吉乃神詠止天

夜彌寒木衣也薄幾片損乃行合乃間與利霜藥置真年_{也力}

天照太神垂迹緣起

人皇十一代垂仁天皇御宇伊勢國五十鈴河乃水上仁顯玉布守_レ帝利惠_レ國美人乃心直奈留事乎悅給布柱垂木仁至迄何母直奈利世中乃費乎思食天供米母三杵計精介神代乃昔青海原仁仕介留萱葺柱和賢木也又法師仍不_レ詣和佛法乃此國仁弘事乎深久忌玉豆乃事也然波瑞籬與利近久不_レ詣奈利又大中臣社司乃申世之和伊勢爾和王氏中臣忌部卜部止天四姓官人有利大中臣和三笠乃森春日乃宮與利參留今乃伊勢宮和第廿六度目乃遷宮仁天渡世玉布三五度目和大和秋山乃社與利移玉陪利千早振神代久幾日本乃秋山與利屋渡遇乃宮

御神詠止天

阿留麻肆木昆登遠和懽爾頓因能流羅武古止波隣島今楚訶民輪宇玖良咩

近和宗近乃歌止天

陪馱傳辭屋幾萬代乎守利古肆内外乃宮乃八重乃瑞籬止聞之乎尤肆幾和歌乃仙人也止雖母無下仁神道乃事乎波知玉和佐利是止難之申寸社司有利行應若之時藤原大納言爲定卿仁古今集乎讀奉之時此事乎問申勢葉內宮計仁社八重垣和阿連止外宮爾母可_レ有樣仁聞太留不_レ可_レ然止柴垣荒垣玉垣水垣奈止豎天內宮計八重垣和御座止口傳寸日本乎磯島共云比何母天神地神知食梟留國乃名也去葉中務卿宗尊親王乃御歌爾母大伴乃美豆乃濱松賀素武奈利早日本仁春彌來奴覽定家卿歌止天

敷島乃道爾我名和龍市今將不知大和言葉伊勢御事乎波神路山止母申侍利續古今太上天皇乃御製止天

小車乃錦手向留神路山又巡利會年母來仁昆

後伏見院御製止天風雅集中爾

神路山内外乃宮乃宮柱身和朽奴止母末乎波多傳與

神祇靈應記

天神七代緣起

- 第一代神 國常立尊陽神漢朝天皇氏也
 - 第二代神 國狹立尊陽神漢朝地皇氏也
 - 第三代神 豐斟淳尊陽神漢朝人皇氏也
 - 第四代神 渥煮之尊陽神立國時五龍氏也
 - 第五代神 大戸道尊陽神同 五龍氏也
 - 第六代神 面足之尊陽神伏羲氏也
 - 第七代神 伊弉諾尊陽神農氏也
- 此神妹伊弉冊尊止和合之天嫁義始未留此神白山權現也右和大已貴垂跡奈利左和稱別山天津子八禰命奈利此三所權現奈利

地神五代緣起事

- 第一代神 天照太神日神豐岡姬 照日尊 大日靈貴 太神
- 爰人皇十一代帝卷纏向珠城宮御宇垂仁天皇拾漆年
- 仁伊勢國御裳濯河乃水上仁五十鈴降利懸留吳竹乃一夜乃中仁顯玉布自垂仁天皇卽位拾漆年甲辰今年應安

元年仁至末天一千五百拾捌年奈利宮川與利渡會乃神止天昔與利廿一年仁一度乃御遷宮大和國秋山與利內宮仁遷利玉布天逆鉾廳天秋山仁今母有神樂岡天磐戶奈登母有此所利外宮和人皇二十一代泊瀨朝倉宮乃御宇雄畧天皇十三年戊申丹後國朝日宮與利遷玉布內宮與利五百餘年後也

第二代神 正哉吾勝尊也

第三代神 天津彥々火瓊々杵尊忍骨尊太子也治世卅

一萬八千五百四十二年也忍骨尊末天和一月三十日乃員數母無於此尊乃時始定止

第四代神 彥火々出見尊也瓊々杵尊天子也治世六拾

三萬七千八百九拾參年也

第五代神 葦不合尊也火々出見尊太子也治世八拾參

萬陸千四拾貳年也

人皇代出現神明事

熊野權現緣起

人皇第一代橿原宮神武天皇卽位肆拾壹年

大奈留熊爾天現形玉布神武天皇和日向國宮崎乃神止成玉陪利其後崇神天皇六年垂跡止又繼體天皇善紀元年壬寅三尺水精盤止化天今乃瀧宮乃邊仁顯寸氏人

私云件三種神寶皇孫火々出見鷗鷯草葺不合尊三代相續人皇始神武天皇相傳天至崇神天皇此御代神物官物相分之時於三種神寶者被副神了於大和國宇多神戶新鑄造神鏡神劍爲帝王御護也內侍所者乃改鑄之御鏡也改造之寶劍者安德天皇御時入海中終不出現寶玉者浮海上之時奉取之還座稱璽宮是也抑太神宮寶劍^{草薙}者景行天皇御宇日本武命爲^平東夷奉勅東征彼命參太神宮祈請之時大和姬命被授神劍今在尾張國熱田社子細見日本書紀一矣

珊瑚集下終

丁丑之歲九月下旬於勢州旅館以^二外宮禰宜家行神主自筆草本^一書寫之^二彼本五卷也今分爲^二天地兩卷^一耳

閏茂之歲臘月下旬於灌頂寺阿彌陀院賜^二中院准后之眞筆御本^一書寫之^二彼爲^二卷物而上下白界在^レ之依^レ便披覽^レ今改如是矣

于^レ時

弘和第三之曆仲呂下旬之候終功畢此書以^二和州宇多郡福西灌頂寺阿彌陀院嚴祐律師本^一書寫之^二不可^レ及^二外見^レ者也

于^レ時

應永第二之曆仲呂初七之天勢州弘正寺寶光院之閑窓書^二寫上下兩卷之秘典^一奉^レ貢^二內外二宮之法樂^一矣
桑門惠觀

于^レ時

應永卅三年^{丙午}三月三日一按手汝彌道祥生年七十九歲二月廿三日於志州答志郡伊雜神戶福嚴坊客殿南面雖爲^二惡筆^一如^レ形書寫了

右筆金剛佛子春瑜^生年廿六歲

夫神皇珍圖形者天地之位象_二四時之行_一治_二天下_一四時之行有_レ寒有_レ暑聖人之法有_レ文有_レ武天地之行有_レ前有_レ後有_レ左有_レ右聖人之法以建_二經緯_一春生_二於左_一秋殺_二於右_一夏長_二於前_一冬藏_二於後_一生長之事文也收藏之事武也故文事在_レ左武事在_レ右

御鎮座本紀曰寶宮棟梁天表御形文

天照太神宮御形象日天尊位座也

止由氣太神宮御形象月天尊位座也

惟天神地祇明元_二八洲_一利物形體_一故皇天之坐而配_二日月_一照_二字內之昏衢_一國家合_二天地_一而寶曆長久

天真之明道鬼神變通人民咸幸甚

仙宮秘文等載_レ右

一十種神寶事

高皇產靈神

舊事本紀曰天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一羸都鏡一

邊津鏡一八握劍一生玉一死玉一足玉一道反玉一蛭

比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神天祖詔曰若有

痛者令_二玆十寶_一謂_二一二三四五六七八九十_一而布

瑠部由良由良止布瑠部如_レ此爲_レ之者死人反生矣是

則所謂布瑠之言本矣

弘法大尺
天字表

麗氣府錄曰
五輪形

邊都鏡

地字表

圓形內輪表
外輪八咫形

八握劍

五帖形
耐不審義

私云八幅輪敷

生玉

水上寶珠

死玉

向下水珠

足玉

火珠

道反玉

下字表母

蛭比禮

水字表白明衣本緣是
清淨義也木綿襪也

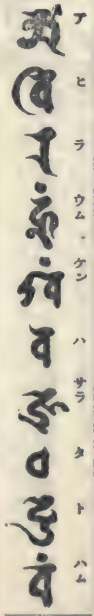
蜂比禮

火字表亦
女懸帶也

品物比禮

寶祚也帝王御即位之時被_レ着_レ之
兩宮御形文在_二彼寶冠_一

而布瑠部由良由良止布瑠者



一三種神寶事

日本書紀曰_二以此皇孫代降故天照太神乃賜_二天津

彥火瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶

物_一因勅_二皇孫_一曰葦原千五百秋之瑞穗國吾子孫可

王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當_二與_一

天壤_二無_レ窮者矣

寶也神語曰破者古語天逆杵天逆太刀俗云_二天乃魔反杵_一亦名天乃登保古此名_二天璽_一也天御量柱者天瓊戈異名也以_二一基_一分_二天地_一而爲_二內外心御柱_一也故_口人者與_二天地_一合_二其德_一而利_二萬物_一者也

大宗祕府曰天瓊玉戈名_二金剛寶劍_一惟是天地開闢之圖形天御中主之神寶獨胎變形座也諸佛菩薩一切群靈心識之根本一切國王父母也

形文深釋曰心御柱者天瓊戈表物也是獨古形三部五部一體不二妙體萬法所生心體也故本覺常住之心蓮臺之上觀_二一大三千界妙理_一也惣八葉蓮華上有_二不審_一輪_一是蓮華理也理即智也智即大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智柱者獨一法身妙一切衆生根源也居_二磐石_一而磐者示_二長遠之不朽_一者也是不動所表也故所現八大龍王十二神王常住守護座也

亦曰心御柱者一氣始一心妙法萬化種子也

寶山記曰惟是天地開闢之圓形天御中主神寶獨古變形神佛神通群靈心識正覺正智金剛座也亦名_二心蓮_一也

亦曰凡八百萬神下_二座南閣浮提_一釋迦尊爲_二父爲_二母爲_レ君爲_レ臣生々世々无_レ不_レ從_レ之世人无_二孝順心_一

犯_二輕垢罪_一墮_二地獄_一故曰神廬舍那佛等說_二大乘心地_一而已

一御形文圖事

寶基御靈形文圖曰太和姬皇女承_二皇天嚴命_一移_二高天原之梵宮_一而造_二神風伊勢內外兩宮社_一顯_二御形於棟梁_一用作_二生化之龜鑑_一興_二心柱於金石_一以治_二國家之福壽_一天神地祇頓首再拜天下幸甚

五十鈴宮御靈形者天瓊玉杵表也是天地發初萬像根本也惟能摧_二破諸災患_一而神心不_レ亂三神一體靈智神財是也故亦名稱_二金剛正杵_一亦名_二天逆戈逆太刀_一也白銅鏡八面者大八洲靈神居也部類三十二神居也山口原宮御靈形者五位圓形座也是則五常圓滿智光表理也一輪中含_二萬象_一五常百行悉皆一圓常住應化元神座也金鏡十四面座部類神五十二座

天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗形表也於是現_二大傳珍圖_一以通_二神明之德_一以照_二萬物之情_一乃成_二之神_一近悟_レ諸不_レ遠也

天照珍圖心神華臺之中天地八尊圓鏡座

豐受珍圖者天地父母二儀之中五大尊光照金鏡座俗常以_二金鏡_一喻_二明道_一也

天皇勅大若子一使罷往大布理奉宣支故率手置帆
負彥狹知二神之裔以齋斧齋鉏等始探山材構
立寶殿明年戊午秋七月七日以大佐々命從丹波
國余佐郡眞井原之奉迎止由氣皇太神一度遇之山
田原乃下都磐根大宮柱廣敷立天高天原爾千木高知天
鎮理定理座止稱辭竟奉支

豐受太神丹波國與佐宮御出時地主明神詠曰奈具
身爾奈具我宮伊豆間今波照出御明給一說
安賀奴美爾阿賀奴小宮乎伊豆流萬爾今者外爾出々
照覽悟也

亦山田原迎接時天照太神拍手忍手 御詠曰增鏡雲
位合御覽與千代千年世重々

ソノカニ ウカリシコトモ ワスラレテ アフウレシサチ ニニアリヌル
一心我頂禮 久住舍那尊 本來我心 衆生而
加護返禮文云
モトヨリノ ヒカリニサケル ハチスハ、 コノノリコソ ニハナサケレ

天宮誓願 久遠正覺 法性如々 同在一所
歸命金剛祕密神 令持令法久住者
世出世間利群生 引導化緣及法界

皇太神重託宣吾祭奉仕之時先須祭止由氣太神
宮也然後我宮祭事可勤仕也故諸祭事以止由氣
宮爲先也

御鎮座本紀曰明年戊午秋七月七日以大佐々命
奉布理留其從神大御食津命、小和志理命、事代命
佐部支命、御倉命、屋和古命、野古命、乙乃古命、河
上命、建御倉命、與魂命、各前後左右爾相從奉仕
大佐々命小和志理命奉戴正體與魂命道主貴奉
戴相殿神一驅仙躡比錦蓋覆日繩曳天御醫日御醫
屏奉行幸爾時若雷神天乎八重雲四方爾薄靡天爲
御垣天從但波國吉佐宮遷幸

一心御柱事

御鎮座本紀曰心御柱一名天御柱亦名曰忌柱
亦天御量柱

謂應天四德地五行徑四寸長五尺御柱坐以五色
繩奉纏之以八葉神奉飭之是則伊弉諾伊弉
冊尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合
天心而與木德歸皇化而助國家故皇帝之曆
數天下之國土常磐堅磐無動三十六禽十二神王八
大龍神常住守護坐依有天下危
天口事書曰八坂瓊戈是天地開闢之始浮高天原神

靈物一照耀如二月奈利惟少緣之物不志在志定主出現

御座今時可進止志比念旦彼處爾禮祭止申勢即彼處爾往

到給天御覽介禮惟昔太神誓願給天豐葦原瑞穗之國仁

伊勢加佐波夜之國波有美宮處止利見定給比從天

上志投降坐志比天之逆太刀逆鉾金鈴等是也甚喜於

懷比言上給比岐

神記曰天之逆太刀天之逆梓大小之金鈴五十口日之

小宮圖形文形等是也

一外宮御遷座事

麗氣曰豐受皇太神于時大日本國天降淡路三上

嶽率三十二大睿屬從庚申年送春秋止古五十

五万五千五百五十五年

遷布倉宮自丙申送三月五十六万六千六百六

十六年

八輪島宮遷戊申年積年五十七万七千七百七十七

年八國嶽遷庚申歲五十八万八千八百八十八年

丹波國與謝郡北治山頂麻那井原遷壬申歲五十九万

九千九百九十九年

私勘已上六箇所御遷坐都盧二百九十万六千百七

年歟

上代本紀曰御間城入彥五十瓊殖天皇卅九歲壬戌天

照太神但波乃吉佐宮今歲止由氣之皇太神結幽契

天降居大部倉津臣命速御食命屋船命宇須乃女神須

摩留賣命宇賀乃大土御祖神若雷神彥國見賀岐建與

奉命天日起神振魂命相從以戾止矣

余時天照皇太神與止由氣皇太神令明齋德居焉

如天上之儀一處雙座焉率四九三十六麗神而朝

大御氣夕大御氣於炊備天奉御饗留丹波道主貴為

御杖代志天品物備貯之百机而奉神嘗焉

天照太神伊勢國爾向幸給

止由氣太神復昇高天原天日之小宮座于時以吾

天津水鏡乃寶鏡留居吉佐宮給于時高貴大神勅

宣以皇孫命靈宜崇大祖止由氣太神乃前社云々

仍為相殿神座注云靈形鏡坐也皇孫命金鏡也

大田命傳曰泊瀨朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳冬十月

一日倭姬命夢教覺給久皇太神吾如天イナシ之小宮坐爾

天下仁志一所耳坐爪御饗毛安不聞一本此下爪丹波國

與佐之小見比治之魚井之原坐道主子八乎止女乃齋

奉御饗都神止由氣皇太神乎我坐國欲度誨覺給支余

時大若子命差使旦朝廷爾御夢之狀乎令言給支即

宮於社中圓輪鏡坐二年奉齋

倭姬世記曰是時豐鋤入姬命吾日足止自支爾時姪倭比賣命事依奉利御杖代止定豆從此倭姬命奉戴天照太神而行幸同注云相殿神天兒屋命太玉命御戶開關神天手力男神袴幡姬命御門神豐石窓櫛石窓命並五部伴神相副奉仕矣

見上

崇神天皇三十九年遷幸但波乃吉佐宮

同四十三年九月九日遷倭國伊豆加志本宮

五十一年四月八日遷木乃國奈久佐濱宮

五十四年遷吉備國名方濱宮

見上

五十八年遷倭彌和乃御室嶺上宮

六十年二月十五日遷大和宇多秋志野宮

六十四年十一月廿八日遷伊賀國隱市守宮

六十六年十二月一日遷同國穴穗宮

垂仁天皇即位元^{○世記}二年夏四月四日遷伊賀敢都美

惠宮四年夏六月晦遷淡海甲可日雲宮

八年秋七月七日遷同國坂田宮

十年秋八月一日遷美濃國伊久良河宮

次遷尾張國中島宮二ヶ月奉齋云々

十四年秋九月一日遷伊勢國桑名野代宮

次遷鈴鹿奈具波志忍山宮六ヶ月奉齋云々

十八年夏四月十六日遷阿佐加藤方片樋宮

二十二年冬十二月廿八日遷飯野高宮

二十五年三月遷伊蘇宮

日本書紀曰廿五年三月丁亥朔丙申離天照太神於豐耜姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎮坐太

神之處而詣菟田篠幡更還之入近江國東廻

美濃到伊勢國時天照太神誨倭姬命曰神風

伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可^{○今}按中

畝與齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照太神

始自天降之處也

一云倭姬命以天照太神鎮坐於磯城嚴櫃之本

而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷

于伊勢國度遇宮

二十六年丁巳冬十月甲子遷度遇五十鈴川上宮倭姬

世紀曰于時猿田彥神裔宇治土公祖大田命參相支

汝國名何問給爾佐古久志呂宇遲之國止^{○今按本}

姬命問給久有吉^{○本書以下處}哉答白久佐古久志呂

宇遲之五十鈴之河上者是大日本國之中仁殊勝靈地

侍^{○泰}利其中翁世二百^{○本書}八万歲之間^{○毛}未現知^{○仁}留有

鋤入姬奉_レ齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌舞
然後隨_二太神之教_一國々處々爾大宮處乎求給倍利

麗氣曰三十九年_{戊壬}三月三日遷_二幸但波乃吉佐宮_一雲

簞現_二榎下_一坐秋八月十八日作_二瑞籬_一四年奉_レ齋矣

大田命傳記曰今歲止由氣之皇神天降坐_二天合_一明齊

德給如_二天小宮之儀_一_志天_一處雙座須于_レ時和久產巢日

神子豐宇氣姬命_{稻靈}奉_レ御神酒_{至今世謂_二丹後國竹}

能賣神_{是也亦元是日天}紫微宮天降坐_二天女_{是也}

亦丹波道主貴_{素戔嗚尊孫}奉_レ備_二朝大御饗夕大御氣_一

奉仕矣其功已辭竟_{天止由氣太神復上_二高天原_一支此}

處_{仁志}以_二白銅寶鏡_一豆道主貴八小男童天日別命崇

祭奉焉

丹後國風土記曰比治山頂有_レ井其名云_二麻奈井_一今

既成_レ沼此井天女八人降來浴_レ水于_レ時有_二老夫婦_一

其名曰_二和奈佐老夫和佐老婦_一此老等至此井_二而竊

取_二藏天女一人衣裳_一即有_二衣裳_一者皆天飛上但無_二

衣裳_二女娘一人即身隱_一水而獨懷_レ愧居爰老夫謂_二天

女曰_二吾無_レ兒請天女娘汝爲_レ兒天女答曰_二妾獨留_二人

間_二何敢不_レ從請許_一衣裳_二老夫曰天女娘何存_二欺心_一

天女云凡夫人之志以_レ信爲_レ本何多_二疑心_一不_レ許_二衣

裳_二老夫答曰多_レ疑無_レ信率土之常故以_二此心_一爲不

許耳遂許即相副而往_レ宅相住十余歲爰天女善爲_二

釀酒_一飲_二一盃_一吉萬病除之其一坏之直財積_レ車送于

時其家豐土形富故云_二土形里_一此自_二中間_一至于今

時_二便云_一比治里_二後老夫婦等謂_二天女_一曰汝非_二吾

兒_一暫借住耳宜_二早出去_一於是天女仰_二天哭慟俯_レ地

哀吟即謂_二老夫等_一曰妾非_二以_一私意_二來_一老夫等所

願何發_二厭惡之心_一忽存_二出去之病_一老夫增發_二願

去天女流_レ淚微退_二門外_一謂_二鄉人_一曰久沉_二人間_一不

得_レ還_二天復無_レ親故不_レ知_二由所_一吾々何々哉拭_レ淚

嗟歎仰_レ天歌曰

阿麻能波良布理佐兼美禮婆加須美太智伊幣治麻土

比天由久幣志良受母

遂退去而至_二荒鹽村_一即謂_二村人等_一云思_二老夫老婦

之意_一我心無_レ異荒鹽者仍云_二比治里荒鹽村_一亦至_二

丹波里哭木村_一據_二槻木_一而哭故云_二哭木村_一復至_二竹

野郡船木里奈具村_一即謂_二村人等_一云此處我心奈具

志久_{古事不善者}乃留_二居此村_一斯所謂竹野郡奈具社坐

豐字加能賣命也

麗氣曰崇神天皇五十八年_{辛巳}遷_二倭彌和乃御室嶺上

天湯津彥命 々々牙

天神魂命 々々拳

天三降命 々々喜

天日神命 々々鬘

天乳速命 々々哥

天八坂彥命 々々舞

天活玉命 火天

天小彥根命 水天

天湯彥命 風天

天表春命 地天

天下春命 金剛燒香井

天月神命 々々花

天伊佐布魂命 々々燈

天伊岐志邇保命 々々塗香

豐受皇太神御降臨三十二神

天潛尾命 水潛尾命

地潛尾命 木潛尾命

火潛尾命 土潛尾命

石潛尾命 金潛尾命

天日尾命 天月尾命

天子尾命 地子尾命

天破塔命 天破法命

天破仁命 天破神命

國加利命 國加富命

國加國命

國加賀命

愛鬘尾命

愛護尾命

解法尾命

學甘尾命

上法神尊

下法神尊

中言神尊

天鏡神尊

地鏡神尊

百々神尊

千々神尊

萬々神尊

已上三十二神

一 內宮御遷座事

倭姬命世記曰凡神倭伊波禮彥天皇已下稚日本根子

彥大日々天皇以往九帝歷年六百廿余歲當此時

帝與神其際不遠同殿共床以爲常故神物官物

亦未分別焉

麗氣曰御間城入彥五十瓊殖天皇_{大倭國磯城瑞籬宮}即位六年

秋九月倭國笠縫邑立磯城神籬奉遷天照太神及

草薙劍令皇女豐鍬入姬奉齋以往雖同殿共床

漸畏神靈共住不安_志別與神籬天復石凝姥神裔

天目一箇裔二氏更鑄造鏡劍以爲護身_{錢所}

_{獻神靈鏡劍也}

倭姬命世記曰奉遷天照太神及草薙劍令皇女豐

大苦邊尊同記 勾那含牟尼如來

龍尊王佛

面足尊同記 毘波尸佛

惶根尊同記 毘葉羅如來 毘波尸佛

伊弉諾尊 天鼓音雷佛

伊弉冊尊 開敷花王佛

一 相殿神事

外宮

左大

皇孫尊
觀自在菩薩

小

天上玉杵命

彌勒菩薩

私記 左天上玉杵命輒不及外聞之間世無知

之

右

天兒屋命
文殊師利菩薩

太玉命

普賢菩薩

社記曰 伴相殿神之內於天兒屋命太玉命者元者

內宮相殿神也而外宮御鎮座以後依內宮御託宣

奉傍外宮者也外宮高宮元者內宮荒祭宮相並

天御座也而外宮御鎮座之後依內宮御託宣同奉

傍外宮者也此等之次第御鎮座本紀分明也

內宮 當時相殿神

左

天手力男神

開天磐戶神也
如意輪觀自在菩薩

右

榜幡豐秋津姬命

皇御孫母
彌勒菩薩

一三十二神降臨事

舊事本紀曰高皇產靈尊勅曰若有葦原中國之敵拒神人而待戰者能為方便誘欺防拒而令治平三十二人並為防衛天降供奉矣

麗氣府錄

注付三十二菩薩云

天香鼻山命

金剛鉤并
上首

天鈿賣語命

金剛薩埵

天太玉命

々々王

天兒屋命

々々愛

天櫛玉命

々々喜

天道根命

々々索
上首

天神玉命

々々寶

天槌野命

々々光

天糠戶命

々々憧

天明玉命

々々咲

天村雲命

々々鑠
上首

天背男命

々々法

天御蔭命

々々利

天造日女命

々々因

天世手命

々々護

天斗麻彌命

々々鈴
上首

天皆斗女命

々々業

天玉櫛彥命

々々護

鬼神所惡也

大宗祕府曰居無爲無事大達之場超生出死名之清淨

亦曰副神光發其蘊直守清虛安閑之處向長生路上祭神敬祖卽與神同祖同牀同作同證無別名之爲神一妙心而已

亦曰一心不亂萬法無咎

亦曰欲示無相觀解令忌有相權教

亦曰神一道無多慮無多智多智多事不如息意多慮多失不如守一慮多志散智多心亂心亂生惱志散妨道嗚呼不死妙藥一道虛寂萬物齊平也

亦曰神人教令潔清惑而畢身不汚語其定也恬思慮正神明而終日不亂語其慧也崇德辨惑而必然以此備之慧群生以正法神而通之大地不能揜密而行之鬼神不能測其演法也惟是以道德謝天子諸侯歸神明祈國家太平是本來大人耳亦曰天宮與靈山分一線之道共爲佛神之賓至形文深釋曰皇則大空本元清淨之妙理是無相法身義也故一氣玄々之元神名也稱皇神故萬物化大通

大通變成神名大道一々歸自位故真如界裏湛然常位也已師在一心矣心乃神之至心傷則神散神散則身喪故以無心爲主此謂歸真如界

神皇實錄曰神語大者人靈也云云名之號魂顯靈也以八洲八齋八心因以爲大象者也古語陽氣爲心爲神故名魂也陰氣爲意爲性故名精魄也因茲祭八齋神靈則世苦樂皆是自在天神之作用

廣大慈悲之八心即續生之相眞實而尤畏鎮坐大元神地如湯津石村長生不死之神慮謹請再拜

天口事書曰神人心外好別請而從不淨實執則不得踐神地上不許飲神地水而五千大鬼常罵大賊

一天神七代名號事

府錄曰

國常立尊漢言大畏慮遮那如來國狹槌尊畏慮舍那佛

豐樹淳尊慮舍那佛

已上三身即一法神也

泥土煮尊勾留尊佛

沙土煮尊寶藏摩尼佛

大戸之道尊拘那含佛 亦龍尊王佛

子以虛空爲正體焉故曰天照太神亦止由氣
皇神則月天子也故曰金剛神亦名天御中主神
以水德利萬品故名曰御饌都神惟諸佛福田生
化壽命也汝等受天地之靈氣而種神明之光胤誰
撓其神心誰干其慮耶

亦曰天照太神則主火氣而和光同塵止由氣太神
則主水氣而萬物長養也故兩宮者天神地祇太宗君
臣上下元祖也惟天下大廟也國家社稷也故尊祖敬
宗禮教爲先故天子親耕以供神明王后親蠶以
供祭服而化陰化陽有四時祭德合神明乃
與天地通也德與天地通則君道明而萬民豐

亦曰人乃天下之神物也莫傷心神神垂以祈禱
爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道
故神人守混沌之始屏佛法之息崇神祇散
齋致齋內外潔齋之日弔喪問疾食害不判刑殺
不決罰罪人不作音樂不預穢惡事不散
失其正致其精明之德左物不移右兵器不用鞠
音不聞口不言穢惡目不見不淨鎮專謹慎之
誠宜致如左之禮矣

御鎮座本紀曰齊情於天地乘想於風雲者爲從

道之本爲守神之要將除萬言之雜說而舉一
心之定準配天命而嘗神氣理實灼然故祭神清
淨爲先我鎮以得一爲念也神主部物忌等諸祭齋
日不觸諸穢惡事不行佛法言不食害亦迄至
神嘗會日不食新飯常謚心慎攝掌敬拜齋仕矣
亦曰天地未割陰陽不分以前是名混沌萬物靈是
封名曰虛空神亦曰大元神亦名國常立神亦名俱
生神希夷視聽之外氣氣象之中虛而有靈一而無
體故發廣大慈悲於自在神力現種種形隨種種
々心行爲方便利益所表名曰大日靈貴亦曰
天照太神爲萬物本體度萬品世間人兒如宿
母胎也亦止由氣皇太神月天尊天地之間氣形質未
相離是名渾淪所顯尊形是名金剛神生化本性
萬物惣體也金剛水不朽火不燒本性精明故亦名
曰神明亦名大神也任大慈本誓每人隨思雨
寶如龍王寶珠利萬品如水德故亦名御氣都
神金玉則衆物中功用甚勝不朽不燒不壞不黑
故爲名無内外表裏故爲本性謂人乃受金神之
性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先
謂從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物

怜小汀於_レ是棄_レ龍遊行忽至_二海神之宮其宮也雉堞
整頓臺宇玲瓏門前有_二井井上有_二湯津杜樹枝葉
扶疏時彥火々出見尊就_二其樹下_一徒倚彷徨良久有_二
一美人排_レ闥而出遂以_二玉鏡來當汲_レ水因舉_レ目視
之乃驚而還入白_二其父母曰有_二一希客者在_二門前
樹下_一海神於_レ是鋪_二設八重席薦_一以延內_レ之座定
○今按本書是間脫文獻彥火々出見因娶_二海神女豐玉姬仍留住已
經_二三二年_一彼處雖_二復安樂猶有_二憶_レ鄉之情故時復太
息豐玉姬聞之謂_二其父曰天孫悽然屢歎蓋懷_レ土之
憂乎海神乃延_二彥火火出見尊從容語曰天孫若欲還
_レ鄉者當_レ奉_レ送便授_二所得釣鈎因誨之曰以此鈎
與_二汝兄_一時陰呼_二此鈎曰_二貧鈎然後與_レ之復授_二潮
滿瓊及潮涸瓊而誨之曰漬_二潮滿瓊者則潮忽滿以
_レ此沒_二潮涸兄若兄悔而祈者還漬_二潮涸瓊則潮自
涸以此救_レ之如此逼惱則汝兄自伏及_二將_二歸去豐
玉姬謂_二天孫曰妾已娠矣當產不久妾必以_二風濤急
峻之日_一出_二到海濱請爲_レ我作_二產室相待矣彥火々
出見已還_二宮○今按是問略歟豐玉姬果如_二前期將_二其女弟玉
依姬直冒_二風波來_一到海邊逮_二臨產時請_二曰妾產
時幸勿_二以看_レ之天孫猶不_レ能忍竊往窺之豐玉姬方

產化_二爲龍而甚慙之曰如有_レ不_レ辱我者則使_二海陸
相通永無_二隔絕今既辱之將何以結_二親昵之情乎
乃以_二草蓑兒棄_二之海邊閉_二海途而徑去矣故因以
名_レ兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊

治_二天下_一八十三萬六千四十三年

已上地神五代

地神三代之間治_二天下_一都盧_二一百七十九萬二千四

百七十六歲也

一神宣等事

倭姬命世紀曰雄略天皇卽位廿三年己未二月倭姬命
召_二集於宮人及物部八十氏等宣_二久神主部物忌等諸
聞吾久代太神託宣摩志萬志本心神則天地之本基身體則
五行之化生利奈肆元々々入_二元初本々任_二本心與神
垂以_二祈禱爲_レ先冥加以_二正直爲_レ本利夫尊_レ天事
_レ地崇_レ神敬_レ祖則不_レ絕宗廟經_二綸天業又屏_二佛
法息_レ奉_レ再_二拜神祇禮日月廻_二四洲雖_二照_二六合須
照_二正直頂止詔命明矣亦曰夫悉地則生_二心爪意則顯
信心留蒙神明利益事波依信力厚薄心一天下四
方國乃人夫等仁至萬奉齋敬矣
太田命傳紀曰天照坐皇太神則大日靈貴故號_二日天

古語拾遺曰于時天照太神高皇產靈尊仍相語曰夫
葦原瑞穗國者吾子孫可王之地也皇孫就而治焉寶
祚之隆當與天壤無窮矣即以八咫鏡及草薙劍
二種神寶授賜皇孫永爲天璽所謂神璽鏡劍是也予玉自從
卽勅曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共
殿以爲齋鏡仍以天兒屋命太玉命天鈿女命使
配侍焉因又勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境
當爲吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命二神宜持
天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉惟爾
二神其侍殿內能爲防護○今按自是以下本書無率三十二神
筑紫日向高千穗穗觸峯天降座

天孫御降臨之時天兒屋命雲驛咒文云

諸神等各念 此時清淨偈 諸法如形像 清

淨無瑕穢 取說不可得 皆從因業生

治天下卅一萬八千五百卅三年

彥火々出見尊

天津彥々火瓊々杵尊第二子也母木花開耶姬大山祇

神女也曰鹿葦津姬亦曰神吾田津姬

日本書紀曰皇孫問此美人曰汝誰之女耶對曰妾是

天神娶大祇神所生兒也皇孫因而幸之夜而

有娠皇孫未之信曰雖復天神何能一夜之間令
人有娠乎汝所懷者必非我子歟故鹿葦津姬忿恨
乃作無戶室入居其內而誓之曰妾所娠若非天
孫之胤必當殲滅如實天孫之胤火不害即放
火燒室始起烟末生出之兒名火闌降命次避熱
而居生出之兒號彥火々出見尊次生出之兒號火
明命凡三子矣

治天下六十三萬七千八百九十二年

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊

彥火々出見尊子也母豐玉姬海神二女也

日本書紀曰兄火闌降命自有海幸弟彥火々出見尊

自有山幸始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之

各不得其利兄悔之乃還弟弓箭而乞己釣鈎弟

時既共兄鈎無由訪覓故別作新鈎與兄兄

不肯受而責其故鈎弟患之卽以其橫刀鍛作

新鈎盛一箕而與之兄忿曰非我故鈎雖多不

取益復急責故彥火々出見尊憂苦甚深行吟河畔時

逢鹽土老翁老翁問曰何故在此愁乎對以事之本

末老翁曰勿復憂吾當爲汝計之乃作無目籠

內彥火々出見尊於籠中沉之于海卽自然有可

察此處一乎素戔嗚尊對曰吾元無黑心但父母已有嚴勅一將永就一乎根國一如不與一姊相見吾何能敢去是以跋涉雲霧一遠自來參不意河姊翻起嚴顏于時天照太神復問曰若然者將何以明余之赤心也對曰請與一姊共誓夫誓約之中必當一生子如吾所生是女者則可以一為一有濁心一若是男者則可以一為一有清心一於是天照太神乃索一取素戔嗚尊十握劍一打折為三段一濯於天真名井一訖然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰田心姬一次湍津姬次市杵島姬凡三女矣既而素戔嗚尊乞一取天照太神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇御統一於天真名井一訖然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰正哉吾勝々速日天忍穗耳尊一次天穗日命是出雲臣土師連等祖也次天津彥根命是凡河內直山代直等祖也次活津彥根命次熊野櫛樟日命凡五男矣是時天照太神勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其十握劍者是素戔嗚尊物也故彼三女神悉是爾兒便授之素戔嗚尊一此則筑紫胸像君等所祭神是也

古語拾遺曰於是素戔嗚神欲奉辭日神一昇天之

時備明玉命奉迎獻以一瑞八坂瓊曲玉一素戔嗚神受之轉奉一曰神一仍其約誓即感其玉一一生天祖吾勝尊一是以天照太神育吾勝尊一特甚鍾愛常懷掖下稱曰掖子今俗號稚子謂之和可手是其轉語也

天津彥々火瓊々杵尊大八洲座也按右落字歟

天照太神之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶皇天御中主尊長男高皇產靈尊之女栲幡豐秋津姬命一生天津彥々火瓊々杵尊一故皇祖高皇產靈尊特鍾憐愛以崇養焉因以受皇天尊號稱皇御孫尊也遂欲立皇孫尊一以為大葦原中國之主上矣

日本書紀一書曰武甕槌神及經津主神乃昇天復命而告之曰葦原中國皆已平竟時天照太神勅曰若然者方當降吾兒一矣且將降間皇孫已生號曰天津彥々火瓊々杵尊一時有奏曰欲以此皇孫一代降故天照太神乃賜天津彥々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物一又以中臣上祖大兒屋命忌部上祖太玉命媛女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

古語拾遺曰於是從思兼神議令石凝姥神鑄日

像之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國日次度所鑄

其狀美麗神是伊勢太儲備既畢具如所謀余乃太玉命

以廣厚稱詞啓曰吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命

乞開戶而御覽焉由如此歌樂聊開戶而窺之當

此之時上天初晴衆俱相見面皆明白伸手歌舞相與

稱曰阿波禮言天阿那於茂志呂古語事之其切皆稱阿那

多能志言伸手而舞今指樂事阿那佐夜聲也俱請曰勿

復還幸仍歸罪過於素戔鳴神科之日本紀之文也

是時素戔鳴尊自天而降到於出雲國簸之川上時

聞川上有啼哭之聲故尋聲覓往者有一老公與

老婆中間置一少女撫而哭之素戔鳴尊問曰汝等

誰也何爲哭之如此耶對曰吾是國神號脚摩乳我妻

號手摩乳此重女是吾兒也號奇稻田姬所以哭

者往時吾兒有八箇少女每年爲八岐大蛇所吞

今此少童且臨被吞無由脫免故以哀傷素戔鳴尊

勅曰若然者汝當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣故素

戔鳴尊立化爲稻田姬爲湯津楓櫛而插於御髻

乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒並作假殿八間各

置一口槽而盛酒以待之也至期果有大蛇頭尾

各有八岐眼如赤酸醬松栢生於背上而蔓延

於八丘八谷之間及至得酒頭各一槽飲醉而睡時

素戔鳴尊乃拔所帶十握劍一寸斬其蛇至尾劍及

少缺故割裂其尾視之中有一劍此所謂草薙劍也

本名天叢雲大蛇所居之上常有雲氣故以名素戔鳴尊曰是神劍也吾何敢私以

安乎乃上獻於天神也

古語拾遺曰纏向日代朝令日本武命征討東夷仍

枉道詣伊勢太神宮辭見倭姬命以草薙劍授

日本武命而教曰慎莫怠也日本武命既平東夷

還至尾張國納宮簀媛淹留踰月解劍置宅徒

行登膽吹山中毒而薨其草薙劍今在尾張國熱田

社

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

日本書紀曰素戔鳴尊請曰吾今奉教將就根國故

欲覽向高天原與姊相見而後永退矣勅許之乃

昇詣之於天也素戔鳴尊昇天之時溟渤以之鼓盪

山丘爲之鳴响此則神性雄健使之然也天照太神素

知其神暴惡至聞來詣之狀乃勃然而驚曰吾弟

之來豈以善意乎謂當有辱國之志歟夫父母既

任諸子各有其境如何棄置當就之國而敢窺

瑚璉集下

第三

地神五代事

第四

神宣事

天神名號事

和殿神事

三十二神事

第五

內宮御遷座事

外宮御遷座事

心御柱

事

御形文圖事

十種神寶事

三

種神寶事

一地神五代事

番地 五行傳神位座
道德極而生化德表也

天照太神

御出化次第見伊弉諾伊弉冊尊之段也

日本書紀曰

生五男三女後也

是後素戔嗚尊爲行之甚無狀何

則天照太神以天狹田長田爲御田時素戔嗚尊春

則重播種子且毀其畔秋則放天斑駒使伏田

中復見天照太神當新嘗時則陰放尿於新宮

又見天照太神方織神衣居齋服殿則剝天斑駒穿殿堯而投納是時天照太神驚動以梭傷身由此發慍乃入于天石窟閉磐戶而幽居焉故六合之內常闇而不知晝夜之相代于時八十萬神會於天安河邊計其可禱之方攷思兼神深謀遠慮遂聚常世長鳴鳥使互長鳴亦以手力雄神立磐戶側而中臣連遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命掘天香山之五百箇真坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡一云真經津鏡下枝懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉又媛女君遠祖天鈿女命則手持茅繩之稍立於天窟戶之前巧作俳優亦以天香山之真板樹爲臺以羅爲手櫛而火處燒覆槽置覆以下三字據本書補顯神明之馮談是時天照太神聞之而曰吾比閉居石窟謂當豐葦原中國必爲長夜云何天鈿女命噓樂如是者乎乃以御手細開磐戶窺之時手力雄神則奉承天照太神之手引而奉出於是中臣神忌部神則界以端出之繩乃請曰勿復還幸然後諸神飯罪過於素戔嗚尊而科之以千座置戶遂促徵矣至使拔髮以贖其罪亦曰拔其手足之爪贖之已而竟遂降焉

不參神則諸佛魂佛則諸神性也人則神主神則人魂如
實知_二自心_一是名_二真如_一是名_二萬法生_一是名_二大悲方
便_一是名_二眞實覺王_一是名_二眞如海_一是名_二般若波羅密
王宮_一是名_二心柱_一是名_二三界建立主_一

天地靈覺書曰故天照太神則不起_レ佛見法見_一萬慮
降伏與_二無心_一相應無着想故以_二無相鏡_一顯_二妙體_一是
表_二大空之德萬法陰歷顯_一也

寶基本紀曰蓋百千萬號_二天津御量之功名_一也故神聖
曰內外不二常一體天神地神皆一露

大宗教府曰惟是天地開闢之圖形天御中主神寶獨鉗
變座也諸佛菩薩一切群靈心識之根本一切國王之父
母也瓊玉亦名_二辟鬼珠_一亦名_二如意珠_一亦名_二護國珠_一
是置_二七寶案上_一作_二大利益_一

私勘仁王經受持品曰是般若波羅密是諸佛菩薩一
切衆生心識之神本也一切國王之父母也亦名_二神
府_一亦名_二辟鬼珠_一亦名_二如意珠_一亦名_二護國珠_一亦
名_二天地鏡_一亦名_二龍寶神王_一文可_レ思_レ之矣

瑚璉集上卷畢

于時

應永二乙卯月三日於弘正寺書寫之畢

惠 觀云々

于時

同三十三年_{丙午}二月十七日於志州答志郡伊羅神

戶上村花表亭以_二宇治鄉興光寺當住之御本_一爲_二

末代興隆_一所_レ令_二書寫_一也本來云_二惡筆_一今又云_二

老眼_一筆跡狼籍後見轉千萬 執筆沙彌

道祥生年七十九歲

瑚璉云事

論語三卷公冶長第五云

子貢問曰賜何如子曰汝器也_{孔安國曰言汝} 曰何器也曰瑚

璉也矣_{包氏曰瑚璉者黍稷之器也夏曰瑚}



瑚璉 上音胡下力展反禮記曰夏曰璉殷曰瑚云々與今相違說者皆言

今誤也瑚璉之形不可_レ測至_レ周_音璉_音則璉外方內圓也以

盛_二稻粱_一口徑六寸足高二寸也蓋內方外圓也以盛_二黍稷_一其量與

簠同皆蓋有_二龜甲_一 一教經喪親章第廿二云

陳_二其簠簋_一而哀戚久_{簠簋祭器盛_二黍稷_一者也祭器陳外不_レ御}

闢之後萬物已備而莫昭於混沌之前因茲萬物之化若存若已而下々來々志自不尊于時國常立尊所化神以天津御量事地輪之精金白銅撰集地大水大火大風大神變通和合給比三才相應之三面眞經津寶鏡乎鑄造表給利倍故此鑄顯神名三才鏡尊神明之道明現天文地理以存矣

同傳曰崇神天皇御宇止由氣皇太神天降坐豆天照皇太神與一處雙坐于時從天上御隨身之寶鏡是也神代天御中主神所授白銅鏡也是國常立尊所化神天鏡尊月殿居所鑄造鏡也三才三面之內一面是也今二面者天鏡尊子天萬尊持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀告詞白賜日神月神所化乃眞經津鏡是也天地開闢之明鏡也三才所顯之寶鏡也當下受之以清淨求之以神心視之以無相無住上因以爲神明之正體也今崇祭一面荒祭宮御靈一面多賀宮御靈坐也已上三面辭竟奉支

豐受宮御鎮座本紀曰止由氣太神復昇高天原天日之小宮座于時以吾天津水影乃寶鏡留居吉佐宮

又曰國常立尊所化神況形於天津水影以天津御

量事眞經津寶鏡三面鑄表

仙宮秘文曰神鏡謂諸佛併移清鏡故且三世遍

十方以不改變凡鏡是三身具足見其形者應身

之體也窺其影者化身之相也觀其空者法身理也

與虛空等於一切世間中而現不出不入不失

不壞常住一心妙體故又一切得法一切不能染智體

也不動具足無漏動心衆生故以清鏡奉崇神體

而遍衆生之心以令歸大道故圓鏡聲意光明遍

照故離無明是名大日生死長夜此時永曉自相不

可得妙解無過斯矣眞如妙定空無有邊內不遺照

外不步緣如月映水如日麗天眼見耳聞如密會

圓焉正法性遠離一切言語道也故以無爲反清淨是道

德也故覺王之心珠靈神之知杵天神寶鏡龍王智劍稻

倉魂五種子日頭月頭照處是神一無貳思也頓首再

拜々々幸甚々々

豐受太神宮繼文曰本有金剛界普賢如來月輪無相

無爲本形三密鏡是爲神體是名法身如來摧一切

衆生八萬四千塵勞門明無盡無餘煩惱惡業是名大

梵天王宮是名金剛法界宮豐受皇太神繼文開海

雲造玄脉知兩宮神祇本緣如予信兩宮人者堺內堺外

兩宮降臨次第記曰色界頂色究竟天二天王大梵天王曲形大空無相妙體是曰常住慈悲神王亦名二本有常住神亦名無上極尊已上三神名本覺眞如神一

伊勢太神宮秘文曰天狹霧國狹霧變成神名名天御中主至尊國常立尊高天原之日小宮居此天人者無有欲性但有二色變故名二色界天也

天王神變深釋曰無上極尊者國常立尊又言心須彌頂一

寶山記曰初初在三神聖一名常住慈悲神王法語曰尸

藥大梵天王神語名二天御中主神一

又曰伊弉諾伊弉冊尊者第六天宮主大自在天王坐或又謂伊舍那天伊舍那天后一

天天下靈神府中五魂座五靈五常名五大神也作萬生寶也

水大 天三下靈神

火大 天合靈神

風大 天八百日靈神

空大 天八十萬靈魂神

件五種神則受天地之精氣而氣形質具而未

相離名稱五大魂是中府藏坐神也故謂神者生之本形者生之具也古語謂獨化神也又云前五柱神者是生化五大尊座也

高皇產靈神皇祖神座

神皇產靈神大神主祖神也

津速產靈神天兒屋命祖神也

私云寶座事見上八柱神者所謂八心八手是也云々

都八柱神者天御中主神寶座之內獨化神也明

百億須彌百億日月百億四天下而爲天地人

民化生元祖者

天鏡尊獨化神天津水鏡神三座是神鏡始元三光面目明白此時也

天萬尊獨化神天鏡尊次生也伊弉諾尊靈明座

沫蕩尊獨化神天萬尊次生也伊弉冊尊靈明座

件三柱神者天御中主神出現之時三魂荒魂坐續

命神坐亦名稱三諦明神也

雄略天皇卽位二十二年戊午外宮御鎮座也于時大

田命傳曰倭姬命議宮坐冬十一月新嘗祭之夜深天

難人等退出之後神主部物忌等宣久吾今夜承皇

太神并止田氣皇太神勅所託宣也汝正明聞給

倍凡神代神靈物之義援田彥神謹啓白久夫天地開

名無上極尊亦曰常住毗尊謂惟三世常住妙心法界體相大智也故天神地祇本妙大千世界大導師是尊也所形名曰天御中主尊亦尸棄大梵天王故則爲大千世界主矣

亦曰天御中主尊元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天水雲神寶鏡名也天水雲神任水德名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇太神也凡以一心分大千形體顯言爲陰爲陽蓋從虛無到化變天月地水感應道交故有名字相

麗氣府錄曰國常立尊亦名常住毗尊也惟是三世常住妙法身天神地祇元神也以一身分七代形體顯言爲陰爲陽化生神月神說法利生不可思議々々々

亦曰大元祖神離言說教如々自受法樂

亦曰自性法身名無邊法界元神此號虛無神常住妙義本無象爲天讓日天狹霧地禪日地狹霧運烈有形有念有言名元神不生不滅不垢不淨不增不減是故空中大空无相善哉亦曰神者天然不動之理卽法性身也通者是元壅

不思議慧卽報身也力者乾用自在卽應身也夫神一之妙孕氣含精至虛至一應群變而常寂生萬物而無心

豐受太神宮繼文曰天照豐受太神者非々想天能斷智體下々來々於欲界他化自在天王宮中

爲大毗盧遮那佛爲除魔瞋首羅難轉法輪化爲尸棄大梵天王爲娑婆世界主於光明飯世界是名大毗盧遮那如來於極樂世界是名天王如來於師子國是名大牟尼尊

於大日本國是名大日靈貴豐受皇太神是也不來不去神本覺不生○不來不去不生神本覺歟神也一切衆生慈父常住不變妙理也豎越方便門橫成正覺智

文天神變深釋曰色究竟天三界法王主也主者法身也法身者遍照光明也下々在於欲界他化自在天王宮中時名號天王如來亦名大毗盧舍那如來名尸棄大梵天王事一切天類上首

名父下下名母亦御氣都神與尸棄光天女天王如來上化下化名也但在時大梵天王功德無上下在時尸棄光天女功德無等々已上三重神號深義如是文

興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱使濯之於中瀨也因以生神號曰八十枉津日神次大枉津日神次將矯

其枉而生神號曰神直日神次大直日神以下略之

又曰然後洗左眼因以生神號曰天照太神復洗

右眼因以生神號曰月讀尊復洗鼻因以生神號

曰素戔鳴尊

倭姬命世紀曰荒祭宮一座皇太神荒魂

伊弉那伎神所生神名八十枉津日神御形鏡坐

神祇譜天圖曰多賀宮

伴神天下四方國人夫等諸事漏落事悉神直日命大直

日命聞直見直給安久平久所知食也

雄略天皇即位廿二年

大田命傳曰荒祭宮一座皇太神荒魂神也

伊弉諾尊到筑紫日向小戸橘之檉原而祓除之時

洗左眼因以生日天子大日靈貴也天下化生名

曰天照太神荒魂荒祭神也

多賀宮一座止由氣皇太神荒魂也

伊弉諾尊到筑紫日向小戸橘之檉原祓除之時洗

左眼因以生月天子天御中主靈貴也天下化而名止由氣太神之荒魂多賀神是也

○天神首名解天地俱生神一代謂天文地理日月星辰狀此時明現神聖出世天口成事

天御中主神

實錄曰天地開闢之始含精氣而應化之元神

視天下而式時候授諸天子照臨天地之

間而以一水之德利萬品之命故亦名曰御

氣津神也神語曰御義利也古語天津御氣國津

御氣亦天狹霧國狹霧是水氣易形天氣下降地

氣上騰天地和同草木萌動惟水道德矣

水字事

元命苞曰水之爲言準也陰化淖流施潛行也故

立字兩人交一以中出者爲水一者數之始

兩人譬男女始陰陽交以起一也水者五行始

焉元氣湊液也

○寶山記曰天御中主尊無宗無上而能化故曰天帝之神身即一無相寶鏡崇神體祭伊勢止由氣宮也

實錄曰於高天原化生神號曰天讓日陽神神國禪

日陰神神皇神亦名天御中主尊也天地俱生神是

諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王

惠齊四海歷代帝王崇尊祖萬方人夫敬神

祇故世質時素無爲而治不肅而化神皇系圖曰神聖生其中焉號國常立尊矣亦

建立日月是也于_レ時以_二羸都鏡邊都鏡_一爲_二國策尊

靈_二而日神月神自匿_二于天宮_一而照_二六合_一給矣亦曰

御餘寶十種神財者羸都鏡一面_{天字五輪形}豐受皇太神

地字圓形外緣八_{豐受皇太神}此外神財載_二神寶之段_一

灌頂天女傳曰羸都鏡邊都鏡二面奉_レ授天孫天降居

余時一面淡路地八大龍神奉_レ鎮一面日向宮奉崇也

伊弉册尊神退事_{伊弉册尊神退事}日本書紀一書曰伊弉册尊生_二火神_一遇_二所_一焦而神退

矣故葬_二於紀伊國熊野有馬村_一土俗祭_二此神之魂_一者

花時亦以_レ花祭又用_二鼓吹幡旗_一歌舞而祭矣

又曰伊弉諾尊拔_二所_一帶十握劍斬_二軻遇突智_一爲_二三

段_{其三段}然後伊弉諾尊追_二伊弉册尊_一入_二於黃泉_一而

及_二之共話時伊弉册尊曰吾夫君尊何來之晚也吾已

陰泉之竈矣雖然吾當寢息請勿_レ視之伊弉諾尊不_レ聽

陰取_二湯津抓櫛_一牽_二折其雄柱_一以爲_二秉炬而見_一之者

則膿沸虫流時伊弉諾尊大驚之曰吾不_レ意到_二於不須

也凶目汚穢之國_一矣乃急走廻歸于_レ時伊弉册尊恨曰

何不_レ用_二要言_一令_二吾耻辱_一乃遣_二泉津醜女八人_一_{名略}

間中略_{○按此}追來伊弉册尊又追來伊弉諾尊已至_二泉津平

坂_一故便以_二三千人引磐石_一塞_二其坂路_一與_二伊弉册尊_一

相向而立遂建_二絕妻之誓_一時伊弉册尊曰愛也吾夫君

言_二如此_一者吾則當緘殺汝所_レ治國民日將千頭伊弉

諾尊乃報之曰愛也吾妹言_二如此_一者吾則當_レ產_二日將

千五百頭_一因曰自_レ此莫_レ過即投_二其杖_一是謂_二岐神_一也

○此間_{有脫文}所謂泉津平坂者不_レ復別有_二處所_一但臨_二死氣

絕之際是之謂歟所_レ塞磐石是謂_二泉門塞大神_一也亦

名_二道返大神_一矣

舊事本紀曰伊弉册尊者葬_二出雲國與_一伯耆國_一堺比

波山_上也

日本書紀曰天照太神在_二於天上_一曰聞_二葦原中國有_一

保食神_一宜_二余月夜見尊就候_一之月夜見尊受_レ勅而降

已到_二行保食神許_一保食神乃廻_二首嚮_一國則自_レ口出

飯又嚮_二海則鰭廣鰭狹亦自_レ口出又嚮_二山則毛龜毛

柔亦自_レ口出夫品物悉備貯_二之自机_一而饗_二之是時月

夜見尊忿然作_二色曰穢哉鄙哉寧可_レ以_二口吐之物_一敢

饗_二我乎廻拔_一劍擊殺然後復命具言_二其事_一時天照太

神怒甚之曰汝是惡神不_レ須_二相見_一與_二月夜見尊_一一

日一夜隔離而住

又曰伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到_二於不須也凶

目汚穢之處_一故當_レ去吾身之濁穢_二則往至_一筑紫日

向小戶桶之檍原而祓陰焉遂將_二盪_一身之所_レ汚乃

御中主神_一未_二顯露_一名_二國常立尊_一亦稱_二國底立尊_一天地之間稟氣之靈蒙_二一大五種之神力_一受_二天地父母之生身_一以_二言語_一授_二世人_一依_二之得_一一切智心_一利_二萬物生化_一也

伊弉諾尊天降陽神名日子伊弉冊尊天降陰神名日子

從_二國常立尊_一至_二惶根尊_一天神六代之間有_二名字_一

未_レ現_二尊形_一五位神坐其後轉變而合_二陰陽_一有_二男女形_一應化相生而專_二心珠_一神以_二清淨_一爲_レ先神態

興_レ焉伊弉諾伊弉冊_二尊承_二天御中主神詔_一即以_二天瓊戈_一指_二立於磯馭廬島之上_一以爲_二國中_一之天

柱_一則化_二豎八尋殿_一共住生_二大八洲次大小島合拾四箇島_一其後處々小島皆是水沫潮凝而成者也伊

弉諾伊弉冊_二尊俱議曰吾已生_二大八洲及山川草木_一何不_レ生_二天下之主_一者歟先生_二日神_一號曰_二大

日靈貴_一亦云_二天照太神_一亦大日靈尊此子光華明彩照_二徹於六合之內_一故_二一神喜曰吾息雖_一多未

有_二若_一此異靈之兒_一不_レ宜_二久留_一此國_一自當_二早送_一于天_一而授以_二天上之事_一是時天地相去未_レ遠

故以_二天柱_一舉_二於天上_一矣次生_二月神_一號_二月讀尊_一亦云_二月夜見_一亦月弓其光彩亞_レ日可_二以配_一日而

治_一故亦送_二于天_一矣次生_二素戔嗚尊_一次生_二蛭子_一

日本書紀等同_レ之

聖德太子神皇系圖曰蓋聞伊弉諾尊則東方善持藏愛護善通由

賀神梵所名_二之伊舍那天_一也伊弉冊尊則南方妙法藏

愛慢行識神亦名_二之伊舍那后_一也凡從_二自性淨妙藏_一

乃至_二邪蛇地_一爲_二下化衆生隨順方便_一故假化義興_二

生滅形_一依_二無爲行滿_一即得_二正果_一是大慈大悲神慮

也

神皇實錄曰伊弉諾伊弉冊尊此_二二柱尊者第六天宮主

大自在天王座

慈覺大師寶山記曰任_二皇天宣_一受_二天瓊戈_一以_二呪術力_一加_二持

山川草木_一能種々未曾有事

日本書紀一書曰伊弉諾尊曰吾欲_レ生_二御寓之珍子_一

乃以_二左手_一持_二白銅鏡_一則有_二化出之神_一是謂_二大

日靈尊_一右手持_二白銅鏡_一則有_二化出之神_一是謂_二月

弓尊_一又回_レ首顧眄之間則有_二化神_一是謂_二素戔嗚

尊

天地麗氣曰伊弉諾伊弉冊_二神尊持_一左手金鏡_一陰生

持_二右手銀鏡_一陽生名曰_二日天子月天子_一是一切衆

生眼目坐故一切火氣變成_レ日一切水氣變成_レ月三界

日ノ神

自神武天皇即位元年^{辛酉}至崇神天皇^代六十八年^{辛酉}歷年六百廿七年至垂仁天皇廿四年^{乙卯}六百五十

年自垂仁天皇即位二十五年^{丙辰}至雄略天皇廿一年^{丁巳}中間四百八十四年

自雄略天皇即位廿一年^{丁巳}至元德元年^{乙未}八百九十六

年至今年延元二年^{丁丑}九百四年神武即位元年以來二千三十年

一天祖神事

天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊

以天於坐而成神號^{イタラハシマシテ}天讓日國禪日皇太神^{イキリアケシ}亦名^ナ天

御中主尊也天地與俱生神也惟是諸天降靈之本致一切國王之元宗也

伊勢太神宮秘文曰夫以天地之起在水氣之用其清陽爲^レ天其重濁爲^レ地故從^レ上高天海^ニ至^レ下根底^ニ而

同時成立也今時水氣高天海初出之故謂^レ之名^ニ天讓日國禪日天狹霧國狹霧尊^ニ亦曰元氣諸神性^ニ亦稟氣懷靈也^ニ是^レ无^レ有^ニ身

形^ニ但有^ニ心性^ニ故曰^ニ無色界^ニ最上^ニ也^ニ高天原^ニ最上^ニ也^ニ

一天神七代事^{天有^ニ七星^ニ故曰^ニ七代^ニ}

弘仁六年萬多親王奉勅神皇實錄曰

大元^{謂無名之名無狀之狀呈稱^ニ氣神^ニ万物靈臺日月星氣是天}

國常立尊^{無名無狀神此著精之君水^ニ本^ニ官^ニ之臣自昔以來}

謂大易者虛無也因^レ動爲^ニ有之初^ニ故曰^ニ大初^ニ有

氣爲^ニ形之始^ニ故曰^ニ大始^ニ氣形相分生^ニ天地人^ニ

也大方道德者虛无之神天地沒而道常有矣原^ニ性

命^ニ受^ニ化於心^ニ受^ニ於意^ニ受^ニ之精^ニ受^ニ之

神^ニ形體消而神不^レ毀性命既而神不^レ終形體易而

神不^レ變性命化而神常然因以名^ニ國常立尊^ニ以^レ初

爲^ニ常義^ニ者^ニ也

○天地耦生神

謂耦生天地對耦萬物生故八天五行法^ニ天地^ニ生^ニ物^ニ五行^ニ自^ニ水^ニ始^ニ火^ニ次^ニ之^ニ木^ニ次^ニ之^ニ金^ニ次^ニ之^ニ土^ニ爲^ニ從^ニ木^ニ生^ニ數^ニ三^ニ成^ニ數^ニ八^ニ俱^ニ言^ニ八^ニ舉^ニ其^ニ成^ニ數^ニ矣^ニ是^ニ天地^ニ稟^ニ四^ニ時^ニ王^ニ相^ニ神^ニ座^ニ也^ニ配^ニ川^ニ有^ニ德^ニ故^ニ於^ニ明^ニ堂^ニ以^ニ祭^ニ五^ニ神^ニ而^ニ已^ニ

水國狹槌尊

火豐斟淳尊

木泥土煮尊

金大戸之道尊

土面足尊

沙土煮尊荒魂

大苦邊尊荒魂

惶根尊荒魂

件五代八柱天神光胤也雖有^ニ名相^ニ未^ニ現^ニ形體^ニ五大府中坐故名^ニ天地耦生神^ニ也應化神名曰^ニ天

土面^五
惶根足

此五柱者國常立
具德也

伊弉册

自誕生
大日靈尊
素戔嗚尊
天照太神

一 天鏡尊
二 天萬尊
三 沫蕩尊

素戔嗚尊
蛭子

合治一百七十九萬二千四百七十
六年也

吾勝尊
男子
自玉生

吾勝尊與豐
秋津姬始有
夫婦之禮

神武
治七十六年

綏靖
治卅二年

安寧
治卅八年

懿德
治卅四年

孝昭
治八十六年

孝安
治百二年

孝靈
治七十六年

孝元
治五十七年

開化
治六十年

崇神
治六十八年

垂仁
治九十九年

景行
治六十年

成務
治六十年

仲哀
治九年

神功
治六十九年

應神
治卅一年

仁德
治八十七年

履中
治六年

反正
治六年

允恭
治四十二年

安康
治三年

雄略
治廿三年
略外宮御鎮座

近日所出故曰日本也仍又號扶桑國一切韻曰和者東海中國也

日本書紀曰神武天皇卅有一年夏四月乙酉朔皇輿巡幸因登腋上噉間丘而廻望國狀曰妍哉國之獲矣雖內木綿之真遠國猶○按本書是蜻蛉之聲帖焉由是始有秋津洲之號也

神祇譜天圖曰一云日本者浦安國亦曰細戈千足亦曰磯輪上秀真國亦曰玉垣內國

私云秋津洲者獨鉗形是也

天地麗氣府錄曰于時爲下化衆生天王如來天御中主尊詔伊弉諾伊弉冊宜汝往修之賜天瓊戈而詔寄賜也天柱尊奉詔立於浮雲之上共計謂有一物若浮膏其圓中有國乎廼以天瓊戈天獨探之獲八葉滄海圖形則投下其戈而因書滄溟而引上之時自矛末落垂滴瀝之潮凝結爲島印明名曰磯取盧島矣後漢則以天瓊矛指下於磯取盧島之上以爲國中之天柱也天瓊杵謂真如界變成金剛寶杵々々變成風氣風氣轉成神々變成生々轉成魂魄魂魄轉成人體故八葉蓮臺自在安樂也是

如意赤玉德也元神用化也伊弉諾伊弉冊二尊天降其島一化堅八尋殿共住同宮矣號曰大日本高見國大日本者三光殿本名

仙宮祕文曰自戈落滴瀝之潮如意寶珠表形凝結爲島名磯取盧島矣神明降跡國萬寶聚所則以天之瓊戈金剛智劍爲國中之天之柱國之柱也

此云心御柱是起也是諸尊能生之本源萬法所歸惣體也

天地靈覺祕書曰大日本國者大八洲也惟大日靈貴治國也亦八葉花也即金剛胎藏諸會大日宮世界國土也凡世界自本々覺也自本无明也本又法界也本是衆生本是佛也本者法然道理也

或曰磯取盧島呻吟々々神明招請之國也豐受皇太神繼文曰

南閻浮提



葦原

一神代略系圖

從彼沒一生初禪梵世中爲大梵王而唯獨一位而懷不悅卽作是念時第二禪天壽盡故生初禪中如是展轉六天宮殿及四大洲悉生也論云劫盡燒壞時一切皆空故生福德因緣力故十方風至相觸能持大水々々上有二千頭人二千手足名曰葦網是人齊中出千葉金色妙寶蓮華其光大明如萬日俱照華中有八人結跏趺坐此人復有無量光明一名曰梵天王此梵天王心生八子八子生天地人民也

法化城喻品

余時上方五百萬億國土諸大梵王此悉自觀所止宮殿光明威曜昔所未有歡喜踊躍生希有心卽各相詣共議此事以何因緣我等宮殿有斯光明而彼衆中有大梵天王名曰尸棄是一大三千世界主一切諸神大祖也亦曰常住毗尊須彌建立其厚十六萬踰膳那々々觀想九山與八海中有大威神宮々柱廣敷立亦持藏山與大宮殿百三二世有大威神无上極尊世界大導師爲神通自在如水珠如火珠顯萬德施萬用

朱舍二年乙酉

寶基形文圖曰天地開闢基在大光明其中有精氣一名曰神亦名心余時爲萬物應化神假名號廣大

慈悲大御神也掛畏以天津神策用抱一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常文圖悟八子給修應化身照神道可也

一日本國造化事

先代舊事本紀曰天祖詔伊弉諾伊弉冊二尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地宜汝往修之則賜天瓊戈而詔寄賜也伊弉諾伊弉冊二尊奉詔立於天浮橋之上共計謂有物若浮膏其中蓋有國乎廼以天瓊矛而探之獲是滄海則投下其矛而因畫滄溟而引上之時自矛末落垂滴瀝之潮凝結爲島名曰礪馭廬島矣則以天瓊矛立於礪馭廬島之上以爲國中之天柱也伊弉諾伊弉冊二尊天降其島則化豎八尋殿共住同宮矣

史記夏本紀正義曰括地志云和國武皇后改曰日本國在百濟南隔海依島而居

日本私記曰日本國從大唐東方萬餘里日出東方昇于扶桑故云日本

或書曰日本國者自大唐而新名也斯國者自大唐東方萬餘里居于東極日出東方昇于扶桑已

母_一道育養萬物精氣_一吾不知其名字_一之曰道_{我不知其名字也}

不_一知當_一何以名_一之見萬物皆道之所生故字_一之曰道也_一強爲之名曰大_{大不知其名強}

無_一上難而無_一外無_一不_一苞容_一故曰大_大

日本書紀曰古天地未_一剖陰陽不_一分渾沌如_一雞子_一溟

滓而含_一牙及_一其清陽者薄靡爲_一天重濁者淹滯而

爲_一地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而地後

定然後神聖生_一其中_一焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬

猶_一游魚之浮_一水上_一也于_一時天地之中生_一一物_一狀

如_一葦牙_一便化爲_一神號_一國常立尊_一自餘曰_一命_一

亦曰天地初判一物在_一於虛中_一狀貌難_一言其中自有_一

化生之神_一號_一國常立尊_一亦曰_一國底立尊_一

亦曰古國稚地稚之時譬猶_一浮膏_一而漂蕩于_一時國中

生_一物如_一葦牙之抽出_一也因_一此有_一化生之神_一號_一可

美葦牙彥舅尊_一

又曰高天原所_一生神名曰_一天御中主尊_一

又曰天地初判有_一物若_一葦牙_一生_一於空中_一因_一此化

神號_一天常立尊_一

忌部廣成奉勸

古語拾遺曰天地剖判之初天中所_一生神名曰_一天御中

主神_一其子有_一三男_一長男高皇產靈神次津速產靈神

次神皇產靈神其高皇產靈神所_一生之女子名曰_一栲

幡千々姬_一天祖天津彥尊之母也

雄略天皇卽位廿二年戊午大佐々命訓傳云々

神記曰豐受皇太神一座天地開闢初於_一高天原_一成神

也一記曰伊弉諾伊弉冊尊_{古語伊舍那天}先生_一八大洲_一

次生_一海神_一次生_一河神_一次生_一風神等_一以降雖_一經_一一

万余歲_一水德未_一露_一天下_一飢餓于_一時_一二柱神天之御

量事_一平_一以天瑞八坂瓊之曲玉_一捧_一九宮_一所_一化神名

號_一止由氣皇太神_一久千變萬化受_一一水之德_一生_一續

命之術_一故名曰_一御饌都神_一也古語曰大海之中有_一一

物之浮_一形如_一葦牙_一其中神人化生號_一天御中主神_一

故號_一豐葦原中國_一亦因以曰_一止由氣皇神_一也故天地

開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中主尊與_一大

日靈貴天照太神_一二柱御大神_一豫結_一幽契_一永治_一天

下_一免_一或爲_一日爲_一月永懸不_一落或爲_一神爲_一皇常以

無_一窮光華明彩照_一徹於六合之內_一矣

府錄曰蓋聞壞劫後過_一廿空劫_一已_一一切有情業增上力

故空中漸有_一微細風_一是世間將_一成前相_一也是風漸增成

世界_一最初第三禪器世界成次第二禪及初禪六欲天

四大洲次第皆成也凡成劫之時雖_一無_一有_一有情_一第四

禪天人壽業盡故從_一彼沒_一已_一生_一第三禪_一如_一是次第三

禪天沒生_一第二禪中_一第二禪中有_一一有情_一壽業盡故

瑚璉集上

第一

天地開闢事 本朝造化事

第二

神祇系圖事 天祖神事 天神七代事

一 天地開闢事

古今帝王年代曆曰昔者天地未分謂之太易元氣始萌謂之太初形氣始端謂之太始形變有質謂之太素質形已具謂之太極五氣運通爲天地之二靈清以陽發升而爲天濁以陰凝降而爲地天地形別謂之二儀人生其間謂之三才

周子通書曰無極而太極動而生陽動極而靜而生陰靜極復動一動一靜互爲其根分陰分陽兩儀立焉陽變陰合而生水火木金土五氣順布四時行爲五行一陰陽也陰陽一大極也太極本無極也五行之生各一其性無極之真二五精妙合而凝乾道成男坤道成女二氣交感化生萬物萬物生々變化無窮焉

周易係辭曰易有大極是生兩儀孔穎達疏云太極謂天地未分之前元氣混而爲一氣既分之後陽氣居上爲天陰氣居下爲地居上者輕清居下者重濁列子曰清輕者上爲天濁重者下爲地中和者爲人謂之三才

易曰有天地然後有萬物有萬物然後有男女有男女然後有夫婦有夫婦然後有父子有父子然後有君臣有君臣然後有上下三五曆紀曰未有天地之時混沌狀如雞子溟滓始牙濛鴻滋萌

又曰清輕者上爲天濁重者下爲地中和氣者爲人故天地含精萬物化生

五行大義曰凡萬物之始莫不始於無復有是故易有太極是生兩儀兩儀生四序四序生之所生也有萬物孳繁然後萬物生成也皆由陰陽二氣鼓鑪陶鑄互相交感故孤陽不能獨生單陰不能獨成必須配合鑪冶余乃萬物化通

老子經曰有物混成先天地生謂道无形混沌而成萬寂兮寥兮獨立而不改者無音聲寥兮空無形獨立而不改者無正變不改者化有常也周行而不殆道通行天地無所不入在陽不殆可爲天下託陰不腐無不貫穿不危不殆

(井上翁藏本奥書)

玄義端書

いにし世のことからよ慈遍となん云し白うるりの法師の侍けるが幸有家になり出けん若かりし頃いともかしこき三種の道の面影をそこはかとなく聞ぬれど菊理媛のめぐみもなくて法師の身と成ける浦山しからぬさまにはあらねどふりにし道をしたふまゝに三種の道の理りをもて十種の道をときけるぞいといみじ○かりけるしかはあれど其ことの葉おのがもる法に脱歟にて吾もる神路を尋し文なれば香山に至ることづてともおもほえてたいにやみなんもかいなくまたやごとなき文と思ふ人は如何に侍らん儒釋道の三教ミツタツにてときぬゆへ其さま身におはすむかし人の言る書ことを○ことごとく歟信せば書なきにしかじとは是なめり一品藤の白玉翁のたまふ玄義は沙門の編なれども三種の傳を得たりと見ゆ然れ共金銀砂石錯綜紛雜せるゆへ具眼人ならでは吹分難きを吾鹽土翁是を拔萃して風水草に載せられぬと今奴吾此文を寫ぬは尊き文とも思はえねど道を尋るよすがともならめと思ふまに／＼筆を染る事實破鼓の皮までたくわへたるのたぐひな

らんかも

神京六條川原潮汲

寶曆六年 丙子十月八日 岸大路八垣橘長之謹書

三結成者一人是也神寶即主都无別體天祖所授繼
德未變其文義則如前辨耳

略料簡者問神寶傳來其相如何答於彼天神且置不
論於地神者皇孫是也何者此尊從天化生所以神寶
同現色質

問上天神何傳欲體耶答靈性周遍未隔一塵天
神化生何障此體例如妙音從莊嚴國不起于
座而令各來況得機緣有佛仕身神力難思凡智
爭計故於天宮雖端嚴身至此葦原而化色身
煩妄情莫疑天授和光無邊靈應如件

舊事本紀玄義卷第九終

本云

此書十卷內四五九以上三卷殊秘藏甚深云々

名_二天之香子弓地之羽々矢_一也自_二彼天上_一令_二投降_一給天之逆太刀天之逆鉞大小之金鈴五十口云々乃至亦謂男弓弭之物大刀小刀弓矢楯梓鹿皮角猪皮忌鍬忌鋤類是也女手未之物麻桶綿柱天機具荒妙衣和妙衣荷前御調類是也云々總諸雜寶其類無_二量如_一彼送文召立記等

用_二料簡_一者問諸寶等是何意耶 答天地開闢之

後_二萬物已備_一无_二照混沌之前_一故愚而不_二貴因茲神明_一以_二天津御量事_一令_二示靈物如_一明_二彼鎮座記_一何者諸行悉育_二群生_一故知萬物無_二非_一神財所以如_二言_一治生產業皆順_二正法_一不_二相違背_一何者迷則_二三道流轉_一悟則果中勝

用法_{疏文}也世間名字出自_二佛經_一金光明說業即解脫可_二解也_一

問神寶如何表_二佛法_一耶 答雖_二表_一議未_二細判_一歟故雖

難_二計試存_一解者十種自當_二十波夢密_一所以佛神度_二生_一不_二異天潤_一萬物_二檀_一波羅密地_二調_一千品_二戒_一波夢密

劍利自忍_二生進_一死禪足玉陽惠道反方便龍施_二願德_一蜂顯_二刀用_一若非_二大智_一何弁_二品物_一十種言_二葉示_一生

根_二八識含藏號_一御倉神_二例如_一止觀明理即云_二一念心_一

即如來藏理乃至嘆_二理而舉_一譬曰明月神珠在_二九重淵_一內驪龍領下_二有_一志有_二德方乃致_一之豈如_二世人龜淺浮_一

虛競執_二瓦石草木_一謂爲_二寶_一云々龍表_二陰陽_一即在_二御頸_一

玉之含緒思_二之可_一知 天地南神顯密二法已如_二前卷_一

今約_二神寶_一謂天鏡則本佛一圓如_二地境_一者迹佛八相若

論_二不二_一本迹理一天圓妙法地八蓮花於_二宗相承_一有_二二

鏡譬_二深旨分明法理必然_一又天鏡則金五佛位如_二地鏡_一

者胎八葉尊亦寶珠胎如來藏理衣內珍寶玉順明珠本

在_二己心_一兼_二蘇悉地_一以_二劍爲_一金自掌_二利惠_一蛇表_二器

界_二顯_一金剛_二劍從_一八海底_二化_一八握相_二令_一因_二理珠_一

現_二順輪果_一須彌半腹譬_二于中央_一日月兩輪耀_二于及

光_二元天逆矛_一即文殊劍八坂瓊者八字德也_二更問_一十種中

則劍及後三多少同體如_二上通釋_一云々若論_二元理_一藥

師木德十中四王普賢延命_二各如_一鏡則日天觀音蓮葉二重

五股八葉千手_二更問_一

問若論_二三種_一相望如何 答類通三種文義无_二窮細論_一

不_二遑得_一意可_二解且如_一仙宮秘文中明_二三種神寶_一各表

德曰玉者皇天之心珠矛者覺王之獨鉞鏡是三身具足

見_二其形_一者應身體也寫_二其影_一者化身之相也觀_二其空_一

者法身理也云々

劍玉各三可_二准_一三才又珠劍鏡此三如_二現_一即法報應

其義如_二云境名_一法身智名_二報身_一鏡智相應能起_二化

用一名爲_二應身_一釋意可_二知_一

矣

亦此外有_三神代_三面_一謂國常立尊所化神天鏡尊居_二月殿_一以_三天津御量事_一撰_三集地輪精金白銅_一奉_三鑄顯_一此三面鏡也爾時神明之道明現今天文地理以存矣天地開闢之明鏡也三才顯現之寶鏡也然天鏡尊傳_三天萬尊_一次沫蕩尊及傳_三一尊_一云々其一面者豐受御靈圓中五輪天含_三五行_一一面多賀宮御靈也一面荒祭宮御靈也云々三面三才互具互顯亦於_三一鏡_一而含_三三_一種_一

用_三料簡_一者問云何含_三三_一答玉劍二種皆具_三三義_一於_二內侍所_一亦備_三三種_一謂圓天珠八葉地鏡明光人劍照_三徹天下_一三稱_三三才_一各具各論已如_三前卷_一當_レ令_三合解_一謂天瓊玉曲妙御宇以_三諸寶_一如_三兩白銅鏡_一以分明看_三山川海原_一乃提_三靈劍_一平_三天下_一焉問三面鏡何答如_三彼三種_一雖_レ掌_三三才_一尙象_三地德_一繼_三皇孫位_一此三面亦雖_レ表_三三才_一殊_レ掌_三天寶_一如_三實錄_一曰_三天鏡尊獨化神天津水鏡神三坐是神鏡始_一元三光面目明_三白此時_一云々彼天此地神寶靈同故如_三麗氣府錄注_一曰_三大日本國者三光殿本名也_一云々堅照_三三才_一橫化_三八洲_一神璽_三即玉靈德可_一知問橫豎表何答劍豎鏡橫玉表橫豎_三三種_一三面互用可解問此三種者在何處耶答以往九帝同殿同

床然至_三崇神天皇御宇_一漸畏_三神威_一使_三石凝姥天目一箇_一二氏孫_三奉_一鑄_三造鏡劍_一以爲_三護身將_一改奉_三齋于_一時倭姬頂_三戴_一二種_三廣求_一諸處_三遂奉_一鎮_三座勢州度會_一故寶鏡則內宮御體也其寶珠則外宮相殿但寶劍者日本武尊平_三東夷_一時奉_三止_一熱田_三如_一倭姬_三世紀等_一問鏡劍奉_三寫而珠如何_一答寶珠所_レ現不_レ同_三餘財_一故造不_レ造未_レ詳_三其相_一見_三一紀_一具口傳_三因尋云不_レ葺合尊自_一龍宮_三所_一傳_三二顆珠者_一在_三何所_一耶答未_レ見_レ文也且如_三風聞_一乾珠滿珠被_レ埋_三箱崎_一云々

三攝_三部類_一者亦用_三一意_一先類寶部次用_三料簡_一其寶部者豐受相殿皇孫御靈是金鏡坐天兒屋命御靈笏坐天太玉命寶珠圓筥坐天照太神相殿手力男命御靈弓坐萬栲幡豐秋津姬命御靈劍坐又朝熊神葺不合金鏡是也如_三社記_一曰_三朝熊六坐倭姬命奉_一鑄白銅日月兩鏡坐云云但月讀命元是鏡坐也今則男形乘_三木馬_一云々凡厥瀧並伊難大歲如_レ是宮社不_レ能_三枚舉_一其神體則或鏡或書廣如_三社記_一可_レ見可_レ尋其外雜寶不_レ能_三勝計_一大畧如_三明_一御鎮座記_三夫神代靈物之義者獲田彥神之啓也玉者日之靈光月之精明也笏者天之四德地之五行也又劍者龍神所_レ造土精之金也弓箭輪王所_レ造陰陽之義也故

實致併以此玉而爲其璽元氣現形故曰水珠陽氣芽物故云寶珠陰陽所化是稱二尊氣形所施恒遍始終指此玉即天御中主豐受變化已如前判故九宮者如下常明之天有三台地有九野然今文云捧九宮者從天應地故稱宮天地開闢之時起形總圖天下之御量事即八坂瓊之曲玉也神璽所化之寶珠也故號神璽亦稱圖形各有謂也以可_{可以イ}知也唐令云璽者以白玉爲印也事始云春秋運斗樞曰舜爲天黃龍負圖出中有璽章文曰文黃符璽說文曰璽玉即世璽譜曰傳國璽秦始皇刻二世記曰曾公作弁帝王世曆云秦制傳曰璽是風俗名別號同寶珠耳隋書志曰皇帝八璽有神璽有傳國璽而不_{傳國璽明受之於天}用_{傳國璽明受之於}運皇帝負辰則置神璽於筵前之右置傳國璽於筵之左又有六璽一皇帝竹璽封命諸侯及三公用之二皇帝之璽與諸侯及三公書用之其三皇帝信璽發諸侯用之其四天子行璽封命蕃國之君用之其五天子之璽與蕃國之君書用之其六天子信璽出蕃國之兵書用之六璽皆白玉以爲之方一寸五分高寸螭獸_{已上漢書大略書之委細記錄追可尋之}見委記但於一寶橫兼三種何者元氣自備衆德

陰潤爲玉陽牙爲劍故稱云天瓊玉才_{委如秘府}精光照徹自_{實イ}是明鏡是故名曰瀛都邊都_{如上一秘府}如云天御中主之神璽也惟是天地開闢之圖形也亦名瓊玉亦名逆矛或天地鏡或國家固即心御柱及天御量柱各々異名一々如文仍於是德並開三種從性現相准上可_知二寶劍義此寶亦同可云神璽神祇令曰璽謂信也猶云神明之徵信此即以鏡劍稱璽也矣然寶劍者草薙是也素盞鳴尊得自蚺尾謂濁氣下雖成地蚺其靈施德終顯寶劍故論下則爲蚺々地而論德則爲明明天彼素盞鳴昇天之時天明玉神奉迎令進瑞八坂瓊之曲玉矣亦素盞鳴降地之後得此靈劍以五世神還奉天矣陰玉常降普生萬物陽劍常昇鎮諸惡善惡二神互取劍玉各生男女其意可知如彼逆矛下海底亦以瓊玉而捧九宮故論一劍堅兼三種其鋒天珠八握地鏡劍體一人總提天下三寶鏡義亦是神璽於岩戶前所奉鑄之鏡如云名日像八咫鏡八頭花崎八葉形也故名八咫也中臺圓形座也圓外日天八座謂表八州也即在子內侍所神鏡是也云々紀云詔曰常世思兼神手力雄命天石門別神云此鏡者專爲我御魂如拜吾前奉齋

兼始終亦開具德以爲衆寶生死二玉天地光胤足與道反陰陽變化道異足住生滅四相前後互交表天四德蛇比禮象地八握蜂比禮者瀛都五行故令此德而昇彼天稱蜂比禮以成三品物故云一二乃至九十一而布瑠都謂言本矣

問所言布瑠都等之言如何答天神御祖教詔曰若有

痛處者令茲十寶謂一ニ二ニ三ニ四ニ五ニ六ニ七ニ八ニ

九ニ十ニ而布瑠都由良由良止布瑠都如此爲之者死人

反生矣是則所謂布瑠之言本矣已上紀文謂劍品物俱掌一

人其餘皆並陰陽二德亦於十種惣爲二儀前九

則陰第十則陽天地元靈是曰布留振靈受生任本

曰舊生類調氣必振其身續命德用尤有其謂惣

尋緣起不出動靜靜陰津音動陽雄音其津塞口塞

則歸死其雄開口開則續氣然前九津津音靜極而出

十音即生元始前謂一津二津三津四津五津六津七津八津九津

十雄而天布留惠由羅由羅登布留惠云々元氣之動陰

陽之振由良由良思之々々如書曰無極而太極動

而生陽動極而靜靜而生陰靜極復動一動一靜互

爲其根分陰分陽兩儀立焉已上書文伊弉諾尊得三貴

子召其頸玉之緒母由良爾取由良迦斯而賜詔其

頸珠名謂御倉板舉神云々頭天陽也體地陰也以兩際稱曰御頸陰陽動中而芽萬物以此含靈名爲御倉但傳言而布羅而布羅波羅而布羅之真言也云々於義雖然於語未便字音既異豈用僻讀況於真言未渡之前有誰令傳佛法之語故論其義可云真言所以稱曰本佛真言三十七尊惣咒是也亦熾盛光心咒也

抑津雄二音阿吽兩聲不能細判具如悉曇仍正紐

傍紐正雙傍雙十二反音其義可尋

問此十種者在何處耶

答十種三種同異如上若令其體簡別不輒且如此紀

第五卷明至于崇神天皇御宇建布都社奉納齋

矣在大倭國山邊郡也

釋三種者亦用三意先釋其義次用料簡三種

義者一寶珠義稱爲八坂瓊之曲玉如云二尊即捧九

宮而所化名豐受皇神水德之術續命之化故名曰

御饌都神也云々故此玉者二尊所化或紀亦云天御中

主所化之玉或稱天地開闢之圖異說不定云々雖似

異途敢非相違各出具德未盡多含千萬雖說不

可知實且順現文宜辨大概謂天地元詠示

意寶珠火德所成如諸文記

已上如
麗氣等

仍如神紀以三

兩鏡而爲多賀荒祭御靈是由本末兩儀同體故名

荒魂舊文可見又如灌頂天女傳曰瀛都鏡邊都鏡二

面奉授天孫天降日向宮居爾時一面淡路八大龍

神奉鎮一面日向宮奉崇也云々

三八握劍即叢雲劍亦名草薙明珠寶劍圖車輪形八州

八葉掌天地上二鏡者天地一劍者是人此三寶描以

兼始終亦開具德以爲衆寶圖五腹形

股

已上取
府錄文

但八

握者未辨其數如十握者圖五葉形若准之者取

中間歟所以空色即當天地云々

四生玉者府錄曰如意寶珠謂火珠是也云々准上邊都

鏡義而已

五死玉者府錄曰如意寶珠謂水珠是也云々准上瀛都

鏡義而已

六足玉者府錄曰表父體形也示上字也云々圖形如

舊即在別紙可准生玉義是陽魂也

七道反玉府錄曰表母體形也示下字也云々圖形如

舊即在別紙可友死道是陰魄也

八蛇比禮府錄曰陽明衣纏表也水字本也故白色也云々

是清淨義圖形如舊即在別紙可准道反

九蜂比禮府錄曰陰懸帶纏表也火字本也故赤色也云々

是正直義圖形如舊即在別紙可准足玉云々

十品物比禮府錄曰寶冠是也圖形在別紙云々謂品物

者意甚廣哉堅掌三才橫領四海冠天香地笏直即

人若領四海必化八州惣以此一而攝上九各

論其義以令統收

用料簡者問云何終一而攝餘耶答終一寶者

是一人也故十種通无非品物御即位嚴皆此天寶衆德

具足方成地玉謂攝十種不出三才初二種則惣舉

天地如彼元祖讓日禪月次八握劍授八州地中

玉四種授天四德從二比禮及終品物還會初鏡

授一人位於初二鏡即有品物其瀛都天其邊都地

於三次一劍亦有品物其乃則天其握則地兩德互兼即

是一人各具橫堅皆掌天地堅則三才橫則八州八葉

八握一手一掌萬民預利如意寶珠三種互用如前卷耳

問三才授德一兩是足何舉同儀用十種耶答三

才成萬物不出兩儀雖然論德非無次第今此

十種從天降地亦至比禮從地昇天還合上寶而

列水火逆次授之意可見也故以品物通會前九

開合自備橫堅宛然二鏡天地一劍是人此三即橫以

雖爲地鏡。再尋造緣。亦非全同。何者十種先奉捧彼饒速日尊。此尊去後傳美真千命。以相承之。而神日本磐余彥命令。平此國之時。則以奉之云々。三種神器別爲皇孫。奉授之後。次第傳之。畢具見其中。寶鏡稱爲邊津。太有相違。如何會之。寶鏡可准天。明玉所造珠。此雖別依八當。知天地互合。天地即以德同。令後名。前故論天鏡。其體難思。難測。隨而異說。區而不定。或云神代三面鏡者。生自天鏡尊。心月輪是也。或云三面自國常立傳天鏡尊。及至一尊。或云於月宮殿而鑄之。或云三面不知鑄冶。其實現色而論。造者石凝姥神同奉。鑄歟。既爲同人。豈爲別鏡。料簡如上。比量可知。故論色造。皆是地鏡。若論理造。皆是天鏡。寶鏡如此。劔玉准知。縱爲蛇尾。何混性相。就中玉則專掌天寶。故諸記多未云造也。問造體在地何煩約。天但皆共可云。同現耶。答天地精明。空色常遍。古今畢竟冥顯。不別雖爲如是。尙迷靈性。況示偏義。誰知神應。問若爾可云同一寶耶。答偏一非一。偏二非二。是故當知如神聖曰。內外不二。常一體天神地神皆一露云々。

三會多少者。亦爲一意。先會多少。次用料簡。其多

少者十種三種其會。異者開合無得。謂初兩都俱一寶鏡。四五六七俱一寶珠。三及八九俱一寶劔。俱第十寶合。上九寶。何者十種雖開三種。各掌陰陽。皆並天地。故於第十二表一人位三種三才已如前判。用料簡者。問多少神財會異未。審是異名歟。亦別體歟。答有。體有用。體則同一用。則各別。雖爲各別。其體歸一。亦雖爲一。其用各別。故論十種不出三種。三種亦一。況亦十種。問若爾此中何爲體耶。答俱體俱用。非一非異。若執一體。是非實體。或從天胤而降。地寶或以地德而顯天性。雖天非天。雖地非地。恒順天地。俱解開合。問開合如何。答清天如開濁地。如合亦互論。德准義可解。二別釋者。分論十種三種寶義。亦用三釋。所言三者。一釋十種。二釋三種。三攝部類。釋十種者。亦用二意。先釋其義。次用料簡。十種義者。一瀛都鏡。豐受御靈圖形如舊文。卽象五輪。謂表天字。而顯五行。故雖掌天而含地德。已上取府錄文。已上如。麗氣等。德所成如諸文記。二邊都鏡。天照御靈圖形如舊文。謂表天字。圓形八葉而顯八洲。故雖掌地而含天道。已上取府錄文。陽氣所變如

靈鏡此神同鑄故知寶鏡同時出現云々惣而衆寶皆掌二兩儀一兩儀成二三成三萬物一萬物品物各有象此象表德具期別釋一

問十種三種名數不同何約二一類論三出現時又鏡既造
劍玉可同若爾可云誰所造耶 答文義俱備何爲疑
乎一類化現故不難也謂十種者則先授三天孫日尊速又三
種者後授皇孫瓊々前後雖別其名體則同若爾類通有
何咎矣瀛都邊都同人同鑄故論出時一亦非異時一劍
玉現世其起如前自然靈寶何尋造人蜂持利針螢
放玉光誰所造也安相承乎應知陰陽精明分焉況
人靈寶莫疑造作但得有始乃螢有造鏡亦如此
本有金耳強論其始且非無由各有其人假稱造
祖如寶鏡者石凝姥神如寶珠者櫛明玉神如寶劍
者則天目一箇神造焉強尋其元者如神紀曰劍者土
精金龍神之所造也玉者日天月天之光精也云々又曰
鏡則一面者天御中主所授白銅鏡圓形中五月輪崇於止由氣
宮是也一面者多賀宮御靈也一面者荒祭宮御靈也已
上三面者國常立尊所化神天鏡尊居月宮所鑄造之
三才相應是也一面者八百万神等以石凝姥神奉鑄
之寶鏡日像形崇祭伊勢太神宮是也一面者石凝姥神

初度所鑄方形象地不合諸神意一矣紀伊國日前神是也
已上
取要

問造元非一其時各別云何和會而通義耶 答神靈雖
遍隨緣而現從性出相從天趣地義開次第理
在同時卽色遠空無妨而已天寶非色造體卽地
使後會前准上可解

神寶義者亦爲二意一先釋寶義次用料簡其實義者
三種十種俱含天地德而亦互象何者同雖出天孫
篇且如十種而象天道如彼天孫饒速日尊受天
祖詔賜十種寶降河內國令神去畢謂天掌生
降地爲死如云陽氣散已卽死故如十種雖並
陰陽多名生死其意在斯又比禮者飛羽德也因道
反玉而舉生天卽一三乃至九十而布瑠部言
具期別釋云々三種義者亦如十種雖掌三才而
象地德何者三種授皇孫尊皇名豐受各如前辨
應知百王連在天命亦知三種共稱神璽十種三種
雖開合異而兩儀一儀施天地德
用料簡者問三種十種有造不造皆可同耶亦不
同耶 答隨天與地施造不造何者天空地造故云
如十種未聞論造何者造色必成地故但如邊津

乎以天瑞八坂瓊之曲玉乎捧九宮所化神名號止由氣皇太神支干變萬化受一水之德生續命之術故名曰御饌都神也云々故指元氣一名曰寶珠亦稱神體天御中主即施豐德號豐受神通堅遍橫始終同等謂尋天地開闢時者天御中主即寶珠也陰陽分後自稱二尊備續命靈遍生萬物故現色質而秀其中真氣所感而成一人於是正論下地現體之色寶者應知此玉與皇孫尊一體同時相共相化例如輪法共與輪王自然具德不可思議請尋讀者當得文意且如彼神皇系圖曰元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天御水雲神任水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇神也凡以一心分大千形體顯言爲陰爲陽矣蓋從虛無到化變天地水感應道交故有名字相云々應知此玉水德所成而具火德何者万物陰陽所共而不孤立故稱生玉陽魂亦成足玉及曰死玉陰魄亦成道反皆同陰陽元氣所化瓊玉分作云々

二寶劍者卽八握劍府錄曰八握劍一柄註天叢雲劍亦名草薙劍也五胎形也云々素盞烏尊赴根國時於出

雲國所令感得卽在蛇尾其尾尖卽劍也及蛇比禮水德陰靈蜂針火德皆共靈劍之所變也悉是陰陽之德用也故八握及九握十握同劍分作都無別體兩儀互具万物不孤其義必然可令准解從性現相從天現地亦與皇孫同化如上云々

三寶鏡者天地靈明是名瀛都及邊都鏡伊弉諾尊於小戸河欲令濊身所投玉纏各化爲神自是始名瀛都邊都乃至同稱瀛都邊都彼左右手持白銅鏡所化神號日神月神府錄云一書曰伊弉諾伊弉冊二神尊左手持金鏡陰生右手持銀鏡陽生名曰日天子月天子是一切衆生眼目坐故一切火氣變成日一切水氣變成月天地建立日月是也于時以瀛都鏡邊都鏡爲國璽尊靈爲日神月神自迄于天宮而照六合給矣又曰瀛都鏡一面是天表字也五輪形也天王如來寶鏡豐受皇太神御靈鏡坐邊都鏡一面天表字內圓形輪表也外輪八咫形天照皇太神御靈鏡坐云々陰陽互兼亦可准上故云二尊似違本紀彼限陽神此並陰神或一或二不同而同亦出現時令准上義若解一鏡須通諸鏡神紀釋豐受靈鏡曰天御中主高皇產神勅石凝姥神取天香山銅奉鑄云々天照太神

舊事本紀立義卷第九 深祕卷也

沙門慈遍撰

第四明神寶出現者大詮略可用三意也所謂通釋別釋結成各約義類當用料簡初通釋者惣舉十種神寶宜設三釋其三釋者一出現時二神寶義三會多少一出現時者可約二意先粗引文次用料簡粗引文者此紀三云天照太神詔曰豐葦原之千穗秋長五百秋長之瑞穗國者吾御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊可知之國言寄詔賜天降之時高皇產靈尊兒思兼神妹萬幡豐秋津師栲幡千千姬尊爲妃誕生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊之時正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏曰僕欲降將裝束之間所生之兒以此可降矣詔而許之天神御祖詔授天璽瑞寶十種瀛都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也

玉及八咫鏡草薙劍三種寶物永爲天璽矛玉自從矣詔天兒屋尊天太玉尊曰惟爾二神亦同侍殿內善爲防護焉日本書紀曰天照太神勅曰若然者方當降吾兒矣且將降之間皇孫已生號曰天津彥火瓊杵尊時有奏曰欲以此皇孫代降故天照太神乃賜天津彥火瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉寶祚之隆當與天壤無窮者矣大田命傳曰天地初發之時大海中有一物浮形如葦牙其中神人化生名天御中主神故號豐葦原中津國亦因以曰豐受皇太神也與天照大日靈尊舉此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財而授賜天孫爲天璽云々諸文雖繁大綱在斯各隨其義綱目可尋

用料簡者問此等神寶何時現耶答天性緣生誰盡根源且屬所授始知出現謂十種財稱曰布留部討其本初尤爲難思試以三種宜論十種一瓊玉者如神紀曰伊弉諾伊弉冊二尊先生大八洲次生海神次生河神次生風神等以來雖經一萬餘歲水德未露天下飢餓于時二柱神天之御量事

其名曰神此所掌此國爲體故天御量獨在_二本朝_一是德所_レ秀是義如_レ前當_レ知自餘百千世界皆爲_二吾朝廣施大用_一如_レ云_二尊降_二天瓊矛_一而探_二滄海_一引上滴瀝凝結成_二島名_一磯取盧嶋_一或記云磯取盧嶋_一一神於_レ是造_二八尋殿_一或記曰八尋殿者指_二指_二立瓊矛_一或記曰瓊矛者神祇寶山今此所也共住_二同殿_一其意如_レ斯_一已上請_レ記

料簡通別者 問物有_二通別_一其義如何 答既論_二體用_一者當_レ有_二通別_一々則神體通則神用其用廣遍_二一切

諸國_一其體獨在_二此朝_一神地應_レ知餘州通雖_レ曰_レ神若論_二靈地_一別在_二日本_一如_二日本宗祕府曰_二諸梵王諸天子諸群生即受_二皇天敕勅_一到_二實證之地_一領_二知衆物之天所化_一百億須彌百億日月一々須彌有_二四天下_一其南閻浮提有_二圓陀々之地_一謂_二之大日靈地_一亦號_二神國_一也

已上
祕府

料簡結前者 問結前如何 答上來玄文乃爲_二五卷_一義分_二次第_一各有_二其意_一第一卷明_二一成_一二也第二卷明_二二成_一三也第三卷明_二三成_一四也第四卷明_二一人

德_一此卷於_レ後料簡上意_レ仍得_二來由詮義_一而已
料簡生後者 問生後如何 答此本紀者偏論_二神道_一故就_二其文_一未_レ交_二佛教_一以_二下卷_一附_二神皇系圖_一畧談_二佛

惠_レ還顯_二祈誓_一六七卷乃明_二神佛同體_一第八卷以明_二本誓同異_一第九卷正明_二神寶出現_一第十卷爰明_二記事靈應_一云々

舊事本紀玄義卷第五終

凡舊事本紀者聖德太子御作本書十卷也依_レ爲_二無點_一可_レ加_レ點之旨雖_レ被_レ下_二勅於神宮_一上古書今更難_レ加_レ點之間奉_レ祈_二請_一尊神_一之處當作者慈遍爲_二法華法樂_一來迎之刻于_二時官廳常良三品等奉_レ屈_レ之作_二廿卷書_一備_二觀覽_一所謂玄義文句是也仍此十卷之內以_二四五九_一爲_二祕卷_一然間運_二多年之功_一剩以_二此志_一企_二上洛_一所_レ令_二傳授_一者也努勞不可_レ出_二窓中_一頓首再拜々々敬白

觀應二年正月五日 大中臣朝臣判

應永十一年五月六日 桃同法燈書寫了

弘正寺住沙門惠觀

非彼說我朝才明恐鴈化國神通治世是何見耶 答

神靈化生滅々々顯神應俱逼性相事理無礙若

不逼者此神有限未免無常計逼者既無盡際何

妨生滅陰水陽火自有昇沉天道地德無非常儀即

事而真彼談所紀逼色而空此神所絕是以二尊受

天祖詔生國及山海及草木等皆化為神雖現生死

神應常恒故移漢土是亦神道之義神德彼雖隔此

不厭彼々此一德未得爲他遠近万事無漏神惠

巨海尚不厭細流泰山亦無讓土壤取百姓業

爲一人德惣使異域悉令歸本朝抑和國者三界

之根尋余州者此國之末謂日本則如種子芽故依

正和人心幼似春草木未得成就論其功用本

在神國唐掌枝葉梵得菓實花落歸根菓謂受流

故當初則皆用託宣而治天下梵漢文傳神態轉隱先

談已竟問漢家粗爾又梵如何答根莖斷簡略如

上辨故佛法渡還添威光是以神宣指西天佛以爲

應迹細期下章如彼孔老密佛爲師佛若歸神本

末誰爭雖文寫漢書理良背若令佛教大同小異惣

明因果示已三世仍任一靈廣教生死云々

料簡廟社者問宗廟社稷其義如何答廟社名字出

自漢土遂論義者意頗別也如弘決云宗謂尊也

廟謂良也謂尊良之所居也社謂后土吐也土所

生之如口吐物即地神也引國語云平九土故祀

以爲神戴皇天而履后土地廣不可盡敬故封爲

社稷謂五穀惣名也即五穀之神也故天子所居左

宗廟右社稷布列四時五行故以國亡爲失社

稷既入怨國及淫女房故社稷壞也又禮記云天

子立三廟一考也二王考也三皇考也四顯考也五祖

考也始祖已上五皆月祭也六遠廟有三祀一祀即廟也二祀四時

祭也諸侯五廟一考二王考三皇考四顯考五祖考

卿大夫三廟一考二王考三皇考四顯考五祖考

考二王考四時庶人無廟已上禮記大智律師孟蘭盆記引此

謂始自天子至於士人家國相傳皆立宗廟雖

五考之用則別而百行源不殊云々宗廟社稷在文可

見王臣民庶次第如斯然此兩宮名曰宗廟異彼所

立細尋可辨問若爾彼此同異如何答宗名尊義且

不異也但彼人廟再不同也今崇兩宮即名天地恐

是可謂六合宗廟故此宗廟義當日本所以別在神

國而已

料簡體用者問物有體用其相如何答万物有精

自在神力現種種形隨種種心行為方便利益所
 表名曰大日靈貴亦曰天照太神爲萬物本體度
 萬品世間人兒如宿母胎也亦止由氣皇太神月天尊
 天地之間氣形質未相離是名渾沌所顯尊形是名
 金剛神生化本性萬物惣體也金則水不朽火不燒本
 性精明故亦名曰神明亦名大元神也任大慈本誓
 每人隨思雨寶如龍王寶珠利萬品如水德故
 亦名御氣都神也金玉則衆物中功用甚勝不朽不燒
 不黑故爲名無內外表裏故爲本性謂人乃受金
 神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先
 謂從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼
 神所惡也已上一文如斯萬義可尋

料簡伏難者問如易等談神妙義者凡超乾坤

離陰陽也而以兩儀爲兩神者未及神意彼可云

劣耶答和漢意別也寧令此類乎但談神妙何限
 一說始自經論無不稱讚神宣亦多爾令守混沌

之初以如之耳是即心之要路也機之證入也所以若
 契此心者必通彼神也彼此畢竟雖無二別此神應
 者非彼神也神國之儀宛異之哉問心神既應用

豈別若爾神國何異彼耶答神妙本有而自遍依正

靈應尤新也何但性常乎凡諸有情皆順妄心此妄若息
 必通真神此真神者天性理也此天性者成日神也若
 非顯現何得蒙益此應體名天照太神其惠普照
 六合之內其德永繼百王之位不同彼偏以妙稱
 神亦異正取德崇祖問答如言者天神無益又
 如此者地神勝天抑彼雖不曰天照神但稱日天
 德輝自同若爾別號日本神國更無異途然有何神
 祕耶答天地一神陰陽不孤於上辨者爲此義也
 今論異途成偏不偏謂彼執偏此顯不偏其偏神
 者離天地也故非陰陽亦非性相故嫌變化徒
 覆靈德還迷天地冥通之道故談神妙雖蕩妄
 慮未知神應利物之相仍雖體無二而有知不
 知於機見不同敢無妨別執其不偏者宛異彼
 義何者真神雖似無形從性出相漸現色質天而
 成地下亦遍上從空趣色從色歸空天地同冥上
 下俱時故於天地唯在一靈且分上下互兼兩
 神謂其上則天地狹霧論其下則皇孫得讓百王利
 物皆是天神三才分別並成地德天地俱生良有以也
 惣指變化即神而已問變化雖易靈妙不改以生
 滅事何稱神明況所記文悉用漢字惣所談義無

天地兩神宜合可_レ知 問天地兩神各有_二陰陽_一 又天與地宜合如何 答_二途雖_レ分不_レ出_二陰陽_一 卽於_二

此義_レ當有_二橫堅_一 其橫天地各論_二陰陽_一 其堅天地以分_二陰陽_一 其橫卽堅其堅卽橫應_レ知天地同體俱生雖云_二兩義_一 實是一神雖云_二一神_一 必具_二兩儀_一 故非_二孤陽_一 亦非_二孤陰_一 凡論_二萬化_一 皆在_二同體_一 故初天祖含_二狹霧_一 亦後地神女而掌_二陽於_二此中間_一 二神合_レ明謂豐受與_二大日靈_一耳其神同體全非_二始終_一 其德俱時都非_二前後_一 天神無_レ形出_レ相爲_二地神_一 地神耀_二天々性現_一 德問清天濁地此理必然日神現昇天地降歟 答盡

理如_レ上重說無_レ由試舉_二一喻_一 宜_レ會_二萬疑_一 謂用_二厚物_一 而囊_二明珠_一 若有_二環門_一 頗見_二現光_一 珠如_二天神_一 光如_二地神_一 依_レ珠有_レ光尋_レ光飯_レ珠々光雖_二常裏_一 德則在_レ地矣地不_レ離_レ空隱顯可_レ知漏_二陰陽之影_一 而顯_二精明_一 出_二天地之間_一 而現_二靈光_一 空色々空々有無_レ礙_二天地_一 地天々性不_レ變在_レ色爲_レ靈在_レ心爲_レ神也心體惟一神靈不_レ離_二在一念_一 各迷_二其理_一 知日卽知字義可_レ了 問神靈在_レ心未_レ有_レ他者何憑_二外護_一 而祈_二益耶_一 答天神之性遍_レ地々神在_レ心々靈常通自有_二聖賢通者_一 而已不_レ通而祈_二一尊_一 生_二日稱_一 天下主_二皇孫繼_一 光爲_二

葦原王_一 其形雖_レ消神明不_レ毀前神後神同飯_二冥道_一 其靈無_レ形隨_レ物而現若賢若愚名在_二己心_一 若_二他神_一 則雖_レ祈不_レ應若_二心外_一 則雖_レ應不_レ感真神如_二月信心如_一 水月而不_レ下水而不_レ上濁則不_レ宿清則得_二宿一月萬_一 光未_レ惜_二影哉_一 一水萬滴未_レ爲_二疑哉_一 如_二彼易云_一 夫唯知_二天之所_一爲者窮_二理體_一 化坐忘遺照至虛而善應則以_二道爲_一 稱不_レ思而玄賢則以_二神爲_一 名蓋資_二道而同_一 乎道_二由_一神而冥_二於神者_一也卽如_二大田命傳記曰_一 德合_二神明_一 則乃與_二天地_一 通也德與_二天地_一 通則君道明而萬民豐也云々 問聖賢雖_レ通愚凡無_レ據如何飯_二神如何_一 祈耶 答賢愚雖_レ別心神不_レ隔若有_二信德_一 何異_二聖賢_一 如_二世記曰_一 夫悉地則生_二心_一 爪意則顯_二信心_一 而蒙_二神明_一 利益_二事波依_一 信力厚薄_二也云々_一 神體各崇感應可_レ祈心

天色地同體無_レ疑金則陰陽之靈玉則水火之精金是神也全是冥也劍鏡寶珠卽神無_レ別天地非_レ遙遠近在_二心_一 依_二心有_一 信依_二信有_一 益天父地母大慈大悲陽男陰女常度_二本作_一 惡_二常化卽如_一 御鎮座本紀云_二天地未_一 割陰陽不_レ分以前是名_二混沌_一 萬物靈是封名曰_二虛空神_一 亦曰_二大元神_一 亦名_二國常立尊_一 亦名_二俱生神_一 希夷視聽之外氣氣象之中虛而有_レ靈_一 而無_レ體故發_二廣大慈悲_一 於_二

施陽道此道無窮不可偏執且取其要以論之者
 天狹霧之含德是也國常立尊以天讓日即天鏡胤孕
 天萬靈然至二尊既生靈兒一此靈兒者其尊光也其
 光用則必遍空也故曰送天不可留也論色體者漸
 成地也故云生國及惡兒也其靈光則陰陽之精明也
 故日月者天地之神光也當初者未分晝夜即指明
 光自爲日月故曰是時天地相去不遠思之神祇實
 山記曰伊弉諾伊弉冊往昔大悲願故而作日神月神云
 云故知二尊即日月也問今論地神何天神耶答空
 天現色是曰生地此地顯靈是稱地神況天地始終
 神○始終神本作殘而道一常存即國常立爲天狹霧若爾何限天神
 致疑應知地神但指靈性一此靈性者還皈陽也如云
 內外不二常一體天神地祇皆一露又曰天地之間稟氣之
 靈蒙二神五行之神力受天地父母之生身云々は故
 天地雖分其靈無變陰陽雖化其神一露故二尊雖
 受色質之龜身還生心珠之靈兒其兒則勝分其親
 則劣也天地之昇沈是陰陽之明闇而已問何以勝
 劣爲親子耶答神歸本有也隱而在一性光用熾
 盛也現而爲二尊其光照者此神之所生故云兒勝
 其色體者兩儀之龜相故曰親劣一惣而言之万物之靈

明也別而論之一精之真極也故稱國主授以天事
 普蒙惠光誰不敬仰一凡二尊始自令生國主通
 稱天子如行基曰照皇天子應現出來故號天子云
 云其光無私而恒照万像若心正直而自契一神天
 地雖分心神不殊仍隨名義須知靈德問曰神
 名義有幾種耶答於此紀文日月各有三重名字
 初則大日靈貴與月讀也謂靈性無形陰陽難測故強
 云貴指功稱讀也中則天照太神月夜見也謂拂闇而
 出嘆其光用以云天照及月夜見也終則大日靈尊
 與月弓也謂其形顯現於天而耀指其嚴良以稱
 靈尊初月寄弓也俱如或紀俱以中名而爲終也是
 令芽初立尊號歟故以照用爲第三義名據一
 意亦無相違云々若繼上與下地者須有五重令
 料簡歟前擬四德今表五行其理明也不繁筆耳
 料簡互用者問天地兩神互用如何答大神常降々
 而非降地神恒昇々而非昇何者於空中盡邊際神
 性量等而國常立唯有名字無有形體其靈周遍無
 非万物即大日靈而無邊量百千日月一靈分遍同
 無中邊何論前後都無上下豈滯昇降應知天地
 一神俱生但隨陰陽互用同體孤陽不起單陰不立

不測千變幾平水德常施万化惟大也皇胤能降是以初則
天御中主天神御祖凡地禪月是其豐之義也中則水珠月
神爲伊弉諾還爲所生而冥日神也終則皇御孫尊正
現欲體一直受神寶令傳永代故豐受者名兼本
末論其意者卽示同體何者天神唯有靈明其體
皇孫卽顯國主故皇孫者掌三才也天而人地橫而爲
豎高皇非始皇孫非終讓中主於百王施豐受於万
物神皇圖曰天御中主尊神風伊勢百船度
會山田原大神座元氣所化水德
變成爲因爲果而所露名天御水雲神住水德亦
名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大草原中
津國主豐受皇神也凡以一心分大千形體顯言爲
陰爲陽矣蓋從虛無到化變天月地水感應道交故
在名字相云々又神記曰豐受皇太神一座天地開闢初
於高天原成神也一記曰伊弉諾伊弉冊尊古語曰伊舍那
天伊舍那天姬
先生大八洲次生海神次生河神次生風神等以
降雖經廻一萬餘歲水德未露天下飢餓于時二柱
神天之御量事乎以豆瑞八坂瓊之曲玉乎捧九宮所化
神名號止由氣皇太神支千變萬化受一水之德生續
命之術故名曰御饌都神也古語曰大海之中有二一
物浮形如葦牙其中神人化生號天御中主神故號

豐葦原中國亦因以曰止由氣皇神也故天開闢之初
神寶日出之時御饌都神天御中主神與大日靈貴天照
太神二柱御大神豫結幽契永治天下或爲日爲
月永懸不落或爲神爲皇常以無窮矣光華明彩照
徹於六合之內矣已上
記文變化始終諸文明也神應前後可
得意也問變化難弁須示位耶答略有四
重其文如上所謂初則天御中主中則多賀自天移
地故稱二柱其大直日如云伊弉諾之所生亦云
豐受荒魂神耳終則月讀是成然男於此器界而
掌晝夜一頭兩目故稱三柱名爲荒魂在文可
見第四重則皇孫以來亦是豐受已如上升故或寄
本或亦約末皆曰豐受隨處可解問異名亦
多其意如何答名有惣別謂別稱者悉隨其德
○按此間或有
異則之二字歟號異也天地之間兼名御中主其胤芽之
稱云皇產或云水雲及御氣津或亦月神各如諸文
爰豐受者是惣名也並名本末如實錄文問豐受
義亦人臣耶答豐者大也如彼字書云々大亦皇也如
前斷簡云々故論所攝雖巨君臣而論能攝獨帝
祖若約天皇論王臣者兩祖各分已前弁畢
料簡地昇者問地神昇天其相如何答地神則陰而

天下「手捧」寶鏡「詔」皇孫「曰」視「此寶鏡」當猶「視」吾
同「床與」殿以爲「齋鏡」寶祚之隆當與「天壤」無窮宣
矣具如「前引」思「之可」知 問德倅「天地」是名曰

皇何以「天地」而稱「皇耶」答天地「一神未」論「兩儀」

三才起後「三皇現」前何者益大稱「顯」皇德「如」云「天地

大人」故指「天地靈明之本」而非「令」稱「皇神之名」故

兩皇者卽名「德也」天陽地陰受「德嘆」恩應「知皇則天地

分後伊弉諾尊除「穢之時再令」出「生日月兩神」是其天

地之荒魂也此本紀曰伊弉諾尊詔上瀨者速下瀨者弱而

初於「中瀨」滌之時所生之神「二柱神名」八十枉津日神

次大枉津日神「後爲」直「其枉」而所生之「二柱神名」神

直日神次大直日神「倭姬命世記曰」荒祭宮一座註曰皇

太神宮荒魂伊弉那伎大神所生神名「八十枉津日神」也

御形鏡坐神祇譜天圖曰多賀宮一座註曰伴神天下四方

國人夫等諸事漏落事悉神直日命大直日命聞直見直給

安久平久所「知食」也又本紀曰伊弉諾尊滌「御身」之時

所「生之神」三柱洗「左御目」時所生之神名「天照太神」

洗「右御目」時所「成名」月讀命「並坐」五十鈴川上「

謂」伊勢齋大神「洗」御鼻「之時所」生之神名「建速素盞

鳥尊」坐「出雲國杵築神宮」大田命傳曰荒祭宮一座註

曰皇太神荒魂神也伊弉諾尊到「筑紫日向小戸橘之櫛

原」而被除之時洗「左眼目」以生「日天子」大日靈貴也天

下化生名曰「天照太神」荒魂荒祭神也謂被戸神瀨織津

比咩神是也同傳又曰多賀宮一座止由氣皇太神荒魂也

伊弉諾尊到「筑紫日向小戸之橘之櫛原」而被除之時

○按本書 洗「右眼」因以生「月天子」天御中主靈貴也天

下化而名曰「止由氣太神」之荒魂「多賀宮是也亦洗」鼻

因以生神號速佐須良比賣神土藏靈貴也素盞鳥尊與合

力座給也云々故天地之用陰陽之化嘆之大也謂「之皇」

也但從「本致」而云天地論「其繼德」卽皇孫耳 問天

皇繼德俱受「兩神」何故多云「皇孫尊」耶 答如「云天

孫亦曰「皇孫」各如「第五六兩卷篇第五天孫專饒速日

尊第六皇孫瓊々杵尊」若從「天上」必爲「天孫」今從「地

下」故曰「皇孫」況論「皇德」雙兼「天地」故高皇產靈通

表而已

料簡天降者 問天神降「地其相如何」答天神則陽而

施「陰德」此德幽玄而非「可」述且約「大途」畧論「之者

地狹霧之含「德是也」天御中主普「地禪月」卽皇產靈乃

至皇孫故豐葦原漸得「爲」造是豐受耳 問若爾者豐受

似「地神」耶 答始終豐受何但限「地天地俱生陰陽

舊事本紀玄義卷第五 深祕卷也

沙門慈遍撰

六料簡詮義者夫聖智幽遠神道難達尙繁筆者還迷津
歟略詮義宜加料簡再論多端且約二十意

一料簡神皇

二料簡天降

三料簡地昇

四料簡互用

五料簡伏難

六料簡廟社

七料簡體用

八料簡通別

九料簡結前

十料簡生後

料簡神皇者 問於上科段雖明天皇未辨來由
是義如何 答皇其源者高皇是也尋來由者氣質元也
此氣累而成葦原惣爲天神地祇本祖所以皇者含靈
之地胤也當知德則曆代之國王也彼高皇者即天神也
天兼地者本一故也天地讓皇陰陽飯神兼稱天狹
霧地狹霧天地雖分神道未變陰陽隨化皇德施惠
神皇一人通被百王德侔天地是名曰皇々必通神
神定施皇天神地皇靈用無窮爲日爲月陰陽之惠爲
神爲皇天地之德陰德合皇天御中主陽道顯神大日
靈尊合此天地而爲一皇使彼道德而授三種

是故應知如神宣云天御中主與大日靈預結幽
契永治天下或爲日月或爲神皇授三種繼
繼百王位具如上引諸文可見天無兩日土
無二王稱之特尊謂之一皇問天地一皇而無
二主何故兩宮雙稱皇耶 答開闢以來歷代繼皇其
數幾世何限乎今稱特尊者唯飯當帝也而兩宮
則天地是一切國王之父母也彼親讓子則此子亦掌耳
何以兩宮之神號而押皇孫之德乎 問若如讓則
前可無歟三皇雙者彌不可乎 答世間官司尙異財
寶雖有前司豈妨當官況三皇者各論元也即此
三者天地人也謂太元神無名無狀即虛無靈非前非
後然元氣成天地之時順陰陽立皇神之名天則
天皇地則地皇兩皇讓德一人得皇例如漢土於盤
古王立三皇氏得立可解高皇產等三皇如次人
臣三皇俱合地德又天鏡等三神如次帝祖三皇俱
合天德侔此天地而現人皇即皇孫尊始降臨耳故
兩宮則天地之本皇也而一皇者受德之末皇也通被百
王其皇亦幾乎各每當代皆是特尊也天無兩日天
照皇神土無二主豐受皇神繼德皇孫々々領國之主
一皇々々無窮所以如云天照豐受預結幽契永治

此書者十卷中殊以四五九爲最祕仍於初學
仁不被免之經年序運懇志剩爲當道
企上洛之時被免之於五條富小路久木尾宿
所書寫之于時慈遍御宿所六角油小路法華堂
宰相律師御房也連々往還及數日相傳云々末代
明證神道奧旨而已

觀應二年正月日

(井上賴因翁藏本奧書)

承應二年八月日書寫了權神主延良判

右一編者雖爲慈遍法師之祕卷不非釋神道
之正書其旨記九卷之奧書焉

八垣摩慎之謹書

寶曆六年丙子十月五日

第イ

是以貧民則不知所_レ由臣道亦於焉闕矣書曰國將興聽_ニ於民_一將_レ亡聽_ニ於神_一々聰明正直而壹者也人而行_ニ非德_一民不_レ和神不_レ享矣神所_ニ憑依_一將_レ在_ニ德矣又曰令_レ施_ニ民之取_一好禁_ニ於民之所_一惡民之所_ニ欲_一天必從_ニ之民之所_一惡天必讓_ニ之云々

五

法能治_ニ世者夫法者禮也各親_ニ其親_一各子_ニ其子_一君臣樽節若無_ニ禮者非_一法也書云足寒者傷_ニ心人怨者傷_一國註曰足下貪而無_ニ禮也心乃神之主心傷則神散神散則身喪禮者國之本無_ニ禮則國亡矣憲法云群卿百寮以_ニ禮爲_一本其治_ニ民之本要在_一于_ニ禮上無_一禮下不_レ齊下無_ニ禮必有_一罪是以群臣有_ニ禮位次不_レ亂百姓有_ニ禮國家自治神宣云背_ニ法而不_レ行則日月照見坐違_一文而不_レ判則神明記識給人受_ニ天地之靈氣不_レ貴_一靈氣之所_ニ化乍_一種_ニ神明之光胤不_レ信_一神明之禁令云々但古者無_ニ文字_一故以_ニ漢才_一令_レ助歟今則彼道盛而還壞_ニ神教_一者也仍再興_ニ本誓_一宜_ニ直_一人心_ニ靈訓分明如_一神懷論云々六政必禁_ニ費者夫國家衰起_一自_ニ民之煩_一故明王政不_レ如_ニ禁_一費諸典各驗不_レ能_ニ具判_一萬事_ニ廻_一心宜_ニ辨_一損益_ニ爲_一公爲_ニ私唯有_一民憂_ニ付_一俗付_ニ眞偏行_一國費_ニ民叛則神不_レ受_一祀冥怒則人必違背學_ニ上而下奢天何應耶忘

他而自欲豈順_ニ冥乎所_一詮宗廟本誓在_ニ之取_一要爲_ニ國如_一神宣云_ニ都合天下之土毛或備_一宗廟之祭_ニ惟仁恩之忠孝以_一信爲_ニ德故神明饗_一德與_ニ信不_レ受_一備物_ニ焉故自_一宮作_ニ及_一諸神態_ニ皆禁_一國費_ニ況其餘乎例如_ニ彼書明_一極極不_レ削茅茨不_レ剪等_ニ而已

七

奉_ニ齋持_一國者凡朝家固者尊神鎮座宗廟安則天下亦穩兩宮之威光者百王之德陣也頻繁之祀何意_ニ之耶神宜曰神垂以_ニ祈禱_一爲_ニ先冥加以_一正直_ニ爲_一本任_ニ其本誓_一皆令_レ得_ニ大道_一者天下和順日月精明風雨以_ニ時國豐民安惣崇_ニ祭神祇_一住_ニ無_一二之心_ニ奉_一祈_ニ朝廷_一則天地與_ニ龍圖_一運長日月與_ニ鳳曆_一德遙海內泰平民間殷富各念祭_ニ神禮以_一清淨_ニ爲_一先以_ニ信心_一爲_ニ宗云々

八

神態守_ニ元者凡禁法雖_レ多不如守_一一是元始々即清淨每_ニ物有_一始終_ニ每_一事有_ニ淨穢_一若_ニ其淨_一則自以_ニ守_一之若_ニ其穢_一則改而用_ニ之淨者空也穢者有也隨_ニ有而有_一心隨_ニ心而用_一穢所以者何天神之未_レ至_ニ地之時頓見_一二法_ニ還歸_一一元_ニ惣厭_一生死之妄見_ニ令_一勸_ニ陰陽之正理_一故頗許_ニ上之空儀_一而強忌_ニ下之觸事_一如下神宣曰元々々入_ニ元初_一本_ニ々々住_一本心云々

坂津矣此邑有神忽生毒氣故人滅瘁由是皇軍不進也已上不得已皇孫凝念祈天子時彼處有人號曰熊野高倉下命乃夢天照太神示武雷曰葦原中國猶聞喧聲汝往而治武雷對曰雖自不行下昔才平國劍將平國矣天照太神詔高倉下命曰此劍名師靈命置汝庫裏宜獻天孫忽寤視庫內果有劍倒立即取進之天孫大悅而尋毒士悉醒矣故赴中州其山中嶮不知其路又夢天照太神訓皇孫曰遣八咫鳥宜爲導者寤有此鳥任飛遂至于菟田下縣矣又夢造天平賀可祭神祇乃如夢使椎根津彥弟猾之二人取天香語山土造八十口以祭天神地祇遂而於國見丘振軍於是取勝不輒于時忽然天陰而雨氷亦有金色靈鷲飛來止于皇弓弭其光如流電由是長髓彥軍皆迷眩失意矣宇摩志麻治命本知天神加而順天孫乃謀殺舅師以歸順焉復天神御祖所授饒速日尊天璽瑞寶十種皆奉天孫焉天皇甚以寵異矣已上說至則有感應而已遠被末代冥鑒可慎愍於天命違順如斯神代在今莫謂往昔皇孫不改何編冥應如三略者專舉政道至兵法者多勘陰陽如一卷者未嘗下兵始舉大數終約十二各論

相和具在口傳但六韜中廣教軍法若非武者巧無要也故光珠教文師盈虛國務大亂等意如斯如書曰夫武禁暴戢兵保大定功安民和泉豐財者也典力舊曲事繁不能細引神宣云提是靈劍平天下惡事者表武威必治天下也天授人與其德稱武所詮無私如前而已

群民順惠者夫無守文者草創無由其守文者仁慈是也縱免萬死其身難持縱值一生其命易留神宣云人乃天下之神物須掌靜謐心乃神明之本主莫傷心神故書曰宗廟之本在於民之治亂在於司其司是政其政是惠一慈普則萬民順耳當知群機譬如人兒自非慈者何昵親乎即如書云王者以四海爲家以萬姓爲子故神宣曰度萬品如一世間人兒宿母胎也云々天地非外開闢在已王民互轉何守一也色無定體隨心所變雖世下賤莫忘本願憲法云背私向公是臣之道矣凡人有私必有恨有憾必不同非同即即以私妨公憾起則違制憲法初章云上和下諧其是謂歟又曰其百姓之訟一日千事一日尙爾況累歲乎今治訟者得利爲常見賄聽讞會饗忘僻故有財者之訟如石投水乏者之訴似水投石

華原中國受_二日嗣_一聖明所_レ覃莫_レ不_二砥礪_一云々故地神則昇_レ天彼天神則降_レ地其顯主則曆代皇孫即日嗣者三種神器今坐_二伊勢_一神鏡并尾州_一寶鏡也其冥主則地祇靈道仍神者第一舉_二天神之初_一是皇胤之祖也第八舉_二地祇之終_一即定國之初也其中間者各如_二本紀_一而於_二軍戰_一隨現神也惣所_レ鎮者天神_四已上地祇_四以下今齋_二神祇官_一而已

特尊伏_三敵者夫真氣大和自感_レ帝報_二妄業_一群士何違_二天命_一皇產降_レ靈國無_二主_一神胤秀發是稱_二特尊_一所以輪王出_レ世則輪法摧_レ怨明君在_レ位則明德照_レ闇雖_レ然爲_レ正有_レ邪不_レ可_レ不_レ伏爲_レ善有_レ惡不_レ可_レ不_レ斷是以天神未_レ洗_二穢惡於小戸之流_一地神始競_二邪正於高天之原_一加_レ之皇御孫尊遣_二神_一伏_二大己貴_一磐余天_一萬軍_一誅_二長髓彥_一神代之爭且置_レ之耳人世之軍粗論_レ之者正哉吾勝尊以_二栲幡姬_一爲_レ妃令_レ生_二兩太子_一也謂櫛玉饒速日尊與_二彥火瓊々杵尊_一是也兄饒速日尊於_二彼天上_一以_二天道日女_一爲_レ妃令_レ生_二天香語山命_一亦云_二產命亦_一號_二高倉下命_一與_二此太子_一相共先令_レ降_二臨河內國_一之時娶_二長髓彥妹御炊屋姬_一令_レ懷_二妊宇摩志麻治命_一亦名_二味間見命_一亦稱_二未_一誕生_二而神去_一皁然兄香語山命則屬_二神可美真千命_一

武天皇_一而爲_レ臣矣弟可美真千命者舅長髓彥命奉_二養育_一爲_二葦原主_一故對_二天皇_一令_レ諱而已

神武天皇者皇孫第四代也謂不_レ葺合尊第四皇子也母曰_二玉依姬命_一海童神之少女也天孫生而明達意雄如矣年十五立爲_二太子_一長而日向國吾田_一邑吾平津媛爲_レ妃誕_二生手研命次研耳命_一及_二年卅五歲_一謂_二兄及皇_一皇_一太子等_一曰昔我天神高皇產靈尊大日靈尊舉_二此葦原國_一而授_二我天祖皇御孫尊_一皇祖皇考乃神乃聖積慶重_二輝多歷_一年序_二自天祖降跡_一以迄_二于今_一即百七十九萬二千四百七十餘歲也亦聞鹽土翁曰東有_二美地青山四周_一蓋是六合之中歟何不_レ都_レ之諸皇子曰理實灼然恒以爲_レ念乃越_二山渡_一嶮三年入_二中州_一于_レ時長髓彥遣_二人言昔有_二天神乘_一天磐船_一自_レ天降_二焉饒速日尊是也娶_二吾妹炊屋姬_一而遂有_二兒息_一名曰_二宇摩志麻治命_一今次_二饒速日尊_一以爲_レ君矣於_二一國土_一豈有_二兩主_一所以來者必奪_二我國_一乃起_二軍兵_一以戰彥五瀨命中_二矢而薨_一天孫憂曰我等爲_二日神子孫_一向_レ日而逆故也乃引_二軍退移_一海中卒遇_二暴風_一於是稻飯命恨_二海神_一乃拔_二劍入海_一化爲_二鋤持神_一復_二三毛野命蹈_一浪秀_一而行_二常世鄉_一矣天孫獨與_二皇子手研耳命_一纔引_二軍方至_一熊野荒

國已知_レ何辨_二是爲_三繼帝_一即三種實此三種者兩宮即王彼八神者八洲擁護兩宮一王即成_三三才_一令_三此三才伴掌_二一德_一故神實即同_レ床共_レ殿故每王則同_レ體共_レ帝謂兩宮者天地之初彼三種者繼德之君能々可_レ辨返々可_レ了_レ其意散則其事妄哉仍玉則天也_{命神實}太玉_也神實_也地也_也神實_也是爲_二父母_一天_神以得_二天子_一皇孫_{其胤寶}鏡_{兩宮和明}其鏡即王_{如已上列}又鏡則天_{無相玉則地德}以_{萬物}以_{神紀等}人_{勢知}冥顯篇_{而掌}三才_又劍則天_空斷_{迷鏡則地靈}陰陽_以玉爲_人心_{虛實}而惠_{萬民}所_詮三種即是一王惣掌_{三才}以備_{一人}即是高皇產靈尊之所_{定置}之顯國主也然世下後漸畏_{神威}奉_移其實於_{今伊勢}耳

天皇鎮魂八神者日域守護諸神也是亦高皇產靈尊之所_{定置}之冥國主也但冥國則地祇神也高皇產靈則天神祖也雖然皇產必成_{地德}故於_{寂初}奉_齋此神何者太元也論_{其神化}天御中主國常立尊令_稱天狹霧地狹霧同體空神不可_{前後}然於_{一空}而現_{三才}即於_{其天中}所_芽元氣是號_{高皇}其產_{有誤}漸降_{而造}葦原_如神皇系圖曰_{元氣所}化水德變成爲_{因爲}果而所_露名_{天御水雲神}任_{水德}亦名_{御氣都神}是水珠所_成即月珠是也亦號_{大葦原中津國主}豐受皇神也

云々豐則豐葦中則中主皇則皇產受則繼皇故豐受者即名_{二本末}何以得_知如實錄云_{天照太神}之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶_{皇天御中主尊}長男高皇產靈尊之女栲幡豐秋津姬命_{一生}天津彦々火瓊々杵尊故皇祖高皇產靈尊特鐘愛以崇養焉因以受_{皇天尊號}稱_{皇御孫尊}也遂欲_{皇孫尊}以爲_{大葦原中國之主}矣高天原神留坐_{天御中主神}天照太神正哉吾勝尊_{皇親}天御中主神漏伎_{亦名高貴神}神漏美命_{津姬命}以_{八百萬神等}神集々賜而神議々賜焉我天皇御孫尊豐葦原水穗之國_{安國}度平久所知食度事依奉_支乃至亦曰天照太神與_{天御中主}則是天孫之大祖也以_{高皇產靈神}爲_{皇親神}漏岐也謂親者祖也故屬_{二祖尊號}名曰_{皇孫}也故豐受者天御中主神皇御孫尊_{二柱惣名也}豐者_{天御中主尊本號}受_{因以}者_{皇孫尊承}得_{尊號}也

名_{三大八洲}而稱_{豐葦原中國}其此緣也_{云々}亦如_{御鎮座本紀}曰_{高貴大神}勅宣久以_{皇孫命靈}宜_崇大祖止由氣皇太神之前社_{仍爲}相殿神座_{云々}天性含_地其元祖也皇產詔命良有_{由也}又神紀曰_{皇天倭姬內親}王託宣久各念天地大冥之時日月星神像現_{於虛空}之代神足履_{地而興}于天御量柱於_{中津國}而上去下來見_{三六合}天照太神悉治_{天原}耀_{天紘}皇孫尊專治_三

正有之也惣應帝德各現威用同床共殿良有以也於是倭姬命世紀曰崇神天皇以往九帝同殿共床然漸畏其神勢共住不安故令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇裔二氏更鑄造鏡劍以爲護身御璽焉是今踐祚之日所獻神璽鏡劍是也云々然於寫本中其內侍所者代々之靈驗度々之火性云々其實劍則沉西海底其神璽則于今御座云々抑正本中內侍所者內宮御體神璽太玉外宮相殿但寶劍者古語拾遺曰纏向日代朝令日本武命征討東夷仍枉道詣伊勢太神宮辭見倭姬命以草薙劍授日本武尊而敎曰慎莫怠也日本武尊既平東夷還至尾張國納宮寶姬淹留踰月解劍置宅徒行登膽吹山中毒而薨其草薙劍今在尾張國熱田社倭姬世紀亦同此歟三種神璽各崇于靈宮百王繼德專足于冥鑒況心御柱別雖有鎮地凡皇道惠通如令上判云々仍下七箇准此趣不繁筆墨得意而已

人王崇神者夫於神代者皆是神也水不濕水誰以爲靈德乎至人世者悉是人也水能濕物何不崇祖神哉所以衆生假和陰陽之精兮從冥到顯當知有形必受天地之胤兮從神得人是神武天皇始祭

神靈奉崇皇祖是人王首耳神皇系圖云天照皇神誓曰吾日太子如八咫瓊之勾以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山川海原乃提神劍平天下肆以名三種神璽也汝敬承吾壽手拘流鈴以御無窮無念余祖吾在鏡中矣或臨寶位以鎮元々上則答乾靈授國之德下則弘皇孫養正之心然後兼六合以開都掩八紘而爲帝宅詔給矣神日本磐余彥天皇賴以皇天之威甲子歲春二月朔甲申詔曰我皇祖之靈也自天降鑒光助朕躬今諸虜已平海內無事可下以郊祭祀天神用申大孝上者也乃立靈時於鳥見山中用祭皇祖天祖矣亦天富命率諸忌部捧天璽鏡劍奉於正安殿天種子命奏天神壽詞此神世事而已天皇鎮魂八神

一高皇產靈神此尊者極天此尊者極天之皇祖帝也

三魂留產靈神玉作

五足產靈神生魂足魂道反魂

七御膳神保食神

右八柱神則八洲守護驗神八齋靈命八心府神座故式爲皇帝之鎮魂神矣以下略之本紀勘之

問伊勢兩宮天地宗靈何故此中不奉齋耶答天皇傾

云謂海寶者陰所極也彼天寶者陽所極也今此珠者陰陽一極論其德者天地一心所以天御中主豐受外宮大日靈尊天照內宮相和奉授皇孫而已當知天地神皇並護一人其神璽者百王心也各隨帝德應現無窮但契元心須知珠心其無心者非如木石也即名無自他親疎等若取要者無私之心也微有執心不知餘心其自他心是名民心既有隔心非圓寶心謂一人心敢非常心以百姓心爲心故也是心理心萬寶無礙別心事心不自在也無心之心無私之心各隨萬事而斷其妄是名寶劍即天御量正直清淨即天下本如秘府曰用天瓊玉戈而降伏從前妄想到穩密清淨本地故一心不亂萬法無咎只切忌不淨猛利人耶云々其心可解理珠事劍事理無礙邪正分明是名寶鏡所謂寸鏡而浮萬像於無心心治無相相寶基本紀曰鏡者靈明心鏡也萬物精明德也故照混沌之前歸元始之要斯天地人之三才當受之以靜求之以神視之以無形而顯實形故則以無相鏡爲神明御正體也云々文意可知所詮三種德在一空一空珠現事事空爲劍空事歸理空鏡化物曰一治世如神懷論今且專辨天皇寶祚即位印明亦如別紙

理珠天王智劍地臣天地明鏡人民歸惠故鎮心柱而收三才即與木德而立中主天則寶珠以上爲正其口四寸掌四德也地則寶劍以下爲正其口五寸掌五行也天地圓口俱表空鏡其體人形卽爲五尺內外心柱本是一氣而分陰陽以爲兩基如彼御鎮座本紀曰伊弉諾伊弉冊尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺都合天心而與木德歸皇化而助國家云々木則掌空元氣化用五行之始萬物之起柱則正直神靈以木歸元以主表帝當知三種即一心柱稱天御量鎮一朝靈元々今德被百王本本分惠齊四海瓊々杵尊亦杵獨王唯依領此御量柱耳如彼倭姬命世紀曰心神則天地之本基身體則五行之化生肆元元入元初本本任本心日月廻四洲雖照六合須照正直頂詔命明矣問三種一空何與木德況鎮色體違心理歟答曰大空非空元氣累累氣清陽爲天濁陰爲地有緣則有迷故神態自然而興有病則有藥故大悲任運而發是以自天神之終及地神以來忘穢勸淨捨邪歸正雖然地神二代未降下界唯至皇孫化生於葦原聊現欲體施惠於群萌故傳三種之神財以繼百王之踐祚卽色爲空卽地而天國家靈命

或云_二天孫_一或稱_二皇孫_一未_二互_一人臣俱被_二帝德_一同領_二天下_一即由_二異本_一無_二天照太神與_一高皇產靈_二共所_一以_二所_一以_二二字異_一約_二天神_一則天讓_二日故受_一天孫之名_二地禪_一月

故受_二皇孫之稱_一次亦約_二地神_一則受_二天照_一故得_二天孫之號_一受_二皇產_一故得_二皇孫之姓_一此紀第五云天照太神高皇產靈尊相共所生故謂_二天孫_一亦稱_二皇孫_一然同第七卷曰上則答_二乾靈授_一國之德_二下則弘_一皇孫養_二正之心_一云々如何是答_二乾靈_一如_二天之無心而降_一一雨_二如何是弘_一皇孫_二如_一地之無念而養_二萬物_一上冥_二神天_一今大慈與_二樂授_一國之德_二下契_一皇地_二今大慈拔_一苦養_二正之心_一如云_二皇有_一至德_二之定名也_一又曰德侔_二天地_一故名曰_二皇所_一以_二皇者即名_一大義_二如_一實錄云_二天大地大人亦大_一故大象_二人形_一坐也老子經曰報_二大象天下_一註曰執守也象道也云々當_二知無心即大心也_一若微有_二私是民心也_一既有_二民心_一何爲_二天子_一若背_二天心_一何稱_二神孫_一寶山記云_二天子則天地位故德侔_一天地_二則稱_一天子_二也_一天者父也地者母也因_二之以_一男爲_二父_一以_二女爲_一母大慈大悲天地孝也如_二唐明曰_一上帝者天也天帝者天也天子天位天祚德侔_二天地_一者稱_二皇帝_一天祐_二子之號稱_一天子_二黃帝以_一靈紀故爲_二靈師_一云々故以_二天地_一而爲_二父母_一受_二一人德_一被_二百

王惠_二應_一知天地即是一人天神地皇並授_二一位_一故繼_二帝位_一必有_二神璽_一也所謂_二劍鏡寶珠_一三種是也世紀曰御饌都神與_二大日靈貴_一豫結_二幽契_一永治_二天下_一言壽宣布大葦原千五百秋瑞穗國吾子孫可_二王之_一地安國止平久我皇御孫之尊天降所知食止事依奉_二于_一時以_二八坂瓊曲玉八咫鏡及草薙劍_一三種之神財_二授_一賜皇孫_二永爲_一天璽_二且視_一此寶鏡_二正當_一猶_二視_一吾可_二與同_一床共_二殿以_一爲_二齋鏡_一寶祚之隆當_二與_一天壤_二無_一窮矣神記曰天地初發之時大海中有_二一物_一浮形如葦牙其中神人化生名_二天御中主神_一故號_二豐葦原中津國_一亦因_二以_一曰_二豐受皇太神_一也與_二天照大日靈尊_一奉_二此以_一八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍_二三種之神財_一而授_二賜皇孫_一爲_二天璽_一云々三種雖異_二一空爲_一體所謂_二寶珠其內無邊故雨_一萬寶_二無_一有_二窮盡_一苟順_二凡情_一莫_二生_一寸想於_二彼仙壺_一尙見_二世界_一況神璽中豈殘_二天下_一如_二止觀曰_一如意寶珠天上勝寶狀如_二芥粟_一降_二無量寶_一蓋色法尙能如_二此_一況心神靈寧不_二具_一一切法_二耶_一云々如_二大論曰_一古佛舍利變成_二如意寶珠_一寶珠變成_二米_一云々然此珠者元神意也抑亦應_二知萬物靈也_一色法而非_二色法_一即備_二妙心_一此意亦非_二常心_一何比_二凡慮_一又如_二書曰_一如意寶珠龍王重寶在_二九重淵_一驪龍領下

舊事本紀玄義卷第四 深秘卷也

沙門慈遍撰

天皇領國者天御量德也天含三才禪德一人凡被三
 百王惠齊四海故應天地普利天下是名御量
 以鎮御柱上天下地乃瓊玉矛其體人形三才如上云々
 神皇系圖云從國常立尊迄至伊弉諾伊弉冊謂天
 神七代矣爰蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命天
 以授天獨矛而諾尊立於天浮橋之上二神共計曰底
 下豈無國歟迺以天獨矛指下而探之獲滄溟其矛
 鋒滴瀝之潮凝成一嶋一名之磯馭嶋二神於是降居
 彼嶋與八尋殿神祇寶山今此處也因欲共爲夫婦產生洲國
 及山川草木等上後生一女日照神三男月神姪子素戔嗚尊或爲日爲
 月永懸而不落或爲神爲皇常存以無窮矣倭姬世
 紀曰天地開闢之初神寶日出之時御饌都神與大日靈
 貴豫結幽契永治天下言壽宣肆カガミ或爲月爲日永
 懸而不落或爲神爲皇常以無窮光華明彩徹於六合
 之內以降高天之原神留座之皇親神漏岐神漏美命以

天八百萬神等乎天之高市爾神集々給比大葦原千五百秋
 瑞穗國波吾子孫可王之地奈利安國止平久我皇御孫之尊
 天降所知食登事依奉岐云々天皇兩孫領國如斯將
 明此德宜用八意

一皇位繼德 二人王崇神 三特尊伏敵

四群民順惠 五法能治世 六政必禁費

七奉齋持國 八神能任元

皇位繼德者夫陰陽作形精魂續命源受于天性流
 分于群生如書云天地之間有真氣大和之氣是也
 有五氣陰陽之氣是也又曰皇是無爲者也王是有爲者
 也皇則天地之首以靜謐爲用也云々是以一尊既受
 天地之性百王皆得神胤之德謂天祖內含精明未
 露顯號國常立尊即帝王祖是天讓日天狹霧也外呈
 地德氣形乃現稱天御中主尊即人臣祖是地禪月地狹
 霧也共天地德自得王臣其次第義如第一卷云云
 夫國常立尊與天御中主分爲王臣雖爲元祖天御
 中主雙兼兩祖何者天御中主之長男號曰高皇產靈
 尊即名靈魂命今イ有二尊受其詔命此是應知定
 續陰陽又高皇產靈之女栲幡千千姬者正哉吾勝之皇
 妃也吾勝尊者天照太神之太子也故此神孫必具兩性

也人繼_二日胤_一和_レ之是也正直任_レ本清淨歸_レ元神態與_レ世聖化在_レ之故隨_二國穢_一彌用_二清淨_一況心正直自拜_二淨神_一其初天神伊弉諾尊尋_二伊弉冊_一追_二至黃泉_一如_下見_二汗穢_一還令_中祓除_上然出_二生地神_一而已又地神首諸神達集各令_下萬罪歸_中素盞烏_上以_二千座淨祓_一除_二穢惡_一以_二無相鏡_一奉_レ顯_二神體_一後皇孫尊傳_二此神實_一令_レ降之時天兒屋根命先捧_二幣帛_一亦用_レ之耳所_レ除之穢卽諸惡也所_レ用之淨卽萬善也御鎮座本紀云人乃受_二金神之性_一須_レ守_二混沌之始_一故則敬神態以_二清淨_一爲_レ先謂從_二正式_一爲_二清淨_一隨_レ惡以爲_二不淨_一惡者不淨之物鬼神所_レ惡也倭姬命世紀曰心神則天地之本基身體則五行之化生_{利奈カハルガコヘニハシメテ}肆_レ元_レ々入_二元初_一本_レ々任_二本心_一與神垂以_二祈禱_一爲_レ先冥加以_二正直_一爲_レ本利夫尊_レ天事_レ地崇_レ神敬_レ祖則不_レ絶_二宗廟_一經_二綸天業_一又屏_二佛法息_一奉_レ再_二拜神祇_一禮_二日月廻_二四洲_一雖_レ照_二六合_一須_レ照_二正直頂_一止詔命明矣_{已上紀文}神態非_レ外正直在_レ心須_下因_二淨元_一知_中皇道_上也

舊事本紀玄義卷第二終

女下照姬_レ便留_二其國_一至_二于八年久_一亦不_二復奏_一追遣_二無名雉_一天稚彥乃射_レ之此箭還立_二胸而死矣天照_一虛實_二冥鑒_一善惡_二業感表_一之甚可_レ恐也云々其後遣_二經津主神武甕槌神_一于_レ時大己貴等奉_レ避_二此國_一云々天神地祇各領_二冥顯_一其文可_レ見如_二前已辨_一焉如是等_二相敢非_一天儀_レ應_レ知遠表_二穢地_一而已天神之終則如_レ現_二生死之穢_一地神之未_レ終顯_二海陸之別_一遠鑒_二末代_一示_二不信之咎_一廣經_二中間_一舉_二無盡之誤_一稍去_二清天_一漸趣_二濁地_一將_レ歸_二真寂_一悉導_二妄亂_一雖_レ化_二濁亂_一神靈何變須_二因_一表_二穢知_一通淨_一也

四、本未通淨者陰陽源流也泡流尋_レ源者神靈大用也其神大神人亦大人天大地大兩大德一故大字則以_二一人_一也若大頂_一一則成_二天字_一也所以天者_二持_レ人也應_レ知天亦天地人也德侔_二天地_一而爲_二一人_一惠被_二民人_一而作_二百王_一三才乘心_○_{作心來}_○一本上下道通四海領掌君臣德收_二一人_一惟明則民人直也善神施_二威惡鬼何競如_一莊子云_二古之人在_二混芒之中_一與_二素世_一而得_二澹漠焉當_一是時也陰陽和靜鬼神不_レ擾四時得_レ節萬物不_レ傷群生不_レ夭人雖有_レ知無_レ所用_レ之此之謂_二至一_一任_二其自然_一而已故神書曰崇_レ德辨_レ惑而必然_レ以此備_二之惠_一群生_一以正

法神而通_レ之天地不_レ能_レ揜密而行_レ之鬼神不_レ能_レ測其演_二法惟是以_一道德_二謝天子諸侯歸_一神明_二祈_一國家太平_一是本來大人耳云々原夫一通之道其源開_二乎天性百王之惠_一其流受_二于神孫_一元々通_二神明_一本々施_二靈德_一云何元々莫_二分_一流云何本々可_レ歸_二一源_一源清淨一本_二正直_一物悉正直故立_二心御柱_一爲_二百王固興_一天御量_二調_一萬民業_一其初二尊立_二天瓊矛_一爲_二國柱_一者卽此元也鎮座本紀云伊弉諾伊弉冊尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合_二天心_一而與_二木德_一歸_二皇化_一而助_二國家_一故皇帝之曆數天下之固常磐無_レ動三十六禽十二神王八大龍神常住守護坐依_二損失_一有_二天下厄_一實基本紀曰心御柱一名忌柱一名天御量柱是則一氣之起天地之形陰陽之源萬物之體也故皇帝之命國家之固富物代千秋萬歲無_レ動下都磐根大宮柱廣敷立稱辭定奉焉_○_{已上書文}天下之本國家之固示_レ之正直施_レ之清淨云何正直爲_レ化不_レ曲云何清淨爲_レ自不_レ用夫天無_レ私而覆_二千品_一_{清淨心神地無_レ心而調_二萬像_一_{正直色微}天下爲_二天下之天下_一非_二一人之天下_一萬民非_二萬人之萬民_一爲_二一人之萬民_一其身直而無_レ影曲_二其心清而色顯_一外影字隨_レ日色字人也意日昇_レ空神光照_レ色日照_二天地_一呈_レ之直}

體_レ冥_二通_一四生_二若達_一靈性_一同異無_レ妨自_レ非_二神力_一何
通_二海陸_一無目_レ籠者入_二冥界_一也例如_二仙壹見_一乾坤外_一
鹽土翁者自心魂也即如_二神紀_一明彼語曰願爾諸聞給_レ倍
吾是天下之土君也故號_二國底立神_一也吾是應_二時從_一機
比化生出現之故號_二氣神_一吾亦根國底國利與_レ備疎疎物_レ仁
相率守護之故名_二鬼神_一吾復爲_二生氣_一仁授_二與福壽_一之
故名_二大田命_一吾能反_二魂魄_一之故號_二與玉神_一悉皆自然
之名也物皆有_二効驗_一我將辭_二訖_一遂隱去矣與玉神言壽竟
于_レ時倭姬命皇太神坐_二正宮之西北角大地輪之中臺_一
祝祭也_{紀文}_{已上}所_レ舉變作悉此鹽土効驗順_レ物靈德如_レ斯
夫以天去地來顯外有_レ冥兩儀雖_レ和萬物難_レ持是以神
性不_レ變而靈光異_レ影應用無_レ窮而機見隔_レ域其域多中
既通_二海陸_一其通變內殆融_二冥顯_一正其所_レ現故云_二神
人_一亦其所_レ治故曰_二神代_一鵜草葺不合未_レ論_二通德_一神
武以降人王而已神源雖_レ淨人流而穢須_レ因_二冥海_一知_中
顯表_上也

三、始終表_レ穢者陰陽變化也於_二變化中_一且出_二海陸_一海
則陰用陸則陽用兩儀和_二三々成_一萬物_一聞_二香討_一根者
淨穢本_一也元氣雖_レ淨陰陽現_レ穢是以_二尊始顯_一男女
之形_一示_二穢相_一是元氣化用也然立_二瓊矛_一爲_二中柱_一者

天御中主國常立耳開闢以來清_レ天濁_レ地所_二以天神地
神也又伊弉諾尊追_二伊弉冊尊_一而到_二黃泉_一乃見_二穢國_一
是即示_二天神下_一於地祇_一各領_二冥顯_一之義_上者也天照太
神詔曰豐葦原瑞穗國者吾子孫可_レ知_〇知_一本_レ作_レ王之地也_{云々}
是以太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊奉_レ勅天降之時
高皇產靈尊御女豐秋津栲幡千千姬命爲_レ妃誕_二生天照
國照彥天火明櫛玉饒速日尊_一奏曰同所生之兒以_レ此可
_レ降矣詔而許之天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一乃率_二供
奉三十二神_一乘_二天磐船_一而降_二河內國河上峰_一爰娶_二
長髓彥妹御炊屋姬_一爲_レ妃令_レ妊_二胎宇摩志麻治命_一未
及_二產生_一而神去矣天性雖_レ常而下現_二生死之相_一云々
高皇產靈神則詔_二速瀛神_一曰吾神御子饒速日尊使_二葦
原國而有_二疑恠_一汝往而察_レ之奉勅而降乃復命焉于_レ時
天祖於_二彼天上_一處_二其屍骸_一日七夜七而哀泣矣老少不
_レ定未_レ上_二天之義_一前後相違示_二下地之相_一云々亦天照太
神謂葦原中津國者御子正哉吾勝可_レ爲_レ王之地也詔賜
而於_二天浮橋_一臨_二照之_一曰於乎聞_二喧擾之響_一彼地未
_レ平具以陳_二不降之狀_一矣於是高皇產靈尊召_二集八百萬
神_一相議以遣_二天穗日命_一然媚_二附於大己貴神_一雖_レ及_二
三年_一尙未_レ復命_一矣重遣_二天稚彥命_一此神娶_二大國玉神_一

牟羅雲命取_二太玉串_一天三十二神前仁相副從_比各開_二天戶_一岐披_二雲路_一介駢仙蹕比天之八重雲伊頭之千別爾千別天降臨于筑紫日向高千穗穗觸之峯而到吾田笠狹之崎_一矣其地美女號_二鹿葦津姬_一是大山祇神之兒也皇孫請_二之山神奉_一之一夜而娠遂生_二三兒皇孫不_レ信非_二吾子_一歟故女忿恨作_二無戶室_一入_二居其內_一而誓之曰若非_二天孫之胤_一必當_レ竊若實天孫之胤火不_レ能_レ害即放_レ火燒_レ室其火初明而誥出兒名火明命次火盛時而誥出兒名火進命次火衰避而誥出兒名火折尊亦稱_二彥火々_一出見_レ尊此尊有_レ德特爲_二國主_一_{地神}何者兄火進命自有_二山幸_一弟火折尊自有_二海幸_一爰兄弟相議而試易_レ幸兄取_二弓矢_一入_二山_一弟亦取_レ鉤到_レ海然互不_レ幸兄火進命遂還_二弓矢_一弟火折尊爲_レ魚被_レ喰而失_二其釣_一兄強責_レ之弟不_レ能_レ覓即以_二橫刀_一鍛作_二新鉤一器_一返_レ之兄尙忿曰何依_二多少_一非_二吾故鉤_一不_レ可_レ取矣火々出見憂_二吟海畔_一時鹽土翁來而問_レ之火々出見具以答_レ之故彼翁惑_二此憂苦_一作_二無目籠_一即納_二此尊_一沉_二于海底_一忽至_二龍宮_一於_二其門前_一而有_二一井_一於_二其井上_一有_二一桂樹_一火々出見_レ彷彿_二樹下_一有_二美女_一來欲_レ汲_二水_一乃仰視而驚白_二父母_一爰請尋_レ之具以答_レ之於是海神乃集_二大小魚_一以逼問

僉曰不_レ識唯有_二赤女_一疾_レ口不_レ來因召探_レ口果得_二失_一鉤_二因娶_二海神之女豐玉姬_一已經_二三年_一欲_レ還之時海神語曰與_二鉤於兄_一之時呼曰_二貧鉤_一然後與_レ之復授_二潮滿玉及潮涸玉_一而誨曰_二濱_一潮滿珠_一潮忽滿若兄悔者濱_二潮涸玉_一則潮自涸如_レ此逼惱兄自伏_二將_レ去之時妻豐玉姬謂_二天孫_一曰吾方娠子產生不_レ必久當作_二產室_一以相待矣乃還_二葦原_一方如_二彼教_一云々故兄_二火進命_一既被_二厄困_一自伏罪曰從_レ今以後吾將爲_二汝俳優之民_一請施_二息活_一於是隨_二其所_一乞_二遂救_一之矣云々天孫依_二豐玉姬_一之語早以_二鵜羽_一而葺_二產屋_一既如_二約束_一遂來到矣以下其未_二葺合_一而產生之故其名曰_二彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊_一_{地神}將_二產生_一時告曰請勿_レ視_レ之天孫猶不_レ能_レ忍竊往觀_レ之然女化_レ龍以甚慙曰若不_レ辱者則海陸相近無_レ隔今既顯_レ之何以爲_レ呢乃草裹_レ兒棄_二之海邊_一永閉_二海途_一而徑去矣尙憐_二其兒_一故後遣_二女弟之玉依姬_一養_レ之者也然此鵜草葺不合尊以_二其姨玉依姬_一爲_レ妃而生_二四兒_一初彥五瀨命次稻飯命次_二三毛野命_一次磐余彥命此第四命即號_二神武天皇_一是乃人王之首坐也凡厥閉_二海途_一來神代既訖靈德方隱隔_レ冥故也龍神威用自在諸趣爲_二火折命_一且現_二一道_一當_レ知變化由_二同類_一矣見性具_二異

顯_二兩儀_一從_レ天降_レ地各化_二萬物_一以_レ妄爲_二酒以_レ迷爲_一
醉取_レ覺云_レ斬取_レ洲云_レ八古婆老翁本理陰陽也尊男
姬女始知_レ陰陽歸_一是稱爲_レ娶雖_レ死又生是名爲_レ子
故大己貴而幽主也故此神現而父尊不_レ見也但又於_二此
尊_一須_レ有體用_二粗明_一文義_一也已如_二前辨_一其體通_二攝一
切惡性_一故諸妄業無_レ非_二此尊_一故云人民山河悉憂_二其
用_一別指_二素蓋烏尊_一誰疑_レ有_レ異方現_二此事_一蛇劍既存
何無_二其尊_一今舉_二一例_一諸分用可_レ解見_二裏識_一表以_レ邪
顯_二正善惡兩神共可_一比知_二天照太神雖_一無_二降臨_一其象
坐_二鏡素蓋烏尊_一亦不_レ顯現_二其體在_一劍況於_二天神_一尙
論_二靈珠_一靈性乘_レ物神應有_レ據然同授_二皇孫_一遠傳_二百
王_一冥顯各化_二人倫_一無_レ違其顯覆_二冥譬如_一懸_二簾其冥照_一
顯如_レ居_二簾內_一仍水清月宿感應明也_○感應明也一本依
罪有_レ罰甚可_レ恐也千品雖_レ異皆是受_二天地之光嵐_一萬
物雖_レ遍_○通悉無_レ出_二陰陽之變化_一若寒若熱增減
不定作_レ男作_レ女生死無_レ窮遊水之鱗住岡之獸已限_二
冥顯_一他界爲_レ冥々極而顯々遍冥々顯極而冥々遍顯々
也能達_二靈性_一必通_二神德_一須_レ因_二冥顯_一知_二海陸_一上矣
二、海陸閉途者即冥顯堺也海則冥陰陸則顯陽雖_レ海而
陸_○陸故冥遍_レ顯雖_レ陸而海故顯遍_二冥然迷_一冥顯_二而

隔_二海陸_一々々若通_二冥顯_一無_レ礙當_レ知陰陽廣化_二萬物_一
所以天地唯在_二一心_一々々能明白契_二神矣若乘_一妄情_一
則妨_レ事業障可_レ恐傳聞古者欲念未_レ起其心互通_二身
帶_一光明_一無_レ假_二佗映_一是故天地清淨壽命無量飛行自
在如_二魚遊_一水然而妄心漸起淨身失_二光天下轉_一闇神明
照_二國神皇實錄曰從_一國常立尊_二至_一惶根尊_二天神六代
之間則有_二名字_一未_レ現_二尊形_一五位神坐其後轉變而合_二
陰陽_一有_二男女形_一應化相生而專_二心神_一珠以_二清淨_一爲_レ
先神態與焉實基本紀曰倭姬皇女託_二宣神主部物忌
等_一慎無_レ懈正明聞焉惣而神代者人心聖而常也直而正
也然自_二地神之末_一天下四國人夫等其心神黑焉分_二有
無異名_一而心走使_レ無_レ有_二安時_一云々精知_二神力未_一廢謂_二
之神代_一義當_二聖人_一也靈德已隱謂_二之人世_一即稱_二凡
夫_一也是以至_二地神_一終無_レ得_二自在_一永閉_二海途_一不_レ通
而已天照太神_○地神詔曰葦原中津國者吾子孫可_レ爲_レ主
之地也正哉吾勝尊_○地神第二之太子皇孫爾就而治之云々皇御
孫尊_○地神第三天降之時伴神天兒屋根命掌_二解除_一而宣謹請
再拜諸神等各念倍此時天地未_レ遠乃以_二天柱_一舉_二於
天_一謂諸法如_二影像_一清淨無_レ假穢_二志取訖不_一可_レ得須
皆從_レ因業生_○利諄辭倍利太玉命捧_二青和幣帛白和幣_一介天

啼素盞烏尊答曰欲從母之根國而已彼母尊者稱黃泉大神故根國者指黃泉也卽是冥道謂爲異界一感見雖隔何有別處然迷恐生死妄隔冥顯故自分神祇各度含識天神領顯皇孫治世地祇領冥素盞烏尊流若論生死冥顯互轉陰陽變化卽離可了且具冥界彼素盞烏尊故趣黃泉就母根國謂其道間行出雲國見箸流至簸之河上子爰老翁老婆置小女於其中間而啼哭矣尊尋其由子時報曰我有八女每一年一度八頭蛇來吞之今也當之然素盞烏尊乃聞廻謀令蛇醉酒拔十握劍斬爲八段視尾有劍名叢雲劍後何以爲私遣五世孫奉天神矣遂娶彼女所生之神名大己貴此等命亦爲幽國之主皆領冥界何者天照太神爲令皇孫奉降葦原先遣二神經津主及武甕槌神此二神降に出雲國五十田狹之小汀則拔十握劍倒植於地踞其鋒端而問大己貴神曰天祖欲降皇孫先遣二神汝當避否答曰當詢吾子事代主此神則三穗之碇釣魚爲樂遊鳥爲樂遣稻背脛問之時命對使曰父宜奉避吾亦不違于時大己貴神白於二神曰僕子既避吾亦當避若吾防禦者則國中諸神同禦今我奉避誰敢不順乃以平國時

所杖之廣矛還授二神曰吾以此矛平有治功天孫若用此矛治國者則必當平安今我當於百不足之八十限將隱去言訖遂隱於是二神誅諸不順鬼神等既訖云々惡以滅用善以相資明來闇去誰爲疑矣違順雖爭遂歸正路重競輕傾何爲恠焉良哉天孫伏地祇歸天々地冥合以化顯界冥顯同體得以可辨地理冥智有脫授劍而隱天智鑒地移鏡而現云々大己貴命事代主神等各奉避此處矣二神昇天而奏子時高皇產靈尊復遣二神曰顯露之事者吾孫宜治汝則可治幽冥之事矣復汝之應住天之日隅宮者今當供造卽以千尋榜繩結爲百八十紐矣大己貴神報曰乃如敎詔而長隱矣各領冥顯在文可見故素盞烏尊其流則皆地祇神化冥界地則雖顯其神掌冥天則無形其孫治顯天神哀下地神仰上陰陽昇沉冥顯救護天或陰或陽互絕違順若天若地俱度昇沉所謂陰陽性一故不違也天地若二別故不順也天照太神素盞烏尊卽掌陰陽而表違順皇御孫尊大己貴命亦以如此其意可知又謂天照太神雖女而陽故上天也素盞烏尊雖男而陰故下地也陽卽陰蛇爲劍而死陰卽陽劍爲蛇而現住地奉天互

色心色心不二又云有情中有凡聖依元初一念如實錄云原性命受化於心心受之意受之精々受之神形體消而神不毀性命既而神不終又曰神者生之本形者生之具也故受形者必有生死論變化則皆陰陽也生陽死陰其體無二心神色靈其性歸一起滅自然隱顯無勞神靈法爾色心不苦變化易遷迷悲生死陰陽互轉妄謂自他因之皇天起大慈徧憐群靈神態與世間一切忌穢惡神皇系圖云凡從自性淨妙藏乃至邪蛇地爲下化衆生隨順方便故假所化義與生滅形依無爲行滿即得正果是大慈大悲神慮也實基本紀云心藏傷而神散去神散去則身喪人受天地靈氣不貴靈氣之所化乍種神明光胤不信神明禁令故沉生死長夜闇吟根國底國云々若從生則冥而化顯若從死則顯而化冥自生至死無不遊冥自死出生無不住顯於此雖顯爲彼是冥爲彼雖顯於此是冥神應王民報感貴賤天地變化昇沉可知麗氣符錄云人者神主神者人神卽生時始天乳死時終地乳故迷悟在心云々太宗祕符曰居無爲無事大達之場超生出死名之清淨是大悲化用也云々元々超生本々出死其元

一氣彼本此心念念有元事々歸本是稱大達卽曰清淨無爲無事不可不守故忌一法以爲穢惡惣經萬物而用除祓謹尋其元由一者伊弉冊尊生火神而神去卽表陰沒陽浮者也陰陽本一故伊弉諾尊尋黃泉而行到卽謂妹曰國未作造竟故可還矣伊弉冊尊曰與黃泉神相論宜還勿視吾矣伊弉諾尊不聽所請舉一片火而見之處肥滿大高膿沸虫流故大驚曰不須也穢國也乃急走歸矣伊弉冊尊恨曰何不三要言令吾耻辱汝已見我情我復見汝情而追來于泉津平坂于時伊弉諾尊以大磐石塞其後路遂爲絕妻誓卽無別處氣絕之際也應知見異但由己心若達冥顯誰怖生死兩儀相待互見情執神忌物字義可知是故伊弉諾尊乃追悔之時急滌身之穢速洗二見之異頓歸一神之本先洗左右御目及鼻以生日月素盞烏尊卽表顯界陽天之相也空自受陽昇天上故也次重左右持白銅鏡而生日月廻頭卽生素盞烏尊是表冥界陰地之性也其體金故受陰沉下萬物雖化一靈未沒故日月者住天宮矣一靈雖常萬物未存故素盞烏尊遂往根國矣如云素盞烏尊年已長常啼泣矣伊弉諾尊問曰何故常

舊事本紀玄義卷第三

沙門慈遍撰

四分辨變化源流者易云子曰知變化之道者其知神之所爲乎注曰王曰能盡變化者體神者也故知變化則知神之所爲也神皇系圖曰元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天御水雲神任水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦原中津國主豐受皇神也凡以一心分大千形體顯言爲陰爲陽矣蓋從虛無到化變天月地水感應通交故在名字相云々

神皇實錄曰於高天原化生○本書此下有神之字神號曰天護日陽神陽神月陰神皇神亦名天御中主尊也天地俱生神坐是諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王惠齊四海歷代帝王崇尊祖萬方人夫○人夫一本敬神祇故世質時素無爲而治不肅而化太田命傳曰天照太神則主火氣而和光同塵止由氣太神則主水氣而萬物長養也故兩宮者天神地祇大宗君臣上下元祖也上已

諸文變化如斯在文可見夫元氣成天地陰陽顯男女以來尊卑之不同王民之種異者也於是拘流有清濁必歸其流聞香有蘭菊須尋其根當述此義略用六意

一冥顯限堺 二海陸閉途 三始終表穢

四本末通淨 五天皇領國 六料簡詮義

一、冥顯限堺者卽隱現異也因上神祇論此冥顯夫神祇之源雖分自上古代冥顯流通示於末世何者神代如天地未遠雖論神祇亦冥顯非遙所以人世天地永去清濁宛異冥顯各別謂陰陽本一々氣變物天地既分々有冥顯冥則死也變陽歸陰顯則生也化陰現陽神皇系圖云陽者氣也亦光也故名曰魂也凡一氣化現名號神靈是生化魂也陽氣散亡卽爲死鎮座本紀云天地之間氣形質未相離是名渾淪所顯尊形是名金剛神生化本性萬物惣體也云々故於陰陽不孤立中而論變化尋源流者且以陽化爲生爲顯此陽變陰歸死歸冥元是一氣分成兩儀其陽爲天其陰爲地上下漸去昇沉遙隔其天陽魂卽掌心神其地陰魄卽掌色靈如府錄云凡一切有情有心有形形是爲陰心是爲陽雖爲兩陰陽一身

必罰過恐天則八百萬餘神護國恥一本作怖地則卅六禽
助家從飯依寶不_レ如_レ行憲法自_レ欽仰諸神
不_レ勝辨道理知_レ僞知而僞知者正而失正歟一本無
知僞以下舊典如鏡焉新學可_レ瑩矣廣略二門利鈍互用
十二字若得_二大旨不_レ俟_二下文_一

舊事本紀玄義卷第一終

德利_レ物例如下_レ止觀々々_二不思議_一起_二慈悲心_一安_中自他上故
神宣曰住_二其本心_一皆得_二大道_一行基言無漏靈智當_レ飯_二
大道_一雖_二道一理_一迷悟不_レ同須_下簡_上二十非_二終顯_中無疑_上
所以經說_レ不_レ如_二三界見_一於_二三界_一隨而釋判_二三千果成_一
咸稱_二常樂_一云々

伏廻_二闇短之思_一仰伺_二明祖之言_一微從_二妄心_一必損_二衆
善_一然如_二淺學_一多貴_二至理_一而不_レ治_二己之心_一但徒誇_二
徒法暫聞_一才智以可_レ耻_二我之私_一不_レ離_二私者妄心談_一
法以_レ何可_レ升甚傷_{○其傷一本}作_二傷哉_一々々々々神未_レ發則佛亦覆_レ
德誰奢_二直尊_一能思々々願顯_二理德_一宜_レ通_二心神_一如來
既爲_二皇天垂跡_一諸賢聖悉無_レ非_二應作_一寔住_二本心_一是
則本誓無漏神也云々

凡始自_二下尊還生_中靈日_上永令_レ被_二歷代_一遙崇_二神光_一日
嗣寶祚無_レ窮下津岩根無_レ動天御量源起_レ乎_二本朝_一焉
國宗廟遍照_二乎餘州_一耳若非_二清淨之志_一爭契_二正直之
道_一百姓皆迷一人可_レ憐夫天潤_二千草_一未_レ分_二親疎_一地
養_二萬物_一豈存_二惡愛_一德侔_二天地_一是稱爲_レ皇故云_二天
子_一不_レ言_二人子_一如_二經說_一云何人王復名_二天子_一生在_二人
中_一處_二王宮殿_一正法治_レ世而名_二天子_一又云三十三天各
以_二己德_一分與_二是人_一稱_二天子_一神力所_レ加故得_二自在_一

神宣曰惠_二群生_一以_二正法_一神而通_レ之故天地不_レ能_レ揜
密而行_レ之又云德合_二神明_一則通_二天地_一而四時穩也惠
通_二天地_一則君道明而萬民豐也料知佛說_二王法_一無_レ過_二
慈悲_一尊神冥誓直示_二正直清淨_一是以內外經書於_二他無_一
私以名_二正直之道_一顯密教釋爲_レ自不_レ作以號_二清淨之
行_一故衆典中舉_二此德_一兮明_二世無_一佛之報_二乃諸論同
受_二彼意_一兮宣_二國無_一二王之業_一因_二茲粟散國王能施_一
正法_二諸天擁護好_レ名善_一譽不_レ以_二正教_一不_レ問_二罪過_一
三十三天各生_二嗔恨_一災難多起怨賊競來衆人違背不_レ
從_二其主_一聖人去_レ處善神捨_レ國復爲_二隣國_一恒得_二其
悌_一仁王金光大集等經誠說分明披_レ卷可_レ見又書云神
怒民叛何以能久神怒不_レ歆_二其祀_一民叛不_レ即_二其事_一神
宣曰背_レ法而不_レ行則日月照見坐違_レ文而不_レ判則神明
記識給蓋聞人命非_レ命皆與_二天命_一仁惠非_レ惠悉蒙_二神
惠_一七星在_レ頂更不_レ可_レ以行_二無道_一五行備_二身敢莫_一
致_二非法_一政途濫則四海不_レ治法意廢則萬邦無_レ寧世
者非_二人之治_一憲法之治也法者非_二衆之持_一道理之持也
公爲_レ公之時其所一也代不_レ代之日其理二也甚違_二神
一之道_一旁背_二無二之盟_一國主尤可_レ恐_二民口_一文士何不
慎_二人謗_一況乎天道無_レ隱神常嗔_レ罪抑亦地德無_レ覆冥

舊事本紀立義卷第一 ○一本作二

沙門慈遍撰

神性不_レ動而動乘_二一天_一靈體無_レ形而形垂_二萬物_一聖賢應_レ之兮自然施_レ德庸愚順_レ之兮法爾得_レ益夫佛之通_レ化也月氏皆聞_二梵音_一神之造_レ地也日域普貴_二秘光_一是以踐祚往聖忝記_二靈驗_一以爲_二代々龜鏡_一傳法諸祖亦註_二神妙_一以備_二人々之寶_一或撮_二綱維_一畧詮_二玄要_一或振_二細綱_一廣講_二奇異_一官文社記不_レ知_二其數_一勅書私錄是亦幾何所以日光遍智者雖_レ辨_二無際之理_一螢火短識者還覆_二無碍之德_一若述_二同致_一則妄取_二神攝佛若論_二異途_一則苟指_二佛屬_一神同異難_レ測不_レ辨_二邪正_一佛神易迷須_レ識_二虛實_一方今有_二宗廟之眞首_一爲_二神道之明燭_一天機秀發才名普聞爰予在_二夢中_一聊受_二冥聖之告_一因_二面謁_一悌_二戴_一練細_二故不_レ顧_一少量_二將下決_一大分_二乃爲_二後蒙_一試釋_二先摸_一但章條森々卷舒之望良疲文旨幽々鑽仰之功何覃仍慙不_二默止_一恣事_二編集_一留遺_二博達_一冀加_二刊修_一玄々亦玄義々何義佛未_レ出無_二能說無_一所說_一

法未_レ說無_二能迷_一無_二所迷_一惣是心識不生而言語自絕矣本來無_二一物_一元神是如何但元_二元莫_一見_二一法_一偏本_レ本令_レ忌_二諸妄_一二法以來不_二神道_一諸妄紛然以_二佛化_一彼妄分_レ異忌_レ異爲_レ穢々若除則自飯_二得一_一此_二一見_一佛迷_レ佛爲_レ妄若轉則佛神不_レ二如_一彼大圓覺經序明_二四相潛心_一仁王般若中說_二是心識神本等_一誠哉經文神則諸佛靈佛則諸神性人則神主神則人魂也妙哉冥鑑兼指_二西天_一告_二有_一神應_二永止_一託宣_二追讓_一佛敎_二應_一知經言我滅度後現_二大明神_一廣度_二衆生_一雖_レ然末世名字僧尼以_二不_レ如_一今而可_レ費_二國故屏_一佛法_二令_一拜_二神祇_一饗_二德與_一信不_レ受_二備物_一仍同非_二同猶_一異非_二異未_一捨_二凡情_一那開_二我執_一兩致有_レ據互爭_二有念_一二妙無_一隔不_レ如_レ無心古人云道無心而合_二人々無心而合_一道是無爲無事履踐諦當之處神宣曰慮多則志散智多則心亂々々生惱志散妨_二道嗚呼不死妙藥_一一道虛寂萬物齊等所謂神一道者陰陽不_レ測無_二一之盟者變化无_レ窮會_二之則心虛而頓超_一乾坤之表_二證_一之則智明而直達_二遠近之事_一是故無念之念慮即平等之器無差之心是慈愍之基淨影師云至人非_レ無_二心但無_一心_二之耳眞行子曰聖人無_二常心_一以_二百姓心_一爲_レ心謂無_レ妄無_レ私天道在_二心是心是起地

神道書紀緣起序

夫神之爲神者先天地之神也道之爲道者超乾坤之道也非識所識非言所言但協正直清淨自拜國常立尊矣一氣始顯儀漸判以來明暗有異正邪不同蓋是大日靈貴素靈爲尊而已凡事々物々皆俱生神去々來々悉備靈性然而究源之彙稀於鱗角迷流之輩○鱗一本作稠於鱗鱗於是有秦詣禪客ト瑞籬之緣邊爲宮法樂講法華之圖意通達萬句兮智光不昧總括千章兮樂說無窮就中因佛惠之玄極述神乘之幽致閑聞所言之旨趣專同累祖之傳來愚老感寸腸不堪忍進臨法筵諮問稟承之傳賢師唯微咲不言強尋元由但謂靈夢之雅訓倩測聖智匪直也人誠被神加妙通此道仍非祕府之可祕者而披神道之茂典非密意之可密者談我家之奧願故舉畜懷儉請和尚願擇髓骨以挑末代之法燈須鈔腦膽以鑒後學之智鏡所以勒玄與疏各成十卷殊詮大宗別爲六軸加之類

要集五十卷并元要圖一卷惣而神道樞機聖化至德在斯于時元弘第二之曆仲秋上旬之天大廟官長錄青光祿大夫常良序○序一本作謹書

神道書紀緣起目次

第壹卷

第三卷

第四卷

第五卷

第九卷

私云已上約十段粗舉一圖大綱在斯納目可
尋云々

豐葦原神風和記卷下終

此和記者左大史小槻季連宿禰所持本也類冊依有
之附屬正時畢未練之人令書寫歟文字不正仍
借請賀茂季榮縣主本令比校以暇日可清書
者也

元祿十三年庚辰二月十五日

享保四年臘月

同十五庚戌七月十七日一校了

谷川昇卯

一本奥書

右上中下三冊者以度會朝雄自筆之本令書寫焉遂校合
畢件本累世傳寫之誤多雖數本互見之寧以愚意推而可
正之乎故從舊本而書寫之但如舊本十段要文者在卷末
之一處今以私意分而列于諸段之末蓋欲使見者有便而
已

寬永甲申歲冬十月丙朔子始筆戌終功

掌神水_レ宜_レ存_二自正_一是長生術不死之藥也

私云中人皆貴_二託宣_一因_レ茲神明無_レ力而託_二齋內親王_一於_二長曆年中_一重止_二託宣_一御坐畢于時各疑_二申末代靈驗事_一於_レ是有_二神約_一以_レ夢可_レ示云々可_レ見_二社記_一而已

佛神同異要文

寶基本記曰神道則出_二混沌之堺_一守_二混沌之始_一佛法則破_二有無之見_一佛_二實相之地_一神則罰_二穢惡_一導_二正源_一佛亦立_二教令_一破_二有相_一而目不_二妄視_一耳不_二妄聽_一鼻不_二妄香_一口不_二妄言_一手不_二妄持_一足不_二妄行_一情不_二妄施_一其非也及是也云々

六波羅密經云或人素_レ頭即與_レ頭乃素_レ矣即與_レ矣是爲_二布施_一眼不_レ隨_レ色意不_レ亂_レ念是名_二持戒_一耳聞_二惡聲_一心不_レ瞋恚是爲_二忍辱_一鼻知_二息出入_一常守_二不離_一是爲_二精進_一口不_レ罵詈_一不_二兩舌_一是爲_二寂然_一心意不_レ攻_レ道亦不_レ生以除_二垢濁_一内外清淨是爲_二知惠_一文

私云_三忌_二六根不淨_一顯_二六根清淨_一仍_二六色禁法_一即_二六度等耳_一

形文深釋曰實降神地不_レ受_二一塵_一佛事門前不_レ捨_二一法_一性海無_レ風金波自踊神明應化釋尊成道神事併_二此道理_一文

又曰皇則大空本元清淨妙理是無相法身之義也文仙宮祕文慈覺曰欲_レ示_二無相之觀解_一令_レ忌_二有相之權教_一大基祕府曰宜_レ起_二方便之門_一遙居_二意像之表_一

私云_三一法不生不隨_二二法故屏_一佛法息_一即如_二下文_一云々

佛神誓別要文

倭姬命世紀曰夫尊_レ天事_レ地崇_レ神敬_レ祖則不_レ絕_二宗廟_一經_二綸天業_一又屏_二佛法息_一奉_レ再_二拜神祇_一云々神祇普傳圖曰夫天照太神與_二豐受太神_一則無上宗神而尊無_二與_一二故異_二天下諸社_一是則天地精明之本源也無相無爲之大祖也故不_レ起_二佛見法見_一以_二無相鏡_一假表_二妙體_一也

天口事書曰未代僧尼者教_レ機_レ相乖_二人_一法_レ不_レ合也由_レ此制非_レ制者是制判也敬神祭禮其致齋前後兼爲_二散齋_一專致_二其精明德_一也須_レ不_レ分_二二法_一共食_二一水_一軌_二匠其心_一令_レ至_二神國道_一矣

弘仁格文曰太政官符禁_二斷京職畿內諸國私作_一伽藍_一事

右奉勅定額時其數有_レ限私自營作先既立_レ制比來所司寬縱曾不_二糾察_一如經_二年代_一無_二地不_レ寺

私云_三委如_二格文_一其條依_二繁畧_一之

天手力雄尊石戸ヲ開キ給フ神ニテ坐相殿也

神皇產靈神八咫鳥并伊勢朝臣祖神也津速產靈神中臣朝臣祖神也件三柱靈神

者天御中主神所化神名爲子父子道今明露現矣

神態忌物要文

舊事本紀曰伊弉諾尊親見泉國此既不祥也還乃追悔之曰吾前到於不須也凶目汚穢之處故當滌去濯除吾身之濁穢則往見粟門及速吸名門然此二門潮太急故還向於日向橋之小戸橿原而被除焉

神皇系圖曰夫水氣者清淨海水即本祖之元性也陽氣者濁世生類不淨實執也故清淨神祭則人竟陽氣鎮也故有鎮魂也陽者氣也亦光明也故名曰竟凡一氣化現名號神靈是生化竟也故陽氣散已即爲死即佛本居善哉々々

太宗祕府曰令盡天地人人居無爲無事大達之場超生出死名之清淨是大悲用也文

御鎮座本紀曰人乃受金神之性須守混沌之始故則敬神態以清淨爲先謂從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼神之所惡也文

天口事書曰神人心外好別請而從不淨實報則不得踐神地不許飲神地水而五千大鬼常罵大賊文

神祇式云六色禁法弔喪問病謂有重親喪病者不亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂謂不作桑竹歌舞之類也不預穢惡之事謂穢惡不淨之物鬼神所惡等是也

內七言謂佛稱曰經稱曰塔稱曰阿寺稱曰僧稱曰尼稱曰女長長齋稱曰外七言謂死保留病須哭稱曰血打稱曰穴稱墓壤又有忌詞堂燒香優婆塞答謂是佛弟子出世行者也

神驗尊靈要文

寶基本紀曰垂仁天皇卽位二十六年丁巳冬十月新嘗會祭夜神主部物忌八十氏等詔曰吾今夜承大神威命所託宣也神主部物忌等慎無懈正明聞焉總而神代仁人心正而常也直而正也然地神之末天下四國人夫等其心黑焉分有無之異名以心走使無有安時故心藏傷而神散去神散則身喪人受天地之靈氣不貴靈氣之所化乍種神明之光胤不信神明之禁令故沉生死長夜闇吟根國底國因茲奉代皇天而西天真人以苦心誨喻教令修善隨器授法彼語將來自爾以來大神歸本居止託宣給利若應節自在告示則開大明戸無形顯音或小童女昇立芽葉上須在驗言矣猥莫信狂言類從天地宮陰陽

五十鈴河上_一留天照太神并_二荒魂宮和魂宮止奉_三鎮坐_一
又曰泊瀨朝倉宮大泊瀨稚武天皇即位二十一年丁巳冬
十月倭姬命夢教覺給久皇太神宮吾如_二天之小宮坐_一
天下_{仁志}一_耳坐波御饌毛安不_二聞食_一丹後國與佐郡比
沼之魚井原坐道主子八乎止女乃齋奉御饌都止由居
太神乎我坐國坐止欲止誨覺給_支爾時大若子尊乎差_二使
朝廷_{仁令}參上_一天御夢狀令_支申給_支即天皇勅汝大若
子使罷往天布理奉止宣_支故率_二手置帆負彥狹知_一二神之
裔_二以_三齋斧齋鉏等_一始探_二山材_一構_二立寶殿_一而明年_戊
秋七月七日以_二大佐々命_一天從_二丹後國余佐郡真井原_一
志奉_レ迎_二止由氣皇太神_一度會山田原乃下都磐根爾大宮
柱廣敷立豆高天原爾千木高知豆鎮定座止稱辭定奉_利奉
利_レ獲利神賀吉詞白賜_倍云々

損失有_二天下危_一云々大田命傳記曰兩宮者天神地祇
大宗君臣上下元祖也惟天下大庸也國家社稷也故尊
祖敬宗禮教爲_レ先故天子親耕以供_二神明_一王后親蠶
以供_二祭服_一而化_二陰陽_一有_二四時祭_一德合_二神明_一乃與_二
天地_一通也德與_二天地_一通則君道明而萬民豐也_{已上}
兩宮

祖神大分要文

神皇系圖曰國常立尊國狹槌尊_{乃至天地}
神代如前
天御中主尊_{以下并}前五柱神者是生化五大尊_{坐也}
私云除_二天御中主以下_一爲_二五柱_一也

高皇產靈神_{皇祖}神皇產靈神_{大神主}津速產靈神_{天兒屋根都}
八柱神者天御中主神寶座之內獨化神也明_二百億須彌
百億日月百億四天下_一而爲_二天地_一人民化生之祖_一者
也云々

神皇實錄曰天御中主神_{天地開闢之始精氣之神即}以_二天八下
靈神_{府中五魂座五靈五常}天三降靈神天合_{靈神}天八百日
靈神_{名五大神也萬生寶也}天八十萬魂神件五柱神則受_二天地之精氣_一而氣形
質具而未_二相離_一名稱_二五大魂_一是中府臆坐神也故謂神
者生之本形者生之具也古語謂稱_二獨化神_一也

高皇產靈神_{皇祖神故亦}栲幡豐秋津姬尊_{皇孫尊母也}
思兼尊_{名高貴神}知性靈坐相殿神也_{高貴神女也}

神皇實錄曰地神五代番地五行傳神位天照太神奉皇故曰大正哉吾勝々速日天忍穗耳尊天祖詔曰吾勝尊也是以天照太神育三吾勝尊一特甚鐘愛常懷腋下一稱曰腋子今謂號稚子謂和天子也母拷天津彦々火瓊々杵尊正哉吾勝々速日天忍穗耳尊太子也母拷

私曰畧云曰皇御孫尊

彦火々出見尊天津彦々火瓊々杵尊第二子也鸕羽葺不合尊火彦々出見尊太子也母豐玉姬海童二女也

私曰以上天神地神次第畢

神皇圖曰人王神日本磐余彥天皇鸕羽葺不合尊第四御子也天照太神誓曰吾日太子如三八咫瓊之勾曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山川海原乃提神劍平天下肆以名之三種神器也汝敬承吾壽乎犯流鈴以御無窮無念爾祖吾鏡中矣

兩宮鎮座要文

倭姬尊世紀曰神倭磐余彥天皇已下稚日本根子彥大日日之天皇以往九代歷年六百二十餘歲當此時帝與神其際未遠同殿共牀以此爲常故神物官物亦未分別焉御間城入彥五十瓊殖天皇即位六年己丑秋九月就於倭笠縫邑殊立磯城神籬奉遷天照太神

及草薙劍令皇女豐鋤入姬命奉齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌舞然後隨大神之教國々處々仁大宮所乎求給利倍天皇以往九帝同殿共牀然畏其神勢共住不安改令齋部氏奉石凝姥神裔天目一箇裔二氏更鑄造鏡劍以爲護神御璽焉是踐祚之日所獻神璽鏡劍是也謂名內侍所也同三十九年壬戌遷幸但波乃吉佐宮積四年奉齋從此更倭國求給此歲豐宇介神天降坐奉饗云云以下如此等求活目入彥五十狹茅天皇纏向珠城天皇即位二十五年丙辰春三月從飯野高宮遷幸伊蘇宮令坐于時猿田彥神裔宇治土公祖大田彥命參相支汝國名何問給爾佐古久志呂宇遲之國止白耳御止代神田進支倭姬尊問給久有吉宮處哉答曰久佐古久志呂宇遲之五十鈴河上者是大日本國之中仁殊勝靈地侍利奈其中翁世八萬歲之間毛仁未現知留有靈物照耀如日月利奈惟小緣之物不有志定主出現御座爾時可獻止念利勢彼處爾禮祭止申即彼處仁往到給天御覽禮惟昔太神誓願給天豐葦原瑞穗國之內仁伊勢加佐波夜之國波有美宮處利見定給從上天志投降降坐比天之逆太力逆鉾金鈴等是也甚喜於懷比言上給支同二十六年丁巳十月甲子奉遷于天照太神於度遇

下_二南閭浮提有_二圓陀之地_一謂_二之大日靈地_一亦號_二神國_一也文

寶基文圖曰天地開闢基在_二光明_一其中有_二精氣_一名曰_レ神亦曰_レ心其時爲_二萬物應化神_一假名_二廣大慈悲大御神_一也掛忝以_二天津神神策_一用_一而天地與_二陰陽_一同節同_レ和合_レ敬合_レ愛顯_二五常之圖_一語_二八子_一給終應_二化神力_一照_レ道可也文

天神七代要文

神皇系圖曰天御中主尊_{神風伊勢百舟度會}元氣所_レ化水德變成爲_レ因爲_レ果而所_レ露名_二天水雲神_一任_二水德_一亦名_二御氣都神_一是水珠所_レ成卽月珠是也亦號_二大葦原中津國主豐受皇神_一也

國常立尊_{謂推三世常住妙心}乃至_二一尊_一如常略之_{右從_二國常立尊_一迄_二至伊弉諾伊弉冊尊_一謂_二天神七代_一矣}

神皇實錄曰國常立尊_{無名狀神此蒼生之君木官之臣自古以來著_二德立功名_一者也}國狹槌尊_{水藏豐斟淳尊火藏泥土瓊尊木藏沙土瓊尊}大戶之道尊_{金藏大苦邊尊}荒魂_生面足尊_{土藏惶根尊}荒魂_{對耦}件五代之

八柱天神光胤也雖_レ有_二名相_一未_レ現_二形體_一五大府中坐故名_二天地耦生神_一也云々伊弉諾尊_{天降陽神名日子也伊弉冊尊}天降陰神名日子也

亦稱_二大自在天子_一也

從_二國常立_一至_二惶根尊_一天神六代之間則有_二名字_一未_レ現_二尊形_一五位神坐轉變而合_二陰陽_一有_二男女形_一應化相生專_二心珠神_一以_二清淨_一爲_レ先神態與焉

神皇系圖曰二尊蒙_二天祖天御中主高皇產靈尊之宣命_一天以授_二天瓊矛_一而伊弉諾尊立_二於天浮橋之上_一二神共計曰底下豈無_レ國歟廼以_二天瓊矛_一而指下而探_レ之獲_二滄溟_一其矛滴瀝之潮凝成_二一嶋_一名_二之磯敷廬嶋_一二神於_レ是降_二居彼嶋_一與_二八尋殿_一社記曰大日本日高見國神祇寶山今此處也云々因欲_二其爲_一夫婦_一產_二生洲國及山川草木神等_一後生_二一女日神天_一二男_一素戔嗚尊或爲_レ日爲_レ月永懸而不_レ落或爲_レ神爲_二皇帝_一存以無_レ窮矣

地神五代要文

神皇系圖曰大日靈貴天照皇太神_{神風伊勢國玉擬五鈴川上座也}

伊弉諾尊持_二左手金鏡_一生_二陰持_一右手金鏡_一陽生因以日神月神所_二化生_一也謂火珠水珠之二顆玉變成_二三昧世界_一建_二立日月_一是也正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天照太神之太子劍霧之化生私云件獨王皇御孫尊火々出見尊尊不合尊其號同_二下文_一

右天津尊率_二諸神部_一降_二臨於筑紫日向國穗日高千穗之峯_一以來至_二鵜羽葺不合尊_一三主治合一百七十九萬

二千四百七十六歲也

御鎮座本紀曰皇天倭姬內親王託宣久各念一天地大冥之時日月星辰像現於虛空之代神足履地而興于天

明也矣已專如在禮奉祈朝廷哀波天下泰平志四海

御量柱於中國而上去下來而以來見六合天照太神

又曰夫悉地則生心須意則顯信心留蒙神明利益事

悉治天原耀天統皇御孫尊專治葦原受日嗣聖

波依信心厚薄且奈天下四方國乃人等仁至萬天奉齋敬焉

明所覃莫不昭厲宗廟社稷之靈得一無二之盟百王

天地開闢要文

鎮護孔昭是以從人本天地續命祀皇祖標德深

舊事本紀曰古者元氣渾沌天地未割猶雞子溟滓含

其根源恭崇祖神令朝四方之國以觀天位之貴弘大業明天下夫逆天則無道逆地則無德而外

牙其後清氣漸登薄靡爲天浮濁重沉淹滯爲地所謂

走本居沒落根國故齊情於天地乘想於風雲者爲從道之本爲守神之要將除萬言之雜說而

先成而地後定然後於高天原化生一神號曰天讓日

舉一心之定準即配天命而嘗神氣理實灼然故祭

天狹霧國禪月國狹霧尊文

神清淨爲先鎮以得一爲念也

神皇實錄曰天地開闢之始含精氣而應化之元神也故

又曰都合天地生長土毛或備宗廟之祭惟仁恩

初禪梵宮居焉視天下而式時候授諸天子照臨

之忠孝以信爲德故神明饗德與信不受備物焉

天地之間而以一水之德利萬品之命故亦曰御氣

倭姬尊世紀曰心神則天地之本基身體則五行之化生

津神也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣亦

利肆元々入元初本々任本心與神垂以祈禱爲

地和同草木萌動惟水道德矣

先冥加以正直爲本利夫尊天事地崇神敬祖則

大宗祕府曰憶者昔高天原初出之故天御義利舉之八重

不絕宗廟經綸天日嗣又屏佛法息奉再拜神

雲以天於坐而成神號天讓日國禪月皇太神亦名御

祇日月回四州雖照六合須照正直頂上止詔命

中主尊也所化百億須彌百億日月々々須彌有四天

リヌ今又忝クモ國母ノ詔ヲ承テ此和記ヲ三卷シルシ
上ル所也扱モ吾國ノ人トシテハ高キモ賤キモ必ズ神
風ノ教ヲバ知リ奉ルベキ者也方ニ今勅ニチナミテ同
シクハ徧ネク見ヤスカラン爲ニ加樣ニ撰ビ上ゲ侍リ
ヌ但文字ヲ和グル心ハアラザレドモ正言ナラ覺束ナ
カラン人モアルベシ所以ニ撰ム處十段ニヲキテ彼段
段ゴトニ要文ヲ出スコト如レ左然則一々ニ上ノ趣ヲ
知テ下ノ文ヲ心得ベキ者也

神道大意要文

舊事本紀曰夫大人之立ニ制義ニ必隨レ時苟有レ利レ民何
妨ニ聖造ニ且當下披ニ拂山林ニ經ニ營宮室ニ而恭臨ニ寶位ニ
以鎮ニ元々ニ上則答ニ乾靈授レ國之德ニ下則弘ニ皇孫養
レ正之心ニ然後兼ニ六合ニ以開レ都掩ニ八紘ニ而爲レ宇不
亦可ニ乎

神皇實錄曰於ニ高天原ニ化ニ生一神ニ號曰ニ天讓日陽神國
神陰神月姫皇神日神國亦名天御中主尊也天地俱生神也是諸天
降靈之本致ニ一切國王之大宗也德被ニ百王ニ惠齊ニ四
海ニ歷代帝王崇ニ尊祖ニ萬方人夫敬ニ神祇ニ故世質時素
無爲而治不レ肅而化

又曰大易者虛無也因レ動爲ニ有之始ニ故曰ニ太初ニ有レ氣

爲ニ形之始ニ故曰ニ大始ニ氣形相分生ニ天地人ニ也大方法
德者虛無之神也天地沒而道常存矣性命既而神不レ終
焉形體易而神不レ變性命化而神常然因以名ニ國常立
尊ニ以レ初爲ニ常美美イ者也文

又曰應化神名曰ニ天御中主神ニ未ニ顯露ニ名ニ國常立尊
亦稱ニ國底立ニ天地之間稟氣之靈蒙ニ一大五種之神力
受ニ天地父母之生身ニ以ニ言語ニ授ニ世人ニ依レ之得ニ一切
智心ニ利ニ萬品生化ニ也文

寶基本記曰人乃天下之神物奈利須レ掌ニ常靜謐心乃神明
之本主利他莫レ傷ニ心神ニ々垂以ニ祈禱ニ爲レ先冥加以ニ正
直ニ爲レ本須任ニ其本誓ニ皆令レ得ニ大道ニ者天下和順日
月精明風雨以レ時國豐民安故神人守ニ混沌之初ニ屏ニ佛
法之息ニ置ニ高臺之上ニ崇ニ祭神祇住ニ無ニ之心奉レ祈
朝廷ニ則天地與ニ龍圖ニ運長日月與ニ鳳曆ニ德遙海內泰
平民間殷富各念祭レ神禮以ニ清淨ニ爲レ先以ニ眞信ニ爲

レ宗散齋致齋内外潔齋之日不レ樂不レ弔不レ散ニ失其正
致ニ其精明之德ニ左物不レ移ニ右兵戈無レ用不レ聞ニ輶音
口不レ言ニ穢惡ニ目不レ見ニ不淨ニ鎮專ニ謹慎之誠ニ宜致
如在之禮ニ背レ法而不レ行則日月照見坐違ニ文而不レ判
神明記識給云々

々異ニ殊ニ人モ君ニ從ガハズ故ニ人ト法ト不合トハ云也又格ノ文ニハ末代ノ僧尼共事ヲ佛法ニ亂テ實ハナクシテ國土ヲ費スベキカ故ニ私ニ伽藍ヲ立田地ヲヨスベカラズ若如此シテ年ヲヘバ地トシテ寺ナラザルコトナカラント禁メ置レタリ委クハカノ文ニアリ具ニ尋テミルベシ凡ソ此事ハ宗廟尊神ノ御誓ノミニアラズ佛末代ヲ鑑ミテ經ノ中ニ廣ク戒メ置レタリ其說事シゲシ且涅槃經ニ如來滅後ノ國王大臣四部ノ弟子トモ古寺ヲバ修治セズシテ名利ノ爲ニ新シク寺ヲ立誠ナクシテ三寶ヲ輕シムベキ故ニ一切人木ヲ引堂ヲ造リ塔ヲ建テ或ハ野中山ノ上或ハ道ノ辻ケガレタル處ニ滿ミテラン此故ニ國土ヲ費シ諸ノ災難起ルベシトナン亦仁王經ニ滅後ノ比丘比丘尼僞テシカモ誠ニヨセテ佛法ヲ破リ國土ヲ損セン因縁ヲ企テバ國王大臣其故ヲ知ラズシテ是ヲ許スベシ故ニ我法ヲモ亡サンハ外道ニハ非ズ皆我弟子共ナルベシ譬ヘバ獅子ノ中ノ虫ノ獅子ヲクラヒテ自死スベキガ如シト云ヘリ是則天魔ノ佛弟子ノ身ニ入テ佛法ヲ亡スガ故也廣ク大乘經ノ中ニ見ヘタリ法華經ニ說ガ如シ惡世之中諸無智ノ比丘名ヲ寺ニカリ衣ヲツバリ或ハ閑ナル處

ニ有テ我ハ眞ノ行ヲスト云テ未得ヲ得タリト思ヒ我慢ノ心ミチ／＼テ人間ノ物ヲバ輕メ賤ミシカモ利養ヲムサボルガ故ニ僞テ法ヲトカン此人ハ惡心ヲ抱キテ常ニ世俗ノ事ヲノミ思ヘシ是皆惡鬼其身ニ入テ誠ノ佛法ヲバ罵リ謗ルベシト云ヘリ心アラシ人能々可耻思ヘ子ノ時興國元年七月八日始テ筆ヲ下シ同九月六日はヲ誌シ終ヌ神道ノ大意詮ヲ取テアラ／＼載侍リ委ハ古キ記文ニ見ヘタリ又如私書集

抑慈遍聊神道ニ趣キコトニ靈驗ヲ憑ミ奉ル起リハ去ル元德ノ年夢ノ中ニ神勅ヲ承ルニ依テ先神懷論三卷ヲ撰ミ佛神ノ冥顯ヲ理リ眞俗ノ興廢ヲ明ラム然ヲ故官長常昌三品奏聞シ奉リシカハ歡覽アラ已ニ綸言ヲ下サレ御祈申ベシトナン其次ノ日叡山ヘ行幸ト聞ヘ侍リ其後兎角有テ思外ニ隱岐ヘ渡ラセ玉ヒシ間且ハ皇道ノ廢レン事ヲ歎ヒテ常昌卿頻リニ神宣ノ趣ヲ委ク尋シムベキ由ス、メ侍リシカバ御願ヲ祈リ申サンガ爲ニ取分テ神道ヲ撰ビ奉ル謂ル舊事本紀ニツキテ其玄義文句各十卷又太宗祕府ニツキテ其要文六卷ヲシルス并ニ神祇玄要圖三卷神皇畧文圖一卷古語類要集五十卷又其外一卷已上八十一卷既ニ上覽ニ備ヘ奉

ダクシテ託宣ニモ及ビガタシ故ニ太神ハ佛教ニユヅ
リテ託宣ヲ留メ玉ヘリ爰ニ知ヌ佛神内證同一ニシテ
而モ化儀各別也所謂ル神道ハ一法未ダ起ラザル所ヲ

佛神誓別事

キヲ守テ機ノ異ナルニ住スル者也譬ヘバ如ニ隨レ病
施レ藥ヲ仍儒道乃佛神利益炳然也委可ニ尋問一

守テ起ル心ノ萬ノ物ヲ皆穢惡ナリト是ヲイメリ佛
法ハ二途既ニワカレテ後諸ノ迷アリ此迷ヲオサヘテ
實相ナリト是ヲオシフ然レドモ佛法ニモ本初ヲ悟リ
不生ト談ジ神道ニ又和光同塵ノ利生アマチシ然ルニ
三互ニカハルコトナケレドモ且ラクカタドリテ面々
トスル計ナリ夫神ハ必ズ本ヲ守テ末ヲイミタマフ處
ハ其末ヲ導ンタメ也佛ハ亦末ヲ導テ本ヲ示シタマフ
意ハ其本ヲサトラシメンガ爲也本末究竟ニシテヒト
シク説ク法華經ノ文此心ナルベシ凡宗廟ノ御本誓正
直清淨ヲ先トストナン其故ハ唯獨一ニシテ二法ヲ見
ザレバ左ノ物ヲ右ニウツサズ是則正直也唯一ヲ守テ
二ニムカハザレバ元ヲ本トシ本ヲ元トス是則清淨也
實ニ正ニシタガウヲ清淨ト名ケ邪ニ隨フヲ穢惡トス
上ニシルスガ如シ此ヲ教ヘ玉フトイヘドモ人ノ心ハ
イヨ／＼猥リナルワザ益サカンナレバ力ナクシテ佛
大慈悲ヲ垂レ穢惡ノ中ニハ責入當體卽是ノ法ヲ示シ
玉ヘリ然レバ諸ノ化ニ勝劣アルニハ非ズ各時ノ宜シ

神宣曰神人ハ守ニ混沌之始屏ニ佛法之息云々混沌ト
云ハ天地ノコト也サレバ天地ノ未ワカレザル其先ヲ
守テ起ル所ノ諸ノ穢惡ヲ忌ムベシト示シ玉フ其故ハ
彼天地本無之源ヲワスレタルヨリ猥ナル萬ノ心ハ起
リ初ル處ニ佛教ト云ヘルハ眞俗ノ二ヲ立迷悟ノ別ヲ
論ジ剩ヘ佛見法見ヲ起シテ我相憍慢ヲ本トスル故ニ
コトサラ僧尼ヲイミタマフ者也其文ニ曰ク天照太神
與ニ豐受太神一則無上之宗神無爲之大祖也故不レ起ニ佛
見法見一以ニ無相鏡一假表ニ妙體云々其心尤深シ能々
可レ思加之又神道トイヘルハ先天天下ヲスナラニシ萬
民ヲ樂ムベキ處ニ佛法ト云ヘルハ出世ノ道ト號シテ
併世間ヲ忘レ國土ヲナイガシロニスベキガ故ニ僧尼
ヲ忌玉フ也又或説云末代名字ノ僧尼ハ教ト機ト相背
テ人ト法ト不合也故ニ文ニ專吞ニ一水一不レ分ニ一流一
云々所以濁世末代ノ此比ハ機根拙シテ佛法ハ誠ヲオ
シユレドモ僧尼ハ教ト機ト相背ケリト云リ加樣ニ誠
ナキ輩シカモ我ハ佛弟子出世ノ人也ト名乗テ法モ世

豐葦原神風和記卷下

佛神同異事

佛法ノ未ダ渡ラザリシ其昔垂仁天皇御宇ニ御託宣トシテ神道ヲ佛法ニユヅリタマヘリサレバ佛神ノ惠全ク同ジクシテ眞俗ノ道更ニ異ナルコトナシ然ルニ御託宣ニ於テ西天ニ眞人アリト告給ハ釋迦如來ノ御事也然ルヲ如來ハ神明ニ替リテ世ニ出坐ス神明ハ如來ニ讓リ託宣ヲトメ玉ヘリ然則佛ノ脱玉ヘル御經ハ悉ク尊神ノ御託宣ナルベシ抑佛ニユヅリ坐ス故ハ御託宣ニコトハリ玉フ如ク總テ神代ハ人ノ心淳ニマシマシテ猥ナルコトナシ故ニ人種少モ惡キ心アルヲ見テハ神始ヲシメセバ自ラ先ヲ本トシテナリ安キ故ニ人猶シ通力^{ホカ}アリ是ヲ神代トハ申也ヒトシメテ心得ハンノカミ輪王物ヲコシラヘ黃帝人ヲ導キ乃至聖人道ヲ得テ政ヲ格セシハ皆神靈ノ德ヲアラハシテ自在ナルワザヲ施ス者也然ルヲ彼ノ用モ漸ク廢シガ如シ地神ノ末ヨリ人ノ心キタナクシテ惡シキ思ニ順ヒ來

レルガ故ニ通力スデニ失ヌ此萌ヲ取テ人ノ世トハ申也故ニ佛ハ地神ノ末人ノ始ニハ成道ヲトナヘ廣ク機ニ隨テ普ク物ヲサトシ給フ也サレバ佛法未ダワタラザリシ程ハ莊老等ノ訓吾朝ノ神道ノ如シ但清淨法行經ノ文ニ佛三聖ヲ兼テ震旦ニ遣シ禮儀ヲ先ヅ開キ然而後ニ大小乘ノ經ヲワタスベシト云ヘリ三聖ト云ハ月光菩薩ハ顏回ナリ光淨菩薩ハ是仲尼也迦葉菩薩ハ是老子也ト云々故ニ老子ハヒソカニ西方ヲサシテ彼ニ聖人アリ又我師タリト云ヘル誠ニ其道通ジテ其教同キ也又此神ノ託宣ニハ化導ヲ西教ニユヅリ彼佛ノ經文ニハ利益ヲ明神ニ著ハス悲華經ニ我滅度後濁惡世中現大明神廣度衆生ト云ガ如シ然レバ託宣ヲ留メテ本居ニ歸玉フ其本居ト云ヘルハ是本有眞性大日靈ノ冥界也法華經ニ神通力如^レ是於^ニ阿僧祇劫^ニ常在^ニ靈鷲山及餘諸住處^ト云ヘルハ此心也行基釋ニ曰天宮與^ニ靈山^分ニ線道互爲^ニ佛神寶主^ト云ヘル可^レ思^レ之眞性徧^ニ法界^ニ神靈具^ニ衆生^ニ託宣物ヲサトス事實ニ深キ心アルベシ況ンヤ日本ハ神國ナレバ佛法未ダ渡ザリシ前ニハ天下ノ善惡ヲバ神明ノ御託宣ニ依テ悉クハカレリト云ヘリ餘リ二人ノ心僞アシキコト茂

ノ本ヲ隱シテ萬ノ神トアラハレ玉フ是也三ニハ實迷
 ノ神謂ル一切ノ邪神ノ習トシテ眞ノ益ナク愚ナル物
 ヲ惱シ僞レル託宣ノミ多キ類是也サレバ此邪神共僞
 テ大神ノ託宣ト云ヒテ人ヲタブラカシ猥リニ惡道ヘ
 引入ベキガ故ニ宗廟末ヲ鑑テ託宣ヲ止メ玉フ也此誓
 約ヲ忘テ中比又託宣ヲ頼ミテ用ユルコトナカリシ時
 カラ○用ユル以下一本作用ル事アリシ時力無ク
 シテ神明重テ齋内親王ニ託宣シマシマシ祭主ト御問答
 アリテ長曆年中ニ重テ託宣ヲ止メ玉ヘリ其時ニ人々
 末代ニハ如何ニシテ御託宣ナラズシテハ眞ノ靈驗ヲ
 知り奉ラント疑テ申シカバ夢ヲ以テ示スベシトナン
 カカル御誓アルスラ猶當世ノ人ハ皆嚴重成鬼神天魔
 ノワザヲ信ジテ誠ノ神道ヲ知ラザル故ニ天下ノ兵亂
 國土ノ災難モ出來ヲヤ其故ハ仁三經ニ國土ヲ亂レン
 トテハ先ヅ鬼神亂ト尤可レ慎ニ此心一也ト云々

豐葦原神風和記卷中終

直爲本謂從正以爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼神之所惡也云々文ノ意分明也然ルヲ當世ニ萬ノ惡ヲ好テシカモ物忌ト云フスベテ神ノ御誓ニカナワズ甚ヲカシキコト也サレバ神ノ御誓六識ノ禁忌ト云ヘルハ萬ノ惡ヲ恐レテ六根ヲ清メンガ爲ニ目

ニ諸ノ不淨ヲ不_レ見耳ニ諸ノ不淨ヲ不_レ聞鼻ニ諸ノ不淨ヲ不_レ臭口ニ諸ノ不淨ヲ不_レ食身ニ諸ノ不淨ヲ不_レ意ニ諸ノ不淨ヲ思ハザレト誓ヒ玉ヘルハ此意也加之内外潔齋トハ喪ヲ不_レ見病ヲ不_レ問寃ヲ不_レ喰心不_レ亂刑殺不_レ斷罪人ヲ不_レ刑音樂不_レ奏穢惡ニ不_レ預兵器ヲ不_レ用輶ノ音ヲ不_レ聞都テ口ニ惡シキ事ヲ云ハズ目ニ不淨ヲ不_レ見鎮專ニ謹慎之誠宜_レ致ニ如在之禮矣所詮者肝要者正直清淨是則此神ノ本誓也仍タ獨一ニシテ諸ノ惡ニシタガハズ是ヲ清淨ト名付タリ只獨一ナル故ニ左物ヲ右ニウツサズ是ヲ心ノ正直トスル也御託宣曰心神ハ則天地ノ本基身體ハ則五行之化生肆元々入ニ元始ニ本_レ本任ニ本心ニ敬_レ神能以_ニ清淨爲_ニ先祈ニ冥加ニ以_ニ正直爲_ニ本日月廻ニ四州ニ雖_ニ照ニ六合須_ニ照ニ正直頂ニ詔命明矣又曰人乃天下之神物須_ニ掌_ニ靜謐ニ心則神明之本主莫_ニ傷_ニ心神ニ夫神垂ハ以_ニ祈

禱爲_ニ先冥加以_ニ正直爲_ニ本也須_ニ任_ニ其本誓_ニ皆令_ニ得_ニ大道ニ也天下和順日月モ精明ニシテ風雨以_レ時國豐民安云々

尊神靈驗事

垂仁天皇卽位廿六年丁巳冬十一月新嘗會ノ祭夜倭姫皇女詔ニ神主部物忌等曰吾今承_ニ大神之威命_ニ所_ニ託_ニ宣_ニ也汝等慎無_ニ懈怠_ニ正_ニ天明_ニ聞_ニケ_ニ焉_ニスベテ神代ニハ人ノ心皆清淨ニシテ悉ク正直也故ニ諸ノツミト云答ト云事更ニナシ然_ニ地神ノ末ヨリハ四方ノ民其心貳クシテ根ノ國底ニ踰躋_ニ是_ニヨリテ_ニ西天ニ_ニ真人アリ_ニ來_ニ皇天ニ_ニカハリ_ニ奉_ニリ_ニ機_ニ隨_ニテ_ニ法ヲ_ニ說_ニカ_ニ言_ニハ_ニマ_ニサ_ニ來_ニリ_ニナ_ニン_ニト_ニナ_ニス_ニ故_ニ神_ニ明_ニハ_ニ託_ニ宣_ニヲ_ニト_ニバ_ニメ_ニ本_ニ居_ニニ_ニカ_ニヘル_ニベ_ニシ_ニタ_ニト_ニヒ_ニ形_ニナ_ニク_ニソ_ニラ_ニニ_ニ大_ニ明_ニノ_ニ戸_ニヲ_ニ開_ニキ_ニ三_ニ歲_ニノ_ニ小_ニ兒_ニ輩_ニノ_ニ葉_ニノ_ニ上_ニニ_ニ立_ニテ_ニ神_ニ變_ニヲ_ニ現_ニスト_ニモ_ニ狂_ニ言_ニノ_ニ類_ニヲ_ニ信_ニズ_ニル_ニコ_ニト_ニナ_ニカ_ニレ_ニ聊_ニ不_ニ審_ニアラ_ニバ_ニ宜_ニク_ニ奏_ニ聞_ニヲ_ニイ_ニタ_ニシ_ニ其_ニ左_ニ右_ニニ_ニ可_ニ隨_ニト_ニ云_ニヘ_ニリ_ニ然_ニ則_ニ尊_ニ神_ニノ_ニ御_ニ本_ニ誓_ニト_ニシ_ニテ_ニ託_ニ宣_ニヲ_ニ止_ニメ_ニ玉_ニヘル_ニコ_ニト_ニ勝_ニタル_ニ御_ニ惠_ニ也_ニ其_ニ故_ニハ_ニ凡_ニソ_ニ冥_ニ衆_ニニ_ニ於_ニテ_ニ大_ニ三_ニノ_ニ道_ニアリ_ニ一_ニニ_ニハ_ニ法_ニ性_ニ神_ニ謂_ニル_ニ法_ニ身_ニ如_ニ來_ニト_ニ同_ニ體_ニ今_ニノ_ニ宗_ニ廟_ニノ_ニ內_ニ證_ニ是_ニ也_ニ故_ニニ_ニ此_ニ神_ニニ_ニハ_ニ本_ニ地_ニ垂_ニ跡_ニト_ニテ_ニ二_ニツ_ニヲ_ニ立_ニル_ニ事_ニナ_ニキ_ニ也_ニ二_ニハ_ニ有_ニ覺_ニノ_ニ神_ニ謂_ニル_ニ諸_ニノ_ニ權_ニ現_ニニ_ニテ_ニ佛_ニ菩_ニ薩

トノトヲ司トリ玉ヒシ大中臣氏ノ祖神也故ニ神代ヨリ以來諸之神事ヲツカサトリシニ依テ宗席ノ勅使ニ定メヲカル今ノ祭主是也第二神皇產靈尊ハ神主度會氏ノ本祖也シタシク神ニ仕ヘ奉リ來レリソノカミノ事ハ暫ラク内宮ノ鎮座セシ時大若子命ヲ以テ大神主ト定メラレシヨリ大佐々尊マテ九代ニ至レリ其時外宮シヅマリマシマセシカハ彼ノ大佐々尊ヨリ御氣ニ至マテ十九代ノ間ハ兩宮共ニ兼行フ大神主一人ナリシヲ天武天皇御代ニ御氣カ子兄虫ヲモテハ外宮ノ禰宜トシ御氣ガ弟志已夫ヲモテハ内宮ノ禰宜トス然レハ則カノ天武天皇ノ御代ニ大神主ハ止メラレヌ然ルニ王位モ靜カナラザリシカハ萬ヨロシカラザル事ナリ又始テ内宮ノ禰宜ニ補セラレシ志已夫其子ナクシテ荒城田氏ニ移レリ但兩宮ニ一人有テハ奉幣ニ事カケヌベキ故ニ二人三人ト加ヘラルハホドニ次第ニオホクナリ今ノ様コレ也此禰宜ノ加ハルコト多クハ惡シキ事アリト見エタル也抑兩宮ノ奉幣ハ皇帝ノ一人ニ限テ其外ハ式文トシテ禁メ置キ玉ヘリ然ルヲ近代ハ神主ヨリ始而諸ノ職掌ノ人共ニ至ルマデ賤キ民ノ幣ヲサ、ゲテ僅ニソノフル物ヲ貪ル故ニ神德モウ

スク王威モカロシ淺増トモ云計ナシ此等ノ事モ委クハ社記ニ載ルカ如シ第一高皇產靈尊榜幡千々姬尊ノ御父也千々姬尊ハ皇御孫尊ノ御母也則皇帝ノ祖神ニテ坐マセリ此事既ニ上ニシルスカ如シアラ、大分如レ此其外ツブサナル本祖ハ姓氏錄ニ見ヘタリ

神態忌物事

伊弉諾尊始テ伊弉冊尊ノ死セルヲ見テ我シコメノケガラハシキ所ヘ致レリトテ小戸ノ川原ニシテ御穢シ給シヨリ以來物ヲ忌ムト起レリ一念起テ二法ヲ分ツヨリ萬ノ穢ハ出來ルモノ也其ケガレ多シトイヘ凡カノ生死ノ二法ノワカレヲ忌タル神ワザ也此故ニ伊弉冊尊起キアカリ玉ヒテ伊弉諾尊ヲオヒタマヒシ詞ニハ必我ヲ見ベカラズト云其詞ヲタガヘリ故ニ汝ハ我心ヲ見ツ我汝ガ心ヲ見ントノ玉ヘルハ此理也此故ニ死ヲ見サレハ生ヲ知ラズ生ヲ知ラサレハ死ヲ恐ルベカラス只二法ノ別ヲ見ルヲケガレト云生死ヲ見ザル處ヲ清シトスル也故ニ行基菩薩釋ニ曰居ニ無爲無事大達之場ニ超レ生出レ死名ニ之清淨ニ宜起ニ方便之門ニ遙居下想像之表ニ況御託宣ノ文ニ曰人乃受ニ金神之性ニ須レ守ニ混沌之始ニ故敬神態以ニ清淨ニ爲レ先祈冥加以ニ正

神ノ威命ヲウケ玉ハリテ詫宣スル處也汝等共慎テ明
カニ聞ベシ我御ヲヤ丹後國與謝ノ宮ニ坐也天ノ宮ニ
アリシカ如ク一所ニ並ヒ奉リテハ如何カウレシカラ
ントナリ此由ヲ奏シ奉リシカバイソギ勅有テ大佐々
尊ヲ始トシテ彼處ヨリ伊勢國ヘウツシ奉ル今ノ外宮
是也聖德太子ノ御釋曰天御中主尊ハ神風ノ伊勢國百
舟之度會山田ノ原ノ太神ニ坐ス又ハ大葦原中津國主
豐受皇神ト號スル也云々又神記曰高皇產靈神詔シテ
宣ク皇御孫尊ハ豐受皇太神ノ御前ニ仕ヘ相殿ノ神タ
ルベキ也如レ此外宮鎮座ノ後內宮ニワタラセ玉ヒシ
高宮荒祭ノ兩神ヲワカチ奉テ荒祭ノ神ヲハ內宮ニ止
メ參ラセ高宮ヲハ外宮ニ移シ奉ル是則伊弉諾尊日向
ノ小戸河原ニシテ御祓シ給シ時玉レ生フ大曲津大直
日兩神也其大曲津ト申スハ荒祭ノ宮天照太神ノ荒タ
マノ神也其大直日ト申スハ多賀宮豐受太神アラタマ
ノ神也ト云ヘリ又相殿ノ御中ニ岩根多力雄尊其御體
ハ弓ニテ坐也袴幡千々姫尊ハ劍ニテ坐也此兩神ヲバ
內宮ノ相殿ニ止メマイラス太玉尊ノ御體ハ則神璽ニ
テ御坐ス天津兒屋根尊其御體ハ矢^{○一本}ニテ御坐ス
譬ヘハ如レ履此神達ヲバ皆分テ外宮ヘ移シ奉ル其外

又相殿マシマセトモ云ヒアラハシ奉ルコト深キ禁メ
也又兩宮及攝社ノ方角并御殿ヲ作リ奉ル有様皆深キ
御事共アリトイヘドモ是ヲ申アラハスニ旁深キ恐レ
多シ委クハ別ニシルシ侍ベリ倭姫皇女又神主物忌等
ニ告テノ玉ハク汝チ諦ニ聽ケ天照太神重テ託宣シ御
坐ス我ヲ祭奉ラントキハ先豐受太神宮ヲ祭奉ルベシ
而後吾宮ヲバ祭ルベキ也トナン故ニ諸ノ祭事ハ皆豐
受宮ヲ先トスル也夫ヨリ皇御孫尊ハ天照太神ヲアガ
メ給天照太神ハ天御中主尊ヲアガメ玉フ德ヲツタヘ
元ヲタツトミ玉フ故也ト云ヘリ仍倭姫皇女加様ノ事
共ハカライ置キ坐テ奏シ玉ハク我ハ久カラズメ去ヌ
ベシ姫宮一人下シ奉リ玉ヒテ我ゴトク尊神ニ仕ヘ奉
ラセントテ下シマイラセ自ハ終ニ岩隱レシ玉ヘリ其
レヨリ以來齋宮ト申奉ルハ是也

祖神大分神

天御中主尊ニ三ノ御子アリ一ハ高皇產靈尊第二神皇
產靈尊第三津速產靈尊其兒ニ市千魂尊其子ニ與居登
玉尊其子ニ天津兒屋根尊即人臣ノ太祖也爰ニ大職冠
淡海公ヨリシテ藤原ノ氏ヲ給リ天下ノ政ヲ主リマシ
マセリ抑天津兒屋根尊ハ皇御尊ノ下ラセ玉ヒシ時フ

ン爲ニ來レリトナンカ、ル程ニ三種ノ神器ニツカヘ
其德ヲ崇メ奉リ玉ヘリ猶モ同宮ノ中ニ神ヲザ恐アリ
シカバ宮所ヲ求メンガ爲ニ崇神天皇ノ御宇ニ倭姫皇
女三種ノ神器ヲイタバキ奉リ大内ヲ出給ハントセシ
時護身ノ御爲ニ石凝姥ノ神天目一箇神二氏ノ者ニ仰
セテ劔ト鏡トヲ鑄替奉ル地祇^ニソナヘマシマセシ
神璽相共ニ大内ニ止メ置參ラセ本ノ三種ノ神器ヲバ
皇女自ライタバキ奉リ處々ニ宮所ヲ尋マシテ垂仁天
皇ノ御代ニ遂ニ伊勢國ヘ入ラセタマヒシトキ猿田彦
ノ翁ト申者ニ行合テイツクニヨキ宮所アルト問玉ヘ
ハ答テ申サク宇治ノサクシラヨリ流タル河上ニアヤ
シキモノ光リテ侍リ定メテ主アルラント思ヒテ翁ハ
萬歲ノ間守テ今マテアリトナン皇女聞召シ喜テ彼翁
ヲサキトシテ尋入マシノ^ハテ御覽シテノ玉ハク此寶
ハ天照太神天ノ宮ヨリツキノ宮所ノ爲ニトテ遙カニ
投給ヒシ天ノ逆戈五百鈴寶是也トナンソノ時御舟ニ
メサレテカノ所ヘアガラセ玉ヒシ時御裳ノスソヨゴ
レタリシヲス、ガセ玉ヒシ川ヲバ御裳濯川ト申ス也
カノ五十鈴ノ所ヨリ流レタル川ヲハ五十鈴川ト申ス
也サレバ終ニ此川上ニ祝ヒ奉ル今ノ風宮ノ御鎮座是

也聖德太子ノ御釋ニ曰大日靈貴天照皇太神ハ神風伊
勢國玉掇五十鈴川上ニ坐ス凡上ニ坐ス時ハ掇トヒロ
クル是ヲ尸垂^{○一本}光天女ト名付奉ル也云々又神記
曰劔鏡寶珠三種ノ神器ヲ以テ伊勢國五十鈴川ノ宮ニ
鎮座シ奉也此三種ノ神器ノ中寶鏡ト申スハ八百萬ノ
神達岩戸ノ前ニテ鑄奉リシ鏡也則今ノ內宮天照太神
ノ御正體也寶劔ト申ハ素盞烏尊蛇ノ尾ヨリ取出玉ヒ
テ天照太神ニマイラセ玉ヒシ劔是也然ルニ景行天皇
ノ御宇日本武尊東夷ヲ平ラケントシ給ヒシ時太神ニ
詣テ御暇申サセ給ヒシ時倭姫皇女此寶劔ヲ以テ日本
武尊ニ授ケマイラセ念比ニ教ヘ奉リ玉ヒシ故ニ彼東
ニテ夷ニヲソハレ遁レカタカリシ處ニ草ヲナギ火ヲ
カケ夷ヲヤキ殺シテ遁レ玉ヒシヨリ以來草薙劔トハ
名付タリ此尊歸リ坐ストテ尾張國ニテ惡シキ風ニア
タリテ失セ玉ヒシ時此劔ハカレニトバマリ今ニ熱田
ノ宮ト申ス也神璽ノ玉ハ天御中主尊水德也此尊サ、
ゲテ豐葦原ヲ作り玉ヒシ是也外宮御鎮座ノ後五十鈴
ノ宮ヨリ山田ノ原ニ奉レ移今相殿ニテ坐ス太玉尊是
也謂ル內宮御鎮座ノ後數百歲ヲ經テ雄略天皇ノ御代
ニ倭姫皇女神主部ノ物忌等ニ向テ宣ク我ハ是天照太

シマシ海ト陸トハ常ニ通ナマシ今ヨリ後ハ永ク知ル
ベカラズトテ產玉ヒタル御子ヲ百草ニツ、ミテ浪ノ
ホトリニ打捨テカヘル後ハ永ク和田津海ノ戸ヲ閉ス
サレハ海ト陸ト今ニ不レ通コトハ是其事ノ本也故ニ
火々出見尊餘ノ女ノ乳アルヲ持テ此御子ヲ養ソダテ
タマフサレバ今ニ至ルマデ乳女人ヲ取コトハ此イハ
レナリ其後母ノ豐玉姬ナヲ我子ノ事ヲ哀ミ思ケレハ
妹ノ玉依姬ヲヅカハシテソダテ奉リシ御子也是則地
神五代ノ終也然ルニ此鶉羽不葺合尊御伯母ノ玉依姬
ヲ后トシテ四ノ御子ヲ生マシメ玉ヘリ第一ハ彥五瀨
尊第二稻飯尊第三三毛入野尊第四ハ磐余彥尊是第四
ノ尊則神武天皇ト申テ御代ヲ繼玉フ則人王ノ始是也
委ハ日本紀ノ文ノ如シ夫レ神ノ代人ノ世異也トイヘ
ドモ皇御孫尊ヨリ以來天津日嗣ヲ受ケ三種ノ神器ヲ
傳ヘ代々ニ至ルマデ天皇ノ御名ヲ得玉ヘリ天ト皇ト
二ノ德一人ノイワレ前ニシルスガ如シ謂ル地ノ靈光
ハ顯レテ天ニ上ル是ヲ天照太神ト申シ奉ル其天ノ源
ハ天御中主神是也此天ノ顯レ下ル其德ヲ高皇產靈神
ト名付奉ル此德ニヨリ終ニ國ノ主ト成玉ヘルヲ皇御
孫尊ト申奉ル也故ニ此皇御孫尊ハ天神外宮ノ相殿ト

シテ德ヲ同ク本ト末トヲ一ツニシテ豐受大神トハ申
シ奉ル也其文ニ曰豐受トハ天御中主尊皇御孫尊二柱
ノ神ノ惣名也豐トハ豐葦原ノ主天御中主尊ノ德也受
トハ此德ヲ皇御孫尊ノ讓リ受玉ヘル名也サレバ聖德
太子ノ御釋ニ曰伊勢國度會山田原ニ坐スハ豐葦原中
津國ノ主豐受皇神是也トシルシ玉ヘリ天先定テ地ノ
靈光天ニ顯レ地既ニ定テ後天ノ德下テ地ヲ主ル也サ
レハ此理ニヨリテ自祝奉ル時地神先シヅマリ玉ヒテ
天德ヲ顯シ天神後ニシツマリ玉ヒテ地ノ德ヲアラハ
ス此道ヲ一人ニユヅリ百王ニ蒙ラシムル故ニ天地ノ
兩宮ヲ崇奉リテ皇帝ノ宗廟トハ申マイラスル也

兩宮鎮座事

神ノ御代ヨリ以來三種ノ神器ヲ傳ヘ上九代ノ帝開化
天皇ニ至ルマデ床ヲ同シ御座ヲ共ニシ奉リシカドモ
代スデニ下ルマ、ニ漸ク神威ヲ恐レ奉リテ別ノ御殿
ニイハヒ奉ル靈鏡殿今ノ内侍所是也然ルニ開化天皇
ノ御宇ニ箱ノ中ニ虫ノ如クシテハタラク物アリ奇ミ
テ御覽ズレバ人ノ形ナリイタハシト思食テ聞セ玉ヒ
テ坐スホドニ漸ク人トナリイツシキ姬宮也是ヲ倭姬
皇女ト申奉ル事ノ心ヲ尋レハ我ハ神ニ宮ツカヒ奉ラ

多キニヨルベカラズ慥ニモトノ針ヲ返セトセメケレ
 バ思ノ餘リニ海ノ端ヘ行テサマヨヒケレハ鹽土翁ト
 云神出來レリ此事ヲ尋聞テ慥レミヲナシ大目ノ荒
 籠ヲ作テ火々出見尊ヲ中ニ籠メ海底ヘ入タマヘリ
 又翁ノ教ニ隨テ八尋ノ鰐ニ乗テ龍宮ヘ至リ彼宮ノ
 門ノ井ノ上ニ湯津桂ノ木アリ其木ノ本ニ良久御座處
 ニ和田津海ノ神ノ娘豐玉姬内ヨリ嚴シキ姬立アマタ
 ツレテ玉ノツルベヲ持井ノ水ヲ汲玉フニ井ノ底ニ彼
 ノ尊ノ影ウツリテ嚴シキ男アリイザヤ汲ントテ汲共
 汲トラレズ自空ヲ見上玉ヒケル程ニ男アリ驚テ内ヘ
 入り父ノ王ニ申サク我父獨嚴シキト思タレトモ井ノ
 上ノ桂ノ木ノ本ニ海神ニ勝レタル男アリト云父ノ
 王聞テカレハ天神ノ御子也トテ内ヘ入レ奉リテ様々
 ニモテナシ申テ後ニ此龍宮ヘ來リ玉ヘル事ノ由ヲ問
 奉ルニ釣針ヲ失タルヲコリヲ委答タマフ其時海神萬
 ノ魚共ヲ召集テ尋タルニ皆々不知ト云但口女ト云魚
 此程口ノ勞アリトテ參ラズアヤシトテイソギ召シテ
 其口ヲ探ルニ果シテ失タル所ノ釣針ヲトリ出セリ其
 時海神禁メテ今ヨリ後餌ヲ吞ベカラズト云又此魚天
 神ノ御ソナヘニ奉ラザルコト是ヨリ起レリ口女トハ

赤鯛ノ事ナリ○一本以口女云々爲注爰ニ於テ火々出見尊此玉姬ニ
 幸シテ三年ヲ送リ玉ヒヌカ、ル處ニ猶古郷ノ戀シキ
 色ミヘケレハ玉姬父ニ此由ヲ申海神此尊ヲ呼奉テヤ
 スク歸タマヘ送り奉ルベシトテ鹽滿珠滿珠ノ玉是也干珠干珠玉
 針ヲ兄ニ返サントキマヅシキモトカツエノハシメト
 云テツバキカケテ後様ニ投ケ返セ又兄怒テシタガハ
 ズバ鹽滿珠ヲ持テ溺セカナシマントキハ鹽干珠ヲ以
 テウカベタマヘヨ如レ此シ玉ハ必民トナリ玉ン其
 ヨリ民來リ順ベシトナン如此シテツイニ葦原ノ主ト
 ナラセ玉ヒヌ抑火々出見尊カノ龍宮ヲ出サセ玉フ時
 豐玉姬語リテ申サク我御子ヲ孕メリ久シカラズシテ
 生ムベシ必產屋ヲ作テ待給ベシトナン此故ニ產屋ヲ
 作ルニ鶉羽ヲ持テ葦ルニ未ダ葦モアヘザルニ來テ產
 奉ル御子成ガ故ニ其御名ヲバ鶉羽不葺合尊ト申セリ
 扱産ントセシ時玉姬尊ニ逢奉テ我產屋ヲバ必ノゾキ
 タマフベカラズト約束ヲシタマフ火々出見尊此語ヲ
 用タマハズヒソカニノゾキ玉フ時八尋ノ蛇鰐ノ形ニ
 テ腹ハヒ臥タリ目ヲ見合セ見付テ恨テ曰ク我詞ヲ不
 用シテ恥ヲ見セ玉ヘリ若シノゾキ玉ハズバ○一本作云ガ如クマ

ハ我子孫立ノ王タルベキ國也汝行テ治メヨ此三種ノ神器ヲ持テ永ク天津驗シトセヨ寶ノ鏡ヲ見ン事我ヲ見ルガ如クスベシ床ヲ同シフシ御座ヲ共ニシテイマハリ奉ラバ天津日嗣ノ榮ヘンコ天地ト共ニ窮マリナカラント事ヨセサセ給ヘリ又神記ニ曰天地開シ時生レマセル神ヲ天御中主尊ト名付クウカベル形葦牙ノ如クシテ次第ニ此國出アラハレリ故ニ豐葦原中津國ト云フ是ニヨリテ天御中主尊ノ名ヲハ又豐受皇太神ト申也此豐受皇太神ト天照太神ト相共ニ三種ノ神器ヲ皇御孫尊ニ授ケ奉リ天璽トシ玉ヘリ其故ハ天照太神ハ父方ノ御祖母也此御名ヲ傳ヘ玉フトキハ天御中主尊ト申ス高皇產靈尊ハ母方ノ祖父也此御名ヲ傳ヘ玉フトキハ皇御孫尊ト申セリ是則父方ハ天ノ道母方ハ地ノ德二ノ靈明ヲ受テ天皇ノ兩名ヲ得タマヘリ故ニ此天地ヲ父母トシテ一人ノ御身トナリ三種ノ神器ヲ傳テ百王ニ令レ象タマヘリ

天照太神 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 父天
天狹霧地狹霧尊一人 皇御孫尊亦名曰天御孫

高皇產靈尊 拷 幡 千々 姬 命 母地
舊事本紀曰天照太神ト高皇產靈尊ト相共ニ生マシ奉

ル御子也故ニ天御中主尊一本作天御孫尊ト名ケ又ハ皇御孫尊ト申ストイヘルハ此心也此皇御孫尊日向國ヘ下リ玉ヒシ時其處ニ國津神アリ其名ヲバ事勝國勝ト申セリ彼娘ニ木花開耶姫ト云ヘルヲ妻取タマヘバ只一夜ニ御子ヲ孕ミタマヘリ皇御孫尊勅シテノタマハクタトヒ天神ノ子成其何ソ一夜ニ孕ンヤ定テ國津神ノ子ナルベシトナンノ玉ヲ開耶姫奉リテ戸モナキ家ヲ作リ中ニ入テ誓テ曰ク若天神ノ御子ニ非ハ燒死スベシ又天神ノ御子ナラバ燒ヘカラズトテカノ家ニ火ヲ付給ヘリ先火ノ盛ナリシ時出來給フヲバ火進尊ト云ヒ次ニ火消ザリシサキニ出來給フヲバ火折尊ト云也後ニ火ノ消テ跡ノホトスル時出來給フヲバ火々出見尊ト云地神第四ノ尊也此尊御代ヲツギ給其故ハ兄ノ火進尊ハ海ノワザヲナス弟ノ火々出見尊ハ山ノワザヲナス或時互ニワザヲカヘ兄ノ火進尊ハ弟ノ弓矢ヲ乞取テ山ニ行キ弟ノ火々出見尊ハ兄ノ釣針ヲ乞取テ海ヘ行ク然ルニ共ニ皆其ワザキカズシテ歸ルニ兄火進尊ハ弟ノ弓矢ヲ慥ニ返シヌ弟ノ火々出見尊ハ釣針ヲ魚ニ喰切ラレテ是ヲ返サズ餘リニセメラレテ腰ノ刀ヲタラシテ針ヲ一箕作テ返シケレハ殊ニ腹ヲ立テ針ノ

豐葦原神風和記卷中

地神五代事

二尊 天神之最後也
如前分別

天照太神○一本有註云又云大日靈貴又云大日靈尊

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊已上天宮ニ御座也

皇御孫尊

火々出見尊

鵜羽不葺合尊

以上五代者皇帝之祖神也

津速產靈尊天神也

市千魂尊如前

與居登魂尊

天津兒屋根尊

天押雲尊

天種子尊

已上五代者人臣之祖神也

此五代モ天神ト同ク五行德ヲ顯シ給ヘリ謂ル天照太

神ハ地神ノ御形ニテ坐セハ土ノ德ヲ主リ給ヘリ正哉
吾勝々速日天忍穗耳ハ金ヲ主リ皇御孫尊ハ木ヲ主リ
火々出見尊ハ火ヲ緣トシ鵜羽不葺合尊ハ水ヲ緣トシ
テ各德ヲ施シタマフ委クハ別ノ記ニ見ヘタリ但於ニ
五代ノ中一前ノ二代者天宮ニ坐シテ葦原ニハ下リ給
ハズ第三ノ皇御孫尊始テ此國ヘ天降り給ヘリ其故ハ
地神第一ノ尊天照太神ノ御子地神第二ノ神正哉吾勝
々速日天忍穗耳ニ向ヒマシノ一テ勅シテ宣ク葦原中
津國ハ我御子孫ノ主タルベキ處也汝下テ治メ給フベ
シトコトヨサシ坐ス時正哉吾勝々速日天忍穗耳尊答
奉リテ宣ク自ハ天上ニサフラヒテ御親ニ副奉ルベシ
吾子皇御孫尊ヲ下サブラフベシトノ玉ヘハ天照太神
是ヲ○一本此下有聞召ヤ
ガテソレヲノ八字ユルシ玉ヘリ其時先ツ經津主武
甕槌ノ二人ノ神ヲ遣シテ大己貴ノ神ヲ始メテ及ビ諸
ノ惡キ國津神ヲシタガヘ天ノ宮ニ上テ此由ヲ奏シ奉
リキ其後第三代皇御孫尊ハ三十二神ヲ前後ニ引ツレ
天兒屋根尊ヲ御前ニ立テ幣帛ヲ捧ケテ天ノ太ノトコ
トヲ奉リ筑紫日向國高千穗ノ櫛不留峯ニ始メテ天降
リ給ヒシ也加樣ニ下シ奉リ給ヒシ時天照太神此皇御
孫尊ニ○一本此下有向ヒマシマシ
テ御寶ノ鏡ヲ捧テ之ノ十四字御勅シテノ玉ハク葦原

十握ノ劔ヲ持テ寸々

○一本作ハキダ

ニ截リ玉フ至レ尾劔ノ及

少折レテ切レズ尊怪デ劔ヲ取直シ尾ヲ立ニ割テ見玉
ヘバ尾ノ中ニ一ノ劔アリ此所謂天叢雲劔也尊是ヲ取
テ私ニスベカラズトテ五世ノ神ヲ以テ天照太神ニ奉
リ給フ是ハ初當我高天原ヨリ落シタリシ劔ナリト悅
給彼蛇ノ臥タル所ヨリ常ニ村雲ノ立シカバ是ニ隨テ
村雲ノ劔ト名ヅク其後素盞烏尊出雲ノ國ニ宮作リシ
タマヒテ稻田姬ヲ妻室トシタマフ其時尊歌ヲ讀給フ
八雲立出雲八重垣妻籠ニ八重垣造ル其八重垣ヲ
是三十一字ノ歌ノ始也日本武尊ヨリハ草薙ノ劔ト名
付今ハ尾張熱田ノ宮ニ御座也卽是天地ノ定レル事ノ
由ヲ云又素盞烏尊ハ遂ニ根國ヘ下リ給トモ云ヘリ天
照太神ハ必天原ヘ上リタマヘリサレバ加様ノ光ノ照
スコトハ世界已ニ出來タルニ依レルガ故ニ天照太神
ヨリ地神トハ申シ奉ル也然ドモ其御子正哉吾勝々速
日天忍穗耳尊マデハ天宮ニ御座シテ葦原ヘハ降り玉
ハズ第三ノ皇御孫尊ヨリ正シク御形ヲ顯ハシ此國ヘ
ハ天降り御座者也仍天照太神ヨリ以來皇帝ノ祖神ト
人臣ノ祖神ト相隨ヘテ地神ノ次第ヲ得レ可意者也

豐葦原神風和記卷上終

ミテグラヲカケ岩戸ノ前ニ立置キ樗九木ノ橋ニカケ
ヲキ庭火ヲ燒テワザヲキアヘリ其中ニ天佐久目尊乳
プサヲ顯ハシ御裳ヲ、シサケ小竹ノ葉ヲ手草ニ持テ
橋ヲ登リ舞ヲドルヲ八百萬ノ神達是ヲ見テ咲サワゲ
リ時ニ天照太神獨思タマハク我ハ加様ニ隱レ居タリ
定テ天下クラカルベシ何トシテ神達笑ラント思タマ
ヒテ岩戸ヲホソク開テノゾキタマフ其時岩根多力雄
尊御手ヲ取テ引出シ奉ル天兒屋根尊太玉尊四手ノ御
繩ヲ持テ御ウシロニ引マハシヌ其時天原ト葦原ト始
テ明ラカニ人ノ面白ク顯レタリ是ヲ見テ神達アナサ
ヤケアナ面白ト云リ其言ノ葉今ニ至テ云ナラハシタ
リサレバ天ノ下夜晝ヲキマヘソメシ其事ノ本則是也
抑如レ此ヲコリヲ尋ルニ天地未レ開ケザル其前ハ皆ム
ナシキ空ノミニシテ更ニ物アルコトナシ纔カニ葦牙
ノ如クナリトイヘドモ實ニアラキ姿ハ見ユザリキニ
尊ナンドノ時ハ男女ノ姿アリシカトモ身ニ光アリテ
日月ノ光ニカラズ飛アリキ思ノ儘ナリシヲ其後漸ク
ミダリノ心盛ニ成ル儘ニ隨テ汚レタル國トナリアラ
ユル人光モ失セ又世間モ闇ク成リシ事アリ是則天照
太神岩戸ニ入給トハ云也然トモ萬物ノ靈性ハ不レ留

シテ清登リ光ヲ顯スヲ天ノ岩戸ヲ出給トハ云也サレ
バ諸ノ惡シキ物ハ次第ニ重ク沈ムヲ素盞鳥尊ト申ガ
故ニ八百萬ノ神達萬ノ罪ヲ素盞鳥尊ニヲホセテ根國
ヘ追奉ル是ニヨリテ素盞鳥尊根國ヘ行給トテ出雲國
清地郷ノ奥箴ノ川上ヨリ物喰タル箸ノ流リ、ヲ見テ
尋ネ登リ給ヘバ祖母ト祖父トアリ二人ノ中ニ姫ヲ置
テ泣悲ム素盞鳥尊此泣悲故委シク問タマヘバ我ハ此
所ノ國神ナリ祖母ヲバ手摩乳ト申祖父ヲバ足摩乳ト
云中ニ置タルハ我娘也名ヲバ稻田姫ト申也泣悲ムコ
トハ我ニ八人ノ娘アリシヲ毎年ニ八岐ノ大蛇來テ吞
喰フ此姫獨ニ成リヌ今年來テ又此姫ヲ吞喰ンコトノ
悲也其蛇ヲ見レバ一ツノ身ニ八ノ頭八ノ尾有テ其長
ハ八ノ峯八ノ谷ニ渡レリ背ニハ松杉茂リ生タリ眼ハ
日月○一本作赤ホウツキノ如シ腹ハ血ヲツ、ミタルニ似タリ扱
問タマフ人者誰ニテ坐ゾト申ハ素盞鳥尊答テノ玉ハ
ク我ハ是天照太神ノ弟也汝ガ娘我ニ得サセバ彼蛇ヲ
タバカリテ可レ殺トノ玉ヲ手摩乳足摩乳喜テ受ケ答
ユ奉ル其時素盞鳥尊八ノ舟ニ八醴ノ酒ヲ湛ヘテ其上
ニ棚ヲ搔テ稻田姫ヲ高ク置キ奉リ影ヲウツセリ大蛇
來テ酒ヲ吞醉テ惘然トシテ居眠臥タリシヲ素盞鳥尊

ン爲メ也又君ト我ト相共ニ子ヲナサント思フ也トアレハ天照太神何ニシテ其心ヲバ知ラントノタマヘハ素盞烏尊答テノ玉ク若我女子ヲナシタラバ賊心ナルベシ若男子ナラハ清心成ベシトテ天照太神ト素盞烏尊ト互ニ約束ヲシテ素盞烏尊ノ腰ニ帶玉ヘル三劔ヲハ天照太神取座シテ此劔ヨリ三ノ女神ヲ成給ヘリ天照太神ノ御手ニマトヒタマヘル五百箇ノ玉ヲ素盞烏尊取座シテ此玉ヨリ六ノ男神ヲ成給ヘリ爰ニ天照太神勅シテノタマハク尋ニ事本^ニ玉ハ是我物也故所^レ生六ノ男子ヲハ我取養テ天原ヲ治メシムベシ此始ノ御子ハ正哉吾勝々速日忍穗耳尊是也扱劔ハ汝カ物也故所^レ生三ノ女神ヲハ素盞烏尊ニ授テ葦原ヲ治メシム則筑紫宇佐宮ナンドニ御座ス神達是也アラノ如^レ此委クハ本紀ニ見エタリ又天照太神御弟月讀尊ニ勅シテ宣ク葦原中津國ニ保食神ト云者アリ汝相共ニ萬ハラフベシトテ下サレタリ保食神月讀尊ヲ見奉リ走廻リテ饗シ奉ル山海ノ珍物ヲ口ノ内ヨリ取出シテ百机ニ備フ月讀尊怒テケガレタルモノヲ我ニアタフトテ帶給ヘル劔ヲ拔テ保食神ヲキリ殺シ玉フ天ニ昇リテ此由ヲ申給ヘハ天照太神怒給ヒテ汝惡キ神也不

レ可ニ相見トテ一日一夜ヘダテキタマフ夜晝ノワカレシ因縁是也其後天照太神三熊之大人ヲツカワシ葦原ヲ見セシメタマフニキリ殺サレタル保食神ノ頭其目胸腹ナンドヨリ蠶養及ビ五穀ヲ出セリ是ヲ以テ天ニ昇リテ參ラスルニ天照太神見玉ヒテ悦デ宣ク是ハ萬ノ人クサノ食ヒテ生ベキ物也トテ水田岡田ノ田ナツ物トシタマヘリ五穀蠶養ノ事本^ニ是ナリ又日本紀ニ委カルベシ其後素盞烏尊人トナリ神ワザタケカリケレバ天照太神ニサマノ仇ヲナシ奉ル是ニヨリテ汝ハ惡キ神也不レ可ニ相見トテ天ノ岩屋ニ隠レ入岩戸ヲタテ、見エ給ハズ故ニ天原天下常闇ト成テ手足ノ置處ナシ萬ノ愁音カマビスシクシテサハヘノ鳴ガ如シ其時八百萬ノ神達神集ニ集リテ神議ニ議リ岩戸ノ前ニシテサマノノヲコタリヲ申シ玉シ中ニ天香久山ノ土ヲ取テ石凝姥神ヲ以日神ノ御形ヲ奉^レ鑄始ノ鏡^{紀伊國目前宮奉^ニ祝籠}是ハ神達心ニ不^レ合後ノ鏡^{伊勢國五十鈴川端御坐}是則御形ニ似奉^レリトナン櫛明玉神ヲ以テ八坂瓊ノ五百箇ノ玉ヲ作ラシム又カタヘノタダイノ神ヲ集メテ天ノミテグラヲ作ラシメ天ノ眞神ヲネコジニシテ上ツ枝ニハ鏡ヲ掛ケ中ツ枝ニハ玉ヲカケ下ツ枝ニハ

ハキカケテ販リ玉フ時伊弉諾尊腹ヲ立テ起キアガリ
 玉ヒテ必ズ見ルベカラズト云ツル言バラ違ヘ我ニ耻
 ヲカ、セツルコト汝我心ヲミル我モヤツコカ心ヲ見
 ントテ八ノ鳴神ヲツカハシテ追出シテ後ニハ自立走
 テ追來ル伊弉諾尊兎角シテ逃去リヨモツ平坂ニ至リ
 テ千引ノ石ヲ立互ニコトハルニ伊弉諾尊曰我言葉ヲ
 タガヘズハ黃泉ト此葦原ト^{○此下一本有常ニノ字}云ヒカヨハス
 ベカリツルニ約束ヲ違ツレバ長ク隔タリヌ我ハ一日
 ニ千人ヲ可^レ殺トノ玉フ伊弉諾尊サラバ我ハ一日ニ
 千五百人ヲ生ズベシトノ玉フ其ヨリシテコソ泉津ト
 葦原ノ道モ塞リテ生死ノ別モ始タリ事ノ本是也其後
 伊弉諾尊悔テノ玉ハク我思ノ外ニ穢ラハシキコトヲ
 見ツレハ御祓セントテ筑紫日向國橘小戸河原ニ往タ
 マヒテ先御頭ヨリ始メテ御冠御衣ナンド祓給フ皆神
 トナレノ扱流ル、河ニ向テ宣ク上瀬ハハヤシ下瀬ハ
 遅トテ中瀬ニテ御身ヲス、ギ御座スサレバ穢ハシキ
 ヲ清クナシ萬物ヲ忌ムハ是其因縁也彼祓ノ時先ツ大
 曲津神ヲ生給ヒ此マカレルコトヲナサントテ次ニ
 大直日神ヲ生シ給ヘリ而シテ後八柱ノ小神ヲ化生シ
 又三柱ノ太神ヲ濯ギ顯シ奉ル左ノ御目ヲス、ギテハ

天照太神ヲナシ右ノ御目ヲス、ギテハ月讀ヲナシ御
 鼻ヲス、ギテハ素盞烏尊ヲナシ又重ネテ勅シ給我天
 ノ内ニ珍敷キ御子ヲ成サントテ左ノ御手ニ白銅鏡ヲ
 持大日靈ヲ化生シ右ノ御手ニ白銅鏡ヲ持テ月讀尊ヲ
 化生シ御頭ヲメクラシテ顧リミタマフ時素盞烏尊ヲ
 化生ス如此シタマヒテ後伊弉諾尊諸ノ御子達ニ勅シテ
 曰ク天照太神ハ天原ヲ知食セ月讀尊ハ夜ノ國ヲ知食
 セ素盞烏尊ハ海ヲ知食セト事ヨセサシ給ヘリ然ルニ
 素盞烏尊ハ己カ國ヲハ不^レ知シテ只是泣ヨリ外ノ事
 ズナキ時ニ父ノ伊弉諾尊何故ニ如此ナクゾト問タマ
 ヘハ答ヘテ宣ハク母ノ根ノ國ヘ行ント思也トアレハ
 父ノ尊ハヤノトク行ケトノタマヘバ素盞烏尊申タ
 マハク且ク高天原ニ登リテ天照太神ヲ相見テ後ニ根
 國ヘ可^レ行トアレハ父尊是ヲ許シ玉ヘリ素盞烏尊父
 ノ勅ヲ受ケ天ニ登リ給シ時羽明玉神下リ向テ八坂瓊
 曲玉ヲ奉ル其玉ニヨリテ天上ニアガリ御坐ス天佐久
 目尊是ヲ見テ天照太神ニ告奉ル本ヨリ素盞烏尊ノ惡
 キ心ヲシリ給ヘル故ニ定テ我天原ヲ奪ハントニコソ
 トテサマギ玉ヒ様々ニヨロヒテ立向タマヘバ素盞烏
 尊申タマハク我ニキタナキ心ナシ只珍敷寶玉ヲ奉ラ

元氣所^レ生水德ノ和氣ナル故ニ天水雲神ト云即水主
ノ形又ハ月珠ニテ御座也萬ノ因果ト顯レテ此葦原中
津國ヲ造リタマヘリト也又或說ニハ天地開^{記イ}テ後天
下尙危カリキ其時^{時ニイ}二尊八坂瓊曲玉ヲ御手ニ捧ゲテ豐
葦原中津國ヲ造レリトナリ即神璽ノ玉ノ起是也加様
ノ文ドモハ皆々同心ナルベシ其故ハ二尊此國ヲ作リ
給事ハ先天御中主尊ノ勅ヲ受テ天瓊ヲ給リ天ノ浮
橋ノ上ニ立テ相理リテ曰此下ニ定テ國アラントテ天
ノ逆矛ヲ指下シテサグリ引上給シ時矛ノシタ、リ凝
テ一ノ嶋トナル是ヲ礪取盧嶋ト名付去レハスベテ萬
ノ國嶋ハ皆潮ノ泡ノ凝々テ成レル物也扱二尊始テ此
礪取盧嶋ニ下テ矛ヲ指立テ八尋ノ殿ヲ作りテ住タマ
フ日本高見國トハ申也二尊男女ノ形ハ御坐トモ陰陽
ノワザヲナスコトナシ爰ニ鵜鴬ト云鳥來テ尾首ヲ土
ニ敲キテ動スヲ見給ヒテ嫁クコトヲ習テ後陰陽和合
ヲ成シ萬ノ物ヲ產出タマヘリ先淡路嶋ヲ產給是則エ
ナノ心ナル故ニ我カハヂナリト云ヘリ此後大八嶋六
ノ小嶋處々ノ國及山川草木ヲ生給ヒテノ玉ハク我既
ニ國ヲ生メリ何ゾ亦國ノ主ヲ生ザランヤトテ一女三
男ヲ生給ヘリ一女ト申スハ天照太神三男ト申ス八月

讀尊^{內宮ノ}蛭子^{西宮}素盞鳥尊^{出雲}然ルニ日神月神ヲバ
久シク此國ニ不^レ可^レ留トテ共ニ並テ天ノ宮ヘ奉^レ送
蛭子生テ三歳マデ足ナヘテ不^レ立故ニ葦ノ舟ニ乘
テ流シ遣リ給フ又素盞鳥尊ハ神ワザケクシテ只常
ニ泣^リ以テワザトスト云リ其故ハ天地ノ分^レレントシ
テ輕キハ上テ天トナリ重キハ下テ地トナル此地ノ人
トナリテ陰陽精先^{○一本ヲ備タリ日月ト顯レテ照リ}
登^{作光}ヲ不^レ可^レ留トハ云也然彼重物ハ皆下テ形トナルヲ
流シ遣スヲ蛭子ト云也又素盞鳥尊ハ惡キ爲作也去レ
ハ山川ノ立シカバ^{○立シカハ一本青山モ枯山トナリ人}
種命定ナキ煩ハ悉ク此素盞鳥尊ノ爲作也トイヘリ是
則陰陽互ニ相尅シテ始アル者ハ必終アルヲ顯シ給
ヘリ其後女神伊弉册尊ハ火神軻丘突智尊^{實茂大明神是也}ヲ生
時ヤカレテ神去御座テ黃泉國ヘ行給ヌ男神伊弉諾尊
跡ヲ追尋行キ呼出シテノ玉ハク我作ル處ノ國未^レ終
飯玉ヘトノ玉ヘバ伊弉册尊答テノ玉ハク且ク相持ベ
シヨミヅノ神ニ理リテ飯ベシ其程我ヲ不^レ可^レ見給
トノ玉フ然ルニ餘ニ遲シ見^ト思玉フ折節空クラガ
リケレバ湯津ノ爪櫛ヲ引カキ一火ヲアゲテ見給ニク
サレ臥シテ蟲ドモ湧出タリキタナシト云テツハキヲ

天萬尊

神皇產靈命 神主祖神一本

天鏡尊

高皇產靈命 帝王祖神也

國常立尊

天御中主尊

國狹槌尊水

地天八下靈命

豐斟淳尊火

水天三下靈命

已上三代ハ獨化神ニテ男神ニテ女神ナシ五行ノ次第

帝祖ニハカハリタリ可ニ見合

泥土瓊尊木

火

沙土瓊尊

天合靈命

大戸間邊尊

風

大苦邊尊金

天八百日靈命

面足尊

空

惺根尊

天八十萬靈命

伊弉諾尊

五

伊弉冊尊

津速產靈命

已上天神七代ハ皇帝ノ祖神其數十一柱也

已上七代ハ人臣ノ祖神皆是獨化神也

此天神七代ノ内始ノ國常立尊ヲ虛無神ト申也只名ノ

ミアリテ實ノ姿ナシ然ルニ天地ハ終レドモ其神ハ不

レ終物ノ形ハカワレドモ其道ハ不レ替常ニ起リテ常ニ

國ヲ成セルガ故ニ國常立トハ申也如^形レ此其理ノミニ

シテ未^レ顯^イヲバ國常立尊ト名付ケ其氣姿ノ顯初ムル

ヨリ天御中主尊トハ申也スベテ天地ニ先立テ天地

トトモニ成レル神也カ、ル故ニ此神ヲバ五行ニハ配

定ラレザル者也後ノ五代ヨリ次第ニ五行顯レタル也

謂ル國狹槌尊ハ水德ノ始豐斟淳尊ハ火德ノ始泥土瓊

尊ハ沙土瓊尊ト同ク木德ノ始大戸間邊尊大苦邊尊ハ

金德ノ始面足尊惺根尊ハ土德ノ始仍此五行ヲ堅樣

ニ開イテ中ノ五柱ノ神代トハ申也ト次第スレドモ横

ニソナフレバスベテ前後ノナキ故ニ或次第モ不^レ同

或ハ互ニ異名トモ成レリ加樣ニ心得ヌレバ文字ニ相

違アレドモ更ニ相違ニハアラズ次ニ人臣ノ祖モ同五

行也天御中主尊ハ除^レ之天八下ヨリ天八十萬魂マデ

次第ニ地水火風空ノ五大アリ此五大ハ五行ト同物也

空ハ顯レテハ木トナル風ハ顯レテ金トナリ其外ノ地

水火ノ三ツハ其名同シケレバ可^レ知也伊弉諾伊弉冊

ノ二尊ト津速產靈尊ヨリハ五行已ニ備リ六根共ニ顯

レリ端嚴美麗ノ姿ニテ飛行自在ノ神達ナリ是只上界

ノ天人モテ御座也然レバ二尊ヨリ男女ノ形顯レ陰陽

ノ道アラハレリト也又一ノ釋ニハ天御中主尊ト云ハ

從道之本守神之爲要ト云ヘリ然則神道之行義ハミ

ダリガハシキ萬言雜說指置テ一心ノ本無ヲ知リ定メ

得一本

能ク其心地ニナリヘテミダリニ道ニ不迷ヲロカニ

德ヲ忘レタル諸ノ民ヲ化スベキ也是ヲ天命ニ叶フト

名付ケ是ヲ神氣ヲナムト云ヘリ誠ニ是ノ理實ニ尤灼

然也故除萬言之雜說一舉一心之定準一卽配天命

而嘗神氣一理實灼然ナリトハ宣ヘリ抑一心ノ本無ニ

カナフベシト云ヘルハ非レ如ニ木石一ミダリナル民

ノ心ヲロカナル私ノ思ヒナクシテ其道ヲ知リ其德ヲ

施スベキ事也一本作事如ニ本文云一經一本人無常心

申す也

以ニ百姓心爲心ト又天下ノ天下タルハ一人ノ天下

ニハ非ズト云也也皆此心也所詮其德此道ハ天

本作

地ノ授ケタマヘル故ニ人モクミシテ從ヒ奉ル者也

本此下有サ天地人ノ三才ヲ一心ニツカサドルヲ以テ王

ト名付ケ奉ル故ニ三ツヲ一ツニヌキテ王ノ字トモス

ル也此故ニ天地一人ノ皇德ヲ君ノ道ト名付ク抑我國

ニハ是ヲ神道ト申セリ故ニ神宣テ曰德合三神明一則必

一本與天地通一本此下有則君道明民豐也云々肝要

只是ニアリ天地開闢ノ始ヨリ濁世末代ノ今ニ至ルマ

デ兩神ノメグミアラタマラズ百王ノ德カワル事ナシ

天地開闢事

古ヘ天地未開ケザリシトキ一ノ氣起リテ大空ニミチ

ハリシ其中ニマロカレルコト譬ヘバ雞卵ノ如シ漸ク

凝ルニ隨テ重キハ下リテ地ト成リ自然ニ輕キハ清ク

上リテ天ト成ル又其中ヨリ葦牙ノ如クシテ成リ出シ

モノアリ譬ヘバ浮ル魚ノ水上ニ遊ブガ如シ空ニカ、

リテ顯シヲ神ノ始トスル也其名ヲバ天ヲ讓日天ノ

狹霧國ヲ禪ル月國狹霧尊ト云ヘリ是則聖德太子ノ舊

事本紀ノ心也日本紀ニハ始テ顯ルル神ヲバ國常立尊

ト云也又一記ニハ未顯靈性ノサカイヲバ國常立尊

ト名付ケ已ニ其姿ノ顯レ始タルヲ天御中主尊ト云或

文ニハ國常立尊ト天御中主尊ト二ノ德ヲ合セテ天狹

霧地狹霧尊トモ云ヘリ所詮同體ノ神ニテ御坐ス故ニ

何モ無ニ相違一者也但又聖德太子ノ御釋ニ且分ニ神

國常立尊ヲバ一向ニ帝王ノ元祖トシ天御中主尊ヲバ

君臣ノ兩祖トシタマヘリ

最初天祖神

天讓日天狹霧地禪ヲ月地ノ狹霧尊

天神七代之事

沫蕩尊面足尊ノ異名也

津速產靈命人臣ノ祖神

豐葦原神風和記卷上

神道大意

神宣曰天地大冥之時日月星辰現ニ像於虛空ニ之代神足履レ地而興ニ天御量柱於ニ中津國ニ上去下來而見ニ六合ニ爰天照太神悉治ニ天原耀ニ天紬皇御孫尊專治ニ葦原ニ受ニ日嗣ニ聖明所覃莫レ不ニ碓厲ニ宗廟社稷之靈得一無二之盟百王之鎮護大業之禮昭也是以本ニ天地ニ以續レ命祀ニ皇祖ニ以標レ德夫齊ニ情於天地乘ニ想於風雲爲ニ從レ道之本ニ爲ニ守神要ニ將レ除ニ萬言之難說ニ而舉ニ一心之定準ニ即配ニ天命ニ而嘗ニ神氣ニ理實灼然已上神說言意ハ謂天地未レ開大冥時日月及諸氣星始テ空ニアラハレシ代ニ神ノ靈忽動テ上ヲ頂キ下ヲ蹈ミ普ク六合ヲワキマヘ知事出來レリ其初レル古ヘ地ノ靈明自ラ天ニアガリテ彼光物ヲ照ス是ヲ大日靈貴天照太神ト申也正シク形ヲ顯ハシ此國ヘ下リ坐マシテ葦原ヲ治メ給シ神ヲバ皇御孫尊ト申セリ是則四海ノ本主百王ノ皇祖ニテ坐マセリ然此皇御孫尊彼天照太神ヨリ親天

日嗣ヲ受ケ三種ノ神靈ヲ傳奉リ日本葦原ノ主トナリ御坐シヨリ以來人王ノ代々ニ至ルマデ威光ノ所レ及四方ノ人民隨奉ラズト云事ナシ故天照太神ハ悉ク治ニ天原耀ニ天紬皇御孫尊專治ニ葦原ニ受ニ日嗣ニ聖明所覃莫レ不ニ碓厲ニ云々其故ハ德倅ニ天地ニ是ヲ名ケテ爲レ皇已上書文ト云ヘリ其意ハ謂ル天ノ意ナクシテ千草ヲ潤ホシ地ノ思ナクシテ萬物ヲ保チ又風ノ分別ナケレトモ一切ヲ人トナシ雲ノ差別モナクシテ衆像ニヲホフガ如ク民ヲ化スルニ惡愛スルヲナク治レ世偏頗ナク道ヲ知リテ德ヲ施シ玉ヲ皇祖トハ申ス也皇ノ字ハ大ノ義也大ノ字ハ一人也天モ一大也地モ大也此天地ニ叶ナフ人又同大也天地一大ノ人ナルガ故ニ一人トハ申ス也少モ他ヲ忘レテ私ヲ顧ヘリミレバ更ニ一人ニ非ズ是皆民ノ心ナルベシ只是レ天地一人ノ德ニシテ又二ノ道不レ可有故ニ宗廟社稷之靈得一無二ノ盟ト云ヘルハ則此意也サレバ一人トシテハ能々神ノ心ヲ知食シ此道ヲ得玉フベキモノ也尤百王ノ鎮護也實ニ大業ノ禮照タル也故ニ本ニ天地ニ續レ命祀ニ皇祖ニ標レ德トハ云也若然者齊ニ天地ニ德少モナクバ皇トモ王不レ可レ云故齊ニ情於天地乘ニ想於風雲ニ是爲ニ

豐葦原神風和記目錄

上卷

神道大意

天地開闢

天神七代

中卷

地神五代

兩宮鎮座

祖神大分

神態忌物

尊神靈驗

下卷

佛神同異

神佛誓別并十段要文

○一本作佛神誓別而無十段要文之四字

正平八年^{癸巳}七月廿六日於三戀橋郷河原村吹上之住宅
書寫了

實相

類聚神祇本源畢

也水者畧語也故古語謂水通而如卜氏勸草者以

奈具社神豐字賀能賣命大膳職御食津神以下十八社

神爲外宮分座之旨載之敢以無正當也豐字賀能

賣命者豐受宮之酒殿神也御食津神_{神保食}也即爲二月夜見

尊被傷害神也全非當宮之分座古語拾遺曰天照

太神者惟祖惟宗尊無一自餘諸神乃子乃臣孰能敢抗

文天照太神者二宮通稱也祖即外宮宗即內宮也故皇御

孫尊者奉敬天照太神內宮天照太神者奉敬豐受

宮外宮仍祭吾之時先可奉祭豐受宮旨內宮神勅

祭然也自爾以來諸祭所先外宮也是則豐受宮者天

神始天照太神者地神始也以當宮豈可類素戔鳴

尊苗裔保食神等哉勘決次第本末錯亂不可然者也

問御食津神事指南雖分明愚昧身猶非無不審云

爲三月讀尊被傷害之篇云御食津神各別之段見何

書乎答於傷害之篇見舊事本紀第三卷也此故

天照太神怒甚之日汝是惡神不須相見乃與三月夜見

尊一日一夜隔離而住文自爾以來晝夜永隔次御氣津

神各別之段祕府實錄曰御膳神粟國祖神大御食都姬神

世間保食神是也神語供神物名曰由加物也亦雜器贊

同爲由加物也故神語名御食津稱由賀神_{其此大緣也}

膳職坐神御食津神火雷神高倍神_{勸持神也}件三神者素戔鳴

尊苗裔稻倉魂名字賀能賣命亦稱御食津神也亦大年

神子與津比賣命大戶比賣命是靈神坐也文仍彼御食津

神與字賀能賣命同體也即坐于當宮酒殿也如載

右御氣津者古語水也水者御氣津之略語也御食津者

御饗津也非水之儀出化之時代與文義之道理最可

令分別若以御氣津雖有書御食津是說者之

謬也不足于爲本也

神道之與願古典之旨歸大底雖一致依見有異

端或就定惠陰陽之二道即配胎金兩部或依戶

棄光明之梵號偏類色界天衆是不得口次無

相傳之故也同名異體異體同名俗物有之神道亦然

佛家面智具定故廻右爲巡神道面定具智故廻

左爲巡有形位分爲佛神混形位性相惟一隨

文執義不能見性迷倒非它一心陳擇一陰一陽

圓融寂然照斯神道風光自己本分也凡神祇祕符不

居其職妄不授之不_{至其齡}強不聽之仍

取至要抽眼目千萬載本文不_遑于委注一卷

數不列都序祕卷依憚外見莫處聊爾冥慮

難測頓首幸甚々々

神陽神外現持陰神內藏持是名稱金剛爲引導衆生界分化現身與國柱是國境注也夫心柱者元初皇帝御靈也與于阿字心地成鑲字正覺不亂定惠一心儀常住不變妙法座自性清淨妙蓮段間不生理方寸神珠是也文是卽加持門標示也

問天照太神開天磐戶爲天下常闇義如何答其說有多趣戎書曰天地開闢時以清定天以濁定地以淨爲上以穢爲下以降有迷悟有差別立有無見亡法性法爾道文依發情欲失自性光明以彼時節開天磐戶之由所載本紀也然後以三光星出現之時開磐戶之旨勒之又明無明有相立之儀又有如常途之儀兼可存之以下開磐戶時鑄造御鏡所奉祕崇內宮御體也

問開天磐戶之時有呪文歟如何答呪文非一祕訓惟多且依一儀者諸神等各念此時清淨偈諸法如影像清淨無瑕穢執說不可得皆從因業生文又云而布瑠部由良々止布瑠部文此外呪文依爲祕說不及悉勒謂天神壽詞天津宮事者皆天上神呪也問何故以解除詞稱中臣祓哉天祝太祝詞者祓之外可有別文歟如何答以解除詞稱中臣祓者中

臣氏人行幸每度奉獻御麻之間有中臣祓之號云此外猶在祕說歟凡謂濫觴天兒屋命者藤原中臣上祖神掌神事之宗源云奏天神壽詞天村雲命者度會上祖神捧賢蒼懸木綿抽精誠祈志地就中天孫御降臨之時天祖太神授祕呪於天兒屋命天兒屋命貽神術於奉仕累葉因茲我君嗣萬乘寶祚受一朝皇圖之時執柄臣者授天神受記於皇帝祭主官者獻天壽詞奏於上禁加之中臣者讀宣命從神事禰宜者持賢木儼祭祀是皆神代古風行來禮奠也其上一禰宜者口訣三種神器印定萬機尊位受倭姬之聖跡戴宗廟之神體次座之仁面受祕訓莫傳外人由緣異他相承嚴明也復次天祝太祝詞是又多說此故聖德太子奉詔撰定伊弉諾尊小戶橘之檉原解除天兒屋命解素戔鳴惡事神呪皇孫尊降臨靈驛咒文倭姬皇女下樋小河太祓彼此明々也共以可尋歟問以豐受皇太神稱御氣津神條其義如何答謂御氣津者水德號也祕府實錄曰天御中主視天下而或時候授諸天子照臨天地之間而以一水之德利萬品之命故亦名曰御氣津神也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣文或又御饌都書之御氣津古語

問以高宮荒祭配于世界日月之理如何 答彼兩神從左右眼出之篇載右畢以摩陀二字當兩眼配日月然問以下洗左右眼所生之神當于日月之位之條其理不可疑矣

問如日本書紀舊事本紀者伊弉諾尊曰吾欲生御富之珍子及以左手持白銅鏡則有化生之神是謂大日靈貴尊右手持白銅鏡則有化生之神是謂月弓尊又出化非一其義如何 答神號雖同尊崇惟異出化次第又以各別也神記曰天照皇太神一座在伊勢國度會鈴川伊弉諾尊曰欲生御富之珍子乃以左手持鏡天鏡尊所作則有化之神是謂大日靈貴亦號天照大日靈貴也此御子光華明彩照徹於六合之內文神祇譜傳圖記曰伊弉諾伊弉冊尊以天鏡捧九空所化神名號天御中主神是止由氣太神靈鏡也文依此等文者自天鏡所化之大日靈尊天御中主神者非差今之內外宮御靈哉彼日月同名之三柱者此性淨圓明之三轉也

問神代三面鏡其起如何 答祕符實錄曰天鏡尊獨化神天三座是神鏡始元三光面自明白此時也日本書紀曰一書曰國常立尊生天鏡尊天鏡尊生天萬尊天萬尊生沫蕩尊沫蕩尊生伊

弉諾文神記曰國常立尊所化神天鏡尊月殿居所鑄造鏡也三才三面是也一面者崇祭止由氣宮今二面者天鏡尊子天萬尊傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊二尊傳持天神賀吉詞白賜且日神月神所化乃真經津鏡是也天地開闢之明鏡也三才所顯之寶鏡也當受之以清淨而求之以神心視之以無相無住因以爲神明正體也今崇祭一面荒祭宮御靈一面多賀宮御靈已上三面辭竟奉支亦曰國常立尊所化神以天津御量事地輪之精金白銅鑄集地大水火大風大神變通和合給天三才相應之三面真經津寶鏡乎鑄造表倍故此鑄顯神名曰天津鏡尊爾時神明之道明現天文地理以存文萬鏡靈器曰三面天鏡尊心月輪鏡文然者此鏡者天地靈明之智性諸神本源之妙體也日月未現心鏡照物故謂天鏡尊心鏡亦天鏡尊居月殿鑄造文以真心稱宮以心月號殿宮殿無外一心之名號靈鏡非他無相之自性也

問伊弉諾伊弉冊尊夫婦如日本書紀等者如世間事其義如何 答於物有淺畧有深祕其旨載右畢疑問次第存外了見也麗氣記曰世界建立後相分凡聖時二梵王天地種物授與天浮下子尊與地出上子尊陽

除_ニ諸闇_一焉大方神是天然不動之理即法性身也謂_ニ之
 名實相_一也未來世一切衆生發_ニ淨業正因_一爲_レ歸_ニ大乘_一
 故顯_ニ本妙之象_一曉_レ了即心是佛或欲_レ示_ニ無相觀解_一令
_レ忘_ニ有相之權教_一慧日照_ニ世間除_ニ生死雲_一是威神之
 恩德也方便之利益也不可思議々々正念生化之本妙
 則在_ニ皇天_一也皇則大空無相之名號天地清淨之妙理也
 文又一氣玄々之元神名_レ之號_ニ皇神_一也故萬物之化大
 道變成以_レ用爲_ニ心意_一二歸_ニ自位_一故真如界裏湛然常
 住也當_レ知伊勢內外兩宮則大千世界本主八百萬神乃
 最貴也文太宗祕府曰天宮與_ニ靈山_一分_ニ一線路_一互爲_ニ
 佛神之賓主_一令_レ盡_ニ天地人_一居_ニ無爲無事大達之場_一超
_レ生出_ニ死名_一之清淨_ニ是大悲用也文神記曰天照坐皇太
 神則大日靈貴故號_ニ日天子_一以_ニ虛空_一爲_ニ正體_一文最可
_レ思者歟

問如_ニ日本書紀舊事本紀等_一者伊弉諾尊既還乃追_ニ悔
 之曰吾前到_ニ於不須也凶目汚穢之處_一故當_ニ滌_一去吾身
 之濁穢則至_ニ筑紫日向小戸橘櫛原而祓除焉遂將_ニ盪_一
 滌身之所汚_一乃興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱便濯_ニ之
 於中瀨_一也因以生神號曰_ニ八十枉津日神_一次將_レ矯_ニ其
 枉_一而生神曰_ニ神直日神_一次大直日神然後洗_ニ左眼_一因

以生神曰_ニ天照太神_一復洗_ニ右眼_一因以生神曰_ニ天照太
 神_一復洗_ニ右眼_一因以生神號_ニ月讀尊_一文天照太神已可
_レ謂_ニ兩體_一哉彼八十枉津日神并神直日神大直日神崇_ニ
 何處_一乎 答洗_ニ左御眼_一所_レ生之天照太神者內宮荒祭
 宮御事也所謂八十枉津日神是也洗_ニ右御眼_一所_レ生之
 月讀尊者外宮高宮御事也所謂神直日神大直日神是也
 問或稱_ニ內宮荒祭_一或號_ニ外宮高宮_一文證如何 答神
 記曰伊弉諾尊到_ニ筑紫日向小戸橘之櫛原而祓除之時
 洗_ニ左眼_一因以生_ニ日天子_一是大日靈貴也天下化名曰_ニ
 天照太神之荒魂荒祭神_一復洗_ニ右眼_一因以生_ニ月天子_一
 天御中主靈貴也天下化而名曰_ニ豐氣太神之荒魂多賀
 宮_一是也多賀宮則伊吹戶主神祓戶神天照太神第一攝
 神也依_ニ神誨_一奉_レ傍_ニ止由氣宮_一也文明文龜鏡也
 問如_ニ舊事本紀_一者以洗_ニ左右眼_一所生之神並坐_ニ五十
 鈴川上_一謂_ニ伊勢齋太神_一文而今稱_ニ荒祭多賀宮_一分座
 如何答天照皇太神御_ニ鎮_一坐于五十鈴河上_ニ之時多賀
 宮荒祭宮_{和魂}同時一所御鎮坐也仍並坐_ニ五十鈴河
 上_一之由載_レ之然後外宮御_ニ鎮_一坐于山田之原_ニ時依_ニ神
 御誨_一以_ニ彼多賀宮_一奉_レ遷_ニ渡會外宮_一皇自_レ爾以來所_ニ
 分座_一也前後次第具可_レ辨者哉

也故謂神者生之本形者生之具也古語稱獨化神也

文寶山記曰高產靈皇帝此名上帝是高皇產靈尊極天也思兼

神靈性始有文字之號次國常立尊與天御中主尊

同位之篇如日本書紀等者天地之中生一物一狀如

葦牙一便化為神號國常立尊文如神記等者大海

之中有一物一浮形如葦牙一其中神人化生號天御中

主神故號豐葦原中國亦因以曰止由氣皇神也文

兩神共自一物之中出化也以浮形字作浮經然則

國狹槌尊以下五代水火山金土者國常立尊之具德也天

八下靈神以下五代地水火風空者天御中主尊之具德也

彼此一體含納而未露顯或及伊弉諾伊弉冊尊或

至高皇產靈神始現尊形初中後如此是神代祕要

也不可不不知矣

問國常立尊以前有天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊

云云其位如何答神祇與源古典秘訣也神中之神靈中

之靈也故不立階梯員外置之群靈之大祖萬物本緣

也麗氣曰常住妙義本無象混為天讓日天狹霧地禪月

地狹霧連烈有形有念有言名元神不生不滅不垢

不淨不增不減是故空中大無相善哉摩訶衍是也文亦曰

是萬象萬緣根本故曰本地風光文豈記筆傳之談言

得之哉

問彼神員外置之云云見何書哉答可見舊事本紀

第一卷凡神道重々位言外令透得者盡達大道哉

問如寶山記者伊弉諾伊弉冊二尊任皇天宣受天

瓊戈以咒術力加持山川草木現種種未曾有事

文如舊事本紀并日本紀等者伊弉諾伊弉冊二尊俱議

曰吾已生大八洲及山川草木何不再生天下之主者

歟先生曰神曰大日靈貴亦云天照太神亦云大

日靈尊此子光華明彩明徹六合之內故二神喜曰吾

息雖多未若有若此異靈之兒不宜久留此國自

當早送于天而授以天上之事是時天地相去未遠

故以天柱舉於天上次生月神號曰月讀尊亦

云月夜見亦月弓其光彩亞日可以配日而治故亦

送于天文彼天上者何處乎答謂天上者無色界也凡

依神位天上之所居區也不可存一偏歟

問於無色界差何乎答於此神者無色界中差飛

空自在天也或書云不來不去神本覺不生元神也一切

衆生慈父常住不變妙理也堅超方便門橫成正覺智

文深釋曰自在天者天宮第一文仙宮祕文曰授以天上

事日神留宅於日小宮遍照十方而令利衆生能

其名二爾時靈物乃中四理志出神聖化生名レ之曰二天神一亦曰逮二于天帝代一名二靈物一稱二天瓊才一文天地麗氣曰本國漂蕩狀貌如二鷄子一漸々万々時一十々々時有二三生之神一乘二浮經一浮經者葦葉今獨股金剛也阿字原者阿字一點也文麗氣曰半月浮經者葦葉形表也法中云阿字此分異本二有阿字本有波月也月形波三日月也三日月與二圓滿月一水本性云々水體者月也心水也心水者鑒字云云月圓滿月合宿際也文寶山記曰月與水本性心水也文證如レ此最可レ存者哉

問天神七代有二廣略義一哉如何答就レ之有二二義一七代者羅列義也一代含納義也以二含納一爲二祕說一所以者何國常立尊與二天御中主尊一名號異而真理一也而有レ名無レ形中五代者水火木金土五行神地水火風空五大神也各又府中之有也面目圓備名曰二伊弉諾伊弉冊尊一是則非二一體之變作一哉

問今所レ言一文證如何答祕府實錄曰國常立尊無名無精之受レ之二神一形體易而神不レ毀性命既而神不レ終形體易而神不レ變性命化而神常然因以名二國常立尊一以レ初

爲二常儀一者也文神皇系圖曰天先成而地後定然後神聖生二其中一焉號二國常立尊一矣亦名二無上極尊一亦名曰二常住毗尊一謂二惟三世常住妙心法界體相大智一也故天神地祇本妙大千世界大導師是尊也文祕府實錄曰國狹槌尊水藏戶豐斟淳尊火藏戶泥土煮尊木藏戶沙土煮尊耦生荒魂大戸之道尊金藏戶大苦邊尊荒魂面足尊土藏戶惶根尊對耕荒魂件五代八柱天神光胤也雖レ有二名相一未レ現二形體一五大府中坐故名二天地耦生神一也文亦曰從二國常立尊一至二惶根尊一天神六代之間則有二名字一未レ現二尊形一五位神坐其後轉變而合二陰陽一有二男女形一文麗氣曰國常立尊亦名二常住毗尊一也惟是二三世常住妙法身一天神地祇本妙元神也以二一身一分二七代一形體顯言爲レ陰爲レ陽化生二日神月神一文復舊事本紀曰天天下尊獨化天神第一世之神也天三降尊獨化天神第二世之神也天合尊亦云天鏡尊獨化天神第三世之神也天八百尊獨化天神第四世之神也天八十萬魂尊獨化天神第五世之神也高皇產靈尊亦名高魂尊亦名高木命獨化天神第六世之神也文祕府實錄曰天天下靈神府中五魂坐五多五常水火天三降靈神天合靈神天八百尊天八十萬魂尊件五柱神則受二天地之精氣一而氣形質具而未二相離一名稱二五大魂一是中府藏坐神

神以清淨爲先我鎮以得一爲念也神主部物忌
等諸祭齋日不觸諸穢事不行佛法言不食_レ害迄
至神嘗會日不食_二新飯_一常識_二心慎攝_一掌敬拜齋奉
仕矣文亦曰希哉視聽之外氣氣之中虛而有靈一而無
體故發_二廣大慈悲_一於自在神力_一現種種形_二隨種種心_一
行爲_二方便利益_一所表名曰_二大日靈貴_一亦曰_二天照太
神_一爲_二萬物本體_一度_二萬品_一世間人兒如宿_二母胎_一也亦
止由氣皇太神月天尊天地之間氣形質未_二相離_一是名_二
金剛神_一生_二化本性萬物惣體_一也金剛水不_レ朽火不_レ燒本
性精明故亦曰_二神明_一亦名_二太神_一也任_二大慈本誓_一每人
隨_二思雨寶如龍王寶珠_一利_二萬品_一如_二水德_一故亦名_二
御氣都神_一也人乃受_二金神之性_一須_二守混沌之始_一故則
敬_二神態_一以_二清淨爲_一先文亦曰心神則天地之本基身
體五行之化生_{利奈}肆元々入_二元始_一本々任_二本心_一日月
廻_二四列_一雖_二照六合_一須_二照正直頂_一文然則明_二元々_一
任_二本心_一以_レ之爲_二神道之風俗_一應_二神主之名號_一從_二他
不_レ可_レ得_レ之以_レ言不_レ可_レ傳_レ之

問天地開闢之後虛空中有_二一物_一形如_二葦牙_一化爲_二神
云云_一彼形何物乎 答天地開闢義汝存知如何 問如_二
古典_一者天地未_レ形謂_二之太易_一元氣始萌謂_二之太初_一形

氣始端謂_二之太始_一形變有_レ質謂_二之太素_一質形已具謂_二
之太極_一五氣運通爲_二天地之_一靈清以陽發昇而爲_二天
濁以陰凝降而爲_二地_一天地形別謂_二之_二儀_一人生_二其間_一
謂_二之_二三才_一如_二日本書紀等_一者天地未_レ割陰陽不_レ分渾
沌如_二鷄子_一溟滓而含_二牙及_一其清陽者薄靡而爲_二天重
濁者淹滯爲_二地_一精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成
而地後定然後神聖生_二其中_一焉故曰開闢之初洲壤浮漂
譬猶_二游魚之浮_一水上_一也文本文如_二此何有_一別釋_二乎
答見_レ文勿論也誰不_レ知_レ之所謂書不_レ盡_二言言不_レ盡
意有_レ淺有_レ深有_二有相之篇_一有_二無相之篇_一僅就_二淺
畧_一不_レ辨_二奧儀_一者每事可_レ迷惑_二須_レ訪_二先達_一哉且可
述_二一隅_一謂_二神聖生_一其中_一者不_レ可_レ得_レ之天心言語
道斷之妙義也葦者阿字也牙者獨一表也神聖尊體也出
化之次第如_二此遍一切處之元神機興則生是名_二有相_一
緣謝即滅是名_二無相_一生本無生之生者生相即無相也滅
又無滅之滅者滅相即有相也有相無相之名言唯是其德
之表裏也相望得_二名都無_一定量_二雖_二無_一文證_二有_一道理_一
者不_レ可_レ捨_レ之況於_二有無兩義_一詳存_二哉

問今所_レ言義明文有_レ之乎 答無_二明文_一者爭吐_二胸臆
詞哉寶山記曰大海原在_二獨化物_一其形如_二葦牙_一不_レ知_二

類聚神祇本源卷十五

神道玄義篇

問神祇古典以天地開闢爲寂歟其上無子細乎
 答於餘卷者載本文雖不及釋義至此卷者
 就問答專可決旨歸也編作更無私曲冥鑒定垂
 證知神祇書典之中多以天地開闢雖爲寂神道門
 風以之不爲極歟所志者以機前爲法所行者
 以清淨爲先

問何謂清淨乎 答其品非一或以正直爲清淨
 或以一心不亂爲清淨或以超生出死爲清淨
 或以六色之禁法爲潔齋之初門者也

問何謂六色哉 答神宣曰散齋致齋內外潔齋之日不
 得弔喪問疾食宍不判刑殺不決罰罪人不
 作音樂不預穢惡之事不散失其正致精明之
 德文神宣勅語具載禁誡篇畢

問何故名六色哉 答用名言之相通爲和漢之習
 俗所謂六色者六境也又第六意識也以誠言之者一

心不亂之義則謂之者六根清淨之義也鎮座本記曰從
 正以爲清淨隨惡以爲不淨文大宗教府云居無
 爲無事大達之場超生出死名之清淨文潔齋之法
 不可不知神不享非禮最可存謹慎歟

問以機前爲法兼機後含德之證如何 答尊神遺勅
 中備天地開闢之後雖萬物已備莫照於混沌之前因
 茲萬物之化若存若亡而下々來々志自不尊文亦曰
 汝正明聞給倍人乃天下神物也莫傷心神々垂以祈
 禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道
 神人守混沌之始屏佛法之息文亦曰各念天地
 大冥之時日月星神像現虛空之代神是履地而與
 子天御量於中國而上去下來而來見六合天照太神
 悉治天原輝天統皇孫尊專治葦原中國受日嗣
 聖朝所覃莫不祗屬宗廟社稷之靈得一無二之盟百
 王鎮護孔照是以從人本天地續命祀皇祖標德深
 其源根恭宗神廟令朝四方之國以觀天位之貴
 弘大業明天下夫逆天則無道逆地則無德而
 外走本居沒落根國齊情於天地乘想於風雲者
 爲從道之本爲守神之要將除萬言之雜說而
 舉一心之定準配天命而掌神氣理實炳然故祭

一覽了

一品 判 私記北畠殿

此卷依北畠一品入道家之召借進之處御書寫可
點進彼書寫御本之由被仰下之間披見之處
被貽此與書畢

彼詞云

丁丑秋九月於勢州宿館以外宮三禰宜家行神
主本手書之此鈔十五卷先以寫畢於當卷者
依祕中祕爲別卷奏覽之時猶留之適經廻
常國之間爲結緣聽一見之由所相談也因
密密寫留更不可他見矣云

貞和四年戊子十二月書寫畢

權禰宜度會神主實相五十二

校點了

正保四年丁亥十二月九日書寫畢正本有誤字後正焉

同十日校合畢

禰宜度會朝和判

寛文十一辛亥年秋八月一日書寫之

權禰宜度會

理也與_二虛空_一等於_二一切世間中_一而現不_レ出不_レ入不_レ失不_レ壞常住一心妙體故一切得法一切不能染智體也不動具_二足無漏動心衆生_一故以_二清鏡_一奉_レ崇_二神體_一而遍_二衆生之心_一以令_レ歸_二大道_一故圓鏡瑩_レ意光明遍照故心離_二無明_一是名_二大日_一生死長夜此時永曉自相不可得妙解无_レ過_レ斯焉真如妙定空無_レ有_レ邊內不_二遺照_一外不_二步緣_一如_二月映_レ水如_二日塵_一天眼見耳聞如_二密會圓_一焉花嚴經曰正法性遠離_二一切言語道_一也文故以無爲反_二清淨_一是道德也故覺王之心珠靈神之智杵天神寶鏡龍王智劍稻倉魂五種子日頭月頭照落處是神一無貳恩也頓首再拜々々幸甚々々

同記

大和寶山記曰 天御中主尊

無宗無上而獨能化故曰_二天帝之神_一亦號_二天宗廟_一天下則以_二三身即一無相寶鏡_一崇_二神體_一祭_二伊勢止由氣宮_一也

南山大師御記

豐受皇太神繼文曰 本有金剛界普賢如來月輪無相無爲本形三密鏡是爲_二神體_一是名_二法身如來_一催_二一切衆生八萬四千塵勞門_一明_二無盡無餘煩惱惡業_一是名_二大梵天王宮_一是名_二金剛法界宮_一豐受皇太神繼文開_二海雲造玄血脉_一知_二兩宮神祇本緣_一如_レ予信_二兩宮_一人者堺內外

不參

神則諸佛魂佛則諸神性也人則神主神則人魂如_レ實知_二自心_一是名_二真如_一是名_二萬法生_一是名_二大悲方便_一是名_二真覺_一覺王是名_二真如海_一是名_二般若波羅密王宮_一是名_二心柱_一是名_二三界建立主_一

類聚神祇本源

止由氣皇太神荒魂也

伊弉諾尊到_二子筑紫日向小戸橋之櫛原_一而被除之時
洗_二左眼_一以生_二日天子_一是大日靈貴也天下現名曰_二
天照太神之荒魂荒祭神_一是也 復洗_二右眼_一因以生_二
月天子_一天御中主靈貴也天下降居而名_二止由氣太神_一
之荒魂多賀宮_一是也亦曰_二伊吹戸主神_一也御靈形鏡
坐也是天鏡尊所_レ造三面寶鏡伊弉諾尊右手仁令_二奉
持_一天月神所化乃眞經津鏡是也

天地麗氣曰 伊弉諾伊弉冊二柱尊持_二左手金鏡_一陰生_月
持_二右手銀鏡_一陽生名曰_二日天子月天子_一是一切衆生眼
目坐故一切火氣變成_レ日一切水氣變成_レ月三界建立日
月是也子_レ時以_二羸都鏡邊都鏡_一爲_二國璽尊靈_一而日神
月神自匿_二于天宮_一而照_二六合_一給矣

羸都鏡一面_{豐受皇太神}
邊都鏡一面_{地字圓形外緣八咫形}

此外神財載_二神宣篇_一畢

或云
灌頂天女傳曰 羸都鏡 邊都鏡二面奉_レ授_二天孫_一天
降居爾時一面淡路地八大龍神奉_レ鎮一面日向宮奉_レ崇
也

二所太神宮正殿觀曰阿津鏡_{オキツ} 鏡津鏡_{ヘツ}云云
亦曰內宮則八葉開花御靈鏡上上諸佛出入九輪下下諸
神通化天女像

外官則圓滿御靈鏡上上如來祕密五輪下下諸天惣體男
天像

都二面御正體徑九寸三分芭蕉葉厚思惟二尺八寸坐
日生摩尼與_二月生摩尼_一照_二天地_一無上徹_二内外_一無陽無
隔無_二四方缺_一無_二上下餘_一微塵中座轉法輪示_二究竟窮
極乘_一無窮無念手取_二流鈴_一口說_二甚深般若_一心觀_二不生
妙理_一足踏_二菩提妙蓮_一談_二畢竟空寂旨_一是諸佛萬德深
行是諸神降化所爲

亦曰 二所内外兩宮界内界外諸別宮各五大八大廿天
内海外海龍王衆觀_二其御形_一大梵天其形摩訶毗盧舍那
本地御正殿內座大覺大悲阿字床御舟形御樋代會_二交
光明妙朱_一奉_レ鎮_二座_一以下金輪聖王玉體安穩寶祚延
長國泰人畜平等之惠也生生者日月赫素和光爲爲是是
阿耨多羅三藐三菩提神達佛達阿日大饒也_{イキハシメ}
慈覺大師御記

瑞拍仙宮秘文 神鏡謂諸法併移清鏡故亘_二三世_一而
遍_二十方_一以不_二改變_一云云凡鏡是_二身具足見_一其形_一
者應身理也與_二虛空_一等者化身之相也觀_二其空_一者法身

神意一紀伊國日前神是也

已上神代寶鏡是也

倭姬命隨^三神誨^一更鑄造日月所化神鏡藏^二置朝熊山神

社^一也亦此處^{天志}種々神財鑄造已竟製造之鏡八十三面

亦劔大刀子小刀子五十二枚矛大小一百二十柄御弓御

箭御楯各四十四種式備^二所皇大神之大幣^一焉

天照太神各二十四種也止由氣太神各二十種分置者

也

阿波良波命傳神記曰天照坐皇太神一座

天御中主高貴高皇神勅曰令^三石凝姥神^一取^二天

香山銅^一以鑄^中日像之鏡^上其形美麗今崇^二祭伊勢太神

宮御靈^一是也

相殿神二座

左天手力男^命元是御戶開神坐靈御形弓

右萬幡豐秋津姬^命靈御形劍坐是神

荒祭宮一座^{天照大日靈貴荒魂御形鏡坐}

伊弉諾尊洗^二左眼^一因以生號曰^三天照荒魂^一亦瀨織津

比咩神也記曰天鏡尊月殿居焉所^二鑄造^一之寶鏡三

面之內二面者伊弉諾伊弉冊尊傳持^天神賀告詞白賜

且日神所化乃真經津鏡一面座也因^レ茲爲^二御靈^一也

天照坐止由氣皇太神一座

御靈形鏡坐也國常立所化神以^三天津御量事^一天三面

乃真經津乃寶鏡鑄顯給^倍利彼三面寶鏡內第一御鏡是

也圓形坐奉^レ藏^二黃金槌代^一焉

相殿三座

左一座皇御孫尊御靈形金鏡坐二面大西小東以^レ西

爲^レ上同御船代內坐是神代靈異物也^{以二面爲}道主

貴奉^レ齋神是也大物忌內人奉^レ仕其緣也

右二座天兒屋命靈形笏坐牙緣也珠玉一雙寶木二枝

坐

天石戶開之時天兒屋命捧持祝詞敬拜鎮祭笏寶木是

也

太玉命靈形瑞八坂瓊之曲玉奉^レ藏^二圓宮^一也是天祖

吾勝尊所化寶玉是也亦五百箇御統玉奉^レ懸^二眞寶

木枝^一也寶玉內納^二珍室^一也是天地人福田也奉^レ納^二

曲玉^一圓宮一合靈異物觸^レ事有^レ効亦五百箇乃有^二金

玉飭寶珠等^一天戶開之時太玉命捧持寶玉是也圓宮

則混沌形也故藏^二萬物種子^一是也亦號^二玉串內人^一奉

^レ仕眞寶木五百箇御統玉之其緣也

多賀宮一座

火珠所成玉 本有法身妙理也 亦名邊都鏡 亦名經津鏡 亦名白銅鏡

相殿坐神

左天手力男命

亦名靡開神
ミトヒラキ

神體八葉靈鏡下八葉形二重 神寶弓座太刀座

右栲幡豐秋津姬命
亦名慈悲心王是群品母儀破寶尊座也
神體前並也

攝政別宮荒祭宮

亦名隨荒天子 閻羅王所化神

天照荒魂神名瀨織津比咩神

神代三面內
神體鏡坐三三鏡尊寶鏡是也

麗氣曰

神鏡三十二面篋二合御代物勿摩正手以三上衣

攝社朝熊神社

是佛眼佛母日月應化遍照寶鏡蓋不合尊金鏡是也

朝熊神六座倭姬命崇祭之寶鏡二面日天月天兩眼精

倭姬命寶鏡云

太田命傳神記曰 國常立尊所化神以三天津御量事地

輪之精金白銅撰集地大水大火大神變通和合給天

三才相應之三面真經津寶鏡 乎鑄造表給倍故此鑄顯神

名曰三三鏡尊爾時神明之道明現天文地理以存矣亦顯

者大乃子 土精金龍神所造也弓箭者輪王所造陰陽義故名三天之香子弓地之羽々箭也玉者日天月天之光精也

笏者天之四德地之五行自然德也物皆爲三神靈敢誰無

私耶焉

一面者從三三三顯現之明鏡

外宮 圓形坐三光天衆五飛龍 守護神五座 是天鏡尊之鑄

造白銅寶鏡也月天所作三面之內也崇祭止由氣宮是

也從三天上御隨身之寶鏡是也神代天御中主神所受

白銅鏡也是國常立尊所化神天鏡尊月殿居所鑄造鏡

也三才三面之內一面是也今二面者天鏡尊子天萬尊

傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀告詞

白賜互日神月神所化乃真經津鏡是也天地開闢之明鏡

也三才所顯之寶鏡也當受之以三清淨求之以三神心

視之以三無相無住因以爲三神明之正體也今崇祭一

面荒祭宮御靈一面多賀宮御靈坐已上三面辭竟奉支

內宮

一面者八百萬神等以三石凝姥神奉鑄寶鏡是則崇伊

勢太神宮也

一名日像八咫鏡是也八咫古語八鏡也 八頭花崎八

葉形也故名三三三也中臺圓形座也圓外日天八座

日前宮 一面日前宮坐也石凝姥神鑄造也初度所鑄不合諸

神體飛空自在天說法談義精氣也

水珠所生玉常住法身妙理也

正體輪中有三輪中輪長六寸餘四輪各長四寸也

是名御正體輪二尺四寸徑八寸也

相殿座神

左皇孫尊

天上玉杵尊 二柱一座

神體八葉形靈鏡 无緣圓輪御靈鏡也

右天兒屋命

前後

太玉命

前後

天兒屋命

亦名八重雲劔神

亦名左右上下有神

亦名頭振女神

亦名百大龍玉神

神體切金方笏御靈鏡

太玉命 亦名大日荒神

亦名月絃神

亦名月讀尊

神體二輪御靈鏡

右二柱靈鏡者梵篋中藏之以一百卅六兩朱各埋

藏之赤色敬愛表也此神不染着善惡唯外相法身

姿現內心慈悲至極也

麗氣府錄曰 亦靈鏡外寶珠

劔杵牙笏賢耆神寶奉

飭之崇祭之一

攝政別宮多賀御前神 亦名泰山府君也

止由氣皇太

神荒魂也 亦名伊吹戶主神也

御靈天鏡坐云云

神寶鏡廿二面藏之內一面天鏡以朱藏文形也左右各一合都四十四鏡表也

麗氣府錄曰 神寶鏡廿二面竹目木藏之內一面天鏡

以朱藏文形也

瑞器記曰

攝社大土祖神

亦名五道大神

雙五處大明神座也

山田原地主神

亦號鎮護神

大年神子大國玉神子

宇賀神一座

大土御祖一座

御體瑠璃壺一口靈鏡二

面華形座云有_二神寶名石一面日象扇一枚書之

降臨次第麗記曰

豐受皇太神 神璽本靈

外宮 五智圓形御寶鏡 是云如意靈珠

水火風空四智御靈鏡

水圓形 土宮

火三角形 角宮

風半月形 風宮

空團圓形 多賀宮

五智圓滿御靈鏡中形其品已上相殿

天照太神宮御鎮座麗記曰

神體八咫鏡坐也

類聚神祇本源卷十四

神鏡篇

萬鏡本緣神靈瑞器麗氣記曰

大梵天宮天體靈光

外宮

一面大自在天王心肝靈鏡

靈鏡變成三精光々々中有三輪各々移五色

成三智々々變坐三平等天照一名豐受皇太神是

曰三御中主尊也

一輪中有三輪是天御中主尊寶鏡

麗氣府錄曰一面飛空自在天同聽發言精氣所化靈鏡也

一輪中有三輪是天御中主尊寶鏡

私日本書雖異靈鏡同也

瑞器記曰

神代三面鏡是也

三面天鏡尊心月輪鏡

一面戶棄大梵天王寶鏡

私云以朱埋文形已見在也

一面光明大梵天王寶鏡

一面世界建立金剛日輪鏡

內宮

一面八咫鏡八葉中有三方圓五位象是天照皇太神御靈

鏡坐也

日前宮

一面紀伊國那草日前宮神靈內侍所前神坐也

伴二面者八百萬神達執天金山精金奉鑄日像

鏡一也

左外相殿皇御孫

二面尤緣圓輪靈鏡

風龍

右外宮同相殿天兒屋根

二面切金方笏靈鏡

伴鏡四面以天香山金葺不合尊制作也謂攝津國

與幡磨國合堺乃世附志奉鑄之云云

東大寺

二面聖武天皇寶鏡是大梵天王兩眼化為明鏡故佛父

佛母兩眼大日頂輪大佛開眼明鏡是也

南山大師靈

三面化現金鏡豐受皇太神別宮多賀宮坂下底津岩根爾

藏置也

小朝熊

二面大和姬命朝熊海水上附志奉鑄白銅鏡也

禁裏御座

內侍所神鏡崇神天皇御宇奉鑄也以爲神璽

豐受皇太神鎮座麗氣曰

外宮

豐受皇太神

五大月輪五智圓滿寶鏡

實相真如五輪中臺常住三世淨妙法身

大毗盧遮那佛亦名法性自覺尊亦名熾盛大日輪也

日皆同此例

被_レ行_二神事_一之內裏猶以不_レ被_レ入_二僧尼_一何況伊勢太神宮者宗廟中之太廟也神宣勅語不_レ可_レ不_レ忌爭僧尼致_二內院參入_一哉僧尼則着_二釋尊服_一之故也云々此外猶有_二深義_一哉

神祇式第四曰禰宜大內人雜色物忌父小內人遭_二親喪_一不_二敢觸穢_一及著_二素服_一卅九日之後祓清復任其服闋之間侍_二候外院_一不_レ預_レ供_二祭物_一亦不_レ參_二入內院_一傍親服中亦同但物忌父死者其子解任子死者父亦解任並非_二復任之限_一

或人難云及_二人皇卅代欽明天皇御宇_一百濟國始獻_二佛像經論_一歟然者夫以往忌_二佛法_一神宮記如何頗可_レ謂_二未來記_一哉

答曰佛西天入滅之後經_二一千四百八十年_一後漢明帝永平七年乙丑夢見_二金人_一佛法傳來以降至_二于本朝

欽明壬申_二四百六十年_一歟漢土典籍者人皇十六代應

神天皇御宇令_レ渡之上者佛法僧之名字豈不聞及哉

神宮記者雄略_二天皇御宇_一神宣也縱雖_レ爲_二未來記_一非

無_二先蹤_一和漢例多就_二中彼忌詞等非_一神主之私記

三世了達之尊神御詔宣也或倭姬命或衢神等正蒙_二

神宣傳神主部嚴重異_レ他誰成_二不信_一哉

類聚神祇本源

(井上翁藏本與書)
貞治六年丁未四月十三日書之
通俊詮改

思_二其笑語_一思_二其志意_一思_二其所樂_一思_二其所嗜_一齋三日乃見_二其所_一爲_レ齋者_二致齋思_三此五_一者散齋七日不_レ御不_レ樂不_レ弔_二欲_レ飲食_一春秋傳曰屬到嗜_レ妄

禮記曰齋者不_レ樂不_レ弔_レ爲_レ其哀樂則失_レ正散_二其思_一

今案六色禁忌者淨_二六根_一之內外精進也所以者何
不_二弔喪問_一病_二制意_一不_レ食_レ六_二精進_一不_レ判_二刑殺_一禪定_二制口_一
不_レ決_二罰罪人_一布施_二不_レ作_二音樂_一忍辱_二不_レ預_二穢惡_一
事_二制眼_一潔齋人如_レ知而不知神不_レ享_二非禮_一專可_レ愼
者歟依_二釋門_一者布施持戒忍辱精進禪定般若_二是也

內七言外七言事

大田命傳神記曰雄略天皇廿一年秋九月種々事忌定給
內七言佛稱_二中子_一經稱_二染紙_一塔稱_二阿良々伎_一寺稱_二瓦葺_一僧稱_二髮長_一尼稱_二女髮長_一長齋稱_二片膳_一外七言
死稱_二奈保留_一病稱_二夜須美_一哭稱_二鹽垂_一血稱_二阿世_一打
稱_二撫空稱_一菌墓稱_二壤亦優婆塞稱_一角婆須_一
神祇式第五曰 齋宮 凡忌詞內七言佛稱_二中子_一經
稱_二染紙_一塔稱_二阿良々伎_一寺稱_二瓦葺_一僧稱_二髮長_一尼
稱_二女髮長_一齋稱_二片膳_一外七言死稱_二奈保留_一病稱_二夜
須美_一哭稱_二鹽垂_一血稱_二阿世_一打稱_二撫空稱_一菌墓稱_二壤
亦別忌詞堂稱_二香燃_一優婆塞稱_二角婆_一

禮記曰 凡祭宗廟之禮牛曰一元太武豕曰剛鬣

豚曰腍肥羊曰菜毛雞曰輪音犬曰羹獻雉曰

䟽趾兔曰明視肺曰尹祭麋魚曰商祭鮮魚曰脰

祭水曰清滌酒曰清酌黍曰薺合梁曰薺

其稷曰明粢稻曰嘉蔬菲曰豐本鹽曰

鹹醴玉曰嘉玉幣曰量幣今河東云

祭宗廟之時改常言漢家日域其例如斯熊野

山參詣之時亦改常言者歟

忌佛法事

御鎮座傳記曰高貴神託宣久又詔布神主部物忌職掌

人等諸祭齋日爾不_レ觸_二諸穢事_一不_レ見不_レ聞不_レ弔不_レ

言佛法言忌亦不_レ食_レ六_二神嘗會日_一爾不_レ食_二新飯_一

齊_二身謐_一心慎攝_二掌以敬拜祭矣_一

亦曰神人守_二混沌之始_一屏_二佛法之息_一委見_二六色禁忌篇_一又

豐受皇太神御鎮座本紀曰諸祭齋日不_レ觸_二諸穢惡_一不_レ

行_二佛法言_一

尼僧忌事

神祇式第三曰 祈年賀茂月次神嘗新嘗等祭前後散齋

之日僧尼及重服奪_レ情從_二公事_一之輩不_レ得_二參入_一內

裏_二雖輕服人_一致齋並散齋之日不_レ得_二參入_一自餘諸祭

類聚神祇本源卷十三

禁誠篇

六色禁忌事

御鎮座傳記曰雄略天皇卽位廿二年倭姬命磯宮坐冬十

一月新嘗祭之夜深天難人等退出之後神主部物忌等宣

久吾今夜承皇太神並止由氣皇太神勅所詫宣汝正

明聞給倭人乃天下之神物也莫傷心神神垂以祈

禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道

故神人守混沌之始屏佛法之息崇神祇散齋

致齋內外潔齋之日不得弔喪問疾食宐不判刑

殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡事不散

失其正致其精明之德左物不移右兵器無用不

聞輶音口不言穢惡目不見不淨鎮專謹慎之

誠宜致如在之禮矣

神祇令第三曰凡散齋之內諸司理事如舊不得弔

喪問病謂有重親喪病者食宐亦不判刑殺不決

罰罪人不作音樂謂不作絲竹歌舞之類也不預穢惡之事謂穢惡者

不淨之物鬼神所惡致齋唯祭祀事得行自餘悉斷其致齋前後兼爲散齋

上卷格第一曰裏書云兼日前後精神改仰齋日事右據令條凡祭

祀所司預申官散齋日平旦願告諸司其散齋之內不

得弔喪問疾食宐不判刑殺不決罰罪人不

作音樂不預穢惡之事今被右大臣宣稱奉勅

散齋之日願告諸司諸司未承承事之前或有犯禁

忌之徒宜改令條散齋之前一日願告諸司自今

以後永爲恒例

下卷亦曰定准犯科祓例事

一大祓料物廿八種事色目略之

右闕意大嘗祭事及同祭齋日內弔喪問疾判署刑

殺文書決罰食宐預穢惡之事者宜科大祓所

輸雜物具如前官人有犯兼解見任

一上祓料物廿六種色目略之

右闕意新嘗祭鎮魂祭神嘗祭祈年祭月次祭神衣祭等

事毆伊勢太神宮禰宜內人及穢御膳物并新嘗等

諸祭齋日犯弔喪問疾等六色禁忌者宜科上祓

輸物如右

禮記註疏曰致齋於內散齋於外齋之日思其居處

而布瑠之言本也故杵獨王受_ニ之言大八洲傳_レ之持_ニ明鏡_ニ照_ニ心月_ニ是妙法寂頂梵王眞言也无爲事不言教是人眞心也

神語而布瑠部由良由良止布瑠部

皇天大神咒

明聞諸法性

皆從因緣生

廣利諸衆生

自空無所依

今崇祭神體

天下應護座

非實亦非虛

是天地精靈

神代屬_ニ五常無心_ニ以_ニ陰陽_ニ治_レ事別無_ニ佛法_ニ但神明以_ニ威光_ニ攝政仁聖廣用_レ德道通威勢化成_ニ大神_ニ變成_ニ大道_ニ契_ニ引_ニ神世現_レ神佛世爲_ニ成佛_ニ也陰神曰無_ニ天不_ニ降種子_ニ无_ニ地不_ニ戲孕_ニ天地和合有_レ體有_レ心身體有_レ言有_レ語契_ハ始_ハ分_ハ終_ハ慈悲先後河也无_ニ生死_ニ无_ニ常涯_ニ無終一切无始万物都不_レ可_レ測_ニ涯際_ニ權_ハ初起_ニ虛无_ニ幻化跡_ニ四相_ニ幻野尋一度是非迷一度是非願神明加護諸佛擁護天皇寶位無_レ動久如_ニ湯津磐邑_ニ久常磐堅磐爾三世常住四海无爲再拜々々
神勅雖_レ多抽_レ要鈔_レ之

類聚神祇本源

蓋聞天地未割陰陽不分以前是名混沌萬物靈是封名虛空神亦曰大元神亦名國常立神亦名俱生神希夷視聽之外氤氲氣象之中虛而有靈一而無體故發廣大慈悲於自在神力現種種形隨種種心行爲方便利益所表名曰大日靈貴亦曰天照太神爲萬物本體度萬品世間人兒如宿母胎也亦止由氣皇太神月天尊天地之間氣形質未相離是名混沌所顯尊形是名金剛神生化本性萬物惣體也金剛水不朽火不燒本性精明故亦名曰神明亦名大神也任大慈本誓每人隨思雨寶如龍王寶珠利萬品如水德故亦名御氣都神也金玉則衆物中功用甚勝不朽不燒不壞不黑故爲名无内外表裏故爲本性謂人乃受金神之性須守混沌之始故則敬神能以清淨爲先從正式爲清淨隨惡以爲不淨惡者不淨之物鬼神所惡也

太田命傳神記曰秋九月雄略天皇即位二十二年種々事忌定給内七言佛稱中子經稱染紙塔稱阿良々岐寺稱瓦葺僧稱髮長尼稱女髮長齋稱片膳外七言死稱奈保留病稱夜須美哭稱鹽垂血稱阿世打稱撫安稱茵墓稱壤亦優婆塞稱角波須祓法定給

亦曰泊瀨朝倉宮崇德天皇大泊瀨稚武天皇即位廿三年乙未二月倭姬命召集於宮人及物部八十氏等宣久神主部物忌等諸聞吾久代太神託宣摩志万志木心神則天地之本基身體則五行之化生索利肆元元入元初本本任本心與又屏佛法息奉再拜神祇日月廻四洲雖照六合須照正直頂止詔命明矣

天地麗氣府錄曰誓曰手抱流鈴以御無窮無念爾祖吾在鏡中其貌如日其心如海其慧如天其穗如地修善道攝心爲先精進爲行正念爲本夫一切法自性空依遍照如來相當知空體爲體无相爲相无性爲性无得爲得爲利益衆生如來作異相是故諸佛應化菩薩万行五通行相十界差別皆是如來方便其實歸空一理不着諸相爲不可得々々々即如來正覺般若修行之要道其至極既以如是

故天女曰伊勢兩宮無始无終大元宗神亦一念不生神羅烈万法心故絞結万像體嗚呼爲法无因利爲神无緣守无無窮妙體邊際无利生力用休息屏佛法息諸神影无邊法界心量故捧兩部合掌藥備法性隨緣机薰一切无作香燒平等无際鹽不供供不受受給矣天王如來曰亦曰一字含千理即身證法如是

掌以敬拜祭矣

大田命白久二面者天鏡尊子天萬尊傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉冊尊傳持天神賀吉詞白賜日神月神所化乃真經津鏡是也天地開闢之明鏡也三才所顯之寶鏡也當受之以清淨而求之以神心視之以无相無住因以爲神明之正體也

興玉神託宣久天照坐皇太神則大日靈貴故號曰天子以虛空爲正體焉故曰天照太神亦止由氣皇神則月天子也故曰金剛神亦名天御中主神以水德利萬器故亦名御饌都神惟諸神福田生化壽命也汝等受天地之麗氣而種神明之光胤誰撓其神心誰干其慮耶謹請再拜言壽竟

倭姬命儀宮坐冬十一月位略天皇卽位廿二年新嘗祭之夜深天難人

等退出之後神主部物忌等宣久吾今夜承皇太神并止由氣皇太神勅所託宣汝正明開給倍人乃天下之神物也莫傷心神神垂以祈禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道故神人守混沌之始屏佛法之氣崇神祇散齋致齋內外潔齋之日不得弔喪問疾食宍不判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡事不散失其正致其精明之德

左物不移右兵器无レ用不聞レ鞞音口不レ言穢惡

目不見レ不淨鎮專レ謹慎之誠宣致レ如在之禮矣于

時大神主阿波良波命承宣記レ之此按本書中略歟神主部物

忌等承神宣以爲訓傳各齋持不顯露深藏以神祕

正焉

豐受皇太神御鎮座本紀曰皇天倭姬內親王託宣久各念

天地大冥之時日月星神像現於虛空之代神足履

地而興于天御量於中國而上去下來而來見六合

天照大神悉治天原耀天紘皇孫尊專治葦原中國

受日嗣聖朝之所覃莫不祇屬宗廟社稷之靈得一

无貳之盟百王之鎮護孔照是以從人本天地續命祀

皇祖標德深其源根一本作根源恭宗祖神令朝四方之

國以觀天位之貴弘大業明天下夫逆天則無

道逆地則無德而外走本居沒落根國齊情於天

地乘想於風雲者爲從道之本爲守神之要將

除萬言之雜說而舉一心之定準即配天命而嘗

神氣理實炳然故祭神清淨爲先我鎮以得爲念

也神主部物忌等諸祭齊日不觸諸惡事不行佛法

言不食宍迄至神嘗會日不食新飯常謹心慎

攝掌敬拜齋仕矣

賜_利無_二黑心_志以_二丹心_天天清潔久齋慎美左物於不_レ移

右須右物於不_レ移左志且左左右左返廻事毛萬事違

事_{奈久}大神奉仕元元本本故也

伊勢_{志天}二所皇大神御鎮座傳記曰狹長田之猿田彥大神齋

內親王神主部物忌等訓悟白久凡天地開闢之事聖人所

述也爰伊勢天照皇大神五十鈴乃河上爾御鎮坐之制作

未_レ露_二紙舉_一故元始綿邈其理難言志願爾諸聞給倍吾

是天下之士君也故號_二國底立神_一也吾是應_レ時從_レ機比

化生出現之故號_二氣神_一吾亦根國底國利與龜備疎備來物

仁相率守護之故名_二鬼神_一吾復爲_二生氣_一仁授_二與壽福_一

之故名_二大田命_一吾能反_二魂魄_一之故號_二與玉神_一悉皆自

然之名也物皆有_二効驗_一我將_二辭訖_一遂隱去矣

今歲_{垂仁天皇廿五年春三月}猿田彥大神參乃言壽覺白久南大峯有_二

美宮處_一佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者大八洲之

內珍圖之靈地也隨_二翁之出現_一三百八萬餘歲之前_{毛爾}

未_レ現知_二留在_一靈物_一利照耀如_二大日輪_一也惟小綠之物

爾不_レ在須定主出現御座耶念木倭姬命曰理實灼然惟久

代天地之大祖_{天照皇太神}并神魯岐神魯美命誓宣豆豐葦

原瑞穗國之內平伊勢加佐波夜之國波有_二美宮處_一利見

定給_{天比}自_二天上_一志天投降居給布天之逆太刀天之逆鋒大

小之金鈴五十口日之小宮之圖形文形等是也_度天之平

手乎拍給甚喜_{其喜ヲコトカキリナシ}於懷_二給此處仁遷_一造日小宮_二給大宮柱

太_二敷立_一於下津磐根_{大田命以_二地輪精金_一造_二岐_一崎博_二風於高}

天之原_一

亦曰_{維畧天皇廿二年}皇太神重詔宣吾祭奉仕之時先須_レ祭_二止

由氣太神宮_一也然後我宮事可_二勤仕_一也故則諸祭事以_二

止由氣宮_一爲_レ先也

亦曰凡神代靈物之義_{義ヲホヒ}猿田彥神謹啓白久夫天地開闢之

後雖_二萬物已備_一而莫_ス照_二於混沌之前_一因_二茲萬物之化若

存若_レ亡而下來來_{天志}自_二尊_一尊_二一本_一于_レ時國常立尊

所化神以_二天津御量事_一地輪之精金白銅撰集地大水大

火大風大神變通和合給_{天比}三才相應之三面眞經津寶鏡

乎鑄造表給_{利倍}故此鑄顯神名曰_二天鏡尊_一爾時神明之道

明現天文地理以存矣亦劍者_{大刀子}土精金龍神所_レ造也

弓箭者輪王所_レ造陰陽義故名_二天之香子弓地之羽羽

矢_一也玉者日天月天之光精也笏者天之四德地之五行

自然德也物皆爲_二神靈_一敢誰無_二私邪_一焉

高貴神託宜久又詔布神主部物忌職掌人等諸祭齋日仁

不_レ觸_二諸穢惡事_一不_レ見_レ聞_レ不_レ弔_レ言佛法言忌亦

不_レ食_二宍迄_一神嘗會日爾不_レ食_二新飯_一齋_二身誼_一心慎攝

類聚神祇本源卷十二

神宣篇

付神寶十種三種事

先代舊事本紀曰天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一謂羸都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖敕詔曰若有_二痛處_一者令_二茲十寶_一謂_二一二三四五六七八九十_一而布瑠部由良由良止布瑠部如_レ此爲之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣高皇產靈尊勅曰若有_レ葦原中國之敵拒_二神人_一而待戰者_レ能爲_二方便_一誘欺防拒而令_二治平_一令_二三十二人_一並爲_二防衛_一天降供奉矣

天照太神手持_二寶鏡_一授_二天忍穗耳尊_一而祝之曰吾兒視_二此寶鏡_一當_レ猶視_レ吾可_二與同_一床共_レ殿以爲_二齋鏡_一寶祚之隆當_レ與_二天壤_一无_レ窮矣則授_二八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物_一永爲_二天璽_一予玉自從矣詔_二天兒屋命天太玉命_一曰惟爾_二神亦同侍_一殿內_レ善爲_二防護_一焉詔_二常世思金神手力雄命天石門別命_一云此鏡者專爲_二我御魂_一如_レ拜_二吾前_一奉_レ齋矣

日本書紀曰於_レ是_二神誅_一諸不順鬼神等_一果以復命子_レ時高產靈尊以_二眞床追衾_一覆_二於皇孫天津彥火瓊杵尊_一使_レ降之皇孫乃離_二天磐座_一且排_二分天八重雲_一稜威之道別道別而天_レ降於日向襲之高千穗峯_一矣

天照太神勅曰若然者方當_レ降_二吾兒_一矣且將_レ降間皇孫已生號曰_二天津彥火瓊々杵尊_一時有_レ奏曰欲_レ以_二此皇孫_一代降_レ故天照太神乃賜_二天津彥火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物_一勅_二皇孫_一曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可_レ王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當_レ與_二天壤_一无_レ窮者矣

神皇系圖曰天照皇神誓曰吾日太子如_二八尺瓊之勾_一以_二曲妙_一御宇且如_二白銅鏡_一以_二分明_一看_二行山川海原_一乃提_二神劍_一平_二天下_一焉肆以名_二之三種神璽_一也汝敬承_二吾壽_一手抱_二流鈴_一以御_二无窮无念_一爾祖吾在_二鏡中_一矣式臨_二寶位_一以鎮_二元元_一上則答_二乾靈_一授_二國之德_一下則弘_二皇孫養_一正之心然後兼_二六合_一以開_二都掩_一八紘而爲_二帝宅_一詔給矣

亦曰皇天壽曰而布留部由良由良止布瑠部云々惟是皇天无極大神咒也

倭姬命世記曰伴童女於大物忌止定給比豆天磐戶乃論領

二大夫賴元

度會大國玉比賣社

御饗社

佐奈社

三大夫賴房

草奈岐社

須波漏女社

河原大社

四大夫康政

田上大水社

度會國見社同神イ

河原淵社河原イ

五大夫廣雅

大間國生社

志土見社

宇須野社

六大夫雅行

小保社小イ

清野井庭社

大河内社

延久四年十二月十一日

七大夫 保延元年六月八日加任

以三伊賀戸神社爲三勞社一歟

康房承久三年三月廿六日任

八員跡九十員無三勞社

已上是マテ宣進文可レ止レ之

一宮崎氏神社坐度會郡宮崎度會主神氏社

右度會神主氏遠祖天牟羅雲命

一名天二上命一名後小櫛命

天御中主尊十二世孫也天照皇太神天孫二柱神天降

坐時御前立天奉レ仕

類聚神祇本源

内宮別宮篇外宮別宮篇

應令社司修造無其勤者科大祓解却見任
官宜承知依宣行之符到奉行

正四位上行大辨兼右兵衛督藤原朝臣河百
右大史外正六位上阿倍志斐連東人

寶龜二年二月十三日

一志止見打懸大河內社增位事

件三箇社爲防河堤守護可被增進位階之由
次第上奏之所被進勅書

勅正五位下志止見名神

今奉授從四位下

大治三年六月十日

勅正五位下打懸名神

今奉授從四位下

大治三年六月十日

勅正五位下大河內名神

今奉授從四位下

大治三年六月十日

官進文可止之

一諸社勞事

廳定置 諸社記

月讀社視得松
三大夫

大河內社視永
五大夫

草奈岐社視有清
六大夫

河原大社視有清
一大夫

淵社視得吉
三大夫

大國玉社視福安
六大夫

山末社視正武
四大夫

宇治野社視重枝
一大夫

小俣社視則安
一大夫

右依例以每年二月之內爲令勤仕於神態所

定置如件諸社視等宜承知致所攝神田者勞主并

祝等可進退也於恒例之勤者不可懈怠之狀

如件

天喜三年三月廿一日

禰宜度會神主常親 禰宜度會神主通雅

禰宜度會神主康雄 禰宜度會神主常季

禰宜度會神主連賴 禰宜度會神主賴元

禰宜勞社等

一大夫常季

高河原社

山末社

櫛田社

大間社視安眞
一大夫

田上社視有常
五大夫

水饗社視今世
六大夫

高河原社視則並
四大夫

國生社視安松
五大夫

伊蘇社視伊蘇近
一大夫

清野社視助世
一大夫

雷社視弘忠
一大夫

志止見社視春末
二大夫

月讀 草奈岐 大間 佐奈 櫛田 須麻留賣

但月讀社宮號之後者加高河原社德治元年造宮

御竈木帳四十七前神社元者四十九前月讀風宮宮號之間兩社除之

宇須野社 草奈岐社 大間國生社 國見社 大國

玉社 田上大水社 大河內社 志士見社 清野井

庭社高河原社 河原淵社 河原社 小俣社 水饗

社 宮崎氏社 北御門社 上御井社 下御井社

伊蘇社 御田口社 根倉社 佐奈社 須麻留賣社

伊賀利社 野依河田社 赤崎社 撫懸社 櫛田社

雷社 伊賀戶社 箕曲氏社 山末社 鹽屋社 水

取社 高神社 客神社 蘭社 宇須野女社 野依

中社 寶答社 尾上社 落合社 別雷社 大水社

河田社 槐本社 高向社 各有祝預請物

一 大中少社差別事

大政官符神祇官并五畿七道諸國司

應早定置天下諸社大中少神殿雜舍瑞垣珠垣鳥居

并四至內地町數事

正一位正三位以上爲大社

從三位從四位以上爲中社

正五位從五位以上爲少社

一大社四至限九町三間檜皮葺正殿一字高一丈二尺在三板數戶

一堅魚木八丸長五尺千木四支長一丈瑞垣一重方二尺

七珠垣二重方各五丈六尺內外鳥居二基內一本高九尺口徑一丈

口徑三間檜皮葺幣殿一字高一丈一尺在三板數戶一本一丈

殿一字高八尺五間板葺舞殿一字高八尺五間板葺直會

屋二字高八尺萱葺板倉二字 三間草葺盛屋二字在三板數戶

二左右板葺廊二字各高七尺五間外舍二字高八尺五間馬

屋二字

一中社四至限八町三間檜皮葺正殿一字高一丈一尺在三板數戶

一堅魚木六丸長四尺千木四支長一丈瑞垣一重方二尺

七尺玉垣一重方三丈五尺內外鳥居二基高八尺三間板葺

幣殿一字高七尺三間板葺拜殿一字高七尺五間同舞殿

一字同三板數戶三間同直會屋二字高七尺五間外舍二字

一少社四至限四町三間板葺正殿一字高七尺在三板數戶一本一丈

堅魚木四丸長四尺千木四支長一丈瑞垣一重方二尺鳥

居一基高六尺二間草葺拜殿一字高七尺三間板葺舞殿

一字高七尺五間雜舍二字同三板數戶

右被左大臣宣備奉勅諸國神社正殿雜舍并

四至町數所定如件宜仰在國司以正稅物

數令造進自今以後不可違失若有破損者

儀式帳曰雜例云式云右諸社並預三新年神寶神嘗祭

度會郡神社二十肆處載官帳名社十六所未載官帳名社八所

月讀神社 草奈支神社 大間國生神社

右三所神社造宮使造奉

度會之國都御神社 度會大國玉姬神社 田上神社

郡野井庭社 大河內社 清野井庭社 高河原社

河原社 河原淵社此社原本ニナシ儀式帳ニ依テ補フ 山末社 宇須野

乃社 水戸御食郡神社 小俣社

右十六社官幣帛宛奉但十三社者國宛料令造奉

伊我理神社 縣神社 井中社 打懸社 志等美社

毛理社 大津社 土賣屋社

右八社未載官帳勘付式云右八社未載官帳但社无料祝造奉但年中三度祭者禰宜內人等率祝

等供

長德三年八月田社三十三所外宮

土御祖社在大國玉比賣社南邊 伊加利社在大國玉比賣社南邊 御田口社在北

從道宮號 風社在高宮道捧本 高神社在政所前山

諏訪明神在宜前山 石根社在上宇治大沼東 若雷社在宮北御門

客神社在同福宜前山

從四位下立石大明神 打懸社在山幡大河內社東

法道社在箕曲物部近末居住乾方 神計社在高向

箕曲氏社在箕曲鄉和泉條居住西 東御門社在沼木乃社邊 縣社在高向

村社 高向神社主氏社在鹽屋 上御井社在御井 下御井

社在高宮後 林社在繼橋鄉森田村 河原饗社 杜社在三 赤崎

社在久 鶴倉神戶大歲社 中津山田饗社在國生

槌柄神戶社 湯田宇羽西津社在宇羽御館西 拍木社在

中松 神落萱社在尾上寺前 阿佐賀社 蘭行嶋社 尾上

社在泉寺西 湯田清階社在三村橋 大水社在三乃々中島島

長德檢錄田社三十三前外式外社

水取社在坐內宮月讀宮北 鹽屋社在坐箕曲鄉大湊以西 野依河田社 河

田社 伊賀戶社在坐內宮月讀宮北 野依中社 別雷社在坐離宮

槐本御社在坐高向村加毛淵東方 根倉御社 磯神社 雷社 宇

須野女社在坐高向村 落合社 蘭御社

已上十四前御竈木帳四十九前神社內也

物忌御社 中松原御社 野依片嶋社

小部御社在但神宮御竈木帳之內尾上社同名歟 三津橋河原社

右件五社云今按云字衍歟 長德檢錄文云御竈木帳未載

之宮

司盛房諸神社等修理沙汰之時未詳歟

私記

造宮使造替六社者所謂

二所太神乃朝大御氣夕大御氣度八盛移居每_レ日二時供進矣凡此御井水者專不_レ干恒出異恠之事不_レ過_二於是社_一亦他用更不_レ可_レ用之亦道主裔大物忌父御井掃淨奉亦御井與_二御炊殿_一往還間道一百二十丈橋一十五丈_{黑木丸橋}此月每修理掃淨雜人等不_レ通_志慎敬仕奉

二所太神宮御鎮座本紀曰天忍水止云天食國乃水爾灌和天獻物亦御伴爾天降奉_仕五伴神三十二神八十支乃諸人_毛令_毛飲詔天下奉支

大同本紀曰皇御孫命詔久何道_{與利}參上_止之間給申久大

橋波皇太神并皇御孫命乃天降坐乎恐美後乃小橋_{與利奈母}參

上_止之申時爾皇御孫命詔久後_毛恐奉_仕事勇止詔_天天

村雲命二登命後小橋命止云三名負給支彼朝夕供奉

御膳乃御井止由氣宮坤方岡片頗爾御井堀天汲供奉

其水大旱魃年_{母不}涸其下二丈許下_天底仁有_二水田_一

其田波旱魃損_{須臾止母}此御井乃水波專不_レ干恒出異恠之

事不_レ過_二於是_一又他用更不_レ用_レ之

神祇式曰度會宮所攝十六座

月夜見社 草名伎社 大間國生社 度會國御神社

度會大國玉比賣社 田上大水社 志等美社 大河

內社 清野井庭社 高河原社 河原大社 河原淵社 山末社 宇須乃野社 小俣社 御饗社

右諸社竝預_二祈年神嘗祭_一

社記注付在所

月夜見社坐_二沼木郷山田村_一承元宮號

草名伎社坐_二同村大間社西_一標銀伏

大間國生社坐_二大間東_一同玉垣之內坐大若子乙若干命

度會國御神社坐_二沼木郷山田村_一天日別命子彥國見賀岐建興來

度會大國玉比賣社坐_二繼橋郷字宮崎高神山南尾崎_一大已賀命

田上大水社坐_二同郷字宮崎同玉垣之內_一也在_二前社_一大神主小事

志等美社坐_二沼木郷山田村_一東大河內中志等美西打懸同玉垣也

大河內社坐_二同村_一大山祇神大山罪乃神

清野井庭社坐_二同郷山田村_一大間社東野草野姬命裏書屋船命

高河原社坐_二同郷山田村_一月讀宮東同玉垣內神名式云西川原坐

河原大社坐_二箕曲郷勾村字三津_一社也河神水神

河原淵社坐_二箕曲郷勾村_一河原社南字鹽坪向也澤姬神

山末社坐_二繼橋郷字宮山_一御田口社南也小梨谷山祇大山津姬命

宇須乃野社坐_二高向郷高向村_一五穀靈神二社同玉垣內

小俣社坐_二湯田郷小俣村_一宇賀神一名稻女大明神

御饗社坐_二箕曲郷大口村_一一名水戶神御饗都速秋津日子神

心爲不許耳遂許即相副而往宅相住十餘歲爰天女善爲釀酒飲一盃吉萬病除也其一盃之直千金財積車送之于時其家豐土形富故云土形里此自中間至子今時便云比沼里後老夫婦等謂天女曰汝非吾兒暫借住耳宜早出去於是天女仰天哭慟俯地哀吟即謂老夫婦等曰妾非以私意來是老夫等所願何發厭惡之心忽存出去之痛老夫增發願願去天女流淚微退門外謂鄉人曰久沉人間不得還天復無親故不知由所吾々何々哉々拭淚嗟歎仰天歌曰阿麻能波良布理佐兼美禮婆賀須美太智伊幣治麻土比天由久幣志良受母

遂退去而至荒鹽村即謂村人等云思老夫老婦之意我心無異荒鹽者仍云比治里荒鹽村亦至丹波里哭木村據槻木而哭故云哭木村復至竹野郡船木里奈具村即謂村人等云此所我心奈久志久奈具志乃留居此村斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命也

二所太神宮御鎮座本紀曰亦名姮娥昇女稻靈電光所變也五穀種所化神保食神分身善釀酒靈形石坐

甕名賀多普器軍陀利夜叉神所化也亦以大土祖宇賀魂神爲根倉甕星神供神酒今號根倉甕是也

御井社

大田命傳記曰神御井水天孫降臨以來天村雲命理

治于虎珀之鉢金剛夜叉神所化也徑一尺八寸天降居留也爲守護七星光明如星坐也皇太神皇孫之命天降坐時爾天村雲命乎御前

立天天降仕奉于時皇孫之命天村雲命乎召詔久食國之水波末熟荒水爾在利故御祖天御中主神之御許爾

參上此由言天來止詔即天村雲命參登天孫之御祖之天照太神天御中主神之御前爾皇御孫之中止宣事

乎子細申上時爾御祖天照皇太神天御中主皇太神正哉吾勝尊神魯岐神魯美尊神議詔久難爾奉政者行奉

下度在度水取政道於遺天下復飢餓久在利何神乎奉下度思間爾勇乎志參登來度詔天忍石乃長井乃水乎

取八盛天誨給久此水持下天皇太神乃御饌爾八盛獻天遣水波天忍石乃長井乃水止術云天食國乃水爾灌和天朝

夕御饌爾奉獻禮即時日向高千穗宮乃御井定崇居焉奉仕矣自爾以降但波真井原爾鎮移居水戶神奉

仕岐其後從真井原遷于止由氣宮乃御井居上焉

已上三所別宮是也但風宮々號之後四所別宮也

風宮在神宮南土宮東但南向坐
裏書廣瀨龍田同體神風日神

御靈八咫鏡坐

降臨次第 麗氣記曰水火風空四智御靈鏡水圓滿宮土

火三角形角風半月形風空團圓形高宮一本

社記曰正應六年三月二十日官符改社號奉授宮

號預官幣依異國降伏之御祈也

嘉元正遷宮之時被増作寶殿畢

北御門社裏書賀茂
若雷神金剛界辨財天女毘沙門天形刻也

倭姬命世記曰一名曰若雷神賀茂社同神也
形懸坐

調御倉神

大田命傳神記曰宇賀能美多麻神座是伊弉諾伊弉冊尊

二柱尊所生神也亦號大宜都比賣神亦名保食神神祇

官社內坐御膳神是也亦神服機殿祝祭三狐神同座神

也故亦名專女神也齋王專女此緣也亦稻靈宇賀能

美多麻神坐也乾方敬拜祭也尊形○按倭姬世
記尊作蟬坐各一座

也

二所太神宮御鎮座本紀曰稻靈豐宇賀能賣命宇賀能

美多麻神保食神尊形一床座以白龍爲守護神也

凡王子八柱同座給也

酒殿神裏書台藏界
辨才天女形

大田命傳神記謂伊弉諾伊弉冊所生和久產巢日神兒

豐宇賀能賣神亦名姁娥亦名昇女從月天降坐善釀

酒飲一盃吉除萬病也其一坏之直千金財積車

送之今號神酒驛家使及齋宮節會賜酒立女一布

此之緣也

亦曰丹波國與謝郡比治山頂有井其名號麻那井

此所居神則竹野郡奈具神是也故豐宇賀能賣神靈石

坐也亦酒造天之噫一口大神靈器也以敬拜祭也古語

吉祥甕腹滿甘露酒一名號神酒獻三節祭也

丹後國風土記曰丹後國丹波郡那家西北隅方有比

治里此里古事記比沼山頂有井其名云麻奈井今既

成沼此井天女八人降來浴水子時有老夫婦其

名曰和奈佐老夫和奈佐老婦此老等至此井而竊

取藏天女一人衣裳即有衣裳者皆天飛上但無

衣裳一女孩一人留即身隱水而獨懷愧居爰老夫謂

天女曰吾無兒請天女娘汝爲兒天女答曰妾獨留

人間何敢不從請許衣裳老夫曰天女娘可存欺

心天女云凡天人之志以信爲本何多疑心不

許衣裳老夫答曰多疑無信率土之常故以此

類聚神祇本源卷十一

外宮別宮篇

神祇式曰多賀宮一座 豐受太神荒魂去
神宮南六十丈

祈年月次神嘗等祭供之

凡二所太神宮禰宜大小內人物忌諸別宮內人物忌
等並任二度會郡人 但伊雜宮內人二人物忌
父等任志摩國神戶人

大田命傳 神 曰伊吹戶主神 祓戶神 天照太神第一攝

社也依神誨奉傍止山氣宮也

神祇譜天圖曰伴神天下四方國人夫等諸事漏落事悉神

直日命大直日命聞直見直給安久平久所知食也

私記元者荒祭宮一所並坐 東方多賀宮
西方荒祭宮 此故至于今荒

祭宮東西遷宮達本宮遷座例也

御靈形事見他卷也神直日大直日神事見于荒祭宮

段也

土宮 在神宮與高宮中東向座

大田命傳 神 曰山田原地主大土御祖神二座大歲神子大

國魂神子宇賀之御魂神一座素盞烏尊子土乃御祖神

一座亦衢神大田命神寶石寶形一面座是神財也

倭姬命世記曰宇賀之御魂神土乃御祖神形鏡坐寶瓶坐

二所大神宮御鎮座本紀曰素盞烏尊孫大土祖一座衢神

大田命一座宇賀御魂大歲神一座 山田原地護神定

祝祭也

注曰 大土祖靈鏡坐 大田命靈銘石坐 宇賀魂靈

瑠璃臺坐也

豐受皇太神宮御鎮座次第 麗氣曰攝社大土祖神 亦名
五道

大神 雙五所大明神坐也
山田原地主神也 亦號鎮護神

大歲神子大國玉神子宇賀神一座大土御祖一座 御

體瑠璃壺一口 靈鏡二面華形坐云々 在神寶一名石

一面日象扇一枚

社記曰大治三年六月五日宮號宣下爲二度會河堤守護

也長承二年仰造宮使被增作寶殿畢預祈年神

嘗月次等祭幣神宮始祭

月讀宮 在神宮北四面堀百二十二丈四
至去瑞垣東西南北二十二丈 御靈形鏡坐

准土宮嘉例依申子細承元四年五月二十二日

被下依請宣旨被授宮號丁

建曆元年辛未造宮使增作神殿准內宮加作小殿

以下同十二月十八日奉成遷宮畢

以上十七箇所神國津社

未入官帳田社事鴨下社大水上兒石已
呂居鴨比古賣命形無

右神社太神宮造奉使造奉而定祝

津布良神社 大水上神兒津布良比古津布良比賣命

形無

葭原神社 大歲神兒佐々津比古命形石坐又宇賀乃

御玉御祖命形無又伊加利比女形無

小杜神社 大水上兒高水上命形石坐

許母利神社 粟嶋神御玉形無

新河神社 大水上神兒新川比賣命形石坐

宇治乃奴鬼神社 大水上神兒高水上形石坐

加奴彌社 大歲神兒稻依比女命形石坐

河相社 大水神御子兒細河水神形石坐

熊淵社 大水神御子多支大刀自形無

荒前社 國生神兒荒前比賣命形石坐

那自賣社 大水上御祖命形石坐又同御玉御裳乃須

蘇比賣命形石坐

葦立豆社 宇治都比女命兒玉移良比女命形石坐

牟彌乃社 大水上兒寒河比古寒河比女命形石坐

右神社倭比賣乃御時仁祝井御刀代田宛奉也

田邊氏社 荒木田氏神社天御中主尊二十世孫天見

通命是也

內宮相殿神二座

外宮相殿神三座

延喜十一年正月二十八日官府預四度案上幣畢

類聚神祇本源內宮別宮篇

正平七壬辰二月廿日書寫畢

權禰宜度會神主實相五十
六十

田邊社 稱_二太神御滄浪河神_一形鏡坐大長谷天皇御宇定祝

蚊野社 稱_二大神御蔭河神_一形鏡座大長谷天皇御宇

定祝

湯田社 稱_二鳴震電_一又大歲御祖命形無同御宇定祝

已上六箇所社造神宮使造作奉也

大土社 稱_二國生神兒大國玉命_一次水佐々良彥命次

佐々良比賣命形石坐倭姬內親王定祝

國津御祖社 稱_二國生神兒宇治比賣命_一形石坐又村

田比賣命形無倭姬內親王御世定祝

宇治山田社 稱_二大水神兒山田姬命_一形無 同御世

定祝

津長大水社 稱_二大水上兒栖比女命_一形石座 同御

世定祝

堅田社 稱_二東方堅田社_一形石座 倭姬內親王御世

定祝

大水社 稱_二大山罪乃御祖命_一形無 倭姬內親王御

世定祝

江神社 稱_二天須婆留女命兒長口命_一形在水又大

歲御祖命形無又宇賀乃御玉倭姬內親王御世定祝

神前神社 稱_二國生神兒筑前比賣命_一形石坐同御世定祝

粟御子社 稱_二須佐分手_一○分手一本命御玉道主命_一形

石坐 同御世定祝

河原社 稱_二月讀神御玉_一形無 同御世定祝

久具社 稱_二大水上神御子久々都比女命_一比古命_一又久々都

形石坐同御世定祝

檜原社 稱_二大水上兒那良原比賣命_一形石坐 同御

世定祝

榛原社 稱_二天須婆留女命御玉_一形無奈良朝廷御代

定祝

御船社 稱_二大神御蔭河神_一形無 倭姬內親王代定

祝

坂手社 稱_二大水上兒高水上_一形石坐 倭姬內親王

御代定祝

狹田社 稱_二須麻留女神兒速川比古速川比女山末

御玉三柱_一形無 倭姬內親王御代定祝

久麻良比社 稱_二大歲神兒千依比賣命_一形石坐 同

御代定祝

瀧原社 稱_二麻奈胡神_一形石坐 同御代定祝

朝熊水神社一座寶鏡鑄造功神也
靈石坐也

件神社之寶鏡二面是則日天月天之所化白銅神鏡

依神託倭姬命御制作也凡天照太神御入座之時

大年神大山津見山祇朝熊水神等奉饗此之所

故神社定給也

倭姬命世記曰酒殿一座天逆大刀逆鉾金鈴藏納也

大田命傳記曰神靈器座御倉神專女也

同記曰素盞烏尊子宇賀之御魂神亦專女三狐神

御戸開關神天手力男神左
栲幡千千姬命右

御門神 豐石窓神 櫛石窓神

四至神三十〇三十一四前宮中祭之

大田命傳記曰夜叉神大將石座也

社記曰但與神祇式符合式文不付在所
此七字一大文字也

諸社三十座 太神宮所攝二十四座式內

朝熊社在宇治郡
前社 園相社在沼木鄉積良村
前社

鴨社在城田鄉山上村
前社在同所狩田村 田乃家社在同鄉矢野村
前社

蚊野社在田邊鄉蚊野村
前在 湯田社在湯田村

大土御祖社在櫛部村 國津御祖社在宇治鄉
殿敷地

朽羅社在田邊鄉原村 伊佐奈彌社長寬檢錄文云無寶
殿敷地

津長社在宇治鄉 大水社在同鄉

大國玉比賣社長寬檢錄文云
無寶殿敷地

神前社在宇治鄉下松下

久具都比賣社在城田鄉久
具村前社

榛原社在田邊鄉前社

坂手國生社在田邊鄉氏社
北岡

多伎原社在三瀨村

度會宮所攝十六座者外宮別宮篇載之

儀式帳二十五所內

瀧祭神社無寶殿 久麻良比社宇治山田社

堅田社

儀式帳曰雜例云朽羅社伊佐奈彌社
已上件二社雖載于延喜式不載于儀式帳也

度會郡社 合四十所之中官帳社二十五所
未官帳社十五所

瀧祭社在太神宮北
河邊無御殿

小朝熊社 稱神櫛玉命兒大歲兒櫻大刀自形石坐

又若虫神形石坐又大山罪命子朝熊水神形石坐倭

姬內親王御世定祝

園相社 稱大水水上兒曾奈比々古命形石坐倭姬命

內親王定祝

鴨社 稱大水水上兒呂和居命形石坐倭姬內親

王定祝

是應時從機比化生出現之故號氣神。吾亦根國底國與龜備疎來物甯相率守護神之故名。鬼神。吾復爲生氣。仁授與壽福之故名。大田神。吾能反魂魄之故號與玉神。悉皆自然之名也。物皆有効驗。我將辭訖遂隱去矣。

又曰與玉神言壽竟于時倭姬命皇太神座正宮之西北角大地輪之中臺祝祭也。

倭姬命世記曰瀧祭神無寶殿在下津底水神也一名澤女神亦名美都波神

天地麗氣府錄曰天瓊矛者獨古變成也天逆戈者大梵天

王矛也天逆太刀者大梵王天矛也

件神寶藏瀧祭仙宮者也是龍宮也亦號常世鄉

神祇寶山記曰夫水則爲道源流萬物父母故長養森

羅萬像當知天地開闢管水變爲天地以降高天海

原在獨化靈物其形如葦牙不知其名爾時靈

物乃中四理志出神聖化生名之曰天神亦名大梵

天王亦稱尸棄大梵天王逮于天帝代一名靈物

稱天瓊玉戈亦名金剛寶杵爲神人之財至于地神代謂之天御量柱國御量柱因興于大日本洲

中央名爲常住慈悲心王柱此則正覺正智寶坐也

故名心柱也天地人民東西南北日月星辰山川草木

惟是天瓊玉戈乃應變不二平等妙體也法起王宣久心柱是獨古三昧耶形金剛寶杵所謂獨一法身智劍也故大悲德海水氣變化獨古形獨古變化栗柄栗柄現明王明王化八大龍神而心柱守護十二時將常住不退是不動本尊緣也故龍神所化八咫鳥者諸天三寶爲三前荒振神使也

亦曰此寶杵則常世宮殿內奉納俗云五百鈴河瀧祭靈地底津寶宮是也是名龍宮城也亦號仙宮也

二所太神宮麗氣曰金剛寶柱長一丈六尺徑八寸廻二尺

四寸亦曰心柱五尺五寸或曰瀧祭神與廣瀨龍田神

則同神異名水氣神也故廣瀨龍田神名號天御柱國

御柱是天逆戈守護緣也彼神名神祇式祝詞具也云々

大田傳記曰

朝熊神社六座倭姬命崇祭之神社是也

櫛玉命一座倭姬命御代瑞玉奉造之神社是也

保於止志神一座倭姬命御代崇祭之神社也懸稅靈神

櫻大刀神二座靈化木座也大八洲櫻樹始從天上降居也

苔虫神一座櫻大刀神與合力大刀于小刀

大山祇一座寶鏡鑄造功神也

櫻神與並坐也

彼神小朝熊山嶺社造奉祝定令_レ坐大歲神稱是也

已上內宮六所別宮是也但加_二風宮_一七所別宮也

風宮

神祇譜天圖曰風宮一座謂志那都比古神廣瀨龍田同神

神代上曰一書曰伊弉諾尊與_二伊弉冊尊_一共生_二大八

洲國_一然後伊弉諾尊曰我所_レ生之國唯有_二朝霧_一而薰

滿之哉乃吹撥之氣化爲神號曰_二級長戶邊命_一亦曰_二

級長津彥命_一是風神也

社記正應六年三月廿日官府改_二社號_一奉_レ授_二宮號_一預_二

官幣_一二宮同前也依_二異國降伏之御祈禱_一也

嘉元正遷宮之時被_レ增_二作寶殿_一畢

倭姬命世記曰與_二玉神_一無_二神殿_一衛神瓊

一書曰衛神孫大田命是土公氏遠祖神五十鈴原地主神也

古語拾遺曰私云天孫御臨降之時也先驅還白有_二一神_一居_二天八達之

衢_一其鼻長七咫背長七尺口尻明曜眼如_二八咫鏡_一即

遣_二從神_一借_二問其名_一八十萬神皆不_レ能_二相見_一於是

天鈿女命奉_レ勅而往乃露_二其胸乳抑_一下裳帶於臍下

而向立咲囁是時衛神問曰汝何故爲_レ然耶天鈿女命

反問曰天孫所幸之路居之者誰也衛神對曰聞_二天孫

應_レ降故奉_レ迎相待吾名是猿田彥大神時天鈿女命復

問曰汝應_二先行_一將吾應_二先行_一耶對曰吾先啓行天鈿

女命復問曰汝應_レ到_二何處_一將天孫應_レ到_二何處_一耶對

曰天孫當_レ到_二筑紫日向高千穗穗觸之峯_一吾應_レ到_二

伊勢之狹長田五十鈴河上_一因曰發_二顯吾_一者汝也可_二

送_レ吾而致_レ之矣天鈿女命還報天孫降臨果皆如_レ期

天鈿女命隨_レ乞侍送焉

大田命傳記曰今歲猿田彥大神參乃言壽覺白久南大峯

有_二美宮處_一佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者大八

洲之內珍圖之靈地也隨翁之出現二百八萬餘歲之前

爾未未知留在_二靈物_一利照耀如_二大日輪_一也惟小緣之

毛物爾不_レ在須定主出現御座耶念木

亦曰天之逆大刀天之逆鋒大小之金鈴五十口日之小

宮之圖形文形等是也

大田傳記曰纏向珠城宮皇女倭姬命伊勢國渡遇之宇遲

乃五十鈴河上之邊立_二儀宮_一御坐之時爾狹長田之猿

田彥大神宇遲土公氏人遠祖神齋內親王神主部天村雲命之孫大若

忌等天見通命之尊孫字多大宇禰奈大阿禮命等也訓悟白久凡天地開闢之事聖

人所_レ述也爰伊勢天照皇太神五十鈴乃河上爾御鎮坐

之製マテ作未_レ露_二紙墨_一故元始綿邈其理難_二言志願

爾諸聞給倍吾是天下之士君也故號_二國底立神_一也吾

從_二御大神寶殿_一遷宮次奉_レ渡_二于月夜見宮_一也于_レ時
禰宜德雄奉_レ遷行事宮司有範供奉

瀧原宮事

神祇式曰瀧原宮一座

太神宮遙宮在伊勢與志摩境山中去太神宮西九十里瀧原並宮

一座太神宮遙宮在_二瀧原宮地內_一並宮同宮

儀式帳曰瀧原宮

伊勢志摩兩國界大山中在太神宮以西相去九十二里稱_二天照太神遙

宮_一御形鏡坐

並宮

倭姬命世記曰廿五年丙辰春三月從_二飯野高宮_一遷_二幸

于伊蘇宮_一真奈胡神爾國名何問給支大河乃瀧原乃國

止白支其所乎宇太之太字禰奈乎為_二天荒草令_一刈掃_二天

宮造令_レ坐_二此地波皇太神之欲給地_一波不_レ有悟給支其

時自_二大河南道_一宮所寬爾幸行

倭姬命世記曰瀧原宮一座

靈御形鏡坐水戶神名速秋津日子神是也

大田傳記曰伊弉諾伊弉冊尊所生河神名_二水戶神_一

倭姬世記曰並宮一座

靈形鏡坐速秋津日子神妹速秋津比賣神此二神因河海持別而生神八柱

神寶日出祕府曰瀧原神鏡

倭姬命御宇能奉獻寶鏡坐猿田彥所生以_二靈石_一為_二正妹_一也三尊坐也

是龍神應變也朱注曰白龍上石是也云々

伊雜宮事

神祇式曰伊雜宮一座

太神宮遙宮在志摩國答志郡去太神宮南八十三里右諸別宮祈

年月次神嘗等祭供_レ之就中瀧原並宮伊雜宮不_レ預_二

月次_一其宮別宮各內人二人

其一人用入位已上并陸子孫內人一人

一人但月讀宮加_二御巫內人一人_一御形鏡坐

儀式帳曰伊雜宮

在志摩國答志郡伊雜村太神宮相去八十三里

宮

倭姬命世記曰伊雜宮一座

天牟羅雲命裔天日別命子玉柱屋姬命是也御形鏡坐大歲神

一座國津神子御形石坐

同世記曰廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞_二晝夜不_レ止

置此異止宜_二大幡主命舍人紀麻良止差_一使遣令_レ見_二

彼鳥鳴處_一罷行見波嶋國伊雜方上葦原中在_二稻一基_一

生本波一基爾為_二豆末千穗茂也_一彼稻白真名鶴昨持廻

乍鳴支此見顯其鳥鳴聲止_二支返事申_一支爾時倭姬命宜久

恐志事不_レ問奴鳥須良田作皇太神奉物乎止詔_二豆物忌

始給_二豆彼稻伊佐波登美神乎為_一豆拔穗爾令_レ拔_二皇太

神御前懸久真爾懸奉始_二支則其稻大幡主女子乙姬爾

清酒令_レ作御饌奉始_二支千稅奉始事因_一茲也彼稻生地

千田號_二支在_一島國伊雜方上_二其所伊佐波登美之神宮

造奉皇太神為_二攝宮_一伊雜宮此也彼鶴真鳥乎號稱_二

大歲神_一同所祝定奉也

又其神皇太神之坐朝熊河後之葦原中石志豆坐

伊弉奈岐宮事

神祇式曰伊弉奈岐宮二座去太神宮三里中村郷在伊弉諾尊一座伊

弉冊尊一座

倭姬命世記曰伊弉諾尊靈御形鏡坐左方

伊弉冊尊靈御形鏡坐右方

社記曰伊佐奈岐宮二座去本宮北三里伊弉諾尊一座伊弉冊尊

一座貞觀九年八月丁亥朔二日戊辰勅伊勢國伊佐奈岐神伊佐奈彌神改社稱宮預月次祭并置內人

一員貞觀十年造替遷宮仁壽二年八月廿八日依洪水神殿流損同十月一日任官司伊度人注申造立彼宮

齊衡二年九月廿日奉遷伊佐奈岐宮月讀宮同前云々凡月夜見伊佐奈岐兩社正殿顛倒之間色々御裝束種々御神寶重々御垣御門鳥居雜舍等皆悉流失已畢仍宮司伊度人本宮禰宜相共急造假殿奉鎮兩宮御體畢

兩宮御體奉戴事神主私兩氏內人供奉之例也而私氏內人依不參會以大內人神主正見所令奉頂御體也仍私氏內人蒙不忠之咎永被罷職掌畢

月讀宮事

神祇式曰月讀宮二座去太神宮北三里

月夜見命一座荒御魂命一座

倭姬命世記曰月夜見命二座形馬乘男形也

一書曰御形白馬乘男形紫御裝束金作太刀佩也

荒御魂命左方形鏡坐飛鳥宮御宇丙寅十一月十一日遷魚見神社也

太神宮禰宜最世社記曰月讀宮一座荒御魂命一座

寶龜三年八月甲寅幸難波內親王第是日異常風雨

拔樹發屋也卜之伊勢月讀神爲祟於是每年九月

月准荒祭神奉馬亦荒御玉命伊佐奈岐命伊佐奈

彌命入於宮社

貞觀九年八月丁亥改社號稱宮預月次祭并置

內人一員同十年廿年一度造替遷宮次被增作寶

殿奉遷於神靈也卷向宮御代豐玉姬命承神託

而刻木馬顯天童形奉獻太神財是也各一匹左右坐

飛鳥宮御代丙寅歲十一月十一日月讀命亦荒御魂命

靈奉遷于魚見社是神託也云々

荒魂命靈元是鏡坐依神宣奉遷魚見社以後宮

號之時以木馬爲神靈者也月夜見命靈豐玉姬命

所作木馬天童荒魂命靈豐玉姬命所作木馬座也

類聚神祇本源卷十

內宮別宮篇

荒祭宮事

神祇式曰荒祭宮一座

太神荒魂去太神宮北二十四丈祈年月次神衣等祭供之

儀式帳曰荒祭宮稱太神荒御薨御性形鏡坐

舊事本紀曰伊弉諾尊日向橘小戸櫛原祓除時所成神

名八十柱津日神次大禍津日神後直其禍所成

神名神直日神次大直日神

日本書紀曰伊弉諾尊滌去吾身之濁穢則往至筑紫日

向小戸橘櫛原祓除時所成神號曰八十柱津日神

次將矯其枉而生神號曰神直日神次大直日神

倭姬命世記曰荒祭宮一座

皇太神荒魂

伊弉那岐神所生神名

八十禍津日神御性形鏡坐

舊事本紀曰伊弉諾尊滌去其身之時所生神三柱洗

左御目時所生之神名天照太御神洗右御眼所

生之神名月讀命並坐五十鈴河上謂伊勢濟太

神素戔嗚尊事畧之

日本書紀曰然後洗左目因以生神號天照太神洗右眼因以生神號月讀尊

大田命傳神記曰荒祭宮一座皇太神荒御薨神也

伊弉諾尊到筑紫日向小戸橘櫛之原而祓除之時

洗左目因以生日天子大日靈貴也天下化生名

曰天照太神荒魂荒祭宮也

多賀宮一座

止由氣太神荒御魂也

伊弉諾尊到筑紫日向小戸之

橘櫛原而祓除時洗右眼因以生日天子天御中

主靈貴也天下化而名止由氣皇太神之荒魂多賀宮

是也

阿波良波命傳神記曰荒祭宮一座

天照大日靈貴荒魂靈御形鏡坐

伊弉諾

尊洗左目因以生號曰天照荒魂亦名瀬織比咩神

今案橘小戸祓除之時洗左目以所生神稱荒祭宮

濯右眼以所生神稱多賀宮之條分明也荒祭宮者

八十柱津日神大禍津日神多賀宮者神直日神大直日

神也

天照皇太神五十鈴河上御鎮坐之時荒祭宮多賀宮

爲攝社同時御鎮坐也依之以洗左御目時所生

神濯右御眼所生神並坐五十鈴河上之由舊事本

紀載之歟不可成疑惑者哉

群靈心識正覺正智金剛坐也亦名心蓮也

亦曰凡八百萬神下座南閻浮提釋迦尊爲父爲母爲君爲臣生々世々無不從之世人無孝順心犯輕垢罪墮地獄故曰神盧舍那佛等說大乘心地而已
熒惑守心祕要右筆記之耳于時己卯沙門行基奉

勅撰鈔之一

天平十一年己卯伊勢太神宮政印一面始鑄造之瑞柏

一百枚奉_レ上_二所太神宮_一矣

天地麗氣府錄曰夫心柱者元初皇帝御靈也興于阿字心地_一上_二鑲字正覺_一定惠不二心不亂常住不去不

來妙法坐伊弉諾伊弉冊_二尊天_一降其嶋則化_二豎八尋殿_一共住_二同宮_一矣號曰_二大日本日高見國_一大日本者三光殿本名亦

曰此杵者我身三昧形故_二所皇太神宮者_一以_二伐折羅_一爲

宗伐折羅者獨貼々々者心肝玉玉者神々者正覺理也理者法界一如々々者真正覺々々々者心柱々々者心王々々者大日々々今兩宮是也

神者心御柱柱則衆生成佛因緣法界緣起是也伐折羅卽是金剛杵陀羅執持義也

所顯露來也稱獨古是形也故名號心御柱卽是三
千界大惣相妙體也所謂心性不生不滅一切諸法唯是一
心故現心相一名神至也

心王大日遍照尊也心數恒沙諸佛如來常住妙法心蓮
臺還我頂禮心諸佛迷八識衆生也悟五智五佛也

天八坂瓊曲玉者皇天之心珠覺王之寶珠也天瓊戈者
亦名天逆戈天神降靈之本致也大日覺王之獨胎變成也所謂獨古者一切

諸法果德一切諸法之父母也故法界率都婆是五輪之妙
體也依之入此五字者大空無相智性也出外用方便
之理門度隨類萬差之化變不可得妙也

大和寶山記曰夫水則爲道源流萬物父母故長養森
羅萬像當知天地開闢嘗水變爲天地以降高天海原

在獨化靈物其形如葦牙不知其名當時靈物乃
中四理志出神聖化生名之曰天神亦曰大梵天王

亦稱戶葉大梵天王逮于天帝代一名靈物稱天瓊
玉戈亦名金剛寶杵爲神人之財至于地神代謂

之天御量柱國御量柱因興于大日本洲中央名爲
常住慈悲心王柱此則正覺正智寶坐也故名心柱也

天地人民東西南北日月星辰山川艸木惟是天瓊玉戈乃
應變不二平等妙體也法起王宣久心柱是獨古三昧耶形

金剛寶杵所謂獨一法身智劍也故大悲德海水氣變化獨
古形獨古變化栗柄々々現明王明王化八大龍神
而心柱守護十二時將常住不退是不動本尊緣也故龍神
所化八咫鳥者諸天三寶爲三前荒振神使也

亦云以昔日伊弉諾尊月子伊弉冊尊從皇天勅宣久
受天瓊玉戈立山跡中央爲國家心柱造八尋
殿神祇峯是也二柱神捧持眞經津鏡化生日神月神以

來治天下以無相鏡崇神象磯城嚴櫃之本祠之
名金剛峯亦日神所化之故稱大日本高見國也天帝
耀慧日除癡闇象清淨心爲世福田不假權

敎唯樂正道之故號大葦原千五百秋瑞穗中國矣
故聖曰智柱立留瑞穗安國此常住不二心柱義也云々法
起菩薩曰大千世界常住一心

亦曰獨古變形神術此寶杵則常世宮殿內奉納俗云五百鈴川龍祭靈地底津寶宮是也名龍宮城也亦號仙宮也
神語神寶形大八洲入法性海中用天瓊玉戈而

降伏從前妄想到穩密清淨本地故一心不亂萬法
無咎只切忌不淨猛利人耶夫天瓊玉戈亦天逆矛亦魔
返戈亦名金剛寶劍亦名天御量柱國御量柱亦名常住心
柱亦名忌柱也

惟是天地開闢之圖形天御中主神寶獨胎變形神佛神通

類聚神祇本源卷九

心御柱篇

豐受皇太神御鎮座本紀曰

心御柱

一名天御柱亦名曰三柱
亦天御量柱

謂應天四德地五行徑四寸長五尺御柱坐以五色
繩奉纏之以八重榑奉飭之是則伊弉諾伊弉冊
尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心臺也都合天
心而與木德歸皇化而助國家故皇帝之曆數天
下之固常磐堅磐無動三十六禽十二神王八大龍神
常住守護坐依損失有天下危
天口事書曰八坂瓊戈形

天地開闢初浮高天海原神寶是也神語破者古語云
天逆杵天逆大刀俗云天乃魔返之杵亦名天乃登保
言此名天璽也

天御量柱者天瓊戈異名同體坐也以一基分天地
而爲內外心御柱也故大人者與天地合其德而
利三万物者也

太宗祕府曰夫天瓊玉戈亦名天逆矛亦名金剛寶劍
亦名天御量柱亦心御柱也惟是天地開闢之圖形
天御中主神寶獨胎變形座也

諸佛菩薩一切群靈心識之根本一切國王之父母也心御
柱咒字明々上則金星慧星輪星鬼星火星水星風星南斗
北斗五鎮大星一切國王星三公星百官星如_レ是謂星名
應_レ坐變成形勝與義是也

亦名白水堅魚
木也爲正

形文深釋云心御柱者天瓊戈表物也獨古形三部五部一
體不二妙體萬法所生心體也故本覺常住之心蓮臺之
上觀一大三千界妙理也惣八葉蓮華上有日輪是蓮花
理也理則智也智則大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作
智柱者獨一法身妙體一切衆生根源也居磐石而盟者
示長遠之不祥者也是不動之所表也故所現八大龍
王十二神王常住守護坐也

亦曰心御柱者一氣始一心妙法萬化種子也

仙宮祕文曰吾聞以代承皇天天御中主詔命天皇孫尊
天降居之時平鬼神治天下靈異物有三百六十種
之神寶所謂天之八坂瓊曲玉戈玉裳比禮天衣白銅鏡
神劍類是三百六十種之中用以天瓊玉戈爲最長而
立國御量柱也惟是初禪梵王應化之種法界體性智

御形文圖五行中火輪卽獨貼形坐也豐受皇太神則金剛
界天髯荼羅御形文圖五行中水輪五智位故有五月輪
也

天皇御宇大和姬皇女承皇天嚴命移大梵王宮而造
伊勢內外兩宮焉顯御形於棟梁之上而示本妙與
心柱於金剛座而治國家焉

寶基本紀曰皇太神宮者日天圖形六合之心體獨存任
天真故明白也五行中火性五色中白色故以白銅奉
飾之

豐受宮者月天形八州之中平等圓滿之心體緣五行中水
性五色中赤色故以金銅奉飭之黃金種智
圓明義也

類聚神祇本源卷八

形文篇

寶基御靈形文圖曰大和姬皇女承_二皇天嚴命_一移_二高天原之梵宮_一而造_二神風伊勢內外兩宮社_一顯_二御形於棟梁_一用作_二生化之龜鏡_一興_二心柱於金石_一以治_二國家之福壽_一天神地祇頓首再拜天下幸甚

五十鈴宮御靈形者天瓊玉杵象表也是天地初發萬象根本也所謂玉卷須賀利大刀子小刀子此其緣形也惟能摧_二破諸災患_一而神心不_レ亂三神一體靈智神財是也故亦名稱_二金剛正杵_一亦名_二天逆戈逆太刀_一也白銅鏡八面者大八州靈神居座也部類三十二神居也

山田原宮御靈形者五位圓形座也是則五常圓滿智光表理也一輪中含_二萬象_一五常百行悉皆一圓常住應化元神座也金鏡十四面座部類神五十二座

伊勢兩宮泰現_二美麗之威儀_一顯_二御形之珍圖_一給是大元之靈明也是稟氣之靈大智也

蓋百千尊號天津御量之功名也故

聖神曰內外不二常一體天神地神皆一露矣

天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗形表也於_レ是現_二大傳珍圖_一以通_二明神之德_一以照_二萬物之情_一乃成_レ之神近_レ悟諸不_レ遠也

天照珍圖者心神華臺之中天地八尊圓鏡坐豐受珍圖者天地父母二儀之中五大尊光照金鏡坐俗常以_二金鏡_一喻_二明道_一也

天神皇珍圖狀者天之位象_二四時之行_一治_二天下_一四時之行有_レ寒有_レ暑聖人之法故有_レ文有_レ武天地之位有_レ前有_レ後有_レ左有_レ右聖人之法以建_二經緯_一春生_二於左_一秋殺_二於右_一夏表_二於前_一冬藏_二於後_一生長之事文也收藏之事武也故文事在_レ左武事在_レ右

豐受太神御鎮座本紀曰

寶宮棟梁天表御形文

天照太神宮御形象_二日天尊位_一坐也

止由氣太神宮御形象_二月天尊位_一坐也

唯天神地祇明元_二八州利_一物形體故皇天久坐而配_二日月_一照_二宇內之昏衢_一國家合_二天地_一而寶曆長久天眞之

明道鬼神之變通人民式以幸甚々々

瑞柏鎮守仙宮祕文曰天照坐皇太神則胎藏界地曼荼羅

亦內十牀廿天外九牀六十二天也五風表德勝相應義
亦正殿板敷下內宮者八輻金輪外宮者羯磨轉輪是一葉
一世界表德

亦御殿皆一面屏開高欄梓木正直事

正殿正理表義也

眉間亦越十八界空表成菩提義

亦一方一面屏開四方建門東西日月行途南北南斗
北斗涉入

亦廿年遷宮東西宮造兩部甲乙曼陀羅牙岳表示也

寶基本紀曰千木者智義也搏風也義者則仁也如天智
則靈也如神風者氣也夫天地之間非風則不行不動
故神聖乘風雲而往行冷然善乍有風竅是則虛空之
中無聲而獨能聞知焉無形之中能露心矣實有之所
歸衆之所集至德一大道之竅也

千木片揆者水火之起天地之象也故則曰天之智義也片
揆者仰天以天開口久斯受三月天之一水利萬品緣也
任水德豐受皇太神乎波號御氣都神也向上天神開口
也向地神合口是陰陽化德也

堅魚木者衆星形也奄守天下比於列星也人氣昇
天爲星善氣則爲善星惡氣則爲客星能善元客非

惡起也

鞭懸者天神地祇之風光衆人之壽命國之權衡民之轡策
者也故式爲名矣

御門鳥居八洲中四方中以西方爲智門也故以西方
一號鳥住也大智清淨心緣也謂陰陽之始乃遂於
大明之上出入於窈冥之門而君臣上下令道遙清
淨之宮殿焉

瑞垣玉垣荒垣者天四德地五行萬象大位五官皆備矣惣
而天地與人形人體與寶舍雖異其名而其源一
也

天地麗氣府錄曰分開敷八葉蓮華故大空無相月輪座
其中有實相眞如日輪是爲如々安樂地亦名花藏
世界密嚴淨土是名大光明心殿亦名法性心殿亦名
伊勢二所兩宮正殿也自性大三昧形大梵宮殿表也

類聚神祇本源卷七

寶基篇

日本書紀曰神代上素戔鳴尊曰韓鄉之嶋是有金銀一若使吾兒所御之國不有浮寶一者未是佳也乃拔鬚髯一散之即成杉又拔散胸毛一是成檜尻毛是成桧眉毛成櫟樟一已而定其當用乃稱之曰杉及櫟樟此兩樹者可爲浮寶一檜可爲瑞宮一之材桧可爲顯見蒼生與津棄戶將臥之具夫須噉八十木種皆能播生日本書紀曰神代下高皇產靈尊乃遣二神勅大己貴神曰今者聞汝所言一深有其理一故更條々而勅之夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事一又汝應住一天日隅宮一者今當供造即以一千尋栲繩一結爲百八十紐一其造宮之制者柱則高太板則廣厚倭姬命世記曰爰皇神託宣久其造宮之制者柱則高太板則高厚禮是皇天之昌運國家之洪啓古止宜助神器之大造一奈利即承皇天之嚴命一天移日小宮之寶基一造伊勢兩宮焉

府錄亦曰造宮義則大梵天女大和姬命承皇天之敎一移飛宮天寶基一而與神籬於神風伊勢五十鈴原矣天照皇太神鎮座麗氣曰
 內鳥居金剛時春天 外鳥居金剛時秋天
 內者授祕密灑水神表一沐浴懺悔一也
 外者解捨祓神除穢惡不淨一也
 天口事書曰二所太神宮在右東西寶殿前後不同儀內宮者陰神外宮陽神坐也是春夏象陽長萬物於前一秋冬象陰藏萬物於後一所謂天地之位聖人之法在前在後象四時一治天下以事理一此其儀式也
 千木片揆者陰陽之表也
 堅魚木者星象坐其數十者大日靈尊照十方一撰也九者五大成身尊光濟八洲郡生光明表也八者八心德明表也七者七星頂坐守護願也六者六根明也五者中府五魂齊也四者四德表三者天地人三才表也一說云十者十地之位表也九者極上之位表也天四德地五行爲九也九者五方羅九州因九之故爲九々八十一數極也
 兩宮形文深釋曰智義者五智成道開白阿字本覺理也亦鑲門身振舞即證大覺位智
 亦鯉木者陰陽重如二月輪十八界々々

(井上翁祇本奥書)

正平八年癸巳正月十一日

於繼橋郷吹上村書寫畢

于時寛文十二年壬子四月廿九日書寫之
數返令校合畢

權神主度會

類聚神祇本源

嚴香來雷水戸神嚴罔象女薪神嚴山雷而御飯炊滿供

奉今號御炊物忌父子其緣也春女炊女是ナリ

亦度相河邊有二人漁人名號三天忍海人今謂之掃守氏取年

魚著神膳食矣

天照皇太神重託宣久吾祭奉仕之時先須祭止由氣

皇太神宮也然後我宮祭事可勤仕也故則諸祭事以

止由氣宮爲先也

亦止由氣太神一處御鎮坐乃今卜筮事天皇勅曰宜本

已宗神之績以高皇產靈神苗裔大佐々命兼行二所

皇太神之大神主職奉仕矣

神寶日出祕府曰古語曰天戸開義八百萬神等顯清淨

妙音歟解太神乃怒爾時人長者猿女君祖天鈿女命

也依高貴尊勅命負冲天氣宇即時八百萬神等集會

坐故手持物名之沖也古語邊沖者道法也故沖中也匿

名藏譽其用在中也表空圓御笛神天細女命大祖善龍王

探天香山金竹其空節間雕風孔融通和氣抗安樂

聲矣天籟地籟人籟三才三籟德用一氣始也名笛也御歌神本聲曲天兒屋根命未

音曲太玉命金玉聲各明也御琴神金瑠命長白羽命用

天香弓六張叩絃供五音即高幡上金瑠居因以象也

故名之瑠琴也今世名和琴是也亦號八百萬神等或

歌詠或遊舞故名之神樂也次天孫杵獨王日向宮天

基之治馭天天位乃日宴樂如天上乃儀也人長神天鈿

女命御笛神善龍王分身大己貴命御歌神天兒屋命太玉

命御琴神瑠命裔孫長白羽命也大宮賣命大來目命等

歌舞天上緣也亦金色靈鵲飛來止于弓弭其鵲曉狀

如流電由是作其尾形也乃有三手置大小及音聲巨

細妙音古之遺式乃天表也亦今世號鳥名子則金鵲

長鳴緣也金鵲者无名鳥明一道化鳥也故亦名天鳥也

倭姬命世記曰爰皇神託宣久其造宮之制者柱則高太

板則廣厚禮是皇天之昌運國家之洪啓古止宜助神器

之大造奈利即承皇天之嚴命天移日小宮之寶基

造伊勢兩宮焉

麗氣記曰山田原造宮之間沼木高河原離宮木丸殿御座

天衆降居奏妙音樂

與佐宮御出時地主明神詠曰

奈具身爾奈具我宮伊豆間今波照出御明給

一說云安賀奴美爾阿賀奴小宮乎伊豆流萬爾今者外爾

出々照覽悟也

亦山田原迎接時天照太神拍手忍手御詠曰增鏡雲位合

御覽尊千代二千年重テ重ネ

戊午秋九月望從_二離宮_一遷_二幸山田原之新殿_一奉_レ鎮_二御船代御槌代之內_一以_二天衣_一奉_レ飭之如_二日小宮儀_一也

注云槌代則天之小宮之日座儀也故謂_二天御陰日御

薩登隱坐_二祝言緣也船代則謂_二天材木屋船之靈_一故

瑞舍名號_二屋船_一緣也天御翳日御翳隱坐古語也

中臣祖大食津臣命稱辭竟神善奉_二祝詞_一言_二久佐度遇乃山

田乃原乃下都盤根爾大宮柱廣敷立_二高天原爾千木高知

皇御麻乃命乃稱辭定奉_二天照坐須止由居乃皇太神乃

廣前爾恐美_{毛美}申給_{久波}天照皇太神神魯岐神魯美命

爾言寄任_二天_一天_二之小宮之寶殿於此靈處爾奉_二移造_一利以_二

今日_一奉_二移鎮_一利御坐須狀於平久安久令_二知食_一度申給登

言壽鎮居白久宮人皆參終夜宴樂

猿女祖天鈿女裔歌女舞姬來目命裔屯倉小男童笛生琴

生簫生篳篥諸命等一時起歌舞其絲竹音鏗鏘而滿_二六

合_二天神地祇受_一和氣_一而隨_二實用_一天上榮樂海內太平

焉

凡神樂起在昔素盞鳴神奉_二爲日神_一行甚無狀種々陵侮

于_レ時天照太神赫怒入_二天石窟間_一磐戶而幽居焉爾乃

六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔_レ厝凡厥庶事燈_二燭

而式辨天御中主神_{止由氣皇}太神是也太子高皇產靈神命宣_二天會_一八

十萬神於天八湍河原_{是也深思遠慮於天石窟戶前舉}

庭火畢作_二俳優_一猿女君祖天鈿女命採_二天香山竹_一其

節間雕_二風孔通和氣_一類是也_{謂和琴也}亦天香弓與並叩_二絃_一今

即猿女神伸_二手抗聲或歌或舞顯_二清淨之妙音_一供_二神樂

曲調當_二此時歛解_一神怒妖氣既明无_二復有_一風塵以來

風雨時若日月全_レ度一陰一陽萬物之始也一音一聲萬

聲之基也神道之奧願天地之靈粹絲竹之要八音之曲已

以爲_レ貴故依_二舊氏之權_一猿女氏率_二來目命孫屯倉男

女_一轉_二神代之遺迹_一而今供_二三節祭_一永爲_二後例_一也天

皇倭姬命詔宣_二久男弓弭之物大刀小刀弓矢楯梓鹿皮角

猪皮忌鋤忌鋤類是女手末之物麻桶綿柱天機具荒妙衣

和妙衣荷前御調類是都_二合天地生長之土毛_一式備_二宗

廟之祭_一惟仁恩之忠孝以_レ信爲_二德故神明饗_一德與_二信

不求_二備物_一焉仍檢_二納神寶_一卜_二兵器_一爲_二神財_一亦更

定_二神地神戶_一二所太神宮乃朝大御氣夕大御氣乎日別爾

齋敬供奉亦隨_二天神之訓_一以_二土師氏_一爲_二物忌職_一造_二

天平瓮諸土器類_一天供進

亦開化天皇孫子丹波道主貴苗裔八小童女寶殿御輪賜

天奉_レ開_二寶殿_一亦素盞鳴尊子冰沼道主率_二御竈神火神

土神各一座
爲守護神

廣敷立天高天原爾千木高知豆鎮理定理座止稱

辭竟奉支亦檢納神寶一兵器爲神幣矣更定神

地神戶二所皇太神宮乃朝大御氣夕大御氣乎日別爾齋

敬供進之亦隨天神之訓以土師之物忌造平瓮乎

丹波道主命今物忌職奉仕御飯炊供進之

皇太神重託宣吾祭奉仕之時先須祭止由氣太神宮

也然後我宮祭事可勤仕也故則諸祭事以止由氣宮

爲先也

御鎮座本紀曰泊瀬朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳十月朔

倭姬命夢教覺給久皇太神吾如天之小宮座爾天下毛

一所耳坐波御饌毛安不聞爪丹波國與佐之小見比沼之

魚井之原坐道主子八乎止女乃奉齋御饌都神

註曰是止由氣太神者水氣元神坐千變萬化受一水

之德生續命之術故名御饌都神也亦古語水道

曰御饌都神也亦天照太神與止由氣太神一所雙

御座之時陪從諸神等奉御饌其緣也

止由氣皇太神乎我坐國欲度誨覺給支爾時大若子命乎

一名大幡主命御間神社是也差使豆朝廷爾御夢之狀乎令言給支即天皇

祥御夢則天皇今日相夢矣汝大若子使罷往天布理奉

宣支今歲物部八十氏之人等率手置帆負彥狹知二神

之裔以齋斧齋鉏等始採山材天隨神教一度相山

田原乃地形廣大亦麗於是地大田命以金石天下津

底根爾敷立天構立寶殿豆

明年戊午秋七月七日以大佐々命奉布理留共從神

中臣祖大御食津命座度相郡小和志理命事代命佐部支

命御倉命屋和古命野古命乙乃古命河上命建御倉命與

魂命各前後左右爾相副從奉仕大佐々命小和志理命

奉戴正體與魂命道主貴奉戴相殿神驅仙躍比錦蓋

覆日繩曳天御翳日御翳屏奉行幸爾時若雷神天之八

重雲乎四方爾薄靡天爲御垣天從但波國吉佐宮遷

幸倭國宇太乃宮御一宿坐

次伊賀國穴穗宮御二宿坐于時朝夕御饌箕造竹原并

箕藤黑葛生所三百六十町亦年魚取淵梁作瀬一處亦御

栗栖三町國造等貢進仍二所皇太神之朝大御氣夕大御

氣之料所爾定給支

次伊勢國鈴鹿神戶御一宿

次山邊行宮御一宿今號壹志郡新家村是也

次遷幸渡相沼木平尾興子行宮天三箇月坐焉號

今處天名離宮也夜々天人降臨而供神樂今世號豐

明其緣也來日命裔屯倉神男女小男童神宴焉

以白銅寶鏡_一且道主貴八小男童天日別命崇奉焉

上代本紀曰御間城入彥五十瓊殖天皇卅九歲壬戌天照

太神遷幸但波乃吉佐宮_一

今歲止由氣之皇太神結_二幽契_一天降居大御食津臣命速

御食命_{中臣}屋船命_{草水靈今爲度相郡}宇賀之御魂稻女神_今

小保神_{社也}宇須乃女命_{五穀靈子宇}須摩留賣命_{今號須麻留}宇賀

乃大土御祖神_{素葦鳥尊子也度}若雷神_{今世號北御門}彥國見

賀岐建與來命_{號度相國}天日起命_{伊勢太神}振魂命_{玉串大內}

相從以戻止矣爾時天照皇太神與止由氣皇太神合

明齊德居焉如天上之儀_一處雙座焉和久產巢日賣

神子豐宇可能賣命_{屋船稻}生_二五穀_一而善_二釀酒_一奉_二御

饗_二御炊神永沼道主_一素葦鳥尊孫也名粟御子率_二四九三十

六竈神而朝大御氣夕大御氣於炊備天奉_二御饗留丹波道

主貴_{大日天皇之子彥座王子}爲_二御杖代_一志品物備_二貯之_一百

机而奉_二神嘗焉諸神所_一作祭_二神之物五穀既成_一百姓

饒矣其功已辭竟天天照太神伊勢國爾向幸給止由氣太

神復昇_二高天原_一天日之小宮座于_二時以_一吾天津水影乃

寶鏡_一留_二居吉佐宮_一給

註云天地開闢之降雖_二萬物已備_一而莫_二照_一於混沌之

元_一因_二茲萬物之化若_一存若亡而下々來々自不_二尊于

時國常立尊所化神況_二形於天津水影_一以_二天御量

事_一真經津寶鏡_二面鑄表寔是自然之靈物天地感應

當_二此時_一神明之道明而天文地理以_二自存者也故鏡

作神名號_二天鏡神_一其緣也

即起_二樹天津神籬於魚井原_一祕_二藏黃金槌代_一天道主貴

八小童天日起命豐宇賀能賣命備_二御饗_一奉_二齋焉于_一時

高貴太神勅宣以_二皇孫命靈_一宜_二崇_一大祖止由氣皇太神

乃前社云々仍爲_二相殿神_一座

註云靈形鏡坐也皇孫命金鏡也

神記曰泊瀨朝倉宮御宇天皇廿一年丁丑冬十月一日倭

姬命夢教覺給久皇太神吾如_二天之小宮坐_一仁天下_{仁志}

所雙坐爪御饗毛安不_二開爪_一丹波國與佐之小見比沼之魚

井之原坐道主子八乎止女乃齋奉御饗都神止由氣皇太

神乎我坐國欲度誨覺給支爾時大若子命差_二使_一朝廷爾

御夢之狀乎令_二言給支_一即天皇勅_二大若子_一使_二罷往_一天布

理奉宣支故率_二手置帆負彥狹知_一二神之裔_二以_一齋斧齋

鉏等_二始採_一山材_二構_一立寶殿_二且明年戊午秋七月七日

以_二大佐佐命_一弟乙若子命子爾佐布命子從_二丹波國余佐郡魚

井原_二奉_一迎_二止由氣皇太神_一度遇之山田原乃下都磐

類聚神祇本源卷六

外宮遷座篇

麗氣記曰_一受皇太神于_二時大日本國天_三降淡路_{三上}嶽_三繼_三三十二大眷屬_一從_二庚申年_一送_二春秋_一止_二五十五萬五千五百五十五年_一亦曰

天潛尾命	水潛尾命	地潛尾命
木潛尾命	火潛尾命	土潛尾命
石潛尾命	金潛尾命	天日尾命
天月尾命	天子尾命	地子尾命
天破塔命	天破法命	天破仁命
天破神命	國加利命	國加富命
國加國命	國加賀命	愛髮尾命
愛護尾命	解法尾命	學耳尾命
上法神尊	下法神尊	中言神尊
天鏡神尊	地鏡神尊	百百神尊
千千神尊	萬萬神尊	

已上三十二神也

遷_二布倉宮_一自_二丙申_一送_二年月_一五十六萬六千六百六十六年

八輪島宮遷戊申年積年五十七萬七千七百七十七年

八國嶽遷庚申歲五十八萬八千八百八十八年

丹波乃國與謝之郡比沼山頂麻井原遷壬申歲五十九萬

九千九百九十九年

與佐宮遷庚申六十一萬千八百十年

私勘已上六箇所御遷坐都廬二百九十萬六千七百七季

歟

神記曰御間城入彥五十瓊殖天皇卅九歲壬戌天照太神

遷幸但波乃吉佐宮積四年奉_二齋_一

今歲止由氣之皇神天降坐_二天合_一明齊_二德給如_一天小宮之

義_二志_一一處雙座須于_二時和久產巢日神_一于_二豐宇氣姬命_一_{稻靈神也}

奉_二備_一御神酒_一

注云今世謂丹後國竹野郡奈具社座豐宇賀能賣神是

也亦元是天昇女姁娥謂從_二日天之紫微宮_一天降坐天

女是也

亦丹波道主貴_{素盞烏尊孫粟御子神是也}奉_二備朝大御饗夕大御氣奉

仕矣其功已辭竟_二天止由氣太神復上_一高天原_{支此處}_{天仁志}

爾時天皇聞食豆卽大鹿島命祭官定給支大幡主命神
國造兼大神主定賜支神館造立物部八十友諸人等
雜神事取心捧天太玉串供奉因興齋宮于宇治縣五
十鈴河上大宮際一令倭姬命居焉卽建八尋機屋一
令天棚機姬神孫八千千姬命一令織太神御衣一譬
猶在天下之儀焉

類聚神祇本源

(井上翁藏本奥書)

正平八年癸巳正月六日書寫畢

校點了

并其子大歲神子櫻大刀自命山神大山罪命子朝熊
 水神等五十鈴川後江爾天奉_ニ御饗_ニ支_テ時猿田彥神
 裔宇治土公祖大田命參相支汝國名何間給爾佐古久
 志呂宇遲之國止白豆御止代神田進支倭姬命間給久
 有_ニ吉宮處_ニ哉答白久佐古久志呂宇遲之五十鈴之河
 上者是大日本國之中爾殊勝靈地侍奈利其中翁卅八
 萬歲之間仁毛未_ニ視知_ニ留有_ニ靈物_ニ照耀如_ニ日月_ニ奈利
 惟少緣之物不_レ在志定主出現御座爾時可_レ進止念比
 耳彼處爾禮祭止申勢利即彼處仁往到給天御覽_波介禮惟昔
 天神誓願給比天豐葦原瑞穗國之內仁伊勢加佐波夜
 之國波有_ニ美宮處_ニ利止見定給比從_ニ天上_ニ志天投降坐
 比志天之逆太刀逆鉾金鈴等是也甚喜_ニ於懷_ニ比耳言上
 給比支

神記曰天之逆太刀天逆鉾大小之金鈴五十口日之小
 宮之圖形文形等是也

廿六年_{丁巳}冬十月甲子奉_レ遷_ニ于天照太神於度遇五十鈴
 川上_ニ留今年倭姬命詔_ニ大幡主命物部八十友緒人
 等五十鈴原乃荒草木根荊掃比大石小石造平互遠山
 近山乃大峽小峽爾立並木乎齋部之齋斧乎以天伐採
 天本末乎波山祇爾奉_レ祭豆中間乎持出來天齋鉏乎以天

齋柱立_{一名天御柱}高天原爾千木高知利下都磐根爾大
 宮柱廣敷立天_{一名心御柱}天照太神并荒魂宮和魂宮止奉_ニ鎮坐_ニ
 子_レ時美船神朝熊水神等御船仁乘奉利天五十鈴之河
 上仁遷幸子_レ時河際_{仁志}倭姬命御裳裔計加禮侍介留
 於洗給倍利從_レ其以降號_ニ御裳須曾河_ニ也采女忍比賣
 造_ニ天平賀八十枚_ニ令_レ天富命孫作_ニ神寶鏡大刀小刀
 矛楯弓箭木綿等_ニ備_中神寶大幣_上矣
 爾時皇太神倭姬命仍御夢喻給久我高天原爾坐聽戶
 押張原如見々志真伎志國宮處_波是也鎮理定理給止覺
 給支于_レ時倭姬命並御送驛使安部武渟河別命和珥
 彥國菴命中臣國摩大鹿島命物部十千根命天伴武日
 命并度會大幡主命等仁御夢狀具令_ニ教知_ニ給支于_レ時
 大幡主命悅白久神風伊勢國百船度會縣佐古久志呂
 宇治五十鈴河上鎮理定理坐皇太神止國保伎奉_支終夜
 宴樂舞歌如_ニ日小宮之儀_ニ志爰倭姬命朝日來向國夕
 日來向國浪音不_レ聞國風音不_レ聞國弓矢鞞音不_レ聞
 國打摩伎志賣留國敷浪七保國之吉國神風伊勢國之
 百傳度會縣之佐許久志呂五十鈴宮仁鎮理定理給止國
 保伎給支于_レ時送驛使朝廷還詣止倭姬命御夢狀細返
 事白支

地到給奴真奈胡神爾國名何問給支大河之瀧原之國止
白支其處乎宇太之太宇禰奈乎爲天荒草令_二刈掃_一天宮
造令_二坐_一此地波皇太神之欲給地爾波不_レ有悟給支其
時自_二大河南道_一宮處寬爾幸行爾美野爾到給且宮處寬
佗賜_二其處乎_一和比野止號支從_二其處_一幸行爾久求都彥
參相支汝國名何問給支白久久求小野白倭姬命詔久
御宮處乎久求小野止號給支其處爾久求社定賜于_レ時
久求都彥白久吉大宮處有白支其處幸行志天園作神
參相天園地進支其處悅給園相社定給支從_二其處_一幸
行爾美小野有支倭姬命目豆給天即其處乎目豆野止號
支又其處爾圓奈爾有_二小山_一支其處乎都不良止號支從_二
此處_一幸行澤道野有支其處乎澤道小野號支

其時大若子命從_二大河_一御船率御向參相支于時倭姬
命大悅給天大若子問給久吉宮處在哉白久佐古久志
呂宇遲之五十鈴川上爾吉御宮處在白支亦悅給天問
給久此國名何白久御船向田國白支從_二其處_一御船乘給
幸行支其忌楯梓種々神寶物留置所名波忌楯小野號
支從_二其處_一幸行波有_二小濱_一其處取_レ鷺老在支于_レ時
倭姬命御水飲止詔久爾老爾何處吉水在問給支其老
以_二寒御水_一御饗奉支于_レ時讚給水門爾水饗神社定賜

支其濱名鷺取小濱號支然而二見濱御船坐于_レ時大若
子命仁國名何問給白久速爾二見國止白支爾時其濱
御船留給天坐時佐見都日女參相支汝國名何問給支
御詔不_レ聞御答毛不_レ白豆以_二堅鹽_一多御饗奉支倭姬
命慈給堅多社定給支于時大若子命其濱乎御鹽并御
鹽山定奉支從_二其處_一幸行且五十鈴河後之江入坐支
時佐美留日子參相支問給此河名何白久五十鈴河後
白支其處爾江社定給支又荒崎姬參相國名問給白久
皇太神御前荒崎白支恐志止詔神前社定給此其江上
幸行御船泊志處名號_二御津浦_一支從_二其上_一幸行小島
在支其島坐且山末河內見廻給且如_二大屋門前_一在地
支其處上坐天其處名號_二大屋門_一支從_二其處_一幸行神淵
河原坐波苗草戴耆女參相支問給汝何爲耆女白久我
取_二苗草_一女名字遲都日女止白支又問給久奈止加加
久爲耆女白久此國波鹿乃見哉毛爲止白支其處乎鹿乃
見止號支何是問給爾止可賣白支其處乎止鹿乃淵號支
從_二其矢田宮_一幸行支次家田田上宮遷幸支其宮坐時度
會大幡主命皇太神乃朝御氣夕御氣處乃御田定奉支
宇遲田田上爾在名_二拔穗田_一是也從_二其幸_一行奈尾之
根宮一座給于_レ時出雲神子吉雲建子命

一名伊勢郡產
神一名櫛玉命

其處爾佐々牟江社定給支從其處幸行間爾無風浪志海鹽大與度爾與度豆御船令幸行其時倭姬命悅給其濱爾大與社定給支

廿五年丙辰春三月從飯野高宮遷幸于伊蘇宮令坐支

于時倭姬命南山未見給天志御宮處寬爾奉戴天照太

神天宇久留土天志御船爾乘奉天過狹田坂手天寒河

爾御船留天過相鹿瀨瀧原和比野久求園相目豆野積

良山澤路天向田天仁志奉于御船天小濱天志御水御饗

奉天二見濱見津爾御船留天山末河內見廻給豆鹿乃見

與家田田上宮仁遷幸支爾時大田命參豆五十鈴之川

上宮處仁禮祭倍志申利勢即彼處爾往給天甚喜給

日本書紀曰活目入彥五十狹茅天皇垂仁天皇廿五年三月

朔丙申離天照太神於豐稻姬命託于倭姬命爰

倭姬命求鎮坐太神之處而詣菟田筱幡佐佐

更還之入近江國東廻美濃到伊勢國時天照太

神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國

也傍國可伶國也欲居是國故隨大神教其祠立

於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則

天照太神始自天降之處也一云天皇以倭姬命

爲御杖貢奉於天照太神是以倭姬命以天照太

神鎮坐於磯城嚴櫃之本而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷于伊勢國渡遇宮

世記曰從飯野高宮遷幸于伊蘇宮令坐支時

大若子命問給久汝此國名何白久百船度會國玉掇伊

蘇國止白天御鹽濱并林定奉支此宮坐天供奉御水在所

波御井國止號支于時倭姬命詔久南山未見給波吉宮

處可有見由詔天御宮處寬爾大若子命遣支倭姬命波

皇太神平奉戴天小船乘給御船仁雜神財并忌楯梓等

平留置天從小河幸行支從其河天志御船後立支爾時驛

使等御船宇久留土白支其處乎宇久留止號支從其處

幸行速河彥詣相支汝國名何問給白久畔廣之狹田國

止白豆佐々上神田進支其處速河狹田社定給支從其

處幸行高水神參相支汝國名何問給白久岳高田深坂

手國止白豆田上御田進支其處坂手社定給支從其處

幸行河盡支其河之水寒有支則寒河止號支其處御船留

給豆即其處仁御船神社定給支從其處幸行時御笠服

給支其處平加佐伎止號支御河瀨渡給止爲爾鹿完流相

支是惡詔天不度坐其瀨乎相鹿瀨號支從其處指河

上豆幸行波砂流速瀨有支爾時眞奈胡神參相度奉支

其瀨眞奈胡御瀨號豆御瀨社定給支從其處幸行美

詔遣下給支子_レ時其神乎阿射加乃山嶺社作定而其神乎夜波志志都米上奉天勞祀支_レ余時宇禮志止詔天其處名天字禮志止號然度坐時爾阿佐加加多爾多氣連等祖宇加乃日子之子吉志比女次吉彥二人參相支此間給久汝等我阿佐留物者奈余曾止間給支答白久皇太神之御贊之林奉上伎佐宇阿佐留止白支子_レ時白事恐止詔而其伎佐乎令_レ進_二太神御贊_一而佐々牟乃木枝乎割取而生比伎宇氣比伎良世給時爾其火伎理出而采女忍比賣我作之天平瓮八十枚持而伊波比戶爾仕奉支爾時吉志比女地口御田并御麻園進

註曰一書曰天照太神自_二美濃國_一廻到_二安濃藤方片樋宮_一坐子_レ時安佐賀山有_二荒神_一百往人者亡_二五十人_一冊往者亡_二廿人_一因_レ茲倭姬命不_レ入_二坐度會郡宇遲村五十鈴川上之宮_一奉_レ齋_二藤方片樋宮_一子_レ時安佐賀荒惡神爲行乎倭姬命遣_二中臣大鹿島命伊勢大若子命忌部玉櫛命_一奏_二聞天皇_一天皇詔其國者大若子命先祖天日別命所_レ平山也大若子命祭_二平其神_一令_レ倭姬命奉_中入五十鈴宮上即賜_二種々幣_一而返_二遣大若子命_一祭_二其神_一已保平立_{此イ}即社_二於安佐駕以祭者矣而後_一倭姬命即得_二入坐_一但於_二其渡物_一者敢不_二

返取_一

二十二年_{癸丑}冬十二月廿八日遷_二飯野高宮_一奉_レ齋編_二懸障院形屋_一四箇年

世記曰子_レ時飯高縣造祖乙加豆知命爾汝國名何問賜白久意須比飯高國止白而進_二神田并神戶_一倭姬命飯高_止白事貴止悅賜支次佐奈縣造祖彌志呂宿禰命爾汝國名何問賜白久許母理國志多備之國真久佐牟毛久佐向國白豆進_二神田神戶_一又大若子命爾汝國名何問賜白久百張蘇我乃國千五百枝刺竹田之國止白支其處爾御櫛落給支其處乎櫛田止號給櫛田社定賜支從_二其處_一豆_志御船乘給豆幸行其河後江爾到坐子_レ時魚自然集出天御船參乘支爾時倭姬命見悅給豆其處爾魚見社定給支從_レ其幸行奈留御攪奉神參相支汝國名何問給白久白濱真名胡國申其所真名胡神社定賜支又乙若子命以_二麻神葛靈等_一進_二倭姬命_一而令_二祓解_一及_二陪從之人_一留_二弓劍兵_一共入_二座飯野高丘宮_一遂得_レ向_二五十鈴宮_一自爾以來天皇之太子齋宮如及_二驛使國司人等_一到_二此等川_一爲_二解除_一止_二鈴聲_一之此其儀也從_レ其幸行豆佐々牟江御船泊給比其處爾佐々牟江宮造令_レ坐給支大若子命白鳥之眞野國止國保伎白支

世記曰于_レ時坂田君等進_二地口御田_一

十年_{辛丑}秋八月一日遷_二幸于美濃國伊久良河宮_一御船形

上案_二樓臺_一神靈坐四年奉_レ齋

次遷_二于尾張國中嶋宮_一聳_レ雲垂_二錦蓋_一現_二神靈_一坐

兩鹿守護之_{香島香取兩社也}三箇月奉_レ齋

世記曰倭姬命國保伎給于_レ時美濃國造等進_二舍人市

主地口御田_一并御船一隻進_二支同美濃縣主角鏑之作

而進_二御船二隻_一捧船者天之曾己立抱船者天之御都

張止白而進_二支采女忍比賣又進_二地口御田_一故忍比賣

之子繼天平瓮八十枚作進

十四_{乙巳}年秋九月一日遷_二幸于伊勢國桑名野代宮_一棕樹

三株中現_二神靈_一坐四年奉_レ齋

伊勢國風土記曰天日別命奉_レ勅入_レ東數百里其邑有

神名_二伊勢津彥_一天日別命問曰汝國獻_二於天孫_一哉

答曰吾竟_二此國_一居住日久不敢聞_二命矣天日別命發

兵欲_レ戮_二其神_一于_レ時畏伏啓云吾國悉獻_二天孫_一吾

不敢居_二矣天日別命令_レ問曰汝之去時何以爲_レ驗啓

云以_二今夜_一起_二八風_一吹_二海水_一乘_二波浪_一將_二東入_一此

則吾之却由也天日別命整_レ兵窺_二之比_一及_二中夜_一大

風四起扇_二舉波瀾_一光曜如_レ日陸海共朗遂乘_レ海而去

也東焉故古語曰_二神風伊勢常世浪寄國_一者蓋此謂之

次鈴鹿奈具波志忍山_爾神宮造奉_二天遷_一神靈_一給六箇

月奉_レ齋

世記曰于_レ時國造大若子命一名大幡主命參相御共仕奉

國內風俗令_レ白_二支又國造建日方命參相_一支汝國名何問

給白久神風伊勢國止_二白進_一舍人弟伊爾方命又地口

御田并神戶_一又大若子命進_二舍人弟乙若子命_一次川

俣縣造祖大比古命參相_二支汝國名何問_一賜白久味酒鈴

鹿國奈具波志忍山_{今安濃}白_二支然神宮奉_一造奉_二令_一幸行_二又神

田并神戶進_二支次阿野縣造祖具桑枝大命_一爾汝國名何

問賜白久草陰阿野國白豆進_二神田并神戶_一次市師縣

造祖建些古命_爾汝國名何問賜白久_{シユキ}宋往阿佐賀國白

進_二神戶并御田_一

十八年_{己酉}夏四月十六日遷_二坐于阿佐加藤方片樋宮_一葛

藤卷纏中舛形上現_二神靈_一坐四年奉_レ齋

世記曰是時爾阿佐加乃彌子_爾坐而伊豆速布留神百

往人者五十人取死冊往人廿人取死如_レ此伊豆速布

留時爾倭比賣命於_二朝廷_一大若子_平進上而彼神事_平

申之者種々大御手津物彼神進屋波志志豆目平奉止

五十八年^{辛巳}遷^二倭彌和乃御室嶺上宮^一留^二於杜中圓輪鏡^一坐二年奉^レ齋

世記曰是時豐鋤入姬命吾日足止白支爾時姪倭比賣命事依奉利御杖代止定^レ豆從^レ此倭姬命奉^レ戴^二天照太神^一而行幸^レ相殿神天兒屋命太玉命御戸開闢神天手力男神^レ檮幡姬命御門神豐石繼櫛石繼命等五部伴神相副奉^レ仕矣儀式帳曰內宮美和乃御諸原爾造^二齋宮^一出奉^二天齋始奉支爾時倭姬內親王太神乎頂奉^レ豆願給國求奉時爾從^二美和乃御諸宮^一發^レ豆令^レ出坐支余時御送驛使阿倍武淳川別命和珥彥國菴命中臣大鹿嶋命十根命大伴武日命合五柱命等爲^レ使^レ豆令^レ入坐支彼時宇太乃阿貴宮坐

六十年^{癸未}二月十五日遷^二于大和宇多秋志野宮^一白座上居^二靈鏡^一四年奉^レ齋

世記曰于時倭國造進^二采女香刀比賣地口御田^一倭姬命乃御夢爾高天之原坐而吾見之國仁吾乎坐奉止悟教給^レ岐從^レ此東向乞字氣比豆給久我思刺豆往處吉有奈良波未^レ嫁^レ夫童女相止祈禱幸行爾時佐々波多我門爾童女參相則問給久汝誰答曰奴吾波天見通命孫爾八佐加支刀部^一呂比命^一兒宇太乃大采禰奈止白支亦詔曰御共從仕奉哉答曰仕奉即御共從奉仕件童女於

大物忌止定給比豆天磐戶乃鑰預賜利豆無^二黑心^一志豆以^二丹心^一天清潔久齋慎美在物於不^レ移^レ右須右物於不^レ移^レ左志豆左^レ左右^レ右左返右廻事毛萬事違事奈久太神爾奉^レ仕元^レ元本^レ本故也又弟大荒命同奉^レ仕從^二宇多秋宮^一幸行而佐々波多宮坐焉

六十四年^{丁亥}霜月廿八日遷^二幸伊賀國隱市守宮^一雲霞中靈鏡坐二年奉^レ齋

六十六年^{己丑}冬十二月一日遷^二幸于同國穴穗宮^一稻倉上居^二靈鏡^一四年奉^レ齋

世記曰爾時伊賀國造進^二竈山葛山戶并地口御田細鱗魚取淵梁作瀬等^一朝御氣夕御氣供進矣

活目入彥五十狹茅天皇^一繼向珠城宮

即位元年^{癸巳}夏四月四日遷^二于伊賀敢都美惠宮^一八重雲簀圓滿靈鏡坐二年奉^レ齋

四年^{乙未}夏六月晦遷^二淡海甲可日雲宮^一雲成^二屏風^一其上亦雲帶^二靈鏡^一坐四年奉^レ齋

世記曰淡海國造進^二地口御田^一八年^{己秋}七月七日遷^二于同國坂田宮^一千木高廣敷板上現^二靈鏡^一坐二年奉^レ齋

治天下三十一萬八千五百四十二歲陵在日向國愛山也
彥火々出見尊女

治天下六十三萬七千八百九十二歲陵在日向國高屋山

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊男

治天下八十三萬六千四十二歲陵在日向國

此三柱尊共三八重雲皆吉里中坐也

神日本磐余彥天皇大倭國橿原宮號神武天皇始

元年甲寅歲多十月發日向日本國也東征是也

卽位八年建都橿原經營帝宅四方國乎安國止

平久知食須天津璽乃劔鏡乎捧持賜天稱辭竟治天下

七十六年

倭姬命世記曰凡神倭伊波禮彥天皇已下稚日本根子彥

大日々天皇以往九帝歷年六百卅餘歲當此時帝與

神其際未遠同殿共床以此爲常故神物官物亦

未分別焉

麗氣記曰故神物官物未分別然靈應冥感稍滂流仍

奉崇三種神光神靈者本有常住佛種也大空三昧

表文法界躰身量也

御間城入彥五十瓊殖天皇大倭國磯城瑞籬宮

卽位六年己丑秋九月倭國笠縫邑立磯城神籬奉遷天

照太神及草薙劔令皇女豐鋤入姬奉齋以往雖同

殿共床漸畏神靈共住不安志天則與神籬天後石

凝姥神裔天目一箇裔二氏更鑄造鏡劔以爲護身璽焉

踐祚目所獻之神靈鏡劔也

世記曰奉遷天照太神及草薙劔令皇女豐鋤入姬

命奉齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌舞然後隨

大神之教國々處々爾大宮處乎求給倍利

三十九年壬戌三月三日遷幸但波之吉佐宮雲聳現榎

下坐秋八月十八日作瑞籬積四年奉齋矣

私記今歲典于介神天降合明齋德一所雙坐事委

旨見于外宮御遷座篇也

四十三年丙寅九月九日倭國伊豆加志本宮現劔坐

八年奉齋

五十一年甲戌四月八日遷木乃國奈久佐濱宮河底岩上

余瑠璃鉢坐三年奉齋

世記曰于時紀伊國造進舍人紀麻呂良地口御田

五十四年丁丑遷吉備國名方濱宮神崎岩上殘水御壺坐

四年奉齋

世記曰于時吉備國造進采女吉備都比賣又地口御

田

立於浮渚在之平地

麗氣曰凡天照太神天地大冥之時現日月星辰像一照虛空之代神足履地而興于天瓊戈於豐葦原中國上去下來而鑒六合治天原耀天絨皇孫杵獨天人壽八萬歲時筑紫日向高千穗之峯天降坐以降迄至彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊終年治百七十九萬二千四百七十六歲也

御鎮座本紀曰天地初發之時大海之中有一物浮形如葦牙一其中神人化生名號天御中主神故號豐葦原中國亦因以曰豐受皇太神也與天照大日靈尊舉此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財而授賜皇孫爲天璽視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當與天壤無窮宣焉皇孫天津彥火瓊杵尊伴神天兒屋命以天津諄辭之太祝詞令掌解除太玉命捧大幣天村雲命取太玉串奉仕天神地祇前後爾相從互關天關岐披雲路令驅仙蹕比天之八重雲乎伊頭之千別爾千別天筑紫日向高千穗穗觸之峯爾天降到居焉經營宮室而恢弘大業光臨六合司牧人神能世闡玄功時流至德以鎮元々上則答乾靈授國之德下則崇神祇

養正之心撥灾反正德伴覆燾道協造化是以普天人民稟氣懷靈何非得處故與天地而無窮將金石而不朽焉實人民自然之德合古便今也

倭姬命世記曰于時以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財且授賜皇孫永爲天璽之視此寶鏡止當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡志寶祚之隆當與天壤無窮宣比即天津彥火瓊杵尊止伴神天兒屋命掌解除宣久謹請再拜諸神等各念倍此時天地清淨止諸法如影形像奈清淨無假穢志取說不可得須皆從因生業止諄辭勢太玉命捧青和幣天牟羅雲命取太玉串天二十二神前後仁相副從天各關天關岐披露路且驅仙蹕比天之八重雲乎伊頭之千別爾千別天筑紫日向高千穗穗觸之峯爾天降到給比且治天下卅一萬八千五百卅三年是時天地未遠故以天柱舉於天上矣

神天上下地麗氣記曰

天照皇太神女

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊男

此二神一向主地底無二無別也

天津彥々火瓊々杵尊男

孫杵獨王也尊以爲然曰中國初定萬物有靈所以草樹稱宮魔神競扇今以杵就之爲中國王賜玄龍車追真床之緣錦衾八尺流火鏡赤玉寶鈴薙草八握劍而壽之曰嗟呼汝杵敬承吾壽乎抱流鈴以御无穷无念爾祖吾在鏡中矣

爾時御祖天王如來天御中主神極天高皇產靈皇神詔授天璽寶十種於杵獨大王給矣

羸都鏡一面邊都鏡一面八握劍一柄生玉一死玉一足玉一道反玉一蛇比禮一枚蜂比禮一枚品物比禮一枚

天祖敕詔曰若有痛處者令茲十寶謂一二三四五六七八九十而布瑠部由良々々止布瑠部如此之者死人反生是則所謂布瑠之言本也

天照皇太神持寶鏡而祝之宣久吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當

與天壤无窮矣則授八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物永爲天璽矛玉自從矣盟言如八咫瓊之勾以曲妙治天下且如白銅鏡以照兩眼者看行山川海原乃提是靈劍平天下惡事矣以兒屋命爲掌禱大將軍神王太玉命爲掌幣神天鈿女爲納侏神石凝姥爲納鏡神玉屋爲納玉神乃使陪

皇孫而降之是大己貴歸化上天皇帝以禮還之是寶上天之祖含靈之本故追尊號曰高皇產靈无上極天太祖尊皇帝矣

日本書紀曰于時高皇產靈尊以真床追衾覆於皇孫天津彥々火瓊々杵尊使降之皇孫乃離天磐座天磐座此座此座此座以鐵矩羅且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣既而皇孫遊行之狀者

一書曰天照太神乃賜天津彥々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物又以中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命猿女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤无窮者矣

一書曰高皇產靈尊以真床覆衾裹天津彥國光彥火瓊々杵尊則引開天磐戶排分天八重雲以奉降之子時大伴連遠祖天忍日命帥來目部遠祖天穗津大來目背負天磐鞞臂著稜威高鞞手捉天梶弓天羽々矢及副持八目鳴鏑又帶頭槌劍而立天孫之前遊行降來到於日向襲之高千穗穗日二上峯天浮橋而

類聚神祇本源卷五

三十二神事

內宮遷座篇

舊事本紀曰天照太神詔曰豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者吾御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊可_レ知之國言寄詔賜而天降之時高皇產靈尊兒思兼神妹萬幡豐秋津師姬栲幡千千姬命爲_レ妃誕_二生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊_一之時正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏曰僕欲_二將降_一裝束之間所生之兒以_レ此可_レ降矣詔而許之天神御祖詔授_二天璽瑞寶十種_一謂羸都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死返玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖教詔曰若有_二痛處_一者令_二茲十寶_一謂_二一二三四五六七八九十_一而布瑠部由良由良止布瑠部如是爲_レ之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣高皇產靈尊勅曰若有_二葦原中國之敵拒_二神人而待戰者_一能爲_二方便_一誘欺抗拒而合_二治平_一令_二三十二人_一並爲_二防衛_一天降供奉矣麗氣曰

天香鼻山命 天鈿賣語命 天太玉命

天兒屋命 天櫛玉命 天道根命

天神玉命 天榎野命 天糠戶命

天明玉命 天村雲命 天皆男命

天御蔭命 天造日女命 天世手命

天斗麻彌命 天背斗女命 天玉櫛彥命

天湯津彥命 天神魂命 天三降命

天日神命 天乳速命 天八板彥命

天活玉命 天小彥根命 天湯彥命

天表春命 天下春命 天月神命

天伊佐布魂命 天伊岐志邇保命

神皇系圖曰夫水氣者清淨海水即本祖元神性也陽氣者濁世生類不清實執也故清淨神氣祭則人魂陽氣鎮也故有_二鎮魂_一也陽者氣也亦光明也故名曰_レ魂凡一氣化現名號_二神靈_一是生化魂也故陽氣散亡爲_レ死即佛本居也善哉々々皇天壽曰而布留部由良由良止布留部云々惟是皇天無極大神咒也

府錄曰爾時八十諸神達曰中國初業天下無_レ主非_レ應_レ命者不_レ能_レ治_レ之能王_レ之者其在_二誰神_一乎諸神議曰皇

伊勢太神宮祕文曰神第二天狹霧國狹變成名天御中主尊

國常立尊高天原之日小宮居此天人者無有欲性但

有三色欲○欲一本故名三色界天也次天御中主尊開宗大元國

常立尊實法常住靈神表化八子生天地人民而下々來

々名之號大日靈貴止由氣皇神是也我國宗廟

無色界非々想天飛空自在天

豐受皇太神繼文曰天照豐受皇太神者非々想天能斷智

體下々來々於欲界他化自在天王宮中爲大毘盧遮

那佛於大日本國是名大日靈貴豐受皇太神是也

不來不去神本覺不生元神也一切衆生慈父常住不變妙

理也豎越方便門橫成覺智

伊勢太神宮祕文曰夫以天地之起在水氣之用其清陽

爲天其重濁爲地從上高天海至下根底而同時成

立也爾時水氣高天海初出之故謂之名天讓日國禪

月天狹霧國狹霧尊亦元氣諸神利性亦靈氣體氣也是无有身形但有

心性故曰無色界高天原最上也

太宗祕府曰威音大通智勝日月燈明等過去七佛以前之

往過去之佛從前神名之天讓日國禪月皇太神故或

爲大千界主一切衆生靈父也

神皇系圖曰天御中主尊所露名天御水雲神任水

德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是也亦號大葦

原中津國主豐受皇神也凡以一心分大千

瑞相仙宮祕文曰授以天上事日神留宅於日小宮遍

照十方而令利衆生能除諸闇焉大方神是天然

不動之理卽法性身也謂之名實相也未來世一切衆

生發淨業正因爲歸大乘故顯本妙之象曉了卽心

是佛或欲示無相之觀解令忘有相之權教也慧日

照世間除生死雲是威神之恩德也方便之利益也不

可思議々々々々正念生化之本妙則在皇天也皇則大

空無相之名號天地清淨之妙理是法身之儀也故一氣玄

玄之元神名之號皇神也故萬物之化大道變成以用

爲心意一一歸自位也故真如界裏堪然常住也當

知伊勢內外兩宮則大千世界本主八百萬神之最貴也

太宗祕府曰天宮與靈山分一線路互爲佛神之賓

主令盡天地人居無爲無事大閑之場起生出死

名之清淨是大悲用也

類聚神祇本源

(和學詣識所本典書)
正平八年己正月三日書寫畢

類聚神祇本源卷四

天宮篇

欲界

第六天 他化自在天

大和寶山記曰伊弉諾伊弉冊尊此二柱尊者第六天大自在天王坐爾時任皇天宣受天瓊牙以咒術力加持山川草木能現種種未嘗有事往昔大悲願故而作日神月神照四天下矣

神皇實錄曰

伊弉諾尊天降陽神名日子也亦稱大自在天子

妹伊弉冊尊天降陰神名日子也亦稱大自在天子

太田命傳曰神記

伊弉諾尊亦名伊舍那天

伊弉冊尊亦名伊舍那天妃

或曰伊弉那天者智摩醯首羅化身

神皇系圖曰

伊弉諾尊則東方善持藏愛護善通由賀神梵所名之伊

舍那天也

伊弉冊則南方妙法藏愛鬘行識神亦名之伊舍那后也續別祕文曰天照皇太神者爲鎮第六天魔王在於欲界他化自在天宮說種種色心不二法超越諸天善神色界

初禪梵衆天 梵輔天 大梵天

神皇實錄曰天之御中主尊天地開闢之始含精氣而應化之元神故初禪梵宮居

中臣稜訓解曰高天原色界初禪 梵衆天也 亦三光天南嶺浮樹下高庫藏是也

東仙宮祕文曰爰地神五代未豐受太神從初禪飛空而下々々以現種種形度衆生與日神一所雙坐也蓋如涅槃經所說思之思之

二禪光天 無量光天 極光天 亦光普天

伊勢太神宮祕文曰伊勢二所兩宮則周遍法界之妙理本覺本初之元神也所狀奉名大日遍照尊故名照皇天一起樹于寶基於天津磐境謂三光天居處也

四禪色究竟天 亦名有頂天

兩宮降臨次第記曰色界頂色究竟天二天王大梵天王曲形大空無相妙體是曰常住慈悲神王亦名本有常住神亦名無上極尊已上名本覺真如神

津國王也

於_下所_レ載_二于右_一之天地麗氣同府錄等_上者雖_レ爲_二官書內_一與_レ所_レ述_二于釋門_一其義相同之間以_レ次_一所鈔_レ之

大日靈貴

神寶日出祕府曰日翻曰毗盧云云大者摩訶也所謂摩訶毗盧靈貴歟

述那

(此奥書井上翁藏本)
寬文十二_{壬子}年三月廿日藤光吉以本而書寫之畢

權禰宜度會神主

(元教部省藏本奥書)

于時應安第五曆三春下旬候雇_二門第他手_一校隱士自力而已雖_レ學_二梵文_一寧捨_二和子設_一信_二佛說_一盡仰_二神語_一矣

沙門 信 瑜

類聚神祇本源卷三

府錄曰國常立尊亦名常住毘尊無上尊所化神惟是三世常住妙法身天神地祇本妙元神也以一身分七代一形體顯言爲陰爲陽化生生日神月神一

吾聞神是天然不動之理即法性身也通是元壅不思議慧即報身也力是幹用自在即應身也夫神一之妙孕氣含精至虛至一應群變而常寂生萬物而無心不爲事

凡一切有情有形有心爲形陰爲心陽雖爲兩陰陽身色心色心不二故從色法濯心法從心法濯識法陰陽一故化有形有心心宿骨主人主亦木木大圓鏡智三昧耶形亦大圓鏡智

能斷智體亦毗盧本身亦法身三昧耶形亦獨古獨即心御柱心御柱即一切衆生心量也亦大日本國異名亦國璽境柱亦名國心柱亦國主主即人人神主

謂非心不明故以心爲

主神人神神即生生即凡夫凡夫即五穀性五穀性即心上妙法蓮華是開時如覺大無主時始天乳死時終地乳故迷悟在心云云

釋曰一心有二轉一者向上隨順二者向下隨順向

上隨順者從信乃至金剛能爲善提果隨順方便故始覺成道成佛外述非真正覺向隨順者自性淨妙藏乃至第一念

能爲邪邪地隨順方便故實無覺無或者本覺本初元神也元神者自而本分無心作也

天照皇太神下轉神變向隨順顯照尊天珠向津媛命幡神種出神是也

御氣都神與三戸棄光天女天王如來上化下化名但上在時大梵天王功德無上下化時戸棄光天女功德無等八洲降化現大日靈貴天照皇太神念力熾盛端嚴美麗形也

下化有想文義云伊弉諾伊弉冊尊持左手金鏡陰生持右手銀鏡陽生名曰日天子月天子是一切衆生俱生眼目坐也故一切火氣變成日一切水氣變成月三界建立日月是也子時以羸都鏡邊都鏡爲國璽靈而日神月神自送于天宮而照六合給矣正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

天照太神捧八坂瓊曲玉於九宮化生神也是名火珠所成神也常懷腋下化生故名腋子也

天津彥々火瓊々杵尊亦名杵獨王亦名示法神亦名相殿神亦名愛護神亦名左右神亦名皇孫尊

天照太神太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊娶天皇

天御中主神太子高皇產靈皇帝女栲幡豐秋津姬命生天津彥彦火瓊々杵尊

謂高皇產靈尊者極天之祖皇帝也能令造化表於無形元尊自謀立天津彥々火瓊々杵尊爲葦原中

火珠者日珠日珠者玉玉者卽字卽字者如意寶珠寶珠者蓮華理々者胎藏界毗盧舍那遍照如來卽字本不生不可得義萬法皆空無自性門是也過去花開王佛是也三十三天中皆是名大梵天王是名光明大梵天王名天御中主尊亦名天照皇大神他化自在天化翳大毗盧舍那如來是名摩醯首羅天王亦名大自在天王昔爲威光菩薩住日宮殿阿修羅王難今居日域成天照太神增金輪聖王福三千大千世界所有有情初於善男善女醜陋頑愚盲聾瘡癰四重八重七逆越誓謗方等經一閻提等无量重罪現在生中頻斷無明皆是神誓大乘善根成就形相有頂天上及無間極亡塵浮塵性相常住無邊異相皆是神跡皆是本覺皆是佛身永離生死常利衆生无有間斷十方如來同入三昧三世諸佛皆與授記自受法樂自在神力兩宮修行功德深甚本來自性本妙形像念念不動卽入阿字若觀一念定勝三世入无量定修習妙觀若有衆聞此功德不至信者當知是人定墮无間能摧佛種諸佛无救何況餘人

官書天地麗氣曰天神七葉者過去七佛轉星天七星地神五葉者現在四佛加增舍那爲五佛化生地五行神供奉

十六葉大神大小尊神賢劫十六尊也云云

官書天地麗氣府錄曰

國常立尊亦名常住毗尊也無上極尊所化神云云

惟是三世常住妙法身天神地祇本妙元神也以一身

分七代形體顯言爲陰爲陽化生日神月神說法

利生不可思議不可思議

國狹立尊毗盧舍那國狹趙尊

豐斟淳尊盧舍那佛豐香節野尊

朱注云已上三身卽一妙神也

泥土煮尊是名勾留尊也沙土煮尊名寶藏摩尼尊也

大戸之道尊名勾那舍也 大苦邊尊名勾那舍牟尼如來

面足尊名毗婁尸佛也 惶根尊名毗棄羅如來

朱注云已上天地分三陰陽化生死迷悟祖元也

伊弉諾尊亦名天鼓音電佛 伊弉冊尊亦名開敷花王佛

伊弉諾尊是東方善持藏愛護善通本地阿閼過去五十

三佛音王是尊也

伊弉冊尊是南方妙法藏愛鬘行織神五十三佛內神

○神一本氣佛是也

大日靈神元祖大毗盧遮那如來常住三昧修行三界建

立尊座也

此名日神也日則大毗盧遮那如來智惠日光之應變也
梵音毗盧遮那是日之別名即除暗遍照之義也

日者天子常住之日光與世間之日光於法性體
有相似義故名大日靈貴天照太神也以八尺流
大鏡祕崇伊勢太神之正體是也

傳曰劫初在三神聖一名常住慈悲神主法語曰尸棄大梵天王
神語名天御中主尊

大梵天宮居焉為衆生等以廣大慈悲誠心故作百
億日月及百億梵天而度無量群品故為諸子天之
大宗三千大千世界之本主也亦曰五星者經津主磐筒男

神等應變也云
伊勢太神宮瑞柏鎮守仙宮祕文曰圓仁慈覺大師撰大八洲中
神風伊勢國天照座二所乃皇太神者是天地開闢之元神

故一大三千界主座也
尸棄大梵天皇此云天御中主神亦名曰伊勢
國天照座豐受皇太神宮是也

光朋大梵天皇此云大日靈貴亦名號伊勢
勢國天照座皇太神宮是也

天地初發之時於高天原成神名天御中主神也記曰大
海初出之故天御義利舉之八重雲以天於坐而成神天御
中主神亦名天讓日國禪月天狹霧國狹霧尊也故天地與
俱生神是也

亦曰星者日氣所生故其字日與生為星也五星者經

津主磐筒男神等應變也
降臨次第記曰

國常立尊漢言大毗盧遮那如來
國狹槌尊漢言毗盧舍那佛
國豐斟尊漢言盧舍那佛

湍土煮尊漢言勾留尊佛

大戸之道尊漢言勾那舍牟尼如來

吾屋惶根尊漢言毗婆尸佛

伊弉諾尊漢言天鼓音電佛

尸棄大梵天王漢言水珠所成王

水珠者月珠月珠者玉玉者久字久字者金剛界大日根

本大毗盧遮那如來是也天上大梵天王虛空無垢大光

明遍照如來過去威音王佛是也三十三天中皆是大梵

天王是名尸棄大梵天王是名天御中主尊亦名豐受皇

太神

湍土瓊本尊漢言寶藏摩尼佛

大苦邊尊漢言龍尊王佛

吾屋惶根本尊漢言毗婆羅如來

伊弉冊尊漢言開敷花王佛

光明大梵天王漢言火珠所成王

光同其塵現五濁國隨順群生扶持萬物使終其性命誰撓其神豈子其慮乎

「日神謂大日靈貴此云於保比屢咤能武智靈貴」
「神力丁反亦曰天照太神亦號天照大日靈貴」

伊弉諾尊曰吾欲生御宙之珍子乃以左手持

白銅鏡則有化出之神是謂大日靈貴神代上

曰伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰吾已生大八洲國及

山川草木何不生下天下之主者歟於是其生日

神號大日靈貴此子光華明彩照徹於六合之內

故二神喜曰吾息雖多未若有若此靈異之兒不

宜久留此國自當早送子天而授以天上之事

是時天地相去未遠故以天柱舉於天上也

豐受皇太神御鎮坐本紀曰天地初發之時大海之中有

一物浮形如葦牙其中神人化生名號天御中主神

故號豐葦原中國亦因以曰豐受皇太神也與天照

大日靈貴尊與此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三

種之神財而授賜皇孫命為天璽

神風伊勢寶基珍圖天口事書曰天地開闢以降神寶日出

之代高天原神留坐天御中主神語曰天議曰國禪月皇神也天照

親神魯伎天照太神天神語曰天日靈貴照皇天也是水火二靈也

命乎天津高御座爾座且天津瓊乃劍鏡乎捧持賜言言宣

古語天神皇我宇都大像御子皇御孫之尊若天津瓊玉戈一曲妙爾天津高御座坐且天津日嗣乎萬千秋乃長秋神嘗此

大八洲乃豐葦原瑞穗之國古語云瑞穗安國古語浦安平久所知

食言寄奉賜此以天津御量神語曰久須志事問志磐根本

立草乃垣葉母言止且天降賜

釋家

大和葛城寶山記曰

天神上音

天御中主尊無宗無上而獨能化故曰天帝之神亦號天宗廟到天

下則以三身即一無相寶鏡崇神體祭伊勢止由氣

也

極天祖神

高皇產靈皇帝此名上常是高皇產靈尊者極天

大日本洲造化神

伊弉諾尊伊弉冊尊

此二柱尊者第六天宮主大自在天王坐爾時任皇天

宣受天瓊戈以兜術力加持山川草木能現三種

種未曾有事往昔大悲願故而作日神月神照四天

下矣昔於中天一度衆生今所

地神六合大宗

大日靈貴尊

大御神也掛畏以天津神策用抱一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常文圖悟八子給修應化身照神道可也

大田命傳曰豐受皇太神一座

天地開闢初於高天原成神也一記曰伊弉諾伊弉冊尊

古語曰伊舍那天伊舍那天姬

先生大八洲次生海神次生河神次

生風神等以降雖經一萬餘歲時代相繼義也水德未顯天

天下飢餓于時二柱神天之御量事平以天瑞八坂瓊之曲

玉乎捧九宮所化神名號止由氣皇太神支千變萬化

受一水之德生續命之術故名曰御饌都神也古語

曰大海之中有一物浮形如葦牙其中神人化生號

天御中主神故號豐葦原中國亦因以曰止由氣皇

神也故天地開闢之初神寶日出之時御饌都神天御中

主尊與大日靈貴天照太神二柱御太神豫結幽契永

治天下免或爲日爲月永懸而不落或爲神爲皇

常以無窮矣光華明彩照徹於六合之內矣

神祇譜傳圖記曰

伊弉諾尊 伊弉冊尊

大日本豐秋津洲

海神

水戶神

速秋津比賣神

風神

山神

野神

木神

豐受皇太神

亦名倉稻魂神亦天御中主神

亦曰御饌都神

天下飢餓于時伊弉諾伊弉冊二柱尊以瑞八坂瓊

曲玉捧九宮所化神名號御饌都神亦名豐宇

介皇太神也是質性明麗故照臨天地利萬物天

文地利是時明千變萬化此時存乃依清淨之願力

垂愛慈慈悲現化如之誤歟護之姿同和光之塵天

機普張與天地齊德元氣流行而與陰陽合明

鬼神同吉凶或現三光天子耀德用於万方

或示八大龍王灑恩波於四海有請必致有所

必應而快一期之榮樂而施二世之利益耳或書曰伊弉諾伊弉冊以天鏡捧九宮所化神名號夫天照太神與豐受

太神則無上之宗神而尊無與二故異於天下諸

社是則天地精明之本源也無相無爲之大祖也故

不起佛見法見以無相鏡假表妙體也和其

栲幡豐秋津姬命皇孫尊性也
高貴女神

思金命智性靈坐
相殿姬神天手力雄神石戶開神
坐相殿神

神皇產靈神八咫鳥并伊勢朝臣祖神也

津速產靈神中臣朝臣上祖

件三柱靈神者天御中主所化神名爲子父子道今

時露現矣

天鏡尊獨化神天神水鏡神三坐是神
鏡始元三光面目明白此時也(私記神代三面御鏡是也)

天萬尊獨化神天鏡尊次生也
伊弉諾魂明座

沫蕩尊獨化神天萬尊次生也
伊弉册靈明座

件三柱神者天御中主神出現之時三魂鬼荒魂坐續

命神坐云亦名稱三諦明神也

耦生天神一代天神第七代陰陽
定位萬物形也

伊弉諾尊天降陽神名日子也
亦稱大自在天子

妹伊弉册尊天降陰神名日子也
亦稱大自在天子

從國常立尊一至惶根尊天神六代之間則有名字

未現尊形五位神座其後轉變而合陰陽有男女

形應化相生而專心珠神以清淨爲先神熊與

焉伊弉諾伊弉册二尊承天御中主神詔即以天瓊

戈一指立於磯馭盧島之上以爲國中之天柱則化

豎八尋殿其住生大八洲次大小島合拾四箇島其

後處々小島皆是水沫潮凝而成者也伊弉諾伊弉册二尊俱議曰吾已生大八洲及山川草木何不_レ生天下之主者一歟

先生日神號曰大日靈貴亦云天照太神亦曰

大日靈尊此子光華明彩明徹於六合之內故二神

喜曰吾息雖多未_レ有如此異靈之兒不宜久留

此國自當早送于天而授以天上之事是時天地

相去未遠故以天柱舉於天上矣

地神五代番(番一本作播)地五行傳神位坐道德極而生化德表也

天照太神奉舉天上故曰大日靈尊也

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊

私云自八坂瓊曲玉出化神也曲玉者火珠也

天津彦々火瓊々杵尊大八洲主坐也
治天下廿一萬八千五百廿二年

私云皇御孫以或十種神財或三種天璽率三十二

神降坐

彦火々出見尊天津彦火瓊々杵尊第二子也
治天下六十五萬七千八百九十二年

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊彦火々出見尊太子也
治天下八十三萬六千三年

社家

寶基本紀曰天地開闢基在大光明其中有精氣名

曰神亦曰心爾時爲萬物應化神假名號廣大慈悲

坐是諸天降靈之本致一切國王之大宗也德被百王惠齊四海一歷代帝王崇尊祖萬方人夫敬神祇故世質時素無爲而治不肅而化云爾

大元謂無名之名無狀之狀呈稱氣神萬物靈臺日月星氣是天地大人亦大故大象人形座也無者元至也

天神一國常立尊世名無狀神此蒼精之君本宮之臣自古以來著也立功名者也所化神名曰天御中主神也

謂大易者虛尤也因動爲有之始故曰大初有氣爲形之始故曰太始氣形相分生天地人也大方道德者虛无之神天地沒而道常在矣原性命受化於心々受之意々受之精々受之神形體消而神不毀性命既而神不終形體易而神不變性命化而神常然因以名國常立尊以初爲常義者也

天地耦生神

謂耦生天地對耕萬物生故八天五行在天地生物五行自永始火次之木次之金次之土爲從木(本)生數三成數八但言八者舉其成數矣是天地象四時生相神座也配用有德故於明堂以祭五神而已

天神二國狹槌尊水藏戶

同 二豐樹淳尊火藏戶

同 四泥土煮尊木藏戶

沙土煮尊耦生荒魂

同 五天戶之道尊金藏戶

大苦邊尊耦生荒魂

同 六面足尊土藏戶

惶根尊對耕荒魂

件五代八柱天神光胤坐也雖有_二名相_一未_レ現_二形體_一五大府中坐故名_二天地耦生神_一也應化神名曰_二天御中主神_一未_レ顯露_二名_一國常立尊亦稱_二國底立尊_一天

地之間稟氣之靈蒙一大五種之神力受_二天地父母之生氣_一○氣一本以言語授_二世人_一也依_レ之得_二一切

天御中主神名稱天地俱生神一代謂天文地理日月星辰狀此時明現神聖出世天口成事

天御中主神

天地開闢之始含精氣而應化之元神故初禪梵宮居焉視_二天下_一而式_二時候_一授_二諸天子_一照_二臨天地之間_一而以_二一水之德_一利_二万品之命_一故亦名曰_二御氣津神_一也神語曰御義理也古語天津御氣國津御氣亦天狹霧國狹霧是水氣易形因以天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動惟水道德矣

地大天天下靈神

府中五魂座五靈五常名五大神也作萬生實也

水大天三降靈神

火大天合靈神

風大天八百日靈神

空大天八十萬魂神

件五柱神則受_二天地之精氣_一而氣形質具而未_レ相離_一名稱_二五大魂_一是中府藏坐神也故謂神者生之本形者生之具也古語謂稱_二獨化神_一也
高皇產靈神皇祖神故亦名高貴神天御中主神長男也

土面足尊 惶根尊

右八柱神者俱生之神陰陽與耦生之神也故乾坤之道相參而化所以成此男女形之矣

伊弉諾尊 伊弉冊尊

右從國常立尊迄生伊弉諾伊弉冊尊謂天神七代矣粵蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命天以天獨矛而諾尊立於天浮橋之上二神共議曰底下豈無國歟廼以天獨矛指下而探之獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之磯敷廬島二神於是降居彼島與八尋殿社記曰大日本日高見國神祇寶山今此所也云々

因欲共爲夫婦產生洲國及山川草木神等後生一女日神二男月神素戔嗚尊或爲日爲月永懸而不落或爲

神爲皇帝存而以無窮矣

蓋聞伊弉諾尊則東方善持藏受護善通由賀神梵所名之伊舍那天也伊弉冊尊則南方妙法藏愛鬚行軀神亦名之伊舍那后也凡從自性淨妙藏乃至邪地地爲下化衆生隨順方便故假所化義與生滅形依無爲行滿即得正果是大慈大悲神慮也

大日靈貴天照皇神神風伊勢國玉振五十鈴川上座

諾尊持左手金鏡天照鏡陰生持右手銀鏡天照鏡陽生因以日神月神所化生也謂火珠水珠二果曲玉變成三昧世界建立日月是座凡上座時名之尸棄大梵光明大梵下座時名之尸棄光天女天照太神遍照智光法陰法陽兩部不二平等一心同殿同床二神即一所座矣

尸棄大梵 尸棄光天女

杵獨大王

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊天照太神太子正哉吾勝尊太子亦凡霧之化生

天津彦々火瓊々杵尊正哉吾勝尊太子亦名皇孫杵獨王也

彦火々出見尊天津彦々火瓊々杵尊第二子

彥波瀲鷦鷯草葺不合尊彥火々出見尊太子

右天津彥尊率諸部神降至於筑紫日向穗日高千穗之峯治天下以來迄至葺不合尊三主治合一

百七十九萬二千四百七十六歲也

神皇實錄曰以代元氣渾沌天地未割猶鷄卵溟滓含牙其後清氣漸登薄靡爲天浮濁重沉淹滯爲地所謂

洲壤浮漂開闢判割是也譬猶游魚之浮水上于時天

先成而地後定然後於高天原化生一神號曰天讓日

陽神國禪月陰神皇神亦名天御中主尊也天地俱生神

日神國禪月陰神皇神亦名天御中主尊也天地俱生神

上件五柱神者別天神

次成神名國之常立神訓常立次豐雲野神此二柱神

亦獨成坐而隱身也次成神名字比地邇上神次妹須比

智邇去神此二神次角杵神次妹活杵神柱次意富斗能地

神次妹大斗乃辨神此二神次於母陀琉神次妹阿夜上

詞志古泥神此二神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神此二神

亦以音如上

上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并稱神

世七代上二柱獨神各云一代次雙

古語拾遺曰又地剖判之初天中所生神名曰天御中主

神其子有三男一長男高皇產靈神次津速產靈神次神

皇產靈神其高皇產靈神所生之女子名曰栲幡千千姬

命天祖天津彥尊之母也

神皇系圖曰天先成而地後定然後神聖生其中焉號

國常立尊矣亦名無上極尊亦名曰常住毗尊謂三

世常住妙心法界體相大智也故天神地祇本妙大千

世界大導師是尊也所形名曰天御中主神名曰尸棄

大梵天王故則為大千世界主矣

天御中主尊神風伊勢百船度會

山田原之大神座

元氣所化水德變成爲因爲果而所露名天御水雲

神住水德亦名御氣都神是水珠所成卽月珠是

也亦號大葦原中津國主豐受皇神也凡以一心

分大千形體顯言爲陰爲陽矣蓋從虛無則到

化變天月地水感應道交故在名字相云

地大天八下靈神

水大天三下靈神

火大天合靈神

風大天八百日靈神

空大天八十萬魂神

前五柱神者生化五大尊座也

高皇產靈神皇祖神座

神皇產靈神大神主祖神也

津速產靈神天兒屋命祖神也

都八柱神者天御中主神變座之內獨化神也明百億

須彌百億日月百億四天下而爲天地人民化生元

祖者也

水國狹槌尊

火豐斟淳尊

木泥土煮尊沙土煮尊

金大戸之道尊大苦邊尊

復使_二鏡作祖天糠戶神_一即石凝姥命之子也採_二天香山之銅使_一圖_二造日像之鏡_一其狀美麗矣而觸_二窟戶_一有_二小瑕_一其瑕於_レ今猶存卽是伊勢崇祕太神所謂八咫鏡亦名_二真經津鏡_一是也

已上就_二舊事本紀_一抄_レ之

日本書紀曰開闢之初洲壤浮漂譬猶_二游魚之浮_一水上也于_レ時天地之中生_二一物_一狀如_二葦牙_一便化_二爲神_一號_二國常立尊_一次國狹槌尊 次豐斟淳尊凡三神矣乾道獨化所以成_二此純男_一 次有神泥土煮尊 沙土煮尊 次有神大戶之道尊 大苦邊尊 次有神面足尊 惶根尊 次有神伊弉諾尊 伊弉冊尊 凡八神矣乾坤之道相交而化所以成_二此男女_一自_二國常立尊_一迄_二伊弉諾尊伊弉冊尊_一是謂_二神世七代_一矣

一書曰天地初判一物在_二於虛中_一狀貌難_レ言其中自有_二化生之神_一號_二國常立尊_一

國常立尊 亦國底立尊 亦可美葦牙彥見尊 亦天常立尊

次國狹槌尊 亦國狹立尊

次豐斟淳尊 亦豐斟野尊 亦豐香節野尊 亦浮經野豐賀尊 亦豐國野尊 亦豐留野尊 亦葉木國野尊 亦見野尊

凡三神乾道獨化所以成_二此純男_一

次泥土煮尊 壘土此云_二于毗尼_一

沙土煮 沙土此云_二須毗尼_一 亦曰壘土根尊

次大戶之道尊 一云大戶之邊

大苦邊尊 亦曰大戶摩彥尊 大戶摩姬尊 亦曰大富道尊 大富邊尊

次面足尊 亦曰吾屋惶根尊

惶根尊 亦曰忌懼城尊 亦曰青懼城根尊 亦曰吾屋懼城尊

次伊弉諾 伊弉冊尊 一書曰此_二神青城懼根尊_一之子也 一書曰國常立尊生_二天鏡尊_一天鏡尊

生_二天萬尊_一生_二沫蕩尊_一沫蕩尊生_二伊弉諾伊弉冊_一沫蕩此云_二阿和那伎_一

一書曰男女耦生之神先有_二泥土煮尊沙土煮尊_一 次有_二角織尊活織尊_一 次有_二面足尊惶根尊_一

次有_二伊弉諾尊伊弉冊尊_一

亦曰高天原所_レ成神名天御中主尊 次高皇產靈尊

次神皇產靈尊 皇產靈此云_二美武須毗_一

已上神號異說等就_二日本書紀_一抄_レ之

古事記曰天地初發之時於_二高天原_一成神名天之御中主

神_訓高下天云次高御產巢日神次神產巢日神此三杜神

並者獨神成坐而隱_レ身也次國稚如_二浮脂_一而久羅下

那洲多陀用幣流之時_{流字以上十}如_二葦牙_一因_二萌騰之物_一

而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神_{此神名}次天之常立

神_訓常云登許_{立云}多知_二此二柱神亦獨神成坐而隱_レ身也

洗_二右御目_一時所_レ成之神名_二月讀命_一

並座_二五十鈴川上_一謂_二伊勢齋大神_一

洗_二御鼻_一之時所_レ成之神名_二速素戔嗚尊_一

座_二出雲國熊野杵築神宮_一矣

伊弉諾尊大歡喜詔曰吾生之子而於_二生終時_一得_二三貴子_一

召_二其御頸珠之玉緒_一母由良爾取由良迦斯而賜詔其

御頸珠名謂_二御倉板_一

伊弉諾尊詔_二天照太神_一云汝命者所_レ知高天原矣詔寄賜矣

次詔_二月讀命_一汝命者所_レ知夜之食國矣詔寄賜矣

次詔_二素戔嗚尊_一云汝命者所_レ知海原矣詔寄賜矣

亦曰伊弉諾尊詔曰吾欲_レ生_二御宙之珍子_一即化出之神

三柱矣左手持_二白銅鏡_一則有_二化出之神_一是謂_二大日靈尊_一

右手持_二白銅鏡_一則有_二化出之神_一是謂_二月弓尊_一

廻首顧盼之間則有_二化出之神_一是謂_二素戔嗚尊_一即大日

靈尊及月弓尊並是質性明麗故使_レ照_二臨天地_一素戔嗚

尊是性好_二殘害_一故令_二下治_一根國矣

伊弉諾尊勅_二任三子_一曰

天照太神者可_レ以御_二治高天之原_一也月讀尊者可_レ以

治_二滄海原之潮八百重_一也後配_レ日而知_二天事_一所_レ知夜之食國也素戔嗚尊者可_レ以治_二天下復滄海之原_一也素戔嗚尊年已長矣復生_二八握鬚_一雖_レ然不_レ治_二所寄天下_一常以啼泣恚恨

伊弉諾尊功既至矣德亦大矣神功既畢當_レ登_二于天_一報命_レ留_二宅於日之少宮_一復靈運當遷是以_レ構_二幽宮於淡路之洲_一寂然長隱亦坐_二淡海之多賀_一者矣

亦曰天照太神詔_二素戔嗚尊_一曰汝猶有_二黑心_一不_レ欲_二與

汝相見_一乃入_二于天窟_一閉_二磐戶_一而幽居焉故高天原皆

闇亦葦原中國六合之內常闇不_レ知_二晝夜之殊_一故萬神

之聲如_二狹蠅_一鳴萬妖悉發往_二常世國_一故群神憂迷手足

罔_レ厝凡厥庶事燎_レ燭而辨矣于_レ時八百萬神於_二天八湍

河原_一神會集而議_レ計其可_レ奉_二祈謝_一之方_二矣矣高皇產靈

尊兒思兼神有_二思慮之智_一深謀遠慮議曰聚_二常世長鳴

之鳥_一遞使_二長鳴_一遂聚令_レ鳴矣復宜_レ圖_二造日神御像_一

奉_レ招祈禱矣復鏡作祖石凝姥命爲_二治工_一則探_二天八

湍河之川上之堅石_一

復全_二剝真名鹿皮_一以作_二天之羽韃_一矣

復探_二天香山之銅_一令_レ鑄_二造日矛_一此鏡少不_レ合_レ意則

紀伊國所_レ坐日前神是也

大苦彥尊亦云大月之道亦云大富道亦云大月摩彥

妹大苦邊尊亦云大月之邊亦云大富邊亦云大月摩姬

別天八百日尊獨化天神第

土五風四

六代耦生天神

青檀城根尊亦云沫蕩尊亦云面足尊

妹吾屋檀城根尊亦云檀根尊亦云蚊雁姬尊

別天八十萬魂尊獨化天神第

七代耦生天神

伊弉諾尊天降陽神

伊弉冊尊天降陰神

別高皇彥靈尊亦名高魂尊亦名高木命獨化天神第六世之神也

亦曰伊弉諾伊弉冊二尊俱議曰吾已生大八州及山川

草木何不_レ生天下之主者歟先生曰神曰大日靈

貴亦云天照太神亦云大日靈尊此子光華明彩照

徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未_レ有若此異

靈之兒不宜久留此國自當下早送于天而授以

天上之事是時天地相去未_レ遠故以天柱舉於天上

矣

次生三月神號曰月讀尊亦云月夜見亦月弓其光彩

亞日可_レ以配日而治故亦奉送于天矣

次生素戔鳴尊此尊可_レ治天下而此神勇悍以忍安且常以_レ哭泣爲_レ行以下異之

次生蛭兒雖已三歲而脚尙不立初二神巡柱之時

陰神先發喜言既違陰陽之理所以初終生此兒矣

次生鳥磐櫟樟船即以_レ此船乃載蛭兒流放棄矣

伊弉冊尊者葬於出雲國與伯耆國堺比婆之山上也伊

弉冊尊者葬於紀伊國熊野之有馬村焉土俗祭此神

之魂者花時以_レ花祭復用鼓吹幡旗歌舞而祭矣

亦曰伊弉諾尊親見泉國此既不祥也還乃追悔之曰

吾前到於不須也凶目汚穢處故當_レ去濯除吾身

之觸穢則往見粟門及速吸名門然此二門潮既太急故

還向於日向橋之小戶櫛原而被除焉遂將_レ盪滌身之

所汚乃與言詔曰陽神爲_レ禊泉穢到日向橋之小門櫛

原而被_レ禊御身一時所_レ成神十二柱神號略之伊弉諾尊詔上

瀨者速下瀨者弱而初於中瀨潛滌之時所_レ成之神二

柱神名八十禍津日神次大禍津日神復爲_レ直其禍而

所_レ成神三柱神名神直日神次大直日神次伊豆能賣神

此外神號略之

伊弉諾尊滌御身之時所_レ生之神三柱

洗左御目一時所_レ成之神名天照太御神

類聚神祇本源卷三

天神所化篇

官家

天地麗氣府錄曰論云劫盡燒壞時一切皆空故生三福德
因緣力故十方三風至相對相觸能持三大水三水上有三千
頭人二千手足名爲三華網是人臍中出三千葉金色妙法
蓮華其光大明如三萬日俱照有三人結跏趺坐此人復有
無量光明各曰三梵天王此梵天王心生三八子三八子生
天地人民也爾時上方五百萬億國土諸天梵王皆悉自
觀所止宮殿光明威曜昔所未有歡喜踊躍生希有心
即各相詣共議此事以何因緣我等宮殿有斯光明
而彼衆中有三大梵天王名曰尸棄是一大三千世界
主一切諸神大祖也
亦曰常住毗尊一須彌建立其厚十六萬瓊膳那云觀相
九山與三海中有三大威神无上極尊世界大導師爲
神通自在如三水球如火珠萬德施三萬用
先代舊事本記曰于時天先成而地後定然後於高天

原一化生一神號曰三天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊自
厥以降獨化外俱生二代耦生五代所謂神世七代是也

神代系紀

天祖天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊

一代俱生天神

天御中主尊亦云天常立尊

可美葦牙彥舅尊

水二代俱生天神

國常立尊亦云國狹立尊亦云國狹立尊

豐國主尊亦云豐國主尊亦云豐國主尊亦云豐國主尊

別天八下尊亦云別天八下尊亦云別天八下尊

地二代俱生天神

角織尊亦云角龍魂尊

妹活織尊

別天三降尊獨化天神第二世之神也

水三代耦生天神

泥土養尊亦云泥土根尊

妹妙土養尊亦云妹妙土養尊

別天合尊亦云天鏡尊獨化天神第三世之神也

火四金五代耦生天神

氣々々轉_二成神_一神變_二成生_一々々轉_二成魂魄_一々々轉_二成人體_一故八葉蓮臺座自在安樂也是如意赤玉德也元神用化也伊弉諾伊弉冊二尊天_一降其島則化_二豎八尋殿_一共住_二同宮_一矣號曰_二大日本高見國_一大日本者三光殿本名

瑞柏鎮守仙宮祕文曰天神天御中主神詔_二伊弉諾伊弉冊_一本名伊舍那天伊舍天妃亦名自在天是也有_二葦原千五百秋瑞穗之地_一宜_二汝

往修_レ之賜_二天之瓊矛_一而詔寄賜也爾時二柱尊奉_二詔命_一立_二於天浮橋之上_一共計謂有_レ物若_二浮膏_一其中蓋有

國乎廼以_二天之瓊矛_一而探_レ之獲_二是滄海_一投_二下其矛_一而因畫_二滄海_一而引上時自_レ戈落垂滴瀝之_一如意寶珠表形潮凝結

爲_レ島名曰_二磯馭廬島_一矣神明降跡國萬寶聚取歸之地也因以爲格也則以_二天之瓊戈_一金剛智劍亦名天御量柱是也指_二立磯馭廬嶋上_一以爲_二國中之天之柱國之柱_一也此云心御柱是起也是諸尊能生之本源萬法所歸之體也

天地靈覺祕書曰大日本國者大八洲也惟大日靈貴治國也亦八葉花臺也即金剛胎藏諸會大日宮世界國土也凡世界自本本覺也自本无明也本又法界也本是衆生本佛也本者法然道理也

或云磯馭廬嶋 唵呼嚧呼嚧神明召請之國也

豐受皇太神繼文曰南閭浮提_レ也シハラ葦原

日本書紀曰神武天皇卅有一年夏四月乙酉朔皇興巡幸

因登_二腋上嚧間丘_一而廼_二望國狀_一曰妍哉乎國之獲矣雖_二內木綿之真迹國_一猶_二蜻蛉之醫帖_一焉由_レ是始有_二秋津之號_一也

一云日本者浦安國亦曰細矛千足國亦曰磯輪上秀真國亦曰玉墻內國

又曰舊說云古者今謂_二之倭國_一倭義取_二稱_一我之音_一漢人取名之字也此國之人昔到_二彼國_一而彼國問云汝國之名稱_二如何_一答曰和奴國耶和奴猶_レ言_二吾也_一自後謂_二之倭奴國_一也通云_二山跡_一山謂_二之耶麻_一跡謂_二之土_一音登戶反夫天地割判泥溫未_レ燦是以栖_二山_一往來國多_レ蹤故曰_二耶麻土_一又古語居住爲_レ土言_レ止住_二據於山_一也

類聚神祇本源

不入_レ子之例_一於_レ是二柱神議云今吾所_レ生之子不_レ良
猶宜_一白_二天神之御所_一即共參上請_二天神之命_一爾天神之
命以布登麻邇爾_{上此五}卜相而詔之因_二女先言_一而不
良亦還降改言故爾返降更往_二廻其天之御柱_一如_レ先於
是伊耶那岐命先言阿那邇夜志愛袁登賣袁後妹伊耶
那美命言阿那邇夜志愛袁登古袁如_レ此言竟而御合生_二
子淡道之穗之使_一_{古訓本}別島_{訓別云和}次生_{氣下效此}伊豫之二
名嶋_一此島者身_一而面有_レ四每_レ面有_レ名故伊豫國謂_二
愛上比賣_{此三字以音讀岐國謂飯依比古粟國謂大宜}
都比賣_{此四字}土佐國謂_二建依別_一次生_二隱岐之三子島_一
亦名天之忍許呂別_{訓許呂二}次生_三筑紫嶋_一此嶋亦身
一而有_二面四_一每_レ面有_レ名故筑紫國謂_二白日別_一豐國
謂_二豐日別_一肥國謂_二建日向豐久士比泥別_{自久至}
熊會國謂_二建日別_一_{曾字}次生_三伊岐嶋_一亦名謂_二天比
登都柱_{自比至都}次生_三津嶋_一亦名謂_二天之狹手依
比賣_{音訓天如天}次生_三大倭豐秋津嶋_一亦名謂_二天
御虛空豐秋津根別_一故因_二此八嶋先所_一生_二謂_二大八嶋
國_一然後還坐之時生_二吉備兒嶋_一亦名謂_二建日方命_一
次生_三小豆島_一亦名謂_二大野手上比賣_一次生_三大嶋_一亦名
謂_二大多麻上流別_{自多至}次生_三女島_一亦名謂_二天一根_一

_訓天次生_三知訶嶋_一亦名謂_二天之忍男_一次生_三兩兒島_一亦
名謂_二天兩屋_{自吉備兒島至}
_{天兩屋島并六島}
和漢春秋曰日本國

史記夏本紀正義云括地志云和國武皇后政曰_二日本國_一
在_二百濟南_一隔_レ海依_レ嶋而居

日本私記曰日本國從_二大唐_一東方萬餘里日出_二東方_一
昇_二于扶桑_一故云_二日本_一

或書曰日本國者自_二大唐_一而新名也斯國自_二大唐_一東方
萬餘里居_二于東極_一日出_二東方_一昇_二于扶桑_一已近_二日所

出故曰_二日本_一也仍又號_二扶桑國_一也
切韻曰和者東海中國也

天地麗氣府錄曰于_レ時爲_レ下_二化衆生_一天王如來天御
中主尊詔_二伊弉諾伊弉冊_一二尊_一曰有_二豐葦原千五百秋

瑞穗中津地_一宜_二汝往修_一之賜_二天瓊矛_一而詔寄賜也二
柱尊奉_一詔立_二於天浮雲之上_一共計謂有_二一物_一若_二浮

膏_一其圓中有_レ國乎廼以_二天瓊矛_一_{天獨}探_二之獲_一八葉滄
海圖形_一則投_二下其矛_一而因畫_二滄溟_一而引上之時自_二矛

末_一落垂_二滴瀝之潮凝爲_一島_{卯明}名曰_二磯馭盧島_一矣_{婆娑}
則以_二天瓊矛_一指_二下於磯馭盧島之上_一以爲_二國中_一之天

柱_一也天瓊梓謂_二真如界_一變_二成金剛寶杵_一々々變_二成風

得國乃以天瓊矛指垂而探之得礮馭盧嶋則拔矛而喜之曰善乎國之在矣

一書曰伊弉諾伊弉冊二神坐于高天原曰當有國耶乃以天瓊矛畫成礮馭盧嶋

一書曰伊弉諾伊弉冊二神相語曰有物若浮膏其中蓋有國乎乃以天瓊矛探成一嶋名曰礮馭盧嶋

一書曰陰神先唱曰美哉善少男時以陰神先言故為不祥更復改巡則陽神先唱曰美哉善少女遂將合交而不

知其術時有鵲鴿飛來搖其首尾二神見而學之即得交道

一書曰二神合為夫婦先以淡路洲淡洲為胞生大日本豐秋津洲次伊豫洲次筑紫洲次雙生億岐洲與佐渡洲次越洲次大洲次子洲

一書曰先生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫二名洲次億岐洲次佐渡洲次筑紫洲次壹岐洲次對馬洲

一書曰以礮馭盧嶋為胞生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫二名洲次筑紫洲次吉備子洲次雙生億岐洲與佐渡洲次越洲

一書曰以淡路洲為胞生大日本豐秋津洲次淡洲次伊豫二名洲次億岐三子洲次佐渡洲次筑紫洲次吉備子

洲次大洲

一書曰陰神先唱曰妍哉可愛少男乎便握陽神之手遂為夫婦生淡路洲次蛭兒

古事記曰於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也故二柱神立

以書者鹽許々袁々呂々邇此七字書鳴調鳴云志而引上時自其矛末垂落鹽之累積成島是淤能基呂嶋

於其嶋天降坐而見立天之御柱立八尋殿於是問其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答曰吾

身者成々不合成一處在爾伊邪那岐命詔我身者成々而成餘處一處在故以此吾身成餘處刺下塞汝身不

合成一處而以焉古訓本生成國土奈何調生云三字伊邪那美命答曰然喜爾伊邪那岐命詔然者吾與汝行

廻逢是天之御柱而為美斗能麻具波比此七字如之此期乃汝者自右廻逢我者自左廻逢竟以廻時伊

邪那美命先言阿那邇夜志愛上袁登古袁此十字以音下效此後伊邪那岐命言阿那邇夜志愛上袁登賣袁各言竟之後

告其妹因女人先言不良雖然久美度邇此四字而生子水蛭子此子者入葦船而流去次生淡嶋是亦

水沫潮凝而成者也

日本書紀曰伊弉諾尊伊弉冊尊立於天浮橋之上其計曰底下豈无國歟廼以天之瓊瓊玉也此云奴矛指下而探之

是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之曰磯取

盧嶋二神於是降居彼嶋因欲共爲夫婦產生洲

國上便以磯取盧嶋爲國中之柱柱此云美而陽神左旋

陰神右旋分巡國柱同會一面時陰神先唱曰意哉遇

可美少男焉少女此云鳥等孤陽神不悅曰吾是男子理當先唱

如何婦人反先言乎事既不祥宜以改旋於是二神却

更相遇是行也陽神先唱曰意哉遇可美少女焉少女此云鳥

等因問陰神曰汝身有何成耶對曰吾身有一雌元

之處陽神曰吾身亦有雄元之處思欲以吾身元處

合汝身元處於是陰陽始適合爲夫婦及至產

時先以淡路洲爲胞意所不快故名之曰淡路

洲廼生大日本日本此云耶麻豐秋津洲次生伊豫二名

洲次生筑紫洲次雙生隱岐洲與佐度洲世人或

有雙生者象此也次生越洲次生大洲次生吉備

子洲由是始起大八洲國之號焉即對馬島壹岐島及

處々小島皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也

一書曰天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豐葦原千五

百秋瑞穗之地宜汝往脩之廼賜天瓊戈於是二神

立於天上浮橋投戈求地自畫滄海而引舉之即戈

鋒垂落之潮結而爲島名曰磯取盧嶋二神降居彼

嶋化作八尋之殿又化豎天柱陽神問陰神曰汝

身有何成耶對曰吾身具成而有稱陰元者一處陽

神曰吾身亦具成而有稱陽元者一處思欲以吾身

陽元合汝身之陰元云爾即將巡天柱約束曰妹自

左巡吾當右巡既而分巡相遇陰神乃先唱曰妍哉可

愛少男歟陽神後和之曰妍哉可愛少女歟遂爲夫婦先

生蛭兒便載葦船而流之次生淡洲此亦不以充

兒數故還復上詣於天具奏其狀時天神以太占

而卜定之乃教曰婦人之辭其已先揚乎宜更還去乃

卜定時日而降之故二神改復巡柱陽神自左陰神自

右既遇之時陽神先唱曰妍哉可愛少女歟陰神後和之

曰妍哉可愛少男歟然後同宮共住而生兒號大日本

豐秋津洲次淡路洲次伊豫二名洲次筑紫洲次隱岐三

子洲次佐度洲次越洲次吉備子嶋由此謂之大八洲

國矣瑞此云彌圖妍哉此云阿那而惠夜可愛此云

哀太占此云布刀磨爾

一書曰伊弉諾尊伊弉冊尊二神立于天霧之中曰吾欲

於是雌雄初會欲_レ將交合產_二生於國土_一而不_レ知其術_二子_レ時鵲鵲鴿來搖_二其首尾_一二神見而學_レ之而得_二交通之術_一矣

先產_二生淡路洲_一爲_レ胞意所_レ不_レ快故曰_二淡道洲_一卽謂_二吾恥_一也

次生_二伊豫二名洲_一

次生_二筑紫洲_一

次生_二壹岐洲_一

次生_二對馬洲_一

次生_二隱岐洲_一

次生_二佐渡洲_一

次生_二大日本豐秋津洲_一

因_レ斯以_二先所_レ生謂_二大八洲_一

然後還坐之時生_二吉備兒島_一

次生_二小豆島_一

次生_二大島_一

次生_二姬島_一

次生_二血鹿島_一

次生_二兩兒島_一合六嶋矣

凡產_二生十四嶋_一其處々小嶋皆是水沫潮凝而成者也

先生_二大八洲_一

兄生_二淡路洲_一謂_二淡道之穗之狹別嶋_一也

次伊豫二名島謂此島者身一而有_二面四_一每_レ面有_レ名

伊豫國謂_二愛上比賣_一

西南角

讚岐國謂_二飯依比賣_一

西北角

阿波國謂_二大宜都比賣_一

東北角

土佐國謂_二速依別_一

南東角

次隱岐之三子島謂_二天之忍許呂別_一

次筑紫島身一而有_二面四_一每_レ面有_レ名

筑紫國謂_二白日別_一

豐國謂_二豐日別_一

肥國謂_二建日別_一

日向國謂_二豐久士比泥別_一

次熊襲國謂_二建日別_一云佐渡島

次伊岐嶋謂_二天比登都柱_一

次津嶋謂_二天之狹手依比賣_一

次大倭豐秋津嶋謂_二天御虛空豐秋津根別_一

次生_二六小島_一

兄吉備兒嶋謂_二建日方別_一

次小豆嶋謂_二大野手上比賣_一

次大嶋謂_二天多麻上流別_一

次女嶋謂_二天一根_一

次血鹿嶋謂_二天之忍男_一

次兩兒島謂_二天兩屋_一

惣產_二生大八洲次六小嶋合十四箇嶋_一其處々小嶋皆是

類聚神祇本源卷二

本朝造化篇

先代舊事本紀曰天祖詔伊弉諾伊弉冊二柱尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地宜汝往修之則賜天瓊戈而詔寄賜也伊弉諾伊弉冊二尊奉詔立天浮橋之上其計謂有物若浮膏其中蓋有國乎廼以天瓊矛而探之獲是滄海則投下其矛而因畫滄溟而引上之時自矛末落垂滴瀝之潮凝結而爲嶋名曰礪馭盧嶋矣則以天瓊矛指立於礪馭盧嶋之上以爲國中之天柱也伊弉諾伊弉冊二尊天降其嶋則化豎八尋殿共住同宮矣伊弉諾尊問伊弉冊尊曰汝身有何成耶伊弉冊尊對曰吾身成成而有不成成處一處耶伊弉諾尊詔曰吾身者成成而有成餘處一處耶故以我身成餘處刺塞汝身不成成處以爲產國土如何伊弉冊尊對曰然善矣伊弉諾尊詔曰吾與汝交廻天御柱而行逢適合如此約束曰汝者自左吾者自右廻逢約竟分巡天柱同

會一面矣伊弉冊尊先唱曰意哉遇可美少女焉伊弉諾尊對曰意哉遇可美少女焉

伊弉諾尊告伊弉冊尊曰吾是男子理當先唱而婦人先唱事既不祥雖然共爲夫婦而生子因陰陽始適合爲夫婦產生之兒卽是水蛭子此子入葦船而流也次生淡州亦是不入子例也伊弉諾伊弉冊二尊議曰今吾所生之子不良宜還復上詣於天具奏聞此狀則其還復上詣於天而奏聞也天祖詔以太占而定時日而降矣伊弉諾尊詔曰吾與汝矣改往巡柱吾矣自左汝矣自右巡柱相逢而爲御戶婚里如此約束竟矣

伊弉諾尊先唱妍哉可愛少女歟

伊弉冊尊復和曰妍哉可愛少女歟

伊弉諾尊問伊弉冊尊曰汝身有何成耶

伊弉諾尊詔曰吾身具成而有成餘雄元之處耶

伊弉冊尊對曰吾身具成而有不成成處雌元之處耶

伊弉諾尊詔曰思欲以吾身成餘處雄元處刺塞汝身不成成雌元之處以爲產生國土如何

伊弉冊尊對曰宣然善矣

物其狀如葦牙不知其名爾時靈物乃中四理志出神聖化生名之曰天神亦曰大梵天王亦稱尸棄大梵天王逮于天帝代名靈物稱天瓊玉戈亦名金剛寶杵爲神人之財至地神代謂之天御量柱國御量柱因茲興于大日本洲中央名爲常住慈悲心王柱此則正覺正智寶坐也故名心柱也

天地靈覺書曰古天地未分萬物未形代漠然凝寂本莫有一物於虛空之中生大意之象虛微靈通是爲萬物之本源謂之諸佛之本地本是非有非無杳冥恍惚莫測涯際本是无所住無相貌而有物混成先天地生名元氣化陰化陽爲魂爲魄名曰精靈有陽不焦託陰不腐天法道而精氣自成焉地法天而萬物生長矣惣道始無形狀而能爲萬物設形象者也故曰道生陰陽陰陽生和清濁三氣分爲天地人天地人生萬物若道散爲神明流爲日月分爲五行萬物之撲散則爲器用也夫無名天地之始有名萬物之母故常無欲以觀其妙常有欲以觀其徵以大道制情欲不害精神治身正時形一神明千萬共湊己身也能不知道之所常行妄作巧詐精散已故發狂失神明故凶者也君臣上下能守五性去

六情節滋味清五藏則天降神明往來於己大道也天地亦大也布氣天地自歸己乎

長阿含經曰水變爲天地祕藏寶鑰曰夫虛寥廓含萬像越大氣大氣巨穀泳孕千品受一水誠知一爲百千母

圓悟心要曰天地未形生佛未分漠然凝寂爲萬物之本

圓覺經序曰元亨利貞乾之德也始於一氣常樂我佛之德也本乎一心專一氣致柔修一心而成道

或曰雙圓性海談四事相重如月殿述三密自樂但可有口訣也

類聚神祇本源

奏覽本懸朱勾所々略之

後宇多院御代以中御門中納言之奉書被仰祭主隆實卿被召之先皇御代以六條中納言被召之仍勾當內侍以假字御教書歡感之趣被仰下六條施行

是次第三禪天沒生第二禪第二禪有一有情壽業盡故從彼沒生初禪梵世中爲大梵王而唯獨一位壤不悅卽作是念時第二禪天壽盡故生初禪中如是展轉六天宮殿及四大洲悉生也

論云劫盡燒壤時一切皆空故生福德因緣力故十方風至相觸能持大水水上有千頭人二千手足名爲葦網是人齊中出千葉金色妙法蓮華其光大明如日俱照花中有入結跏趺坐此人復有無量光明名曰梵天王此梵天王心生八子八子生天地人民也

今案稱八子者天八下靈神天三下靈神天合靈

神天八百日靈神天八十万魂神已上五種者五大魂已三代有父子之道

高皇產靈神神皇產靈神津速產靈神八柱也

神皇系圖曰

都八柱神者天御中主神寶座之內獨化神也明百億須彌而億日月百億四天下而爲天地人民化生元祖者也云々以葦網曰天御中主之條滄然者也

社家

豐受皇太神御鎮座本紀曰天地初發之時大海之中有一物浮形如葦牙其中神人化生名號天御中主神故號豐葦原中國亦因以曰豐受皇太神也與天照

大日靈尊舉此以八坂瓊之曲玉八咫鏡及草薙劍三種之神財而授賜皇孫爲天璽視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡寶祚之隆當與天壤無窮宜焉

寶基御靈形文圖曰天地開闢基在大光明其中有精氣名曰神亦名心爾時爲萬物應化神假名號廣大慈悲大御神也掛畏以天津神策用抱一而天地與陰陽同節同和合敬合愛顯五常文圖悟八子給修應化身照神道可也

釋家

大和葛寶山記行基菩薩奉詔撰

蓋聞天地成意水氣變而爲天地十方風至相對相觸能持大水水上神聖化生有千頭二千手足一名常住慈悲神王爲葦網是人神齊中出千葉金色妙寶蓮華其光大明如萬日俱照華中有入神結跏趺坐此人神復有無量光明名曰梵天王此梵天王心生八子八子生天地人民也此名曰天神亦稱天帝之祖神也

亦曰夫水則爲道源流萬物父母故長養森羅萬象當知天地開闢嘗水變爲天地以降高天海原在獨化靈

易序卦曰有天地然後有萬物有萬物然後有男女有男女然後有夫婦有夫婦然後有父子有父子然後有君臣

莊子曰不明於道者悲夫何謂道有天道有人道

無爲而尊者天道也有爲而累者人道也主者天道也臣者

人道也天道之與人道也相去遠矣不可不察也又

曰萬物各復其根各復其根而不復知不知而復乃真

々沌々終身不離渾沌無知任其自復乃真能終身不離其本耳又曰純素之道唯

神是守守而勿失與神爲一常以純素守至寂一之精而不瀉於外則冥矣

通合于天倫精者物之真者也野語有之曰衆人重利廉士重

名賢士尚志聖人貴精故素也者謂其無所與難

也純也者謂其不顧其神也能體純素謂之真人

又曰古之人在混苞之中與壹世而得澹漠爲當

是時也陰陽和靜鬼神不擾四時得節萬物不傷群生

不夭人雖有知無所用之任其自然而已此之謂一至一

本朝

官家

府祕神皇實錄曰謂太易者虛無也因動爲有之初故曰太初有氣爲形之始故曰太始氣形相分生天地人

先代舊事本紀曰古者元氣渾沌天地未剖猶雞卵子溟滓含牙其後清氣漸登薄靡爲天濁氣重沉淹滯爲地所謂洲壤浮漂開闢判割是也譬猶游魚之浮水上于時天先成而地後定

日本書紀曰古天地未剖陰陽不分渾沌如鷄子溟滓而含牙及下其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也

亦曰古國稚地稚之時譬猶浮膏而漂蕩

亦曰天地未生之時譬猶海上浮雲無所根係

國史者同于日本書紀仍不注之

神皇系圖曰古天地未割陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含牙及清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地後

定天地

天地麗氣府錄曰蓋聞壞劫後過廿空劫已一切有情業

增上力故空中漸有微細風是世間將成前相也是風

漸增成世界最初第三禪器世界成次第二禪及初禪

六欲天四大洲次第皆成也凡成劫之時雖無有情一

有情第四禪天人壽業盡故從彼沒已生第三禪如

有情第四禪天人壽業盡故從彼沒已生第三禪如

正義曰凡无方无體各有二儀一者神則不見其處一
所云爲是無方也二則周遊運動不常在二處亦是
无方也無體者一是自然而變而不知變之所由是無
也二則隨變而往無定在一體亦是無體也云必有之
用極而无之功顯者猶若風雨是有之所用當用之時
以无爲以風雨既極之後万物賴此風雨而得生育
是生育之功由風雨無心而成是有之用極而无之功
顯是神之發作用以生万物其功成就乃在於无形
應機變化雖有功用本其用之所以亦在於无也

周易曰陰陽不測之謂神注曰王曰測陰非陰測陽
非陽故曰陰陽不測亦一陰一陽之義也謝曰夫神者何
爲者耶妙萬物而爲言者也夫絕天象者曖昧不能
圖其狀窮變化者陰陽不能測其量故聖人後
天地而生而知天地之始先天地而沒而知天地之
終韓曰神也變化之極妙萬物而爲言不可以形語
者也故曰陰陽不測嘗試論之曰原夫兩儀之運萬物之
動豈有使之然哉莫不獨化於太虛歟余而自造
矣造之非我理自玄應化之無主數自冥運故不
知所以然而況之神是以明兩儀以太極爲始
言變化稱乎神也夫唯知天之所爲者窮理體化

坐忘遺照至虛而善應時則以道爲稱不思而玄賢則以
神爲名蓋資道而同乎道由神而冥於神者也
亦曰神以知來智以藏往注曰韓曰往來之用相成猶
神智也

亦曰子曰知變化之道者其知神之所爲乎
注曰王曰能盡變化者體神者也故知變化則知神
之所爲也謝曰言唯體神者能知變化之道也韓曰夫
變化之道不爲而自然故知變化者則知神之所爲
也

老子述義曰神者生之本也形者生之具也

又曰夫原我性命受化於心心受之於意意受之
於精精受之於神形體消而神不毀性命既而神不
終形體易而神不變性命化而神常然

又曰夫天地之間有真氣太和之氣是也有正氣陰陽
之氣是也有邪氣錯亂之氣是也人之行各有所感感
真氣者爲聖人感正氣者爲賢人感邪氣者爲小人
感應之差千殊萬端異方之心面安有紀量哉

老子道經曰天下神器不可爲爲
也執者失之強執之則失其或吹或吹或吹或吹
有強大有所羸弱必或載或隨或載或隨
有所羸弱必或載或隨或載或隨

有強大有所羸弱必或載或隨或載或隨

生五始於中央土又云天始生一者因一而生天非
 生一故云一生二生三三三萬物地生二者亦
 因二而生地因三生人因四生時五行皆由一而
 生數至於五土最在後得五而生五行也五行同出
 而異時者出離其親有所配偶譬如人生亦同元
 氣而生各出一家配爲夫妻化生子息故五行皆
 相須而成也五行同胎而異居有前後耳夫五行皆資
 陰陽氣而生故云濡氣生水溫氣生火強氣生木剛氣
 生金和氣生土故知五行同時而起詭義相生傳曰五行
 並起各以名別然五行既以名別而更互用事

元命苞曰水之爲言準也陰化淖流旋潛行也故立字兩
 人交一以中出者爲水一者數之始兩人譬男女陰陽交
 以起一也水者五行始焉元氣之湊液也

上繫辭曰神無方而易無體一陰一陽之謂道繼之者
 善也成之者性也者見之謂之仁智者見之謂之
 之智百姓日用而不知也故君子之道鮮矣

注曰韓曰方體者皆係於器者神則陰陽不測易則唯
 變所適不可以一一方一體明也謝曰言神道之
 不係於一方不滯於陰陽也韓曰道者何无之稱也
 無不通也无不由也况之曰道寂然無體不可爲

象必有之用極而无之功顯故至乎神無方而易無體
 而道可見矣故窮變以盡神因神以明道也陰陽雖
 殊无一以待之在陰爲無陰陰以之生在陽爲無
 陽以之成故曰一陰一陽也王曰一陰一陽者或謂之
 陰或謂之陽不可定名也夫爲陰則不能爲陽
 爲柔則不能爲剛唯不陰不陽者然後爲陰陽之宗
 不柔不剛然後爲剛柔之主是故上言神無方易無體
 下言一陰一陽之謂道更互相明無方無體非陰非陽
 故謂之神故謂之道也繼猶繫也性者自然之所體
 也能繼神道成變化者是體善與性者也神道無體
 不可爲名故仁智各是見其所感通而名之焉而
 不知其所由故曰仁者見之謂之仁智者見之謂
 之知百姓日用而不知也然則無者有之宗少者多之元
 故體無者苞衆有者也執一者通万事者也故曰君子
 之道妙矣也少猶可以濟多而況於無乎此寄少以
 明道神者也謝曰斯言易之爲道無幽而不備也仁
 者得仁智者得智百姓日用而不知其由也故知其
 由者得不鮮乎韓曰君子體道以爲用者也仁智則
 滯於所見百姓則日用而不知體斯道者不亦鮮乎
 故常无欲以觀其妙始可以語至而言極者也

物孳繁然復萬物生成也皆由二陰陽二氣一鼓舞陶鑄互相交感孤陽不能獨生一單陰不能獨成一必須配合一鍾冶爾乃萬物化通

三五歷紀曰未有三天地之時混沌狀如雞子溟滓始牙濛鴻滋萌

又曰清輕者上爲天濁重者下爲地冲和氣者爲人故天地合精萬物化生

老子道經曰無名天地之始無名謂道道無形故不可名也始者道吐氣布化出於虛無爲天地之始有名萬物之母有名謂天地天地有形位有陰陽有柔剛是其名也萬物母者天地含氣生三萬物門大成然如母之養子也又曰玄牝之門是謂天地之根根元也言鼻口門是乃天地之元氣所從往來也

老子述義曰有太易有太初有太始有太素一氣形質具曰渾淪清爲天濁爲地和爲人天地含精萬物化生又曰易緯及列子曰太易者未見氣太初者氣之始太始者形之始太素者質之始氣形質具而未相離曰渾淪渾淪者言萬物相渾淪而未相離也言虛則精氣氣則有形有質者也有質者也有形者也有質者也有

又曰視之不見聽之不聞脩之不得此言氣形質具至妙至微者也

老子德經曰道生一道始所生一者也一生二一生陰一陽也二生三二生陰一陽也三生四三生陰一陽也

生和清濁三氣三生萬物天地人共生一物爲三天地人也

又曰昔之得一者昔往也一元氣也道天得一以清言天得一以清故能重象

地得一以寧言地得一以寧故能安靜不動搖也神得一以靈言神得一以靈故能變化無形也

述義曰經曰道生一道則經太易也一即渾淪也一生一陰陽也二生三天地人也然後三生萬物

又曰萬物本於三三本於二二本於一一生於道

故經曰天下之物生於一有一天下也又曰有生於無

無道也一在有無之間對道爲有對天地爲無即

德也惟道德之寥廓人物之有待形雖生滅神固常在故

列子等說混沌未離即稱萬物已備則萬物之性照於

混沌之前不可萬物之生始於開闢之後理必然矣

又曰一形道之應道爲一之本一矣

淮南子曰天地之襲精爲陰陽陰陽之轉精爲四時四

時散精爲萬物積陰之寒氣反者爲水積陽之勢氣反

者爲火水雖陰物陽在其內故水體內明火雖陽物

陰在其內故火體內暗木爲少陽其體亦含陰氣故

內空虛外有花葉敷榮可觀金爲少陰其體剛利敬

性在外內亦光明可照土苞四德故其體能兼虛實

五行大義曰天生一始於北方水地生二始於南方

火人生三始於東方木時生四始於西方金五行

洛書



四正

東南方
西北方
卦音風節相配圖



八卦

八音

八風

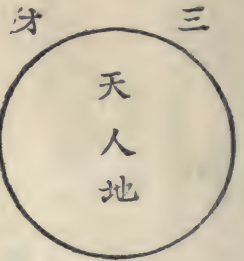
八節

東方	震	竹	明庶	春分
東南	巽	木	清明	立夏
南方	離	絲	景風	夏至
西南	坤	土	涼風	立秋
西方	兌	金	閭闔	秋分
西北	乾	石	不周	立冬
北方	坎	革	廣莫	冬至
東北	艮	匏	條	立春

四維

東南 西南
西北 西北
左傳隱公五年疏八節之風亦與八卦八音相配

五行大義曰凡萬物之始莫不始於无而復有是故易有太極一是生三兩儀兩儀生三四序四序生之所生也有



列子曰清輕者上爲天濁重者下爲地仲和者爲人謂之「三才」易曰有天地然後有萬物有萬物然後有男女有男女然後有夫婦有夫婦然後有父子有父子然後有君臣有君臣

臣然後有上下一「律曆志」曰太極元氣圖「三爲一」孟康曰元氣始起天地人混合爲一故子數獨未分之時天一也師古曰爾雅與舍同極中也元始也

周易曰闔戶謂之坤韓曰坤道闔戶謂之乾韓曰乾道施壹闔壹闔謂之變王曰乾坤交合往來不窮謂之道見

乃謂之象王曰謂在天成象也萬物運動於下而懸象見於形

乃謂之器王曰在地成形爲器用也制而用之

謂之法王曰取天之象昏明之理取地之宜利用出入民咸

用之謂之神王曰物莫不由無以通神也者萬物之所由故曰

往來無窮故神道之功通焉能爲是故易有太極王曰太極是生

兩儀王曰兩儀天地也韓曰有夫必始無故太極生兩儀也太極

生四象王曰象四象生八卦韓曰卦以八卦定吉凶

吉凶生大業王曰物有動用而吉凶先生吉凶既生而

業也謝曰太極易之極也論兩儀則入於窮矣是故謂之太極四象四時之象也從二儀至乎大業則天下之能事畢矣萬物之情見矣老子經曰報大象天下往報守也象道也博聞錄曰

河圖

易大傳曰河出圖洛出書聖人則之孔安國云河圖者伏羲王天下龍馬出河遂則其文以畫八卦洛書者禹治水時神龜負文而列於背禹遂因而第之以成九類關子明云



河圖之文七前六後八左九右洛書之文九前一後三左七右四前左二前右八後左六右後御子曰圓者星也歷紀之數其肇

於此乎方者土也畫州井池之法其倣於此乎蓋圓者河圖之數方者洛書之文易繫辭曰天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十天數五地數五二位相得而各有合天數二十有五地數三十凡天地之數五十有五此所以成變化而行鬼神也注曰此夫子所以發明河圖之數至於洛書雖夫子之所未言焉

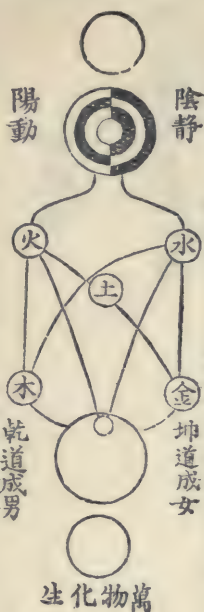
類聚神祇本源卷一

天地開闢篇

漢家

古今帝王年代曆曰昔者天地未形謂之太易元氣始萌謂之太初形氣始端謂之太始形變有質謂之太素質形已具謂之太極五氣運通而天地之靈清以陽發升而爲天濁以陰凝降而爲地地形別謂之二儀人生其間謂之三才

新端分門纂圖博聞錄曰



周子通書曰○極而太極太極動而生陽動極而靜々而陰靜復動一動一靜互爲其根分陰分陽兩儀立

焉陽變陰合而生水火木金土五氣順布四時行焉五行一陰陽也陰陽一太極也太極本無極也五行之生各一其性无極之真二五精妙合而凝乾道成男坤道成女二氣交感化生萬物萬物生々變化無窮焉

老子道經曰有物混成先天地生謂道无形混沌而成

寂兮寥兮獨立而不改者無匹雙不敗者化有常也周而不

殆道通天地无所不入在陽可三以爲天下母

如母之養子也吾不知其名字之曰道容不不知常何

以名見萬物皆從道之强爲之名曰大不知其名強曰大

所生故字之曰道也故曰大

博聞錄曰



係辭曰有太極是生兩儀

孔穎達疏云太極謂天地未

分之前元氣混而爲一一氣

既分之後陽氣居上爲天陰

氣居下爲地居上者輕清

居下者重濁如止水於是

天地位焉乃謂兩儀

續々群書類從卷一

神祇部

類聚神祇本源並序

天照豐受皇太神宮禰宜正四位上度會神主家行撰

神祇之起邈哉遠矣杳冥恍惚混沌未形堪然凝寂陰陽莫測出於物外超於意表煒々煒々虛徹靈通彼天之狹霧國之狹霧卽是本地風光也天御中主國常立尊寧非大元至妙哉至如以一心分三界以一質配七代化陰化陽風雲之感不窮爲魂爲魄變通之理無盡者歟爰澆薄之世魯鈍之士披文不通義着相不辨性僅趨降迹之一轍偏暗威音之玄妙謬起邪見還成狐疑若明乎天真靈知本乎海滴卽定於神道盡透得仍爲備後昆之規矩略抽本書之樞要名曰類聚神祇本源矣抑歷代之官文傳來之社記意言同者採一而捨餘義趣異者相並以共勒此外古典不廣尋新編有遺漏後之見者義加裨補于時元應

二年初陽中旬陪瑞籬之神館述管見之蓄懷而已

續々群書類從第一神祇部目錄終

宇佐八幡宮緣起一名字佐大神宮緣起	七二三
三社託宣略抄	七三三
陽復記	七四七
土德編	七七一
未生土之傳	七七三
神學承傳記	七七七
土津靈神正學記	七八五
會津神社之訓詞	七八七
神道生死之說	七八九
病後手習	七九三
八重垣大明神由祝詞 同碑銘	八〇三
神道辨草	八〇七

二十二社略記……………四三五

和歌兩神記……………四五五

皇太神宮殿舍考證……………四五九

豐受皇太神宮殿舍考證……………四八一

外宮神領目錄……………四九九

內宮氏經日次記……………五一一

神宮祕傳問答……………五七一

賀茂注進雜記……………五八五

元祿七年賀茂祭祀記一名賀茂祭再興記……………六六一

石上神宮御事抄……………六七三

月能桂……………六七七

東照宮大權現緣起……………六九一

出雲大社記……………七〇五

續々群書類從第一神祇部

目錄

類聚神祇本源	一
豐葦原神風和記	九七
舊事本紀玄義	一二七
瑚璉集	一六九
神祇靈應記	一九九
神皇系圖	二〇七
神皇實錄	二一一
天口事書	二一九
本朝諸社一覽	二二三
神社便覽	四一一

るべく、土津靈神正學記と會津神社之訓詞とは土津靈神即ち保科正之の神學に志深かりしを知るに足べく、病後手習・八重垣大明神由祝詞・同碑銘・神道辨草は跡部光海・伴部安崇等の學識の一班と閱歷の大要とを知るに足るを以て何れも之を收むることとせり。

一本書は其大部寫本なるを以て、誤字脱字等多く、讀下し難き所少からずと雖、是を校正するに當り務めて原形保存に意を用ひ、其一見誤寫に出づる者なること判然たるものゝ外は漫に改めず、或は横傍を施して疑を存し、或は傍注若しくは割注によりて今按を加へ置くことゝせり。

二本書は文學博士井上賴圀及び佐伯有義兩氏の監修に成り、特に後者は親しく材料選擇の勞を執られたり。茲に一言其勞を謝す。

文は今括弧を以て區別せり。又賀茂注進雜記は後に至り黒川氏所藏の本を得て是を對校するに所々頗る文に異同あり、又彼に詳しくて是に略せる點を發見せるも、時既に發行の機に迫り爲めに悉く是を注する能はず。然れども猶是によりて所々事實誤謬の廉を發見し、是を訂正するを得たり。

一陽復記は流布本を以て底本とす。この書は度會延佳の著にて、以てその本領を窺ふに足る。土德編未生土之傳・神學承傳記・土津靈神正學記・會津神社之訓詞・病後手習・八重垣大明神由祝詞・同碑銘・神道辨草は何れも佐伯氏所藏の本を以て底本とす。所謂俗神道家の著書は頗る多く、現に佐伯氏所藏に係る者のみにても百部以上に上れる由なるも、悉く之を收載し難きを以て本書には僅にその一二を收むることゝなしぬ。土德編と未生土之傳とは吉川惟足學說の一斑を、神學承傳記はその閱歷の大要を知るに足

一 神祇靈應記はもと鈴木眞年氏藏本にて今佐伯氏の所藏に歸せる古寫本を以て底本とし、本朝諸社一覽・神社便覽は流布本を以て底本とす。この二書は板本なれども出版以後歲月を経ること久しく、世間に流布の書極めて稀なるを以て、特に之を收載す。十二社略記は黒川氏藏本を以て底本とす。

一 皇太神宮殿舎考證・豐受皇太神宮殿舎考證・外宮神領目錄・石上神宮御事抄は黒川氏藏本を以て、賀茂注進雜記・賀茂祭再興記は、内閣の藏本を以て、月能桂は平田家藏本を以て、氏經日次記・神宮祕傳問答東照大權現緣起・出雲大社記は佐伯氏の藏本を以て底本とし、宇佐八幡宮緣起は黒川氏本を以て、東照宮大權現緣起は故内藤恥叟氏藏本を以て、出雲大社記は佐伯氏所藏の一本を以て校正す。右のうち外宮神領目錄は元所々闕文ありしを伴信友翁是を外宮神領給人引付により對校して補ひたるものにて、其補

ために制限せられて省かれたりと思考せらるゝものは勉めて之を収載し、以てその缺點を補ふことを期せり。

一類聚神祇本源及び神風和記は文學博士井上頼圀氏の藏本を以て底本とし、圖書寮本・黒川眞道氏本を以て校正し、舊事本紀・玄義は佐伯氏の藏本を以て底本とし、井上氏の藏本を以て校正す。珊瑚集は井上氏の藏本なるが、類本なきを以て、引用の文句は各其原據の書に溯りて校正せり。以下類本なきもの皆同じ。

一神皇系圖・神皇實錄・天口事書の三部は疑はしき書なれど、御鎮座傳記・御鎮座次第記・御鎮座本紀・倭姬命世記・寶基本紀の五部書は既に續群書類從に收めたるにより、その例に倣ひてこゝに收む。この三書を合せて神宮八部の書と稱すればなり。神皇系圖は眞福寺本を以て底本とし、井上氏校本を以て校正す。神皇實錄・天口事書は佐伯氏藏本を以て底本とし、井上氏本を以て校正す。

例言

一神祇の書群書類從正編に收めたるもの七十種、續編に收めたるもの百六十六種に及べり。本編に於ては其の遺れるを拾ひ漏れたるを補ひ、左の三十二種を收めて此の部を構成す。抑我が國は古來神國と稱し神祇の事蹟極めて多く隨ひて之に關する著書頗る多しと雖も、本編出版に際し各部の權衡上紙數に制限あるを以て、正續の二編と對照比較して神祇及び神社の全體に亘るもの十一部、伊勢以下諸國の大社に關するもの十三部、其の他度會延佳・吉川惟足等神道家の著書十部を收むることゝなしぬ。正編及び續編に於ては主として三卷以下のものを收め、四卷以上に渉るものは必要缺ぐべからざるものと雖も悉く之を除けるが如し。故に本編に於ては、正編及び續編に收むべくして卷數の

卷之三

附錄

附錄

附錄

附錄

附錄

附錄

附錄

附錄

一正續編は一部三卷以下の書に限り、其以上に渉る者は概ね之を採らざりき。本編は必しも此例に拘泥せず、ほゞ十卷内外に及ばせる者あり。

一本編每部門の編輯選擇は各専門の大家に依託せり。故に其類從の範圍時代等に就ては各部門或は小異なきを保せず。然りと雖其大綱は諸門を通じて一貫し、二十の大冊首尾連絡して紊るゝ所なきを信ず。

明治三十九年五月

國書刊行會

詩文

文

筆

歌文

物

語

產業

雜

絃

雜

鷹

戲

飲

食

雜

鞠

宗教

釋教

教育

消息
(雜)

地理

紀行
(雜)

記錄

帝王
(雜)

法制

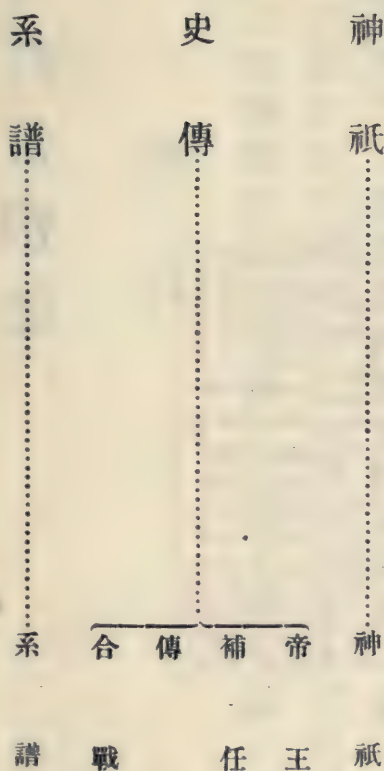
官職
律令
公事
裝束
武家

得ざるもの又甚多し。そは將に三續四續に俟ちて之を補はんとす。

一本編の類從部門は正續のそれと頗異同あり。是れ其採集の書に古代近世の變遷あると、今日文運の需要如何に省慮して改補を加へたる爲めなり。今異同を對照すること左の如し。

新部門、十二

舊部門、二十五



續々群書類從

緒言

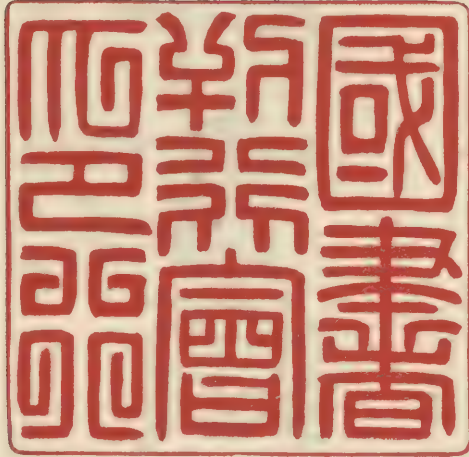
一本編は塙檢校保己一の輯めたる正續二編の後を承けて其遺漏を拾ひ、且其未だ取るに及ばざりし近世（江戸幕府時代）の典冊を收む。されば正續既收の書は固より此に採らずといへども、彼に收めたるは零本にして後に完本の世に出でたる類は、重複を避けずして収載せるもあり。

一本編の編輯に就ては、前輯二篇の外なほ正續史籍集覽・存採叢書・帝國文庫等に入りて刊行を経たる者も、概ね之を避けたり。

一本編は本會第一期の刊行に於て、合二十冊約二萬頁の目算を以て之を集めたり。しかも古今の奇籍寶典紙數の制限の爲に收め



AC
145
G857
v.1



續六群書類從
第一



AC
145
G857
v.1

gunsho ruiju

9

AC
145
G857
v.1-16

SUBSTITUTE 'R' CARD

E.A.S.

es

.....
.....
.....

